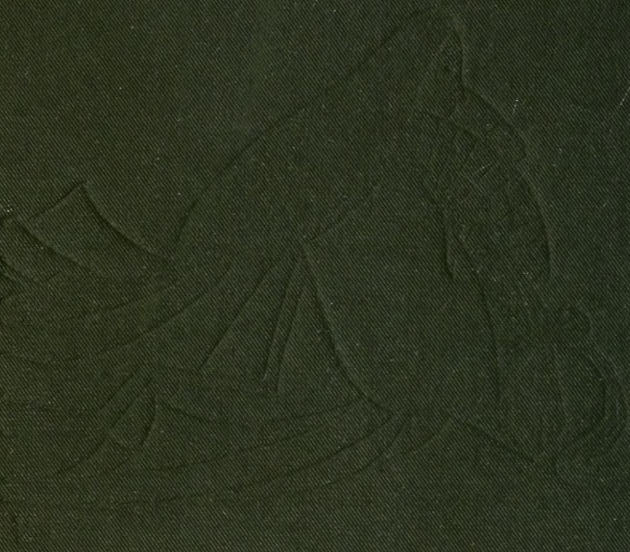
國文註釋全書



文學博士　本居豊頴
文學博士　木村正辭　校訂
文學博士　井上頼圀

國文註釋全書

東京
國學院大學出版部刊行

V. 9

源氏物語岷江入楚

中

岷江入楚第十七繪合

廿九歳
前齋宮御入内の事繪合の巻にはいつ比とたしかにみえされども六條御息所周忌などのうちは入内なとの事あるべからず其うへ繪合をし給ふ事は三月十餘日とみえ侍れはかた〳〵ことしの事にてはあるへからす依て源氏廿九歳をは無事の年にとり侍るへし

卅歳　内大臣
前齋宮御入内之事　梅壺女御也後號秋好中宮ト
朱雀院送刺柳莒薫衣香等給事
主上好繪給事
源氏君奉繪於御門給事
三月十餘日梅壺女御與弘徽殿女御繪合之事
左方女房　平典侍　侍從内侍　少將命婦
右方女房　大貳典侍　中將命婦　兵衞命婦
朱雀院奉繪於梅壺給事
又於御前有繪合事以清涼殿西庇爲其所摸天德歌合之例也
源氏御繪須磨卷出來仍左方勝之事　歌合例也
源氏與帥宮御物語事
繪合之次有御遊事
山里立御堂給事嵯峨御堂也

繪合

花以詞爲卷名云々　私云詞に繪合とつきたる詞はなき歟左右の御繪なともあり又竹取の翁にうつほのとしかけを合てあらそふなとゝあり　河前齋宮女御與弘徽殿女御有繪合之與故號之也　花後拾遺集の詞に正子內親王繪合の事みえたり（私後朱雀之皇女有繪合之事）　扇合双紙合根合なと皆歌をもて詮要とせり云々　或御說繪合は兩度あり內々と又外さまとなり天德の歌合に思ひなすらへてかけり冷泉院を村上に比したるなり此繪合源氏卅歲の三月の事也　花源氏君卅歲の時の事なり繪台は三月の比の事也　廿九歲の事は物語に所見なきにや　弄此卷は源氏卅歲みをつくしと此の卷との間にあるべし

前齋宮（センサイクウ）の御參の事　弄秋好也冷泉院の女御に御參事也　花六條齋宮は澪標卷に　私云かくて秋好は處女卷に中宮にたち玉ふなり　前坊（故院の御はらからと葵の卷にみえたり）　母六條御息所　秋好中宮（葵に齋宮にたち給うてみをつくしの卷に都へうつらせ給ひて繪合に內へ參り給ひて梅壺と申きたさめに中宮にたち御法に皇后宮にあからせ給ふ）

河爲齋宮人後入內之例　河元正天皇御時井上內親王（聖武天皇太子時女）養老五年爲二齋宮一後光仁天皇納レ之爲レ后光仁天皇女酒人內親王寶龜三年爲二齋宮一後桓武天皇納レ之有レ寵　桓武天皇女朝原內親王延曆三年爲二齋宮一後平城天皇納レ之　朱雀院御時徽子女王（重明親王女）天慶元年爲二齋宮一後天曆朝爲二女御一

中宮の御心にいれて　弄うす雲也　一向もと中宮にてましく〳〵ける故にかくはかけるなり

こまかなる御とふらひまてとりたてたる御うしろみもなしと　これよりは秋好に御うしろみなければねんころにおほしやる源の心なり　弄源氏の心

大殿は院にきこしめさんこと　源の朱雀院の御心をはゝかり給ふなり此段の心はみをつくしの卷に薄雲へ秋好の事を源の申給ふ所にてよくきこえたり

其同心をかけるなり

二條院にわたしたてまつらん事をも　弄二條院　私此事別（前イ）にあり

おやめき聞え給ふ　源の大かたなるやうなる物からおやめきうしろみ給ふなり御母御息所の事は人もしりたる事にて御遺言なともありしゆへおやさまに思ひあつかふとなり

院はいとくちをしう　朱雀の秋好に心をかけ給ふ事

は前にみえたりみをつくしにもありしなり
その日になりて　前齋宮の女御まいりの日なり
えならぬ御よそひとも　朱雀より秋好へ奉り給ふなり　或は御衣とも歟云々
御くしのはてうちみたりのはこかうこの箱とも　花
うちみたりのはこのふたの上にては髮をけづるときうちみたし侍れば箱の名になつけ侍るへし　弄
かうこのこの字濁へしうちみたりの箱髮の具なればうちみたりといふなり　或かうこ細説猶濁兩説と云々　私聞書にもかうことあり濁説を用へし
河　櫛箱巾箱　香爐筥　香壺箱蓮註 付箱也　水原抄云可然所の御厨子の或調度也諸香を被納也壺身高サ三寸五分弘サ九寸七分長サ同云々
くさ〳〵の御たき物ともくぬえかうまたなきさまに
河　種々也　師説云またなきとはいまたなきなり又とはよむへからすと云々　案之又なきも有何事哉無種類心也　水原抄云くさ〳〵のたき物とは近丁子等一種つゝにて未合せぬ香也百ぶの外とは百歩を指歟一歩は六尺也 光親説 百歩は薫には六十丈にあたる歟　案之くさ〳〵とは種々の薫物なり　合香方ニ春梅花夏荷葉秋菊花冬落葉　黒方　侍從　供養香　薫衣香　補闕香　百和香なとゝて數多方あり　又百歩の外とは承和百歩方の心也拾芥云空中盛埋經三七日取燒百歩之外聞香云々　梅が枝卷に在之　此百歩の外をおほく過にほふとは匂ひのすくれとほくにほふといふなり是も百歩のほかにきこゆるといふよりかくかきたり
百歩のほかを　弄しはく薫衣香のにほふとなり
おとゝ見給ひもせんにと　朱雀の御心に源の御覽せんとおほしたるにやいつくまても心をつけたるありさまにし給へるとなり
かくなんと女へ記う　朱雀よりかう〳〵の旨おくり物とものさまを源へ申なり
たゝ御くしのはこのかたつかたに　弄たゝやうなる心なりたゝの字有減也　関餘の物なとに心をかけす大やうなる體なりてまかになまめくとは此調度のこまかにうつくしきさまなるへしと源の見給ふ也
さしくしのはこの心ばに　花さしくしの筥金銀の蒔絵の筥四方四寸也の折枝蒔等を蒔なり　天暦三年藤花宴に御膳折敷の心葉藤花と云々　近代御前物

折敷の四すみにいとかねにて松の枝をしていさにて葉を結て鶴なと作てたつること在之心葉のよしなり今さしくしの箱にもかねにて花をつくりてそへたるをいふへしての事梅かえの卷にもあり　弄さしくしはさす儲歟註一勘齋宮の額にさし給ふへき故にさしくしといへり　河てゝろ葉心葉也かねにて梅の枝を造たるなり着小忌時冠に指なり女房の調度も有之　一説云組の惣名也或綬とも書なり權記云長和二年十月廿日今日新皇女御百日也實經所謂籠物二棒一枝籠蘇芳色納二紅梅一付二菊枝一以二蘇芳村濃組一結レ之其一枝青色納松子付松枝以青村濃組結之并以象眼薄物等染表裏色爲折立又有銀心葉又置之銀折敷各一枚云々　拾遺云むすひふくろをやるとて「あさからぬ契むすへる心葉はたむけの神そしるへかりける源語類字云心葉也むねにの葉也心をなかことよめるなり又云くみの惣名なり云々愚案難信用之繪合にさしくしの箱の心は又えんにすきたる沉の莒に同し心はの様梅か枝に沉の箱にるりのつは二つすへて心は紺瑠璃には五葉の枝白きには梅をえりておなしく引むすひたる

糸のさまと云々　私云心はの事多分は箱につけたる緒のくみと心得たり然るをある人五葉の枝梅なとを金銀にてえりたりとあるは箱のくりかたとみえたりと云々又心はに歌をかくとあるは箱のくりかたにはかくへからす緒のくみかとおほつかなしそれも組には書にくし書て付たる歟所詮金銀にてえるとあれはくりかたたるへき歟　又答曰或云金銀にてえりくりかた勿論なり其くりかたにむすひ付たる組也詞にもむすひつけたる糸のさまとあり組の糸のさまをいへり既に綬の字を心はとよませたり猶組たるへき歟云々　私云兩義あれ其組を以て正とす

朱雀御製
わかれちにそへしをくしをかことにてはるけき中と神やいさめし　河齋宮下向のときの刺櫛のこと也「戀しくはきてもとへかし千早振神のいさむる道ならなくに　花此齋宮の御下りは朱雀院の御在位の時の事也御額にくしをさして二たひ京の方へおもむき給ふましき由を御門の宣ふ事ありそれをかこつけてとにて我身のかくとはさかるへき中と神のいさめたまふ事にて有けるならんと云る心なり儲

をは髪にさせはそれを又神によそへて云るにや
弄齋宮は御代に一度下向し給ふ事也不時に歸京あるましきよしの御詞ある事なり其時の事をかこつけにてはるかなるへき契に神のいさめ給ふ歟となり

おとゝこれを御らんしつけて　弄此種々の御音信の式を大かた見給ふなり歌なとをよく見給ふなるへし　私大かたさま〳〵の御音信を御覧するに先此御歌を源の見つけ給ふなるへし

いとかたしけなく　朱雀の秋好に心かけ給へるを源の心くるしく思ひ給ふなり

わか心ならひのあやにくなる　源のかやうの方には身をつみて思ひしり給ふなり

かのくたり給ひしほと　秋好の齋宮にてくたり給ひし時より朱雀の御心にかゝるなり

とし經てかへり給ひて　秋好の齋宮よりのほり給ふ事なり

御心さしをもとけ給ふへき

かゝるたかひめ　弄冷泉院へまゐり給ふ事也朱雀の御心を推量し給ふなり

御位をもさり　朱雀の位をさり給へは心しつかに又何も御心にかなはぬやうなる事あらんほとにうらめしうおほさんとなり皆源の心なり

我になりて心うてきぬへき　源の我身にあてゝ色々におほすなり

なにゝかくあなかちなる事　朱雀の御心を推量して秋好の入内の事を源の後悔なり

つらしとおもひ　弄謫居なとの事に朱雀を恨申ける事也すまのうつろひの折ふしなとの事なるへし

又なつかしくあはれなる　すまの事なとも朱雀の御心より必しもおこれる事にあらす少御心よわくおはしましての事なりそれを源のはかりしりてこそ恨とは思ひ給はぬなり

とはかり打なかめ給へり　河時日本紀しはしはかりなり　私朱雀の御心をとやかくやと源の心くるしく思ひ給ひてしはらく思ひみたれ給へるなり

この御かへり　朱雀の御歌の返事の事なり

又御せうそこをもいかゝと　御歌は心葉につけられたるとみゆ御文は別にありけるなるへし源のゆかしくおほして女別當にたつね給ふなり

御文はえひきいてす　朱雀よりの御文をは女別當の
源へは見せ奉らぬなり
宮はなやましけに、秋好のさまなり
御かへり　朱雀への御返事なり
けはひきゝ給ひて　朱雀への返事を秋好の物うくし
給ふを人々のそゝのかしきてゆるを源の聞給ひて
のさまなり簾へたてゝなるへし
いとあるましき御事なり　源の詞也返事なとなくて
はかなふましき事なりとすゝめ申給ふなり花鳥の
義あやまれり或御說同　花源氏の御詞也
しるしばかり　いさゝかにてゝ返事なくてはと源の
宣ふを秋好のはつかしく思ふなり
いにしへおほしいつるに　弄大極殿にての事なり御
涙をおとし給ふ事なとなり其時朱雀廿五歲也　私
齋宮下向の時のさまを秋好もおほしいてゝさすか
返事あるなり
をさな心　秋好は十四歲はかりにての事にや
こみやす所の事　弄そのをりの事やかて御息所の事
を思ふなりあはれなり
たゝかく　御歌はかりある歟

返歌にいは
わかるとてはるかにいひし一こともかへりて物はい
まそかなしき　弄祝言なりしてとなれともなり　花
わかるとてはるかにいひし一ことは御門の別のく
し奉給時の御詞也かへりては歸京の本なりまたは
其時は祝言ならし事なれとも今はかなしきとなり
上の詞にみやす所の御事なとかきつらね哀におほ
されてとあれはそのかたに取なしてかへりて物は
かなしきとよみ給へるにや云々
とばかりやありけん　返事のさまをくはしく見ぬと
いへるなり
えきこえたまはす　源の此返事を御らんしたくおほ
せとさえ宜はぬなり御使のろくとは朱雀の御使な
り
院の御ありさま　弄源の心なり
女にてみたてまつらまほしきを　是は女になりての
よし歟
いとよき御あはひ　秋好の御さま朱雀とよく似合た
る御中ならんとおほすなり
うちはまたいはけなくおはします　河幼也いはけな
し同心をさなきこゝろなり　この卷は澪標卷の次

の年にはわらす三年めなるへし内は十三歳はかり
にておはしますへし但しひて御としの沙汰無用な
り
にくき事をさへ　齋宮の心をはかりてなり冷泉へ參
り給ふ事思はしからすやおはしめすかとなり
すりの宰相　河參議兼修理大夫也　橘常主　在原友
干貞側也　弄參議にて修理大夫をかけたるなり一
人なり　私源氏家禮の人也たれともみえす
内に參り給ふ　六條には修理宰相によく宣ひ置て源
は參内し給ふなり
うけはりたるおやさまには　源の朱雀への用意なり
源のかやうに宣ひおきて參内し給ふ事を註してか
ける詞なりうけはりたるとは源のおしたちて親め
きたるさまにはみえじとの事なり
よき女はらなとは　弄六條の宮なり
あはれおはせましかは　六條の御息所の事なり源の
心なり
おはしいたづかましと　河寵しかしつく心なり　或
説勞むいたはる心なり　或本にいつかましと云々
同心なり

むかしの御心さま　是も御息所の事をとやかく源の
おはすなり大かたの世上むきには心ありしなりと
りよりては執ふかき所のそひたる成へし
さこそあらね　弄世の人はえさやうにやさしき事は
ありかたきをとなり　聞何もたらふたる事はまれ
なる物なりといふなり
中宮も内に　弄薄雲也當には三條宮におはしますな
り
うへはめつらしき人　主上冷泉なり秋好の入内のこと
なり
宮もかくはつかしき人　秋好の事を薄雲の主上へ申
給ふなり宮は薄雲なり
人しれすおとなははつかしうや　花御門の御心にお
となしきときこしめしてはつかしくやあらんとお
ほしめしたるなり
いたうよふけてまうのほり　秋好の入内也儀式なと
こまかにはかゝす
いとつゝましけにおほとかにて　大やうに心はつか
しけなるさまなるべし是より秋好の體なり
さゝやかにあえかなる　秋好のちひさく物よわきささ

まなり
こきてんには御らんしつけたれは　弄致仕大臣の女なり　私はやとくより入内にて御覽し馴たるなり
これは人さまも　弄秋好なり
おとゝの御もてなしも　秋好をは源氏の一かとにもてなし給ふなり
うちとけたる御わらはあそひ　いまた帝也冷の秋好へ隔心也さて弘徽殿に打とけたる御あそひの時はおはしますと也
權中納言おもふ心ありて　弄中納言の女を后にもと思ひしに秋好をはゝかり給ふなり
御むすめにきしろふ　弘徽殿に秋好はあらそふやうの心なりきしろふは競ひ構ふやうの心成へし
院には　弄朱雀院也
くしのはこの御かへり　御返事なと見給ふにつけていよ〳〵御心にかゝるなり
そのころおとゝの參り給へるに　朱雀院へ源の參り給ふなり
齋宮のくたり給ひし　榊の卷の事也源に朱雀の御物かたりありし事なり

さおもふ心なんありしなとはえあらはし給はす　秋好の今は入内し給へはかならすと心しめたるやうには宣ひなさす大かたのさまはかり宣ふなり
おとゝもかゝる御けしききゝかほにはあらて　ふかく朱雀の秋好に御心かけ給へる事を源にしらぬよしにて大かたに秋好の御事を申いたして朱雀の御けしきを見給ふなり
あはれなる御けしき　これより秋好の事を朱雀のふかくおほしたる御氣色のみゆるをいふなり
あさはかならす　河不淺墓也
いといとほしくおほす　朱雀の御事を源の推す心也
めてたしとおもほししみにける　弄秋好の體の事なり源もいまたしかと見給はぬなり　私朱雀のこれ程におもほす秋好の御かたちをいまた源の御らんせすしていかなるそとおほすなりねたうおほすも源の心なり
いとおもりかにて　これより秋好の體のをも〳〵しくしかるへき事をいふなり源の御かたちを御らんせぬいはれをいふなり
いはけたる御ふるまひ　河これはいはけなくと同心

なり
見奉り給ふまゝに　弄逢々の様をおしはかりたるなり見たるにはわらすとなり
いこわらまほしと思ひきこえ給へり　源の心に秋好をほめ給ふさまなり
かうすきまなくふた所　秋好と弘徽殿とのおはすれは外々の女御なとまゐりにくきとなり
兵部卿宮はする／＼とも　弄薄雲の兄宮也　私するするは逢々の心なり
みかとおさなひ給ひなはさりともえ思ほしすてし　秋好と弘徽殿とのさふらひたまへは兵部卿宮の御女の入内をはしはらく猶豫し給ふなり兵部卿宮は薄雲の兄宮みかとの御伯父なり其御女にてちかき御ゆかりなれは御かとの御心もつきなはおのつから入内もさせんとまち給ふとなり
ふた所の御おほえとり／＼に　秋好と弘徽殿と也二人の御おほえひとしくは有ましき事なれと只今はみかとも弘徽殿へは馴給ひつるゆゑに御心やすくて書なとは弘徽殿からにおはするなり秋好へはいまたうちとけ給はぬ故に御おほえのおなしやうなるなり
うへはよろつの事にすくれてゑをけうわるものに　弄主上の御事也　花宋の徽宗皇帝好畫此時畫図及第といふ事あり是によりて畫の上手とも多かりけり其ははるかに後の事なれとてとのついてにかきのせ侍なり
になうかゝせ給ふ　おもてにたてゝ好み給ふ心なりよく繪をも主上のあそはすなり
齋宮の女御　秋好なり梅ゝほの女御と申す也
かきかよはせ給ふ　齋宮女御とみかとゝ繪をかきかよはし給ふなり
ましておかしけなる人の　弄秋好なり　私殿上人の中なとにも繪かく人をは賞　たまふなりましても此秋好の繪をよくかき給へはみかとの御心にしみたるなり
とかく筆うちやすらひ　秋好の繪をかき給ふさま也
ありしよりけに御思ひまされるを　繪の事に御心うつりてなれ給ふまゝにみかとの御心秋好にうつるなり
あくまでかと／＼しくいまめき給へる　權中納言の

心をいふなり末まて此心のさまはいつくにてもかくのことし

上手ともをめしとりて　畫の上手ともをめしあつめておくなり

いましめて　弄かたく口かためなとするなり　或誠なりつけをしふる心なり云々

物かたりゑてそ　物語の心を繪にかきたるなり

れいの月なみのゑ　弄十二月の繪也　一説云年中行事の繪なとを云なるへし　聞年中行事の繪　或歌の詞書なとに四季の繪かけるにともありてれ月次ともいふへき歟又月次の屛風共ある歟惣別四季の變化飛花落葉のことわりをもしらせんために一年のうつり行さまをかける事おほしと也こゝへはいらぬ事なり

又こなたにてもこれを御らんするに　花弘徽殿なり

いといたうひめて　河秘なりめは詞字なり

この御かたにもてわたらせ給ふを　弄秋好のかたへなり　花齋宮女御の御かたへもてわたらせ給はんと御門のおほしめすにもをしみ給ふとなり

おとゝきゝ給ひて　源なり

權中納言の御心はへのわか〳〵しさ　河意見日本紀むかしよりかく物あらそふ心のかと〳〵しくおはせしがいまもかはらすと源の宣ふなり

あなかちにかくして心やすくも御覽せさせすなやましきてゆるいとめさましや　御門なとへさほとまてをしむはあまりなる事と源のおほして繪ともを進し給ふなり

こだい（古代）のゑともの侍るまゐらせんとそうし給ひて　水原抄云是は齋宮に進せらるゝ繪なり奏の字不審可尋と也　案之被奉内裏繪也詞云あなかちにかくして心やすく御覽せさせすなやましきてゆるいとめさましや古代の御ゑともの侍るまゐらせんと奏し給てと有然は奏の字不審あるへからす

とのにふるきも　弄二條院なり

女君と　紫上なり

長恨歌王昭君なとやうのゑはおもしろく哀なれとことのいみある　河楊貴妃は馬嵬にうしなはれ王昭君は夷狄につみせられともに其憚あるへしとなり　弄祝ふへき折ふしとなり

こたみはたてまつらし　今度也秋好入内のはしめな

れはなり
かの旅の御にきのはこ　河須磨明石の日記なり菅家宰府の間の事を令記置給云々又後集も彼時の御作なり此例歟
心ふかくしらていまみん人たに　私心ふかくしらてとは須磨への隠居のことをよくもしらぬ人なりとも此繪のさまはかりにても涙をしむましきさまなりといふなり　愚本心ふかゝらてかくいことくあり是は心ふかき人も此繪の哀にてみしるへしといふなり諸本にて見合へし又弄花にはしらていまみん人たにとあり　一向しらさる人なりともあはれなるへしと云々
まいてわすれかたく　源紫の心中を推はかりこれよりいふなり
とりかへしかなしう　今さらのやうにもおもはるゝとなり
いまゝて見せ給はさりける　今まで見せ給はぬを紫の源にうらみ給ふなり
紫上 ひとりゐてなかめしよりも海士のすむかたをかきてそみるへかりける　花紫上の歌なりあまのすむかたをかくは須磨にての源氏のありさまを忍にかきたるをいふなり　弄須磨の巻には女君も書給ひたるとみゆされとも今も忍ひ給てかくよみ給へり繪をも書てなくさむへかりし物をとなり　私都にゐておもひなけきしよりもすまのうらにては浦々のさまなとにもかやうに心のなくさみありつれは源よりもわか心のなくさみはなかりし事をかてちなしたるなり
おほつかなさはなくさみなまし　ひとりゐてのなくさみには繪ほとの事はあらし物をといふなり　或は須磨巻に源も日記のやうに書給　上もかき給ふいかてか空にかよふ御心ならんなとありされは心ふかく源さへ今とり出し給へは紫上はかき給へと源へ見せ給はぬなるへしさて物語には紫上の繪を源へ見せ給へる沙汰はなし
返源氏 うきめみしその折よりもけふはまた過にしかたにかへるなみたか　花過にしかたもむかしかきたる繪のかたにそへて紫上の只今悲しと思ひ給へる氣色を見給へは更に涙をもよほし給ふ心也　弄かへる涙かとは波にそへたる涙哉の心なり　うきめみしと

は須磨の浦にての事をいふ也
中宮はかりにはみせ奉るへき　薄雲のはみせ奉らんとなりすまあかしのさまをしらせたてまつらんためなり
かたわなるましき　よきをえり給ふなり
うら／＼のありさまさやかに　此繪にかきあらはし給へるゆゑと御覽すれは須磨明石のさまさなから眼前のやうにあかしの家居なともあるに一しほ明石上の事姫君の事なとおほしいつる心なり
かうゑともあつめらると　かう源氏なとのとりもちて繪とも參らせらるゝ事なり
やよひの十日のほとなれは　繪合なとのあるへき時節なり
内わたりもさるへきせちゑとものひまなれは　正月は諸の節會以下政道多き月なり二月も諸社祭以下しげし三月はことしけからぬなり
おなしくは御覽し所もまさりぬへくて　みかとよりはしめて御隙ある比なれはよき繪ともを御らんせさせんとえりとゝのへてわさとかましく源の奉り給ふなり

こなたかなたと　梅つほとこきてんとなるへし
梅つほの御かた　花斎宮女御の梅壺におはしますゆゑなり
そのころよにめつらしくおかしきかきり　其時分世に有しことなりたとへは其比有つる行幸の儀式又は何にても其時分ありし事なりいつれもむかしはかくのことしとみゆ
いまめかしきはなやかさは　弄實ならぬかたなり
こよなくまさりて　弄こき殿のは勝れたるとなり
私當座人の目おとろくやうの事なり何のうへにもある事なり
うへの女房なとも　内裏の女房なり
この比の事にすめる　繪のとりさたはかりとなり
中宮もまいらせ給へり　薄雲なり
かた／＼御らんして　薄雲もいつれをも御らんしたるなるへし
すてかたく　薄雲もゑをはこのみ給ふなり
御おこなひもおこたりつゝ　薄雲のおこなひなりゑ道の宮にておはすれは朝夕行ひ給ひしなるへし
この人々のとり／＼にろんするを聞召てひたりみき

りとかすにかたせ給ふ　花繪合は二度あり始のはま
つ梅壺のおんかたにて內の御繪に合せられたり後
度のは御殿にて梅壺女御と弘徽殿の女御との御繪
に合せ給ふなり　弄左梅殿壺右弘徽後度也勿論な
り花鳥にみえたりうへのも宮のもとありそれは惣
してのことなり繪合は二度なり始のは梅壺にてと
花鳥にあり三月十日比と又後度となり　聞弘徽殿
と梅つほと左右なり　私此義を案するに兩度なか
らうへにての事歟左右も同しく梅つほとこき殿と
なるへし此左右にわかれたる六人の女房はみなう
へにさふらふ人々なり中宮の參り給へるころこの
人々のあらそひさたむるをおかしとおほしてかり
そめに左右にわかちて梅つほと弘徽殿との繪ゝ堅
固內々にて合せられたるなるへしもしうへの御繪
と梅つほの御ゑとならは左の方うへの御ゑなるへ
し又前の詞にも梅つほのはいにしへの物かたりこ
き殿のはいまめかしきと有今度の繪合のおこり此
二かたの繪のおとりまさりをとり〳〵にあらそふ
につきて此事ありとみえたり又末の詞にわか人と
もはしにかへりゆかしかれとうへのも宮のもかた

かたはしをたにえみすとありこれはうへのは內裏
の女房の事宮のとは中宮の女房也わか人なとの何
ならぬには此繪ともをみせ給はぬといふなり花鳥
の義おほつかなし

梅つほの御かたには平典侍侍從の內侍少將の命婦

齋宮の女御左の方とみゆ方人此三人なり　花天德
歌合には更衣典侍掌侍命婦なと方人なり故に此繪
合にも其例をうつせり

右には大貳の典侍中將の命婦兵衞命婦　右の方こき
殿なるへし又方人三人なり

心にくきいうそくにて　河有職也此典侍以下非花族
然は以前の卷の有職も是に同し花族は只花美也
私いうそくは有職と云々物知たるやうの心也　或
御說にいうそくとは其時の事にたつさはりて名あ
る人なり

まつ物かたりのいてきはしめのおやなるたけとりの
おきなにうつほのとしかけをあはせてあらそふ　河
左は竹取翁の物語古物語也作者不知　右はうつほの物語順作と
云々有疑　廿二帖　イ十二帖と云々　右方勝の詞云左に其こ
とわりなしと云々　弄竹取は梅壺方なり　うつほ

はこき殿方也聞書同之　花萬葉十六に竹取の翁の事ありそれは物語にいへると相違せるなり　或抄御説に萬葉にたかとりとあるはわかなの事をいふ六百番歌合にたかとりとよめるは此義なり物語の心と相違せり　私六百番問答左に勘加へし　花物かたりの大意をいはゝ竹取翁野山に竹をとりてつかひける中にもとひかる竹一すちありみれは三寸はかりなる人いとうつくしうてゐたり三月計によきほとなる人と成かたち清ら成事世になく屋の内くらき所なく光みちたり此の子の名をさゝたけのかくやひめとつけり世界のをのこきゝめてつゐせうしけり此かくや姫のいふやうゆかしく思ひ侍る物をみせ給はんに御志の程はみゆへしつかうまつらん事もそれに定むへしと云て石つくりの御子には佛の御名のはちを給へくらもちの御子には蓬莱の山に銀を根とし金を莖とし白き玉を實としたる木有それか枝を折てたまへ今又獨りにはもろこしにあるなる火ねすみのかはきぬ給へ大伴の大納言には龍の首なる五色に光る玉を取て給へといふくらもちのみこたくみらをいれかくれゐて玉の枝を作出て持ておはしたるにたくみ玉の枝作れる祿いまた給はらすとてきたりてうれふ此時かくやひめのうたにまとかと聞てみつれはことのはをかされる玉の枝にそありけるといひて返しつ右大臣あべのおほしはもろこしのわけいといふ人に火鼠の皮かひておこせよとておほくの金をとらす尋得たるとて送るかくや姫火にやかんにやけすばこそまことと思はめとて火の中にうちくべてやくにめらめらとやけぬそれよりあへなしといふ事はしまりける此五人いつれも心さしとけすなりぬゝ云々

六百番歌合　私勘入　春中一番

野遊　左持　顯昭

わかなつむ野邊をしみれはたかとりの翁もむへそたはれあひける

右　寂蓮

わかなつむ子日にいつら友なくは家路おもはぬ旅ねせましや

右方申云左の歌うちまかせてはたけとりとこそ申すなれたれたかとりと云るさる證のある歟　陳云たかとりたけとり二樣に萬葉に點したり隨て又堀

河院百首に師時卿の歌にもたか取とよめり　左方
申云右の歌家路おもはぬ旅ねは必野計にあるへき
にや　右陳云子日わかなの事を思ひ出は野と思ひ
て讀るにや　判云左方たけとりのおきなかことた
かたけは二様にも申なるへし然るを此翁にとりて
たかとりといひけるといふ證據はあるへきを萬葉
集にはたゝ詞に昔有翁號曰竹取此翁か季春月登望イ岳
遠望忽値煮羹九ヶ女子百媚無儔花容無比　略之と云り
此事をいま野遊の歌に詠せる由跡なきにあらさる
へしたゝし萬葉集に二様に點したるよし左方人申
云々彼集は源順か和せる倭假名付來る也然るに順
か點本于今難傳たかたけを以誰人之點可爲指南哉
師時卿說以同前也隨伴翁幷九女子等中無竹字たゝ
詞はかり也然らは順か定て點を加へさる歟すへて
二様によむ條はたけは普通の說也たかは篁の字歟
陽唐韻にもたかむらと訓せり小野篁卿名字もたか
むらと號して侍めり然らはうちまかせてたけよろ
しきにやたゝし何にても此歌の風體ことなること
なきうへに翁もうへはなといへる姿詞不可庶幾歟
右の歌はつねのことなるへしとは見え侍れといつ

れ勝とは難定申例の持にて侍なんかし堀勘　私川
院百首　懐舊歌　師時卿「はるをかにのぼりてみ
けんたかとりかかみのてゝちにてとをしそおもふ
なよたけのふりにける　是より左右の方人のいふさ
　まを大形書たるなるへし
この世のにこり　人間の濁にけかれすと也いつれの
　人にもあはぬ事也
かみよのことなめれは　花上代なり　花神代の事な
れは今は昔の事と云心なり富士の事をいへは神世
　ともいふ歟
目およはぬならんかし弄　左方の詞也左の竹取の事
をほめたてたる也右方よりおとしたるにこたへた
るにや　私なよたけのよゝにといふよりここまて
左方よりほめたてゝいへる詞とみて然るへし先お
かしきふしもなけれともとは先卑下していへる詞
なりさてまたほめたてたるなり
右はかくやひめ　これより右方から竹取物語に難を
　くはふることとはなり
けにおよはぬ事なれは　左方より目およはぬならん
かしといふにこたへて云る詞なり八月十五夜に天

上したる事はしられぬ事なりと云是も大かたにいひなしてすこしはおほつかなきさまにおとしたる心あるへし

この世のちきりは竹の中にむすひけれは　これよりいひくたす詞なり

ひとつ家のうちはてらしけめと　竹取の翁か家の内をてらしたる事也

もゝしきのかしこき御ひかりには　みかとよりめしにも参らぬ事をかくいひおとす也弄同

あへのおほしか千々のこかねをすてゝひねすみの思ひかた時にきえたる　此かくや姫は上界の天人なれは下界の凡夫と契をこむる事なとは有ましき事也仍思ひかけたる人にさまゝゝかなはぬ事を所望したるなりくはしくは竹取翁の物語にあり此あへのおほ（多の字か）千々の金にてもろこしへひねすみの皮きぬもとめにやれりあらぬものをこれなりとておくりけるをよろこひつゝかくや姫のもとへもていきたれは火ねすみならは火にやくへからすとて火に入たれはあらぬ物にてやかて火にやけたる事なりそれよりあへなしといふ事いてきたりと彼物語にかけり仍こゝにもけにあへなしとはかける也　弄有方よりおとしたるなり竹取物語にあるかくや姫は天人なれは凡人にあはしとて難義なる事共を云て或は蓬萊の玉の枝或は火鼠皮又は燕の巣の中のこやす貝なとを取て来らん人にあふへしといひしによりて此安倍のおほし渡唐の舟にあつらへて金銀をつくして求めたるうつくしき皮なえ姫にみせけるに火に入て心みるに則焼たり仍あへなかりき此事をいひておとしたるなり　花　東坡詩云　火鼠不レ知レ寒　火鼠不レ知レ暑　河神異経曰南方有大山長三千里晝夜火風雨不レ滅火中有レ鼠重百斤毛長三尺可レ為レ布若不浄以レ火焼レ之則浄號二火浣布一也云々　十州記曰火林有二火獣一如レ鼠毛長三四寸取レ之以為レ布名二火浣布一有二垢汗一唯以レ火焼レ布而良久出振レ之白如レ雪云々　李嶠布詩云曝泉非桂鶴浣火有炎光是也

くらもちのみこのまことのほうらいのふかき心もしりなから　弄親王にやこれもかくや姫のけさう人なり蓬萊のいたりかたき事をしりなからいつはりて行て尋ねたるよしにて玉の枝を造出て姫にみせけ

る時玉造たる工の來て祿の未下を責けるにて僞顯
れて曲なしこれもかくや姫の繪をそしりたるなり
その時姫の歌に「まことかときゝてみつれはこと
のはをかされる玉の枝にそ有けるあへのおほしは
火鼠の皮をもとめたれと人のはかりてあらぬ物お
てせたるなり此くらもちのみこは我といつはりて
玉の枝をつくりたる事をそしるなり
あやまちとなす　これら皆竹取物語の難ともなり
といひたつるなり
繪はこせのあふみ　河巨勢相覽（セノアフミ）（高國本）　一説巨勢金岡相覽
同人也云々但如高名錄者相覽は猶先代人也金岡仁
明天皇之時之人也承和四年九月五日書ニ御所繪一
花巨勢相覽者金岡之子云々金岡寛平時人乎爲ニ其
子一則可レ爲ニ貫之同時人一　弄金岡子云々　私勘除
目成支抄讃岐少目從八位下巨勢朝臣相見（姓也）　或云畫師
昌泰二年二月除目執筆時平公
手は紀のつらゆき
河紀貫之小野道風　共以能書也　見非字直本勘文
かんやかみにからのきをはいして　河紙屋の人はし
めて色紙をすきいたすと云々からのきは唐綺也か
らのうす物なり　弄はいしては張たるなり　聞う
らうちしたる事歟云々字可尋也　私云むすひ花に
も糸をふのりにてぬり物に色々のなりにしてつけ
て後に花にするをはいし物といふなり
としかけははけしき浪風におほられ　右の繪なり則
右の方人の此物語をほめていふ詞なり　河うつほ
の物語第一卷にとしかけかしこき物にてもろこし
へわたさるゝに惡風にあひて波斯國へ行ぬ栴檀木
のしたに琴をひきてあそふ所にいたりて琴を習ひ
きはめてけり時ならぬ霜雪をふらせ天地をうてか
す日本にかへりて名をあけたる事なり　弄十二三
歲の時遣唐使にて波斯國にいたり聞琴聲孝行の者
也阿修羅琴を造りあたへし事あり
人の御門　異國の事をいふなり
ならひなしといふ　弄右の方人右をほめていふなり
きなる玉のちく　五色の玉あれは黄玉勿論也
繪はつねのり手はみちかせ　河左衛門少志飛鳥部常
則天曆比畫工也　木工頭小野道風正四位下參議案
守孫太宰大貳葛絃男　弄道風者延喜朱雀時代人也
榮花物語第八屛風そゑへられたる所に屛風ともは

たりうちつねのりなとかかきて道風こそ色紙かた
は書たれ
左にはそのことわりなし　弄右勝也　私左の方より
此右の繪に難をくはへすとなり
つきにいせ物かたりに上三位をあはせて　河伊勢物
語業平作有上三位古物語の名也　上は正也本性も本上と書之也　弄伊
勢物語左也正三位右也又右まさるへきやうなり
内わたりよりうちはしめ　正三位の繪のさまなるへ
し
平内侍　花左方の人也　弄同
平内侍
いせのうみのふかきこゝろをたとらすてふりにしあ
とゝなみやけつへき　いまめかしき繪を賞翫せはふ
るきものかたりの名をはくたすへきことなりされ
と伊勢物語をはえくたさしとなり
よのつねのあたことのひきつくろひかされるに　花
正三位のこのかたりのことなりこのものかたりい
まの世につたはらす　私正三位のものかたりを左
方よりいひくたす詞なり伊勢ものかたりは業平の
ことなり正三位は作ものかたりなるへし仍てかや
うにいひくたすなりよのつねのあた事とは今の事
なり
右のすけ　花右の方の大貳のないしのすけなり此人
の左の伊勢物語を又いひくたしたるさまによめる
歌なり
右のすけ
雲のうへにおもひのほれる心にはちひろのそこもは
るかにそみる　花雲のうへとは正三位物語にあると
なり千尋の底は伊勢物語をいふなりいせの海とあ
る故也　弄正三位の繪にある事なるへし　私正三
位に雲の上におもひあかれる事なるへし　或正三
位の物語に兵衛の大君といふ人は心たかき人にて
後には女御に成給ふとみえたり　此事尋ぬへし
兵衛の大きみの心たかさは　河王娃東上三位物語事
也おほいきみとは王氏の女なりと云々後拾遺作者
にも小大君とてあり重明親王女也　私おほきみと
よむ歟河海にはおほいきみとあり　弄又正三位の
中の人なるへし
さい五中將の名をはえくたさしと　河在原業平朝臣
者四品阿保親王第五男也仍號在五中將也五郎中將母
伊豆内親王也從四位下右近衛權中將兼美濃權守元
慶四年五月廿八日辛酉卒年五十六見三代實錄　國史云體皃閑麗

放縦不拘隆無才學善作和歌　勘物云顯季卿稱五郎中將云々　弄薄雲の勝と定め給ふなり　私兵衛の大君といふより薄雲の詞をくはへ給ふなり

〔薄雲〕みるめこそうらふれぬらめとしへ〔てもイ〕にしいせをの海士の名をやしつめん　いせ勢物語は事ふりぬれと猶在五中將をはえいひくたさしとなり　或御說うす雲の御歌なりわか御身尼にて物すれはあまり名をはくたさしととりなし給ふなり花鳥に梅つほの女御の歌とあるはわろし聞書同　私此歌の義花あやまれり然とも猶左に註す　花うらふれぬらめは心にふりたるをいふ梅壺もと齋宮にて年久しく伊勢にまし〳〵けるによりて伊勢物語をかたうとゝし給ふ也誠にことわりにてそ有ける　私名をやしつめんは名をやは沈めん也しつめしと云ふ義也

かやうの女事にて　女の心にまかせてあらそひあへるさまをいふ也

一まきにことの葉をつくして　弄結句の番肝要とあらそふなり伊勢物語正三位より後の番の事也こゝまでは內々の合なり　私此段弄の義如何一卷に詞を盡しとははかなき女の事にて心々に一卷の中にて詞を盡しあらそふといふなり必結句の卷の事とはいかにいへるにてもおほつかなし

しにかへりゆかしかれとうへのも宮のもかたはしをたに　花たへかねたる心也內のと齋宮のとの事也初度の繪合は內のと齋宮と云々如何　私花鳥に此度のは內裏の御繪と齋宮女御の御繪と云々此事おほつかなしこれも梅つほと弘徽殿との繪とみえたりさてうへのも宮のもといへるはうへの女房と中宮の女房との事成べしあさはかなるわか人なといつれも繪をみぬなるへしうへのも宮のもといふをうへの御繪も宮の御繪もと心得たるはあしかるへしと存如何又此初度の繪合は中宮の內裏にてのうへつほねなとにてし給へる歟さて後度主上の御前にてとある歟

おとゝ參り給ひて　源氏のおとゝなり

おなしくは御まへにてこのかちまけ　弄主上の御前にてとなり後の番なり天德歌合を模せり　私此詞にて初度は中宮の御つほねにてやとおほゆ此詞末に繪合あるへき序なり　河古來物合勝負常之例也朱雀院菊合永承六年　永康六年內裏根合　郁芳門院

前栽合　寛子皇后宮扇合　上東門院菊合　正子内親王繪合等也　後拾遺集正子内親王繪合し侍りけるにかの草子にかきて侍ける　さかみ「みわたせは波のしからみかけてけり卯花さける玉川のさと
但同時しける歟如何

中にもことなるはえりとゝめ　初度の繪合には大かたの繪ともなりすくれたるをはかねてえりのこし給ひしとなり是は梅つほ方の繪の事なり

かのすまあかしのふたまき　弄左遷の愁をあらはし給はんの心なるへし

その御心ゐとらす　繪合し給ふへき心つかひなり

かみ繪をとゝのふる　昔はきぬにかきたるをいまの世には紙にかくをかみ繪と云なり

いまあらためかゝん事は　源の詞か只今あたらしくかゝせん事はほいなきなと宣ふなり

ひとにもみせてわりなきまとをあけて　中納言はいまかゝせたまへともひとにかくしてさま／＼調給ふなり　河ふかき窓とは深窓也秘藏也かくのことくあり

院にもかゝる事きかせ給ひて　弄朱雀也又秋好におほしはなたぬ心にや

としのうちのせちゑとも　弄年中節會の繪なり　私朱雀より承らせ給ふ繪のさまをいふ也

えんきの御手つから　弄桐壺帝擬延喜帝事已分明也不及異論　弄桐壺に比したる心みえたりされは次にわか御代とあり

又わか御代の御事もかゝせ給へるまきに　花これは朱雀院のわか御世にありし事を桐壺の帝のかゝせ給へる御繪に書そへ給ふをいふなり

かの齋宮のくたり給ひし　梅壺の齋宮にてくたり給ひし時の事也　花齋宮の御下向の時は大極殿に行幸なりて別のくしを御自から齋宮の御額にさし給ふ事なり梅壺の女御の御下りの儀式朱雀院の御心に忘れかたくおほしめされて公茂にかゝせられて奉らせ給へるなり物語の作様あはれにおもしろく心詞さらに及かたく覺え侍り云々

かくへきやうくはしく　繪のやうとくはしく朱雀のこのみ給ひて公茂にかゝせ給ふなり

きんもちか　弄繪かきなり　河公茂望イ繪師也在高名錄也釆女正巨勢金岡孫公忠子也

えにすきたるちんのはこにおなしきてゝろは　河
此心葉はもしくり方に梅を造たる歟如何　花　艶に
透たる沈の箱とは沈のはこをすきたるふくろにい
れたるを云ふにやまた沈をえりすかしたるはこと
こゝろうへきにやおもひさためかたし河海にてゝ
ろ葉はくりかたに梅をしたりとしるされたりそれ
は不可然金にてうちたる花のえたを沈の筥にとり
そへられたるにてこそあらめさしくしの筥の心葉
もみなおなし事にや　私聞書沈にてほり物をした
る筥をいふ歟
院の殿上にもさふらふ左近中將　昔は内裏の昇殿を
得たる人も院の昇殿ゆるされ給はぬも有院の昇殿
ゆるされたるも内裏へ昇殿せぬもあり此人は内裏
にても院にても昇殿ゆりたる人なり昇殿せぬ人は
殿上にはさふらはぬ事なり
御こしよせたる所のかう〳〵しきに　繪にかきたる
體なり是は齋宮の乘給へるこしなるへし　弄　神々
しきなり
朱雀
身こそかくしめの外なれそのかみの心のうちを忘れ
しもせす　弄　朱雀の御歌也　花　朱雀院の御心に齋宮
の女御の御入内をはいなくおほし召たるなり　聞
しめのほかとは標の字也しるしと訓す物にしるし
て領する義なり庵をしめおくなと云も同し園生を
しむるなと同し又是は注連の心あるなり齋宮の事
にたよりあり
きこえ給はさらんも　返事なからんもいかゝと秋好
のおほす也仍くるしくおほし召なから返歌あるな
り
むかしの御かんさしのはしをいさゝかをりて　弄　鬘
の具をすこし折てなり幻術の鈿合を傳へしによそ
へたり齋宮に立給ひし時朱雀院のさし給ひし事を
思ひ出て昔のかんさしと云り花鳥にしるせり一勘
花鳥の説尤有興有味者也　花　楊貴妃かのかんさし
を半折て方士にさつけて爲我謝太上皇と云舊好を
尋し事を思ひよせ侍り朱雀院も今太上皇にてまし
ますゆゑなり　河　取金釵鈿合各折其半授使者曰爲
我謝太上天皇謹獻是物尋舊好也　長恨歌　私　楊貴妃
のさたさのみ無用にや只わかれの櫛の時の事をお
返秋好
ほしいてゝの事歟
しめのうちはむかしにあらぬ心ちして神代のことも

今そこひしさ　花内の御すまゐもむかしのやうに有
ねは齋宮にてましく〱し時の事戀淋イしき心なり院の
御歌はしめの外とあれはひきちかへてしめの内と
よみ給へり　弄神代の事とは過にし方也　聞しめ
の内は禁裏の事を云朱雀の御歌にそのかみの心の
うちを忘れしもせすなとあれは是も大やうに過に
し方を恐ふさまによみ給へるとみるへし
はなたのからのかみ　河縹唐紙ハナタノカラノカミ
院のみかと御らんするに　朱雀の秋好よりの返事を
御らんする也院の御門の事前に註せり位につき給
はて源氏なとのやうに太上天皇の尊號はかりなる
をは院とはかり申へし位につき給て後に太上天皇
にており居給ふを院のみかと〻申へし帝の字をみ
かとよむ故なり位につかぬをは帝とは申さぬな
り
ありしよとりかへさまほしく　聞位をさり給へる事
を朱雀の御後悔也位にておはしまさは此秋好なと
も必入内させ給ふへき人なり只今はおり居給へる
故にかやうの事なとしひて入内あるへき事ならぬ
故にとりはつし給へるをおほすさまなり

おと〻もつらし〻と　朱雀の源氏をもての事につらく
おほすへし〻となり草子地なり
過にしかたの御むくいにや　花朧月夜の御事をいへ
り　弄草子地の詞なり須磨のうきめありし事なり
聞同
院の御繪はきさいのみやよりつたはりてあの女御の
御かたにも　河弘徽殿の女御なり母二條太政大臣の
四君なれは太后より傳へ進せらる〻歟　弄朱雀の
御繪はあく后御母イの御方より傳りてあく后のいもうと
の方に傳りて權中納言の方の女御方へも傳るへし
大臣の四君なれは太后より傳へもせらる〻歟
ないしのかんの君もかやうの御このましさは　弄朧
月夜の事なり繪の事也
その日とさためて　花三月廿日あまりなり梅壺と弘
徽殿との御繪合なり
ひたり右の御ゑとも　弄左梅壺右弘徽殿西に向て北
右南左也
女はうのさふらひにおましよそはせて北みなみかた
かたにわかれて　弄女房のさふらひ臺盤所也主上御
座なり　花女房のさふらひとは臺盤所をいふ也此

繪台の御裝束は天德四年三月卅日內裏歌合を摸して書なせる也淸凉殿の西の庇にて有此事臺盤所立御倚子南第四間爲左方女房座北二間爲右方座渡殿南北敷絲端疊爲公卿座後凉殿簀子爲侍臣座云々西宮記にみえたり。河三月卅日天德四年內裏歌合西宮記云其儀西廂皆懸新御簾納仁壽殿也第五間渡內立御倚子臺盤所倚子也南方立御几帳立置物御机在御座南南第四間垂御簾爲左方女房座矣北二間爲右方女房座渡殿南北各敷絲端疊三枚爲公卿座後凉殿東簀子敷從渡殿南北相分鋪長疊爲侍臣座南北庭敷疊二枚爲樂所召人座　今案淸凉殿西面也御記云暫擬淸凉殿南殿中渡殿藩云々

殿上人はこうらうてんのすのこ　前にみえたり　弄こうらうてんは御殿の西なり

左はしたんのはこにすはうの花そくしき物には紫ちのからのにしきうちしきはえびぞめのからのきなり　河花足也　花天德歌合左方洲濱紫檀机蘇芳下机紫綺地敷云々今案左方繪は紫檀の箱に入て蘇芳木にて作れる花足にすゆ又下つくゑあるへし云々其敷物は紫のからの錦なり打しきは机をすゑたるちしきなりそれは蒲萄そめのからの綺也天德のすはまも紫檀すはうにて作りて紫の綺を地敷とせり

わらはは六人あか色にさくらかさねのかざみあこめはくれなゐに藤かさねのおり物なり　河天德童女四人昇文臺云々　弄わらはは此時繪なとゝりしたゝむへき用歟又有故歟かさみは童女のうへにきる物なり水干のかみのやうなる物なりあか色のうはきに櫻かさねのかざみ紅に藤のかさねはみな袙なりあこめは二も三もかさぬる物なり藤かさねは面うす紫裏萌黃をいふなり花同

右はちんのはこにせんかうのしたつくゑうちしきはあを地のこまのにしきあしゆひのくみけそく花イの心はへなといといまめかし　河あしゆひのくみは色々の糸にてまわりにあはひおすひを結て机の四の足をからみて花足よりもなかくうちはへたるなり　下濃也童の裝束左は赤色右は青色也舞の裝束にいたさる歟花天德歌合に右方洲濱沉机淺香下机淺綠浮文織物地敷云々せんかうは沉の淺木を云下机を作

り足ゆひくみは花足を絡たるにや河物合風流事天德西宮記云右方弁持洲濱二机一奇一箕參上自御湯殿西邊獻童女一人着青色實正執銀花柳枝下居砌次小舍人昇員指洲濱置實正蔵如御記者北次左方自殿上侍方參上童女一人執地敷也御前粹如右次童女四人昇洲濱立地敷上小舍人二人於砌下取傳置員指前云々　永承承暦以下依爲以後例略レ之風流故樣々也

わらはあを色にやなきのかさみやまふきかさねのあこめきたり　花 青色のうはきに柳のかさみ紅梅かさねの袙きたる也河海云左の童赤色右青色は舞の裝束をかたどるといへり今案地敷左はからの綺右はこまの錦とみえたり左は唐樂右は高麗樂にかたどるにや　弄 青色はかりやす紫にあくさしたる色也一本にあをにとありあをにならはこきもえきに黃のましりたるなり柳はおもて白く裏は青きをいふ夏は卯花といふなりやまふきかさねのあこめは面うすくちは裏黃なるをは花やまふきといふ面黃に裏紅なるをはうら山ふきといふ　以上一勘

おまへにかきたつ　繪の入たるはことるなり

うへの女房まへしりへと　河 前後也　花 うへの女房とは典侍掌侍等也まへは左しりへは右をいふ是もあかいろ青色のきぬともきたるにや　花 しりへ左しりへ右なり　私まへにいへるは繪の机をかきたるわらはの裝束なり是は繪合の人數の女房なるへし左右をわかちてさうそきたる成へし

うちのおとゝ權中納言　源氏致仕大臣召によりて參内なり

その日そちの宮も　弄 螢兵部卿也　判者也

いとよしありておはする中に　是より螢の宮の事をいふ何事もよし有て心はせおはする宮也と云也その中に繪かく事を別して好給ふゆゑに源氏のおとゝも折節參會したるやうに參内なれは下にて中合給ふなるへし殿上にさふらひ給ふを御前より召有て又繪合の所へ參り給ふとなり

このはんざつかうまつり給ふ　繪をよく螢の宮のかき給へは判者し給ふとなり

れいの四季のゑもいにしへの上手とものおもしろき事ともをえらみつゝ筆とゝてはらすかきなかしたる

さまたとへんかたなしとみるに　或今案これは左
方のゑなるへきにや梅壺へは院より御繪共まゐら
せらるゝ中に年の内の節會さもかけるとありこき
殿へも月次の繪權中納言より參りたるとみえたり
と云々紙繪に合せらるゝとみえたれはなるへし紙
繪權中納言かゝせられてこき殿へまいらせらるゝ
と前の詞にみゆ　私この義然るへしいにしへの上
手とものとあれは梅つはかたの繪のさたとみゆ
かみゑはかきりありて山水のゆたかなる　花紙繪は
紙のたけみしかくて山水の景氣ゆたかなからさる
よし歟懸繪本體歟　弄昔は絹に多分かきし也　或
是こそ右の繪の事とみえたり　私此義然へき歟
花紙をつきてかきたれはきぬのやうにもなくたけ
みしかくて山水のいきほひをみせつくさぬよしな
り上の詞に中納言も其心おとらす此比世にはたゝ
かくおもしろき紙繪をつとへつゝとゝのふる事を
とあれは紙繪は弘徽殿の御繪をいふにや　拾遺第
九詞云廉義公かみゑにあを馬をひける所とあり
いまのあさはかなるもむかしのあとにはちなく　河
不恥古也　弄可見也　花紙繪は山水のゆたかなる
心をみせつくさぬ物なれとも上手のかきたるは
筆のいきほひ有て今のあさはかなるもむかしの
跡にいたくはちぬとなり
あさかれいの御さうしをあけて中宮おはしませは
花朝かれいの西の障子をあけて御簾をかけたるへ
し　或御說花鳥に西の障子とあるわろし眞案り
私清凉殿との間なるへし
ふかうしろしめさんと　薄雲何事もたと〳〵しから
すおはしませは繪の事なともしり給はんと源のお
はすなり
心もとなきをり〳〵にさしいらへ　弄源の詞也　源
の詞をくはふるなり
左は猶かすひとつあるはてにすまの卷出きたるに
弄左方一番の勝と也今一番なるへき時須磨の繪出
たり　花歌合に負さしとてある也天德歌合には金
銀藤花を洲濱にすゑてかすさしのまへにおく花の
枝にて數をとれるにや　私云四月廿六日云々正子
內親王繪合の日記云古筆也所持也詞略して書すかすさし
のかねのすはまにさしてのいそをつくりたる磯山
に松をおほくうゑたるをかすにはまへにさしうつ

すへきなり右かすさしかねのすはまにかねのつるあまたてり千とせつもれるなといふ心なりかすにはつるのうらつたひすへきなり　以下略之　かすさしの體大かたきこえたり

中納言の御心さわきにけり　須磨巻出來る故なり源氏の君繪の上手ときこえたり

あなたにも　右方弘徽殿にも中にすくれたるをえり殘したるとなり

かゝるいみしきものの上手　源氏繪の上手にておはするにすまの浦にて心をすましてかきつくし給へるはたとへん物なかるへし

みこよりはしめ　帥宮也後に螢兵部卿也

そのよに心くるしかなしと　源氏すまの浦におはせし時を人々の思ひしは事の數にもあらすと只今の繪のさま詞書なとをみるに思ひくらふるなりおほしけん事ともは詞かきにみえたるなるへし

さうのてにかんなの處々にかきませて　須磨の巻の繪詞草字に假名をませてかき給へるなるへし物かたり繪なとのやうにしなし給へる歟

まほのくはしき日記にはあらす　河まことしき日記にはあらすとなり　私故人日次記皆以眞名也是は假名ましりに詞をかきて繪のあるなるへし仍まことしき日記にはあらすと云なり

あはれなる歌なともましれるに

よろつみなをしゆつりて左かつになりぬ　花天德歌合左勝員九云々

夜あけかたちかくなるほとにものいとあはれに　源の心なり輿に乘したるなるへし

御かはらけなと　河勸盃事　天德御厨子所供御菓子干物次供御酒左大臣起座獻盃　見西宮記

いはけなき程より　是より源の我身のことをの給ふ詞なり　閑此物語一部の内にこれ程に源氏の自讃の詞なしと也云々

すこしもさえなとつきぬへくやおもほしけん　是自讃詞也才學も秀ぬへく父みかとの御らんしつる歟となり

院ののたまはせしやうに　これより桐壺御門の源へ御敎訓の樣を語り給ふなり　弄桐壺帝の事也

さいかくと云もの世におもくする物なれはにやあらんいたうすゝみぬる人の命幸とならひぬるはいとか

たき物になん　弄顔回か不幸の如し　河論語曰有ニ顔回者一好レ學不レ遷レ怒不レ貳レ過不幸短命死矣今也則亡未レ聞ニ好レ學者一　史記曰顔回一箪食一瓢飲不幸短命死云々仲尼弟子傳　白氏文集文人數奇詩人薄命
しなたかくむまれさらても人におとるましき程にておなかちにてのみちなふかくならひそといさめさせ給うて　花品高き人の才學もいたく人におとらぬ程ならにさのみ深くならひそ命とさいはひとはならふ事はいと有がたき物そと仰事ありてほんのさいのかたををしへ給ひしにさのみ我ながらつたなき事もなく又すくれたる事もなかりしか繪書事におきてはこのましく思ひて心に入るゝやうにて有しと源氏のとはすかたりに申させ給へるなり云々
ほんさいのかた／＼の物数へ　河本才文才はかりにかきらす詩書禮樂いつれも才の本たる歟　弄世の政事(コツリコト)は能々をしへ給ふなり
心のゆくはかりかきて　繪かく事なりわか筆勢のかきりを盡してみはやと思ひしにとなり
おほえぬ山かつに　源氏謫居の時の事なり
さらに思ひよらぬくまなくいたられしかと　繪には隨分心のいたりふかきよしなりされと筆のゆくかきりありて心におもふほとはなきと也すこし卑下の詞をくはへたる也
されと次てなくて御らんせさすへきならねは　上覽に備へき次てなけれはかゝる次てに取出したるよしを帥宮に對して源の申給ふなり
すき／＼しきのちのきこえ　かやうの次てに取出す事は好みたるやうに人のいひつたへんと用捨の詞なり
なにのさい(かたイ)も心よりはなちてならふへきわさならねと　是より帥宮の返答の詞也
みち／＼に物の師ありまねひ所あらんはことのふかさあさゝはしらねとおのつからうつさんにあとありぬへし　何の道をも師匠に習ふはかりにてはならぬ物也自體の器量肝要也されともその道々の師ある事は善か惡かにてこそあれまなふに跡なき事はなき物そとなり惣しての事を宣ふなり
筆とるみちとこうつ事とそあやしうたましひのほとみゆる　河遊仙窟云圍碁出於智惠　花碁は東坡も三不能といへる事なり

深きらうなくみゆるをれものもさるへきにて　河を
れ物とは愚なる物歟　私苦心して稽古もせすちと
愚鈍なるものにも天性の器用にて碁なとうつこと
あるとなり碁有別智酒有別腸といふことあり
かきうつたくひ　手かき碁うつ事なり
家のこの中には　弄たかき家の人々はよくまなひこ
のむ人そ才あるとなり
このみえけるとそ　好得ける歟　或こゝは家のこと
はみこたちの事をさして宣ふと云々此義如何只高
家の人のうへなるへし　私位高き人は性も別なる
へしさやうの人の好得たる藝はかくへつのくらゐ
といふ義歟
院の御前にてみこたち内親王　院は桐壺帝也その男
女のみこたちに何も物數へさせ給ひし事を宣ふ也
その中にもとりたてたる御心にいれてつたへうけと
らせ給へるかひあり　帥宮の源氏の事をほめ給ふ
なりいつれのみこたちにも物ならはし給ひしかと
りわき源へはみかとの御心にいれてをしへならは
せ給ひしかそのかひありて何事も抜群なるとなり
文さいをはさる物にていはす　是より源のさま〲

の藝能をかそへたつる也　花文才は無上の藝能な
れは中々いふに及はす其外は管絃の道に達するな
んいとありかたきことなり源氏の諸道諸藝をきは
め給ふ事は嵯峨一世の源氏北邊大臣信公の例をう
つしていへるなり云々　弄源氏才學等比嵯峨源氏
信公と云々花同　河源氏文才草書畫工吹笛鼓琴彈
琵琶事　信大臣嵯峨第一源氏號北邊大臣傳云大臣
好讀書兼善草隸又工圖畫丹青云妙本上天皇親自敎
習以吹笛鼓琴彈琵琶之徒思之所涉究其微音云々
琴ひかせ給ふ事なん一のさえ　源の藝にすくれたる
なるへしいちと讀也
うへもおほしのたまはせ　藝の一々の次第を云たて
給ふ也桐御門もかやうにおほしめし世の人も思ひ
つるにいつの間に繪はこれほとすくれたるそと宣
ふ也
いとかうまさなきまて　弄まさなきはつよくほめた
る詞なり一勘　私源の御身なとにはあまりなるま
てすくれたる心にいふなり
すみかきの上手ともあし跡イをくらう　昔の上手ともゝ
及ふまし樣きをはむるなり

かへりてけしからぬわさなり　あまりすくれたるをいふなりまさなきまてといふ類也あまりの事に興もさむるやうの心なり

ゑひなきにや院の御事きこえいてゝ打しほれ給　師宮の御門の御事を申いたしてあはれなる體なり

廿日あまりの月さしいてゝ　弄はしめの繪合は十日比なり

こなたはまださやかならねと　花御簾の西むきなるによりて廿日の月はこなたへさゝぬよしなり弄同

大かたのそらおかしきほとなるに　月はさしこねともそらの體なとの事おもしろくかけり

清ふんのつかさの　弄書司也女官なり和琴をあつかると云々先和琴をつかさとるよの樂器の事は殊にみえす一説　花李部記承平四年新嘗會勅召二書司一司禪御云琴手ハ良之萬爲體書司則取二朽女一名和琴置之御前二云々今案物合之後には必御遊あり書司は女官の名也和琴をつかさとるよりて和琴をもやかてふんのつかさと云也朽女は宇多の法師につかひたる和琴也　河ふんのつかさ　圖書寮被納累代樂器所也

物合後御遊事

召堪能公卿殿上人等令置人臺御遊具　天德地下召人相交之出見御記　承暦永承共無召人永承根合時主上令吹御笛給見御記　私云書司

わこん權中納言給はり給ふさはいへと人にまさりて

源氏に次てなり　或說の詞に源の管絃の道に達し給へることをかけりそれをうけたる詞なりさはいひつれと權中納言も源にこそおとり給へ餘人はすくれたる和琴となり

みこさうの御こと　帥宮箏を彈するなり

おと〻琴　源琴を彈するなり第一の上手とみゆ

少將の命婦　此人琵琶をひくなり繪合の人數左方の方人とみゆ

うへ人の中にすぐれたるをめしてはうしたまはす

花御遊には催馬樂うたふ人拍子をとるなり助音することには付歌といへり天德歌合絶頭有御遊雅信朝臣拍子侍臣召人等候之

あけはつるまゝに花の色も　此時のさまおもひやりてみるへし

ろくともは中宮の御かたより　河天德大臣夏裝束一襲大納言白合御衣一重參議白單重御衣自餘疋絹上

東門院　[illegible]時人々賜御衣之由見河名記
御子は御そ[illegible]さねて　花帥宮繪の判者をし給ふに
よりて別に祿を給はり給ふなり　弄別の祿を給は
り給ふ歟
かのうら〳〵のまきは中宮にさふらはせ給へと　河
或本には中宮にさふらふと聞えさせ給ふとあり理
不可然彼　磨明石巻は中宮にまひらせおかれよと
源氏仰られたる也　花一本には中宮にさふらふ
とあるは理不可然由河海にのせ給へり愚案も是に
おなしその故は須磨明石の巻はけふの繪合に源氏
の君の奉らせ給へれは中宮にさふらふへきいはれ
なし又上の詞に中宮はかりにみせ奉るへきものな
りがたはなるましき一帖つゝさすかにうら〳〵の
有樣さやかにみえたるをえり給ふとあれは中宮へ
まゐらせおかれよと申させ給へるに首尾相叶成へ
し此次の詞に是かはしめ又殘りのまき〳〵ゆかし
からせ給ふとあり是か始めとはけふの須磨明石の
の繪の事なり是につきて次々の巻をゆかしくおほ
しめす成へし　弄薄雲の方におかせ給ふへしとさ
ため給ふ也又女院を中宮といふ歟如何可尋　或は

須磨明石の巻は藤つほの中宮におかせ給へと源氏
の宣ふ也心は猶かの浦にてのあはれをみなにみせ
奉らん爲なり
うへも御心ゆかせ給ひて　弄上も繪を好み給へば一
段悦おほしめすを源氏の君もうれしく見給ふなり
はかなき事につけてもかうもてなしきこえ給へは
よろつにつけて弘徽殿の女御梅つほにおさるへき
事を權中納言のおもふなり梅つほを源のとりもち
給ふゆゑなり
うへの御心さしはもとより　弄こき殿の事也　私み
かとははやくより參り給ひ御としも同しほとにお
はすれは心やすくおほしつきたるをたのもしく權
中納言のおもふなり
さるへきせちゑともにもこの御時よりと　弄賢なる
事を本として又遊の事もありし也　私是より源氏
の內府の天下輔佐の心もちゐをいふ段なり　花世
のことくさに延喜天暦の聖代といひならはしたり
冷泉院をは天暦の御宇になすらへ侍るなり繪合の
例に引ける天德の歌合も此御代の事也
河天下明德皆自虞舜始史記第一五帝本記例始自聖代云々

おとゝそ　花源氏の内府也　私是より源氏の體をい
ふなり冷泉院なとかく即位ある事をいさゝか恐れ
給ふ心もある歟如何
いますこしおとなひ　主上冷泉院の御事なり
むかしのためしをみきくにも　源の昔の人のうへに
て分別し給ふなり萬のたらひてひさしくたもつは
かたきことゝいふなり
よはひたらてつかさくらゐたかく　河大友皇子天智天皇
十年正月一本十二年任太政大臣廿五
天武天皇元年五月集ゝ被誅廿六歳
東三條左大臣　承和七年八月七日任右大臣年廿九齊衡元年六月十三日薨四十五時左大臣左大將
此等之例歟　六條院卅二歳歟　私源氏此とし卅歳
なり
よにぬけぬる人のなかくはえたもたぬわさなり　河
金光明經曰獨拔而出成佛正覺　史記曰大名之下久
不居　後漢書曰位尊身危財多命殆　成功名遂而身
退者天之道也　文選曰木透於林風又摧之行高於人
衆人非之　杜詩曰自謂頗挺書立登要路律致君堯舜
上再使風俗淳　此意覚蕭條　行歌非隱倫
この御世には身のほとおほえ　源の内大臣にて政を
もなかはを分て攝政へゆつり給ふやうになれは滿
足の時分を心に思ひしるなり
中ころなきになりてしつみたりし　弄命へ幸との事
を前にいひしに叶へり萬事可思也
いまよりのちのさかえはなほいのちうしろめたし
今の分にてさかゆるは命なとあやうしと也源の獨
愼の心なり
よはひをものへんと　河延なり
山里の長閑なるをしめて御堂つくらせ給ふ　花嵯峨
に御堂たてられたる事松風卷にもあり大井の里の
事をやう〳〵いひたすへきたよりにいへるなり
弄嵯峨の御堂の事也松風卷に此春よりと云々
すゑの君たちおもふさまにかしつきいたして　弄夕
霧も少年なり又明石にもいとけなしとなり私いつ
れも行末久しきゆゑに源のとく世をそむき給はん
事はかたしとみゆるとなり
いかにおほしおきつるにかと　草子地也　源氏の御
分別のやう推してはしりかたしと用意をくはへて
かきたるなり

岷江入楚第十八　松風

松風　以歌幷詞爲卷名　花弄秘同
齋宮女御集　身をかへてひとりかへれる山里に聞しにたる松風そふく此歌の前の詞(詞には)にかの御かたみのきんをかきならすをりのいみしうしのひかたけれは人みなれたるかたにうちとけてすてしひくに松風はしたなくひゝきあひたりあま君物かなしけにてよりふし給へるをふきわかりて歌に身をかへて云々

花源卅歳の事なり繪合同年なり　秘源卅歳の秋の頃よりかけり繪合の卷も同年の春の事也　弄同或抄是は明石の姫君の事をおくにひるのてかよはひにと有詞にて源卅歳とは勘るなり源廿八歳三月十六日に生れ給みをつくしにありひんかしの院つくりたてゝ　花虚女卷に六條院はつくり給ける夫よりさきに二條の東院作りて花散里うつろはせ給ふ六條院作り出て彼花散里はうしとらの町に住給ふ明石上はいぬゐの町と見えたり此東院はうつせみ末摘はかり始終は殘り留り侍なり二條院の東院なり蓬生の卷の末より作給ふよしみえたり弄同　或抄二條院より東にあたる院なり

にしのたいわたどのなとかけて　西對渡殿也是は二條院の東の院西の對なり花散里の住給ふかたなり或抄御説に寢殿を先つくりてそれに對して東西の對をは作る物なり北の對は内々の方なり

まところけいしなと　政所家司也　政所も家司もよろつの事をとりまかなふ人なり政所家司なとになる人のその所々に居てとりおこなふ事なり

ひんかしのたいはあかしの御かたと　秘明石上のすませ給ふへきとなり　源の御心あてかひなり

北のたいはことにひろく　秘女三宮なとの居給ふためなるへし　私あまたつとへすませんために結句ひろく造給ふなり明石花散里なとは各別に住給へは中々西東の對はひろからぬとなり

へたて〳〵しつらはせ　ひろく造りてしつらひわけ給ふなり念比に面白き心つかひなり

しん殿はふたけ給はす　河さるやう有てしん殿は云云　河寢殿は妻室の居所也源氏未其仁なし河さるやう有てふたけすと有歟　禮記云聘則爲妻奔則爲妾注云聘問也妻之言齊也以禮見問則得與夫敵體妾之言得接也言得接見於君子不得與夫敵體也と云り聘は以禮迎也奔は無媒心也野合之義也されは紫上も爲妾之義歟仍寢殿に居せさる歟　花河海の説あやまれり紫上は本より二條院の西の對に住給へり東院の寢殿をは源氏の御やすみ所に心あてたまふ故にふたけ給はぬをさるやう有とは云る也　花鳥に河海の説をあやまりたる由記さる然れとも河海可然歟其故は六條院にても寢殿には紫上をおき給はぬ也聊心あるとみえたり　或抄御説此義に同し聞書源氏の紫上を本妻にはもてなさぬなり六條院にても寢殿に女三宮を置給へり紫上は此事遺恨也さやうの事故病つきなともし給へる歟

わたり給ふ御すみ所に　二條院の東の院へわたり給ふ時の源の御すみ所なり

さるかたなる御しつらひ　これは源の御住所なれは女とあひ住給はぬ所のしつらひのさまなといさゝかかはるへしそれをいへり

あかしには御せうそこたえす　明石上へ源より文にて上洛あるへき事を申催し給ふなり

女はなほわが身のほと　明石の身上を卑下なり

こよなうやんことなき　秘源のかよひ給ふ所々おは

きをいへり　聞六條の御息所以下をいふ　或抄やんことなき人をたにかけはなさて又うちとけたることはなきときけはまして數ならぬ身のさし出ましろはん事はいかゝと思ふなり

このわか君の御おもてふせに　河後撰「かさせとも老もかくれぬ此春そ花のおもてもふせつへらなる

不及此歌

たまさかにはひわたり給ふついてをまつ事にて人わらへに　明石上京へのほり給ふとも源の對面はまれなる事にて人わらはれなる事のみ多からんとの遠慮也

又さりとてかゝる所にて　姫君の事を思ふ心なり數ならぬ身のたちそひてのほりたらんは姫君のおもてふせと思ひ又かゝる田舍にておひ出給はん事もいかゝとさま〳〵に姫君の事を思ひわつらふなり

ひたすらにもえうらみそむかす　明石の心なり源へのあひしらひなり

おやたちもけにことわりと　明石の父母にも此心中をことわりと思ひしりてともに心をつくす也

むかしはゝ君の御おはち中つかさの宮　河前中書王兼明事をいふ歟號小倉宮　菟裘賦云余龜山之下聊卜幽居辭レ官休身欲レ終レ老於此遂テ二草堂之漸成一爲執政之者枉被陷君昏臣諛無レ所三于愬一　花醍醐御子中務宮兼明親王山庄大井川の邊に有號小倉宮也此親王を明石上の母君の祖父に比して書り　秘明石尼のおはち中務宮也兼明親王に擬してかけるなり

同弄或抄御說云前中書王菟裘賦を作り給ふ菟裘は所名也唐の名所歟云々

らうし給ひける　領し給ふなり

あひつく人も　前の中書王の御末に然るへき人なしとなり

よひとりてかたらふ　宿守をよひとりて明石の人のいふなり

世中を今はと　是より宿守に對していふ詞なり　秘明石上の心なり　私是より明石上の母の宿守に云心詞歟秘の義不審

かゝるすまひ　明石の浦の事なり

末の世に思ひかけぬ　明石上を源氏のみそめ給ひて姫君のいてきたる事なり

にはかにまばゆき人なる　京へふと立出んよりも少

都のかたほとりにて都の事をも聞ならしてから源
の御かたへもうつろはんとの心もちゐなり
しつかなるましきを　心のうちつゝましき事を云り
ふるき所たつねてとなん　大井の事なり先祖由緒の
地なれはなり
さるへき物はあけわたさん　上渡也田舎よりのほせ
わたさんといふ心歟遣作の料は京へのほすへきと
なり聞書同
かたのこと　形のことくなり
あつかりこのとしころ　秘宿守の返事な
らうする人も物し給はす　九禪中納言伊衡卿は兼明親
王の一男也それよりのち相續して住人なしとなり
あやしきやうに　河藪なり　私河にはのらやぶにな
りてとあり
しもやにそ　河下屋　雜舍也
このはるの比よりうちの大殿のつくらせ給ふ　内大
臣は源氏なり　秘源の嵯峨の御堂の事なり　花綸
合卷の末にかつ〳〵いひ出せり御堂は栖霞寺に思
ひなすらへ侍る故に大覺寺の南にあたりてと下に
みえたり棲霞館は左大臣融公の山庄也後に寺に成

て棲霞寺といふ今の清凉寺の東にある阿彌陀堂是
なり清凉寺は其西にある寺なり小野宮右府記永延
元年八月十八日法橋上人位奝然申請云以二愛太子
山一號二五臺山一又清凉寺建二立一伽藍一置二白栴檀釋
迦尊像一云々　此釋迦は奝然入唐し渡し奉る佛なり
但し清凉寺と云名は昔より有しなり貞觀七年の國
史にみえたり又李部王記に天慶の比棲霞寺釋迦堂
としるせり奝然わたし侍るよりさきにも釋迦堂は
ありしなりといとおほつかなき事なり所詮清凉寺
といふはもとよりありける中に奝然別に一堂をた
てゝ二尊釋迦を安置し奉るにや
いとけさわかしう　最氣(イトケ)　騒(サハカシキ)
おほくの人なんつくりいとなみ　源氏へ家禮の受領
なと人々の請とりてつくることとなり
しつかなる御はいならは　秘しつかにと思ひ給はゝ
御心にたかふへきと也此あつかりいやかりて云也
なにかそれもかの殿の御かけに　秘これより尼公の
詞なり源の御堂近きはさいはひとなり
かたかけてとおもふ事ありて　聞書如此句をきるへ
しと云々　河かたかたかへるとはその人につかふる心

なり或は肩をやすむるとも云なり　世俗に肩をい
るゝと云なり文選に息肩於漢欣戴高祖と云此心也
私云此義如何かたかへるとは其あたりへかたよる
心歟よりつかまほしうする心歟如何
おのつからおひ〳〵に　内のしつらひなとは速々に
せんといふ心なり
みつからうする所に　秘又あつかりの詞なり我あ
なかち領知することもなけれともかて〳〵として
居住するとなり
かてかなるならひにて　或抄かて〳〵なと云心なり
又こま〳〵としたる心なり
みさうの田はたけなといふことの　或御庄田畠此あ
たりにあるへし
こみふのたいふの君に申たまはりて　みんぶのたい
ふと云様にはよますみふたいふと心して讀也　花
兼明親王長男伊渉中納言二男伊行従四位上春宮學
士民部大輔云々兼明親王は文才世にすくれ給へる
人なり此みこうせ給ひて後帝より何たる文を作り
おかれたると御尋ありしに伊渉申侍りしはとなる
文も侍らす兎のかは衣こそ候へと申されしかはめ

つらしきかは衣かなまゐらせよ御覧せんとありし
かは彼の菟裘賦を奉れり菟の字兎と云文字に似た
りけれはいはれもしらす申し侍りしその上ての賦
の内にはゝかりたる詞あり君昏臣は諛とかゝれた
りさしもみては世にすくれ給へる人のそのあとに
未錬の子の侍りけるを口をしき事には申傳へ侍る
なり云々　私云兼明親王は延喜の御子前中書王と
申す具平親王は天暦の御子後中書王と申す世にす
くれたる才人にておはしけれは古今の間に中務に
成給へる親王おほくおはすれと此兩親王をのみそ
申侍る　秘　前中書王の次男伊行の事によそへたり
弄同
人にましらはんことを　明石の心中を源の察し給へ
る也その故其上かやうの所を作り出してから案内
申たるは口惜からぬ用意也とほめ覺す源の心中歟
さるへき物なとたてまつりて　秘かはりをいたして
わか領するよしをいふなり
そのわたりのたくはへの事を　河　産也　秘　上洛あり
ては此田はたけなとをとりあけられてはとあやふ
けに思ひて云なり

ひけかちにつなしにくき　秘つれなしを略したる也
弄同　河強つれなけにくけなる歟清少納言枕草子にひけかちなるをとこのしひつみたると有

はちふきいへは　秘はちらひなといふかことし
弄はらたつ體なり　撥播（撫イ）歟はらひのくる心なり
一説はちをはらふ時必うそをふくなり蜂吹也

さらにその田なとやうの　秘尼公の詞なり

券（ケン）なとはてゝにわれと　花券は文書の事なり　開券はしるしと訓すと云々　秘券は支證の物なりさやうの事には心はなきそとなり

大殿のけはひをかくれは　源の事なり　秘源の御かたへもかけはなれぬさまにいひなすなり　私此やともりのはちふきいひてみれと明石尼公源の御あたりをなといふかむつかしく思ひて此大井の宿守の修理なとうけとつてする也

かやうに思ひよるらんとも　秘源のかやうに上洛すへき用意あるをはしり給はさるなり大井の宿の用意をしり給はぬなり

のほらん事を物うかるも　明石上の上洛を物うききさまに返事あるを源の不審におほす也これ一つ又は

わか君のかゝるかた田舎にておひ出給ふも人のきすにやいひなさんといろ〳〵におほす源の心なり

つくりはてゝそしか〳〵の所　大井の家なり此家出、來の間とかく申のへたるなり　秘明石よりかやうの處もとめ出したるよしを申なり

かく思ふなりけりと　秘人めなき所をもとむるなりけりと思ひ給ふなり

人にしこれみつのあそん　秘惟光をつかはしてみせ給ふなり

あたりおかしうて海つらにかよひたる　秘大井川の邊なれは海つらに似かよひて明石の浦にすみ給ひしにたよりあると也　私惟光の歸り參りて申さまなり

さやうの住ひに　秘源の心なら明石かやうの所の住居につきなかるましき人となり

よしなからすはありぬへし　河由あるといふなり

つくらせ給ふ御だうは大かくしのみなみに　秘弄大覺寺の南とは栖霞寺を思ひてかけるなり彼の寺は融の公の山庄也　河大覺寺の事舊記に曰正子内親王（淳和后嵯峨の皇女）承和七年十二月日入道（依淳和崩也）　貞觀十八年

二月廿五日以嵯峨院爲大覺寺奉淳和院太后令旨請嵯峨院爲大覺寺之由奏伏見宮家御集應和四年二月廿三日御記曰召左大臣於前定諸寺別當講說了請大納言及入禮大夫於瀧殿小飯進水飯參議重信朝臣爲大覺寺別當　花 大覺寺はもと嵯峨院と號せり嵯峨天皇昔日閑放之地なり

たきとのゝ心はへなとおとらす　花 瀧殿は泉殿といふかことし大覺寺にも瀧殿あり栖霞寺にもあるによりて心はへなとおとらす面白き寺とはかけるなり　河 秘 泉殿なとは大覺寺にもおとらさるなり弄同　瀧殿事古人釋云舊名所なり在大覺寺南云々紫明抄云舊名所に全無瀧殿只瀧與野の心はへおとらすと讀へし云々今案古八此等の會釋共に推量の義と聞えたり只泉殿といふ心なり大覺寺の瀧殿にもおとらすおもしろきといふなり詩に瀧を飛泉瀑泉なと作て無二差異一者也大覺寺瀧古歌以下多之四條千載集大納言家集云嵯峨の大覺寺にまかりて是かれ歌よみ侍りけるによめる「瀧の音は絕て久しく成ぬれと名こそなかれて猶聞えけれ　後拾遺集　瀧殿にて赤染右衛門「あれにけり今たにかゝる瀧つせのはやくそ人はみるへかりける　西行集云大覺寺の瀧殿の石閑院へうつされて跡なくなりぬと聞て見にまかりて赤そめか今たにかゝるとよみけんをり思ひ出られて「今たにもかゝるといひし瀧つせのその折までは昔なりけん　爲長卿小倉山黛當簾色大覺寺泉落レ枕聲　東北院のわたとのゝやり水に影をみて讀侍りける紫式部「影みれはわかうき泪おちそひてかことかましき瀧の音かな　作者池水を瀧となかめし歟

これは川つらに　花 これは大井のさとの事なり　秘 小倉宮の御所也明石尼の家をいへりそとしたる寢殿なり

何のいたはりもなく　河 勞也何のよせもなくたてたるとなり　造作もなくしなしたるをいたはりもなくさ云なり何のかのと苦勞したる事のなきを云也

こさそきたるさまも　大井の家のさまなりそさうなる體なり

うちのしつらひ　秘 惟光にみせ給ふて後は源の御方より申つけ給ふなり

したしき人々いみしうしのひて　秘 むかへをくたし

給ふなり　花明石上のむかへに源氏の君の御心し
りのともからを京より下されたるなり
のかれかたくていまはとおもふに　これより明石上
の心中なり
心つくしになりはしめけん　我身に事過たる事を入
道の思ひよれる事なとを思ふなり
露のかゝらぬたくひ　花源氏君の御ゆかりにかゝら
ぬ人をうら山しく思ふとなり　秘源の契をかけ給
ふ事中々なるとの事なり露ならぬ心を花に置そめ
ての心あり　或抄御説同之
おやたちもかゝる御むかへにて　明石上の父母のね
かひのまゝにはあれと又今はかなしきとなり
あひみてすくさむいふせさの　明石上又は姫君の事
を思ふ入道の心なり
おなしことをのみ　句を切て心得へし
さらはわか君（若きみ）をはみたてまつらては侍るへきかと
姫君の事なり　秘手をはなちたてまつらんと同事
をいふなり　此詞さらはわか君をはみたてまつら
て侍へきかと同事をのみいふよりはかのことなし
と云詞なり

としころたにおなしいほりにも　入道と母君とは同
所にはあらさるへし　秘明石尼の心也年比たにひ
とつ庵の内にも入道はなかりし物を此時明石の上
につきてのぼらてはと思ひ定めたるなり
たれによりてかはかけとまらん　河入道と明石尼
同庵にたにすまされはたれかはかけもとめんとな
り　一説たれによりてか影をもとむへきとなり
たゝあたにうちみる　秘そとしたる事さへ別れはか
なしき物をとなり
みなれそなれてわかるゝ程は　河「みなれ木のみな
れそなれてわかれなは（はなイ）戀しからんや戀しからしや
花みなれ木は水になれたる木をいふそなれ木とも
云也「そなれ木のそなれ〳〵てむす苔のまゝはなら
すともあひみてしかな　そなれは磯なれたる心な
るへし　私云河の引歌然へき歟但聞書には花鳥の
引歌はかりあり
もてひかめたるかしらつき　花明石入道事なり　秘
入道してかやうのすまゐをせしをいふ也
心おきて　此入道普通ならぬ心さまなるへし
又さるかたにこれこそは世をかきるへきすみかなめ

清れと　秘此すみかにて夫婦もろともに身を終るへきと思ひしに思ひかけさる事の出來ぬるよとなりさるかたとは夫婦のかたらひてそなくとも後世のつとめかたにても此所にて身を終んと思ひし事なりさるかたとは後の世の事なり

わりはてぬ　河わりはてぬ命まつまのほとはかり憂事しけく思はすもかな

こゝろほそし　是まて尼公の心なり

わかき人々のいふせう思ひしつみつるは　秘わかき人々はのほるをよろこふなり宰相のめのと又類にふれて京よりよひ下せし人々の心中に久しく京を見すしていふせう思ひつる心にうれしかるへし

見すてかたきはまのさまを　のほりたくおもふ人の心にもさすかこゝの面白き景氣には心のとまる也よする波によそへて袖ぬれかちなり　おもしろくかきなせり時節のさまを思ふへし

その日となる曉　上洛の日の事なり

海のかたをみいたしいたるに　明石上のさまなり

入道の例のこやよりもふかう　常の後夜のおこなひよりも早々おきて來たるなりふかうは夜ふかうなり後夜とあれはふかうとはかりかきたるなり

おこなひゐましたり　おこなひゐたるなりおはします共よむなり

こといみすれと　門出なれは誰も／＼悦心あるなり物を忌なり

わか君はいとも／＼　明石の姫君也

よる光りけん玉の　河夜光玉　史記曰尙有徑寸之珠照車前後各十二乘云々　私與入載之仍略之　楚王臣隋侯蛇之病を愈たりしに蛇七寸玉を含夜來恩報隋侯此玉を得楚王に獻す夜中常有光明故名夜光玉云々　與入には卞和玉と有不審也　楚王有一玉名夜光玉昔楚臣隋侯出行て牧牛を飼ふ小兒一の蛇を打傷て血流れて沙中に伏まろひて命已欲絶隋侯是哀て扶取て水中に向て流て神藥を水中に入て活る事を得たり後彼の蛇水中に入て亡す又其蛇は是海龍王之子也後に七寸の玉を含て夜來向て隋侯に與へんとす隋侯の庭の中に忽に光あるを見るおもへらく賊人來て火を以て入て照すとおもへり隋侯即劍を取て門に向て立り動くへけれとも　賊不見門を開て見るに一の蛇の子玉を含て戸の外に立隋侯

問云何者そ答云我は是海龍の子也變して蛇と爲て
草中に遊ふ時に牛飼の小兒我を傷命正欲死にあへ
り而て先生命を扶て神藥をつけてたすくる事を得
たり故に下を以て先生恩徳を報せんとすと云隋侯
玉得て王に奉る王玉を殿上に置く夜中に常に光明
あり故名夜光玉云々
みなれてまつはし給へる　秘入道を見しり給ふなり
三歳なれはなり
人にたかへる身をいまく\しく　かやうに出家入道
し　修業するさま人にたかへるさまときこえたり
まことの道に入る人といへと此おひさき遠き姫君
の御爲には身のさまをいまく\しく思ふへし
明石入道 ゆくさきをはるかにいのるわかれちにたへぬは老の
涙なりけり　秘うちむきて面白き歌なり　聞たへぬ
は老の涙とは堪忍はせぬよしなり御門出なれは
泪をはてほさしとおもへともかなはぬなり　河末
の詞にひと丶ゆ丶しやとはいへり
いともゆゝしや　秘いまく\しやとなり
おしのこいかくす　御門出なれは涙をつゝむよし也
尼公 もろともに都はいてき此たひやひとり野なかの道に

まとはん　河引歌ふる道にわれやまとはんこのたひの野
中の草は茂りあひにけり　花もろともに都を出
るは明石入道の播磨守に成て下りし時の事なり野
中道は清水のある所をいふにや　弄野中の道にま
とはんとはたよりなき心なり　秘播磨國の任に下
りし時夫婦ともなひしを只今ひきわかれん事は誠
に荒野の方角をもしらぬ所に迷出たる心ちし侍る
となり花鳥の説はさしつめてせはき歟云々　私云
弄秘兩抄の説尤然へし
て丶ら契かはして　これより尼公の心なり
かうきたる事を　秘源の御志の行衛もしらぬはう
きたる事をたのみなるとなり　或源の御心をもし
らす姫君むすめの行衛さためかたきをかうきた
るとはいふ也すてしよにとは入道京より國の守に
成てくたるはかつく\世を思ひすてたるを母君の
身に引かけていふなり　私國の守になるを世をす
つるといふは中將を辭して身をさけたる故なり此
末の詞にも又明石の卷なとにも此心みえたり
御かた　明石上なり
明石上 いきて又あひみんことをいつとてかかきりもしらぬ

世をはたのまん　秘いつの世に又あひみんとかきりもしらさる也　私此歌いきて又あひみん事のかきりもしらぬ世をはいつとかたのまんといふをかくつゝけたる歌なり

おくりをたにと　秘父をいさなひ侍るなり　弄明石入道を送りにもとさそひしなるへし　此入道は二度都へのほるへき人ならす又明石上のくたらん事もかなはぬ事なれはかくいふなり

かた〳〵につけてえさるましき　かたかたにつけてとは門出に出家の身なり又二たひ都のかたなとへおもむかんも心よわくみゆへしと道までのおくりもせぬなり

さすかに道のほと　入道の心中なり

世中をすてはしめしに　秘此以下入道の詞なり中將をすてゝは播磨の任に成て侍る故にわが娘をかしつくたよりにと思ひて任に趣き侍りしと也　花これよりは明石入道の女に語侍る事なり我身世を捨たりしか播磨守に成てかゝる住居をせしも唯女君獨のことを思奉し故也任はてゝ都へのほらんと思ひ侍りしかともふる受領のしつめるたくひにてはおや大臣のなき跡をはつかしめん事を思ひて世を捨んによきかとてと思侍りしに思かけぬ事の出まうてくるよしなか〳〵と語り侍る也

さらに都にかへりて　秘上洛してふる古受領などゝいはれん事を口惜思ひて出家せしとなり

おやの御なきかけをはつかしめん事　秘父大臣たるをいふなり　河孝經曰詩曰夙興夜寐亡忝爾所生註云當夙興夜寢進德修業以無忝辱其父母　私云此まへの詞にをこかましき名をひそめてといへる中將を辭して受領に成たるは當分得分の多に付ての事なり中將より立身してこそ高官高位にもあかり大祿にもあつかるへきになりさかりて當分の利につきたる事をいふなり

やがて世をすてつるかとてなりけりと　河の引歌あり略之　私二度歸京もせすして出家したるをさては此樣に思ひよりて中將をも辭して受領にも成つらんよと人の思ひいひたるとなり

そのかたにつけては　秘其時はよく思ひよりたるとおもひしなり　私其かたとは我一身のとりおきをは隨分の仕樣と思ふ也され共明石上成長につけて

おちなき事のありしをいふなり
君のやう／＼　秘明石上のおとなひ給ふるをみては都にあらは可然宮つかへをもさせ奉るへきものをと思ひかへすとなり
にしきをかくしきこゆらん　花明石上のおとなふるを見て田舎におらせんは入道の心にやみの夜の錦と思ひ侍るなり心のやみは父子を思ふ道をいへり　秘よるの錦の心なり弄同　河富貴不歸故郷如衣錦夜行史記朱買臣傳上　伊行釋奥入同　私云花弄等にいへる心計にて可然
佛神をたのみ　秘住吉なとにたのみかけしなり　私佛に六時のつとめにも此事を心きたなくうちますよし明石の巻にあり
思ひよりかたくてうれしき事を　秘源の御事なり
みたてまつりそめても中々身のほとを　秘行末いかかと又物おもひをし侍るなり
わか君のかういておはし　姫君の出來たる事をことなる宿縁ありと思ふとなり
ちきりことにおほえ給へる　此姫君の事故源と明石上と別して宿縁ありとたのもしく思ひて上洛さするなり
見たてまつらさらん　逢みたてまつらぬなけきは我身一つの事なりそれか世をすてはてたる身なれはかゝるゐ中にはおき奉らしと思ふとなり
君達は世をてらし　秘瑞夢の事を思へり弄同　明石上と姫君となり
しはしかゝる山かつの　入道の身を卑下していへり
天(テン)にむまるゝ人のあやしきみつのみちにかへるらん
一時(ヒトトキ)に　花地獄餓鬼畜生を三途といふ修羅を加ては四趣と云人天をそへては六道といふ三途は三悪道なり　河天人墮三途事なり勘文　天上の樂盡て歸三途心なりといへり案之此義前後するか都へ歸るを三途をいてゝ天上に生るに例へたるか明石浦に隠居の程を三途の道の時といへるにや天よりかへりて三途に墮するといは丶今の悦の折節頗不便歟如何案之天に生せんとて先三途に墮する歟
秘河海今案をくはへしるさる一旦はその奥ありされと此文を前をかけて見る故に不審出來ぬるなり御契はかりてそはありけめと讀切て天上欲退時の文は今別るゝ悲しみの心はかりにとるなり今都へ

のほる人は天へものほる程心のにて我心は此苦あるとなり　正法念經云天上欲退時心生ニ大苦惱一地獄諸苦毒十六不レ及レ一　又云果報若盡還墮ニ三途一
弄天人のかりに此界なとに來て又天にかへる事ありそのたとへなり　私弄花に正法念經の文を書入て別きはの悲の深き事を手本に此文を云ならはせり入道のむすめの別の悲の事歟

いのちつきぬときこしめすとも　秘此所に藤の衣にやつれ給ひそなと云詞ある本不用之其故は此詞若菜卷にあり重語なれは可略之弄同

さらぬわかれに　河「世中にさらぬ別のなくもかな千代もといのる人の子のため

わか君の御とをなん　姫君の御事は猶思ひはなたす六時(ロクジ)の御つとめのうちにも祈まゐらせんとうちひそむ入道のさまなり

御車はあまたつゝけんを　源の忍び給ふ故にかくいふなり

かたへつゝわけんも　車と舟路とにせんもいかゝと也忍び給へとも人數あまたあるへしかた／＼舟はかりにさたむるなり

御とものの人々　京より此迎に參りたる人々なるへし

たつの時に船出(フナデ)し給ふ　辰の時は海上にたよりありてかきなせる歟

むかしの人もあはれといひけん浦の朝霧　弄ほのほのとの歌の心なり　秘一首の内にあはれなる事はそなはれり
河ほの／＼と明石の浦の朝霧に島かくれゆく船をしそ思ふ　此歌に哀と云詞はなけれともその心あるへきなり又中古先達此歌を無常或哀傷釋教旅歌なと思ひ／＼にいへり義理甚深成故也
花島かくれ行舟をしそ思ふといへる詞の中に哀なる心はおのつからこもり侍るなり都へのほる舟の島かくれゆくを入道のなかめゐて物かなしく思ふ此外別の仔細あるへからす　私云此歌をこゝに引用る心花鳥の說尤然へし

入道は心すみはつましう　今更に上洛もせはやとおもふ程の心なり

こゝらとしをへて今さらかへるも　これよりは尼公の心なり年へたるうらをさりて二たひ京へのほる事を思ふなり

猶思ひつきせす　奥入「鴈のくる峯の朝霧はれすのみ
思ひつきせぬ世中のうさ　私云紹巴此歌を引けり
強て引に不及事歟但朝霧にはたよりある也如何

尼公 かのきしに心よりにしあまをふねそむきしかたにこきかへるかな　河彼岸也　聞あま舟は尼をかりて云也　私此外に諸抄に義なし都よりくたりて入道の發心により我も佛道に心をかけて過せしかいまさら都のかたへおもむく心をいへり都をそむきてゐ中にゐつゝ發心せしかその國へ行はそむきたる方へ歸るなり

御かた　明石上なり

尼公 いくかへり行かふ秋をすこしつゝうき木にのりてわれかへるらん　秘船の心なりうきたる心なり　うき木は只船と同心なり船よりは猶うきたる心ありからひたる歌なり　聞行かふ秋とは行かへる秋なりいくたひの秋そとなり　或明石浦にていくとせのうき秋を過しきて今又都へ歸るそとなりうき木は船よりもうきたる物なれは只うきたるといはんためなり船の心なり此分御説とあり

河槎（ウキ）楂同張騫漢武帝使として槎に乘て天漢の源を究に孟津にいたりて牛女にあひて歸りし事なとを思ひて詠する歟　文選には十年とあり三十歳を經て歸りける也日本紀に仁德天皇御時駿河國大井川にふたまたなる木なかれ下るをみて彼國人吾子籠（アコキ）此木を取て始て船を作出て南海へまはして難波浦に付進之を號御船と云々其以前は査若くは筏を用と云々然る如日本紀にも伊弉諾尊蛭子をなかされしにも葦船或鳥磐櫲樟船以下多有皇御孫あまくたり給しにも船有又神武天皇崇神應神天皇御時にも船を作と見えたり今時流布の船の姿を吾子籠始て作出ける歟　私聞書云張騫か孟津の津より歸りし事なりその如く都へ行つきて本意にあらんする歟有ましき歟となり舟よりも猶はかなき乘物也行かふは秋のいくたひ行かへるそとなり　猶端に註する分可然

おもふかたの風にて　秘順風なり

かきける日たかへすいり給ひぬ　かねてその日と思ひし日則入洛なり

みちのほともかろらかに　船よりあかりて大井まての路次なり忍ひたるさまにしたる也

家のさまも
としころへつる海つらに　秘おもしろきかきさまなり
所かへたる心ちもせす　明石のさま大井の川つらに思ひよそへられて同前のやうなりしとなり
むかしの事思ひいてられて　是よりは尼公昔住し事を今のやうに思ひ出たるなり
つくりそへたるらう　是よりは源より家司に仰てことくはへられたるをいふにや
したしきけいしに　源の家司なり
御まうけの事　まうけなとして待うけたるさまなり
わたり給はんことは　秘源なり
とかうおほしたはかるほとに日ころへぬ　源の大井へおはせん事は紫へ申給はてはいかゝとなり何とかとおほしかまふる間にすこし延引し給ふ也
中々物思ひつゝけられて　明石上の心なり　源のおそくおはするか明石にてよりも物思ひのそふとなりそれによりて此音たかはぬさきになと有しを思ひいてゝ御かたみの琴を引なり
すてし家ゐも戀しう　秘明石浦なり源の無音故何にのほりつらんとは悔みたる心なり
かの御かたみのきんを　秘明石に源のおき給ふ琴を隨身してのほれる也　花明石の家ゐにて源の御形見のきんを引ならしゝことを思ひ出て人の聞ましき所なれはすこしかきならしたるなり
尼公 身をかへてひとりかへれる山里に聞しにたる松風そふく　秘わか身は同しき身なから一向に身をかへたるさまなり松風はかりもとの物なるとなり河海說無益なり　聞 聞しに似たるは明石上の事也又兼明なとの昔を思ふなり明石巻に入道明石上をせん王の御手にかよひて侍りし山ふしのひかイる耳に松風をきゝわたし侍るにやと云し心也　私秘に河の說無益と云々尤可然歟身をかへてとは大井の家はおりなから祖父の跡ともなく引かへ又尼になりたる事又は入道をもおくらかしてひとり都にかへりたるにかはらぬ物は松風の聲はかりそとなり琴をは松風にておのつからあひしらひたる成へし　此うた又前の詞に松風はしたなくと有是巻の名とせり
明石上 故鄕に見しよの友を戀わひてさえつることをたれかわくらん　秘明石上は都にて誕生せしなりされと

も二三歳の事なり故郷をはおほえ給ふましきなり
たゝ故郷にみしよとは歌のつゝきにて讀るなるへ
し以琴ことによせたり　此歌愚案母上は京を云明
石上は明石の事を故郷と云へき歟秘如此書註之
弄明石上の歌也明石上たとひ京にて生れ給ふとも
二三歳には過へからすみし世の友とは故郷なれは
よめる歟誰となくとも入道なとのことにても有へ
き歟　花さへつることは琴にそへたるなり　或御
説此故郷はたゝし明石の事のよし　私秘弄にいへ
ることく明石浦を思ひてよめる心可然也
かやうに物はかなくて　是は源の御出延引故物おも
はしく故郷も戀しくて心もおちつかぬ様を云る也
おとゝ中々しつ心なく　源もまた明石にありしより
も心いられ給ふといふなり
女君にはかくなんと　秘明石上のほりの事を紫には
たしかにも申きかせ給はさるなり
れいのきゝもやあはせ給ふとて　後に紫の聞給ひて
恨給はんを源のくるしうおほしてしらせ給ふなり
かつらに見るへき事侍るを　弄嵯峨の堂たて給ふを
おほやうにかつらとの給ふにや又桂院なと修理の

事も有しとみゆ花鳥に桂院別に註す　是より紫上
へ源より案内をの給ふ詞なり
いさや心にもあらて程へにけり　桂嵯峨の御堂なと
に見給ふへき事あるを何かと此程おこたり給へる
と宣ふなり
とふらはんといひし人さへ　秘明石上の事なり
かのわたりちかく來居て　大井の事なり桂へも嵯峨
へも程ちかき故也
さかのゝみたうにもかさりなき佛の　明石上をとふ
らひ給はんとて何かといとまいるへきさまにかこ
つけ宣ふさまなるへし
かつらの院といふ所にはかに　紫の心也　秘紫上は
大井と桂の院とをひとつに心得給ふ也　弄此詞に
紫上の大様にて大井と桂とを同し様に意得ての給
にや桂院は桂宮院を思へるにや太秦寺邊西也云々
桂院は桂宮の事なり花別注之と云々　河崇徳峡イ天皇
元年三月始建法興寺今元興寺也　水原抄云太秦寺
歟宇豆麻佐日本紀　又號葛野寺然は葛野院と讀へき
なり秦川勝建立藥師佛也且若紫上ニさかのゝ御堂
にて藥師佛供養し給とあり　案之嵯峨與太秦在所

懸隔歟然は桂院歟桂川邊也　天暦八年八月廿日御記云令元輔御左大臣以陰陽頭義樹可爲桂院別當云云今桂宮院は此跡也　花水原河海皆あやまれり桂院は桂川の邊にあるへし猶別にしるすへし

心つきなければ　紫の上の心也

をのゝえさへあらため給はんほとや　王質か故事也河奥入「をのゝえは朽なは又もすけかへんうき世の中にかへらすもかな　秘紫の詞也源はたゝ二三日侍りなんとの返答なり　私をのゝえくたすといふをあらため給はんとはおもしろくいひなせり歸り給はんほとの久しく待とはならんと云心なり又嵯峨の院をつくられ桂院修理なとの時分は斧のえもたよりありて書なせる歟　河晉王質か石室窟に至りて一局碁をみるほとに斧柯の朽たりし事なりしはしと思へともかへらん期の久しかるべき心なり　述異記云晉王質伐木至信安郡石室山見數童子圍碁與質一物如棗（頑イ）核含之不飢局未終斧柯欄（爛イ）盡既歸無復時人郡國史（志イ）曰石室山一名石橋山一室石山晉中朝時有王質者嘗入山伐木至石室有童子敎曰彈琴而歌因斧柯而聽之童子以一物與質狀如棘（梅イ）核含之不復飢遂復小徑亦謂飯頃童子謂曰汝來已久何速不去質應聲而起柯已爛盡

御心ゆかぬけしき

れいのくらい（へイ）くるしき御心かな　花此詞は處女卷にもあり紫のわか心おほえの程を人にくらへてあらそひ給ふ心なりなこりなしとは紫上の御心むかしのやうにもなきと世の人のいふ物をとは御心をとらんとて世人にいはせ給へるなり　弄源氏大井へわたり給ふ時紫上の心ゆかぬをみて源氏宣ふ詞なり源の心と紫の心と同しからぬやうにくるしきと也　秘花鳥の說いかゝ源の心と紫上の心との同しからぬやうにてくるしきとなり

いにしへのありさまなこりなしと　秘源のすき／＼しき心もいにしへのやうにはなしと人もいひ侍る物をとなり花鳥の說如何弄同

かりの御そにやつれ給へりしたによにしらぬ心ちせし　秘源の明石にてのやつれ給ひし時だにたくひなかりしにとなり

ひきつくろひ給へる御なほしすがた　只今の源の御いてたちのさまなり

思ひむすひつる心のやみもはるゝやうなり　明石上
尼公なとの心なるへし
めつらしうあはれにて　秘源の御心なり
わか君を　姫君なり
大殿はらの君を　秘夕霧なり
時世によれは人のみなすなりけり　夕霧は祖父左大臣大宮なとの御もてなし時世のおほえあるによりて人のみなしのすくれたるなりと是に思ひくらへ給ふなり
すくれたる人の山くちはしるかりけり　秘伊勢造宮の時も山口祭有鷹狩にもまつ入所を山口と云なり
花山口は山入の始をいふなり伊勢造宮のあらんとて十月に山口祭有けるも杣人の始をいへり又鷹狩にもいへりとり物の始を山口とはいふ也よくなるへき人はをさなき時よりみゆるたとへ也　河六帖人よりもおもひのほれる君なれはうへ山くちはしるく成けり　六帖「秋霧の立まふみねの山口をかねてそしるきうつろはんとてかけろふの日記著しるき山くちならはてゝなから袖の景色をみせよとそ思ふ　或説云是は伊勢造宮山口祭の事歟その心はかはるへし
うちゑみたるかほの　秘姫君なり
めのとのくたりしほとは　源の京よりくたし給ひしめのとなり
月ころの御物かたり　此めのとの明石より御帰京の後の事ともを語り申成へし
さるしはやのかたはらに　めのとに源の愛援にの給ふなり
こゝにもいとさとはなれて　源の詞也
ほいあるところにうつろひ給へと　秘二條院の東の院なりかやうの心むけにてたて給ひし故なりされは本意とはの給ふなり
いとうひ／＼しきほど過してと　秘明石上の詞也
つくろふへき所々のあつかり　所々にあつかりあるへしそれにつくろふへきやうを仰つけ又只今も家司なとかへ給へるなるへしそれらにも作事の事仰せらるゝなり
かつらの院にわたり給ふへしと　秘桂院へ参りたる人々大井へ尋参りたるなり
ちかきみさうの人々　源の領し給ふ所々の人成へし

せんさいともをれふしたるなとつくろはせ給ふ　花
是は大井のさとのことなり
たて石ともゝみなまろひうせたるを　前中書王の舊
跡のあれたるさまなり
なさけありてしなさばゐかしかりぬへき所かな　是
より所のさまを源の宣ふなり
かゝる所をわさとつくろふもあいなきわさなり
花昔よりあるたて石なとをつくろひなほさは昔の
俤もなきやうならんはあひなきとは云り　私此義
いさゝかおはつかなしかゝる所をわさとつくろふ
も無用事也執心か出來すると也末の詞にみえたり
さて過しはてぬは立時物うく心くるしかりきなと
秘源の詞也かりそめと思ひても住所にも必習着の
心ある物なりそこに住はてされは立はなるゝ時心
とまるわさ也明石にてもやり水なとに心のとまり
侍りしとなり　弄源氏須磨にてやり水なとに心と
とめ給ひし事をおもひ給ふなり大かたにも此理あ
るなり　私此兩義尤甘心なり來しかたは須磨にて
の事なるへしさて過しはてねはとはそのまゝそこ
にすこしはてぬ所をとまる樣にしたるは立はなる
ゝ時心とまりてわろきものなりされはかゝる所を
わさとつくろふもあいなきとはの給ふなり河海花
鳥等の義おはつかなしされともこゝにかきくはふ
るもの也　河古今「けふのみと春を思はぬ時たに
もたつことやすき花のかけかは　さてすくしはて
ぬはとは前栽の立石なとの荒損したるをみすくさ
てつくろひぬれは立時名殘をしく物うくおほゆへ
きかとあるなりくるしかりきはあかしのとまやた
ちはなれし事を思ひ出られたりけるにや　花此段
の心詞頗心得かたき物なり河海に立時を立石をつ
くろふ心にみられ侍るいかゝと覺え侍る是はたゝ
源氏の歸京の時の事を語り給ふにやさてもあかし
のとまやに過すへきにもあらねは思ひ立しかとも
名殘おほく心とまるは苦しかりしと過にしかたの
事を女君に語給ふなり　私河花兩抄ともにはしに
註したる義に大概ことなりて侍るによりて河にた
つときをたて石の事に釋せられたるよし花にしる
されたれと其心とはみえす河海等も本によりて立
石のやうに釋せられたるも侍るにやおほつかなし
心とまるもくるしかりき　庭なとの事より明石にて

の女君に心とまりし事なといひつけてなきみわら
ひみといふも年月のつもりを打とけかたり給へる
さまとみえたり
いとなまめかしきうちきすかたにて　源のさまなり
袿ば男は下にきる物なり直衣なとも着給はぬ體な
りうちとけ給へるすかたなり
うれしと見たてまつるに　尼公の心なり
あかのくなとのあるを　河閼伽具也　水の梵語なり
云々　東のわた殿のかた尼公の住給ふへきちかき
なるへし　秘閼伽具のあるを見給うて母君の事を
思ひ給ふなり
御なほしめしいてゝ　秘ふかきさまなり
木丁のもとにより給て　尼公の方にある木丁なり
つみかろくおふしたて給へる人の　秘若君をよく養
たてまつりたるよとなり　秘前世につみなき物形
もよきとなり此物語に此所ゐまた所にあり只今尼
公のおこなひの具を見つけ給うて思ひ出し給へる
から妙なる詞をとりいてゝの給へり
いといたくおもひすまし　明石のすみかをすてゝ尼
公のゝはりたる事をの給ふなり

又かしこにはいかにとまりて　入道の獨とまりての
こりたる心中なとをの給ふなり
すて侍にし世を　尼公の詞なり
おしはからせ給ひけれは　秘ねんころにの給ふ事を
いへり　私世をすてしすみかをはなれて思ひみた
れるとも只今源のさそと仰らるゝにつけて満足し
て命なかさもかひある事そと思ひしると申なり
あら磯かけに心くるしう　姫君の事なり　秘鹽屋の
かたはらにてはかなしかりしとなり　河「みさこ
ゐるあら磯浪に袖ぬれて誰かためひろふいけるか
ひそも
ふたはの松もいまはたのもしき　河千代へんといは
ひそめてし姫松のねさしそめてし宿は忘れす
あさきねさしゆゑや　花是は明石の姫君の母上をあ
さきねさしと卑下して尼公のいへるなりいやしき
腹にいてき給へといふ心なり　秘御母かたを卑下
の詞なり
昔物かたりにみこのすみ給ける　中務宮の跡なれは
其事を語り出し給ふ也尼公の卑下したるをさやう
のかたには詞をくはへすして此小倉の庭の樣を宣

へる妙也此詞尼公の父前中書王と云事あらはれ侍也俗姓のたかき故は至極して聞え侍る也甚深微妙の詞なり中務宮の跡なれは其事を物語し給ひ出したり尼公の淺さねさし故也なと卑下の詞をなくさめん心にて彼親王の事をの給ふなり妙也妙也　私昔物かたりにみこのすみ給ひけるありさまなとかたらせ給ふにとは源の中務のみこの事を宣ひいたして尼公に語らせて聞たまふとみえたり　花　兼明親王天延三年八月十三日龜山に祈水祭文有後の世までも小倉山のふもと篁(とにて)の中に水の跡ある由或説にしるし侍り　私龜山云付て水のあるましき謂なしと云義を書給と云々　或御説に此祭文一番よみはて給ふ時水則たちわかり龜山と云名なれはかめは水をかたとる心にていかてか水をえさらんと云心を文にかき給へり祈水の祭文三度よみ給ふと也

つくろはれたる水のおとなひかことかましう　弄　水の音もおもひをそへたる心也　秘石なとたてかへさせなとし給ふ故也折節の景氣尤感あり　花かことかましきとはかこちかましきなり石をたてなはされてみこのすみ給ひし昔にかはりたると水のこたへたるやうに聞なされたる心なり

尼公
住なれし人はかへりてたとれともし水そ宿のあるしかほなる　秘尼公の歌なり我はむかしのあるしなれとも忘はてたるなり水の聲計りむかしのまゝなるさなり

返源
いさら井ははやくのことも忘れしをもとのあるしやおもかはりせる　花わすれしはわするましき心なり　河　小(イサラ)日本紀　小井也はやくの事は過にし事なり古今にもはやくすみし所なとあり　秘いさら井は小井なりはやくのことゝは過しことなり前歌の第二句をうけたり或はもとのあるしとは中書王の事と云々　今案尼公の事をもよみ給ひしにやもとは女にて住しか今尼になれは面かはりとも云へきにや　私云兩義何れにても可然歟又忘れし忘れと兩義の事也

あはれとうちなかめて　河「あれにけり哀いくよの宿なれや住けん人のおとつれもせぬ　此歌の心歟たゝ哀と詠たる事此物語に多し

よにしらすとのみ思ひきこゆ　尼公の心也

御寺にわたり給て　弄嵯峨の御堂の事なり　普賢講

十四五日つこもりの日おこなはるへき　ふげんかう

河彌陀
あみたさかの念佛　河勘文十四日普賢講十五日阿彌陀晦日釋迦念佛常行三昧也云々　秘佛の縁日ともいへり末の詞に月に二たひはかりの御契也とあり此法事のたよりにわたり給ふなるへし弄同　花李部王記に天慶八年三月廿七日重明就棲霞寺之新堂修ニ先室藤原氏周忌法會ヲ安ニ置金色等身釋迦如來像一體ヲ云々同記ニ棲霞寺釋迦堂之三僧法花三昧六僧供料稲七千束丹波播磨之國奉加之事奏請之永代長講三昧を行由見えたり今の物語に常行三昧といへるこれらを思ひよせたるへしと云々

たうのかさり佛の御くなとめくらしおほせらるゝ

河以廻文人々に仰らるゝ心歟　私勘必廻文の事にては有へからす人々に仰らるゝなるへし

月のあかきにかへり給ふ　花大井里にかへり給ふなり秘同

ありしよの事　明石にて岡邊へかよひ給ひし事なり

かのきみ（んイ）の御こと　秘彼やとにおき給ひし琴なり

弄明石にても箏をきゝ給ひし事ありき

かきならし給ふ　源の琴をかきならすなり

またしらへもかはらす　秘只今のやうにおほえ給ふなり明石巻に此音かはらぬほとにかならすなと契給ひし時の事なり弄同

源氏
ちきりしにかはらぬことのしらへにてたえぬ心の程はしりきや　花明石巻云此ねたかはぬさきに必あひみんと女君に契給ひしかはかはらぬことのしらへとはよみつるなり

返明石上
かはらしとちきりしことをたのみにて松のひゝきに音をそへし哉　弄ねをそへし哉はわかなくねをそへしとなり　秘落句おもしろしをり／＼にわかなくねをそへしと也　聞此間待とほなりし事又明石にての事にても有へし或はちきりし事を琴にそへよめり松のひびきにねをそへしとはまつは松風に琴のねをそへたり下の心は此大井の里の松風にわかなくねをそへたるといふ心なり　私ちきりしことを琴にそへよみて下の心は我なくねをそへしといへる義尤然へし松のひゝきになくねをそへしを明石より大井の里まてかけてみるへし

にけなからぬこそは身にあまりたるありさま　花にけなからぬは紫の上に似たると也はりまの守の女なとゝいふへくもあらねは身にあまりたるありさ

まといへり　秘源の御かたはらにても似合さるやうになきと也花鳥説いかゝ聞書に此段草子地と云云

てよなうねひまさりにける　明石上のさまなり

わかきみはたつきせす　あく期もなくまもられ給ふ也盡期なき心なり

いかにせまし　秘源の心なり

二條院に　秘紫上の養子にし給ふへきかとおほす也

のちのおほえもつみまぬかれなん　秘紫の御子にしたまはゝつゐに入内なと有へき時の人のそしりもあるましきとおほしなる也

又おもはん事　秘明石上のおもはん所いかゝとなり或明石上年ころの明石のすみかをはなれこゝにては此姫君をなくさめにて過し給ふにひきはなちかたくおほすなり

をさなき心地に　秘姫君なりはしめはおもきらひし給ひしも次第々々になれむつひ給ふなり

いたきておはするさま　源の姫君をいたき給ふなり

みるかひありてすくせこよなしとみえたり　明石上の心中なるへし又あたりにある人々の心也　聞書草子地也云々

又の日は京へかへらせ給ふへけれは　此日大井より京へすくにかへらんとおほすなり

かつらの院に人々おほくまゐりつとひ　源の桂の院におはしますかと思ひて人々参りつとひたるなり

こゝにも殿上人あまた　大井へも殿上人ともの参りつとふなり

いとはしたなきわさかな　是より源の人々にの給ふ詞也

みあらはさるへきくま　物のくまとはかくれたる所也これは物のかくれにて人のみあらはすましき所をみあらはされぬるとの給ふ也

さわかしさにひかれて　此人々にもよほされて出給ふなり

心くるしけれはさりけなくまきらはして　源出かてにやすらひて明石上にいとまこひせんとおほすさまなり

みてはいとくるしかりぬべき　源の詞なり

いと里とほしや　河「里遠み人もすさめぬ山櫻いたくなわひそわれみはやさん　秘「里遠みいかにせよと

かかくのみはしはしもみねは戀しかるらん元眞集歌也　此歌心相叶歟　花引歌里遠みいかにせよとか云々弄同みてはいとくるしかりぬへきといへる詞にてみ侍れは元眞集の歌こゝにはかなひて侍り

はるかに思ひ給へたえたる（つイ）　花めのとの詞也秘同　或御説明石にてはるかに思ひたえつるよりも今からは疎遠ならんはくるしからんといふ詞也

わか君計をさしいてゝたち給へるをしたひ給へは　姫君手をさしいたして源のたち給へるをしたふ也

つい居給ひて　源也

あやしう物思ひたえぬ　源の詞也

いつらなどもろともにいてゝは　秘明石上の事をの給ふなり　或源氏いつくにても人のしたかふ御身なり又こゝにても姫君のしたひたまふくるしやといふ心なり云々　今案いつらなともろともに出てはと明石上をの給ふ詞あれは唯明石上をうらみ給ての御詞にやもろ共に今は姫君めのとなどゝもろともに出ていとまてひをも何とてし給はぬそとめのとにの給ふ御詞なりしはしにてもくるしやと云詞は前の引歌の心に通する也

人ここちもせめと　或人心地とは本心なりいまは我心も心にてなきと云心なり　私人こゝ地は人々しき心もせぬといふ義也

うちわらひて　秘めのとなり

女君にかくなんと　明石上へめのとの申なり

中々物思ひみたれて　明石の上の心也

あまり上すめかしと　上らうめかしきなり

人々もかたはらいたかれは　明石上のおそく出給ふを人々のせうしかる心なり

几丁にはたかくれ　明石のさまなり

たをやきたるけはひみこたちといはんにもたりぬへし　秘明石上なり宮たちといはんにも不足なきさまと源の見給ふなり

さこそしつめつれ　秘まへにはうてきもせさりしをいふなり

いはんかたなきさかりの御かたち　源の御有樣也

いたうそひやきたりし　明石にて見奉りし時の源のほそくたけ高きやうにみ給ひしかいまはよきほとに成あひ給ふとなり

かくてこそものゝしき　秘源の容儀のうちあひたるを云也
あなかちなるみなしなるへき　聞草子地なり
かのとけたりし藏人もかへり成にけりゆけひのせうにて今年かうふりしてけり　秘かものみつかきよみたる藏人也　私此人は伊與介か二男紀伊守か弟藏人右近將監也源氏すまに御うつろひの時殿上の御ふたけつられかへりのぼりて靭負尉になり此卷に叙爵とみえたり　花解官せられし藏人なり紀伊守か弟左衛門尉より五位に成たるなり良清か事也　私良清と註せられたり思ひあやまり給ふにこそ良清はみをつくしの卷に住吉詣の時おなし佐とあれは左衛門佐と聞ゆ　推古天皇十一年十二月始行冠位十二年春正月朔日始賜冠位於諸臣有差是叙位始也天武天皇十一年六月丁卯男始結髮仍着染紗冠在若紫卷
御はかしとりに
人かけをみつけて　（藏人歟）是より良清か明石上の女房にいふ詞なり　秘内の人かけを見つけてなり
きしかたの物わすれし侍らねは　弄ゆけひの尉の詞なり　過にし事共忘かたけれともかたしけなくて申かたしとうれへ。（てイ　たイ）かへるなり
うら風おぼえ侍りつる　秘明石にありし時の事をも謝し申へきをそのたよりもなきとて只今のこと使にけしきはみたるなり
やへたつ山はさらにしまかくれにも
河（奥入）古白雲の八重たつ山（たえすたなびく）のみねにたにすめは住ける世にこそ有けれ「身をうしと人しれすよを尋こし雲の八重たつ山にやはあらぬ
高光少將世をのがれて横川に住けるころ御門より「都より雲の八重たつおく山の横川の水はすみよかるらん　御返し「九重のうちのみつねに戀しくて雲の八重たつ山は住うき　しまかくれとは明石なりほのぼのとの歌の心也　花是は女房の返答なり八重たつ山は大井の里の山かくれなる心なり　此處の住居も彼明石の島かくれにおさらさりけるを知る人もなしとさうざうしかりつるに昔忘れぬ人のあることそたのもしけれと云也　秘雲の八重たつなり此大井も人影なくてあかしの島かくれにも更におとらさるなり　弄雲の事なり山中

のさひしさは明石の島かくれなとにもおとらす松も昔のとは誰をかもしる人にせんの心なり友もなきに昔忘れぬ人の詞をたのもしと女のこたへたるなり引歌有河海

松もむかしのと　河「誰をかもしる人にせん高砂の松も昔の友ならなくに　秘昔の友も侍らさるに昔忘れぬ人の詞たのもしく侍ると女の答なり

わすれぬ人も　河今までに忘れぬ人はよにもあらしおのかさまさま年のへぬれは

こよなしやわれも思ひなきにしもあらさり　秘事の外なりすくれたるなり女の思ひあるさまにいへるによれる我身も明石にて浮沈の思は同し物なり只今は冠を待てはなやきたるなり明石上を彼浦にて朽はて給ふへきかと思ひしを思かけさる幸こ也花鳥に良清と云如何　弄こよなしやとはすくれたる事也我も思ひなきにしもとは須磨明石にての浮沈の思ひは我も有と云心にや女房の島かくれにもおとらすなと思ひあるよしをいひたるにあはせてなり我思ひをいひも出はやの心にや衛門尉伊與守か子なり　詞なり花鳥の説不審紀伊守弟を良清也と云々如何良清は播磨守か子なり良清か明石の上に思ひなきにしもあらさりしと云に似たり良清かと云義不用之是はゆけひの尉か詞なり　花是は又良清か心なりこよなしやは萬うつりかはりてこの世ならぬやうなり入道の女をは我もむかしはおもひかけたりしと思へは淺ましう覺えたり今ことさらにといふよりは良清か女房に云詞なり　私花の義不用之案之秘弄等の義其心解しかたき樣也先此人はゆけひの尉紀伊守か弟にて良清にはあらす又こゝの問答は　女房とたゝいいかはしたる詞計なりさて此こよなしやとはゆけひの尉の心中に思ふ事なり良清は入道女をしきりに思ひかけたる人なり此ゆけひもありさま聞及ひて同し受領の品なれは心中にはともかくも思ふことなとや侍けんそれを只今心に思へるさまとみるへしや如何

いまことさらに　秘かさねてわさこ參るへきよし也

うちけさやきて　かけしろいなき體にもてなすなり

いとよそほしくさしあゆみゆく　粧ある也　行粧の見事なる體なり物々しきさまなり

おひはらひ　前をおふさまなるへし

御車のしりに頭中將兵衛督　花此二人系圖になし秘聞等同之　車はしりより乘物也　河上首ほどながえの方にのるなり後にのる人尻にあるなりこゝにも殿上人あまた參れりとある人々なり

いとかろ〳〵しきかくれか　秘源の詞也

よへの月にくちをしう　秘御むかへの人の詞也　頭中將兵衛督なとのいふなるべし

山のにしきはまたしう　河「霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦のおれはかつちる　秘霜のたて云々此歌にも紅葉とはいはさるおもしろし

野邊の色こそさかりに　野邊の色に山の紅葉心を付へし

なにかしの朝臣のこたかにかゝつらひて　誰とはなし小鷹なとすゑてたちおくれたるほと御前にてかたり申さまなり風流の體なり

けふは猶かつら殿にて　殿上人ともの大井へ參り又桂の院に待たてまつるもあれはそれにひかれて又桂院へおはするなりけふは大井より京へかへり給はんとかねてはありしなるべし

にはかなるみあるしゝさわきて　河あるし饗の事なり飯の名なり　秘噪(サワク)なり

うかひともめしたるにあまのさへつり　鵜飼なりあまのさへつりはあかしの浦を思ひ出給ふなり

ことりしるしはかり　秘小鳥をは萩の枝なとに付るなり　秘河海にくはしくみえたり　河小鳥を付枝事數九を(三つゝイ)羽のしたをはさみて山すけもしはかつらにて付なりみつらにあたりたる所をゆひわけたるなり是を山つけといふなり萩にかきらす秋薄菊の枝にも付るなり延喜廿年十月十八日召雅樂寮人於清涼殿前奏舞枇杷左大臣仲平權中納言藤原朝臣善小鳥於菊枝立階前奏云船木氏有進御贄西宮花鳥同載之宇治寶藏日記云永觀年中朱雀院へたてまつる小鳥萩の枝一すちに雲雀五を馬尾にて鼻をとほしてならへ付たりと云々西園法師といふもの草に枝あるへからすと云義を執して木の枝とよみけり親行にあひてさま〳〵に問答しける由水原抄にも載之親行又草の枝の支證とて古今の「萩の露玉にぬかなんとゝれはきえぬよしみん人は枝なからみよ又六帖の歌に「なよ竹に枝さしかはすしのすゝき夜ませにみゆる君はたのまし源重之「夏かりの

をきのふるえはかれにけりむれなく鳥は空にや有
らん　此物語の中にも夕かほの枝を扇にすゑたる
事あり野分巻に女郎花とこなつの枝とあり薫大將
菊を一枝をりてなとおほくありといへりけるを猶
承諾せさりけるか後に枝さしのほる朝かほの花と
いふ連歌をして親行におちあはれて鎌倉に跡を晦
しけりと云々案之兩人問答猶理不究にや惣して草
の枝なしと云義更にあるへからさる事なり和語に
はおのつからしとけなき事ありと云とも詩には專
鳥獸草木の名をしるを用とすといへる事も實なき
事有へからすそれに草の枝を作れる唐人詩句おほ
し折殘枝なと十日菊にも作れり其例不可勝計而西
圓是を難せは眼前に枝ある草は無異論萩薄なとは
現量に枝なき物なり仍萩枝薄の枝とよめる作例や
あるといはは其理あるへきなり萩のふるえはかり
すてたるふる枝を枝に似せたるなり此事猶秘說あ
り　つとは產なり家つとなといふ類なり
すんなかれて　秘順流也次第にめくる盃なり
川のわたりおやうけなれど　秘おやうきをもわすれ
たるなり　弄醉中に岸近き人々の事なり

おの〳〵せくなとつくりわたして　絕句詩也　おの
おのつくるゆゑにつくりわたすと云也　是は桂の
院にてのさまなり
月はなやかにさしいつるほとに　おもしろき夜のさ
まなるべし
おほみあそひ　弄御遊也
ひき物は和こんはかりふえとも　わさとならぬ御遊
のさまにかきなせりふえともと云は笙なともこも
るべし
をりにあひたる調子　秋なれは平調なるべし
殿上人四五人　此人々は禁中よりすくにこゝへ參り
たる人々なり
うへにさふらひけるを　これより此人々の參りたる
いはれをいひのへたる詞なり此人々禁中にさふら
ひしなり
御あそひありけるついてに　是は禁中御前にて御遊
ありしとなり
けふは六日の御物いみあく日にて　河勘文云六日の
御物忌事長神の物忌也長神方違は五日六日連綿す
る也云々　九條右丞相記に天慶七年正月七日庚辰太

政大臣從十二月廿八日至于昨日合八ヶ日閉門物忌已時參殿　案之若六ヶ日物忌歟如何猶可勘　或說云御物忌は甲乙兩日六日也物忌とは伊勢怪異八幡怪異賀茂怪異各二日合六ヶ日歟云々　弄さして何事となくとも六日なとつゝきたるにや　秘愛の註にかけるなり御物忌さして何事とはなし六日なとつゝきたる成へし箒木の巻にもありしなり

かならす參り給ふへきほと　是は御物忌のほとは外宿の人は參せすして今日あきたれは源の參内あるへき事なるを何として參内なきそと勅定に付て桂院に御逗留のよし人の奏したるへしさて御せうそこありて皆々こゝに參れるよしなり

御使には藏人の辨なりけり　五位の職事也　秘殿上人四五人といふうちなるへし

冷御製 月のすむ川のをちなる里なれはかつらのかけはのとけかるらん　秘桂のかけを桂の里によそへてよめり結句は長閑に月も澄て面白かるへしとほめたる也　弄同　聞書說したる心もあり　河安天論云桂花は月也月の中仙人桂樹有其初出とき仙人是見漸成レ形ヲ後桂幽　兼名苑云月中有レ河水上ニ有ニ桂樹一高五

百丈

うらやましうとあり　勅書の詞なるへし

かしこまりきこえ　源のもてはやし給ふ樣なるへし

うへの御あそひ　今夜御前の御遊の事なり所からそれよりもこゝの御遊面白しとなり

物のねをめてゝ又えひくはゝりぬ　輿に乘するゆゑに盃の數をそふるなり

まうけの物も　秘かつけ物引出物なとなり　花儲物は被物なとのため女の裝束を用意せる心なり

とりあへたるにしたかひて　とりあへたるは有あひたるをなといふ心なり手もとに有合なといふ心なり

御つかひの辨はとくかへりまゐれは　源の返事をうけたまはりていそき歸京せんとなり

女のさうそく一くたり　かつけ給ふイ

河うつほの物語かつら巻に内におとゝ久しくまゐり給はぬ事を見候と右のおとゝの給ふ右大將久しく參らぬ哉との給へはおとゝ桂川のわたりにけふある所を持て侍りとの給ふを右近少將なかよりにこれかの桂の家にものしてうちのかたにとらせよと仰

ゐイ
給ふなかよりいそきかへるひとつ車にてゆきまさすけすみの中將なかすみの侍從なとのりてかつらへまうて給ふかゝるほとに少將ひさしうなりぬいとかしこしとていそけはあやかいぬりのうちき一かさね袴くしたる女のさうそく一くたりかつけ給ふいそきまいりぬ異人々はとゝめ給てあそひ明しつとめてかへり給ふにおなしやうなる女のさうそくかつけ給ふ

源氏 久かたの光にちかき名のみして朝夕きりもはれぬ山さと　秘我身の幽閑なるさまは霧もはれさるとなり行幸なともあれかしとなり次の詞にみえたり　弄次の詞にてみゆ

行幸まちきこえ給心はへなるへし　草子の地なるへし　花久方の光をたのむと云は君の光を待給ふ心あるなり伊勢か久かたの中に生たるとよめるも桂に侍ける時七條の中宮のとはせ給ひける時の御返事によめる歌なりうちの御使の御返事に奉給ふに便あるにや　弄歌に朝夕霧もはれぬとあるは行幸とあらは光有へしと云心なり　或かつらのかけはのとけかるらんとあそはしたるをうけて月宮に近きは名のみにてさもなきと云心は都に近き山里なれは行幸もあれかしと云心をふくみたる也其心歌にたしかならぬを行幸まちきこえ給心とは會釋したる詞なり

中におひたるとうちすんし給ふ　河「久かたの中におひたる里なれは光をのみそたのむへらなる　伊勢歌

みつねか所からかもとおほめきけん　河あはちにてあはとはるかにみし月の近き今夜は所からかも躬恒　秘明石にて此歌を誦し給ひし事也　引歌あはちにて云々　或明石にてあはとみるあはちの島のあはれさへのこるくまなくすめる夜の月と源の詠し給ひし月の夜なとおほしいつるなるへし

ものあはれなるゑひなきに　秘草子地なり　かくの給ひたるに人々もおもひやりすあはれあるへし又御ともに下りたる人なとの思ひいてのゑひなきも有へし

源 めくりきて手にとるはかりさやけきやあはちの島のあはとみし月　秘面影のちかくさやかなる心なり天地を手裏に入たるなり　花明石巻にあはとみるあはちの島のあはれさへと源氏のよみ給へる歌にか

かりてあはちしまのあはとみし月とは又よみ侍るなり

頭中将
うき雲にしはしまよ（かイ）ひし月影のすみいつる夜そのとけかるへき　秘明石にまし／＼しは誠にうき雲の如なりと祝してよめるなり　私云記に雲妬（姤佳イ）佳月なとの心も有へき也

右大辨すこしおとなひて故院の御ときにもむつましうつかうまつりなれし人なりけり　弄たれともなし或記に左大辨　河海この人の註をなか／＼とかけり　河此辨若光源氏元服の時又鴻臚舘にて高麗人にあひたまひし時ありし人歟故院の御むつましくとあるおもかけある由先達稱云　花此辨源氏の君の鴻臚舘にて高麗人とあひ給ひし時の人かと先達の稱するよし河海にしるされたり大なる僻事なり源氏の高麗人に相せられしは七歳の時也ことしは既に卅歳になり給へりいまゝて納言なとにも昇進せすして右大辨にて可有事いかゝとおほえ侍り又一本には左大辨とあり　秘誰ともなし花鳥に河海を破せらる尤可然

右大辨
雲の上のすみかをすてゝ秋（夜半イ）の月いつれの谷にかけかくしけん　花いつれの谷には霞の谷をいへり故院崩御の事をよめるなり　弄花鳥に故院の事をよめりと云々霞の谷心ある歟　秘草深き霞の谷にかけかくしの心あり老人なれは故院崩御事を云出したる也　私此右大辨故院の恩寵をかうふりしてとを忘れかたく思ふ故に只今此歌を詠せりふとしたる様は前の詞に故院の御心寄事也し人とは書り奇妙也奇妙也しからは老人に似合たるかたもあるへし

心々にあまたあめれと　秘草子地なり

うちしつまりたる　醉後各輿に乗し感を催したる庵（座イ）のさまなり

千とせもみきかまほしき　源の御有様をいふなり

をのゝえもくちぬへけれと　秘紫上の前の詞に斧のえさへあらため給はんはと也まちさほにとあるをうけたり常山の蛇の勢あり　河故郷はみしこともあらすをのゝえのくちし所そこひしかりける　私云此歌を引に不及也

けふさへはとていそきかへり給ふ　一夜あそひあかして又の日なるへし

物ともしな／＼にかつけて　花大井よりめしよせら

れたるまうけの物を管絃せし人々にかつけたる也
近衛つかさの名たかきとねり物のふし　近衛舎人は隨身なり神樂の人長は彼所役也(とイ)よて神樂の其駒をまはせらるゝ也物のふしは色ふし也色掌也御神樂のさいはらに朝倉次其駒人長起舞此間内藏人官人執疋絹挿人長腰　花北山大將儀云補物節事定物節事等中少將相共ニ於陣座定稱先成府奏付殿上少將奏聞後令藏人給上云々下兵部近例若無帶(常ノ)藏人之頭爲着付藏人云々次中將執筆定番書番長以下令結將曹依次召立稱唯進立幷拜大臣之大將前或里第定云々今案物節といふは近衛舎人の中東遊達したる物を物節と稱す其中番長府掌等在之是により春日祭賀茂祭の使之羽林東遊近衛十人召具於社頭求子駿河舞なと舞之也倍從は府生加倍從も近衛の官人也倍從和琴笛等役也賭弓相撲の大將還あるしの時もみな有東遊書物節の役なり其外神樂の人長召人なとも近衛舎人是をつとむる也其内に番長と云は近衛中結番するを云也其外は長上と云て長日の番をする近衛をいふなり　弄花鳥云今案物節と云は近衛の舎人の中に東遊に達したる物を物節に補す　秘物節也花鳥にみえたり
そのこまなとみたれあそひて　その駒や我に草かふ草はとりかへ水はとりかはん　神樂其駒ぬきかけ給ふ色々　聞書にかたをぬくと云々　私人人の祿を物のふしともにぬきかくる事なり
おゐには物へたてゝ　桂より京へかへらせ給ふを大井の里にはよそにきくなり大井と桂とは一里はかりへたゝるへき歟
せうそこをたにせてと　桂より歸さまにせうそこをたに大井へつかはさん物をと源のおほすなり
とのにおはして
山さとの物かたりなと　大井の體なと隔心なきやうに紫上へかたり給ふなり
いとまきこえしほと過つれは　前に二三日侍なんとある故なりすこしほと過るなり紫の御心をとりての給ふ源の詞なり
このすきものとも　人々尋ね參りて桂にて酒宴なとに醉給へるさまにもてなしておほとのこもる也
れいの心とけす　秘紫上の事也
みしらぬやうにて　紫のうちとけぬさまなるを源の

みしらぬさまにみたれかゝり給ふとなり
なすらひならぬほとをおほしくらふるもわろきわさなめり　秘明石上さしもすくれたれと紫上にくらふる時は又中々ならひならぬと只今源の心中におほすなりそれをわろきわさなりとは草子の地にいふなり　秘源の詞なり同程なる事こそ論する事はあれ紫上と明石上とは天地の隔あるとなりたくらふるにたらさるとなり　私是を源の詞といへるはあやまれり愚存はしに注す此分然へき歟
われはわれと　紫上をいさめ給ふなり　河われはとおもひあかれと云心なり紫上にまさる人なしと也　私われはわれと各別におほしなせと又ならふ人なしとおもふ心をこめて源のいさめ給ふ詞成べし
くれかゝるほとに　その日晩に及て源の參內となり
ひきそはめて　秘大井への文なり
そはめてまやかに　紫の上のそはめにみ給ふ也
こたちなとにくみきこゆ　紫の上にさふらふ女房なとなるべし
とけさりし御けしきともに　秘紫上なり　その夜はてのほと久しく參內したまはねは直廬にもさふらひたもふへけれと紫の御心とらんと退出したまふなり
ありつる御かへり　大井よりの返事也
これやりか[くイ]へし給へ　ひきさきなとし給へるとなり　秘させる事なき文なれはかやうに宣ひて紫上へ參らせ給ふ也　私源の隔心なき樣を事更にみする也
いまはつきなきほと　源のやう／＼年もたけ給ふ心をの給ふなり
ことに物もの給はす　源の思ひ出してつく／＼とながむるさまなり
ふみはひろこりなから　紫上は手もふれ給はぬ也
女君見給はぬやうなるを　紫のみやうもせぬやうにて怨したるさまなり
せめてみかくし給ふ御ましりこそ　秘紫の上みぬかほをつくり給ふとなり　私源の詞なりみぬやうにして御覧するとかこつなり
うちゑみ給へる御あいきやう　源のさまなり
さしよりて　紫のそはへ源のさしよるなり
まことにらうたけなる物をみしかは　源の詞なり姫君を見給ふ事なり

物めかさんはともはゝかりおはかるを　母かたの位
なき事を源のゝ給ふなり
おなし心に思ひめくらして　子にし給へと宣はんと
て源と紫の心をひとつにして養育して給へとの給
ふなり
こゝにてはくゝみ給ひてんや　何となりとも紫の心
次第に思ひさためんとの給ふなり
ひるのこかよはひにも　秘三歳といはんためなり
弄同　次生蛭兒已雖三歳而脚尚不立舊事本紀明石姫
君三歳になるといふ心なり　朝綱卿詠蛭子　かそ
いろはいかに哀れとおもふらんみとせになりぬ足
たゝすして
つみなきさまなるを　此巻の前の段にもあり前生の
罪業あさき人そのかたちよしといふなり　或今案
をさなき人のにくけなきをもいふへきにや
いはけなけなるしもつかたも　花袴着の事なり弄同
河着裳の事也　しもつかたは腰つきなり紫上に裳
の腰引ゆひ給へと也　秘しもつかたとは腰をいへ
り裳着の事なり　私着袴の事なるべし
めさましと　御心にかゝらすはとなり

ひきゆひ給へ　秘着裳の事なり
おもはすにのみ　花紫上の詞なり我か思はぬ事をも
思はせてとりなし給ふ御心のへたてをみしらぬや
うなれは我身もへたてあるに似たれはうらなき心
にこそ有のまゝに申給へいはなき御心には叶ひ
侍りなんひるのこのよはひならはいかに美くしき
此ほひならんとえていたきかしつかまほしく思給
うて打わらひ給ふなり　秘紫上の詞なり源の心隔
あるやうに思ひ給ふなる事をのみの給ふ程に我も
餘りにみしらぬやうにあらんもいかゝと思ひてこ
そすこしもえんしなともし侍れさも心には思はさ
るなり此義大畧同し
いはけなからん御心に　秘かのをさなき御心にはか
なひぬへきとなり
或御説此所の詞うらなくやはとてこそと句を切て
いはけなからんとよむべし
ちこをわりなう　秘草子地也　私紫の心ともいふべ
し此姫君の事ゆゑ紫の機嫌なほりすこしうちわら
ひ給ふなり
いかにせまし　秘源の心なり

むかへやせましとおほしみたる　姫君をこなたへむかへたくおほしながらさすが明石上の心をはゝかりて思ひみたれ給ふ也
わたり給ふ事いとかたし　大井へ御出まれなると也
月にふたゝひはかり　秘まへにありし月ことの十四五日晦日の念佛なとの日の事なり
としのわたりにはたちまさりぬへかめるを　河「あまの河遠きわたりにあらねとも君かふなては年にこそまて　「天の川たえぬ物からあら玉の年のわたりにたたひとよのみ　花たなはたの契にはたちまさる様なれともなほむねあかぬ事にそあかしの女君は思ひ給ふなり　秘星合にはまさりたるなり
およひなき事と思へともなほいかゝものおもはしからぬ　明石上なとの身にて月に二たひはかりのちきりなとも誠に過分の事とはおもへともさりとて又物おもはしからぬにてはなきなり及はぬ事とてもいよ／＼戀しきかたはまさるべき也

岷江入楚第十九　薄雲

卅歲　内大臣
大井里冬住居事
明石姫君可奉渡二條院有議事
十二月姫君奉迎二條院事
同着袴事
卅一歲
正月出大井給事
源氏引箏明石彈琵琶事
攝政太政大臣薨事
天變頻示事
三月入道宮御惱事
行幸三條宮事
入道宮崩御事　三十七歲
法務僧都候夜居之次與主上御物語事主上爲源氏御子事
桃園中務卿宮薨事元爲式部卿宮
源氏可任太政大臣之由有御氣色源氏固辭事
秋加階幷聽牛車參內事
權中納言任大納言兼大將事

王命婦任御匣殿事
源氏問王命婦給事
齋宮女御出二條院給事
住寢殿給與源氏有父子儀事
源氏參齋宮女御方御物語事女御は秋好の事也
又渡紫上西對御物語事　女君號春給事
渡大井里給事

薄雲　花以歌爲卷名

河源の歌也　入日さす峯にたなひくうす雲は物おもふ袖にいろやまかへる以此歌號す
花又詞に云雲のうすくわたれるかにひ色なるをとあり詞をもとりて名とせりといふへきにや源氏卅歳の冬より卅一歳の秋までの事みえたり
秘卷名以歌號之松風と同年なり卅歳の冬より次年卅一歳の秋までの事あり

冬になり行まゝに河つらのすまゐ　花これは大井の里の事也秘　或御說冬になれは川風はけしうつねよりも心はそきさまなり

うはのそらなる　秘明石上の心なり明石の舊里をははなれきて又源もたえ／＼にし給へはとなり

君も猶かくては　源の宣ふなり

かのちかき所　秘二條院の東院なり花同

つらき所はおほくこゝろみはてんも　河後撰十一かりそめなる所に侍る女に心かはりける男の爰にてはかくひんなき所なれは志は有なからえたちよらぬと云りけれは所をかへてまちけるにみえさりけ

れは女宿かへて待にもみえすなりぬれはつらき所のおほくもあるかな

秘後撰十一 河同仍略之 此詞書歌よくてゝにかなへりてゝもかしてもつらき所おほかるべしとなり明石上の心は二條の東院にうつりても源のおなしさまにつらくかれ〳〵にし給はゝいかゝの心なり

弄宿かへて云々 私大井は程遠ければかれ〳〵なるかこつけもあるなり程ちかく成てかれ〳〵ならはかこつけ所もなくつらかるへければつらき所おほく心みはてんものこりなき心ちすへきとはいへり面白くかけり 後撰の詞書にいへる女はつらき所をこゝろみはてたるものなり

いかにいひてかなといふやうに 「河拾うらみての後さへ人のつらからはいかにいひてかねをもなくへき

私秘弄同歌を引り 私此歌の心のやうに明石上の思ひみたれたるとなり

さらはこのわか君を 二條の東院へいまたうつるましきならはまつ姫君はかりを紫のかたへわたせと源のゝ給ふなり

かくてのみはひんなきことなり 秘中宮などにもおほすゆゑあれはなり

たいにきゝおきて 秘紫上なり

はかまぎの事なと 聞もぎ云々 私如何 明石姫君はかまぎの事也松風巻の末にあらまし有しなり一勘大略三歳之時有之但五歳以上例又勿論也花山院は九歳着袴云々愚案此勘思亘給歟此はかまきの事は明石姫君事也女八の勘例あるべき事也 私一勘は親王着袴之例也

さおほすらんと思ひわたり 秘明石上の心也紫上つ養子にし給ふへき事と也 思ひわたるとは連々さやうにおもひ給ひしとなり

あらためてやんことなきかたに 秘紫上の御子にしたまふともまことの御腹ならては人は申すましきとなり 私人のもりきかんことも中々にやつくろひかたくとはさやうにこと〳〵しくもてなし給はゝいよ〳〵實の御母かたのとり沙汰はあらんするとなり

はなちかたく 秘姫君をはなちかたく或イ明石上の思ふさまを源の見しり給ふなり又本義にはつくろひか

たくおほされんと手はなちかたくと云義あり不可
用之　秘源いいかゝと思ひ給ふ故にきと詞に出し
かたくし給ふなり　私此秘の義あやまれり
ことわりにはあれと　明石上の心中を察して源もこ
とわりと心中におほすなり
うしろやすからぬ方には　源の詞也　秘自然繼母な
との方を如何とは思成給ふなと源の宣ふ也
かしこにはとしへぬれどかゝる人もなきか　秘紫上
なり花紫のはらに子なき事をいへり
前齋宮のおとなびものし給ふをたに　秘紫上は年こ
ろ御子なき故に齋宮を養子のやうにし給ふと也
今紫上は廿四歳歟齋宮は廿三歳歟也只名はかりの
御子にし給ふなり　閑前齋宮廿四紫上廿五歳也と
云々猶可勘　弄紫上廿四歳秋好齋宮廿三歳にて齋
宮は賢木巻に十四歳なり紫も同し程なるべし紫の
うしろみ給ふにはおとなしきなり
惜みかたけなるを　明石姫君のあいらしきを宣ふ也
女君の御ありさまの思ふやうなる　秘紫上のありさ
まを語り給ふなり
いにしへはいかはかりの事に定り給ふへきにかと

秘明石上の心なり源の御心はなほさりの人一人に
心をとめ給ふましく聞およひ侍りしにかやうに心
を紫上一人にとゝめ給ふはいかはかりの人にかと
ゆかしく思ふなり
數ならぬ人のならひ聞ゆへき　明石上の卑下なり
私是は總別の人のうへなり紫上になほさりの人の
立ならふへき事とはおもはぬなりされとあかしの
上も源の御おもひ人の中にて姫君なと出來給へは
さすかに立いてしとはいふなり
人もめさましく　是は明石上の我事を自讃にはあら
す我やうなる物か人數に立いてたらは紫の心に猶
めさましうおほすへしとなり
わか身はとてもかくてもおなし事　兎角我身の上の
事は打捨て姫君の御ためを明石上の思ふ心なり
おひさきとほき人の御うへ　秘姫君の事なり
つひにはかの御心にかゝるへき　姫君もつひには紫
の御あつかひにならひては成ましきと思ふなり
さりとならば　さうあらんするならはといふ詞なり
かくなに心なきはとにや　姫君のなにの分別もなき
時紫上へゆつりたるかましなるへしと明石上の分

別なり
又手をはなちて　是よりあかしの上の又引返し姫君をはなちかたき事をいろ〳〵におもふ心なり
うしろめたからんこととつれ〳〵もなくさむかたなくてはいかゝあかしくらすべからん　是よりはなちかたき事のさま〳〵なり是は引はなれては心もとなからん事つれ〳〵なくさむるかたなからん事又何につけてか源の御立よりもあらん猶かれ〳〵ならんと思ふ事などをさま〳〵に思ひみたるゝ也
なにゝつけてか　姫君をはなちては源の尋ね給ふ事もありかたきとなり
あま君おもひやりふかき　秘遠慮ある人なり
あちきなし　是より尼公の姫君を紫上へわたして然るへき事をさま〳〵明石上にいひきかする詞也あちきなしとは無為方也せんかたもなしと云詞也
つひにこの御ために　姫君の御ためなり
あさくおほして　源の浅く覚しての事にてはあらしとなり
母かたからこそみかどの御こともきは〳〵におはすめれ　河朱雀院は延喜第十一村上天皇は第十四皇子にておはしませとも此両皇御母中宮溫子昭宣公女たりしによりて即位有けるなり西宮左大臣高明親王なとは第一皇子にて賢才ありしかとも更衣腹なりし故に人臣と成給ひし心歟是等の例を云にや
このおとゝの君の世にふたつなき　秘朱雀院は延喜第十一村上天皇は第十四の皇子にておはしませと母かたの然へきによりて位につき給ふなり今源も更衣腹なるによりて位につき給ふ事なきとなり
故大納言のいま一きざみ　桐壺更衣の父按察大納言の事也いま一きさみとは大臣にのほらぬ事をいへり　河大鏡云三條院の御時に后にたてまつらんとおほしけるうちよりは大納言のむすめの后にたつれいなかりければ御ちゝ済時大納言を贈太政大臣になしてこそは后にたてさせ給ひしか
ましてたゝ人はなすらふへき事にも　源の大納言の女の腹さへなり明石上の事なとは中々いふにたらぬ事といふ心歟又猶末にみかとの御子たちの事をいへはさも親王皇女なとのたゝ人腹の事は不足言といふ心歟
又みこたち大臣の御はらといへと　或みこたち大臣

の腹といへとさしむかひたる御腹ならておとり給
ふと云心なりさしむかひたるとは本臺の心當腹の
事本妻腹の事おとりの所とは妾腹の事そばの事也
さしむかひたる　秘本臺なり　弄おとりの腹は人も
思ひおとすへしと云々
おとりの所　秘落胤腹なり　私此段いさゝか心得か
たし親王大臣なとの娘をならへもちたる人も其中
に親王にも大臣にも勝劣有へし其所に付ておとり
の所といふか又おなし大臣親王の女にても本臺と
本臺ならぬとは人の心もちかふといふにや
なしてこれはやんことなき御かた〳〵に　秘然へき
御腹にてもいてき給はゝけおされぬへきと也　私
是より明石上の事をいふなり此詞につきてみれは
上のことはかやうにかた〳〵にならへすゑたる人
の中に同し大臣のむすめならひてあれとも本臺と
本臺ならぬとの差別にておとしむる物なりまして
明石上なとはその中へは立ならひかたしと尼公の
遠慮なりとみるへし此義可然歟
おとしめられぬはしめ　親なとにかしつかれたる子
か則世のおはえもある物なり今源に姫君なとたく
ひなき時わたしたてまつりてもてかしつかれ給は
は後々に又ことと腹に出來給ふともおはえおとらし
との分別なり
何のはへかあらん　河光[ハヘ]　榮[ハヘ]　無[ハヘ]見[ナシ]日本紀
さかしき人の心のうらとともにも物とはせなと「かく
こひん物とはかねて思ひにき心のうらそまさしか
りける　引歌に不及歟　或心のうらは推量の事な
り物をよく推する人なり云々如何　私さかしき人
とは心かしこくものを相しなとする人のことをい
ふ歟
思ひよわりにたり　秘あかしの上也　わたし奉らん
と思ふかたへ弱たりるなり
殿もしかおほしなからおもはん所の　源なり　秘明
石上の思はん所をためらひ給ひて御はかまきに事
よせての給ふなり
しひてもえの給はて　姫君わたし奉らんとうちつけ
てえの給ひつかはさぬなり
いかやうにかと　御わたりの事をおもはせての給へ
り
よろつの事かひなき身にて　明石上返事の詞也　秘

我身のかひなきにそへてもいかゝとなり又さりとて手をはなちてもいかゝとかやうにいへる思ひよわりたるよと源の思ひ給ふなり

たちましりてもいかに人わらへ　紫の御わたりなとへ参らせても又いかゝと卑下していへるなり

いとあはれにおはす　源の心也

日なととはせ給ひて　姫君の二條院へわたり給ふへき日なり

さるへき事なとおきてさせ給ふ　姫君わたし奉らんの御心まうけなり

はなちきこえさせんことは　これより明石上の思ふ心なり

よかるへき事をこそはとねんず　姫君の御ためよきやうにと思ひて念し過すなり堪忍する様の心なり

めのとをも　姫君の乳母なり

いとゝたつきなき事をさへとりそへいみしうおはゆへき事と君もなく　秘いみしうはつよくかなしかるへきとなり　弄君もなくとは明石上のうちなく也

さるへきにや　乳母の詞也　秘明石まて下りし事も縁にてこそありつらめとなり

としころの御心はへ　明石上の事を云

うちたえきこゆる事はよも侍らし　つひに又逢たてまつらん事なり

うちなきつゝすくす　姫君をわたし奉らんと返事申てからかやうに云つゝ折々なけきすくすなるへし

雪あられかちに心ほそさまさりて　姫君の御ことを思ひなけきて過す折ふしのあはれに物かなしき時分になれるさま心をつけてみるへし冬になり行ままにとかさいたしてこゝには心ほそさまさりてとかけり尤おもしろし

あやしうさま／＼に物おもふへかりける　明石上の明石にて源氏にあひそめたてまつりてはとなく御歸京をなけき又みやこへのほりたれとも程遠くたえまかちなるさへあるに今又姫君にさへはなれん事をいふなり

この君を　姫君なり

雪かきくらしふりつもる　明石上所のさまをおもひやるへし

なかめゐたるやうたいかしらつき　明石上のさますくれたりとみゆ

かきりなき人と　位たかくやんことなき人の事をいふ也
かやうならん日　秘行末の事をいへり　姫君を紫へわたし奉りたらんあとの事を今より思ふとなり
らうたけにうちなけきて　明石上なり
明石上 雪ふかみみ山の道ははれすとも猶ふみかよへあとたたすして　秘明石上の歌なり　ふみかよへ文をもたせたり乳母によみかくるなり　花心は文にてなりともたえすとひ給へとのよしなり
返乳母 雪間なきよしのゝ山をたつねても心のかよふあとたえめやは　秘雪ふかきよしのゝ山也とも尋かよはんとなりもろこしのよしのゝ山にこもるともの歌をふまへたり弄同　よしのゝ山にこもる共の類なり云々　私よし野山は雪深き所にいひならはしたれは雪間なきとは思ひわするゝ心はあらしとなりまして此大井なとへは跡たえしとなりそれをいひなくさむとはいへり
此い(のイ)雪すこしとけてわたり給へり　秘源の來り給ふなり面白き詞也
れいはまちきこゆる　秘面白詞なり

さならんとおほゆることにより　花よのつねは源氏君をまちきこゆれとけふわたり給へるはわか君の御むかへにやと思ひてむねつふれたる也　秘さためて御むかへなるへきとなり
人やりならすおほゆ　人のするわさにてもなきと也　秘我心なから心ならさるなりいなみ申ともさてこそ有へき物をとなり　心からの事にそとなり
わか心にこそあらめいなひきくらんを　明石上の心なり思ひもなけかし我心まゝなり今にてもいなと申さんにはしひてはわたし給はしさやうに申さましとおもへとも一度うけひき申て又かはらんはかろかろしき事とやかて思ひかへすなり
いとうつくしけにて　秘姫君也
おろかには思ひかたかりける　秘なほさりの人にてはなしとなり明石のうつろひなともかゝる事のあらんためなりけりとなり
この春よりおふす御くしの　秘髪を置き給ふなり
弄かみおきの事にや
あまそきのほとにて　河ふかそきの事也　秘ふかそき也さけ尼の髮ほとゝなり弄同

よその物に思ひやらんほとの心のやみおしはかり源の心に此姫君をはなち給ふ事明石上いかはかりなけくらんとおしはかり給て心くるしさに色々にの給ひ明す也夜一夜さま〳〵の給ふなるへしうちかへしの給ふとはいなとあらは此まゝにてもなとさま〳〵の給ふなるへし　聞箋同し又のたまひ飽くと云義有これは何とやうに成ともと人に物をこのますることをあかすると云心なり此まゝなりとも又二條院へわたさんとも母上の心次第とあかするなりと云々不用之云々　花あかすはわか君をわたし給ふをいなと思ひ侍るも我身のくちをしきさまならすたにもてなさせ給はゝと也　私是はうちかへしのたまふと句をきりてあかすなにかかくちをしきとよまれたりとみゆ此義如何不審

なにかゝくくちをしき身の　明石上の詞なり行末然へき事にてたにましまさはとなり　秘くちをしき身のほとならすたにとは我身の俗姓にひかれて姫君をも人の思ひおとすへきを紫の上なとの心に入てあつかひ給はゝ然るへき事なれはいなとは思ひ侍らすと申なから忍ひかたくうちなくとなり

姫君はなに心もなくて御車にのらん事を　をさなき人のさまなり

はゝ君みつからいたきて　秘明石上はつねには物ふかけなる人なりしか只今はわかれたてまつる事のたへかたさに忍ひ給はぬさま尤あはれなり松風巻にはもろともにいて給へかしなとの給ひし時のさまにはかはれる所思ふへし弄同

かたことの聲は　姫君のさまなり

袖をとらへてのり給へと　明石上の袖をとらへて車にのり給へと姫君のゝ給ふなり

明石上すゑとほき二葉の松に引わかれいつかこたかきかけをみるへき　秘行すゑを祝したるなり　心はあらはなり

えもいひやらす　いみしうなくさまなり

さりやあなくるし　秘源の心なり　私されはこそと云心歟

返源おひそめしねもふかけれはたけくまの松に小松の千代をならへん　花武隈の松は二木なれは明石上と紫上との二人に喩へたるへしさきの巻にあさきねさし故やいかゝと尼公のいひしをなくさめて根も深

けれはとよみ給へり　秘松風卷にあさきねざしゆゑやいかゝと尼公のいひしをうけてふかき心にの給ふなり花鳥說可然　或弄には松に小松とは紫の君をならへて紫の心にや猶母上によるへきをやとあり　私弄愚本に此注なし猶可尋　聞松に小松は明石上と姬君となり說々わろしと云々私可用之也

のとかにをと　源の明石上をなくさめたる詞なり

さるはおほし　明石上の心にはさは思ひなから只今忍ひかたきとなり

めのと少將とて　乳母と少將と云人と二人姬君の御車にのるなり

御はかしあまかつやうの物　河御劔なり不限男女調度なり　尼兒(アマカツ)　花皇女の御はかしをくせらるゝ事は陽明門院よりの事なり或あまかつははうこのやうなる物也小兒三歲まてこれを用ふ諸事凶事をこれにおほするまじなひなり　天兒作り物にて小兒にそふる物なり

人たまひによろしきわか人　秘つきの人の車なりともの女房ともの車なり　人給(ヒトタマヒ)　副車(ヒトダマヒ)　私副車也兩字訓點等秘抄の表紙に三光院内府の手跡にて書注之但出所を不注也　人たまひは出車(ソヘ)なり物見なとの時に家禮の人なとの車を點して女房なとをのする車なり出車とも人給ともいふなり

よろしきわか人わらはなとのせて御おくりに　そのまゝ姬君につき奉るも有るへく又道のほとはかりの御おくりに參るも有へきなり

みちすからとまりつる人の　秘明石上の事なり源のしわさなりと明石上の思ふへきとなり

つみやうらん　人に物おもはするは罪業になるへき事なれとゝなり源の心なり

ゐなかひたる心ちともはしたなくてや　きら〳〵しき所のすまひいかゝと人々の思ひしとなり

にしおもてをことに　河別にと也　秘二條院のにしおもて也住よきやうにしつらはれたるなり弄同

わか君はみちにてね給ひにけり　程遠きゆゑをさなき人のね入給へるなり

うちひそみ　姬君のさまなりなきなとはせてうちしめりたる體なりこなたにて御くた物まゐりなとあるは紫上の御方なるへし

山さとのつれ〳〵ましていかに　源の心也　秘明石

上の事を思ひやり給ふなり　私常にさへさひしき
山里なれは姫君のおはせぬ故ましてとかけり
ものあひたる心ち　秘符合したる也
いかにそや人のおもふへききすなき事は　秘源の心
なり同しくは紫上の御腹にてあらは思ふ所も有ま
しき物をとなり　花同しくは紫の御腹にてあれか
しきすなき玉にてあらんとの心也何とやらん是は
母かたの劣なるを思ふ心あるへし紫にはあるへか
らすと也
しはしは人々もとめて　又姫君のさまなり大井にて
見なれし人々をたつぬるなり
心やすくおかしき心さま　秘此姫君の心さま今より
かやうに物やはらかによくおはすると也又紫の御
さまのよくおはすれは姫君の早くなれ給ふと云歟
或紫の御心さまの事也云々　私此義可然歟
又やんことなき人の　又乳母をおきそへ給ふと也
御はかまきは何はかりわさとおほしいそくことはな
けれと　秘別に經營もみえさるなり不斷公卿殿上
人さふらひまたはしつらひなとのきら／＼しさも
いつもの事なれはそのきはのけちめとりたてゝみ
ゆる事もなしとなり
御しつらひひゝなあそひ　これははかまきの調度な
との事歟
參り給へるまらうとゝも　弄明石姫君につきて參り
たる女とものの心なり人々の出入ひまなきをいへる
なり
姫君のたすき引ゆひ給へる　河手繦(タスキ)日本紀古語拾遺　襷(タスキ)　襅(タスキ)
一説　織成襷　續齊諧記和名多須岐　延喜神事式云　表裙(ウハモ)　襅(タスキ)
襷(チハヤ)一説云玉手繦とて袍の上に玉をかさりてかくる
なり女はかけ帯と云是を蜂の比禮蛇の比禮只物の
比禮なと云也ゆふたすきと云も木綿を襷とするを
云なり古語拾遺云以二蘿葛一爲二手繦一　御そのなか
き様なる物也着袴のい調度にあり人丸「玉たすきか
けぬ時なくわれてふとしくれしふらはぬれつゝも
みん　花河海に引のせたり皆僻事也別に注すへし
弄私抄にみえたり花鳥別に注すと有一勘今世無存
知人頗秘事也　秘花鳥にしるせり別勘の中也
大井にはつきせす　明石上の心也
身のおこたりを　秘明石上の後悔する也　聞二條院
へ渡し奉る事を同心したる後悔と云々　或身のお

こたりとは源氏へ逢奉るましき事を逢たてまつり
て姫君をまうけて今かく引はなるゝ事なとかたか
た物おもふはひかことゝいふ心なり　私或抄の義
も可然歟
さこそいひしか尼君も　私尼きみのたゝ打たのみき
こえてわたし奉り給てよとまへにはいひしか今は
涙もろなるとなり
うれしかりけり　尼君の心也
なに事をか中々とふらひ　秘明石上よりの音信也
何事をか中々とは姫君へはなましひの色あひなと
いと卑下しておくり給はすつきて參りたる女房と
ものかたへ世に無き色あひのきぬともをおくると
なり心つかひ面白し
まちとほならんも　秘源の心なり姫君のましまさぬ
故と思ふへきそとなり
としのうちにしのひて　大井へ源の御出なり十二月
すゑなるへし
いとゝさひしきすまひに　是は姫君をわたし奉り給
ひてより後の總別の事をいふなりさひしからんを
なくさめんとてまへ〳〵より文のおとつれもたへ
まなくし給ふとなり
女君もいまはことに　秘紫上なり
うつくしき人につみゆるして　紫上の姫君をうつく
しみ給ふゆゑ源の明石へ細々文のかよふをも前の
やうにうらみ給はぬとなり
としもかへりぬ　或姫君四歳也　花源氏卅一になり
給ふなり　秘源卅一歳なり　弄同
まゐりつとひ給ふめる人の　秘參賀なり
おとなしきほとのは七日の御よろこひ　花正月七日
のいはひをいふへし　弄年始の禮の事なり或は七
日なとにまゐり給ふ人も有へし　秘ちとおとなお
となしき人は七日なとに參り給ふなり　聞七日に
參賀すると云又七日つゝけて參賀すると云兩説云
云此義不審
うはべはてりかに　秘天下太平の時分なり身にとり
ては皆ことの愁はあるらめとうはへは引つくろひ
ほこりかに思ひもなき様にみゆる頃ほひなり　當
時の聖代をいへり
ひんかしの院のたいの御かた　秘花散里の事なり
花二條の東院の西對にすみ給ふなり

ちかきしるしはこよなうて　秘明石上は程遠し是はちかき故に細々にもわたり給ふ也　私こよなうてとは程のちかきしるしは殊外ちかふたる事となり
わさとはみえ給はぬ　今はうちとけわさとおはしてとまりなとはし給はぬとなり
たゝ御心さまのこめき　河古めき勿論歟　巨めきなり大やうなる心なり　私巨の字可用之
かはかりのすくせ　花散里の身の程を思ひしる也
折ふしの御心おきて　源なとよりの御あつかひのさまも紫にさのみおとらすとなり
けいしとも　弄別當東院にての事なり　一勘愚本には此詞無所見家司共とあり其事歟　三本べたうけいし如此あり
山里のつれ／＼　明石上の事也
物さわかしきほと　公事政以下わたくしの祝義なとなり
さくらの御なほしに　秘常の冬の直衣なり　花つねの直衣のうらてき蘇芳なるを櫻色とはいへり下の櫻人の歌に縁ある色なるへし
まかりまをし　紫上へ御いとまこひなり

女君たゝならす　紫の心にかゝりておほすなり
とにもいて給ぬへけれは　秘姫君のしたひ給ふさま也　私外なり簾の外也一説には戸也　闇簾外也
こしらへおきて　姫君をすかし給ふさまなり
あすかへりこんと　秘櫻人の歌なり弄同　左久良比止曾乃不禰止々女之末津多止乎萬知津久禮留見天可安戸利己牟也曾與也安春可戸利己牟曾與也二段已上己止於己曾安春止毛以波女乎千可太仁門萬左留世那波安春毛左禰己之也曾於與左安春毛左禰己之也曾與也催馬樂呂櫻人　花櫻人の歌にその舟ちゝめはとゝめなりせなは夫なりさねこじとははやく來らしの心なり
紫上舟とむる遠かた人のなくはこそあすかへりこんせなとまちみめ　花櫻人の心をよみ給へりをち方人はあかしの上にたとふる也　秘櫻人の歌にて悉皆よめり明石上を遠方人になして云り　花櫻人にその舟とゝめと云詞あり上詞をうけてよめり舟とむるとは源氏を明石上の止めんと也　河に水表日本紀　遠方彼方已上河海　或櫻人は花人なとゝいふかことし麗人をいふてその舟とゝちゝめとは其ふねとゝめ

なり島つたひをとは島つたふなりさすかへりこん
はあすかへりこんなり二段は女にかはりていへる
歌の心なりことをこそあすともいはめは詞にこそ
あすはかへりこんとはいへといふ心なり　私舟と
とむるあすかへりこんせなをちかた皆櫻人の詞を
よみすゑたり心もよくかなひたり河にせなは夫な
り兄也日本紀背男也萬葉
いたうなれて　中將のさまなり
にほひやかにほゝゑみて　源のさまなり
返源 ゆきてみてあすもさねこん中々にをちかた人は心お
くとも　花 源の返歌なりあすははやく歸こんといふ
心なり　秘 さねてこんとは早々來らんと也　弄 あす
もさねこんといふも櫻人の詞にある歌の心明石上
は中々心おくともあすかへりこんとなり花鳥に云
あすはやく歸りこんとなり　私云只あすかへりて
んとなるべし以上弄　河 早來なりはやくてんなり
又云實來なりまことにてんとなり伊勢物語にもつ
かひさねとある人といへり此心なり　聞 さねこん
櫻人の詞也はやうこんとなり又實（マコト、云心ナリ）の心と云々　紫
のうらみ給ふほどに遠かた人の恨は中々とはぬよ
りもふかく成ともあすはやくかへらんと也紫上を
深切に思ふよしをみせたり中々にとはたま〳〵行
てはやくかへらは中々とはぬよりも恨あるべしと
いふなりあすものもの字は櫻人の詞をそのまゝお
きたるなりあすははやく歸んと云心に見るべし
源と歌なとよみかはし給ふをも姫君は何ともしら
ぬとなり
なにことゝもきゝわかて　明石上の事ゆゑかく紫と
うへはうつくしみ　姫君を紫の慈愛なり
おほしゆるされにたり　明石上の事を殊外紫の思ひ
ゆるし給ふなり
いかに思ひおこすらん　秘 紫上のおもひやりなり
われにていみしう戀しかりぬへき　紫の明石上の心
中を察して思ふなり我はわれか身にしてなり
なとかおなしくはいてや　御前の女房たちの云なり
秘 紫上の實子にてましまさはとなり
かしこにはいとのとやかに　大井の家の心にくゝす
みなしたるなり
みつからのけはひなと　是より明石上のさまなり源
の心也

たゝよのつねのおほえに　弄明石上のよのつねにもあらはこれ程心くるしくもおもふまし明石入道のおもはん所はかりをこそおもはめ明石上の人の程なとはさしも思ふましき事なるを人からの御心に入たるゆゑにたち歸り給ふもくるしくなけかれ給ふとなり

さるたくひなくやはと　祕明石上の大かたの人にてあらは此姫君をわか御かたにとりわたして明石上をはすておき給へりともためしなきにてはあるましき物をと也　聞此明石上よのつねの人ならは是ほとなる人からは有へし共おもふへしされとも入道のひか物なる故かくよきむすめをもちたる不審に思はるゝと也人のほとは尤可然となり　或よのつねのことくに受領の女なれはその分際ほとにあつかひ給ふともさるたくひと思ふへきを入道の此娘をぶんさいよりも思ひあかりたるもさすか也又御心さしもあれは一かとおほすと也人のほとなとはさても有へきをなとおほすと受領の娘ほとにあつかひ給ふともそれにてあらんとなり明石の入道の女なとを源氏の身にてうちやりさまなれはとてちからおよはぬなり　私此段諸抄の注釋をかきのすといへともいまた愚意證しかたきに似たり猶了簡をくはふへし

心のとかならす　祕まことに夢のやうにいつも思ひ給ふなり明石上をあかす思ひ給ふ故なり引歌におよはさるなり

夢のわたりの浮橋かと　河奥入世中は夢のわたりのうきはしかうちわたしつゝ物をこそおもへ　弄引歌世中は云々引歌なくても也夢のほとゝ行かへる心ちし給ふなるへし　祕まことに夢の樣にいつも思ひ給ふ也明石上思ふ故也引歌不及歟

さうのことのあるを引よせて　源のひき給ふなり

かのあかしにて　明石の巻にありし事なり

すこしかきあはせたる　明石上のひはを源のことにかき合たるなり

いかてかうのみひきくしけん　河ひきくんじけんとおほさる薫なり　薫修の心なり　花一本ひきくんしけんとおほすとありくしは具なりくんしも同心なりものゝとゝのほりたる心なり河海には薫の字に釋す不審なり　祕河海薫云々花鳥は具なり云々

いつれもおもしろき歟青表紙にはひきすくしとあり然は過なり超過の心なり　私ひきすくしの義を用ふへし三本如此

わか君の御ことなと　姫君のありさまかたり給ふなり

こゝはかゝる所なれと　弄大かたなる所にては物参りなとする事聊爾にもなかりしにや　秘源の上臈しきさまなりいつくにてもれうしに物なとまゐる事はなけれともなり

ちかき御てらかつらとのなとにおはしまきらはしつつ　此二ヶ所に御膳なと調する人も陪膳の人なともあれはこなたさまにてきこしめしつるなとまきらはして大井にてはくた物なとをもさのみはきこしめさぬをまはにはみたれ給はぬといふなり　秘御寺へなとゝまきらはして御出あるなり

又いとけさやかに　大井の里にてもさのみかとを立てきこしめすなとはなきか明石上のおほえことなるといふ心なり　秘さすかにこゝをはさるへき所と源のの給ふなり

女もかゝる御心のほと　秘源氏のふしなへてのやうにはし給はさるをみしりてなり

すきたりとおほすはかりの　花すきは過也身の程に過たるふるまひはせぬとなりさるから又卑下せぬは過不及なき中庸の道理なり　河数奇なりと云々

私云過の字然へし明石の心つかひ妙なり

おほろけにやんことなき所にてたに　源のけたかき御さまを明石上聞及ひたるなり大井に住ほとは何とやうにもてなし給とも人のしらぬ事なり立ましりては人よりもくたれる所のほとをや人にあなつられんとおもふなり近きほとは東院の事なり

中々いとめなれて　秘東院へうつろひなん事をはあるましき事に思ひたるなり

かやうにふりはへ給へるこそ　秘たまさかなれとかくわさとわたり給ふ御志の深切なるをいへり　弄わさとわたり給ふ事なり

あかしにもさてそいひしか　秘此世をも思ひすてたるやうにいへともなり　松風巻にけふなからわかれ奉りぬなといひしかともとなり

むねつふるゝ事もあり又おもたゝしく　入道の聞てうれしき事も又むねつふるゝ事もあるとなり

その頃おほきおとゝうせ給ひぬ　秘葵上の父太政大臣攝政也

しはしてもり給へりし程をたに　秘致仕の表たてまつり給ひし時の事なり　朱雀の御位のほとてもり居たまうて今上冷泉の御時攝政大臣になりし人なり

よろつの事おしゆつり　攝政に萬機をうちまかせ給へるに只今うせ給へは源氏の御いとまなからん事をおはしなけくなり

みかとは御としよりは　今上冷泉院の御としよりもおとなしくおはすと源の思ひ給ふなり

しつかなる御ほいも　源のしつかなるねかひもかなふましきとなり此段皆源の心なり秘同

こまやかにとふらひ　太政大臣の葬禮佛事なとにも源氏のかの御子又孫なとよりも心にいれ給ふと也

ものゝさとし　怪異なとなるべし

あまつそらにもれいにたかへる月日ほしの光みえ雲のたゝすまひ　河令云陰陽寮頭一人掌天文暦數風雲氣色　注云謂天文者日月五星廿八宿也暦數者暦計日月之度數而造暦授時也氣色者風雲之氣也言以五雲之色視其吉凶候ニ十二風氣一知ニ其妖祥一　應和二年七月卅日黑雲氣一條廣三尺許起坤亘艮康保二年正月五日白雲廣三尺許經天亘東西

みち〳〵のかんがへぶみ　諸道勘文

世になへてならぬ事ともましりたり　聞冷の即位あるに源のはかくれたる事なから父にて臣下にておはするやうの事なるへし逆なる故なり又源の子にて位につき給ふ事もあるましき事なるべし

うちのおとゝのみなん　天下おだやかならぬ事を源の心にわつらはしくおはすなり

入道きさいの宮　秘薄雲也

三月には　彌生なり

いとはけなくて物ふかくも　今上冷泉の桐つほのみかとに別給ひし折は御幼少にてさのみおほしめしいれさりしが此度は御心つきてふかくおほしなけくさまなる故に薄雲も一しほかなしく思ひ給ふとなり

ことしはかならすのかるましき年と　秘后の御祠なり上﨟しき體なり我身と命のかきりをしりかほならんもいかゝと也　弄薄雲も卅七歲女のつゝしむ年なり

命のかきりしりかほに　くとくの事なともし給はす
此てゝろつかひ上﨟しく感あり
うつしさまなるをりすくなう　花いつも違例がちなるなり　秘うかく\としたるさまなり　河現様
現心萬　現人日本紀
三十七にておはしける　薄雲の御年なり　秘此としの重厄此物語におほし女のつゝしむへきとしなり　をしくかなしさみたてまつらせ給ふ　冷泉の御心の中なり
つゝしませ給へき御としなるに　秘主上の御心なり　聞主上の御詞也　秘此分可然歟
はれ〳〵しからて　むさと御わつらひをたになけきおほしめしつるにとなり
御つゝしみなとをも　くとくのことなとつねよりわきてする事もなしと薄雲の仰らるゝにつきてかく勅定あるなり
たゝ此ころそ　此ころになりてそ御修法なとよろつにし給ふとなり
つねの御なやみ　總別かよわくおはせしなるへし
かきりあれは　程なく還幸なり

たかきすくせ世のさかえも　秘后の御心の中なり當時無雙の人となり　此薄雲は先帝の御女后はらにて我御身も后國母にて眞實に無雙の人なり
心のうちにあかすおもふことゝ（ともイ）人にまさりける　秘是は御心のうちに源の密通の事一つの御思ひなり
さるへきすくせもならひなく又心中に物を思ふ事もたくひあるましきと思しめし知るなり
うへの夢のうちにもかゝる事の　私源の御事を夢にもしり給はぬ事を悲しく思ひ給ふ也　花六條院の御子なる事を上のまたしらせ給はぬ事也冷泉は源の密通ありて出生し給事をしり給はぬをうしろめたく後世までの思ひ共成へく薄雲の思ひ給ふと也
おとゝはおほやけ方さまにても　秘太政大臣の事なとなり　源の薄雲の事をおもてむきにてもかやうのやんことなき人のなくなるををしみ給ふさ也
人しれぬあはれはた　花女院と源氏との御中の事也御心かよひし事なり
としころおはしたえたりつるすちさへ　好色かたのこと今かきりに成て又今さら思はるゝとなり
御木丁のもとによりて　薄雲の御木丁のもとへ源の

よりて御ありさまとひ給ふなり
月ころなやませ給へり　是よりさふらふ女房の詞わつらひ故薄雲はいよ〳〵行ひ給ひしなろへし
かうしなとをたに　弄柑子無毒病者の用物也云々只はかなき物をもとみるへし　秘柑子無毒故病者も食すと云々但それまてもなし只不食をいふなるへし　河聖武天皇神龜二年柑子從唐國來植種結子唐玄宗開元三年也又本草云柑子無毒云々仍病者宜食也
院の御ゆゐこんたかへす　秘后の源へ申給事なり桐帝の御遺言なり　寛平二年勅左大臣源融關白事暫々依病有親事如故寛平遺誡云右大臣已甍言而無驗　花是は故院の御遺言によりて源氏君の政をしり給ふ事を女院の御心に日ころうれしく思ひ給ひし事をほのかにの給ふなり
いまなんあはれにくちをしく　かきりのさまになりて謝せん所なきかくちをしきとなり
御いらへもきこえやり給はすなき給ふ　秘源のさまなり　花源の御涙にむせひ給て御いらへもえ申給はぬなり

なとかうしも心よわきさまにて　源の我心よわき様をくちをしくおほすなり
いにしへよりの御ありさまを　公界にしてもあたらしくをしき薄雲の御さまなりまして御心のうちにおほすことあれはいよ〳〵かなしかるへし
はか〳〵しからぬ身なからも　源の詞なり
おほきおとゝのかくれ給ひぬるをたに　これも大やけのためを源の思ひ給ふ故にをしみ給ふなり
またかうおはしませは　薄雲のかきりのさまなる事なり
ともしひなとのきえいるやうにて　薄雲の臨終のさまなり源氏君緣ありて此臨終にあひ給也　河如烟盡灯滅　法華經論衡曰人之死也猶火之滅灯滅而燿不照人死而智不彗
かなしき事を　源の心也
かしこき御身のほとゝきこゆる中にも　秘是より薄雲の行跡をいへり　或草子の地と云々
かうけにことよせて　秘權不肖の差別なきなり其身權威をふるひ給はさる殊勝なり　聞かうけとは權門たてする事をこゝにはいへり　河豪家有千人郷謂豪

史記注云鶡冠子曰德萬人者謂之俊德千人者謂之豪
德百（楊イ）人者謂之英也
世のくるしみことあるへき　諸人の上を憐愍のふか
き心となり
くどくのかたとても　秘無用の物をはついやし給は
さるなり　私すゝむるによるとは人のすゝむるに
したかひて施入なとして事たてゝ名聞かましくは
し給はぬなり
いかめしうめつらしう　是よりは昔のさかしき世に
て事々しく名聞かましきやうにする人もありしに
此薄雲はさやうならぬと云々
もとよりのたから物　先帝よりつたはりたる物なる
へし
つかさかうふりみふのものゝ　太上天皇になすらふ
る御封を給つれは年官年爵等の限ある事なり又中
宮にての時も有なり
まことに心ふかきかきりを　人しれす寺々なとへ寄
進しおかせ給へる事有るなるへし或堂搭たつる事
なとを上代い人のせしも人にわつらひをかけてせ
しに是はさはなくて寶をつくし御封を物なとをも
て功德をしおかせ給ふと也御説につかさかうふり
とは年官年爵とてさたまりたる后太上天皇なと得
分なり
をさめたてまつるにも　御葬送なり
殿上人なとひとつ色にくろみわたりて　花天下諒闇
の事也　弄同　秘服裴也　諒闇也
ものゝはえなき春のくれなり　秘天暦八年母后の事
を比していふなり　河村上御記云天暦八年正月十
四日母后崩廿四日今日朝撤尋常御簾改懸蘆簾以鈍
色細布爲端帽額
二條院の御まへのさくら　秘源の思ひ出給ふなり
ことしはかりはと　河「ふか草の野へのさくらし心あ
らはことしはかりは墨そめにさけ
人のみとかめつへければ　これはさまておはしめす
ことゐかゝと人のおもふへきとおはすなり下の心
ある故なり
御ねんすたう　念誦堂なり今の世に持佛堂なといふ
さまなるへし
山きはの木すゑ　峯の梢なり弄同　閑山きはとは
山と空とのきはなり峯也

雲のうすくわたれるかにび色なるを何事も御めとまらぬ比なれと　私おもしろき花もみちにも心はとまるましくおほしなけくなりされと此雲の色の折にあひてにび色なるか物あはれにてかへりて御目にとまれるなり折のあはれなるさまなり

源氏　入日さす嶺にたなひくうす雲は物思ふ袖に色やまかへる　秘源氏もいま鈍色の服を着し給ふ故なり　聞眼前の躰をよくよみ給へり

人きかぬ所なれはかひなし　秘かやうにおもしろき歌なれと人のきかぬ所なれはかひなきとなり　草子の地なり弄同　聞念誦堂にてひとり詠し給ふ也

御わさなとも過て　四十九日の御佛事なと過てなるへし

この入道宮の御はゝきさき　秘先帝の后なり

弄入道の宮は薄雲也此御母后誰の女ともみえす

薄雲の御母の事先帝の后也

つき／＼の御いのりの師にてさふらひける僧都故宮にも　此僧都系圖にはなし先帝の后なり此薄雲又今上冷泉なとの御いのりをもつとむるとなり故宮は薄雲なり

とし七十はかりにて　僧都七十計なり云々

今はをはりのつとめをせんとてこもりたるか　後世のつとめのかたをせんとて公請を辭して籠居なり

宮の御事により　秘薄雲の御事也　薄雲崩御の事によりて御とふらひに出るなり

この頃は猶もとのことく　秘御持僧にとなり

いまはよゐなといとたへかたく　夜居なり　よゐの僧は二間に候するなり御持僧の事なり

ふかき御心さし　秘もとの心さしなり

こたいにうちし（しはイ）ふきて　古代ふるめかしきさま也

いとそうしかたく　秘僧都のことはなり

かへりてはつみにもや　みかとの曲事とかおほしめさんといふ心歟

しろしめさぬに　秘主上のしろしめさゝるをいへり

天の眼のおそろしく　河天眼　秘河花にはてんけんとあり　聞には天の眼とあり五眼とは肉眼天眼恵眼法眼佛眼也　花天眼は五眼の一なり帝釋梵王等の照覧なり

なにのやくかは　河何益なり何の益かあらんなり

ほとけも心きたなしとや　正直ならぬ所をいふ歟

うへ何事ならん　主上の御心なり
法師はひしりといへと　秘寛算供奉の事なとそのた
くひゐはし　弄一勘何事とは定かたし如寛算供奉
事歟かゝるためしをおほしけるにや又大かたにて
もある事なり　私僧の宮なとの事に聖なとある歟
とさま〳〵おほす也又法師はひしりといへとゝ云
詞いさゝか心得かたし法師とは大かた僧の名ひし
りとは世を捨たる心歟俗人も世をいとふ心なとの
あるをはひしり心なと此物語にかけれはその心歟
いはけなかりし時より　秘これより主上の御詞なり
更に幼少にましましゝ時より心へたてすおほしめ
されしにいまは隔心申さるゝ事の侍るかとなり
私そこにはとは僧都をさして仰らるゝなり
あなかしこ　秘僧都の詞也
佛のいさめまもり給しんこんのふかき道をたに　佛
のいさめまもり給ふのりのふかきみちをたに一本
しんこんのふかきみちをたにとあり　河眞言秘密
事也　私眞言の秘密の事さへ傳受有にとの事也
これはきしかたゆくさきの大事と　たゝいま奏せん
とする事のさまをまつ申なり

過おはしましにし院　秘桐壷なり
きさいの宮　秘薄雲なり
世をまつりこち給ふおとゝ　秘源氏なり
よからぬ事にやもりいて　法師なれと用捨の詞をつ
かふなり
かゝるおいはうしの身にはたとへうれひ侍りともな
にのくいか　河後悔なき也　わか身の愁になること
ありともかやうの事をは奏せんとなり
佛天のつけあるにより　秘わさとかやうに奏したる
也弄同　佛天のつけの必ありしにては有へからす
わか君はらまれ　是より事のよし奏する詞也　秘我
君なり主上をさして申さるゝなり
故宮のふかくおほしなけく　秘薄雲なり
法しの心にえさとり侍らす　男女の間のことなれは
なり
おとゝよこさまのつみにあたり給ひし時　源氏須磨
へ隱居の時の事なりかやうのまきれ故天のとかめ
あるかと薄雲のおほしおそれて冷泉の御祈ともか
さねておほせつけられしとなり又源もそれを聞て
ことくはへて僧都に御祈の事とも仰られしとなり

御位につきおはしましゝまて　當今御位の時分まて
その御祈をせしとなり
そのうけたまはりしさまとて　花當代の御門はまて
とは源氏の御子にてましますなり
さま〳〵に御心みたれけり　冷泉の御ありさま御心
なり
とばかり御いらへも　しはらく返事なきなり
すゝみそうしつるを　さし過て申出たるを逆鱗かと
僧都の恐怖して御前をまかりたゝんとするなり
心にしらて過なましかは　秘勅宣なりよく奏したる
となり
又この事をしりてもらしつたふる　此外に猶しる人
あらんかと主上のおそれおぼす御詞なり
さらになにかしと　又僧都の詞也
さるによりなむいとおそろしう　かやうの密事なる
によりて佛天の照覧おそろしきとなり
てんべんしきりにさとし　河天變なり　秘例にたか
ひたる天變の事まへにみえたり　私天變とは或は
日月星宿風雲つねにたかへる事なり
とのけなり　私此恠也歟

何事もわきまへさせたまふへき　時にいたりてとか
をもしめす也　政をも自らしたまはん時を得てか
くの如しといふ理也
よろつの事おやの御代より　諸事昔より先王の例を
本とし給ふ事なり公私ともに子は親のおきてをつ
く物となり此御門は故院の御子なから實も源の御
子なればかく云なり
うへは夢のやうに　主上冷泉の御心の中なり
おとゝのかくたゝ人にて　子なから位におはする事
を恐れ給ふなり
御らんするにつけても　源を主上の御らんしての心
のうちなり
故宮の事をひるよなく　主上のかゝる事聞給事を源
はしり給はねは薄雲の御事をおほし出たる御涙を
と思ひ給ふなり
その日は式部卿のみこ　秘桃園宮の事なり弄同　朝
顏の齋院の御父なり
世はつきぬるにやあらん　秘勅定なり　源へ對して
なり
故宮のおほさん　秘故宮は薄雲なり位をさり給はん

事をの給ふなり

いとあるましき　秘源の詞也

さかしき世にしも　結局さかしき世なとによからぬ事もあるとなり

ひしりのみかとの世にも　秘聖代にも怪異なとある事漢家本朝不可勝計也主上をなくさめたてまつりて申給ふ也弄同　河堯湯負ニ洪水大旱之責一高宗成王有ニ雊雉迅風之變一雖レ有ニ小異一不レ失ニ大（天イ）徳一（後漢皇后上和熹鄧皇后傳）及成王用事人或譖周公云々奔楚（史記周公世家）貞觀政要曰黄帝興蚩尤七十餘戰其亂甚矣既勝之後便致太平九黎亂德顓頊征之既尅之後不失其治桀爲暴虐而湯放之在湯之代即致太平紂爲无道武王伐之成王之代亦致太平

我國にもさなん侍る　河我朝延喜聖代菅家左遷事以下歟和漢先蹤不可勝計

ましてことわりの　秘致仕大臣式部卿宮薨給事也いつれも皆かきりある老臣どもなり

かたはしまねふも　秘かやうの事女なとのまねふへき事にあらすとなり草子地なり

つねよりもくろき御よそひ　秘今主上も源も同し素服にてましませは猶まかふ所なしとなり

うへもとしころ御かゝみにも　主上の御かたちの源に似たるとは鏡なと御覧するにも連々おほしめししをいま此事故一しほにあはれとおほすなり

いかてこの事をかすめきこえはやと　源へ此事をいひいたしてありさまをも見たく主上のおほしめすなり

うちいてきこえ給はぬほとはたゝ大かたのことゝもをつねよりも　此ことをうち出かたくおほしてよきついてもかなと大かたの事ともなつかしくきこえ給ふなり

うちかしこまり給へる　秘平生にも似す慇懃にむかひおはしますをあやしく思ひ給ふなり

かしこき人の御目には　源の事なり何とやらん不審にはおほしなから是ほとに委くきこしめしたらんとは思ひより給はぬなり

いまさらにしかしのひ給げん事　秘薄雲もふかく忍ひ給ひし事なるを今さらにさた〳〵ととひ給ふへき事もいかゝとおほしめしかへすなり

かの人にも　王命婦にもなり

かゝる事のれい　凡人の子の位につく事なり
いよ／＼御かくもん　物をしらさる物の位ある馬牛の錦などをきたるにたとふるなり　或御説云人不レ通二古今一者馬牛而錦裾聞書同　秘　博學ならては知かたき事と也此段殊勝學者可付心也
もろこしにはあらはれても　河　秦始皇者莊襄王の子として位に即といへとも實始皇の母太后嫪毐呂不韋といふ臣下に密通して所生也云々見史記傳　秘　秦始皇の事河海にみえたりいと多かりとかけるこの外にも例有へし私案之晋元帝は牛金といへる人の子なり　案鶴林玉露第五云　呂秦牛晋　秦虎視山東蚕食六國不知六國未滅而秦先滅矣何也始皇乃呂不韋之子則是嬴氏爲呂氏所滅也司馬氏欺人孤寡而奪之位不知魏滅未幾而晋滅何也元帝乃牛金之子則司馬氏爲牛氏所滅也春秋書莒人滅鄫義正如此胡致堂欲用春秋法於始皇紀便（使イ）明書呂氏元帝紀便（使イ）書牛氏以從其實秦始皇は呂不韋か子なるによて呂秦といひ晋元帝は實父牛金なるによりて牛晋と云なり然者鶴林玉露にいへる秦は嬴氏なれとも實父呂氏なれは呂秦とかき晋は司馬氏なれとも實父の姓に付て牛晋としるせり始皇紀に使明書呂氏元帝紀使書牛氏以從其實實にといへるこれなりもろこしにはあらはれてもしのびてもといへるこのことなるへし
日のもとにはさらに御らんしたる所なし　花　陽成院の御母二條の后なり業平中將かの后にちかつき參る事伊勢物語にみえたりよて陽成院の御門は中將の子どいふ事ありこれもたしかにしるしつたへたる文などはなきなり薄雲の女院の御事これになずらへておもふへし　秘　我國にはなきなるへし花鳥陽成院の御事をひけり難用之　私此事は誠似有仔細哉　以上秘　閑書花鳥の説あやまれり
一世の源氏又納言大臣になりて　秘　其例河海にみえたり只今源を親王になしたてまつるへきとなり　私是を天子の位をゆつらんとおほす事なるへし　弄　光仁天皇　元大納言宇多侍從河に有　河　一世源氏任官已後即位例　光仁天皇元大納言　桓武天皇元從五位上大學頭中務卿　光孝天皇元二品式部卿　宇多天皇貞觀十二年賜源姓任侍從仁和三年爲親王即帝位　同親王の例　光孝御子式部卿是忠親王元

慶八年四月十三日賜源姓寛平三年十二月廿九日立親王元中納言従三位　同弟太宰帥是貞親王賜源姓任左中將後爲親王　醍醐御子中務卿兼明親王貞元二年四月爲親王元左大臣正二位源氏　上野大守盛明親王康保四年七月爲親王元源氏大藏卿正四位下

私一世の源氏とは天子の御子の姓をたまはれるなり

人からのかしこきに事よせて　源氏賢才におはすれはそれに事よせて位をやゆつらんとおほしめすなり

秋のつかさめしに　京官除目也（ツカサメシノヂモク）　春の除目は諸國のつかさをむねと任せらるゝ故に縣召除目といひ秋のは京官をむねと任せらるゝをつかさめしといふなり

太政大臣に成給ふへき　秘こゝにては未任給なり任相國の事は乙女卷にみえたり弄同

みかとおほしよする事のすちももらし　秘位につけ給はんの事なり

おとゝいとまはゆき　源の心中に位の事おほせらるるを驚給心あり

故院の御心さしあまたのみこたちの中に　是より源の奏し給ふ詞なり

何かその御心あらためて　故院の御心むけさそあるらんそれをたかへしとなり

のとかなるおこなひ　いますこし大やけにもつかうまつりて後は身のいとまを給はりて閑におこなひをもしたきとなり

つねの御ことのはに　連々源の心中かくのことく申給ひしなるへし

太政大臣になり給ふへきさため　前の太政大臣の事は内々の定なれはそのついてに位をゆつらんと勅定なりされとも源の承引なけれはさらは太政大臣にとおもてむきの御定めなり

しほしとおほす所　秘源の斟酌し給ふなり

たゝ御くらゐそひて　秘従一位の事なるへし　弄同

牛車ゆるされて　秘聴㆓牛車㆒　御くらゐそひてとは品の事歟　寛弘八年八月左大臣藤原朝臣乗牛車出入待賢門上東門等云々　左大臣源融寛平元年十月十九日聴輦車　右大臣源兼明天延二年二月廿八日聴輦車　承平二年左大臣乗牛車出入上東門云々

あかすかたしけなき　不足(アカヌ)たらはすに恐れおほしめす主上の御心なり
猶みてになり給ふへく　源をせめて親王になしたてまつらんとなり
世中の御うしろみ　源の心なり　秘天下の攝政なり
權中納言大納言に成て右大將かけ給へる　秘葵上の兄也　弄同　私此除目に兩官に任したる歟とみえたり此春は父大臣薨し給へり重服の中任官の例ありといへともうちまかせたる歟猶先例を勘へし
いま一きはあかりなんに　此大納言大臣になりたらは政をゆつらんと源の下心なり
なに事もゆつりてん　河源の心かまへなり
猶おほしめくらすに故宮の　源の心なりかく御門のさま／＼御らるゝ事ともにつきて此密事をしろしめしたりと源のみしり給ふ也故宮は薄雲なりその御爲もいとほしき事なり又主上冷泉の色々おほし召わつらひ給ふにつけてもたれかかゝる事を申けんと不審におほし召なり
命婦はみくしけとのゝ　秘王命婦なり　王命婦みくしけとのゝさうしのあきたるをつほねにたまはりて內すみをするなり御匣殿(ミクシゲドノ)の職になりたるにてはあるへからす御匣殿は御服なとつかさとる人なり親王大臣家なとまても有へし　其職の心同し
この事をもし　秘源の尋給ふなり
さらにかけてもきこしめさんを　王命婦の詞也　秘薄雲の御心にあなかちに忍ひ給ひし事なりきこしめさんとは主上にきこしめすへき事なり
かつはつみうる事にやと　みかとの御ためもうす雲の御ためもつみうる事なから猶みかとの御ためをおほしめしなけきしとにや
一かたならす心ふかく　源の薄雲を思ふ心なり　秘薄雲のかく心ふかくおはせしを一かたならすと源の戀しく思ひ給ふなり
齋宮の女御はおほしゝもしるき　秘秋好中宮也是より中宮の御事をいへり源氏のうしろみ給ふ據也　私おほしゝもしるき御うしろみにてとは入內あるへきまへの所にみかといはけなくおはしませはおとな／＼しくそひおはしまさはよからんとありしかそのことく齋宮女御の御心もちの然るへきをおほしゝもしるきといふなり　秘源氏のうしろみ給

ふさまなりといへるはあやまれり
御やうい ありさまなとも思ふさまに　秘中宮の然へき人にてましませは源もよろこひ思ひ給ふなり
秋の比二條院にまかせ給へり　秘秋好今は源氏を御里のふんにし給ふなりはしめは朱雀院へのきこえをおほしてよそ人のやうにし給ひしとなり
いにしへの事ともかきつゝけて　源の心なり時節の感にもよほされて懐古の思ひあり又六條の御息所の事もこもるへし
御袖もぬれつゝ　秘源なり
こまやかなるにひ色の御なほしすかた　源の服衣のさまなり　式部卿桃園のみこの御事によりて着服なり源の叔父なり
世中のさわかしきなとことつけ給てやかて御さうしんなれは　弄下の心は薄雲の愁傷也周章不審なり
みつからきこえ給ふ　秋好の人つてならすの給ふ也
せんさいともこそ　聞思ひたはれんを下にふくませたり　秘源の詞なり百草の花のひもとくなとの心ある也　河「百草の花のひもとく秋のゝに思ひたはれん人なとかめそ

心やりて　花の心ちよけにさきたるを云なり
時しりかほなるも　秘諒闇の内なるを花はしらさるかとなり
むかしの御事　秘六條御息所の事也
野の宮にたちわつらひし　さかきの悪にある事
物あはれとおほしたり　源のさまなり
かくれはとにや　河「いにしへの昔のことをいとゝしくかくれは袖そ露けかりける小町姉　私秋好中宮もすこしなき給ふと也　河拾「わかおもふ人は草葉の露なれやかくれは袖のまつそほつらん　弄秘等いにしへの昔云々の引歌を用尤可然古歌[右イ]にをよはす
みたてまつらぬこそ　秘中宮をは源のいまたさたかに見奉り給はさるなり昔は男女のへたてはるかなるなりふかきさまみえたり
むねのうちつふるゝそ　御心にかゝれは也
うたてあるや　あなかち源の見たくおほすはうたてあるやと草子の地に評してかけるなり
過にしかたことに思ひなやむへき　秘源の過にしかたの事ともかたり出給ふなり　私ことに思ひなや

むへき事なくとは榮耀時代のおほえ何事につけてもゝ思ひ事なかりしに心から好色の事に物思せし事をの給ふなり

つゐに心もとけすむすほほれてくやみぬる事ふたつなむ侍る　河一には六條御息所の事なりいまひとつはのたまひさしつとは若薄雲女院事歟

このすきにし　秘御息所なり

あさましうのみ　秘御息所はつゐに源をうらみはて給ひし事なり

なかきよのうれはしきふし　なかき世までのうらみも殘るらんとなり

かうまてもつかうまつり　秘かやうの事にてさりともみなほし給ふへきかとなり　秋好を源のうしろみ給ふなり

もえしけふりのむすほゝれ　河「むすほゝれもえし煙をいかゝせん君たにかけよなかき契りを　秘弄等引歌用之　弄此引歌叶歟むすほゝれ給ひけんとは御息所の思ひの事也歌の詞をかる也或御息所は物を思ひつめたる人にておはすれは心もとなきなりむすほゝれ給はんやといふ心也　其心若菜巻にみゆへし云々　秘いかにいひてもかへらぬ事と也

いまひとつはのたまひさしつ　弄薄雲の御事にや河同之　秘かきさしたるおもしろし　或是は秋好中宮の御事に御心のかゝる事なり　私云薄雲の事といへる可然歟

中ころ身のなきにしつみ　秘左遷の時の事なり　歸京ありたらは何とせんなとゝ内々心におはせし事のかたはしつゝかなふとなり

ひんかしの院にものする　秘花ちる里なり東院にうつろはし給ふ事こゝにはしめてみえたり　私此前にちかきしるしはこよなうてとあり花散里の事也

心はへのにくからぬ　是よりいとこそさはやかなれといふまては花ちる里の心もちゐをいふ源の詞なり源の心をもみしりて心きよくかけしろはぬ體をさはやかとはいふへし貪着せぬ心なるへし

かくたちかへりおほやけの　歸京して天下の政をしる事なとをよろこひとは思はすたゝ好色かたに心のひかるゝ計をの給ふなり秋好へちとけさうかましくいひなさむとてかくの給ふなり

おほろけにおもひしのひたる御うしろみとは　弄齋

宮に源の宣ふ詞也おほろけならすの心なるへし思
ひ忍たるは源の下の思を宣へりおほろけならぬと
なり此入内の事も随分の奉公にて侍りおほろけな
る心にてはしいてさる事となり中宮をは我物にし
てありともさもありぬへき事なりなはさりならさ
る心の中なるとなり　私中宮を源の我物にてもみ
たきを入内させ奉りたるは随分おもひ入たる心中
ひとつとなり事の次に思ひの色をみせ給ふなり
あはれとたに　秘おほしめししるへき事となり
むつかしうて　中宮の心也
さりやあな心う　されはこそあはれとたに仰られぬ
よとなり　さて此けしきをみて源の別事にいひま
きらはし給ふなり
いまはいかにのとやかに　源の別事にいひなす詞な
り
おもひ出にしつへきことの侍らぬてこそさすかに　今
は退休せはやと思ふ身にとり思ひ出といふへき事
のなきかさすかにくちをしきとなり
数ならぬをさなき人　秘明石姫君なり後には入内有
へし其間まちとほなるへきとなり

かたしけなくとも猶此門ひろけさせ給へ　秘秋好の
御さいはひにて此源氏の一門繁昌すへきと也皇子
の御誕生なとの心をふくめり弄同　河于公高明事門イ
歟　于公東海人其子于定國字曼倩家の門の破たる
を父子ともにつくろひけり于公かいはく此門を高
く大きに駟馬高蓋の入ほとにたつへしわれ獄の司
として事をおこなふに隠徳おほきか故に我子孫か
ならす家をおこすへしといひけりさて門を大に高
く立つはたして定國大臣になり其子永は御史大夫
に成にけり御史大夫は大納言にあたる也彈正を御
史といふ今の心にはすこしかはるへきか　花是は
あかしの姫君の女御后に立給ふへき事をおほしよ
りたるなり中宮なとの行啓には鳳輦もしは糸毛の
車なとにめし事なれは駟馬高蓋になすらふるなり
河花南抄の義に及はす　秘弄等之義可然と　聞于
公か隠徳有しに付て源の秋好なとをうしろみ給ふ
事隠徳なれは明石の姫君のうへなとに陽報あらん
とおほす心にや云々是も無用にや
侍らす成なんのちにも　源のおはせぬ後まて此一門
加イ
に心をそへ給へとなり源の御子の分なれは秋好の

御德によりて一門の繁昌せんとなり
きゝついて　聞つきてなり　聞入てなり
しめ／＼とくるゝまて　源のかへりうくしたまふな
り
はか／＼しき　實々しきかたの事なり
としのうちゆきかはる時々の花もみち　秘六條院つ
くるへき心なり弄同　私年のうち行かはるは四時
運轉の事なりはか／＼しきのぞみはあるは子孫の
榮花后大臣をならへもちなとするやうの望の事な
りそれはさておきぬまつさしあたりたる春秋の興
にて心をなくさむるはかりの事はしてみたき事そ
となり
心ゆくこともし侍ける心寄はかりあらはなるさため
　秘古來未决事となり　おとしつけたる勝劣なし
といふ心なり
もろこしには春の花のにしきに　秘河海石季倫金谷
園并樂天か何をひけり弄同　河晉石季倫居金谷春
花滿朝作五十里錦障逢春不遊樂恐是無心人樂天　萬
葉第一云　天皇詔内大臣藤原朝臣競憐春山萬花之
艷秋山千葉之彩時額田王以歌判之歌　「冬こもり
はるさりくれはなかさりし鳥もきなきぬさかさり
し花もさけれと山遠みいりてもとらす草ふかみと
りてもみえず秋山の木のはをみてはもみちをはと
りてそしのふ靑きをはおきてそなけくそこのうら
みし秋山そわれは　私これはやまとことのはには
秋をあはれふといふ所にひけり天智天皇也内大臣大織冠なり
やまと言のはには秋のあはれをとりたてゝ　花春は
たゝ花のひとへにさくはかり物のあはれは秋そま
されろ　秘弄等此歌を引弄此歌なとにてみるへし
時々につけて見給ふにめうつりて　自古逢秋悲寂寞
我言秋日勝春朝　秋詞劉禹錫　「大方の秋に心はよせ
しかと花みる時は何れともなし　「春秋に思ひ亂
れてわきかねつ時につけつゝうつるこゝろは　秘
春秋に思ひみたれし此心なるへし
いつかたにか御心よせ侍るへからん　秘六條院四季
にわかちてつくるへき心かまへ也その中にてかく
いつかたにすませ給ふへきにかと御心をみんため
なり」三光院殿御說也
いときこえにくき　秘大事の返答とおはしめしたる
なり　齊宮の心なり

御いらへきこえさらんも　此返事の給はさらんもいかゝと思ひめくらし給ふなるへし
ましていかゝと思ひわき侍らん　中宮の返答なり源氏さへ思ひさためぬとあるにまして我はとなり　秘我身はかなき心なとには分別ありかたきとなり
けにいつとなき中に　是も源の思ひさためぬとありしをうけてけにいつともわかぬとの給ふなり
あやしときゝし夕こそ　河いつとても戀しからすはあらねとも秋の夕はあやしかりけり　「秋のよのあやしきほとのたそかれに荻ふく風の音そ身にしむ　引歌　秘いつとても戀し云々弄同　弄此詞殊勝なりいつれとてたへかたき事なるを母御息所の事によせての給へるあはれおもしろし〳〵
はかなう消給ひにし露のよすか　秘故御息所のかくれ給へる事秋なれは心よせのある由なり　大事なる返答をかくいひなせる尤殊勝なり　或故前坊も八月にかくれ給ふにや御息所も秋なれはかた〳〵かくの給ふにや云々
えしのひ給はて　源のこらへかねて風流かましき歌をよみかね給　なり

源氏　君もさはあはれをかはせ人しれす我身にしむる秋のゆふ風　さはとはさらはなり　歌のおもては我も内々は秋をあはれと思ひつるにさては御心にもさやうならはあはれをかはさんとなり下の心はおもひの色をいさゝかあらはしたるなり
忍ひかたきをり〳〵も　秋の夕はしのひかたきをりをりあるとは中宮になまむつかしき事をほのめかし給ふによりて心得すおほして御いらへもなきなり
いつての御いらへか　いかゝ御いらへをし給ふへきとも心え給はぬとなり
このつゐてえこめ給はて　源のえしのひこめ給はて何とかやとうらみかたる御詞もあるへしと筆者の察してかくなり
いますこしひかことも　源の心は猶これより打みたれもしつへかりしを秋好のうたてとおほしたるもことわりにわか心もけしからぬ事と思ひしらるゝゆゑ我は思ひかへしてみたれすとなり
心つきなうそおほしなりぬる　秋好の心也　源のものふかううちなけきたるさまのなつかしけなるを

も秋好の心にはうるさく御覽しなすとなり
やはらつゝひきいり　そとつゝ漸々に入さまなり
あさましうも　源の詞なり
まことにこゝろふかきひとは　花源氏君のわかてゝろのあさき事を自稱したまふなり　秘眞實にこゝろふかき人はかやうにあさはかにことばにもいたし侍らぬをとなり
つらからんとてわたり給ぬ　河「つらからん人のためにはつらくしてつらきはつらき物としらせん　弄秘聞書此引歌なり　私云前の詞によしいまよりはにくませ給ふなよつらからんとてわたり給はぬとありかやうの事によりてにくみ給ふなよにくみ給はゝつらからんとたゝの給ふ詞歟如何　秘秋好も内へ引いり給へは源も退出し給ふなり
御にほひのとまりたるさへうとましう　源の匂ひのとまりたるなりうとましうは秋好の心なり
御しとねのうつり香　河茵也　詩文茵暢轂小戎篇
柳かえたにさかせたる　河「梅かゝを櫻の花に匂はせて柳かえたにさかせてしかな　秘梅かゝをさくら云々源のよろつくしたる御さまをいへり　花源氏君の萬事かけたる所のおはしまさぬをほめていへり　或御說歌の心はねかひことなり此源の御さまは梅かゝを櫻の花のにほひて柳の枝にさきたる樣なるとなり面白く本歌をとれり云々
たいにわたり給て　紫上のおはする對なるへし
かうあなかちなる　秘源のみつからの事をいへりわりなき事に心のとまるくせの猶のこりけるを源のみつから思ひしり給ふとなり
これはいとにけなき事なり　秘秋好に心かけ給ふ事あるまじき事となり　花秋好中宮にたはふれ事なと申給ふは有ましき事をにけなきといふなり
おそろしうつみふかきかたはおほうまさりけめと　花藤壺女御の御事なり　秘源の秋好を思ひ給ふ事と薄雲にかよひ給ひし事を思ひくらへ給ふに薄雲の事は猶つみふかき事なりされともそのいにしへは年わかきほとにて思ひやりなきにゆるさるゝかたもあるへしと思ひさまし給ふなり弄同
おもひやりすくなきほとの　わかき時の事をの給ふなり
猶このみちはうしろやすく　弄年たけぬれは好色の

道には遠慮の心も出來ぬる物なり　うしろやすくと也弄同　私薄雲はふかくあるましき事なれとわかきほとの事にてあやまちありき今秋好は薄雲にくらへてはかろき事なりそれさへ遠慮のあるはてとのほかのちかひなりそれをうしろやすしと源のみつからおほししるなり　花このみちはうしろやすくといふをたいの姫君のなからひをの給ふなりとあるはあやまれり

女御は秋のあはれをしりかほにいらへきこえけるもくやしう　源の此御いらへにつけてむつかしき歌なとよみかけたまへは煩はしくおぼしたる秋好の心なり

つねよりもおやかり　花源氏のいよ／＼中宮を御子のことくし給ふなり

女君に　源の紫への給ふなり

女御の秋に　是より秋好中宮とはいへり

君の春の曙に心しめ給へる　闕乙女巻の末に春秋の爭ひあるへき事の序にかくなり　秘紫上の春をあはれみ給ふ事此詞よりみえたり弄同

あそひなとしてしかなと　あそひはかりせはやと思ふ故大やけわたくしのひまなき身ふさはしからす源のおほすとなり

ふさはしからね　河不祥也

いかておもふ事してしかなと　秘ねかひのまゝにあそひにて過したしとおもふも紫のさう／＼しくやと思ふ故なりそれそ心くるしきとかたらひ給ふなり　秘おもふ事とは紫上故に山こもりもとゝこほり侍ると也　私此心ならは大やけわたくしの隙なきもくるしけれはおもふことくやまこもりなとせんとおもへと紫のさう／＼しからんと思ふ故にとゝこほるといへる歟（イ以下ナシ）てのこゝろかなはす如何私の義尤然へき歟「してしかなとたゝ御ため　私さうさうしきはさひしき心也君の御心をもなくさめはやと思ふ心あるよし紫上にかたり給ふなり」

山さとの人も　明石上なり

所せさのみ　御おほえのまさるほと御ありきもなりかたきなり

世中をあちきなく　秘明石上の事なり

なとかさしもおもふへき　秘明石上の京へわたりたまはん事をきらはしくおもふはおほけなき事と源

の思ひ給ふなり　私おほそらのすまゐとはおしなへてのつらにてはいやと明石の心たかく思ふを源の心に過分の事とおほすなり

いとほしく　さすかにおほしはなれぬなり

すみなるゝまゝに　秘大井里なり

いとふかゝらさらん事にてたに　秘なほさりの人をおきてたに心とまるへきあはれふかき所のさま也

ましてみたてまつるに　明石上の心なり源の心にさへあはれそふなりまして明石上の方からは源をおもふ心をましてといへり

つらかりける御ちきりのさすかにあさからぬ　秘姫君のいてき給ふをいへり　又たまさかにあひたてまつるはつらき契りなりされとも大井まてはるばるおはするはあさからぬと思ふなり

てしらへかね給ふ　源の明石上をなくさめかぬるとなり

かゝり火とものゝ　秘八月の末なれは自然の篝火なともあるへし　私大井川鵜舟の篝八月まても有へき歟又何のかゝりにても有へしほたるのとふは庭のやり水なるへし

かゝるすまひにしほじまさらましかはめつらかならまし　花須磨あかしにてかゝるいさり火なとをはみなれ給ふことをいへり　秘あかしにての事なり浦のいさり火なとを見さる人ならはめつらかに思ふへきを明石上は目にちかく明石にてみし故にめつらかにも思ひ給ふましきとなり　弄明石にての事なり

明石上　いさりせし影わすられぬかゝり火は身のうき舟やしたひきにけん　秘此歌古來稱美の歌なり明石にての物思ひも大井にての心つくしもおなしさにまた鵜舟のかゝりを海士のいさりに思ひよそへてうき事のはなれぬ心をいへり第四句殊に感あり　弄此歌殊勝なり以下秘の義に同仍略之八月頃歟たゝ螢にまかふ心なるへきにや　河廻嶋日本紀　求食萬

古今　おもひきやひなのなかちにおとろへてあまのなはたきいさりせんとは

おもひてそまかへられ　秘まことに明石にてのいさり火に似たるとなり

返源　あさからぬしたのおもひをしらねはや猶かゝり火の影はさわけける　花古「篝火の影となる身の侘しきは

なかれて下にもゆる也けり　今案下のおもひはなかれて下にもゆるをいふかけのさわくとは火の光のさたまらぬ心なるへし下のおもひにくらふれはあさはかなる心なり　秘花鳥の説然るへし明石上のかくいひ給ふよりも我身の下のおもひはなほさりならぬと也落句おもしろし　聞源のふかきおもひをしりたらはかゝり火のかけはさたまらんとなり　身のうき舟やなとうかひたる心に明石上のよめれは源のかくよみ給ふなり

たれうき物とおしかへし　河「うちかへし思へは悲し世中をたれうき物としらせそめけん　引歌うちかへし云々　弄引歌同　花源氏の君の御心をうき物とあかしの上のうらみ給ふなり　秘花鳥の説いかが是は源の心なるへし　或明石上のふかく源をうらみ給ふを又源のかたよりもうらみ給へはおしかへしといへり御説花鳥説わろしと云々

大かた物しつかに　源の此頃はちと御いとまあるなり

たふとき事ともに御心とまりて　花さかのゝ御堂にて御念佛したまふとてはとをふれと太井へもしけしけとわたりたまふことに女君もおもひまきれけんかしとなり　私筆者の察してかけるとなりとそとは前にもありし書とめなり本にさやうにありつるといふやうにみせたる詞なり

岷江入楚第廿　朝顔

卅一歳　内大臣
九月齋院御服故移桃園宮給事女五宮爲同宿給事
源氏參桃園宮給事
先參女五宮次參齋院御方對面宣旨局給事
翌朝奉槿花於桃園齋院事
源氏在東對迎齋院宣旨語給事
紫君依前齋院御事故怨源氏給事
十一月又參桃園宮給事
源典侍候桃園宮爲尼對面源氏事七十一許歟
參齋院御方有人傳御返許事
十二月在二條院與紫君語給事
雪圍事
昔於中宮御前作雪山事
與紫君物語人々上共給事
故薄雲女院見源氏夢怨給事

朝顔　花以歌詞幷爲卷名

歌源氏「みしをりの露わすられぬ朝かほの花のさかりは過やしぬらん
同詞かれたる花ともの中に朝かほのこれかれにはひまつはりと有
秘卷名以歌幷詞號せり源氏卅一歳の九月より冬の末迄の事みえたり弄同　宮(官イ)内大臣薄雲の同し年也
齋院は御ふくにておりゐ給ひにきかし　河父桃園式部卿宮の御服也重服にてはおりさせ給ふこと也
花槿の齋院は桃園式部卿御女榊卷に賀茂のいつきに立給ふ薄雲卷に父宮の御服により齋院をおりゐ給ふなり　秘薄雲卷の末に式部卿宮うせ給ひしよしあり此事なるへし河海に延喜帝のみこの事をひけり准據の例なるべし齋宮は一代に一度かはる也
齋院はその御身に服あれはおり給なり代始にはかきらさる也是齋宮齋院のかはりめなり　弄此卷に宮と稱する人五人也槿の前齋院父桃園式部卿女五宮三宮致仕大臣北方也薄雲女院也
おとゝれいのおほしそめつる事たえぬ御くせ　河辯

歟源のわりなき事に心のとまる事也
宮わつらはしかりし　前齋院也　源のさま〳〵いひうこかし給し事也
いとくちをしく　うちとけたる返事もなきをかくおはす也
長月になりて桃園宮に　重服になり給ふゆゑに齋院をおり給うて先他所にまし〳〵て後に桃園宮にうつり給ふとみえたり桃園宮は今の佛心寺其跡也弄
同　河大和物語云桃園兵部卿宮うせ給て御はて長月晦日にし侍るにとして彼宮の北方に奉りける「大かたの秋のはてたに悲しきにけふはいかてか君くらすらん　二品兵部卿宮敦固は寛平第四の御子母延喜延長五年九月七日薨　拾遺集に桃園に住侍ける前齋院の屏風に貫之「白妙のつもる衣に櫻花色をも香をもわきそかねぬる　桃園の在所一條北大宮西一條面中許世尊寺南當時號枸杞町歟師氏大納言宅也保光中納言代明親王男傳領仍號桃園中納言今案敦固親王事歟延喜帝御連枝幷九月薨逝事相似御記云延喜二十年六月八日齋院宣子內親王自夜中所病困篤及曉出院至太宰帥親王桃園家九條右丞相記云天德三年二月十三日桃園家立于寢殿立坊城家此家本爲寢殿去條冬イ立北對本之北對卑陋尤甚仍所改作也
女五の宮そこにおはすれは　源の御伯母也　秘 式部卿宮の御連枝なり
そなたの御とふらひに　槿齋院への御とふらひとはなくて女五宮へとかこつけてこゝへ源のおはするなり
故院このみ子たちを　秘 故院とは桐壺帝也
今もしたしく　秘 源もしたしく大切に思ひ給ふ也女五なとの事を桐壺の心ことにおほせしゆゑ源もかくあるなり
つき〳〵にきこえかはし　次々歟　私たえすといふ心歟　閑 草子地と云へき歟
おなししんてんのにしひんかし　河 西は齋院東は女五宮也　秘 桃園の東の方には女五の住給ふなり
程もなくあれにける心ちして　秘 式部卿宮薨し給うて程もへさるにあれたるさまあはれ也　古歌「うちつけにさひしくもあるかもみちはもぬしなき宿は色なかりけり　此歌の心なり聞書に同しく此歌を

ひけり
宮たいめんし給ひて　秘此巻に宮と云人五人あり別
に注す仍略之弄花に注するに同し
いとふるめきたる御けはひ　河氣ケハヒ日本紀　形勢ケハヒ新猿楽記
しはふきかちに　河咳嗽　女五のふるめかしきさま
也
このかみにおはすれと故大とのの宮は　花葵上の母
は三の宮桃園の宮は女五なりさてこのかみといへ
り　秘三宮なり葵上母宮なり此女五宮よりも年は
まさり給へともわかくみえ給ふと也
もてはなれ聲ふつゝかに　女五宮のさまなり　河太フツツカ
或御説もてはなれてはそれに似ぬと云ふ心なり
私云其人に似あはぬ心なるべし
こち〳〵しう　河こと〳〵しうなりちと五音通する
なり無骨の心なり
さるかたなり　聞葵上母宮は源のふる姑にて細々馴
給へは勝負の心歟思ひ給ふ心か云々　私是は攝政
の北方にてよろづ花やかにもてなされし人なり此
女五はかすかにふるめかしくこのみ過し給へれは
それをさるかたなりといへるにや

院のうへかくれ給て後　秘桐壺帝なり女五宮の詞な
り　私桐帝女五宮御兄弟なり
この宮さへかくうちすて　私式部卿宮なり桃園なり
女五の兄也
かくたちより　源のとふらひ給を云なり
かしこくもふり給へるかな　秘源の御心のうちにて
このほか御年のよりたる事を思ひ給ふなり
うちかしこまりて　源の女五へ慇懃なるさま也
院かくれ給うてのちは　私是より源の詞なり
おなし世のやうにも　こと〳〵く別の世界になりた
るやうなりと也
おほえぬつみに　秘すまの事也　私おほえぬつみと
は身にしらぬ罪といふ心也
たま〳〵おほやけに　秘歸京し侍りては又政道にひ
まなきと也
御物かたりをたにきこえうけたまはらぬをたに　久
しく無音のさまを源の謝し給ふ詞なり
いとも〳〵あさましく　秘女五宮詞なり命なかくて
すまのうつろひなとの事見聞侍りしはかなしきと
なり

いつかたにつけても　弄桐壷帝崩御以下源氏のすまにくたり給ふなとの事なり

いのちなかさのうらめしき　河老子（莊イ）曰壽則多ㇾ辱

かくてよにたちかへり　秘源のたちかへり給うてかくさかえ給ふをみ侍れは又命なかきもかひあるやうに侍ると也

み奉らすして歸（まいイ）しかは　命みしかくて源のさかえ給ふを見殘したらはくちをしからんとなり

いときよらに　秘さしむかひて源をほめ給ふなり　聞女五宮の又さらにの給ふ詞なり　私此うちむかひてほめ給へるさまなとまてとにてち〳〵しうなといへるにかなふ歟

わらはに物し　源氏の幼少の時の事也

時々みたてまつる事たにゆゝしう　あまり此世に應せぬ人とあやうく思はれし心歟

内のうへなむいとよくに奉らせ　秘冷泉院源氏によく似給ふと也

さりともおとり　秘源にはおとり給ふへきとおしはかりたるなり

なか〳〵ときてえ給へは　河長々也

ことにかくさしむかひて　秘源の心中也

山かつになりて　秘源の詞也すまなとのやつれなり

うちの御かたちは　冷泉院なり

あやしき御おしはかり　秘さりともおとり給へらんとありし返答也

時々見奉らは　秘女五宮の詞なり源を時々見奉りたきのよしなり

いとゝしき命やのひ侍らん　命のなかきをかてつなりいよ〳〵なかく命やのひんとなり

又ない給ふ　女五のふるめかしきさまなり

三宮うらやましく　河攝政北方葵上の時なり　秘葵上の時宮をいへり又女五宮の詞なり

さるへき御ゆかりそひて　弄三宮源氏をむこに也　源を婿にて今にそのゆかりにしたしき事をの給ふなり

このうせ給ひぬるも　花うせ給ひぬるは式部卿宮の事なり齋院を源氏にあつけ奉りたく思ひより給へりしを三宮にせんをせられてくい（イなナシ）給へりし由をかたり給ふ也　秘式部卿宮なり槿の齋院を源に嫁したかきよし思ひより給ひし事也

すこしみゝとまり給ふ　源の心なり　秘まへの物語ともにきゝにくき事とも侍りしに此一言にいさゝか耳とゝめ給ふなり弄同

さもさふらひなれなましかは　秘きゝも侍らはうれしかるへきよしなり　齋院を源へゆるし給はゝうれしからんとの心也

みなさしはなたせ　みなとは女五の事をもてめていふなり　秘今はうと／＼しくし給ふをいへり

あなたの御まへを　秘齋院の御かた也

えねんし給はて　今の物語に催されて源のこらへかねてこゝをはやく立給ふなり

かくさふらひたる　秘源の詞なり

やかてすのこより　或御説すの外よりと兩説也　私すのこは簀子なりすのとは簾外なり猶簀子可然歟

にひ色のみすにくろき御几帳のすきかけ　花服者の所の御簾へりもつかうにはにひ色の布を用るなりくろき几帳とは木丁の手くろぬりにしてまきゑらてんなしかたひらはこれもにひ色也　私只今服者たるによりてなり

すのこはかたはらいたければ　是も簀子簾外兩義有

せんしたいめんして　秘齋院の宣旨なり　河齋院宣旨女房の官なり　或御説宣旨とは齋院に宣旨なとを取つきて申人を云中宮のも同し事なりと云々　聞齋院に成給ふ時の宣旨を請取し人と云々可尋　私云中宮齋院なとはおもて向の御用なくて叶はす直に人に物なと仰らるゝ事は有ましけれはさやうの事を云つたへ又は文なとをかく役者歟おほせかきをあまた所せんしかきと此物語にあり

御せうそこはきこゆ　河御せうそこはの給ふ詞なり文にかきらず大和物語にも忠岑みはしのもとに松ともして御せうそこしてとあり

いまさらにわか／＼しきみすの前かな　秘簾中へもいり給ふへき物をあまりによそ／＼しきと思ひ給ふなり　私みすのまへとは源はひさしに居給へは母屋の御簾のまへなるへしひさしにもみす有へし年のほと官位なとにことつけてかくの給ふ也ちかつかまほしくおほす故也

神さひにける年月のらう　秘源の心をかけわふ事の年久しくなるよし也弄同　花久しくふりにたる事を神さふるとはいふ也齋院に申給へる詞なりされ

は神さふるはたよりあるなりらうは勞なり奉公なとの勞なといふかことし[とイ]　河神閑又神宿神翁閑雅
日本紀　後拾「こきかけつ衣の玉は住の江の神さひにける松の木末に　今案神さひたるは閑の字相叶歟たとへはけたかく閑なるよしなりさひしき心也宿の字も古めかしき心には可叶歟俊成卿六百番歌合判の詞にさひてこそといへり褒美の心なり見嘉應住吉歌合判の詞にも左其姿詞つかひしりてさひてこそ侍れとあり神祇ならぬ事にも可言歟定家卿は劒刀をこそさひたるとはいへとて父卿を難すと云云日本紀に宿雨宿雪とあり是は宵の雨宵の雪の事なり古き心なり馬の毛に宿鴇毛と書たるも古心也猶此物語は俊成卿説相叶歟衣鐵のさひ也或は苦同

今は内外もゆるさせ　聞内外とあり　心は内外の差別もなくゆるさせ給はんと思ふと云ふ心也

あかすおほし　源の滿足ならすおほしたる也

ありし世はみな夢になして　夢にいひなしてイ本

弄此詞齋院の語人傳にてなり　花父宮の御事なり　秘内よりの返答なり齋院にておはせし事なとは久しく成たるとなり　私父宮うせ給て齋院をもおりゐ給へはいまおとろきたる樣の心ありてさては過つるかたは皆夢ぢやげな今夢さめてからはかなく思ひしらるゝよと思へはそれも又思ひさためかたき只今の心中そとなりさてありし世はみな夢とは源氏の色々に心をつくしたるとし月のらうつもりたるとかこつをみな夢そとおほめく心なるへし

らうなとはしつかにや　秘年月の勞なとは思ひしらさると也

けにこそさためかたき　秘源の身上以下何事も不定なるなり

源
人しれす神のゆるしをまちしまにこゝらつれなき世を過す哉　秘齋院にて年月ゐますほとはいもせのかたらひもたえぬるを只今はよきひまありと思へるを神のゆるしとはよみ給へるなりこゝらつれなきとは源みつからつれなく世にふる心なり　花弄等之義同仍略之

いまは何のいさめにか　何のとは神のいさめの事なり　秘今はかこつけ給ふへきかたもなかるへし時節をえたるとおほえさる物をと也　弄齋院おりゐ給へは神のいさめもありしと也

よにわつらはしき事　弄すまへ行給ひし事なと也
秘すまへ行給ふ事なり其後はすきかましき心もな
き物をとなり　私秘にすきかましき事もなきとい
へるは如何さま〳〵に思ひ給へあつめしとは權は
齋院におはし源はすまのうつろひなとの後久しく
おはつかなくて過ぬる事を宣ふなりおもふ事の心
につもりたる也
いかてかたはしをたに　秘人つてならてきこえはや
の心なり弄同
御よういなと　弄源の用意をほむる也弄同
さるはいといたう過したまへと御位のほとにはあは
さめり　河ねひすくしたるなり　花すくし給ふはね
ひ過し給ふなり御位のほとゝは源氏時に内大臣也
大臣なとはいかにもとしたけたるかよき事なるを
このおとゝねひ過し給ふとはいひなからいまたわ
か〳〵しきかたましり給ふを御位のほとにはあは
ぬといふなり　秘源の宿德なと具して居給へとも
位よりは年わかく見え給へはさふらふ人々のいふ
なり　弄源氏の位よりは年わかくみゆるとなり
聞草子の地なり

なへて世のあはれはかりをとふからにちかひしてと
も神やいさめん　花齋院の御返事は大かたの世のあ
はれを申うけ給へるにつきてあたなるふるまひは
いつきの宮のときちかひし事あれは神はわすれす
いさめ給ふへきと也　秘齋院の御返事なり世の中
のあはれはかりをいひかはし給ふをも神は昔ちか
ひしまゝにゆるし給ふましきとなり堅固にいひは
なち給ふなり　弄なへての世の中をとふとも神や
いさめんと齋院のよみ給へるとなり
あな心うそのよのつみは　秘源の詞なり弄同
そのよのつみはみなしなとの風に　秘しなとの風河
海に見えたり東南の風をいふ　祓の詞也一切の穢
氣を祓除の義也　河そのよのつみとは過つるかた
の事をはしなとの風につけてはらひすてたると也
樹下集「つみとかは科戸の風にまかせたりさすらへ
ぬらん大海原に　東南の風を科戸をの風と云諸の
不祥を吹失ふと云々中臣祓云科戸風乾方よりに吹風也天の八
重雲を吹拂ふか如し　先代舊事本紀云伊弉諾尊曰
我所レ生之國唯有ニ朝霧薰滿一矣乃吹撥之氣化爲レ神
是謂ニ風神一也名級長津彥命次級長戸過イ部神　弄しな

との底は中臣祓の詞因神事用此語
あいきやうもこよなし　源の御さま也
みそきを神はいかゝ　河「戀せしのみそきを神はうけすとか人をわするゝつみふかしとて　秘源の詞也　弄にいつれも此引歌を用へし人を忘るゝは罪ふかしといさめ給心なり　花「戀せしとみたらし川にせしみそき神はうけすもなりにけらしも　今案ありしよの罪はみなしなとのかせにたくへて跡かたなく成侍れと戀せしの御祓は神もうけ給はぬやらんいまもおなし心に侍るよしの給ふ也　私猶みそきを神はうけすとかの歌にて面白きなり
はかなきことをきこゆるもまめやかにはいとかたはらいたし　源のかやうにはかなくのたまふも權のやうたい物ふかくうちとけぬさまなれは實めになりてかたはらいたきやう也といふにや
よつかぬ御ありさまは　物なれす人とほき體なり　秘此齋院は人にかはりて人になひくかたの心こはきよしなり
見たてまつりなやめり　秘さふらふ人々のみたてまつりなやむなり　齋院みつからの給はぬ事を女房達のいかゝと思ふなり
すき〳〵しきやうになりぬるを　源の詞也我身の事をの給ふなり　秘今夜は人の思ふところをおほしてたち給ふ也
よはひのつもりにはおもなくこそ　秘かく外樣むきに有しを面目なきとなり　恨みたる詞なり
よにしらぬやつれを今そとたに　弄源のうらみ給へる詞也秘同　河住吉物語「君か門今そ過行いてゝみよ戀する人のなれるすかたを　花やつれすかたを見おくり給ふへくきこえまほしきと也　秘君か門今そ云々せめて見おくり給へかしとなり　私戀する人のなれるすかたをといふを心にもちてよにしらぬやつれとの給へり今そ過行いてゝみよと申さんやうもなきほと物遠くあひしらひ給ふとうらみ給ふ詞也
所せきまてれいのきこえあへり　源の跡にて人々めてさわくなり又薄雲卷に秋好の御かたより立給へる跡のうつり香なとの事あり仍てれいのといふ歟
大かたのそらもおかしき　秘九月廿日かた也
過にし物のあはれとりかへし　花これはもとの事を

齋院の女とものおもへる事なり　秘齋院にましま
す時申かはし給し事を思ひ出給ふ也　私秘の心は
齋院の過しかた思ひ出給ふといふなり如何たゝむ
かしより源の心ふかく申かよひ給ひし事を齋院の
女房共の思ひいつるなるへし

心やましうてたち出給ひぬるは　秘是は源の御心な
り

とくみかうしまゐらせて　格子をあくるなりまゐら
するとは下すをも上るをもいふなり

朝かほをゝりて參らせ給ふ　弄九月卅日也

けさやかなりし　河あさやか同心歟掲焉歟　弄以下
源氏よりの御文の詞也　秘文の詞也よそ〳〵しく
簾外にさふらひしもおもなきやうなれとわすられ
かたさにもよほされて申侍るとなりされともは御
もてなしの面目なかりつれと又うちおきかたくて
となり

源氏
みしをりの露忘られぬ朝かほのはなのさかりは過や
しぬらん　花式部卿姫君に朝かほ奉りしとはゝき
きの卷にみえたりそれをみしをりの露わすられぬ
とはよみ侍る也河同　秘源のゐなかちにみ奉り給
にてはなし朝かほ奉りし事帚木卷に有し事なりそ
のかみの事をいへるなり下句の心は槿の花のさか
りは程なき物なるをあはれと思ひ給ふへき由也心
はあひみん事をいそくよし也　弄花のさかりは過
やしぬらんとは源氏にあふ事をいそき給ふ心なり
私あふ事をいつかと心もとなく思ふ心尤面白し

年ころのつもりも哀と　さりともとしころの心さし
のほとはおほししりぬらんとかつは思ふといふ文
の詞なるへし

かつはなと　秘かやうに申もかつははゞかゝとおほす
らんとなり　花鳥の義あり如何　私かつはとはと
しころの心さしのほとをさりともおほししるらん
とかつは思ふといふ義然るへき歟花鳥の説はあや
まれる也　花かつは我身のおとろへもおもひしら
れたるといふは朝かほの花をみて思ひしりたる心
なり下の詞におとなひたる御ふみの心はへとはこ
の心をいへり

おとなひたる御ふみの心はへに　艶々たらぬ也　私
歌のさまのすくよかなるゆゑに御かへりをし給ふ
なり

おほつかなからんも　返事なくは源のおほつかなく
おほさんと也

返齋院
秋はてゝ霧のまがきにむすほゝれあるかなきかにうつるあさかほ　秘源の歌のさしむきてのおもてはかりをとりて返事をし給ふなり下句我身ひとつにかきるへからす世間のはかなきさまを此朝かほに比していへるなりうつるはうつろふなりかやうに用たるはまれなり　私云はなのいろはうつりけりないたつらに云々是もうつろふ心歟秋も過る比霧のまがきにあるかなきかにうつろひたる朝かほのさまを推はかり給へる也　私云花のさかり過やしぬらんと源のよみ給ふはうちむきて中々秋も過る比霧のまかきにあるかなきかにうつろひたる朝かほのさまを推はかり給へと也

につかはしき御よそへ　齋院の御かへりの詞也　花朝かほははかなき花也さてにつかはしき御よそへとは齋院の御返事に書給へり露けくとは御思ひのうちなれは露けき袖をうるほすとのよし也　秘今物思ひのうちなるに盛者必衰のとわりも思ひよそへられてあはれなるよし也花のさかりは過やしぬらんとあるも我身のおとろへ行ありさまに似つかはしきとりなし給ふなり　弄さかりは過やしぬらんといふ心にとりなして露けくなとある歟　私さかり過行朝顔は齋院にはよきたとへ物なりそれにつけてもまてとに露けくのみあると也

なにのをかしき　秘いつくにをかしきふしものこる事もなきをあはれにみ給ふ也

青にひのかみのなよひかなる墨つきはしも　花服衣の用る紙の色なり河同　河麗すみつきはしもの字皆てにをはなり

人の御ほとかきさまなとにつくろはれつゝ　弄草子の地なり　秘草子地也　かやうの贈答なと人のほと〳〵にあら〳〵かたりなしてあしき事もある物なりそのをりは興ありと思ふことも後にかたりつたへてさしてなきことのあるなり世間のこれもをしへなり

そのをりはつみなき事もつき〳〵しうまねひなすに　句　此句アシキカ　はほうゆかむこともあめれはこそさかしらにかきまきらはしつゝおほつかなき事もおほかりけり　句　私人のほとかきさまなとにつくろはれてその折はつみ

なき事も今旬をきりて先是は人の位かきさまなとにてさしたる事もなきもよくみなさるゝとなりさてつき／＼しうまねひなすかほうゆかむこともあめれはこそと句をきるへしつきつきしうまねふにもほうゆかむ事あるへしとなり花鳥四方なる物のゆかむ如くにつきなき事にまねひなすにはゆかむ事あるとなり是物語の作者の心也以上花　又さかしらにかきまきらはしておほつかなき事もおほかりけりとはかたりつたふるにほうゆかむ事あれはこそさかしたてにかきまきらはしおきたる物におほつかなき事おほしと也

たちかへり今さらに　源の心中也　私只今は似あはぬ樣に思ひ給へともと也

もてはなれぬ御けしきなから　弄齋院の源氏には一向にはもてはなれす文なとはかはし給はぬとなり

さらかへりて　花さらにもとに立かへりてなり弄同

ひんかしのたいに　花二條院の東の對なり弄同　源のすみ給ふかたなるへし

せんしをむかへつゝ　花齋院の宣旨也　秘源のかたらひ給ふなり

さふらふ人々の　秘齋院にさふらふ女房なり

なひきやすなるなとはあやまちも　源ならぬ人にもなびくへきほとの心かろき女房なとは此源の事をよになくさめてたてまつるとなりあやまちもとはこなたよりもいひかたらん程に思ふといふなり

宮はそのかみたに　秘源も宮も年わかくまします時たにもつれなくて過給ふ物をと也

誰もおひもなかるへき　權も源も御よはひもわかゝらぬにといよ／＼思ひはなれ給ふなり思ひなかるへきとはかやうの事思ひかけ給ふへき事にもあらすと云ふ心歟

はかなき草木につけたる　風流めかぬ文なとには返事なともあるを人のうか／＼しくやとりなすらんとそれをさへくるしくおほすと也

ふりかたくおなしさま　心の中なり　かやうにおなしさまにつれなきから源も心のとまるなり

よの人にかはりめつらしくも　秘かく心ふかき所に源はふかく心をとめ給ふ也

世の中にもりきこえて　花世間には人々よき御あはひなるほとゝ沙汰あるとなり

たいのうへは　秘紫の上也
しはしはさりともさやうならん事もあらはへたてゝは　紫の上は世間のとり沙汰を聞給へともさりともしさやうの事ありとも我にはかくし給はしとしはしは思ひ給ひ（へとイ）しなり明石の事なともよそよりもれぬさきに源のかたはししらせ給へれはとなり
うちつけにめとゝめ　紫上の源のありさまに心をつけてみるなり
御けしきなとも　秘源なり　源の御けしきのあくかれたるさましるくみゆるとなり
まめ〳〵しくおほしなるらんことを　河まことしき心なり　秘眞實なるを我にもきかせ給はさるとなり
つれなくたはふれにいひなし
おなしすちに　秘紫上は式部卿息女なり槿齋院も又宮の御子なるよしなり弄同　花朝顔の齋院は源氏といとこにてましませはおなしすちといへりよそほかならぬ事にてはあれともなり　私花の義不審此物語宮たちの事をおなしすちとあまた所いへり
むかしよりやんことなく　朝顔をは源の執しおほす故紫の心おき給ふなりわれも同し親王の女にてはあれともとおほすなりそれより同しすちと云也
年ころの御もてなし　源の紫上を執し給ふ事年來はならひなしと思ふなり
人におしけたれんは　秘紫上のわか身はおしけたれんと也　年ころならふかたなくならひて俄に人にけたれんは一しほくちをしかるへき心也
かきたえ名殘なきさまにはもてなし給はすとも　是も紫の色々に思ふ心なりかけはなれて名殘なくはあらしと思ふなり
あなつらはしきかたに　紫はをさなくより馴給へは心安くあなつり給はんとなりさて朝かほの齋院をはなれ〳〵しくもてなし給はゝいかゝあらんすらんと思ひみたれ給ふ也
よろしき事こそ　秘なほさりなることとこそなり花同
うちえしなと　そとしたる事こそ打いてゝうらみなともし給へこれは實につらくおほす故みしらぬかほにておはする也
はしちかうなかめかちに　源の御心のあくかるゝさまなり

うちすみしけく　これも心のあくかるゝまゝにまき
らはしなるへし
やくとは御ふみを　河役也　文をかくことをしてと
のやうに源のし給ふ也　秘内すみの隙の役には文
をかく事をし給ふと也　河後拾遺「秋までの哀も
しらす春の野に萩のふる枝をやくとやく哉和泉式部
けに人のことはむなしかるましき　秘紫の上の心な
り人のいふ事は虚言にてはなきよとなり　弄人の
言なり古今にことは夏野のしけくともなとの類也
けしきをたに　秘おほろけにもしらせ給はさるを紫
上のうらみ給ふなり　私此段紫の上の心なり
冬つかたかんわさなともとまりて　河神　日本紀秘
諒闇故に十一月なれとも神事も停廢するなり花同
弄薄雲かくれ給桃園宮なとの儀によてなり
私弄に桃園宮といへるはわろし薄雲の事故に諒闇
也
れいのちかつき參り　槿へおとつれたさ故に女五宮
へまいり給へはちかつきまゐりとはおもしろくか
きなせり
心よわからん人はいかゝと　弄槿の宮の貞心あるよ
しきこえたり
まかり申し　源の紫へいとまてひなり　河辭見日本紀
イトマサセ
女五の宮の　源のまかり申しの詞なり
みもやり給はす　秘紫上なり目も見合せぬなり
わか君をもてあそひ　秘明石の姫君なり紫のさま也
河姫君をもをさなきほとは若君と申來れる也
あやしく御けしきのかはるへきこころかなつみもなし
や　源の詞なり何ことも身におほえたるつみもなし
御けしきのかはるはあやしきと也
しはなれ衣のあまりめなれ　河すまのあまのしほや
き衣なれゆけはうとくのみこそ成まさりけれ　秘
弄引歌同之　私あまりうちそひてはめつらしから
しとてちとゝたえをしけれは又何とおほすにか御
けしきのあしきと心をとり給ふなり是にて內すみ
のしけきはきこえたり
なれゆくこそけにうきことおほかりけれと　秘紫の
詞なり引歌同之　河「なれゆくはうき世なれはやす
まのあまの鹽やきころもまとほなるらん　私しほ
やきころもと云にすかりて歌を引かへて用たりお

もしろき詞なり源のまとはなるはまことになれ行はうき世なるしるしとうらみたるなり
みすてゝ出たまふ道　源の心なり
宮に御せうそこ　源の女五へおはせん事をさきへ案内を啓したる故に出給ふなり弄同
かゝりける事もありける　紫上の心なり
にひたる御そともなれは　花 源氏君諒闇によりてにひ色の直衣をき給へる也　秘 源氏の衣裳をいへり輕服なれはなり　弄 一勘凡裝束事也
みいたして　源の御さまを紫のみいたすなり
まことにかれまさり　秘 紫の心なり此まゝにかれ給はゝとなり眞實にかれ給てはと忍ひかたくおはすなり
御せんなとのしのひやかなる　前駆なともおほからす心あるかきり御供とみえたり此人々に樣體をいひきかせ給ふなり源の御心にもにけなくおほす成へし
内よりほかのありきは　秘 源の詞なり參内より外のありきは物うけれとも式部卿宮かくれ給ては心ほそく住給ふを心もとなきなと意趣をのへていて給ふなりことにたゝ桃園宮といへるは女五の事也式部卿宮は槿齋院の御父桃園の式部卿宮也
いてや御すき心　秘 さふらふ人々のいへるなり　源のことわり給へとも御供の人々御好色のいまたあらたまらていかなるかゝる／＼しき事もやいてこんといふやう也
宮には北おもての人しけきかた　秘 女五宮也　私是は門の事なれは此桃園の宮をさしていふなり　秘 北門は雜人の出入する門なれは人しけきとはいふなり秘同
西なるかこと／＼しき　桃園の宮の西の門なり　秘 西の門より入給ふなり
宮の御かたに　女五宮の御かたへなり
けふしもわたり給はしと　秘 けふは暮はてぬれはかく思ひ給ふなり　弄 夜ふけなとするをの給ふなり
みかともり　河 閽人論語閽音昏又和名閽守門者也　和名美加度毛利
うすつき出きて　薄映出來　花 世俗にうすふるふなといふ心なり　弄 すさましき體なり　弄 さむき體なり
こほ／＼とひきて　花 かきのなる音なり

しやうのいといたうさひてけれは　河行少馬蹄生易蹶　用稀印鎖澁難レ開白氏文集　秘此詩を引く

あはれときてしゅすきのふけふとおほすほとみとせのあなたにもなりにける　青表紙本みそとせのあなたとなり　私案之みそとせ可然なりそのゆゑは源氏今年卅一歳なりわか身昨日今日のわらはへとおもひしにはや卅年さきに成ぬると身を観し給ふなり尤みそとせ可用也天文三九月注之以上秘箋イ　聞三十とせなり源氏卅一歳なり觀念なり是青表紙なり常の本にはみとせとあり　私此義別而如此注之尤仰て可信之他の説不可用之然共他の抄の義與に注加之　河毛詩云三月不レ見況於二三年一或曰自二須磨一歸洛四年歟　花源氏君廿七歳すまより都へ歸給ふとしは卅一歳てとしは五ヶ年なれとみとせのあなたといへるは大かた久しき事には三年といひたれと猶久しき事に三とせのあなたとはいへるなり　弄すまよりかへり給ひしほとなり源氏卅一歳の心可然歟歸京以後四年なり桃園のあれたる所にての心なり三そとせイ本　源氏卅一歳なり其程をとり給ふなりみとせを用へし

木草の色にも心をうつす　花あさかほをもてあそふ心にいへり　私はかなき木草にも心をとむましき事といふ歟

いつのまに蓬か門とむすほゝれ雪ふるさとゝあれしかきねそ　秘世の變するをいへり　河蓬茅爲我廬編蓬爲我門白氏文集　蓬門蓬衡文選　衡門蓬戸桑門同上　皆隠居の心なり

やゝ久しうひこしろひ　門の鎖の事なりひこしろひは引しろふなり

宮の御かたに例の御物かたり　秘女五宮なり

そこはかとうちはしめ　女御の御物かたりのさまなり

御みゝもおとろかす　源は樺上の方へはやくゆきたくおほすゆゑに御耳にもいらぬなり

宮あくひうちし女五宮也　河欠伸曲禮新猿樂記同

いひきとる　聞書女五宮のいひきなり　吼鼻經文なり

よろこひなからたちいて　女五宮のいひきの音すれはうれしくて源のたゝんとし給ふなり

又いとふるめかしき　おくより又老人のうちしはふ

きてことはをかくるなり
かしてけれときこしめしたらん　秘誰ともしらぬ老人の詞なり
院のうへのおはおとゝ　秘まへにみえたり
なのりいつるにそおほし出る　源のやう〳〵と思ひ出給ふなり
源内侍のすけと　是より源の心中に思ひ給ふ事をかけり　河上﨟女房なり典侍と書てはないしのすけと此二字をよむなりかんの君とは内侍のかみの事なり
この宮の御てしにて　河御弟子にてなんとは出家の後は男女共に家人を皆弟子と稱するなり　秘源内侍事なり尼なれはいふ歟
その世の事はみなむかしかたりに　秘源の詞なり院のみかとの御代の事也
はるかに思ひいつるも心ほそきに　源の院の御時を戀しくおもひ出るにその代の人はおほく昔になりて心ほそきにかやうにのこりたるを聞つけてうれしきとなり
おやなしにふせるたひ人　河聖德太子達磨和尚の片岡山に飢臥給へるを御覽する歌也　拾しなてるや片岡山のいひにうゑてふせる旅人あはれおやなし
秘我身は今はおやもなしとの給ふなりいひはなちてもたち給ふへきをかくあへしらひ給へる源の仁恕の心ふかくなさけあるさまみるへし引歌同前弄
同　花源内侍をふはおとゝとの給ふにつきておやなしにはくゝみ給へかしとの給ふは世俗に母のなき子をうはやしなひにする心歟　私此義如何
いとゝ昔（わたるイ）思ひいてつゝ　源内侍のさまなり
すけみたるくちつき思ひやらるゝこわつかひ　秘老者の歯おちて口うちゆかみたるさまにや思ひやらるゝこわつかひとはこゑのていにて口もとのおしはからるゝと也
うちされんとは　秘され事の心なり
いひてしほとになと　河内侍のいふなり　私身をうしといひこしほとに今は又人のうへともなけくへきかな　秘我身の年のよりたるをは忘れていまたわかしと思ふ友の年のよりたるをいへる也人のうへをいふなり源内侍我身の老をはいはすして源のかくおひたち給へると思ふとなり　引歌河海に同　弄一勘

源内侍の年のよりたるを歎たる詞なり花同之　此引歌しひて心かなはす人のうへと思ひし老の身のうへに成ぬるなといふへき所に源内侍若年とみし人にも身の上にいひし老の來る程にみなすてとをいふ歟引歌河海に同し

いましもきたゝる老のやうに　源の心なり　秘今更に來りたる老のやうに源内侍は思ふとなり老はもとよりの老なる物をと也　聞何のかのといふは大かたの事こそあれ源内侍はことのほかの老者といふ人なり

ひきかへこれもあはれなり　或は業平のけちめみせぬと云ふに源氏の性同し百とせに一とせたらぬと同し心歟

このさかりにいとみ給し　河挑　挑戰也　源内侍なとの年盛りにはいかはかりの女御更衣にまし〳〵けるも皆はかなく過給ひしを云へり　院の御代の女御更衣なとのうへを源の心に思ひいて給ふなり

ひたすらなく　うせ給へるなり

はかなき世にさすらへ　河さすらへはよくもなくて世になからへたるとなり

入道の宮の御よはひあさましとのみおほさるゝ　秘薄雲なりいまた四十にもなり給はさるをいへり世は不定なり源内侍かくなからへ侍るよと也

年のほと身のゝこりすくなけに　源内侍の年より末のよはひすくなきを云心はへもあためきなとしたる人の命なからへておこなひなとしてあるは思ひかけぬよと也

物あはれなる御けしきを心ときめき　秘かく世の中の不定をあはれと思ひ給へるすかたなるを源内侍は我身のうへを思ひ給ふ故と昔の心を忘れさるなるへし　弄源氏のあはれみ給ふを源内侍猶むかしの心わすれぬなるへし　私猶秘義の然へし河の義略之

わかやく　源内侍のさま也

返源内侍
としふれとこのちきりこそ忘られねおやのおやとかいひし一こと　花おはおとゝといはれしゆゑに親のおやとはいへりこの契は子に（なぞイ）こと葉をかるなり

河引歌「おやのおやとおもはましかはとひてましわか子のこにはあらぬなるへし　秘おやの親とはおはおとゝと有し事也引歌河に同し　私源の物哀れ

なる體を源内侍の昔を思ひいてたるかと思ひてさ
れたる歌をよみかくるなり
返源 身をかへて後ちもまちみよこの世にておやを忘るゝ
ためしイ ならひありやと　花 身をかへては生をかへてこの世
も子にそへたる詞なり　秘 なくさめての給ふなり
此世にておやをわするゝ子はなきとなり
たのもしき契ぞや　源の詞かくいひてたち給ふなり
後の世も忘れしと歌にあれはかくいへり
にしおもてには　秘 齋院の御かたなり
いとひかはならんもいかならんとてひとまふたまは
おろさす　秘 眞實の貞女なりいとひかはにもし給は
ぬなり　此心つかひおもしろし
目さしいてゝうすらかにつもれる雪の光　おもしろ
き夜のさまなり
ありつる老らくの心けさうもよからぬ物のたとひと
かきゝし　河 清少納言枕草子云すさましき物おうな
のけさうしはすの月夜と云々　花 源内侍のわかや
くにつきていへりしかも又月さしいてゝと上にあ
れはしはすの月よにならへていへるなりよからぬ
物とは十種の冷しき物をいふなり　秘 河海に枕草
子にすさましき物おうなのけさうしはすの月夜と
云々但當時流布の枕草子に此事なし他本に此事あ
る歟但清小納言か父元輔歌に「いさかくてをりお
かしてん冬の月春の花にもおとらさりけりと冬の
月を愛したるなり其女の身としてすさましき物に
いひなさん事はいかゝと覺侍る如何又此卷のおく
にもこの事みえたり篁歌同し具に河海にみえたり
私此事河花兩抄の義につきて枕草子の本に異同あ
りとみえたり河海にたしかに書のせられたれは此
事をのせたる本あるなるへし花鳥も此義に同せら
れたり又元輔か歌に冬の月夜を賞したれはむすめ
のかける物に冷しき物には入へからすと云も其謂
なき歟述作の上におきては同し作者花にむかひて
は紅葉はをよはぬよしをよみ紅葉に對しては花を
も忘るゝと詠す是古來の習なり必父の詠せし事を
さくへきにはありし者哉如何又此卷の末に冷しき
物にいひけんとかけりすさましき物にいひたる事
はいつれも有なるへし
こよひはいとまめやかに　源の實にうらむるなり
ひとてとにくしなとも人つてならて　是より源の詞

なり河後抄「今はたゝ思ひたえなんとはかりを人つてなく
らていふよしもかな　私是はあふ事かなはぬ人に
我身かくもおもひたえんといふ事を直にいひたき
といふ儀なり只今源の心はにくしとの一ことをな
りとも人つてならて仰られはそれを思ひたゆるこ
とのたよりにせんとおも立て實らしくいらへ給ふ
とたゝ御詞自然におもしろし
昔われも人も　秘朝顔の心中なり
故宮なとの心よせ　秘故式部卿宮源にもなとおほし
ゝなり
世の末はさたすき　秘さかり過たる心なり弄同
つきなきほと　河無月也定家卿説
あさましうつらしと　秘源の心なり
さしはなちてなとはあらぬ　秘しかもそむかはいか
さまにし給ふ也
心やましきや　かけはれなれぬさまにし給ふからい
よ〳〵わりなき心のそふを心やましといふなり
夜もいたうふけ行に風のけはひはけしくてまことに
秘誠の字おもしろし
つれなさを昔にこりぬ心こそ人のつらさにそへてつ
らけれ　つれなきは昔からの事なりそれにこりぬわ
か心か人のつらさにそへてつらしと也面白し
心つからのと　心日本紀　弄引歌不叶　河伊行釋か
けていつる涙の川のせをはやみ心つからや又も
なかれん　古「春風は花のあたりをよきてふけ心
つからやうつろふとみん　中務「戀しきも心つから
のわさなれはおき所なくもてそわつらふ　秘河海
引歌あまた侍れとさして不叶歟只我身の心つから
と云る成へし河海三首の内には中務の歌可用之歟
けにかたはらいたし　秘さふらふ人々の心也　おま
りつれなくおほするなと申體なり
返槿齋院あらためて何かはみえん人のうへにかゝりときゝし
心はかりを　花人の上にきくたに昔と今と心のかは
るはほいなく思ひ侍るをまして我身に成りては何
かはあらたむへきとよみ給へる也　弄齋院の貞心
をなにかはあらたむへき人の心のさためなきやう
にとみえしとよみ給ふ也　秘齋院の貞なる心をを
り〳〵はあらためてはいかにして用ふへきそとな
り人のうへにてさやうにあらたむるときゝしたに
もあるましき事に思ひしにまして我身にはいかゝ

あらため侍るへきとなり結句心はかりをとある本ありこれ可然歟末の詞にむかしにかはることはならはすと侍り心かはりとあれは詞かさなりていかかと也

むかしにかはる事は　秘我は昔にかはる事はなきとなり

いとまめやかにえん　源のうらみていへる也

いとかく世のためし　源の詞なり

いさら川　秘もらし給ふなとなり　河「犬かみのとこの山なるいさや川いさとこたへてわかなもらすな「かりそめにゆきあふみなるいさや川いさとてたへて我名もらすな　私諸本いさら川とありいさや川同所歟如何或抄御説引歌をもいさら川とあそはすと云々河海には物語の詞にもいさや川とありかりそめに行あふみなるいさら川如此かきたる本もあり　兎角我名もらすなといふ事と心うへし

なれ〳〵しやとて　源のわか名もらすなとの給ふはことありかましけれはかく宣ふにや

せちにうちさゝめきかたらひ　是は宣旨なとにかたらひ給ふ事なり

何事にかあらん　秘さふらふ人々にも宣ふなり　私宣旨なとにさゝめきかたらひ給へと心しらぬ人の何事にかあらんとおもふ心歟

人々もあなかたしけな　さふらふ人々のいふ詞なりあまりなる御あひしらひとなり

かるらかにおしたちて　秘源の心人の心をやふりておしたる事なとはあるましきとさふらふ人々のいふなり弄同

けに人のほとのおかしきにも　さふらふ人々のいふをきゝ給ひて權のおはす心中なり源の御ありさまのたくひなく御心さしのほとをもみしりたれともおはす心のありてつれなきなりその心次の詞にみえたり是まことの貞心なるへし

おしなへてのよの人のめてきこゆらん　秘此あはれ意イをみしりたるさまにもてなさはよのつねの人のつらに思ひなし給へきなりさやうにてはかひなかるへしとふかく齋院はおもひ給ふなり　弄おしなへて源氏に人のめて奉ることくなひき給ふとみえはかひもなしと齋院の思ひ給へるなり

かつはかる〳〵しく　弄心のほとをしも源のみ給は

んかたをはつかしとなり　さやうにならはかろかろしきと源のおほしおとしぬへしとなり
なつかしからんなさけもいとあひなし　河無愛也無敢也　隨所可用之
よその御かへりなとは　御ふみの返事なとなり
人つての御いらへはしたなからて　こゝへ源のおはする時も宣旨なとして御かへりをもの給ふなり
としころしつみつるつみ　花齋院にては御神事かちにて御おこなひの事もなかりしなり　秘齋院にては經佛の結緣もなきをいへりそなたにむきてねをのみそなくなとよみ給ひし此心也　私「おもへともいむとていはね事なれはそなたにむきてねをのみそなく選子内親王の齋院にてよみ給へるとなり　弄齋院にて法事し給はぬ程の事なり尼に成給はんの心はへなり
御おこなひをとは　秘出家し給ふへきなとの心かまへもあれと人のいかゝとりなさんと思ひわつらひ給ふなり
中々いまめかしき　秘齋院の心つかひやさしくありかたき心なり　今尼なとに成り給はゝ源のあなかちにしたひ給ふゆゑと人の推量すへきとの遠慮なり
さふらふ人にもうちとけ給はす　源なとにたのまれていかやうなる事かあらんとさふらふ女房にも心をおき給ふとなり
御はらからのきんたちあまた　花齋院の御はらからあまたあるやうにみえたれと系圖にはみえさる事なりさもこそおはりつらめと思ひやるへきなり物語に此類おほし　弄おとりはらにてむつひ給はぬなるへし系圖にみえぬともおはしけるなるへし
系圖にみえすさせる人もなきなるへし
ひとつ御はらならねは　秘別腹なれは也
めてたき人の　秘源をさしていへり
ひとつ心とみゆ　花齋院の女房達は源氏君とおなし心になるをいふなり　秘同心に源に心をよせたるなり弄同
おとゝはあなかちに　花是より源氏君の御心の中をかきあらはしたるなり
まけてやみなんも　弄源の心中帚木巻にひきたかへ心つくしなる事をなと有しかことし　秘源の心帚

本卷に有しかことしまけてはやまし又人からをお
　もひすてしと也
けにはた人の御ありさまよのおほえてとにあらまほ
しく物をふかくおほしゝり　是は槿の齋院の御あり
　さまを源のおほす心なるへし
よの人のとあることかゝるけちめもきゝあつめ給て
むかしよりもあまたへまさりて　河結目　揭目也訓
　イチシルシ　花あまた經まさりて　秘源氏人の心
を經歷して事のさま〳〵心持まさり給ふなり弄同
　聞世をふるにしたかひて何事にも功の入たるなり
いまさらのあたけも　河化日本紀
むなしからんは　朝顔にあはすはと也
女君はたはふれにくゝ　紫上の心なり　河古ヿありぬ
やとてゝろみかてらあひみねはたはふれにくきま
　てそ戀しき
忍ひ給へといかゝうちこほるゝ　秘紫上の體なり
あやしくれいならぬ　秘源のあやしみ給ふなり
宮うせ給て後　秘源の詞なり薄雲の事なり弄同花同
　私内にさふらひ給ふ事しけきことはりをのへ給ふ
なり

おとなひ給へと　源の紫をさして宣ふなり
まろかれたる御ひたひかみ　花涙に御くしのまろか
　れたる也秘同
いよ〳〵そむきて　紫のさま也
いといたくわかひ給へるは　又源の詞也
たれかならはしきこえたるそとて　秘われてそかく
　そたてたてまつりたる物をとなり
つねなき世にかくまて　定なき世なりよろつの事を
觀したるさまなり又紫上をたくひなくみ給ふゆゑ
　心おかれしとおほすさまなるへし
齋院にはかなしと　秘こゝにて源のいひ出したまふ
　なり
おのつからみ給ひてん　さなき事とは行末に自然に
　みえんそと也
昔よりこよなう　秘齋院の御事也
かしこもつれ〳〵に　秘齋院なり
まめ〳〵しきさま　實にわかみたれんと思ふ心にて
　はなしとなり
かくなんあるとしも　弄紫うへにはかなきことをし
　もかたるへきかはと源のの給ふなり　聞實々しき

事にもあらぬをいとかく事々しくは案へかたり申
さんするそとなり明石の上なとやうの實事ある事
は源のかたよりすゝみしらせ給ふ也
松と竹とのけちめおかしう　河貞松彰於歲寒といふ
心なり松竹同事なり十八公榮霜後露一千年色雪中
深　秘ふかくもなき雪のさまなり　闡松と竹と雪
のつもり樣各別也
時につけても人の心をうつすめる　拾「春秋に思ひみ
たれてわきかぬる時につけつゝうつる心は貫之
冬のよのすめる月に　河拾「いさかくてをりあかし
てん冬の月春の花にもおとらさりけり元輔　秘お
もしろき體也端にくはしくしるせり「つもりそふ
老さなるともいかてかは雪のうへなる月をみさら
ん家隆のよめるもかやうの心なるへし
すさましきためしにいひおきけん　河清少納言枕草
子十列冷物　十二月之月夜　同扇同蔘水　老女假
粧　女醉　胡爪老　法師醉舞　無酒神樂　勅使被打
閑競馬　崑崙八仙畫舞云々　小野篁日記しはすの
もち月の比月いとあかきに物語しけるを人みてあ
なすさまししはすの月夜にもあるかなといひけれ

は「春をまつ冬のかきりと思ふにはかの月しもそ
あはれなりける　花清少納言と紫式部とは同時の
人にていとみあらそふ心も有しにやしはすの月夜
清少納言は冷しき物といひしを式部は色なき物の
身にしむといへり心々のかはれるにや　清少納言
か枕草子にはしはすの月夜といふ詞なし異本なと
にかける歟如何小野篁日記にありと云義あり　私
勘枕草子のすさましき物のうちに無之以上弄
みすまきあけさせ給ふ　河遺愛寺鐘欹レ枕聽香爐峯
雪撥レ簾看樂天　一條院雪のあしたに香爐峯の雪い
かゝあらんと仰られけるに清少納言御前に候ける
か御返事をは申さて御簾をまきあけたると申つた
へたり
雪まろかし　河雪圍　應和三年閏十二月廿日令三右
衛門志飛鳥部常則堆レ雪作二蓬萊山於女房小庭一今
日功畢賜二常則及畫所雜色役者二人祿一有レ差
さま〳〵のあてめ　弄一勘わらはゝかさみをき侍れ
とそれをはぬきてあてめをきたるにや　秘うへに
かさみをきるへきをよるなるによりて畧したるへ
し

おひしたけなきとのゐすかた　秘袴のこしなるへし
弄閒　今の腰帯ははかまの帯の事にや一勘とのゐすかたは宿直のすかた也　花わらはの御とのゐせしままのすかたなり
ちひさきはわらはけて　河海の説略レ之　花童氣なりをさなけなると同し榮花物語にも此詞あり　秘をさなきさまなり童氣なりをさなき心に興したるなり
あふきなともおとして　河女房も式には冬をかきらす用之檜扇なり　秘女の冬も扇を用之義如何云々さし扇は冬も用之上古の式歟
うちとけかほ　秘女の扇をもつ事は面をかくさんがためなりされは扇なともおとしてうちとけたるそなり
ふくつけはれ（ろイ）と　秘力をいれて大きにまろかさんとするなり　弄力を入たる樣なり　貪生（フクツケヒト）遊仙窟　私貪の字をフクツケと訓すと見えたり貪はムサホルなり貪欲の方なり大きに丸かさんと欲心をおこすなり
かたへの人は　傍輩をかたへの人といふ也

心もとなけに　此雪まろかしにくはゝりたく思ふなり
一とせ中宮の御まへに雪の山　花此中宮は薄雲の女院なりよにふりたるは雪の山はむかしよりそのあとたひかさなるをいふなり又花山院後涼殿の前の南の壷に雪山つくられて作文ありし事は小右記にみえたり寛和元年正月十日の事なり　河枕草子云しはすの十日あまりのほと雪いみしうふりたるを御使に式部亟忠隆まゐりたれはしとねいたして物なといふに雪の山つくらせ給はぬ所こそなけれ御前の壷にもつくらせ給へり中宮にも弘徽殿の御前につくらせたり京極殿にもつくらせ給へりといへは「こゝにのみめつらしとみる雪の山所々にふりにけるかな　此雪の山長徳二年の後長保二年の前の事なり此物語寛弘の事なれは一とせと云此事歟又雪山には藏人所も沓をはきて山をつく本所の雪をになひてはこふ也　弄薄雲の御前につくられたる事有しとなり　源の紫上へかたり給ふなり中宮は薄雲なり雪山の事河海花鳥にみえたり伏見後伏見永仁の比まては此事あり諸家の記録にもみえた

り藏人頭奉行として沙汰せしなり秘同
はかなき事を　秘はかなき事なれとはなやかなる人にてまし〳〵しと也
うしろやすきものには　源氏をこゝろやすき事に薄雲のおほしたりしなとの給ふなり薄雲の里亭より參內の時も源の供奉なと有し事もあり紅葉賀の卷にや
もていてゝらう〳〵しき事も　河良々　亮々　日本紀りやう〳〵しきと云詞せいのちひさきなとをりやう〳〵しきと云非其義稱美の詞なり　秘とりたててはへ〳〵しき所はなかりしかともとなり
はかなき事をもし給ひしはや　はや弄同
やはらかにおひれたる　いつれも薄雲の御さまなり
君こそはさいへと紫のゆかり　秘紫上の御ため薄雲はをはなりさて紫のゆかりとはいへり　花紫上は女院の御めひなれはゆかりこよなからずとなり
すこしわつらはしき　弄物えんしなり
かと〳〵しさの　是は薄雲に紫上ゆかりこよなからす似たる所あるとなりわつらはしきけのかと〳〵しきとは唯今槿の事なと物えんしのあるをたはふれの給ふ詞なるへしかと〳〵しさのすゝむとはさし過たる心なりかと〳〵しさの過たるとなり
前齋院の御心はへ　秘是より槿齋院の事をの給ふなり　是は同し心ふかさなから又薄雲なとゝはかはりたるとなり
たゝこのひとつこゝろ　今の世のこゝろある人はこれひとりとなり物なといひかはせんとこなたも心つかひせらるゝほとなる人となり
ないしのかみこそはらう〳〵しく　秘紫上詞也
あさはかなるすちもてはなれ　花紫上の詞なり內侍こそあさはかなるすちなともてはなれたる人の御心を何とやらん聞し事ありしと心もとなくの給ふなり　かろ〳〵しきかたなとは有ましき人と思ふとなり
あやしくもありける事とも　秘源と名をとり給ゆゑゆかしきとなり
さかし　秘源の詞なり弄に紫上の詞とありあやまれり　花是は源氏の返答なりかんの君に名を立し事をかたり給ふなり
かたちよき女の　朧月の事なり

さも思ふにはいとほしく　弄源氏の詞也朧月夜の事
也秘我も後悔ありまして内侍のかみも悔給成へし
うちあたけ過たる人の年つもり行まゝに　源の好色
になかりしと思ふさへかやうの後悔ありましてた
てゝ好色なる人はいかにかやうの事おほからんと
人のうへをの給ふなり
人よりはこよなきしつけさと　源の好色をたてさり
しとの給ふ詞也
山さとの人こそ　秘これより明石をほめての給ふな
り
人よりことなるへき　秘明石上受領のむすめたる事
をいへり弄同　花明石上の事を源のかたり給ふ也
おもひあかれる様をもみけちとは明石上は人にも
おさるましき人なれは思ひあかれるさまを源氏の
みけつとの給へるなり　聞族姓よりは思ひあかり
たるなりそれもあまりさし過たるやうにはなく可
然人なれとも受領の女ゆゑ源の思ひあらせすして
おくとなり秘弄の義叶へり然るへし
いふかひなきゝはの人はまたみす　秘源のあひ給ふ
人の内にさのみいふかひなききはの人はなけれと

そのうち然るへきと思ふ人のまれなるとなり
ひむかしの院に　秘花散里なり
御はたさらに（さはたさらにイ）　秘此人の様なるはありかたきとなり
さるかたにつけての心はせひとにとりつゝみ　さる
やうなる人もある物なるかみそめしよりおぼすや
うに定心につゝましけに思ひて過る事はえあるま
しき事とほむるなり
いまはたかたみに　秘此人のやうなるは有かたき、
なり　いまは況や何事をそむく事もあらんとなり
（紫上）氷とちいはまの水は行なやみそらすむ月の（すイ）かけそな
かるゝ　秘當座の體はかりにてしかもなやみもなく
すくれたる歌なり
かんさしおもやう　紫の髮のかゝり面也以下也
戀きこゆる人の　秘薄雲なり花同弄同
いさゝかわくる心もとりかへしつへし　三本とりか
へしつへしと有花鳥にはとりかさねつへしとあり
花あなたこなたへ源氏君のわけ給ふ心もなきとな
り　もとより紫上を思ひ給ふに又かさねて御心を
しめ給ふなり又の義わくる心を又かへして思ひ給
ふなり弄同之　私權なとへ此程あこかれし心もと

りかへさまほしく後悔なると也
源氏 かきつめてむかしこひしき雪もよにあはれをそふる
をしのうきねか　花かきつめてはかきあつめてなり
昔戀しきは薄雲の女院の御事也上にいへる事なり
雪もよには雪の夜なり雨もよには雨の夜なり一説
雪もよには雪もよほしといふ詞なり新古今に草も
木もふりまかへたる雪もよにといふ歌は催心にか
なへるにや鴛のうきねは鴛鴦の契也對の御方と物
語し給ふ夜の事なり　弄よにの二字助語にや云々
但歌にすてし心有やうに聞ゆる詞なり可思推と云
々又夜又催と云々　秘かきあつめてなり雪も夜に
花鳥にくはし落句紫上とむつましき事をいへり
入給ひても　寢所に入給ふなり
宮の御事を　秘薄雲也
もらさしと　秘夢のうちなり薄雲の事を紫にかたり
給ひし事也
くるしきめを　此事後世の罪障にても有へし
女君のこはなと　源のおそはるゝやうにし給ふを紫
のこはなとの給ふに源の少しおとろき給ふなり
涙をなかれ　夢中の涙なりいみしく口をしくとは夢
のはやくさむるよとをしむ心なり
いまもいみしうぬらしそへ　さめても涙の出ると也
うちもみしろかて　源氏の事也　秘紫上のしつまり
たるさま用意あるなり又源氏の事なり云々然は女
君いかなる事にかとおほすにとよみきりてうちも
みしろかてふし給へりと心うへし
源氏 とけてねぬねさめさひしきふゆのよにむすほゝれつ
るゆめのみしかさ　秘今いさゝか物をも申かはすへ
き物をとなりとけてねぬは寒夜の體なり
さとはなくて　薄雲の御ためとはなくてなり
所々に御す經　花故宮の御ために御誦經せさせ給ふ
也　河延暦元年十二月壬子勅太上天皇國忌御齋宮
今月廿[illegible]日宜令天下諸國國分寺僧尼奉爲誦經焉 續
日本紀
くるしきめみせ給ふとあるも　源の密通の事有ゆゑ
となり
おてなひをし給ひ　薄雲の事なり
この世のにこりを　河伊行釋法華經に五濁惡世劫濁
見煩惱衆生命濁（五濁は劫濁見濁煩惱濁衆生濁命濁）
ふかくおほしたとるに　源の心中に色々分別也

しるへなき世かいにおはすらんをとふらひきこえに
まうて〻　河伊弉冉尊火神を生て焼てころされて黄泉
國へいます是を伊弉諾尊尋ておはしたる心也　秘
一本しる人なきと云々
人とかゆきこえつへし　源の薄雲の佛事なとあなか
ちにし給は〻人不審すへきとなり
内にも御心のおに〻　秘主上僧都のかたり申せし後
は源をかたしけなくし給ふゆゑにふかくつゝみ給
ふなり　弄主上よゐの僧奏し申つるによてよろつ
に源氏をかたしけなくし給ひし程にいよ〳〵薄雲
の事をしらせたてまつらしとなり
あみたほとけを心にかけて念し奉り給同し蓮にとて
そは　河一心不亂阿彌陀經　一たひもなむあみたふつ
といふ人の蓮のうへにのほらぬはなし　秘各留半
坐乘花葉の心なり　一々池中華蘂滿花華惣是往生
人各留半座乘華葉待我閻浮同行人善導和尚五會法事讃也
源氏
なき人をしたふ心にまかせてもかけみぬ水のせにや
まとはん　河みつせ川を水にそへたるなり三途河事
なり伊行本にはかけみぬ水のせにや事とはんとあ
り不審　秘いかやうにしたひて行侍るとも其生處
はしりかたきとなりみつせ川をよせたり　弄三瀬
川によせてよみ給ふ水の瀬は三瀬川によするとあ
り
今おほすそうかりけるとそ　瀬にやまとはんとおほ
すそうかりけるとなり別の義有へからす

岷江入楚第廿一　乙女

卅二歲　諒闇　任太政大臣
四月一日　更衣服凶服事
權齋院除服事　源氏訪給事
大殿若君御元服之事夕霧大將是也
六位還殿上事
冠者君付字事　於東院有此事
入學事
寮試事
文人擬上事
梅壺女御立后事
源氏立后連續事
源氏任太政大臣事
大將任內大臣事
系圖云母ハ按察大納言故北方
冠者君與內大臣四君姬君比々奈遊事雲居雁是也
內大臣殿依姬君事　怨大宮給事
姬君奉渡內大臣給事　姬君十四と云々
五節事
惟光良淸女爲五節事
冠者君聽直衣參內事
源氏遣文於筑紫五節事
冠者君遣文於惟光女五節事
花散里君爲冠者君之御後見事
卅三歲　太政大臣
正月太政大臣覽青馬事　忠仁公例と云々
二月朱雀院行幸之事　三月女院爲御忌月故也
於御前文章生試事
於柏殿太后御對面事
大學君補進士事
同秋除目任侍從事
六條院造作事六條京極中宮之御故宮邊四町也云々
卅四歲
春式部卿宮五十御賀之事
八月六條院造畢御方々移徙事
花散里艮町紫上巽町中宮坤町
九月秋好中宮被奉紅葉於紫上事
紫上御返事付五葉松事
十月明石上渡六條院事　乾町

乙女　以詞并歌爲卷名

源の歌に「をとめてもかみさひぬらしあまつそて
ふるき世の友よはひへぬれは　此歌の前の詞にむ
かし御めとまり給ひしをとめのすかたをおほしい
てゝ今此詞をとれり　河凡此卷五節舞姫事を爲宗
仍有此名　秘卷名以詞并歌號之五節之事ある故に
號すとみえたり源氏卅一の四月より卅四の十月ま
ての事みえたり花同　弄源氏卅二より四に及ふ也
三十四歲の秋まて也雲井の雁年十四より也
私云十月まてといへるよし
としかはりて宮の御はても過ぬれは　河薄雲女院一
周忌也諒闇色改たる也　花去年三月薄雲かくれ給
ふとしの三月周忌にあたれるなり弄同　秘薄雲諒
闇三月まで也只今諒闇四月の衣かへなり
世中色あらたまれる衣かへのほと　河除服の事なり
花除服とは服をぬき侍るをいふなり　花天下皆諒
闇の服をあらたむる也則又四月更衣の比にあひ當
るとなり
ましてまつりの比は　賀茂祭也
大かたの空のけしきも　秘四月天氣和叉(且イ)清といへり

花四月は清和の天氣といふなり　弄諒闇の後世
中の人の心も心地よき折也
前齋院(センサイキン)はつれ〳〵と　今年はおりゐ給ふをいへり
弄祭の比齋院にての事なとおほしめしいつるにい
つしかつれ〳〵なる心なり
御まへなるかつらのした風　桃園の庭にある桂なり
秘齋院の御まへなり人々祭御禊なとを思ひ出つる
と也弄同
大殿(オホトノ)より御そきの日は　齋院御禊の日なり　秘賀茂
御禊日也祭の三日前也弄同　閑午日にありと云々
けふは　秘文の詞是より歌へかゝりたる詞なり　花
こそのけふまてはとあり註に源氏の御文の詞なり
下の歌にかゝりたる詞也こその御禊の日まては齋
院の御服にならせ給ふへしともおもひよらさりし
との心となり　私三本只けふはさ計あり此義を用
へしいつれにても歌へつゝけてみるへき歟
かけきやは川せの浪も立かへり君はみそきのふちの
やつれを　秘思ひかけさる事と也去年までは齋院な
りしを思ひかけすおりゐ給ふ事となり君かみそき
とは除服の日の秡の事也いつかゝる齋院おりさせ

給うて除服の御そきし給はむとは思はさりしと也
藤を淵によせたり此物語にあまた所にあり　花か
けきやはとは思ひかけきやはといふ詞なりふちの
やつれは藤衣をいふそれを川の淵によそへていへ
り藤を河の淵にいふことは此物語歌にもふちに身
をなけつへしやとこの春は花のあたりを立さらて
見よとありきみかみそきは齋院の御除服のことな
り　弄君かみそきとは除服の日の祓の事也いつし
か齋院おりさせ給て除服の御そきし給はんと思ひ
かけさりしと也或又說此歌除服の事とはみえす去
年まては祭のみそきにあひ給ひしをことしは引か
へてさやうにもなきをかくのことくあるへきとは
かねておほしめしきやといふ心をかけきやはとあ
そはす也今日除服とはみえすまことにいかにのと
かにけふはおほさるらんとあるも除服とはみえす
云々　私此說僻案也尤はしめの花鳥以下の義を用
ゆへし前の義も今日除服のみそきし給ふと云には
あらす去年の祭まては御禊にあひ給ひしか今年は
藤のやつれをあらため給ひみそきをし給はん事よ
と御禊のみそきに思ひよせたるはかり也

むらさきのかみのたてふみ　花紫の紙にかきたるは
藤につくる故也藤は又藤衣にたとへたる也弄同
秘ふちの花につけたるは藤衣にえんあり
をりのあはれなれは　弄大かたは源の文なとをもむ
つかしく覺え給ふにこれはあはれなる事ともなれ
は御返あるなり　秘何事も其時節に感ある事也
返權齋院
ふちころもきしは昨日と思ふまにけふはみそきのせ
にかはる世を　河古今飛鳥川淵にもあらぬわか宿も
せにかはり行物にそありける　花藤のやつれも昨
日と思ひたれははや一めくりに成て除服し給ふ心
也せにかはる世は古今の歌飛鳥川ふち云々と侍る
せにかはり行のことはをとれり
秘除服の御そきなり月日のはやくうつるとなり飛
鳥川ふちにもの心也　或弄花云此の返歌は除服と
みえたれとイ
云はされと是は年月程もうつりて去年の別のはや
うつりかはりてみそきの折になりたるらんといふ
へくや去年の祭まては齋院にてましましたりその
後父宮にはなれ給へは此みそきは御禊のみそきな
るへしとあり　私此弄花の義愚本に不見河に註し
のする所也花鳥にははや一めくりに成て除服のよ

しかれと式部卿宮かくれ給へるは四月より後の事なるへし只藤衣なときて昨日けふのまに又ほとなくみそきの比に成ぬるとよみ給へるにや

はかなくとはかり　秘歌の中にもはかなき事を詞にあらはさす此てにはにて歌を足す也　弄同し此ことはことにめてたしと云々

御めとゝめて源氏也

御ふくなほしのほと　秘父宮の御服をぬき給へは吉服を調して源より参らせ給ふ也

院はみくるしき事に　秘院とは齋院なり院とはかりかけるめつらしきなり　源のねむころかり給ふを齋院はくるしくおほすとなり

けしきはめる御ふみ　風流めきたる御ふみなとのそひたらはかへし給ひてもくるしからねとさはなきとなり

としころもおほやけさまにて　秘齋院にまし〳〵しときもかやうの事はつねの事なれはと宣旨の申也

女五の宮の御かたにも　女五宮へも同しやうにとふらひ給ふを悦給ひて源をほめ給ふこと葉也（句を切）

おとなひてとふらひ給ふことかたちのいと　源をさまし〳〵ほめ給ふなり

わかき人々はわらひ　秘齋院への御心さしにて侍る物をとて人々わらふなり　私源の年おとなしくおはするをちてなとのやうにおとなひなとの給へるさま又御をとつれを悦ひ給ふ事なとをわらふ也

こなたにもたいめんし　秘女五宮齋院に御對面のときはかく教訓し給ふなり　女五宮齋院の御かたにて源氏の事をの給ふなり

なにかいまはしめたる　式部卿宮の素意も齋院にてまします事は本意共思ひ給はさりしと也私源のいまはしめていひより給ふことにもあらすと云にや

故宮もすちことになり給うて　秘源をよそ人に見なしたるをはくちをしき事に思ひ給ふなり　弄齋院にゐ給ひし事をのたまひし也　花すちことにとは他家になりて系圖なとにも別に有つる事なり　え見給はぬとは源氏を我むこと見給はぬとの心なり　私系圖の沙汰あやまれり

おもひたちし事を　式部卿宮は源をむこにとらんと思ひたち給ひしなり

あなかちにもてはなれ　齋院のつゐに同心なかりし

となり
くやしけにおほしたり　式部卿宮後悔ありしと女宮
の権への給ふなり
されと故大殿の姫君　秘葵上也
三宮の思ひ給はん　秘葵上の母宮女五宮のあね也
式部卿宮はさやうにのたまひつれと三宮の心をは
はかりて我はてとはをもくはへさりしとなり
えさらぬすちにてものせられし人　秘葵上也花同
さやうにてふはせましも　源にあひ給ひても似合ぬ
事にてはなきとなり
さえ（らイ）かへりてかく　河更に昔に立かへりて也　秘斎
院おり給うて又源氏ののたまひまつはし給事也弄
　同此詞朝かほの巻にあり
心つきなしと　秘斎院の御心なり
故宮にもしか心こわさ　斎院の御詞也又宮もさやう
におほしたら（たイ）は今さらその心をあらためしとなり
はつかしけなる　斎院の心ふかくはつかしけにの給
ひなす故に女五宮のかさねてもえのたまはぬなり
おもむけ給はす　えいひおりたまはぬなりそのうへ
えおもむかせぬとなり

宮人も　さふらふ人々なり
いとうしろめたくのみ　斎院の御心なり　宮人とも
源へみな心よせなれはいかなる事かしいてんと斎
　院のあやうくおほす心なり
かの御みつからは　秘源なり　弄源の心なり
わか心をつくし　花是より源の心におもひ給ふ事也
御心やふりきてえんなとはおほさゝるへし　秘是ま
て斎院の御事を云り　斎院の御心をやふりておし
たちたる事なとはせしと源はおほすなり是も権の
心の物ふかくはつかしき所おはする故に源もかく
思ひ給ふなるへしそれを権はしり給はて宮人なと
の引いれてかやうの事もありてはと用意し給ふな
りおほさゝるへしとは源のこゝろを察してかける
なり
大殿はらのわか君　秘是より夕霧の事なり
御けんふくの事　秘夕霧十二歳也　弄同　河夕霧十
　二歳歟十二元服事桐壺巻に註す
大宮のいとゆかしけに　秘夕霧の祖母なり
かの殿にて　秘三條宮也
右大將殿をはしめ　秘二條攝政息也弄同　後に致仕

大臣はゝきゝの巻頭中將也夕霧の伯父なり
御おちの殿はらみなかんたちめ　右大將の外藤大納言寿宮の大夫なと系圖あり
四位になしてんとおほしやかて四位に云々（イ本弄花にあり）　花親王の子は元服の後やかて從四位下に叙す源氏君よのつねの源氏の同列に非す故に親王の子に准して四位に叙し給はむとおほしめしよりたれとも猶斟酌あるよしなり　秘　世の源氏は直に從四位下に叙するなり夕霧は二世の源氏なれは五位に叙すへき人なれとも夕霧は世のおほえもあるによりて定て四位に成給ふへきと世間の人も思ひたるなり　孫王直叙四位事上古定事也　是續日本紀等不違具錄　河
還叙令曰凡蔭皇親者親王子從四位下（諸王者不限有品無品皆是一部内令）
（諸親王不注品階者皆放此例）
源興基（諱正尹人康親王男）貞觀八年正月七日叙從四位下（無位）
源[illegible]雅（兵部卿克明親王男）承平四年正月七日叙從四位下（同無位）
親王子直叙四位雖爲流例一世源氏大臣息大略叙爵歟源叶（信大臣子）　静（光大臣子）伊渉（兼明親王之子）　忠賢（高明大臣之子）　皆是叙從五位下者也六條院于時大臣也如何因茲四位になしてんかしとおもへとも猶有斟酌也　或御説四位になすへきを斟酌にて六位になし給ふ是は大學の道に入らせんため也平人は七位なとより六位へのほりて大學の道に入を是は位をさかりて六位にて大學の道に入奉り給ふ源の御心殊勝云々元服後叙四位例承和良親王加冠即叙四品同二年正通王加冠即叙四品源融朝臣於內裏加冠叙正四位下
きびはなる　夕霧の事なり　稚（キヒ）（日本紀）　いときなき也
わか心にまかせたる世にて　源の心つかひ尤政道にかなへり
しかゆくりなからんも　秘　不意也思ひやりもなくとなり
あさきにて殿上にかへり給ふ　河　淺黃（六位綠袍）　童殿上以後還昇也　秘　あさきは六位の袍を云り殿上にかへるとは夕霧は童殿上とて童體にて昇殿したる人なれはやかてかへりのほり給ふを云り弄同　一世の源氏の子は其蔭從五位下なれはあけの袍を着して昇殿（進イ）すへきに冠者の君のあさきを着する事二の心あり五位の蔭たりといへとも未た叙爵せさる時は無位也延喜縫殿寮式に無位は淺黃とみえたり故に淺黃にて殿上にかへるとはいへり無位は黃袍とい

ふ一説あり桐壺の巻にしるし侍りぬ一説云六位のみどりの袍をあさきといへり深緑の色は藍と苅安とにて染たりあさきの色にかよひたる故也これによりて三條上のめのとの詞に六位すくせといひ夕霧の歌にはあさみどりとやいひしほるへきとあれは六位の袍にて還昇せりといふへきにや

御たいめむありて　大宮源に對面し給ひてなり

ての事きこえ給ふに　六位にてあさきを着給ふは心ゆかぬよし大宮の丶給ふなり

おひつかはすましう　河加階を高くなして人に追つかすましき義也親行說也　或說云老つくはいまよりおとな〳〵しき心なり以上　秘昇進に人の追つきかたき心也弄閑　私只今かうあなかちにしてもまたきに追付すましうと也是より源の詞なり

大かくの道にしはしならはさむの　花西三條右大臣良相公閑院左大臣冬嗣公の子也大臣息大學の道をならふ此等の例也くはしく河海にみえたり　河尙書大傳曰古帝王必立大學小學使公卿之大子大夫之元子士之適子十有三年始入小學見小節焉踐小義焉年十有五入大學見大節焉踐大義焉入小學知父子之道長幼之序入大學知君臣之義上下之位　實錄曰大臣在童稚局量開明及於弱冠始學大學稚有才辨論語曰三年學不至於穀不可得而已　貞觀格云大學者尙才之處養賢之地也天下之俊咸來海內之英並萃游夏之徒元非公相之子揭焉之輩出自寒素之門高才未必貴種々々未必高才且夫王者用人才是貴朝爲厮養夕登公卿　秘禮學記玉不レ琢不レ成レ器人不レ學不レ知レ道焉故古之王者建レ國君民敎レ學爲レ先云々　雖レ有二嘉肴一弗レ食不レ知二其甘一雖レ有二至道一弗レ學不レ知二其善一大學鄭氏註云大學者以記其博學可以爲政也　丞相の子息大學の道に入る事良相公俊賢卿等の例あり　或御說云藤氏は勸學院源氏は奬學院橘氏は學館院なとをおきて其氏々の儒者ある事也

いま二三年を

いまとくなり侍りなん　奉公の道にも立身ほとあるましきとなり

みつからはこゝのへのうちに　源の自稱なり

よるひる御前に　桐みかとの御前になり

たゝかしてき御てよりつたへ侍りしたに　秘延喜の帝よりならひとりたるなりそれさへおよはさる事

のおほきとなり
文さえ（文のさみイ花）　弄　文才也　かしこき御手より傳申たる事も
あまたにひろくまなはぬ道は事たらぬ事あると也
はかなき親にかしこき子のまさるためし　秘　賢き子
も愚父におよふことはかたきことなり況愚子乎　弄
同　花　子のかしこきと云もはかなしといはるゝお
やにまさる事はなきならひ也これは大かたの事な
り舜の父に瞽瞍といふものもあれはなり又見過テ二
於師一減ス二師半徳一といへり父子の道もこれにおな
かるへし　私源のかしこき延喜の御手より何もつ
たへたるさへ愚なれはまして大學にも入すして源
のをしへのまゝにては夕霧のいかにおろかならん
といふ心なり
つき／＼つたはりつゝへたゝりゆかむほとのゆくさ
き　かやうに次第々々におとりゆきてはいかゝあら
んとなり　へたゝりゆかんとは懸隔におとり行心
なり
たかき家の子として　世間の事をわけての給ふ也
位高き家に生れ官位にのほり富貴になりぬれは學
文なとに身をくるしむる人はなきとなり

ときにしたかふ世の人のしたにははなましろきをし
つゝ　河めましろき目くはし也或目ましろく（史記項羽本紀）
したにはめましろきをしつゝと有註上にはつゐ
せうするやうにて下にはそしる心なり　弄本はな
ましろきイ本　めましろき心は同也鼻をこめかしな
とするなり
時うつりさるへき人なとにたちおくれ　時代かはり
或權威なとありし親なとにおくれたるときけちめ
のみゆる事をいふなりかゝり所なき前に人の追從
せしも威におそれての事なれはさやうの人か今お
ちあひて猶かろめあなつらんとするなり
なほさえをもとゝして　是は漢才なるへし
やまとたましひ　和國魂　和才魂魄也　花　わか國の
めあかしになる心なり
さしあたりては　秘　當時さしあたりては叙爵なと有
へき事をいへり當分の事なり六位にては不足なる
やうなれとも後の榮をおもふ故ありと源の詞也
つひの世のおもし　夕霧終には政道輔佐の賢才の臣
になさんと思ふ所有と也
侍らすなりなん後もうしろやすかるへきによりなん

秘 源の薨せられて後うしろつよかるへきとなり
私つひに源氏の本意のことくありし事なり
たゝいまははかく\しからすなからもかくてはくゝ
み侍らはせまりたる大學のしうとてわらひあなつる
人も　河 窮(セマル)途(セマル)急(セマル)日本紀　窮者 同　薄 才學のうすき也付紙あり　花 せ
うつほの物語にもせまりたる大學の衆と有
まりとは窮者なり　除目の四品の籍に内豎窮者と
いふことありたとへは大學の衆にてとし久しく有
て昇進なとももせぬ心也　弄 窮者とて大學の道にて
そのまゝ昇進なともせぬ人をいふこゝにては卑下
の詞なり　私せまりたる大學の衆とは窮屈にして
くつろきもなき事にいへるなり學問より外の事な
くくつろくかたなき心なるへし
うちなけき給うて　秘 大學の君なり
けにかうも　段々の理も尤さるへしとのたまふなり
この大將なとも
引たかへたる　あまり人のおもひよらぬ事となり
てのをさな心ち　夕霧の心中を大宮のゝたまふなり
大將左衛門督の子ともなと　秘 左衛門督は大將と別
腹の兄弟なり　系圖にも藤大納言春宮大夫二人の
内此左衛門督歟云々
あさきをいとからしと　六位の事なり大宮の御詞な
り
うちわらひ(はイ)たまひて　秘 源氏なり
いとおよすけても　是より源の詞也　およすけたる
とまつの給ひてさて又はかなき事をの給ふよとな
り
この人のほとよとて　秘 夕霧の事をの給ふなり色々
にの給ひて夕霧の事を心にうつくしみ愛し給ふさ
まなり
かくもんなとしてすてし物の心え侍らは　源の詞也
學文をして物の道理をしりたらはそのうらみは自
然にのこるへからすとなり
あさなつくる事はひんかしの院にて　弄 二條の東院
にて也　秘 字也儒者になるとては必ある事也文章(モンジヤウ)
院にて堂監(ダウケン)といふ物かは簡にかきつくる也文屋康
秀を古今序に文琳とかけるも字なり此類なり兩抄
にくはしくみえたり　河 禮記曰已冠而字之成人之
道也字所以相尊也　今案六位冠者其姓字具江二橋宣源榮等
曹司喚之　水原抄云假令藤原をもて大堂の字とせ

よと文章院の堂監と申者の書くたす事侍也是は當時も彼院の初参の時吉書學生か入學の名簿を秀才隨身して参る時堂監書下分たる事也漢家にも侍やうに本朝にも假令曰忠臣といへるか字は達音是體に侍しか近代其儀も絶侍り登省の時の時必字をつけ侍事也　花學生入學の時文章院の堂監か書くたす名簿に字をかくなり聖廟の御字は菅三三善清行(ミヨシキヨユキ)かあさなは三耀といへり夕霧のあさなは源の何と有へき也

めつらしくいふかしき　めつらしき作法とゆかしくおもふなりいふかしきは不審成心なり

はかせともおくしぬへく

はゝかる所なく　秘源の御子なりとて所をおきてははかる事なくかきりある法式のことくに事をおこなふへきよしを下知し給ふなり

しひてつれなく　隱しぬへきを念してきひしく事ををこなふなり

家よりほかにもとめたるさうそくとものうちあはすかたくなしき　秘窮したる儒者ともは皆着するなり弄借衣也或御説紈袴不㆓餓死㆒儒者多誤㆑身　私儒者は和漢ともにとめるはまれなるにや貧儒なとおほくいへり　弄かたくなし木　花人にかりたる裝束なれはうちあはすといへりかたくなしき一本かたくなしきとありめれはやうもなくきてえたり河他所より求出たる裝束也かたくるしきとは古弊の袍の肩の破裂しぬへきといふ心なり　伊勢物語云しはすのつこもりにうへのきぬをあらひて手つからはりけり心さしはいたしけれとさるいやしきわさしならはさりけれはうへのきぬのかたをはりやりてけりせんかたもなくてたゝなきになきけりかたくるしきこれらの心なり一説かたくなしなるとなと相似なり

むへ／＼しう　開書理字なり物に理運なる心なり

さるはものわらひなとすましくすくしつゝ　秘すくしは年のよりたる人をいへり

へいしなとも　秘酌をとるなり　瓶子取へいしにて酌をとるなり銚子にてとるは近代の事なり今も瓶子にて節會の時はとるなり

すちことなるかたのましらひ　花博士ともいまたならはぬ事に思へり　私此義如何酌なととる人もお

となしく物わらひすましきをえりたまへと猶みならはぬ事にてたへかたしとなりそれをすちてとなるといふなり

右大將民部卿なとのおほなくかはらけとりたまへるに　弄ねんころなるなり　秘あふなくおほなく同詞なり伊勢物語あふなく思はすへしの歌はおほなくにてねむころの心なりこゝにねむころの心とはみえす伊勢物語天福本の聲にあふなくとふの字濁て聲をさせりこの物語におほなくはあふなくの心あるなりとみえたりおちはゝかりたるこゝろとおほえたり

とかめいてゝ　河とかめ出とは賞翫の先例に超過する事を色代する由なりおろすは盃をのみくたす心なり巡流なり　私河の說さもこそはとみえ侍れと猶いかゝと存するなり過分なりとておとろきたるさまなり

おほしかいもとあるしはなはたひさうに侍りたまふ　花說別にしるすへし河の義略之　弄卑下の詞なり垣下のきんたちといふ事有大饗なとにも人數の外の人のましはりたるをえかのきんたちといふあるしは饗なりこゝにても大學の衆ならぬ公卿ひさう（非常）なりといふなり座につき給へる人とも垣下とは云也人數の外をえかといふ故なり　秘此事十ヶ條の一也おほしとは凡の字也我身を凡也と卑下したるなりかいもとあるしとは垣下の人と云なり大饗なとにも垣下（エカ）の公卿とてあるなりこゝにてもさしさたまりたる人數の外を云なりかく凡下の儒者ともの中に大將なとのましり給へる事は過分なる事と申心にや

ひさうに侍りたまふ　秘非常に侍りたまふなり

かくはかりのしるしとあるなにかしを　秘大學の衆の詞なりがやうに人々のしなをもしらすしてはおほやけにつかうまつらせ給ふかすてふ過分なるよしを申なり　弄大學の衆の詞なり　一儀にかゝる大學の衆に大將民部卿なとのをしかいもとのあるしにてかはらけとり給ふ事あるましきといふ心なりしらすしてとは大學の程をもしらてあるし給ふ事となり　一義云々しるしと有は大將らの公卿をしらては大やけにつかうまつるへき大學の衆ならんやはとなり

はなはたをこ（鳴呼）なり　河 儒者といふはかりの我等をと
卑下したるなり　花 をこはをこかましきといふ心
なり我等をかほとにもてなさせ給ふは中々をこか
ましくおほえたるといふなり
人々みなほころひて　たへかねてわらふなり　花 は
ころふるはわらふなり花の笑をもほころふるとい
ふなり
又なりたかくなりやまん　風俗歌の詞なり　河 なり
たかしやなりたかしおほみやちかくてなりたかし
あめれのなりたかし一段　おとなせそやおとなせそ
二段あなかまこんとり（えもやイ）やみそかなれ三段　風俗鳴高
又號大宮　西宮記云有政日事辨就結改如常上卿入外記戸
官常唱鳴高　弄 河海云風俗鳴高或號大宮 の詞をひけり
不叶なり問云飛鳥高鳴何文そや一答河海には不見
鳴高と云事はあり　或式註云飛鳥高鳴也自用之儀
也世を物なしにすると也さるによりて座をたてと
おとしたる詞なり返々初より儒者の内々のやうに
とおほせけれはかくいふとあり　私此事不可用之
さをひきてたちたうひなん　河 曳座退き侍なんとな
り　秘 さをひきたつへきとておとしたる也　何事

もありやうにきひしく事おこなへとありし故にか
く云なり
みならひ給はぬ　大學の道にいらぬ人々なり
この道よりいてたち給へるかんたちめ　儒業よりの
立身の公卿なとはよく心得てしたりかほなるなり
かゝるかたさまを　夕霧を大學の道に入給ふ事を奇
特におほしめしよりたると源を稱美申なり
物いふとてもせいす　なりたかしなといふなり
なめけなりとてとかむ　秘 無禮（ナメケ）日本紀　なりとてもと
かむるなり
よに入ては今すこしけちえんなるほかけにさるかう
かましう　河 揭焉（イチシルシ）　火影（ホカケ）　猿樂（サルガク）　私ひるよりもいち
しるく見ゆる火のかけに樂の作法か物まねなとの
やうな心ちかするとなり　花 けちえんははれかま
しきなり　弄 猿樂はふるくもあるとかや心に隨ひ
て思ひ入ぬる事をふるまひいふ物なり大學の衆源
氏の仰に隨て殊にきひしくおこなふにたとへたる
なり或御説に右にいふことくてとのほかにをかし
くかと〳〵しき事ともをとかめいふやうなるはま
ことにをかしく狂言かましきなり

わひしけに人わろけなる　儒者の末々の門生になる
へし家よりほかにもとめたるさうそくなといへる
卑意なり
おとゝはいとあされかたくならる身にてけうさうし
まとはされん　河輕慢（狂イ）　詞にけうまんしまとはされ
んとあり　花あされはあされたる大きみすかたと
いへる心なりけさうは假粧なりつゐせうせらるゝ
心なり一本にけうまんしまとはされんとあり輕慢
なり人にきやうまんせられんと思ひて座にはいて
たまはぬ也あまり人に追從せらるゝも身かもちく
るしき物なりましてけうまんせられては面白有ま
しき心なり　弄けうさうしけさうする人をほめな
とするもけさうするなり　秘或本けうまんすると
いへは同し心歟けさうするなり物を追從する事な
り源の出座し給はゝ皆つゐせうするやうなるへき
もあしかるへきとてかくれ居給ふなり　同小書云
青表紙にはけうさうしなとはされなんとあり然は
けうさうしなとはとよみきりてされなんとよむへ
し心はつゐせうしなとせは左禮なるへし本の道に
はそむくへきとありて斟酌ある心なり

數さだまれる座に　定れる數あるへし源のをこなひ
給ふ故に我も我もとまゐりあつまりて座につきあ
まれるなるへし
かへりまかへる（つイ）　秘源の仁恕ふかき心みえたり
ことに物たまはせ　別にといふ心なり
ことはてゝまかつるはかせさい人　花才人なり　秀
才をいふなり　弄さいしんとよむへし一渺　私事
はてゝまかつるは座につきたる衆の事なり
さるへきかきり　公卿殿上人の詩文にたへたる人也
はかせの人々は四韻たゝの人々はおとゝをはしめた
てまつりて絶句せくつくり給ふ　私四韻は八句の詩也
河花木被人知　以名爲韻　中書王具平親王　年齢稍邁
減ニ詩情ヲ一　被レ誘ニ鄒牧ニ一句城（成イ）　應笑久抛風月賞ノ
桃李之外忘ニ花名ヲ一　江以言　春天花木富ニ芳榮ニ一　自被ニ人
知ヲ一得レ擅ニ名ヲ一　何處未レ承ニ霞養色ヲ一　誰家不レ審ニ鳥呼レ
聲ヲ一　句同唐帝專ニ房女ニ一　粧嘆秦醫一里兄ノ　莫レ恨翰
林零落士ノ　西園今日接ニ群英ニ一　近代則釋奠宴座
席者四韻上卿絶句作事也
けうあるたいのもしえりて文章博士たてまつる　花
翰林の人の出題するなり韻の字は切韻とて何字を

もて韵とすといふ時もあり又題中には取韻と云て題の五文字の中平聲の字をとりて韻とする事もあり又何韻にても作者の心まかせにさる事もあるなり

みしかき此の夜なれは　河四月の比也上に祭の比とあり　秘四月の末なれはなり

左中辨かうしつかうまつる　弄無先祖　秘系圖の外の人なり文章生より昇進する人なるへし

おほえ心てとなるはかせなりけり　左中辨の事をいへる註なるへし

かゝるたかき家にむまれ給うてせかいのえいくわにのみ　夕霧の事也

まとのほたるをむつひ枝の雪をならし給　秘ならしは馴なり　花車胤孫康は家貧にして油なきゆゑに螢雪をあつめき源氏君の御子せかいの榮花にたはふれ給へき御身にて身をくるしめ學問し給ふはありかたき事なり枝の雪は窓の螢に對していへる詞なり灯をは九枝といへる義河海にいへり然へからすたゝ木の枝にふれる窓の雪なるへし　河晋車胤字武子河東人也好讀書無油夏月則生絹囊盛ニ數千ノ螢ヲ照レ書ヲ後ニ至ル史部尚書ニ　孫康家貧無油常映雪讀書後至ニ御史大夫ニ枝の雪とは枝は灯也九枝とも云り雪を灯に擬たる心也　仁王經云佛告大王應作九色幡長九丈九色華高一丈千枝灯高五丈　太平御覽第八百七十鄴中記云名虎正月朔會於殿前設百二十枝灯以鐵爲之云々西京雜記曰高祖初入咸陽宮周行府庫金玉珍寶不可稱言其尤異者有靑玉五枝灯高七尺五寸梁王筠灯詩曰百花曜九枝傳言朝會賦華灯爔百枝之煌々是等皆灯を枝と云なり　私灯を枝と云事河海說如何花鳥の義尤然るへきなり

くことに　閑毎句なり

おとゝの御はさらなり　秘源の御詩をいへり　河御詩をはといふへきを略したるなり　花さらなりはさらに人のおよはぬ心をつくり給ふよしなり　私源の何にてもすくれ給へる人なれは詩のすくれたるなとゝいふはいまさらめきたるといふなり勿論なる心なり

女のえしらぬ事　秘草子の地なり

うちつゝきにうかくといふてと　令曰凡學生在學各以ニ長幼ヲ爲ス序ト初入學皆行束脩之禮於其師各布一端

延喜式云凡遊學之徒情願入學不限年多少惣加簡試(エラヒ)其有レ通二一經一聽レ預(アツカル)ニ學生一但諸王五位以上子孫不預(イトナ)二簡試一　東脩之禮也論語述而篇にも自行東脩以上吾未嘗無誨焉　花鳥に令の文を載し也　河寛平八年十二月十三日齊世親王入學當日早朝召文章博士紀長谷雄卿　自持名簿賜之長谷雄拜舞親王參堂

二世源氏歷儒業例　儒　源伊行（従四位上民部大輔東宮學士兼明親王男花山院侍讀）

儒　同俊賢（正二位大納言民部卿左大臣高明男）　俊賢卿例尤叶今例也

又執政臣歷儒官例　忠仁公（天長五年閏三月甲午任大學頭于時從五位下）

やがて此院のうちに　花　二條院に御曹司をつくりて學問し給ふなり　文章院中に有東曹司撰此也　私云此院とは二條の東院也入學もこゝに有へし夕霧をは花散里へうしろみの事を源のきこえつけ給ひしなり　東院に花ちる里すみ給へはそのたよりなり　弄　御さうし　オンサウシ一禪

大宮の御もと　夕霧の祖母

よるうつくしみ　秘　草子地也　此程まては夕霧大宮三條宮におはしつれとあまりうつくしみかしつき給て學問もなるましきとてかくはし給ふとなり

一月(ヒトツキ)にみたひ　大宮なとへの御みまひなり

つとてもりゐ給ひて　集（日本紀）(ツト)　夕霧の心なり

殿をつらくもおはしますかな　夕霧の心も源氏をか（にイ）やうにくるしめ給ふとつらく思ふなり

大かたの人からまめやかに　秘　夕霧なり　實々しき心たてにてさらは學問に心を入てとくしはてはやと心かけ給ふなり

たゝ四月五月(ヨツキイツツキ)のうち　弄　よつきいつ月とよむへきなり

史記なといふふみは　河　史記（司馬遷作）本紀十二卷（象一年）年表(イナシ)十卷志八卷世家卅卷（象一月）列傳七十卷都合百三十卷（後爲八帙ツヽメテ爲八十三卷）　西京雜記云司馬遷發憤作史記一百三十卷　金樓子曰王仲任言夫説一經者爲儒者也傳古今者爲通人也上書奏事者爲文人也能精思著文連篇章爲鴻儒也若劉子政楊子雲之例是也叢儒生轉爲通人々々（轉爲文人々々イ）轉爲鴻儒也今案文人文章生（擬生ノ字脱カ）擬文章生とて文章生に擬する也或は擬進士と云

いまはれうしうけさせんとてまつわか御まへにて心（寮試）みさせ給ふ　秘　大學寮にての試也大學寮にて史記をよましめて難義を問て儒士をこゝろむること也詳くは抄にみえたり　弄　寮試事宗祇一問一答寫之奥

に註す　花是は寮試かけさせんとてまつ習禮し給
ふ事をいへり學生を大學寮にて試るを寮試といふ
試には史記をよましむるなりよくよみえたる人を
擬文章生に補す擬進士ともいふなり　弄宗祇問　擬文章生と
文章得業生同事歟　一答大學寮にてはしめより學
問したる人を試に及第せるをは文章得業生といふ
なり又昔は諸國より才人を年貢に奉る事有それを
貢士とも進士ともいふこれを大學寮にて試に及第
せるをは擬文章生といふ同事のかはりたるなり
花先段のつゝきの流也　凡儒業をつとむる人の次
第道をふるには先補大學生灯燭料を給て九年の間
螢雪のつとめをなして功をつみて後大學寮にて試
らる史記をよましめて難義をとふ五條の中に三條
に通するを及第とす則文章得業生に補すさらに又
橡樟七年といひてくすの木は七年をふれは用にた
つにたとへて七年の間學問してその後式部省にて
課試をとく先詩賦を作る次に策の文をかく　弄祇問　策の
文とはいかやうのとにか　策の文とは儒業の一大
事也たとへは問者の儒士ありて題を出して其題の
とを對句にかきて不審をたつるを獻策の人即時に

又對句に書て證文を引てこたふることなり策の文
は本朝又粹の第三卷にありそれを披見あるへし
花又先段の次也昔これに秀才進士の二科あり秀才
をは方畧といふ方略は無端の大事といふ心なり弄
祇問　方略と云事猶以不審如何　答秀才をいふ歟
さきの文章得業生に成たる人にとふこと也方略の
二字は無端の大事と釋せるなりかきりもなき大事
といふ事なり進士といふは擬文章生になりたる人
なり　花又箋獻策の時問題に答てかくことはきは
めたる大事也弄祇問　獻策問題のやう如何　答
其問題さたまらす文粹に出せる事は或は神仙或は
神祠鳥獸言語運命山水松竹かやうの題に付て其故
事を不審する事也題は時にしたかひて望期なき事
なり　花又問　進士をは時務策といふ令と云書に
みえたり弄祇問此義如何　一答昔は時務といひて
當時の政道なとの事をいかにしてかよかるへきと
思ふ事を文にかきてこたふるなり或又方畧の宣旨
をかうふりて獻策の文にかくこともあるなり　花
又聞今の世には文章得業生二人あり秀才のために
はしめより給料を給て學問したる人なりそれは方

略の宣旨をくだされて式部省にて課試せらるゝなり　祇問方略宣旨如何　弄一答進士の人方略をかうふる事なり　花又問又入學の衆の中に器ある時博士これを擧すれは大學寮にて試て又史記をよましむ及第の人を擬文章生に補す數二十人ありこれを式部省にて試て詩もしは賦をつくらしむ及第の人を文章生に補すこれを進士ともいへり或は御前にて勅題をくだされて試みらるゝことあり文章生に補して後さらに方略の宣旨を蒙て課試をとくる事もあり進士は時務策たりといへとも方略の宣旨を蒙れは方略の試なり　弄祇問此意如何　一答上にいふか如し　花又次文章生の方略をかうふりて獻策することは當職の時と又外國の掾になりたるときと散位の時とかうふるなり京官に任して後は不獻策ならひなり　弄祇問當職とはいつれの職そや京官の人不獻策とは如何　一答當職とは文章生の當職なり其後諸國の掾に文章生なる事あり國の掾になりては一任四ヶ年とて五年めに前官になるそれを散位と云也此間に獻策をはするなりなにしても京官に任しては獻策の事はなきなりそれを非成業の人といふ也　夕霧の大將はいまこのつらの人也　花又次或文章生さらに得業生に轉して課試の例も有り　弄祇問文章生と得業生との差別如何答さきに擬文章生と云人文章生に成て或は文章得業生になることありこれはまれなることゝ也　花又次あるは文章生にとゝまりて方略の試に及はさることもあり源氏夕霧の君はいま此例なり朱雀院の行幸の次に御前試に詩をつくりて及第し給うて進士に成てやかて侍從に任し侍り　寮試作法　河寮頭以下各一員博士以下各一員參着試廳出貢擧交名等博士加署渡寮頭々々見了下允以下以籌（以冊イ）匣三合置試衆座前又以讀書等置頭博士秀才（謂之試博士）幷試衆等（殿爾イ）前次第召試衆々々抱卷進出幔門下允仰云版允試衆（後殿イ）指而就版允又仰云敷居爾試衆指於敷居下脫沓着座置帙並頭仰云冊衆准之探冊（三史之間今日讀冊也）膝行置試博士前試博士對寮頭云史記乃本紀乃一乃三乃卷世家乃上帙乃五乃卷下乃帙乃一乃卷傳乃中乃帙乃七乃卷頭仰云令讀與試衆各披帙抱卷引音讀之頭仰云古今試天試博士對頭云文得頭云書註寮掌捧簡稱註由畢未衆退出堂監於幔門外仰登科酒肴事

れいの大將　夕霧のをち右大將なり　秘源の御まへにて内々の心みなり
左大辨式部大輔左中辨　秘三人系圖にみえさるなり
はかせのかへさふへき　秘かへしをはるへき所なり　河論語學篇云言可覆云々　註曰覆猶復御書所にも覆勘とてあり　聞かへさふはおしかへし不審すへき所なり
かた〳〵にかよはし　文段のうへに流通したる心なるへし　或かういふ説もあり又かういふ説もありとなりかた〳〵とは音と訓となり云々　私此義不審也
つましるしのてらす　河つましるしのてらす（心イ）とあり爪しるしとは詩歌なとに合點せんとてまつ爪にてしるしを付ることなり云々然は寮試を合點に擬して今の内々の心みをつましるしの心ちすとなり一說云角筆の事也角筆とは假名付んことを憚て無點の言に角なとにてしろく假名を付る事あるなり然は點なき所々をもつまひらかによみ給ふてと爪しるしのあるやう也といふなり　秘說々われとも只忘れたる所にはしるしをしておく事のあるをつましるしといふなるべし　不審の所につましるしを付るなりよくよみときしにてそのてらすといふなり
さるへきにてそ　秘此人は大學の道に入給ふへき器なりと人々思へるなり
大將はまして　をちの右大將はましてなり扨祖父故攝政のおはせはいかにうつくしみ給はんとの給ひいへるなり
殿もえ心つよう　源氏君なり
人のうへにてかたくななりと　源の詞なり　人のうへにてはかたくなしくもとかしく思ひしか我身のうへに成たるとなり
子のおとなふるにおやのたちかはりしれゆく　花子の成人するにしたかひておやの無才のあらはれゆくをいふしれゆくはされゆく心にやおやの子におとりてもてゆく心なり源氏君の人のうへにてみしか我身も今のやうにては夕霧におとるへしとの給ふ大將なとのきゝ給ほとにうつくしみてのたまふ詞なりさきにははかなきおやにさかしき子のまさるはなきといふは大かたのことなり今は源氏君の

我身に引かけてのたまふなり　弄此巻にしれ物の
かたり（イナシ）なといふは左禮事なとのことし或説に云愚
の字を萬葉にはしれと訓せりもしその心歟たちか
はりといふに叶へき歟　秘しれは癡字なり帚木巻
にしるせり
大將さかつきさし給へは　秘此御師に盃をさし給ふ
なり
ゑひしれてをる　御師の大内記也
世のひかものにて　秘世間へはうちもむかすすれ（れイ）
すれしき人なり
さえのほとよりはもちひられす　才學ありて心諂曲
になきゆへ世に不過（逢イ）なるなり
御らんしうる所ありて　源の然るへきものと御覽し
て師にとり給ふなり
たちまちに身をかへたる　源の御かへりみにてゆた
かになりたるなり
おほえそあらんかし　草子の地なり
大かくにまいりたまふ日は　寮試の日をいふなり秘
同
れうもんに　秘大學寮の門なり

くわざの君に　秘夕霧なり　冠者の君なり
かゝるましらひにはたへす　あやしきさましたる學
生ともの中へ夕霧の不相應なるとなり
さの末をかくしと　秘學生は以二長幼一爲レ序といへ
る令の文なり　花寮試の時は長幼をもて序（席イ）をなし
て人の種姓はいらす故に冠者君も學生ともの末座
に列したまふなり
こゝにても又おろしのゝしる　秘制止をくはふるな
り
すこしもおく（うイ）せすよみはて給うつ　夕霧のよみすま
したるなりこゝの作法にも臆せぬなり
大かくのさかゆる比なれは　只今源の御興行にて夕
霧の入學ゆへ一しほさかえて我も〳〵とこゝろさ
す人おほしとなりかみなかしも上中下なり　秘源
氏には奬學院藤氏には勸學院橘氏には學館院をた
てゝいつれにても學問をさせ侍るへき心みえたり
もんにんきさう　文人擬生　河金樓子曰云々　此事
端ニ載之　今案文人は文章生きさうは擬文章生と
て文章生に擬する也或は擬進士云々　花史記五條
の中に三條以上に通するを擬文章生に補するなり

秘進士及第也　花鳥にくはしくしるさる大數をあけていへは二なり方畧の宣言をかうふる人は本の文章の生なり進士とて國々より進するを擬文章生とは云なり文人きさうとは此事なり夕霧は擬文章也此以後行幸の時御前の試ありし也　開書に東坡を御前にて試んとし給へるを王荊公か支たることありと云々此事可尋　夕霧のさとくかしこくてかやうの事共はやく成たるなりそれにまたいさみて師の大内記も夕霧も互にはけましはげむとなり

殿にもふみつくりしそく　源にて細々作文あるとなり

はかせさいしんとも所えたり　源の殿中のさまなり

すへて何事にも　是は學問の事にかきらす諸道の事をいふなり源の補佐の臣にて何事も再興あるをいふなり

かくて后居たまふへきを　秘立后の事なり　當代いまた后なし

齋宮の女御をこそは　秋好なり

はゝ宮も御うしろみと　秘薄雲なり前齋宮のことをあなかちにとおほしめしたるなり

おとゝもことつけ給ふ　源の薄雲のかくありしと我心ひとつならぬやうにいひなし給ふなり

源氏君のうちしきり后に居たまはんこと　秘河海花鳥にくはしくみえたり　河後朱雀院御時陽明門院三條院皇女　中宮嫄子敦康親王女両后共依爲源氏春日大明神有御祈太神宮有御託宣事此事隆爲（雖カ）寛弘以後事聊可潤色乎桓武以後天下國母多大織冠之御末也忠仁公以來藤氏臣皆外家として必執政する也　花藤壺の中宮の後齋宮女御の中宮に立給事源氏のうちつゝきといへり必しも源の姓を給はらされとも帝王の御女をはみな源氏にとるなり心は藤原氏の后の中絶する事をいへり

弘徽殿のまつ人より　右大將の女齋宮よりもさきに入内なり

こなたかなたに心よせ　齋宮方弘徽殿方と樣々もてあつかふ也

兵部卿宮ときこえし今は式部卿にて　秘紫上の父なり　桃園式部卿宮薨して後式部卿闕たるによりて任したまふなるへし　弄一勘入省卿事式部卿は親王ならてはならすや兵部卿にはたれもなる官なり

式部卿はいさゝかまさるにや　私八省卿のうち中務式部卿を殊に親王の官とす兵部卿は大納言等時により兼任然共猶親王の官也
はいありてまゐり　此女御まゐりの事も前にあらましある也
おなしこと王女御　同事とは秋好は前坊の御女なり是は式部卿親王御女なれはおなし王女御にて源氏の心に通ふへきなり
王女御　河王女御　朱雀院皇女昌子内親王冷泉院女御　世以號王女御云々　憙子內親王文德女御 嘉(喜イ)子女王淸和承(兼イ)子女王同 憙子女王同 寛子女王同 班子女王光孝 中野親王女 熈子女御朱雀院女御 文彦太子女 徽子女王村上女御 重明親王女 庄子女王村上女御 代明親王女凡王女御にかきらす姓をも昔はよひ付る也李部王記云藤女御源女御なとあり
おなしくは御はゝかた　秘薄雲と式部卿宮の女御としたしき心也弄同　私式部卿宮の女御は薄雲の御めひ主上冷泉の御いとこなり　但秋好も桐壺のみかとも前坊と御兄弟なれは主上と御いとこなり
母きさき　薄雲おはせぬかはりにと式部卿宮かたには内々のたまふなるへし

梅つほゐたまひぬ　秘秋好なり弄
御さいはひの引かへ　秘故母みやす所は不幸にて過し給ひしをひきかへ幸人(サイハヒヒト)なると也
おとゝは太政大臣に　秘勘例抄にみえたり　河皇子任太政大臣例　大友皇子天智天皇御子 天智天皇十年始任太政大臣高市親王天武天皇御子 持統天皇四年任太政大臣
花内大臣轉太政大臣例　忠義公兼通　天延二年任太政大臣元内大臣 但關白なりてれよりのちは連綿也信長公淸盛公なとも內大臣より相國に任せる也
大將內大臣になり給ひぬ　右大臣の內大臣になり給へるに世の政を源のゆつり給ふなり此ことのあらまし薄雲の卷にありしことなり　河內大臣執政例
堀河關白兼通忠義公 天祿三年十(十一イ)月廿一日內覽十一月廿七日內大臣　中關白道隆公永祚元年二月廿三日內大臣二年五月關白　帥內大臣伊周公 正曆五年八月廿四日內大臣長德元年三月八日內覽
人からいとすくよかに　秘以下大將の事をいへり
ゐんふたきにまけ給ひしかと　榊卷にあり　花掩韻にまけたまふ事榊卷にありしことなり
おほやけ事にかしこく　秘有職のかたなり

はら〳〵に御子ども十餘人　私云系圖にのする所十
一人なり
おとらすさかへたる　秘源におとらさるとなり
女は女御と　弘徽殿なり
いま一ところ　雲井の鴈なり
わかんとほりはらにて　雲井の鴈の母は王孫なり今
は按察大納言の室になり給へるなり　河宮腹也よ
まんにはわうかんとほりとよむへし　師說如此云
云末摘花卷にわかんとほりの兵部大輔と有も王孫
なりてまの丶物語に兵部卿宮のわかんとほり此外
うつほ隱蓑物語なとにも此名有　花致仕のおとと
の御女一人は弘徽殿の女御母は二條太政大臣の四
君今一人は雲井鴈此母君わかんとほりなり今は按
察大納言の北方也　弄雲井のかりの母譜ともなし
按察は五節奉る人なるへし系圖に可加之
さしむかへる子とも　さしむかへるは當分の事をい
ふなり
後のおやにゆつらん　秘まゝ父にそへん事をいへり
弄同　秘それに任せて後のおやに又これにまかせ
て又それによせてなと異本にありと云々

大宮にと　雲井の鴈を迎へて大宮に預け奉給ふ也
女御には　弘徽殿なり　女御はとは父おとゝのおほ
さねとかたちは雲井もすくれたるとなり
くわざの君ひとつ所　夕霧なり或六位無官の人を冠
者と云と云々
おの〳〵十になり給ひてのち　花おとゝし比のこと
なり夕霧ことしは十二歳なり
をのこゝにはうちとくましき　秘夕霧は十二歳雲井
は十四歳なり
ちゝおとゝ　雲井鴈の父大臣なり
をさな心ちに　夕霧の心なり
けさやかには　父おとゝはけとほくとおほせとひと
つ所なれはおのつから今もみかはし給ふなり
いかなる御なからひにか　夕霧と雲井の鴈とのあひ
たの事をおもはせてかけるなり草子地也
よそ〳〵になりては　秘學問をしておの〳〵にいた
まふをいへり　思ふへきとおしはかりてかけり
かたおひなるての　二人の手跡のさまなるへし
見かくしつゝ有へし　是も草子地なり
所々の大きやうすきて　秘太政大臣并內大臣

の大響也　河太政大臣内大臣新任饗の事也年ごと
に饗あれはかくいふなり　廂母屋の饗なといへり
荻のうは風もたゝならぬ　河「秋は猶夕まくれこそ
たたならね荻のうは風萩の下露
宮はよろつ物の上す　秘大宮なり
ひはこそ　内大臣詞也弄同　うつほ物語にひはなん
さるは女のせんにうたてにくけ成すかたしたる
物なる
までとしうつたへたる人　琵琶の上手なきとなり
なにのみこくれの源氏　秘なにくれと上手をかぞへ
あけ給ふなり　花世俗になにくれかくれなにやか
やといふ詞は何の字の訓と音とをわけていへる詞
なりそのなにくれといふ詞を又わけてなにの親王
くれの源氏なとゝいへりこゝには琵琶の上手をか
ぞへたつる詞なりとかくといふ詞をとやかくやと
するもかくするもなといへる詞也
おほきおとゝのやまさこに　秘明石上なり　花太政
大臣をいへりこれはあかしのうへのことなり
物の上手のゝちには侍れと　河明石入道延喜の御時
より三代といへる事也　弄同　秘前大王の御手よ

り引つたへたるよしまへに有し事なり
かのおとゝいとこゝろことに　明石上の琵琶を源の
ほめたまふとなり
なほひろう物にあはせ　合奏せではとなり　明石上
の山かつにてひとりことにてさやうにすくれたる
は奇特なりと内大臣のゝたまふなり
宮にそゝのかし　大宮へ琵琶を所望なり
ちうさすと　左の手にておす事を云り弄同　杜也琵
琶にてはちうといふ箏にては柱といふ也同字也
河柱さすはおす事なり琵琶也
さいはひにうちそへて　弄致仕攝政北方詞なり大宮
也　秘大宮の詞あかしの上のさいはひ人なるをい
へり
みにそへてもやつし　明石の姫君をそのまゝにそへ
たらんは御母かたゆゑやつれんを紫上へゆつれる
心持なとをほめたまふなり
女はたゝ心はせよりこそ　内大臣の詞也弄同
女御をけしうはあらす　秘弘徽殿なり
おもはぬ人に　齋宮女御の中宮にたちたまふこと也
秘秋好におされたるとなり述懐をのたまへり

この君をたに　秘雲井の鴈也　花同
東宮の御元服たゝいまの事　秘朱雀院の御子後に今
上と申せしなり
心さしたるを　雲井鴈を東宮へ參らせんと思ふ也
かういふさいはひ人のはらのきさきかね　花明石姫
君を云也かねは賓なり物のさねなり　秘明石中宮
をいへり　弄明石中宮をさなきを云也　私かうい
ふとは只今うはさをいひたる明石上といふなり
おひすかひぬれは　河おひつゝけたる事なとやうの
事なり　花としのほとにあひたる心なり立ならふ
心なり　聞跡へ追つゝく心なり　私此義然へし
河海の義同
たちいて給へらんに　明石姫君入內あらは又人のあ
らそふ事はなりかたかるへしと內大臣の今より宣
ふなり
なとかさしもあらん　秘大宮の詞なり
この家にさるすちの人　秘大宮の詞也忠仁公以來藤
原氏はさるすちなれはさやうに思ひうんして思ひ
すてたまふましきことゝなり　私大宮のおとゝを
いさめてのたまふなり

女御の御ことを　弘徽殿入內の事をき祖父致仕攝政
のゐたちとりもち給ひしもその心そとなり
かくもてひかむる事も　故攝政おはせは今度弘徽殿
の立后は理運なるへしか樣によてさまなる事はあ
らしと大宮ののたまふなり
この御事にてそおほきおとゝをもうらめしけに　秘
源にすこしうらみあるよしなり　弄攝政の北方と
源とは又なき御なからひなるを弘徽殿の女御の后
にゐ給はぬ事故に少しうらみ給ふとなり　私大宮
の心中なり
ひめ君の御さま　秘雲井鴈なり
いときひはにうつくしうて　いとけなき樣なり
御くしのさかりかんさし　河御くしのさかりは　下(サカ)
場(リハ)さかり所なり　本にさかりとはかりあり盛歟只
下(サカリ)歟
うちまもり給へは　內大臣なり
はちらひてすこしそはめ給へつる　雲井鴈なり
とりゆのてつき　河箏の取由なり
宮もかきりなうかなしと　大宮の雲井の鴈をうつく
しみ愛する心なり

おとゝわこん引よせ　内大臣當時の和琴の上手とき
こゆ、
りちのしらへの　秘秋になりてをりにあふ調子なり
弄同
おまへの木すゑほろ〳〵と　時節あはれなる體なり
風のちからけたしすくなしとうちすし給ひて　花鳥にはきんの聲と有
きんの手ならねと　河文選四十六六臣註　陸士衡豪
士賦序落葉俟微風以隕風之力蓋寡孟甞遭雍門而泣
琴之感以糸何者欲隕之葉無所假烈風將隕之泣不足
繁哀響李善注引桓子新論雍門周琴事　花きんの聲
ならねとゝありて雍門周は琴を彈すいまの大臣は
和琴をひき給へり故に琴の聲ならねとゝ云り　お
まへの木すゑほろ〳〵とのこらぬと上に云て風の
ちからけたしよわしと豪士の賦の心を思ひよせて
かき侍る心詞たくみにおもしろく聞えたり　秘豪
士賦序の詞なり　私案之豪士賦は齊王冏と云人切
にほこりたるをそしりたる賦なり文選には序はか
りを載たり此序に不足繁哀響也と云るへきに是故
ニ苟ニ時ニ啓於天理盡ニ於民ニ庸夫可(響イ)以ニ濟聖賢之
功ニ斗筲可以定ニ烈士之業ニ言遇レ時也故曰才不レ半

レ古ニ而ニ功ハ己ニ倍セン之蓋シ得ミ之於ニ時勢ニ云々此心
は庸夫とていやしき者も賢聖の名有又斗筲のすこ
しきなる才ある者もあけ用らるゝ事あり又才學の
古の人に半にても及はさる人も功名の勝れたる人
のある也其故は時の運なるといへるなり只今內大
臣の心も今源の勢に天下よりみれは我むすめの立
后なとの事は時いたらさるを思ひ給心あるにより
て此句を誦し給ふなるへしかやうに末の句を引合
てみ侍らは味あるへき歟以上秘　或御說豪士賦云
云略之雍門周孟甞君か所に行て云孟甞君天下にさ
かえたりとも木の葉の風をまつかことく必むなし
く成て後は草かりわらはなとか塚上にのほりて孟
甞君か尊貴すら猶かくのことしといひてはかなか
るへきといふを聞てなく是は孟甞君にある人の云
やうは雍門周か琴をきく人はみな泣と語りしを孟
甞君きゝてわれはふつとなくましきといふを又雍
門周きゝてわれはふつとなかせうするといひて孟
甞君か所へ行て如此の飛花落葉のことわりより孟
甞君かむなしくならん後の事をかたるに其時眼に
涙うかふ其時雍門周琴をひく時に一曲にて涙くた

ると云々　私此諸の(抄イ)あはせやうは前にくはし仍略
之
秋風閑にかきあはせ　河秋風閑は盤渉調律也弄同
秋風のちからけたしすくなしなと似合たり
みなさま〳〵おと〻をも　大宮の雲井の鴈をうつくしみ給ふうへにおと〻の和琴さうかなとを(こイ)きこえて又是をもうつくしと思ひ給ふをさま〳〵といふなり
いと〻そへんとにや　感をくはへたるなり　さまさまに愛し給ふうへに又くはへたるなり夕霧の参りたるなり
御木丁へたて〻　姫君のおはするを木丁へたてたるなるへし
をさ〳〵たいめんも　秘内大臣詞也　學問にこもりたまふをのたまふなり
ざえの程よりあまりぬるもあぢきなきこと〻　秘才學のあまり過たるもわろき也　聞繪合源にのたまひし事を内大臣のおもふ心なり　私繪合巻也
かくをきてきこえ給ふやうあらんと　つねには源も才學の過たるもあしきとのたまふか夕霧には一段の學問をさせ給ふは定めて仔細あるへしとなり
とき〳〵はて〻(ことにイ)わさしたまへ　笛をす〻めんとてかくの給ふなり
ふえのねにもふることとは　河向子期思(畏イ)舊賦序云隣人有吹笛者發聲寥亮と追想曩昔遊讌之好　文選六臣註第十六
おと〻はうしおとろ〳〵しからす　秘うるはしき拍子にはあらて檜扇なと打ち合せ給へる成へし　花さくはうしとあり河海にもさくはうし笏拍子　笏二をもて拍子にしてうつ事なりとりあへす御遊なとある時はかたはらなる人の笏をとりて我笏と打あはする事ありて致仕の大宮の御前へ参り給ふにはさためてとのゐすかたなるへし笏の用意に及ふへからすその時は扇なとを打ならすをもさくはうしに准していへるにや　私たゝはうしうちならしとある本よし
萩か花すりなと　河更衣(コロモカイ)催馬樂呂　秘催馬樂呂更衣ころもかへせんわかきぬは野はらしのはら萩か花すりと云々花鳥の說尤おもしろし　花今案冠者の君のあさきの色をあらため給はん事を思ひよせて大宮の御前にてことさら衣かへの歌をうたひたまふ

なり
大殿も　花故大臣殿の致仕の表たてまつりし事也
秘花鳥故大殿と云々然ともたゝ源氏の事なるへし
私大殿は源氏の事なり御まつりことをのかれ給ふ
とは此内大臣に政をゆつり給ふとまへにありその
ことをいふなり
ひめ君は　雲井鴈也
しゐてけとほく　あなたに雲井鴈をわたしたまふを
いふなり
御ことのねはかりをも　夕霧の參て笛を吹給ふとこ
ろに御ことをはしはしやめてとあり其後は雲井の
鴈ことをはひき給はぬ成へし
いとほしきこと　秘夕霧の姫君に心かけたまふこと
也
ねひ人とも　大宮の人々なりすこしおとなしくての
夕霧と雲井鴈のあひたの事しりたる人なるへし
おとゝいて給ひぬるやうにそ　秘内大臣なり　大宮
の御前をはかへり給ふやうにてまきれ給へるなる
へし
しのひて人に物の給ふとて　内府の女なとにみそか

ことの給ふなり
わか御うへをそ　弄内大臣の御うへ夕霧雲井雁のこ
とをいふなり
かしこかり給へと　内府のうしろことといふ詞なり
をれたる事いたき　すくになき事なり　秘御おきて
にたかひたる事のいてきぬへきとなり
こをしるといふとは　河明君知レ臣　明父知レ子
史記　擇レ子莫レ如レ父擇レ臣莫レ如レ君左傳知レ臣莫レ
如レ君知レ子莫レ如レ父日本紀　知レ子莫レ如レ父昭十三又
如此未勘云々　大學云莫レ知ニ其子ノ之惡ニ云々
つきしろふ　とりあつかひ沙汰するなり
されはよ思ひよらぬ事にはあらねと　秘内大臣の心
なり　夕霧と雲井雁とのことなり
おともせて出給ひぬ　秘内大臣なり　唯今かへり給
ふ也
殿は今こそ出させたまひけれ　かへりたまふにさき
の聲を人々のきゝつけてとくに内府はかへりたま
へると思ひつるに只今いて給ふよとおとろく也
御あだけ　花あたなるふるまひなり　内府のいつく
のくまにかくれおはしてかありつらんいまた好色

におはしますなといふなり
さゝめき事の人々は　雲井の雁の事なと云し人々也
火さの君おはしましつる　くらき所にて内府を夕霧にとりまかへてしりうことなともいひしなりしりうことはうしろことともしとけ言(コト)なり
わつらはしき御心を　秘内大臣の心を人々の思也
殿は道すから　内大臣の心なり
あしき事にはあらねと　夕霧と雲井鴈とよきあはひにてはあるとなり
めつらしけなきあはひ　あまりちかきゆかりとなり
これ一つ也
おとゝのしひて女御をおししつめ給ふなり　秘　秋好立后の事なり此ひめ君をはかならす立后あるへきとおほす故なり
わくらはに人にまさる　若まれにも人にます事あらんすらんと思ひしとなり
殿の御中の大かたには　源と内大臣との中也
かやうのかたにては　繪合の時なとの事なり
ねさめかちにて　内府の心にかゝる故なり
大宮もさやうのけしきは御覧すらん物をよになくかなしうし給ふ御むまこにてまかせて見給ふらんと
是迄内大臣のおしはかる心中なりさて人々のいひしけしきをめさましうねたしと心うへき歟しからは人々のしりうことのさまをねたしとおほす内大臣の心なるへし此義聞書等の義なり　私是は人々のさゝめきしさまをいふなり大宮もけしきしり給ふへけれと夕霧を愛し給ふゆへにしらすかほをし給ふならんと人々のいひしなるへし其けしきをとりてねたしとおほすなるへしさゝめきし所にかくはなけれとその事をのちにかきあらはす事つねの事なり如何猶此義心得やすき歟
すこしをゝしう　河　雄拔(ヲヲシウ)日本紀　鮮(アザヤカ)鮮(イ)　私云あさやくとは鮮の字たるへき歟物のかと〳〵しきはあさやかなる心歟
私わつらはしくたけき心なり惣しては男らしきなり　或はかとありてなたらかならぬなりたけきなり火急なる心なり御説にもこゝにては男々しきにてはなしたけき心となり
二日はかりありて參り給へり　大宮へ間ちかに内大臣のおはしたるなり

しきりに參り給ふ時は　秘細々に參り給ふ時は大宮
もよろこひ給ふなり
御あまひたひ　河尼額　河さけ尼の事なり
まほならすそ　弄まをとよむ說もあり先は船のまほ
かたほなとによせたる詞なりまをとよむはほの字
をやはらけたるなり
こゝにさふらふも　内大臣の詞也
よからぬ物のうへにて　秘姫君故に大宮にもそむく
へき事のいてきぬるとなり
かうもおもふ給へしと　今は何かと貪着すましき人
の上そと腹立してなけやりさまにのたまへる詞也
宮けさうしたまへる御かほの色もたかひて　大宮の
引つくろひ給へる御かほの色も變するなり御目も
おほきにとはおとろきあきれ給へるさまなるへし
いかやうなる事にてか　秘大宮の詞也
心おきては　隔心の仔細出來ぬらんとなり
さすかにいとほしけれと　大宮の御事をさすかいと
ほしうおほす内大臣の心なり
たのもしき御かけに　秘内大臣の詞なり
をさなきものを　秘ひめ君をあつけたてまつりして
となり
みつからは中々　結句内府へは雲井鴈のうと／＼し
きとなり
まつめにちかきましらひなとはか／＼しからぬ　こ
き殿の事なり
さりとも人となさせ　雲井鴈をは大宮へうちまかせ
たるとなり
ならふ人なきいうそく　花源氏の君の事なり　秘天
下無雙の有職なり　源氏並夕霧をさしていへり私
是は華族のすくれたる事をいふ也
したしきほとにかゝるは　夕霧君は内大臣の甥かた
のをひにあたるをいふなり
あはつけき　淡つけき也淡々しき心也さやうのふる
まひは數ならぬ人たにあしき事となり
なにはかりのほとにもあらぬ　私身の中にてめつら
しけもなき也夕霧と雲井鴈とはいとこなるを云り
かの人の御ためにも　夕霧のためにも然へからぬ事
となり
ゆかりむつひねちけかましき　秘めつらしけなきよ
しなり

おとゝきゝおほす所　源の御心を察してのたまふ
なり然へき事とはおほさしとなり
かゝる事なんと知らせ給ひてことさらにもてなし
源の御事をとかくのたまふうへにてことさらにも
てなしてならは又めつらしけなき事なりともさも
有ぬへしとなりあらためてならはまゐらせもすへ
きとなり
ゆかしけある事　花　けとほくもてなす事を云なり
嫁娶の儀式なとの事なり引つくろひてとなり
をさなき人々の心にまかせて御らんしはなちけるを
雲井夕霧の心にまかせてしらぬ様にて大宮のおは
しつるは曲もなきてとゝうらみ奉り給ふなりみけ
しきしり給ふへしと前にありし行衛なり
ゆめにもしり給はぬ　秘　大宮なり
けにかうの給ふもことわり　大宮の詞也
けにいとくちをしきことゝはこゝにこそ　秘　我こそ
おもふへけれとなり　かやうの事はよそきゝの大
宮の御あやまちと申へけれはとなり
もろともにつみをおほせ　二人の人々とおなしやう
につみしてのたまふはうらめしきと大宮のゝたま
ふなり
みたてまつりしより　秘　此姫君をわたしたまひしよ
り心をつくせし事也心てとにとは別して愛しうつ
くしみし心なり
そこにおほしいたらぬ事をも　内府のおほしよらぬ
事をも何とかなとよきやうにしたかりしとなり
物けなきほとを心のやみにまとひて　御子ならねと
も孫なれは心のやみとはのたまふなりいまたいは
けなき人々を男女の道なとを我心から思ひいそき
てしらぬさまにて有しにてはなしとしりたまはぬ
事なれはのたまふなり
さてもたれかはかゝる事　これよりいかなるものゝ
申つるそと不審し給ふなり
よからぬ人のことにつきて　虚言なと人はいふもの
なりそれをよからぬ人とはいふなり
きはたけう　きは〳〵しうつよくとなり
むなしき事にて人の御名やけかれん　秘　跡なきこと
なとを人のいふにやとなり弄同　もし虚言ならは
かやうにのたまひちらすはあしき事なりなき事故
御名のけかれてはとなり大宮の用意尤なりたしか

なる事をしりたまはねはなり
何のうきたる事にてか　私内大臣の詞也　不定なる
　事にてはなし定説なりとのたまふなり
さふらふ人々も　とイ一日のしりうことをのたまふなり
くちをしくやすからす思ひ給へらるゝやとてたちた
まひぬ　内府鬱憤散せさるのさまなり
こゝろしれる人は　此事よくしりたる人々の心なり
一夜のしりうことゝ　しりうことの人々はさためてお
とゝのたれ〳〵としり給ひぬらんよからすおほさ
ん事をおもふなり
ひめ君は何心もなくて　雲井鴈のかたへ内大臣おは
　するなり
わかき人といひなから　秘内大臣の詞也
心をさなく　雲井鴈をさして云也
われてそまさりてはかなかりけれ　花我子の心をさ
なきをみしらぬ我が猶はかなきとなり
さいなみたまふに　花さいなむは罪なり御めのとと
　ものかたにのたまふなり
かきりなきみかとの御いつきむすめ　秘醍醐皇女康
子親王事河海にみえたり　河丞相欲贖子罪陽右イ石汚

公孫誅漢書　康子内親王延喜皇女村上帝の御時弘
徽殿におはしましけるに九條の右丞相忍ひてまい
らせ給ひけるか後にはあらはれて出入給ひけり閑
院太政大臣公季母也　世繼　又左京大夫道雅通イ密通前
齋宮當子三條院皇女母后戒子云々
けしきをしりつたふる人　秘媒なとのありてつたふ
　るは常のことなり
さるへきひま　又何とそよき次なとのひまなくては
となり
これはあけくれたちましりて
宮の御もてなしよりもさしすこして　大宮の御分別
よりもさし過てかやうにたちましり給はんことに
てはなきなとゝ申へきもいかゝとなり
をとゝしはかりよりは　此段に御めのとたちのさい
なまれていふ詞なり
わかき人とてもうちまされはみ　これは世上の人の
事をいふなり
ゆめにみたれたる所おはしまさゝめれば　是は夕霧
の實々しきさまをいふ
おのかとちなけく　内大臣へ陳するやうには申さて

われとちいひ合てなけくなり
よしはしかゝる事　内大臣の詞なり　私てゝの様體内大臣の性ちと急なる心みえたり
心をやりてあらぬ事　人は何ともいへてなたはあらぬ事といはんとなりそれを心をやるとなり
今かしこにわたし　内大臣のかたへ雲井鴈をわたすへしとなり
宮の御心の　大宮なり
そこたちはさりとも　秘めのとたちをさしてのたまふなり
いとほしき中にもうれしく　雲井の鴈をいみしうの給ふはいとほしきなりその中にもめのとなとのとかなきやうにのたまふうれしきとなり
あないみしや大納言殿　秘按察大納言也　雲井鴈のまゝ父なり　弄雲井鴈の母按察大納言の北方にてわたり給ふにきゝ給はんとわぶるなり
めてたきにてもたゝ人のすちは　夕霧もたゝ人にはすくれたるなりされと女御にまいり給事なとこそ本意なれとなり　花女御后にならぬ事をいふなり
うちなけき給ひて　内府のさまなりいろ／＼姫君にのたまへともかひあるへきならねはなり
いかにしてかいたつらに　これゆへに此姫君をもてそこなはぬやうにしなしたきとなり
さるへきとち　内府のめのとたちなとを方人（カタウト）にしてのたまふなり
宮はいと／＼ほしとおほす中にも　大宮此事をいとほしとはおほすなり
中にもをとこ君の　秘夕霧をは猶大切におもひ給ふとなり
なさ（けイ）なうこよなき事のやうに　大宮の御心には内大臣のあるましき事のやうにの給ふもあまりいかゝとおほすなり
もとよりいたうおもひつき給ふ事　秘内大臣は此姫君をはおもひすてゝおき給ひしを我こそかくやしなひたて侍しものをとおほすなり花同　私大宮のもてかしつきてかくしなし給へはこそ春宮への事なとも思ひより給へ内大臣のうちすてゝおき給ひしとなり
とりはつしてたゝ人のすくせあらはこの君よりほかに　秘春宮をさしおきては此夕霧の外に誰人をもと

むへきそとなり
これよりおよひなからんきはにはとこそおもへと
大宮の御心には夕霧には雲井の鴈よりも猶一かと
ある帝王の御女なとをもなとかえ給はさらんにと
結句不足におほすなり
わか御心さしのまされはにや　雲井の鴈よりも夕霧
に御心さしまされはかく色々に夕霧に理をつけ給
ふなり
おとゝをうらめしう　内大臣のゝたまふを結句うら
めしくおほすとなり
御心のうちをみせたてまつりたらはましていかに
大かたにてたに内大臣の大宮をうらみたまふに此
御心のうちをみせたてまつりたらはいかはかり内
大臣の腹立したまはんとなり草子地なり大宮の御
こゝろのうちを内大臣にみせたてまつりたくとな
り
かくさはかるらんともしらて　冠者の君也　内大臣
の腹立の事を夕霧のしらぬとなり
一夜も人めしけうて　一日内大臣と來りあひ給ひし
時の事なり

夕つかたおはしたるなるへし　草子地なり
宮れいはいひしらすまちよろこひ　つねには夕霧を
大宮のまちうけよろこひ給ふかけふは雲井の鴈の
事心にある故に實々しくあひしらひ給ふなり　河
海には宮れいはせひしらすとあり註に是非不知と
あり
御ことにより内のおとゝの　秘大宮の詞也
ゆかしけなき　ちかきゆかりとちといふなり
心もしり給はてやと　もしゝり給はぬ心にやとなり
心にかかれる事の　秘夕霧の心也
何事にか侍らん　秘夕霧の詞也
しつかなる所　學問所なり
あはれに心くるしくて　大宮の心に夕霧を心くるし
う思ふなり
いまよりたに　秘大宮の詞也
こと事にいひなして　つよくもえのたまはす夕霧を
いたはり給ふ心のみえたり
いとゝふみなとも　夕霧の心に今はふみかよはしも
かたからんとなけかしきとなり
物まゐりなとし給へと　夕霧の何もみいれ給はぬと

也
ねたまひぬるやうなれと　夕霧のねたるやうなれと
心あくかるゝとなり
中　なかさうしをひけと　夕霧と雲井の鴈とのおはする
かたの中へたてなるへし
よりかゝりて　夕霧なり
鳳の竹にまちとられて　風生竹夜窓間臥月照松時臺
上行白樂天
をさなき心ちにも　雲井鴈の心なり
雲井の鴈もわかことやと　秘是より名となれる也
河霧ふかき雲井の鴈もわかことやはれせぬ物のか
なしかるらん　秘引歌同之
いみしう心もとなけれはこれあけさせ給へ・花これ
は姫君のひとりことを聞て冠者の君の中のさうし
をあけたまへと御めのとにのたまふなり
小侍従やさふらふ　秘雲井鴈のめのとなり　弄御
めのとなり
ひとりことをきゝ給ひけるも　秘雲井鴈の心なり
あひなく御かほをひきいれ　はつかしく思ひてかほ
を引入るなりおとなしからぬ體なり

あはれはみしらぬしも　草子地なり　雲井鴈のあは
れとはおもふをいへり
かたみに音もせす　互になり
夕霧　さよ中に友よひかはすかりかねにうたて吹そふをき
のうはかせ　花冠者君の歌なり友よひかはすとは姫
君の雲井のかりも我てとやのひとりことなり　弄
目面なり聞てかなしき心あるへし　秘夕霧歌なり
聞てかなしき心なり　私秘弄兩抄の義尤然るへし
身にもしみけるかなと　秘「大方の秋のさかとはし
りなから荻ふく風そまつは身にしむ　六帖「ふき
よれは身にもしみける秋風を色なき物と思ひける
哉　秘引歌に吹よれは身にもしみけるに此歌の結
句の荻のうは風身にもしみけるかなとかきつけた
るさま艶におもしろし　弄引歌秘に同し
宮のおまへにかへり　夕霧は大宮の御あたりへかへ
りてね給へるなるへし
わか御かたに　三條の宮にて夕霧のゐたまふかたな
り
女はたさはかれ給ひし事のみ　雲井の鴈の心内大臣
の給ひしさまをはつかしくのみ思ふなり

我身やいかゝあらん人やいかゝおもはん　我身のため人の思はん事の分別もなき雲井鴈のさま也と也
おかしうらうたけにて　夕霧の事を雲井の鴈のおもふ心なり
又かうさはかるへき　秘かくへたてらるへき事とも思ひたまはさるなり
御うしろみともし　雲井の鴈の方の人ともなり
おとなひたる人やさるへきひま　いまたさやうの心はへもしらねはさるへきひまをもえうかかひ至（出イ）すあはぬをくちをしくのみ夕霧のひたすらに思ふさま也
おとゝはそのまゝに　秘内大臣なり母宮へまいりたまはさるなり雲井の鴈をわか御方にわたしたてまつらんとなり
北の方にはかゝる事なんとけしきも　秘雲井の鴈の繼母なり
大かたむつかしき御けしきにて　内大臣の機嫌なとむさとあしきさまなり
中宮のよそほひことにて參りたまへるに女御の世中　秘弘徽殿の立后なきを無念に思ひ給ふ故に里にいたし奉らんそのほと雲井の鴈をも里におき奉るへきといひなし給なり
さすかにうへにつとさふらはせたまうて　秘立后こそなけれ御寵愛はおとらされは此うへのつほねにつとのみさふらひ給へは常に主上のたへすましますなり　弄弘徽殿のうへつほねに内のつねにましまして女御もさらに祇候あるよしなり
心ゆるひせす　さふらふ女房も油斷のなきなりくつろきなき心なり
ある人々も　弄内大臣の女御のおもと人共なり雲井の鴈を俄にわたしたまはんも人いかゝとおもふへけれはまつ女御をまかてさせたまふなり
にはかにまかてさせ　秘雲井鴈をわたさむとてまつ女御を俄にわたし奉り給ふなり
御いとまもゆるされかたきを　弘徽殿に御いとまゆるしかたくみかとの思召たまふなり
うちむつかり給ひてうへはしふ〳〵に　主上の御けしきよくもなきなり御いとまをいたし給はぬとなり
しひて御むかへ　御門は内大臣の下に腹立もある故

也

つれ〳〵におほされんを　内大臣のことはなり　女御の御里にてつれ〳〵ならんとなり女御へ申たまふなり

ひめ君わたして　雲井鴈をよひ給はん事をいひ出し給ふなり

いとさう〳〵しくおよすけたる　弄さかしくさしすきたることゝろなり夕霧をいへり說々無益なり　私兩抄の義を用へし但河花の義左に註す　河纚(サクシリ)禮記恃同上　性の字或說人、なまさかしきをさくしれたりといふことあり云々又はさかしらといふ歟くとかとらとりと五音通するゆゑなり云々此事秘說あり　花　纚の字をさくしりとよめり角にてしたる錐也物のむすほゝれたるを此きりにてとく物なり禮記內則篇に童子の父母につかうまつる時の身に具する物一つ也冠者君の學文して父母につかうまつる時の禮儀をしり給はんからに此さくしり一を身にしたかへ侍らん事も有へからすさかしきさかしらなといふ說もあり心をやりてうたかへる說なりたしかに證據みえ侍らす

宮いとあへなしと　秘大宮也　無敢也

ひとりものせられし女こ　秘葵上なり　こゝへ內大臣むかへにおはしたるに大宮の詞なり

へたてありて　秘雲井鴈の事故うらみあるさまにの給ふ事なり

うちかしこまりて　秘內大臣の返事なり

心にあかすおもふ給へらるゝ事は　一端を申はかりなり思ひのほかにへたてありておほしなすもつらくとある詞をうけて心のへたてなき故に心におもふとをりをかく申すとなり

ふかくへたておもふ給へる　秘ふかく思ひへたて奉るにてはなきとなり

うちにさふらふる世中うらめしけ　秘女御里いての事なり

くし侍れは　河苦也　弄くつしとよむへし屈するなるへし

あからさまに　白地なり

はくゝみ人(ビト)となさせ　秘雲井鴈を人となしたまふなり

かうおほしたちにたれは　秘大宮の詞也　私大宮の

心なり　私内大臣の御心のとかめ所おはすれはこれほとにおほしめし立事をとまりたまはしとかくの事をの給はぬなりあかすくちをしうおほされてといふまては大宮の御心也

人の心こそうきものにはあれと　これよりさま〳〵におほす大宮の御心なり

かくをさなき心ともにも　秘夕霧雲井鴈なとなり

かやうの事ともを思ひより給へるはうとましき事となり

又さもてそはあらめ　さて又夕霧雲井鴈の事はさもあれ内大臣の物の心を分別しなから大宮のとかのやうにのみ思ひてかやうにとりかへしたまふは情なきとなり親子の中とてもたのみかたきとなりこのおとゝは物のおもひやりもふかきとのみ思ひしに此事はわか身ひとつのあやまりにのみおもひ給ふ事をうらみ給ふなり

これよりうしろやすき事も　内大臣の御かたにおき給ふともまた心やすくのみあらしとなり

をりしも火さの君まゐり

このころはしけうほのめき　秘一月に三日はかり大宮に参り給へとありしに合せてしけきとなり弄同私もし雲井鴈にあひみる事もやとうかゝひ給ふ也

心のおにゝはしたなくて　夕霧の内大臣にあはむ事をおもはゆく思ひてかくれ給ふとなり

左の少将少納言兵衛佐侍従大夫（タイフ）の君　皆大宮の御孫也

みすのうち　大宮のおはする簾中へは此人々はいりたまはぬなり

左衛門督　是は内大臣の兄弟也別腹也

故とのゝ御もてなし　故摂政のおきてのまゝなり大宮は継母なれと此人心よせあるとなり

その御子とも　左衛門督権中納言の子とも参りて此中にあるなり

この君（君イ）にゝるにはひなく

大宮の御心さしも　秘夕霧一人をうつくしと思ひ給ふなり

たゝこのひめ君をそ　秘夕霧につきては雲井の鴈をそ大切におもひたまふなり手ならしたまふ故なり

かくてわたり給ひなんを　秘たゝいまひきわかれ給ふへき事なり

殿はいまのほとに内にまいりて夕つかた　内大臣なり　内大臣は參内ありて夕つかた御むかへを奉らんとなり此間に用意なとあるへきよしなり弄

いふかひなき事をなたらかにいひなしてさてもやあらましと　花是より大殿の心に思ひ給ふことなり　秘内大臣の心の中なりかくて夕霧にゆるしても有へきとはおほせと又それも口惜なり

人の御ほとのすこしもの〳〵しう　夕霧の官位なとのゐかりての事となり

心さしのふかさあさゝ　秘夕霧の心さしをこゝろむへきとなり

ことさらのやうにもてなしてこそあらめ　今さらのやうにしなしてむこにとらんとなり

せいしいさむとも　河制諫也

宮もよもあなかちに　草子地なり　大宮のなほさりにのたまふ故なるへしとおもふ心か内大臣の滿腹なり故にかくおもふなり

こゝにもかしこにも　内大臣の北方へも大宮へも女御の御ときにとの事を面(オモテ)にして雲井の鴈をよびとり給ふなり

わたし給ふなりけり　私いふかひなきといふよりこゝまて内大臣の心をかけるなり　草子地に察してかける詞といふへし

宮の御ふみにて　弄大宮より雲井鴈へなり　秘同殿なから各々にすみ給ふ故に文を奉り給ふなり

おとゝこそうらみもし給はめ　文の詞なり内大臣こそ大宮に隔心有とも雲井鴈はわか心さしをみしり給ふらんいま一たひ對面ありたきよしなり

いとおかしけにひきつくろひて　御返事におよはす雲井鴈のおはしたるなり

十四になんおはしける　雲井の鴈ことし十四歳なり夕霧に二つまさり給へり

かたなりに見え給へとこめかしう　秘こめかしうはおほ〳〵としたるなり巨の字なり大やうなる心なり　河こゝにては古めかしきにあらす子めき歟君は小めき歟　私秘の說可用之

かたはらさけと　大宮の詞なり

みはつましきいのちをこそ　大宮の行末みしかくて雲井鴈の行末を見はつましき事をさへなけきつるにとなり

うつろひ給ふやいつちならんと　秘いつくへかすくにうつろひ給ふらんといふかいのちのうちにかく引わかれんとは思はさりしとの給ふなり
ひめ君ははつかしき事を　わかれたてまつらん事よりは夕霧との事をはつかしく思ひてかほをもたけすなくさまなり
をとこ君の御めのと宰相君　夕霧の乳母なり
おなし君とこそ　宰相君の詞夕霧雲井鴈は行末まてのちきりと思ひしをかく引わかれ給ふ事かとなり
殿はことさまにおほしなる事　父内大臣はいかなる人に縁をむすはむとの給ふとも同心し給ふなといひしらするなり
いよ／＼はつかしと　雲井鴈のさま也
いてむつかしき事な　秘大宮の詞也
いてや物のけなしと　宰相君の詞なり　夕霧をあなつり給ふ事なり
けにわか君や人にをとり　秘若君我君兩樣也めのとの詞なれは若字可然歟　弄宰相君詞也夕霧のめのとなり　我君也　私若君も可然也
心やましきまゝに　夕霧を思ひあなつり給ふとくちをしく心やましきまゝにさま／＼にいふなり
ものゝうしろに入ゐて　夕霧のかくれゐて雲井鴈を見たまふなり
人のとかめんもよろしき時こそ　忍ふも大かたの時こそわれとなりよろしき時とはなほさりの時といふなり
御めのと　夕霧のめのと宰相君なり
宮にとかくきこえたはかり　大宮へも何かと申まきらはして雲井鴈に夕霧をあはせ奉るなり
おとゝの御心のいとつらけれは　秘夕霧の詞内大臣の事なり
さはれおもひやみなん　秘さわれ又さはれとよむ人もあり云々弄同　私さらはさてなといふ心歟三光院なとさはれとよまれしにや
なとてすこしひまありぬへかりつる　此程たいめんもあるへかりつる物をと悔みたまふなり
まろもさてこそあらめ　雲井鴈の詞なり
戀しとはおほしなんや　又夕霧ののたまふ詞也
すこしうなつきたまふ　雲井鴈のさまなり
御となふらまゐり殿まかて　內より退出あるなり　く

らまきれに對面に給ふに火なとともすなりそのをりふし内大臣も禁中より退出となり
そゝやなとをちさはけは　私驚破(ソゝヤ)長恨歌　内府の退出におとろくなり人々の體を云なり
いとおそろしとおほしてわなゝき給ふ　雲井鴈の内大臣におちてわなゝき給ふさまなり
さもさはかれはとひたふる心にゆるしきこえたまはす　是は夕霧のこゝろなりとてもさやうにもてさはかれはと也ひたふる心とは一向にくるしくもなく思ひなりて雲井鴈のかへらんとするをゆるしたまはぬとなり　秘夕霧のくるしくもなく思ひ給と也
御めのとまいりて　雲井鴈のめのとなり
けしきをみてけに宮しらせ給はぬ事にては　秘此樣體を宮のしり給はぬよしあるはそら事と云(言イ)なり
いてやうかりける世かな　雲井鴈のめのとのいふ事なり
殿のおほしのたまふことは　内大臣の事なりそれはさておきぬ繼父按察大納言又實母なとのおもはん事よとなり
めてたくとも物のはしめの六位すくせよと　雲井鴈也　河三條の上のめのとの冠者の君をうけさる詞也六位をは冠者といふ無官のものは冠者といふなり　花いまた五位にならさるによりて六位といふ誠は無位なるへしうへにしるし侍りすくせは夫婦のちきりをいふなり
たゝこの屏風のうしろに　夕霧と雲井鴈とおはする屏風のうらにてかく乳母のいふをきゝ給ふなり
あはれもすこしさむる　夕霧をおとしむるか心にかかりてこゝのあはれもすこしさむるとなり
かれきゝたまへ　夕霧の詞雲井鴈にいひかけたまふなり
夕霧
くれなゐの涙のふかき袖の色をあさみとりとやいひしなるへき　秘夕霧の歌なり　聞心あらはなり　袖の淺みとりも泪の紅になりて色ふかきよしなり
雲井鴈
いろ／＼に身のうきほとのしらるゝはいかにそめける中のころもそ　花いかにそめける中の衣そとは冠者君のあさみとりをよみたまへるにつきたる姫君の返歌なり　秘かくさま／＼に人のもてあつかふなるはいかなるいろにそめたる衣かとなり
殿いり給へりわりなくてわたり給ひぬ　内大臣のか

たへおはせんとてこゝをたちわかれ給ふなり
わか御かたに　夕霧のわか方になり
御くるまみつはかりにて　雲井鴈の内大臣の方へわたりたまふなり
しつ心なければ　夕霧の心なり
ねたるやうにて　大宮の御まへへめし給へと夕霧のね入たるやうにしてうこかぬとなり
うちはれたるまみも人にみえん日　人にもみえじ大宮にもめしとゝめられしとわか方へいそきおはするなり學問し給ふ所なるへし
道のほと人やりならす　秘イ私不及引歌　河「人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていさかへりなん
夕霧霜こほりうたてむすへる明くれの空かきくらしふるなみた哉　秘景氣おもしろし　上のイ三四句殊勝也云々
大殿にはことし五せち奉りたまふ　秘源の參らせらるゝ五節に惟光かむすめまいるなり弄同　弄問云源氏の君は公卿の分にや　一勘可然むすめなともちたる人にかけおほせらるゝ公卿分又受領分は國司たる人なりこれを内裏の五節となつけ侍り　或御說に五節は受領の者に仰付られてこれをとりおこなはせらるゝなり其國より祿などをのほせてとりおこなふなり
なにはかりの御いそきならねと　秘させる經營にてはなけれともとなり
いそきせさせ給ふ　紫上のかたなるへし
ひんかしの院には　秘花ちる里の方なり
まいりの夜の人々の　參りの夜とは曉參（グワサン）の事かとなり
とのには大かたの事とも　二條院の事なり
中宮よりもわらわしもつかへのれう　秋好よりもさうそく奉り給ふなり
過にしとし五せちなとゝまりて　去年薄雲の諒闇なりことしは色あらたまりとりそへてきらをつくしたる也　花諒闇によりて五節停止せられし也　河薄雲女院崩依諒闇被停止也　本朝月令曰五節舞者淨御原天皇之所制也相傳曰天皇御吉野宮日暮彈琴有興俄爾之間前岫之下雲氣忽起疑（如イ）知高唐神女髣髴應曲而舞獨入天矚他人不見擧袖五變（放イ）故謂之五節其歌曰　乎度綿度茂邑度綿左備須毛可良多萬乎多茂（ヲトメトモヲトメサビスモカラタマヲタモ）

度遷摩岐底乎度綿左備須茂　善相公異見曰（内イ）一請
減五節妓員事右臣伏見朝家五節舞妓者大嘗會時五
人即皆預叙位其後年々新嘗會時四人無預叙位之例
由是至于大嘗會時權貴之家競進其女以宛此妓尋常
之年人皆辭遁可闕神事爰有新制令諸公卿及女御輪
轉進之其費甚多不能堪任伏案故實弘仁承和二代尤
好內寵故遍令諸家擇進此妓即以爲選納之便也諸家
儻倖天恩不顧靡費盡財破產以貢進方今聖朝修其推（雄イ）
薄之義防閑此等妓女舞畢歸家無預燕寢然則此妓數
人逢有何用重案舊記昔者神女來舞未必有定數四五
人伏望擇良家女子未嫁者二人置爲五節妓其時服月
料稍令饒給節日衣裝亦給公物若負節不嫁經十ヶ年
者即預女叙位聽令出嫁若願留侍者預之藏人之列即
擇其替人亦如前年　寛平遺誡曰每年五節無人進出
追彼期日經營尤切也今須公卿之中令貢二人雖非其
子必令求貢殿上人一人選入召之當代女御又貢一人
公卿女御依次貢之終而復始以爲常事須入十月節召
仰各身在所令用意
按察大納言　雲井鴈のまゝ父なるへし
左衛門督　秘葵上の兄弟なり是公卿分なり

うへの五せちにはよしきよ今はあふみのかみ　公卿
分二人受領分二人也受領分は上より出さるゝ心也
さてうへのとは云り　弄問殿上人のまゐらするを
うへの五節といふと河にあり其分にや　一勘殿上
人の參らするは大內よりの心也　花五節は恒の年
は公卿二人殿上受領二人四所也代始は公卿二人殿
上受領三人五所也其受領の分をは殿上人まて參ら
すれは上の五節と云也五節舞姬四人事善相公（歟イ）意見
云新嘗會時四人云々今年依爲新嘗會若四人也公卿
二人者按察大納言左衛門督也殿上受領者良淸惟光
也以上四人也　私云よしきよとは近江の守にて左
中辨なるといへり官の次第をいはゝ左中辨は本官
近江守は兼官なれは左中辨にて近江守かけたると
いふへきを五節をたてまつる事は受領か本なる故
に近江守にて左中辨なるといへる歟
みなとめさせ給て宮つかへすへて　秘同河に見え
たりとあり　弄問五節をとゝめ給ふ事例の事にや
一勘花鳥に註せらるゝ分なり
おの〳〵むすめを　當年四人の舞妓皆其人々の女也
とのゝまひゝめはこれみつの朝臣のつのかみにて左

京大夫かけたるむすめかたちなといとおかしけなるきこえあるをめす　弄問惟光女は源氏のおとゝのまゐらせらるゝ分歟又受領分歟　一勘これは受領分也但源氏君よりたてまつらるゝよしなり
からいことに　惟光か心なり　迷惑するなり
大納言のほかはらのむすめ　按察大納言の女なりほかはらは妾腹といふなり
あそんのいつきむすめを　秘惟光はわかむすめ參らせんことをいかゝと思ひ侍れと按察大納言もはか腹の實子を奉り給ふ故に實の女を奉るなり
わひておなしく宮つかへやかてせさすへく　花五節の舞姫やかて宮つかへにめしとゝめられし事善相公の異見に見えたり　私わひてとはさらはせめてそのまゝ宮つかへさせんと思ひ立と云歟
舞ならはしなとは　秘かねて里にてよく沙汰せしとなり
かしつきなと　かいしやくの人をいふへし
その日のゆふつけて　夕暮かけていふなり
すくれたるをと御らんしくらへえり出らるゝは　わらはなとを御らんしくらふるなりえり出らるゝはその事を選ひ給ふにそれに入たるは又程につけたる面目となり
御前（ゴゼン）にめして御覽せん　御前の試は寅の日なり
御前をりたゝせて（わたらせイ）　これは源の御まへにてのうちならしなり　私まへのをは御前とよみ後のをはおまへとよむへきか
いまひとところのれうを　秘然へき人のあまたあれはいま一分も參らせたきとなり
たゝもてなしようい　かたちはいつれともなし何樣體の然へきを撰出られたるといふなり
大かくの君　秘夕霧なり　私始て大學の君とかけり
くしいたして　河苦也　苦し痛なり　私文もよまぬは學問もせぬとなり
心もやなくさむと　五節の用意なとをみてまきらはさむとなり
かたちはいとめてたう　夕霧也
うへの御かたには　秘紫上の御方なり
わか御心ならひ　秘繼母の中をさけ給ふなと　聞薄雲の心のあるなるへし
いりたち給ふ　けふは此とりまきれにつねよりはち

かつき給ふなり
まひゝめ　惟光女なり
やをらよりて　夕霧のゝそき給ふなり
なやましけに　秘惟光女也
かの人の御ほと　秘雲井の鴈に似たり
いますこしそひやかに　雲井鴈よりちとせいのたかきなり
やうたいなとのことさらひ　雲井の鴈よりも年なとゆきておとなしき歟
何心もなく　秘心もなくみかへりたるなるへし
夕霧　あめにますとよをか姫の宮人も我心さすしめをわするな　河豊岡姫とは五節舞姫の事なり我物に領したるにはしめをさすなり是を神事の時なれは木綿によそへていへるなり
拾神樂歌「みてくらはわかにはあらすあめにます豊をか姫の宮のみてくら　花豊岡姫は天照太神を申す也　秘天照太神也宮人もとは天人なり舞姫を云我領する心をたかへそとなり弄同　閑延喜式神名帳廿一番豊若宮(トヨワカ)とあり住吉の内にあり　惟光は今攝津守也仍如此歟稱名院説也云々　九禪抄に青表紙にはとよわか姫とあり用之惟光は攝津守にてあれは豊若姫は住吉廿二所おはします其内豊若姫と申あり攝津の守か女なれは住吉の義をいへるなり云々　私是は又稱名院の説也少異ある間註之也しめとは標(シルシ)也物を領するとてのしるし也神事の折節なれは註連に事よせたる也
みつかきのとの給ふ　河拾萬曰「をとめ子か袖ふる山のみつかきのひさしき世より思ひそめてき
秘引歌河に同し
うちつけなりける　秘久しき世よりの心はあまりにうちつけなると草子地にかくなり
わかうおかしきこゑなれとたれとも　惟光の女の心なり夕霧(かイ)をたれともしらぬなり
なまむつましきに　此女のおもふ心なり
けさうしそふとて　けしやうなとしそふるなり
さはきつるうしろみ　花そゝきつるとあり註云そゝめく心也とあり　河捶(ツツキ)文選
くちをしうて　夕霧の心なり
あさきの心やましけれは　六位の袍なり
五節にことつけてなほしなとさまかはれる色ゆるさ

れて　河殿上六位聴直衣也蒙禁色雑袍之宣旨歟或説
被加職事歟六位職事着禁色故也　西宮抄云指貫は
王者以下衆人所用也古時有制臣下不用近代五位已
上昇殿六位皆用之也云々　弄六位禁色歟　色ゆる
されては詞のかさりなりたゝ直衣ゆりたるなり
一禪御說云々　或夕霧六位にて直衣をゆるさるゝ
事は前段の事によりてさまかはれる色ゆるされて
といへりあさきのうへのきぬにかはりたるよしを
いへる詞なり色はたゝ詞也又御說五節には六位も
直衣をゆるされてきるなり五節にかてつけてゆる
さるなり　秘五節の日直衣を着する也　余考宇治
左府記仁平元年十一月十七日癸丑晴今夕五節參内
師長等蒙聴直衣之宣旨束帶參入似無面目仍不參内（次イ）
云々案之五節之次上古直衣を聴歟夕霧も此以直衣
を聴と見えたり　聞書にも此事あり
みかとよりはしめたてまつりて　主上をはしめたて
まつりて夕霧を別しておはしめすなり
五せちのまいるきしきはいつれともなく　花十一月
中丑日舞妓參入式（或）（曉參）則有帳臺出御寅日御前試卯
日童女御覧辰日節會舞妓進舞

大殿のと大納言のとは　按察の女と惟光か女となり
こゝしう　巨々也　弄大やうなる心なり　河古々歟
ふるめかしき心歟　又巨々大やうなる心なり　廣
韵云巨は大なり
ものきよけに　草子の地なり何事もしたてからなる
となり　かうはめらるゝなりけりといふまて草子
地也
みなすこしおとなひつゝ　秘上古は十二三也　今年
は年もたけたるなり
大殿　源も參内して見給ふなり
むかし御めとまりし　秘つくしの五節の事なり　す
まの浦へおとつれし人歸京の後もまくなきつゝり
てとある所に御ふみ奉りし大貳の女也　河乙女は
少き女をいふなり萬葉に未通女なと色々にかけり
未嫁女のことなりといへり天乙女は天女のとなり
只女の惣名なりされは又萬葉には妻女ともいへり
昔とは筑紫の五節也花散里の卷にみえたり
たつの日のくれつかた　河十一月中の丑日より始る
若丑二あれは下の丑なり但上の丑も有例此日まい
りの日といふ辰の日は五節の終の節會の日也

源
をとめても神さひぬらんあまつ袖ふるき世の友よは
ひへぬれは　をとめても神さひぬらんは昔の五節を
思ひ出て云りあまつ袖ふるは人丸の歌の乙女子か
袖ふる山のみつかきをふるき世にとりなしたるな
り是は源氏の我事をよみ給へり　秘つくしの五節
のもとへつかはし給ふなり我身もとしのふりぬる
よしなり
とし月のつもりをかそへて　秘久しくとたえおきて
御たつねあるもあはれなるなり　此歌たゝおほし
けるまゝの事なれはかくいへりそれを五節の心に
一段御懇切なるとおもふははかなしとなり此段草
子の地に察してかける歟
返五節
かけていへはけふの事とそおもほゆる日かけの霜の
袖にとけしも　花かけていへはとはいひかくれはの
心なり羅のかけをひかけとよめは五節の舞妓の日
かけの糸をかさしにするもこれにかたとるなり又
此歌の袖にとくる霜は日影にそへたるなり　秘そ
のかみ源に逢たてまつりしを結句におもはへたる
なり袖にとけしもとは源氏に五節の逢たりし事を
思ひよせたるなり　私此五文字そのかみの事をう

けて仰らるれはと云ふなり
あをすりのかみよくとりあへて　弄五節日ことに着
するきぬの色かはるへし辰日は青すりをきるによ
せてかけり　花舞姫の裝束丑日は赤色唐衣寅日は
青色唐衣辰日は青摺唐衣赤紐日蔭鬘等也青摺は小
忌の事也源氏君のふみやり給ふも辰の日の事なれ
は青摺の紙にて五節君の返事をかきたる也　秘辰
日は青すりをきる故にをりに逢たる也　河青摺の
紙とは青き蠟紙なり唐紙の上は印にあてて蠟にて
摺たれは云なり五節の折節なれは此紙のたよりあ
るによりて用之歟
こずみうすゝみ　墨のこきうすき也
人のめとまる　夕霧の惟光か女の五節に心とまるな
り
けゝしう　河けさやかなるなり　又潔齋なり
つらき人のなくさめにもみるわさしてんとおもふ
雲井鴈のなくさめにみはやと夕霧のおもふ心なり
かたちもにくからぬなるべし
あふみのはからさきのはらへつのかみはなにはとい
とみてまかてぬ　秘五節は內野にて祓をするなりて

てに國の守によせてかける妙なり弄同　齋院なと
彼所にてはらへし給ふ事はわり弄　花前齋宮歸京
の時は於難波有祓前齋院退出の時は於辛崎修祓て
れ皆神事をとく解除也五節の難波からさきの祓是
等に思ひなすらへ侍り五節前後の齋に皆祓をする
なり何の祓も河邊海邊にて禊をする本義なり辛崎
難波七瀨の禊なり仍近江攝津國司奉つる舞姬此禊
尤有便宜乎舞姬は五節はてゝ曉天退出の時祓をす
るなり上古は辛崎難波までも下向しけるか近代は
內野にて陰陽寮參りまうけて勤仕也　七瀨所々
難波　蠡大　河俣攝津　大島　橘小島山城　佐久奈谷
辛崎近江　又洛中七瀨者　河合　一條　土御門　近
衛　中御門　大炊御門二條末　應和三年二イ七月廿一
日御記曰藏人式部丞藤原雅我元イ供御祓物以明日令天
文博士保憲赴難波湖及七瀨三大河臨禊　秘「拾みそき
するけふからさきにおく綱は神のうけひくしるし
也けり　同集に伊世歌詞に難波にはらへしに侍て
まかり歸ける曉に森の侍りけるに郭公の鳴けるを
聞て「時鳥ねくらなかからの聲きけは草の枕も露け
かりけり

大納言もことさらに　ことさらとはわさと別して參
らせむと奏してまつ退出なり
左衛門督のその人ならぬを　秘實子にはわらさるな
り　弄宇多御門の御制あり
それもとゝめさせ　秘五節に參りたるなり弄同
つのかみはないしのすけあきたかに　惟光女を典侍（ナイシスケ）
にとおもふなり
さもやいたはらましと　勞なり　源の御心なり典侍
にと執奏あらんとなり
かの人は　秘夕霧なり　宮つかへせん事をきゝては
いなく夕霧の思ふなり
わかとしのほとくらゐ　夕霧の身上を卑下したるな
り
わさとの事には　是を雲井鴈をさしおきて思ふには
あらねとも又心にかゝるをいへり
うちそへて　秘雲井鴈の事に打そへてなり
せうとのわらは殿上　秘此舞姬の兄弟なり
五せちはいつる　夕霧の詞也
ことしとこそは　せうとの童の返答也
かほのいとよかりし　又夕霧の詞也

ましかつねに　秘汝か也　汝字の事歟　河古人釈に
まろか也云々今案汝歟日本紀に今の字をいましと
よめりそれを略してましと云歟或は爾也とも書り
いかてかさは侍らん　秘返答なり
さらはふみをたにとて　此わらはして文つかはす也
さき〳〵もかやうの事は　秘かやうの事は文もいま
しめし物をと思へともなり
としのほとよりはされて　惟光か女の事をいふなり
みとりのうすやう　六位の色によれる也花弄同
[夕霧]
日かけにもしるかりけめやをとめこかあまのは袖に
かけし心は　わか心かけたるを云り　聞けめやのや
文字はやすめ字歟如何　私云やの字いさゝか心あ
る歟　河日かけとは蘿(カツラ)蔦爲手襁諸社祭にも此ひか
け草を鬘とする也
ふたりみるほとに　秘兄弟なり　秘惟光女と童とな
り
ちゝぬし　秘惟光なり父主なり　河主也世繼云なに
かしの藏人にていますかりしかと云々いさゝかか
しつく心なり
よからぬわさしけりと　このわらはをしかるなり

たかそて(とイ)　惟光のとふなり
殿のくわさの君　童の詞なり
なてりなくうちゑみて　秘惟光のよろこひたるなり
きんじらはおなしとしなれと　汝世繼竹取うつほ等
にあり　秘汝等也弄同　童と夕霧と同年なり
はゝ君にもみす　五節か母惟光の妻也　みすはみす
るなり
この君たちの　是より惟光の夕霧の事を母にいふな
り
殿のおきてをみ侍るに　弄惟光源氏の心をいふなり
秘源の御心をいふなり但夕霧をいへる可然也　私
源の御心とみて然へし
あかしの入道のためし　惟光のよろこひいふことは
なり
みないそきたち　秘かやうにはいへとみないそきた
ち侍るなり　私云此義心得かたしかやうにのたま
はゝ夕霧に參らせんなとゝいへと先只今宮つかへ
にいそき出たつとゝりみたしたると云なり
かの人はふみをたにえやりたまはす　花是よりは雲
井鴈の事なり弄同　秘雲井鴈のかたへふみをたに

かよはしたまはぬとなり　私云此義又三抄共に雲井鴈の事とあれとさとはみえ侍らす或抄又聞書には五節の事とあり尤然へし其故は五節の事とみるにてみないそきたつといふ心よくきてえたるなり夕霧のかやうに一たひはかりの文なれは惟光の奉らん事もかなはて宮つかへにいそきたつ也夕霧はたよりもまれに又まさるかたの雲井の鴈にのみ心かゝりて文をたにえやり給はすといふなりさてつひに宮つかへしたる人なりてのかの人と云は夕霧のことなり

たちまさるかたの事　是より雲井鴈の事なり

さとさへうく　秘雲井鴈の事を思出侍るつまとなる故に三條宮も物うくおもはるゝと也　花里は三條の宮をいふ也猶こもりゐたまふは二條の東の院也

殿はこのにしのたいにそ　秘夕霧を花散里にわつけたまふ子のことくにしたまへとなり花鳥同

大宮の御よのこりすくなけなり　これより花散里へ夕霧をきこえあつけ給ふ源の詞なり　ゆくすゑまてうしろみ給へとなり

たゝの給ふまゝの御心にて　源ののたまふまゝにし給ふなり　花散里の心いつくにてもかく見えたり

ほのかになと見たてまつる　秘夕霧の花散里をほのみ給ふなり

かたちまほならす　花散里の形すくれ給はぬ也

人はおもひすて　源は心を本とし給ふ事と夕霧のおもひしるなり

つらき人の御かたちを　雲井鴈を心にはなれす思ふはあちきなしとなり

心はへのかうやうに　花ちるさとの心はえよしと夕霧のみしるなり

又むかひてみるかひなからん　秘夕霧の花散里の事を思ひ給ふなり

殿の今にさやうなる御かたち御心とみ給うて　花ちる里のかたちすくれぬを源のさしむかひなとはし給はぬ事をいへり

はまゆふはかりのへたてさしかくしつゝ　弄几帳をいふ也　河拾遺人丸「みくまのゝうらのはまゆふもゝへなる心はおもへとたゝにあはぬかも　秘木丁のへたてをいへり常は隔てかさなりたる事にいへりこゝにうすき事にいへるめつらしく妙なるな

り　花　はまゆふはうすきものなれは几丁のかたひ
たをいふなり　栄花物語第廿（九イ）云袖くちきぬのかさ
なりたる程うらのはまゆふにやあらんいくへとし
りかたしと云々これはかさなりのおほき事をたと
へたるなり

心のうちそはつかしかりける　夕霧の花散里の事を
いろ〳〵におもふかはつかしきと察してかけるな
り

大宮のかたちことに　河高光日記「鏡山君か影もや
そひたるとみれはかたちはことにそありけることな
るかたちとは出家の故なりさまかふるなといふな
り此歌の心にはかはるへし　秘いまたかたちのき
よらにましますとなり

人はかたちよき物とのみ　女のかたちのあしきをさ
のみ夕霧のみ給はぬ心なり

もとよりすくれさりける御かたち　花花ちる里の事
をいふ也

そしらはしきなりけり　此段夕霧の心を筆者の察し
てかくなり

宮はたゝこの君　雲井鴈はおはせねは夕霧一人の御
用意なり

みるも物うく　六位のさうそくなる故なり

ついたちなとにはかならす内へまゐるましう　夕霧
の詞よろつ物うき心なるへし

なとてかさもあらん　大宮の詞也

おいねとくづをれたる　秘夕霧の詞也　年はよらね
とも心のくつをれたるとなり　聞雲井鴈の事を思
あまりていふなりひとりことのやうになり

かのことを　雲井鴈の事となり大宮の心なり

男はくちをしきゝはの人たに　秘大宮詞也　夕霧を
いさめての給ふなりさやうに物思ふさまにはおほ
しそなとのたまふなり

なにかは六位なと人のあなつり　夕霧詞なり　六位
すくせといひし事なとなるへしなにかはとは何か
おもひのなからんとなり

内へ参るも　参内も物うきよしのたまふなり

ておとゝ（おやイ）おはしまさましかは　秘葵上の父也

物へたてぬやうに　秘源の紫上のかたにいつもまし
ます故におのつからけ遠くなり侍るとなり

けゝしう　秘こと〳〵しきなり弄同

ひんかしの院にてのみなん　弄花散里の住給ひし方なり　花ちる里の御かたにてのみ源のおまへちかきとなり

たいの御かたてそあはれに　秘花散里也　夕霧に心いれたまふとなり

おやいま一ところ　秘あふひの上也

宮はいと丶ほろ〳〵と　夕霧のかくのたまふさへ大宮の御心にかなしかるへきに葵の事をさへのたまふ故にいと丶ほろ〳〵と丶かけり

は丶におくる丶人はほと〳〵につけてさのみてそあはれなれと　大宮の詞なり夕霧をなくさめての給ふなり

故おと丶のいましはしたにものし給へかし　故攝政の事也　大宮の詞也

かきりなき御かけにはおなし事と　内大臣を御子にもちたまへる事

世（ヨノ）の人（ヒト）もめていふなれと　つね〳〵の人にはあらすと世間にはほむるなりされと母宮なとへはさしもあらぬなり　此段夕霧は親をうらみ給ふ大宮は子内大臣へうらみあるさまをのたまふなり

おほさきとはき八さへ　大宮のかくの給ひてさて我身の御うへはさておきぬいまた何の分別も有ましき夕霧のうへなとにさへ物思ふやうの事のあるはあちきなき事とおほしめしてなき給ふなり

ついたちにも大殿は御ありきしなけれは　秘源卅三歳也太政大臣にては節會なとにもあなかちに出仕せさるなり但中古以來節會に參する事あり　弄一勘源氏の君太政大臣にて節會なとの出仕あるへき事にもあらさる故なり

（貞房）

よしふさのおと丶と聞えけるいにしへの例に　秘忠仁公也准三后者忠仁公はしめ也あを馬をみる事未勘得也　河光仁天皇寶龜六年正月七日天皇御楊梅院（殿イ）小安殿設宴於五位已上既而門院宴進青御馬兵部省進五位以上裝馬（是青白馬之始也）　忠仁公覽白馬事舊記所見未詳云々但宇治關白以彼例覽之然者勿論也白馬者引諸院宮之故也忠仁公依蒙准三后宣旨被覽之歟宇治關白同之仍源氏太政大臣同依准三宮覽之者也准后事太皇太后宮皇太后宮皇后宮此三になそらへて准三后と云也　執政准宮例　忠仁公　貞觀十三年四月十日爲准三宮　昭宣公　元慶六年二月一日准

三宮一如故事仁和四年二月十九日更賜之依前固辭不受貞信公天慶二年二月一日准三宮一如貞觀故事辭不賜同九年九月廿日詔賜之忠義公貞元二年三月四日准三宮　東三條關白兼家公寛和二年六月廿二日爲攝政蒙准三宮宣旨　弄 忠仁公例良房のおとゝの例にてあを馬を引事後代に其例を用たる事おゝ良房公の時の事は所見たしかになく共はや有し分にとり置侍るなり猶可勘也一勘

弄 或あを馬を白馬と書事青きまて白きといひて云イあまりに白きものは青くみゆる故なり七日の節會をは青馬節會とも云也禮記文も青馬也　一勘せちゑの日は内のきしきをうつして昔のためしにも事そへて　花 内の儀式をうつすはあを馬をひくに左馬寮頭以下供奉し來る儀式をうつしたるにやむかしのためしにも事そへたるはよしふさのおとゝの時の例にも猶事そへいつくしきありさまをいへるなり

二月(キサラキ)の廿日餘(ハツカアマリ)朱雀院に行幸あり　河 御記云延喜十八年二月廿六日己巳是日參入六條院云々此月彼例也凡儀者天暦二年三月九日康保二年十月廿三日兩度例殊相叶也　非父子之時行幸上皇宮例　花 天長十一年正月二日仁明天皇幸淳和院見國史　天慶十年正月四日村上天皇幸朱雀院但母后御同宿謁太后于柏殿見李部王記　其後度々幸此所抑龜山院御宇文永八年五月行幸深草院御所長講堂之時有沙汰爲中門下御如朝覲行幸被追天長等例云々　秘 仙洞への行幸は毎年朝覲の行幸とてあるは父子の御時の事なりこれは兄弟にてましますゆゑにいかゝとなり但榊の卷に春宮をはいまのみてになしてなとの給はせおきしとかけり然共冷泉院は朱雀院の御猶子と見えたる歟云々　小書仙洞への行幸事中古よりは連々の事なるとなり

故宮の御忌月(キツキ)　弄の點同之　秘 薄雲也忌月音によむへし弄同　或御きぐわちとあそはす唐には忌月なくて忌日はかり有日本には忌月忌日共にある也聞書に忌月又はきくわつと云々

人々みなあを色にさくらかさねをき給ふみかとはあか色の御そたてまつりたりおとゝめしにてまいり給ふおなしあか色をきたまへれは　河 保元内宴日有沙汰法性寺關白被着赤色袍之由見松殿記　櫻下襲事面は普通也裏櫻也八幡臨時祭日主上令着櫻下襲

同半臂着給或又晴の行幸なとも春は公卿着樺櫻或蒴木下襲染装束也　晴は俄に諸臣着麹塵袍一日之當色也其時主上令着赤色御袍給又第一人同之　漢代曆曰大唐景雲三年壬子正月五日内外武官各加階及天下老人與板授官年九十已上老與緋袍牙笏西宮記云内宴之日臣下皆麹塵主上服御赤色而第一上卿服同色之袍是又例也有雜例之中故貞信公並小野宮大臣度々着赤色但延喜之間國經大納言時々着赤色云云クワウロセンと云は地赤き文黒袍也　花内宴日主上并第一公卿着赤色又殿上賭弓時如此見西宮抄青色の袍の下襲は櫻かさね或は朽葉を着用するなり
秘あを色は麹塵なりおなしあか色とはかやうの時の晴の日は第一の公卿は主上と同し色を着する也
弄一勘青色は麹塵とも號す今も極臈のきたる袍なり　赤色はあかねにて染るなり青色よりはたかき色なり赤色の御そとはうへのきぬの事なり
いよ〳〵ひとつ物と　みかと源と只同し物そとなり
院もいときように　秘朱雀院なり
なまめきたるかたに　うつくしきやうの心なり
けふはそのわさとの文人(モンニン)　秘弄同點　秘きとしたる作文とはなきなり
そのさえかしこしときこえたる學生十人(ガクシヤウシウニン)をめす　弄一勘文人は儒者なり學生は今日及第すへき人をいふその心かはれるなり
秘學生とは今日及第すへき人を云也
式部のつかさこゝろみの題をなずらへて御たい給ふ
大殿の太郎君のこゝろみ給はり給ふへきゆゑなめり
河延長(喜イ)四年七月五日御記曰　去月廿三日式部省奏有試判　文其判及第者三人登省　記曰康保三(二イ)年十月廿三日行幸朱雀院御題於藏人所被行之　飛葉共舟輕詩勒七言　澄陵氷奥膺及第人一人　橘倚平字橘宜式部丞飛彈守是輔子藤原雅材獻策　并(辨イ)散樂村上御門也是等其例也　秘勅題をいたさるゝなり　花御前試に勅題をたまふは延長應和康保等の例なり又堀河院(寛イ)貞治四年鳥羽殿行幸に被下勅題　有進士試　秘大殿のたらう君は夕霧なり
おくたかき物ともは　臆病をいふなり　河水原抄云おくたかき物とはいまた學問いたらすのほるへき道もはるかなりと云心なり奥高なり或云奥義をきはめたる高弟の心歟可勘文也　今案臆病甚者歟高

慢なといふも甚しきを高といふ也此巻にもはかせともおくしぬへしとあり奥にあらす

つなかぬ舟にのりて池にはなれいて　花放島の試には詩なと人に商量する事もかなはぬなりさていとすへもなけなるといへり　秘放島の作文とて中島の人もかよはぬ所にやりて詩を作らするなり其故は自然人に談合なとさせしの爲なり唐朝にも進士を試るには人もかよはさるところにをしこめて文をかゝせ侍るなり　河放島試事也　朱雀院試には學生皆舟に乘て中島に行て詩を作るなり文章生試に式部省にて行と也省之試ともいふ也今日朱雀院にて被行之也　うつほ物語云すゑふさ試の題給はりてひとり舟にのせられて出たり則おもしろきふみ作り進士になされて方略の宣旨くたりぬと也

かうくるしき道ならて　夕霧の心なり　秘樂なとはかりしてもあそひぬへき物をとおほすなり

春鶯囀まふほとに

院のみかと々さはかりの事　花院のみかとはきりつほのみかとなり　秘花鳥には此院のみかとを桐壺としるさるあやまれる也朱雀院にて有へし昔の花宴の時をおほし出たるなり

そのよの事あはれにおほし　朱雀院のかやうに仰らるるにつきて桐壺の御門の御時の事を源の思ひいてたまふなり

おとゝ院に御かはらけまつり(参イ)給ふ　弄御酌なととり給ふ心なり一説

〔源氏〕うくひすのさえつる聲は昔にてむつれし花のかげそかはれる　秘今日の春鶯囀はかはらされともむつれし花とは桐壺のみかとのかはり給ふをいへり弄同　河後撰「鶯の鳴なる聲はむかしにて我身ひとつのあらすもあるかな

〔朱雀院〕こゝのへを霞へたつるすみかにも春をつけくる鶯の聲　秘洞中をすこしうらみたるなり今日の行幸にて春をはしめてしるとなり

帥のみこときこえし　秘螢兵部卿宮なり　河六條院の御弟也　若花宴にて秋風樂舞人歟

いまのうへに御かはらけ　主上へなり　冷泉院なり

〔兵部卿宮〕いにしへを吹つたへたる笛竹にさえつる鳥のねさへかはらぬ　弄世を祝し給ふ心也されはわさやかに奏し給ふとあり　秘唐堯よりの禮樂をつたへたると

なり御代を祝し給ふなり
あさやかに　秘祝言なるによりてなり
とらせ給ひて　主上御盃をとらせ給ひて也
うくひすの昔をこひてさえつるは木つたふ花の色や（主上冷泉院）
あせたる　御製也我御代の何事も昔におよはさるよしを卑下し給ふなり弄同　花主上の御製也花のいろのあせたるはわか御代のおとろへをそへ給へるなり
これは御わたくしさまに　秘草子地なり　是は御前にて此御遊はかりおそはしたる御歌なれは末々の人々は詠せぬよしをいへり又かきおとしたるかとさたかならぬさまにいへるなり　弄其席にあまたの人々有しに歌をかしさる故にかくいふなり　作者詞也
かくて所と遠くておほつかなけれはおまへに御こともめす兵部卿宮ひは内のおとゝわこんさうの御こと院の御まへにまいりてきんはれいのおほきおとゝ給はりたまふ　李部王記曰天暦二年三月九日（朱雀院行幸也）歸徳之間樂所頗遠絃音不分明詔右大臣云操絃者近候宜歟右大臣奏之上皇令召圖書寮御琴式部卿和琴余琴右衛門督（琵琶高明卿）治部卿（箏兼明卿）又召唱歌者數人候南欄
さうかの殿上人あまたさふらふあなたうとあそひてつきに櫻人　河安名尊（催馬樂）　櫻人　同上あなたうとけふのたうとさやいにしへもはれ二段　いにしへもかくやありけむけふのたうとさ三段　あはれそこよしやけふのたうとさ　唱歌殿上人なり　聞櫻人には舟の事島つたひなとありけふの體にかなへり
なかしまのわたりにこゝかしてかゝり火ともして　河天暦二三九同行幸之日也臨昏主殿寮供庭燎之由見同記
おほきさいのみや　秘朱雀院の母后
かへ殿にわたらせたまふ　私河海花鳥皆かへ殿とあり　河栢梁殿在朱雀院艮角東宮故事云彼宮有素栢局床也云々此故歟栢殿爲後宮御在所之由見九條右丞相記　花栢殿者漢武帝之栢梁殿にかたとるにや天慶十年正月朱雀院行幸謁太后于栢殿之由見李部王記
おとゝもろともに　主上の御供に源氏さふらひ給ふなり

きさき待よろこひ給ひて　太后の行幸を悦喜し給也
さた過給ひにける　太后の御さまなり
古宮を思ひいて　主上の御心に薄雲の事をおほし召
出たる也又源氏の心也云々
かうなかくおはしますたくひも　秘主上の御心也か
やうに年ふりてもなからへ給ふたくひ有ける物を
とさらに薄雲の御事をかなしく思ひ給ふなり
いまはかくふりぬるよはひに　秘后の詞なり
よろつの事わすられ　むかしの事はいまは夢のやう
なる只今の行幸にて中々昔の事を思ひ出たるとて
なき給ふなり
さるへき御かけともに　秘二條攝政太政大臣桐壺の
帝なとなり
おとゝもさるへききさま　秘只今はつゐて也かならす
わさと參へきよしなり
后は猶むねうちさわきて　太后の心中也いかにおほ
しいつらんといふまて大后の心を察しかける筆者
の詞なり
世をたもち給ふへき御すくせなり　聞主上冷の御事
を大后のおもふ也と云々

内侍のかんの君も　朧月夜なり　のとやかにおほし
いつるとは院にはしつかにさふらひ給ふ故源の御
事なと猶おもひ給ふなるへし
いまも猶さるへきをり　これよりは皆草子地なり
后はおほやけにそうせさせ給ふ事ある時は御たうは
りのつかさかうふりなにくれの事にふれつゝ御心に
かなはぬ時そ　后につきたる年官年爵なとの事也さ
やうの事の御心にかなはぬ時命なかきもかくむか
し薄雲女院かた源氏かたなとへあしくし給ひし事
をとりかへさまほしう後悔なる也むつかるは發憤
とかけりいきとほりを起す也　河御給年官年爵也
おいもておはするまゝにさかなさもまさりて　秘老
ひかみ給ひたるなり　河誠知老去風情少見此爭
無二一句詩一　樂天
院も今はくるしう　朱雀院也　花此詞松風卷にもお
り人の機嫌とるかくるしき心にや　私何ともしに
くゝもてあつかひたる心にあまた所あり
大かくの君その日ふみうつくしうつくり給うて進士
になりたまひぬとしつもれるかしてき物ともをえら
せたまひしかとも及第の人わつかに三人なんありけ

る　花作文は詩なりうつくしうははめたる詞也
秘横入(ワウニウ)したる學生なれは進士といへり本道の代々
儒者の家の人ならは秀才といふへき也　弄一勘秀
才たるほかはいつれも進士といふなり必しもゐ中
よりのほらねともいひつけ侍るなり　河禮記王制
曰大樂正論二造士之秀者一以告二于王一而升二諸司馬一
曰二進士一　註曰可三進受二爵祿一者也　聖武天皇神
龜年始進士試帝王系圖　進士及第例　承和六年春五
星若連珠詩少輔藤原氏宗朝臣及第三人三月廿日判少輔藤原氏宗朝臣　孫王茂世
王桓武御後仲野親王男　三原永道文長河　登科記云式部卿是忠
親王二男進士及第式膽王　延喜十六年八月廿八日
誠行幸朱雀院御題高風送秋詩以鐘爲韻七言六句及第四人九月廿一日判
藤原高樹字藤原童近江椽　大江維時字大江二　春淵良規字朝二
藤原春房字藤蘩　已上四人不作闕何及第　勾イ
たゝ三人なん　秘夕霧此中なり
秋のつかさめしにかうふりえて侍從になり給ひぬ
河正躬王葛野親王男　弘仁七年輔文章生天長八年十一月
二日任侍從　源清平是忠親王男　延喜二年九月文章生七
年九月卅日侍從　源保光代明親王男　天曆四年十二月廿
日奉文章生試同五年遂及第十年正月一日侍從　閑

延喜源光之例可尋此秋の京官除目に夕霧任侍從也
かの人の御事　秘雲井鴈の事也花同
おとゝのせちに　秘內大臣也
大殿しつかなる御すまゐを　源氏六條院をつくり給
ふ事をかきいたすなり
こゝかしこにておほつかなき山さと人　明石上の事
るへし
六條京こくわたりに中宮のふるき宮のほとりをよま
ち　弄六條院の跡たるへき歟　中宮のふる宮のほと
りをとあり　花中宮のふるき宮は六條御息所のす
み給ひし所なり其宮を六條院四面八町の中につく
り入られたるなり　秘宮す所の舊跡なり　ほとり
をとは六條御息所舊跡から其ほとりの四町をこむ
るなり二町四方なるへし　河うつほの物語云紀伊
國むろの郡に神なひのたね松といふ長者吹上の濱
のわたりに四面八町の內に紫檀蘇芳くろかい(とちイ)から
もゝなといふ木を材木として金銀瑠璃陣渠瑪瑙の
おほ殿をつくりかさねて東の陣の戸には春の山南
の陣のとには夏のかけ西の陣の戸には秋の林北に
は松の林四面をめくりうへたる木草たゝのすかた

せす此事を模するかたね松の孫の源氏の宮のために造て四面八町の內に四季をわけてすまゐけるといへる相似たり
式部卿宮　秘紫上の父宮なり
御賀の事たいのうへおほしまうくる　父式部卿宮の五十の御賀を紫上同意し給ふなり　弄御賀事一勘賀儀先規不同也法事には藥師經壽命經等供養の事あり
おとゝもけにすこしかたき　弄なほさりなる御中なれは過しかたきとなり
めつらしからん御家　六條院作り出して御賀をすへきとなり
としかへりては　秘源卅四歲也弄同
この御いそきの事　これは猶六條院作りみかく事なるへし
御としみの事　河御賀の事なり年の滿たるを賀する故なり　後德大寺左大臣記云試樂と云々　不審
花若菜上の卷にも此詞あり　御賀なり　年滿也
三代實錄第三十四元慶二年九月廿五日丁巳太上天皇延屈碩學高僧五十人於淸和院大設齋會講法華經限二日訖太皇太后今年始滿五十寶筭山是慶賀修善祈禱餘齡親王公卿文武百官畢會（コトくクニ）此御賀の事濫觴也云々可尋　弄としみは年忌なるべし賀の事有へき事なり此賀の事ありしとみゆ　年忌の義不用也
聞年滿也
御心にいれて　源の御心にいれ給ふなり
うへはいそかせ　秘紫上なり　經佛法事の日のさうそくろくともの事なり
ひんかしの院にもわけて　秘花散里紫上の御中よき事をいへり
御なからひまして　聞源と花散里との御中の事を云
云たゝ紫上と花散里との事歟
年ころ世中にはあまねき御心　御賀のいかめしき用意をきゝ給ひて式部卿宮におはしのたまふ事なり
源の世界へはあまねく仁慈のある人なるか式部卿宮へはあしかりしとなり
ことにふれてはしたなめ　秘源氏式部卿宮をすこしよからぬ御中成しは紫上のたくひなき寵愛にひかれて所々まけたる事をせしの御心なり弄同
つらしと思ひおき給ふ事こそ　聞すまの御うつろひ

の時御をとつれのなかりし事なとを思ひ出て前に
ありさやうの事歟云々
かくあまたかゝつらひ給へる人々おほかる中にとり
わきたる　源のあまたの中に紫上をすくれてもてな
し給へる事世の人も心にくゝ思ひきこゆる事をう
れしく式部卿のおほすとなり
わか家まてにほひこねと　式部卿宮へはうと〳〵し
くおはすれは紫の上にかゝり給事はなしとなりそ
れをにほひこねともといへり
めいほくにおほすに又かくこの世にあまるまて
紫上の寵せられ給ふはかりをも滿足におほすに又
此御賀なとは老後の光華かなと悅給ふなり式部卿
宮の心なり
北のかたは心ゆかす　紫の繼母なり仍かやうに式部
卿の悅給ふは心にあはぬなり
女御の御ましらひのほと　祕王女御立后あるへきを
さもなき事をいふなり　おもひしみ給ふなるへし
とは北方の心ゆかぬ事を察して草子地にかけるな
り
八月(ヤツキ)にて六條院つくりはてゝわたり給ける　河此六
條院は河原院を模する歟御記にみえたり一世の源
氏作られたるも其例相似たる歟　延喜十七年三月
十六日乙丑此日參入六條院此院は是故左大臣源融
朝臣宅也大納言源朝臣奉進於院　延長二年正月廿
六日乙丑此日參入六條院令御二此院一
ひつしさるのまちは中宮の御ふる宮　六條院の坤の
町則六條御息所の舊跡となり仍秋好の御座ある也
たつみには殿の　巽には源氏のすみたまふ方なり
うしとらはひんかしの院にすみたまひし　祕花散里
なり
いぬゐのまちはあかしの御かた　乾は明石上(アカシ)なり
ひんなき所なるをは　もとよりの池山をも便あしく
つきのなきをはつくりかへたるなり
みなみひんかしは　たつみなり源のおはするかたな
り則紫上と此所にあひすみ給ふなり仍春の景を作
るなり末々には春のおまへとあり
もとの山に紅葉の　母御息所のおはせし所の山なる
へし
やり水の音まさるへき　すてしつくりかへたるなり
その比にあひて　六條院への御うつり八月なれは秋

好の御かた時にあひたるとなり
さがの大井のわたりの野山むとくに　嵯峨大井なり
都に近き野山をいへりむとくは無德又は無得なり
北のひんかし　うしとらなり花散里の住給ふかた夏
の御かたといへり
くだに　牡丹の類云々　弄　苦丹也　杜丹共云夏の類
にかけり　河　岩藤也　苦膽と云草あり同物也薔薇
荷なといへり　闡　苦丹也牡丹と云說あり是各別な
り云々
ひんかしおもてはわけて　うしとらの町の東面は馬
場に作り給ふなり競馬の爲なり
五月（サツキ）の御遊所（アソヒトコ）
上馬（シヤウメ）共　無上の馬也　河　馬場殿　埒　五月は馬の月なれば夏の方に馬場ある也
一說云乙殿與第舍をおとゝと云也殿に有甲殿有乙
殿又寢殿をよるのおとゝと云かことし　今案此儀
不可然野分卷に寢殿をおとゝの死といへり乙殿に
あらさるなり只殿の字の訓をおとゝといふ故なり
人をも大臣にあらされともおばおとゝなと云なり
殿字の訓なり
にしのまちはきたおもてつきわけてみくしまちなり

いぬゐの町の西面は明石の住給ふ冬の御かたとい
ふなり北をつきわけて御倉町にしたるなるへし
われはかほなるはゝそ原　秘　母にたよりありおもし
ろくかけり　明石上は中宮の御母なる心歟
ひかんのころほひ　六條院へ御うつりの比なり　河
彼岸八齋法成道經云一切衆生依時二八月齋十方世
界一切衆生薩菩得樂靈瑞而已　彼岸者二八月幸會
時修到彼岸齋食云々　波羅密此者到彼岸　秘　時正
なれはよき日といへり
一たひにて　御かた〳〵一度に移徙あらんとありし
かとさはかしきとて中宮は渡御延引なり
おいらかにけしきはまぬ花ちる里　此たひは紫上と
花散里はかりうつり給ふなり
來の御しつらひ（からイ）はこの比にあはねと　時分にあはね
とも心ことにつくろはれたるとなり
御車十五（ジヤウゴ）御せん四位五位うち　花　紫上の御うつろひ
なり秘同　六位はすくなきなり
てちたきほとには　源氏紫上の御うつろひなれはこ
と〳〵しきほとの事にはあらぬとなり
世のそしりもやとはふき給へれは何事もおとろ〳〵

しういかめしきことはなし　河省カイリミル也　省畧也　源氏のつゝしみ給ふ心なり

いま一かたの御けしきも　花散里なり前（末イ）に花ちる里その夜そひうつろひ給ふとあり

をさ〳〵おとし給はて　紫上のおわたりにさのみちかはぬなり

侍従の君そひて　秘夕霧也花ちる里に供奉し給ふ也そなたへもてかしつき給へは　花ちる里を紫にさのみおとさぬやうにはかならすしもし給ふましき事なれは侍従君へのかしつきにし給ふからかくあるそとなりそなたへとは侍従君をもてかしつきたまふかたへひかれてとなり

女房のさうしまちなともあて〳〵のこまけう（らイ）　河宛　宛　細分（コマク）女房のつほねなとそれ〳〵にあてゝこまかにわかつ心なり

五六日（イツカムイカ）過て中宮　秋好の六條院へわたり給ふなり

さはいへと所せし　秘紫上の御わたりをたくひなく思ひしにこれは猶一段と見えたるなり　私此義如何紫上の御わたりも省略し給ふと見えたり（がらイ）是も省略し給ふれと中宮にておはすれは所せしてかなはぬといふ心歟

御さいはひのすくれたる　是より秋好中宮の御事を云御幸にうち遊ひて世のおほえもすくれたると也

らうなどをとかくゆきかよはし　あなたこなたへの廊なとおほしとなり

けちかくおかしき　廊なと行かよひてたかひにかよふ道なとのあるをけちかきといふなり

宮のおまへえもいはす　秋好中宮のおまへなり

こなたにたてまつらせ　花紫の御方へ中宮より奉り給へるなり　秘紫上の御かたなり

こきあこめ色　わらはの衣裳なり　河紫苑色　面蘇芳裏青なり　弄かさめはうへにきるあこめはきぬにかならすかさなるなり紫苑色はきぬの事歟　一勘あかくち葉はよのつねのくち葉のあかきかたによりたるなり

わらはのおかしきをなん見覺しすてさりける　秘紫の心なり　同花鳥に上東門院の御事をひけり　榮花物語云いにしへの后はわらはつかはせ給はさりけれといまの世は御このみにてさま〳〵つかはせたまふかさみはかりさせ給ひてうへのはかまきす

是は上東門院の御事なり
さる所にさふらひ　此わらはのやう體然へきとなり
　中宮にさふらへはとなり
秋好中宮
心から春まつそのは我やとの紅葉を風のつてにたにみよ　箋心から春に心をしめ給ふとも紅葉のおもしろきを御らんせよとなり弄同　風のつてにたに見給へさりとては面白きといふ心成へし
わかき人々　紫上のかたの人々なり
返紫上
風にちるもみちはかろし春の色をいはねの松にかけてこそみめ　箋紅葉は花よりもかろきとなり岩根の松の春のおもきこそまされとよめるなりねたます樣にのたまへともちとも卑下せすしてのたまふ也弄同　私河にはいつはの松にかけてこそみめとあり又詞にもてのいつはの松とあり　河いつはの松五葉の松なり萬葉にありえならぬはたゝならぬなりえもいはぬなと云心なりつくり事とは造花の風情なり　或本に岩ねの松につけてこそみめとあり詞に相同する歟如何　拾遺云元良親王承香殿のとしてとに春秋いつれかまさると問侍りけれは秋もおかしう侍りと云ひけれはおもしろくさきたる櫻をこれはいかゝといひて侍けれは「大かたの秋に心はよせしかと花みる時はいつれともなし　伊尹應和三七月日宰相中將君たち春秋くらへ給ふて春をのみおもしろき物にし給ふていふかひなく心もとなき物にいひなし給ふなりとて桃園宮の御かたより中の十日はかりのほとにおもしろき花ともを折りてよきすて給ふなる事いとひか〳〵しと聞え給へるにつくり花のいとおもしろき是いとあはれなれはとて奉り給へれは花に心をつくる君哉とてかへし奉れは松につけて春の御かたへ「かゝる秋を君にまかせて我はたゝのとけき春をまつそくるしき　返し「さく花も人の心ものとかなる春としりせは春をまたまし　或御說云下の心は卑下也風にちる紅葉は色こく薄くおもしろき物なるを此岩根の松は色もなく紅葉におとりたる心をもたせたりいかてかこなたよりあなたをおしくたさんと也
かくとりあへず　紫のかくやかて思ひより給ふを中宮の感しおはすなり
御前なる人々　中宮の御まへなり
おとゝ此紅葉の御せうそこ　源の助言したまふ也

春の花さかりに　祕胡蝶卷の末（序イ）にかき出すなり
たつた姫のおもはむ所　花中宮たつた姫に思ひなすらへたるなり闇同　さししぞきて　河退て也
いとわかやかに　源の御さまなり
いとゝ思ふやうなる御すまゐにてきこえかはし給ふ
祕程遠からす四町八町のうちにてかくいひかはし給へる事を滿足するとなり
大井の御かた　明石の上也　御しつらひを始としておとらぬさまなるとなりこれも姫君の御ためをおほすとなり十月にわたりたまふなり

岷江入楚第廿二　玉鬘

卅五歳　紫上廿七八之由見此卷實者廿八也
夕顏上離別以來事
玉鬘君四歳時伴少貳下向筑紫事源氏十七歳事也
同君十（廿イ）歳時少貳卒去事源氏廿三歳時事也
同君卅許時肥後國大夫監念玉鬘君事
源氏卅三歳時以上はもとの事なり
三月大夫監來少貳館事今年玉鬘廿三歳也
四月玉鬘君逃筑紫而上洛事
故少貳北方兵部君豐後介等相伴事九條殿宿也
秋玉鬘君詣八幡並長谷寺事
於長谷寺逢右近君事
右近君歸京六條院語申玉鬘君事
源氏君遣文於玉鬘方事右返歟
同君先渡右近五條家事
十一月同君渡六條院艮町事以東御方爲後見事
其夜源氏對面玉鬘君事
歳暮賦裝束於人々給事
紫上花散里玉鬘君末摘花明石上空蟬尼君

末摘君唐衣之歌之事
和歌髄腦等之事

玉鬘　秘　以歌爲卷名

河戀(源氏)わたる身はそれならてたまかつらいかなるすちをたつねきぬらむ源氏君の歌なり　花 此卷は乙女卷に次第をたては六條院卅五歲の三月より十二月迄の事をいへるなりおほよそ夕顏上は五條わたりにて源氏の君にあひ初てなにかしの院にて物に氣とられてむなしく成給へりし其時は女は十八歲源氏は十六歲の時の事にやそれより先に致仕のおとゝのまた中將といひし時にあひ給うて玉鬘の君をはまうけ侍り此姫君の四の年西京にやとり侍りしかめのとの男太宰の少貳に成て下りしに具せられて肥前(後イ)の國にして廿年はかり過し侍りしか肥後國に大夫監といへる口有しか此姫君を思ひかけてのかるへき樣もなかりしかは俄にめのと子なとをかたらひて京へにけのほりし時初瀨にて右近君に行あひてそれよりして六條院へむかへられたまひしてとし玉かつらの君は廿二の年にあたるへし夕顏上又世に侍らは卅七にやなり給ふへき紫上は廿七八とこの卷にみえたれともまことは廿八なるへし夕霧の君はことし十五歲なるへし

としつきへたゝりぬれとあかさりし夕かほを露わすれ給はす　花玉鬘の君の三歳の時夕顔の上ははかなくなり給へりそれよりことしまては廿とせはかりをおくり侍れと源氏君の御心にいさゝか忘れ給はぬ御事をいへり　河此巻の始末摘巻と同様なり何も其（註イ）説あるなり末摘花巻は若紫の次なれとも横のならひなるか故に夕顔巻につゝけんためにてかけり此巻また玉鬘の事出来へきためにより先夕顔のうへの事をおもひいたせり共以有悲致　弄又露わすれすとは夕顔巻に夕露にひもとく花或は光ありとみえ夕顔のうは露なとありし心歟　秘此發端末摘巻に似たり然れとも心各別なり先末摘巻の心は常陸宮の事を聞てもし夕顔上に似かよひたる人もかなとおもひて尋よりたる心あり此巻の心は今六條院を造（さイ）畢有てさても此院の内に夕顔上の在世ならは一かたはふたけ給ふへき物をと思ひ給ふ心よりあらましかはとふかく思ひ出給ふ也かやうに見侍らねは發端聊つきなきやうにも有又重語のやうなり此事諸抄沙汰に及はさるなり　私秘の義尤仰て信すへし面白し

心々なる人のありさま　心々なる人の上なり夕顔の上のやうなるもなきとおほす源の御心なり

あらましかはと　河「世中に（拾遺）あらましかはとおも（イナシ）ふ人なきかおほくも成にけるかな爲頼　此私爲頼紫式部大略同時の人也難爲證歌之由有一義　弄然而爲頼とすこし先達也伊勢物語「春日野の若紫のすり衣しのふのみたれかきりしられすを本歌として河原左大臣しのふもちすりたれゆゑにと詠らるゝか業平は元慶元年正月十八日卒五十六（三イ）其時左大臣五十四歟左大臣は寛平七年八月廿五日薨す七十三歟是等は同時の先達爲證之例也私此義强て用なき事也

右近は何の人かすならねと　秘夕顔の後むかへとり給ふなり

ふる人のかすに　としよりたる女房のなみにといふなり

すまの御うつろひのほと　秘此間には紫上の御かたにわたし給ふなり

心よくかいひそめたる　右近のさまなり　河ひそむは潜なりしのひやかなる躰なり龍のいまた出さるを潜龍といふがことし易云潜龍勿用　註云龍德而隱

といへり以前の巻の譬の心には非るなり

女君もおぼし　右近をよきものと紫上のおぼすとなり

心のうちには　右近か心中にはなり

故君物し給はゝ　夕顔上の事を右近か色々に思ふなり六條院へかた／＼のうつろひ給ふにつけておもふなり

さしもふかき御心さしなかりけるをたにおとしあふさす　源の御心はさのみ御心さしのなきも打捨てはおき給はねは夕顔なとはあかしなとほとのおぼえはおはせん物をと思ふなり　河孝經云滿而不レ溢（ミツレトモアフサス）あふさすはあふれさせすなり常陸宮の姫君なとの事をいふ也溢は滿也物のあまるやうの心なり　私其人をさすに及ふへからす

やんごとなきつらに　紫上なとのことをいふか

この御殿うつりの　花乙女の巻のをはりにある事なり

かのにしの京にとまりしわか君をたにゆくへもしらす　秘此以下玉かつらの事をいへり　河わか君は玉かつらなり　花これよりは玉かつらの君四のとしつくしへ下りて侍りて廿とせはかりして都へのぼりし事をなが／＼とかきなしたるなり

ひとへに物をおもひつゝみ又は今さらにかひなき事によりてわか名もしらすなと（名もらすなとイ）　河いぬかみのとこの山なるいさや川いさとこたへてわか名もらすな　弄同　秘引歌同之夕顔上はいかにしてむなしく成たるそと人のとふをつゝみ給ふへきとて右近を外につかはさすしておき給へるなり右近はかの西の京の古郷へは音信もせすしてあるゆゑに玉かつらの行へもしらさるなり

そのめのとの男少貳に成て　秘夕顔上のめのとなり　弄同　河職員令云　太宰府（オミコトモチノツカサ）　少貳二人掌（ツカサトル）同二大貳一玉鬘のめのとの男少貳になり此人も夕顔上の父かたに由緒ある人歟筑紫にて死する時も此姫君の事を京へのほせ奉りてしかるべきよすかおはせん事を返々いひしとなり

かのわか君の四になる時　玉かつら四歳の時少貳任に赴くなり

はゝ君の御ゆくへも　めのとの夕顔上の行へをしらて神佛に祈しとなり

はるかなるほとに　玉かつらを具してつくしへ下る事をいふなり

猶ちゝ君に　秘致仕のおとゝ中將の時の事也

さるへきたよりも　夕顔上と父君と御中たえたりし故なり

はゝ君のおはしけんかたもしらす尋ねとひ給はゝ　致任の大臣へしらせたく思へとも夕顔上の行へをしらねはいかゝと問給はむ時にてたへ申へきやうのなけれはえ申さぬとなり

またよくもみなれ給はぬに　秘父君をもみしり給ふましきとなり

とゝめたてまつり　秘父君の御かたに玉かたつらをとゝめ給はんとなりそれも又うしろめたきなり

しりなからはたゐてくたりねと　秘案内申てしり給ひなからは中々下向の事をはゆるし給ふましきとなり　私是より私の注なり

かやうにさま／＼おもひわつらひて手はなち奉らん事をかなしくおもひてはつくしへ玉かつらを具し奉るなり

たゝいまからけたかく　玉かつらのおひさきみえたるさまなり

ことなるしつらひなき舟に　そさうなる船のさまなるへし　聞乘あひの便船なとなるへしと云々不可然歟

をさなき御心ちに母君をわすれす　玉鬘のさまなり　夕貌上のめのとの心中いふかたなきあはれなるへし

むすめともゝおもひこかるゝ　秘少貳の女姉御許兵部君をさな名あてきとてあるなり

舟みちゆゝしと　船路は一段物いまひする事なり仍かくいふなり

おもしろき所に　道すからの海上のさまなり

心わかうおはせし　秘夕顔上の事を思ひいてたるなり

おはせましかはわれらはくたらさらまし　花玉かつらの君の御めのとの詞なり　秘此詞幷兩首の歌作者花河雨抄其說不同なり河の說可然哉其故はおはせましかはといへるも夕貌上の在世にて有とも妻は夫にしたかふなれは夫のくたるに必相具すへき事なり然れはむすめの詞歌なるへしをさなきもの

の歌をよむましきにあらす後撰に第八冬の歌　親の外にまかりておそくかへりけれはつかはしける人のむすめのやつになりけるか神無月しくれふるにもくるゝ日を君まつほとはなかしとそおもふ　私河花兩抄の義は二首の歌の次にあり此秘の義尤然るへし前の詞にもむすめともゝおもひてかるゝとありそのうつり成へし

かへる波もうらやましく　河いとゝしく過行かたの戀しきにうらやましくもかへる浪かな　秘引歌に及へからさる也　弄舟人のうたふ詞なり別に仔細なし

花舟子のうたふ聲也こゝにかなへる歌いまた見出し侍らす　後拾遺集第四惠慶法師の歌に淺茅原玉まくくすのうら風のうらかなしかる秋はきにけり

河毛詩云匏有苦葉招々舟子註云舟子は舟人也　箋云舟人の號　琗琭白氏文集第廿六

ふたりさしむかひて　秘前にしるせり　少貳か夫婦二人さしむかひてなくと云り河に少貳女二人と釋せられ侍れといかゝと覺侍り兵部君はいまたあてきとてをさなき時の事なり歌なとよまんことおほつかなくおはせましかはわれらはくたらさらましとめのとのやしなひ君をうちすてゝはいかに男はくたるとも乞下るましき心をいへるなり

作者註に在舟人もたれをこふとか大しまのうらかなしけに聲のきこゆる　秘わか身こそおもひはある物を舟人は何をかおもひのあるそとなり　河大島は筑前國鐘御崎近邊なり

同上こしかたも行へもしらぬおきにいてゝあはれいつてにきみをこふらむ　秘君とは夕顔上のこと也　私夕顔上の行へしらぬさまはまことに舟人のよの行へもしらぬやうなるにたとへて云る歟　河此兩首少貳女二人姉おもと兵部君歌也前の詞に女とも丶思てかるゝをといひ又おはせましかはわれらはくたらさらましと云り共に女ともか事也　花小貳夫婦か歌也

弄河海此兩首少貳かむすめ兩人歌也花鳥の説少貳夫婦か歌なり女子はまた十歳はかりなりそれか歌よむへき事不審と云々説々不同河の義昔の人をさなきより歌よめりと云々歌の前のことはともにて知るへしむすめともの詞とみゆ　私弄にも河の義によれり此兩首始の歌はあねおもと次の歌はあて

き後に兵部君かよめるなるへし　弄おはせましか
は我らはくたらさらまし花鳥に少貳くたる其妻は
下らしとなり歌以下の詞むすめのにはおとな過た
る歟如何　私如此有猶前の義に随ふへし
ひなのわかれにおのかし丶　河「思ひきやひなの別
れにおとろへて海士のなはたきいさりせんとは
ひなとは夷也田舍の事なり　私此義然るへし猶別
の義有不可用之但後註イに載之　河或抄云南海に一つ
の鳥あり雛をそたて丶成長の時おきへつれてゆき
てはなつなり其後は互に行へをしらす是をひなの
わかれといふなり云々　案之漢朝古事歟孔子在衛
國聞桓山之鳥生四子羽翼既成將分離其母悲鳴以相
送といへり是を四鳥の別と號す詩にも別離と作り
來れり此事歟
かねのみさきを過てわれは忘れすなと　河筑前國な
り　河嚴島明神御歌「つくしなるかねのみさきに浪立は人のつ
らさそおもひしらる丶　萬七「千早ふるかねのみさ
きを過れともわれはわすれすしかのすへかみ　祕引歌
「千早振かねの云々　河引歌に同我は忘れすとは都を忘れ
すとなり　花かねの御さき筑前國なり我は忘すは
京の事を忘れぬなり　弄かねの御さきを心に忘れ
ぬとなり引歌のすへ神とは皇神とかけるなり　一
勘日神とかきてすへ神と讀りもし其事歟
よと丶ものことくさにて　夕顔の上の事をのみ常の
ことくさにいふなり我は忘れすといふもみな夕顔
の事心にあり
かしこにわたりいイつき　つくしへゆきつきての事なり
まいてはるかなるほとを　夕顔のうせ給へる事をし
らて都の内のいつくにかおはすらんといふなり心
つくしとははるかなりといふ心なり
この君を　玉かつらなり
夢なとにたまさかに　夕顔上なり
おなしさまなる女なとそひて　花なにかしの院にて
夕かほのうせ給へる時に女のあらはれて靈になれ
るよしかの卷にみえたりその有樣歟めのとの夢に
もみえける成へし名殘も心ちあしうとはかやうの
御ゆめをみては覺て後まても心ちよからぬと也
なこりも心ちあしくなやみ　祕心ち夢の名殘をなや
ましきやうなるは靈氣なとにけとられたる人とお
なしきなり

少貳任はてゝのぼりなんとするに　秘　少貳上洛也
河　仁徳天皇四年始置諸國史　少貳任限事　仁明天皇承和元年七月勅諸國守介云以四年可爲限但陸奥出羽太宰府是云官國始自筑前等僻在千里以五ヶ年可爲任限也云々　天平十五年十月辛卯始置鎮西府寶字二年九月丁丑始以廿日爲交替程十月甲子國司以四年爲任限國史寶龜十一年八月庚申太宰任限增爲五年

ことなるいきほひなき人は　道のほともわつらはしき故也　私少貳の任の得分なともさのみなかりしにや

たゆたひつゝ　秘　猶豫したるなり

しなんとする心ち　少貳の心なり

この君の十はかりにも　秘　少貳は任限五ヶ年なれは九ツ十はかりなるへし花同　私任限過て上洛延引とみゆ猶以さやうなるへし　弄　少貳任五年四歳まて下向

我さへうちすてゝ　少貳のいふ事なり

さるへき人にもしらせたてまつり　玉かつらの父君なとの事なるへし

をのこゞ三人あるに　秘　少貳の子ともなり一人は豊後介也其外は二部三郎なり　私少貳のかたく（かた〳〵イ）遺言するなり

わか身のけふをは　花　おやの孝養といふ事なり臣たるものゝ志ありかたし弄同

その人の御子とはたちの人にもしらせす　河　我館なり　秘　玉かつらの實父をは我館の中にもあらはささるとなり

にはかにうせぬれは　少貳死去の事なり

われにもあらて年をすくす　人におぢはゞかりて人心ちもせす月日を過すなり

この君ねひとゝのひ　玉かつらおとなしく成給ふままに夕顔上よりもかたちのまさりたるへしとなりちゝ中將なとのかたへも似たる故と也

きゝついつゝすいたるゐ中人とも　花　聞つたふるなり　秘　聞つたへつゝなり　秘　聞つぎつゝ歟

心かけせうそこがな　花　せうそこかなは文やる人おほきをいふなり

ゆゝしくめざましく　ゐ中のあら〳〵しきえひすなとの文やるさまをいま〳〵しくめのとなとのおも

ふ事なり

いみしきかたはのあれは　玉かつらの御かたちはよけれともかたはのあると人にいひなして人の文おこするにもあひしらはぬとなり

あたら物をといふをきくもゆゝしく　玉かつらのかたは實事ならねは人のかくいふはいま／＼しきとなり

いときなきほとをいとらうたしと　秘箒木卷になてしこの歌のことなり

むすめともをのこともゝ所につけたる　秘皆よすか定りてありつきたるなり　花少貳か子とも男女ともに其所につきたるたよりとも出きて有つきたるをいふなり

京のことはいやとほざかる　秘かくありつきぬれはおのつから都へのほる事は何かとして打過侍るなり　聞住つくまゝに京へおもひたつ心のうすきと云ふ心也　私此心のうちは玉かつらのめのとの心なるべし

物おほししる　秘玉かつらのなり

ねさうなとしたまふ　秘年星也　又は年三也正五九月也此義可然歟後世のつとめなとし給ふ也　河年三月長齋經曰若有善男子善女子等修年三之齋戒忽曉諸難等獲殊勝福利其年齋者於年有三ヶ月所謂天帝釋爲其主領廻向天下檢計衆生所作善惡其正月廿（卅イ）日向南閻浮提二月起西瞿耶尼三月行化欝檀四月有東弗婆提也天帝以正月五月九月巡向而南列註記衆生作業云々　後撰集第廿云年三おこなふとて女旦越のもとに硯をかりて侍けれは加へてつかはしける　仙祐法師百とせにやとせをそへていのりくる玉のしるしを君みさらめや　一說云歳星云々　私一年の内には正五九一月の内には六齋にしたる善根かよく冥に通するとなり　ねさうとはねぬやうによむ也

廿（ハタチ）はかりになり給ふ　玉かつらなり

このすむところはひせんのくに　秘任はてて肥前國に住する歟　弄一勘同之

大夫（タユウ）のけんとてひこのくにに　河太宰府一員　帥橘　大貳少貳大監二人少監二人大典少典大少令史少貳叙爵の時少卿といふあり件之臨叙爵之時大夫監と號す大監者正六位下少監者從六位上相當也有軍監

軍者有東監者 有西武下也　花 大監は正六位下相當の官なれと從五位下に叙しぬれは大夫監と稱するなり　秘 監は太宰之大監也相當六位也さふらひの中監にて叙爵したるか叙爵してあるを大夫の監といふなり　弄 太宰の監なるもの丶叙爵したる也監濁てよむへし

そうひろく　一類のひろきなり　旅の字の心歟又孫の字歟と云々

むくつけき心のうちに　あら〳〵しきひな人の心をいへる成へし

かたちある女　かたちのよきをかたちあるといふなり

いみしきかたはありとも　玉かつらの君かたはなりともみかくさんとまて監のいふなり

尼になりなんとす　此君かやうの事を聞て尼にならんといふといはするなりそれをあふなかりて肥後國よりこゝへ來るなり

このをのこともを　少貳の子三人をよひて大夫監かかたらふなり

おなし心にいきほひを　秘 何事もいひあはせて同心合力すへしとなり

ふたりはおもむき　秘 次部三郎なり　花 少貳かをのこ子三人あり次郎三郎は大夫監にかたらはされたり太郎の豊後介一人は同心せさるなり

しはしてそにけなくあはれと思ひ聞えけれ　次郎三郎の心なりはしめはさすかいかゝと思ひつるか監にかたらはれて結句しかるへきさまにいひなし又いひおとしなとするなり

おの〳〵わかみの　秘 此二人か心なり

ちかきせかいにはめくらひなんや　河 經廻なり　メクラヒ云々　監にあしく思はれては近國にはありかたしとなり

世にしられては何のかひかは　父おとゝなとのしり給はぬ事を云ふなり

この人かくねん比に思ひきこえ給へるこそ今は御さいはひなれ　つくしなとにては此監なとのかくいふは姫君の御さいはひなりと此二人のいふなり

秘 此人は大夫の監なり

さるへきにてこそ　こゝにて年へ給へるはかやうの事に縁の有て成へしと云なり

まけじたましひにいかりなはせぬ事とも丶してん

河「拾人もみぬところに昔君と我せぬわさ〳〵もせしそ戀しき　公忠　私此監まけしたましひにいかり（とイ）出なはいかやうのあたをもせん物そとおとしいふなり

中のこのかみなるぶでのすけなん　弄おと丶ひの中の兄といふなり　秘兄弟の中にて第一の兄といふなり

たい〳〵しく　秘これはおかしけなる事となり退の字なり

あけたてまつる　秘上洛をいへり

故少貳のの給ひしことゝもに　豐後介は父の遺言をおもふなり

むすめとも丶なきまとひ　女（ムスメ）ともは玉かつらを上洛させたきとなり

は丶君のいふかひなく　夕顔上の行へなくなり給へるかはりに此君をせめて人めかしく見なし奉らてと皆々おもふなり

さるもの丶中にましりなんことも　監かことをおとしめいふなり

なけくをもしらて我はおほえたりき　秘大夫監なり玉かつらのめのとなと監をおもひくたしたるをはしらて我か所におきて隨分おほえある身とおもふなり

ことばそいとたみだりける　河吾嫌ニ其說迂一　孝經序　花拾「あつまにてやしなはれたる人の子はした丶みてこそ物はいひけれ　輔相　ゐなか人の文の詞の聞にく丶まかりたるをたみたると云也今の世にもさのみある事なり　秘孝經序吾嫌其說迂然無以（テ）難（スルコト）之手跡は大かたよろしきを詞のすく〳〵ともなきなりしたゝみてこそ物はいふなれとよめるとおなし又或御說の御本には詞そいとたらさりけると云々不足の心なり　私秘抄に孝經の序の文をひきて詞にもたみ（たみたりイ）たりけるとありさて三本にはこと葉そいとたらさりけるとあり如此聞たらぬなり不足なり云々

みつからもこの家の二郎を　大夫監少貳の子次郎なるをかたらひてこ丶へつれたちて來るなり

卅はかりなるをとこの　監かさまなり

さへつりゐたり　ことの葉おほく物いふさまなり

けさう人はよにかくれたるをこそよはひとはいひけ

れ　秘大夫監か詞なり　私此註如何此段は草子地
なりとみえたり聞も此の如し　河假借人貞觀政要にはなつかしうすとよめり氣
裝人新猿樂記又假相人同　夜這人同　竹取物語云よる
はやすきいもねすやみのよにいてゝもあなをくゝ
りかいまみまとひあへりかゝる時よりなんよはひ
とはいひける
さまかへたる春の夕暮なり秋ならねともあやしかり
けりと見ゆ　河「いつとても戀しからすはなけれと
も秋の夕はあやしかりけり」弄引歌のあやしきこ
ころはかりをとるか　秘三月なれはなり　引歌あ
やしかりけりの心をとれり
おはおとゝいてあふ　河祖母殿　花故少貳の妻なり
玉かつらの君をうまごとなのらせたるによりて祖
母殿といへる歟弄同　秘心をやふらしとは大夫監
か心をやふらしとなり
故少貳のいとなさけひ　秘大夫監か詞なり
さる心さしをもみせきこえす　申通せす打過たる間
に少貳の死去有しなといふなり
そのかはりいかやうにつかうまつるへし　秘威光な
り聞同

志をはけまして　少貳人の志の末をとけんとおもふ
なとゝいひよらんためにかく云なりこれへ今日は
隨分志を致して參るなとゝいふなり
このおはしますらん女君すちことに　姫君はすちこ
とに一段位たかくおはするなと聞ていふなり
いたゝきになんさゝけ　監かゐなかひいふさまなり
おとゝも　秘おはおとゝなり
しぶ／＼におはしけるか　秘女房ともおほきよしを
きこしめすゆゑにいかゝとおほすなるへしとなり
是は我をおとゝの嫌ひ給ふは女とものよからぬを
あまたたくはへおきたるをきらひ給ふ成へしと監
の心をやりて云なり
すやつばらを　秘しやつはらと云詞なり
ひとしなみには　秘等輩にはすましきとなり　すや
つはらは田舍詞なりすはその物にてもなき心なり
いまた世俗にかゝるたくひの詞はある事なりひと
しなみはたゝ人なみなりしは助語なり花同　私前
の義を用ふへし
わか君をも　秘玉かつらの本臺とすへきとなり花同
いかゝはかくの給ふをいとさいはひありと　秘おは

おとゝの詞なり　是程然へき事はなしとなり
思ひはゝかる事侍りて　秘かたはなるよしをいへり
さらにおほしはゝかりそ　秘大夫監か詞なり
天下(テンカ)に目つふれ足をれ給へりとも　弄わさとことことしくよむへし監か詞なり　秘天下音に讀也奥に此和歌はといへり田舍人の詞なり
つかうまつりやめてん國のうちの佛神は　いかなるかたはをもしなほしてんといふ也國中の佛神も皆わかまゝなれはなと田舍人のゆゑにいふさまなり
その日はかりといふに　はや理不盡にいつ比むかへ奉らんなとゝいふなり
この月はきのはてなり　秘三月は春のはての月なり本說もなきことなれと當座をいひのかれんためなり　河三月春季終也四季の終月世俗說憚之云々
ゐなかひたる事　季の終の月を本式にはいむ事なる故かくいへり
君(大夫監もしイ)にしそ心たかはゝまつらなる鏡の神をかけてちかはむ　河或古老物語云或家始祖藤宇合一男廣繼於西府謀反以大野東人爲官兵令攻彼等之時廣繼自以刀頸其頭昇空蹶殺官軍化成赤鏡見之人悉死云々肥前國松浦郡鏡明神是也(見式家系譜公卿符)風土記云昔者氣長足姬尊在此山遙覽國形而勅云天神地祇爲我助福使用御鏡安置此處其鏡即化爲石見在山中因名曰鏡山　新千載集第三に淺からすたのめたるをとこの心ならす肥後國へまかり侍けるかたより便につけて文おこせて侍ける返事に紫式部「あひみんとおもふ心は松浦なるかゝみの神や空にしるらむ　花肥前國松浦郡鏡の神は太宰少貳藤原廣繼か靈也又鏡山も神功皇后の御鏡化して石となれるを鏡山といふなり是をも鏡の神といふへきにや下の詞に松浦箱崎同社なりといへるにつきては石淸水八幡と同體のよし聞え侍りしからは鏡の神に二義あるへきにこそ云々　秘鏡の明神兩義有兩抄に見えたり廣繼は御靈八所の一所なり奥にあるは神功皇后歟新千載の歌也河に在略之　私三本此歌の五文字君にしも(もしイ)心云々如此あり
このわかはつかうまつりたりと　秘隨分と自稱なり
うちゑみたるも　監かさまなり
あれにもあらねは　花われにもあらねはといふ詞なり　秘われにもあらねはとはあきれたるさまなり

おはおとゝの心中なり
むすめともに　少貳の女ともに返しせよとおはおとゝのいへともそれはなか〳〵ならぬといふなり
うちおもひけるまゝ　秘心におもふまゝをありのままにいへり
返少貳おはおとゝ
としをへていのるこゝろのたかひなはかゝみの神をつらしとやみん　秘とし月かけて然るへき幸を祈りたるなり此大夫監にとめられなは神をつらしとおもふへきとなり監がおもはん所をも忘てうちおもひけるまゝによめるとかけり弄同
いてやてはいかにおほさるゝ　弄歌を監かとかめたるなり　河までやこはいかにまてやはしはしやと云心なり　花いてやとは大夫監かなんとしたるか此返歌を聞てしはらくおさへたるなり　秘監か聞とかめたる也　多分の本まてやと有之可用之耕雲本も如此しはしまての心なり
むすめたちはさはいへと　秘まへにまろはまして物も覚ほえすとはいひつれとも此歌の心をのへたる也さてさはいへととかけり
この人のさまことにものし給ふをひきたかへ侍らんはつらく　弄玉かつらをかたはありといひし事なり　秘此人のかたはありといひつるをもかへりみ給はすちきりおき給へりもし此御心のたかひなは神をはつらしと思ふへきとなり歌の心をあらぬさまに用ひかへたる事伊勢物語春日のゝ歌なとの例なり　聞かたはなる事を祈たれはおもひの外の縁か出來たるとなり是か相違したらはつらからんと云心をあしくつゝけたりとむすめとものいふなり
私かたはをもみかくさんといふ監のやうなる幸はあらし是をとりはつしては鏡神をもうらみ申さんと義をつけかへたるなり　弄さきの歌釈しかへて娘のこたへしなり其心は祈る心は幸なりさるをかたはによりて引たかへは神をもつらしと恨みんと也如此一首を心をかへて用る例あり引たかへ侍らはつらくと也此歌の心を辨しかへたるならはきこえひかめといへる如何　或女とも云此歌の心は監かやうに承るはうれしき幸なれとも又かく引たかへたるかたは人なれはみえ給はしさあらは此程祈りたる松浦の鏡の神もつらからんとよめれとはぬと云に監かけにもと思ふなり

猶ほけ〳〵しき人の　花　おはおとゝの此姫君のつらくおもひたまはんことをおしはかれは老ひかみてありのまゝに聞えたると女ともそはにていひたるなりそれをときゝかすとはいへり　私此義如何不審也むすめともの歌の心はかやうなるをちやつときこえかたきやうによめりといひなすなり年よりてはほれたるゆゑなりなといふさまとみゆ

おいさり〳〵とうなつきて　花　おいはおうなり領納したる心なり　榮花物語においさり〳〵なくといふ詞あり是に同し　秘　領状するなりさり〳〵はさにてあるといふなり

おかしき御くちつきかな　或御説此歌こなたのおもひたるやうにもなく作意のかはりたるをおかしといへるなり

なにかしらゐ中ひたりと　わかみのうへなといふさま田舎人のさまなり

又よまんと　盛か又歌をよみたく思へともかなはていぬとなり

次郎かかたらひとられたるも　おはおとゝわか子なから心おくなり

ぶの介をせむれは　たのみ思へる人は豊後介一人なり

いかゝはつかうまつるへからん　豊後介か詞なり

まれ〳〵のはらから　河　親（ハラカラ）萬第八にみゆ　秘　たまさかなる兄弟もとりあはさるなり　花　おほくもなき兄弟といふ心なり

此けんにおなし心　豊後介盛に同心せぬとて次郎も三郎も豊後介と中よからぬとなり

このけんにあたまれては　あしくおもはれてはなりあたかたきのやうにせられてはあしかりなんとなり

中々なるめをやみん　なましひの事をしてはと豊後介大事におもふなり

いきたらしと　河　不生なり　花　いきてありかたきとなり

おもひかまへて　豊後介心かまへなり

いもうとたち　豊後介かいもうとなりあねはてゝにとまる歟あてきはよすかあれともすてゝのほりたるよし末にみゆ

あてきといひしは今は兵部の君　秘　末のいもうとな

り
大夫の監はひてにかへり　秘こゝの注にかけり
あねおもとは　子ともなとおほくてつくしに殘るな
り　兵部君の心都の人なれとも久しく住たれはこ
こをも故郷と云ふなり
松浦の宮のおまへのなきさと　秘都にてもおもひ出
ぬへきとなり「おくろさきみつの小嶋の人ならは
都のつとにいさといはましをといへる心あり　私
鬪にくりはらのあねはの松の人ならはの類也と有
前の歌を引たかへたる歟秘の歌然るへし
兵部君 うきしまをこきはなれてもゆくかたやいつくとまり
としらすも有かな　秘兵部君の歌也浮嶋は名所なり
されとこれは名所にあらすたゝうきたるといふ心
計也　弄うき所をと云心あり兵部君歌うき嶋こゝ
にては名所にあらすしほかまのまつにうきたるな
とは名所なり
玉鬘 行さきもみえぬなみちに舟出して風にまかする身て
そうきたれ　玉鬘の歌也身のうへによそへたる尤あ
はれなり行末とても風なみにまかせたるなり　弄
玉かつらの歌なり身の上によそへたる歌なり

うつふしふし給へり　玉かつらの船中にてのさま也
まけしたましひにておひきなん　監のきゝ(つきてイ)つけて舟
にて追來てはと思ふなりさてはや舟にかまへたる
なり
はや舟といふ物　花はや舟は艫をおほくたつるをい
ふ舟の兩方のせがひに八ちやうも十ちやうもむか
ての手のことくたてゝおせはとくはしるなり海賊
舟は艫をおほくたてゝこくによてはやくはしると
いへり　河あしはや小舟萬葉第七　舸四聲字苑云古
我反　漢語抄云波夜布禰　高尾舟一云職士可乘之
輕舟也　はこやの刀自物語云女をは馬にはえのせ
たてまつらしはやふねつくるへきやうをおもほせ
と也
後撰朝綱(綱イ)朝臣「大島に水をはこひしはや舟のはや
くも人にあひみてしかな
あやふきまてはしりのほりぬ　順風つよくてあまり
あやふき舟のはやきなり
ひゝきのなたもなたらかにすきぬかいそくの舟にや
あらん　河「きのふこそふなてはせしか伊作(イサ)魚とる
比治奇(ヒチキ)のなたを今日みつるかな萬第十七「あふ時

はますみのかゝみはなるれはひゝきのなたに波も
とゝろに孫姫式「年をへてひゝきのなたにしつむ
舟の波のよすかをまつにそ有ける忠見集　名所袖
中抄顯昭云比ちきのなたは播磨にあり俗説にはひ
ゝきのなたともいふと云々　李部王記云天德四年
六月十一日是日備前備中淡路等飛驛至備前便申云
賊二艘（純友等也）從響奈多捨舟脱遁疑入京歟云々　花ひ
ゝきのなたのかいそくの舟は李部王記の面影あり
河に見えたり　聞ひゝきのなた名寄には備前とあ
り

かいそくのひたふるならむよりも波のおにしき人（三本おそろしきとなり）
花ひたふるは一向と云へり海賊の舟ならは一向の
事なりさはなくて大夫監か追きたらはいかゝはせ
んとなり　おにしきはおにのやうなる人といふ心
なり　河鬼也　私河花におにしき人とあり三本お
そろしき人と有

玉かつら又は兵部の君
うきことにむねのみさわくひゝきにはひゝきのなた
も名のみなりけり（さはらさりけりイ）　弄玉鬘の歌と云々　一勘兵部君
と云々如何　祕玉鬘の歌也又說兵部君と云々兩說
共に用之聞書同　私三本さはらさりけり（名のみなりけり）如此有猶
玉かつらの歌にて然るへき歟

河じりといふ所　河河尻　花川尻（攝津國也）弄同　聞尼
崎あたりか　私勘云土佐日記云六日みをつくしの
もとよりいてゝ難波につきてかはしりにいるみな
人々をんなをさなきもの額に手をあてゝよろこふ
事ふたつなしかの舟ゑひ（醉）のあはちしま（淡路島）のおほいこ（巨）
都ちかく成ぬといふを悦ひてふなそこよりかしら
をもたけてかくそいへる「いつしかといふせかり
つるなにはかたあしこきのけてみ舟きにけりいと
おもひの外なる人のいへれは人々あやしかる

からとまりより川しりおすほと　河「からとまり（能許）の
てのうら波たゝぬ日はあれとも家に戀ぬ日はなし
萬葉之此泊若各別所歟又おほすはとはといふ引
歌有之歟可尋　善相公意見に延喜十四年曰重請修
復播磨國魚住（ウヲスミノトマリ）泊事右臣伏見山陽西海南海三道舟船
行程自櫂生泊至韓泊一日行自韓泊至魚住泊一日行
自魚住泊至大輪田一日行自大輪田泊至河尻一日行
也是皆行基菩薩計程所建立而今公家唯修造韓泊輪
田泊長廢魚住泊以下略之　花清行か意見にのせた
るとならは唐泊より河尻へは三日に行道なり故に

川尻といふ所ちかつきて舟子は唐泊よりおす程はとうたひたるなり唐泊は備前國にあり狭衣歌に
「かへりてしかひこそなけれからとまりいへらなかりし人のゆくへは
なさけなきもあはれに　聞こゝへ舟かつきたるかうれしきゆゑなり
いとかなしきめこもわすれぬとて
けにそおもへはみなうちすてゝ　豐後介か心なり
身のたすけとおもふらうとうともは　河郎等也　用にも立へき物をは道の用心に皆召具したるとなり
これをあしとおもひておひまとはして　大夫監か聞て豐後介か妻子をいかにあたなむらんなと思ふなり
心をさなくかへりみもせて　玉かつらの御事を詮と思ひたる所みえたり
すこし心のとまりてそ　秘思ひたちてのほりし時はさも思はさりしをと心もしつまりて思ひ出てあさましきまてかなしむなり
胡の地のせいしをはむなしくすてゝ〳〵つ　河梁原卿
井不レ得レ見胡地妻兒虜棄捐　白氏文集縛戎人の詞　花豐後介

のわか女を殘しおく事を思ひて此句を誦したるなり　秘豐後介のありさま文集縛戎人之詩の心によく相似たり全篇をみるへし　弄從レ漢攻レ胡之時漢人止二胡國一不レ得レ歸漢軍敗之故也後又從レ漢攻レ胡之時止レ胡之人欲レ歸レ漢也此時棄二胡妻子一而漢不レ入二彼人一剩圍レ之號二敵國之住人一仍兩國無レ便之意叶二物語喩一云々　私云文集縛戎人詞也以上弄
此心は漢より胡國を攻られしに漢軍破れて多胡國に止たりさて多年居着きて妻子なとも有り其後又漢より胡を攻られし時此者共漢に歸りたく思ひて胡國にて持たる妻子を棄て出たれは漢の方久しく敵國に住したる者なりとて寄なんたそ結句圍なとしたそ豐後介か筑紫の住なれたる所をも離れ又都も故鄉なからも久しく在國したれは便も有ましき事に比したる也
兵部君聞てけにあやしのわさやとしころしたかひつる人　豐後介か胡地のせいしをいふを聞て兵部君の身の上をさま〳〵思ふなり是も男をすてゝのはれるなり
かへるかたとても　みやこはふるさとなれはかくい

へり
たゝ一所の御ため　玉かつらを田舎人になしたてま
つらんをわたらしく思ふはかりに何の心あてもな
く都へ思ひ立しとなり
思ひめくらすかたなし　住つる所をはなれて数日の
海上にて心のしつまる程行末のさまなといはんか
たなかるへし
この人をも　秘玉かつらなり
いそき人ぬ　秘京へ入るなり
九條にむかししれる　秘めのとのしれる人也
あやしきいちめあき人の　市女商人　都のうちなか
らかたほとりのやうなるなり
秋にもなりゆくまゝに　秘三月より思ひ立てのほる
ほとにとかくして秋に成なり面白し
ぶでの介といふたのもし人もたゝ水鳥のくかにまと
へる　河如魚鼈之居陸似鳥雀之覆巣古願文　本文猶可
勘　花舊記に莊子の魚のたとへをひけりこゝに不
叶一説別にしるすへし　秘古釋さま〳〵なり花鳥
別勘にもあり其義に不及詩經也關々睢鳩在二河洲一ニといへ
る其所を得たる心なれは只よるへもなき姿をくか
にまとへるとはいへるなり　聞水鳥は水を得たる
物なりそれかくかに住たるやうなるとなり別義な
しと云々　私此義尤可然三光御説也
心をさなくいてたちにけると思ふ　豊後介が心也
したかひきたりしもの　豊後介か郎等なとも行ちる
なり
おはおとゝ明くれなけき　豊後介かうへを又思ひな
けくとなり
なにか此身はいとやすく　豊後介か詞也おはおとゝ
に心やすく思はせんとなり
人ひとりの　玉かつらなり
さる物の中にはふらし　玉かつらを監なとにあはせ
たてまつりては豊後介いかやうのいきほひに成て
もくちをしき事なりと思心イをたてゝいふ也
やはたの宮と申はかしこにてもまゐりいのり申給ひ
しまつらはこ崎　河筥崎は八幡也松浦宮はあまたの
説ある歟風土記に神功皇后の御鏡石に成て鏡山に
ましますとみえたり仍一體といふ歟　延喜廿一年
六月廿一日於觀世音寺南大門御託宣記當寺講師遣一記之託若宮神
子七才女子橘滋子曰也吾是八幡若宮一御子也大菩薩仰云吾穗浪

郡大分宮移住後已有　三意一者竈門宮ハ我伯母仁御
坐而年中節會府官以下國司離任年來之間晴之翟或
乘馬天遇（過イ）遙拜下或乍着笠渡彼御前其恨甚有恐二者
郡司百姓饗膳供給越嶮岨山數日致煩民間苦同我苦
三者放生是海上之事也穗浪宮者已非放生地也因之
避彼地欲移住筥崎松原有其故昔我國土鎭護始時戒
定惠筥彼松原地所置也仍其名を筥崎とは號也云々
筥崎新宮可向新羅國方又礎面書敵國降代之由可立
其桂（柱イ）宮殿梁棟可用柏根又可安置藥師彌勒觀音等像
奏聞公家早棄穗浪古殿移坐筥崎宮云々（記略文）　大貳藤
原當傍朝臣言上公家任官符旨少貳眞材朝臣造立新
宮其官符議云託宣之旨爲御樂所來（未イ）闕如之外賓通接
之境也營其宮殿殊盡美麗者　延長元年遷御筥崎離
宮　花　筥崎は筑前國在云々　秘　松浦者神功皇后鏡
を埋給ひし成へし　弄　筥崎神者八幡同體也松浦事
在河海若其義歟不分明云々又花鳥に在　閑　松浦筥
崎とはたゝつゝけていひたる歟
かの國をはなれ　肥前よりのほり給ふときの立願也
今おなし社なれははやく八幡へ參り給へとなり
ごしとて　河　八幡宮五師也　河　貞觀八年別當安崇之
時以運如法師始補五師云々安和二年別當貞芳之時
以五師貞善法師始補大五師云々村上御記云康保三
年八月廿八日藥師寺三綱五師等相率參陣外云々
弄　八幡宮の五師五人有事歟一禪勘云五師はたゝ法
師の司也五人の事不遣八幡宮に不限諸寺に五師は
あるなり
おやのかたらひし　秘　故少貳かしる人なり
うちつきては佛の御中には　秘　それにつきては也
秘　菩薩を佛といへる如何と云說あれと佛菩薩は同
事なれはなり　花　長谷寺は觀音也佛に對して神佛
といひならはしたれは誠は菩薩なれと佛といへる
にや又觀音を則佛といふは無量壽佛涅槃し給ひて
後一切光明功德山王佛となつけ奉るへし佛と申さ
んにもたかひ侍るましき也　私記別の沙汰に及は
す菩薩をも天部をも世俗にはおしなへて佛と心得
たり神佛と云義然るへし
はつせなん日本のうちにはあらたなるしるしあらは
し給ふともろこしにたにきこえあン也　秘　緣起にみ
えたり　河　緣起云長谷寺は神河の浦北豐山峯德道
上人建立十一面觀世音菩薩之利生道場也（十一面二丈六尺）文

武天皇御宇德道上人造立之法道仙人是也　神龜聖武天皇元年四イ
公家被建立堂宇同四年三月廿日供養講師行基菩薩
也唐僖宗皇帝后馬頭夫人文宗孫玄成太子女形の見にくき事を
歎き給ひけるに仙人の敎へによりて東に向て日本
國長谷寺觀音に祈請し給ひけるに夢中に一人の貴
僧紫雲に乘て東方より來て手をのへて瓶水を面に
灑と見て忽に容貌端正に成にけり因玆乾符三年丙
申七月十八日侍女を引卒して明州の津にいてむか
ひて十種の寶物をたてまつらるゝと云々　又吉備
大臣入唐時長谷寺觀音住吉明神に祈請して野馬臺
を讀けるに靈瑞あるよし江談にみえたり
とをき國のさかひとても　秘　遠國といひなから我國
の人なれはいかてか靈驗なからんと也又の義は德
道上人の聖朝安穩藤氏繁昌と祈給へは玉鬘は藤氏
の人なれはと也兩說共に可用之
わか君をはまして　弄　我君は玉鬘也ましで藤氏を取
わきての心也　河　德道法道イ上人長谷寺建立之時藤原房
前卿奏聞助成之間彼上人聖朝安穩藤氏繁昌乃至法
界衆生のためと祈請之由見緣起今の玉鬘君は藤氏
の棟梁の息女なれはましてといふなり　花　神龜元
年二月廿三日勅に依て藤原房前朝臣奏狀に所載下
稻三千束爲ニ長谷寺造佛料物ニ云々　今案玉鬘の君
をは藤原のるり君と云ふ藤氏繁昌を祈請せるよし
長谷寺の緣起にのせ侍れはましてと云詞をあらは
し侍り一儀云もろこしの人たに祈請渇仰すれはそ
のしるしをあらはし給ふましてわか君は我日の本
に生れ給ひてしかも初瀨へまうて給へは利生にあ
つかり給はん事うたかひなきかと云心也云々
ことさらにかちよりと　秘　一段の懇志たるによりて
なり　河　うつほの左大將あて宮を思ひかけてその
いのりにはつせにまうつるもかちよりとみえたり
いかなるつみふかき身にて　玉かつらの身の上をさ
ま〱におもひつゝくる心中なり
わかおや世になくなり給へりとも　母上の此世にな
き人ならはわれもおなし道になりたきとなり
ありけんさまをたに　秘　三歲にてはなれ給ふ故母上
の御かたちをおほえ給はさるなり
かくさしあたりて身のわりなき　親たちをしらぬな
けきはかりにて有つるか今は又玉かつらの身上も
たつきなきを打そへてなけくと也

からうしてつばいちといふ所に四日といふみの時は
かり　秘長谷寺のあたりとみゆ弄同　聞に長谷寺へ
一里計有と云々　河椿市大和國名所也つはきの市
ともつは市とも云因能歌枕に見えたり　日本紀に
海石榴市といへる別所也つはきの市にて土蜘を打
ころしたる處也　萬「紫ははひさす物をつは市の
やそのちまたにあひしてやたれ　清少納言枕草子
云つは市やまとにあまた有中にはせ寺にまゐる人
のかならすそこにとまりけるは觀音のつけのある
にやあらん心ことなり

花小右記云正暦一條院元年九月八日參長谷寺午時至
椿市令交易御明灯土器等參御堂修諷誦布廿端御灯（明イ）
三萬灯云々　今案初瀨へ參る人はつは市に至りて
御明（ミアカシ）の事なとを用意する事此物語の心小野宮の右
府の記にあひかなへり

あゆむともなくとかくつくろひ　つは市まて四日に
行つきたるはすこしつゝの道なるへし

このたのもし人なる介　秘豐後介なり

ゆみやもちたる人ふたり　秘めし具したる人なり

しもなるわらは三四人（サウシニン）　聞三四人又（サウシニン又 ミタリヨタリ）或抄
にサウシニンと有可用之

女房（をんなはらイ）あるかきり三人つほさうそく　秘をんなはらと
ありておはおとゝさては兄弟なり云々　私此秘の
義あやまれり　花あるかきり三人は姫君少貳の後
室兵部君此三人也弄同　河つほさうそくは市女が
さに中ゆひたる物なりと云々枕草子にあり拾遺集
の詞にも春ものへまかりけるにつほさうそくして
はべりける女ともの野にはべりけるをみてといへ
り

ひすましめく物　河大つほかふる物の名なり　秘い
やしき女なり或類字源語抄に不淨を川に持て行て
洗てすつる下女なり丸といふ桶に不淨の有を生好（サイコツ）
絹（私精强と書歟）二幅を縫連て兩の端を結合て此丸を
すへて臂にかけて持出るなり此女をひすましと云
すますは灑なりと在

大（オホ）みあかしの事なとこゝにてしくはへ　秘つは市に
て用意せしなり　花李部王記云延長八年八月作願
文遙祈長谷寺奉灯明十萬灯云々　小右記云正曆三
年三月參長谷寺奉御明十萬灯云々

家あるしのほうし　弄はせのふもとのさとゝきてゆ

人やとしたてまつらんとする所に何人の　花宿ぬしにしらせすしてこれよりさきにつくし人をやとしたれはあるしの法師來てはら立をいふなり　秘別の人をやとさんとせし物をとて腹たちたるなり

めさましく

けに人々きぬ　これ右近なり　秘かやうにいふうちに人々の來るなり

これもかちよりなめり　秘これ右近なり玉かつらの事祈る故の懇志歟弄同　忍ひて參るゆゑかやうにあるなり

ほうしはせめてこゝにやとさまほしく　此せめてはずんご懇切にといふ心也いとせめて戀しき時はなといへる歌に同し心歟

かしらかきありく　花かしらかきとは心ちあしくおもふ心なり　弄これをいとほしけれとゝいへり

人々はおくにいりほかにかくしなどしてかたへはかたつかたによりぬ　つくし人をはおくのかたへいれ少貳は外に宿をとらせ女君なとをはかた／＼へよせてもとのまゝにておくなり　私初瀬にて玉かつら右近おひやとり是なり

せしやうなと引へたてゝ　秘幕の類也ついたて障子のやうなる物なり　弄一搨軟障（ゼシヤウ）とて幕のやうなる物に高き松なと繪にかきて壁にそへてひくなり

このくる人も　後に來たる右近か事をいふなり

さるはよとゝもにこひなく右近なりけり　是は草子地歟　互に戀しく思ふ事なるへし

はしたなきましらひの　秘彼參詣を訓釋する也　草子地なり　紫上の御あたりもはれ／＼しきましらひは心にもかなはされは玉かつらにかへり逢へき祈念に連々參詣せしなり

れいならひにけれは　常に參詣しなれたるなり

かちよりあゆみ　河徒歩行（カチヨリユカン）也　大軍徒渉（カチヨリワタリテ）氏白氏文集

まゐりもの　食物の事歟

おまへに　玉かつらの御前なり

御たいなとうちあはて　道具の不合期なる心なり

わかなみの人　秘等輩はかりにてはなくて主君あるとおほしきなり　聞右近心なり云々然らは右近つれにてはなきと心に思ふ歟

物のはさまよりのそけは　花右近の君かのそけるなり

このをとこのかは　豊後介なり
ふとしもみわかぬ　右近の豊後介かわかき時を見しに年を經てふとりやつれたる故見忘れたりと草子地に註にかけり
三條てゝにめすと　はした物歟
又見し人也　此三條をも右近のみしれるなり
故御かたのしも人なれと　夕顔上なり此三條は下すなれと五條わたりの夕顔のやとまてつきて參りし女となり
かくれ給へりし御すみか　弄夕顔の宿の事也　秘かくれ給へりし御すみかとは頭中將にかくれしのひて五條のわたりにおはせし事をいふなり若河原院にてうせ給へる時の事にやと人のおもひまかへぬへきゆゑに懇に註するものなり
夢のやうなり　右近か心也　此三條にてすこし思ひいてゝかくおもふなり
しうとおほしき人は　玉かつらなり
この女に　三條也
兵藤太（ヒヤウドウタ）と　河兵藤太豊後介かもとの名也此名先例あり兵部丞なとにてありける時は太郎なるにつきて姓をくはへて兵藤太といへる歟　弄此名も例ありき昭宣公の內にありし也　私花寛平御記云臣家有ニ兵藤太者ニ云々今案昔の兵藤太は昭宣公のめしつかはれし人の名なり此物語に兵藤太は豊後介か事なり右近かみし時は此人兵藤太といひしを思出したるなり云々
とみにもてぬいとにくしとおほゆるもうちつけなりや　此三條か食物に心いれておそく來るを右近のおもふ心なりされといまたおほ〳〵しく見しりなから三條におとしつけてかくおそく來るをにくしとおもふはうちつけなるといふなり
からうしておほえすこそ　花三條かあり〳〵といふ詞なり　秘かく尋ぬるを三條不審に思ひたるなり
つくしの國にはたとせはかり　三條か右近の方へ行とて云詞なり
ゐ中ひたるかいねりにきぬなと　三條かいてたちのさま也　河搔練は紅のうすき色也かいねりのもにきぬきてと云へきを畧したりしをん色の裳の如し如此詞不可勝計　花搔練はうすき紅のきぬのねりはりたるをいふゐ中ひたるとは小袖をいふにやき

ぬなときては上にうすきぬをきたるへし　河海にかいねりの裳にきぬきてといへるあやまれるにや云々

わかよはひいとゝ　秘右近かわれもはつかしきなり三條かさまにて身を思ひしゑなり

猶さらのそけわれをは見しりたりやとて　右近の三條にいふ詞なり

此女てをうちて　三條かおとろきたるさまなり

あかおもとにこそ　秘うかおもとなり

あなうれしともうれし　ゐなかひ下す〳〵しきさま也

うへはおはすや　秘夕顔の上也

わかきものにてみなれし　右近か三條をおもふ心也

まつおとゝは　花右近か詞おとゝはめのとをいふなり　秘右近か詞也少貳の北方をいへり　弄玉かつらのめのとなり

わか君は　玉かつらなり

あてきと　秘兵部君なり

君の御ことは　弄夕顔上の事なり　秘夕かほの上の事をはてたへさるなり

みなおはします　秘三條か詞なり

姫君もおとなに　玉かつら君なり

みなおとろきて　おとゝ豊後介なとみな〳〵おとろくなり

いとつらくいはんかたなく　秘夕顔の上をつれて行ぬる人は此右近なれはなり

まついひやるへきかたなく　互にことはもなくて先なくさまなり　秘もろともになきたるさまおもしろし

老人はたゝわか君は　秘我か君也夕顔上をいへり　花老人は少貳の後室也わか君は夕顔上の事なり

うちすて給へるわか君の　秘夕顔にはなれて乳母の老はてゝ殘れるは我子なから心うけれと玉かつらを打捨ておき給へるかほたしにて命もをしまるゝとなり此わか君は若君なるへし

よみちのほたし　冥途をいふか玉鬘の君にかけとゝめらるゝ心をほたしと云なり

またゝき侍ると　一瞬也　花瞬秘同　生て目をはたらかす心なり　弄存命の心也

聞灯の消殘りたる體也あるかなきかにして消やら

ぬ體也老人の存命にたとへたるなり
むかしそのをりいふかひなかりし　弄右近か心也
その折とは夕顔上のうせ給ひし當意をいふ也
いてやきこえても　右近か詞也　秘夕顔上の此世に
ましまさぬよしをいへり
三人なからむせかへり　花上にいへる三人なり
むつかしくせきかねたり　私こゝのあはれをいはん
かたもなけれは（なくあはれなれはイ）中々かきあらはさすしておきたる
心尤感ふかゝるへし
心あはたゝしくて立わかる　寺へはつれたゝぬなり
もろともにやといへるかたみにともの人　つれたる
人々の不審すへけれは各別に寺へは參るとなり
このすけにたに　河豊後介なり
中にうつくしけなるうしろて　秘玉かつらなり
う月のひとへめく物きてめ　秘一本にのしひとへめ
く物と有ねりきぬをはりてのしをかけたるものな
り卯月の時もきるものなり卯月のひとへめく物或
はのしひとへと有誤りなり花鳥に見ゆ　弄うすき
ぬの事也一勘如此のしをかけたるひとへ云々　聞
卯月とは更衣の比也　河のしひとへめく物古人釋

うすきぬ歟云々猶可尋枕草子云やせ色くろき人の
すゝしのひとへきたるはいとひんなしおなしこと
すきたれとのしひとへはかたはともみえすかし云
云　花のしひとへは舊記（説イ）にうす衣といへるあやま
れりきぬといふはうらのある名なりひとへと云は
うらもなき物をいふなり枕草子にすゝしのひとへ
に對しておなしすきたれとのしひとへはかたはと
もみえすとかきたるはねりひとへのことくきこえ
たりはりひとへのうへにのしをかけたれはのしひ
とへとはなつけたるにやかみのすきかけなといへ
るわたりやうもなくひとへとはきこえ侍（かイ）るなり
心くるしうかなしと　玉かつらの君のうちより參り
給へるなとを右近の思ふ心なり
あしなれたる人は　秘右近は御堂にはやく參りつく
なりあしなれたるはありきなれたる成へし
この君をもてわつらひ　秘玉かつらなり
そやおこなふほと　秘初夜也弄同
右近かつほねは佛の右のかたにちかき間にしたり此
御師はまたふかゝらねはにやにしのまにとほかりけ
るを　花つくし人はけふはしめてまうてたれはいの

りの師とたのみたるもいまた心さしあさきをふかからぬとは云なり　弄　玉かつらの局は末のかたなれは右近か局にとをきてゝろなり右近か局は佛遠（佛に近）しとあり（かきイ）堂は東向也その左右に局ありその局よりにしのつはねはとをしと也　秘　玉かつらは今日始て参り給へる也右近は速々参りたりし故に佛に近き方に局をかまへたる也又の義は長谷寺は宿老次第に局をかまへてひとをやとすなりまたふかゝらぬとは今の玉かつらの師は宿老ならさるよしなり此義可然也又にしのまに遠しとは玉かつらの局は末のかたなれは右近か局は佛に近しとあり堂は東向也其左右の局より西の局は遠しと也　私弄秘に師の宿老ならされはふかゝらねはにやと云義を執せらる此事不審也其故は此所にて玉鬘右近とあひやとりなり然は師は同人也前にやとりとりし時も玉かつら君の始よりやとりたれとも右近をやとさんとてかしらかきありくとあり前よりたのみなれたる師なれは右近を馳走する様也玉かつらははしめなれは師の志のおろそかなるをふかゝらねはといふなり又西の間に遠しとは堂は東向なれは佛に遠き局は東へよりたるなり右近は佛にちかけれは東のつはねよりは西のかたにあたるなり玉かつらの局より右近か局は西にあたりて遠しとなり聞書愚意とおなし　又此前にあひやとりせしはつば市なり長谷の師の坊にはあらす然らは秘弄の義然へきか但ふかゝらねはにやとは玉かつらの給（始イ）たるゆゑといへる義兎角可然歟

こなたにうつし　豊後介にいひて玉かつらの君其外の女ともをも右近か局へよひたてまつるなり人おほく参りこみたれは心つかひなり

かくあやしき身なれとも　秘　右近か詞なり

たゝいまの大殿に　右近か源にさふらふ事なり

物かたりいとせまほしけれと　右近か心なり

はとけをかみ　行（すゝなと）にまきれて物語もならねは佛を念するなり

右近か心の中に　玉かつらの君の事をかつ〳〵観音によろこひ申也

おとゝの君のたつね奉らん　是は源氏の大臣也

さいはひあらせ奉りたまへなと申ける　右近か心中の祈念なり

この國のかみの北のかたも　秘大和守也　弄大和守也　當國爲神領事近代の事也
大ひさにはこと事も申さし　大悲者也　觀音也　河大悲者とは觀音の事也玉鬘君の事より外には申さしと也類詠國史長歌云　五種の寶雲は大悲者の千種の御手の人の世をうつほの惣持院の十禪師の大とくもまたなくはせの大悲者人のねかひみて給へと云々　聞大悲薩也　猶始の義可然歟
大貳の北のかたならすは　此三條筑紫にて大貳をこと／＼しき事に思ひてかくいふなり
たうこくのすりやうの　河當國々司北方と云也大和國司也
三條らもするふんにさかえかへり申　河賽白氏文集 日本紀 其器量のすてしきなる物はねかひ事もかくあるなり
ひたひに手をあてゝ　ふかく信をおこしたるさまなり又ゐ申ひをかしき體をいふなり
右近にゝしくもいふかなときゝて　玉かつらを受領の妻にとねかふを右近かいまいましくおもふなり
いといたくこそゐ申ひにけれ　秘右近が詞なり　右近か三條をゐ申ひたるといひおとすなり
中將殿のむかしの御おほえたに　秘今の内大臣也
　花中將殿は玉鬘君の父君致任大臣也三條に云さかするによりて中將殿とは昔申せし名のりを云也
天下を御心にかけ給へる大臣にて　花四海安危ハ照ニ掌内ニ百王理亂懸ニ心中ニ 白氏文集 百錬鏡抄歟
いかはかりいつかしき　いつくしきといふ詞なり嚴の字也
御かたしもすりやうのめにて　秘今内大臣の女にてある玉かつらなとさやうの受領なとの妻になりたまふへき事かとなり
あなかまたまへ　秘三條か詞なり　花「床ちかしあなかまよはのきり／＼す夢にも人のみえもこそすれ
　大臣公卿もしはしまてとはしはし待給へ申てきかせたてまつらんと三條か右近にいへる詞也　私花の義尤面白しはしまて暫待也　今案あなかま給へはあなかしかまし物な言ひそと云心也
大貳のみたちのうへのし水のみてらの觀音寺也　秘筑前國也今に東大寺西堂管領也　聞に大貳の舘のうへにありと云々此事猶可尋　私大貳殿の北の方

といふ心歟舘とは殿といふ心なりうへは大貳の北方をいふ歟猶觀世音寺大貳の舘近き所ならは聞の義然へし　河在筑前國沙彌滿誓觀世音寺建立也則別當也萬葉に見　菅家御詩に都府樓纔看瓦色觀音寺只聽鐘聲　花八幡に對して松浦箱崎といひ長谷寺に對してし水の御寺の觀世音と云る物語の作りさまよしなきにあらさる也」萬「とふさたてあしから山にふな木きり木にきりかへつあたら舟木を　弄滿誓か觀世音寺作りし時の歌なり觀音寺筑前國觀世音寺萬葉歟　一勘清水の御寺も觀世音寺同事歟清水は在所の名也

あなむくつけとて　むくつけはおそろしき心也　右近におそろしき事な宣ひそといふ心なり

つくし人は三日てもらんと　秘玉かつらなり

かゝるついてにのとかに　右近は三日てもらんの心さしならねとつくし人と心しつかにかたらはんためにてもるなり

御あかしふみなと　河御燈文　秘願文成へし聞書同之　花李部王記云延長八年八月作二願文一遙祈二長谷寺觀音一願二御病平愈一將レ造二白檀觀音像一及奉二鏡一面灯明十萬灯一今案父御門延喜帝之御惱之時朱雀院御願文也

さやうの人はくた〱しう　秘例文なれは大かたよく心えてかく也　聞私くた〱しうわきまへとは懇に尋問ふ心歟又大かたにとふて例なれて大かたにかくといふなり

ふちはらのるり君　玉かつらの童名也　勝原瑠璃君玉かつらの內侍のかみの童名なり

その人この比なんみたてまつり出たり　弄わさと比比とおほめかしたるなり　秘わさと此比と云る奇特也

きくもあはれなり　秘つくし人のきくなり

ほうしいとかしこき事かな　こゝの祈の師の詞なり靈驗ありといふなり

しれる大とこのばうに　秘つは市にはあらす　弄つは市の宿にはあらす御堂のつほねより宿坊におりたるなり右近か御師なるへし

ひめ君のいたうやつれ給へる　玉かつらのさまなり

おほえぬたかきましらひをして　秘右近か物語なり　花同

殿のうへの御かたち　秘紫上也花同
又おひいて給ふ姫君　秘明石の姫君也花同弄
かうやつれ給へる　秘玉かつらをいへり
おとゝの君　源氏君なり
ちゝみかとの御時　秘桐壺なり
當代の御はゝきさき　秘薄雲女院なり
このひめ君　あかしの姫君なり
よき人とはこれをいふにやあらんとおほゆると聞え給ふ　源氏の君のかく仰らるゝ事を右近かかたるなり玉鬘の君のかたちのおとるましきとおもひていふなり
みたてまつりならふるに　右近の君見たてまつりならふるなり
かのきさいの宮をは　花藤つほの中宮をは右近か見たてまつらぬ事なれは知りきこえすといへり
姫君はきよらにおはしませとまたかたなりにて　花明石姫君也八歳也　明石姫君はすくれたれといまたをさなくおはしますをいふなり
うへの御かたちは　紫上の御事なり　弄夕かほの上の事なり　私此義非也　紫上は各別にさかりにうつくしき成へし
殿もすくれたりとおほしためるをことにいてゝは何かはかそへのうち　源の心にも紫はすくれたりとおほせと紫に對してかたり給ふ事なれは此かそへのうちへは何かは入給はんそとなり
われにならひ給へるこそ　花源氏紫上にたはふれ給ふ詞也　秘雙（ナラブ）也紫上の事を宣ひて源氏我身をよきためしにの給ふなり
いつこかおとり給はん　秘玉かつらはおとり給ふましき由なり　右近か心に紫上をこそたくひなく思ひしに今玉鬘の君を見奉れはさらにおとりたる所ましまさぬとほめたる詞也
いたゝきをはなれたる光やはおはする　河上臈をはなれてよき人あるましきと云心也勘文同日出てはまつ高山をてらすと云々　花楞嚴經云世尊頂放ニ百寶無畏光明ヲ云々　今案佛の光明は眉間よりも又足の下よりもはなち給ひし全身をはなれたる光はなきなり其中に最上はいたゝきよりはなち給ふ光なり人のみめよきといふも最上はかきりあるたとへにいへるなり　秘河海花鳥共に之用なり

これをすくれたりとはきこゆへき　人のかたちには
紫上此玉かつらなとを最上といふへし別にはあら
しと右近のいふなり
おい人もうれしと　秘　おはおとゝなり
かゝる御ありさまをほと〳〵あやしき所に　秘　殆ほ
とんと也　おはおとゝの右近にいふ詞なり此玉かつ
らをすてにゐ中人になしはてんとせしとなり
家かまとをもすて　河　家烟也　河　仁徳天皇御歌「高き
やに登りてみれはけふりたつ民のかまとはにきは
ひにけり
をとて女のたのむへきともにもひきわかれ　おはお
とゝ男子女子にも皆わかれてこしとなり
かへりてしらぬ世の心ちする京にまうてこし　河　詣（マウテ）
来（コシ）也　都は故郷なから類にもはなれ年久しくなれ
はしる人もなくて結句しらぬ世界のやうなるとな
り
あかおもとはやよきさまに　右近をさしていふ詞な
り
おのつからゆきましりたる　ひろき所はいつかたへ
の縁もある物なりと云ふなり

ちゝおとゝのきこしめしかすまへられ給ふへきたは
かり　秘　給ふへきと云詞落着せめてとは也　如本こゝ
ははや上のよきさまに道ひき給へと云に影略して
見へきなりさまにたはかり給へと云へきをさまの
字上にあるをもたせて云也文體面白し　秘　此義非
也まへにかけては見へからすたはかりとははかり
ことなりかすまへられ給ふへきやうにはからはれ
よといふ也　私此詞さきのわれにならひたまふこ
そといふ所の註にかけり今引合て爰に書いるゝな
り此段何のやうもなく聞えたる所なりむつかしき
沙汰に及はさる事歟
うしろむき給へり　秘　玉かつらなり
いてや身こそ数ならねと　秘　右近か詞なり
殿もおまへちかく　源也
いかにならせ給ひにけんときこえいへるを　玉かつ
らの事を折々右近の申（クイ）いたすとなり
聞いてたてまつりたらはと　聞出したらはしらせよ
と源の右近にの給ふとかたるなり
おとゝの君はめてたくおはしますとも　源を云也お
はおとゝの心に源は然るへき事なれともやんこと

なきかた／＼おはすれはいかゝと玉かつらを源の北方に思ひていふ也子にせんとおほす心をしらぬなり　花是はめのとの詞なり

まことのおやとおはするおとゝ　むかしの頭中將今内大臣也

ありしさまなとかたりいてゝ　花是は右近かかたる詞也　秘こゝにてありしさまを右近かくはしくかたり出る也　夕貌上のうせ給へるさまなと成へし

子もすくなきかさう／＼しきに　玉かつらを源の子にせんとおほす心を右近のいふなり

たつねいてたると人にはしらせて　清　此て字清也　源の子そといひなして玉を尋とのと右近に宣ひしと也

心のをさなかりけることは　秘そのかみは右近もをさなかりしをいふ也　私をさなきにてはあらさるへし心のいたりなく分別なかりしをいふ成へし

少貳になり給へるよしは御名にてしりにき　右近のしりたる時は少貳にはあらすされと源へまゐりたる時の名にてさてはその人少貳に成たるよと知つるとなり

まかり申にとのにまゐり給ひしに　秘少貳になりてくたるとて源へいとまこひに參り給へりしをもみしなりされと其時もえ尋よらさりしとなり　花まかり申罷申也少貳なとの任國へおもむかんとては然るへき所へ御いとまこひに參るをまかり申とはいふなり

さりともひめ君をはかのありし夕かほの五條にそ　玉かつらをつくしへ具し奉らん事をはおもひよらさりしとなり

右近　二もとの杉のたちとをたつねすはふる川のへにきみをみましや　河古初瀬川ふる川のへに二もとある杉年をへて又もあひみん二本ある杉　秘けふはつせにまうて侍らすは何として逢奉るへきそと也　私年をへて又あひみたる心引歌をよく思ふへし

うれしきせにもと聞ゆ　河六帖三「いのりつゝたのみそわたる初瀬川うれしき瀬世イにもなかれあふやと　秘引歌おなし

源玉鬘　はつせ川はやくのことはしらねともけふのあふせに身さへなかれぬ　はやくのことゝは昔の事を云ふそれを水のはやきに詞をかりていへり古今歌「よし

の川岩波たかく行水のはやくそ人をおもひそめてき此はやくも同し心なり身さへなかれぬとは涙川によせていへり是は玉かつらの君のよみ給ふへきなり右近にあひて昔のことをきけは身もなかるゝほと涙に袖をぬらすとなり　秘玉鬘の返答なりそのかみの事はしらねと今日あひぬる事のうれしさは袖にもあまるとなり　弄ふるき事はしり給はぬと玉かつらのの給ふ也　河「あさみてそ袖はひつらめ涙川身さへなかるときかはたのまん

かたちはいとかるく　右近か心なり

ゐ中ひこち〳〵しう　花こち〳〵しうは初音巻にもある詞なりこと〳〵しき心なり女のためには物のこち〳〵しきはわろき事なり　秘かたちにうちそへたるやうたひをほめたるなり

おとゝをうれしく　秘おはおとゝをありかたくおもふなり

はゝ君はたゝいとわかやかに　秘夕貌上よりはまさりさまなる也猶此物語には紫上を第一にほめてかき次に玉鬘をほめてかくなり

つくしを心にくゝ　秘所詮筑紫は人のよく生長する所そと心にくゝおもふなり

みな（はろイ）みし人はさとひにたるを　秘玉かつらの外はみなゐ中ひたるなり　花ゐ中ひたるをはさとひたるといへりさとなれたるなり　弄さとひたるはゐ中ひたるなり所によりて又義あり

くるれはみたうにのほりて　観音へ入堂也三日の心さしにてかくこもるとなり

秋風谷よりはるかに吹のほりて　花谷のふきあけといふ事なり　秘かけつくりの坊の（堂イ）さまなり　私御百首の中に古寺鐘を　後柏原院御製に「吹のほる谷風みえてはつせ山夕のかねに雲のかゝれる

人なみ〳〵ならんことも　父おとゝにかすまへられ奉らんとも思はさりしに皆々物めかしたまふを聞てたのもしく思ひたまふなり

はら〳〵さなにも　秘内大臣の御子なり

かゝるした草もたのもしくそ　花玉かつらの君の我身を卑下してかゝる下草とはの給へり　河（萬葉）「わかやとに軒の下草おふれとも戀わすれ草みれとまたおひす人丸　（大和物語）「かしは木の森の下草おいの世にかかるおもひはあらしとそおもふ　良岑仲連　私不

及引歌卑下していへる詞なり
いつとてもかたみにやとる所もとひかはし　秘寺より出るとてもあり所を互によくをしへおくなり
おひまとはしたらん時　昔ゆくへなくありし事ゆゑなり
程遠からていひかはすも　秘六條と九條と程近き故也花玉かつらは九條の家にかへる右近は六條院近きわたりなれはほと遠からぬといへり右近か家はまことは五條なり下に見えたり
右近は大殿に参り　秘泊瀬より歸て以後也
この事をかすめきこゆる　玉かつらの事を申出すへきついてもやといそき参る也草子地なり　秘此事は玉かつらの事なり
みかと引いるゝよりけはひことにひろ〳〵として　引入るゝは車也秘二條院は狭少なりし目うつりに只今六條院のひろくすみ給へるをいふなり　弄二條院の目うつりにていふなり
おもひふしたり　秘玉かつらの事をおもひふしたるなり
とりわきて右近をめしいつれは　秘紫上よりめすなり
おもたゝしうおほゆ　右近の心に面目ありておもふなり
おとゝも御らんして　秘紫上の御方にて源の見給ふにはあらす前に御覧しける也次の詞にうへにきかせ奉らてといへる詞にて知ぬへし　弄同
こまかへるやうも　河若反萬葉同萬三　河「あさ露のけやすき我身老ぬとも又こまかへり君をしまたん萬三人丸「霜かれの草のゆかりそあはれなるこまかへりてもなつかしき哉うつほの物語に大將こまかへらせ給へかしと云々　秘河海に萬葉十一若反をひけり當時流布仙覺が點本に若反（わかへり）と點せり古點にこまかへる也わかゝへる心分明なる者なり　花こまかへるはとしよりのたちかへりわかやくをいふなり
まうてゝ七日に過侍れと　右近が初せにまうてゝ歸るまて七日はかりなる玉鬘の三日といひしにその程かなへり　秘長谷寺に三日參籠首尾七日はかりなり
あはれなる人をなん　秘玉かつらなり
なに人そとゝひ給ふ　源の詞也誰そとの給ふなり

ふときてえいてんもまたうへにきかせ奉らてとりわき申たらん　ふと源氏はかりへ申たらんは紫上のいかゝおほしめさんと用捨したる分歟　秘此詞にてみえたり紫上の御方にはあらず
御とのあふら　秘紫上の御方なり
女君は廿七八にて　秘實は廿八歳也
かの人を　秘玉かつらなり　弄廿八歳なるへし玉かつらは四歳にて肥前に下り任五ヶ年也其歳廿年はかり過て六條院へは廿二歳にて迎る也
おもひなしにや　玉かつらはかりをみたる時はおとらしと思ひつるか只今紫上をみれはよろつのたゝすまひ以下かはるへけれは又一かとちかふたるとなり
おほとのこもるとて右近を御あしまゐりに　秘源の御あしさすりなとさせ給ふなり　弄足をさする事なり
わかき人はくるしとてむつかるめり　河むつかるは勘當の心なり若き人ははらたつといふ心なり　花わかき人はつかふをはらたつほとに年老たるとちはむつひよきとたはふれ給ふ詞なり

さりやたれか（はイ）つかひならひ給はんを　秘さふらふ人人のいふなり
うへもとしへぬるとちうちとけ過は　秘源のたはふれの給ふなり紫上の右近をもいかゝと自然うたかひ給ふへきとなり　弄右近に源氏のかたらひ給ふを紫上のむつかり思ひ給ふへきにやと源氏の詞也
さるましき心とみねは　秘紫上の詞也源の御心一向にさあるましきとは思はさるとなり　弄紫上の詞也源氏の御心をあるましき心ともみねはあやふしと宣ふて右近にたはふれ給ふなり　私うへもとしへぬるとちうちとけ過はむつかり給はんとやといふを源の詞といへる如何是は紫の心にも右近ともしたし過はむつからんとおほすやらんさるましき心とはみぬあやう（ふイ）しと右近にの給ふ心歟前をは只紫の心中を推量てかける成へしさるましきといふより紫上の詞なり
いとあいきやうつきて　紫のさまなり
世中のとやかにおほさるゝまゝに　源氏の御身のいとまもありおほすさまなる事を云ふなり
かのたつねいてたりけん　秘源の詞也たはふれ事な

り
たふときす行者　前に右近か山ふみし侍りてあはれなる人をみいてしと申たりしをうけての給ふるたはふれ事なり
あなみくるしや　秘右近が詞也
けにあはれなる　秘源の詞なり
とし比はいつくにかと　源の玉かつらのいつくにおはせしそと問ひ給ふなり
あやしき山さとに　右近か詞なり
よし心しり給はぬ　秘紫上はその世の事はしり給ふましきなりくはしくはかたり申ましきとなり源の詞なり
うへあなわつらはし　秘紫上の詞なり
かたちなとは　秘源の詞なり
かならすさしも　右近が詞也かならすさやうによからんとも思はさりしかことの外おひまさり給ふとなり
おかしの事や　秘源の詞也
この君と　弄紫上をの給ふなり　秘此君とゝは紫上をいへり花鳥に此君とは源自稱と云々いかゝ　花此君源氏の自稱の詞なり玉かつらの君を我に似たるかと問ひ給ふなり　此義非なり
いかてかさまては　秘右近が詞なり　右近がいかてか紫上ほとにはおはせんと卑下していふなり
したりかほにこそ　秘こゝにておやかりての給ふ也
弄したりかほにとは紫上のほとはなきといふは玉かつらも随分よしとおもふよと右近が心を推量し給ふ源の詞也
我に似たらばしも　源の實子のやうにちやといひなしておき給ふ詞なり
かくきゝそめ給うて　秘源也
めしはなちて　紫の御そはにては右近が申にくき事もあらんとめしはなちて此事を仰せらるゝなり
ちゝおとゝには何かしられん　玉鬘の實父内大臣は男女君たちあまたあれはその中へ数ならて今たちましり給はんは心くるしかるへしとおほすなり
われはかうさう／＼しきと　源は御子のすくなき事なり
かつ／＼いとうれしく　秘右近か心なり
たゝ御心になん　右近か申詞なり源の御意次第とい

ふなり
たれかはつたへほのめかし　内大臣のかたへもたヽこゝもとからの便ならてはしらすることとなるましけれは源氏次第たるへしと申すなり
いたつらに過給ひにし　河過去の人をいふなり　秘夕顔上のむなしく成給へるは源ゆゑなりと右近かすてしかこちて申すなり
つみかるませ　花夕顔上をむなしくみなし給ふ罪の事を云也
いたうもかてちなすかなと　秘源の詞也　夕顔の事をわか咎にいひなしてかこつよとの給ふなりはヽゑみなからも理なれは涙ぐみ給ふなり
あはれにはかなかりける　夕かほの事なり
かくてつとへたるかた／＼の中　秘人のあまたある中にも夕顔上ほとの人はなきとなり
わか心なかさをもみはつるたくひ　秘花散里末摘なとの類なり
右近はかりをかたみに　右近はかりを夕顔上のかたみにと見給ふ心なり花鳥にはそこはかりをと有り
さて物し給はヽ　秘玉かつらをむかへ奉り給はヽほいかなふへしとなり
御せうそこ　秘六條院にむかへとらんとてかけり末摘の事にこり給へる故となり
かの末摘花の　秘是よりゆかしうおほさるゝといふまて草子地なり　弄六條院なとのはれ／＼しき所へ田舍ひたる人をむかへてはと覺して先文なとのさまにてこヽろみ給ふなり
ものまめやかにあるへかしう　秘眞實のをやめきてかき給へるなり
かく聞ゆるを　聞和歌へつヽけたる詞なり
源氏
しらすとも尋ねてしらんみしま江におふるみくりのすちはたえしを　花すちはたえしは源氏のわかゆかりにてあるとの給ふなり　弄玉かつらはしり給はすともなり　秘そなたにはしらせ給はすともまことのおやのすちはたゆましきとなりみくりはすちといはんためなり水草なり　聞みくりはすちのたえぬ物なり　三稜(ミクリ)　河後撰「ふみにかありといふなるみくり生る人くるしめのつくま江の沼「つくま江に生るみくりの水はやみまたねも見ぬに人の戀しき

みつからまかてゝの給ふさまなと　源の御ふみを右近もちて玉かつらへ参るなりさてくちつからも源のゝ給ふさまをいふなり

御さうそく　玉かつらのき給ふへきなり

うへにもかたらひ　秘紫上へわか御むすめ尋出たるよしをきかせ給ふなり

御くしけとの　秘大臣家にもあり衣服をしたゝむる事をつかさとるものなり　河天子より庶人にいたるまて装束調する人を御匣殿と云ふなり

さうしみはかことはかりにても　秘玉かつらなり　河此かことは少事なり　秘此かことはすこしなり　ひたち帯のかことなり

おとゝの君も　是は玉かつらの實父内大臣なり

右近か數にも侍らす　秘源のねんころに心をつかひ給ふやうをいひきかせ奉るなり　私此義如何神佛に祈る事は右近なとは數ならぬ身にてさへ玉かつらへめくり逢奉る事の成就したるなりまして親子の御契はたえしとなり

たれも〳〵たひらかに　秘其身安穩にたにましまさはつひには親子の道はたゆましきとなり先源氏にまかせ奉り給へと也

ゐ中ひたらむ物をと　玉かつらのはち思ふなり

返玉鬘
「數ならぬみくりや何のすちなれはうきにしもかくねをとゝめけん　秘詞つゝき殊勝の歌なりうきは游泥也筑紫に鹽しみてありし事なり　弄うきは泥なり

てははかなだちて　秘手跡は玉かつらはおくれたり螢卷にもみえたり何事も紫上におとりさまなる事はなきを手跡はおくれたるなり

御心ちおちゐにけり　源の御心の内に何事も口惜からすと安堵し給ふなり

すみ給ふべき御かた御覧するに　玉かつらのゐ給ふへきかたとなり

みなみのまちは　秘紫上の御方なり

けせうに人しけく　秘せけうと聲をさす　河顯證はれ〳〵しき心歟云々　聞いちしるくまきるゝかたなき心なるへし

中宮のおはしますまちは　六條院のひつしさるの町は中宮の御里居の時おはします殿也

さふらう人のつらにや　秘中宮の御方はすみ給ふべ

き方はあれと皆みやつかひ人のつらに人の思ふへきとなり　弄中宮につかうまつる人にまきれんとなり

すてしうもれたれとうしとらのまちのにしのたいふとのにてあるを　河禮記ニ曰婦人壂メ帶ニ麻干房中ニ註曰房中則西房也天子諸侯有左右房者也喪大記篇也　案之必西に住居すへき故ある歟　文殿は仙院より執政大臣家に至るまで在之文書をさめらるゝ所也　私うもれたるとははなやかならぬなり花散里の「住給ふはしまち也」西の町也イにし歟　花うしとらのまちは花散里の住給ふまちなりその西の對の文殿にてあるを外にうつして玉かつらの君を住給ふへくおほしあてかひたるなり

あひすみもしのひやかに　秘花散里とあひ住もよかるへしとなり

うへにもいまそかのありし昔の　秘夕良上の事を紫へたゝ今かたり給ふなり

うらみきこえ給ふ　夕顔上の事をかくし給へる事又御子のありし事なとなり紫の恨るなり

わりなしや　秘源の詞な

世にある人のうへとても　此世になき人の事を何といまめかしくとはすかたりせんするかといふ歟

人にはことに　紫を別しての事といふなり

いとあはれに　夕顔の事を思ひ出たるさまなり

人のうへにてもあまたみしに　秘我身のうへにある事なれと人のうへにいひなし給ふなり

いと思はぬ中も　思ふ中も思はぬ中もといふ心なり畧していへるなり女の道にまよひたるは然るへからすとなり

女といふ物の心ふかきを　花心ふかきとは六條のみやす所なとのやうに心ふかくて物のけなとに出るをいふおのつからさるましきとは心ふかき人をいふ也夕顔上なとのやうなる人なり　弄此段源氏の紫上にの給ふなり人のうへにてもとは源氏の我うへの事との給はぬなりはゝかりてなり又は我もと聞しはとなり思はぬ中もとは思ふ中も又はさしも思はぬ中なとにも女の心ふかきを見聞しには女の事にはすき〳〵しき心をゝかはしと思ひしかとゝの給ふなり

おのつからさるましき　秘隨分に心をおさしな

私此段別の事もなく只うちむきてみるへし世上の人のうへにても見しに女の道に貪着しては然へからぬ事と思ひしる事ありしかは随分好色をたてさりしされ共さすかに女の数をも見つると源の御身の上をかたり給ふなり

あはれとひたふるに　秘あまたの中に夕顔上のやうなるはなかりしとなり　私夕顔上の心さま物やはらかにみえたりたゝ一向にあはれなり

世にあらましかは　夕顔の事なり

北のまちに物する　秘明石上なり　花右近か心にも夕顔上いま世に物し給はゝ明石上の御おほえほとにはあるへきよし上の詞に見えたり源氏君もさの給ふなり北の町は前にいぬゐの町とあり北の乾かけたる所なり

かと〳〵しうおかしきすち　夕顔の躰をの給ふなりきとしたる様の心もちひなとはさのみなかりしなるへし

あてはかにらうたく　大やうにけたかくやはらかなるやうの心歟夕顔上のさまかくありしと也

さりともあかしの波には　秘紫上の詞也紫上も明石をはおしけちかたく思ひ給ふゆゑなり　花是は源氏君の夕顔上を北のまちにものする人のなみにはなとか見さらましとの給ふを紫上聞給うてさり共明石上には立ならひ給はしと猶明石上をはめさましく思ひ給へるなり

猶北のおとゝをはめさましと心おき給へる紫上の心を推量してかけり草子地なり

又ことはりそかしとおほしかへさる　秘此姫君の母上なれは源のすてかたく思ひ給ふはことわりと思ひ給ふなり紫の心なり

すか〳〵しくもいかてかは　秘早速にはなりかたきとなり　花すか〳〵しきは速なりめしつかふへきわらはは下つかへやうの物なとたつねもとむる程をふへけれはすか〳〵しくはえわたり給ふましきよしなり

にはかにまとひいて給ひし　俄に上洛し給ひしほとになり

いちめなとやうの物　河只下女なとを云歟或市女商人也　花市女商人と上の詞にもみえたり「白浪もたつ日たゝぬ日ある物を市に市女のたゝぬ日そな

き　今案今の世にもつかへ人なとをは物うる商人
なとあなたこなたへ行かよふほとにおのつから聞
清 付て中たちするたくひおほく侍るなり
ゐて丶　清 將て來る也出來るにてはなし
その人の御こなと丶は　玉かつらの族姓をはあらは
さ丶るなり
十月にそわたり給ふ　秘 一本十一月とありいつれも
可然也　弄十月　イ本 十一月可用歟
おと丶ひむかしの御方に　花散里うしとらの町の東
の對に住給ふなり　秘 花散里歟おと丶は源氏玉か
つらの君を花散里へあつけ給ふなり
あはれと思ひし人　秘 源の詞なり
物うくして　物怨しなとしたる躰也
えき丶いて丶なん
女になる成まて　秘 年たけたるなり今年玉かつら廿二
歳歟同書入　禮記内則篇女子十年不出云々　十有
五年而笄　聞 禮記にははや人に嫁したるを婦と云
なり云々　河 おうなになるまて　嫗とは老嫗を云
凡年老たるよしなり　花 おうなに成　おさなき姫
君のおとなしく成をおうなに成といふなり　弄 お
うなになるまて　嫗也　私如此歟おうなの義在然
而秘聞に女とありをんなの義を可用也
おほえぬかたよりなんき丶つけたる時にたにとてう
つろはし侍るなり　私おほえぬかたよりなん聞付た
るとなりさて又聞つけたるとてうつろはしと兩へ
かけたる詞歟
中將をきこえつけたるに　花 夕霧を花散里にうしろ
み給ふへくのたまひし事なり　弄 夕霧中將のよし
こ丶にみえたり　秘 夕霧こ丶にてはしめて中將と
みえたり夕霧をも御子のことくよくあつかひ給ふ
をいへり
おなしことうしろと　玉かつらをも夕霧のことくに
うしろみ給へとなり
けにか丶る人　花散里の詞
ひめ君のひと所　明石姫君一人斗なりし事なり
おひらかにの給ふ　花散里のいへるさまなり
かのおやなりし人は心なん　秘 源の詞夕良上をいへ
り
御心もうしろやすく　秘 花散里をさしての給ふなり
つき〳〵しくうしろむ人なとも　秘 花散里の詞なり

殿のうちの人々は　秘源の御かたの人々なり玉かつらを源の御むすめとしらて又いかなる思ひ人をむかへ給ふそといひしらふなり
むかしひかるけんしなといふ名は　秘玉かつらのつき〳〵の人なりあてき大貳のめのとなとなるへしとしころのうひ〳〵しさに　ゐ中にてはこれほとまての推量もなかりしなり中々に推量も及はさりし事なり
みきちやうのほころひより　弄玉かつらのおもと人ともの源氏を見奉るなり
おそろしくさへそ　玉かつらの女房ともの心中なり
わたり給ふかたの戸を　源氏のおはして入給ふへき戸なり
右近かいはなては　秘妻戸なと成へし　弄同　河播放也かけかねをはなつなり
この戸くちに入るへき人は　弄今はしめたる所の御あひしらひに宣ふなり　秘源の會釋にかくの給ふなり
火てそいとけさうひたる　火のあまりほのかなるを云なり玉かつらをよくみんためなり

わりなくはつかしければ　秘玉かつらなり
うれしくて　源の心也
いますこしひかりみせんや　源の詞也
右近かかけてすこしよす　秘灯の事也灯といはすしてかける筆法奇特なり
おもなの人やと　秘是も會釋にの給ふなり無面也　河莫面也　眞名本伊勢物語云むかしおとこつれなかりける人のもとにおもなくていへる成へし　花おもてつれなき心なり
けにとおほゆる御まみのはつかしけさなり　秘夕顔上によくにたるをいふにや　私父内大臣にはつかしけなる所のにたるかそれをいふ歟父前に右近かかたちなと然るへきさまにいひしをけにと思ひ合する心歟此三の義いつれにても有へき歟
いさゝかことゝ人とへたてあるさま　源の眞實の御子のやうにの給ひなすを云なり
とし比御ゆくへをしらて　秘源の詞なり
過にしかたの　夕皃の上の事なり
まことにかなしう　眞實にかなしく思ひいつる也
御としのほと　玉かつらのとしのほとなり父子の中

のかやうに久しくへたてたる事あらしとなり
きこえんこともなく　玉かつらの心中也
あしたゝすしつみそめ侍にけるのち　河朝綱かそい
ろはいかにあはれと思ふらんみとせになりぬあし
たゝすして　蛭子の父母にすてられし事を玉鬘の
我身の上によそへていへるなり　花玉かつらの君
の三のとし母におくれてしつみ給へることを蛭子
になすらへて云なり　弄玉鬘君の三四のとしの程
を云心にて三とせに成ぬの歌の詞にての給へり
秘三四歳の時ゐ中に下り侍るなりよく似合たる返
答也三とせに成ぬの歌の詞にての給ふなり
むかし人によくおほえて　玉かつらの聲けはひ夕顔
に似たるとなり
ほゝゑみて　源のさまなり
しつみ給へりけるをあはれとも今は又誰かはとて
秘源の詞也　私あはれとも今は又たれかはとてと
はみとせに成ぬとの歌の詞をうけての給へるなり
かの歌の初五文字かそいろはいかにあはれとゝあ
りかそいろは父母なり今は夕皃の上はおはせねは
我ならて又たれかはあはれと思ひ奉らんと源の眞

父に成ての給ふなり尤面白し此義何の抄にもなし
心はへいふかひなくはあらぬ　秘此玉かつらのいら
へを然るへく思ひ給ふなり
右近にあへき事　こゝのたゝすまひを右近に仰つけ
らるゝなり
わたり給ひぬ　源のわか御かたへかへり給ふなり
うへにもかたり　秘紫上にもかたり給ふなり
さる山かつの中に　是より玉鬘のさまを源の紫上に
かたり給ふ詞なり
兵部卿宮なとの　源の御舎弟螢兵部卿也
このまかきのうち　源のあたりを我との給ふなり
すきものとものいとうるはしたちてのみこのわたり
にみゆるもかゝるものゝくさはひなきほとなり　好
色なるわか公たちなとも源の御あたりをは實々し
くのみもてなすなりそれを源の給ふなりかやうの
御女なとのなきゆゑなりかやうの人あらはみな人
人の心をさめはてじとの給ふなり　花くさは種也
すきものともの心つくすたねにせんと云心なり
猶うちあはぬ人の　弄物とはきやうなる心なり　聞
打あはぬとは心をさめあへぬ人をいふ成へし源の

あたりへ實々しきかほをしたりともかゝる人あらはそこの心のをさまらぬ人は本性見えんとなり
あやしの人の　秘紫上の詞也　花是は紫上の源氏を申給ふ詞なり
人の心はけまさん事を　勵也人のなほさりなる事をこなたより色々にして人の心をおこさする心をいふ歟
まことに君をこそ　花是は源氏の御詞也いとむしんにしなすとは源氏のぬしつき給ふ事をの給ふ也心なきわさをむしんなるといへり　秘紫上をもかやうにしておきし人の心をもみたるへき物を我ものに定おきて後悔あるとなり　聞今の心ならましかはとは昔よりも好色のうすく成たる心歟只今おもふやうの心ならはと云成へし
おもてあかみて　紫上のさまなり
硯ひきよせて　秘源也
源氏
戀わたる身はそれなれとたまかつらいかなるすちを尋ねきつらん　花戀わたるは夕良上の事なりいかなるすちとは誠はわか子にはあらぬ事なり　弄身は源氏の身也いかなるすちとは玉かつらのいかにたつねき給ふらんと也誠の御子ならねは也實父に心さしそあるらんのやすらひなり　秘身とは源氏の身なり夕良上を忘れす戀わたる身はおなし我身也いかなるすちとは玉かつらは誠の親に尋あひたき志の有へき也　河玉鬘は玉の鬘なりすちを尋とは鬘のすちにたとへてなり萬葉には冠の纓也後撰には縵なとをも玉鬘とよめり髪を褒美しても云也
萬「玉鬘かけぬ時なくこふれともなにそもいかにあふ時もなし　後撰「いつくとて尋ねきつらん玉鬘我はむかしのわれならなくに　いせ物語「人はいさおもひやすらん玉かつらおもかけにのみいとゝみえつゝ
あはれとやかてひとりこち　河しなてるや片岡山のいひにうゑてふせる旅人あはれおやなし　弄夕顔の事をの給ひしなり閑同
けにふかうおほしける人の　源のあさうはおほさぬよと紫の上のおもひ給ふ也
中將の君にも　夕霧の玉かつらの方へ參りての詞也
人かすならすとも　源の玉かつらの事を夕霧にの給ふなり

まつめしよすへく　てなたへめしよせらるへき物を
　といふ詞也
いさまめ〳〵しく　花夕霧の中將はまてとにわかお
　とゝいとおもひ給てそのあひしらへにし給ふを心
　しれる人はおかしくおもふとなり
かたはらいたきまて心しれる人は思ふ　秘夕霧は眞
　實の兄弟におもひ給ふなり
心のかきりつくしたりし御すまゐなりしかと　花つ
　くしにての事なり　秘豐後介國にて我心のかきり
　つくして玉かつらをあかめたりし事も只今此御住
　ゐをみれはかきりもなくゐなかひたる事にてあり
　けるなとなり
おやはらからも　秘源夕霧なとなり
いまそ三條も　秘前に大和守の北方に成給ふへきや
　うに長谷寺にていのりし事なり
けんかいさざしけはひ　秘大夫監か事　花いきさし
　は氣なり一本いきまきしけはひとあり
　弄いきさし　花に見ゆ　河にいきまきしかほ　河けん
　かいきまきしなりいきまくははらたつなりいきと
　ほる心也　或本にいきさしとかける僻事なり

ぶでの介か心はへを有かたき物に君もおほししり
　豐後介か忠節を玉かつらの思ひしり給ふなり
おほさうなるは事もおこたり　玉かつらの方に別し
　て家司なと源氏の定給ふ也
豐後介もなりぬ　秘豐後介も家司になるなり　花豐
　後介も西對の姫君の御家司になる也
ゐ中びしつみたりし心ち　豐後介か心也
いかてかかりにも立いて見るへき　秘此人なとはか
　りそめにも此殿中へは出入しかたきを今家司に成
　て心やすく出入して結局人をしたかふるとなり
人をしたかへ事をおてなう（ふイ）　弄豐後介孝心ありて遺
　言をたかへす忠貞にて玉かつらを京へ具し奉りし
　にてたへて面目をほとこしける成へし
おとゝの君の御心むきてのてまかにありかたうおは
　します事　豐後介を玉かつらの方の家司になされた
　るはいつかたも然るへき事也仍てこまかに源の思
　ひやり給ふ事を云也
年のくれに御しつらひの事　玉かつらの御かたをも
　やんことなき御かた〳〵のつらに何事もし給ふと
　なり

かゝりともゐ中ひたる事なとやと　ぬしのやうたい
こそ然るへくともさうそくなとのかたには猶ゐ中
ひてやと調したるをも玉かつらへはおくり給ふと
なり　秘さうそく調する事なとゐ中ひてはとおほ
してこなたよりもしたてゝ奉り給ふなり
いとおほかりける物ともかなかた〳〵にうらやみな
くこそ　秘紫上へ申給ふなり　聞是よりきぬくはり
といふ也　私きぬくはりといふ名目はあまりいか
かと聞ゆ殊に連歌なとにきぬくはりとする事おも
はしかるましくや如何
こなたにせさせ給へるみなとうでさせ給へり　紫上
の御方にて調せられたるも殘らす取出給ふなり
かゝるすちはたいとすくれて　かやうのそめいたす
やうの事も紫のすくれたるとなり
世になき色あひ　秘紫上かやうの方までたらひ給へ
る事なり
うちとのよりまゐれる物とも　河裝束うつ所也うち
殿はり殿なとゝてあり男女裝束うちのり本躰なり
板ひきひきのりなとは略義となり　秘板引に今は
する事をは昔はうちたるなりさやうの事をする所
をいふなり
御そびつ　秘御の字みと讀へし
うへもみ給ひて　紫上也
いつれおとりまさる　紫上の源への給ふ詞也
きたまはん人の　秘人々の御かたちを大かたしらん
ためにかくの給ふなり
さまにゝぬは　その人のさまに似合はぬはと云詞也
つれなくて人のかたち　源の詞也しらぬかほをして
ゐて人のさましらんためよと源のゝ宣ふなり
さていつれをとかおほす　秘さては紫上はいつれを
き給ふへきそとなり　私源へ紫のかやうにの給ふ
をさらはいつれをとれ〳〵とかおほすそはからひ
給へと云心歟紫はいつれをき給はんそと云義如何
私秘の義可然歟猶可案之
それもかゝみにては　秘我身も鏡なとにて見る斗に
ては知かたき事なり是をも源にはからひ給へとな
り花鳥の義いさゝか異ある歟　弄問云それもかう
身にてはといふ說あり如何不覺悟一搦紫上の心に
人のかたちのよきあしきも鏡にてみるやういかて
かおしはかるへきといふなり鏡にてみつから見る

心なり御説也　花 貞觀政要云唐太宗嘗謂侍臣曰以銅爲鏡可以正衣冠以古師イ爲鏡可以知興替以人爲鏡可以明得失朕常保此三鏡以防已過今魏徵徂殂イ逝遂亡一鏡矣今案人をもて鏡とするは魏徵よりおこれり又正衣冠といへはイる衣裳のかたにもそのたよりあるにや人のかたちのよしあしきも鏡にてみるやうにはいかてかおしはかるへきと紫上の給ふなり　私いつれをとかおほすと云は紫上のき給ふへききぬの事と云々兎角それも鏡にてとは人の手本になるやうの心歟

こうはいのいともんうきたるにゑひそめの御こうちきいまやういろのすくれたるとはこの御れう　秘 かの御れうとは紫上の御ためなり　河 紫上の事也紅梅はきぬいまやう色はうすきぬの事歟いつれもみなかくのことしと心うへし　花 ゑひそめはおもて蘇芳うら花田なるをいへりいまやう色とは紅梅のこきかたによれる色なり末摘花の卷にも見えたり紅梅のもんうきたるはうはきいまやういろはかさねのきぬの事なるへし

さくらのほそなかにつやゝかなるかいねりとりそへて姫君の御れう也　秘 さくら色はおもて白也かいねりは紅なり　花 櫻はおもて白くうらゑひそめなりかいねりはうすき紅のあやのはりたる也つやゝかなるは色のつやうつくしきなり是は明石の姫君の御れうなり　弄 ほそなか貴女のきる物なり一勘をさなき上臈のうへにきる物なり下にかさねのきぬは有へきなり

あさはなたのかいふのおり物おりさまなまめきたれとにほひやかならぬにいとこきかいねり具して夏の御かたに　河 かいふは海河イ浦又大浪のかたをおれるなり　秘 大浪にみる貝也夏の御かたは花散里なり　花 海賦は大浪にみるや貝やなとおりたる文也淺縹ハナタなれはにほひやかならぬなりこきかいねりは紅のかいねりなり

くもりなくあかきにやまふきのほそなかはかのにしのたいに　秘 くもりなくあかきはうはきなりにしのたいは玉かつらなり　弄 くもりなくはきぬの事なり　花 山吹はおもてくちばうら紅梅なるをいふ也さてはなやかにくもりなき色といへり是は玉鬘の君に似合たる成へし

うへは見ぬやうにて　花是は紫上の心におもひあはせ給ふなり
うちのおとゝのはなやかに　秘さては實父の内大臣によく似たるよとおほすなり
色にはいたし給はねと　花紫上の心に思ひ給へと色には出し給はぬなり
殿見やり給へるにたゝならす　花源氏の紫上の心中をさとり給ひてそなたを見やり給へは紫上はちらみ給ふをたゝならすといへり
いてこのかたちのよそへは人はらたちぬへき　花是よりは源氏の詞の御詞なり物の色あひは無上なるといふも限ある物なり人のかたちは限りなき物也よけれとも又あしきかたちもありわろけれとも何とやらんみれはみところのあるをそこひあるといふ心はかきりなき心なり河海の説いかゝとおほえ侍り　弄源氏の紫上の人の程を見給はんの心をまきらはさんとての給ふ詞なり　秘紫上の人のほとを見給はんの心なれは源氏のかく宣ふ詞なり
物の色はかきりあり　秘玉かつらへのは結搆に見えたりと紫上の思給ふとおほしてかくの給ふ也

おくれたるも又猶そこひある物を　河古「そこひなき淵やはさわく山川のあさきせにこそあた波はたて　そこひあるとは底あるなりひはやすめ字なりたとへはかきりあるといふ心なり無涯底也　私人のかたちはもてなしありさまにさま〳〵の見所いてきてかきりなき事なりかゝる色あひにはかきりのあるといふ事なり花鳥にはそてひたるとありて河海説いかゝとあり不審只今書のする義を用へし
そこひあるものをとてかの末摘花の御れうに　秘此句うつり奇特なるかきさまなり
柳のおり物のよしあるからくさの　花柳はおもて白くうら青し夏は卯花といふなり　弄わさと似合ぬめてたきを選り給ふとなり
人しれすほゝゑみて　弄同し心なりにあふましきををかしくおほすなり
梅のをりえたてふとりとひちかひからめいたる白きこうちきにこきかつやゝかなるかさねてあかしの御かたに　河白き梅の織物はきぬうき文のこきは紅梅のうすきぬなり　秘こきは紫か河説あやまれり
花白きもんのおり物にこきうちきをかさねたるな

りてきといふはこき紫也今の世にふしかねにてそむゐはまねひもの也こき紫のうちたるは光色ありてうつくしきなりそれを白きにかさねたれはけたかくみゆへきなり　河海に紅梅のうすきぬといへるあやまれるよし花鳥にはの給へりこれは明石上へおくり給ふなるべし

うへはめさましと　明石上へてとの外けたかき色あひなるを紫上のおどろき思ひ給ふ心なり

うつせみの尼公に青にびのおりものゝいと心はせあるを見つけ給うて御れうにあるくちなしの御そゆるし色をそ給て　弄御れうには源氏の御料也ゆるし色はうす紅なり上古には尼も用るなり朽葉にかさねたる花鳥の說然へし　花青にびは尼のきる色なり口なしそめのきぬも尼公のため可然によりて源氏の御れうに用意し給ふをそへて贈給ふなり又ゆるし色は紅梅のうすき也出家の人もかさねのきぬに用ふ例有へし河海に黄なるゆるし色とのせられたるかならすしも黄かち成へからすと花鳥にはの給へりたゝゆるし色は薄紅と心得へきなり　河黄なるゆるし色の事須磨卷に勘あり　西宮記云黃衣無品親王孫王綾源氏及良家子孫弱冠者着之公卿子孫候殿上無官時用黃衣　弄くちなしの事なり紅紫のゆるし色にてはなし淺黃紅非制限古傳此心にて給ひしなり　私花鳥の義を用ふへし

おなし日き給ふへき　秘みな元日の御れうなり

けににげついたるとも見んの御心　河似氣付也　秘紫上の似よせてみ給ふへきためことわりなりとなり　花おの〱き給へるをみて似合たりけりと知給はんためなり

さしはなれえんなるへきを　聞御使の祿なとなくともといふ也

あるへき事はたかへす　末摘花の古躰なる心さまをいふ也

山吹のうちきの袖くちいたくすゝけ　秘使の祿也　花袖くちのすゝけたるとはふるびたるを云かさねのきぬもなきをうつほなりといへり

いてやたまへるは中々にこそ　秘文の詞なり　花柳のきぬの色もなきをうらみ給へるなり　私花鳥の義いかゝ源のことゞしくのみおはするにさすかに此數におほしいてたるをかこつなり

きてみれはうらみられけりから衣かへしやりてん袖
をぬらして　古「いとせめて戀しきときはぬは玉の
　よるの衣をかへしてそぬる　私源のとひ給はぬを
　恨みて此衣をかへしやりてんとなりかへすともた
　たにてはかへさし恨の涙をそへてぬらしてかへさ
　んと也

御てのすちことにあふよりにたり　河あふよりたる
　は昔によりたるなりあふとはあなたといふ心なり
　又奥也いつれもさ様なるなり弄同河　花枕草子云
　あふよりて三四人さしつとひてゑなとみるもあり
　云々　今案あふは奥の字也おふなけなといふ奥な
　き心なり奥といふはおなたなりあなたは過にしか
　たをいふ末摘の手跡の昔やうなるをいへる也　秘
　奥の字也上古也あまりにふるめかしきと也

いといたくはゝゑみて　源の末摘の文をわらひ給ふ
　なり

うへ何事ならんと　紫上也

御つかひにかつけたる物をいとわひしく　源の御心
　也

御けしきあしければ　秘此祿あまりに比興なれは源
　の御氣色もあしければ御使もはやくまかりいつる
　なり

かやうにわりなうふるめかしうかたはらいたき所の
つき給へるさかしらにもてわつらひぬへくおほすは
はつかしきまみなり　弄末摘の返しのよからぬをさ
　かしらありとの給へり秘同　私此祿なとの無用の
　事のなまかしこけにさし過たるをさかしらと云也
　源の心にもてわつらひおほす體を云なり

はつかしきまみ　秘源のまみなり　まみなりみけし
　きなりは源のさまなり君なりは末摘を皃して源氏
　のの給へるなり

こたいの歌よみは　河古代の歌讀なり又は古體とも
から衣たもとぬるゝかことこそはなれね　花末摘の
　歌「から衣君か心のつらけれは袂はかくそそほち
　つゝのみ末摘の卷に在此君から衣袂ぬるゝといふ
　を好みよみ給ふなり　秘末摘はから衣といふ歌を
　おほく讀給ふなりてゝにてついてに歌よむ事を云
　なり

まろもそのつらそかし　秘源のわれも此類そとなり
　いまめきたることのはにゆるき給はぬこそねたきて

とは又あれ　弄ゆるき給はぬこそねたき事は又あれと云々例の事なり人の中なることををりふしおまへなどのわざとある歌よみの中にてはまとゐはなれぬみもしそかし　秘われ人會合の時は必まとゐしてなとよまてはとおもふなりみもしとはまとゐの三字なり　弄三文字みもしは三文字也大かたの人の事をの給ふ詞なり折ふしの御まへなとにてわざとかましき時歌よむ人のまとゐなと云三文字をやゝもすれははなたすよむ也　河「思ふとちまとゐせるよはからにしきたゝまくをしき物にそ有ける俊成卿本にはまとゐはなれぬかしとあり定家卿本にはみもしそかしと云々古人釋云みもしそかしは身そかしなりもとしとはやすめ字也と云々　案之やすめ字也もしまては重疊歟三文字と讀へき歟假令不堪の歌讀當座會過い趣を詠せんとて毎度にまとゐの三文字をはなたすあらする歟逢生君のから衣毎度に出來ることし　花河海に說て出せる中まとゐの三文字といへる然るへく覺侍り下の詞にあた人のと云五文字とかきつゝけ侍れは三もしと云もまとゐを云成へし

けさうのおかしきいとみにはあた人のといふ五文字をやすめ所にうちおきて　河「後撰左大臣あた人もなきにはあらす有なから我身にはまたきゝそならはぬ　是も强不可限此一首惣して艶書の歌にあた人と云詞をこのみ詠のよしか　花やすめ所と云は歌の第三の句を云或第一句をもいふへきにや　秘けさうたちたる計にはあた人と云事を必よむとなり　弄やすめ所中五文字　私勘鴨長明か無名抄云俊恵物語のついてにとひていはく遍昭僧正の歌に「たらちねはかゝれとてしもぬは玉のわか黒かみをなですや有けん此歌の中にいつれの詞かことにすくれたるおほさんまゝにの給へと云予云かゝれとてしもといひてぬは玉のとやすめたる程こそはことにめてたく侍れと云かたくはやく歌はさかひにいられにけり歌よみはかやうの事にてあるそと云々是も中の五文字をやすめたるといへり

よろつのさうし歌まくら　花歌枕とは名所の歌をあつめたるをいへり能因法師か五代集の歌枕のことし　秘歌枕とは名所の歌をあつめたる草子なり毎度あそこゝにつゝくるはかりなり同事也

よくあないしり　弄ふるき事をしり給ふとなり
よみつきたるすちこそ　口つきて細々よむすちの事なり
ひたちのみてのかきおき給へりけるかうやかみのさうしを　河紙屋紙の草子なり　秘蓬生の君の父宮也
花常陸宮は末摘の父宮也かみやかみといふはむかし北野に近き紙屋川にてすきたるかみ也
みよとておこせたりし　秘源へ参らせ給へりしなり
わかのずゐなういと所せうやまひさるへき所おほかりし　河有五家髄脳又濱成式には學七病喜撰式には書四病孫姫髄脳有八病是等也
もとよりおくれたるかたの　源の生得歌道不堪なるにさやうの事をみてはいよ〳〵むつかしく成故返したるなり
うこきすへくも見えざりし　花歌をよむに始より病をさらんとすれは更によまれぬ物なり上手の歌は病をさらんとせねともおのつから病はなき物なり
河勘すへくも也歌の病ことに避ははたらくへくもなしと云なり
よくあなひしり給へる　弄ふるき事をしり給ふとなり　秘かやうの事はよくならひつたへ給ふ成へし
めなれてこそ　弄かくめなれたるとわらひ給ふなり
おほしたるさまそおかしきや　源のおかしくおほするさまを皆々も又おかしくみ奉るなり
うへいとまめやかにて　秘紫上の實にの給ふなり
かきとゝめて姫君にも　花明石の姫君也あさむきての給ふなり　常陸宮のかき給ひし草子の事を紫ののたまふなり
むしみなそこなひてけれはみぬ人はた心ことにこそは遠かりけれ　和歌の髄脳紫上の御かたに殘りたるも虫のそこなひたるなりそれを心えぬ人のみれはそこねたるゆゑに一段と心得にくきと紫のの給ふなり心ことにてそはとほかりけれとは心得かたき事をいふなり
姫君の御かくもんにいとえうなからん　源の詞也
明石の姫君の御ためにも一段無用のものそとなり
用なからんなり
すへて女はたてゝてのめる事　秘をしへのさま妙なり　是より萬のをしへ也女にもかきらぬ事也
何事もつきなからんは　たてゝこのめるかあしきと

て何事にもおほつかなきは又わろきなり
たゝ心のすちをたゝよはしからすもてしつめて　秘
又心をたてんとせははらあしきやう成へし　花こ
れ女の本様なり紫上は女のよき定を具し給へる人
なり
御かへりことはおほしもかけねは　秘かく物語し給
ひて末摘の返事し給はん事は思ひかけ給はさるな
り
かへしやりてんとわめるを是よりおし返し給はさら
んは　秘文の返事に歌あるにはおしかへし返歌ある
へき事常の事也返しやりてん袖をぬらしてと有に
おしかへし給はさらんといへる詞面白し弄同　花
末摘花の歌にかへしやりてんとあるに源氏の御返
歌なくはさらはさてあれのやうにてあまりに情な
かるへしと紫上のさかしらし給ふを情捨給はぬ源
氏の心なれはけにもとおもひ給うて御返事を書給
ふなり
なさけすてぬ　秘かく紫上のの給ふにつけてなり
心やすけなり　末摘ははつかしからねは源の執せぬ
體を云なり

返源
かへさんといふにつけてもかたしきのよるの衣をお
もひこそやれ　秘かへしやりてんとあるを是はよる
の衣にとりなしてよめる殊勝なり源の我身の問こ
ともなきかことわりとなり　花末摘の返しやりて
んは源氏の給りたる柳のきぬを中々なれは返し参
らせんとよみ給へるをそのかへすといふ詞をうし
なはすしてあらぬかたにとりなしよめりたとへは
古今の歌に「いとせめて戀しき時はぬは玉のよる
の衣をかへしてそぬるとあれは末摘のあまりかた
はらいたきのみなるをはいなく思ひ給てせめて夢
にたにみまほしくて衣をかへさんとはの給ふにこ
そはあらめ我身の情なきを思ひしられ侍れはけに
ことわりにてあると女に道理をつけて返事をし給
へるなり心ことはたくみに書なせりよく〱心を
つけてみるへき物なり
ことわりなりやとそあめる　河古歌の詞歟可勘

岷江入楚第廿三　初音

初音　玉鬘　並の一

卷名ははつね　花鳥以歌並詞爲卷名「年月を松にひかれてふる人にけふうくひすのはつねきかせよ　詞にもけふは子日なりけり云々この御返はみつからきこえ給へはつねをしみ給ふへきかたにもあらすかしとて御すゝりとりまかなひかゝせたてまつらせ給ふと云々　此卷玉かつらの並なり花鳥に十七の卷の翌年の事なれとも竪の並に取へし云々此卷を竪の並にとる故は行幸の卷まては月次につゝ〳〵と月をついてゝしるせりされは竪の並なり玉鬘の並は皆竪なり　此卷は源氏卅六歳の正月の事をのせたり花鳥同玉かつの卷の末十二月にきぬくはりとてありし其あくる正月なり二條六條院住わけてさらためたる正月なり　此卷は六條院造畢して移徙ありし翌年十二月にきぬくはりとて年頭の料に各へきぬとも進せられし翌年の正月の事也新造の正月の二度め也　乙女卷源氏卅四歳の八月に六條院造畢則彼岸中に移徙云々　玉鬘卷源氏卅五歳の十二月にきぬくはりあり　此卷　源氏卅

六歳の正月也
一六條院の事
六條京極わたりに中宮のふるき宮の邊りに（四方一々イ）女一に
ならしめて作らせ給云々　式部卿宮明年五十賀を
同しくは珍しき御家居にてといそかせ給云々　か
くて翌年八月に造畢也　南（係）辰巳の町は南の東云々
南源氏紫上とすみ給　山高く春の花の木數をつく
し池の樣面白てかき前栽五葉紅梅櫻藤山吹なとや
うの春の翫をわさとは栽て秋の前栽をはむら〳〵
ませたり秋未申の町は秋好中宮御ふる宮（こイ）なれはも
とより御座也山に紅葉の色よかるへきをうゑ泉の
水遠くすましやり水の音まさるへき岩をたて加へ
瀧おとして秋の野をはるかにつくり（ワタマシは八月也）其頃にあひて
さかりにさき亂たり夏丑寅町は北東云々　東院に
すみ給對の御方花散里なり涼しけなる泉ありて夏
のかけによれり近き前栽呉竹の下風涼しかるへき
木高き森のやうなる木とも木深く山里めきて　卯
花かきねことさらにしわたし花橘瞿麥さうひくた
になとの花の草々を植て春秋の木草その中にませ
たり　西の對は玉かつら　東の町はわけて馬塲の
おとゝつくり埒ゆひて五月の御あそひ所にて水の
邊にさうふうゑしけらせてむかひにみまやして世
になき上馬ともをとゝのへたてさせ給へり　冬戌
亥町は　北明石の御方　池山をも便なき所なるを
はくつしかへて水のおもむき山のおきてあらため
つくる　西の町は　北面つきわけて御くら町也へ
たての垣に松の木しけく雪をもてあそふへきたよ
りによせたり冬のはしめ朝霜むすふへき菊の籬わ
れはかはなる柞原さま〳〵名もしらぬ深山木とも
の木深きなとをうつしうゑたり

一衣くはりの事き給はん人の御かたちによそへて
たてまつれ給へかし云々　紫の上　紅梅のうき文
えひそめのこうちき　姫君　櫻のほそなか（かつふイ）　かい
ねり　花散里　あさはなたのかのその織物こきか
いねり　玉かつら　くもりなくありきに山吹の花
のほそなか
末摘花柳のおり物から草をおれる
明石上　梅の折枝に蝶鳥飛ちかひたる白小打衣こ
きかさね
空蟬　あをにひの織物くちなしのかさね

としたちかへるあしたの空のけしき 朱小書也 卄六歳の正月竪の並也行幸の巻まて月次に書て行也 正月一日になりぬれは冬の空にひきかへたるなり 元日立春なるへし 河「あら玉の年立かへるあしたよりまたるゝ物はうくひすのこゑ 引歌に及へからすさしも年のくるゝをきはにさへ〳〵しき空に今年のこへぬれは去年の雪氣の空のなこりもなく一天春色となれるとなり 年にはよる物なれとも大度は眼前の境界なり これは元日立春なり此程までは冬の空の嵐にさへ雪けに閉たる空もけふにあけては引かへたる一天なり凡時節の反逆は七難の一なり然るを當時仁澤世に蓋ひ黎民撫育の聖徳もあまねき故に陰陽も燮理し時候も相調て秋は秋の如く冬は冬の如く春は春の如く時節のけちめも分明に一天泰平の春也 巻々に何その詞を一つゝ書たり此巻は此字をかけりけしきけはひの類也けしきと云事爲家卿の申されしは亡父このまぬ詞とて歌には詠ましきと云々されとも定家卿のまた夜は深き雪のけしきに又よはにも春のけしきなる哉此類あまた見侍へしは巨難なきに似たり先達の遺訓のうへは好み詠すへからす

數ならぬかきねのうちたに 朱小書此たにの詞にて滿天の春光をしるへし 六條院を云たてんと先公界を云なり 先世間の事を云出すなりこれか六條院の花美を云あらはさんの心なり上の詞に天下一統の春色を云ひたてゝさやうにあるには世界の數ならぬ所まても漏れぬ春の光を云なり 河 拾遺貫之「野へみれはわかなつみけりむへしこそかきねの草も春めきにけれ

いつしかさけしきたつ霞に 春にあけぬるけちめもいちしるきそらの霞なり 花 古今「霞たち木のめも春の雪ふれは花なき里もはなそちりける貫之 朱小書云 私云けしきたつといへる心あるへき歟春に明てはまた程もへぬ空のけしきなれはさたかに霞とは見えぬ物からうらゝかけなる空の氣色ははやさたかに霞むはかりに見えいまた萠出ぬ木の目もいひしらす打煙れる様に見なさるゝなるへし 墨小書云 私云新古今左衛門督通光「難波江や霜もまたひぬ蘆のはにつのくむ程の春風そ吹此歌可載也

おのつから人の心ものひらかに 人も陽氣を得て心ものひらかなるそ 朱小書おのつからと云詞心を

つくへき歟朝のそらのうらゝかにけさよりは始て垣ねの雪間氣色たつ霞木のめの糶なとの天地うちあひたるあまねきの春光には自然に人の心ものひらかになれると云なるへし天地の間萬物無心いうへにてたにも分明なる春色なれは人の心にわきさまふるは理也自然の道理なるへし　師說に此段を三に分て天地人の三才と見るへしと云々尤面白しあしたの空のけしきといへるよりは天也數ならぬかきねのうちたに雪まの草わかやかにといへるは地なりおのつから人の心もといへるは人なり

ましていとゝ玉をしける御まへは（墨小書平生さへあるにまして年の始に翠簾なと六條院の下僕の物までも引つくろひて見所あるなり）　花云ましてといふ詞は上の數ならぬかきねのうちといふにかけて見るへきなり　今いふ所は六條院のありさまなり云々　こゝより一重重をたてゝ書出せり　これより六條院のありさまを云たつるなり此六條院のありさま作りさまより始め目もあやなるにまして正月なとは御簾几丁に至まて花麗なるへけれは有さま思ひやるへしましてといふ詞を能あちはふへし數ならぬ垣ねたにあまねき春の光には漏れ侍らねはましてとなり此六條院はなへて春色も更に各別の様なり　花云朗詠早春詩云庭増二氣色一晴砂綠林變客輝宿雪紅（紀納言）　玉をしける云々河に玉堺萬井水左大臣「ほり江には玉しかましを大君の御舟こかんとかねてしりせは又萬にけしきやとも玉しかましを　玉しきの事禁中に限歟

御かた／＼のありさま　六條院の作りさま四方にそこ／＼と住つけ給て東は紫上南は（此朱なしイ本）

春のおとゝの御まへ　秘　墨小書三段に嚮分る也　發端に春初の總別の様を云て數ならぬ垣ねのうちと云ひまして玉をしけると云又春のおとゝの御まへ（紫上方なり）如此三段に分て見るへし　河に紫上の御方也おとゝ日本紀に殿也又亭（以上河）　又こゝにて一重段をたてたり紫上のありさまを一重かさてあらはさんの心にて發端より書出せりこゝを三重に書たると花鳥にも見えたり發端には先世間の様を云たてて數ならぬ垣根たにと云ひ次に六條院のありさまを世間に超越したる春の光をまして玉をしける御まへはと云たてゝさて此六條院の中にても紫上の御方は更也三段各別の春色なると云也公界の春た

にもあるを此六條院の繁華なる有様は別に作り出たるやうなり然るを六條院の同し殿の中にても事から有様より始て紫上の御方は各別に世間のきわはなれたる春の光なりと云也

梅の香もみすのうちの匂ひに吹まかひていける佛の御くにとおほゆ　此はいつらといへは春の空長閑に梅の香もおかしき時分所はいつてそといへは玉をみかける六條院然もこゝは紫上の人からも有様もけたかく物ふかくてそくもれると思所もなく類ひなき有さまはたくらへて云んにも天上にも人間にも比量もなし唯まさしく生佛國まて也　上にいへる如く三重に段をたてたるも此生佛國の詞より見れは九品の三輩を含めるなるへし數ならぬ垣ねは下輩玉をしける御まへは中輩とも云へし　春のおとゝの御まへはこれてそ上輩にとりても上品上生なるへし此末の詞に蓮の中の世界にまたひらけさらん心ちもと云る此段わけに相叶へるなるへし

花云法華經云栴檀香風悦ニ可衆心ニ云々梅の香の事

生佛國の事河云四土不二同居方便實報寂光也云々

花鳥云生佛國は極樂淨土を云也云々

さすかにうちとけてやすらかに　前の詞にいかめしく書たるに對していへり弄　如此結構に花美奇麗なるあたりへは人もよりつきにくき樣なる物なるをさもなく殿の中はきらひやかなる物から然も寄來る人の心もおかれす打解たる和氣のあるを云也總て人のそはあたりに有人はよりつかれぬ樣なるも苦しからぬ事も有ぬへし人の本對たる人は（本墨小書）諸人の歸服する和氣なくてはと云なるへし　此語妙也紫上は今本臺なる故に面許かさりたる許にてはなくて内々も有へきさまなりかやうにきらひやかなりとて又人のよりつくましき樣にはなく住なし給ふなり

さふらふ人々も　祇候の人々も可然をは明石の姫君の御方にとなり　姫君は明石の姫君なり明石の上の方にての養育は聊爾なるとて紫上の御子の分にして五六年てなたにて養育なさる去程にめしつかふ人々もわかき人をえらひておかるゝなり

すこしおとなひ　此段は源氏の紫上の方の事也　衣裳てときまて目やすきなり

はかためのいはひして　河云　齒固事　見掌中暦

六本爲一前　一本煑鹽鮹鮎押鮎火干皆上に置鮎串
差　一本鯉鳥鹿猪膂隨盛物串差物置上但貫之　一
本瓜漬茄漬蕪大根　一本鹿蘇白散羅坏空盞　一本
酒盞羅杯四口　一本鏡相具鮎大根橘　元三御藥齒
固事　內膳自右青瑣門供御齒固具盛青瓷　大根一
坏　瓜串刺二坏　或云三坏然而總七坏之由有所見　押鮎　切盛置頭　煮鮎一坏
圖切置頭二串　猪完以雉代之　鹿完以鴫代之　以上七坏
之內精進物供於第一御臺魚類供二御臺　或説無鹿完有腹赤
皇女禎子　三條院女三宮母中宮研子御堂關白女陽明門院是也　長和三年正月一日　于時三歳
餅鏡御覽是其例也榮花物語云うへわか宮にもちひ
かゞみみせ奉らせ給ふ　正月元三春之氣節也本爲
政月秦始皇以此月生因而名政遂改爲正月也尙書曰
月正元者首也月上元日祖禰進酒降神致福祥　尙書
大傳云夏以平旦爲朔殷以雞鳴爲朔周以夜半爲朔々
謂月朝故曰三朝此爲歲朔之日家國同時而宗祭也
齒固は元三の日の事也齡はよはひ也則よはひとも
よめり齒固はよはひをかたむる心也たかつき六本
にをしきをすゑ一の臺にもちひ大根橘をそる也此
餅は近江の火きりのもちひを專用へし是によりて
やかて此國の鏡山の歌を詠する也　俊賴歌はかた

めのおしきのしき物にかきつけゝる云々「我をの
み世にもちひのかゝみ草さきさかえたるかけそ
こほれる　私齒固はよはひをかたくすると也馬を
齒を以てよはひを知事あり其理相叶へる者歟
千とせのかけ近江のやの歌を誦して鏡に向と云なり
河海「萬代を松にそ君をいはひける千とせのかけに
すまんとおもへは
としのうちのいはひこと　花云よの常は舊年を年の
內と云年內の立春なと云か如してゝの年の內は今
より後一年の中の事をことぶきするなり舊年には
あらす今年の年中なり　素然私云伊勢物語に「ぬ
れつゝそしひて折つる年の內に春はいくかもあら
しとおもへは此年の內も今の年中を云此類歟
そはれあへる　そをれとよむへし　河云たはふれな
り　戲也云々
おとゝの君　源氏の君なり　これらか源氏の仁じよ
の深き心なりとりはやす樣なる奇特なり
ふところでひきなほしつゝ　つゝしみ禮を致す也
源のさしのぞき給を候ふ人々むつかしかる心也
弄源氏のさしのそき給事を人々はしたなく迷惑し

て思へらさ故に詞をかけて過給へるなり源の仁恕ある故なり
いとしたゝかなる　源の詞なり　源の今さしのそき給を人々迷惑の樣なるを見知て詞をかけ給ふなり
詞を加へて過給尤よしありことの外なる祝ことと共かなと人々の思ふ道々少しきかせよ
われことふきせんと　河ことふきは年始の祝詞也
古事記曰擊口鼓爲伎（コトフキヲ）　文選曰振十城之虛壽掩咸陽以取儁　西宮記云歌合人於南殿西被調子入自日華門列立案庭踏歌周旋二度列立御前言吹奏祝詞畢
日本紀云壽詞　言吹　文選云壽或譸
中將君そ　秘　源に祗候人なり須磨のうつろひの時紫上へ參る人なり　源の心かけ給ふ人なり
かねてそみゆるなとこそ　河「あふみのやかゝみの山をたてたれはかねてそみゆる君か千とせは　世俗說云　鏡餅鏡之時誦此歌云々　少云昔の歌にもかねてそみゆるなとゝ君の御事をこそいはひ奉り侍りつれ私の祈には何程の事か侍らんと中將君の申給へるなり
御かた／＼のさんざし給はんとて　河　參座　參賀事なり　花散里なとを始としてあなたこなたありき給ふなり
けさこの人々の　齒固の事歟
うへにはわれみせたてまつらん　玉かくの給へるのみなるへし　但歌にてあれは實なり　紫上へは源のあなた此方へ御出なきに御前にて參らせらるへきとなり榮花物語
源　うす氷とけぬる池のかゝみには世にくもりなき影そならへる　源の歌なり紫上と影をならへんと也　河
柳は似舞腰池如鏡　白氏文集　氷池如二破鏡一雪影似二殘花一　僧達空（寔）「早春　春の日のかけそふ池のかゝみには柳のまゆそまつはみえける
けにめてたき　草子地なり
返紫上　くもりなき池のかゝみに萬代をすむへきかけそしるくみえける　紫上の返歌なり六條院の體なり廣大に面白き歌なり
なにことにつけても　草子地也　源と紫との御あはひを云也
けふはねのひなりけり　元日子の日也　河　十節記曰正月子日登岳遙望四方得陰陽靜氣除憂惱之術也又云引小松延邏年云々　初學記云歲首祝折松枝男七

女二七　本朝事始云天安元年禁中有曲宴昔者上日（月イ）
之中必有此事時謂之子日遊今日之宴修舊迹者也倚
松樹以摩腰習ニ風霜難（之イ）レ犯和菜羹而啜口期氣味之克
調（菅家屆從雲林院序）　「行末も子日の松のためしには君か千
とせをひかんとそ思ふ三條太政大臣　文粹第九屆ニ從
雲林院ニ不勝感歌耶叙所觀（菅家）　予嘗聞于故老曰上陽
子日野遊厭老其事如何其義如何倚松樹以摩腰習風
霜之難犯和菜羹而啜口氣味克調也云々　類聚國史
七十二　子日曲宴　平城天皇大同三年正月戊子曲
宴賜五位已上衣被庚子曲宴賜侍臣衣被翠主命小臣
分類するに舊史之次て見有旨亦子日賜菜羹之宴
野中芼菜世事推之蘆（鑪イ）心灯下和羹俗人處之爽指文粹
九早春觀賜宴宮人同賦催粧應製菅家
けに千とせの春をかけて　花　朗詠子日倚松根摩腰千
年之翠滿手菅　「めつらしき千世のはしめの子の（源惟賢）
日にはまつけふをこそ引へかりけれ「千とせまて
限れる松もけふよりは君にひかれて萬代やへん
九禪抄元日立春子日此三相當の日なれはかくいへ
り
わらはしもつかへ　花　わらはゝあてめにかさみをき
る下つかへは五きぬにからきぬをきるいつれも袴
をはきる也うちきと紅をはきる下つかへははした
物より品下なる女也
おまへの山のこまつひきあそふ　花　貫之集　白川院
子日歌序云けふはむ月の時いまたわかれぬはての
子日なり世中の事として小松を年ことにひき櫻を
かしらにかさして霞とゝもに立ましり花とちりか
ひてみつからもあはれ心をやりてさきの事をわす
れぬけふのあそひにそ有ける　圓融院寛和元年二
月十三日戊子御幸紫野立幄屋御前植小松有和歌題
云於紫野翫子日松平兼盛献之則献和歌序見小野宮
右大臣記　花　今案御前の山の小松これを思よせ侍
り
北のおとゝ　明石上なり　姫君の實母なり
ひけてともひわりてなと　河鬚子　籠歟　檜破子
うつほの物語にひわりてなときよけにてもたせ給（押紙）
へり　花　圓融院子日御幸檜破子居御前云々　亭子
院位におはしましける時いまたみこにて正月はつ
子の日わりてうして后宮の御かたにたてまつら
せ給ふとてかきつけさせ給ふける　延喜御製　續

後撰「二葉よりけふをまつとはひかるともひとし
き程をくらへてもみよ
五葉の枝にうつる鶯も云々歌まて　河　拾遺曰太后の
宮に宮内と云人のわらはなりける時たゝこの御門
の御前に候ける程に御前なる五葉に鶯のなきける
をかれよめとおほせことありけれはつかうまつれ
る讀人不知「松の上になく鶯の聲をこそはつねの
ひとはいふへかりけれ　同集云天暦御時にたいは
ん所の前に鶯のすを紅梅の枝につけてたてまつら
れたりけるをみて一條攝政　「花の色はあかすみ
るとも鶯のねくらの枝に手なゝふれそも　今風流
此兩首の心歟　花ひけてをつけたる松枝に鶯の巣
くへるかたをつくり物にせり明石上より姫君にま
ゐらせ給へはことさらに思心ありといへり　弄云
拾遺歌を思ひてかけり松に鶯は初子の縁ある物な
り思心あらんとは折にあひたる作物なれは鶯も心
ありてしなしたるとなり　作枝也
おもふ心あらんかし　私云上の義理のうへに猶又歌
をかけて見るへき歟　松に鶯は初子の縁ある事は
勿論そこに含める心はへあると云義なるへし　其

下心はといへは左の歌音せぬ里也
明石上
とし月を松にひかれてふる人にけふうくひすのはつ
ねきかせよ　河の説は右の詞の下に有　花躬恒集「春
のたつけふ鶯のはつ聲を鳴て誰にか先聞すらん
弄ふる人は經人古人兩説也　古人とは卑下の心也
經る人とよみてよろしき歟　私云古人と卑下の義
ならは年月を心の松にひかれて今日の初音をきか
せよと二句あり結句は引つけて見るへき歟經人の
義ならは松にひかれては松にかゝりてなと云類な
るへし對面のをりもやと年月を待にかゝつらひて
經たる人に折にあひたる初音をな惜みそと云歟
姫君紫上の方へ御出ありては四五年になるなり對
面ありたき由なりせめて御返事の初音をも聞たき
となりふる人古の字と經歴の儀と兩説なり經歴の
義可なるへき歟
おとせぬさとのと　河　伊行釋「けふたにも初音きかせ
あるイ
よ鶯の音せぬ里はすむかひもなし　拾遺「谷の戸
をとちやはてつる鶯の松に音せて春のくれぬる
けにわはれと
こといみもえし給はぬ　今日は元日なれは事忌もす

へき日なれ共哀催なり
はつねをしみ給ふへき　花をさなき人のはしめて文かき歌よむ事をいへり　直の御返りをし給へとなり
明くれみたてまつる人たに　母の心を源の思ひやり給ふなり
つみえかましく　かく引はなちておき給ふをの給なり
姫君 ひきわかれとしはふれとも鶯のすたちし松のねをわすれめや　元の根さしはわすれすとなり　貴ム に明石姫君冷標巻に當年明石にて三月十六日誕生の時九月源氏君廿七歳也此巻に源卅六なれは九歳を歷
くた〳〵しくそある　河細碎　弄凡そ歌のくた〳〵しきは宜しからぬ事をしらせんためにかける詞なるへし　草子地也評して書なり歌と云物はことわり許にては叶ましき也餘情を今ちとそへたきとなり心をつけて見へし
夏の御すまひ　花ちる里なり
ときならぬ　夏の方なれはなり
わさとこのましき　われすさめすなるなり

あなかちにちかやかなる　一宿なとはし給はぬなり
いもせのちきりはかり　河妹兄（イモセ）日本紀　妻妹萬葉　いもせとは日本紀の如くは伊弉諾伊弉冊尊兄弟夫婦と成給へる因緣也いもうとゝせうとゝ云心なりされは蘭巻に岩もる中將玉鬘君を「いもせ山深き道をもたとらすてをたえの橋にふみまかひけるといへり　初は姉妹ともしらて尋つるに實には妹にて有けるとよめる也　一説にはいもせとはいもとせと云心なり云々　兄弟夫婦事　高津內親王桓武御女嵯峨女御他腹即位歷之　又仁德天皇依菟道稚子之遺言彼一腹の妹を女御とし給　淡海公妹五十重夫人爲妻他腹　漢朝には同姓猶不嫁云々　弄云よるなとゝまり給ふ事はなけれと年頃の如く夫婦の契はかりは今もかはらぬ心なり　一勘
御木丁へたてたれとすこしおしやり給へは　總して花散里は心もちひ打むきて如此可然人なり源のみ給ひしまゝにておはするなりふりの吉なりあまり人の恥かゝやけるも見苦しき物なり
はなたはけに匂ひおほからぬ　秘花散里には年の内あさ花田のかいふの文のきぬを送り給へれはそれ

をき給なり是より下の御方にも皆源氏のくはり給へるをき給へり　玉鬘巻の末に衣くはりの事あり其所に見えたり右の花鳥に詳なり

やさしきかたにはあらねと　花髪のほうそくなきをやさしきと云也　本しきにあるへき事にてはなけれ共ちとかやうにもめつくろい給へかしと源の思給ふなり

えびかつらして　河日本紀云伊弉諾尊投二黒鬘一此即化成二蒲萄葛一此故にかつらをえひかつらといへるなり　花女のつくりかつらをえひかつらと云蒲萄のつるに似たる故なり

われならさらん人は　源の心の中なり花散里は容顔美麗なる所はなき物をされとも我心のかはらす思ふを我なからうれしく思ひ給ふなり

心かろき人のつらにてわれにそむき給なましかは　河伊勢物語「いてゝいなは心かろしといひやせん世の有様を人はしらねは　詞云男女いとかしてく思ひかはしたりけるかいさゝかなる事につけて世中をうしと思てかゝる歌をよみて出にけりとあり此心をとりて心かろき人といへる歟又花散里の巻にわれも人もなさけをかはしすくひ給ふやうなるそれをあいなしと思ふ人はとにかくにうちかはるを又ことわり世のさかと思ひなし給ふといへり此事歟

人の御心のおもき　花散里の御心なり何事につけても恨給ふ御けしきもなきとなり

こまやかに　河仔細

ふるとしの御物かたりし　年内よりの御物語なり西のたいへわたり給またいたくすみなれ給はぬほとよりは　玉かつらの方なり　河玉鬘君去年十一月にわたり給へはいまた住なれすと云ふなり　去年十一月よりすみ給様にいまたうひ／＼しかるへきを能すみなし給ふとなり

御しつらひ有へきかきりなれと

さうしみに　人からも可然となり

山吹にもてはやし給へる　衣くはりの事詳花鳥　花西のたいの姫君にはくもりなくあかき山吹のほそなかをおくり給へり玉鬘君のくもれる所なく匂ひきら／＼しきは山吹の衣にいとゝもてはやされ給へり御方々のき給へる御装束共にけわいたるを見

んの御心とさきの巻のきぬくはり給ふ所にいへる
はかやうの事をいへるなるへし
物おもひにし　田舎なとに居給ひし事なり　玉かつ
ら四歳にて肥前にくたり少貳任五ヶ年也廿年女イはか
り過て廿二歳にて六條院へ迎也
かみのすそすてしほそりてさはらかに　花髪の少し
落すきてさはやかなる心歟　弄云髪のあら〳〵と
かゝりたる様なり
かくてみさらましかは　我物にしても見たきとなり
えしもみすくしたまふましくや　私云此十二字草子
地歟素然私云十四字歟
かくいとへたてなくみたてまつりなれ給へると猶思
ふにへたゝりおほく　花まことの御親ならぬ事を云
り　弄云源氏に隔なく馴ても猶まことの親ならね
はまほならすもてなしたるなり　又は源氏の心と
見えたり　儀二あり源の心と云義もありされとも
玉鬘の心に見へきなり源の玉かつらをは眞實の御
子の様にしたまへとも眞實の父にてはなき故に隔
なく馴ても猶誠の親ならねはまほならすもてなし
たるとなり

とし頃になりぬる　是より源の詞なり去年から如此
くすまひ給ふ物をとなり
つゝみなく　秘今は物つゝみもし給ひそ紫上の方な
とへも御出あれと也
いはけなきうひこと　うひ琴也明石姫君也
うしろめたく　紫上の事なり
の給はん　玉鬘の詞なり
さもあることとそかし　花紫上をあはつけき心なき人
と源氏の給ふにたかはぬ心なり物語かく人の詞な
り　草子地なり紫上はうしろめたき所なとはなき
人なりとことわりて書なり　朱小書　私云紫上をあ
わつけき心なき人との給ふは勿論沙汰に及はぬ義
なり何事にへたてにくみ申さるへきそ作去源氏の
かやうにおとなしやかに口にてはの給へとも折々
は何とかあらんすらんいかにうしろめたからぬ御
心なりとも御心おかれぬへきと云にや
ちかきわたとのゝ　秘明石上は聊かと〳〵しき所あ
るとなり
さうしみはみえす

硯のあたり
からのとうきやうこなしきのことく〳〵しきはしさし
たる　河云端は縁なり　唐東京錦なり唐にも東西兩
京あり其內東京の錦すくれたりと云々　舒明天皇
御宇以唐東京錦摸用吾朝　花唐東京錦茵藤の丸圓
文の白綾方一尺八寸縁白地錦四方二寸許裏蘇芳平
絹無レ縁也今案白地錦を東京錦といへるなり　玉
云一勘もろこしの東京といへる所に織たる物歟或
云白地の錦居給ふとおはしき所也東京錦とは白き
唐錦なり尋常の茵さるへし云々河花詳なり
よしある火をけに　河案之普通火桶歟　一說薰物の
火とりの事なり云々
侍從をくゆらかし
物ことにしめたる　河殊なり　又云每也
えひかうのかのまかへる　えい香と云說もあり花に
詳なり　河案薰衣香方　零陵香七分　沉香二分
丁子二兩　蘇合二兩　篤唐二兩　霍香三兩　鬱金
一兩　麝香半分　右六種各別擣爲散和合唯蘇合篤
唐以手拔碎和且好一說衣被香麝香異名也見延喜式
云々　或衣被香　浥衣香方　千金翼方　沉香　苜
蓿香各五兩　丁香　甘松香　霍香　靑木香　艾納
香藥名歟り尋藥には非す教長朝臣說　鷄舌香　雀腦香各一兩　麝香
半兩　白檀香三兩　零陵香十兩　又古老の尼君の
秘事とて申には衣被香は麝香半分沉香三分二白檀三
分一何も最上品を取合て少しなませんしなる甘葛
にて合云々此外に檳榔子を少し粉にして入云々浴
き匂の增なり云々最少分可加云々譬は薰十兩なら
は檳榔子一分計と云々總して匂をまとむる樣の有
也云々譬は當時三草と云薰の同類なり　花衣被香
とかけるは衣裳をにほはす心なり裛衣香とかくは
衣につく心なり　或抄云昔人の云あこの君のをしへ
侍し衣被香とは麝香半分　沉香二分　白檀二分一
巳上いつれも最上を撰てませしなり千歲累の汁に
て合するなり此外檳榔子のうは皮をこそけて粉に
して少し入は涼しき匂ひする故なり當時三くさと
云薰物是也檳榔子はたき物十兩に一分入へし總し
て匂をまとむる益ありといへり
すちかはりゆゑあるかきさま　河明石上手跡當時世
のすちに替りて又勝れたるなり　弄すちかはりと
は常の人の亂れたるにもかはりて故あるとはめた

る也
こと／＼しくさうかちなとにもさへからす　しとしととめやすく書也　河さうからす　不才　才學かましからす也或本にされからす　朱小書云此義ならはさうかちとは文字かちなとにも才學からせぬと云歟箒木卷にもまんなを女のかきすくむる事を難せり　弄云されともかゝぬとなり打とけぬるにも心見ゆへし弄の説されからぬ也
こまつの御返りを　姫君よりさきの御返り也
明石上
めつらしや花のねくらにこつたひて谷のふるすをとつるうくひす　河とつる閉なり　紫明云とつる閉なりと釋せり謬歟　雅成歌「鶯のなくねのとかにきこゆなり花のねくらもうこかさらなん　兼盛「人しれすまちしもしるく鶯の聲めつらしきけふにもあるかな　花第一句にめつらしやとあれはとへる鶯は心詞あひ叶侍り花のねくらは春の御方をたとへていへるなり　姫君の紫上に養はれ給を云なり花のねくら也花には谷のふるす今日姫君の御返歌あるを云なりとつる鶯の説河にあり猶とへる鶯なるへし

こゑまちいておくる　河未勘　弄同之
さけるをかへに　河拾遺「梅花さける岡へに家しあれはともしくもあらす鶯の聲　花明石上は姫君のはつねも今年こそ始て待出たるにともしくもあらすの歌を手習にかき給へるは引かへしたるなくさめ詞なるへし　花弄河に御近々にある故にともしくもあらすと云心をとるなり
ひきかへし　草子地なり此義不審草子地にはあらす
筆さしぬらして　花源氏君の明石上の手習したる端に何事を書すさひ給へるなり
ゐさりいてゝ　花
しろきにけさやかなる　花明石上は白き浮もんのきぬを源氏君送られたる由上卷に見えたり
あたらしき年の御さはかれもやと　花正月一日の夜の事なり明石の御方にとまり給へる事をいつしかなるやうに御方々の人々もてさわくへき事を云へり下の詞に南のおとゝにはまして目さましかるとあり大方は紫上の御方にてこそ年の始なれはとまり玉ふへきにかゝれは人々めさましく思ふなり
猶おほえことなりし　人々めさましく思ふ也

かくしもあるましき　明石上の心なりあなかちにかやうに夜深く御歸なくともとよくほりに思ひ給ふなり

まちとり給へるかたなまけやけしと　河好物(ケヤケキモノ)白氏文集十二尤(ケヤケキ)者同廿六けやけしとは善惡につけて冷(スサマシク)おそき様なる心(スクレタル)なりすくれなからもはけ〳〵としたる姿にはあらぬ也　選ニ梨園弟子中尤物一序李白詩後世間尤物不在大能蕩(トラカシ)君心則爲害文集八孫門　意者不但感其事亦欲懲尤物窒(フセヒテ)亂階垂於爲來世陳鴻長恨歌傳　大鏡云古今撰せられしをり貫之をめしいたして和歌つかうまつらしめ給へり　「と夏はいかゝなきけんほとゝきすこのくれはかりあやしきはなし　これをたにけやけき事と思ひ給ひしにとあり　花待とり給へるとは紫の御方へわたり給事なりけやしは世にすくれめさましき心なり　弄尤なりわつらはしき心なるへしけやけしとは花に云世にすくれめさましき心と云々然れともてゝの心はわつらはしきとなり紫上のさてそ思ひ給ふへきとき源の如此の給ふなりけふはりんしかく(キヤク)のことに　小私江次第目録はかりに名書目をのみ載て次第なはのせす不審　河臨時客とは攝政關白の亭に春のはしめ上達部を招て遊を云なり定れる公務ならねは臨時客と號する歟自餘をは大饗と云中宮東宮幷左右大臣也執政臣朱器の饗を設を臨時客と云自餘の様器饗を大饗と云也是も源氏執政の故に朱器の饗を設られたる故に臨時客と云也　大饗事　正月二日二宮大饗中東關白臨時客四日左大臣饗五日右大臣饗謂母屋饗　大臣初任謂廂饗　花河海說あやまれり大饗は毎年正月に三公各之を行給そ其時は請客の使なとありて客人を殊更招請して藤氏の一の大臣は氏長者たるによつて朱器臺盤を氏院よりわたして是を用るなり自餘大臣は赤木くろ木のつくえ様の器を用るなり尊者あり鷹飼なとわたる義あり臨時客と云は正月二日三日の間關白大臣の亭へ客人のふと來れるを云さて臨時客とはなつくるなり其時は臺盤なとは用ひすをしき高つきをすうるなり催馬樂朗詠かたぬきなとあり樂器をめさす笏拍子にてうたふ物なり源氏君太政大臣たるによて臨時客の事攝政の臣の如し　墨小書私年中行事抄云　正月二日關白家臨時客事云々　花鳥と根元抄と相違花鳥の時しるし改らるゝ歟根元抄云攝政關白家に春の

始大臣以下の上達部を招引して遊事なり定れる公務ならねは臨時客と云にや云々大臣の母屋の大饗は年をへて行はる鷹飼なとわたりて其興ある事なり是は藤氏長者朱器饗を設る也大臣家には樣器の饗をそなふるなり臨時客にも尊者なとありて尋常の大饗の儀式に同しはてつかたに御遊ありて催馬樂を歌ふ云々　弄云客きやくとよむへし一勸臨時客は攝關家にての名目なり但六條院は大臣なから執政の職をも兼たる程なれはなすらへていへるなり一勸

おもかくし　花　おもかくすとは臨時客の取亂しに事よせて紫上に正たいに向ひ給はぬを云はち給ふ心なり　花の説可なりおもかくすとは紫上の嫌疑をまきらかし給ふ也

ろくなと　臨時客には錄なとはなきを是も事に事をそへたるなり

なすらひなるたに　源に似たる人もなき也

いといふそくおほく　花に詳　河右族　草族心也　花いうそくは有職ともかけり物を知たる事なりとりはなちては何れも皆すくれて見え給へと源氏君に立ならひ給へはけおされて萬及かたき由なりいうそくはかたちよりはしめ藝能にいたるまでの事をいへり

わろしかし　草子地也

この院にまゐるには　源の院號の事藤末葉にこそ見えたるを如此いへるは生得六條院と云歟 朱小書　小書にも此院に參ると踏歌の事を云り　私云昔の事を後人しるす書なれは院と云無疑歟

つねのとしよりもとなり　今源の玉鬘をえ給ていかなる聲もなと思ほす折節なれはなり

花の香さそふ夕風　河古今「花のかを風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる　後撰「山風の花の香さそふもとには春のかすみそほたしなりける　常ならは梅かゝとこそ云へきを花といひておきて更に梅と云妙なる語なり古今の花のかを風のたよりにたくへてそといふも梅をいへはなり　素然私三光の義云古今の本歌の心は梅か香を風にたくへて鶯をさそふしるへとするなり此詞は春の初風の長閑なるにおまへの梅のさきあひたるは此春風の花をさそひたるやうなるなりおなし花の香さ

そふ風を心を用かへたる妙なりとぞ申されし
おまへの梅やう〳〵ひもときて　花臨時客には肩ぬきの事あり花も心ありて紐とくといへり
あれはたれ時なるに　河たそかれ時なり
物のしらへとも　花此殿催馬楽　臨時客には樂器を用す郢曲の人笏拍子にてうたふなり然れと此臨時客には大饗の例になすらへて笛の筥なとをめし出したるにや物のしらへといへるおほつかなし但物のしらへとは音曲につきて時の調子をも云へし樂器の有無にかゝはるへからす弄云花鳥云々
辨の少將この殿うちいてたる　小書青表紙此名なし　私云此辨少將今の本に無之如何　河秋篠安人　左京大夫人父不見　左中辨　近衛少將　延暦廿三年正月廿七日任參議　中辨　少將如元　此殿催馬樂呂このとのはうへもとみけりさきくさのあはれさきくさの花二段さきくさのみつはよつはのなかに殿つくりせりや殿つくりせりせりや
さきくさのすゑつかた　河さきくさに有說々歟後撰集には朱草福草なと書てよめる歟延喜式にも福草又材種とかけり風土記には紫草とも書之曾根好忠集にさき草をわかなにつみてとよめり然れは春の始に萠出る草歟三葉四葉とあるにつきて木ともいへり此草春初に必三葉四葉に萠と云々　又檜木ともいへり日本紀少彦名命檜木のたねをまきて家を作らすとあれはなり又三枝祭(サイクサ)とてありされと是は三枝の花を折て酒樽をかざるよ令の文にもあれは各別の事歟但さきくさの三葉とつゞけんために今の三枝の字も心かよふへき歟　葛(サキクサ)
崇神天皇内侍所同殿をおそれ申されて温明殿をと間に作りて崇申されし事を三葉四葉に殿つくりせりとよめるなりされは三葉四葉は合て七間なり間の字をはとよむなり三間四間也或說には三段(ツマ)四段(ツマ)なり段をあまた重て屋敷を高くつくり重たる心なり是秘說なりと云り
なにこともさしいらへ　源の何事にも事くはへ給へはよろつもてはやされて各別になるとなり
物へたてゝきゝ給ふ　紫上の外の御かた〳〵は皆よそに聞給ふなり
はちすのうちのせかいにまたひらけさらん心ちも
河於蓮華中經十二大劫觀經下品下生釋云雖得生彼

華合經於多劫此等罪人在華內時有三障乃至除（脫イ）此已外更無諸苦經云猶如比丘叉三禪樂也　觀經疏散善義に云らく在華內時三種障一者不得見佛及諸聖衆二者不得聽聞正法三者不得歷事供養除此已外更無諸苦　花 上の詞に春の御方をはいける佛の御くにといへり其外の御方々は物へたてゝ開給故に蓮の花のいまた開けぬにたとへたるなり十樂の中に蓮華未開樂の心なり　弄云彼蓮の中に劫を經る間三の不足あるの由なり佛を見す說法をきかす佛を供養せす云々東の院なとにある人々のさまに似たり紫上をは生佛國にかけり其餘の御方々は下品下生にかく也此殿の中に在なから如此よそに開給は彼蓮の中に劫を經る三不足あるか如し三不足とは一には不見佛二には說法をきかす三には佛を供養せすと云々東院にある人は此類なり

ましてひんかしの院にはなれ　末摘空蟬なと也三段に書也　花 二條院の東の院には末摘空蟬なとすみ給なり

世のうきめみえぬ山ちに　河「世のうきめみえぬ山ちへいらんにはおもふ人こそほたしなりけれ　私

蓬生卷に大貳の北方猶おはしたちね世のうき時はみえぬ山ちをこそ尋ぬれなと申せし事あり

つれなき人の　源氏なり

おこなひのかたの人は　花 うつせみの姬君の事なり

かなのよろつのかくもん　花 末摘花の事なり

さわかしき日ころしつめて　ちと取しつめてとふらひたまふなり　臨時客五日叙位七日節會八日大極殿御齋會或行幸十一日除目如此等のさわかしき日頃過すと云なり

ひたちの宮の御かたは　末摘なりなみ〳〵のやうには思食さす人目よくあつかひをもし給ふなり

人めのかさり　末摘は人からなれは人目のかさり計を常にし給ふなり

さかりとみえし御わかかみも　私云蓬生卷に御乳（子歟）母の侍從を始め大貳の北方伴て筑紫へ下向の時我御くしのおちたりけるをかつらにし給へる九尺あまりはかりにていときよらなるをはてに入てと云々めいよ末摘は髮のよき人なるか是さへ年よりてさもなき也

御わかゝみも年ころにおとろへゆきまして瀧のよと

み　河古今「落たきつ瀧の水上年つもり老にけらし
なくろきすちなし　同「瀧つせの中にもよとはあ
りてふをなと我戀の淵せともなき　花古今の歌は
瀧を髮にたとへたり是によりて髮を又瀧にたとふ
る也瀧のよとみはしらかの変りたるなり　本歌の
心は此瀧は年よりたる歟一すちも黑きすちなしと
いへるを髮を瀧にたとへかへたり
弄髮の白くましりたるをいへり　古今の歌は瀧の
水上のかみと云字を以て髮にたとへて黑きすちな
しと云を是は髮を瀧にたとへかふるなり　私云よ
とみと云にて黑きすちさすかにましれるを知へし
まほにもむかひ　源のかたより正體にもえむかひ給
はぬなり末摘は其心もなきなり
柳はけにてそすさましかりけれ　河玉鬘卷に末摘の
もとへ柳のおり物を送られたり人からに思よそへ
てせられたることなれはけにこそと云なり　前の
衣くはりの時此御方には柳色をまゐらせ給し事也
小書柳色かみたむなき色にてはなけれともきなし給ふ
人からなり
ひかりもなき黑きかいねりのさい〳〵しく　河搔練
は紅に裏張たるなり　花かいねりはうすき紅のは
りたるきぬなりはり板いれは黑む物なりさい〳〵
しくはさや〳〵となる心なり　そしも色なる也
さるをり物のうちき　花此織物のうちきも末摘の方
に用意せられたる也何色とも見えすおほつかなし
かさねのうちきなとは　うつほにき給ふなり　花此
うちきにかさねのなきをいへり例のうつほにてき
給へる心にや大かた源氏の送り給へる小袿は柳な
るへし次に黑きかいねり一かさねは五きぬの分な
りさる物のうちきなとは表着なとの事なりかさね
のなきは單をかさねられぬをいへるにや　弄うち
きは打たるきぬなりひとへと云物はきぬの下に必
きるなりかさねは五きぬなとあまたかさぬるなり
御心にもあらす　源の御心なり　小書あらせうしの人や
となり
ことさらに御木丁ひきつくろひへたて給ふ　花花ち
る里は源氏に對面の時木丁を隔たるを源氏の方よ
り押のけ給へはそれもさておはす由上に見えたり
末摘は木丁をそはへのけられたるによりて鼻の色
あらはなれは源氏君とさらに木丁を引隔て給へる

を中々女はさしも思ひ給はぬといへる也用意もてなしの心あると心なきと人々の上にわかれたる物なるへし　花に云々

いまはかくあはれに　兎にも角にも源をたのみ給ふ事なるがあはれなるとなり

かゝるかたにも　小書 かう有にしも誰かさてはくゝまんそと覺すに猶いとほしきなり源たに見すては誰やの人かはぐくまんそとおぼすなり　小書 私云かゝるかたとは鼻なと又よろつ衣裳如きの事なるへしおしなへての人ならすとは凡よからす共世上の人なみにもあらぬを云也

われたにこそはと　源の仁恕ある所なり

御ぞともの事　源の問給ふなり

ふくみなへたるこそよけれ　花 只内々の姿はきたる物のさやめかぬかよきを云也　小書 私いかにもぼじやぼじやとしたるがよきなり

こち〳〵しくさすかにうちわらひ　花 さかきの巻にもあり五音の通したれはことく〳〵しくと云ふ詞なり

だいごのあざりの君　醍醐の阿奢梨君也　末摘の第二の兄か

かはきぬをさへとられにしのち　花 ふるきのかはきぬをき給ひしを醍醐の阿奢梨のとれると語給也したぎのやうなる物もとられ給ひしとなり　私貂裘をき給ふ事末摘巻に見えたり其時は源氏十七歳なり此巻までは廿ケ年に及ふ事なりたとひ醍醐の阿奢梨の取られすとも餘り年久しきそや可笑々々

いとはなあかき御せうとなりけり　花 醍醐の阿奢梨は末摘花の御せうとゝ云心なり阿奢梨は末摘の弟なり先は似合たる兄弟かなと源の思給ふなり

心うつくしといひなからあまりうちとけ過たりとおほせとてゝにてはいとまめにきすくの人にておはす

河 まめは眞也　木強人也　きすくは木偶人なり

花 心うつくしとは末摘の事也心に思事を有のまゝに云を心うつくしとは云なりされとも内々の着たる物なとの事を殘さすの給へは打とけ過たるなりそれに隨て源氏も末摘の所にては誠にきすくの人に成てかさり艶たち給はぬ心なり木すくは木男なと云か如し

かはきぬはいとよし　源の詞なり

山ふしのみのしろ衣にゆつり給てあへなん　河拾遺「山ふしものふしもかくて心みついまはとねりのねやそゆかしき　世をのかれて野山に臥を山ふし野ふしといふなり　みのしろ衣は簑の代に用たる心なり後撰「ふる雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおとろかれぬる　「山里は草葉の露もしけからんみのしろ衣たゝすともきよ　花かはきぬはいとよしとは阿奢梨のとり給へるはいとよき事なり云々山伏は阿奢梨を云也あへなんとは有なんと云詞なり　弄注云あへなんと云はありなんと云詞なり云々　私不審云々　あへなんは相當せんと云心なり

いたはりなき白たへの衣は　いたはりなきは煩もなきと也　河六帖「ひなつるの白妙衣けふよりは千とせの秋にたちやかさねん　花いたはりなきとは惜からす内々心にまかせて着る心なり

ならへにもなとかかさね給はさらん　河後撰「ならへ(あまたイ)にはぬきかさねゝと人しれす思ふ心はちへにそありける　私云拾遺第六別の部なり五文字相違あまたにはと云々詞書云橘公頼帥に成てくたりける時としさたか繼母内侍のすけのむまのはなむけしけるにさうそくそへてつかはしける貫之云々

おれ〳〵しくたゆき心のおこたり　花おれ〳〵しきは物に退屈する心にや又人にしたかふ心にや胡蝶巻にも此詞ある也　弄おれ〳〵しきとは愚なるなり　花一同

たゆき心の　河墮窳(タユン)史記墮落也懈也玉篇云徒果反　窳(ユク)俞矩反器空中也緩也

ましてかた〳〵のまきらはしき

おのつからなんとの給て　花おのつから忘るゝ事なり　自わするゝ事もあるとなり

むかひの院のみくらあけさせて　河長倉日本紀　花むかひの院は二條院なり　弄二條院の藏なり　二條院なり東の院より向ひといへり

すみ給はぬ所のけはひ　花源氏君の住給はぬ所なり

源ふるさとのはるの木すゑにたつねきてよのつねならぬはなをみるかな　花よのつねならぬは霞にもまきるましき鼻の色をよそへてよみ給へり　ふる里とは今細々住給はぬ故なり花は紅梅なり下心は常陸君の心あり

うつせみのあま衣にも　こゝから又空蟬の方へ行給

なり　花下に松か浦嶋を引寄たりさてあま衣とは
そへたりされは又返りし衣のかたにもかゝれる也
小書うつせみの事父中納言うせて後伊豫介か妻になる
又常陸に成て下りし時具して下り關屋に歸京同巻
に介におくれて後に尼に成て二條院の東院に住き
うけはりたるさまにはあらす　小書我はとは思はぬ用意
なり慇懃に我こそはともなく局ずみの様なり
佛はかりに所えさせ　心あるすまひのさまなり
あをにびの木丁の心は　女房の花の帽子の色也
花出家の人の木丁の帷は靑鈍を用るなり空蟬の方
へくはられし衣も靑にびをうへにかさねたれは木
丁の色と同様なり
袖くちはかりそ　花袖くちはかり色ことなるといふ
はくちなしの御そゆるし色なとをそへられたれは
色ことなるとはいへり　きぬくはりの時我御れう
のをかさねてとあり
松かうらしまをはるかにおもひてそ　河後撰「おと
に聞松かうら嶋きてみれはうへ心あるあまはすみ
けり　後撰雜一西院の后正子淳和后嵯峨皇女御く
しおろさせ給ておこなはせ給ける時彼院の中島の
松をけつりてかき付侍云々素性　おとに聞松か云
云　引歌おとに聞松か
昔より心うかりける　源の詞なり
さすかにかはかりの　小書つひに源にはしたかはてはて
たる人なりされ共我所へ來て居る程の契は有ける
よとなり
かゝるかたに　空蟬詞なり
あさくはあらす　源を淺くは思まゐらせぬとなり
つねにをり〳〵かさねて心まとはし給ひし世のむく
いなとを佛にかしこまり　花是は源氏の詞なり佛に
かしこまるとは罪を懺悔する心なり源氏の過にし
かたの罪障を佛にかしこまり申なり　源の詞なり
中川の宿より以來いたつらに心をつくし給ひし事
を今は折々佛に懺悔し給ふなりそなたにもしるし
有事もあるかとなり
おほしるや　花おほし知やとはかゝる事もそなた
故の事なれは思ひ知り給ふらんとなり　そなたは
思ひ知りたる歟其様につれなくてははてぬ事もあ
る物をとなりかく宣ふは紀伊守が繼母也空蟬に心
かけたるをそれ故尼になれるを源の知ての給ふな

り
かくいとすなほにしもあらぬ物をと　花　源氏の心にはよのつねならは継子の紀伊守なとをてそたのむへき人のかゝる思ひかけぬすまゐなとは世のさためなくすなほならぬよしをにほはせての給ふなり
かのあさましかりしよのふることを　河　伊豫守うせて後紀伊守けさうしける事歟源氏われにこそつれなかりしかとも紀伊守にはうちとそとけつらめと云心をの給ひけるにや　花　伊豫守なく成て後紀伊守かけさうしたりし事を聞給ひてかくの給ふと尼君は心に思ひ出したるなり　弄云空蟬か身にくるしき事なとなるへし紀伊守か心なとにや　空蟬の心中なりまゝ子の紀伊守か色々にいひし故に尼になる事を源のきこしめしての給ふと思ふなり
かゝるありさまを御らんしはてらるゝよりほかのむくい　素然聞書空蟬の詞なりかやうの身上のはてを人に見ゆるほとのむくいは何事かあらんとなり
いにしへよりも物ふかく　空蟬のよしあるさまなり
もてはなれたる事と　空蟬出家の事なれは也
はかなき事をのたまひふるへくもあらす　人のありさまもてなしによりて心はつかしくうちとけにくき事はある物なりあなつりにくきさまなるへし
かはかりのいふかひなたにあれかしとあなたをみやり給ふ
あなたとは末摘の住給ふかたなり人はしなにもよらぬ物と思ひたまへるなり　常陸君是ほとの用意もあれかしとなり
この御かけにかくれたる人々　此外にも多きなり
みなさしのそきわたし給て　いつれをもすて給はぬさまなり
たゝかきりあるみちのわかれのみてそうしろめたけれ命そしらぬ　河　信明集「なからへは命そしらぬ忘れしと思ふ心はつきそはりつゝ　敦慶のみこの「かきりあるわかれのみてそかなしけれ誰も命をそらにしらねは　ム源のわかあらんかきりはかくはくゝまんするかわか後はと憐愍し給ふなり
いつれをもほと〳〵に　源のすて給はぬなり
われはとおほしあかりぬへき　源は今一天下を掌に入給へともいかなる人々をすて給はぬ有かたきとなり

ことしはをとこたうかあり　朱小書圓融院天元六年まて踏歌はあり其以後は絶たり　河踏歌濫觴注付末摘花巻圓融院天元六年正月十四日有男踏歌太政大臣藤原頼忠公承香殿東庭左大臣源雅信公桂芳坊右大臣藤原兼家公藤壺大納言藤原爲光卿梅壺權大納言藤原朝光卿梨壺各差上首有踏歌今度以後男踏歌絶而無之　天武三年正朔云々聖武天平元正十四始有男踏歌天平十四年正十六童女云々濫觴　新儀式云正月十四日男踏歌也　西宮記云延喜十三年正月十四日踏歌參所々倘侍幷一親王宿所等　太后御記云延喜七年正月十四日をとこたうかありてわたかつけの藏人四人大うへわたりおはします云々正月十四日男踏歌也其儀新儀式以下に見えたり丁酉饗公卿大夫等云々　私勘七日宴也　持統天皇七年正月丁酉漢人踏歌を奉つる是新年の祝詞也
小書 首書云持統七年春正月辛卯朔丙午是日漢人等奏踏歌私勘十六日也　八年正月朔日乙酉漢人奏踏歌癸卯唐人奏踏歌　歌頭以下相引之月華門より入て右近陣の前庭列立天皇出御淸涼殿の孫廂に御倚子を立て御座とす內藏寮祿の綿をつみたる机を舁て殿前庭にたつ公卿召によりて東の簀子に着座御厨子所酒肴供す踏歌の人漸く進て南殿の西柱より調子を奏して仙花門より入て東庭に列立周旋三度の後言吹御前にすゝみて祝詞を奏し歌曲を奏す舞人等東西の階よりのほる內侍二人相分て綿を取て踏歌の人にかつく其後所々に踏歌曉に及て歸參歌頭舞人等座を庭中に儲られて各祿を給て退出　花正月十六日の節會をは女踏歌と云舞妓すゝみ出る故なり男踏歌は十四日にあり殿上地下の四位以下の叢然へき所々をめくりて催馬樂をうたひ舞かなつる事あり是は昔正月十四五日に京中の遊士月に乘してあなたこなたをへめくりてうたひ舞しより事おこれり末代に千秋萬歲と云て逸興をもよほす事あるは是等の餘風也圓融院の天元六年正月男踏歌ありし其後は記錄なとにも所見なし其儀式は西宮と云書に見えたり　新儀式西宮抄にあり日本紀持統天皇云々　河海の引やう聊誤あり　隔年に有事なれは今年は男踏歌と云々　私西宮云古語云あられはしりと讀云々これ禪閤仰なり　踏歌後日勘宣命譜安良禮末之利云々　朱小書京中遊士事女踏歌の事なり誤れる歟　打

熨斗嚢持襖着位袍當夜歌頭以下相率麴塵袍白下襲集中院
暫而自月花門參入行列右近陣前庭時尅出御御座孫廂
南四間平文御倚子内藏寮舁祿綿机立前庭南第四間王卿依召參
上簀子南第三間當圓座上人多召南廂小板敷賜酒肴於王卿御厨子所供御酒踏
歌人進南殿西頭始奏調子訖入仙花門列立庭上踏歌
周旋三反後列立御前言吹進出當絹案立奏祝詞喚嚢
持二盤嚢持舁唯進而計綿數奏絹鴨曲奏此殿訖着座
列立門掃部寮當御階南邊一許丈立床子爲歌頭以下
舞人以上座相對地爲上仁壽殿西階南立床子爲管絃
座南廂小板敷東々上敷疊立机爲打熨斗嚢持座又有諸イ
所司二分吹管者同着之内壁下北面西上爲殿上侍臣人イ
座内藏寮舁四尺臺盤二臺立舞人以上座八尺臺盤一基
爲管絃者座幷備肴膳次王卿以下々殿勸盃侍臣侍所
雜色以下行酒三四巡後漸調子唱竹川即起座列立三
四唱後舞人已上下イ双舞進申上東階内侍二人相分被綿
且舞且還女藏人二人持綿匣候内侍後但彈琴者以下男藏人二人傳取
御簾中於庭中被之奏我家曲退出自北廊戸其後踏歌
所所及曉歸參御座如初歌頭舞人賜座於庭中相對西上
管絃者在横切北上西面打熨斗嚢持座在南西上北面
折薦座出御之後王公イ卿先候簀子歌頭以下依召參入着

座賜酒饌此間奏管絃數巡之後賜祿有差事退出歌頭
與支イ子染褂各一領歌掌踏掌同色衾一條吹物彈物襖子
一領打熨斗嚢持絹一疋内藏寮立高机精綿百屯延喜
十三年正月十四日丁巳御記曰此夜有踏歌事曉頭風
雪及戌刻雪晴亥刻踏歌人等參入於右近陣前理管絃
此時即意節イ子中務卿親王常陸太守親王大納言藤原朝
臣權中納言藤原朝臣參議仲平朝臣定方朝臣等侍簀
子數舞人等進到竹架東頭列立先奏調子次萬春樂漸
進南北總三度訖當御前分立言吹吐詞持嚢荷綿即奏
絹鴨曲次奏此間殿此間内藏寮立臺盤長竹東邊掃部
寮旋床子奏歌々行着床子親王公卿等下殿行酒三四
巡後管絃受調歌竹河曲使地列庭中内侍藏人等持被
綿給歌座歌頭已下舞童以上双舞進上階給綿彈琴以下樂人等令
男藏人付後給之了歌我家曲退出時子一尅自瀧口到東宮御息所
曹子踏舞歌イ弘徽殿次尚侍曹子飛香舍次承香殿息所司イ曹子麗景殿
次克明親王直廬昭陽舍次參入東宮寅四尅還參入内裏
候右近陣前召之東庭掃部給平敷座給酒肴令奏絃歌三四曲
後給祿歌頭給褂舞人給褂召人藏人所人等給襖子雅
樂物師等給疋絹已上注之即入内歌舞人等退出于時卯三
尅同十七年廿三年同之廿年イ李部王記延長七年踏

歌人裝乖纓冠麴塵闕腋袍白下襲着深沓持白杖以着
立加列前官權脫劒振靴高巾子着綿面童子二人在舞
人列（右衛門督兒今阿子 故貞文千葛蒲町） 其裝束如舞人着花加多鬘房及着
線鞋左少將行扶進中間綿臺東頭之唱（供イ）囊持二聲濟弘
稱唯到綿所唱一十百千萬億等數北退詞吹左權中將
伊衡左歌頭右權中將實賴右歌頭出北戸參中宮弘徽
殿次飛香舍（王公座 南縁） 次承香殿（右大臣 女御） 次東宮踏相參御前
左右大臣有障共不參宿所故不踏又云內侍二人相分
被綿且舞且還（女藏人持綿 匣候內侍後） 但彈琴者已下男藏人二人傳
取御簾中於庭中被之奏我家曲退出
（西宮抄云）一踏歌事　私勘　八日被定踏歌之事召內藏寮官人
仰自明日可辨備踏歌調樂所酒肴幷可奉帖綿廿帖細
屯一連綵斫綿十連綿花斫綿二屯糸三兩之由召掃部
寮仰可奉床子鋪設之由召主殿寮仰可奉燎火之由召
左右衛門尉仰可掃中院幷含章堂之由（調樂之事者日月中 院兩近行含章堂）
仍兼仰也召大藏省木工寮官人等仰來十四日可打七
尺幄於中院之由召穀倉院預仰可設同日中院出立饗
之由召修理職內作令作進歌頭以下舞人以上之杖（調樂）
之（同假以 權作之） 又召大臣大將幷女御等家司仰可辨備來十四
日踏歌之饗之由酒飯被綿隨所有別又召御巾子造仰

可奉高巾子二口又召內藏寮仰奉高巾子新（斫イ）冠絹之狀
（以冠二條 爲一條） 又召圖寮信濃布一丈六尺即以一丈令縫囊以
二尺遣於畫所調小舍人二人囊面斫又以內藏寮所進
綿遣掌侍等所令調被綿（以廿帖爲歌頭已下舞人以上 斫以十帖爲列人十二人斫） 又以
細屯綿一連遣圖所令調十四日中院斫肩綿（一斫廿 二帖） 召左
衛門府官人仰可採進杖廿五枚三狀被府進上之後給
作物所令削繕又以高巾子冠等給御冠師等令調設又
（不イ）可令設長櫃件長櫃御前座起之間袋面小舍人二人持
出取入餘膳斫（召出內 藏寮） 綵法歌頭六人支子染袴各一領
歌掌已下舞人已上支子染衾各一條樂人九人各褪子
一領熨斗袋持物師等各疋絹（爲取才典雅樂物師一兩召 預此ノ列ノ同聊注而已） 事
了高巾子返納出所　同日夜若有男踏歌前五六日於
御前被撰定歌頭以下囊持以下人々（行列次第 載在圖中） 其後於中
院習禮二三度（召酒殿酒肴殿肴爲催與之賞兩之 時於八省院ノ含章堂練習なり） 前二日於中
院試樂內藏寮立平張備酒饌掃部寮立床子主殿寮舉炬
火當日大藏省木工寮立幄中院裝束色目可載注深沓
欲腋等可加載又諸司二分以下預此事者着位袍欲腋
袍內藏寮辨備酒饌（式穀倉 院備之） 晚景着麴塵袍白下襲着座
（打熨斗囊持 等着位袍） 內藏寮被綿作物所奉綿花白杖（前四五日召內 藏人綿一屯紫）
（三兩給被 所令造進） 但高巾子冠自所給之藏人當夜歌人候右近陣

入自月華門 出御東孫廂間鋪毯代立御倚子 王卿依召參上障子數圓座敷多數長橋 內藏寮賜王卿酒肴御厨子所供御料歌人於南殿西發調子入自仙華門列立東庭踏歌周旋三度列立御前言吹進出當繡多侍案當南四間立 奏祝詞了囊持云々朱注之 唯進計綿奏絹鴨次奏此殿曲着座 行立間掃部寮當御階南邊相去一許丈立床子爲歌頭以下舞人已上座各相對南北爲上仁壽殿西階南邊立床子爲管絃者座南廊小板敷東邊西面東上敷疊立机爲打熨斗持囊座若諸司二分吹管同着此座同壁下北面西上敷疊爲殿上人侍內藏寮舁四支臺盤三基立舞人已上座又立八支臺盤爲管絃者座臺盤皆辨備肴饌 王卿已下々殿勸盃侍臣所衆行酒 三四巡後吹調子唱竹河曲即起座列立如前歌四唱後舞人已上双舞進羊上東西南階內侍二人分に被綿且舞且還女藏人二人持入綿候內侍後 彈和琴者已下男藏人傳取自御簾中於庭中被之奏我家曲退出自北廊（此イ）戶向所々曉歸參御座如初歌頭以下座給庭中 南西（北イ）對面（三イ）上管絃者座在横切北上西（南町イ）面打熨斗囊持座在南西（在イ）上北面 御書歌人依召參入着座給酒饌此間奏管絃數巡了祿有差天慶二年正月十四日踏歌舞人翹塵持袋左將監伴有時以上左將衞大石富門乘纓着位袍淺沓延喜十五年正月十四日踏歌參所々尙侍幷一親王（上之イ）福所等（宿イ）裏書國史云天平六年二月癸巳朔天皇御朱雀門覽歌恒男女二百參拾（四イ）餘人五位已上有風流者皆交雜其中正四位（一イ）下長田王從四位下栗栖王門了王從五位下野中王等爲（頭イ）以本末唱和爲難波曲倭部曲淺茅原曲廣瀨曲入裳（到イ）判曲之音令都中士女縱觀極觀而向罷賜奉歌恒男女等祿有差

つきにこの院にまゐる 河源氏院號以前此院と號す如何只是在所に付て此院と申なり 朱小書院と云事私云物語作者後代より書之儀歟

みちのほと遠くて 小書私六條京極なれはなり

この御まへはことに 源氏は諸道の堪能なる故なり

ひたりみきのたいわたとの 花凝殿の東の對西の對又左り右の大きわたとのなとを淺敷に構へられたるなり

にしのたいの姬君 玉鬘なり

こなたのひめ君 明石の姬君なり

うへもひと所に 紫上なり

朱雀院后の宮なとめくりけるほとに 私弘徽殿の大后なるへし右の詞に朱雀院に參りて次に此院に參

とあり相違にはあらす物語のあやなりあなたこなためくる事奥入に詳にあり

みづうまやにてことそかせ給ふへきを　河伊行釋

水驛すへきといふことなり水原抄云此事宇佐勅使よりおこる陸地下向の時は毎驛祇候雜事也海路には驛定らさる間無之故に空に付て水驛と云なり驥家雜事とて上古有之見延喜式一說云兼ては支度したる事の相違したるをすえきと云也水路の驛家不中用之儀歟今案踏歌宴に飯驛水驛と云事あり李部王記九條右丞相記以下に見えたり今の心は水驛にて有へきを事をくはへて賞翫せられたる心なり有別儀　花　李部王記延長七年正月踏歌人踏歌西に行東行く又西に行く列立す袋持取綿詞吹了還入る更に入て置二御前一此度水驛也（唯進二湯漬一又用二樣器一）同記云天慶五年正月十四日參康子親王所々陪麗景殿仍被レ綿侍女授之後に設饗水驛なり更詔昭陽舍設盤饌に（南北對座）芻驛なり　同記云天曆四年正月十四日參中宮至て賜饗（用樣器）水驛也又侍二院侍須臾上皇還二御寢殿一踏歌舉て賜レ饗芻驛也　九條右丞相記承平四年正月十一日の踏歌飯驛水驛被定之中宮は飯北宮は水今宮は飯許左大臣宿所は飯右大臣宿所は水右大將宿所は飯云々　今案水うまやとは男踏歌にいひ傳へたる事也踏歌人を饗應するにつきて酒或湯漬なとを用るをは是を水驛と云事そきて簡略する心也又飯驛とも芻驛とも云は引つくろひて饗應する儀なり踏歌の人の所々をめくるを驛路にたとへたりその驛には馬をはせてとおれは水はかりを人ものみ馬にもかふは水驛と云又人は飯を食し馬には芻なとをかへは飯驛芻驛と云か如く酒肴はかりを用を水むまやといひ饗膳を用るをは飯驛と名つけ侍るなり又厩牧令水路をは舟をもてわたる是を水驛といへる今その心にてはなき也　小書承平四年正月十二日九曆云踏歌飯驛水驛被定云々中宮飯北宮水今宮飯許左大臣宿所飯右大臣宿所水右大將宿所飯（素然私此事前にあり）　天慶五年正月十四日李部王記御前事了參太后宮（承香殿）賜饌被綿次參康子內親王（麗景殿）設酒肴如前成明親王同住此殿仍被綿後設饗水驛なり更詔昭陽舍先被綿而就饗饌芻驛也　弄云踏歌の人のうたひて院々なとをめくるを驛路にたとへていへり水驛飯驛と云如く踏歌にも家によりて其作法あり

然るを水驛なるへきにねんころなりしとなり本文は宇佐使より出たり廿二人役者ありつたひありく故に驛に擬するなり爲驛と飯驛とは同物なり人の飯を食ほとなる所にては馬にもわらを飼故なりここは水驛なり人の世俗にすやかともいふは此義歟と云々

あを色のなへはめるにしらかさねの色あひ　河 春季着白襲事老年の公卿なとは冬も白重を着する事ある歟但是は其儀にはあらす春宮袍に白下襲を着するなり踏歌の定れる事なり李部王記にみへたり朱首書私麴塵の袍なり云々但青色あを色と各別也　花 李部王記踏歌の人裝垂纓の冠麴塵闕腋袍白下襲着深沓持白杖西宮抄裝束抄云青色の麴塵袍白き下襲半臂白石帶深履錦花白杖今案此青色をは歌頭以下ことく〳〵く是をきる熨斗袋持此二人位袍を着する由見えたり白杖は舞人まて是を持也雛童は絲鞋をはくといへりあを色麴塵なり六位の袍をいふなり云々私案之黄櫨染これを麴塵と云青色は又青色各別なり推量の分は青色の麴塵と云なるへし青色の必しも麴塵と云には定るましき歟　弄云あを色は麴塵とも云腋あけのうへのきぬなり一注白かさねは下かさねのうら面白うちたる物なり一注　高巾子をきる物六位の中にあり麴塵の袍なりしらかさねは白き下襲なり　裝束抄云黄櫨染は天子着之給或稱麴塵云々西宮云非藏人用無文云々　青色は天子上皇親王諸臣童殿上等着之　或云青色は冬も夏も唐綾浮線綾云々仰輦車宣旨之藏人必着青色 主上着御之日藏人不着之 吏部王記天慶四八廿四源爲明加元服源氏暫在孫庇服麴塵袍結髮或抄云麴塵は青色の事也云々　私云以此記見之麴塵青色無差別歟猶可尋決之保元三正廿二内宴公卿皆着青色闕腋也頭中將 公光 信賴 共青色袍左少將成憲青色闕腋又文地下無文青色云々　私但西宮抄に麴塵袍白下襲と色目分明なり決せり

かさしのわたは　河 踏歌の人以綿造花差冠額也 號高巾子 云々

殿の中將の君 夕霧 内のおほいとのゝきんたち 柏木なさなり此兩人歌頭なり　花 夕霧柏木君を云なり延長七年踏歌に左中將伊衡左の歌頭たり右中將實賴右の歌頭たり例になすらへたり

ほの〳〵と明ゆくに雪やゝちりて　延喜十三年御記云曉頭風雪及戌剋雪晴云々

竹川うたひてかよれるすかた　河　竹河催馬樂呂なり新儀式云次王卿以下之殿勸盃侍臣所雜色以下行酒三四巡之後漸調子唱竹河曲見奥入たけかはのはしのつめなるやはしのつめなるや花そのに二段はなそのにわれをはなてわれをはなてやめさしたくへて　かよれるとは舞の姿たをれたるなり匂兵部卿卷にもとめまひてかよれる袖とあり　うたふ歌なり　かよれる舞なり　舞の手の事なり云々かしてによりの心なるへしかよりかたよりなとの心なり

こゑ〳〵のゑにもかきとゝめかたからんこそ　聲はゑかきかたきとなり　東波十一李伯時陽關圖龍眠獨識（議イ）慇懃所書出陽關意外聲

こちたき　おひたゝしき心なり　多き心なり

さるはかうこしの世はなれたるさま　河　高巾子解冠踏歌式　新儀式　高巾子自所給之正月十四日　花　西宮抄云召御巾子造仰可奉高巾子二口又召内藏寮仰可奉高巾子新冠絹之狀以絹二條上爲一條又以巾子冠給御冠師等令調設事畢高巾子返納於所但高巾子冠自所給之同裝束抄云高巾子之六位以綿裹面云々　今案高巾子冠は巾子をたかくしたる冠白ききぬにて是をはる藏人所より是をくたし給六位の舞人の内是を着す高巾子きる物は綿の面をかうふるよし見えたり常には見馴ぬ姿なるによて世はなれたるとはいへり猶別にしるす事あり　花　別勘にあり狂言かましき物にさするなり狂言烏帽子なとなるへし　わたをむしりかけたる物なり　朱小書別勘別儀なし

ことふきのみたりかはしくおこめきたる　河　右にあり　花　西宮抄云踏歌立御前奏壽詞おこめきたるおかしきとなり

例のわたかつきわたりてまかてぬ　河　右に詳也　踏歌綿事續日本紀云天平二年春正月丙戌朔辛丑天皇御大安殿宴五位以上晩頭移幸皇后宮百官主典已上陪從踏歌且奏且行引入宮裏以賜酒食因令探體短籍書以仁義禮智信五字隨其字而賜物得仁者絶也義者絲也禮者綿也智者布也信者段常布也今綿を賜は猶禮遺心也以上可　花　かつけ綿は内藏寮より是を奉るを内侍藏人等奉る階の上に匣に入て持向へは歌頭以下舞童以上双三に舞すゝみて階をのほりて彼綿を給ふ也琴ひき以下のかつけ綿は六位藏人傑中

より取つたへて庭中にして是をかつくるなり是よりさきに又机に綿を積て貯たるを袋もてすゝみよりて一十百千萬とかそへて袋に入てになひてきぬかもと云歌をうたひてまかつる由見えたり今の世に絕て久しき事なれはたしかなる事はしれる人なし新儀式西宮延喜御記なとに載られたる事は大かたしるし侍る事なり是等は皆內裏の儀式なり物語にいへるは六條院の事なれは祿の綿なと內藏寮より奉る事は有へからす各本所にまうけられたるへし

辨少將にをさ〳〵おとらさめる　紅梅の右大臣なり聲よき人なり夕霧をほめての給ふなり　素然私云こゝに中將の聲は辨少將にをさ〳〵おとらさめると云るは此中將は柏木なり辨少將は紅梅右大臣榊の卷に童にてたかさこうたひし時より聲すくれたりときこゆ此柏木もおとらぬとの給へるなり此次の詞の中將は夕霧なり但此中將も夕霧歟如何　河

秋篠安人左京人父不見　私公卿補任從四位下土師宇返男件安人初賜姓云々　左中辨近衞少將延曆二十四年正月廿七日任參議中辨少將猶如元

いにしへの人は　延喜天曆と時代をはめんとて如此かく也　上古の人は極て賢人もあれともかゝる方は又おくれたる人もあるへし　今時の人はかゝる樣の事すくれて器用なると夕霧をほめ給ふなり

中將なとをは　夕霧なり　素然私此詞前の中將も夕霧をいへるなり

すく〳〵しき大やけ人　天下補佐の道政道有識の方をのみさせてかやうの遊のかたなとをは心かけさせしと思ひしとなり

みつからのあされはみ　源氏の政道學文なとにはうとくかやうの遊の方なとのみてのましかりしを夕霧はさやうにあらせしと思ひしとなり

猶したにははのすきたる　實々しき道はかりと思ひしかと夕霧の下にはかやうの事をもとりあつかひ給ふとのたまふなり

もてしつめすくよかなる　人は實法はかりにても叶はぬ物となり花實を兼てはとなり

いとうつくしとおほしたり　花源氏君の御むすこの中將を愛し給ふ心なり

はんすんらく御くちすさひにの給ひて　河萬春樂

踏歌曲　催馬樂　多氏之外不傳なり　はんすんらく一段くわうえんそおくせんねい二段くゑんせい（んイ）くゑんしよねんくわうれい三段　踏歌の歌に我家此殿萬春樂竹河（納蘇利イ）此四曲を歌ふ皆呂也　我皇延祚億仙齡萬春樂　元正慶序年光麗々云々延曆佳期帝化昌（華イ）々々々百辟陪筵掌幄内（宮イ）天人盛　千般作樂紫宸場々々々久露堪露歸休德々々々　日暖春天仰載陽　願以嘉辰常樂事天人盛　千々億載春明王萬春樂　事吹々々新元掌樂淡海三船睦　花　西宮抄云踏歌同舞人起座唱萬春樂　我皇延祚億仙齡萬春樂　元正慶序年光麗　催馬樂淡海三船撰之多氏栢傳之　私云今の催馬樂の中無之多氏の外不傳之なるへし　花　今案萬春樂すへて八句の詩也それを漢音にうたひて何ことのあはひに萬春樂と唱るなり踏歌の舞人の立さまに云事なるを源氏君御くちすさみにの給ふなりしはらく二句をかきつけ侍り

延喜踏歌圖

歌頭　歌頭
歌頭　歌頭
歌頭　歌頭
東階　歌掌　歌掌

舞人
舞人　舞童は舞人の列にあり
歌掌　挿頭　和琴　踏掌琴ひき以下の十二人をは列人と云なり此内九人は樂人なり
樂人　新綾（イ）　琵琶樂人
々　標　百支々
々　籠　笙々
士　綱　樸斗位袍　紫小書位袍さはたゝつれの例袍を云也五位は五位の袍四位は四位の袍さ其位のを着する義なり
非　違　袋持同

弄云花鳥云々

人々こなたに　御かた〳〵かへりいたりたまひぬと書て又こゝにてなたにつとひ給へるつゐてにとあり相違の樣にきてえたり然ともかやうの只次にと云心なるへし

わたくしのこえんわるへし（かにすへし）とのたまひて　河に踏歌後宴　弓始なり　延喜七年二月廿二日御記曰踏掌所奉仕踏歌後宴云々　御射場中務卿親王左大臣以下更召殿上公卿等預召立書別如例御賭物臣下賜

私西宮云一踏歌後宴二三月間（日イ）宿所等　御出出居警蹕出居依仰召王卿或召非殿上王卿取弓矢　着座王卿皆起卿一人不立可同献物　出神仙明仙門侍臣共取献物入自月華門列立庭射場南西上北面西上卿并献物

問云何物一人唯云踏掌所進御贄名折櫃各稱稱名了上卿

云給膳部貫首唯退召膳部內膳正唯𦀌膳部受一人相
迎數步して授 當右仗座參議已上授以下途膳所 所掌取簡召計王卿以下
取弓矢進月華門列入判事即錄者前行當橘樹下屛幔
西邊立留 右近六位官人率仕雨日不引射手 射手等著座 標御前方錄者退 雜色二人
一人召射手者一人執盃行酒者 出納一人令持中二脚 一脚置裝錢花高幔等一脚置酒糟等並以柳筋小 幔イ
舍人舁兩立校書殿東廂北面上間其後數疊爲王卿以下座其前數圖座爲射手東著座 入候橘樹下幔西邊
叟嫗形相從 內藏寮給王卿侍臣給酒饌出居召右將監唯仰
云懸的唯懸御的矢串的矢內豎 著 立橘樹下還去天皇射注三度間以中的爲限殿上
小舍人取御矢此間暫令否叟嫗形等中鵠持王卿間起返就几丁 注自棚前趁渡著安福東廂
一人取輊一人取簡取柞立棚西邊執簡者自班西幔西 辭イ
邊北上簡賀令却叟嫗形等中鵠持王卿間起進就下取
花鬘獻之踏掌所豫立御花鬘机御賭物臺等於御座南
御溝橋上若無御射不獻或獻之 次將依仰懸替親王
的所掌取簡著的付座一々召親王射了 兩日所掌在射殿北邊射了御前經
射廷南就祿所 替的公卿以下射中否頒行插頭苑髮錢有差 御
厨子所供菓子干物等御酒射了雜色出納合舁中取叟
嫗形退出如參時依仰分前後令射先所掌持簡硯於上
卿書分 夏類賭物隨御気 御覽了一々召之各唯 舍人不候 踏掌所𥫗懸
縑射分 御衣一襲后宮女御匣殿の別當間一所依召獻懸物 的付着侍臣 次に射了暖市
再拜 列立庭中北面西上重行但強負依負 若中科者仰給懸物無中科者令射

一度 有中者可懸之 注 延喜五三廿九踏歌後宴女御女房代王
卿以上射手給花鬘祿本者各女房給女裝束 兵式十
七日大射前廿日者點親王以下五位以上卅人前二日
以間定能射者廿八 若不足者返取六位已下 於省南門射場令調習云
云 花 男踏歌の後宴は二三月の間弓の勝負ある事
也西宮抄に見えたりそれは內裏にての事也私の後
宴は六條院にて御方々つとひ給ふついてに女樂わ
るへき用意ありされともあらましはかりにて其事
ありともみえす女樂はわかなの下にある事なり
弄云禁中にて踏歌の後宴とて二三月に弓の始とい
ふ事ありそれに比して私にて女樂を後宴にすへし
となり此女樂の事こゝにての給へるはかゝなりき
竹川卷に見えたり前の詞に御かた〳〵の人歸り給
ふてとあれと又其內の事をかける也 此義相違 踏歌の後
宴を摸して源のの給ふなり
御てとゝものうるはしきふくろともして 河 管絃の
器皆袋に納本儀なり 調イ 琵琶袋 面錦或赤色浮線綾裏唐綾 箏袋錦二
幅 和琴袋如箏 笙笛袋大底同前なり 花 ことと
いへは十三絃にかきらす和琴琵琶等のひき物はて
との中に入る也ふえといふ時は笙篳篥も笛の中に

こもるなり　箏のふくろうるはしきは錦二はたはりにて裏つけて琴をつゝみて四所くみにてゆひたり箏よりあまりたる程は一尺はかりことを入るは手もとのかたをまつさきに入るといへり琵琶の袋は面錦うらは唐綾なとにて雙六の調度ふくろ、やうにしりのかたをまろにしてふせくみはうすひらと云くみをぬひめはかゝりにをすといへり或はある色（こイ）のふせんれうのおもて花田の唐綾のうらつけたるとうのかたをくひのほとよりなからはかりをきりて其きりめの程に緒をつけてゆふ神妙也といへり和琴の袋は箏に同し或説に和琴の袋には唐錦（綾イ）を用へからす我國より出來たる器なる故といへり笛の袋笙のふくろも有へきなり衣笠内府の雜物抄にみえたり

ひめおかせ給へる　河秘置なり　朱小書秘藏なり

ゆるへるを　注ゆるへる緒を調なり　此女樂の事花鳥に云女樂有へき用意ありされともあらましはかりにて其事ありともみえすと云々然とも竹河卷に（本朱にて入之）薰中將に冷泉院の御物語の次に此女樂の事おもしろかりし由ある上は有しとはみえたり此物語のならひかき出せは則其事ありと心得へきなり　私云玉かつらの並九卷月次につふ〳〵とかきたるよし諸抄にもしるさる然るに二月の事漏脱不審に似たり案之踏歌の後宴必二月三月の間に取行之由西宮等に詳なり然らは此私の後宴二月にありしと心得へき歟二月の事を含ませたる尤見所ある者歟されは此卷の次にやよひの廿日あまりと發端にのせたり可付眼也　追勘竹川の卷に此事をいふに故六條院のたうかのあしたに女房にてあそひせられけるいとおもしろかりきと右のおとゝのかたられしと云々然は踏歌の翌朝十五日則女樂ありとみえたり竹川卷を抄する次記之

岷江入楚第廿四　胡蝶

卅六歳　太政大臣
三月廿餘日春御前船楽事 中宮御方女房乗船なり
其夜於春御前有御遊事
兵部卿宮歌靑柳給事
西對姫君入々通情事
兵部卿宮挿頭藤花給事
中宮季御讀經事
蝶鳥舞童事
春御方供花事
紫上被奉消息於中宮事
四月入々通艶書於西對姫君事
兵部卿螢宮右大將鬚黑大將也　中將君柏木是也
源氏君與玉鬘物語事
源氏君以玉鬘事語紫上給事
源氏君與玉鬘君戯給事

胡蝶　玉鬘並二花 以詞幷歌爲卷名

秋好中宮歌返しなり可卷名「胡蝶にもさそはれなましㇾ心ありて八重山吹をへたてさりせは　素然勘紫上歌乙女にあり「花園のこ蝶をさへや下草に秋まつむしはうとくみるらん　私詞には蝶とはかりあり胡蝶とつゝきたる詞なし　花云初音卷同年事なり但是は三月四月のことをしるせり又竪の並なり玉云玉かつらの並竪のならひなり此卷源氏卅六三月より夏まて　抄云はつねの同し年なりやよひの廿日あまりの頃はひ

つねよりことに　秘新造の翌年なれはなり聞同はかのさとにはまたふりぬにやと　花外の里にもいまたかやうにふりせぬにやとうたかひ思へり外にははやふりぬへきと打定めたる心なり春の光をこめ給へる御前なれは外にはかはるへき心なり　弄ふりぬとはいまたおしなへたらぬ也此所花鳥たくひなく面白く新なるより思ふ心なり　秘はやよそにはあまねくあるへき時分なれとも此所のさまのめつらかなれはいまはよそにはか樣の花鳥はあるましきと思はるゝなり是は三月廿日餘なれははや

春色もおのつからふりぬへきを此御前に猶ふりぬる外の里も如此あるにやと云なり御前のふりぬ心をいへるなり

山の木たち中島のわたり色まさるこけのけしきなと　秘雪の消たる時分に汀なとをも行て見たきと人いともおもふへきとて舟を作らせて此經營あるになん

わつかに心もとなく　聞池のあたりを行て見まほしくゆかしくおもふ心なり

からめいたる舟つくらせ給　龍頭鷁首の事なり又摸唐船歟鷁與艗同　箋一本うらめいたるとあり如浦也となり

いそきさうそかせ給て　花船の装束なりやかたのおほひ幡幔(はたのまんなと)なとなり

おろしはしめさせ　秘舟の事なり

うたのつかさの人めして　河雅樂寮人なり

中宮此ころ　秘秋好なり

かの春まつそのはとはけましきこえ給へりし御かへりも　乙女卷に秋好中宮の御歌「心から春まつ園はわか宿の紅葉を風のつてにたにみよ　或抄云　弄是は乙女卷は源氏卅四歳の時なり此卷卅六歳とあり五葉奉り給明年の事なるへし一年若は相違なりとみゆ如何と云々或一本弄花に此事なし仍加之

このころやとゐほしゐと丶の君　秘このころや紫上の心なり　秘おと丶源氏の心なり

かろらかにはひわたり　弄昔の中宮なとは同し院のうちなとにてもたやすく渡り給はぬ心なるへし同六條院の中に今宮はましませとも輕らかに此方へ渡御あるは無便となり昔い中宮なとはかやうに同院のうちにてもたやすくはわたり給はぬ所心をつけて見へき事となん

わかき女房たちの物めてしぬへきを　花中宮も此頃御里におはしませとかろ〱しき様なれはこなたへと申さる丶に及はすせめての事に女房たちを舟にのせ給ひて南のおと丶の御前の池へこき出し給へるなり　弄中宮の女房たちなり　聞中宮の女房を舟にのせて紫の方をみするなり

みなみの池のこなたにとおしかよはし　秘ひつしさるの町と南のおと丶のあはひよりこき出るなり

ちひさき山をへたての關に　秘中島あるなりこなた

より見れはへたゝるやうなれとも舟にてまはれは
ひとつなるなり
つりとの　箋私實世（貞イ）云いとあつき日東のつり殿にと
あり此釣殿なるへし
こなたのわかき人々　弄紫上のかたの人々也　紫上
方の女房衆こゝより同様にのりて遊ふなり
龍頭鷁首を　まへに唐めいたるといふも此事なり龍
は元より水を心にまかするものなり鷁は風を受て
よく行物なれはなり　おろしはしめさせ給ふ日は
うたつかさの人めして船の樂せらるゝ末に龍頭鷁
首に女ともをのすとみゆ同舟なるへし箋以後の事
にや　私云舟にのりたる事二度なり是はおろしは
しめの日なり此段なか／＼とあり後の度は中宮の
季の御讀經に紫上より供花ありし事なり　箋龍頭
鷁首　鷁五歷切又作鶂（鵃イ）（舌イ）又作鷊（䳗イ）　淮南子龍舟鷁首浮
吹以虛高誘註曰鷁天鳥也畫其象著船首以禦水患
西都賦登龍舟張鳳蓋註曰畫龍於舟也　文選云浮鷁
舟　晉王濬爲益州刺史謀伐呉造戰舟艦畫鷁怪獸於
歸首懼江神　鷁鳥雄鳴上風鵰（鳴イ）下風則孕鷁江東人船
前畫青鷁因名

かちとりさをさすわらはへみなみつらゆひてもろこ
したゝせて　からこのやうに出たゝせたるなり
まことにしらぬ國　舟も唐めき衣裳もからめきたり
又此池の中へこき出たるもはしめなれはしらぬ國
のやうなりとことく／＼しくかけり
なかしまの入江の岩かけ　前へかけて見るへし山の
木たちなかしまのわたり心ゆとなくおもふといふ
によりてみるなり
色をましたる柳　聞柳無氣力條先動池有波文氷盡開
かやうの心なり
ほかにてはさかり過たる櫻も　花上の詞には外の里
にはまたふりぬにやとかけるは此殿の中にありて
外をみぬ人の詞なりこゝの段は外より來たる人の
見て此御前の花はまたさかりなりけりといへるな
り　私花鳥の義是も面白し妙なり　弄外のちりな
んの歌の心下にあり
らうをめくる藤の色も　白氏文集　秦中吟繞廊紫藤
架爽砌紅藥欄攀枝摘櫻桃帶花移牡丹
をしのなみのあやにもんをしへたる　河柳無氣力
條先動　池有波文氷盡開　後「水の面にあや吹亂

る春風や池の氷をけさやさ（はイ）くらん　伊勢「水の面
にあやおりみたる春雨や山のみとりをなへてそむ
らん　おもしろきことはつかひなり浪のあやにお
しの文をおりませたると見ゆる水面なるへし
ものゝゑやうにもかきとめ　此六條院の此時の景趣
おもひやるへし
まことにをのゝえもくたいつへう　河「百敷はをのゝ
えくたす山なれや入にし人のおとつれもせぬ　後又
金　拾「薪こることは昨日につきにしをいさをのゝ
えはこゝにくたさん「故郷はみしこともあらすを
のゝえのくちしところそ戀しかりける　郡國志曰
石室山一名石橋山一名空石山晋中朝時有王質者嘗（固イ）
入山伐木至石室有童子數人彈琴而歌質同杖斧柯而
聽之童子以一物與質狀如棗（核イ）梅含之不復飢遂復小停
亦謂俄（頃イ）項童子語曰汝來已久何速不去質應聲而起柯
已爛盡　箋此説面白し琴の事めつらしき事也　私
云述異記曰信安郡石室中晋樵者王質逢二童子圍碁
與質一物如棗核食之不飢置斧於座而觀童子曰汝斧
柯爛質歸鄉閭无復時人句府
風ふけは浪の花さへ色見えてこやなにたてる山ふき

のさき　弄此歌ともは中宮の御かたの人々南のおと
との人々の歌なり　秘弄に同し作者はさして誰と
もなし　河「波の花おきからさきて散くめり水の
春とは風やなるらん　山ふきのさき一説云近江國
云々或云非名所なり宇治に山吹の瀬あり　若名所
なり　蜻蛉日記云いし山にまゐりてかへるとてい
かゝ崎山吹のさきなといふ所をみやりてあしの中
よりこき行　弄山吹のさき名所也　宇治近江共に
前の歌未見云々　秘近江云々此外には歌にもみえ
す
春の池やゐての川せにかよふらんきしの山吹そこも
にほへり　ゐては山吹の名所なれはこゝをほめてい
へり
かめのうへの山もたつねし舟の中に老せぬ名をは（やイ）こ
こにのこさん　蓬萊山負鼇背也　白氏文集不見蓬萊
不敢歸童男非女舟中老　秘文集の句を引こゝの心
は不老不死の藥は此六條院也何別に覔蓬萊哉と也
箋私勘　蓬萊事　鼇背の事は列子より出たり
列子第五湯問篇曰湯又問物有巨細乎有修短乎有同
異乎夏草曰渤海之東不レ知ニ幾億萬里一有ニ大壑一焉實

惟無底之谷其下無底名曰皈墟八阮九野之水天漢之流莫不注之而無增無減焉其中有五山焉一曰岱輿(興イ)二曰員嶠三曰方壺四曰瀛州五曰蓬萊其山高下周旋三萬里其頂平所九千里山之中間相去七萬里以爲隣居焉其上臺觀皆金玉其上禽獸皆純縞珠玕之樹皆叢生華實皆有滋味食之皆不老不死所居之人皆仙聖之種也一日一夕飛相往來者不可數焉而五山之根無所連着常(帶イ)隨潮波上下往還不得暫峙(時イ)焉仙聖毒之訴之於帝々恐流於西極失群聖之居乃命禺彊使巨鼇十五擧首而載之迭(造イ)爲三番六萬歲一交焉五山始峙而不動云々

春の日のうらゝにさして行舟はさをのしつくも花そちりける　眼前の景氣うつくしき歌なり

行かたもかへらんさとも　桃源なとのことし　聞同

河　續齊諧記曰漢明帝時永平十五年中剡縣有劉晨阮肇二人共入天台山採藥迷失道路糧食之盡望山頭有一挑樹二人共取食之如覺少健下山得澗(滑イ)水飲之並各澡洗行一里又度一山溪見二女顏容妙絕便喚劉阮姓名如有舊交歡悅因問郎等來何晚也因邀過家廳却(片イ)無男兒又有女數仙各至女家云來慶女聟各出樂器歌調劉阮就所邀女宿言語巧美行夫婦之道住十五日求還女曰今來至此皆宿福所招得與仙女交會流俗何可樂乎遂住半年天氣恒如二三日求去切(皈イ)女曰罪根不滅便(使イ)君等◦(始イ矢イ)此共劉阮果還家無相識鄉里惟異三失乃驗七世子孫也　私云此六條院のありさま人間には比量すへき所なけれは只仙宮の如しとほめて云る也

わうじやうといふがく　河　皐臚平調　拍子各十　遊聲一帖序一帖拍子十無舞　遊聲序共斷之破三帖拍子各十　第八第九兩帖合舞九帖也打三度拍子廿可彈十一反　南宮譜曰昔善儛此曲者大臣源當朝臣物部安藝綠經等　秘　平調の樂也　弄　私云此樂に平調を用る事時の調子にあらす不審に似たり平調を根本といへは金の聲秋なり雖然平調は律呂相兼てゆるからすせまからす其中を得たり故に祝言の調子に用之云々されはこゝも時の調子雙調なるへきを先平調を用る味ある也又十二律に配する時平調を正月にとるなり旁心あるにや

心にもあらすつりとのにさしよせられて　秘　日もはやくるゝ程に心にもあらすとなり　聞　殘りおはきさまなり

こゝのしつらひいとことそき　秘こゝのつり殿はさせる荘厳をもせさるなり
御かたのわかき人とも　紫上の人々歟又両方のをいふ歟
はなをこきませたる錦にゐとらす　河古今みわたせは柳櫻をこきませて都そ春のにしきなりける　花錦上舗(敷イ)花といふ語あり錦たるもうつくしかるへきに花をさへこきませたるならんは無上なるへき心なり禪話にもちゐるは別の心なるへし
舞人(マヒウト)　河秘如此聲(シャウ)をさす
おまへの庭　秘堂上にも樂をするなり
ものゝしとも　秘物の師舞人なり
そうてうふきたてゝ　河雙調　秘春のしらへなれはなり　箋私云雙調は呂也木音也巳春の調なれは平調を改めて時の調子を吹たてたるなり
うへにまちたる御こととものゝ　堂上には絃を本にするなりことゝもとは絃の總名なり但管も有へし
あなたふとあそひ給ふ　河安名尊　催馬樂呂也　私云雙調の樂は呂なれは催馬樂も呂を用るなり
みかとのわたり　六條院の門前なり

春のしらへはいとことにまさりけるけちめを人々ゐはしわくらんかし　河古今浪の音のけさからことにきこゆるは春のしらへやあらたまるらん　雙調は春のつかさとる調子なり仍春のしらへといふなり
春雙調　夏黄鐘調　秋平調　冬盤渉調　壹越調中央也　弄春のしらへは雙調とあり律にや　箋私云弄の義誤れり　秘春は一段物のしらへもことなるを聞人はいふに及はす樂をし給ふ人もこそゐはしわくらんとなり
かへりこゑに喜春樂　河反音は律也　喜春樂黄鐘調　河序拍子十二　破拍子十四　或本雙調拍子中曲古樂　花かへりこゑは呂より律にうつるをいふ喜春樂は黄鐘調の樂なり平調にもわたして用るにや尋へし　弄喜春樂も呂也かへり聲の律の呂になるにや呂律次第春のしらへは雙調とあり律にや　箋私云弄の義誤れり喜春樂は黄鐘調也　秘かへり聲は律になるなり喜春樂は黄鐘調律なり　皇麞は平調律呂なり
あをやきゐりかへし　河青柳をかた糸によりてなけや鶯のなけや鶯ぬのふと云かさはおけや梅のはな

かさや　青柳拍子十二　催馬樂律　長生樂序　箋に
あり秘になし　安名尊は呂の歌也青柳は律の歌な
りさて呂の歌安名尊を律の青柳にうつしてうたふ
なり　秘律の歌なり
をりかへしおもしろく〳〵うたひ給あるしのおとゝ　私
いくかへりもうたふ心なりあるしのおとゝ源なり
中宮は物へたてゝねたう　秘樂の聲なとなり　弄春
の御かたをねたうおほしけるなり
いつも春の光をこめ給へる　河衆人熙々（嬉々歟）如登春臺
花藏春閣或藏春臺なといへるなり　箋常住溫和の
ある所を藏春塢といふ也　秘此六條院は溫和なる
所はありなから紫上の御腹に御子もむすめもまし
まさぬをのみあかぬ事に皆思ひてすくよかなる方
計にて此程は宥しを今は玉かつらのあるほとにと
なり
心をつくるよすかのはたなきを　河紫上の子のなき
事なり親行本云えたなかきとあり
にしのたいのひめきみの　秘今は玉かつらのある程
なとなり
ことゝなき御ありさま　秘此玉かづらは無事にてよ

きを皆聞なり　私云いつれもはめたる事にいへり
おほしゝもしる心なひかし給人おほかるへし　花玉
かつらの卷云兵部卿宮なとの此まかきの中このま
しくしたまふ心みたりにしかなすきものとものの心
にうるはしだちてのみ此わたりにみゆるもかゝる
ものゝくさはひのなきほと也とあり　秘花にあり
わか身さはかりと　人數ならぬ人なとは中々えいひ
よらぬなり源のさもゆるし給へき人ならぬは中も
いたさぬなり
えしもうち出ぬ中のおもひに　河「さゝれ石の中の
おもひはありなからうち出ることのかたくもある
かな　秘堅固のつかさ位いやしき人は心にはもと
より思へともうちいてぬ人おほしとなり
ことの心をしらて内のおほひとのゝ中將　花柏木の
中將はわかおとゝいともしらぬなり　秘實は兄弟
なる物をとなり中將は柏木なり
すきぬへかめり　私過ぬへかめり歟すきぬへかめる
歟すき心の事歟可決之
兵部卿宮　秘螢兵部卿宮なり
としころおはしける北のかたも　二條の太政大臣の

むこのよし花宴巻にみえたり弘徽殿太后帥宮北方致仕大臣室四の君也五君朧月夜尚侍六の君也 ・うけはりて今けしきはみ給ふ　兵部卿宮玉かつらを我物とおもふさまなりうけはりてとは理運なる様のこゝろなり

けさもいといたうそらみたれして　花空酔をする心なり　私朱墨のしるし如本

なよひさうとき　河早速なり　花さうときは心つられする心にや　朱墨如本　箋なよひはしなやかなるなり麗なりさうとくは早速なり心いられの義歟　弄はやりかなる心なりけさう心にいそかはしきなり　秘うき／＼とされたる體なりいさむる心なり講談之時如此　箋如此

おとゝもおほしかさまかなふと　河玉鬘巻に玉鬘君の事をかゝる物ありといかて人にしらせて兵部卿なとのこのまかきのうちこのましくし給ふ心みたりにしかなとありし事也　秘此まかきの中にあるもかゝる草はひのなきさき思はれと仰有しにそ

おもふ心侍りすは　兵部卿の詞玉かつらの事をかすめ給ふなり

兵部卿宮

むらさきのゆゑに心をしめたれはふちに身なけん名やはをしけき　河「紫の一もと故にむさしの丶草はみなからあはれとそみる　花兵部卿宮は誠に源氏の御女と心得給　紫の故とはよみ給へり御めいにあたれはゆかりの色をかことにし給ふなりふちに身なけんは藤花を戀の淵によそへたるなり　弄淵になり藤にそへたり　秘藤を淵にとりなす事後撰より出たりそこひもしらぬそこのふかさか云々此物語には多きなり　箋狹衣にも云々義花鳥に詳なり

おなしかさしをとて　河後「我やとゝたのむよしのに君しいらは同しかさしをさしもこそせめ　花「ぬす人のたつたの山にいりにけりおなしかさしの名にやけかれん　今案兵部卿は連枝におはしませはおなしかさしとの給ふなり　秘藤の花のかさしなり　箋おなしかさしとは宮の盃に藤あるへしその盃を源へさし給と云義にや　箋おなしかさしをとてたてまつれ給ふ　花たてまつれ給ふは盃をさし給ふ也　箋私云此詞河海にもあり雖然今所持之青表紙の本此詞なし　私云箋如此朱點以下如本寫之

返源氏ふちに身をなけつへしやとこの春は花のあたりを立さらてみよ　秘此邊を立さらてみよとなりいまた源のゆるし給はぬ詞なり　御説其ふちに身をなくへき心をもちて花のあたりを立さらてみ給へ必その心さしのしるしはあらんそとよみ給ふなり

せちにとゝめ　懇切になり

えたちあかれ給はて　河猶

けさの御あそひ　私云此段まて船おろしそめられたる日の遊の事と見ゆけさといへるは則おろしはしめの翌日なり此日中宮の季御讀經のはしめなり今日紫上より鳥蝶にさうそきなとさせて御讀經の所へ供花し給ふとみゆ

けふは中宮の御ときやうのはしめ也けり　河本朝月令二月云々國史云天平十七年九月平城中宮請僧六百人令讀大般若經濫觴歟 續日本紀第七　季御讀經とは春秋内裏にて大般若を講讀せらるゝなり引茶とて僧に茶をひかるゝなり中宮東宮これに同し　弄六條院にてありと見ゆ有例歟　秘三月へ延引あるへし二八月にある事なり定て有例歟大般若をよむ事なり　箋私に勘年中行事私抄云　季御讀經事四ケ日或三ケ日時僧各定等兼日被行仍官進例又副天台興福寺竪義交名並寺々輪轉文等秋不進之　諸院御讀經事第二日有引茶第三日有御論義秋無之　根元抄云季御讀經二月八月於禁中被請之四ケ日之義也第二日引茶とて僧に茶を賜事あり天平元年四月八日始貞觀の頃ほひ毎季に行はれけるとかや云々　私云勘此義不見いかゝ　江次第五云季御讀經事　春秋二季請百僧於南殿讀大般若經其内定御前僧廿口(内イ)於御殿讀仁王經納言參議各一人着南殿行事自餘皆候御殿貞觀御時每季行之元慶天皇踐祚之後二季修之　上卿奉レ仰着レ陣仰レ辨令ニ陰陽寮ヲ勘ニ申日時一(發願の日時 結願の日時)　又仰レ辨令レ進ニ例文硯一之 史二人進 例文 置ニ上卿前一入ニ年々僧各々僧綱諸寺ノ解文外作喚死去勘文等興福寺延暦寺等ノ竪義者ノ注文近例去年僧名ノ上ニ押紙書今年可ニ請定一之僧名上 硯置ニ參議前一加ニ入續紙並續飯並等板等ヲ之若无者他參議或有下令ニ辨官一書レ之例上　上卿披ニ舊定文一令レ參議書之 大辨書レ

總百人　僧綱　大威儀師 百串 威從(縦イ)各一人 百僧外

三會已講　諸寺　東大寺　興福寺 各八人之中上四人軸請下四人輪轉次第各一人　元興寺　大安寺 已上各一人往年次第各一人　藥師寺　西大寺 已上各一人次第一人

法隆寺一人 東寺 西寺（已上各一人次第一人） 延暦寺（八人如東大寺次第一人）定心寺（院イ）（一人次第一人諸寺次第在百僧內） 梵釋寺 崇福寺 天王寺 常住寺 貞觀寺（眞イ） 嘉祥寺（吉イ） 極樂寺 元慶寺 法琳（殊イ）寺 仁和寺（寺イ） 圓成寺 醍醐寺 廣隆寺 法性寺 雲林院 圓融院（寺イ） 慈德寺 積善寺 圓教寺 法成寺 圓宗寺 法勝寺 尊勝寺（付殿上辨）（已上各一人但隨僧綱員有出入） 定畢副日時勘文人筥奏聞（若藏人） 返給下辨々先結定文（上卿仰宣旨給之） 次給日時（上卿仰可依勘申） 史撤筥文 上卿仰下外記可催諸司堂童子由上辨申請奏（若殿上辨者即付辨令奏）後日史書僧名（審イ）奉所々大臣家（立紙） 行事上卿左右大辨行事辨（以上小藥子又與大夫史）云々 季御讀經 當日上卿以下着陣召外記問諸司具否（香イ）（圖書堂童子南殿出居次將等也） 召辨問僧參否 次奉仰定申御前僧（定申云々或雖無仰）仰辨令進例文硯等（史二人進之如恒辨候記下取見參僧堪候御前之廿口上令入筥僧綱四人以上用大辨若無者他役之僧綱）令參議書之（不候例延喜十十十三應和四）令藏人若殿上辨奏（入筥） 返給下辨尅限至上卿仰行事辨令撞鐘（件鐘季御讀經時懸於承明門外云々今案永安門外歟） 右近衛開永安門大臣於陣差定可候南殿之納言參議等（上可留南殿云々）（納言爲行事者地納言參議等可着南殿若爲昇殿人者最末人可着歟季御讀經時雖地下人參御前云々但臨時者非此限今案雖季御讀經不如候南殿） 次王卿參上御前 左右近次將

着南殿簀子敷座昇自東西階但左將者出自本陣經宜陽殿西砌並軒廊（若無一府次將者有宣旨一度此次將令候或有一人時召渡南殿不令候御前但先例令上御前僧後着南殿天延三年例不候例延喜十七年） 次納言參議各一人着南殿 次僧侶參上（近衛一人着胡床制濫入看督使 出僧綱從僧二人童子一人凡僧各一人威儀師引御前僧入自明義仙花等門從儀師引自餘僧昇自西階大威儀師居凡僧之上諸寺次第在東廂） 座定差定法用（從儀師若南殿無下可三奉仕咒願導師也僧綱已講有識之僧上者令下威從觸中候御前上綱上卿令奏事由遣之或有下非職僧奉仕導師之例） 御導師着 從僧光敷座具置香爐之筥 諸僧總禮三度（依從儀師催） 堂童子着座（自日花門）（圖書爲先入臺例副書着淨衣近例不然西儀者宜陽殿校書殿壇上） 唄二段（置笏打磬王卿） 分花僧左右各十八（散花僧在西）一々居南廂 堂童子昇（自南階入自中央）間行花筥（南復座） 衆僧行道畢（唄不起） 堂童子昇納花筥退 次將仰御願趣（經東著入自南廂先居上卿前仰之道其所分就導師柱邊仰之或必不仰之臨時御讀經時必仰之云々令撤先例延長八二月天慶三年三月季御讀被仰之就中延長貞信公被問御願趣於辨央明中將來仰之云々） 次啓白教化 讀經作法（等）畢導師復座（從僧取座具） 咒願（出自西）二禮（出自東） 着（從僧等敷座具從儀師一人居三禮南凡一人居咒願南）圖書官人各在行香机前 左右行香（圖書官人）（從儀師傳擬王卿着劔之人於本座解之置笏）左王卿（若有不足辨少納言出居將猶不足大夫外記史近代堂童子）右侍從（猶不足中加殿上人又不足出居將加之） 先順三禮（西者咒願）之後行東西第一行僧不行自餘僧 圖書官人取火蛇相隨 王卿復座從儀師跪佛前差御導師等（出自西方着之夕座初夜）

(半夜長朝明日朝座等御導師也)僧等退下王卿退下出居下王卿着陣饗
(近例不着)御讀經事　西宮臨時云御讀經上卿依仰於陣定
僧名勘日時(廿日卅日隨時儀)內藏寮進料物請奏藏人奏下辨史(守中イ)
催夏引茶仰內藏寮殿(四位行之六位引茶甘葛煎一以茶々與土器等之類藏或更給扇御導師有隨喜句云云司)
卅口之時撤母屋御裝束以御物移仁壽殿御佛安
御帳中御帳東西設畳僧座其東南少退敷僧綱座之南
座東西敷凡僧座北御障子下(限御帳下)皆敷僧座南座東端
威儀師候前居磬佛前間別敷御導師座(或東庇衆僧座中御導師候東庇南北敷)
堂童子座近代南座敷出居座前殿上東戶前也　出居
參上王卿參上(法用了以仰御階旨)行香時東庇座僧不立僧綱西南
座僧並承香兼定堂童子押小柱也(西方柱也)五位四人若
有闕用四位可用六位之由在藏人式云々　天慶五三
廿五仁壽殿有卅(卌イ)口御讀經公卿候渡北面出居南殿北
綠西一間延喜廿六十四於南殿三日御讀經藏人行事
季御讀經　應和四七七民部卿藤令申云御讀經日
時召陰陽寮云々　應和二十二十三丁酉日請廿口僧
淸涼殿讀仁王經依天變也　十六日庚子大納言源々
令佐忠奏卷數(數イ)僧名　天慶九六十七臨時御讀經結願
也僧數卅口之外又有殿從藏人仰圖書令撞鐘云々威
從卷數付史々付辨々先覽右大臣次奏覽返給藏納外

記　承平元閏五廿九吏部王記六十口僧於常寧殿修
臨時御讀經三ヶ日廿口分候弘徽殿也　小野記云御
讀經時打鐘事二季上召行事辨仰云臨時顧若藏人仰
諸司令打但雖臨時百口時者如二季(二季時承明門外懸鐘臨時懸射場)　萬
壽四六十東大寺搭上虫示恠之由寺家有解文云々
八月八日宣旨云簡寺中淨行僧五十口始自今月十一
日午尅七ヶ日間於大佛前轉讀仁王經令有冥感云々
其供口料別宛黑米一斗可運送之由下知大和國云々
又始從十一日於淸涼殿七ヶ日令廿口僧轉讀法花經
云々　寬弘二九十九被定淸涼殿臨時大般若御讀經
事依東大寺恠也　長保三年正月九日未刻從大佛身
水溢書如汗云々　東大寺言上者令神祇官勘申云非
帖(惟イ)所(閏イ)國者從卯酉方有言上兵革之事歟陰陽寮申云恠
所之非大事天下有兵賊之事歟同月十七日宣旨簡寺
中有智職能僧口始從今月卅日巳二點六十口開於大
佛前轉讀大般若經令有冥感云々但供料用本供物云
云　延長二二月廿一日天皇召僧正讀如意輪觀音儀
軌　應和元年九月三日造藏人所瀧口人內藏官人拔
書殿人等候二百ヶ寺誦經(爲息災也)造寺使賜所御牒於在
地國々令供給也　天曆三十三記云御讀經結願左衛

門督高明依警固帶弓箭先入解弓箭行香云々　私巳
上箋に被勘入所也
やかてまかで給はてやすみ所とりつゝひの御よそひ
にかへ給ふ人々もおほかり　河緋御装束なり赤色な
り　花諸抄にあやまれり別にしるすへし　弄一勘
河海にいへるあやまりなり前に口傳あり　夜とま
り給へる晝の衣裳にきかへ給ふなり云々　禪閤又
說有と云々　秘束帶なり河を花鳥に破するなり直
衣は宿衣なり束帶は晝のよそひなり夜のよそひを
晝のよそひに改るなり
あなたに參り給ふ　秘中宮の御方へなり
おとゝの御いきほひに　秘源の着座し給ふ故なり
いつくしき御ありさまなり　秘にひかれて此中宮
も一段光華ましますとなり
春のうへの御心さしに佛に花たてまつり給ふ　秘紫
上の方よりも供花をし給ふなり
とりてふにさうそきわけたるわらは八人　秘是則舞
人也如此時の樂には蝶鳥なとは必ある物なり　花
花の陰に舞いつるとあり花瓶もちたるわらはの則
鳥蝶の舞人なるへき歟一勘わらはゝ則鳥蝶の舞人
なり是は今の世にもある事なり
鳥にはしろかねのかめにさくらをさしてふにはこか
ねのかめに山ふき　河法會儀蝶鳥供花定事也迦陵頻
胡蝶菩薩　或先菩薩捧供華二行相分經舞臺上到壇
下授花於僧又定者二人取火舍也　金銀事　天武天
皇御宇自對馬國始獻白銀　聖武天皇御宇自陸奥國
始進黃金九百兩　花かめの色は花の色にしたかひ
てこかねしろかねにとゝのへたるなり此花はつく
りにあらす下の詞にかめの櫻すこしうちゝりま
かふといへる故なり
いかめしう　河可畏　忍面　同
みなみのおまへの山きはより　秘昨日のことくに舟
にのせ給ふなり
かめのさくら　秘つくり花にてはなし實の花なり
わさとひらはりなともうつされす　河平張　花樂屋
の事なり　秘蝶鳥の舞ある程に樂屋あるへきをそ
れをもわさと略せらるゝなり
おまへにあたれるらうを　花南方の中門の廊を左右
の樂屋にしたる也
あくらともをめしたり　河幄等　輕幄絹也　幄布也

花胡床を日本紀にあくらとよめり樂人の座を云 河海抄あやまれり 弄胡床なとにこしかけたるなるへし云々 一説 秘あくら花説可なり

わらはへとも 蝶鳥の八人なり

さやうかうの人々 箋小書唐には天子も香を行し給有云々

との丶中將の君して 夕霧なり

花その丶こてふをさへやした草に秋まつむしはうとくみるらん 河をとめの巻に紫上のもとへ中宮の歌に心から春まつ園はわか宿のとはけましきこえたりし返事也 秘秋好中宮は秋を定て待給ふへきそと也松虫なとは此蝶をはうとくこそみるらめと也

宮かのもみちの御かへり 中宮秋好也

きのふの女房たちも 花中宮の女房たち春のけしきに思ひうつりて中宮に物語きこえたるなり 秘昨日の舟にのりたる女房ともなり

花におれつゝ 花情をおりたるなり 秘情を折なり面白きかきさまなり

うくひすのうら丶かなるねに鳥のかくはなやかに 花鳥は壹越調の樂なり鳥の樂に感して花になく鶯も池の水鳥もさへつるかと思ひわたさるゝ也 河鳥は迦陵頻也壹越調序拍子八破拍子八急拍子八 中弄をりふし鶯のさえつりたる音なり 鳥の樂にあへり 花鳥弄花河に同し

きゝわたされて 鳥の樂も鶯のさえつりもひとつしらへにかよふをいふなり

きうになりはつる 秘鳥の急なり

てふはまして 河蝶宇多院御時被造之由見李部王記 花かめに山吹をさしたれは蝶の童は山吹のませのもとへ舞出るといふへし一は蝶の舞に感して誠の蝶も山ふきのませへまひ入ともみえたり鳥の樂に池の水鳥とものさえつるといふに對して見るへき也 弄舞人云々誠の蝶も離のもとに舞心なるへし鳥の樂に鶯の聲を合せしか如し云々 一禪鳥はたた童の舞たるすかたなるへし用此儀也 秘蝶は日本の樂也花鳥の急に催されて誠の鶯も水鳥もなき又此蝶の樂に誠の蝶も飛出なとゝいふ義あれとも不用之

宮のすけをはしめ 秘中宮亮

わらはへにたぶ 秘蝶鳥の童なり

かねてしもとりあへたる　櫻山ふきの色かねて用意
したる樣なり
しろき一かさね　河白細長歟さきに櫻のほそなかと
あり其つゝきなれはほそなかといふ詞を略したる
なり　弄きぬの事にや　一勘合點きぬなり
こしざし　河腰差疋絹　只の卷絹也　隨身に大將の
給ふなり　花疋絹をこしさしといふは腰にさしは
さむ物なれはなり　秘花鳥にあり
中將君にはふちのほそなかそへて　花女のさうぞく
は裳からきぬなとなりそれに中宮のわかほそなか
をぬきてかつけ給ふなり　弄女の裝束とは裳から
きぬなとなるへし
御かへり　中宮の御返事なり
昨日はねになきぬへくてこそは　河「わかその丶梅の
ほつゑにうくひすの音に鳴ぬへき戀もするかな
秘昨日そなたの御ゆかしかりし事なり弄引歌河にあり
弄わかその丶梅云々
返秋好中宮こてふにもさそはれなまし心ありて八重山吹のへた
てさりせは　河六帖六「なにしおはゝ八重山吹そうか
りけるへたて丶おれる君によそへて　花上の詞に
南の池はこなたにとおしかよはしなさせ給へるを
ちひさき山をへたてのせきにみせたれと丶あり是
によりて中宮の返事に八重山吹をへたてさりせは
とはよみ給へるなり　弄へたてつる心あるにや心
ありてへたてすはと也　秘心ありへたて給はすは
今日はかなき蝶にさそはれてなりとも參たきと也
すくれたる御らうともの　河御らうとは上臈の事秋
好中宮紫上なとの事なり御口つきともは歌の事な
り然るを思ふやうならすといへる如何若卑下のよ
し歟又云彼贈答を時の人々思ふやうならすといひ
ける歟　花中宮も紫上も歌には功の入給へる人々
なれと時としては思ふやうにもいてこぬとなり是
は物語かく人の詞なるへし　箋上臈たちの歌には
さしもなきとなり　秘紫上又中宮なとに過たる當
時臈高き人は誰かあらんそとなれは歌なとも一段
と有へきかと思へはそれほとなきは所詮歌といふ
物は思ふやうにはなき物と草子地に評してかくな
り
まことやかのみもの丶女房　秘昨日舟にのりたる中
宮の御方の女房たちなり

さやうのことくはしけれは　秘むつかしと云詞まて物語作者の詞なり　秘同しく草子地也

にしのたいの　弄紫上へは踏歌の時より玉かつらはいひかはし給ふなり

ふかき御心もちひなりあさくやいかにもあらん　河紫上と玉鬘の君とはいつれにも心さまよき人ときこえたりされは心ふかきあまりにかへりて淺きやうになつかしくもてなして人の心へたつへくもなきといへるにや猶可了簡　花是は玉鬘君の御心もちひをほめたる詞なり心深きはかへりて淺くもいかにもなるわさなりといへる心深きは人にあさむかるゝ樣なる事はなきなり又あさきはなつかしく人の思ひつくかたあるなりらうあるとはらう〳〵しきをいふなり　弄さま〳〵に註したれとも深き心のおくをはしらすと也　秘あさくもいかにもあらんといふまてをよみきりてけしきいとらうありてとさらによむ也此段むつかしき樣なれとも如此讀きりて心得安し玉鬘の心もちひをほめたるなり玉かつらは心ふかきやとも又あさきやとも心の奥はうち見にはきとみえぬ人となり

けしきいとらうありて　秘只うちむきてよくなつかしくらう〳〵しきとなり

いつかたにも　誰もそけても思はぬとなり

きこえたまふ人　秘玉かつらを念する人おほきなり

おほろけにおほしさたむへきにもあらす　聊爾に玉かつらへぬしをは定めしと源のおほすとなり

おやかりはつましき　秘わか物にもしたきとおほすなり　弄密通の心あるなりされはまことのおやにしらせやせましとなり

ちゝおとゝにも　秘内大臣なり

とのゝ中將はすてしけちかく　秘玉かつらの方から心へたて給へとも夕霧は實の兄弟のあひたいをし給ふなり

内のおほいとのゝ君たちは　秘柏木なとなり是は實の兄弟なれは女房もむつひたかり給ふなり

この君に　弄夕霧にたちそひなとし給ふなり

そのかたのあはれにはあらて下に心くるしくなんひめ君はおほしける　河内大臣也玉鬘君實父也の子息けしきはみわたるを玉鬘君そのかたにはあらて誠の兄弟なれはしたに心くるしくおほゆるとなり　花

玉かつらの君は内の大將(おほイ)との丶君達を我おと丶いとしり給へる故にわれをけしきはむをそのかたのあはれにはあらて下に心くるしくおもひ給ひていかにしてわれは同しはらからそとしらせましと思ひ給へる事を云なり　弄玉かつら岩もる中將を艷なるかたならて兄弟の心下にかよふなり　秘花鳥にあり

まことのおや(やイ)に　花内大臣をいふなり　河にはおなしくはかの殿にとあり

さやうにもまうし　秘實の親に逢參らせたきよしをはさすかに源へかくともえ申給はぬなり

ひとへにうちとけ　秘源へひとへにたのみ給ふ事なり

にるとはなけれと猶は丶君の　秘夕良上に似たるとはなけれともなり

これはいとかとめいたる所　河於日本紀才學同廉　これは玉かつらのさまをいふなり

衣かへのいまめかしう　秘四月になるなり　四月天氣和又淸なり

たいの御かたに　秘西對なり　玉かつらなり

おもひしてとおかしう　秘玉かつらのかたへ方々より文あるなりされはこそと源のおほすなり

そ丶のかし

くるしい事におほいたり　玉かつらの心也

いられかましきわひてと　心いられなりいら〳〵しきなり

はやうよりへたつることなり　秘兵部卿宮は源の御連枝といひなから其中にても一段と隔なくむつひ給へとも好色の方にてはつよく源に心へたて給ふをかやうの人出來て御心の色をみるてそおかしけれと源の丶給ふなり　箋兵部卿宮と源とすきたるかたはへたて給ふ事有しとなり

すこしもゆゑあらん　秘兵部卿宮をさしおきては誰になひくへきそ心あらん女は此宮にこそ心をはとむへきとなり

つ丶ましくのみおほえたり　玉かつらの心也

右大將のいとまめやかに　秘髯黒也しつほうなる人なり

戀の山にはくしのたふれ　河孔子仆何事乎不審也論語云長沮桀溺丈人石門荷蕢儀封人楚狂接輿孔子を

あさけりし事なとを云なり或又孔子東荊山の下に遊て三人の小兒ありて土を摧て城を作る孔子曰車道を去へし吾過と思ふに小兒曰吾聞聖人は上天命を知り下人情を覺る從古至今車まさに城を去へし城何車を去むと孔子車を留て地に下き此等を孔子の仆とは云にや髯黑大將しほうなる人の戀のみちに迷ふを孔子の仆に似たると云歟孔子戀の山に迷にはあらさる也抑下惠か弟盜跖と孔子との事をいへり　弄盜跖と孔子との事なとなるへし未詳　弄問孔子の事相當する也一答大略孔子の事歟慥なる證據なし　秘花の說に一同實法なる大將も戀のみちには如此程に孔子ほとの人なりともいかゝとなり俗に龍のけつまづきなといふかことし說々不用引歌「いかはかり戀の山ちのしけゝれはいりと入ぬる人まとふらん　今案孔子のたふれといふ事は昔より世の人ことわさにいひつたへたり孔子ほとの聖人なれとも時としてたうるゝ事のあることゝ髯黑大將のきはめて實法なる人なれとも戀の山に入ては思ひまとふといへるなりくしのたふれたる本文尋るにをよはさるへし　諸抄の說みなあやまれり河海の說は相違なきにや

中にからのはなたの　おほき文ともを見くらへ給ふ事になり

これはいかなれはかくむすほゝれたる　柏木の文なり玉かつらは兄弟なる事を思給へはかたはらいたくてあけても御覽せぬなり是は源氏の詞なり

柏木 おもふとも君はしらしなわきかへり岩もる水に色しみえねは　箋理あらはなり　河柏木右衛門督于時中將の歌なり依之號岩漏中將となり

かきさまいまめかしうそほれたり　聞或御說そほれたるはやさしたちたる樣なり　聞風流めきたるなり　私云朧月夜の手跡の事をあまりそほれてくせそひたるといへり

はかくしう物もきこえ給はす　秘玉かつらの答へ給はぬなり　柏木の文なれはこたへにくゝし給ふなり

右近をめしいてゝかやうにおとつれ　秘女のをしへなり　玉かつらの物もの給はぬ故に右近をめして源のとひ給ふなり

ひんなき事し出なと　さふらふ女なとのみちひきし

こ聊爾なる事の出來る事の給ふなりそれはおもひ
かくるほどにては男のとかにてはなしかやうの所
に女の用意有へき事そとなり
あれにてしりぬ（思ひしにイ） 秘源の我にてなり
あなさけなうらめしうもとそのをり 秘その時は
無心におもふなり 此段源の我身にしりたるさま
をの給ふなりつれなく心おもきは其當意にこそ情
なくうらめしうも思はるれ立かへりおもふにはよ
き事そとなり
もしはめさましかるへききははけやけうなとも 是
は數ならぬ女なとの心におもきはあまりなる事な
とゝ思はるゝ事なり 弄花云さ程（惣本此詞なし）ならぬ人の事の
外に思ひあからんもけやけくこと〳〵しくおほゆ
るなり
わさとふかからて折ふしの花てふにつけたる 花此
一假は男の方より花てふにことつけて文おこせな
とするを女の返しにねたくあひしらひたるに其男
中々心たち思ひしたふ事もあり又そのまゝうち忘
れたるも女のためくるしからぬ事なりなほさりこ
とにいらへしたりなとするはさらてもありぬへけ
れはかろ〳〵しきわさといへるなり 秘自然のな
さけを返事をせぬはそれから思ひくはたてゝ云や
まぬ事も出來る物なりそれをははやく返事をさせ
てはたせとなり 私花鳥の義然へき歟
心たつやうにも 河思ひたゝるゝ樣なる詞なり
物のたよりはかりのなほさりこと 秘なほさりこと
にいふ事を口とく返事をするもわろきなり
くちとく心えたるも 返事とくしたる心なり 私此
段男のさのみ思ひ入ぬなほさりてとにいひよるを
心ねたうあひしらひたるはにくきやうなりそれよ
り結句まけし心のつく事もあるなりされとも女の
貞心あらはなひかすして有へきなりさてまけし心
もなくてそのまゝ男のいひやみたらんは女のため
くるしからぬ事なりされはなほさり事に心とく返
事せんは後の難ありぬへし心ねたくあひしらひた
るかましと批判する詞なり
すへて女の物つゝみせす 是より總別の女の心もち
ひをの給なり
そのつもりあちきなかるへきを 秘「ねきことをさの
みきゝけんやしろてそはてはなけきの森となるら

めの心なり
宮大將　秘 兵部卿宮と髭黒と二人なり
おふな〳〵　秘 ねんころなるなり弄
あまり物の程しらぬやうならんも御ありさまにたか
へり　此二人なとはあまり情なくもてなし給へき事
ならぬとなり人からによれはなり御ありさまにた
かへりとは玉かつらのさほとの分別なとは有まし
きほとの御としにてはおはせぬ心なり
らうをもかそへ　河 功勞也　ねんころに苦勞する人
のありさまをは玉かつらの分別に有へき事となり
君はうちそむきて　玉かつらなり
なてしこのほそなか　花 なてしこはおもて紅梅うら
青なり
この頃の花の色　弄 卯花なるへし色は柳もおなし
花 四月なれは卯花かさねをいふにや
さはいへとゐならひ給ひしなてりこそ　弄 右近は玉
かつらを田舎ひたるやうにみえし源氏はその始は
ゐ中ひたりしと見給ひしなり上樣の故なり　秘 弄
花に同し今は見なほし給ふとなりとあり　私 ゐ中
ひすと思ひしかと今更思ひくらふれはそのはしめ
は田舎ひたるよと思はるゝ義なり
たゝありにおほとかに　玉かつらの始は何となくお
ほとかなるさまのみなりしとなり　只今は人々の
樣體用意を見ならひ給へは一きはめてたく見え給
ふなり
けさうなとも心えてもてつけ　けはひ用意なとなる
へし
いとゝあかぬ所なく　河 あく所なくこそ有へき心得
かたき歟但和歌のならひ如此詞おほし　花 あかぬ
所なくは不足なる所なきなり河海の說おほつかな
し
こと人に見なさんは　秘 よそ物に見なさんはくちを
しきとなり
おやとさこえんにはにけなくわかくおはしますめり
花 玉鬘君は廿三源氏は卅六也十四歲の御子にあた
る故かくいへり右近か心にはおなしくは源氏君の
御めをかけ給へかしと思ひたるなり　秘 源と玉か
つらとは年は十三ちかひなり右近か心には源の物
になしたく思ふなり御親にはちとにけなきと右近
かおもふなり

さらに人の御せうそこ　花是は右近か源氏にてたへ申詞なり　右近か申詞也源のしり給ふより外の文はとりもいれぬとなり

御ふみはかりはとりいれ　あなたよりの文をはとり入るゝなり

御かへりはさらにきこえさせ給ふをり　秘源のそゝのかしてかゝせたてまつられしより外は御かへりのある事もなきとなり

それをたにくるしひてとに　玉かつらの心に源の返事をそゝのかし給ふをさへくるしく思ひ給ふとなり

さて此わかやかにむすほゝれたる　花源氏の詞也さきの柏木中將の文の事これまては源氏もいまたぬしをしり給はぬなり　秘花鳥にあり

いといたうかひたる　つよく風流めきかきたるよとなり

かれはしうねくとゝめて　花是より右近か詞なり書の使かしうねくとゝめていにたるとなり　秘度々返したるを御使かしうねくとゝめていにたると云なり

内のおほいとのゝ中將の　河海には中將の君の御とかとありて註に御文とるといふへきを例の略したるをりとあり

此さふらふ見るこをもとより　河見于或本みしをこそ　秘玉かつらのめしつかふ小女房の名なり　秘花鳥にあり　箋秘花に一同　但朱あり如何

いとらうたき事かな　源の詞也　秘くせ事なり文なととり入ぬやうにはあるましき事となり

公卿といへと　秘人の族姓をいふなり　源の柏木なとはいまた淺官なりともあなつるましき人なり公卿なりとも柏木なとのおほえにはならはぬ人おほかるへしとなり

さる中にもいとしつまりたる心なり　秘實法なり柏木は族攝祿の家なるに殊に人からのすくれたると源のほめ給ふなり

おのつから思ひあはする　柏木の中將是まてはいまた兄弟ともしらぬなり思ひあはする時もこそあれとは始終は聞あはすへき心なり　弄玉かつらのおとゝいと知へきとなりまついひまきらはさんとの給へり　秘實の兄弟なれはなり

けちえんにはあらて　花あらはれたる心なり　箋云朱あり
かうなにやかやと　秘源の玉かつらにの給ふ詞なりおほす所もあらんとやくましきを　河やくましきとは心やましきなり　秘同　秘かやうに申事ともを何とかおほすらんと御心はしらぬ程に心やましきとなり　聞玉かつらの心におほしなけくかたあらんとなり
かのおとゝにしられ　玉かつらの父内大臣の事なり
わかしう何となきほとに　玉かつらのうへを源のの給ふなりいまた世のたゝすまゐをもひろく知たまはてなれ給はぬ親のあたりへいてましらひ給はん事いかゝとなり
こゝらとしへ給へる　秘父おとゝのかたは繼母の御中なれはなり
猶世の人のあめるかたに　花玉かつらの君にむてをとりて後質のおやにはしらせんと源氏君の思ひ給ふなり　弄しかるへき人の室にもなし給てとなり誰にてもあれ然へき人の室になして其後に實の父にしらせ申へきとなり

宮はひとりものし給ふやうなれは　秘さて誰人にかと思ふに兵部卿宮はとなり　私これより玉かつらの君に心かけ給ふ人々のありさまを源のいひきかせたてまつり給ふなり
めしうとゝかにくけなるなのりする人　河召人思人なといふ名なり　小大和物語にのさいし在中將のむすめ君の御いもうとの伊勢守にていますかりけるか御もとにかみのめしうとめきてありける人をこの女のせうとのさいしきみはしのひてすむになんありける蜻蛉日記小野宮のめしうとか此物語常夏の巻にも有　秘召人なり手かけものなり　聞めしうとゝはとのゐなとにめしよする心なり
さやうならん事はにくけなくて　花うはなりたちのおほからんに心得てあひしらふ人はなたらかにもてけちてもありぬへしさはなくてねたましきくせあらん人は我もえこらへすつゐには人にあかれぬへき事なり玉かつらの御心はいまた源氏君もよくもしり給はぬ故なり　秘てかけものなとの所をもなたらかに思ひて有へきと思ひ給はゝ兵部卿宮になり給へとなり

其の御心つかひなんあるへき　此あまたおもひ人のあるをなたらかにさなから本臺としてもちひられんは分別の入へきむつかしき心つかひとなり

大將はとしへたる人のいたうねひ過たるをいとひかてらに　花 髭黑大將の北方は紫上の姉君槇木柱姫君の母なり大將その人にはなれたく思ひて玉かつらをおもひかけたるとなり　弄 玉かつらの事を源氏の心に思ひ定めかね給ふなり大將の事は侍人なと無勿躰よしを思へりてとわりなれはと也大將は本臺をすさめて玉かつらに思ひかけたるもわつらはしとなりこれらの詞にていへる心見るへし本以墨合點　聞 此髭黑北方は紫上と別腹の姉歟　秘 此北方はちと物くるほしき程にそれをいとひかてらに此玉かつらをもとめ給となり此北方といふは紫上の姉なる程に源の心身にてはちとしわつらひ給ふなり

さもあへい事なれは　これも本たいをおきなからはしにくき事なれはかくの給ふなり殊に紫の兄弟の故も有成へし

かうさまの事はおやなとにも　秘 かくのことき事は父なとにもえいはぬ事なりされともをさなき御としにてもあらはやなれはわれを夕皃上とも思ひなすらへてこゝろへたてすのたまへとなり

御心にはわい給はさらん　秘 わいは分給はさるらんとなり

まろをむかしさまになすらへて母君と思ない給へ母には又むすめなとは心やすきかたも有へけれは源氏のわれを夕顔上とおほして心やすくし給へとなり

御心にあらさらん事は　玉かつらの心にまんそくせすおほさん事は心くるしかるへしとなり　此前の詞にあらぬ事なくといへるはたらはぬ所なきなりよくきてえたり

まめやかに　源の實々しくの給ふさまなり

くるしうて　玉かつらのこたへにくゝ思ふなり

何事もおもひしり侍らさりける程よりおやなとはみぬ物に　花 是は玉かつらの返答なり三才の年母君にはなれ侍り父君にはいまたしられ給はすさておやなとは見ぬ物との給へり　秘同

きこえ給ふさまのおいらかなれは　河 おいらかにいな

とはいはて信濃なるきそちの橋をかけたるやなそけにとおほいて　源の心也
さらは世のたとひの後のおやをそれと　河後のおやをおやとせよと云る事なり致仕は前の親六條院は後のおやなり　秘後のおやの事世俗に云なり　私世のたとひとは世俗の諺なといふかことし
おろかならぬ心さしのほと　ちと好色かたをふくませたり
おほすさまの事はまはゆければ　うちあらはれてけさうたちては見え給はぬなり
けしきある事はとき〳〵ませ給へと　是はちと好色をにほはせたる詞なり玉かつらのみしらぬやうにあひしらふなり
すゝろにうちなけかれて　秘かへるへきとし給へと如此の給ふなり　源の心にけさうはあれともさすかに打いてにくきをうちなけきなとするさまなり
源氏ませのうちにねふかくうゑし竹のこのおのかよゝにやおひわかるへき　花玉かつらの君にたとへたりおのかよゝになるとはあらぬかたに成給ふへき事なりさて下の詞におもへはうらめしかへい事そかしとつゝけてかけり　秘花鳥にあり　弄おのか世にやとは人にしたかひて源氏と世々をへたてんとよみ給ふなり
おもへはうらめしかへい　おのかよゝにわかれん事をおもへはうらめしきとなり歌よりつゝけて源の給ふなり
ゐさりいてゝ　弄すこし禮ある心なり　秘玉かつらの禮あるなり
返玉鬘いまさらにいかならん世かわか竹のおひはしめけんねをや尋ねん　河朝忠集「いくよにもあらぬ物故わか竹のおひそはりける春さへそうき　花おひはしめけんとは實の親をいへるなり　弄玉かつらの歌には實のおやの事にとりなしてよめるなり　玉かつらは源氏の實父にとりなして實の根さしなとは中々たつねましきと也　私源の歌はいかなるよすかにか定り給はんとよめるを玉かつらは實父のかたへゆかはてそ生わかれもせめ源を實父とうちたのむよしにとりなせり前の詞にさらは世のたとひの後の親をそれとなと源のの給ひつれはかた〳〵源を實父と思ふよしなり

中々にこそ侍らめ　河まことの親に今さらしられ奉らん身は中々なる事にやわらんとの給ふはもし此やうにも思ひ給はすはねたくと思ふ事も有へし且は又源氏君を次にしたるとや思ひ給はんすらんさてかくはの給ふなり下の詞にいとあはれとおぼしけりとは源氏の御心なり　いつかたにつけてもあはれなる心さまなり

さるは心のうちにはさしもおもはすかし　秘玉鬘の心中にはいかにも實の親にあひたく思ひ給ふなりいかならんをりに源の内のおとゝに申かたり給はんと心もとなく思ひ給ふなり　秘花鳥にあり

此おとゞの心はへ　源氏の懇切におはするを玉かつらの見しり給ふなり

おやときこゆとも　實父といふとも内大臣の事はなれ奉らぬ父なれはこれ程にはあらしやとおほすなり

むかし物語にも　弄住吉物語なとにもおやにもうとく成たる事あり　秘聞同

心としられたてまつらん事はかたかるへうおほす　玉かつらの親にしられたきと我かたからすゝみてはあらし源氏にまかせたてまつらんと思ひしつむるなり

とのはいとらうたしと　秘源氏なり

うへにもかたり　秘紫上なり　玉かつらの心さまをうれしくおほして源の紫上にかたり給ふなり

なつかしき人のありさまにも　玉かつらのさまをほめ給ふ源の詞なり

いにしへのは　秘夕皃上なり

はるけ所なくそ　夕皃の上はあまり物やはらかに大とかにきとしたる所のなかりしなるへし

この君は　玉かつらなり

けちかき心さま　愛敬なとある體なり

うしろめたからす　實々しき所もきとしたるさまなり

ほめ給ふ　秘源の玉かつらをほめ給ふなり

たゝにしもおほすましき御心を　秘紫上の心に源のたゝはあるましきと思ひ給ふなり

物の心えつへくはものし給ふめるをうらなくしもうちとけたのみ　是は紫上の詞なり玉かつらの君源氏をまことの親にてはなきと心え給ふへきかうらな

くうちたのみ給ふらんか心くるしきとなり　花是は源氏の君のたゝもましますましき御心をしりての給ふなり　秘花鳥にあり　聞紫の詞也玉かつらの君物の心えつへくおはすれは心つかひはあらんすれともうらなくうちとけ給ひたらは源の好色か出來らんとなり　秘うらなくしもうちとけとは紫上のおしあてに源に申さるゝなり

なとたのもしけなくやは　源氏の返しなり昔のゆかりに思ひよそへてたのみきこえむになとかたのもしけなかるへきとなり　源の詞なり如此たのもしけなくの給ふ物かなとなり

いてやわれにても又しのひかたう（こィ）　花又紫上の詞なり源氏君の昔われをも御むすめのやうにおはしめしたれと又さもあらさりしを思ひ出らるゝとの給ふなり　秘花鳥にあり

あな心とくふほひて　心ときは心のさとき也利根なる心なり　花紫上を心ときとおほすなり

いと見しらすもあらし　秘玉かつらもさやうの方の心あらは見知給はてはとなり　弄紫上の見しり給ふへしとなり　私物の心えつへき玉かつらなれは源の好色の心なとのあらは見知へしさやうの方なき故にこそかやうにうらなくおやさまにたのめといふ心なり　或玉かつらのわか親めきたる心さしを見しり給ふへけれは好色めくともうけひくましきとなり

わつらはしけれは　紫上のかやうに思ひより給ふをわつらはしくおほすなり

心のうちに人のかうおしはかり　源の心中なり紫の上なとの推量をわつらはしく思ふなり

心にかゝれるまゝにしは〳〵わたり給ひつゝ　玉かつらの方へ細々源のおはするなり

わかゝえてかしは木　緑槐陰合沙堤平の心なり　若楓柏木なと面白き時節なるへし是は源のつねにおはする方とみゆ

和して又きよし　秘樂天か句なり　河四月天氣和且清緑槐陰合沙堤平　白氏文集十九

まつこのひめきみ　秘玉かつらなり　花云まつたいの君のにほひやかに　西の對の姫君なり云々　箋朱あり

てならひなとして　玉かつらのさまなり

なごやかなるけはひの　河婀娜　又柔
ふとむかしおほしいてらるゝにも　秘夕かほの上に似たり　忍ひかたくてはよく似たる故にいよ／＼好色の心の忍ひかたきなり
みそめたてまつりしは　玉かつらを初て見し時はさのみ似たりともおもはさりしとなり　源の詞なり
中將のさらにむかしさまの　河夕霧の中將は葵上に似す玉かつらの君は夕かほの上に似たると源氏のいはれたるなり　秘夕霧は葵上へは一向似たまはぬ程に人といふ物は母には似ぬ物かと思ひたれは今玉かつらはよく夕顔上に似給ひたるよとなり
橘のあるをまさくりて　手にとりもてあそふ心なり
源氏たち花のかほりし袖によそふれはかはれる身ともおもほえぬかな　玉かつらのよく夕顔上に似かよひたるを橘を袖の香にたとるに比するなりさてもとの源の身のやうに思はるゝよしなるへし　聞夕顔の名殘はさなから此玉かつらにとゝまりたれはかはれる身共おそはれぬなり　或弄花さ月まつ花橘の云々　此本歌の心あり昔の人の袖の香と云心可然歟と私にあり　弄花愚本に此義なし

よとともの心にかけて　これより源氏の詞夕顔上の事をわすれす忍ひし事なり
かくてみたてまつるは　そのまゝなる玉かつらなればなり
女かやうにもならひ給はさりつるを　玉の心なり是ほとまてちかやかなる事も始となり
おほとかなるさま
返玉かつら袖の香をよそふるからにたち花の身さへはかなくなりもこそすれ　「たち花はみさへ花さへその葉さへ枝に霜おけとましてときは木　古今「さ月まつ花橘のかをかけはむかしの人の袖の香そする　和泉式部日記云彈正のみこかくれ侍て後帥のみこ橘をつかはしていかゝ見るといひて侍りけれは　「かほるかによそふるよりは時鳥きかはやおなし聲やわたると　花玉かつらの君の我もはかなく母のやうに見え奉らんとの給ふは源氏君のたゝならぬ御けしきのみえ給ふ故あちきなく思ひ給ふ也　秘我をは夕顔上に比し給ふほとに我も源故にはかなくなるへきかとなり
中々なる物おもひそふ　源の心中なり

けふはすこしおもふ事きこえしらせ給ひける　忍ひかたくてもらし給ふなるへし
わなゝかるゝけしきもしるけれと　玉かつらの心かう
くイ
らわなゝくけしきをしりなから源のみしらぬ様にもてなし給ふなり
なにゝかかく　秘　源の詞なり
いとよくもてかくして人にとかめらるへくもあらぬ　聞　たゝ人の見とかめぬやうに心をかはして忍ひてあひおもひ給へといひしらせ給ふなり
あさくは思ひきこえさせぬ心さしに又あまたそふへけれは　花　源氏の君の此程とてもあさくは思ひたてまつらぬに猶おひ思ひ給ふならは又一しほ心さしのそふへきとなり
このおとつれきこゆる人々には　秘　宮大将なと也　聞　宮大将なとに源をおとし給ふへきかとうらみ給ふなり
いとかうふかき心ある人は世にありかたかるへきなり　花　玉かつらの君の心ふかき事をの給ふなり　秘　源のみつからの給ふなり
うしろめたくこそ　弄　源氏の心さしのふかきやうなるはあらしとなり　源ほとに玉かつらを思ひかしつくへき人はおほえぬ物をと源の自称なり　私弄秘の兩義尤然へし然らは前のいとかうふかき心あるそいふを花鳥に玉かつらの心を深き事をの給ふといふはあやまれり源のみつからの給ふ事なりその故は源のかくいとひ給ふは宮大将なとにおほしおとしたるにや宮大将なとも源の心さしの懇なる様にはあらしとおもふ故玉かつらをいつれにてもゆるさんはうしろめたしとおもふと源のの給ふなりおやめきなから好色の心のましれるをさかしらなる御おや心とは草子地に評してかけりさかしらはかしこたてなとのやうなる心又は進ミなとかけり是は無用のさし出ましき事にきしいてゝいらうやうの心なりこゝにいへるさかしら心は進心とかけるにかなへる歟如何
雨はやみて風の竹になるほと　河　風生竹夜窓間臥月照松時臺上行　秘　和且淸末句也
人にはこまやかなる御物かたり　玉かつらのかたの人々遠くさふらふなり
なつかしいほとの御そとものけはひ　花　源氏君の女

君のき給へる御そともをとかくひきすへらかして
女君によりふし給なり　秘罔　秘初着單衣與體輕
此句に文集同詩の中の句なり　箋文集十九七言十二句
贈駕部具郎中七兄時早夏朝歸閑齋獨所偶題此行
四月天氣和且淸　綠槐陰合沙堤平　獨騎善馬御鐙
穩　初着單衣與體輕　退朝下直少從偶侶イ　歸舍閉門
無送迎　風生竹夜窓間臥　月照松時臺上行　春酒
吟掌三數盞　曉琴閑弄十餘聲　幽懷靜境何人別
唯有南宮著䖏兒
いとこゝろうく　弄玉かつらの君の心なり　秘花鳥
にあり
まてとのおやの御あたりならましかはおろかにはみ
はなち給とも　弄上の詞にまてとのおやなりともと
源氏をありかたく思ひ給ひし心又たちかへりうた
てく思ひ給ふなり　秘前にはかうさまの事はおや
などにもさはやかにわか思ふさまとて語いてかた
きといひて源をありかたく思ひ給ひしを今更こゝ
にては又たちかへりうたてく思ひ給ふなりへたて
ある所とへたてなき所とをかきわけたる妙なり
私云此義前の詞を引たかへたり弄の義と同し事と

晃ゆ　闕實父内大臣はおろそかにし給ふ事はあり
ともかうさまのもの思ひはあらしと玉かつらの心
うく思ひ給ふなり
かうおほすてそ　秘源の詞なり
しらぬ人たに世のことわりにて　花女のならひ心さ
しあれはしらぬ人にもなひくはならひなるを此年
月むつましく思ふ心さしをゆるし給はぬと源氏君
の恨み給ふなり
秘花鳥にあり
なにのうとましかるへき　花源氏の詞なり
しのふるにあまるほとを　好色かたの心に忍ひあま
るといふ歟又夕顔上のむかしの事を忍ふにあまる
といふ歟如何
たゝむかしの心ちして　ちかやかなるさまのよく夕
顔上に似たるなり
ゆくりかにあはつけき　河不意日本紀　思ひやりなきや
うなる心なり　卒爾同
おもひうとみ給て　源のいて給ふとての詞なり　黄
ム此行上に本有付紙
よその人はかうほれ〱しうは

かきりなくそてひしらぬ　河云「そてひなき淵やはさ
わく山川のあさき瀬にこそあた波はたて　後「か
きりなき名におふふちの花なれはそてひもしらぬ
色のふかさか　同「玉藻かるあまには有ねとわた
つみのそこひもしらすいる心かな　そこもしらぬ
なりひはやすめ字なり玉かつらの巻に人のかたち
はおくれたるも猶そこひある物をとなり　聞引歌
後かきりなき名におふ云々ふかき心なり
むかし戀しきなくさめ　夕顔上の事を忘れぬとなり
われにもあらぬさまして　玉かつらの體なり
いとさはかりみたてまつらぬ御心はへを　又源のの
給ふ詞なり
ゆめけしきなくをとて出給ひぬ　河努なりゆめ〳〵
なり　花ゆめ〳〵人にあやしまれ給ふけしきなみ
せ給ひその心なり　秘花鳥にあり
世中をしり給はぬ中にもすこしうちよなれたる人の
ありさまを　弄大かたの世人のならひをも玉かつら
いまたしり給はぬなり　秘大かたの世のならひ男
なとになれ給ひぬへき事はかけてもしり給はぬと
なり　私玉かつらはもとより世心なき人なりその
うへよのつねの男女のならひを人の上にても見し
り給はぬといふなり
これよりけちかきさまにもおほしよらす　實事なと
の此上にある事ともしり給はす至極うちとけたる
事と玉かつらはおもひ給ふとなり
御心なやましけに　花玉かつらの御心ちれいならぬ
をおとゝのさわき給ふなり　私是はたゝさふらふ
人々のもてさわくと見えたり
とのゝみけしきの　源の懇なる事を皆々女房たちの
いふなり
兵部なとも　玉かつらのめのとてなり　私前にあて
きといへるなり
身そ心うかりける　私心うきなり　いとゝおもはす
る御心といふより玉かつらの心なり
又のあした御ふみとくあり　源より文たてまつり給
ふなり
しろきかみの　源よりの文のさまなり色紙なとは艶
書めくほとにたゝ白き紙にかき給へるをうはへは
すくよかにといへり
たくひなかりし　秘是より文の詞なり

源氏
うちとけてねもみぬ物をわか草のことありかほにむすほゝるらん　河伊勢物語「うらわかみねよけに見ゆるわか草を人のむすはんことをしそおもふ　花ねも見ぬは草根を夜るぬる方によそへたり在中將か妹によみてやれる歌を本歌にせりてとありかほにむすほゝるゝは玉かつらの君のなやみ給ふ事なり第一句に打とけてといひてむすほゝるゝおもしろく侍るなり　秘實儀もなきとの心なり

をさなくてこそ物し給ひけれ　おやかりたる御詞とはこれをいふなり

たゝうけたまはりぬ　秘是より玉かつらの文の詞なり只の字は上につく字なり　聞人の不審せんと一筆返事し給ふなり

かやうのけしきは　源のおほす心なり

うらみ所ある心ちし給ふ　聞ちとかとめいたる所のそひたる故に又うらみ所ある心地すとなり

うたてある御心かな　草子地なり源の玉かつらにさま／＼に心をつけ給ふをいへり

色にいて給ひてのちはおほたの松のとおもはせたる事なく　河六帖忍イ「戀わひぬ大田の松の大かたは色にいてやはんといはまし　花大田の松の歌は六帖にも又朝綱集にも重之集にも有彼歌の心は色にや出しとあらまし事に云るを物語には早色に出給へれは大田の松のと思はせたる事なきと云り面白く書たる物かな　秘花鳥の說尤面白云々

いとゝ所せき心ちして　玉かつら心くるしく思ふとなり

ことの心しれる人はすくなうてうときもしたしきもむけのおやさまに　秘玉かつらの心なりすき人もすくなきなりさていつれも源氏を實父とおもひなしてあるとなり　秘實の父と人はおもふとなり

かうやうのけしきの　源の玉かつらに心かけ給ふ事なり

ちゝおとゝなとのたつねしり　實父內大臣のきゝ給ひてからは源と通し給ひてもくるしからぬ事なるか源氏のまめ／＼しうもおほさす又心は源になひきたらんは實父內大臣もかる／＼しくおほさんとさま／＼に心くるしう思ふなり實父にしられさらん間は源を實父と人の思ふにさやうの事ありてはうき名なるへしとなり

よろつにやすげなう　秘玉かつらの色々に思ひみたれ給ふなり

宮大將なとは　文なとをもとり入させたまさかの御返事なとを源のそゝのかし給ふ故なり

この岩もる中將もおとゝの御ゆるし　秘前にかのぬしたちをはいさゝかはしたなめんなと源の仰られしを此中將なとは傳聞てなり

まことのすぢをは　實は玉かつらと兄弟なりされと先源の御子と人にしらせんやうにさやうの所をいひあらはさす此人々におひしらひておく也

かたよりに　秘一方むきになり　私此詞なし如何箋云諸抄に見えぬ詞ののれるあり仍別書之あかぬ所なくの次第有　河海中將の君の御とかは　此文とかと云へきを略したるなりむかし物かたりと云後にあり　弄うしろめたくのみこそ　源の心さしふかき樣なるはあらしとなり　河もしはめさましかるへき　さほとならぬ人のことの外思ひあるらんもけやけくこと〳〵しくおほゆるとなり　黄ムの此通りに又本に付紙あり

岷江入楚第廿五　螢

卅六歲　太政大臣

玉鬘君思憤給事

兵部卿宮參西對給事

源氏君聚螢放直衣袖給事

五月五日出馬場殿給事 騎射並觀馬事

源氏君宿花散里方御物語事

永雨中御方々翫繪物語等事

源氏與玉鬘御物語事

天台法文事

紫上爲明石姫君翫物語繪事

夕霧中將常參明石姫君御方給事

右中將依念玉鬘君與夕霧中將御中好事

內大臣殿不忘撫子給又見夢令占事

螢　花以詞並歌爲卷名秘同

詞はたるをうすきかたにての夕つかたおほくふくみて云々

河歌「聲はせて身をのみてかす螢こそいふよりまさる思ひなるらめ

花源氏卅六歳の五月の事なり又竪の並也秘同

弄源氏卅六才の夏の事也

いまはかく〳〵しき　源氏の今は攝政し給へるなりさておも〳〵しきとはいふなりされとも皆内大臣に毎事ゆつり給へと天下をは掌に入てましますなり

のとやかにおほししつめたる　おも〳〵しく成給へる故に源のかろ〳〵しき御ふるまひなともなき心なるへし

たのみきこえさせ給へる人々　源のつとへおき給ふ人々も皆心しつまる也

みなおもふさまに　秘六條院のありさまなり源の御光に皆々おもふまゝなると也前の卷にもみえたりたゝよはしからて　物のたゝよふは定らぬ心なりたたよはしからぬはおちつきたる心なり

たいの姫君こそいとほしう思ひのほかなり　花是は源氏のなまむつかしき事をの給ふ事は小蝶の卷のおくにある事也　秘對の姫君は玉かつらなりよろつに源をこそたのみ給ふうちに心をかけ給ふ事の心やましきとなり

かのけんごうかりし　河肥後國大夫監事　秘源を大夫監なとのすちに思ふへきにてはなけれとも外聞然へからすと也

かゝるすちにかけても人の　秘哲子のきこえありつるに外聞不可然と也云々

さまてとにうとましと　玉かつらの心なり　監はゐ中のあら〳〵しきえひすにてけはひうとましく思ひしなり此源氏はさやうにはあらて人のおもはん所のうとましきをさまてとなるといへり

何事をもおほししり　秘玉かつらの年もたけたる故におほししるとなり

はゝ君のおはせす　秘夕良上也

又とりかへし　かやうの事故に夕顔上おはせはと別して思ふと也

おとゝもうちいてそめ給ては　秘大田の松のなと前

の巻にもみえたり
けしきはみ給ふことにむねつふれつゝ　けしきはみ
給ふことに九禪抄　聞けしきはみ給ふことには事な
り秘に毎かとあり如何　私箋には清濁の聲をさす
朱引あり兩義いつれも可然也
けさやかにはしたなく　秘玉かつらの本性をよくか
きあらはす也　花人からも思ひ給ふ故なり
人さまのわらゝかに　河和也　花にこやかなる心
也　秘にこやかに人あひよき也　箋に如此朱引あ
り
いたくまめたちこゝろし給へと　箋如此朱引あり
聞實々しくすれとも猶愛敬のある也
兵部卿宮なとは　螢宮也
御らうのほとはいくはくならぬに　河積勞の心也
花奉公の勞なといふかことし　箋云朱あり　秘ら
う勞なりいふ心は兵部卿宮は年勞をしてさのみ年
月をへていかにかなとし給ふにてはなけれともな
り　同年月をへ給ふ事はなけれとゝ也
さみたれになりぬるうれへを　花盛明親王集九條右
大臣の御四君にきこえ給ける「わひつゝもたのむ
月日はある物を五月雨にさへ成にけるかな　信明
集「神代よりいむといふなる五月雨のこなたに人
をみるよしも哉　うつほまつりのつかひなれはい
かゝはすへき五月雨にもなりにけるを左のおとゝ
かはらけとり給ていてやさけ給ふても久しく成ぬ
とて郭公なく音さひしく成ぬるは五月雨なかくい
くよふれはそ　東宮よりあて宮に「ためしにも人
のひくへき郭公この五月雨をいますもあらなむ
今案さ月はいむ月なれはよろつをはゝかるを五月
雨になるうれへとはいふ也　弄五月には人々あは
ぬ愁をいへり古歌にあり花云々　秘五月には人々
あはぬ愁をいへり五月をいむ事花鳥にもみえたり
箋私勘異苑日俗以五月爲惡月故忌云々　五月は
嫁娶をいむと云なれは五月にならぬこなたに逢た
きと也箋如是
すてしけちかき　秘兵部卿宮よりの文なり
殿御らんして　源なり　源の兵部卿宮なとへはとき
とき御返事なとしたまへとあれとこゝちあしとて
なむ人々のイ
玉かつらの御かへりなき也
みたり心ち　河帝範云足寒時心亂

人々もことにやんてとなく　さふらふ人々也　秘玉かつらの御身になるへき人もなき也

は丶君の御をちなりける宰相はかりの人のむすめ

花夕顔上のをちは父三位中將といひしか弟也官は宰相ほとの人也そのむすめを今宰相君といへり夕顔上にはいとこ成へし　秘夕顔上は三位中將の女なり其兄弟宰相なる人のむすめ成へし玉かつらのいとこ也私玉かつらのいとこにはあらす夕顔上のいとこ也

三位中將——夕顔上——玉鬘尚侍
　|—宰相　宰相君玉かつらの君の女房六條院にすみ給ひし比人々の返事かきし人竹川にかほるに歌よみかけしも此人にや

めしいてゝと葉なとの給ひてかゝせ給ふ　只今兵部卿宮への御かへりかゝせんとめし出るなり詞をは源のの給ひてかゝせ給ふなり

物などの給ふさまを　弄源氏螢兵部卿宮の物の給はんさまなとをゆかしとなり　秘源と兵部卿宮と何事にも隔なけれと好色の道には心へたて給へるをこの物の給ふさまはゆかしきと也

うたてあるものなけかしさの後は　玉かつらの心

秘源の心かけ給へるをのかれむの心にて兵部卿宮にもさたまりぬへくおはすや

何かとおもふにはあらすかく心うき御けしきみぬ

玉かつらの心のうちをかきあらはしたるさまなり源氏の御あたりをはなれたき故にと也なにかと思ふ事にはあらすとはよすか定る事を何かと思ふ故にはあらすと也

殿はあいなくおのれ心けさうして　花此一段の詞いさゝかみにくきなり源氏君はおのれ心けさうし給ひ兵部卿宮を玉かつらの君の下待給ふを知給はてかしこへ出給はんとおはしたりよろしき御かへりのあるといふより兵部卿宮の玉かつらの君の返事のまさるなるをうれしく思ひ給ひて忍びやかにおはしたるといふ心なり　秘兵部卿宮のけしきをみんとしたまち給ふなり　聞源は兵部卿をよひ奉りて此ついてにわか心けさうし給ふとなり末にその心みえたり　私おのれ心けさうしてとは兵部卿宮の御けさうの樣をみんさて源のこゝに出られおはするをは宮は知給はて玉鬘の御心とよろしき返事ありつると思て嬉しくいそき忍ひおはしましたると也

いとしのひやかにおはしたり　兵部卿宮也
つまとのまに御しとね　河茵　花これは兵部卿宮の
御座をいふ也
そらたきもの心にくき程に　秘源のとりもちてかう
し給ふ也
おやにはあらてむつかしき　花源氏君の女君をかい
しやくし給をいふなり
さかしら人　とやかくやとあつかふ心なり
うもれたりと　秘源のかくの給ふ也　宰相君のあま
りいりめなると源のの給ふなり
いとゝしき御にほひのたちそひ　弄源の匂ひ也
かねておほしゝよりもおかしき　兵部卿宮のよそ
よそにておほしゝより玉鬘のやうたいのすくれた
ると心のとまるなり
うちいてゝおもふ心の　花是は宮の宰相君にの給ふ
をいへり　秘宮よく詞をかはし給ふ也
ひたふるにすき／＼しくはあらて　好色かたはかり
ならす實々しくもさま／＼に躰よくの給ふなり
おとゝいとおかしと
宰相君の御せうそこ　秘宮の御せうそこをつたへ申
なり
ゐさり入たるにつけて　或宰相君につゝきて御そは
によりたまふてとかくをしへきこえ給ふ也　源の
宣ふ事をも宰相君につけての給ふといふなり　聞
此分に同し
いとあまりあつかはしき　或わつらはしきといふ心
に又あつき比なれはかねての詞也　秘是より源の
教訓のことはなり
よろつの事さまにしたかひて　秘それ／＼のしなほ
と／＼にしたかひてあひしらひ給ふへきなり此宮
なとをはさしはなち給ふへき事にてはなきと也
御聲こそをしみ給ふとも　物をこそのたまひかはさ
すとも也
いとわりなうて　秘玉かつらの心也
ことつけてもはひいり　秘源の事也
すへりいてゝ　玉かつらの出給はすは是をついてに
源氏のはひも入給ひぬへけれはむつかしくて木丁
のもとまて出給ふなり
なにくれとこととなかき御いらへ　花ことなかき御か
へりとは玉鬘の君の宮の御返事を聞えわつらひ給

ふをいへりより給てといへるは源氏君の奥の方の木丁のもとにより給てかたひらをうちあけ給ふといへる也　秘宮の御返事に思ひわつらひ給ふ也

ほたるをうすきかたにての夕つかた　河几帳の帷は三重なる物なりおもては綾裏は綀文なり中信ありうすきかたとは裏のかた也　素舜記云うすき扇云云不審　伊勢物語に此くるまを女車とみてよりきてとかくなまめくあひたにかのいたる螢をとりて女車にいれたりけるを此螢のともす火にてや車なりける人みゆらん以螢火女を見る此等の例なり

花うつほ上内侍のうへいかてこのないしのかみ御らんせんとおほすに御とふらひをあらはにともせはものしいかにせましとおもほしおはしますに螢おはします御前わたりに三四つれてとひありくうへこりてみなとらへて御袖につゝみて御覧するにあまれか光に物はみえぬへかめりとおほしてたちはしたわらんはよかりぬへけれはいかてわらはへやさふらふ螢すこしもとめよやと仰らる殿上わらはへ夜ふけぬれはさふらはぬうちにもなかたゝの朝臣はうけ給はりて水のほとりの草のあたりにありきておほくの螢をとらへてうふくの袖につゝみてもてまゐりてくらき所にたちて此螢をつゝみなからうそふく時にうへいとゝく御覧しつゝけてなほしの御袖にうつしとりてつゝみかくしてもてまゐり給て内侍のかみのさふらひ給木丁のかたひらをうちかけ給て物なとの給ふに此内侍のかみのほと近きに此螢をさしよせてつゝみなからうそふき給へはさるうすものゝ御なほしにそこらつゝまれたれは殘る所なくみゆ　今案うつほ物語の螢をみかとの御うす物の御なほしの袖につゝみてさしよせ給ふは内侍のかみのなり姿をみ給はんとてのはかり事なりたとへは車胤白紗の嚢に螢をもちて文を照してよみける心はへに同しかるへし又物語に源氏の君の螢をおほくつゝみかくし給ふも玉かつらの君を兵部卿宮にみせたてまつりて彌御心をまとはし給はんとし給へるなりさて螢をうすきかたに此夕つかたおほくつゝみおけるといへるを河海には几帳の帷は三重なる物なり表は綾裏は綀文紗中信ありうすきかたとは裏のかたなりとしるされたり几帳の帷夏は表裏ともにうす物なり但木丁の帷に

夕つかたより螢をつゝみおかん事はたやすかるへき事にあらすうすきかたといふはたゝ直衣の袖のうすきかたと云心にや然らはうつほの物語とその心同しくして下の詞にはともなくまきらはしてかくしつれはほの〳〵ひかるといふにや源氏の袖につゝみ給へるを引かくし給へると心得侍らんにいたくちかひ侍らぬにや如何　秘花鳥の說可然　弄禪閤御說木丁にはつゝみておきかたし只直衣の袖につゝみてさとはなち給なるへし此義可然云々うつほの物語にも直衣の袖につゝみて出したる事あり但如何夕つかたより用意し給ふ成へし

けちえんに　掲焉なりあらはなり

扇をさしかくし給へるかたはしめ　秘玉かつら也

おとろ〳〵しき光　秘源のかく思ひ給ふなり

宮ものうき　兵部卿宮也

わかむすめと　秘この宮は源のむすめと聞給によりてかく心とゝめての給ふなるへし

いとかくしもくしたらんは　秘源の心に具したると思ひ給ふなり　源の心なり兵部卿宮も源の御女といふにて心とゝめ給ふなりこれはとまてさまかたちなとたらひたらんとはおはさしと覺してかやうにしありき給ふ心也彌心をとゝめさせんと也

まことのわか姫君　花是は作者の詞なりわか姫君は明石姫君也　秘草子地なり實子の明石姫君なとならはかくはし給ましき物をとなり

ことかたよりやをらすへりいてゝ　花是は云々源氏君の我御方へ歸り給ふ事を云り　秘源の歸り給也

宮は人のおはするほと　秘人とは玉かつら也人のおはするとは源の簾中にゐ給ふと宮の推量し給ふとなり云々　私云たゝ玉かつらとみて然へき歟

御心ときめき　兵部卿の宮の心也　玉かつらのけはひちかきにはときめきする也

えならぬうすものゝかたひら　花木丁の帷子夏はうすものなり

ひとまはかり　一間はかりなり

ほの〳〵光　河會明　箋私云此詞今の本に無之ほのかなる光とある詞の事歟

ほのかなる光　爰に一行禮紙（札イ）有可勘　秘これさへ心をとむるつまとなる也

えんなる事のつまにもかくしつへく　或艶なること
のはしめにもすへきなり後の事を今いふなり
そひやかにふし給へる　箋大かたなる心なり
あのこと　河如案也　秘案のことくなり源の推量に
かなひたるなり
螢兵部卿宮 なく聲もきこえぬむしのおもひたに人のけつにはき
ゆる物かは　花なく聲もきこえぬむしは螢なりその
思たにけつにけたれぬなりいはんや人のおもひは
音をさへたつるなれは彌けたるましきとよめる也
秘鳴こともなき蟲の思さへ消かたきを人の思はい
かゝと也
思ひしり給ひぬや
かやうの御かへしを　秘久しく思案するもいかゝと
也
ときはかりをそ　秘適時によみ給へる也
返玉鬘 聲はせて身をのみこかす螢こそいふよりまさる思ひ
なるらめ　花人はおもふことを言にいたせは心の中
もかつ／＼くつろく習也聲もせぬ虫の思ひてこそ猶
まさり侍れと女君の返事にし給へるは螢の思ひに
くらふれは宮のは物ならぬといふ心也　秘言に出
ていへはなくさむ事もあるへし　されは音をなか
ぬ螢の思ひてこそ深くみえ侍れ只今宮はかく歌なと
よみ給ては思ひなくさめ給ふ方の有へきとおさへ
たるなり 此義以朱被注之今墨書之者也黄文以朱注之 箋私愚案花鳥弄秘の義
思ふ所あり凡思と云物は言に出て云ほとなれは堅
固淺きなりあの螢虫にもえなから言に出てもいは
す音にもたてぬてそ言よりまさる深切の思にて有
らめと思ふを兵部卿宮の人のけつにはきゆる物か
はと言に出ての給はそれてそ思ひの淺きにてはあ
れとおさへて玉鬘のかくよみ給ふなるへし又一義
をいへり思なからめと云てはかなくきこえなして
とある詞にてみれは兵部卿宮にはとり合すして只
螢のうへはかりを公界に云るにや其時は聲たてゝ
鳴虫よりもいはすして思ひにもゆる螢こそと云よ
りまさる深切の思にては有らんと螢のうへを推し
はかりてはかなけに云なし給ふなるへし而も其中
に宮の人のけつにはとの給ふ中々かへりて淺きと
云心は自然にこもるへき歟爰に一行禮紙有曰勘 如本
私後拾遺源重之螢をよみけりと也「音もせて思ひ
にもゆる螢こそ鳴虫よりもあはれなりけれ此の巻

抄出し給て或物に歌をかくとて集を披見し侍る次に見いてゝ載之

いとはるかに　秘いとはるかなるよしをうらみ給ふなり物とを（氣近きイ）きさまを宮のうらみ給ふなり　花いとはるかにもてなし給ふ　弄女君のあひしらひを不足に宮の思ひ給ふなり

すき〳〵しきやうなれは　宮のことありかほならしとはやくかへり給ふ用捨なり

のきのしつくもくるしさに　時の景氣なり五月雨になるへき時分なりと也

ぬれ〳〵よふかく　秘實事もなけれは夜のふけぬさきにとて出給ふなり

ほとゝきすなとかならす　河四五月変雲外語二三更後雨中聲　古「五月雨に物思ひをれは郭公夜ふかく鳴ていつち行らん　私云義ぬれ〳〵の詞と其引歌ことに朱點ありよく叶たる心歟　花時鳥うちなきけんかしとは兵部卿宮の思ひの程を郭公によせて必歌をよみ給ふへきことをいへりそれも聞とかめされは書つくるに及はぬとなり夜深く出給ふに古今のいつち行らんの歌を思ひよせてかくはかけるなり又兵部卿宮は必涙をなかしつらんと云心を郭公によせていへるにも相違すへからす　秘此段は草子地なり古今の五月雨に物おもひをれはの歌の心にてかけり物思ひのあるによりて聞もいれ給はさる也　聞此夜の景氣時鳥の鳴へき時分そとなり宮も心まとはして聞とめ給はぬ故なり尤面白し草子地なり　私云一聲山鳥曙雲外萬點水螢秋草中前にほたるをおほくつゝみたる事あり今明ほのの時分一聲鳴へき郭公のさま此詩なとを引ても面白き歟如何

御けはひなそのなまめかしきは　秘宮は源によく似給ふと也

よへはいとめおやたちて　河妻女ふやの事　秘母のことくとりもち給ひし也

うち〳〵はしらて　弄源氏の父ならぬことをしらぬなり秘同　箋云私此義不審源の好色心のある故に一段したしくし給ふをしらぬ人なり　私聞書の説然へし

かくさすかなる御けしきを　秘心かけたまはぬ方なくはうれしかるへきと也

わか身つからのうさそかし　河古心からうき世中となつけつゝ人のためさへかなしかるらん
おやなとにしられたてまつり　秘實の父母なとにしられたらましかは有ましき事かはとなり
人にゝぬありさまてそつひに世かたりにやならん
秘今玉かつらの有様はたくひもなきよしなり源の實子のやうのきこえありてさるむつかしき方の事出來ぬれは人きゝもいかゝとおもひ給ふなり
さるはまことにゆかしけなき　花源氏の君は玉かつらの君を誠はのこりおほくてはてんと思ひ給ふれと御心のくせにて秋好中宮なとにも一わたりはか樣にみえ給へる也　秘源のゆかしけなく我物にすへきとは又思ひさため給はさるなり源の天然の御心くせなり聞同　弄螢に玉かつらの事歟源の心を殘すなり次に中宮なともといへり相違　私云弄箋如何おほつかなし
中宮なとも　秘秋好也
いとうるはしく　聞實々しくかけはなれては思ひ給はぬなり
やんことなきかたの　秘中宮はけたかき方にて玉かつらのことにはえし給はさる也
此君は　玉かつらなり
ありかたくおほしかへしつゝ　源の用捨さすかなる躰也　草子地歟
五日にはむまはのおとゝに　花馬場の殿はうしとら町花散里のまします方也　弄東の御かたの西の對に渡り給ひし程に馬場にちかき故なり秘同
つひてにわたり給へり　或乙女卷に西には馬場ありといへりされは玉かつらのましますかたなれは源氏わたり給ふなり兵部卿宮の歸り給ふ後朝歟　私兵部卿おはしましたる時の詞に夕やみ過てとあり四日ならは夕闇にてはあるへからねと四日は夕月夜のほともすこしなる物なり又くもりたる空の躰夕やみにも過てたと〳〵しきといへる歟
いかにそや宮はよやふかし給ひし　秘よへの宮のことをとひ給ふなり
いたくもならしきこえしわつらはしきけはひ　秘さのみちかつけ參らせそとなり
人の心やふり物のあやまちすましき人は　秘男女のあはひは大事なるとなり　男女のうへになりて亂

れぬ人はかたきものそとなり
いけみころしみ　花いけつころしつと云詞なり　秘前に此宮たちをさへさしはなちたる人つてにきこえ給ふまじきとなりかしとの給ひて叉爰にてはいたくもならしきこえしわつらはしきけそひたる人そやとの給へりさていけつ殺しつの給ふとは云り
いましめ　誡なり警なり
つやも色もこほるゝはかりなる御そに　河儼ツヤ　叉光也　弄つやは色の外にある物なり猶くはしれるきよらの奇特なりと也　秘顔色をいろつやといふかことしつやは色の外に有物なり　聞つやはきらなといふ類の餘情なり　今の世俗にきんといふ物歟この世の人のそめいたしたるとみえす　同し染たる色も源のき給ふは別して色もみゆると也
つねの色もかへぬあやめ　花菖蒲はいつもあれとも五月五日には時をえてめつらしくみなさるゝと也　秘詞つゝき殊勝なり源の事をいつくにくはゝれるきよらにかあらむとかきてかやうにかける妙也菖蒲は常に緑なる物なれと五日には別して色をそふるなり只人のもてなしによれると也　弄文目なり

菖蒲によせていへり　箋叉此義朱なり今以墨書之叉黄用朱　私愚案花鳥幷秘の義思所あるにやあやめを菖蒲に治定して見るへくは五月五日菖蒲は色もかほりも例年のことわさにてめつらしからぬを此六條院の有樣はつねの色もかへぬ菖蒲もけふは殊更にめつらかに覺ゆるかほりなりとこそきよらを玉鬘の心に思ひてなるへし叉只菖蒲の説をは引捨て源の衣裳の文目見たるは猶まさるへき歟其時は前の詞につやも色もこほるはかりなる御そなとと源の衣裳のよき事を云たつる其詞の末と見るへし常の色もかへぬ御その文目もけふは一人めつらかにおかしきかほりと玉鬘の心にめて給なるへししかも下の心に菖蒲をは含ませて見るへきなり然らは弄の義に從ふへき歟
おもふことならは　秘玉かつらのこゝろなり　聞源の好色のむつかしからすはと也或同　聞書私云源を親のやうにあらて實父內大臣の女としられて源へなひかんはおかしかりぬへきと思ふ心歟如何
宮より御文あり　兵部卿宮より玉鬘へ文ある也
しろきうすやうにて　花菖蒲の根はしろきゆへに白

き薄様にかき給へりさて歌にもおふるあやめのね
のみなかれんとよみ給へり 秘 あやめのねにたよ
りあり
みるほとこそおかしけれまねひいつれはことなるこ
となしや 秘 草子地なりその折の興ある事も後々か
たれはさもなき事のあるなりこれも世上のをしへ
をかけり
兵部卿宮 けふさへや引人もなきみかくれにおふるあやめもね
のみなかれむ 引人もなきみかくれとは心をよする
人もなき身そとうけたる也あやめはけふひかるゝ
なり我はけふもひかれすとなりあやめの根を音に
そへよめるなり
ためしにも引いてつへき根に 花 續古今 みかくれておふる
五月のあやめ草なかきためしに人はひかなむ貫之
今案なかきねにむすひつきたるは根は音をなく事
になすらへてたえぬ涙なとをみせたることなり
弄 長き根のあやめなり 秘 一段と長き根なるへし
私あやめの根の長きためしには是をこそ本にはす
へけれといふはかり長き心なるへし
けふは御かへりなとそゝのかしおきて出給ひぬ 秘
源のいさめ給ふなり 兵部卿宮へ返事の事すゝめ
おき給ひて源は馬場のおとゝへいて給ふ也
これかれも 秘 人々も申なり
御心にもいかゝ 秘 みつから返事をし給ふなり
返士要 あらはれていとゝあさくも見ゆるかなあやめもわか
すなかれけるねの 花 此あやめもわかすは古今のあ
やめもしらぬ戀もする哉のあやめと同しあやめも
わかぬは何の分別もなき心なり下の根の一字にて
菖蒲とはきこえたるなり是は宮の水かくれの根を
猶ふかゝらぬとおしくたしたる心也 弄 宮の思ひ
の分別なきとにや 秘 あやめもわかすとは無分別
にとなりかく宣へはかへりて淺くみゆるよしなり
花鳥にくはし
わか〳〵しくとはかり 花 文の詞なりかやうの事い
ひかはし侍るも年たけては面目なきと云心なり
宮をわか〳〵しうと歟 かやうの文かきはわかわ
かしきとなり宮の隱し給ふ詞なり
てをいますこし 兵部卿宮の思ふ心なり 秘 玉かつ
らの手跡也
いさゝかわかぬてとゝ あかぬ事とは不足に思ひ給

へる心なり　私あかぬ事とみ給ひけんかしとは手のよからぬとみ給はんと草子地におしはかりかける詞也

くす玉なと　箋私藥玉と號する本緣未詳可尋决　河續命縷　靈絲彩索なと云り藥玉躰也　宋書曰元喜四年斷夏至曰五絲縷之屬　金門歳節曰端午朮羹艾酒以花絡樓臺插鬢（採百草花結五綵絲遺樓臺等形今藥玉類也）避兵巳佩靈府小續命縈縷長（文秀端午詩）　御記曰延喜十三年五月五日丙午絲所供奉藥玉如常　撤去年九日茱萸以藥玉懸替差御柱前例也』延長三年五月五日丙申書司立菖蒲瓶絲所奉續命縷如常五月五日糸所藥玉を供す去年の菊薬茱萸を撤して御帳東柱に結付る也　花昔武德殿にて五日の節會行れて騎射の事ありその時宮内省典藥官人あやめを献す又内侍藥玉を太子以下に給ふ時藥玉を右の肩に打かけて左の脇へ垂て二の緒を分て腰にゆひて各拜舞するなり　箋私勘事物記原曰百索風俗通曰五月五日以采絲繫臂辟兵及鬼令人不病瘟一名長命縷一名辟兵符一名五色縷一名百縷索又曰閨婦人蠶功成蓋始于漢時提要錄北人端五以雜絲結合歡索纒乎臂初學記又條達織組雜物以相贈及日月星辰鳥獸之狀文綉金縷帖畫貢献于所尊古詩繞臂双條達陽詩五色双絲献女功多因荊楚遺風又云綉闌誇新功索絲喜續年章簡云皇帝閤帖曰清曉會坡香采絲續命長一絲增一歳萬縷献君王又云肅館初成長命縷珠囊仍帶碎兵繒風土記云以五色絲絲爲百索絲々絲辟兵鬼神也

おほししつみつる　秘筑紫にゐ給ふ事也

心ゆるし給ふことも　心やすくおもふさまなる事もおほき也

おなしくは人のきすつくはかり　秘源の心かけ給ふ事なり　人のきすつくとは人の我にきすをつくる事なくもかなとなり源なとの密通あらは人の玉かつらのきすにせんとなり

殿はひんかしの御かたにも　秘花ちる里なり　殿は源なり

中將のけふのつかさのてつかひのついてに　秘中將は夕霧なり左近の人々引つれまゐるへきと也　河左近騎射眞手番なり五月三日左近騎射荒手結五日眞手結四日右近騎射荒手結六日右近騎射眞手結也　河私云五月四日を荒手結五日を眞手結には五日の

荒手結を日折と云歟云々 ィ本手結に荒手結とて左右に各兩度有之云々 花手結は左近の眞手結なり五月五日にあたれり夕霧の中將左近なるゆゑにおのことも引つれて參らんするよし申給ふなり 弄てつかひは馬弓の時二人つゝつかひて射る事歟但未勘也一勘

さる心したまへ 秘用意し給ふとなり

あやしくこゝには 秘かりそめにし給ふ事も六條院にてある事をは人々きそひ給ふと也

うまはのおとゝ 河馬場殿 花處女巻に云馬場のおとゝつくりらちゆひて五月の御あそひ所として水のほとりにさうふしけらせしとあり

こなたのらうより 秘花散里のすみ給ふかた也

わかき人々 花ちる里にさふらふ女房ともにの給ふなり

左のつかさによしある官人 河官人隨身なり殿上人におとるましとは容儀の事なり 花官人は將監將曹府生をいふ也

たいの御かたよりも 秘玉かつらなり 聞紫上の御方云々同私玉かつら歟云々玉かつらのよし

すそこの木丁 河下濃 花末濃とは几丁の帷子は白くすそを紫に或紺に染たるなり 弄うへは白くて帷のすそを紺にても紫にても濃染たるなり今の世にも車の下すたれは如此

さうふかさねのあこめ 河菖蒲重 表は靑裏は白色也 花菖蒲重 面は靑裏紅梅なり 箋朱あり

ふたあゐのうすもの 河二藍

四人 弄よたりと讀り

あふちのすそこのも 花樗は面はうす色裏靑なり末濃はすそを紫に染たるを云へし 弄問裳にもきぬのことく色々有へ歟一禪答云さのみおほくきぬなとのやうにはなきなりすそこなとは勿論也

なてしこのわか葉の色したるから衣 河薄蘇木也 花なてしこは面蘇芳裏靑なり一說面紅梅裏靑なり是は花にかたとれる色なりわか葉の色は瞿麥の葉にかたとれるうらきぬ也然は薄蘇木を河海にはいへる無相違也 弄問云つねのきぬと差別如何一禪答裳をきる時着するを唐衣といふ今の世にも髮上の內侍なとは着也わか葉の色とは裏もえきなり

こなたのは 秘花散里の方也弄同 箋朱あり

こきひとかさねに　花濃打をかさねたるきぬなり
篆朱あり
なてしてかさねのかさみ　花なてしこかみにしるせ
り　篆朱あり
けにみこたち
てつかひともおほやけ事にはさまかはりてすけたち
かきつれまゐりて　花つかさの手結には官人以下馬
に乘て的を射る大やけ事にさまかはるとは大やけ
わさは人々かた山によりて少々參らぬものもある
を此時はこと〳〵くまゐりあつまるをさまかはる
とはいふへし又手結には官人はかり射るを今日は
上﨟のすけたちも射るをさまかはるともいふへし
いつれも相違なかるへし　弄左右近の騎射は公事
なり中少將は不射之六條院にては羽林とものの射る
をいふなり　一禪勘　秘一義は大やけ事にはかた
む樣なる事のあるをさもなきと也　一義には中將
少將も交りたるをいへり花鳥兩說ありいつれも然
へし　河すけたちは次將也
とねりともさへえんなるさうそくをつくして身をな
げたるてまとはしなとをみるそ　河身を捨て勝負し

たる歟　花是は競馬の事を云なり馬埒の手結は騎
射とて馬に乘て的を射る事計有て競馬の事はなき
を五月五日の節會武德殿にて行はるゝ事は騎射の
事はてゝ競馬もあるなり六日又武德殿にて十列の
競馬あり其後馬弓の事あり五日は五位以上の人た
てまつれる馬にのる六日は寮の御馬にのりて競馬
の事あり又長和二年五月十六日左大臣の上東門院
の第に行幸ありて競馬を御覽有則又騎射の事も有
隨身裝束褐衣上着靑地打懸布帶末額先例用紫地錦
打懸此序只用競馬之時打懸云々又萬壽元年九月九
日關白の賀陽院にてこまくらへ有行幸行啓あり東
對を馬場のおとゝにして其前北面に御馬をはせた
り競馬はてゝ又騎射の事有　西宮抄六日競馬左右
十列騎尻着末額左赤右靑近代左右共靑打懸長
腰幷南面袴左右同　着魚形尻鞘等也又諸衞射及雜裝
束皆有例色目更不構亂又左右近衞打毬之催裝束
柏巾子冠黃袍靴等各持毬杖　繧イ　延喜近衞府式云騎
射官人二人着皂緌緋布衫金畫纈甲形金畫布曹形近
衞四十人纐繧イ布甲形銀畫布曹形兵衞府式云右五月五
日騎射官人二人皂緌深緋貲布衫金畫細布甲形金畫

曹形　延喜式凡五月六日騎射官人近衛惣十人並着深緑布衫錦甲形白布帶横刀弓箭行縢麻鞋今案騎射と競馬とに近衛の裝束不同競馬には打懸といふ物を着す陵王の裝束のことし騎射にはたり褐衣を着すかやうに裝束わけたるとねりとものえんなるさうそくけさうをつくしてとは競馬のさうそくの事なり

てまとはし　秘あらそひきほふ也

みなのまちもとほくして　花馬場の北より南へとほしたれは紫上のおはします南の町の東の對にもそのかたのわか人ともはみ侍るといへる也

たきうらくらくそむなと　河たきうらくなつけり打毬樂　納蘇利「高麗曲破急或落蹲以上箋也黄鐘調にも敬吟毬樂あり」私云平調太食調打毬樂　花六日武德殿の騎射はてゝ打毬の事あり唐人の裝束にて馬にのりて毬子をはしらしむるを打毬と云其時奏する樂を打毬樂とはいへるなり納蘇利も六日の競馬の日雅樂寮是を奏す　箋打毬樂は必かやうの時の勝方より奏するなり右禰講云々素然云此義不審

かちまけのらんしやう　河諸の勝負の後亂聲常の事なり競馬相撲或闘鷄なとにも有也延喜十二年亭子院歌合にも勝方亂聲あるよしみえたり競馬行幸に蘇芳菲左狛龍右を奏すと云々又陵王納蘇利常の事なり打毬樂も定有先例歟可勘

花かちまけの亂聲は必競馬にある事なり上東門院賀陽院の競馬にも毎度此亂聲は有しなり競馬の行幸には蘇芳菲左狛龍右取此舞をもつて御輿を迎奉る事あり裝束のやうは保延四年四月宇治左府の記にみえたり蘇芳菲は其躰師子の如し有子二人面形如土なり狛龍は馬形ニ疋乘尾舞人なりてゝにはいらぬ事なれともついてをもてしるす也　秘らんさうとは勝方は亂聲とて必太皷なとうつ事なり今も賀茂の馬競にも此面影はあるなり

とねりともの滕　河近衛舎人也

おとゝはこなたにおほとのこもりぬ　聞花ちる里の方に源の寝給ふとなり

兵部卿宮の　秘源の詞なり

人よりは　秘人よりはすくれたると也

よしといへとなほてそあれと　秘形のよき人はあれ

とこれほとの人はなしと也　よきやうなる人もあ
れと猶かほとのよういけしきなとのよきはなきと
いふ心歟　聞よしといへとさほとなき物かあるを
花散里の見給ひけんと詞をのこすなり云々如何
箋御説かたちのよき人はあれとも猶是はよき人と
の給ふ心なり　私秘の義に同し此説然るへし
御おとうとにてそ　花散里の詞　秘源よりは弟にて
ましませとも源はわかくみえ給ふと也
としころかくおりすくさす　此兵部卿宮は御兄弟の
うちにてもとりわき源と御中よくおはする故に源
氏の御方に何事もある時は必此宮はおはすると也
むかしのうちわたりにて　秘花散里の詞なり久敷み
参らせ給はさりしと也　私花散里はあねの女御の
内すみの比内わたりにすみしなるへしさて源もみ
そめ給へるなるへし
そちのみこよく物し給へと　秘兵部卿宮の弟なり花
散里此ついてに帥宮の事をいひいて給ふなり
おほきみのけしき　河王氣色　秘孫王めくと也弄同
之
ふとみしり給ひにけりと　秘花散里のよく見知給た

るよと思ひて源の返答にもおよひ給はさるなり
なほあるをはよしともあしとも　花今日の物見にみ
こたちあまたましませとも兵部卿宮帥宮なとの外
はよしともあしとも花散里の詞にかけ給はぬなり
弄花散里の批判の詞外の人をは善悪を源の宣はぬ
心なり　私猶弄花の義然へき歟
人のうへをなんつけ　河難　秘かやうの所心をつ
くへし
右大將なとをたに　秘鬚黑なり今螢の宮の事を云い
て給ふも玉鬘の事をとやかくやと思ひ給ふゆゑ也
ちかきよすかにてみんは　花鬚黑大將を玉かつらの
君にあはせ奉らは不足に思ふ事もあらんと也　秘
源のむこにてみん事はと也
ことにあらはしても　源の心中にはかり思ひ給ふな
るへし
いまはたゝ大かたの御むつひ　秘花散里と源とのあ
はひなりいもせのかたらひは今はなきよしなり
おましなともてとく〳〵にて　河各別なり　聞別々なり
こと〳〵のこの字いつれも濁へき也
なとてかくはなれそめしそと　秘は字兩說あり一義

は詞字なり一義は離也　私いつ比からかやうにならひたる中そと源の宣ふ心なりはの字詞にて猶然へき歟如何
なにやかやともそはみきこえ給はて　弄うらみなとし給はぬなりそはむとはうらみそむく體なるへし
折ふしにつけたる御あそびともを入つてにのみ　花散里のかたにてはやかうの事始也
けにめつらしかりつる　秘ことなる御遊なとはこなたにてはなきをけふは殿の御方の得分にて此事ありしとなり
花散里
その駒もすさめぬ草と名にたてる汀のあやめけふや引つる　河神樂其駒その駒そやわれに草かふ草はとりかはん水はとりかはん　後撰上香をとめてかる人あるをあやめ草あやしく駒のすさめさりけり　惠慶
今案菖蒲は駒の食せぬ草なれはすさめぬと云りすさめぬは不愛なり水さはのあやめはこなたに水の邊に菖蒲をうゑたる由處女巻にみえたり花散里の我身の事になすらへてよみ給へりよのつねはすさめられぬ身なれとも今日の競馬には此まちのおはえある心ちするよしなり　弄菖蒲馬は食せさるなり花散里のはへなきにたとふされと今日の遊になくさみぬとなりこなたの町の折にあひたるとなく相違の分以朱付さみたるとなり
返源
鳰鳥にかけをならふるわかこまはいつかあやめにひきわかるへき　河端午「わかこまとけふにあひつるあやめくさおひおくるゝやまくるなるらん能宣
わかこまとはわかきこもなり萬葉にみしまえの玉江のこまといへりまこもと五音通するなり駒にもそへたるなり　花わかこまはあかてもなり五音通する故なり駒くらへの日なれはこまよ詞をかけりにほ鳥の一説にこもは菖蒲に似ておとりたる草也源氏い我身をわかこまに比し女房を菖蒲にたとへて似ておとりたれともひきわかるましきとなくさめ給ふなり　弄此歌の心にほとりは枕詞なり影をならふる鳥なれはよめりわかこもとあやめと影をならふるなり引わかるへきとは花散里と源氏の御中との事をたはふれ給ふなり　秘かけをならふる鳥なれは枕詞におけるなりわかこまは若こもなりこもとあやめとに對してかけをならふるとはいへり引わかるへきとは花散里と源氏の御中との事を

たはふれの給ふなり花鳥説はにくけある也不用也

あいたちなき御ことゝもなりや　弄たいの御方の歌は駒もすさめぬとよみ給て源氏のすさめ給はぬ事をほのめかし源氏は又には鳥にかけをならふるといひて女房に似ておとりたれとも引わかるましさとの給へりいつれもあいたちなき御歌なりと物語の家にかきさとゝめたる也　弄上の詞のさまなり

秘花散里は我愁をいひ出し源も夫婦の間の事はかりの給へりいつれも優ならさる歌と也　聞風流ならぬ心なり　草子地也

朝夕のへたてあるやうなれと　源の詞なり朝夕うちそひ給はぬ事なれとうちむきたる人さまなれは隔心なき心その給ふ也

のとやかにおはする人さま　秘花散里也

ゆかをはゆつりきこえ給ひて　花帳代の床をは源氏にゆつりて我身は木丁引へたてゝ別に臥給ふをいふ　弄ゆかをは源氏にゆつり給ふなり　秘同

思ひにはなれはて　花散里の心に夫婦のかたらひなとは思ひはなれはてたるなり

あなかちにも　源氏のしひてもの給はぬなり

なか雨れいのとしよりも　秘五月雨なり

御かた〳〵ゑ物かたり　箋其比世にはやり事を一さかりわれも〳〵といとむ心なるへし繪物語つゝけてよむへき歟繪ある物かたりなるへし

あかしの御かたは　明石上より姫君へ繪なと奉り給ふなり

にしのたいには　玉かつら也繪をもてのましくし給ふなるへし

つきなからぬわか人　秘玉かつらの御方には繪なとかく事（朱書之今以墨書之）もつきなからすする人あまた侍る也　箋上詞に人々もやんとなくよせおもきなともをさ〳〵なしたゝ母君の御おちなりける宰相はかりの女云云相違に假たりされ共相違にはあらす人からのおも〳〵しく俗性のすくれたるなと也數多もなき也

さま〳〵にめつらかなる人の　つくり物かたりにいへる人々のさまなり

わかありさまのやうなる　秘玉かつらの有様なり

すみよしの姫君の　河住吉の物語事なり　花住吉の物語に中納言の娘三人ある中に一は宮はらにてみめも心もすくれたりけり宮つかへさせんとていた

したてけるをまゝ母わか腹のむすめに思ひまし給へる事をやすからす思ひて六角堂の別當この姫君に忍ひてかよふよし空事をいひつけてあやしき法師をかたらひて姫君のすむ對よりいてゝ行よしせさせて中納言にみするにあさましと思ひて宮つかへの事とゝまりぬそのゝち内大臣の子にて宰相右兵衛督なる人にあはせんとするにまゝ母又かぞへのかみとて七十はかりなるおきなめたゝれおそろしけなるにぬすませんとたはかりかぞへのかみよろこひていつの比とさためてけり是を此姫君かへりきゝて父君のもとをにけて住吉なる所に忍ひてすみけり此故に住吉の姫君といふなりくはしき事彼物語をみるへし今案住吉の姫君の其世にもてなされたるはさる物にて玉かつらの今のおほえは猶まさりさまに侍るにもかぞへのかみおそろしさは大夫の監か思ひかけたるによそへられ侍ると也

弄住吉物語事繼母のまゝ女に約したる人をわか女にあはせんとて父に讒言して主計頭と云むくつけき男をまゝ女の方へ入て父に云てわか女につゐに合せさりしかとあね姫は優なる名の殘りたれはなり

さしあたりけんをりは　弄其時を思ひやるは勿論可然姫君のさまとみえたり今の世におもふもと也　秘其時を思ひやるは勿論然へきとなり

かぞへのかみ　民部省の被官主計主税兩寮也　弄彼物語にまゝ母のはかりて父に讒しける事なり見前

ほと〳〵しかりけん　河拾「宮つくるひたのたくみのてをのゝおとほと〳〵しかるめをもみしかなほとほとしはおとろ〳〵しき心也　花ほと〳〵しきと云詞萬葉の歌に有拾遺歌と其心同し後撰の詞にほと〳〵しくとあるは其心かはれりそれはうと〳〵しきなと云心なり　弄おとろ〳〵しきなと云詞也

かゝる物とものちりつゝ　秘かやうの物語繪なよなり

あなむつかし　源の詞也　明石の姫君又玉かつらの御方其外此比はやりてちりほふ故なり

女てこそ物うるさからす　弄うるはしからすなり　秘物うるはしからすといふ心歟　聞私女の物にあかす數寄たる心歟

人にわさむかれんと　聞人にたはからるゝ性と云なり
さみたれのかみのみたるゝもしらて　河伊行釋一ほとゝきすをちかへりなけうなゐこか打たれかみの五月雨の比　花うちたれかみの五月雨を打かへしてさみたれ髪のみたるゝをもしらてといへるは五月雨の中に女君の髪うちみたるゝもしらて繪をかき給ふをいふ也　秘髪といへり　郭公をちかへり云々河同
又かゝる世のふることならては　秘かやうの事ならては何事にてかなくさみ給ふへきそと也
いたつらに心うこき　弄古今序に繪にかける女の事可思也　秘古今序に繪にかける女をみていたつらに情をうこかすかことしといへり
らうたけなるひめ君の　花住吉の姫君の事なり　弄姫きみの心つくしなとをいさむる心なり　秘ふる（しイ）き物語にかやうの事あまた侍り姫君の心つくてともやさいさむる心なりかゝる心とはさやうなる方の心つよく也
しつかに又きくたひそ　秘二度とよめはすちなき事と思ひとく事も先うちみるには興ある事とおもふ事のあるなり　聞おとろ／＼しくかきなしたるはちやつと心かとらるゝ事あるそなりかさねてはみさめのすると也
おさなき人の女房なとに　三本女房なとに　聞明石の姫君なるへし
物よくいふものゝ　聞辨口のきゝたる物のさあるへきそゝろことをいひなれたる人のいひいたしたる事ともさそなと源のゝ給ふなりさしもあらしやとはさなき事もあるへしとなり　秘かやうの物語なとはすちなき事とのみ宣ふなり
さしもあらしや　秘かやうの物語なとはすちなき事とのみの給ふなり　私辨舌のうへよりいひ出したるなるへしさにてはあるましきかと玉鬘君へ源のいひかけ給ふ詞なりおほれ給ふへくや
けにいつはりなれたる人や　花玉かつらの君の源氏の住吉の物語をいつはりとのみの給に付きて僞をしなれたる人そわか心ならすにいふと源氏にあたりての給ふ詞なりいま源氏一部の意此段にいへるかことしまことしきそらことなるへし　弄玉かつ

らの語なり　秘是以下玉かつらの詞也　素然云かならす住よしには限るへからず惣別のつくり物かたりの事なるへし
さもくみ侍らん　秘源なとなり偽をしなれたる人そさてわか御心ならひにさしくみて推量し給ふとなり　花源にあたりて宣ふ詞なり
てちなくもきこえおとして　秘皆實事なる物を無骨に申おとしてありけるよと源の輕慢しての給ふなり
神代より　弄呀しての給ふなり
しるしおきけるなり　此繪物語なとこそ神代よりをしるしおける物なれは日本紀なとは唯かたはしそと也
日本紀なとはたゝかたそはそかし　河日本紀卅卷舍人親王撰　私三光云イヘビト、ヨム云々此事秘して申さゝりき　花日本紀三十卷始レ自二神代一至二持統天皇御宇一品舍人親王安麿等撰レ之　今案神代より世にある事をしるしおけるは日本紀の事なり
是にこそとは惣しては此物語草紙に別しては住吉の物語をの給ふなり吾國の書には上もなき日本紀を押さけてそれは大概をこそしるしおきたれ誠に假名草紙なとにてそまことしく道々しき事はありけれとて源氏のわらひ給ふは玉かつらの君の誠にとりなしての給ふをおかしく思ひ給へともしはらく女君の心にしたかひ給へる心也
その人のうへとてありのまゝに　花是よりは源氏君の世間の道理をの給ふなり　秘源の詞なり下には紫式部此物語を作れる大意をあけていへり莊子寓言のことし寓言と云もの以二己之言一借二他人之名一以言也と注せり閑詞
よきもあしきも　弄又なくさめての給ふなり秘同
後の世にもいひつたへ　さきの人のあしき事をつたへて後生のいましめとする事也
よきさまにいふとては　秘されは人をはめていはんとてはさま〳〵にとりつけていへるなりされと世間になきことをは一もいはさる也
人にしたかはんとては　秘紫式部か作意を心にこめて寓して述る也
人のみかとのざえつくりやうかはれる　箋云花鳥には人の御門のざえつくりやはかはるとあり　花人

の御門のさえつくりやうは唐朝の書籍を云才ある人の作れる書也　弄才なり云々さえにて詞たるへき歟愚案宥柏也　紙同　秘さえは才なり一本さえつくりやはかはるとあり無煩なりされと日本と唐土との才覺は文章にかきなす所の作りやうこそかはれ惣別は同物なり此時はやうとある可然

おなしやまとの國の事なれと　三本如此　河和國　花和漢ことなる事なれと作者の心は後代のためしにしるしおく事なれは只同事也やまとの國の書にも古へ今の相違はあれとも偏にそらことゝは云へからさる也　秘文體古今かはれる事も異朝本朝の作意又その內にて淺深こそ有へけれ一向になきにては有ましきとてゝにて繪物語をたすけての給ふ也私案するに人のみかとのさえつくりやうかはれるおなしやまとの國の事とは日本紀と繪物語の事をいふにや日本紀は神代よりをしるして漢字を用ひたれは人のみかとの才といふ昔といへるにあたるへし此繪物語は假名なるへしさて近き世のことを作りたれは同しやまとの國の事とはいへるなるへし漢字假名と昔と今との事にてさまかはりたる樣なりとも古事は同し和國の事なれは繪物語とてもいひくたすましきとたすけて源の丶給ふなるへし

佛のいとうるはしき心にてときおき給へる御法も

河佛は四意趣に住して說法し給なり所謂別義意別時意長時意平等意これなり　花しはらく天台宗の義によらは法花を眞實に定るに付て余前の諸教をは皆方便といへり方等經は五時教の中第三時にあたる大乘教の初門なり淨名思益等の經なり小乘を彈伊呵して大乘を褒美するに方等部をは彈呵褒美の教と云二乘に對して說給ふ故なり凡佛の方便はいかにも衆生機をかゝみて說玉へる故に無き事をも有といひ又ある事をもなしと宣ふこゝにいへる事かしてには又かはるいつれを誠と決定しかたし所詮は衆生萬機をさゝのへ空有の二執をはなれてつひに一實の道に歸せしめて一旨におさむるなり三界唯一心心外無別法の道理なり煩惱と菩提とは譬へは水と氷との如し水と氷とは只一性なりまとへは菩提の水氷となるさとれは煩惱の氷水となるかことし全各別の物にあらす善惡不二邪正一如の理なれはしはらくよきあしきはかりのかはりめな

りよくいへは何事もむなしからすとはかヽる繪の物語假名草子なとも是によりて益をほとこせは則方便の諸教と更にかはる所なかるへしと佛の御法に引かけてことわりをのへ給ふなり　秘此段やすくきこえたりされと教にあはせて見るなり諸抄にみえたり如來はしめに衆生の煩惱を即時にひるかへすへきとて先花嚴をとき給へるなり　弄方便の教に空を得し弟子共方等部にて迷ひをせし事在て然る方等經をは諸教に通して大乘に入初門たるとほめたりき凡如來出世の本意は凡聖一如善惡不二のことわりをときて衆生の迷を速にひるかへさんと思食すこゝろあれは大悲のきはまり是に過たる事あるましき故にうるはしきといへる歟此故に國も實報國土の出を現し佛も報身のすかた說法も三界唯一心の法なれは佛の心も法もうるはしきかたなるへし是華嚴經の分なり

はうへんといふ事ありて　花鳥の義右に詳なり　弄最初大乘の法を說給ふ事は佛の本意也されとも時いたらさる衆生に不相應の法を說給へは機教相違する故に三七日思惟の內證より實大乘をやはらけて十二年權教を說給へり其中に阿含經は一向の小乘なり佛も劣應身所他も髮をそり衣を墨に染る事此時より始れり誠はさも有へき事ならねとも餘りに衆生の物ことに執心ふかき故にこれを破らんとてかやうの方便をまうけ給ふなり　秘是則方等なり最初より大乘を說給ふ事佛の本意なれとも衆生の機いたらされは先大乘をやはらけて權教をとき給へる其中に阿含は一向小乘なり

さとりなきものはこヽかしこたかふうたかひをおきつへくなん方等經の中にふ（得イ）ほかれと　箋花鳥の義右に詳なり　河法華の未證謂得未證謂證の心なり　弄河含經の四諦緣生の法門は全く如來の本意ならぬを所化の機根いやしくして誠そと修行して法界空の理をしらすして只心あれはこそ身あれはこそと思て但空偏眞の理に落はてたる故に佛又手をかへて衆生を引導し給ふ故に方等經の中に四教をならへて色々に說ましますこれは淨名經等にも侍り此時昔のさとりにもつかす今のさとりをも得す所化の衆生たヽ惘然としたる心歟須菩提也　同一會衆有空錯亂して迦葉泣て三千にふるひ善吉惘然

として手に一鉢もなく是によりて深く恥レ小慕レ大機は直に圓に越或は別にすゝみ或は道にかなひ又は三歳にとゝまるこれは四教並對の教共いひ又彈呵の教ともいふなり　秘いまた衆生の起縁熟せさる時四教の大小乘をならへて設給ふなり此時に昔のさとりにも今のさとりをも得さる人あるなり此時に狐狼野干とはなるとも二乘の見をなすへからさるよしをの給を聞て迦葉泣て三千にふるひ善吉惘然として手に一鉢をなくといへり其後畢竟空の理を聞て聊さとりを得なり方等經の中にあるとは此華なり（仁王の説 法花廿年）　弄 花嚴三七日阿含十二年方等（無説時）般若（廿九年或卅年大般若説）法華八年涅槃一日一夜

いひもてゆけはひとつのむねにありて　河 五時説教ことく法花一實の道に歸する也 河イ本開三顯一の義也　般若説法の心歟彼阿含にして碎空碎破の空理に沈み方等にして有空錯亂せしを今畢竟皆空と説て彼等の機をゆりそろへて有空一念のさとりをあたへ給是をいひもてゆけは一つむねと云る歟又般若にかきらす萬法一如の心歟云々　秘 麗々法々一色一香しかしなから純一實相にして別の法なき也

いひ（イナシ）もてゆけはひとつむねにあまりて菩提と煩惱とのへたゝりなり

ほたいさほんなうとのへたゝり　河 煩惱即菩提生死即涅槃　案之此物語一部の大意作者已證のおもむき是にみえたり方便とは法華已前説教なり方等經とは方等部の諸大乘を指兩乘前の諸教雖遍至法華の顯機於一緣悟一實圓融之旨又煩惱即菩提等是なりさとれは菩提となりまとへは煩惱と成なり此等心なり　箋 花鳥上の段決（聞イ）　弄 法華經の内證あらはれてみな塵々法々一色一香しかしなから純一實相にして更に別の法なし天際日のほり月くたり蓮葉はまろく松葉は細くして是誰かなせることわりそや只天ものいはすしておのつから四時ゆきたる道はかりなり如斯すかたをはゝかる事もなく説故によくいへはと云なるへし眞實と云心なり四十餘年は眞實ならすとみえたる歟菩提と煩惱とのへたゝりなき事は龍女か無垢世界の成道にてきこえたり毒龍の角をさて鱗をかへたるにもあらす只其まゝの成道なり彼會未開會の時はしはし煩惱菩提を二所に立て生死涅槃の二路にへたて或は方便眞實を

相待し爾前爾後をかたくわかち今法花開會の前には此妙傳と義無雙にして全く爾前爾後とたてさるなり三毒三身無自性なれは三惑四趣則毘盧身出煩惱菩提本不生なれは生死涅槃又空花の開落なりこれしは　法華得益の一機の始終なりつら〳〵其實事をふみ見れは四十餘年の勞功も是にあらす非にあらすまたいつれか實いつれか虛何の方便を廢して始て眞實にとゝまらん凡一代の御法色はさまさまなるは只根機の聞うると聞得さるとによるへし　箋仁王經上二諦品云菩薩未成佛時以菩提爲煩惱菩薩成佛時以煩惱爲菩提何以故於第一義而不二故　秘人の善惡は菩提と煩惱となり悉皆天台の法文を以てかけり紫式部は天台宗の許可まて受て宗旨をきはめたり

附箋
いひもてゆけはひとつむねにあたりて菩提と煩惱とのへたゝりなん　黄ムのひとつむねにあまりたとへのやうほたいと煩惱とのへたゝりと心得たるはか（いふイ）りにては委細に難消也此譬喩はすなはちはふところのひとつむねにあたるといふ當躰也煩惱のうへよりは道皆煩惱なり菩提よりみれは煩惱こと〳〵くほたい也

よくいへはすへて何事もむなしからす　聞善惡不二の理なれはかやうの作物語まても皆眞實の道理にはつれすと物語によきさまに准をつけての給ひなすなり

附箋
よくいへはよきやうにいへはなに事もむなしからすといふ義理も同前なりとつめ〳〵ていへはといふ義かいひもてゆけはといふ再釋なり

さてかゝるふる事の中に　秘源の自稱なり

まろかやうに　花丸はむかし男女の通稱也又古人の名に丸麻呂の二字を用たる事あり又上に文字をくはへてなに丸なといへる事あり愛にいへるは只みつから稱してまろといへりふのれなといふかことし

しれものゝ物かたり　秘愚痴なる也

ものゝひめ君　弄何の姫君ともなし

御心のやうに　源の玉かつらをさして云

たくひなき物語にして世につたへさせん　玉かつらのつれなき心を物かたりに作りて世に殘さんとなり

かほを引いれて　玉かつらの躰也

さらすともかくめつらかなることは　秘玉かつらの詞也　作物語にし給はすとも世にかくれはあらしとなり

めつらかにやおほし給ふけにてそまたなき心ちすれ

秘源の詞我をは世にためしなき事との給ふことわりなれと又玉かつらのことくにつれなき人は世にまれなると也　私玉かつらは我をたくひなしとのたまへと我も又玉かつらをめつらかなる人とおもふとの給ふなり

よりゐたまへるさまいとあされたり　河されは同心なるよし以前にみえたり

源思ひあまりむかしの跡をたつぬれとおやにそむける子そたくひなき　秘源の歌なり玉かつらを實子にしての給へり心はあらはなり

ふけうなるは佛のみちにも　秘不孝オヤニシタカハス　日本紀

花四十華嚴經十二云地神常言我負ニ大地一一切所レ有及須彌山不ニ以爲一レ重亦無ニ厭心一於ニ三種人一常厭倦不レ欲ニ任持一何等爲レ三一者心懷ニ叛逆一謀レ害レ人等二念レ棄ニ恩親一不レ孝ニ父母一三撥ニ無因果一毀ニ謗三寶一破ニ輪僧一如レ是三人秘極患重乃至一念不レ欲ニ任持一心地觀經第二云世間之恩有ニ其四種一一父母恩二衆生恩三國王恩四三寶恩如レ是四恩一切衆生平等荷負善男子父母恩者父有ニ慈恩母有ニ悲恩一云々世間所レ高莫レ過ニ山岳一悲母之恩逾ニ於須彌一世間之重大地爲レ先悲母之恩亦過ニ於彼一若有ニ男女背レ恩不レ一順令ニ下其父母　生中怨念心上母發ニ惡言一子卽隨墮或在ニ地獄餓鬼畜生一父母恩重經梵網經等自餘經說不レ遑レ記　私花鳥にあり

からうして　玉かつらの久しく逗留して返歌するなり

返玉鬘ふるき跡をたつぬれとけになかりけりこの世にかゝるおやのこゝろは　秘源のことくなる心のあるは古物語なとにもまことになきと也

心はつかしけれは　歌の心もはつかしくて源のさのみ亂れぬとなり

かくしていかなるへき御ありさまならん　弄玉かつらの身の行末を物語の作者いへり　秘草子地なり

何と行末は有へき事そと也

むらさきのうへも姫君の御あつらへにてとつけて
明石姫君の御あつらへとなりてとつけはかてつけ
なり
こまの丶物かたり　河　古物語ふるき物語うつほの物語なとを云歟清少納言
枕草子にも此詞あり　又云古萬葉集なと順集にも
かけりこまの物語くまの丶物語なとかきたる本も
ある歟あやまり也古本如此　花　河海に此物語の繪
と有古物語と云心なり親行本にはこまの丶物語と
かけり又くまの丶物語とかきたる本もありそれも
こまをくまと五音通するによりてなり今案こまの
の物語は枕草子にも物語の名に出せり勝説といふ
へし
いとよくかきたるゑかなとて御らんす　源氏のかく
の給ひて紫上ともろともに御覧するなり
ちひさき女君のなに心もなくてひるねしたる　花　こ
まの丶物語の中にある事なるへし
むかしのありさま　花　紫上は此物かたりをみ給ひて
昔の我身のありさま思ひ出し給ふとなり　秘　紫上
の昔の事を思ひ出給ふなり
か丶るわらはとちたにいかに　花　是も物語の中に有

へし源氏の君のわか身にたとへての給へり　秘　紫上を
まろてこそ猶ためしにも　花　丸は右にあり
は随分によく養たてたると自稱し給ふ也
けにたくひおほからぬことゝもはてのみあつめ給へ
りけんかし　又おほからぬ　世上の事にや　上の詞
つ丶きまろこそ猶ためしにもしつへく心のとけさ
は人に丶たりけれときこえ出給ふけに以下雙紙の
詞也源氏好色事なり　花　草子とものの事なり又源氏
の見あつめ給事なり云々　弄　好あつめたる歟此見
あ　め歟　花鳥又義あり　私以上箋の如く合點以
下寫之　花　こまの丶物語にたくひすくなきことゝ
もかきあつめたるへし　秘　草子地也又は紫上の詞
なりてのみあつめ給ふとは草子ともの事にや又源
の見あつめ給ふ事なり好又は見あつめ給なり　私
只源氏の好色のうへにたくひおほからぬ事まてさ
まさまみあつめ給ふといふにや草子地にて心得や
すき歟如何
ひめ君の御まへにて　秘　源の詞也　あかしの姫君也
みそか心つきたるもの丶むすめ　花　伊勢物語にみそ
かなる所といへり隠密の所をいへりみそか心も人

にかくしたるふるまひなり　聞　密事の心なり
たいの御かたき丶給は丶心おき給ひつへくなむ　花
上の詞にある御姫君なとはかくはもてさわき給は
しといへりあのことく明石の姫君には世なれたる
物語をたになよみきかせそみそか心つくるわろき
といましめ給へり　秘　玉かつらの聞給は丶まこと
の御女にはかやうの心つかひの有けめよと思ひ給
ふへきと也
うへ心あさけなる人まねとも　紫上なり昔物語とも
の中に同しやうなる事とものあるをの給ふなりさ
れはみるにもかたはらいたきなり
うつほの藤原のきみのむすめ　弄　藤氏ならす一世源氏人の女也
異名なり花本に詳也　あまたの人のいひしにもなひかす
つひに内へまゐりし人なりこれもあまりなりとの
給ふなり　花　うつほの物語に藤原君とて一世の源
氏にて右大將まさよりといふ人あり北方を二
人もち給へりける一人は攝政大臣の娘一人は時の
御門の御妹后腹の女一のみこなり其后腹の九にあ
なり給ふイ
たりてあて宮と申みめ心すくれ給へりけれは春宮
をはしめ奉りて時のいうそく聞つたへて心をつく

すにことと人々には心つよくて春宮へ參り給ぬれは
源少將といふ人は出家して山にこもりておこなふ
はらからの侍從なかすみは御文を湯をもちてすき
入てやかて絶入ぬ太宰前帥滋野のますをとてあら
あらしく心おそろしき樣したる人はいきとほりを
なして内裏へ參りて申しけれは御門見給ふにさか
なき事ともを書たりけれは男女の子共までみな流
しつかはしぬ又みはるの大臣と云人は家に火をつ
けてやきほろほし山にこもりぬ此外源宰相さね
た丶右大將かねまさ平中納言兵部卿宮上野宮御お
ひのみこあねの女御の御腹兵衞佐ゆきまさ左大將
なりた丶の父君なり　の源少將此人々いかにせんとおと丶の君
達又つかひ給女房なとをかたらひていひわたれと
もみなき丶いれ給はてやみにけり是をおもりかに
はか／＼しき人にてあやまりなしといへり　秘　花
鳥にみえたりあまたの人にもなひかて内に參りし
人也これもあまりなるとの給ふなり
すくよかにいひ出たることわさも女しき所なし　秘
いつれにもなさけなくもてなしてひまなき文とも
も返しし給はす又源宰相是はかりとしひて聞えた

るにたまさかに返し給とても「昔おふる岩に千世
ふる命をは黄なる泉の水そしるらむ「しぬといは
はためしにもせん物をのみ思ふ命は君かまに〳〵（ためしにだにもせんものなイ）
よめる歌是體にのみあり又ゆきまさの兵衛佐歌を
よみておこ君といふしてまゐらす御返給へとなき
のゝしり給へとかゝる人の返事はせぬ物そたゝみ
せつれはめさましといふとの給へとあり是等を始
として女しき所なしとはいへるにや
うつゝの人も　河現人なり　花是よりは又源氏の詞
なりうつゝの人は現世の人なり昔をはいはしこの
人もこそあれといふなり　弄現存の人をいふなり
秘今現在の人もかくあるなりあまりに思ふ所をた
てたる人をいへり
よきほとにかまへぬやよしなからぬおやの　弄かま
へぬやといひ殘してよしなからぬを下の詞につけ
てみるべき歟云々又了簡あり　秘此やの字にて讀
きるへし只よき程にすべき事となり中庸をたふと
へるありかたし　箋故禪閣仰中庸をたふとへる有
かたし
よしなからぬおやの　秘至極やしなひたるとては只

大やうなるはかりにて何事にもおくれたるは曲も
なき事なり　私よき程にかまへぬやよしなからぬ
とよへつゝけておやの心とゝめてはとよむへき歟
其義はたてたるおもむきこゝにてよきほとにかま
へぬるやよしあるといふ義なりかまへぬるなり畢
なりよしなからぬはよしある也
こめかしきを　花をさなかましき心なり朱あり　此
義如何巨めかしきは大やうなる心なり
おやのしわさゝへ　河立レ身行レ道揚ニ名於後世ニ以顯ニ
父母ニ孝之終也孝經
けにさはいへと　秘よくそたてたる人はさすかなる
所のみゆるとなり人をそたつへきやうを紫上にい
ひきかせ給ふなり
こと葉のかきりまはゆくはめおきたるに　花物語の
つくりさまをいふり物しらぬ人のかきたるはさし
もなき事をこと〳〵しくはめたる心なり　秘花鳥
に繪物語なとのつくりさまとするはいかゝ爰は只
世上のありさまをいふなり
けにとみえて　人のはめたるほとにけにもありける
よといふやうならぬはわしきなり

すへてよからぬ人に　河崔子玉座右銘　無レ使ニ名過一レ實　秘此座右銘奇持なる語なり無分別なる人のはめそこなふ事のあるなり　私香もなく馨もなきを思ふへし

この姫君のてんつかれ　明石姫君なり　河世俗にてんさすといふ事ありほめそしらるましき心也

まゝ母のはらきたなき　河腹黑也　賢木卷にあり　花紫上は明石姫君のまゝ母にておはしませは住よし物語其外まゝ母の腹あしき事ともかけるふる物語をかきうつし又繪なとにもあたらしくかゝせ給て紫上にみせ給へるなり　弄心の惡きをいふ也

一拗　秘はらきたなきとは心のあしきを云也まゝ子をにくむ心のあるなりさやうのかたをかける繪物語なとをは心みえしとてえりのそき給へるなり

花鳥の說如何　聞えりつゝとはえりのくる歟云々

中將の君を　秘夕霧なり　弄夕霧の中將紫上の方にはうときと也　私まゝ母のことかへりにかきいたせり

こなたには　明石の姫君のかたへは夕霧もひめ君の御かたには

うと〳〵しからぬなり

わか世のほとは　源のおはせぬ世に今よりたかひにむつひ給ひてこそしたしくもあらめとかやうにならはし給ふなり

みなみおもてのみすのうち　秘姫君の御かたの南おもてなり

たいはん所の女房のなかは　花執柄家には臺盤所あり女房のさふらひ所なり　秘紫上の御方なり　弄六條院の女房のさふらひなり

あまたもおはせぬ　源の御子の少き事也

大かたの心もちひ　秘夕霧をほめたるなり

おほしゆつれり　夕霧の物々しくまめやかにおはすれはうしろやすく源のおほすと也

またいはけたる　これより明石姫君のまたいはけなくおはするさまを云なり

かの人のもろともに　河雲井の鴈の事也　花夕霧雲井鴈とひゝなあそひせし事を思ひいたし侍り　秘雲井鴈の事を思ひ出給へり

ひゝなのとの宮つかへ　姫君のひゝなの宮つかへを夕霧のし給ふ也

うちはたれ　雲井鴈の事を思ふ也
さもありぬへきわたりには　是より夕霧の好色の體をいふなりなほさり事いひふるゝはあれと心とゝめぬなり實々しき人なり
さるかたになとかはみさらん　少々心とまりぬへき人にもなほさりことにて過るとなり雲井の鴈に心のある故也
猶かのみとりの袖を　河六位宿世といはれし事なり
花雲井の鴈のめのとの六位よくせといひし事をみなをされはやと思給は猶雲井鴈に心をとゝめ給へるなり
やんことなきふしには　弄ことさらにたてゝ雲井の鴈の事をは思ひ給ふなり
あなかちになとかゝつらひ　夕霧のかたより雲井の鴈をあなかちにかゝつらひしだひ給ふやうならはおとゝはゆるし給ふへけれともなさけなくはしたなめられし事をつらしと思ひて人にことわらせて得めと思ひいそかれぬ心也　秘今ちとしひての給はゝ内大臣もゆるし給ふへきを夕霧の心には昇進もありての給ふへきとて分別ある也斟酌あるなり

たふるゝかたにて　秘倒也たをれたる心也弄同
さうしみはかりには　秘雲井鴈はかりには心をふかくみえ給ふなり
せうとの君たち　秘柏木なと也夕霧のしやうをねたく思ふ也
たいの姫君を　玉かつら也
右の中將　柏木也　河岩もる中將也
いひよるたより　秘みるこなとなり
この君をそ　夕霧を玉かつらへのたよりに柏木のたのむなり
人のうへにて　秘夕霧の詞なり雲井鴈の事心にあり
むかしのちゝおとゝたちの　秘夕霧柏木の御中昔の父君たちの御なからひのやうなるとなり　秘致仕大臣と源との御あはひ又今夕霧と柏木とのましらひの符合したる也
うちのおとゝは　致仕大臣也
そのおひいてたる　秘此内大臣は男子あまたもち給へるをいへり
そのおひいてたるおほえ人から　此君たちも或は母かたの高下又はぬしの器用なとに從ひ其ほと〳〵

に心のまゝにおふしたて給ふと也
女はあまたも　系圖には男子七人女子四人これをのす
女御もかくおほしゝこと　河立后事歟　秘立后事也
ひめ君もかくことたかふ　雲井の鴈なり　秘夕霧をひきさけ給ふ也
かのなてしこを　花玉かつらの事也
ものゝをりにも　花雨夜の物かたりの時をいふにや
秘雨夜の物語
物はかなかりけるおや　秘夕かほのうへなり
さかしらにわか子といひて　聞系圖たてになり　弄
内大臣語　さし過なとよからぬ體也
君たちなとにも　秘柏木なとにさしての給ふなり
これはいとしかおしなへて　夕かほの事をの給ふなり
ものうんしして　花慍ワラミタル心ナリ　大和物語世中をうんしてつくしに行ける人とあり
すくなかりける　女子のすくなき也
中比なとは　中比はうち忘れ給ひし也然るを今源の玉かつらをかしつき給へるを聞てさらに思ひいて給ふなり
わかおもほすにしもかなはぬ　女御姫君なとのおもふやうならぬ事なり
夢み給ひて　秘内大臣夢也　河毛詩第十一小雅斯干篇　下莞上簟乃安ニ斯寢ニ乃寢乃興乃占ニ我夢ニ吉夢維何維熊維羆維虺維蛇大人占レ之維熊維羆男子之祥維虺維蛇女子之祥　聞玉かつらの事をうらなひあてたる也

岷江入楚第廿六　常夏

卅六歲　太政大臣

六月六條院東釣殿逍遙事
內大臣公達參會事
源氏尋近江君事
西對御前瞿麥花盛之事
源氏君彈和琴歌貫河給事
內大臣毀源氏給事
西對姬君事
內大臣殿渡雲井鴈君方給事
其次竅見近江君與五節君打雙六事
內大臣殿與近江君語給事
近江君奉文於女御殿事

常夏　花以詞並歌爲卷名但詞にはなてしことあり一物二名なりまた歌にはなてしこの床なつかしきとあり　河卷名なてしこのとこなつかしき色をみはもとのかきねを人やたつねん　箋秘に以歌爲卷名　私云なてしてとは詞にはなてしこの色をとのへたるからのやまとの云々又なてしてをあかても此人々の云々歌にはなてしこの床なつかしき云々源の歌也玉鬘の君の返歌には山かつのかきほにおひしなてしてのもとのねさしを誰かたつねんとあり源の歌一首の外はとこなつの詞なし仍以歌爲卷名といへり花には一物二名なれは歌詞にて卷の名とすといへる也

花源氏卅六歲の六月の事又竪の並なり　秘源氏卅六歲の夏なり　弄箋同箋に竪の並と云々

いとあつき日ひむかしのつり殿にいてさせ給ひて

河京中名跡云釣殿今六條院是也　京中名跡記釣殿院號六條院光孝天皇の御所なり六條東洞院にあり今物語にいへるは六條院の釣殿六條京極なり各別の所也　箋花うつほ祭の使に有釣殿納涼事御前の池に網おろし鵜おろし鯉鮒とらせよと云々　閑つり

殿はちんなとの類也　花うつほ祭の使にかゝるほとに六月の比ほひになりぬ大將殿の池ひろくふかく色々のうへ木きしにそひておひたり水のうへにえたさし入なとしたる中嶋にかたはらは水にのそきかたはらは嶋にかけていかめしき釣殿つくられおかしき舟ともおろしよき橋わたしてあつき日さかりには人々すゝみなとし給ふに十二日いとまの日にて參り給はぬをつり殿にてけにすゝませたてまつらんけうあらんくた物なと給へよと聞え置給うてつり殿にいて給ひぬ君たちなとさふらひ給ふにおまへの池に網おろし鵜おろしてこいふなとらせよきひしおほきなるみつふしき（うイ）とりいてさせいかめしき山もゝうめもゝなと中嶋よりとりいてゝおかしきてかめとも水にひろひたてなとしてすゝみ遊ひ給てあるしのおとゝけにてゝにわかきものともひとりもなきさう〳〵しやなかすみ藤侍從よひにやれかしふかき契りのある人はよしあそおりすくさぬそよきなとの給てはおとろきての給ひつかはしたれは三とてろなからあそひいとゝ日々いてきて舟にのりて釣殿へましつ　今案あつき日釣殿に人々すゝみていをなとてうしたる事此物語におもかけにたるによりてのする物也

中將の君も　秘夕霧也

したしき殿上人　秘六條院家司也

にし川よりたてまつれるあゆ　箋河に西川は桂川也東川は賀茂川也此兩河の鮎を供御云々　花西宮抄に禁河也淀（堤イ）川左衛門府撿知葛野河右衛門府撿知已上夏供鮎云々　今案堤河は東也葛野河は西川也云云如二禁野一已上箋の分也　秘桂川也此川禁野と云如くに禁河也　康保三年閏八月十九日御記云遣左右看督使巡撿洪水其五六條及西河渺々如海云々夏の泉の會には鮎の皮ひき雪朝には鴨壺蒸を必賞翫すへき者なり云々庖丁書にみゆ　道信朝臣一ひをのよるうちにはあらて西川のあみたにあらはいをもすくはん　大和「賀茂川の瀨にふすあゆのいをとりてねてこそゆかめ夢にみゆやと　六帖「君ませは物も思はす賀茂川のせにふすあゆのやなこもりして「あたらよのいもとはねなてとめかたきあゆとるとるといはのうへにゐて　花今案堤河は東河也葛云々前にあり私云箋に略之今別注加之

ちかき川の　弄賀茂川也　箋賀茂川なり　非二京極河一六條院へ流す事は近代の事也云々　河近き河とは賀茂河なり　京極河かといふ説もあれとも京極河を六條へなかす事近代事なり上古にはなき事なり云々其上六條院名字河原左大臣の六條院を摸する歟彼院後には亭子院御領として醍醐天皇の行幸なと有しなり伊勢物語云昔左のおほいまうち君いまそかりけり賀茂河の邊に六條わたりに家をいと面白作りて住給ひにけりとあれは然は近き河は鴨川勿論歟御記云延喜十七年三月十六日此日參入六條院此院は是故左大臣源融宅也大納言源朝臣也奉進於院云々　賀茂川をいへり時の景物ともなり

いしふし　石臥　鰯 和名　鮔 同　箋鮔 和名伊之不之性伏沈在石間云々時の景物を賞する義なり鮔樣之物頼御前調味之例亭子院御集並うつほ國讓等云々

花亭子院御集云いしふしやうの物御まへにててうして參らすうつほ國讓にとりあへるいをともえらせ給つ鮎一てはへ一こ小いしふしてふないれさせあらまきなとそへさせておとゝ御まへに人々めして調せさせ給うてけうしてまゐる和名鮔音夷伊之不之

和名　性前にあり

大との、君たち　秘柏木なとなり　箋柏木以下兄弟達なり　箋云此席には柏木は參入無之也　或柏木紅梅辨少將　藤侍從夕霧を導て來り給ふ也

おほみき

ひ水めして　箋氷水冷水なり　枕草子云いみしくあつきひる扇の風もぬるしひ水にて云々　弄氷水ひやゝかなる水也和　秘ひやゝかなる水也　公子調二氷水一佳人雪藕絲千五杜子美文八溝納涼時　河氷室　仁德天皇六十二年夏五月遠江國司始獻氷水鏡には仁德天皇二年中はしまるといへり蜻蛉卷に勘付畢日本紀云夏氷を水酒に漬して用ゆと云り氷水其義歟さうときは早速とかけり　枕草子云いみしくあつき日の中にはいかなるわさをせんと扇の風もぬるしひ水に手をひたしてもてさわくほとにと云々

すゐはんなと　河水飯　箋俗比目と云飯なり一説干飯云々うつほに此事あり　花うつほ十二に宮おとゝなとまりけ給ひて後すいはんしてまゐらせたる事あり今案いまの世にひろくなつけてくふ物なり

弄干飯なとの類水つけか花鳥の義あり開にほしひ

やうの物なり　秘今の世にもありてひめといへる物也或御説にはするはんとはひめとて飯をあつくしてあらふてくふ物なり

さうときつゝくふ　花もてさわく心なり　箋早速の字也比之目久體也　いそかはしき體なり　秘ひしめきてくふなりいそかはしき體なり早速なり

風はいとよくふけとも日のとかにくもりなき　秘夏の景氣おもしろく書けり　河てる日に夕せみなとの鳴たる暑き體也

せみの聲なとも　花山院御集　箋つかは虫は聲もたてぬに蟬の羽のいと薄き身もくるしけになく

水のうへむとくなる　箋源詞也此六條院は殿閣生微涼の比さへ難避暑今作なり　枕草子云無徳なる物鹽干の方にをる舟と云々　秘源の詞也かくまて六條院は涼しき所なるにたへかたきとはことの外なる暑にてあるよしなり殿閣生微涼の心あり

むらいのつみは　花無禮　箋無禮之罪也

いとかゝるころはあそひなとも　秘するわさもなきと也　弄あそひなともむつかしくくるしき心なり

わかき人々　秘人々にうちとけ給へとなり　或惣して奉公する人の事をの給ふなり

たへかたからんなほしひもとかぬ程に　素然云箋如此三本如此　箋帯紐なりなの字は詞なり一説しの字を入て直衣紐云々なほしひもとりぬ　一本聞解衣盤拍亦朝恩東坡

こゝにてたに　箋此心安き所にてせめて隨意に逍遙し給へとなり

おきなひたる心ちして　箋源の當官相國の義なり或年よりたれは世上の人も物遠くて物語をもきかぬなり

めつらしき事とて　秘人々の心なり　或内大臣の君たちの心なり

かうらんにせなかをしつゝ　高欄のかたへ背をなして居るなり

いかてきゝしことそや　秘源の詞也　箋源の詞也源に語り申せし人はいつくよりか傳へ聞けんと也聞近江君の事なり此人の事狂言にかき出したる也

ほかはらのむすめ　箋外腹也近江君の母少將君と云人なり云々

辨少將に　箋紅梅也

ことしくしう　秘辨少將詞也
さまて　箋辨少將の返答也
この春の比夢かたり　箋螢巻の末に見春比見給ひし夢と可心得云々　河螢巻に內大臣夢見給ひてあはする人めしてとあるよしの事也小町「はかなくも枕さためすあかす哉夢かたりせし人を待とて　花夢かたりは螢巻にあり此女は近江君の母少將君といふ人也　弄夢の事螢巻にありこゝには春比といへり春比み給ひしと心得へきにや　秘螢の巻のおくにあり春の夢なり　或內大臣の落胤腹に近江君とてあるをとりいて給ふ是はなてしこを尋給ふて螢の巻に夢をみてあはせ給ふに人の御子にみなし給ふなとゝあるを心もとなかり御子たちにわか子となのりする物あらは聞せよと宣ふ聞柏木中將聞出してすて給ふ也おかしき人也此事委源氏聞給うてしらぬやうにとひ給へは辨少將の返事也
われなんかこつへき　聞ゆかりの事なり
中將の朝臣　箋柏木事也
ふれはひぬへき　河觸なり　箋觸也睦觸縁したる心なり　秘觸なり能縁したる心なり弄同　聞縁にふれたるしるしやあるとなり
くはしき事はえしり侍らす　兄弟なれとも辨中將はくはしくはしらぬと也
めつらしき世かたり　近江君のおかしきさまをいふなり
おのつからけそんなる　河家損家のきすなるべき心也勘文云きすつきたる心也云々事日本紀態　箋家損なる事也　家の瑕となるへき心歟云々已上河海　箋曰家損の義は人のためと云詞聞えすけそこと云詞なるへし　けそうは顯證なりあらはなる義なりかやうの事は世上の人のめにかくされぬ物そとなり和語の習上の字を下にてはぬる事非一云々付之落胤腹なとあるは人の家損と也秘　私人のためといふに付て義は有へからさる歟我か事を人に對していふ時人のと我をさしていふ事常に有事なり
まことなりけりと　箋源心中也　秘さてはまことなりけるよと治定し給へるなり
いとおほかめるつらに　箋內大臣の息男女多き由なり　秘源の詞なりさらは內大臣は御子達あまたある物をとなり

おくるゝ雁　兄弟おほきを云り　箋他腹の數にもあらぬを云凡雁行は兄弟に比する故なり　河雁は父母の次に兄弟にたとふ列をみたらすとふ物なり是を雁行の禮といふ也　好忠集「るいよりもひとりはなれてとふ雁の友におくるゝ我身かなしも

いとふくつけきそ　少云秘なり　あまりにこと過たるとなり貪心なり槿卷にみゆ雪まろかしの所にあり　玉云弄なり念比なる心也仙云欲かましきと云々箋曰此義未決弄ふくつけき念比なる心なりあまりなる心なりおそろしき心也　聞欲ふかき樣なる心こもれり福つくる也云々　或御説には貪の字をよめり欲か多き心なり云々

いとをもしきに　河乏なり　箋乏也　源の御子の少き出なり秘同

名のりも物うきゝはとや　箋源をは思あなつりて申來る人なきと也戯なり　秘我身をはさしもなく思ふ故やらんなのり出る人もなきと也

さてももてはなれたる事にはあらし　箋源の推量に内大臣の息女は實事なるへし其故は　私如此先へ書かけたり如本也

らうかはしく　箋内大臣のかみ妄に色めき給ひし程にと也秘同

まきれありしほとに　もてはなれたる事にはあらしと上へくり返して見るてにをはなり　巳上箋　秘内大臣もそのかみはみたれたる事もありしと也

底きよくすまぬ水に　箋月は同光も濁水には影のくもるか如くいかに内大臣の息女なり共おとり腹は如何となり　弄をとり腹にありし女子にてさやうによるしからぬとなり　秘おとり腹ならは別したる事も有ましきとなり月も濁れる水には影くもらてはかなはさるなり

中將君もくはしくきゝ給へる事なれはえしもまめたたす　花木夕霧の事なりまめたゝぬとは實法かほをせぬをいふ心におかしとおもふなるへし　素然云花義尤可然　秘花鳥に夕霧と云々如何是は柏木なり此事柏木のとりもちてし出給ふ事なれは辨少將にさして此事をの給ひかくるゝなり　弄内大臣の息の中將近江君の事をよくしりたる事なれは物語を聞てまめたゝぬなるへし花鳥に此中將夕霧云々可然歟愚在猶不審或此弄の義をのす御説同柏木也花鳥の説

わろしと云々　聞柏木なり　箋曰夕霧なり花鳥の説可然非柏木其故は此席には辨少將藤侍従の兄弟兩人計なり柏木は今日の席に參入とは不見なり源氏辨少將を指て此ことを問給にて舎兄柏木の不參はみえたり　花鳥まめたゝぬとは實法かほをせぬを云心にてあしと思なるへし云々　私云此箋の義尤可然花鳥の義を用へしさて此詞のつゝきに朝臣やさやうの落葉をたにさ夕霧に源のの給ふなり

少將と侍従とは　秘こゝにてみえたり皆連枝をあけていふなり　箋少將は辨少將なり次男紅梅なり藤侍従は三男左衛門督也共以内大臣息の連枝なり

あそんやかやうの落葉をたにひろへ　花落胤腹をいふなり　秘夕霧をさしての給ふなり雲井の鴈にはさらひ給ふ事口をしく思ひ給ふ故なり　弄源氏夕霧にの給ふ詞なり落葉とは落胤腹の女子をなりともひろへとなり雲井鴈の事をねたく思ひてなくさめにとの給ふなり　箋源詞夕霧にの給ひかくるなり落葉とは落胤腹を云たにの詞字眼なりせめてそれをたにと云なり雲井鴈を許容なきをねたく思ひ給ふ故なり

人わろき名の　夕霧を内大臣のむこに會はきらひ給ふといはれんよりはと也

おなしかさしにて　河「我宿とたのむよしのに君しいらは同しかさしをさしてこそみめ箋引之　河近江君を雲井鴈の姉妹なれは同しかさしと云にや　秘内大臣の御子といふはかりにもと也箋載之　花父の大臣の夕霧に姫君をゆるされぬ事を源氏君の無念に思ひ給ひての給ふ詞也　箋云引歌わか宿とたのむよし能叶へり雲井鴈と云々心に任て我宿とたのむへき内のおとゝのあたりをよく／＼なれはせめておなしかけにかくるゝなくさめに此近江君をせめては尋ねよらめとなり此時は什しいかは近江君なりせめてと云詞は心に十分せぬ義なれはさやうの落葉をたにと云へる詞符合せり

ろうし給ふやうなり　河哢　嘲哢の義也　弄秘箋同

かやうの事にてそ　秘源と内大臣との御あはひなり　箋曰此段草子地也　源と内大臣との間を云

ひまありけるに　間なり　中のよからぬ事をひまあるといふ此字なり　河有隙なりたとへは心よからぬ事のましれる心なり

まいて中將をいたく　內大臣の夕霧に雲井の鴈をゆるし給はぬ事也
なまねたしとももりきゝ給へかし　源の此しりうてとをもつたへきゝ給へかしと御心ありてかくはの給ふとなるへし　草子地也
かくきゝ給ふにつけて　秘近江君を尋出し給ふ事をきゝ給ふにつけて玉かつらをみせたてまつりてはとおほす也　箋曰此一段源の心の內なり　近江君を尋出給ふ事を聞給につけて玉かゝらの事をさそと思ひ給ふとなり
たいの姫君　玉かつら也
又あなつらはしからぬかたにてももてさわきなんはや　秘はやは詞字なり　玉かつらをみせ奉らは又あなつらはしからぬ方に一段ともてはやされんとなり此近江君はあしきかたにもてなされてよそへももりきこゆるなり善惡につけてこと〳〵しき所のある心なり　箋はやは詞字なり　箋曰かくるゝまてにかへりみしはやの類也
かひある所つき給へる人にて　內大臣の性を源の思心也
よきあしきけちめ　人の善惡のけちめのある人也
もてはやし又もてけち　秘內大臣の性を云善惡のけちめ賞罸ある人となり　弄內のおとゝの心は人をもてはやして又かろむるにお人にすくれたりと也
おほえぬさまにて　秘一向にしらせてさしいたしたきと也　箋內大臣の覺悟も無に與風玉かつらをみせ申さはと也
いときひしく　箋曰緊の字なりゆるかせならぬ義也　玉かつらを養育之事義㒵聊爾なき樣に由斷あるましき由也少云也秘道仰云玉を內大臣にみせ奉らは一かとあるやうにもてなしてかく養育ありしは隨分の高恩そと思はせ奉らんと源の心中なり云々　私云是まて近江君の事の次に玉かつらの事を源のとやかくやとおほす心中なり
夕つけゆく風いとすゝしくて　聞只夕になり行體歟　前に日のとかにくもりなき空の西日になるほとゝいへるより夕になり行體なり又かせはいとよくふけとゝあれは日のよわくなるほと涼しき成へし
心やすくうちとけ　箋源の詞也秘同　各心やすくうちやすみなとし給へとて源は西の對へおはするな

るへし
いとはれぬへきよはひ　源の年なとたけぬる心を宣ふなり
にしのたいに君たちみな御おくりに　こゝにさふらふ人々なり　秘玉かつらの御方なり箋同
おとゝ　句如此ひめ君を　秘おとゝと讀切て心得へし
といて給へ　河外出也　少云外へ出給と也おとゝと讀切へし皆秘の義也
しのひて　句箋如此箋　源のひそかに玉かつらへ申給ふなり箋曰兄弟たちを玉へみせ申さんとて外出給へとなり然も程の近けれはひそかにの給ふなり
秘うちしのひて源のゝ給ふなり
少將侍従なと　秘これより源の詞也　箋辨少將藤侍從也　秘此一段源の詞也
ゐてまうてきたり　箋源の供奉あると也
いとかけりこまはしけに　花此人々姫君のましますす所まても推參したく思ひたれと中將の實法なる人にてしんしやくし給ふによりて外様にやすらふ心也　箋玉かつらを兄弟とも不知床敷思申也
中將のいとしほうの人にて　河實法或質朴　秘夕霧の實法をいへり　箋載之
箋曰夕霧もうち／＼の心はしらて此兩人をうとき人のつらさにさしはなたるゝ由也　聞少將侍従なとの此御方へ參りたく思ふを夕霧の實々しき人にてゐて來ぬと源の詞也　弄柏木中將しほうたてにて西對へも御送りにも參らす弟の君達はかり參り給ひし也又云夕霧のしほうにてさそひこぬと云々然は此時は右中將は不來とみゆ右中將はましてしつまりてみゆ云々あらまし事にや　私云始末の體柏木は不參なり此中將又夕霧勿論也
この人々は思ふ心なきならしを　箋少將侍従わか兄弟ともしらて心をそかくらめと也　或御説にかしこの人にとあそはす上のめりにつゝくへからす云云　私此義自然のあやまりなるへしめりかしとつつけて此人々といふ義可用之
なほ／＼しききはを　河直々聊得道心なり直人同心歟　秘なほ／＼しきは直人を云なり窓のうちなるとはおやの所にあるむすめをいふ也　箋こゝらの人さへ窓の中なる程はゆかしくおもへる常の事也
小秘直人なり數たらぬをさへ窓の中をは心ふかく

思ふをと也
この家のおほえ　箋六條院を云へり内證はさもなきをわか分際よりも世間のおほえは花麗なると也卑下也
くた〳〵しきほとより　河細砕白氏文集　秘さほとなき事をも人のもてあつかふならひなるにこれはことわりなり
思ひなすへかめるかた〳〵物し給めれと　箋曰此方方をは上へ引つゝけて見るへし此六條院をは心にく〳〵思ふ方々おほき也　私云此方をは思ひなすへかめると句をきりて方々とは秋好は源の御女の分にておはすれと中宮にておはす明石の姫きみはいまたをさなくおはしまし又世間からも后かねと思へれは中よるへきに非さるをいへるにや如何
さすかに人のすきことといひよらんにつきなしかし　箋曰かやうに人々心をよする樣なれと御息女の少き故に人のしたしみよらんたよりのなきことなり　聞源の内々のさまよりも外聞のこと〳〵しき故にいひよるへきつきもなしといふ心歟云々
かくて物し給ふは　箋玉かつらを養育あるは年來の本意相叶と也
ねかひおもひし　秘人々の心の程をもみるへき本意に叶へるとなり　私人のけしきのふかさあささはかやうの好色の事なとにつけてこそ人の眞實の程もちひはみゆへき事なれは也
おまへにみたりかはしきせんさいなともうゑさせ給はすなてしこの　河牛麥萬葉　石竹(ヤマトナデシコ)萬　箋金錢白氏文集
ませいとなつかしく　河架　籬也　花みたりかはしきせんさいとはあれこれをうゑすしてたゝなてしこはかりをうゑられたるをいふなりなてしこはたまかつらにたとへ侍りはゝきゝの巻に山かつのかきはありともと云る歌よりたとへきたるなり
みなたちよりて　秘殿上人なとなりと夏のことなり玉かつらの事をふくめり
心のまゝにも折とらぬを　箋殿上人共なり玉かつらの事をふくみて折とらぬをあかぬといへり　弄とこ夏の事を玉かつらによそへての給ふ也
いうそくともなりな　弄ほめたる詞なり　秘源の詞なり玉かつらはよき親類のあまたあると也　箋源の詞也　有職者そと各褒美し給ふ也

右の中將はまして　秘柏木なり花同　箋曰柏木なり源氏うはさをの給ふなり此人數の內に居給ふにはは非す

いかにそおとつれ聞ゆ物や　秘岩もる水の歌の後は文のかよはさゝるかと也

はしたなく　秘さしはなちたる樣にはし給ふましきそと也

中將の君はかくよき中にも　箋物語の地なり　秘夕霧なり別に傑出するなり草子地也　弄夕霧の事也

中將をいとひたまふこそおとゝはほいなけれ　秘源の詞雲井鴈をゆるされたる事なり箋同　花おとゝは內大臣をいふこれより玉鬘君との物語なり

ましり物なくきら〳〵しかめる中におほきみたつすちにてかたくなゝり　花夕霧の事なりかたくなゝるは頑字なりこれは愚なる心なりてゝにはたくみたてなかるへき事にいへり　秘后なとに皆たつへきと也こと王孫なとはいやとなるへし箋載之　箋秘后云々同上　箋曰內大臣は攝籙の臣なり源は王孫華族の臣にて有也と思ひくたさるゝにやと也　私源の宮大臣の君達の人にすくれたる中にも夕霧の又一かとすくれたるをみ給ひて自慢の心も有へし箋の義然へき歟

きまさはといふ人も　弄玉かつらの詞也　秘玉鬘の詞なり雲井鴈の事也催馬樂の詞にて書り云イ　箋源の詞におほ君たつとの給へるを吾家の詞にとりなして答へ給ふなり夕霧の方よりきまさはむこにせんの心なれ共夕霧のつれなき故そと內大臣を方人しての給ふなり花說同之已上箋　河催馬樂　吾家云わか家は帳ちやうをもたてたるに大君きませむこにせんみさかなにはなによけんあはひさたをかかせよけん　右箋同載之　弄上のことはにおほきみたつとの給ふ詞によりて催馬樂吾家の詞をとりてむこにせんといふ心を玉かつらのこたへ給ふ也

いてそのみさかな　秘源の詞同催馬樂の詞　箋源詞今さらもてはやされんよりはなとやおさなきとちのまゝにてみ給はぬとなり箋曰弄云々　花此御さかなも我家の詞にありてと〳〵しきむこいりの作法を云なり

たゝをさなきとち　箋三條宮におはせし時の事也秘

むすひ置けん心もとけす　河萬「岩代の野中にたて

るむすひ松心もとけすむかしおもへは　私箋　秘等に不引之此歌に及はさる歟　聞私とけすとは不逢歟是愚案なり如何是又不及引歌

また下らうなり　箋淺黄の事也　秘源にまかせ給ふともあしくはすましき物をと也

うめきたまふ　源の體なり　箋私云鬱陶し給ふ也　箋曰嗟嘆也

さはかゝる御心のへたて　花是は玉かつらの心に思ひ給ふ事也　箋玉かつらの心なりさては源と内々は底の心に述懐おはしけるよと聞給ふ也　秘玉かつらの心なりさては源と内大臣との御中かやうのへたても有けるよと也

おやにしられたてまつらんことの　秘玉かつらの心にかやうに源と内大臣との底の隔心あらはわか身の實父にしられ奉らん事もいつとも知れぬと思ひ給ふ其故は源の懇切におはするをさしおきて實父にしられたきと玉かつらのすゝみの給はん事も成かたし源の御心とあらはし給はん事もいつかと心もとなくおほす也

月もなき比なれは

猶けちかくてあつかはしや　夏は灯の近きもあつきと也

篝火こそよけれ　或はかやうにと灯をたにあつかはしとて篝火いかゝなれともかゝり火は水のうへなとに遠くたく物なれはあつからぬ也

おかしけなるわてんのあるを　和琴

りちにいとよくしらへられたり　箋律云夏也如何云云　箋曰諸樂器平調をいろはとして五常樂を始とする者なれ今玉かつら初學ときこゆ然らは平調勿論の事歟惣別平調は祝言に用ひて四季通用なり旁以平調と云へし

かやうのことは御心にいらぬすちにやと　秘和琴をいへり玉かつらはかやうのかたはすき給はぬ歟と思ひあなつり給へれはよくしらへ給ふと也　箋乙甲に乙のしらへの調りたるを源の御らんしてさては和琴をひき給ふよと驚き給ふ也此一段源の詞也

秋のよの月影すゝしき程いとおくふかくはあらてむしの聲にかきならしあはせたるほと　秘月ゆゑはしちかきよしとなり　弄月なとのよはしちかくの心なり　箋曰今案箏は小音の器にて奥ふかくものに

こもれる音の聞所也和琴はすみのほりたる物音なれはしちかくけちかき音のいまめかしきと云にや新涼の月の下尤可有其興歟又今案和琴のうへにある時は奥深くはあらてとは和琴の物あさき音の初秋のをりにあひたるを云けちかくいまめかしきとは諸樂器に合するよりも此物の音計聞近く虫の聲にひゝきあひたるめづらかなると云にや以上箋

こと〳〵しきしらへもてなしやしとけなしや　秘しとけなしやと也弄同　箋曰こと〳〵しきしらへにてなしとは弓はつ六張の形をつくりたくほくに絃をすけはれる誠にこと〳〵敷しらへなり　箋曰しとけなしやとは弓とりひろけたる器の作法なり

この物よ　和琴也　箋此物よとは和琴をいへり　聞廿五絃とはあまり事々數なりさやうにてはなく六絃にて萬の物の音こもるとなり

さなからおほくのあそひ物の音拍子をとゝのへとりたるなんいとかしこき　秘色々のあそひ物の音拍子を調る物也　箋此器にて諸樂器を調ると云々　私いとかしこきは此詞の末へつゝけてよむ字なり

やまとことははかなうみせて　秘皆或は高麗もろこしの樂器多き也　箋事の字にかよはしめてかけり　ヶ曰物あさきやうなれと手にてもれると云なり　以上箋　いとかしこきやまとことはゝかなくみせてやまとことは和琴の名勿論なりしかれともこゝにては和國の事といへるにやもし又そへことなる歟如何又和琴の名すゝかくちめ花そのあまつ絃六すちなり　花和琴の事也　河海の説あやまれる本あるにや　私のかしてき詞いとかしこきやまとことゝつゝけてかけり如何上の詞へつゝきたるよし

ひろくことゝ國のことをしらぬ女のため　秘女なとのためにしいてたる物かとなり　箋曰左樂は大唐右樂は高麗いつれも外國の樂なり箏なとは女のためふさはしき器なれ共深く事の心を學はんには女のため物遠かりぬへし和琴は諸樂器にひろくかよはしてきはもなき樣なれとさすか我國の器物にて外に求め調されは女のため相應なるへしさるによりふかき心とてなにはかりもあらすといへる是也　猶一説あるへし以上箋

物なとにかきあはせてならひ給へ　源の玉かつらへの給ふ詞なり　和琴をすゝめ給ふ詞なり　秘昔は

樂にあはせしなり近代大方絶たる歟 箋昔は諸樂
器に合せけるを近代漸絶と云々譜は一卷今に殘れ
り纔に五常樂計傳れり
ふかき心とて 秘和琴は琴なとのこさくにさのみふ
かきことなき物なり 秘和琴は琴なとのことくこ
もれる事はなき樣にてこまやかならぬ故に眞實に
ひき得るものまれなるへし
このうちのおとゝ 箋致仕大臣也
おなしすかゝきのほとに 弄和琴にある事也云々
箋菅搔片搔と云事あり 河和琴にあり左の手にて
つかふをはおりすて右の手にてはちにてかくを菅
かきと云 源語類字云菅攪(搔イ)和琴に有 私云餘り絃
にあるへからす 或箏にすかゝくといふ事なし琴
にある詞なり管を絃に云々 私云此事不審可尋之
よろつの物のねこもりかよひて 箋ケ曰和琴はたを
やかならぬ物の音なるを諸樂器に合せん手しな堪
能の所行たるへし惣別樂器棟梁として音律を此器
にして調ると聞えたりされは上の詞におほくのあ
そひ物の柏子をとゝのへたるなんいとかしこきと
あり以之可知之

いふかたもなくてそひゝきのほれと 内大臣の和琴
のすくれたるさまを源の玉かつらへかたりきかせ
給ふなり
ほの〳〵心えていかてとおほす事なれと 秘玉かつ
らはちと心え給ふなり 箋玉の心の中也 ケ曰此
器に手ふれて始て心にしめ給ふゆゑ彌父をゆかし
く思ひ給ふなり
いかてとおほす事なれは 弄玉かつら父をゆかしく
思ひ給ふ也 箋私此のいかてとおほす事とは和琴
をいかにして熱心の義歟それにひかれていとゝ父
内大臣を玉かつらのいふかしくおほすといふなり
但いつれにても心はたかふへからさる也
此わたりにてさりぬへき御あそひのをり 花玉かつ
らの君の詞也 秘玉かつらの心なり 内大臣の和
琴をきく事もあらんかとなり 私云源へ玉かつら
のの給ふ詞トみゆ 箋玉の詞此六條院にて御遊の
次に内大臣の物音を聞給ふついても有なんやと也
あやしき山かつなとの 箋誰もひく人はあまた侍れ
とすくれたるは有かたきと也 秘あやしの人々も
もあまたひきなれはたれもするわさにやと思給し

にさてはさやうに勝劣のありけるにやと也　聞大かたの人のひくは淺き事はかりなる故に安淺イきわさそと思たれはさやうにはおくふかき事のありけるよと玉かつらのの給ふ也

さかし　花是は源氏の御詞なり秘同　箋源詞也　ケ曰さかしは賢の字なりむかひの人の分別かしこしなと領解の詞也　秘の賢の字といへる不審なりさそかしとうけたる詞なりあまた所に此詞あり

あつまとこそ　弄ゐ中ひたるやう也　秘山かつなと云にかゝれり　弄ゐ中ひたるやうなる也　箋上の詞に山かつのとの給へるをうけての詞なり東夷に取なして名はゐ中ひたるとの給へり

御まへの御あそひにもまつふんのつかさをめす　河圖書云裏書累代の御物被置所也　和琴は伊弉諾伊弉冊尊令作出給云々仍諸樂器の最上におかるゝ也　花和琴は伊弉諾伊弉冊の二神の御代よりいてきたるうつはものといへとも日本紀なとにはみえ侍らす又天岩戸に天照大神のこもりたまふ神宴よりいてきたるともいへり最初は弓六張をならへてつるをうちならしゝより和琴といふ物はつくり出したるともいへり今の世に巫の口にするとて弓のつるをうつはかゝる事よりおこれるにやふんのつかさは男官をは圖書寮といふ女官をは書司といふ和琴を書司の女官あつかり申也名をは御たならしといふ又は朽目或宇多の法師なとゝ和琴の名物なりわか國より出きたる器なるによりていつれの樂器よりも上におかるゝ事となれりさるによりてこれをものゝ親とすともいへり此詞は內のおとゝの和琴の上手なる事をいはんとてなり　秘花鳥にあり　箋花云男官は圖書寮女官は書司と云和琴をは書司女官あつかり申なりわか國より出現の器なる故に諸樂器の上におかるゝ事になれり仍て是を物のおやとすと云へり云々御たらし朽女或宇多法師各名物也和琴の濫觴於天岩戸の前神宴の時弓六張を並て弦を打鳴しより起れり一說伊弉諾伊弉冊尊作給云々　日本紀には不見云々以上箋

これをものゝおや　秘和琴をものゝおやといへる妙なり

その中にもおやとしつへき御手よりこそ　河內大臣すくれたる和琴の上手となりされは玉かつらの君

彼手より引とるへきにいまた露顕せさるによりておやとしつへきと源氏いはれたる也　箋内大臣の事也これをの給へきためなり
こゝになとも　箋秘に此わたりにてさりぬへき御あそひのをりなとにとありし返答なれは如此の給ふ也
此ことに　箋曰此和琴の事にと云又此琴にと云歟　聞此事に手惜まぬ也　私和琴事に通はして見て可然歟
てをします　秘こゝなとにて手ををしますひきたまふへき事は有かたきと也　箋諸藝堪能の人手を殘して殘り多き物なれはてをしますひき給ふましきとなり
しらへすこしひき給ふ　只今源の和琴をすてしひきならし給ふ也
ことつきひう　箋花云狛氏十巻抄云ことつき事粒ことさい三説ありつきは人のかはつきなりついは其姿かはつはみたる物から物々しくけたかく濃にあひたる心也目由の曲をせしたる姿を云ことあり其心性に向しかせみたるとは早き物から閑なり假令人の大足に走るに小足に走る風情なりことつひは事の字なり和琴の字にあらすことついは今の人のあしくよみ誤れるなり不用之　秘源のかきならし給ふ體をいへり花鳥にみえたり箋同載之さひうイ本にいとになくゝ有てきひうの詞なし　箋私云心得さる事なり何樣うつくしき體なり　箋曰琴さきをつひと書誤歟此花鳥寓の誤と見えたり重可決之已上箋　私云琴さきとは和琴をひく角にてしたるはち也　弄花鳥に委しことつきなと云詞あり琴の躰也　河ことつひは琴粒さかけり和琴にことついことつきことさいと云事なり狛氏十巻秘抄にみえたりと云々たとへはことついとはそのすかたなり或説事の字なり和琴の琴の字にあらすと云々
これにもまされるねやいつらんと　秘只今源のひき給へるたくひなきに是よりまさる事はいかゝ有へきそと思ひ給ふ也　箋曰大臣の事なり源のしらへたくひなしと聞に是にまさらんはある間しきの由なり
此事にてさへ　箋曰上に此事と云詞あり同し歟相違歟可付眼又此次の詞にもこの御事によりとあり

一同歟凡工夫すへし又末にたゝ此事のみとあり労
以可付眼
ぬきかはのせゝのやはらた　箋河に貫河催馬樂呂ぬき川の　せゝの　やはらか　たまくら　やはらかに　ぬるよは　なくて　おやさくる　つま一段　おやさくる　つまは　まして　うるはししかしあしはやう〳〵はやはきのいちにくつかひにかん　二段くつかはは　ちんかいの　ほそしきをかへ　さしはきて　うはもとかきて　みやちかよはん　三段花ぬき川のせゝのやはらたはたまくらといはんとて下のもしを略していへりうたふ時にかやうにきこえ侍るにや又おやさくるつまもぬき川の詞にあり玉かつらの君の事を思ひよせてうたひ給ふ故にすてしうちわらひ給ふとはかけるなるへし（まイ）　弄問やはらた如何うたひなとにはやはらたにくらとある歟　答云の字は手枕のたなりうたふ時にたらしにてゑからつる程なる歟又まくらを略してたとはかりいふ歟一捌おやさくるといふを源氏のおやめきて玉かつらのそむき給ふによせてうらみ給ふ也　花鳥の義同之　秘うたふ時にたの字まて上のふしにつきて聞ゆるをいへり花鳥にみえたり箋載之　箋曰和琴は律の調と見えたり貫河呂の歌頗不審なり如何但此時夏なり前のしらへを源のひき給時改ためて呂にしらへかへられたると心得へき歟

おやさくるつま　箋秘に二義あり源の内大臣をさけ給ふを云也又の義には源をおやのやうに玉かつらのし給はぬを云なり箋曰後の義相違歟子の身としては親の心にそむかぬ物なるを源にしたかひ給はぬをそこにふくみておやをさくると取なし給へり

いてひき給へ　箋源詞也　いて　河云厭歟日本紀

さえは人になんはちぬ　花才なり　秘一切の藝能人にはちてはなりかたきよしなり老人のをしへなり　箋一切の藝能あまり人におむる心あれは人中の所作はならさる物なり殊に樂は斟酌の氣にては成かたし後人のをしへを云へり

さうふれん　河想夫戀平調文字につきて此樂はかりこそ女は憚るへきといへる心なり即問向來弾了曲蕃人不尋相夫憐千載佳句　箋想夫戀平調　花に唐書には想夫憐とかく日本には想夫戀と書之同心なり夫を

思とよめる故に女は其心してひくへしと云り云々
箋曰此樂は女の心の中には心よせなるへきをさす
か名に耻てひきかぬる人そあるらんと云にや
おもなくて　おもてつよくて也　箋秘に耻給はて誰
にも〳〵合奏し給へと也
さるゐなかのくまにて　秘玉かつらの心なり　花く
まはかくれたる心なり是は玉かつらの心なり箋同
ふるおほきみ女の　河王女　王孫の女なり箋　秘ふ
る宮なとの女のはてなり箋載之
てふれ給はす　玉かつらの手をもふれぬなり
しはしもひき給はなん　秘玉かつらの詞源にいまち
とあそはし給へと也　箋玉の詞心もとなきにと云
切てしはしもひき給はなんと返して見るへきなり
私云しはしもといふより心もとなきにといふまて
玉かつらの心なり詞といへる如何心の内に源の今
しはしひき給へかしきゝならふ事もやと思ふとな
り末にいかなる風のといふより玉の詞なり
この事によりてそ
ちかくゐさりよりて　常は玉かつらの源へ隔心ある
か此和琴の事によりかく近く源のそはへ玉かつら
のゐさりよる也
いかなる風のふきそひて　花是は玉かつらの詞也
玉かつらの源への給ふ詞なり前にいかなる風のか
よひてか各別の音(聲イ)はいつらんと源の引給ふ和琴に
めてゝの給ふなり琴の類には風のかよふ事縁ある
にや
わらひ給ひて　源のわらひ給ふなり
みゝかたからぬ人のためには身にしむ風も吹そふか
ら　花是は源氏の返答の詞也　弄源氏の我御事也玉
かつらの耳かたき心をもての給ふなり　箋云河の
說一同云々　秘源の我御心かけ給ふすちをは聞も
入給はさるを云又の義に此琴に心をしめて聞給ふ
故にと也箋同　箋秘の後の義ならはおしやり給ふ
には卑下の心なり前の義ならは恨みたる心也　或
御說耳かたからぬとはさとき人となり耳のかたき
はとんにきとくなき事と也云々　私此義に付て案
するに耳かたからぬはさときなりそれを玉かつら
の耳かたきには鈍にさとからぬにてはなくて源の
の給ふすちに耳かたきをかよはしての給ひなす成
へし如何

なてしこをあかても此人々を　秘前に有し事也　箋
源の詞也　瞿麥前にあり
いかておとゝにもこの花その　箋秘に玉かつらの事
をふくめり
世もいとつねなきを　秘世はさためなき物なれは也
弄同
いにしへも物のついてに　花昔の雨夜の物かたりの
すてになてしこの事をの給ひし事なり　秘雨夜物
語事也箋弄同
の給ひいてたるにも　秘夕顔上の事をおほし出たり
源氏 箋弄
なてしこのとこなつかしき色をみはもとのかきねを
人やたつねん　秘玉かつらのなつかしく思ひ給よし
を内大臣へ申給はゝ夕顔上の行衛を尋出給はゝか
へりてわつらはしかるへきと也　弄玉かつらを内
大臣へみせたらは必す夕顔上の行衛を尋給ふへし
それかわつらはしさに思ひやすらへると云也弄
花野宮歌合判歌に源順「秋もなほとこなつかしき
花の色をうたかひおける露そはかなき　今案もと
のかきねは夕顔上の事を云り「山かつのかきほあ
るともゝ折々にあはれはかけよなてしこの露此歌に
よれる詞なりぬしを内大臣にみせ申たらはもとの
垣ねをあやしみ給はんはわつらはしかるへきと也
このことわつらはしさにこそ　前に注せり
まゆてもりも　秘いふせきと也　河「たらちねの親
のかふこのまゆこもりいふせくもあるかいもにあ
はすて　弄玉かつらの事をうち出ぬ事也　花是は
玉かつらのこもりゐて父にしられ給はぬを心くる
しきとなり私河弄秘花等の義箋皆載之
返玉かつら 山かつのかきほにおひしなてしこのもとのねさしを
たれかたつねん　弄「玉かつら母うへの事を卑下し
たるなり下句又卑下也　秘我身をも母上をも卑下
したる也　花玉かつらの心にはもとの事までは内
大臣殿もなにかたつね給はんたゝとくたいめんあ
らせ給へかしとの心也
なつかしうわかやかなり　玉かつらのさま也
こさらましかはとうちすんし　源のすし給ふ也　花
本歌有へし未見出之　弄同　箋秘に引歌未勘心は
只今てゝへ源の御出なくはかゝる一ことをも聞給
ましきと也

えしのひはつましう　源の心也
わたり給ふ事も　玉かつらの方へ源のおはする事也
御心のおにゝおほしとゝめて　われと心にいかゝと
思ふさなり　さてわたり給はん事をもとき〳〵は
思ひとまり給ふとなり
さるへき事をしいてつゝ　ことのたよりをつくりい
てゝ文をは細々をくり給ふなり
たゝこの御事のみ　秘には此詞ありて箋にはなし
秘さま〳〵に思案し給ふなり
なそかくあいなきわさをしも　箋是より源の心中に
さま〳〵工夫也
物おもひをすらんさおもせしとて　さらは物を思は（なはイ）
しとて心のまゝに玉かつらをおひみ玉ひつゝ源の
御ためはさておきぬ玉かつらのためもいとほしか
るへしとなりこの人のためとは玉かつらの事也
かきりなきおほえ（御こゝろざしイ）といふとも春のうへの御おほえは
かり　箋春のうへとは紫上也秘同
わか御心なから　源の玉かつらを我物にてみ給ふと
も紫上ほとにはえおもはしと我心に思ひしり給ふ
也

さてそのおとりのつらにては　箋なましいの數にも
あらぬなみにては如何と也　秘皆々のなみにては
曲も有ましきと也
わか身ひとつてこそ人よりはことなれ　源の我身をお
ほす也
みん人のあまたか中に　源の一身は人にすくれたれ
ともそれになりとも思ふ人あまたの數のうちにな
らんは女のためにはおほえもなき事と也
ことなることなき納言のきはのふた心なく　さした
る事なき納言ほとの人なりとも二心なき人ならは
女のためには源のあまたの中にてあらんよりはま
さるへしと我事を思ひ給ふ也
宮大將なとにや　箋螢兵部卿宮髭黑也
もてはなれいさなひとりて　河引率日本紀　秘宮大將
なとのふとゝりて行給うては也　花鳥の說いかゝ
箋其人の方へむかへ取てはよ所人にみはて給はん
は如何となり　花もてはなるゝはわか御事なりい
さなひとるは納言なとのきはの人を云也
いふかひなきにてもさもしてんとおはすをりもあり
玉かつらのぬしに成つらん人のむかへとりてゆか

んはいふかひなき事なから玉かつらのためなれはさやうにもやせんと源のわか事を思ひはなれんとおほす時もあると也

されとわたり給て御かたちをみ給ひ　又おはして源の玉かつらをみ給へは思ひはなたれぬと也

いまは御ことをしへ　和琴也

ひめ君も　玉かつら也

かくてもなたらかに　河平日本紀　源のまことにはみたれ給はぬなるへし

猶さてもえ過すましくおほしかへす　源の心なり前の詞に思ひもたえなんやいふかひなきにてもさもしてんとおほすをりもありといふ是は源の思ひはなれむとおほす時の事なりかやうになれ給ふ時は又たゝは過しかたくおほしかへすと也

さは又さてこゝなから　さらは又也　秘宮大将なとをむこにとりてむかへておくへきとなり關守つよくとも物なといひかはすたよりにはよかろへき歟と也　箋此玉かつらを取はなし申されすして六條院にをき申されなからぬしを定めらるへき歟となり其故は關守つよくとも守りめの隙はあるへきそとなり

かくまた世なれぬほとのわつらはしき　よなれぬとはいまた世になれぬ心なり心は源氏の姫君をいひなひかさんほとのわつらはしさをいふなり

おのつからせきもりつよくとも　花人はせくともせかるましき心也　河「人しれぬ我かよひちの關もりはよひ／＼ことにうちもねなゝん　箋弄云一禪云關守とは常に其人を守護する事を云其儀にても無相違歟云々　人しれぬの歌によれり

物の心しりそめなは　よなれたるかたの心つきそめなはなひかしやすらんとおほす也

いとほしきおもひなくて

わか心もおもひいりなはしけくともさはらしかし

河「つくは山は山しけ山しけゝれと思ひいるにはさはらさりけり　弄秘箋引歌同之

いとけしからぬ　秘草子地也　箋ぬしありなから心かけ給はん事は以外の事也

いよ／＼やすからす思ひわたらん　かやうにあらは一段とおもひのまさるへきと源の心中也　箋中々の物思ひ也そふへき也

なのめにおもひすくさんことの　箋我物に得給はん
も源の御心まかせの事なからそれは主の始末の義
を如何と思入れ給ふにさすかに御覧しはなち難け
れはとにかくにおしなほしえ思すて給はんことの
かたき由なり
よつかすむつかしき　箋草子地なり秘にはいとけし
からぬと云一句を草子地云々誤れり
内のおほい殿　箋致仕也
いまの御むすめ　箋近江君也秘同
殿の人もゆるさすかろめいひ　内大臣の家中の人々
も此近江君とりはやし給へからぬ事とかろ〳〵し
く各申と也
世にもなきたる事と　弄ほけ〳〵しき心ほれたる心
也　秘ほうけたるなといふ詞也　箋弄云ほけ〳〵
しき事と云々ほうけたるなと云詞也
少將のことのついてに　箋辨少將也秘に源の問(宣イ)給ふ
よしを父おとゝへかたり給ふ也
わらひ給ひて　内大臣也
さかしかしてにてそ　箋是より内大臣の詞　箋曰さ
かしわりまことこそと詞に有玉かつらの事成へし

山かつの子むかへとりて　玉かつらの事を内大臣の
の給ふ也
みとゝめてそおとしめ給ふやと　世上のためには隨
分よくおはする源なれ共此内府のあたりの事をは
目にたてゝ何事をもの給ふと也
是はおほえある心ちそしけるとの給ふ　箋かへりて
面目と也　花かの御詞にかくる(ゝイ)は中々おほえある
心ちするとめんほくしき事なり　聞源のかやうに
目かけ給ふは内府のおほえそとなり對合してあら
そひ給ふ心有なるへしといふ理なり
少將かのにしのたい　箋玉かつらをほめ給ふ也秘同
おほろけにわらしと　箋秘に大かたにはなくすくれ
たるとおほしきと也
いてそれは　箋いしの詞上にいてひき給へと有云々
秘内大臣の詞也源の御女と聞より名も聞ゆるなる
へし
人々しき程ならはとし比きてえなまし　さほと然へ
き玉かつらはとくよりきてえあるへき事なるにさ
もなくて此程かやうなるはすくれたるにてはあら
しと也

あたらおとゝのちりもつかす此世に過給へる　花ちりもつかぬは人にけされぬなり此世にすきたる過なり

おもたゝしきはらに　箋紫上御腹也弄　花おもたゝしき腹とはおもておこすほとの人の腹に御娘をえてかしつかまほしく思ひ給ふれといまにさる事もなきは大かたの御子の縁もなきやうにみえたれは今より後をおほつかなく思はるゝとなりおもたゝしきとは紫上なとに御子のなき事なり　箋生得御子のすくなきか源の御身には一つのかけたる事をあたらおとゝと云へり　ちりもつかぬとは人にけかされぬなり此世に過たるは才徳をさしていへり以上箋

おとりはらなれと　明石の姫君也入道の女のはらなれはかくいへり

そのいまひめ君はようせすはしちのみこ　河實の御子　箋玉かつら也　實にはあるましき不審と也秘

さすかにけしきある所つき給へる　源氏の事也

いひおとし給　河云下す也

さていかゝさためらるなる　玉かつらを宮大將なとの内いつれにゆるし給ふそとなり

みこそはまつはしえ給はん　御子こそは先は仕得給はんとなり螢兵部卿をむこに取給はんとの推量なり其故は兄弟の中なから源と間のよろしきなり又人からも然へきと也

人からもいときやうさくなる御あはひともならんかし　聞兵部卿宮をほめたる詞なり御あはひならんとは源のむこにてもたかひに然へきと也

猶ひめ君の御事　箋雲井鴈也　秘同花

あかす口をしくかやうに心にくゝもてなしていかにしなさんとやすからす　此やすからすにて何をきり心うへし

いふかしからせまし物をと　箋ゆかしからせんとなり　私人に心にくゝゆかしからせん物をと也

位さはかりとみさらんかきりは　花夕霧中將の位もあかり給て後むこにもさためんと思給ふ也　箋夕霧公卿にも成給うてゆるすへきの心也秘同

おとゝもねんころにくちいれ　箋源の御方よりの事也秘同

かへさひ給はんにこそ

男かたはたさらに　夕きりの心には内大臣の方よりまくる樣にし給はてはとおもふ心ありて心いられをみえぬなり此心前にみえたり

心やましくなんとかくおほしめくらすまゝに　内大臣の心夕霧の思ひいられぬ事なり又わか御娘たちのおもふやうならぬ事も此源の近江君の事なと聯する樣にの給へるを聞給ふにつけても雲井鴈の事とやかくやと心中に思ひ給ふ也

ゆくりもなくかるらかに　箋内大臣の心中にさまさま思ひつゝけ給ふあまりにうかりと思はすに雲井の鴈の御方へ與風おはしけるなりゆくりなくは不意也　秘雲井鴈の御方へ與風わたり給ふ也　花内大臣の思ひもかけぬと雲井鴈の御方へふとわたり給ふ也

少將も御ともに　辨少將なり

ひめ君はひるねし給へるほとなり

うすものゝひとへをき給うてふし給へるさま　雲井のかりのひるねのさまなり

あつかはしくはみえす

扇をもたまへりけるさなからかひなをまくらにて手に扇をもちたるをそのまゝ枕にしたるなり

人々も　雲井雁にさふらふ人々もうちやすむなり

扇をならし給へるに　箋内大臣也

何心もなくみあけ給へる　雲井鴈おき給へる體なり

うたゝねはいさめきこゆる物を　河纈乃庶反又人渚反陟寢見莊子「たらちねのおやのいさめしうたゝねは物思ふ時のわさにそ有ける　箋はしちかきうたゝねなとはかろ／＼しきといさめ給ふなり秘同引歌　たらちねの親の云々箋同此引歌味あり　私雲井鴈は夕霧と中のへたゝりて物思ふ人なり

女は身をつねに心つかひして　私をしへなり心を付へし　箋内大臣の教訓なり　此一段女のをしへの金言なり可付眼也

さりとていとさかしくみかためて　女のさかしかり過たるも又惡きことなりみかためてとはみかたくて歟又身かためて歟

ふとうのたらにによみゐんつくり　河ふとうそんのたらによみ　河不動尊陀羅尼慈救呪歟　素然云此事不審釼索印或刀鞘印歟　箋曰わなかちに印明の事にはあらぬことをつくりたる體をいへり

うつゝの人にも　聞　いつもなるゝ人の心なり　箋秘
に現在の人にもさし向はさるをいへり人遠なるへ
き由を云なり
きさきかねのひめ君　箋明石姫也秘　花伊勢物語に
むこかねとありかねは器量なといふかことし　私
きさきかねは后に成へき下地をいふ歟兼ていへる
心歟如何
よろつの事にかよはしなたらめてこと〱しき故も
つけしたと〱しくおほめく事もあらしと　花こと
ことしきは過也たと〱しきは不及なり過不及な
きを中庸の道とするなり　私かよはしなたらめと
は平等の心なり是も過不及なきの心なり平の字を
なたらめとよませたり　秘かと〱しき故とはお
ほめかしき事なき也
けにさもある事なれと　是も内大臣の評判也
たてゝなひくかたは　花心のひく方には非す其方へ
なひく習なりさやうにをしへなさんと思へとも人
人生得の心のおもむきある物なれは心のまゝには
あらし生れつき給る赴有へしといふ也
この君のひとゝなりみや仕へに　成長　箋明石姫君

なり秘同　明石姫君入内なとあらん時こと〱し
き事有へしゆかしきと内大臣の給ふなり
おもふやうにみたてまつらん　箋雲井鴈の事なりて
き面にの給ふなり秘同　花是は雲井鴈の事をの給
ふ也
思ひしすちはたかふやうに　箋夕霧の事故春宮の事
は思絶たるとなり秘同
いかて人わらはれならす　夕霧にゆるすとも事さま
然へき體にしなしてゆるさんと内大臣の分別也
こゝろみてとにねんころからん　箋夕霧の事也　秘
夕霧の事なり念比に人も心にいれすはなひき給ひ
そと也　箋試み事にと云なり人の心みるへきため
はかりのうきたる事にしたかひ給ひそとなりこゝ
ろみことにと濁て讀へし花鳥には人の心をみんと
て思はぬ事をも念比に云事也云々此義可然也
ねきことになしはし　河禰宜言　河「ねきことをさの
みきゝけんやしろこそはてはなけきのもりとなり
けめ　箋弄閑等引歌同之
むかしは何事も　花是は雲井雁の心也
秘昔は何の分別もなかりきいまなん過しかたもと

りかへしはつかしきと也　箋雲井鴈の心なり乙女巻のをさなきとちのひさへ心のむかしを今立かへり恥給ふよし也

いとほしかりしことのさわき　夕霧のためも雲井の鴈のためにてもあるへし

いみしうはつかしき　雲井鴈の心也

大宮よりもつねにおほつかなき事を　弄雲井鴈の事をの給ふなり

かくの給ふかつゝましくて　箋祖母の御方へも此内大臣の一言故わたりかよひ給ふ事もなき也かくの給ふとは父内大臣の事也

おとゝこの北のたいのいま姫君に　箋近江君の事なり是より以下近江君の事を云也

さかしらにむかへゐてきて　是も進心の心歟さし過たる心也

かくてこめおきたれはまことにかしつくへき　かやうに人々しからぬ人を眞實に物ふかく物めかさんとするかと人のいふもねたくと近江君の事を内大臣のおほすなり

さるをこのものに　箋花云あなつりくさにする心なり　聞なふり物になと云也

かたちはたいとさいふはかり　人はいひおとせともかたちなとはさのみくるしからぬと也

女御の君に　箋弘徽殿の女御也秘同

わかき人々のことくさには　さふらふ人々なとのわらひ草なとにはなあなつらさせ給ひそと也

わつらひつゝきこえ給ふ　内大臣のかくの給へとも心にもおかしくおほするなるへし

なとかいとさ　箋女御の御返答也秘同

ことのほかには　箋さやうに事の外にはと也

中將なとのいとになく思ひ侍りけんかねことにたえすと　秘柏木なとのかねては然るへき人なるへきと思ひの給ひしにかはりたるといふはかりなるへし

さりともと心にくゝ女御の思ひ給ふ也　箋柏木なり此人近江君を尋出給ひし故荷擔ありしかとも十分ならぬと云よくほりにてそと推量し給ふよしをよさまにの給ひなすなり花の説秘義に同し仍畧之

かくの給ひさわくをはしたなく思はるゝにもかたへはかゝやかしきにやと　秘皆とり〳〵にの給ふ故にかゝやかしくて何事もわろきかと也花鳥の説いか

か　箋曰皆とり〳〵に褒美したまふゆへに人なれぬけしきも有にやとなり　私云花説非なり　已上箋也　花内のおとゝのかくの給ひさわくを女御の聞給ひてはしたなくおほさるゝ事はさてはかたへの我身かやうなる物いかほともみめかたちかよくてあたりをかゝやかすほとの事かあるそとはつかしけに女御はの給ふなり

いとはつかしけに　近江君のうへをの給ひたる女御のさま心はつかしけなるなり

この御ありさまは　箋女御の御事を云也秘同

おもしろき梅の花　河「にほはねとほゝゑむ梅の花をこそ我もおかしと折てなかむれ　花弘徽殿女御の御かたちをいふなり朝ほらけの梅の花をみるやう也

のこりおほかりけに　ほゝゑみ給へる也　私前の引歌ににほはねとほゝゑむ梅の花をこそとありさてけにほゝゑみ給へるさまそといへる尤おもしろくかきなせり如何又私云ひらけさしたるといへともほゝゑみたるは又たくひなしといへるおもしろし

人にことなりとみたてまつり給ふ　内大臣の心中也

中將君いとさいへと　弄中將のおとな〳〵しきにさいへと心わかきと云詞なり　花柏木中將の心さかしとはいへともわかく遠慮もなくて此近江君をたつね出したると也　秘内大臣女御へ申さるゝ詞なり柏木は第一の嫡子なれと遠慮もなくてむかへとりたるとなりさてさいへとも心わかきとはいへり中將なとのになく思ひ侍りけんとある詞をうけたり　箋内大臣女御へ申さるゝ詞なり柏木は嫡子にてよろつ明察なれ共何としても若輩故遠慮もなくて此近江君を尋出給へるとなりさいへといへる是なり上の詞に中將なとのになく思ひ侍りけんと云詞をうけたり

いとほしけなる人の御おほえかな　箋此一句草子地の評也　是も近江君故柏木をさへかくの給ふをいふなり

やかて此御かたのたよりに　箋内大臣の女御の次てに近江君の方に立より給なり秘同　箋曰女御は今父大臣の里におはします程と見（覺イ）えたり雲井鴈の方より女御の御方へまいり給うて此次に近江君の方へ渡り給ふなり秘同

すたれたかくおしはりて　花　はしちかなる體也近江
君の事也　箋奥深からぬ體也
五せちの君　箋秘曰近江君の官女云々近江君のつか
ひ給ふ人也箋曰不審也
されたるわか人　箋此詞近江君の官女とは聞えす
すくろくをぞうち給ふ　此段悉皆物語の狂言也
手をいとせちにおしもみてせうさい〳〵と　河小蘩
和名にみゆ　河萬「一二のめ一句のみにはあらす五
六三四さへありけりすく六のさい　秘ちひさきめ
をてふなり　弄あひてのさいをとりてもみたるな
り秘同　箋近江君也　箋曰五節君の打出る籌を小
目々々とこふ也　箋曰此義もさも有ぬへし然れと
も只空手をもみて切にあひての小目を乞にても有
へきにや　聞せうさい勝籌也我と人とにちかわへ
し此義如件
聲そいとしたときや　河舌早
あなうたてとおはして　箋父内大臣の心の中也
さきおふおもてかきせいし　箋上古は私の殿舍渡御
にも前を追けるにや源氏六條院にても此趣見えた
り箋曰本になし
この人もはたけしきはやれる　秘五節君也

御返しや〳〵と　秘大目をとこふにやあひての五節
かさまなり箋戴之弄同　箋曰ねたを申へし返報
せんの心歟
とうをひねりて　聞竹の筒也　よき目をうち出んと
ためらふ體也
中におもひはありやすらんと　河箋同「さゝれ石の中
におもひはありながらうち出ることのかたくも有
かな　秘引歌よくかなへり弄同引之　私此引歌殊
によくかなへりとそ云へき其故はうつ人の心に念
する所のめは中にありぬへしされともそれをうち
出ることはかたきと心を用ひかへたる歟さゝれ石
も雙六の心にたより有にや黄ム引歌用様さゝれ石
の念と云をは石のつかひたきやうあるに心得うち
出ることはさいのめの思ふやうに出ぬ事をいふに
や此義いかゝ
いとあさへたるさまともしたり　私物ふかゝらぬ體
ともを云歟
かたちはひちゝかに　清同　秘一説泥土ちかなるとなり下
す〳〵しきなり箋同之河略之弄同　聞土ちかに下
すしきなり又ひたいのちひさきなり云々　秘に此

義不審也と云々
かみうるはしくつみかろけなるを　河過去の善惡の因によりて今生の容皃の好醜ありと云々端正者忍辱中よりして來るといへりされは近江君かたちなとさすかにあしからぬはつみかろけなるといへる歟一說ねちけ心ふかき人は罪おもき相なり此君心あさき體なる故につみかろけなるといふ歟　花河海に此二の心を出され侍り後の一說相當し侍り
秘河海に兩說あり何も可然歟第一の義よろしき哉
箋秘云河の第一の義宜云々過去の善惡の依て今生容貌の好醜あり云々されは近江君かたちあしからねは罪輕と云歟一說佞け心深き人は罪深き相なり此君心淺き身を罪淺けなると云り云々　花云後の說相當云々　箋曰かみうるはしく云々髮の事は不聞本說可尋箋如此
ひたひのちかやかなると　額のちひさき體也
こゑ（いろイ）のわはつけさ　物いひ舌はやにあはく／＼しきなるへし
こと人とあらかふへくも　秘我身に似たる所あると內大臣の思ひ給ふ也　箋父おとゝの我心なからも他人とはみ給はぬ也
かゝみに思ひあはせ　花我顏を鏡にてみるに近江君のにかよひたれは我身のすくせ心うく思ひ給ふ也
かくて物し給は　花父おとゝのはしめはのそかれたるか後には近江君にあひて物の給ふ也　秘前は立のそき給ふなりこゝより內大臣內へ入給うての詞也はしめはかいまみし給へるか今更に對面ありて詞をかけ給ふ也　箋曰此君の住給ふ所は此の對也
つきなくうひ／＼しくなとやある　內大臣詞也　うひ／＼しくてさふらひにくゝやなとの給ふなり
ことしけくのみありて　秘關白なれは隙もなきと也　弄同　箋內大臣當職の故萬機無暇也
れいのしたとにて　箋近江君也
かくてさふらへはなにの物思ひか　箋近江君の詞也　秘
ゆかしと思ひし御かほ　父內大臣を年比ゆかしく思ひし事也
手うたぬ心ちし侍れ　河向掌テツク素然云　若拍掌をよむへき歟　手うたぬとは心もとなき心歟要ある事に手をうちて人をよふ心也手うたさらんは心も

となかるへき歟一説に雙六のをりふしなれはおとゝをつねにみたてまつらねは雙六のよき手うたぬ心ちして心やましき云歟　河海の一説可然にや
弄よき手を雙六にうたぬ心なり　秘河海説いかゝ雙六の心ありよきてをうちいたさぬ心のするなり
箋秘説雙六のよき手をうたぬ心云々花同之　箋曰抃の字なり　抃説の儀歡喜の時の事なり今不抃と云は心不滿足と云なりしかも離六の語勢を下に含めり東坡喜雨亭記有之　私勘　喜雨亭記云彌月不雨民方以爲憂越三月乙卯（己イ）乃雨甲子又雨民以爲未足丁卯大雨三日乃止官吏相與慶於庭商賈相與歌於市農夫相與抃於野上下文略之（素然はもし招学をよむへきにや）

けに身ちかくつかふ人も　箋内大臣詞也秘同

えさしもあるましきわさなりけり　箋此一句仔細聞へす末の詞にましてとの給ひさふる御けしきと云詞にて其理聞えたり謂はうち交はりてあまた召仕の人の中にては大方の事は善惡も耳目に留らぬ物なれともそれたに親の仁體たる女子はあしき事には親類を云ひ立る物也況や内のおとゝの御女とて思はしからさらんは見苦しかりぬへきにより身ちかくもならはし給はぬと云義也

たゝうちの人にてあらはなへてのつかうまつり人こそと也

ましてとの給ひさしつる　秘箋ましてわかむすめなとゝいはんためなりいひさし給ふをも近江君はききとかめ給はさるなり
父おとゝのかやうにの給ひさしたる躰の心ふかくはつかしきさまを身上の事とも思ひとかめぬさなり近江君のさまなり

はつかしきもしらす　箋近江君の分別なきさま也

なにかそはこと〳〵しう　河なにかそれはとなり箋同　花近江君の詞也秘同箋同

おほみおほつほとりにも　弄おほみはかしつく詞歟御字の心歟一勘　河尿壺と　秘之しと筒もつ者を大つほもちの仕丁と云々　花延喜齋院式云大壺一合云々今案小便つほの事なり　箋私云尿筒やうの事なりおほみとは御大口おほみおほくちと云也御帶をおほみおひといふかことし

えねんし給はてうちわらひ給ひて　箋内大臣也秘同

につかはしからぬやく　内大臣の返答也

おやにけうせんとならは　親の爲に孝心あらはさや
うの雜役をし給はんよりも物いひせちに靜になし
給へとの給へる也
おてゝきたまへるおとゝにて　箋弄云物々しき也云
云　ケ云如何　或をこかましき心なりきやうけん
かましき心歟　私云此義然へき歟事おかしく物を
宣ふ心なるへし
したのほんしやうによる　秘近江君詞也　箋近江君
詞　舌の本性むまれつきの心巳上箋
をさなく侍りし時たにこはゝの　近江君の母なるへ
し又祖母歟
めうほうしのへつたう大とく　秘近江國にあり　箋
別當大德也妙法寺近江國神崎東郡高屋鄕内興寺有
邊をは妙法寺の村と云本尊觀音云々箋承和九年十
二月廿七日格云妙法花經最勝王經別々一人每年聽
度隨業各人在近江國妙法寺華最勝等寺其試定者始
從序品盡令晴誦イ讀誦イ請イ令案近江君と云にて
知ぬ此妙法寺の大德うふやに侍けるさりぬへき事
也此大德舌はやに有けるによりてあやかりけるな
るへし
あえ物となん　花あやかり物也榮花云世のあえ物と
聞えつへき故也　箋私云舌とき人のうふやに來れ
る故におやかりたるとなり　箋たうひしとは侍り
給ひしと云也秘同
いかてこのしたとさやめ侍らん　箋内大臣心中に感
し給ふよし也
けうやうの心ふかくあはれなりとみ給ふ　親に孝せ
んの心あらは舌とさゝめ給へと内大臣の給つる故
にかくいかてか舌とさやめんといへるをけうやう
の心ふかしと云なり是もふかくもおもひいれす近
江きみのいへるさま也
そのけちかく　箋内大臣の詞也
大とてこそはあちきなかりけれ　あやかりたるとあ
るにつけてかくの給ふ也
たゝそのつみのむくいなり
をしてともりこそ　河吃訥　若得爲人聾盲瘖瘂乃
至謗斯經故獲罪如是　文法華經箋同秘河くはし
大乘そしりたる　箋謗斯經故の事也
こなからはつかしけにおはする　花弘徽殿の女御の
御事也　箋此子なからとは近江の君の事也はつか
しくおはすと云は女御の御事なり又子なからを女

御の御事一つとみても同事也女御も他人にあらぬ
御兄弟の事なれは恥へきに非され共女御ト近江君
と雲泥なれは何事にも面目なき由なり此段諸抄釋
せす可謂不足言　私云此段箋の義尤面白しさりな
から子なからとは近江君の事はつかしけなるとは
女御の事といへるは六け敷をなり子なからははつ
かしけにおはするとは子なから恥かしけにおはす
るは女御一人の御事にて然へしさていかにさため
てかくわやしきけはひもたつねすむかへしそかは
となる人ならは内大臣の實子にてあらんと不定な
る事なりさやうの所をもよく糺明せすしてむかへ
とり給へと女御のおほさん所人々の思はん所を内
大臣の憚りおもひ給ふと也
あまたみつき　見次歟
女御のさとに物し給ふ比　秘内大臣　箋おもひかへ
し給ふ物からといへる面白し今更何ともすへきや
うなけれはかなはしの體也
さる心してみえたてまつり　秘女御の御里にましま
す時まいり給ふへきかとなり　箋用意の義也　女
御殿里居し給時參り給へといへる心なり内すみな
とに立ましるへき人に非さる用捨面白し
いとうれしき事にこそ　箋近江君詞秘同
御かた〳〵にかすまへしろしめされ（られ奉らんイ）んてとをなん
箋事をなんとよみ切てねかひし心をはふくませて
詞には見せす
ねてもさめてもとし此何事を思ひ給へるにもあらす
箋此詞は下へつゝきたる詞なり別に引はなちて見
るへからす年比たち居おきふし何事をか思へらん
と也秘同　私ねてもさめても此事のみ也何事を思
ひつるにもあらすと也
水をくみいたゝきても　箋おほみ大つほといへる語
勢なりいかなる雑役をもつとめんと也　河「法華
經をわかえしてとは薪てりなつみ水くみつかへて
そえし行基
いますこしさえつれは　いますこしとは凡はといふ
心なり今すこしてとそへてさえつる也
いふかひなしとおほして　箋内大臣の心也秘に詞云
云非也
いとしるおりたちて　箋内大臣の詞也　秘内大臣の
詞水をくみとあるをうけてたきゝひろひたまはす

ともといへり
たきゝひろひたまはすとも　花 提婆品　採菓汲水
拾薪設食　箋 採薪及菓蓏也　箋曰水をくむと云る
をうけて法花經をわかえし事は薪こりを思よせ給
へり上の詞に妙法寺別當の事を出せるに彼寺法華
三昧の寺なれはをしてとともりと經文を引て書あ
らはして其語勢にて薪のさたに及へりつみかろき
と云詞是又前後の句にあり誠に如雨頭蛇此卷の文
勢能可付眼
かのあへ物にしけん法師たにとほくは　箋 舌疾をな
ほし給へと也
をことにの給ひなすをもしらす　箋 秘云をこの物な
といふかことし近江君の愚なる體也
おなしき大臣と　箋ヶ曰草子地也内大臣のきら／＼
しく物々しくあと有てつねの人もなほさりの人み
えにくきをも此近江の君はみしらす思ふまゝにあ
さ／＼しく物うちいひたるさま也
おほろけの人　秘 此内大臣には大かたの人たにはつ
かしく思ひてみえにくき事にするを此近江君は何
とも思ひ給はさるとなり

さていつか女御殿には　箋 近江君詞也はやいつしか
と參らん事を思ひいそくと也
よろしき日なとやいふへからん　箋 内大臣詞也　吉
日を撰にも及ましきなりなにかはと讀切へし　秘
よろしき日なとは先の給へと參らんとおもはれは
けふにてもくるしからしよく／＼こそことしくは
何かはとの給ひすてゝ内大臣もかへり給ふ也
さもと思はれは　箋 女御へ參給ふへき義を尤と思は
れはとなり父おとゝも此人をあへしらひあました
る所にの給ひすてゝの詞にみゆ
わたり給ひぬ　秘 かくいひすてゝ出給へる也
よき四位五位　秘 内大臣の供奉なり箋同
いてあなめてたのわか御おやゝ　箋 近江君詞也
あやしきこ家に　近江君の我身の事をの給ふ也
五せちあまりこと／＼しく　秘 是は近江君の御ため
にはあまりに過分なると云なり　箋 五節か詞也内
大臣は近江君のためには過分なれはさのみすくれ
ぬ親に尋ね出られ給うて相應すへきとなり　私よ
ろしきおやの今はよろしきとは中品の事なり大か
たのなといふやうの心也　箋曰此五節近江君の官

女ならぬ事は此段にてみえたり
れいの君の人のことやふり　箋秘云近江君の詞箋曰
口わろになの給そと也
いてめさまし　箋あさましきと也　いては發語也
今はひとつくちに　箋もとの我身とな思はれそとな
り　箋曰此五節凡夫の時よりの友たちにて如此云
歟但又女御殿へ参るほとならはこの間のわれにて
も有ましきと云歟　私内大臣のかやうにの給ふを
懇切なると思ひかたく心おこりしていへる詞な
りことはなませられそとは詞をなませそと云下す
なりあるやうあるへきとは仔細ある我身と思はれ
よなとゝ自慢の詞也
うちそほれたるはさるかたにおかしうつみゆるされ
たり　私云そほれは仙源抄云たはふれたるなり又ほ
こりたるともいふさるかたにとはこれも又一むき
ある心なりかたちなとさのみあしからぬなり
たゝいとひなひあやしきしも人の中に　河夷也ゐな
かひたる也　私物いふさまもしちすといふまては
近江君のさま也　花これよりは物かたりの家に批
判したる心也

ことなるゆゑなきことの葉をも　箋秘云先公界の事
を云へり心をつけて見るへし云々箋曰此段は物語
作者の評なり
うちきゝみえことにおほし　箋秘うち聞耳異也　さ
まよくいひなしたれは何とやらん然へくきゝなさ
るゝなり
おかしからぬ歌かたりを　さしたるとなき歌かたり
をするもやうによりてさもありつへく聞ると也
のこりおもはせもと末をしみたる　箋上の詞には源
氏内大臣を和琴の上手と玉鬘に語給てをします
なとあきらかにかきならし給はむことやかたから
ん物の上手はいつれの道にも心やすからすのみそ
あゐるとあり此段に符合せり引合せて味ふへき也
かイ
ふるきすち思ひえぬほとのうちきゝ　歌なとちやつ
ときくに義理は先思ひわかれねとも語る人の樣に
したかひて艶なりとも面白しともまつおもはるゝ
となりふかきすち思ひえぬほとゝいへるおもしろ
き詞なり
心ふかくよしある事を　秘此段不審　私云箋に此義
不審と云々されとも不審なさににたり此段より近

江君の事をいふ也いかやうの心ふかくよしある事をの給ふともよろしくきこゆへくもあらす舌とにあはつけしといふなり耳にとまるかしといふまてはさしもなき事ももてなしによりてよくなる詞を云公界にいへりいと心ふかくよしあるといふよりいかやうのよき事を此近江君はの給ふともこはつきあはつかにしたとなれは聞よくはあらしと評したる也

あはつけきこはさまに　箋是より近江君の事を云也

私云相違歟に注すあはつけきはおちつかすあはあはしく舌ときさまなり

ことはたみて　河逵　見字經　河あつまにてやしなはれたる人の子は舌ためてこそ物はいひけれ

わかまゝにはこりならひたるめのとのふところにならひたるさまに　ならひたると云詞をかさねてかきたる心同歟異歟上の詞にたゝそのつみのむくひなりをしこともりこそ大乗そしりたるつみにもかそへたるかし云々此文法とみえたり

いとあやしきにやつるゝなりけり　箋心もちことと葉つかひにてかたちのあしきかたもおしけたるゝと云なり外相は第二第三にて内證の肝心たる事を示す者なりされは次の詞にいといふかひなきにはあらすと云々此詞にて可分別　私前の詞に近江君のさまをあいきやうつきてうちそほれたるさるかたにおかしくつみゆるされたりとありさやうなれともあしくみゆるは何事そなれは此故そゝ様體をいひたてるなり

いといふかひなくはあらす　花近江君の歌なとはわろわろとつゝくる事をいふなり

もとすゑあはぬ歌　箋もとすゑあはぬはしたことうちつゝきとあり半事（ハシタコト）本末かきあはぬ也と云々　私上下の不相應なるなり女御の御方への文の所に此心みゆへし

さて女御殿にまいれとの給へるをしふ〳〵なるさまならは　箋近江君のひとり言なりうき〳〵と女御へ參らすは内大臣もいかゝをほすへきの心也

おとゝの君天下におはすとも　秘天下箋云（テンカトヨムヘシアメカシタトモ）　弄あめかしたてんかにともよむへきにや世にたくひなくおはすともなり　私謂抄の趣猶てんかとよみて可然歟　箋此近江君を内大臣の天下に

雙ひもなく思給ふ共連枝たちにそむけられてはあり所もあるましきさとなり　秘内大臣こそあかすし給ふものこりの連枝たちにしられすしてはとなり

御おほえのほど　箋草子地の批判也誰か有へきそ内のおとゝ程の人の念比に思ひ給ふならはそれに勝れる人有ましきを今此君の存分は内大臣を脚下に思ひ給ふ由なり　私云此義いき當り不審なりおほえの程いとかろらかなりやとは近江君の事を草子地に嘲哢してかけるなるへし同し内大臣の息女にておはしなから兄弟にもにくまれては此殿中にありかたしとおもふは近江君のおほえのかろ／＼しきといへる也此義然へき歟

まつ御ふみたてまつり給ふ　近江君女御御殿へ文を奉るなり

あしかきのまちかきほとには　箋是より文の詞なり　私此以下箋其句々々に引合たり仍用之　秘是より文の詞引歌抄にみえたり皆略之　古今「人しれぬ思ひやなそとあしかきのまちかけれとも逢よしもなし

かけふむはかりのしるしも　河後撰「立よらはかけふむはかりちかけれとあひみぬ關を誰かすゑけんなこその關をや　寛平の御門御くしおろさせたまひての比御丁のめくりにのみ人はとはせたまうてちかうもよらせ給はさりけれは六條御息所「逢みてはおもてふせにや思ふへしなこその關におひよつくきみ

しらねともむさしのといへはかしこけれとも　箋御ゆかりなき申はかたしけなけれ共と也秘同　花かしこけれとゝはおそれかましけれはいふ心なりはらからゆかりなとゝ申せはおそれかましきと也

六帖「しらねともむさしのといへはかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ

てんかちにて　河てんかちにてとは眞名のかと／＼しき姿歟　箋花云河の説眞名の変りてかと／＼敷と云々今案眞行草の字に依て六書の點かはる物也かなは草の字の猶草なる物也必しも眞名に非す共筆勢のことく／＼敷を點かちなると云へし下の詞にいとさうかちにいかれるてのそのすちともみえすとあれは假名を草に書たるを點かちなるとは云ことおほえ侍り云々

まことやくれにも　女御の御かたへ近江君の參らん
　といふ事をほのめかしたるなり
いとふにはゆえ（とイ）にや　拾「にくさのみますたの池の
ねぬなはのいとふにはゆる物にそ有ける　箋此引
歌は女御の方より近江君をいふにはゆる義也
あやしきはみなせ川　六帖「あしき手を猶よき方にみ
なせ川底のみくつの數ならすとも　箋花云下跡の
　あしき事をいへり

近江君
草わかみひたちのうみのいかゝさきいかてあひみん
田子のうらなみ　箋河云草わかみとは近江君我身に
よそへて常陸の海のいかゝして田子の浦波に立出
んといへる歟云々　花云六帖「駿河なる田子の浦
波たゝぬ日はあれとも君をこひぬ日はなし　今案
此歌の所詮はいかてあひみんの七字に有歟凡そ歌
の體はすゝろ事を云つらねたるへし萬葉に無心所
着の體と申へきにや　秘本末きこえさる歌なり只
第四の句を詮とするなり　弄上下とゝのほらぬ歌
なるへし　ひたちの海を　いかゝさき　箋云蜻蛉
日記云石山にまいりて歸るとていかゝさき山吹の
さきなと云處をみやりて云々　田子の浦浪

おほ川水のと　箋「三吉のゝ大川のへのふち浪のな
　みに思はゝわれこひめやも　花云大川のへを大川
　水と引かへたるにや但又他の證歌ありや可尋之萬
　葉の歌の心ならはなみには思はさるとの心なるへ
　し云々已上箋　秘おほ川のへを用ひかへたる也
いとさうかちに
いかれるての
たゝよひたる
しもしなかに　箋河云是もよからぬ右筆の體歟
はしさまにすちかひて　箋河云近代は夷中の人なと
　は消息の袖書をゆかめて書事あり凡俗の所爲也但
　中古の假名消息共に裏をゆかめてかける多し如何
　或文のかき樣かきはしむる所を端へよせへてゆか
　みたるたふれぬへくといふ也
うちゑみつゝ　箋近江君の随分と思ふさま也秘同
なてしこの花につけたり　箋河云文をは紙の色の花
　に付る物なり只今青色の紙を瞿麥に付たる夷中い
　たる事にや云々　私云河云但なてしこのわか葉色
　もある歟云々
ひきましわらは　河まるかふる下女也　箋私云下女

なり　箋私云下女之イ　河云厠長女院なとに有なりさやうの者歟行
幸の後騎にも在之
太いふの君
中納言君
ゆかしけに　いつれも女御の宮女也　中納言君かた
はしを見つけてゆかしく思ふ也
さうのもしは　女御の御詞也　箋私云歌の事なり花
云女御のわか御心の及はぬにやあらんとなり是迄
箋載之　花此歌もと末うちあはぬよみやうにてあ
るとの給ふなり
たまへり　箋中納言の君に給ふ也
返事かくゆゑ〳〵しからすはわろしとや思ひおとさ
れなん　箋是は女御の御詞也此返事かくのとく由緒
ともをとりあつめてあしかきなこそむさし野なと
のやうに書給はすは近江君の心に叶ふましき程に
むつかしけれは中納言にゆつり給ふ也此段諸抄漏
脱不可然已上箋　秘さと御返事申されよと也
もていてゝこそあらね　箋さすか御連枝の事とて面
にたてゝはさふらふ人々もえ笑はさるをわかき人
人はおかしきにたへさるよし也

をしさとのすちにのみまつはれて侍めれは聞えさせ
にくくこそ　秘ふる事とものおほき也中納言君の申
詞也　箋中納言君の詞なり種々の本説證歌を引た
る返事のかきにくき由なり秘同
せんしかきめきて　箋仰書の事也河同
たゝ御ふみめきて女御の御直書のことくに中納言君
のかくと也
ちかきしるし　箋文の詞　あしかきのと云をうけた
り秘同
返中納言
ひたちなるするかの海のすまの浦に波立出よはこ崎
のまつ　河一向嘲哢の由歟浪立出よ計の詮歟　花四
ヶ國の名所をよめるなり　秘四ヶ國をよめるなり
立出よと云を詮とせり無心所着の類也　箋四ヶ國
をよめるなり立出よと云を詮とせり弄云無心所着
也萬葉此類あり但それも一理よくあらはすなり此
歌も立出よと云心をよめり常陸駿河海攝津須磨筑
前箱崎已上箋
よみきこゆれは　中納言君御返事かきて女御へよみ
きかせたてまつるなり
あなうたて　箋女御の御詞也　秘女御の御詞也まこ

とに女御のかき給へると思ひ給ひてはうたてある
也とおほすなり
それはきかん人　花聞しらん人は女御の御みつから
の歌とは思ふましきと也　箋中納言君詞也　聞し
らん人はゆるすへきとなり秘同
おしつゝみて　河立文なるへし
御かたみて　箋近江君なり
おかしの御くちつきや　近江君の詞也女御の御歌を
まち得て褒美申さるゝ也
まつとの給へるを　はてさきの松とあるを待といふ
事にみなしたり　花宮崎の松と云結句を心よせの
方にとりなしたるなり　秘此歌は立出よといへる
詮なるをたゝまつと計心得たるなり　弄近江君立
出よとよめるをはみしらてまつとある所をいへり
此人源氏物語の狂言なり　箋此歌はたちいてよ
といへる詮なるをはみしらて松とある所を待と心
得たると也　箋曰非作者の眼に作意を解せさる事
をいましめて書たる詞なり此巻五十四帖の内經文
の句の金言の教誡の文法文體一向條の巻に相替れ
り字に可付眼又弄抄に此人源氏物語の狂言なり云

云不可然此人の言能く以て善惡邪正の差異分明に
あらはれたり能味知へし
いとあまへたるたきものゝかを　箋河云蜜の過たる
は合香の下品の事なり仍あまへたると云なり　箋
曰下品の薫物のくせ聞き匂あると也蜜の多少の沙
汰に及さる歟
へにといふ物いとあからかに　河粉白氏文集　これも
兒女子の體也「いたいけやへにかもにたる梅花あ
こかかほにもつけたくそある　北野天神七歳の御
時の御歌なり　或面子(カホツキ)　荏苒(ヘニテカス)遊仙窟
御たいめんのほとさし過したる事ともあらんかし
秘草子地也　悉皆狂言にかけり　箋草子地なり
箋曰此對面の作法を書殘したる物語の書さま奇特
なり上の詞におかしからぬ歌かたりをするももと
末をしみたるさまにてうちすんしたるはふかきす
ち思(者イ)ひえぬほとのうちきゝにはおかしとなり云々
作意の肝心此所にあり可付眼也

岷江入楚第廿七　篝火

卅六歳　堅双也

源中將吹笛事

篝火　以詞幷歌爲卷名　堅並也

河卷名源氏歌「かゝり火に立そふこひのけふりこそ世にはたえせぬほのほなりけれ　私返歌玉かつら「行へなき空にけちてよかゝり火のたよりにたくふ煙とならは

詞御前のかゝり火のすこしきえかたなるを云々

又いとかけすゝしき篝火にかけとゝめられて云々

秘 卷名以詞幷歌號之

源氏卅六歳秋の始の事也

この比世の人のことくさに　秘 近江君の事を聞て源の宣ふなり姫君とは近江君の事なり惡事千里を走るの心也　箋 世上の口故に物のおかしきためしには此近江君の事を引出すを源氏の分別には内大臣のあつかひ不足なるよしをの給ふとなり

ともあれかくもあれ　秘 よくもあれあしくもあれ女子ならはうちにこそふかるへきを女御殿にあつけ給ふは然るへからすと源氏は思ひ給ふとなり　箋 内大臣の御女とあるからは其人の善惡にはよるましきと也

なほさりのかことにても　箋 此かことは心はいさゝかと云成へし謂はいかに不肖なれはとて親としられ子とあらはしては有ましき事と也

かく人にみせいひつたへらるゝ　箋 おもはしからぬ人ならは奥ふかく心にくきさまなるへきを女御殿の歷々の中へさし出して人の嘲哢になし給は如何と也

心えぬことなれ　箋 分別のなき人ならねは不審にもなけれとも内大臣はいかなる分別とも源のわきまへ給はさると也

いときは〳〵しくものし給ふあまりに　是よりは源氏の推量也　箋内大臣の情をいへり　聞常夏の巻に内大臣の本性を源氏の宣ふ所にいと物きら〳〵しくかひある所つき給へる人にてよしあしきけちめもけさやかにもてはやし又もてけちかろむる事も人にことなるおとゝなれと云々されはきは〳〵しくと云は善悪のきはをたつる人と見えたりさるに依てわか子と云きはをたてゝ玉鬘にもまけしと近江君を尋出給へるにおもはしからねはそれをしりなから許容せんはわれを非に人の見るへきと中々にさし出して方外の人にし給なるへしと也　聞大方の事にてもたつね出してからさやうに女御殿へあつけなとして人にしらるゝはあしきなり　餘り物のかとめいたるところのおはする内府なる故にたつね出しなからあしけれは又かやうにあるそと源の内大臣をもとき給ふなるへし　秘いときはきはしうとは内大臣の心つかひをいふなり

ふかき心をもたつねす　秘よくかねても尋ねすしてふしよひよせ給ふ事遠慮なきと源のもとき思ひ給ふなり

なるへし　箋内大臣の性を推量して源氏の推量には此分との給ふなるへし

よろつの事もてなしからに　箋世間は一切荘厳からなる物也況や人は非器量なれはそれにつけてもしなしやうにて建立したる物なるをと也

いとおかしかり給ふ　近江君の事を源のおほすなり

かゝるにつけても　箋玉かつらの心也秘同

とし比の御心をしりきこえすなれたてまつらましかははちかましき　近江君の事をつたへ聞て玉かつらの源の御事をありかたく思ひしり給ふなり實父内大臣の御心のかとめいたるをおほすなり　或右近か實父内大臣よりも源に見え給ふか可然事なる由を云也内大臣の近江の君をあつかひ給ふやうを聞給ひて親の御心を玉かつら聞及給ふと也右近も實父に知れ給はぬをよしとおもひきこゆるなり

右近もいとよく　秘源の御心のありかたさをいひしらするなり　箋源の御思のふかきをあたに思ひ給ふなとなり

にくき御心こそ　箋源の御心かけ給ふ事也

やう／＼なつかしう　源の御心はかけ給ひなから又あなかちなる御心もなけれは御心さしのありかたきなと思ひしりて玉かつらの心もうちとくると也
はつ風すゝしく吹いてゝせこか衣も　河箋「六帖　はつ風の涼しくふけは我背子か衣のすそのうらそさひしき　秘箋　河の引歌に及はすせこか衣とはうらさひしきの枕詞に見るへし　古今「我せこか衣のすそを吹返しうらめつらしき秋のはつかせ　弄枕こと葉歟もの字如何云々　箋曰初風の引歌詞の前後よく叶へりもの字は我も人もの心なるへし
御ことなと　箋和琴なり秘同
いとしは／＼　河数度の心なり
五六日　箋いつかむゆかとよむへし弄同し
ゆふつくよはとくいりて　おもしろき體なり
荻のおともやう／＼あはれなるほとに　前の詞に初風すゝしくとかきて夜に入ほと風もひやゝかなるゆゑ荻のおとも物あはれなる程なるへし
かゝるたくひあらんやと　秘玉かつらの心なり　箋曰源の心なりかはかりけちかくそひふしなからいたつらなるはたくひあらしと歎給ふなり玉かつらの心とみん義非なり　聞源の心なれてあはぬ事歟云々箋の義尤可然
わたり給ひなんとて　秘かへり給はんとてなり
御まへのかゝり火　河篝火(カヽリヒ)　私常夏の巻にかゝり火のたいひとつこなたにめしてとあり
右近のたいふをめして　箋河右近將監の叙爵したる人を云也
いとゝすゝしけなるやり水のほとりに　箋弄云篝火は必水の上にて燒なり火をやかて消して涼しくかまへたるなり云々　箋曰此義不審殊にほとりと云る水上とは聞えす如何　私水のほとりなるへしかゝり火のかけにやり水の涼しくなかるゝさまなともみえたるなるへし
まゆみの木の
うち松おどろ／＼しからぬ　箋篝火の臺に打入々々する故に打松と云弄同　秘篝火の臺を池水なとの上に置て打入々々する松の事なり　河うち松とはかゝりに燒松なりたゝ時々打入々々する故にうち松といへるなり　伊勢物語につい松のすみしてといへりつき松なりほそなかにゆひてもゆれはつく

なりさてつい松といへり松炬續松とも書り
さしぞきて　さししりぞきてなり涼しからんため
に御前のかたへ遠きやうにしたるなり
ものをつゝましく　玉かつらのさまなり
かへりうく　源の心なり
たえす人さふらひて　秘源の下知し給ふなり
夏の月なきほとは　花秋なれといまたあつき比なれ
は夏の月といふにや又立秋の節以前土用中なれは
夏といふにや　箋私云秋に成ぬと書て夏の月なき
程といへる面白し夏の中も涼しけれは秋なり秋の
中も殘暑あれは夏の心ありと云々　弄云秋もいま
たあつき比は大かた夏の心あり云々　箋曰惣別夏
の事を云へり今を夏と云には非す夏の夕やみの程
はともしひも物むつかしけれは庭の篝火こそよけ
れ惣別のうはさをの給ふとみるへきにや　私はし
に註せられたる秘弄等の義可然花鳥土用の沙汰も
あまりなるにや
源
かゝり火にたちそふ戀の煙こそ世にはたえせぬほの
ほなりけれ　秘わかおもひは此かゝり火にもおとら
さるをなほさりにみ給ふかと也　箋篝火を常の烟
となく見給ひそ我胸の煙立そひたるをとなりされと
被篝火はやかて消ぬへしわか下もえは消ぬへき期
のなきとなり
いつまてとかやふすふるならても　河古今一夏なれはや
とにふすふるかやり火のいつまて我身下もえにせ
ん　秘古今引歌夏なれはとあるをこれは下にもえぬも
くるしきと也　箋夏なれは宿云々秘云是は下にも
えぬもくるしき也と云々　箋曰わか思ひの立そふ
故に蚊遣ならぬ篝火も苦しき下もえと成にける是
はいつを限りとかすへきむかし人のいつまて我身
下もえにせんといへる如くなるとなり時節初秋な
れは蚊遣火と云へきにも非す本歌夏なれはさ治定
したる所を引たかへてふすふるならてもといへる
上の詞に夏の月なき比といへる今を指て夏と云は
さる事分明なり夏の沙汰をは云出してふすふるな
らてもと云なせる文體可味之也
女君　玉かつらなり
あやしのありさま　閑玉かつらの心なり
返玉鬘
ゆくへなき空にけちてよかゝり火のたよりにたくふ

烟とならば　秘篝火の焼させはやかてきゆる煙のことくなる思ひならはやかてきえぬへきとなり　弄かゝり火はたきさせはやかて消る故にたくふ煙とならはとよめり　箋篝火の煙は空に立のほる程もなく消る物なりそれに立そふ煙ならは消やすかりぬへきなり常のけさうの贈答ならは此歌に戀の烟を分明に詠すへきを玉鬘はつひに見知らぬさまにて過し給へは何ともわきまへぬ只煙と計心得たる歌のさまなり作意甚深なる物乎　花云篝火の煙は立のほれは消る物なりそれにそふならは戀の煙とても行へなく成ぬへき物なり云々　箋曰花の説尤珍重なり此義ならは公界の戀の煙と見るへし玉かつらの身にかけては見るへからす

人のあやしと　秘玉かつらの心也或同　聞玉かつらの詞也　箋たまかつらのさまなり　私玉かつらの詞又さまともみるへき歟

くはやとて　箋源の詞さらはなと云心なり秘同　花云すはやなといふ詞なり　箋曰未摘花巻にくはや昨日返事云々以上箋　或抄さらはさうなと云心なり同心するなり云々

ひんかしのたいのかたに　聞花ちる里のすみ給ふかた也

さうにふきあはせたり　私三本逍遥院に吹あはせとかゝれたり

中將のれいのあたりはなれぬとち　箋夕霧の朋友の事　或は源の詞と云々

頭中將にこそあなれ　秘柏木也　箋柏木の笛そと聞定め給なり笛の堪能の人なり此人の笛後に薫大將へ傳はれり

わさともふくなる　秘吹なすなりほめたるなり　箋源の笛を稱美し給ふなり

御せうそこてなたになん　秘源のせうそこし給ふ詞なり　箋云源より御消息し給ふなり玉鬘の御方に思はすに夜ふかし給によきまさらはしなるへし

うちつれて三人まゐり給ふ　箋サンニント付たり　箋夕霧中將柏木頭中將藤少將紅梅等也秘同　弄此中に辨少將もあるへし

風の音秋になりにけりときこえつる笛のね　河「秋きぬとめにはさやかにみえねとも風の音にそおとろかれぬる　弄秋風樂の心なり　平調也　次の詞

盤渉調と云々 或 河海に楚思渺茫雲水冷商聲清暉
管絃秋 樂天 風の音秋にもなるか久かた、あまつ
空さへかはるへらなり 貫之 私愚本に此詩歌なし
箋源の詞なり秘同
しのはれてなん
御てとひきいてゝ 河和琴事也次詞に御てとは中將
にゆつり給へけにかのちゝおとゞのつまおとにを
さ〳〵おとらすとあり彼内大臣和琴の無双の上手
といへり又玉鬘の君も和琴をひくよし同みえたり
箋和琴の事弄同
なつかしきほとにひき給ふ 源のひき給ふなり
源中將はばんしきてうに 箋夕霧なり 箋此段始て
源中將と云なり 箋盤渉調當調子也 箋云風の音
秋に成にけりときこゆる笛のねといへる盤渉調の
事と聞ゆ但てこにて更に盤渉調と書たるは風の音
秋と云に由緒ある歟
まへは頭中將の笛ときこゆてゝは又夕霧の笛也箋
は誰人か也 私盤渉調を箋に當調子といへる如何
秋は平調子也思忘られたるへし
頭中將心つかひして 箋出したてかたきは歌曲の事

なるべし 箋柏木は玉かづらの御方なれは心けさ
うなるへし
辨少將ひやうしうちいてゝ 秘紅梅なり 尤頭中將
の遅き所に弟の少將うたひ出たるなり 弄
しのひやかにうたふ聲鈴虫にまかひたり 箋花云寛
平御記に平利世桓武孫也皇玉二世孫皇后の弟也聲二長蟬歌初謨秋虫之
嘯二葉間一親聽曲調宛如松風之動曉後爰乘閑暇所々
合歌與皮青髭數千行并綾羅衣裳今案うたふ聲を虫
の音に比す此御記の面影ありと云々 私左方に加
朱の字義には略之今加也 弄其をり秋なり聲よき
虫なる故にたとへたるなり以上箋 秘花の説に及
はさるなり聲よき虫なれはたとへたるなり
御ことは中將にゆつらせ給つ 秘柏木也箋同弄
ちゝおとゞの御つまおとに 箋内大臣なり和琴の上
手の由上にあり
みすのうちにものゝねきゝわく人 箋源の詞玉かつ
らの事なり秘同箋同此一段玉かつらと柏木以下兄
弟の事を此次てに知らせやせましの御心にてかや
うにははしての給へとも沓思ひもかけぬ事なれは
誰も聞とかめ給はぬなりおもての心は簾中に誰か

おはすらん今夜はふかく酔もすゝめられ年たけた
る我身は忍ひなきのくりこともやあるへきと公界
へは聞えさせて下の心は玉かつらの事をとはすか
たりやせましの心なり　みすのうちは面は誰かあ
るらんの心裏は玉かつらの音律は辨へ給を云
こよひはさかつきなと心してを　勸盃も簾中へ心つ
かひあるへき夜なり
忍ひなきのついて　源の沈酔し給はゝ忍ひなきのみ
ならすふることのとはすかたりも有ぬへきにとな
り今夜の御遊の興あるを取はやしての給ふよしな
り裏の心は柏木に兄弟の事をやふといひあらはさ
ましと云心なり以上箋
さか月なと　秘盃なとのついてに實父の事なとを云
出給ふ事ありてはとなり
忍ひなきのついて　花「よる光る玉といふとも酒のみ
て酔なきするにわにしかめやも　弄玉かつらの事
をも兄弟の君たちにかたりいてましなといふ心な
りされは姫君もあはれときゝ給ふなり
ひめ君も　箋玉かつらなり
あはれときゝ給ふ　弄あはれはねかはしき心のあれ
はなり心にかゝりし事なれはなり　秘あはれの字
はねかはしき心のあるなり又常のあはれにてもあ
るへし　箋あはれと云はねかはしき心のあるなり
心にかゝりし事なれはなりあはれさもあれかしと
云時は常の哀に非すあつはれなと云心也常の哀に
てもあるへし
たえせぬ中の御ちきり　箋行へつひには兄弟の御契
くちすましきよしなり
この君たちを人しれす目にも耳にも　玉かつらは兄
弟とよく知給へる事なれはみる事きく事に付て此
君たちの事をゆかしくおほすとなり
かけてさたに思ひよらす　箋柏木辨少將なとの事な
り
この中將は　箋柏木なり花云昔相如琴心を以て卓文
君を排（挑ヵ）事あり今柏木は玉かつらの兄弟なる事をは
知らすして思ひ切にかけなからの心をかりて心と
けても引給はぬにや云々　弄頭中將しつまりたる
人なり　秘柏木なり花鳥云司馬相如か琴心にて桃（挑ヵ）
事をひけりおもしろし　聞かきわたさゝとは琴り
體なり　花かしは木の中將は玉かつらの君をわか

いもうとなる事を知すして心をかけて和琴を引けるかゝるついてにもえしのひはつましきの心もてそいてくれとて斟酌してをさへ／＼心とけてもかきわたさぬといへり昔司馬相如か琴を引て卓文君か心をとりしかは文君夜相如かもとへかよひけるためしもあるにや　私勘相如昔挑文君得莫使簾中子細聽司馬相如か文君を挑事を作れる詩也前の詞にみすのうちに物のね聞わく人とありしに面白くや

岷江入楚第廿八　野分

卅六歳　太政大臣

中宮御前植秋花事
八月野分事
紫御前修理前栽事
夕霧中將大風中參六條院事
中將自妻戸融奉見紫上事
中將又參三條大宮給事
未明中將參花散里次參紫上御方事
源氏君以中將爲御使被訪申中宮事
中宮御方童共虫籠飼露事
中將參源氏御方申中宮御返事給事
源氏君參中宮事　付中將候御供事
次渡明石御方給事
次渡玉鬘御方給事
源氏與姫君戯給中將奉見恠思事
次渡花散里方給事
次渡明石姫君御方給事
中將申出硯紙書文給事　付苅萱枝事

中將奉見明石姫君事
中將又參三條大宮給事
內大臣參三條宮事　被申御子達之事

野分　以詞爲卷名　竪並

河此卷野分をもて始終爲詮也
私野分れいのとしよりもおとろ〳〵しく
又云またかくさわかしき野分にてそあはさりつれ
と花同
秘卷名以詞號之源氏卅六歲の八月の事也竪並
中宮の御まへに　箋秋好なり　秘六條院にて秋好中
宮のおはする方なり
色くさをつくし　弄色々の草をなり箋同　箋曰濁音
不審
よしあるくろ木のませ　箋架マセ　花木の皮をけつれる
をあかきとはいふなり　箋皮なからをは黑木皮の
なきは赤木といへり唐木には非す弄秘同　河風浪流イ
の心か　能因歌枕ませをはしめといふと云々箋
朝夕露の光も　河拾「うゑたてゝ君かしめゆふ花なれ
は玉とみえてや露もおくらん伊勢箋
つくりわたせる野へのいろ　箋秘に秋の野をうつし
て作りなすなり
涼しうおもしろく　箋春には暖なる心かあるなり秘
春秋のあらそひに　秘若菜卷にもあるなり箋　花萬

葉第一近江大津宮御宇天皇代天皇詔二内大臣藤原朝臣一大織冠競二憐春山萬花之艶秋山千葉之彩一時額田王以レ歌判レ之歌冬木成春去くれは不レ喧鳥も來鳴ぬ不レ開花もさけれは山をしけみ入てもとらす草深みとりても見えす秋山の木の葉をみては黄葉をは取てそしのふ青きをは置てそなけくそこし恨し秋山われは　河樹下集にはしかのとよぬし大伴黑主か論義の歌「面白のめてたき事をくらふれは春と秋とはいつれまさると黑ぬし「春はたゝ花こそはちれ野へてとに錦をはへる秋はまされり黑主

花拾遺第九ある所に春秋いつれかまさるとゝはせ給けるに　「春秋に思ひみたれてわきかねつ時につけつゝうつる心は貫之　又云元良親王承香殿のとしこに春秋いつれか波さるとゝひ侍れは秋もおもしろう侍るといひけれはおもしろき櫻をこれはいかゝといひて侍りけれは　「大かたの秋に心はよせしかと花みる時はいつれともなし　又題しらす　よみ人しらす　「春はたゝ花のひとへにさくはかり物のあはれは秋そまされる　謙德公いまた宰相中將の時應和三年七月二日彼君達春秋歌の合の事あり秋の方より「花もみつ紅葉をもみつ虫の音もころ〳〵おほく秋はまされり　今案萬葉額田王の歌を始として秋に心よせたるやまと詞のおほき故なり云々　此段の末花鳥の分なり仍河海の引歌に同之間略之　今以朱註之　私以上箋分註之

私慶長三三廿一春秋あらそひには昔より秋に心をよする人おほし然るに春の御前紫上の時めく花園をみてその時は只春の色そと感し思ひしか又只今秋草の盛をみてたゝ秋ことゝす又人思ふなりさて本來秋に心よする人おほしといへるにつきて又引かへして本へ立かへるやうにいへり

なほ名たゝる春の御まへの花そのに心よせし人々

名に立なり此物語にも名たゝるそのゝなとあり

箋秘云紫上の御勞也花におれつゝなといひしかともとなり　私云てふの巻に花におれつゝといひしも　「大かたの秋に心はよせしかと花みる時はいつれともなしといへるによく叶へり　河「露たにも名たゝる園の菊なれは花の主や幾世かさねん

又ひきかへしうつろふけしき世のありさまに〻たり

秘時をりふしにしたかふ時世のならひなり　箋世

とおしうつる變化のありさま彼も一時なり是も一
時也　古今「色みえてうつろふ物は世の中の人の心
の花にそありける　拾「春秋に思ひみたれてわきか
ねの時につけつゝうつる心は　此二首河海の引歌
以上箋　私花におれつゝきこえありとこてふの巻
にいひしさまを思ひ出てかける詞なるへし
これを御らんしつきて　箋中宮此花ゆゑに久しく里
すみし給ふなり秘同
御あそひなともあらまほしけれと八月は故前坊の御
忌月　先坊の御忌月なれは遊ひなと斟酌ある也　河
孝謙天皇寶龜元八月崩朱雀法皇天曆六年八月十五
日崩　坊八月薨事例未勘
野分れいのとしよりも　暴風　野分　秘八月は必大風
の吹なりこゝに野分ふきたるよしをかける作者の
奇特なり乙女に紅葉の事あり胡蝶に其御かへしあ
るを其かへしの造意あるをさやうにては盡期もな
き事なるへきを此野分にて秋の花みな色もなくな
れる心妙なり惣して天道此心ありたゝそこつには
みるへからさるなり　箋花云杜詩に八月秋高風怒
號云々八月大風か吹事古來連綿先例河海に出歟

此卷に野分吹たるよしを書たる心は乙女に紅葉に
てはけまし給ひしを胡蝶に過し春南の御方よりい
かめしき御返事せさせ給ひし時人々心をよせし也
然るを今又秋に成て中宮より此花園にて御返しあ
らまほしきを餘りに事かさなり盡期なきに似たり
仍此秋の暴風に興を失ひ給へる書さま也面白き物
語のかまへ也已上孝　是は面ての義下の心は天道
は一切の十成を誡む必と期する事必たかふ物なり
されは必とすることなく難しとする事なしといへ
り仁王經にも事與願違樂與悲倶也と說く可付眼而
已　河八月大風事　仁和三八月廿日自卯剋暴風西
刻北風拔樹京中人家顚倒　延喜十三八一自申刻大
風折樹破屋　天慶五八月十一大風暴雨如延喜十三
八一　康保三八廿八大風諸司幷京中破損　永祚元
八十三酉刻大風宮城門舍以下京中顚倒又賀茂上御
社幷石清水御殿東西廊祇園天神堂凡一條北邊新舊
堂舍東西山寺皆顚倒同二年十一月七日改元爲正曆
依去年八月大風也已上河
さしも思ひしまぬ人たに　秘中宮の御心には一段と
身にしめて思ひ給ふへき也況や中宮の御心の中の

切なる故をたにといへり
まして草むらの露の玉のを　花　古今躬恒長歌に玉の
をとけてこきちらしあられみたれて霜こほり　私
に「白露に風の吹しく秋のゝはつらぬきとめぬ玉
そ散ける
御心まとひもしぬへく　中宮に切にゐはしめしたる
さまなり
おほふはかりの袖は　河「大空におほふばかりの袖
もかな春咲花を風にまかせし　秘箋同しく引之
秋の空にしも　秘　妙なる詞なり春の花といへるをか
くとりなせる尤おもしろし　箋　春の花をかく云ひ
かへたるたくひなきなり
うしろめたくいみしと花のうへをゐほしなけく　箋
河に「さけはちるさかねは戀し山櫻おもひたえせぬ花
の上かな　拾遺　私「朝またきおきてそみつる櫻
花よのまの風のうしろめたさに　夜のまの風のう
しろめたき心此歌も可然歟
みなみのおとゝにも　箋　紫上御方なり
もとあらの小萩　箋　河「宮城野のもとあらの小萩露を
おもみ風を待てと君をこそまて　引歌奇特なり

萩の露は風を待事に云ひならはせり是は露のもろ
きをいへり然るに今の野分はあまりに風を待つけ
過したるよしなり假令秘にはけしかれとは祈らぬ
物をといへる類なりとなり　秘　引歌風をまつこと君
をこそまてと風を待とはいへともあまりことの外
に吹をいへりはけしかれとはいのらぬ物をといへ
るかことし
河引歌　宮木のゝもとあらの云々　萩のふる枝をはるやけ
は今年のわか枝におひかはるなりもとあらの萩と
は去年のふる枝にさけるを云なり小萩といひてて
とし生萩よりも枝さしもすくみては〳〵しきそれ
か中に大小あれはちひさきをもとあらの小萩とよ
めり　一説秋ふかくなりて下葉のちりすきたるを
あら萩といふなり云々もとあらの櫻といふもてと
きよりも本こは〳〵しくあらく見ゆる故也
はしちかくて　紫上也
おとゝは姫君の御かたに　聞　明石姫君也　源氏は明
石の姫君の方にゐはするなり或玉かつらの方にわ
たり給ふとあり私不審
中將君まゐり給ふて　箋　夕霧也秘

てさうしのかみより　小障子の上よりなり　箋私云かみは上なり紙に非す　弄一譯云つねに庇なとを隔て障子を立るなり上をはさまにするに依てそれよりのそく事をする也然は上の字なるへし以上箋

ひさしのおましにゐ給へる人　箋紫上也

春の明ほのゝ霞の間よりおもしろきかは櫻の咲みたれたる　箋「淺みとり春のけしきはつゝめ共こほれてにほふかは櫻かな　かは櫻とはうす紅にて艶なる花なり和名に朱櫻とかけり古今物名のかには櫻の事なり云々以上箋に河の義を載之　花薄くれなゐの花なるへし古今にいへるかには櫻の事なり

あちきなく見たてまつるわかかほにも　みな夕霧の心中なり

うちわらひ給へる　秘紫上なり　聞鎮帷屏みすのおもしにかくる物なり

花ともを心くるしかりて　前に紫上の御方にも前栽つくろはせ給ふとあり

おとゝのいとけとほく　源の紫上の方へ夕霧なとを物遠くし給ふを今分別するなり

いたりふかき御心にて　みる人のたゝにはあるましきと源のいたりふかき御心にておほろけにもみせ給はさるよと夕霧のおもひ給ふなり　箋心見し人は心動きぬへき事を上智の上より遠慮し給ふ故物遠くし給ひけるよと夕霧のおもひ給ふなり

にしの御かたよりうちの御さうしひきあけてわたり給ふ　箋源なり秘同　源の明石の姫君の御かたより紫上の御かたへかへり給ふなり内々のへたての障子なるへし　私云にし面の御かたといふにつきて或抄には玉鬘の御方と云るさにはあらす是は明石姫君なり玉鬘はうしとらのまちの西の對に住給へはこれへははるかにへたゝれるなるへし

あはたゝしき　河周章　箋優也

いとうたて　秘源の詞箋

又よりてみれは　箋夕霧なり　をのこともあるらんをなとの給へる源の心つかひなり夕霧もこのまきれにみ給へる事これをおもふへし

物きこえて　秘紫上へ源の物の給ふなり箋

おやともおほえす　箋源の御ことなり　私夕霧心なり

いままゐれるやうに　秘只今參れるやうにして夕霧

のこわつくり給へるなり
されは 箋源の詞上の詞にみかうしおろしてよをの
こともわるらんをあらはにもこそあれ此詞に就て
されはよとはの給ふなり箋
としころかゝる事の 箋夕霧の心なり
風てそけにいはほをも吹あけつへき 秘河海説無念
歟たゝ風のちからを云岩ほを吹あくる事なるまて
もなき事をみてあまりなるまて吹をいへり紫上面
影をもおほろけにもみる事もなきを只今みたてま
つるはまとに風の岩を吹揚たることしとなり 箋
云夕霧の心に風と云物は嚴なりとも吹あけぬへし
其故はさしもつゝやかなる紫上源氏なとの御心を
此風のさわかしけれはこそいつくもあらはにて思
かけぬかいまみをし給ふ事よと也風の岩を吹揚る
には非す然れは河海に項羽紀に大風揚沙石 文選
風賦䃭石拔木此等の先蹤に及可らす 私當代の儀
河の儀を不用抄云左註之景行天皇十二年初將討
賊次于柏峽大野其野有石長六尺廣三尺厚一
尺五寸天皇祈之曰朕得滅土蜘者將蹶茲石如
柏葉而擧焉因蹶之則如柏上於大虛故號其

石曰蹈石也 日本紀第七 私柏峽大野豐前國也 願凱
之啓蒙記曰零陵郡在石燕得風雨則飛如眞燕 以上
先賢釋此兩條外勘いつれも風の事に有さる歟 愚
管見所及如此爲之如何 史記項羽本紀曰於是大風
從西北而起折木發屋揚沙石窈冥晝晦此外御註畧之
人々まゐりて 源の家司なとやうの人々なり
うしとらのかたより侍れはこの御前はのとけき也
箋寛平御記云八月丙子從昨日暮至今日雨不霽昨日
申尅大風自艮角吹起酉二尅息此外延喜十二年八月
一日大風古來相傳之古今未有如此之大風云々
秘南はのとかなるなり紫上のさとよりのとかにみ
てゐ給へることゝにてみえたりこなたはのとかなる
なり 箋艮より吹風なれは南おもては長閑なるな
りもとあらの小萩露もとまるましく吹ちらすをす
こしはしちかくて見給といへる紫上のさまうしと
らの風といへるにてきこえたり
むまはのおとゝもみなみのつり殿 花ちる里のおは
するうしとらの町なり
中將はいつてより 箋源の詞秘
三條の宮に 箋夕霧の返答 秘夕霧の詞祖母の御か

たにさふらひしとなり
かしこにはまして　秘三條宮なり夕霧の外祖母なり
わかき子のやうに　秘物おちし給へるなり
まかて侍りなんと　夕霧の三條宮へ參らんといとま
を申給ふなり
けにはやまうて給ひぬ　箋源の詞秘
老もていきて又わかうなる事　わかき子のやうにと
夕霧の申給へる故にかくの給ふなり
かくさわかしけに　箋三條宮へ源の御傳言なり秘同
道すからいりもみする
うるはしく物し給ふ君にて　箋夕霧の實父を云
三條みやと六條院とに　夕霧のつとめたる事を云
九條右丞相遺誡云凡非有病患日日必可謁於君若有
故障者早以消息可問夜來寧否又云大風疾雨雷鳴地（秘になし箋在之）
震水火之變非常之時早訪親次參朝云々箋禮記文王（此語末夕畧之）
世子曰文王爲世子朝於王季日三鷄初鳴而衣服（而衣服イ）至於寢門。外イ
問內豎之御者曰今日安否如何內豎曰安文王乃喜及
日中又至亦（變イ）如之及暮又至如之其有不安節則內豎以
告文王色變行不能正履此語末畧之　夕霧は儒學を
し給ふ故にかやうに道か正しきなり

この院にまゐり宮よりそひて給けれは　六條院へ見
參にいりて三條宮より參內もあるなり
宮いとうれしくたのもしと　箋三條宮なり
まちうけ給ひて　夕霧を待うけ給ふなり
おとゝのかはらさへ　河殿瓦　箋云寢殿檜皮葺の棟
瓦も吹ちらすなり風飜翠瓦雨頽墻體也　秘瓦なと
も落るなり
かくて物し給へることゝかつはの給ふ　私云宮の御
心にかく夕霧のわたり給へるはうれしけれとも道
すからも此あらき風にはあやふしとおほすなりか
つはとかける此心なり
そこら所せかりし御いきほひの　秘三條宮の事也
箋云故攝政薨に薨し給ひしよりよろつ引かへた
るなるへし
つねなき世なり　秘權門なりし人にてありしも今は
人のまゐる事もまれなるとなり　私此君は夕霧な
り
いまに大かたのおほえの　大宮は今とてもおほえの
かろき御身にはあらねと故攝政のおはし源を御む
こにてもち給へる時のやうにはなきとなり

内のおとゝの御けはひは中々すこしうとくそ　秘へたてあるとなり　内大臣はすこしおろそかにおはするとなり
すゝろに物あはれなり　箋夕霧心なり
戀しとおもふ人の　箋雲ゐ鴈の事なり秘
ありつる御おもかけ　箋紫上の事也秘
きしかた行末　秘たくひなき紫上の御有さまなり
箋上代にも末代にも難有さまなり
いかてひむかしの御かた　箋花ちる里なり
おとゝの御心はへを　秘花散里をもかすまへておき給へるを殊勝なる御心と父おとゝを思ひ給ふ也
此花散里を數まへて置給へる事源の優恕深きを歎徳し給ふなり
人からのいとまめやかなれは　夕霧の君實法の人なれは紫上をみ給ふてにけなきまては思ひよらぬとさやうならん人も哉と思ひ給へる也にけなきはたくひなき心なり　夕霧は實法なる人故ににけなき事はあるましきと思ひ給ふなり　弄夕霧の心の事なり　夕霧は實法の人なれは紫上を見給ふにもあるましき事と思ひ給ふは誠には心も動給はすと也

爰にてにけなきといふは有ましき事をいへりおのつからにつかはしからぬと云に心かよへり　花鳥にたくひなき心と云々不可然歟
さやうならん人をこそ　秘かくのことき人をこそとおほすなり　箋紫上に類する人もかなとこそとおほすなり
あかつきかたに風すこし　景氣おもしろし　箋寛平御記云八月丙子從昨日暮至今日雨不霽昨日申一刻大風自艮角吹起寅二刻息此面影　見たり景氣面白也以上箋
むらさめのやうに　箋河　白雨　和名無良佐米　暴雨と一種也
風のふきまふほと　六條院のあたり廣きさまなり
人々はたおはしますおとゝのあたりにこそしけゝれ
箋云ひろくそこらたかき心ちする院にとよみ切へし其次におはしますおとゝにこそ人々しけゝれと云心也是は院はひろく人數はすくなきと云には非す常の御所一つを各大事として家司以下あつまりつれは自餘の殿舍は人すくなきとの心なり
ひむかしのまち　箋花散里　夕霧をは花ちる里へ源

のきこえつけ給へる故なり
またほの〳〵と　河會明
道のほとよこさまあめいとひや〻かに吹いる　雨風の體なりおもしろくかけり　箋世俗に今よこしといふ風の時の雨なり車のうちへ吹いるなり　めつらしきよし逍遥院申されしとなり　私三光物語云連歌に一度よこさま雨としたりき
またわか心に思ひくはゝれるよと　秘紫上の御事なり　箋したは雲井鴈の事に又紫上の事の添たるとなり
ひむかしの御かたに　花散里の御方なり
をちこうして　箋花散里なり
つくろはすへきよしなといひおきて　夕霧の花散里のかたの事下知をくはへてかへり給ふなり
みなみのおとゝ　箋源の御方なり
おはしますにあたれるかうらん　河高欄　閘源の寝所の順の階の間なり　箋云あたりの間なるへし源氏おはしますをりの高欄なりいまたおほとのこもりたるに夕霧中將まゐりてたゝすむなり
山の木とも　秘庭の山なり　庭のうゑ木の體なり

日のわつかにさし出たる　野分のなこりおもしろし
うれへかほなる庭の露　箋私云草とものあるにもあらぬさまなり
中將のこわつくる　箋源の詞秘
おとゝ夜はまたふかゝらんはとて　源の夕霧の聲をきゝておき給ふなり
おとゝうちわらひ　箋紫上は物の給ふけしきなり秘
いにしへたに　箋源のたはふれての給ふなり秘
曉のわかれよ　花これはあるましき事なれと紫上にたはふれの給ふ詞なり
ゆるひなきならひ　無綏　箋ゆるいなき如此付之無綏夕霧の心也　箋くつろきのなき也ちともすきるなきなり水もらぬなといふ事なり　秘ひまなき御あはひとなり
みかうしを御てつから　箋云内へ一つにあくる格子なるへし蓬生卷にもけうそくにうちかけ給ふとみゆ今の世にも紫宸殿は如此なり　閘内へ上る格子なり
たちのきてさふらひたまふ　秘夕霧の退き給ふなり

夕霧の氣遣神妙なり
いかにそ　箋 源の詞なり秘
しかはかなき事に　箋夕霧の御返答　秘 しかはさう
とい ふなり
いとふひんにこそ　箋 如本
わらひ給うて　箋 源なり
いまいくはくもおはせし　秘 源の詞箋　箋云別に仕
へし同は短しの心なり
うちのおとゝはこまかにしもあるましうこそうれへ
箋 秘に宮もつねにかくの給ふとなり　箋云しみ
しみとしたる孝心はなき人となり
人からあやしうをゝしき　河 雄壯日本紀 をとこをと
こしきなり　秘 是より内大臣の性を源の給ふな
り箋
おやなとの御けうをも　箋 秘面てむき計の孝なりこ
まかしくもあるましうといふをうけたり
人にも見おとろかさんの　外聞を本にして賓儀の思
ひ入少なきなるへし
さるは心のくまおほく　箋 秘云心にいさゝか深き所
ある人なり云々如何　箋云心にかまへたる所あり
て思積りのある人と云にや　聞 心に表裏のある躰
強く悪き表裏とは見へからす云々如何
うるさなから　秘 うるはしきなり弄聞　箋 うるはし
きなり才能の人とみゆ
かくなんなき事は　箋 難のなき人はまれなるとなり
大かたは無雙の人なれとなり　箋 難のなき人は世
に稀なる事となり賢者も一失必ある事なり大方は
無雙の人なれともと云なり
いとおとろ〳〵しかりつる風に　箋 源の詞
この君して御せうそこ　箋 夕霧を御使に参らせ給ふ
なり秘
よるの風のおとは　秘 源の詞　源の中宮へ申給ふ詞
なり
おこりあひ給ひ侍て　花 風の病おこりあひたる也
秘 かせの心おこりあひたる也　箋 野分に風心ちの
萠したるなり弄同
ためらひ侍る　箋 養生し給ふよしなり秘
朝ほらけのかたち　秘 夕霧のかたちなり箋
ひむかしのたいの南のそはに　箋云中宮の對屋なる
へし

御前のかたをし　聞こせんのかたとなりおまへ可然歟

みすまきあけて　秘中宮の御方なり

うちとけたるいかゝあらん　秘立ちよりてはいかゝなるへき人とは知らねともよそめには床しき人達となり　聞内々のまゝの衣裳と云々されと明くれの體さたかならぬとなり　私此義ならは引つくろはぬ衣裳のさまなから明くれのさたかならぬ故におかしく見なさるゝとなり

さやかならぬ明くれのほと　河上の詞に日のやうや（わつかイ）うさし出たるにとありこゝに又明くれとあり不審なり一義云八月の日卯の半に出とみえたり此心歟然とも暴雨後朝重雲未晴陰霧猶暗ひとへに明くれの雲のことくなる歟中將又はるかに見やりたれはさたかならぬ明くれと云歟朝に霧わたりてとあり旁不相妨矣　拾「朝ほらけ日くらしの聲そ聞ゆなるこや明くれと人の云らん　箋上の詞に日わつかにさし出たるにと云て此明くれの詞のみよし河海の說尤なりそらはいとすこく霧わたれるとあれは暴雨後朝朦朧たる故深き殿中明くれの如しと云へし　箋云南のおとゝはたつみをうけたり日の出はやかるへしされはわつかにさし出たるにといへり今此中宮は西おもてなれは日の光おそかるへし況や野分のあとの空すこく霧わたれるには一入をくらくあけくれの如くなるへし此物語の習時節刻限方角以下少も相違する事なし能可廻思慮而已　拾朝ほらけ云々前にあり

わらはへ

むしのこともに　河虫屋なり

しをん

なてしこ　秋に感ありて七草にもよめり箋

をみなへし　おもてたて青くぬき黄なりうらはもえきなり

かさみ

四五人　箋しでにんとあり

いとあはれけなる枝とも　秘風に吹ちらされたるなり箋

吹くるおひ風はしをにことく〳〵に匂ふらむかうのかをりもふれはひ給へる御けはひにやといと思ひやりめてたく心けさうせられて　私此段三光自筆の抄に

出るの分脇に註付る分等如本寫なり　箋秘に此心
得さる事也　河にしゝうのかにことににほふのか
をりも云々註に侍從は薫物一方かうのかをりは麝
香の事也花鳥にしゝうのかにことにゝほふかうの
をりもふれはひ給へるけはひにやと有註にかうの
かをりもやかて侍從のたき物を云り中宮の御うつ
り香にふれてたきものゝ香をもてはやしたる心な
り　河海に麝香の事かといへるしかるへからす
弄しをに諸本同紫苑の事歟しらに或本紫蘭　しゝ
うに或本侍從薫物方なり可然云々　箋云しをにの詞
可然紫苑をいへり此中宮の住なし給へる御ありさ
まは秋の離に匂はぬ花まてもみすの中の追風の香
にしめるやうなるとまめやかに宮のそてふれ給ふ
にやとおほゆる心にくきけしきをいへり匂はぬ紫
苑を云出してこと〳〵く秋の花共おのか匂ひには
あらてかうの香にしみけると云なせりされはこと
ことにほふらんかうのかをりと引つゝけ見るへし
諸抄の義皆截之然而以墨合點如本
ふればひ給へる　河振舞袖ふれる五音通するなり
秘ふるまひ給となり惣しては袖ふるゝなとなり中
宮の御ふるまひも立そひたる歟となりたきものゝ
にほひなとなるへし　弄こゝにてもふるまひ給ふ
なり　箋觸なりはひは詞の助なりはみなと云か如
し是河海説なり尤可然　箋云秋の花も宮の袖ふれ
給てうつり香に匂ひけるにやとおほゆるよしなり
秘弄等の義非なり秘弄等にふれはひの詞こゝにてはふるまひ
給なり云々　聞中宮の體を思ひやりたる夕霧の心
なり

立いてにくけれと　夕霧の心中なり

人々けさやかに　秘夕霧の御いてあるをはちたる也
私俄に肝つふるゝやうにはなく自然にみな〳〵
簾中へすへり入たるなり心つかひしたるさまなり
みなすへりいりぬ　箋云かうらんの人々なるへし人
人けさやかには有ねともといへる人に耻たるもよ
き程なる體可見之

御まゐりのほとなと　入内の始めなとは夕霧は童形
にて居給しかは女中にもふかくはち給はさるなり
箋

御せうそこけいせさせ　秘源の御言傳なり

宰相の君內侍など　秘二人なり箋　此二人夕霧のし

り給へる人なるへし
わたくしことも　秘物かたりなとし給ふなり箋
これはたゝさいへと　箋花云けたかくすみなし給へる中宮の御事なりものおもひ出らるとは紫上のかいまみの事也云々　弄云夕霧の心にて南のおとゝ思ひおとし給ひしにさはいへとけたかきと也云々聞同　秘云紫上をたくひあるましく思ひしに又勝れて上﨟しきとなり　箋云此段は中宮の御事にはあらす宰相内侍なとやうの此御所にさふらはるゝ人の有さまを云へり其人からはさまての事もなけれと此宮の所からけたかくよし有をさいへとゝは云り数ならぬ人といへとけはひありさま各別なると見給ふよしなりすみたりとはにこやかなるさま歟　箋秘云花鳥説如何是は只上﨟しきなるへし云云以上箋　私此箋の義如何猶弄花の義其外多分同之歟　此義を可用歟
さま／＼に物おもひ出らる　箋云此宮の人々を見給につけて世にすくれたる人はなき物かなと思ふより雲井鴈の事紫上なとさま／＼に思出給ふなるへし是を紫上の事と一偏に見るへき事さま／＼の詞あたらさるへし
南のおとゝには　紫上の御かたなり
中将みはしに　夕霧の中宮より紫上のおはする南のおとゝへかへり参り給ふなり
おらきかせをも　宮よりの御返事に源よりの御音信をまちしとなり箋　箋云おほふはかりの袖といへる語勢なるへし
いまなんなくさめ　秘只今の音信なり　只今の御音信にて慰給ふなり
あやしくあへかに　秘源の詞箋
女とちは　箋宮中女房計にてとなり
けにおろかなりとも　箋源の疎畧と思ひ給はんとなり
はつかに見ゆる袖くち　箋紫上なるへしと推し給ふ也秘同　私みしかき御木丁はさし木丁歟
むねつふ／＼となる　箋云胸の鳴なり　弄云成字なり云々不可然　聞胸のくるしく成なり　或むねつふるゝなり
ほかさまにみやりつ　夕霧の紫上の袖口とみるより心にかゝりむねつふるゝ故にあらぬかたへ見やり

たるなり
中將のあさけのすかた　私開字歟秘　紫上へ源の中
ふ給也箋　朝開形萬旦開容儀萬
たゝいまはきひはなるへき　夕霧の年のほとよりも
ねひとゝのほりたると源のおはすなり
心のやみにや　河「人のおやの心はやみにあらねと
も子をおもふ道にまとひぬる哉
わか御かほはふりかたく　秘草子地の判なり箋
いといたう心けさう　源のさまなり
宮にみえたてまつる　源の詞なり　源の詞秋好中宮
の御事をの給ふなり弄
なにはかりあらはなるゆゑ〳〵しさもみえ給はぬ
或是より源の中宮をほめ給ふなり　箋云よろつの
事心にはたらひなから上へにはそれとも見え給は
すおくふかき御心をいへり同也如愚といへる類也
聞中宮の御さま何とやらん心はつかしき體なり
いとおほとかに女しき物からけしきつきてそおはす
るや　箋云みるめはおほとかにて心のさときさとき
とを云なるへしけしきつきて此詞箋此義　聞けし
きつきてとは餘情にはつかしけなる體のてもるな

り　私云此義然へき歟
中將なかめ入て頓にも驚くましき　夕霧の紫上の補
口をさそとみて心にかゝれは外さまになかめやり
てそのまゝ心にかゝるまゝにつく〳〵となかめ入
て居たるなり仍源の簾外へ出んとし給ふもえしら
ぬなり
心ときさ人の御目にはいかゝ見給ひけん　此夕霧の様
體を源の不審に見しり給て立歸へり紫上へもし見
え給ぬるかとたつね給ふなり
かのとのあき　河彼戸
おもてうちあかみて　秘紫上也箋
いかてかさはあらんかし　紫上の詞
なほあやしとひとりこちて　秘源の心なり　箋源な
り
みすのうちへ　箋弄に中宮の御方の事也
わたとのゝとくち　箋上の詞に中の廊よりまゐり給
とあり同し廊にや
おもふことのすち〳〵　河筋々　箋雲井鴈紫上の事
箋云此段にて上の詞のさま〳〵に物思ひ出たる
と云るを一人のうへに見ましき事を知るへし

こなたよりやかて北にとほりて　明石の方へ源のおはするなりみやり給ふも源也
なれたるしもつかひ
りんたうのさかほ　弄字のまゝ一註
とかくひきいて
物のあはれに　聞源の此程明石へうと〳〵しきは又野分のなこりなりなといまた御音信なきこと歟
御さきおふ聲の　殿舎渡御にも上古は隨身前をおひけるなるへし　花云家の中は心まかせなり仍制し止め給ふなり
こうちきひきおとして　花衣架にかけたるを引おとしてきたるなるへし　秘明石上の禮あるさまなり　弄此兩義に同聞同　或說云こうちきは本たいの女のきる物なれは源氏御わたりのおとを聞てこうちきを斟酌の心有ておしやりたるなり　箋衣架にかけ置たるを引おろしてき給ふなり明石上の禮義あるさまなり　弄花鳥同　秘箋如此を用へし
けちめみせたるいといたし　聞かとあるをいたしと云々　秘いたしとはほめたる詞也弄同　河揭目勞　箋弄云ほめたる詞也云々秘同　箋云いといたしとは明石上の心なり源氏の御出の儀なるに驚てやうやうにてうちき計をまきかけて赤脚なると心に痛し思へるなるへし
はしのかたについゐ給て　源の體なり
心やましけなり　源のやかて立かへり給ふをいふ明石の心中なり
明石上
おほかたに荻のは過る風のおともうき身ひとつにしむ心ちして　箋弄云この歌殊に殊勝なる歟野分をいはすして大かたのをいへりまして野分なとの事も下の心にあるへし　秘云源の音信すてゝかへり給ふを云なり野分をはいはてそのありさま殊勝也　箋云荻の葉にうち吹風のとまらぬことく〳〵源のしはしもやすらひ給はぬ事をうれへたるなり野分の身をしほかはてとはりさと云分あるへきにや已上箋
にしのたいには　秘玉かつらなり箋　箋云花散里の御方の西の對なり
こと〳〵しくささなおひそと　箋秘云同家の中なれはなり　箋云玉かつらへは下にけさう心ある故にこなたに刻をうつし給ふ事を人しれすとおはすな

るへし　花明石上の方へ渡り給ふとて隨身さきを
おひたり家の内の事は心まかせの事なりさてさき
なおひそとの給ふなり　私前に此事を註せり但花
鳥の本段の註なる故載之
日のはなやかにさし出たる程　箋上の詞に日のわつ
かにさし出たると云々日たくる天に雲霧も晴たる
氣を見ることし
けさ〳〵と　けさやかなると同詞なり
ものきよけなる　玉かつらのさまなり
ちかくゐ給ひて　源のおはして玉かつらのあたりち
かくゐ給ふなり
おなしすち　玉かつらに源のたはふれ給ふ事なり
たへすうたてと　箋たへすは不堪忍なり　私云不斷
にても心可然歟如何
かう心うけれはこそ　箋玉かつらの詞秘　箋云うき
身をは野分にそたくへはやとなり
むつかり給へは　箋熱の字なりいかる方によれり
いとよくうちわらひ　箋源なり
風につきてあくかれ給はんやかろ〳〵しからん　秘
源の詞風にもあくかれ給ふへき事はあまりにかろ
かろしかるへきとなり　箋源の詞風のさそふまゝ
に御身をまかせ給はんもかろからん御心なるへし
さりともとまるかたありなんかし　秘心のとまる方
有へきとなり　箋玉かつらの心のとまる方も定て有
へきとなりあしく取なして戲給ふなり弄同
やう〳〵かゝる御心むけこそそひにたれ　箋いつし
か源氏をはいとひ給て外さまへとあくかれ給御心
の出來にけるよと也
ことわりやと　箋いつまてかやうにしても居給ふへ
きか殊に源氏のねひ過れは外を求め給もかた〳〵
ことわり哉と唹し給ふなり
けにうちおもひのまゝに　秘あしくいひたると玉か
つらの思ひ給ふなり　玉かつらの心なり心にうか
ふまゝを遠慮もなくの給しよとなり
みつからもうちゑみ　玉かつらなり
いとおかしき色あひ　箋玉つらの容顏を云也
ほゝつきなと　河毉名苑云酸漿　箋一名洛神珠　和
名保々都岐　已上河　聞玉かつらの事　ほゝつき
童の吹てあそふ物也こえてふくらとしたる體なり
かみのかゝれるひま〳〵　箋髪のかみのかはにかゝ

れるさまなるへし
まみのあまりわらゝか　聞にこやかにうつくしき故
しなたかくはみえぬなり和の字なり　箋曰まみと
は目の上の事と聞ゆ桐壷にまみなともいとたゆけ
にと云々　又若紫に紫上のをさな立をまみのあた
りうちけふり云々　わらゝかとは秘ににこやかな
るなり云々如何仙源抄云和也云々　箋曰あまりわ
らかなるとあるは何様ほめたる詞なり猶不決
そのほかは露なんつくへくも　河難也
中將いとこまやかに　秘夕霧なり　聞夕霧の心に源
玉かつらとこまこまと物語し給ふ程にかやうの折
節いかにしてか見るへきなとなり　聞昨日紫上み
たてまつりし事にならひてなり
まきるゝ物とも丶とりやりもたれは　野分の翌朝な
れはいつくもあらはに物の立ともしところなる由也
おやときこえなからかくふところはなれす物ちかか
るへきほとかは　夕霧の不審したまふなり箋　箋曰
父母兄弟に遠とこそ云をいかなれはあやしく見給
なり
あやしき心もおとろきて　源も玉かつらの體を夕霧

の心におとろくなり
さすかにいとなこやかなるさまして　玉かつらのむ
つかしくは思ひなからさすかつんと隔心にはなき
體と見るなり
ことなれこしきにこそあめれ　箋秘云平生かくな
れこしきかとなり箋曰なれさらめと云にや　聞
こと丶はてにをはなり云々つんとなれこしきと
いふ義歟
あなうたて　箋夕霧の心なり
もとよりみなれおはしたてゝ給はぬは　秘幼少の時
より引はなれてそたち給へる故と思ひ給ふなり
幼少より見なれ給はぬ故かと思ひ給ふなり
かゝるおもひそひ　好色の心をいふなり
むへなりけりや　河承諾の心なり諾日本紀宜も同事
なるへき歟　固宜師曰理宜然也漢書高紀下
箋曰私云むへなりの心いさゝか心得かたき故に箋
にも如此ありて註せす案するに夕霧の心中にもと
よりみなれおはしたて給はねはかゝる思ひそひ給
へるなめりとわか心に承諾してむへなりとそれを
思へる成へし夕霧の心中に義を付て則心中にて承

諾したるなるへし

あなうとましと　夕霧の心中にかくさま〳〵思ひ給ふをはつかしき事そと草子地なり

女の御さまけにはらからといふともすこしたちのきてことはりそかしなと　河日本紀には同胞同腹なとかきてはらからとよめり然は一腹の心也但此物語にあなかち一腹ならねとも只兄弟はかりをもいへるにやと見ゆる所もありし如何　箋夕霧の工夫なり源に道理をつけて我心にも玉鬘を見なれしには他腹なとゝ云まきらはしもあらはよそ〳〵には思ふましきとなり　箋曰河海に日本紀を引て同腹なと書てはらからとよめり然は一腹の兄弟歟云々此説尤可然同母兄弟を立のきてこと腹共思ひなさんには心あやまりもせましと云へるなり打任て他腹の兄弟婚合の許すへきに非す上古の事は例とするに不足梵網の戒律世にひろまりて姉妹六親行媱無慈悲是菩薩波羅夷罪と説き律令格式定りてより以来父子兄弟と違る道諸人守る所也文に依て義解するには三世の諸佛の怨といへる如く此物語師説を受すして自見せは邪路に入事指掌ことくならん

昨日見し御けはひ　秘紫上の事なり箋

みるにゑまるゝ　箋玉かつらなり

八重山吹のさきみだれたるさかりに露かゝれる夕はへ　花玉かつらの君のすかたの夕露の思ひなすらへ給同し十七巻にきぬをあなたこなたへくはり給ふ所にくもりなくあかき山吹の花のほそなかはにしのたいにとありき給ふ人のかたちにおもひよそへ奉らせ給ふと見えたれは源氏の御心にも山吹は玉かつらの君にかよひたると思ひ給へるなり　箋玉かつらの巻きぬくはりに玉かつらの君には山吹のはそなかとありき給ふ人のかたちに思ひよせて奉れ給へり源氏の御心にも此花にたくひ給へるよし花鳥に註せらる尤可然

をりにあはぬよそへともなれと　聞草子の筆法なり時節にあはぬたとへともなれと心中にうかふまゝそと夕霧の心中をかけるなり　箋云此は秋なれはなり又上の詞に紫上をかは櫻にたとへ給へしはよそへともとなり

花は限こそあれそゝけたるしへ　河諷文選灑同庭樹以灑落帯　花はしへなとのしとけなきもある物を

と也　箋曰花鳥の色にも音(香イ)にもよそふへき方そな
きといへるかことし
御まへに人もいてこす　箋玉かつらと源なり
いとこまやかにうちさゝめき
いかゝあらんまめたちて　秘玉かつらの方より源の
出給ふなり何とはしらすけしきまめたちて出給ふ
よと夕霧の思ひ給ふなり弄同　箋曰源のふしめに
こ立かへり給ふ處へし其故は玉かつらよりよみか
け給ふなり氣色を取給ふ也
玉鬘 ふきみたる風のけしきにをみなへししほたれぬへき
心ちこそすれ　箋曰女郎花うちなひきはよのつねの
風なり吹みたる風は源の事なり是はあらさる外の
風なれはいたつらにしほれぬへしとなり
くはしくもきこえぬに　聞玉かつらの此歌をよみか
け給ふはさたかにきこえぬを源氏のみち／＼すし
給ふかきてえたるとなり
にくきものゝおかしけれは　此段皆夕霧の心なり源
と玉かつらの様體の心つきなきと思ふ夕霧の心な
るへし　聞歌よみかけたるはさし過たるとにくゝ
おもふ心歟

或夕霧の心玉かつらの源氏へ歌なとよみかけ給ふ
をにくきとなり　さりなからおかしきとなりさて
ちかくゐたりと源氏へ見え奉りしとて夕霧立さり
ぬとなり
返源氏 下露になひかましかはをみなへしあらき風にそしほ
れさらまし　秘下露になひかはあらき風にはあたる
ましき事なり我は忍ひて(にイ)なき給はゝよかるへきと
の下心なり　箋源氏に忍ひてなひき給はましかは
あらき風にもいかてかしほるへきとなり下露といへ
へる見所あり　弄源になひきなはとなり
なよ竹を見給へかし　河靡竹とかけり
なひくによりておれぬ心なり弄秘　箋證據にいへ
り　なよ竹は苦竹なとのことと歟よのなかくてをれ
ぬ物なり引歌　古今「なよ竹のよなかき上に初霜
のおきゐて物を思ふ比哉　私此引歌に及はす　う
つせみ君の事をいへるになよ竹のやうにてさすか
にをるへくもあらすといへり
ひかみゝにやありけん　箋夕霧の心なり　聞夕霧の
立のきさまなれは遠くなりたるゆゑにさたかなら
ぬなりさてかくいへりひか耳とはしらす聞にくゝ

有ましき事と夕霧のおもふなりさてこゝにてまめたちて立給ふはちと述懐なとのふかく有しゆへにあらき風なとある力なり

ひんかしの御かたへ　秘　花散里也箋

わたり給ふ　源なり

あさゝむなる　河　朝寒

ねひこたち　箋　河年預後達年老たる女房なり云々調行

ほそひつめくもの　箋　河云絹櫃の事也云々秘に枕草子上の端にも見ゆ弄枕草子にまつりちかく成ては青くち葉二あゐなとの物ともをおしまきつゝほそひつのふたにいれ紙なとにけしきはかりつゝみて引ちかひもてありくこそおかしけれと云々以上箋 みィ

河　引歌六帖「しらぬひのつくしのわたは身につきてきてはみねともあたゝかにみゆ　秘　はそひつはぬりをけなとの類歟聞同　弄　綿をかけてむしりなとする物なり

いまやう色のになくうちたる　河　紅なり延喜式云紅を今様色とも聴色ともいへり　或いたくうちたるはきらのあるなり

中將のしたかさねは　秘　源のたつね給ふなり箋

御前のつほせんさいのえん　秘　ごせんとあり　秘　禁中に御あらましの御宴も停止せられけると也箋曰花共野分にあひたる故なり　河　康保三年八月有前栽宴云々　以上箋　私河海には何をかえんせられんとあり

すさましかるへき秋なめり　前にいへることく此野分の吹ちらしたる體をかきたる皆世間の有さまなり春秋のをりにふれて興をもよほし給はゝ盡期あるましきをかく書なせり

なにゝかあらん　箋　源の心に花散里を褒美し給ふ也

みなみのうへにもおとらす　花散里のかやうのかたは紫上におとらぬなり

御なをしからの花文（ケモン）れう　箋　からのもし　秘　三本御なほしけもんれうとありからの三字無之　河　唐花紋綾　順和名　唐顯文紗事なり　秘　夏の直衣なり顯文紗なといふかことし　花　花紋綾は有花文之綾也謝惠連詩云客從遠方來遺我鶴文綾と云同心也或説顯文綾なりけんもんしやなといふかことしこれは夏の直衣をいふ當時は穀の竪文なるを用也大略同事

なり歟花鳥秘の義に載之河の義秘に同しと云々同
天暦御記經櫃三合並置下机一脚之上花文綾覆云々
箋
この比つみ出したる花は　箋此比の花とは鴨頭草也
河花同　花云夏直衣花田に染る故也云々　河云鴨
頭草移花と云も露草云々已上箋　秘月草の事なり
中將のこそかやうに　秘源の詞　箋曰二藍の色年齢
に從て淺深ある故なり
むつかしきかた〳〵めくり　箋夕霧の心也
かゝまほしきふみ　夜前の野分のとふらひに雲井鴈
惟光か女なとのかたへのなるへし
ひめ君の御かたに參り給ふ　弄明石姫君の御方へ參
給也　箋夕霧一人參るなり
またあなたになんおはします　花明石姫君は紫上の
御かたにおはしますかとなり秘同弄同箋同
物さわかしけなりしかは　箋夕霧の詞秘
宮のいとも心くるしうおほいたりしかはなん　秘曰
なんといひすてたり　花三條の大宮の風におち給
へりしほとにそなたに侍りしよしを夕霧かたり給
ふなり

ひゝなのとのは　此夕霧明石姫君へは源のけとほか
らすもてなし給ふ也ひゝなの宮つかへなとし給ふ
前の巻にあり
人々わらひあふきの風たに　人々ひゝなの殿の事を
返答
ほと〳〵しくこそさきみたれ　殆　箋河云おとろお
とろ敷歟云々　箋曰殆歟
この御殿あつかひ　女房たちひゝなあそひのむつか
しき事をいふなり
こ（かイ）と〳〵しからぬ紙や侍る　秘夕霧の詞箋
御つはねのすゝりとゝこひ給へは　箋曰との字二つ
面白し
みつしによりて　明石姫君のてうとの御つしなり
かみ一まき　河一重なり
いなこれは　秘私の硯をとの給ふなり　箋曰會釋な
り以上箋
北のおとゝおほえを思ふにすこしなのめなる心ちし
てかき給ふ　花雲井鴈をあかしのおほえになすらへ
ての給ふ也　弄雲井鴈の事を明石上におもひやお
とされんとなり云々如何すこしなのめなる心ちと

は明石姫君の事をしひてかたしけなく思はて御硯にて書給ふなり北のおとゝまてきてえんの遠慮あまりなる歟又そこの人々もたしかにそのうたへとしらん事おほつかなし又云夕霧紙硯をこひ出給ふて過分なるやうに思ひ給ひしかとも明石上北殿のきゝ給ふ事もあり文のやり所心にくゝも思はれすくちをしと明石上のさまをおもへばさのみさやうにいふへき事にはあらすとの夕霧の心中歟　秘花鳥の義いかゝ姫君后かねなれは執し給へるなりされと明石上のさまをおもへはさのみさやうにいふへき事にはあらすとの夕霧の心のうち歟　箋夕霧の心に姫君は后かねなれは執し給へるなりさる故に御硯にてはいかゝとの給へるなりされと御腹を思へは明石の上なりさまておそるへきかはと思落して御硯にて斟酌なく理運に書給となり秘箋加花鳥の義一向不相當弄の義も穿鑿に入不可用之
已上箋

すみ心とゝめておしすりふてのさきうち見つゝ　或夕霧の樣體よきなり紫の紙には墨うすくては見えぬ物なれは心とめてよくするとなり

されとあやしくさたまりて　秘夕霧の歌の口つきなり儒業を學て其才學のみにてはなと優なるかたのかけたるなり草子地　弄同　弄草子地なり夕霧の口風雅ならぬ事を評せり儒より出て廣才博覧のあまりはなく／＼と優美なる方のおくれたる也是又世上のをしへなり

風さわきむら雲迷ふ夕にも忘るゝまなくわすられぬ君（夕霧雲井雁へ遣す歌なり）　箋曰杜詩風雨にも亦可來和と云類なり　秘曰雲井鴈へ遣とは此歌にて見えたり云々以上　河無復風塵日本紀　聞風さわき村雲まよふ詩の對句なとやうの心有漢才過たゝ故也云々私此義に及ふへからさる者歟　私頗阿夕立の歌に「野分する頃ならなくに風さわき村雲迷ふ夕立のそらとありふきみたりたるかや　此文を刈萱に付たるなり

かたのゝ少將は紙の色にこそとゝのへ侍けれと　河此交野少將事はゝ木きの卷に事舊畢彼少將無雙の色好なるによりて艶書の紙の文をは藤の花につけられ木草につくるさたまれる事也此物語の中にも處女卷に源氏齋院へたてまつられし紫の紙の文をは藤の花につけられたり螢卷に兵部卿の文玉か

つらの元へ白きうすやうにて菖蒲の根につく若菜に源氏女三宮へ白き紙なる文梅につく浮舟巻に兵部卿浮舟のもとへむらさきのうすやうにて梅につけたり源中將すく／＼しきまめ人なれはさはかり紫の色もおもひわかさりけるといはれたる　花是は紫のうすやうに書てかるかやにつけたるが紙の色にはちかひたると人々とかめたる也なみのしめゆふと云物語によそへつゝみれとかなしかくてのみひとりはいかゝゐての山吹ふりにたる事なれと紙の色にゝたるこそおかしけれとて山吹につけ給ふかた〻〻少將にやあらん今案交野の少將は紙の色に似あひたる枝につけたるを夕霧の心には必しも然へからす何にても其時にしたかひたる花につくへきと思ひ給へるにや　弄物語あり好色者也　秘さふらふ人々のいふ也花の色に紙の色をもとゝのへたる也　箋交野の少將の物語ありされは紙の色にあひたる枝に付たるを今紫の薄様を苅萱に付られたるを咎めて人々の申なり箒木處女巻に詳也　河云凡同色の木草に付る事定れる事なり此物語の中乙女巻に源氏齋院へ奉られし紫紙を藤花に付られ螢巻に兵部卿宮玉鬘への白き薄様菖蒲の根に付若菜に源氏女三宮へ白き紙（梅とあり）櫻に付浮舟巻匂宮浮舟のもとへ紫薄様櫻に付今夕霧の心を河海には實法の人なればさはかりの色も思ひわかさりけると返答し給へりと云々花鳥には何にても其時に隨ひ咲たる花に付へしと思ひ給へるにや云々已上箋

さはかりの色も　弄夕霧の卑下の詞なり秘同　箋夕霧の返答なり　私云卑下しての給ふなり云々箋曰如何河海説可然哉　右に見えたり我はけさうの文のかきやうもうと〳〵しきと也たはふれ給ふなるへし

いつくの野へのほとりの花に　花いつくの野邊のほとりにて有しやらんかゝる色したる花はありしとおほめきてこたへ給へる也　弄いつくのいかなる花につくへきとそなとたはぶれ給ふなり　又説あり　聞いつこのほとりにさやうの花はあるそと云也花の義相違　秘箋弄に同し花鳥の説如何これは雲井鴈へなるへし　箋秘云いつくのいかなる花に付へき事はと戯れ給ふなり花鳥の説如何さやうの花のいつくやらんに有し物をとなり云々是は雲井

鴈へなるへし云々　箋曰引歌あるへし　私逍遙歌に「露よ袖にいつくの野へのほとりよりさそひかきぬるさをしかの聲

かやうの人々にも　女房とも夕霧に詞をかけてみしなり箋

心とくへうもゝてなさすいとすく／＼しうけたかし

夕霧の風流のかたへよらぬさまなりさるかたよきほとなる體なり

又もかい給うて　又も書給てなり　箋是は別のかたなるへし　弄一通は雲井鴈一通は五節なるへし又いつくにても以上箋　又ことかたへなり　私五節は惟光かむすめなり

むまのすけ　箋夕霧の家人なり秘

おかしきわらはなれたるみすゐしん　文ともの使なり

わたらせ（わか御方）給とて　箋あかしの姫君の紫上のかたよりこなたへ歸給ふなり花弄　箋曰風ゆゑに紫上の御方へ入申されけるなるへし夕霧は此御かへりを待かてら文とも書給けるにや　已上箋

見つる花のかほとも　紫上はかは櫻玉かつらの君は山吹にたとへし花のかほはせを夕霧の思ひ出給ふ歟　箋紫上かは櫻玉かつらの山吹也明石姫君を藤にたとへたる事若菜下にも見ゆ花鳥の義末にあり

れいは物ゆかしからぬ心に　夕霧の實法にてかやうの事も心にかゝらさりしか紫上をふと見給て心にかゝるからかやうにあるなり

たゝはひわたり給ふほと　明石姫君なり

人のしけくまかへは　箋曰御つき／＼の數多なる體なり

うす色の御そに　箋弄云紫のうすきなり云々

またたけにははつれたる　箋曰つねにはたけにあまるをはつるゝ（かしイ）と是は身のたけに不足をいへりめつらしき詞なり御年は十一はかりにおはすへし

すゑの引ひろけたる　髮のおひ／＼ふさやかなる體なるへし

おとゝしはかり　箋曰

ましてさかりいかならん　夕霧の心なり

さき／＼の櫻山吹といはゝ　花明石姫君を藤にたとへたる事若菜の卷にあり

かゝる人々を　夕霧の心中にねかふなり

さもありぬへき程なから　此人々は朝夕へたてなく見たてまつるへき人々なるを源のあまりにへたてさせ給ふとなり　紫上も姫君も夕霧とかやうによそ〳〵なるへき事ならぬを源氏の心おき給てふかくへたて給ふ事をいへり弄同

まめ心もなまあくがるゝ　思ひかけぬかいまみ故に何とやらん夕霧の心にかゝるやうなるとなり

おは宮の御もとに　秘三條宮なり　箋夕霧の三條宮へ参るなり

よろしきわか人　三條にもよき若人なとあれと惣別のやうたいなとか紫上明石姫君玉かつらの御方なとのやうにはなきとなり

中々所につけて　三條宮にてはかた（ち歟）きよき尼君たちなとは所に相應して中々よきさなり

内のおとゝも　内大臣の母三條宮を夕かたとふらひ給ふなり

姫君を久しく見たてまつらぬ　箋雲井鴈の事なり　秘雲井鴈を久しく見さるよしを宮のゝ給ふなり

いまのこの比はとにまゐらせん　秘内大臣詞箋

心つから物おもはしげにて　箋夕霧の事をふくめり　秘曰箋曰きゝしれの給ふなり

女子こそかくいはゝもち侍るましき物なりけれと　雲井鴈の事につけてかくの給ふなりさて近江君の事を又いひいて給ふなり

猶心とけす　夕霧の事をいきとほれる心見えたり

心うくせちにもきこえ給はす　秘宮の御心也　箋雲井鴈をわたし給へとはしひても大宮のゝ給はぬなり

いとふ（清）てうなるむすめ　河不調近江君事なり　内大臣詞近江君の事なり　箋聞にふてうとあり　ふてうとは物のとゝのふらす悪き事なり

むすめといふ名はして　おとゝの御むすめといふをなり弄　内大臣のまことの御むすめならはいかてかあしかるへきと宮のうたかひ給ふなり

それなんみくるしき事に　逸興に御目にかけたきとなり　私云大宮の御詞に内大臣の實の女なるからにさやうに不調なるは不審なるとの給へはそれをうけての詞也されは其事也内府の實子にて如此なる故にこそもてわつらひ侍れとなり

きこえ給ふとや　秘式部わか書たる所をかくしてし

るせり巻々に此心みえたるにや　弄巻の終いつれにもかく人にゆつりて紫式部の自作ならぬよしをかけり尤深し〳〵　箋紫式部自作にあらさるよしをかくして巻ごとに此心みえたり

岷江入楚第廿九　行幸

卅六歳　太政大臣
西對姫君事
十二月大原野行幸事
西對姫君見物事
藏人左衛門尉爲御使雉一枝自内裡獻太政大臣事次日源氏君渡西對御物語事昨日行幸見物事也
卅七歳　同
三條大宮自去年冬病惱事
二月朔日源氏三條大宮給事
玉鬘君事申大宮給事
大宮以御文被招請内大臣殿事着布袴事
内大臣參三條宮事
源氏君對面事
語玉鬘君給事
十六日玉鬘君御裳着事
自三條宮被獻櫛筥事
中宮被獻裳唐衣御髪上具事
常陸宮被送裝束事

内大臣結腰給事

近江君參女御殿申内侍上所望之由事

內大臣殿參女御之次被召出近江君事

行幸　以歌爲卷名竪並　花弄秘箋同

河うちきらし朝くもりせしみゆきにはさやかに空の光やはみし　王かつら歌也　卷の名也　私同返歌にも有又詞には大原野の行幸とあり　秘源卅六歳の十二月なり卅七歳の二月までの事なり　初音卷にも卅六歳なり　行幸は大原野行幸なり　或御説に天子のを行幸といふ院のを御幸と云いつれもみゆきとよむへし此卷の名に大原野の行幸なり

私此並の卷に數ありといへとも初音は源卅六歳正月胡蝶は同三四月螢同五月常夏同六月篝火同七月野分同八月行幸同十二月大原野行幸より翌年源卅七歳の二月迄の事なり卅六歳の九月十月十一月等の事は此卷の初に心こもるへし

かくおほしいたらぬ事なく　秘玉かつらを源のおほしける心なり　弄いかなる可然縁もかなとなり以上秘　箋玉かつらのよすかの事をいかてよからん事もかなとおほし入たるよしなり花同

この音なしの瀧てそ　花さなから又源氏君の思ひかけ給ふ事なり　秘源のしたにおもひ（こゝろイ）かけ給ふことなり引歌に「いかにしていかによからんをの山の

上より落るおとなしの瀧箋同此歌可然歟　河「とにかくに人めつゝみをせきかねて下になかるゝ音なしの瀧　いかにしていかに云々　箋河云とにかくに云々いかにして云々兩首の引歌いかてよから(いと)んことはと云詞の時はをの山相叶へりうたてをとなしう(ほしうイ)とわる詞の時には人めつゝみの歌叶へり箋曰兩首の心相叶へり　弄引歌兩首いつれも心叶へり在河海　或御說にかくおほしいたらぬことなくとは玉鬘をいかやうなる緣にもつけたく源のおはすなりいかによからんの本歌の心音無の瀧も音あれば世中のことわりにしていかによからんと云心なり

みなみのうへの御をしはかりことに　箋胡蝶の巻に源と玉かつらとの御事をたゝにしもおはすましき御心さまをみしり給ひつれはと思ひし事なり　花同　或說に螢の巻に紫上めつらしき御子あつかひかなとうたがはしきやうにの給ひしを思ひあはせて源のかくの給ふとあり　私始の義よし

かのおとゝ　秘内大臣なり箋

何事につけてもきは〳〵しう　箋内大臣の性善惡のきはたてたる人なり其趣常夏の巻にも見たり

さておもひくまなくけさやかなる　箋弄云内大臣の玉かつらの事を知給て又源氏の密通をあらはしてけさやかならんもをこかましかるへしと也　秘云内大臣玉かつらの事を知給うて又源の密通を顯はしてけさやかに内大臣の御方への聞えあらは我御心なからをこかましかるへしとなり花云致仕のおとゝは何事もきわをきわにして亂りかはし事を嫌給ふなり是も致仕大臣の御心にあなかちなる事に思ひ給うて事外なる御もてなしなとのあらはをこかましかるへき事を思ひ給て玉かつらをしゐてしたひさまなる事はあらしと思ひ返し給ふなり云々箋曰かのおとゝと云より此一段は内大臣の事也さておもひくまなくけさやかなる御もてなしとは源氏密通の義もあらは玉かつらを内大臣へしらせ申さん時其かくれあるましきとなりもしさやうならは内大臣の性物ことにきはをたてたる人なれは紫上へは所もおかす思こめもなくこと〳〵しくもてなされんはをこかましかりぬへきと也　秘の心は源氏の思くまなくけさやかなる御もてなしと見

えたり其時は思ひくまなくと云詞叶はす内大臣の
事に見れは思ひこめもなくと云に叶へり総別おも
ひくまなきと云詞竹川の巻にもおもひくまなき花
とみる〳〵此時は思ふかひなきの心無曲よしなり
然時は源氏の事に見んには内大臣の本意にたかひ
て曲もなき御ふるまひのあらはいかゝと云心歟猶
可工夫以上箋
そのしはすに（としのイ箋）大原野の行幸あり　三本年のなし　箋
河云仁和二年十二月十四日戊午寅四刻行幸芹川野
為用鷹鶴（鶴イ）也李部王記延長六年十二月五日大原野行
幸卯初上御輿　花云野行幸は仁徳天皇御宇より始
る云々仁徳天皇始仁明天皇承和（元イ）三イ二　光孝仁和二
芹川　醍醐昌泰元交野　延喜四大井川　延長四北野　同六大
原野此等なり　中頃白河院承和元大井川　十二月の例
は仁和二十二十四芹川御幸行平中納言千世のふる道
跡はありけりの時なり　今の行幸は延長六年十二
月五日大原野行幸例なり摸之　李部王記大略一同
云々已上箋　秘仁徳より始る遊覧に非す農業検知
なり　嵯峨天皇末に萬民の費を以てやめられたる
を仁明は再興せられしなりヲ世のふる道是也　私

に三光院自筆細字に被書入
御かた〳〵ひきいてつゝ　六條院の御かた〳〵也
うの時に出給うて　私河云延長六年十二月五日大原
野行幸卯初上御輿也
朱雀より五條のおほちを　秘箋如此　弄すさかと有
箋私云西のしゆしやかなり行幸の道つかひは上卿
陣の座にて仰するなり野行幸の事勘例花鳥に見た
り　十二月之例は仁和を引用此巻は延長六年の例
を仰用と見えたり　榊巻に齋宮母そひてくたり給
ふ事又親王供奉事皆仁和の例なり　太政大臣無供
奉事は延長の例なり以上秘の分を箋にのせたり御説　花鳥に李部王
記云自朱雀門至五條大路折至桂河邊上御輿就[illegible]群
臣下馬上御輿群臣乗馬渡浮橋方将其上句渡数枝　自桙路入野
口以上箋
けふはみてたちかんたちめもみな　箋同記云鷹（高イ）飼親
王公卿立本列其装束御赤色袍親王公卿及殿上侍臣
六位以上着麴塵袍諸衛官人着褐衣腹巻行縢諸衛服
上儀府掌（生蚫）以上着腹巻行縢悉熊皮（唯イ）○腹巻四位五位用
虎皮六位以下阿多良悉及鹿兒皮適用（無皮者用色皮）以上武官
着小手馬寮内舎人等同諸衛鷹飼親王公卿着地摺布

衣及袴（式用紫木蘭地綾色袴）小襖子餌袋犬鷹着豹皮腹巻及到野口着狼皮行縢四位以下同大井河行幸

うまそひ　河馬副也箋

たけたち　箋人からせいてろよき人々なり　秘　色ふしの行列見所有へし

左右大臣内大臣　箋曰三公納言參議都合卅一騎なり此外に親王あるへし行幸の時關白は乘車にて後陣に被候但野行幸之時先例如何可尋之

青色のうへのきぬえひそめの下かさねを殿上人五位六位まてきたり　箋あを色は麹塵也一日晴には必す着する也今六位藏人極﨟の着する袍是也かやうの時主上にはあか色を着御し給ふ也　秘河云一日之晴儀に諸臣着麹塵袍野行幸時左方鷂飼着赤白橡地色摺衣右方鷂（鵜イ）飼着青白橡地色摺衣之由競狩記に見えたり　花云李部王記延長六年大原野行幸其裝束御赤色袍親王公卿殿上侍臣六位以上着麹塵袍今案主上は赤色の御袍を着し給其外親王公卿以下は皆青色の闕腋の袍下襲は蒲萄染なり是は鷹をつかはぬ人の出立をいへり承和三年大井川行幸にもかくそありし云々　弄狩塲の例あり

雪たゝいさゝかうち散て　箋河云延喜二年（裏書には四年十月十九日云々）十月又芹川行幸あり　大鏡云山口に入らせたまひし程にしらせうといひし御鷹の鳥をとりなから御輿の鳳のうへに飛びまいりてゐて候ひしやうやう日は山のはに入かたに光のいみしうさして山の紅葉錦をはりたるやうに鷹の色はいと白く雉は紺青のやうに羽うちひろけて居候し程は實の雪のすこしうち散て折ふしさることやは候しとき身に（よイ）しむはかり思給へ候しはつみえ侍けりとて爪はしきはたへとしけるとなり云々彼記に雪のさたなし仍引載之と云々　以上箋

みちのそらさへ　道すからの體も事うるはしかるへし其時を思ひやるへし

みこたちかんたちめなと鷹にかゝつらひ給へるはゆつらしきかりの御よそひともをまうけ給へり　秘　鷹つかふ人は皆衣裳を野にて改むるなり兩抄に見えたり箋　箋曰こゝにてはいまた着用するにあらす衣裳の色めを云なり野におはしつきて着用とし るへし　親王公卿鷹飼事（如本）　河云李部王記云乘輿抄行出日華門自左近陣於朱雀門　夫門就（路院）鷂人説朝臣伊

衛朝臣朝頼朝臣在大將前鷹人（飼秦イ）茂春秋成武仲源致在公卿前鷹人（飼イ）陽成院一親王按察大納言鷂人中務卿彈正尹陽成院三親王在公卿前　鷹飼裝束事　弄云白き布の狩衣に靑く摺たる也指貫のうへにむかはき腰あてなとする也　花鳥李部王記鷹飼親王公卿着地摺布衣及袴（或紫木蘭地綺袴）小襖子餌袋　河伊勢物語云仁和のみかと芹川に行幸し給ひける時今はさることにけなく思ひけれともとつきにける事なれは大方の鷹飼にてさふらはせ給けるすりかり衣のたもとにかきつけたる中納言行平一おきなさひ人なとかめそかり衣けふはかりとそたつもなくなる　今案是は王卿の鷹飼の裝束也布狩衣の摺の文あるをきる袴にも同しく或は紫木蘭地の絹の指貫をきる由見えたり襖子は下に重ねたるきぬのとなり餌袋をつくへし冠は卷纓の冠をきるへし　仁和芹川の行幸に行平中納言の大鷹飼の狩衣鶴を文に縫たるも公卿のたかかひのことなり云々　河云仁和二年芹川行幸日公卿皆着摺衣　舊記云正五位下藤原朝臣國平着摺衣立列亘獵野云々　鷹事（ヨサムノミヤケノ）　河云仁德天皇四十三年秋九月庚子朔依細屯食阿彌古（ヒ）（弄土爾切安也）　補奇

鳥一献ニ於天皇一曰臣每張レ網捕レ鳥未三曾得ニ是鳥之類一故奇而献レ之天皇召ニ酒君一示レ鳥曰是何鳥矣酒君對言此鳥之類多在ニ百濟一得馴而能從人亦捷飛之掠ニ諸鳥一百濟俗號此鳥曰俱知（今時乃鷹也）　乃授ニ酒君一令ニ養馴一未ニ幾時一而得馴酒君則以韋（葦緡イ）着其足以ニ小鈴一着ニ其尾一居ニ腕上一献于天皇是日幸ニ百舌鳥野一而遊獵時雌雉多起乃放レ鷹令レ捕忽獲數十雉是月甫定鷹司（間イ）部故時人號其養之處曰ニ鷹司邑一也（日本紀）以上箋

そゑ（すイ）のたかゝひ　箋一本このゑのたかゝひとあり（私本イそゑたかゝひ三本如此同そゑ靑表紙）云々

秘閣　河諸衛鷹飼　令曰主鷹司正一人掌調習鷹犬事箋　箋秘云諸衛なり六府を云皆すりかりきぬなり左右に分て赤色靑色あるなり　箋曰諸衛とはかねてより狩裝束と見えたり　花云諸衛とは六衛府のすけ以下を云へし

世にめなれぬすり衣みたれきつゝ　河かすか野の若紫の云々　摺かりきぬをなんきたりけると云り箋わか紫のすり衣忍ふのみたれの心有　すり衣はかり衣也　花云昌泰元年十月片野行幸左方鷂飼着赤白橡地色摺衣右方鷂（鵜イ）飼着靑白橡地色摺衣西宮抄云鷹飼地摺狩衣綺袴玉帶鷂（鵜イ）飼靑白橡袍綺袴玉帶卷纓

有下襲着釵者尻鞘王卿鷹飼入野之後着行縢餌袋承保三年大井川行幸鷂（鵜イ）飼両人鷹飼皆雲客也巻纓色々狩衣袴唐錦接腰韝餌袋云々鷹飼随身四人錦帽子狩衣袴腹纏餌袋云々以上各具犬飼着帽子　今案諸衛鷹飼装束先例聊不レ同なり又はいたか飼とおほ鷹飼との狩衣も不同也昌泰記赤白橡と云はあかいろの事なり黄櫨の茜とにて摺たる狩衣なり青白橡とは青色事なり莿安と紫とにて摺たる狩衣也袴はきぬの指貫玉帯巻纓の冠釵は尻鞘あり此外唐錦接腰韝等は承保の記に見えたり　李記云自桂路入野口鷹飼王公到此狩鷹員外鷹飼祗（祇イ）候武家着青摺衣四人摺衣者従詞所扈従也又諸衛鷹飼親王公卿摺布衣上見西宮抄云公卿如例衛府着弓箙鷹飼地摺狩衣綺袴玉帯鷂飼之花鳥に引所同見右　或王卿以下鷹飼着供（令イ）奉装束扈従乗輿云々四位以下鷹飼着帽子臂鷹合牽犬列立安福殿春興殿前又公卿以下諸衛及鷹飼等装束随遠近相替鷹飼入野之後解大緒大鷹飼者結懸腰鷂鷹結腰底（示イ互イ）樂鷹飼又同云々「（イナシ）伊勢物語此歌詞にかり衣のすそをきりて歌をかきてやるそのをとこしのふすりのかりきぬをなんきたりけるといへり

めつらしくおかしき事にきほひ出つゝ　箋諸人萬人のこらす物見に出たるを云なり

あしよわ車　私三本あしよわき車とあり　箋河云輪の弱き車なり云々

うきはしのもと　箋行幸の道の橋なりはしわたしの官人とて検非違使の故實ある事なり秘同　李記云乗馬渡浮橋云々見上

にしのたいのひめ君も　箋玉かつらなり　秘同

みかとのあか色の御そたてまつりて　御輿の内より外には心をもとめさるなり立ならふへき事もなきとなり　河云延長四年十月十九日大井川行幸上服赤色袍黄櫨染御袍文竹鳳臨時祭庭座賭弓射場始式又朝覲行幸後出御等之時被用之晴之儀に諸臣青色の袍を着する時は主上赤色の御袍を着せしめ給第一座の人又着之是諸臣異なる色と内宴野行幸以下晴時事也條々多畧之云々　李記云卯初上御輿其装束御赤色袍花云延長六年二主上赤色をめす上に註せり　延長四年十月大井川行幸にも昌泰元年片（交イ）野行幸にも赤色を着御ありし也諸臣は必す青色の袍を着する事なり但第一の公卿は主上と同しく赤色

を着る事あり　白河院承保の大井川行幸に京極殿關白にて赤色の袍唐錦袴を着し給ふ此外内宴には法性寺關白赤色を着し侍し侍り此行幸に源氏のおとゝ參り給はゝ赤色を着給ふへきなり　河延長四年十月十九日今上與法皇行幸大井川同十一月六日行幸北野延長四年は北野行幸なり

うるはしくうてきなき　箋人主之體如山岳焉高峻而不動

なすらひきこゆへき人なし　河御輿の内より外には目うつるへくもなきとなり

わかちゝおとゝ　秘内大臣なり　此父おとゝも御門より外に目うつるへきものなしと也　箋内大臣を玉かつのらの心に随分の器量とはみゆれとも御門の日うつしには人からのけおされたるなり

人にすくれたるたゝ人と　河たゝ人　凡俗日本紀　箋同

御こしのうちよりほかに　御こし　秘箋　箋花云昌泰元年野行幸の時車中之女爭瞻天顏（眼イ）或出半身或悉露面云々見記納言記

ましてかたちありや　箋其外の若殿上人はましてならふへきもなきとなり秘同

中少將なにくれの　箋羽林の將は皆弓箭を帶して左右に分れて前行するなり

きえわたれる　何とも目にたゝぬを云也

さらにたくひなくおはしますなりけり　秘平生はその人かの人とかたちよき名ある人々もみないてききしたるとなり　如土といへるかことし　箋上の詞にかたちありやおかしやなとわかきこたちのきえかへり心をうつす中少將云々平生は其人彼人と容よき名ある人々も出きゝしたる由なり　如土と云か如なり　さらにたくひなしといへる随分と思ふ程の人々それにも非すみゆるはよく／＼主上のすくれさせ給へるによりてとなり

源氏のおとゝの御かほさまは　箋主上に似給へるなりされとも上下けちめ各別に見え給ふとなり

さはかゝるたくひ　箋主上（アラヒト）の御事なり

あてなる人はみな　河貴人　箋同　箋玉かつらの心に平生源氏夕霧なとをみならひ給てやんことなき人は皆かやうにこそとなへての世を心にくゝ思ひ給ふらにけふの晴に出てみな世には人なきかこと

く主上へけおされたるとなり箋

兵部卿宮もおはす 秘 螢なり箋 箋 親王供奉例 在奥河海箋右にもあり

左大將のさはかり 秘 鬚黑なり 箋同 聞 玉かつらを思ひかけたる人々なり

おもりかに 秘 そゝけたる所なき人なり箋

やなくひなとおひて 河 胡籙也 箋 大納言の大將は行幸の日は帶弓箭也大臣の大將は行幸の日もやなくひを負すして隨身にもたしむるなり 秘 花云西宮抄云公卿如例衛府公卿着弓箙又如例令案大將は納言以下弓箭を負事なり大臣の大將は衛府をはつゞくらさる習なり鬚黑は大納言の大將たるに依て箙を負侍るなり云々昌泰元年片野行幸右大將菅原朝臣供奉給云々

色くろくひけかちにみえて 秘 河に莊子曰文王昔者寡人夢見良人黑色而髯 疏云文王之父季歷生存之日黑色多髯云々

いかてかは女のつくろひたてたる 箋 弄云けさうしたるかほにくらへて思ひ給ふわりなしとなり鬚黑大將大納言世餘よしめくとも若年の假粧には似かたからんとなり云々 秘 云大將は年ふくる迄假粧するなり此大將は鬚かちなる故に假粧なと似合ましきとなりかく取わきいへるはたゝいま玉かつらに心かけ給ふ事の切なる故なり

わかき御心ちには 玉かつらの心に鬚黑をよく見て見おとし給へる事をいへり

おとゝの君のおほしよりて 箋 玉かつらの心なり以下秘同 源の玉かつらを內侍のかみに參らせ給ふへき事を思ひより給ひし事なり

宮つかへは心にもあらて 九 大かたの宮つかへは本意にもあらすと思ふ玉かつらの心なり

なれ／＼しきすちはもてはなれて 秘 玉かつらの心也宮つかへの事はくるしく思へといさゝかは御あたりちかくつうまつらはやと思ひよると也 箋 玉かつらの心に宮つかへの事はくるしく思へと聊御あたり近くさなからしたしき故にはあらてつかうまつらはやの御心いてきたるなり 是しかしなからけふの御氣色を見給ふ故なるへし又鬚黑をのかれんの心も有へし

かくて野におはしましつきて御こしとゝめ上達部の

ひらはり　箋李記云従獵幸行獵至御輿墳進朝膳親王公卿着平張座於墳項眺望召中將少將右權中納言賓頼朝臣少將中正近進イ持御鞭筥劒上降墳路左兵衛佐仲連候御前料理鷹人所之雉殿上六位昇俎具御厨子所膳御臺二臺藏人頭時望朝臣陪膳侍從以御賜王卿饌侍從斗長盆從云々　河平張と云々

御さうそくともなほしかりの御よそひなとにあらためたまふ程　弄きなほすなり　秘なほし兩義あり一說直衣と云々一說なほす儀なり改の義可然と也　箋なほしはなほす也改の義也　一說直衣云々花云西宮抄云天皇服白橡御衣延喜御時天皇御右近馬場改着直衣云々昌泰元年片野行幸着御赤白橡唐綾御衣云々入野之後着狩御衣云々今案野に入らせ給て後主上の御服を御直衣に改られし例もあり又狩衣をめされし事もありし也云々　箋曰花鳥の義直衣の說を載せらるゝにや如何此段は野口に御輿と、まりて上達部平張にて狩裝束に改らるゝ所を御さうそくなほしとはいへり上の詞にみてたちかんたちめなと鷹にかゝつらひ給へるはめつらしきかりの御よそひともをまうけ給ふとありこれは先裝束共の色をいひたてゝ用意のよしをかきあらはせりされはまうけ給ふといへるにて分明に聞ゆ此段にてうるはしく改め着するなり諸衛の鷹飼は野口以前より狩裝束と見えたり不可分混亂ものなり　聞御さうそくともなほし直衣なりかりの御よそひ狩衣なり如此あり　私云弄秘箋等一同の上は狩のよそひになほすと云義を用へきなり

六條院より御みきくたもの　河六條院より御みき御へすみ火ろなとたてまつらせ給へりとあり　御酒御贄御にへなり炭火爐御へは御にへ也古今にも御へと有も大嘗會には贄をそなふる事也　箋源氏より可獻を申さるゝ也　秘に花の延長六年の例をうつせり此時六條院は宇多御門御事なる原イへし今の物語にも六條院おのつから相叶もの也　李記云六條院被貢酒二荷炭二荷火爐一具殿上六位昇之立御前卽解一瓶至雉調所充供御充公卿料近衛將監役之　李記云延長四年十一月六日有北野行幸其日余因物忌不參未刻上還船岡茂峯最後獲　箋曰六條院と書事尊號以前太以不審也諸抄不及此沙汰如何

けふつかうまつらせ給へり　秘草子地なり　源氏の

故障のよし申さるゝなり　箋曰御門より供奉あるへき由御氣色有しかとも故障し給へると云訓釋の註にかける詞なり秘に草子地とあり不可然巳上箋

御物いみのよしを　李記云延長四年十一月六日有北野行幸其日余因物忌不參

藏人の左衛門のせうを御つかひにて　箋花鳥に延長四年北野行幸之時藏人左衛門尉源俊春を御使にて雉一枝中宮へ奉らせ給へり其例を以て又藏人左衛門尉を以て六條院へまゐらせられたるなり云々秘同　秘云北野より源氏へ進せらるゝなり

きし一枝　箋河云九條右丞相集に朱雀院より雉一雙薄につけてたまはせける云々　付鳥枝事　柴高七尺五寸普通の柏より葉せはく圓くして表裏に毛生たり是を鳥付柴と云一説云たもん柴といふ物なり冬は立枝を隔てゝ雄を左にあけて付雌をさけて付也　春は雌を左にあけて付春は雌を賞するゆゑなり付様口傳有之又鷹野より人のもとへ遣すには三四尺の柴の枝を刀目をつけすして本を折はしらかして付之　一雙の付様如右　四條大納言隆親卿記柴六七尺雌雄一雙を付なり又大臣家大饗元服移徙如此用之　産所へ遣すには根引の小松に付之秘事義氏朝臣說鷹野より人のもとへ雉を送るには柴ならねとも萩(荻イ)薄をはしめて何にても付之　又春は梅秋は紅葉に付常事なり　大臣大饗用之又初雪の朝雉を人に遣す時之作法なり　又梅の作枝　忠仁公伊勢物語　一松に鳩を付事山鳩也義家朝臣以後不付之　一鶉をは萩(荻イ)薄の枝に付也　一小鳥をは紅葉の枝に付也　一雀をは竹に付十月はふし柴に付といへり御鷹飼武文鑑(說イ)なり　以上箋以河海の義如此註之　河伊勢物語に業平朝臣忠仁公に奉る雉九月なり梅枝に付たり「わかたのむ君かためにとをる花はときしもわかぬ物にそ有ける

おほせことには何とかや　花作者の詞なりかやうの儀式かましき事は女のしらぬ事なれはくちうつしにかきとむるもおほつかなくおほゆると也　聞女房の身なれはかゝさるとなり　箋曰此一句花鳥に作者の詞と云々不可然作者の心なりこれは使には藏人左衛門尉ときこえしが勅定のおもむきいか樣にかありつらんと云義なり

さやうのをりのことまねふにわつらはしくなん　箋曰此一段作者の詞也其をりの勅定さへたしかにもきかて御製なと書とゝむるは女の身にて憚あるとなり此段をは次の御製の事と見るへし箋花鳥義此次に書加へたり

御製
雪ふかきをしほの山にたつ雉のふるき跡をもけふはたつねよ　秘ふるき跡とは延喜野行幸ありし事なり

弄同　箋曰ふるき跡とは太政大臣供奉の先例ある事をの給へり　今日出仕なき御無念之會釋なり

太政大臣のかゝる野の行幸につかうまつり給へるためしなとやありけん　箋曰昭宣公の例也如此先蹤もあれは參り給へかしとなり　此御歌を訓釋せるなり　秘の義なり花鳥云御歌にふるき跡をもけふは尋よと侍るは仁和二年の昭宣公の例を思召たる也只今源氏君の當官太政大臣之故也　箋曰此一段は作者の詞也御製の意趣かくそ有んすらんと云義なるへし　太政大臣供奉之例　河云光孝天皇仁和二年十二月十四日戊午寅四尅行幸芹河野爲用鷹鷂也式部卿本康親王常陸太守貞國親王太政大臣藤原朝臣基經融左大臣源朝臣右大臣源朝臣大納言藤原朝臣良世中納言源朝臣能有在原朝臣行平藤原朝臣山蔭已下參議扈從其狩獵之儀依承和故事或考舊記或付老者語而行事乘輿於朱雀門留輿砌上勅召太政大臣三皇子源朝臣定宜賜佩釼太政大臣傳勅定拜舞與前帶劒騎馬皇子源朝臣正五位下藤原時平權着摺衣午三尅亘ニ獵野ニ於淀河邊供朝膳行宮在泉河鴨河宇治河之會漁人等獻鯉鮒天子命飲右衛門督諸葛朝臣奏歌天子和之群臣以次歌謳大納言藤原朝臣起舞未二刻入狩野放鷂擊鶉如前放隼擊水鳥坂上宿禰獻鹿一太政大臣馬上奏之乘與還幸左衛門權佐高繼經イ別墅供夕膳高經獻贄勅叙正五位下太政大臣繼高經拜舞

野行幸御製太政大臣賜答之例　見右　私云右河花秘等之義悉以箋註之

おとゝ御使をかしこまりてもてなし給　饗應し給ふなり　箋源氏藏人左衛門尉を召入て饗應し給ふなり

返源
を鹽山み雪積れる松原にけふはかり成跡やなからむ

箋云大原野行幸は今日始たるに依て是萬代の始たるへしと稱美申さるゝ也　秘の義なり　花云「大

原やをしほの山の小松原はやこたかゝれ千世のかけみむ　同今案けふはかりなる跡とは大原野行幸はけふかはしめなれはかく申給へり云々　國史云光孝天皇仁和三年五月廿八日辛丑勅以山城國乙訓郡大原野爲太上天皇遊獵之地云々已上箋　花今案御門の御製のふるきあとゝは太政大臣の供奉し給ふ事を宣へり源氏の御返歌のけふはかりなるあととは前にあり　私に註之

とそのころほひきゝしことの　箋此一段又作者の詞なりきさやうのをりの事まねふにわつらはしくなんといへる上の詞をうけたり秘同

又の日おとゝにしのたいに　箋行幸の翌日なり源より玉かつらへ文を進せらるゝなり

昨日うへはみたてまつらせ給きや　秘源の文の詞也

箋　けしきはみもあらぬかおかしきを花にはおほきをと云り詞の多きなり云々但當流おかしきとあり

かの事はおほしなひき　秘内侍のかみに參り給ふへき事なり

しろきしきし　是より源の文のさまを云なり

よくもおしはからせ　秘玉かつらの心なり　箋源の推量のこゝろときとたまかつらのおもひたまふ也

あひなのことやと　秘あは／＼しき事となり　箋おしあてに用捨もなくの給ふとなり　あいもなき心なり　秘にあい／＼しきと云々如何　心あさくはや思ひうつりたるかとの給ふと玉かつらの思ふ心なりと云々

昨日は　箋玉かつらの文の詞

玉うちくら(きイ)し朝くもりせしみゆきにはさやかに空のひかりやは(をそイ)みし　箋くもる心なり霧わたりしらみたるなりみゆきは深雪を行幸にそへたりかやうに歌にてこたへ給ふる面白し　弄秘　箋曰昨日はうちきらしと引つゝけてみるへしよそ／＼にほのかなる御けしきは是非をわかさりしと也昨日はとつゝけてみれはさやかならん時こそと云底の心こもれり詞によくもおしはからせ給ふ物かなとおほすと云云此詞にて可分別以上箋　河拾遺「うちきらし雪はふりつゝしかすかにわか家のそのに鶯(雪イ)のなく　花引歌

同上今案うちきらしは霧のうちふたかりたるやうなり　此歌は玉かつらの君の源氏の返事によみ給

へるなり　空の光は御心をたとへ給へるなり
おぼつかな(部イ)き御事ともになん　玉かつらの文の詞也
箋曰天顔も伺侍の事も心に是非をわきまへぬよし
なりとももと云詞面白し何と有へき事そと云心とも
れり　秘たしかにもみたてまつらさるのよしなり
うへも見給ふ　箋うへとは紫上なり
しか〳〵の事を　秘伺侍のあらましの事を此次に紫
上へ源のかたり給ふなり　箋イ本弄にさらの事と
ありて註にさやうの事とあり本にあり猶尋ぬへし
私とあり家本無之
中宮かくておはす
こゝなからのおほえにはひんなかるへし　箋中宮を
も源の御子のやうにて参らせ給へり今又此内侍の
かみ参給うて玉かつらの寵を奪はれ給うては中宮
の御けしきいかゝとなり　秘箋
かのおとゝにしらせても　箋さらは又實父内大臣に
息女の事をあらはしてまゐり給うても又弘徽殿の
女御のおはす所如何となり
わか人のさもなれ　秘箋かやうに點してあり　秘主
上へは誰も心をとゝめ給ふへきとなり箋

はゝかるおもひなからんは　中宮弘徽殿なとにはゝ
かる所なからん人もといふ歟
あなうたて　秘紫上詞也箋
心もて宮つかへおもひたゝん　主上に心のとまるは
かりに女の宮つかへなとおのれと思ひたゝんはさ
し過たらんとなり
いとそこにしもそめてきこえ給はん　秘源の詞也そ
ことは紫上をの給へり　秘箋曰けしからすにの給
ふともみたてまつり給はゝ人より殊にそめて給ふ
へきと戯れ給ふなり已上箋
又御かへり　秘前は源より文はかりにて歌のなかり
しを玉かつら歌にて返事をし給へりさて又返歌の
有なり
返源
あかねさす光は空にくもらぬをなとかみゆきにめを
きらしけん　箋天子をは日にたとふるなり日をきら
すとは霧ふたかる心なり秘　花には目きりすとい
ふ心なり日の霧のさへきりたる様なり　河云日さ
りなと云事歟云々　同天原あかねさしいつる光に
はいつれのぬまかさへ渡るへき菅家花鳥同　箋曰
あかねさす光と云て日をもたせたる作例尤可然一

日晴の御服の赤色自然に相應興あるにや以上箋
猶おほしたてよとたえすすゝめ給ふ　秘宮仕を思たち給へとなり箋同　源氏の玉かつらの宮仕をすゝむるなり
とてもかくても　秘源氏の心也
まつ御裳きの事
よたけくいかめしうなるを　弄のとかなる心也　聞ことの外にと云心なり内府へしらせん爲に猶ことゝしきなり　秘私勘に此巻よたけくとかける詞三所にありいつれも聊心のかはりあるかこゝにかけるはいかめしくこと／＼しきをいふ歟又よろつうひ／＼しくよたけく是はま遠なるこゝろ歟よたけき御ふるまひとは是はまちかねたるこゝろ歟師説よたけくとはのとかなる心と云々　箋右禪閤御説此詞三ケ所にあり秘の義を載之間畧之　箋曰此段のよたけきは造意の大きなる事と聞ゆ
としかへりてきさらきとおほす　箋源氏卅七の二月也次の詞に大宮こその冬つ方よりなやみ給ふと云云年こえたる所は分明なり但年かへりてと讀きりて二月の儀は有ましきとみるへき歟

女はきこえたかく　秘人の女子なと云て誰ともなくておしかくしておけるなり扨氏神なとをもあらはさてあるなり　箋女とは玉かつらをいへり此一段玉かつらの事を種々に工夫し給ふなり
名かくし給ふへき程ならぬ　箋玉かつらの生長ありし人なれはなり
人のむすめとてもりおはするほとはかならすしも
氏神の　河伊勢物語に昔二條の后のまた東宮のみやす所と申ける時うちかみにまうて給ひけるに云々　箋此程は只誰やらんのやうにて氏神をあかめ給ふ事も面にたゝねは源氏の御子の分にておしまされておはしつれもし此内侍のかみの宮仕もあらは藤氏を源氏と申なさんは三笠山の神慮もはかり難きと云又つひには人の知へき事なれは計略かましく造意したる様にて世のもときもあるへしとなり
このもしおほしよる　秘尙侍なとになり給はゝ春日大明神の御心もいかゝとなり源の御子ならは源氏なり内大臣の子ならは藤氏なるへき心そ花の義同仍畧之
わさとかましき後の名にて　秘實父にしらせたてま

つらては源のわたくしあるやうにや後のきこえもあらんとなり
うたゝ有へし　箋うたて也　河「花とみてをらんとすれは女郎花うたてあるさまの名にこそ有けれ箋
なほ〳〵しき人のきはこそ　箋直人たゝうとなり數ならぬ人こそ氏姓をも改て時の宜に從ふこともあれ是はやんことなき俗姓を何の不足のあれはとてさやうにも有へきそと云也春日の神の御心にたかひぬへきもと云る詞にかけて見るへし　秘たゝ人なとこそとり親なとするこそとのあれとなり
おやこの御ちきりたゆへきやうなし　箋かやうにさま〳〵に源氏の思案を廻し給ふ兎に角に玉鬘親子の間の眞實をあらはさゝらんはあしかりぬへしとなり　以上一段箋之義なり猶可切瑳琢磨なり　私云女はきこえたかくと云より一段につゝけて箋に註之今此間に秘等の義を書加了
おなしくはわか心ゆるしてを　箋曰人のいひもらさぬさきにとなり　源のかたから内府へすゝみしらせんと思ひ定るなり
御こしゆひにはかのおとゝを　秘男女兩様なり内大臣へ申さるゝなり元服の加冠の如し　箋玉かつらの御裳着の腰ゆひに父おとゝを請し申さるゝなり此物語の中明石の姫君は秋好中宮なり今の玉鬘は内大臣たるへし男女兩様なり元服の加冠の如し勘例可有之兩抄不見如何　弄問云男女さたまらぬ事にや玉鬘の腰ゆひには内府とあり　明石姫君は秋好中宮と見ゆ如何叉裳着は年齢不定にや　答云本は着袴裳着は三歳なり其以後は不定なり一勘
大宮こその冬つかたより　箋三條宮なり　葵上内大臣等の母義なり此御煩に事よせて斟酌あるなり　秘内大臣斟酌あると也　花玉かつらの御もきのこしゆひに内のおとゝを請し申給へは三條の大宮の御なやみの事に斟酌のよし返事ありたゝ源氏の御女のふんに内大臣は心得給ていまた是迄はわか御むすめとはしり給はぬなり
中將君も　夕霧なり
心のそらなく
いかにせましと　秘源の心なり箋
宮もうせ給はゝ御ふくあるへし　秘玉かつらの祖母なれはなり　箋五ケ月の服なり弄同　花三條宮う

せ給はゝ玉鬘の君祖母の服をおひ給ふへき事なり
しらすかほにてものし給はんつみふかき事　此實父
をあらはし給はすは大宮の着服も有ましき事を源
のおほすなりそれをあらはすましきはあまり私な
る事となり

三條の宮に御とふらひかてら　秘源三條宮へ參り給
ふなり　箋三條宮は桐壺御門の御兄弟なり然れは
源と姨ふひなり源と內大臣といとこなり

いまはまして　秘源の御ありきたやすからさるよし
なり箋

よそほしく　行粧こと〳〵しく儀式かましくことこ
としき心歟

御かたちなとの　源の御さまなり

めつらしくみたてまつり　大宮の源氏をみ給ふ心の
中なり

御心ちのなやましさも　箋宮の御事なり　秘面白き
書樣なり

けしうはおはしまさゝりけるを　箋けは恠なり濁る
說不可然　箋曰源のかねてうけたまはりしよりも
別義おはしまさゝると安堵し給ふなり

なにかしの朝臣の　秘夕霧なり　箋夕霧の別して思
ひなけきて餘りこと〳〵しく申給へるによりいか
やうにかとおとろきつるに承り及ひつるよりもこ
との外樣體よくおはしますと源のゝ給ふなり

內なとにもことなるついて　是より源の出行なとの
たやすからぬさまをのへ給ふなり

おほやけにつかふる人ともなく　河相國はたやすく
出仕なし所職なき故なり

よろつうひ〳〵しくよたけく　箋曰はるかなる心な
るへし　聞のとかに成たる心なり

よはひなとこれよりまさりたる人こしたへぬまて
河潛歎曰吾不レ能爲ニ五斗米一折レ腰拳々事ニ鄉里小
人ニ耶義凞三年解レ印去レ縣乃賦ニ歸去來ニ云々　河晉
書陶潛字淵明彭澤令を辭せし事なり令の封米五斗
也　箋曰河海に淵明彭澤令折腰之歎の故事を引此
段の心に不相叶此詞の心は四皓ことときの者或は太
公望みな老かゝまりても世に仕へたる事ともをい
へり

あやしくおれ〳〵しき本上　箋おろかなる心なり
秘おろかなるなりほれ〳〵しきなり　聞生得の物

よわき體をいふなり　箋おろかなるなり　箋曰おれ物とあり是をおろか成物となり　愚字可然

そふ物うさになん　箋年のかさなる故となり　私疎懶懈怠の義なり　ことのくさき心也

としのつもりのなやみとおもひつゝ　秘大宮の詞老病の事なれはとなり箋

ことしとなりてはたのみすくなく　老病故とのみ思ひたればかやうに死期のちかつくやうになるとの給ふなり箋

見たてまつりきこえさする事もなくて　源を今一たひ見參なくてやとなり

けふこそ又すこし　今はのやうに思ひつる心も源に對面ありて命をのふるよしなり

今はをしみとむへき　年齡をしからぬ事との給ふなり

さるへき人々にも　箋葵上　致仕相國也　此人は大宮の夫なり

世の末にのこりとまれるたくひを人のうへにて　聞壽則守辱多の心也　箋曰上東門院の御事をふくみて書たるへし續世繼云御堂殿の御むすめ上東門院後一條後朱雀の御母にて御むまご後冷泉後三條までみたてまつり給へりしかともみなさきたゝせ給ひしかはさかさまの御なけききこゆる世なく御命あまりなかくて中々人めをはつる思ひふかくおはしましき云々

いてたちいそきをなん　箋往生をいそくとなり　妙なる詞なり云々秘　河「いてゝいなはたれかわかれのかたからんありしにまさるけふはかなしも不及此歌

この中將のいとあはれに　夕霧のあなかちに迷惑（念比イ）ある心さしにかけとめらるゝやう也となり

さる事ともなれは　箋源の心なりことわりある事ともとなり　秘　箋曰かゝる涙もろきは老者の定れる事なれは無餘儀なり

内のおとゝは　箋源の申給詞也　秘源の詞日々に參り給かと也

日へたてす　毎日となり　箋毎日謁視事見右丞相遺誠（寫本如此朱にてけし）　私云内のおとゝは日へたてす參り給事しけか（あり）らんをとつゝけてよむへし參り給事しけからんときりてよめは心得られす

きこえしらせんと　玉かつらの事也
おほやけことのしけきにやわたくしの心さしのふかからぬにや　箋大宮詞殊勝なり　秘當職の故歟孝心の淺歟となり以上箋　弄關白なり
の給はすへからむこと　箋いかやうの御事にか侍らんとなり
なにさま　箋云さの字濁へし
中將のうらめしけに　箋雲井の鴈の事かと推し給ふなり秘
はしめの事は　大宮なとのしり給はぬ事とはしめの事をの給ふなり
いまはけにに〻　箋一本にいまはけにき〻にく〻云々　けにく〻とは箋云此末本無　私云世俗によりもつかぬやうにいひはなつ事をいふ歟其理可然乎猶可尋
たちそめにし名のとりかへさる〻にもあらす　花「村鳥の立にし我名今更にことなしふともしるしあらめや箋
をこかましきやうにかへりては　箋曰内大臣の如此へたてをきたまふを不足のやうに世間にも申すなり
たてたる所むかしよりいととけかたき人の本上　箋内大臣の天然の性をの給へり一度云か〻れることはをれかたき性と見えたり　秘内大臣の天然の性をの給へり大宮の御心には此聞えしらせんと源の給は此雲井の鴈の事と推し給てかくの給なり
此中將の御事とおほして　箋雲井鴈のことを内大臣へ申さるへきかと推し給ふよしなり
うちわらひ給て　源なり
いふかひなきにゆるしてすて給ふこともやとき〻侍て　箋源の詞也　箋曰いはけなきともちのむつひなれは夕きりの事はよし内大臣のむこには不足に思給ふとも雲井雁の事はむすめひとりすてたると思ひてもゆるし給へと大宮まて内々源の申あつかひ給ひしに内大臣のいましめきふくみしかは無益の一言を交て源迄面目を失ひけると後悔なれはそも此一義を何事あれはとて内大臣へ申へきそとうちわらひての給へるなり雲井雁の事を大宮へ源氏の口入の事は此段にて始て書出せり此物語の習毎度如

此　秘源氏の詞初は夕霧もをさなかりし時分の事なれは口入ゐすへきと思ひしをくつろくへくもなかりし故にはしめ申へく思ひしも後悔思へるなり更に申へき事にあらすとなり　私云秘本此巻三光自筆此段如此朱にて滅之

よろつの事につけてきよめといふ事侍れはいさゝかさもとりかへしすゝき給はさらむ　秘立にし名と前にあるをうけてその名をもあらふにあらはれさる事はあらしとなり　箋曰内大臣を嘲り給詞なり一切けがれたることも清むるためしのあれは此立そめし名もとり返しすゝき給やうもそ有らんとなり此事に限りてすゝかれぬ物をとさみしての給ふなり　私河に漁父辭を引り爰にあたらす仍略之　花すゝいとは洗濯の心也上の詞に清めと云事有下に水の喩あるとなり

かく口をしきにこりのすゑに　秘ちと内大臣をさみしたる詞なり少々の事をはきゝ過さてはさのみ何事も底より清き事は有かたきとなり本朱如此　箋曰一たひけかれたる名を聞なからわれはかほに待とるへきよすか有とも底きよからぬ事そとなり上に大宮の詞に立そめし名のとりかへさるゝ物にもあらすとある返答なり

何事につけても末になれはおち行けちめこそやすく侍めれ　秘人のおちふるゝ事をいへり本滅之　箋曰夕霧をおし隔て雲井鴈をとりもつかぬ身にてあるへきならは女子の進退安き事なり諸事末世になれは物の作法もくたりはてゝ昔にかはりぬれは中々心安き時代にて有けるよときよくりての給ふなり

いとほしくきゝ給ふる　箋曰此いとほしき憐愍に非す箋云上の詞にこりの云々なにことにつけても末になれはおちゆくけちめといへり濁世末法のさま詞の面影あり可付意也

さるはかのしり給ふへき人を　箋かのとは内大臣の知給ふへき人を尋得たるとなり箋　箋源の詞なり

ふいに　不意也箋

そのをりはさるひかわさともあかし侍らす　秘尋出たるをりは誰人の子ともしらさりしなり本儀なり　箋曰日の初は源の御實子のやうに聞えしかは事の心を深くも尋しらて御子のすくなくて乏しきまゝ

に許容ありしを能聞明らめ給へは僻事にて内大臣の知給ふへき人にて有よしなりわさと大宮へはかやうに申なし給ふなり

たゝさるものゝくさはひの　秘御子のすくなき事也箋

かことにて　箋かこつけてなり幸の事と思ひてなり

むつひも見侍らす　むかへはとりなからむつひさりしなり　箋曰親しくもなき由を態の給ふなり

うちにふはせらるゝやうなんある　箋勅定のよしをの給ふなり

内侍のかみの宮つかへする人なくてはかの所のまつりこと　秘かの所は内侍所なり箋　河延喜式云内侍司一百十人尚侍二人　典侍四人　掌侍四人　女孺一百人云々

女官なとも　私云女官に二の心有女官と云は内侍命婦藏人ことき女の官を云是をはによくわんと云なり女の字をひかす女房の官の總名に云なり又にようくわんと云あり是は下﨟女なり今世に末の物とて御膳なと取あつかふ者なり此中を選て得選と云なり臺所の女官御湯殿の女官あり此時は女の字をにようと引なり

こらうのすけふたり　河故老典侍　秘當代故老のすけ二人あり此人々轉任有へき歟又競望の方々も有よしなり　箋弄　箋典侍任尚侍例　尚侍從三位當麻眞人浦虫（父正六位上純丸左京人也）　弘仁七年任典侍未幾遷爲尚侍（天安元年任尚侍）　國史云浦虫爲人貞和早標美譽未嘗適於人遂不知伉儷之道自掌宮人職能修禁内之禮式河同

尚侍從三位廣井女王　嘉祥三年任權典侍（天安元年任尚侍）

尚侍從二位藤原朝臣灌子（准イ）　應和四年正月任尚侍（元典侍）　以上箋

御たつねにたかふへき人なんなき　箋族姓以下十分に撰に入へき人のなきなり次の詞にて其仔細をのへ給ふなり

猶家たかく人のおほえ　箋然へき人を撰へきとなり　箋曰品高けれはとて世におちふれぬる人は其職を勲するもたつきなけれは族姓すくれ世のおほえもおりわひたる人を撰來る事なり

家のいとなみたてたらぬ人　箋私云家のかへり見せさる人と也説々あれとも此儀可然也　又云私の家に居なから奉公の例もあるとなり　私云別に註す

る義なし　秘の義可然なり　聞家のいとなみを本にせぬをとなり　弄家はたかくてさるからわか家のいとなみを心にたてゝみやつかへの方を思はぬ人は内侍のかみには任しかたきにや家たかくて宮仕の事をこゝろにいれん人をそ古よりさためらるるとなり

したゝかにかしこきかたの　秘典侍二人は年月の労あれと只可然人からを撰はるへきとの定めなり私云その人ならてもとは族姓たかゝらぬ人なり　箋曰才漢幹歟を本とせらるへきならは故老の典侍の轉任にても事足へけれとも

しかたかふへきも　箋曰故老とても才幹の撰に入へき仁體なしとならはとなり　一本しかたくふへきも同事なり　一本したふへきも　是も同心なり

私云以上箋

おほかたのおほえをたに　箋思ふやうなる人なくはせめて人からを撰はるへきの叡心にて内々此人をと思召よれるさまなり

にけなき事としも　秘此仰は尤なるとなり　箋假合たる事なれは尤の仰なる故辭し申かたきとなり私云此段聞書同之

みやつかへはさるへきすちにて　花私云總して宮つかへに出たつ事は可然寵をも得へきの心かまへ有へしされと是は内侍所の政をしたゝめんの心あれは人のむすめなと奉らんは本意なき事也女御更衣にこそ望をもかくへき事なりされとも此事を嫌はつへきには非すとなり聞　花宮つかへはわたくしより思ひよりて出たつこそたけき事もあれそのつかさにことかくるにつきて大やけさまの定にてめしいたさるゝはかるかるしきやうなれと但それも又人からによるへきと云心也　弄たかきもくたれるも宮つかへはかりは思ひあかる事もあり侍なと役ある事ははか〳〵しからす政をしたゝめん事をの給也

なとか又さしも　弄よき人の子もなる事也となりたゝわか身の有さまからこそよろつの事侍めれと思ひよわり侍し　箋曰私云此段諸抄に註せす如何　愚案するに女御なとに參らせんこそ本意なれかやうに職掌あることは政の是非によりて人にほめそしらるへきことなれはわは〳〵しきことと思ひつれ

と又おしかへし思案するにはなとかさしもあらん
たゝ人々の身のたてやうからこそ何事も善悪はあ
れたゝ參らせてみんと源の思ひなり給へはといふ
義歟
よはひのほとなと　秘内大臣の御子にて可然なり源
の御子にては聊ちかひたるとなり　箋曰此義如何
此段玉かつらの事を只いひあらはし給と見えたり
私云秘抄此巻三光筆也然而此義如何朱にて滅之同
わきに如此之註之仍如本　箋政をすへき人の事と
實父を申あらはせし驚いたると也餘り微弱にても
如何と思て年齢を尋し次にかう〳〵の事と實父を
申あらはせしに驚きたるとなり如此申なし給なり
私云愚案の前に註する分につゝけて此義可然歟
かの御たつねむへは（いイ）　内府の尋給ふへき人となり
かゝる事なとあらはし申へきやうを思ひめくらして
箋御こしゆひの事なり
御なやみにことつけて　秘大宮の御なやみとて御腰
結の事を故障ありし事なり　箋大宮の御煩に事よ
せて故障ありしなり
をりしもひんなう　をりしもあしく似合ぬ事と思ひ

とまりしとなり
よろしく物せさせ給うければ　秘大宮の御病のよろ
しきとなり　箋大宮の御病氣驗けにおはしければ
なり
おもひおこせる　箋思ひ立ぬる時にとなり
さやうにつたへものせさせ給へとの給ふ　これまで
源の詞わかかやうに申よし内府へ仰傳へられよと
なり
宮いかに〳〵侍ける事にか　箋秘大宮の返答なり不
審をし給ふなり
かしこにはさま〳〵に　秘内大臣なり箋
かゝるなのりする　秘近江君もとめ出し給ふ事なり
箋近江君なとの事なり
いかなる心にて　箋内大臣をさし越して源へ申よれ
はいかやうの事にやと疑給ふなり
かこちきこえかゝるらん
このとしころうけたまはりてなりぬるにや　箋私云
大宮の詞なり義あまた侍れと只源の憐愍の心深き
よしを聞及て實父をさしおきて御子に成給へるか
と當座の取合に大宮のゝ給ふなりなりぬるにやと

は源の御子の分にて居給へるにやとなり云々　弄
大宮の詞の源の憐愍ある心を玉かつらなとも年來
聞及てかやうに實父の方をさし置て源氏の御方へ
參られけるを事にや成ぬると當座の取合に大宮の丶
給へる歟云々　源氏を父と承り違たると云義歟と
云々うけ給り成ぬる　又うけたまはらてなりぬる
うけたまはりて可然歟但不見證本　以上弄　或宗
長義に内大臣かの有し夢より尋らるゝ事有しをい
かに承りてか源氏の御方へは御むすめのやうには
なりぬらんといふ心なり云々
さるやう侍る　秘　源氏の詞也箋
くはしきさまはかのおとゝも　内府は速々おもひ合
せ給はんとなり
くた／＼しきなは人のなからひにたる事に侍れは
夕皃上の事平人なとこそかやうの事はあれとあら
はには源のゝ給はぬなり
中將の朝臣にたに　夕霧にさへ此事をしらせぬなり
人にももらさせ給ふまし　大宮へも口かため給ふな
り
うちのおほいとのも内府も源の三條宮へおはしたる

を聞給ふなり
いかにさひしけにて　三條宮の體を内府の思ひやり
たるなり
いつくしき御さまを　源の歴々の體をいふなりいつ
くしきは嚴重のさまなり
こせんとも　源の前駈なり
おましひきつくらふ　御座なり
中將は御ともに　夕霧なり
御子ともの君たち　内府の子息たちなり
まうちきみたち　弄　諸官なり　内府へ家禮の殿上人
ともなるへし
御くた物おほみきなと　内府の仰つけられ給ふさま
なり
みつからもまゐるへきを物さわかしさ　内府の參會
給はゝこと／＼しく成て物さわかしからんなとの
給ふなり
大宮の御ふみあり　大宮より源のとふらひ給よし御
せうそこ侍るなり秘如此
六條のおとゝのとふらひに　秘　大宮の文の詞也箋
人めのいとほしくも　外見又は源へ挨拶申入もなし

となり
かくきこえたる　大宮より文のありたるとはなくて
わたり給へとなり
たいめんにきこえまほしけなる　源の對面して申たき事もあるやうにの給ふとなり
何事にかはあらん　秘内大臣の心なり
このひめ君の御こと　雲井鴈の事かと思ふなり
中將のうれへにや夕霧の切に思ふ故に源の口入あらんかと思ひ給ふなりまた大宮のさし合ての給はんとてかとおもふなり
宮もかく御世のこりすくなけにて　大宮のことの外勞し給へるとなり
このことくせちにのたまひおとゝもにくからぬさまに　大宮のわか存生のうちに雲井鴈を夕霧にゆるし給へなと懇切に仰られんに源の一言そへ給はゝさりかたき事なるへしとなり
つれなくて思ひ入れぬを見るにはやすからす　秘夕霧のおりたちもいひより給はさるをいへり
さるへきつゐてあらは人の御ことになひきかほにてゆるし　弄人の御言なり　私源なとの推量にもかやうに雲井雁を隔ておき給ふとも終には大宮源なとの今一度も口入もあらはそれを次てにて宗てゆるし給はんとそ思給ふらんその御心にて大宮とさしあはせて宣はゝいなひ所なからん樣にといふ心歟
秘如此いなひ所なからんかし　秘如此聲をさす也
又なとかさしもあらん　秘いまたためらひ給ふなり
是も内大臣の御心くせなり　聞かやうにいなひ所あらしとは思ふ物からさりとては夕霧へ對しては存分ある程にいかゝせんと思ひやすらふなり是申たてたる所つよき人といふ内府の性をいへり　弄なひきやせまし又やすらはるゝ内大臣の心あやにくなり
いとけしからぬ　草子地なり
君たちいとあまた　子息たちなるへし
たけたちそゝろかに　秘人からなり　聞内府の體なり　せいのたかき體をいふなり
ふとさもあひて　秘なれあひたるなり
いとしうとくに　河宿德なりし　秘しうとくは宿植德本　觀音經なり前世にうゑたる德にいまの世の光花あるとなり　本勘入

おもゝち　かはもちなり面もちなり
あゆまひ　弄歩體也　秘歩さまなり
えびそめの御さしぬきさくらの下かさね　花直衣布袴なり櫻の下襲はおもて白うらえびそめなり　秘直衣布衣といへる出立なり
いとなかくしりひきて　下かさねのしりなり　裾の事なり
六條殿はさくらのからのきぬの御なほしいまやう色の御そ　源氏なり　花是は布袴とはみえすいまやう色の御そはつねのきぬなり下かさねとはみえ侍らす大君すかたはさきにしるし侍ぬ
ひかりこそまさり給へかうしたゝかに引つくろひ　弄内大臣の光ことにしきも源氏の引つくろひ給ふにはなすらひてもみえすとなり　又云光のまさり給へる事こそあらめ容儀なとも無雙とにや源を内府にみ合せる心なり又まさり給へるにて何をきりて内府の事にも可然歟　秘此段兩義ありなすらへてもみえ給はさりけりと云までを源氏の容儀に見る義有又の義は光こそまさり給へと云まて源の事なり其末は內大臣なりきらきらしき所は內大臣はまさり給ふへきとなり　二義共に用之　箋云此義の時は子息達引つれ給へる行粧の繁昌の見る目はまされると云にや　三光自筆　聞にかくしたたかにとは內府の體也云々　私光てそまさり給へを源の方へ付てかくしたゝかにと云より內府の事と見る義可然歟
藤大納言春宮大夫　弄内大臣の弟たちなり　秘同
私云皆三條宮の御腹にはあらす
おのつからわさともなき　今日の義はかねて催しなとありつる事にてなきさへかやうにあまたつとひ給へるとなり
十餘人　聞十人あまりなり
さいはひに人にすくれ給へる　秘人々の云なり大宮の幸人なりと云なり
さふらはてはあしかりぬへかりけるを　秘内大臣の御源へ申給ふ事なり
御かうしや　秘考事なり　勘當なり　河考事
かんたうは　花源氏雲井の雁の事を思はせての給ふ詞なり　弄源夕霧と雲井雁との事をほのめかし給ふ也　聞源の心に玉かつらの事をふくみての給ふ

なり夕顔の事をおもひ出てなり云々　秘源の詞也
私云花弄の義可然歟如何
この事にやとおほせは　内府の心也　秘雲井の鴈の事にやと思ひ給ふなり
かしこまりたるさまにて　内府の體なりかんたうはこなたさまなとゝの給ひて雲井鴈の事なとをの給はんかと思ひて恐懼したる體にまきらはすさま也
むかしより　秘源の詞也
大小の事　秘弄かくのことし
はねをならふるやうにて　河比翼也　聞四皓か故事をひけり　或臣者君之羽翼也　史記
末の世となりて　源と内府との間むかしのやうにあらぬ事をの給へり
うち〳〵のわたくしこと　秋好中宮を源の入内させられて弘徽殿内府女の寵おとり給ふ事なとなり又源には雲井鴈の事なとなる成へし
ことかきりありてよたけき　秘萬機をし給へるいとまなきなり　聞同又よたけきは勢ある心なりことことしき體なり　私云かきりありてよたけきとは關白なとの人なれはかる〳〵しきありきなとし給ふ事は成かたきなりそれとても行粧を省略せられても源なとへは音つれ給ふへき事との給ふ詞なり
その御いきほひもひきしゝめ　かきりある所粧をも略してとなり
いにしへけに　秘内大臣詞なり
おもなれて　河馴思也　私面馴歟
たい〳〵しきまて　秘あまりに緩怠なるまてとなり
はねならへたるかすにて　私須磨巻にもつはさならふると歌にもあり卑下の詞なり
思給へしらぬには　秘源の御恩をわするゝ事はなきとなり關白なとゆつり給へる事なり
けにおのつからうちゆるふ　ゆるふは懈怠の心なりいきほひをも引しゝめ給てこそはとふらひたまはめと源の宣ふゆゑに其懈怠を謝しての給ふなり
ほのめかし出給ひにけり　花玉かつらの事なり　秘玉かつらの事をいひ出給ふなり
おとゝいとあはれに　秘内大臣なり
そのかみよりいかに成にけんと　秘内大臣の詞也
なにのつゐてにか侍りけんうれへにたへすもらし　秘もとかたり申しゝ也　聞雨夜の物かたりの事

なり
はか／＼しからぬ　秘近江君尋ね出給ひし事なり
かたくなしくみくるしと　聞近江君なとのさまなり
又さるさまにてかす／＼につらねてはあはれに思ひ給へらるゝ　聞近江君なとの體を見る故にたつぬる事のうすく成たるとなり　私此段いさゝか心得にくし案するにさるかたにとはわか子ともなとのかたかたにつけてさまよひありかんはわか恥辱にてもあれはかたくなしくみくるしきを尋出してみんよりもあはれなる事と云也扨此玉鬘は今日まては尋出給はねは心にかゝりつるとの義歟前の詞かたかたにつけてさまよひ侍ると云にかけてみるへし
あはれに思う給へらるゝ　秘玉かつらの事を思ひ出給ふなり　私云是は内府の子ともの行衛いまた尋出ぬがあるを總して思ふ心なり
まつなん思ひ出給へらるゝ　是はさやうの子たちの中に別して玉かつらの事を思ひ出ると内府の詞也
いにしへの雨夜の物かたり　帚木巻に有し事なり前の詞には何のつゐてにかとおほめきてかきたれと今はあらはしていへり

かくまいりきあひては　是より源の詞也
宮はたまゐいてひめ君の御事を　花葵の上の御事を大宮の覺しめし出たる也　秘葵上のおはせましかはと也　心よはからぬ源さへ今夜の感にもよほされてうちしほれ給へりまして大宮はといふなり
ありしにまさる御有さまいきほひを　源の事なり御ありさまは容儀なりいきほひは威勢也　河「いてていなは誰か別のかたからん有しにまさるけふはかなしも　不及此歌
しほ／＼と　秘如此つけたり
あまころもはけに心ことなりけり　聞花に面白なり大宮尼にておはしますなり
中將の御事をは　秘雲井鴈の事なり
一ふしようゐなしと　秘用意なしとうらめしく一節おほしおきしなり
人わろくおほしとゝめ　源の心中を察してかくなり
かのおとゝはた　秘内大臣もよさついてなる物をとなり　内大臣のすゝみ申さんもさすかにて申出ささりしなり
むすほゝれたる心ちし給ひけり　内大臣の此次に源

のかたはらの給はゝゆるさんと思ひ給ひつるに源のかたはら一ふし心おきての給ひ出ぬをなにとやらん心にかゝりて思ふなり對面のさま心とけてみえつるに此一ふしを殘し給へるなとかた／＼心にかゝるなり

こよひも御ともに　秘内大臣の詞也

うちつけにさわかしく

ことさらになん　わさとまゐるへきなり

さらは此御なやみも　秘源の詞御裳き　事なり

きこえし日　玉かつらの裳きの日の事也

御けしきとも　源と内大臣となり

又いかなる御ゆつりあるへきにか　花此事とはしらす雲井鴈の御事とひか心得たる人々は思ふとなり

秘花鳥の說いかゝ關白をも源のゆつり給ひしに又何事かと世間に皆思ふなり　弄

おとゝうちつけにいとゆかし　聞内府の心也　秘玉かつらをいつしかゆかしく思ひ給ふなり

ふとしかうけとりおやからんも　皆内府の心に玉かつらの事をさま／＼に思ひあつかふなり

心きよくみはなち　源の玉かつらを尋得て密通のなき事はあらしと內府の推量なり　弄玉鬘を源氏たたにはおき給はしと內大臣の思ひ給ふなり

やんことなき御かた／＼を　秘紫上なとのつらにし給へは人めをいかゝとおほすなり又さりとて聊爾にはし給はしとてあらはし給ふなり

さすかにわつらはしく物のきこえを思ひてかくあかし給ふなめりと　うけはりてとは理運におもてむきには紫上なとにはゝかりて玉かつらをもてなし給はす又御子なとのやうにて置給へは密通も有にくき故內大臣の女とは今あらはし給ふなるへしと色色に內大臣の推量なり物のきこえを思ひてとは御子と人にしられては密通ありにくき事をいふなり

くちをしけれと　聞さやうに人しれぬ事は內府の心に不足に思ふなり

それをきすとすへき事かは　秘源の心きよき事は有ましきと思へとそれも力なき事となり

ことさらにもかの御あたり　秘わさともこそ源の御あたりへはまゐらせおくへけれとなり

みやつかへさまにも　秘内侍のかみにまゐり給はゝ女御の御ためいかゝとなり　私女御は弘徽殿なり

内大臣女なり
ともかくも思ひよりの給はんをきてを　内大臣の兎
角思ふに我はからひにもしたく思ひ給へと源の尋
出しておき給へは了簡もなし源氏次第と思ひなす
なり
かくの給ふはきさらきついたちころ　是は三條の宮
にて源と内大臣參會の頃の事なり
十六日ひかんのはしめにて　河彼岸　齋法成道經曰
一切衆生依特二八月齋十方世界一切衆生離苦得樂
靈瑞而已乃至中春中秋晝夜各五ヶ剋（月イ）を時正と云な
り仍首日たる歟　彼岸者二月八日八王幸會修下到
二彼岸一齋食法上
よろしくおはしませは　秘　大宮の御病のよろしきな
り
いそきたち給て　御裳着の事をいよ／＼いそき給ふ
也
れいのわたり給ても　秘　源玉かつらの御方へわたり
給なり
おとゝに申あらはし　内大臣へ玉かつらの事申給ひ
し縁なり

あへいこと〻も　秘　内大臣に逢たてまつらせ給ふへ
き事なとねん頃にをしへ給也
あはれなる御心は　秘　玉かつらの心なり實父よりも
ねんころなるとなり
有かたからむをとおほす物からいとなんうれしかり
ける　源のねんころなるほと結句實父はねんころに
ありかたからんと思ひやりなからうれしきと也
秘　此からの字妙也かくねんころなる事はたくひな
けれと今實父にしられたてまつるは一段とうれし
きとなり　弄　玉かつらの心源氏をありかたき物に
思ひ給ひなから父にしられんとうれしく聞給ふも
のからといふ心尤也　私前に註する分可然歟の義
よし
かくてのちには中將の君にも　夕霧に玉かつらの事
を源のいひきかせ給ふなり
あやしのこと〻もや　此玉かつらの事を夕霧の心に
源の御子のやうにたつね出給ひ今又内大臣の御女
のよしいかなる事のさまそと不審に思ふとなり
うへなりけりと思ひあはする事　花　野分の巻にある
事なり源氏玉かつらとたはふれたまふを夕霧かい

まみて思ひの外に思ひしる事のおもむきを聞ひらきては道理にてあると思ひあはする事なり　秘野分の日あやしかりしと思ひ合せ給ふ也　秘源氏玉かつらにたはふれ給ひしを夕霧の中將ほゝかにみしを疑ひしかと今事の由を聞ておもひあはする也

かのつれなき人の御ありさまよりもなほもあらす　秘雲井鴈なり雲井鴈よりもまさりさまなる物をとり　花雲井鴈の事なりなほもあかすおひ出らるゝ雲井の鴈の事なり　私三本には猶もあらすとあり花鳥には猶もあかすとありなほもあらすといふもおなし義とみえたり

思ひよらさりける事よと　聞玉かつらへ好色の心にかゝらさりし事よと我なから愚痴に夕霧のおもふ心なり

されとあるましう　秘夕霧の實法なるなり　聞雲井鴈を思ひかけなから又玉かつらへ心をうつさんはねちけたる事なりと思ひかへすは夕霧の實なる心かなと草子地にかくなり

三條宮より　秘玉かつらへ文あるなり　祖母なれは大宮よりとふらひ給ふなり

きこえんにも　秘文の詞なりいま〳〵しきとはその身尼にてましますよしなり

さるかたにてもなかきためし　秘命なかきためしにとなり

あはれにうけたまはりあきらめたる　秘わか御孫なるよしなり

御けしきにしたかひて　秘かく(大宮イ)は申せとも御けしきにしたかふへしとなり　聞内大臣のわか孫といふ事をは聞たれともいまた源の御子の分なるほとにかくいへり

(大宮)ふたかたにいひもてゆけは玉くしけ吾身はなれぬかけこなりけり　花三條宮は玉かつらのために祖母なり又源氏の北方葵上は宮の御女なり玉かつらの君を源氏の御女といへと葵上の爲まゝ子なり繼母は親母に同と云本文あるによりていつかたにつけても三條宮はむまことと思ひなし給へる心也　秘玉かつらを内大臣の御子なれとも大宮の御孫源氏の御子といへとも葵上のまゝ子なれは是も又孫ゝ也云云　弄玉かつらは三條宮の孫なり源の御子の分にてもはなれぬ心をふたかたにとよめり

とのもこなたに　源氏なり
こたいなる御ふみかき　此文を御らんして源のゝ給ふ詞なり　昔は御ふみかきのすくれたるといふなるへし
いたしやこの御手に　花いたしやはいたましき心なり　秘いたはしやなり
御てふるひにけり　秘御手ふひにけりふるひなり年よりて御手の振たるなり　古ふるひには非す
よくも玉くしけにまつはれたる　花ふたかけて玉くしけの秀句なり
卅一字のなかに　さんじういちじ也　秘歌よむ事をこゝにていさめて式部かいへるなりあまり緣の詞の過たるものあしき事なり　弄世の人に歌のさまをしめしたるなりいつくも此心なるへし見るへし見るへしそへたる事のかたきなりとは堅固過たるなり弄同　からころもきつゝなれにしつましあれはも此歌の類なりされとそれはおりくなれはえさらぬ事なるへし古人沙汰したる事なり　此義聞同
私八雲御抄にも秀句は歌の源なれと事すきぬるはわろしとあそはせり

中宮より　秋好なり
白き御裳からきぬ　裳唐衣なり　聞からきぬは唐より渡たるものなり云々此義猶可尋也
御くしあけのぐ　花髮上の具足をいふにや
からのたき物　河薰物方自唐土傳故如此云歟又唐にて合せたる藥も有之梅枝卷に見ゆ　秘河海に兩義ありいつれにても有へし　聞唐にて合せたるなり又薰物は唐物にて合する程にかくいふ歟
御かた／＼みな心々　是は明石上花散里以下のかたかたなるへし
人々のれうに　さふらふ女房なとへの心あてなり
ひんかしの院の人々も　是は二條院の東院なり此なみの衆はかやうに時の御とふらひなとはさし過たる事なり
ひたちの宮　末摘の君なり
かたのことくなん　河如形なり
あはれなる御心さし　草子地なりさし過たる無用の事を嘲哢してかけるなり
あをにひのはそなか一かさね　弄服者ならても用る事有例一勘青鈍は服者ならねと着する事勿論なり

たゝにひ色は凶服なり　聞青にひは服者ならても用ることあれともかやうの祝義の時は假あはぬなり

おちくりとかや何とかや　秘昔秘したるものなり

河落栗色はこき紅の袴なり合袴は中重のなき袴なりうつほ物語にもあまたあり此色の袴上古は晴の時用之由舊記等載之或説に下地をうす紫に染て上を紅にして染たる色なり云々叉云おちくり色は紫なり云々　秘あはせのはかまはなかへのなきなり

花こき紅のくろみ入たるほとにそめたるをいふへし　弄おちくり色の袴等なり一掛合點あはせの袴はうらあるを云猶々引勘へし昔めてたうしける色を末つむのふるめきてたてまつり給ふなり

むらさきのしらきりみゆるあられぢの御こうちき

河紫のしらみきはみたる色歟よからぬ色たる歟うはしらみと書たる本もあり　秘しらみくろみたる色なり　聞下をうす紫にそめてうへを紅にそめたるなり此色のそてねたるなり　弄紫のしらみたる色なり是はおちくり色の註なり或説に下地を薄紫にそめて上を紅にてそめたる色なりと云々河海一答

私弄に紫のしらきりみゆるは落栗色の註なり云々然共霰地の小袿(コウチキ)の色とみるへき歟

しらせ給ふへき　末摘よりの文の詞なり

これいとあやしけれと　此きぬの色々を卑下したる詞なり

おいらかなり　秘おとなしきなり　聞是まてまたしもとなり　弄おいらかとはおとなしきと云々雙紙の詞なり

との御らんしつけて　源の心中にくるしくおほすなり

あやしきふる人　是より源の詞末摘の古代にてか様なると人にはいひきかせ給ふなり

かくものいみ(つゝみイ)したる人はひきいり　秘人のをしへなり

さすかにはちかましやとて　こゝにくをきりてよむへし

かへりことはつかはせ　かやうにはの給へとも返事はつかはせと源の詞なり　秘源の仁恕あるなり人からを思ひ給ふゆゑなり

ちゝみての　故常陸宮なり　末摘をかしつき給ひし

物をとなり　聞 ちゞ宮のあまりにいたはり過しわろくそたてたるなりとなり

おなしすちの歌　末摘のから衣をつねによみ給ふなり返歌またこのむすちといへり

末摘 わか身こそうらみられけれから衣君かたもとになれすと思へは　聞 身の數ならぬ故に君になれぬとなり　九禪云疎遠なるといはんとはかりなり無用の歌なり云々

しぶかみ　秘 ちゝみたるなり

えりふかく　河 しゝかみはふるひちゝみたるすかたなりえりふかくとはえりいれて書たる歟文字つよなる心なり　秘 假名はうき／＼としたるこそよけれえり入たる樣なり　九 一テイ々あしき事を云りつよくかたくいづれもかなはぬさまをきらふなり　しかみは文字つよくかく樣なりえりふかくは眞の物の樣にかたちをかくは惡となり

おとゝ　源氏なり

このうたよみつらん程こそ句まして今はちからなくて　秘 侍從なと有し時はあつらへ給ひしを今はさやうの人さへなくて自身苦勞してよみ出し給ふへきとなり　弄 つまりたるなり侍從かくつろくる事もなき心なり

われせんと　源のみづから返事をせんとなり

あやしく人のおもひよるましき　源よりの返事の詞なり

返源 から衣又からころもから衣かへす／＼もからころもなる　河 韓衣 伊勢物語眞名本 「いくたびかよにかへすらんから衣かへす／＼もうらみらるれは　花 古今「から衣日も夕暮になる時はかへす／＼そ人はこひしき　今案末摘花の卷から衣君か心のつらけれは袂はかくそそほちつゝのみ玉鬘の卷にきてみれはうらみられけりから衣かへしやりてん袖をぬらして此卷に我身こそうらみられけれから衣君か袂になれすと思へは是迄から衣といへる事を三度讀侍る故にから衣又から衣／＼とはかさねてよみ給へるなり嘲哢の歌なり　秘 玉鬘の返事は別に有へし此歌は源のかき給へるなりから衣といふ詞をしけくよみ給へる故なり私云末摘の歌のさまも源へをくりたるとみゆ玉かつらの君より返事は別にあるましき歟

いとまめやかにかの人の　源の詞也末つむのこのみよむから衣なれはかくよめりと實々しく源のの給ふなり

君いとにほひやかに　秘君は玉かつらなり

あないとほし　玉かつらの詞

ろうじたるやうにも　秘嘲哢なり　河ろうしは嘲哢なり　伊勢物語になほ人をはうらみつへき物になんありけるとてろうしてよみてやりける

よしなしと　花から衣といふ文字多き事なり　河よしなし事は無用事なり　秘草子地なり　かやうの事をかけるはよしなきとなり　私云花の詞如何此段いらぬ事をかけるとなり　聞草子地なりいらぬ事をかきたるといふなり又源のたはふれことの事歟　私いらぬ事をかけるといふ筆者の詞可然也

さしもいそかれ給ふましき　秘とく對面あり度との心なり

めつらかにきゝ給ひし　玉かつらの事也

あへいかきりに又すきて　定れる作法に事をそへたるなり

けにわさと御心とゝめ　源のねんころなるを内大臣の思ふ心なり

やうかはりておはさる　秘源の心に入たる事なり實子にてもなし又室家にてもなきをいかなる事にかくまて心にはいり侍るそとなり　九禪わかむすめのやうにはなくて別に何そやうなるやうにし給ふとなり　私むすめの事をよそ〳〵しくする事を内大臣の思ふ心歟　或弄花に私に御こしゆひに參り給へと我御むすめなれはとにやとあり　愚本無之

ゐの時にそうちにいれ奉り給ふ　秘御對面ある時なり　玉かつらの居給簾中へ内大臣の入給ふなり

れいの得よりはすこしひかりみせて　秘かやうの時の灯はほのかなるへきをこれは實子を此次にあらはしてんの御心にてわさとあらはにし給ふなり

いみしうゆかしう　内大臣の玉かつらの事を思ひ給ふなり

こよひはいとゆくりか　河思ふやうなる心なり　花ゆくりなきとは不意とかけり心なきやうなる心なるへし　弄にはかなる心なり

ひきむすひ給ふほと　花裳のこしをゆふなり

えしのひ給はぬ　内大臣の體なり　聞夕良上の事又

玉かつらの上にてもあるへし
あるしのおとゝこよひはいにしへさまの事は　弄源氏の詞也　花此姫君のこゝにわたり給ふ事のいはれをいまたあかし給はねはいにしへさまの事をはかけ侍らぬといふなり　聞夕良上の事なり　九禅祝義の夜なれは夕良上の事はいはぬとなり　私玉かつらの根本を人にあらはさぬ事なり
心しらぬ人めをかさりにてなほよのつねのさほふにと　秘内大臣の實子と云事はいまた世間の披露なき故に有へき作法にと源のゝ給ふなり　聞たゝ源の子のことくし給へと源の内大臣への給ふなり
けにさらにきこえさせやるへき　秘内大臣の詞源の念比なる事をいへり　源のいにしへさまの事はかけぬとの給ふにつけてけに何とも申へき様なしと云義歟　弄源氏のねんころなる事ともかたしけなしと内府のの給ふなり
かきりなきかしこまり　秘かくてもあつかひ給ふかたしけなさはかきりなき事となり
今まてかく思ひこめさせ　御ねんころはかたしけなけれとも今迄かくしおきたまへるうらみをもそと申さてはと内府の詞なり
内大臣
うらめしやおきつ玉もをかつく迄いそかくれぬるあまの心よ　花後撰十五からさきのはらへに車より黒主にかつけものする裳のこしにかきつけてみるといふ女におくりし「何せんにへたのみるめも思ひけんおきつ玉をもかつく身にして　秘今までしられて過けるよとなり　聞玉もは裳にかけたるなり　裳をも玉もとよめり
猶つゝみもあへすしほたれ給ふ　秘歌にあまの心よとあるによせたり　弄　私こよひはいにしへさまの事はかけしと源のの給へとも猶内大臣はつゝみもあへすしほたるゝとなり
姫君はいとはつかしき御ありさまともの　玉かつらは源内府なとのおはするゆゑにはつかしくつゝましくて返歌もありにくゝおほすゆゑに源の返ししたまふとなり
返源
よるへなみかゝるなきさに打よせてあまもたつねぬもくつとそみし　花もくつは裳によそへたるなり
我身のよるへはいつくともなかりしをそなたよりたつねもし給はさりしよとなり源のおしはかりて

返事をかくし給へり 聞玉の心になりと源のよみ給ふなり 九禅 此返歌玉かつらのし給はぬゆゑに源のし給ふなり父内大臣の方へより給ふへき便なくてわか方におはせしを今まて尋給はぬと源のかたよりは又うらみ給ふなり 私此両義猶決し定へしもくつともみしと云心は玉かつらをたれもたつねすとみしと源の心歟如何

いとわりなき御うちつけと 弄内大臣の玉かつらを今まて尋給はぬをわりなしとかこち給ふなり秘今まては尋給はて又かやうに内府のうらみ給ふを俄にうちつけなることゝ源のの給ふなり

いとことわりになんと 申のふへきかたなしと内大臣の申て出給ふなり

いて給ひぬ 内府の簾外へ出給ふなり

みてたちつき〱 秘次々なり

御けさう人もあまた 秘兵部卿宮鬚黒なとなり

このおとゝかく入おはして 聞何とも今夜の體を心しらぬ人々心得かたく思ふなり玉かつらをいつれへと定なとの有にやなとさま〱思ひうたかふなるへし

中將辨の君はかりそ 秘中將は柏木なり 聞中將は柏木辨は紅梅の大臣なり

人しれす思ひしてとをからうもうれしくもともしらて心かけし事をからくも思ひ又實のはらからなれはうれしくも思ふとなり 秘兄弟

辨はよくそうちいてさりける 紅梅は玉かつらへ文かよはしなともなかりし事なり 弄

さまことなるおとゝの 秘六條院のさま〱の事をし給へるをいへり 或むすめのやうにて人の心をつくさせなとし給ふ事なり

中宮の御たくひに 秘秋好なり 聞秋好の類に此玉かつらをもしたてんとやおほすらんなと恒に世人のいふさまなり

したて給はんとやおほすらんなとおの〱いふよしをきゝ給へと 世人の取沙汰を聞給ふとなり 私花鳥云したて給はんとやおほすらんなとおの〱いふあかぬよしをきこえ給へともとありて註云是は内大臣の玉かつらの君をみ給て歸り給へはけふの事猶のこりおほき心ちするよしを聞へ給ふとあり然而三本あかぬの字なし

猶しはし御心つかひし給ひて　秘源内大臣へ申給ふ詞なり　花是は源氏の内大臣に玉かつらの君の事を申給ふ詞なり
何事も心やすきほとの人こそ　九禅大かたの人のうへこそあれ能々御遠慮あれとなりこなたをもそなたをもとは源と内府との方なり
人のきこえなやまさん　源をも内大臣をもさま〳〵人のいひあつかふへき事なり
なたらかにやう〳〵人めをもならす　漸々に人めをも馴たるかよきとなり案之此段あかぬの字を入て花鳥の義に付て心得やすきなり如何三本のことくならは大かたの玉かつらへ内大臣のもてなしの有へきやうを源より申さるゝ事と心得へし
たゝ御もてなしになん　秘内府の返事なり弄　源の御心に随へきと内府語なり
かうまて御覧せられ　此段玉かつらの事を源へ謝し申さるゝ内府の詞なり
御おくりもの　秘裳着の祿例よりも事くはへたるなり
大みやの御なやみに　前に大宮の煩にことよせて腰ゆひの事を内府の斟酌ありし事なり其行衛なれはけふはこと〳〵しき御遊なとはなしとなり
兵部卿今はことつけやり給ふへき　裳きなとなくては嫁娶も有ましき事なれはさやうのかこつけに今まて延引せしを今はかこつけこともあるましきと宮の申給ふなり玉かつらの事なり
内より御けしきあるを　尚侍の事なり　秘内よりの御左右を待てとなり
かへさひ奏し　今一度奏して其返事次第と源のゝ給ふなり
ことさまの事は　別の事はとなり　兵部卿宮へなりとも髯黒へなりとも御一左右の上にてともかくも思案すへきとなり
ちゝおとゝは　内府なり
なまかたちなる　内府の心なり玉かつらのかたちなとすくれすはこれほと源の懇にこと〳〵しうはもてなし給はしと思ふなり　秘源のかく念頃かり給は玉かつらの大かた可然人故にてこそあらめと思ひやり給ふなり
いまそかの御夢も　秘螢巻にみえたり　花夢をみ

給うてあはするものに内府のとひ給へはわか御子
を人のものにて見給はんと申せし事なり
女御はかり　内府の女弘徽殿なり　秘内大臣のかた
り給ふなり
せちにこめ給へと　玉鬘の事懇切に穩密あるとなり
しねんに　秘かやうに點せり自然なり
このさかなものも　秘近江君なり花
中將少將さふらひ給ふに　花柏木　紅梅君なり　私
云中將は柏なり少將は紅梅なり此人辨の小將なり
仍小將とはかりもかける歟
殿はむすめ　内府なり　むすめは玉かつらなり
ふたかたにもてなさるらん　秘源と内大臣となり
かれもおとりはらなり　母かたの卑をいふ玉かつら
の事なり近江君は女官はらなり
おふ(アウ)なけにいへは　河無奥おくふかゝらぬ體なり奥(アウ)
なげにや　物の淺々しき體なり　秘奥もなくとな
り
中將　秘柏木なり
しかかしつかるへき　秘二かたにもてなさるらんと
いふにかゝれり

かくゆくりなく　私云遠慮なき心歟前に思ひやり心
と此卷に河海に注せり其心通する歟
物いひたゝならぬ　口まめなる女房なともきくに此
近江君にはたかしらせたるそと柏のいふ詞なり
あなかまみなきゝて　秘近江君の詞　九禪皆よくし
りたる物をとなり　聞あなかまはあなかましや
なと物いひあしき體なり
ないしのかみに　玉かつらの成へきとなり
みやつかへにいそきたる　内々宮つかへに參りたき
と申しゝはかやうの内侍のかみなと望におもひし
となり
なへての女房たに　女御にさふらふ女房たにせぬわ
さまてみやつかふはさやうの忠節に女御の尚侍な
とにも申なさせ給はんかとの事なりといふなり
御まへのつらく　女御をさしていふ也近江君のうら
みかくる詞なり
みなほゝゑみて　中將辨君なり
ないしのかみは　秘尚侍の闕あらは中將辨こそ望申
へきにと嘲哢していへる詞也　弄近江君のおとゝ
いの君たちわれこそ尚侍をのそまめとあさけり給

ふなり　私云中將の詞なり此歌に中將君そつらく
おはするとあり　但それは尋出したるがつらきと
云心歟如何
ひたうにも　河非道なり
めてたき御中にも　近江君詞
中將の君そつらくおはする　近江君の詞柏木の尋出
して今更かやうに嘲哢し給ふをかこつなりさかし
らにはさし出るましき心なり進止とあり
せう〳〵の人は　小々なり詞とも近江君に似合てか
けり
まじりひきあけたり　秘點にはらあしき體なり　河
史記目瞋(イカラカシ)レ目視二項王一頭髮上指目眦盡裂項羽本記樊噲か怒れる姿な
り
けにあやまりたる　秘近江君尋出したる事を近頃あ
やまりたるなり
小將はかゝるかたにてたくひなき御ありさまをおろ
かにはよもおほさし　弄此詞は少將の近江君をなく
さめたるなり　秘少將はなさけ〳〵しくなくさめ
ていひ給ふなり　閑近江君をなくさむる詞なりこ
れも哢したる詞なり　私云此段如何案するにかゝ
るかたにてもたくひなきとは近江君女御へおりた
ち宮つかふさまを申給へはそれをよも女御もおろ
かにおほさしと少將のいふ義也
御心しつめてこそかたきいはをも　私云聞書にはか
たきいははほとあり岩なり秘抄にもいはほもとあり
三本いはほもとあり如何但岩の義可然歟　花日本
紀第一云天照太神踏二堅庭一而陷レ股若沫雪(アハユキ)以蹴
散今案かたきいははかたき庭とあるへき事なり
素盞烏尊の惡行を天照太神いかり給へる時ますら
をのわさをし給ひていきはひをなし給ふ時の事な
りかたき庭をも雪のことくけちらし給ふ心なり天
照太神もすさのをの尊とは御せうとなり今又近江
君と弁少將もおとゝいなれは近江君はらたてたる
事をたとへていへり　秘かたきいは云々抄に見え
たりかく書なせる面白なりはらたちたるさまなり
御心しつめてこそあわ雪の消ることく思ひのきゆ
る事もあらめとなり　弄天照太神云々兄弟の中に
かなへり御心しつめてこそ沫雪のことく思ひのき
ゆる時もあらめとなり
中將もあまのいはとさしてもり給はんや　河むかし

素盞烏尊あしきふるまひありし故に天照太神天磐戸にとちこもらせ給ひしかは世間とこやみになりし事なり兄弟に不和の事をいふ歟彌かたき岩の儀相應するなり故人何不指心乎　花中將は兄なり近江君は妹なり古今假名序註に素盞烏尊は天照太神の御このかみなりといへりしはらくこれによるへし近江君のこもり居給へらはめやすかるへきとなりかたきいはほわは雪になし給ふといふ事より一類に引たる本縁なり　私云花鳥に古今の假名序によるへしといへるは兄弟の次第日神月神蛭兒素盞烏なりされと假名序には素盞烏尊を天照太神の御このかみとあれはかく註せり　弄かたき岩ほの詞によせて岩戸の事をいへりさしこもり給はんよかるへしとなり　秘兄弟の事に奇特なるとり合なり

少將はなくさめての給ふを柏木はさやうにはらたち給はゝ引こみてゐ給へとなり

ほろ／＼となきて近江君のさまなり

すげなう　河無人望也

たゝ御まへの御心の　秘女御なり

いそしく　秘いそかはしく也　河かろらかなる心歟

つかうまつりたらぬざうやく　下﨟女さへしかたき事迄みあつかふなり雑役なり

物もいはれ給はす　女御の體なり

おといとけさやかに　秘おとはいらへたる聲なり　弄おといらへたる聲なり　よろしからす

いとつかへたる御けはひ　聞内大臣の詞此みやつかへのやう大やけにつかうまつらんにいかに相應せんとなり哢しての給ふなり

さも御けしき　近江君の返答　此段詞ともをいやしくかきなせり

夢にとみしたる　河邯鄲の夢なとの心歟

むねにておきたる　河愁の心胸中にひしとありてむねをおさへられたるやうなる心歟　秘驚きたる心なり　弄おとろくやうなる心又おびゆる心なり

したふり　秘黠也　舌とき心歟

ゑみ給ひぬへきを　秘内大臣おかしく思へるを堪忍あるなり

いとあやしうおほつかなき御くせなりや　草子地なり　實もなき御く（まイ）せとなり

さもおほしの給はさりしかは　内大臣の詞也　私云

此段いさゝか不審なり案之いとあやしうおほつか
なきといふより内大臣の詞なり前に近江君の此女
御殿なとおのつからつたへきこえさせ給ひてんと
たのみふくれてとあり其事なり内大臣の何とて侍
侍望なるよしを我にたしかにはの給はてさやうに
おほつかなく大かたにたのみてはおはしつるそと
近江君へのたまふ詞なりとみゆ如何
おほきおとゝの御むすめ　玉かつらの事なり内府の
わかむすめとはあらはし給はぬなり
まうしぶみを　官位を望時申文をかく常の事なり女
にも申文をかく事ある歟又晒しての給へる歟
きこしめさぬやうあらさらまし　勅許あらんと云歟
ひゝしく　弄秘々なり　ねんころになといふ心也
私師説　秘々なり念頭になと云心と云今案ひゝし
くといふ心にて可然歟　聞ひゝしく懇なと云心結
搆と云心なり　私に美々敷歟
なかうたなとの心はへおらんを　なかうたなとのお
もしろき心あらんをよみいたされは主上今とても
聞すくさせ給はすないしのかみをは近江君をなし
給はんと内大臣の晒しての給ふなり　河　長歌事古

今には短歌と書てことかきにはみななか歌とかけ
り萬葉には是を長歌とする歟一説云卅一字の歌は
五七五を一句として七々を一句とせり仍長歌なり
短歌は五七を一句とす仍みしかき歌なりと云々長
歌短歌の事家々の口傳にも樣々にいへりいつれも
有謂なり俊成卿古來の風體抄にも註両説彼心猶
引長歌歟俊頼曰長歌をも同事をいひなかせるを
長歌と稱しやう〳〵によめるをは稱短歌云々是難
決事歟所詮長歌短歌共になかうたの名なり崇德院
久安御百首にも短歌と出さるゝを人皆長歌を詠之　案之長歌とは今のつゝけあつめたる歌の事也
短歌とは長歌の奥に又反歌をいふなり仍長歌とも
短歌ともいふ歟　私云此長歌短歌の事秘説ある歟
今河海に註する分をのすしひて沙汰に及へからす
所詮心あるなかうたなとをよみ給へとの給ふなり
うへはそのうちに　弄みかとの御事なり
人のおやけなく　秘草子地なり
やまとうたはあしくも　秘近江君の詞也　申文はい
かゝあらん和歌をは隨分よまんとなり
むね〳〵しきかたの事　おもてむきの執奏は内大臣

あれとなり物の棟梁をするかたなり
つまこゑのやうにし　河一說しは〳〵のこゑなりつ
まこゑとはわかいふへき事を人にいはせたる風情
歟未勘得ともむかしはつねに俗體にいひつけたる
詞も今の世にはいひたえて人のいとしもしらぬ事
ありやかて難義なとにもなるなりもしさやうの詞
か　能々尋ぬへし　花たとへはわかいひたき事を
人をやとひていはせて時々そのはしをいふをつま
こゑといふなり　弄本人の申給ふ事に言(聲イ)をそへて
いはんとなり　秘　聞に聲をそへていふ心なり
世の人は　弄内大臣の近江君のよろしからぬはちを
まきらはしてかくあつかひ給ふと世の人さま〳〵
いふとなり　秘なにかてゝへむかへ給はゝかくは
し給ましき事となりたゝ此人のよろしからぬはち
をまきらはしてかくあつかひ給と世の人のさまさ
まいふとなり　私云世の人は父内府のためもはち
かましき事なるをかくの給ひて近江君をはしたな
め給ふはあるましき事なりとさま〳〵いふといへ
る歟

岷江入楚第三十　藤袴

三十七歲　太政大臣
尙侍御宮仕之間事
玉鬘君着祖母服又夕霧宰相中將着外祖母服事　夕
霧の中將宰相のよし始めてこゝに見ゆ又三條の大
宮うせ給へる事いつ頃とたしかに見え侍らす但下
の詞に御ふくもこの月にはぬかせ給ふへきをつい
てよろしからさりけり十三はかはらへ出させ給ふ
へきと云々是は玉鬘君の八月にうはの服をぬき給
ふ事を云り祖母は五ヶ月の服なれは八月までをか
そふるに四月末三條宮はかくれ給ふならし
宰相中將爲源氏御使參玉鬘中御門給事
八月十三日玉鬘君除服事
宰相中將持蘭花奉玉鬘事
宰相中將參殿御前申玉鬘御返事給事此次御物詣事共有
十月可有入內之由事
柏木頭中將爲(念イ)內大臣御使參西對事
九月西對姬君參人達競申事
姬君申兵部卿宮返事許給事

蘭（フヂバカマ）　花 以詞幷歌為巻名但詞にはらにの花とあり
河 巻名「おなし野の露にやつるゝ藤袴あはれはかけよかことはかりも　花 源卅七の八月の事あり又竪の並なり　秘 源卅七八月九月の事なり物語には三月より五ヶ月の事は見えす

内侍のかみ御宮つかへの事　河 初参以前に尚侍になされける歟只今も宮仕の事いまたあらましのほときこえたり如何　花 里第なからまつ尚侍に任せられて後に入内の事あり相違なき事なり　玉かつらの尚侍のかみの事行幸巻に細沙汰あり五ヶ月の間に内侍のかみに成給へるなるへし里なから内侍のかみに任する例花鳥に見えたり

たれも〳〵そゝのかし給ふもいかならん　秘 源と内大臣となり

おやとおもひきこゆる　秘 玉かつらの心中なり　箋
聞 實父ならぬ事をいへり

うちとくましき　秘 源の心かけ給ふをいへり

心より外にひんなき　花 御門の御詞にもかゝるおもはすなる事もあらはいかゝせんとなり　ひんなきはたよりなき心なり　秘 自然御門の寵にもあつかる事のあらはとなり

中宮も女御も　秋好と弘徽殿となり

わか身はかく物けなき　弄 為中なとにておひたちしことなり　私云源も父のことくし給ひ内大臣又實父なれとも心やすくうちとくへき女おやなとのなく身もおちつかぬやうなるを云歟

いつかたにもふかく思ひとゝめ　弄 源も内大臣もねん比にうしろみ給といへともいまた程もなしとなり　秘 たま〳〵おやにしられ奉りて又程なく女御なとに心おかれたてまつりてはとなり　聞 いまた奉公の労も久しからすとなり　私云此儀ともいかなるへきに歟案するにみかとの寵をうるといまた思ひとゝめ給ふ程もなきに父内大臣も女御の為に心もかはるへしなと思ふ玉かつらの心なり何いつかたにもといふ歟

うけひ給ふ人々　ウケイ　秘 咒詛の心なりてゝにてはたゝあしさまにおもふ心なり　聞 あしかれとそねむ心なり　弄 咒詛の心なりてゝにてはそれまてはなし唯よろしからぬ心なり源氏寄をなけくなり　河 承引水原抄　案之うけひは人のかろ〳〵し

く思ふ心なり　咒詛 日本紀 此心歟又日本紀に誓をうけひとよめりそれも誓言の義なりいか樣にもうけひくにはあらさる歟　「水のうへに數かくことさわか命いもにあはんとうけひつるかも是も猶心ちかふ歟　私云秘の義然るへし

物おほしゝるましき　玉かつらの年齡分別あるほとなりと云なり

さりとてかゝるありさまも　弄 源のゝ給ふかゝるもあしき事にてはなしとなり　秘 宮仕に出たつ事あしき事にてはなしとなり　私云此まゝ源の方におはする事歟

このおとゝの御心はへ　河 意見(コヽロハ)へ日本紀　おとゝは源なり

いかなるついてにかはもてはなれて人のおしはかるへかめるこゝち　花 是は玉かつらの君を源氏のたゝはおき給ふましきと人のおもへる事也

心きよくも　玉かつらの心實事なき事をあらはさんとなり

まことのちゝおとゝも　秘 源の心かけ給へきと內大臣のおしはかり給ゆゑにわか物にもえとりもちてし給はさるなり

うけはりてとりはなちけさやき給ふへき　河 請(ウケハリ) 日本紀 諾(ウケハリ) 淸(ケザヤキ) 佾亮(ケサヤキ)　聞 內大臣の今さらわか方へよひとり給ふ事も源へはゝかりてえし給はぬなり私云うけはりはわか物に理運にする心なりけさやくは物にきわをたてゝする心なり

猶とてもかくても　是は前にいへる詞に合てみるへし入內ありて奉公ありみかとの寵をえは中宮女御の御心おき給ふへしかくては又源の心かけ給も又御方々の心おき給ふへき事をとてもかくてもといふなり但愚案なり如何

かれ〳〵しき　河 懸々　私云此詞前に註する愚案にかなへりあまたの中にかゝつらふ事なり人の本妻にならぬ心なり

中々此おやたつね　實父內大臣たる事をあらはし給ひてからは玉かつらへ源のはゝかりもなく好色のさまをあらはし給なり前は御子の分にてありしゆゑ人めをもはゝかり給ひしとなりとりくはへつゝとは以前よりもたはふれをもふかくの給ふ心歟

いつかたも〳〵　秘 源內大臣なり　或 おやと云は源

と内大臣二人なれはいとはつかしきなり

みいたし給へるさま　玉かつらの體なり

うすきにひ色の御そ　河薄鈍色祖母服なり　うす花田なり　花三條の大宮かくれ給へる事玉かつらの君の御服の色にてはしめていひ出せりなやみ給ふ事は行幸巻にみえたり　秘三條大宮なやみ給ふ事前巻に見えたり此巻にうせ給ふとはみえたり三月廿日と藤の裏葉に見えたり三月なるへしと玉かつらの祖母の服をき給へり　弄大略同し　箋云三月より八月まで外祖母の服六ヶ月なり如何先例可尋

私三光白筆如此

宰相中將おなし色のいますこしこまやかなる　秘夕霧參議に昇進の事こゝにてみえたり行幸蘭の巻の間にて昇進なるへし弄　花夕霧の宰相中將になり給へる事こゝにてはしめて見えたり是も外祖母の服をき着へり輕服直衣鈍色平絹或薄鼠色をも用るなり　河こまやかは例の濃色なりこゝろさしのふかきにしたかひて服色もかきりあるよりはこかるへきなり　弄見河海云々　色のこきなり輕服は心の淺深によりてこきうすきあるなり夕霧は最愛の孫たるによりて色のこきなり　聞夕霧は外孫なれとも別て養育の故結句色のこきをき給へるなり

えいまき給へる　河巻纓は着服の義なり　花服者の巻纓するは冠のかさりをのそく心なり

はしめより物まめやかに　花是は夕霧と玉かつらの御あひしらひなり　秘玉かつら實の兄弟のよしをいひしらせ給ゆゑに夕霧まことのはらからのことくし給へるなり

いまあらさりけりとて　花夕霧のまことにわかおとといにてはなかりけるよとていつしかかはらんもなさけなかるへき心なり　秘今さらにしと／＼しくし給ふへきもいかゝとなり

殿の御せうそこにて内よりおほせ事　花尚侍の御入内の事　秘内より夕霧を御使として源へ申されしとのよしをやかて玉かつらの御かたへ申給ふなり内よりの仰を源の玉かつらへ夕霧しての給ふなりこゝへ夕霧のおはしたる様にかけり

御かへり　秘玉かつらの源への返答なり

かの野分のあした　河朝而萬葉第一第八の巻何も人類の事をいへり　秘玉かつらを夕霧の見給ひし事

弄
うたてあるすちに　秘實子にとりてはあまりむつましく心得かたく思ひ給ひし事なり　聞兄弟と思ひしかは心にはかゝりなからあるましき事に思ひしとなり

きゝあきらめてのちは猶もあらぬ心そひて　聞夕霧と兄弟ならぬ事なり　秘猶もあらぬとは夕霧の我身もあらぬ心つくとなり　私云うたてあるすちとは夕霧玉鬘と兄弟と思ひし事然るへしさて兄弟ならぬよしを聞あきらめては夕霧も思ひのそふといふなるへし

この宮つかへを大かたにしも　是は源の心中を夕霧の推量しておもふなりたゝいまみやつかへの事をの給ふ御つかひなれはなり　聞源の玉かつらを宮つかへにも急度出し給はしといふ歟野分の帖なとよりの事を思ふに御實子ならはいよ〳〵とり〳〵夕霧のおもふ心歟

秘如此
さはかり見所ある　花玉かつらの君御入内あらはかならすみかとのおほえあるへき事なり　弄源氏と玉かつらとの事なり　秘御かとゝよき御おはひなるへしとなり見所あると云を弄云源氏と玉かつらとの事なりと云々

おかしきさまなる　秘中宮女御の御ためにはわつらはしき事の有へきなり

たゝならすむねふたかる　夕霧の心にも何とやらん心かゝりなり　聞おかしき事のわつらはしきとはみかとへ玉かつらのまゐり給とも又此まゝ源の密通ありとも何事そ引出給はんと夕霧のおもふなり

つれなくすくよかにて　夕霧のつれなく實々しきさましてつくり事をの給ふなり

人にきかすましと　花これは源氏の御てとつてあるを人のきかぬ所にて申せと侍るよし夕きりの申給ふなり　秘夕霧のつくりことにかくの給ふなり

そらせうそこを　花源氏の御せうそこにてもなき事をそらせうそことはいふなり

こまやかに　河子細

うへの御けしきの　秘まへに人にきかすましと侍りつるといへる事の子細を訓釋するなり　聞夕霧のちか〳〵参りよらんためにつくり事をの給ふなり　その申やうは冷(みかと)の御心かゝるほとにその御心もち

ひあれなと源のゝ給ふといひなすなり
いらへ給はん事も　玉かつらのいらへんかたなきな
り
猶え忍ふましく　聞夕霧の心なり
御ふくもこの月には　聞夕霧詞なり　花此月は八月
なり祖母の服は五ヶ月なれは大宮のうせ給ふ四月
の事なるへし　秘玉かつらの物の給ふけはひみま
ほしくてかくいひかけ給ふなり　八月なり三月廿
日大宮の御忌日なり八月廿日まて輕服の日なり
花鳥に四月とあるは誤なり　私藤の裏葉に三月廿
日とかけり
十三日（シウサンニチ）　秘點之
かはらへ出させ　河出二河原一解除する事なり除服は
祓事なり
かたらひ（たくひイ）給はん　これより玉かつらの詞夕霧のため
に大宮は母かたの祖母なり玉かつらの爲には父か
たなれは差別あるへくやさて同し樣にはいかゝと
の給ふ歟　秘玉かつらの詞なり　私案之たくひ給
はんとはかはらへ同しく出給はん事なりさやうに
て夕霧も御出あらはことく／＼しくならんなり今ま
て源の御女と人のおもひつるに事たかふさまなら
ん用捨なるへしやかて此次の詞にて心得へし　聞
祖母も父母のかたに付て輕服の日數差別あれは玉
かつらと夕霧と同し樣に服をぬき給はんはいかゝ
といふ心歟又夕霧は大宮の外孫なり玉かつらは源
の御女の分にてしかも葵上の御腹ならすは大宮と
は他人なるへし仍て源の御子と人におもはせんと
の玉かつらの用捨の心歟
この御ふくなとの　河勞 水原抄　花いまゝて源氏の
御女のはしにてあるに又三條宮の御服をなとゝい
はゝ人のあらぬさまにとりなさん事をはゝかり給
ふなり﨟あるは心ふかく物なれたる心なり上﨟し
き心にはあらさるへし　河案之﨟ある歟上﨟しき
體なりらう／＼しきともらうたきともいへる同事
なり　秘今内大臣實子の事は此三條宮の御服をき
給へるによりて人あまた知へきなりらうおりとは
遠慮をめくらす物勞のあるなりいつれも此段玉か
つらの體をほめてかけるなり
もうさしとつゝませ　河三條宮の御服を玉かつらの
君くはしきさまを人にあまねくしらせしとおもむ

けたるを宰中將かたみなれはぬきすてんたにも物うきを忍ひ給ふ心うしといふなり　花 大宮は夕霧のためにもうはにてましますか故なり　秘 中將は忍ひかたき物をとなり　秀能か歌「露をたに今はかたみの藤衣あたにも袖をふくあらしかな　此語勢なり　以上開引此歌

さてもあやしう　花 内大臣の御女ならは源氏君は何とて又もてはなれぬやうにし給ふそと心えかたく思ひ給ふなり夕かほのむかしをいまた夕霧はしり給はぬ故なるへし　弄 夕霧の源氏の玉かつらをかしつきおき給ふ事をいかなる故そともしらさるとなり　秘 兄弟かとおもへはさはなくて輕服はおなしやうにきたるは心得さるとなり此衣ならてはとなり

この御あらはし衣の（キヌ）　弄 點之　河 此祖母の着服なくは致仕のおとゝの子とも思ひわくましきと云也源氏の子ならは不可有着服故なり

なにことも思ひわかぬ　秘 玉かつらの返答　夕霧さへ分明になきなれはましていかゝすへきぞとなり

思ふ給たとられ　弄 たとるとは物の心を思ひわかんとする心なりまとふと云心にはかはるへし迷ふは一向にまよふ心はかりなり　聞 思ひわかんとする所まても入たらぬ心なり

かゝるついてにとなり　夕霧のよきついてと思ふなり

らにのはなの　河 しらにの花とあり紫蘭むとはぬる字をは假名にはいつれをもにを用るなり古今物名部の下に見えたり　花 らにとかける一本ありらんは物名にらにとよむなり又一本しらにとあり紫蘭なり　弄 蘭らんとよむへき歟一答物名の時はらにとよめともつねにはらんといふへき歟但書本によるへし　秘 らんしらにの說諸本異あり拾遺愚草物名はんひとはしめはよめるをはにひとのちにあらためたるなり假名の習にはぬる字をはに文字にてをくるなりしをんしをにの類なり

これも御らんすへき　弄 服衣の然にや歌に見ゆ兄弟の心なり春蘭夏蕙なと名のかはるを蘭兄蕙弟と用る事あり其故をいへり　秘 蘭の類あまたあり蘭兄蕙弟といふ事あり兄弟の事にとる也秘如此　紫のゆかりを云る歟　私云春蘭夏蕙秋芝冬蓀といへり

皆一種なり云々蘭は藤はかまと訓すれは服衣の藤衣のかたにとりなせる歟歌の心はさに見えたり

とみにもゆるさて　夕霧の此蘭をしはし手をはなたぬなり

うつたへに思ひもよらて　うつたへとはやかてと云心也うちつけ同詞也　忠見家集「春雨はふりそめしよりうつたへに山を綠になさんとや見し　蜻蛉日記うつたへに秋の山へをたつね給ふにはあらさりけり　藐姑射刀自物語にうつたへに御こゝろはいなみの丶いなみきこゆるにも　今案うつたへにといふ詞うつたひにとゝいへる心もあるなりよみやうによるへきなり　聞うつたへには一向にといふ詞なり「松かねを磯への波のうつたへにあらはれぬへき袖のうへかな　これはうつ度にや　秘うつたへに總してはひたすらになと丶云心なり一向にの心なり磯への浪のうつたへにの心はうつ度にと云義あり如何爰の心は一向に思ひもかけすしてとり給へるなり河海說如何

御袖をひきうこかし　玉かつらの袖を夕霧の引うこかすなり

夕霧 おなし野の露にやつるゝ藤はかまあはれはかけよかことはかりも　河同し野の露にやつるゝとは玉鬘與夕霧共に祖母の服にやつれたる心なり　花藤はかま藤衣によそへたるなり　弄蘭こゝにては藤衣のこゝろはかりとみゆかことは少事なり　秘上句三條宮の御服を同しやうにき給へるを云なり藤はかまは藤衣の心ありかことは誓言なり　こゝの心は只少計といふ心なり

みちのはてなる　河「あつまちの道のはてなるひたち帶かことはかりもあはんとそ思ふ秘同　花かことはかりもと云る歌の末の詞にかけていへる也聞弄歌の心面は誓によせて下はすこしもあはんとよめる也あはんといへる心に夕霧のゝ給ふ也

返玉鬘 たつぬるにはるけきのへの露ならはうす紫やかことならまし　花後撰「むさし野は袖ひつはかりわけしかと若紫はたつねわひにき　今案はるけきのへとは武藏野をいへり歌の心は玉鬘君夕霧と連枝のゆかりならてはるけきのへならは紫のうすきゆかりをかこちはへるへきにはるけき中にてもなき程にかこつへき事はよも侍らしと玉鬘君のいひのかれ

たる歌の心はせなりおもての事をかくしてうらをいへる歌なり下の詞にかやうにてきこゆるよりふかきゆゑはいかゝといへるにて歌の心はきこえ侍るなり　秘此歌花鳥の義も面白歟玉かつら夕霧は此程まては兄弟なりされは同野と云へき程もなきとなりはるけき中にてもなき程にかこつへきよしもなしといひのかれたるなり又此義は玉鬘と夕霧との中を能尋ぬれは兄弟には非すはるけきのへなりされとも又はるかによそ人といふへき事にはあらすうす紫はそのゆかりは有へしとなり實はいとこなる故なり　弄此歌の心は玉かつらと夕霧と能尋ぬれは兄弟ならす故にはるけきといへり薄紫とは實にはいとこにてそ有へきなり遠きゆかりなれは薄紫といへり歌の心たくみ也花鳥又面白なり

秘はるけきは遠きゆかりなり薄紫は兄弟には非すいとこなる故なりかことはかこち草はあるとなり花鳥説よし引歌あり

かやうにてきこゆる　聞みすこしの對面なと也かことはかりもあはんとそ思ふといふをのかれんためにこれよりふかきゆゑはいかゝと玉かつらのおはめきの給ふなり

すこしうちわらひて　夕霧の體なり

あさきもふかきも　秘夕霧の詞なり　弄玉かつらの心にとまる事はあるらんとの給ひまつはるゝなりいかさまはなれたる中にてはなきなり

まめやかにはいとかたしけなき　弄此心如何御宮つかへの心をいふにや又かりそめなれと兄弟と云心にや　或抄にあり愚本無之宮つかへし給はん人なる故に又かりそめも兄弟といふ事をうれしく思ふなり

えしつめ侍らぬ　秘とかく申出すへきにてはなけれともとなり　かやうに申出てからは中々うとみ給はん物をとこめつれ共えしつめぬとなり思ひのふかきさまをいはんためなり

今はたおなし　河「詫ぬれは今はたおなし難波なる身をつくしても逢んとそ思ふ　秘まへにはかことといひこゝにははやいひいてぬれは身をつくしてもあはんといへるなり

頭中將のけしきは　花柏木は玉かつらをおとゝひともしらて心をかけし事なり夕霧はおとゝひと思ひ

てけしきはむふるまひもせさりしかと今内大臣の御女とき〻ひらきてはしめの心に引かへたるなり

中々かの君はおもひさまして　柏木は兄弟としりてから好色のかたはうちおきしたしく申むつはん事をうれしく思ふ體なりとなり

あはれとたに　夕霧の心中をあはれとたにおほしめせなとさま〳〵に宣ふなり

かたはらいたけれと　秘作者の詞なり

かんの君やう〳〵引いり　弄内侍のかみになり給ふ事此所にてはしめて見ゆ兩卷の間なるへし　秘はしめてかんの君といへり内侍のかみなり　私云次の詞に此宮仕をしふ〳〵にといへりいまた尙侍には成給はぬにや但又成給たれともしふ〳〵なるにや尙侍に成給事此所にてはしめてみゆ兩卷の間なるへし　私云此始の詞或抄にあり愚本になし兄の玉かつらは後にも入内して宮つかへし給はす里亭なから尙侍におはせしなり

心うき御けしきかな　秘夕霧の心なり　夕霧のわか心の實々しきは御覽し知らん物をとうらむるなり

いりはて給ぬれは　秘奥へひきいり給なり

たち給ひぬ　夕霧なり

中々にも　夕霧の心なり

かのいますこし　秘紫上なり　河野分のあした同時に紫上をも見たりし事なり

御まへにまゐり　秘源の御前なり

いて給ひて　閑源のとさまへ出て夕霧にあひ給ふなり

御かへりなと　秘玉かつらよりの返事を申さるゝなり

このみやつかへをしふ〳〵にこそ　秘源の詞なり　弄玉かつらの心中には宮つかへをしふ〳〵にも思ひ給はすうへにかく見え給ふなるへし　河私云しふ〳〵は澁々なり難澁の心なり

宮なとのれんし給へる　河練　練習の事なり　弄れんしは兵部卿の好色に調練し給ふ也　秘れんしは念入の調練なり　私云兵部卿宮好色に調練したる人に念頃をつくして宣ふゆゑにさやうに宮つかへをしふ〳〵に思ふかと源の推量なりされと行幸の時主上をみ給ひてはめてたしと玉かつらの思ひつれはもてはなれては思はしなとさま〳〵の給ふな

り
さても人さまは　花 玉かつらを女御后に成給ひてよからんや又たゝ人なとにてやよくおはしますへきいつれにたり給へるかと夕霧の源氏にたつね申されたる也　弄 玉かつらの人さまはいかやうになし給て似合給はんそと御けしきのゆかしさに夕霧の源氏に申給ふなり　秘 夕霧の返答なりいつかたさまにして然るへきそとなり

いみしき御おもひ　秘 中宮弘徽殿に及ふ事は有かたきとなり

宮はいとねん頃に　兵部卿なりみかとにはわさとさるへき仰にてもなければ出立給はんもいかゝと也

わさとさるすちの御みやつかへ　秘 内よりは女御になとなりかたき仰にてもなければ出たち給はんもいかゝとなり

ひきたかへたらん　弄 わさとならぬみやつかへなるに兵部卿宮のゝ給ふを引たかへ給はゝ源氏の御兄弟の中にてうらみやし給はんとなり

さる御なからひにては　秘 源と兵部卿宮となり此御なかにては引たかへかたき事となりさしもおりたちて念頃にの給ふ物をとなり

かたしや　又源の詞　秘 源の返答難義なる事となり
弄

わか心ひとつ　秘 わか實子にてもなきとなり

大將さへわれをこそ　秘 鬚黒なり　ひけ黒の實父内大臣よりも源をうらむるとの給ふなり

かゝるてとの心くるしきを　秘 かやうのくるしき事をもかけはなれてよそに聞へき物を我子のやうにし給ふて今は後悔なるとなり

かの母君の　花 夕良の事なり　聞 夕かほの上の事を源のの給ひいたす也此段はさもなき事をつくり出しての給ふなり仍つきつきしきといへり　私云案之すへてかゝる事のといふより夕良上の事をの給ひ出す詞なりかのはゝ君のあはれにいひおきし故に我子のやうにしたるからと人々の恨をもおふなり總別にかゝる事の心くるしき事をもしらすかほして有へき事なりとの給ふ詞なりさて玉かつらゆゑ人の恨をおふは結句前にしらぬかはしたるよりはおとりなりとの給ふなりみなつくり事をの給ふなり

かのおとゝはた　秘又ちゝおとゝの引とめ給へき様もなきとなり　玉かつらの實父内大臣の事
こゝに物めかすとて　源の玉かつらをもてはやし給ゆゑ實父内大臣も人めかし給なとゝの給ふなり
つき〳〵しく　つくり事なる故にかくいへり
人からは宮の御人にて　河玉かつらの君螢の宮にたくひてはよかるへしとなり　花兵部卿宮の北の方なとゝいひてよかりぬへきとなり　秘眞實は兵部卿宮の家室にて可然となり　聞前に夕霧の玉かつらの人さまをとひし行末なり猶源の詞なり
いまめかしう　玉かつらの體を源のほめ給ふなり
宮つかへにもいとよく　秘褒美しての給ふなり
おほめかしからすはか〳〵しくて　聞分別なともありさるから何事もかひ〳〵しきかたもたらひたるとの給ふなり
たかふましきなとの給ふ　是まて源の詞なり
けしきのみまほしけれは　聞夕霧のおもひ也　秘夕霧の源の心を見んとて申さるゝなり花
とし頃かくて　秘夕霧の詞なり
御心さしをひかさるにこそ　秘源の心なとかけ給よし人の申となり花弄聞
かのおとゝも　秘内大臣なり弄
大將のあなたさまのたよりに　弄鬚黒なり　秘大將の內々申さるゝをも父おとゝは此おもむきの返答をし給へるなり　聞ひけ黒の内大臣の方へたよりして申給にも源の御心をはゝかるやうの返答ありしよしきゝしとなり
うちわらひかた〳〵　源なり　秘かた〳〵といふより源の詞なり
宮つかへをも何事をも御心ゆるして　秘實父の許諾にてこそしたかふへけれと云へり聞同　花是より内大臣の申さるゝ事を源氏に夕霧のかたり申さるゝなり　私云此花鳥の義如何　秘の義に随ふへし
女は三にしたかふ物にこそ　河三從婦人從人者也幼從二父母一嫁從レ夫々死從レ子禮記にあり　秘禮記に婦人は從レ人者也幼則從二父兄一嫁則從レ夫々死則從レ子註云從とは謂レ順二其敎令一云々　花儀禮に云く婦人有二三從之義一無二專用之道一故未レ嫁從二父母一既嫁從レ夫々死從レ子故父者子之天也夫者妻之天也今案女子は幼時は父に随ふといへとをすてにとし

たけたるうへはよろつ源氏君の御心のまゝならん三従のついてをたかへしと内大臣ののたまふとなり源氏君のたゝなるましきおとゝもとりおき給ふ心なり　弄此段心得かたき所なり三従の義ならは源氏も養父なれは玉かつらのしたかひ給ふへけれとも又實父あり養父の心にまかせ侍らは次第たかひぬへしとの給ふなりあはれといふ詞此心なり

私云此段花鳥弄花等の義如何

ついてをたかへておのが心にまかせん事は　河次第をたかへてなり次第とは幼嫁老時によりて人にしたかふなり　秘今は内大臣の儀にてそしたかふへけれその次第をたかへてはおのか心のまゝにはいかゝとなりおのかとは源のみつからの給ふなり　聞是は源の玉かつらと實事なき事を心にこめての給ふなりすてに内大臣のおしはかりのことく實事あらは夫なりさらはわかまゝにてそせんする事なれともさもなき事なれはとは實父次第にてよかるへしとの給ふ詞なり　秘聞書等の義尤然へき歟

うち〳〵にも　聞又夕霧の詞なり　花是は源氏のうち〳〵にもおもひ人ともあまたあるによりて玉かつらの君をとりたてゝ物めかし給ふ事はさすかにてすてかてらに我にゆつりつけ宮つかへせさせんとし給ふと内大臣のうしろ言に申給ふを夕霧のかたり給ふなり　弄うちにもとは源氏の六條院の内にもの事なりおもひ人たちおほき事なり或本うち〳〵にもとあり同心なるへし　秘内大臣の心なり紫上其外の人々なりおもひ人たちおほき事也

私云此段花鳥義然へし又うち〳〵とは内大臣の内内にてかくのことくの給といふ詞なるへし

やことなきこれかれ　紫明石上なとなり

すてかてらに　此段花鳥の義然へし前にあり

おほそうのみやつかへ　秘かく宮つかへに出したて給ふ事は玉かつらの下心をはおしこめてし給ことく内大臣のかたにはの給ふなり

らうろう　河牢籠　花牢籠なり獣をは牢にこめ鳥をは籠にこむるこゝろ也こゝの心もおしこめたる義なり又人の自由ならぬ事をもらうろうと云その心にはあらぬなり　弄牢籠鳥獣をこめておく心なり又は下の心をおしこめたる義なりこゝにては此義相叶へり或本ろうせん是又可然なり　秘牢籠なり

鳥を籠に入れ獸を牢に入たる如しとなり　私云お
ほそうの宮つかへとは尚侍は不断禁中に伺候せね
ともなる職なり玉かつらの君にても見えたり又女
御覧ぶなとの樣に寵愛をかうふるへきにてもなし
仍おもてむきをは尚侍になし奉りて里亭におきて
源のわか物にせんとし給ふとの内大臣かたの推量
なり牢籠の心おもよく相叶へき歟
かしこくかとある　源の色々才覺をめくらし給ふと
　内大臣の思ふとなり
よろこひ申されし　弄　眞實は悅喜にあらす或本よろこ
　ひの字なし河内本歟云々　私云よろこひの字三本に
　あり
いとうるはしきさまに　夕霧のうるはしきさまなり
けにさは思ふらんかし　秘　源の心なり聞　さやうに
　こそおしはかるらめと源もおほすなり
まがまがしき　源の詞　河　枉言　花　源の思ひ人に
　し給ふなり　秘　曲なり正直になきとなり　弄　曲心
　なり邪正なり
いたり心ふかき御心ならひ　秘　内大臣の心ならひと
　なり　世間に心をまかせなり聞書

あらはなる事ありなん　證據のみゆる事あるへしと
　の給ふなり
おもひくまなしや　花　物のかくれあるましき心なり
　河　後撰「いつかたに立かくれつゝみよとてか思ひ
　くまなく人の成行　秘　かくるゝ所もなしとなり
　聞　思ひかひなきとなり　九　おもひくまはいたらぬ
　かたなきまて人の思ふと云ふ心なり　私云此義可
　然歟又わか心にはすこしくまある事はなしと源の
　の給ふ詞也
御けしきはけさやかなれと　秘　夕霧の心なり　源の
　口さはやかに仰らるれども猶うたかはしく夕霧の
　思はるゝとなり
おとゝもさりや　源の心なりされはこそわか玉かつ
　らへ心をかくらんと人の推量するかと心中に思ひ
　給ふなり
あんにおつる事も　人の推量のことく玉かつらと實
　事なと有てはと我心なから源のおほすなり人の推
　量にあふ事を案におつるなと云なり
ねぢけたらまし
　かのおとゝにていかてかく心きよき　内大臣へ源の

心さよきさまを知らせんとおほすなり
けに宮つかへのすちにてけさやかなるましき　玉かつらにぬしなと定めたまふてこそ心さよき様もあらはれめ宮つかへに出たち給はゝ何のけちめも有ましき也其さまを内大臣の思ひ給へるを源の心におそろしく思ひはり給へると思ふなり前にある大そうの宮つかへといふ所にあへり
かしこくも　秘人はおそろしくも思ひよるとなり
むくつけく　弄おそろしきなり
御ふくなとぬき　秘八月なり
月たゝは　秘九月はいむ月なれはなり花
十月(カミナツキ)はかり　弄點之
うちにも心もとなく　秘内には引たかへなとし給てはとおほすによりていそきたまへるなり
きこえ給ふ人々はたれも／＼　秘兵部卿宮大將なとなり
心よせのよすか／＼　河従(ヨスカ)日本紀　資同　便　玉かつらのけさう人たちなとのつたふるよすかゝよすか共なり
よしのゝ瀧を　弄引歌河海にあり　河「手をさへてよしのゝ瀧はせきつとも人の心はいかゝとそおもふ秘聞同
おの／＼いらふ　文つたふる人々の返答なり
中將も中々なる事うち出て　秘夕霧なり前にありし事なり
たはやすく　秘夕霧のさまなり
めやすくもてしつめ給へり　これまて夕霧の事をいふなり
まことの御はらからは　柏木以下玉かつらの實の兄弟は源の御あたりなれは夕霧のやうにはまゐりちかつかぬなりさて心もとなくそおもひけるといへり
頭中將心をつくし　柏木なり
うちつけなる御心　兄弟と聞え柏木の假に文なとたへたるをいふなり
との〻御つかひにて　秘内大臣よりの御使にて柏木參り給へるなり
なほもていてす　秘頭中將は實兄弟なれといまた忍ひ給ふなり　聞柏木といまた兄弟分の面むきのよし通しはなきなり内々は申かよふときこゆ

月のあかき夜かつらのかけにかくれて　河月中有河
河水上有桂樹高百丈下有一人斫樹姓呉名剛父西河
人也年十六（六十イ）得仙長生類名苑　花「夏なれと夏ともし
らて過る哉日の桂のかけにかくれて惠慶集　今案
此桂のかけはまことの木の陰なるへし　弄　非月桂
庭の桂木なり　庭の桂の木なるへし　聞
みき〻入へくも　秘　はしめはへたて給か今はさもな
きなり　聞　蘭他人にてけさうたちし時は中々あた
り近き事もかなにさりしなり今は兄弟としり給へ
はちかく〳〵しき冴なり
みつからきこえ　玉かつらの柏木に直に物の給はん
猶つゝましきなり
宰相の君して　弄　玉かつらの方にありし女房なり
秘　さふらふ人なり夕良上のいとこなる歟
なにかしをえらひて　秘　柏木の詞なり
みつからてそかすにも侍らねと　柏木の卑下しての
給ふ事なり
たえぬたとひも　河　兄弟事也可勘　爲君世々爲兄弟
又往來生未了因 東坡寄子由 秘　兄てとなり聞同

こたいの事　秘　めつらしからぬふるき事なり弄聞
物しとおもへり　ちと無興したる體なり
けにとしころのつもり　秘　玉かつらの返事　聞　玉の
詞也兄弟なからうと〳〵しくて過つる年頃のつも
りをも申うけたまはらはやと思へともとなり
かくまてとかめ給ふも中々うと〳〵しき　さやうに
時儀たらんは公界むきにてこそあれ兄弟なれは心
やすくあひしらふのよしなり　秘　かくの給へはか
へりてへたてかましきとなり
なやましくおほさるらん　秘　又柏木の詞
よし〳〵けにきこえさするも　理りを申も却て心な
き事よし〳〵申さしなと少うらみたる體なり
いとめやすし　柏木の體の然へきとなり
まゐり給はんほと　秘　いつ頃まゐり給へきそとなり
内府よりの給ふこと葉なりいつ頃入内の事ともた
しかにしり給はぬとなり
うち〳〵の給はんなん　内々にて我にしらせ給へ
となり
なに事も人めに　秘　内大臣は何をも人めをはゝかり
給ふとなり　聞　よろつ源へまかせたてまつりてお

く故さし出かましきあつかひもえせす心もとなきよしの給ふと柏のかたり給ふなり
いてやをこかましき　猶柏木の詞なり前に艶書なと玉かつらへおくりし事をいひ出るなり
いつかたにつけても　秘頭中將詞兄弟といひ又くはしき事をはしらて文なと參らせし事かた〳〵にとなり弄聞
まつはこよひなとの　秘へたてなくうち〳〵へ參りぬへき物をとなり　私おもてむきにおひしらひ給ふをうらみたる詞なり
北おもてたつかたに　河北面内々の方なり南面を晴の方とする故なり　秘内々の方なり
君たちてそめさましく　秘宰相なとこそ物へたて給へけれとなり　めしつかはるゝ女房なとに對面あらん事かおよひなしなとゝうらむる詞なり
しもつかへなとやうの　河下仕
かくなんときこゆ　聞柏木のゝ給ふさまを女房の玉かつらへ申なり
けに入きゝを　秘つもりたる事をも申たけれともなはさりにてはなきとなり　聞源氏の御かたに玉かつらのおはしなから兄弟なとゝ俄にむつひ給はんはうちつけなるやうにあらんと入きゝをはゝかりて對面なきよしをすく〳〵しうの給ふなり
まはゆくてよろつおしこめたり　玉かつらの理をせめての給へは柏木の今すこし申さんと思ひつる心中もまはゆくて殘したるとなり　むもれいたるとはおもふ事の心中にうつもれてあらはれぬこゝろなり
すくよかに　秘點之
柏木 いもせ山ふかき道をはたとらすてをたえのはしにふみまよひけん　花柏木の玉かつらをいもうとゝもしらて文をやりし事をふみまよひぬるとよめり　弄兄弟の事をたえの橋をふみまよふといふ戀によせたるはかりなり別義なし緒絶橋國は奥州也ふみまよひけるよと歌より詞にかけつゝけ詞より歌につゝくる物語の體なり　秘いもせは兄弟をいへり兄弟ともしらて文なと參らせたるよとなり　をたえの橋には心なしふみまよふと云より戀によせたるはかりなりふみまよひけるよと歌より詞に云つゝくるなり　古今「つの國の難波おもはす山しろの

とつにあひみん事をのみこそといへり名所二つをよめる此贊例なるへし聞同　河いもせとは日本紀に妹兄とかけりいもうとせうとなり伊弉諾伊弉冊尊兄弟夫婦となり給ひしより夫婦をいもせといふなり頭中將玉鬘を舊來は兄弟の道とはしらて怨しつるといふ歟　後撰云はらからたちのなかに事か侍けん讀人しらす「君とわれいもせの山も秋くれは色かはりぬる物にそ有ける　はらからの中にいかなることか侍けんつねならぬさま見えけれは讀人しらす「むつましきいもせの山のなかにたにへたつる雲のはれすも有かな　いもせ山とは紀伊國いもせ山とて吉野河へたてゝ有と云々　萬葉云「背の山にたゝ(直)にむかへる(向)いも(妹)せやまことゆるす(許)てもうちはし(打橋)わたす　又云「おほなんち(大己)すくなひ(少)こなのつくりたるいもせの山はみれはかなしも
後拾遺道雅卿「みちのくのをたえの橋や是ならんふみゝふますみてゝろまとはす　業之皆々近代歌也　證歌如何
業平「春日野の若紫のすり衣しのふのみたれかきりしられす　是は河原左大臣のしのぶもちすりの歌を本歌として詠と云々最近代の歌を證歌に用例也　業平元慶四年卒五十六　河原左大臣此年六十二歟　寛平十七年八月十五日薨七十七聊先達歟

よなとうらむるも入やりならす　花　柏木のふみまよひける事は我心からの事なり入やりならぬ事といへり

返事　まよひける道をはしらていもせ山たとくしくそ誰もふみゝし　花　玉かつらの返事ふみまよふとはしらすおほつかなく思ひなから文をみしとよみたまへり　秘　なにゆゑとももしらさりしとなり　聞　心あらはなり　弄　誰もふみ見し　文によせたり　九　我もといふへきを誰もふみ見しといへる尤面白と云々

いつかたのゆゑとなん　花　柏木は兄弟と思ひて文をたひたりしやらん又何事ゆゑとも思ひわかさりしとなり

何事もわりなき　弄　女房の玉かつらの心をとりおはせて頭中將につたふるなり　聞　宰相君のいひつたふるなり　私源氏の御心を思ひはかる故に兄弟へやうにもえし給はぬといふ歟

おのつからかくのみも　花　今よりはかやうによそよそしくあるましきと玉かつらのゝ給ふなり　秘　宰

相君の云なりかく疎遠にては有はつましき事と也
聞賓の兄弟なれは速々にかくはうと〳〵しくは有
はつましきとなり
よしなか居し　河「住吉とあまはつくともなか居す(いふイ)
な人わすれ草おふといふなり　秘柏木の詞引歌な
し
やう〳〵らうつもり　河漸勞　漸々功勞をつまんと
なり　秘奉公の勞なり
かくてんもさて　河恪勤　聞奉公する事なり是も聲
にかけり此悉聲をおまたところかけり　聞蘭(ラン)牢籠(ラウロウ)
練(シン)したる　恪勤(タヽスツトム)なとなり　弄或本かことをもて
やすく聞ゆる歟聞恪勤と書たる心如何　一勤奉公
する人をいふ今も力者かくこなと常にいふ事なり
いかてかゝる　此柏木も人體可然なり夕霧なとかた
かた容儀すくれたるを各(名イ)といふなり
大將はこの中將　右近大將右近中將なり　鬚黑右大
將柏木頭中將なり　うつほ云右大將藤原かねまさ
あて宮をいかむとおほすちゝおとゝよき御中なり(らイ)」
されとおやにはきこえたまはてあて宮にきこえ給
ふへき事をおもはすに左大將殿の中將此御つかさ
の中將なりけり御中いとよくかたらひ給ふものに
もろともにもの見給てあそひなとし給ふ　今案鬚
黑の大將も柏木の中將もともに右のつかさなり
人からもいとよく　大將をいへり
したかたなるを　河したたち同事なり
なとかはあらんと　聞内府の心なりちゝおとゝは此
鬚黑をむこにても可然人とおほすなり
かのおとゝの　秘源なり
さるやうある事にこそ　聞源の心さし給故こそと内
大臣の疑推なり　聞源の玉かつらに御心かけ給へ
しと内大臣の思ふなり
この大將は　聞鬚黑の系圖をかけり
東宮の女御の　河承香殿女御春宮の母女御なり　私
云春宮は後に今上なり
おとゝたちを　源内大臣につきてのおほえなりと鬚
黑を云なり
式部卿宮の御おほい君　秘紫の上の兄弟也　弄おは
い君は嫡女なり　鬚黑の本の北の方は式部卿宮の
嫡女なり　河大君嫡女の心歟只今長大之義歟(久イ)業平
朝臣か女を閑院大君閑院今君と集にもあり

みつよつかこのかみ　髭黒よりも北方はとしまさりなり
おうなとつけて　河嫗老嫗心なり淸少納言枕草紙すさましき物しはすの月夜おうなのけさう　聞おうなは老女といふ心なり
そのすぢにより六條のおとゝ　秘紫上のあね右大臣の本臺なれは是をおしのけてはいかゝと源は思ひの給へるなり
色めかしうちみたれたる所なき　髭黒のさま實々しき人なるへし
かのおとゝも　秘實父也
女は宮つかへを秘　玉かつらの心の中也宮つかへは物かけにおはしたりともり聞給なり　私髭黒の内内のたよりに聞給へは内大臣は有ましき事の樣にはの給はす又玉かつらには宮つかへを物うけなりと聞ていよ／＼心いられするとなり
たゝ大とのゝ　秘源なり
まことのおやの　內大臣さへ内々同心ならはとなり
この辨（典イ）のおもと　秘此人右大將にあはせしとなり
花玉かつらの女房達なり髭黒は此辨の局をかたらひ給ふなり　弄女房なり玉かつらの方にあり
九月（ナカツキ）にも　弄
御うしろみとも　艶書のつかひする人々を云
猶たのみこしも　秘八月なるへし髭黒の文の詞なり
秘此義如何九月の事なるへし末の詞に月たゝはとあり十月にならは内入有へき事なり歌にても九月ときこえたり
（髭黒）かすならはいとひもせまし長月に命をかくるほとそはかなき　秘我身數ならは九月は人のいむ月なれはいとふへきを此月たゝは内へ参り給へき故にいみある月をもはゝからて一すぢにいそぎたるなり
河九月をは世俗に憚て歟又玉鬘巻に季のはてなともありされとも數ならぬ身なれはいとはすといへり十月には内まゐりと定められたれは九月はかりに命をかくるよしなり
月たゝはとある　秘十月に内へ参り給事をよくきゝ給なるへしとなり
いふかひなき世は　秘宮つかへに出給ふ事　兵部卿宮の文の詞なり
（螢兵部卿）朝日さす光を見ても玉さゝの葉分の霜をけたすもあ

らなん　秘花鳥義ありはやく消やすき身なるをよく
はからひ給へとなり又の義は內にさふらひ給はゝ
天顏にふれてましますへきとなりされは朝日さす
光をみてもとはいへりわかむすほゝれたる思ひを
は忘れ給をとなり此義可然なり　「玉さゝの葉分
における白露のいま（いまさらきえんイ）いく世へん我ならなくに　今
案玉篠のうへの霜は朝日の光にはきゆへき物なり
そのごとくなるわか身にてあれは消せぬさきには
からひ給へといふ心なり　「篠の葉におく霜より
もひとりぬるわか衣手そひちまさりける（此たゝい下に付紙にあり）
り私云秘の義然へし又引歌なし聞書には引歌あり
弄天子へ參り給ふへき事なり猶忘れ給なとなり
いとかしけたる下をれの　花さゝの葉のしたをれた
るなり　秘篠をいへり歌にゆつりたるなり　河悴
焦　憔悴
御つかひさへそうちあひたるや　花髯黑の御使と兵
部卿宮の御使と行あひたるなり聞同　秘兩方の御
使の行あひたるなり　九禪同　私云諸抄此義あや
まれる歟如何螢兵部卿は好色の道風流をたて給ふ
人なりされはかしけたる玉篠に霜のおきたるに御
ふみをつけ給へりそれをおとさすもて參れるは御
使（文イ）も兵部卿の宮の御心に相應したるといへりそれ
をうちあひたるやと草子地にかけりかた／＼の御
使の行あひたるとみる義古來の事なり不審して紹
巴にも直に相談せしなり此義におきては愚案なり
とも此義可然歟能々可ニ尋決一なり
式部卿の宮の左兵衛督　秘是も玉かつらに心かけた
る人なりこゝにてはしめて左兵衛督の傳をかけり
とのゝ上の御はらから　紫上の兄弟といふなり
（左兵衛督）忘れなんと思ふ物のかなしさをいかさまにしてい
かさまにせむ　花義孝集「わすれぬをかく忘るれと
忘られすいかさまにせん　秘事か
ら面白き歌なり　箋義孝歌を聊引なほすなり　河
「明ぬとて今はの心つくからになといひしらぬお
もひそふらん　私云此歌をひけり如何
おぼしたえぬへかめるを　秘內へ參り給なはかやう
の事かきたえぬへきなりいまを名殘なるへきとな
り聞同　花あなたこなたの御文ともあるを玉かつ
らの君何ともおほしたゝて御返事のなきをさうさ
うしきといふなり　私云秘の義尤然へし

兵部卿宮返玉鬘

こゝろもて日かけにむかふあふひたにあさおく霜をおのれやはけつ　秘兵部卿の宮はかりへ御返事あるなり　花此歌の心は日をは君にたとふるによりて葵は心もて日にむかふ物なれと朝おく霜をは我とはえけたぬならひなり玉かつらの君我身の宮つかへの事心にもあらぬ事なるうへけたすもあらなんとかてち給へとけたんけたしもわかまゝならぬといふ心なり　秘けたすもあらなんとあるをうけたり葵は必日にむかふ物なり衛足(エイソク)とて身をたもちたる物なりされと日にむかふとて霜をはえけたぬ物なりそのことく玉かつらの宮仕に出たつ事も我心からなる事にてはなきなり人まかせなるをいへり　弄葵花の自心向日も霜をおのれとはけたすとなり玉鬘の身を我とはいかゝはからはんとなり　河傾心比葵藿朝夕奉堯曦賦百詠　蘘(襄イ)荷依陰時藿向陽綠葵含露白薤負霜潘安仁閑居賦　葵は日にむかひて葉をかたふけて根をかくす物なり　孔子曰鮑莊子之智不及葵葵能衛其足葵向日傾葉蔽其根文集第十三　河イ本鮑子為齊使則足彼留孔子聞曰云々前にあり文集第十三　聞衛足の葵は二葉にあらす云々

みつからはわはれをしりぬへき　秘我は心からにてはなきとあるを宮はうれしくみ給ふなり

露はかりなれは　聞兵部卿宮の心中なり

をんなの御心はへは　花女の御心はさためて宮にはなひき給ふらんとおもひたちは思ひ給へるとなり　弄玉かつらを女のほんと定め給ふと云々紫上は又最上なり中々いふにおよはさるへし此物語に所々に有へし　秘この君をなん本に云々　花鳥いかゝ玉かつらの心はへをほんにすへきとなり紫上を第一にして次には玉かつらを女の本にはすへきかといふ心なり此物語に此よし所々に見えたり

おとゝたちは　源氏と内大臣となり

岷江入楚第三十一　眞木柱

卅七歳　太政大臣

十月比右大將依辨君媒介見參西對姫君事

三日夜御消息爲源氏君御沙汰事

十一月內侍所女房參內侍上御方事

大將留守之時源氏君渡內侍上御許物語給事

內侍上可有入內間事

大將本臺煩物氣事 式部卿宮御女眞木柱姫君の母儀也

父宮欲奉移大將本臺於我宮事

大將與北方物語給事

大將欲出尙侍許之時北方懸火取事

翌朝大將送又出尙侍許陳先夜不參子細事

木工君與大將君贈答事

大將出尙侍許事

大將還故里見女君達事

式部卿宮奉渡大將北方事姫君書歌據眞木柱事

同宮北方怨源氏事

大將參式部卿宮恨申給事

大將伴男君十歳八歳還故里事

卅八歳同

正月尙侍參內事 承香殿之東面爲曹司

男踏歌事

大將候職曹司之時兵部卿宮讀歌稱自大將之山奉

尙侍曹司事

其夜主上渡御尙侍曹司事

尙侍退出事

主上有御消息尙侍申返事給事

二月六條院送消息於尙侍事　有返歌

源氏君彈東琴歌風俗給事

三月渡西對見山吹花事

鴨子送尙侍許事

大將書返歌事

十一月尙侍生男子事

柏木頭中將宮參尙侍許事

近江君振舞事

詞云秋のゆふへたゝならぬにも云々これは秋の事
を思ひいたして卷の末にかける也

眞木柱　或被柱　花 以歌爲卷名秘
河卷名今はとて宿かれぬともなれきつる眞木の柱は我をわするな　私云詞にもありかの眞木柱を見給にとある詞にて付たる卷名歟　花 源氏卅七歳の十月よりあくるとし卅八歳の秋までの事此卷にみえたり又竪の並也　弄 源卅七八歳の事也冬より明年秋に至るなり但十一月の詞あり此卷の始に玉鬘髭黒の室に成給ふ心見えたり
秘 源卅七歳十月より卅八の秋までの事有但末に十一月にいとおかしきちごをさへいたき出給とあれは十一月までの事ある歟　聞 歌にはまきのはしらとあれとも卷名はまきはしらなり　私此卷の末にいたりて案するに此卷は源氏卅八歳の十一月までの事をかけり玉かつら男子誕生の事十一月なりさて末に秋の夕とあるは近江君の事をいはんとて前にありしことを思ひ出てゝかける段なりされはいかなるをりにか有けんとかきて末に秋の夕暮とありたしかならすかきいてたるは過去たる事を今いひ出る故なりまさしく霜月に男子むまれたる事をかけるをすてゝ末にかたり出たる秋の夕をたてゝいはんや尤十一月までの義然へし猶奥に注す

うちにきこしめさむこともかしこし　花 是よりは髭黒の大將を辨のおもとか心しりをして玉鬘の君にかよはしそめたる事なり尙侍に成給ていまた入内なともなきにかゝる事のあれは内にきこしめしては御とかめも有へけれはしはらく人にもらさしとおとゝをはしめて御かたの人々はいさめきこえ給ふと也源氏君も內大臣もしり給はぬ事なれはあらはにいつの月日とは物語にしるしとめす辨のおもとならてはしるましき事なるへしかやうのかきさま物かたりの妙所也よく〳〵思ひわくへき也　弄 源氏君の心なり　秘 玉かつら髭黒大將にあひ給へる事をいへり花鳥にくはしくみえたり　聞 同

しはし人に　秘 源の心中なり世界へひろくしらせしと也公私のため然へからさるとなり

いさめ給へと　源の諫る也

さしもえつゝみ　髭黒の體也さしもはさうしも也

ほとふれといさゝかうちとけ　秘 大將の心なり玉かつらの心に大將の御心の思ひの外なることとおほしつゝうちもとけ給はさるなり　聞 玉かつらの體

也
いみしうつらしと　髭黒の心なり玉かつらのうちとけぬをうらむるなり
みるまゝにめてたく　秘大將の心なり此人を自然兵部卿宮によことられてはと思ひたまふなり
いし山のほとけをも　河石山寺在近江國瀬多南一説聖武天皇御宇金鷲仙人建立云々　勘付關屋卷並うつほの物語云仰いとうれしきこと也かし此事をしるし給へれはますらをはいたゝきにいたゝきたてまつらん云々　花石山の觀世音を佛といふ菩薩をほとけと云事玉かつらの卷にしるしをはりぬ髭黒の大將石山の觀音に玉かつらの事を祈り給へるなるへし
女君のふかうものしと　秘玉かつらも心よくも思ひ給はさる故に出頭もなきなり　花玉かつらの辨のおもとをよからす思ひ給へるによりてえましらはてこもりゐたるをいふ也聞同
けにそこら心くるし　河多日本紀幾多同　玉かつらへ心かけし人々のうへをいふなり
心あさき人のためにそ　河心あさき人とは髭黒大將の事をいへりいつはりかさしてひたおもむきに此大將はきすくなるまめ人とみえたり仍心あさきといふ歟かやうなる人をは正直とて佛神のうけ給へきにや兵部卿宮は心ふかくといへり或本には寺のけんもなひかしけんかしとあり但證本ことにあらはれけんかしとあり　花石山寺の佛の驗德もあらはれたるといふなり　弄髭黒のもとの北方の物のけを祈りしは成就せす玉かつらの事を念せしは成就せしとなり北方の心は物のけしうねきにあはせて玉かつの心をあさき人とかけりすへてわくらかに心ふかゝらぬなるへし　秘河海云心あさき人とは髭黒を云といへる義あり是も面白し又の義は髭黒の本臺の北方の物のけをさま／＼祈り給ひしかとも其しるしもなかりしなり其故は物のけのしうねき故なり今此玉鬘の事を祈り給へるには早く成就するなり是は玉かつらは心あさき人なる故に利生もすみやかなるとなり此時は心あさき人とは玉かつらをいへり此說可然歟　箋曰心あさき人とは辨のおもとか事也此人聊爾なるみちひきか高名にて石山の利生をあらはしたるといふなり　私曰以

上秘此義ハ義三光白筆て首書にあり　私曰案するに此三義の內愚意は猶河海の義に心ひくなりおとゝも心ゆかすなといへるは源の事なり玉かつらも心に叶はぬ源の心にも髯黒をは心ゆかす思ふとなり詞のつゝき髯黒を心あさきといへる義可然よし存す如何又弄花に注する分愚意不庶幾如何猶可聞之

おとゝも心ゆかす　右大將の北方紫上のあねなる故も有へし　秘此もの字は源も玉かつらも本意にてはなきとなり

いふかひなきてとにてたれも〳〵　秘實父なとはゆるし給ふ也　私云いふかひなき事とは瓣のおもとの聊爾にみちひきそめたる事なれはとりかへされぬ事にてそのまゝゆるし給ふをいへるなり

人のためいとほし　はやく成初たる事なれは右大將のためをもおほす也

きしきいとになく　河儀式　最　無レ二　大將の出入の儀式なりかやうの事をも源のよく沙汰し給へる也源の殊勝也

いつしかとわかとのに　秘大將のわか御方になり

かしてにまちとり　秘いまた本の北方ましませは也

ことつけ給て　聞いまた本の北方おはすれはふとわたし給はん事もいかゝなと源の玉かつらを我方にしはしおきたまはんとのかてつけにの給ふと也

なたらかなる　河平日本紀　功（朽イ）論語　漫（慢イ）同注

おとなく　音なく也

ちゝおとゝ　秘內大臣の御心にはうしろみなき宮つかへよりは大將のぬしつき給ふ事をは然へき事と思ひ給ふなり　私曰實父內大臣は弘徽殿女御なとのさふらひ給へは此事を心やすく思ひ給ふなるへし

こまやかなる御うしろみなき　源氏君涯分うしろみ給へとも母（女イ）おやなときは又心やすき事なかるへし內大臣の心なり

なまほのすいたる　河閃　側尙書　花なまは生也物のなま〳〵しきもこのましからすほのは側なりかたはらなるはたゝしくもなき心なりすいたるは數寄數寄しきなりへつらひかましき宮つかへの心なり

心さしはありなから　弄內大臣玉かつらをねんころにおもへともなり　秘涯（遅イ）分のほどはつゝ（すくゝイ）むへけれとも女御をおきたてまつりて二かたにはいかゝと

思ひ給ふ也　聞内大臣の心には戀に思ふとも女御
の御前をはゝからんと也
けにみかとゝきこゆとも　是は大かたに評していふ
詞なり御門なりとも大かたのやうにあらは本意に
はあらぬ事なるへしされは内大臣のかやうに思ひ
給ふもことはりなりといふなり
あはつけき　河淡付　あはつる同詞也
三日の夜の　弄もちゐなとの儀式いかめしうせられ
たる也　秘嫁娶の三日めなりもちゐなとの儀(祝義イ)式也
きゝつたへ給ひて　祝義の様を内大臣の聞傳へ給ふ
なり
てのおとゝの御心を　秘源の心はかけなから實事な
きよしを父おとゝのきゝあきらめ給ふ也聞同
有かたしとはおもひ　實父内大臣の源の心を有かた
しと思ふ也
かうしのひ給ふ　此段源の心かけたまふ事は人しれ
ぬ事なれとさはありなから實事もなく黔黒にゆる
し給ふ事をおのつから人のいひつたふるといふな
るへし
うちにもきこしめしてけり　秘天聽にも達するなり

すくせことなりける　みかとへ御縁のなきと也
さおはしゝはいも　秘みかとの御心なり女御后にも
とおほしめすよと也　私云此義猶案すへし　案之
里亭に居なから尚侍の職になりなんとのはしめよ
りの源より申され様もありつれは其分なるへし宮
つかへに出たゝす共折々は參り給へとの勅定也
宮つかへなと　花かけ〳〵しきはたと〳〵(えイ)しき心も
ある歟こゝにはなまなさけかましきすちをいふに
やなまははかりなる心也
かけ〳〵しきすち　秘よすかさたまりたりとも時々
は參り給へとなり　聞かけ〳〵しきは物のかゝつ
らふ心なり懸々敷なり風流かたなくてなり尚侍な
れは折々は參內あれとの御心也
霜月になりぬ神わさなとしけく　河十一月神事　一
日供忌火御飯　十日(イナシ)神祇官供御贖物　上卯日相嘗
祭　賀茂齋王遙拜　宗像祭　明日齋院神樂　上巳
日山科祭　上申日平野春日　橋本　當麻等祭　上
酉日松尾梅宮　攣川　當宗　中山等祭　中寅日鎮
魂祭　上(中イ)卯日新嘗祭　中子日大原野祭　中丑日園並
韓神祭　今曉大殿祭　中巳日齋宮鎮魂祭　同日大

極殿祭　中申日吉田祭　同日日吉祭　下卯日東三條神樂　下未日臨時祭　下酉日賀茂臨時祭　同夜御神樂　秘神事の月也内侍のかみの所へすけ以下來て事をいひ合する也　弄神事によりて倚侍の所へ典侍以下來て事をいひ合するなり倚侍は必しも内にもさふらはす一禪

内侍所にことおほかる比にて　花内侍司の中に倚侍典侍掌侍女孺この四等の官あり霜月には女官とも内侍のかみのもとへ參りつとふ事有へし　私勘

内侍所事　又曰賢所(カシコトロ)　内侍所は神鏡のおはします所なり世の始は同殿御坐仍主上朝夕御本鳥(ほとりイ)をはなたす云々　禁秘御抄　垂仁天皇御宇或崇神天皇御宇云々始爲別殿御温明殿近代御春興殿歟是里内義也白川院御云内侍所神鏡飛出欲上天而女官懸唐衣袖奉引留依此因緣女官奉守護云々

大將殿ひるも　髯黑の玉かつらのかたにひるもかくれ居るなり内侍なとの參るに忍ひたるさま也

宮なとはまゐて　螢兵部卿宮也

兵衛督は　秘これも玉かつらに心かけし人なり大將の本臺の兄弟なりされはかた〱にくちをしく思ひ給ふなり

をこかましう　兵衛督の心なり我になひき給はぬ事と妹との事とかた〱かく思ひかへすなり

大將は名にたてるまめ人　髯黑の實人なる事也

あらさりしさま　實々しかりつる行迹に引かへて好色めくなり髯黑のさまなり

女はわら〱かに　河和饒(館イ)　秘にてやかに也

もてかくして　弄和したる體なと髯黑に對して曲もなしとてもてかくすなるへし　秘大將に對しては和したるさまをももてかくして機嫌あしきさまをつくり給ふ也　聞髯黑へうちとけぬ體也

心もてあらぬさまはしるき　秘玉かつらの心ならす大將にあひ給ふとなり此心を源のくはしくは知給ふましきとてはつかしく思ひ給ふなり奥の卷にも玉かつらの心ならさるよしをはめて源のゝ給へる事ある也

おとゝのおほすらん　おとゝは源なり　秘ひけ黑に心なひくやとおほすらんかはつかしきなり

宮の心さま　秘玉かつらの兵部卿宮に心ひくなり

とのもいとほしう　秘源を人のうたかひしも今けか

れさることあらはれぬへきと也
うちつけに　秘うちつけなる事は源の心くせにて嫌
給ひたる也
紫のうへにもゐなしうたかひしよなと　前に紫上
の疑の給へる事有今源のおちゐたり給ふ成へし
いまさらに人の心くせ　弄源氏のみつから心のくせ
をいまさらにと思ひ給ふなり　九源の心なり玉か
つらの事をつねに心にかけて思ひ給ふ心のくせと
なるとなり今さらに人のとは源の我事をのたまふ
なり　秘源の心くせなれは今よりこそ大事なるへ
けれとなり　箋曰人の心のくせとは大將のことを
いふなりくせとは心のくまある人をおほく此物語
にはかけり以上秘　私云此段如何源の年月玉かつ
らに心かゝりし事なれは今さらなる事なとありて
はと用意し給ふ物から猶御心にはなれぬといふに
や猶案へし　重て案之人の心のくせとは源の年月
玉かつらを思ひそめし心のくせなりそれを今さら
に叉いかなる事かと我なから思ひ給へともさても
やとは思ひ人のうちにてやおかんともおほしたり
しほとの事なれは思ひやまれぬをうはわたり給う
てみ給ふとにや
大將のおはせぬ　秘源の御出ある也
女君あやしう　玉かつらの體なり何とやらんはつか
しく物おもはしきなるへし
すくよかなるをりもなく　玉かつらのなやましきさ
まをいふなりすくよかならぬは勇健ならぬ心也
とのもよういことに　源の前々のやうにみたれ給は
す實々しきさまなり
けゝしきさま　河賢々也　聊うやまふ心なり　弄つ
ねにの給ひたはふれ給ひしに似すかと〳〵しき御
氣色なり聞　秘かと〳〵しきさま也
すくよかなるよのつねの人　花ひけくろの大將の事
也　秘此程大將にならひて今源にむかへは別の物
にみゆるとなり　私云髯黑の實々しく風流めかぬ
よのつねの人のあうつしには一入源氏の君別物に
みゆへし
おもひの外なる身　花玉かつらの思ひ給ふ心也
すこしのそきつゝ　源の木丁のうちをみ入るゝ也
いとおかしけに　玉かつらのさまなり
らうたいてとのそひ給へるも　九懐妊の事なり云々

聞同
よそにみはなつも　秘源の心なり我物にしてもみるへき物をと也　私云此義諸抄に沙汰なし此巻の末に十一月にいとおかしきちごをさへいたき出給ふとあるは明年の事なり月數も相違歟只玉かつらのおもやせなとし給へるさまの引かへめてたくみゆるをいへる也
くちをし　源の心中なり
源氏 おりたちてくみはみねともわたり川人のせとはたちきらさりしを　河後撰　わひ人のそほつなるてふ涙川おりたちてこそぬれわたりけれ　花おりたちてくみはみねともとは今は源氏君玉かつらの君に密事なきよしなりさりなからわたり川にては我こそ引たすけんと思ひしかは人の瀬とはちきらさりしと也　弄只川の事也一禪勘云わたり川は三途川の事也　花鳥後世の事云々源の引わたすへき心さしあれと源氏不通して人にゆつるをおもはすと也　一二句源の實事なきをいへり手をとりて引わたす程の事はありしとなりわたり川は三途川なりされとこゝにては只川とみて可然歟　聞おりたちてとは是非に我物と定めんとは思はさりしなり又かやうに人の物となさんとしも思はさりしをとなり又わたり川は三途なり又は只川をわたるにいふなり人のせといはんためなり三途川の義末に相叶歟
思ひのほかなりや　秘歌を足たる也
返玉鬘 みつせ川わたらぬ先にいかて猶涙のみをのあわときへなん　河三途川なり或は大小川ともいへり　十王經にみえたり地獄の繪をみてよめる歟　「みつせ川わたるみさほもなかりけり何に衣をぬきてかくらん　右花鳥にも同此歌をのす仍畧之　今案此歌は三途川のうはの罪人の衣をはくことなり懸衣翁脱衣婆とてうはおほちありといへり　河水條日本紀水尾萬葉　弄此歌たゝはかなくよみ給歟しぬる心必有へしみつせ川はきし所なりわたらぬさきにとは世のうき契なとみぬさきにとにやみつせ川わたるとうけてよめり又さたまれる死よりさきにきへはやとなり　秘此歌の義あまたあれとも只はかなくよめる歌なりかやうの事の出來さるさきにきえたきとなり又さたまれる死期の來らさるさきに消たきとなり五文字はわたらぬさきといはん爲にお

けるなり 聞 是よりは治定の三途川也
心をさなの御きえ所や 秘 源の詞なりたれも三途川
は必わたる事なり（みちイ）
かの世はよきたり 秘 點之聞同 弄 三途川事なり
秘 三途川の事なり 善道と云説あり非なり 河 善
道なしと云なり渡此川三（亡イ）人は必趣三惡道故なり云
云 一説云通路なき歟三（亡イ）人必此河を渡る故によく
へきみちなしといふ歟 又云善道中歟冥途へおも
むく道中歟然共十王經以下の文に二十七亡人渡ニ
大小河ニ受種々苦と説り善道中の義しかるへから
さる也

御手のさきはかり 河 或説云御手のさきはかり引た
すけんとあるは源氏玉鬘と本意をとけたる歟最初
に嫁合の男必此川を引こすと云々しかれはうはへ
は隱密のよしにくみはみねともといへとも內々は
おほしる事もあらんかし世になきしれ〳〵しき
事もとある歟又うしろやすさも此世にたくひなき
とはありなからも女の御ためを思ひて大將をむこ
にとり給へる心歟云々但本意をとけさるよしみえ
たり 玉鬘內（尙イ）侍通髯黑大將事 尙侍滿子內大臣高通女藤

右大將定國 是等例なり 花 源氏玉かつらの君に
密事ありとは河海說大かた相違なきにや但其實な
くともなれ〳〵しきとはことを枕にして物語あり
しなとは實事のなきはかりなりさるにとりては御
手のさきはかりひきたすけんときこえ給へるもこ
とわりは叶侍にや 秘 夫婦のかたらひをはしめた
る人三途川を引わたすなり實事なしとても夫婦の
かたらひをいひしらせたる故に引わたす程（をりイ）の事は
有へきとなりことを枕にてなとありしなとはかり
にてもいふへき也 私云秘の義花鳥の義に同せら
るゝか 河 一本云定家卿歌には此前の詞は前の一
本と同し仍畧之歌に一「せめて思ふ今一度のあふ事
はわたらん川や契りなるへき以前の心歟 案之通
路無くなるをとよむへし其故は六帖第三歌に一「わ
すれ川よく道なしときゝてしはいとふのうみのた
ちはよりけれとあり如此心歟玉鬘の歌にみつせ川
わたらぬさきにあわときえんと有を源氏此川をは
よきて行へき道なしとの給ふなり但萬葉に與奇道
歟云々神さまのあら磯もみえす波たちていつてよ
りゆかんよき道もなしといへり然は善道一義歟此

義可秘藏弄　私云以上河海一本如此然は此歌も通
路はなしにて猶以道理相叶歟猶萬葉集を引勘へし
まめやかにおほししる　弄おほししる事は心さしの
事なり　聞實事なき事を思ひししらんと也　秘玉か
つらも思ひしり給ふ事有へきとなり心さしの事也
世になきしれ〳〵しさ　秘子のことくし給ひなから
心かけ給ふ事　弄聞同
又うしろやすさも　秘かくはくゝむ事はえ忘れ給ふ
ましきとなり　箋曰非なり琴を枕にても心をやふ
り給はぬを大將のおしたち給へるにて源の心を今
思ひしり給ふへしと也　私云以上秘の分なり　弄
實事なとなき事聞同
きゝくるしう　玉かつらの思ふさま也
いとほしうて　秘源の別の事にいひなす也
うちにの給はする　秘源の詞なり
なほあからさま　秘暫時にても參り給へと也
おのか物とりやうし　秘大將の事也　河領
思ひそめきこえし　弄内へ參らせんの心なり　秘源
の心は先宮つかへに出して後にはともかくもと思
ひしとなり　聞源の心は先入内をとおもひしと也

私云源のはしめよりの支度には相違せるとなり源
の心は先宮つかへに出して後に誰にてもゆるさん
と思ひつる歟又髯黑へゆるさんとも思はさりしに
かくなれるをたかふと云也　案之猶秘の義然へし
二條のおとゝは　弄玉かつらの父葵上の父をも二條
と號せしか父子無（イナシ）不審歟　秘父おとゝ也　系圖に
二條のおとゝとあるは弘徽殿の太后の父大臣也
私云玉かつらの父内大臣の事とは聞えたり弄花に
葵上の父をも二條と號せしかといへるはあやまれ
り　系圖の分左に注す

攝政太政大臣┬致仕太政大臣（此卷内大臣也）─玉鬘君
　　　　　　└葵上

二條太政大臣┬弘徽殿太后
　　　　　　└四君（致仕相國北方）

案之致仕太政大臣（此卷に内大臣）　玉鬘の父大臣は二條の太
政大臣の聟なれはもし二條の亭を致仕大臣傳領歟
如何但若菜卷に源氏朧月夜にかさねてあひ給へる
時二條の亭の藤さける由みゆ朧月夜なとすみ給へ
りとみえたれは是も不審只此義に及はさる事也

てまかにきこえ給ふ　源のあるへき事のさま何やかやとこまかにの給ふなり父おとゝは然へき事とおほせは源の本意にはたかひたれとも心やすしと也

あはれにもはつかしくも　秘　玉かつらなり

いとかうおほしたるさまの　玉かつらの思ひくつしたるさまなれは源の心におほしめす事をも殘してみたりかはしきたはふれことをもえの給はぬなり

たゝあるへき　秘　心つかひをしへ給ふなり

かしこにわたり給はん事　大將の心なり暫時も參内をは心にゆるし給はさるなり内侍のかみにて必拜賀に參し給ふへき事なり　箋　大將の方へ玉かつらのわたり給はん事を源氏のふとはあらせしとおほすと也わか方におきたくおほす也猶思ひはなれぬ源の心中也　九同聞同　私云秘の義尤不審なり或抄云九禪又聞書の義尤可然なり此次の詞に　内へ參り給はん事をやすからぬことにおほせとそのついてにやかてまかてさせたてまつらんの御心つき給てとありてこれにて案之に聞書等の義可然也

うちへ參り給はん事を　秘　參内あらはすくに大將の亭へわたすへき心あれはさもと思ひなり給へるなり　或玉かつらよろこひ申しの爲にそと御門へ參らん事も髭黒のいやと思はれけるかそれを次てにしてわか方へすくにわたさんと思ひなりて暫時參内の事を同心あると也

かくしのひかくろへ　聞　かやうの風流かましき事に髭黒のなれぬ也　私云源氏かたによろつ有へきさまにもてなし給へとも猶世の人きゝをはゝかり給ふ故に忍ひかくろふるやうなるか又此前の詞に内侍つかさなとおほく參りて大將のかくろへておはするさまをかけりさやうの事歟

まかとのゝうち　髭黒のすみ給ふ亭也

うちすて給へりつる御しつらひ　弄　北方の物のけにうちすてたるけしき也　髭黒の北方物のけにわつらひてとし久しけれは心もとまらすしてよろつありのまゝにてあれたるやうなるへしそれを今あらためつくろひ給ふなり

北の方のおほしなけくらんさまも　秘　大將の本（蓋イ）意也　髭黒のさまなり北の方にも心とまらぬ故に御子たちの事をもひけ黑の心にかけ給はぬなりすく／＼しき人のさまなり此北方の腹に男子二人女子二人

あるは系圖にみえたり
なよひかに　秘大將の事なり只實めなるかたはかりなる人なれはかく思ふ事をもえ思ひかへし給はさるなり
ひたふもむきにすゝみ給へる　聞物のかたにある體なり退屈のなき也　秘一方むき也
人の御心うこき　由もなく思ふへき事のおほき也
女君人におとり　秘大將の本意なり（鬚黒の北方也イ）
さるやんことなきちゝみこの　秘先帝の親王なり
いみしうかしつき　鬚黒の本の北方を父式部卿宮思ひかしつき給ひしとなり
御かたちなとも　鬚黒の事也
あやしくしうねき　河強シウネ哥
このとしころ人にもに給はす　數年物のけにわつらひ給ふなりさて身もちなとも打すてゝうもれておはするなり
うつし心なき　物のけのおこる時は本心もうするとなり
御中もあくかれ　鬚黒と北方の御中もなり
やんことなきものとは　聞鬚黒の本の北方を聊爾にはし給はぬとなり實々しき心也
めつらしう御心うつる　玉かつらの事かたちのすくれたる也
かのうたかひをきて　花源氏君の玉かつらの君に密通なきよしはこゝの詞にみえたり　秘大將の心に源に密通を疑し事もさもなきをうれしく思ひ給ふなり
心きよくてすくい給ひけるを　心きよくてすくすなり過いなり　花鳥云すくひはきよめたる心なり
一本如此注之傍筆を加畢
ことわりになん　草子の地なるへし
式部卿宮きこしめして　秘式部卿宮よりよひとり給ふ也
人わろくて　俗に手もちわろきなといふ體の事也
人きゝやさしかるへし　やさしきは耻かしき也　河萬「松浦川この川上に家はあれと君をやさしみあらはさす有き　私云玉島やこの河上鮎但玉島川は則松浦也同所なり　松浦なる玉島川とよめり　河「何をして身のいたつらに老ぬらし年の思はんことそやさしきやさしきは耻かしき也　秘としの思

はんてともやさしくといへるも此心なり
おのかあらんこなたは　秘こなたとはあらんあなたはと云心なり行末をいふにはあなたといふなり
式部卿宮のゝ給ふ也
いと入わらへなるさまにしたかひなひかても　猶ひけ黒のかたにしたかはすともわかあらんかきりはもてなさんと思ひてよひとり給ふ也
宮のひんかしのたい　式部卿宮の亭の東對屋なり髭黒の北方をよひとりてすませんと也
おやの御あたり　髭黒の北方の心中なり
今はかきりの身　秘一度よすかさたまりて又立かへり給へき事面目なきと也
うちはへふしわつらひ　秘うちたへ也
ほんしやう　秘に本上如此點也　髭黒北方の心を云ふ也
時々心あやまり　秘物のけなり或物くるほしき事なり常は心うつくしく大やうなるなり
すまひなとのあやしう　北方の物のけ故に打すてたる氣色なり
うもれいたく　河埋痛

玉をみかける　大將の心なり玉をみかけるとは玉かつらの住給ふ方なり
心にはいとあはれと　髭黒の心中に北方をあはれとは思ひ給ふなり
昨日けふの　弄髭黒の北方にのたまふ詞也　秘ひけ黒の北方にの給詞然へき人といふ物は何事をも思ひのとめてこそ有へき物をと也
いと身もくるしけに　北方の身もくるしけなる故にさのみえうち出さるとなり
年ころちきり　大將もあはれとおもひ給ふ也
世の人にも似ぬ　弄物のけをいへり　秘物のけをいへり我は随分堪忍すへきと也
えさしもありはつましき御心おきて　髭黒の我は随分今まて堪忍しつ行末とてもみはてんと思へとも式部卿宮よりよひとらんなとゝの給へはさもありはつましきとなり又北方の心をきてにても有へし
おほしうとむな　此なの字製禁の心にはあらすうとみ給けるよといひかけたる詞なり　九聞等同之
私云御心おきては式部卿宮の御心おきてなりそれにつきてみつからもおほしうとみけるよといふな

り末の詞にみえたり
とさまかうさま　兎に角になり北方をあはれと思ふとおさなき人々のうへとなり
女の御心のみたりかはしき　秘女は遠慮なき故に世のありさまを御らんしはてさるなるへし　私惣別女は遠慮なき物なるに此北方は物のけさへそひたれはかやうにの給ふなるへし
ひとわたり見さため給ふ　こゝの一途のやうをみ給ほとおほすはさしも年來契りおきつるに我にまかせて今しはし御らんしはつへきにとなり
宮のきこしめし　秘女こそあれ父宮の同意し給へる事心得かたきとなり
さはやかにふと　河きはやかにとあり俄なる心歟水原云々案之きはことなるといふやうなる事なりたとへは善惡分明なる體なり　聞さはやかは急速の心歟　私云急に物のきはをたてたる體歟
まことにおほしおきつる　此折節永く引きらんと式部卿宮のおほす歟となり
しはしかうし　又すこしの間勘當の心にかよひとらんとおほす歟となり　秘かうしは勘當也

いとねたけに　秘如此大將のいひ給ふを北方は嘲哢しての給ふと思ひ給へるなり　聞何とやらんにくいけしたるなり髣髴の體也
御めしうとたちて　河召人立なり　思ひ人めきたる也　めしうとの事　大和物語云このさいし君の御いもうとの伊勢守にていますかりけるか御ともにかみのめしうとめきてありけるに　蜻蛉日記云をのゝ宮の御めしうと云々　日本紀云有客（宮イ）人生男女者四人　以上河
もくの君中將のおもと　秘木工君は大將の御方の女房中將は北方にさふらふ人なりいつれも大將のおもひ人なり
ほとにつけつゝ　此南人さへ玉かつらの事をねたくおもふ也
いとなつかしう　北方本心なる體也
みつからおほけ（をイ）たり　河饒　毫　漢語抄　病中々なにおほ〳〵としたりし歟　弄ほれたるなといふ詞
秘北方の詞我身の事はかりにてはあらて父宮の御うへをさへの給ふと也
宮の御事をさへとりませの給ふこともりきゝ給はんは

いとほしううき身のゆかりかゝる〳〵しきやうなるみみなれにて侍れは今はしめていかにもものおもひ侍らすとてうちそむき給へるらうたけなり　花みゝなれたるは聞なれたるなり　私云此段諸抄しるさす仍くはしく注するなり此段皆北方の詞なり我こそ物のけにわつらふとての給ひはちしむることわりなれと父式部卿宮の事をさへそれにとりませての給ふはもりきゝ給はんもくるしきとなりうき身のゆかりとは我身の継人のやうにもあらぬから父宮の事をかく引出るはかる〳〵しきとくるしく思ふとなりみゝなれにてとは我身のことをいつもかやうに恥しめ給ふに聞なれたれは今はしめたる事のやうにくるしくも思はぬとなり

いとさゝやかなる　北方のありさまを此一段にいへり　河細々許　小々狭

ひわつにて　河あつし同字たるへき歟

かみいとけうらにて　弄かみいとうるはしう一本かみいとけうらにて

もてやつし　わつらひ給ふ故身にも又居所のさまなとにも心をつけさるよしみえたり

宮の御事をかろくはいかゝ　秘大将の詞也　式部卿宮の事をあしくは申さぬと陳するなり

てしらへて　北方をいひなたむる也

かのかよひ侍る　玉かつらの方也

玉のうてなに　秘玉かつらをむかへんと也　私云是は六條院に玉かつらの住給ふかたの事なり

うひ〳〵しくきすくなる　髯黒のわか身の上をの給ふなり何とやらんわか無調法なとあるを源氏かたの人いかゝみるらんとなり

心やすくうつろはし　我方へ玉かつらをわたさんと也

おほきおとゝ　源氏也　弄高位等のことはいふに及はすと也

心はつかしういたりふかう　源の心かしこくいたりふかき人にかやうに申なといふ事もれ聞えんは迷惑なるよし也

御中よくて　秘玉かつらをむかへて御中よくてましませと也

宮にわたり給へりとも　式部卿の宮の御方へわたり

給ふとも忘れはせしとなり
まろかためにも　髭黒のみつから稱する也
かたみにうしろみんと　互に契りしまゝに思ひかはして居給へといふ心歟
こしらへ　色々に北方をいひなたむるさまなり
人の御つらさは　秘北方の詞也　髭黒をかならすしもつらしと思はすとなり
世の人にもにぬ身のうさを　わか物のけにわつらひ給ふ事なりそれを父宮の思しめしなけくと也
ひかてかみえたてまつらんとなん　我身ゆゑと思へは父宮の御方へかへりすまんも面目なきよし也
おほとのゝ北の方　秘紫上也
こと人にやはものし給ふ　此北方のいもうとなれはかくいふなり
しらぬさまにておひいて給へる人の　式部卿宮にはしられぬさまにて紫の生長ありたる故に他人むきなる心也
末の世に　他人むきにて紫の生長して後にといふなり
かく人のおやたち　私云親めくなり　花是は紫上を宮のうらみ給ふを北方のの給ひ出る也玉かつらの君を大將にあはせ給ふ事を紫上のしわさと宮の心得恨給ふ也玉鬘を大將にあはせ奉る事は紫上のわさと取もちてし給へると式部卿のかたには云々也
こゝにはともかくも思はすや　秘何ともてこゝには思はさると也
もてなひ給はんさまをみるはかりとのたまへは　秘ともかくもと北方のゝ給ふなり　私云紫上他人むきにて出生の人なりさて源のすまのうつろひなとにも式部卿宮音信給はすかた／＼遺恨なるなりされはその相當の返報に玉かつらの事なとを紫上のとりもちてし給ふと宮の御かたにはうらみ給へとも髭黒の北方には何とも思はすれはのせられやうをみんなとゝ本心にてよくの給ふと也
いとようの給ふを御心たかひにやくるしき事もいてこん　秘かくの給ふまてはしかるへし又物のけおこりてはとなり　私云此詞草子の地歟
大とのゝ北方　紫上也　秘大將の詞也
いつきむすめの　弄紫上のこと也　秘紫上はいまた人のいつきむすめのことくして我身をさへ人まか

せなるやうにし給へれはまして人のうへまでの事はいかゝとりもち給ふへきそとなり
かく思ひおとされたる人のうへ　鬢黒のわか身の事を云也
人の御おやけなく　秘式部卿宮をいへり　弄聞　私云式部卿宮の兎角おやけなきとなりさやうにの給ふ紫上は御むすめにてはなきかといふ心なり
日ひとひいりゐて　いひなためんとの鬢黒の心也
くれぬれは心もそらに　秘大將玉かつらの御かたへ參り給ふへきの心也
雪かきたれてふりかゝる空にふりいてん　おもしろき詞也
さの御けしきも　秘北方の事
中々ことつけて　かこつけてなり
われもむかへ火つくりて　秘河海にみえたり　河日本紀第七曰賊有殺王之情王謂日本武尊也放火燒其野王知被欺則以燧出火向燒而得免　日本武尊東夷を征し給ひし時駿河國にて賊徒野を燒しに尊十束劒にて草をかり給て向燒のかれし事なりたとへは人の腹たつへき事をこなたよりも相對して腹立する心をいふなり
いとおひらかに　北方の體なり何共かまはぬやうに色にいたさすして居給ふ故に鬢黒の立いてかたき也
かうしなともさなから　弄おろさぬなり　秘格子も夜に入ともおろさゝる也
北方けしきをみて　鬢黒のなかめわつらふさまをみしる也
よもふけぬめりや　河一本「道もあしいかてかゆかん白雪のふりおほふ竹のよもふけにけり
そゝのかし給ふ　秘玉かつらへおはせよと北方のもよほすなり
今はかきりとゝむとも　秘花あはれなりいふかひあるましきとの給ふなり
かゝるにはいかてかと　秘大將の詞也　此雪の空には思ひ立かたしとまつの給ふ也
猶この比はかり　是よりは又玉かつらへ夜かれのあらんも心くるしきさまをいひきかせ給ふ詞なりわか心のあたゝしからぬをしらて今より疎遠なるなとゝ人のいひなさんとなりかこつけ事なり

おとゝたちも　秘源と内大臣なり
ひたり右に　河ひたりみきにもぬるゝ袖かな　此心
歟
思ひしつめて猶みはて給へ　北方に堪忍あれとのこ
とわりをの給ふなり
こゝになとわたし　玉かつらをこゝへわたしては二
かたに心やすくあらんなとゝいひしらせ給ふ也
ほかさまにわくる心　本心なるをみてはうれしくよ
そへ心もうつらぬなとゝよくいひなし給ふなり、
たちとまり給うても　秘北方の詞なり　髯黒のこゝ
にとまり給ふても本意にもあるましけれはわか為
にもかへりて心くるしかるへしとなり
よそにても思ひたに　秘おもしろきかきさまなり
袖のこほりもとけなんかしとなこやかに　婀娜　柔
河同　河「思ひつゝねなくにあくる冬の夜は袖の氷
のとけすもある哉　秘にも此歌あり
御火とりめして　北方の火とりをめしよせて髯黒に
たきしめさするなり
みつからは　北方也
御めのいたうなきはれたる　聞物のけにつねになき
給ふなるへし
みる時はつみなうおほして　髯黒の心中也
いかて過しつる年月そと名殘なううつろふ　玉かつ
らを見初てからはもとの北方にてはよく過しつる
そと思ふ心のうつりたるは我なからかろ〳〵しき
心かなと思ふうちにも猶玉かつらの方へ心はもよ
ほされて心けさうをくはふるとなりかやうに一旦
の心もいてきたるは北方の本心にてなこやかに物
なといひ給へるさまのあはれなるによりてなり
そらなけきを　玉かつらの方へ心のすゝまぬさまに
もてなすなり
ちひさき火とり　是は又（伸イ）別の火とりなり前のはふせ
籠の下に入る大きなる火取なり是はふところに入
るなるへし
をいふなり
ならひなき御ひかり　秘源なり　花同　髯黒のさま
をゝしきさまして　秘男々しきなり弄同
たゝ人　弄點之
さふらひに人々聲して　いつれの所にもあるへし家
禮なとの人のゐる所なり大將の御出をまつ御供の

人々雪の樣なとを聞給ふやうに申なり
まほにはあらて　はやく御出あれなとはえ申さてか
やうに申をいふ也
中將もくなとあはれのよやなと　秘よやは世なり北
方の心によせてわたくしの物えしもあるへし弄
さうしみ　秘北方なり
おほきなるこの下なりつる火とりを　秘袖に引入た
る火とりにはあらす弄同前に御火とりめしていよ
いよたきしめたてまつり給ふとありし火とりなる
へし以上箋　河六帖　たき物のこのした煙ふすふと
もわれひとりやはしなすへしやは聞書にも此歌を
引
いかけ給ふほと　秘沃懸也
人のやゝみあふる　河やゝ微なり　やう〳〵なり
花みあふるは見逢なり　私云やゝとは只詞なりや
う〳〵の心には有へからす　秘みあふるはみもあ
へぬなり　私云花鳥の義不審只とりあへすなとの
同し詞なり
うつし心にてかくし給そと　本心ならぬゆゑにゆる
すかたのあると也

きよらをつくし　秘玉かつらのわたりをいへり
さなからまうて　更啓日本紀
心たかひたるとは　弄物のけ也　秘大將の心なり是
は物のけのするわさと也
覺ししつめて　大將の心中なり
よはひのゝしり　秘呼叫也
よ一夜うたれひかれ　花ものゝけの加持せられてう
たれひかれたるけしきにくるひのゝしるなり　秘
行者のうちたゝきなとする事なり弄
かしこへ御ふみ　玉かつらへ文あるなり
よへにはかに　これより文の詞なり
きすくに　河木強　風流めかすありのまゝなるをい
へり
髯黑
こゝろさへそらにみたれし雪もよにひとりさえつる
かた敷の袖　花雪もよは朝かほの卷にしるしはへり
ぬひとりさえつるは火とりの火をかかりし故にそ
の夜はとまりし心をそへたる歌なり　弄雪もよの
よの字非夜字語助也　秘雪もよは槿卷にもあり非
夜字語助　私云花鳥に獨さえつるは火とりをそへ
たりといへり如何此義に及へからさる歟聞書云心

さへといふにて物のけもそらにみたるゝ心ありと
云々　河後撰雪のすこしふる日女のもとにつかは
しける兼茂朝臣「かつきえて空にみたるゝあは雪
は物思ふ人のなみたなりけり　又「心さへ空にみた
れぬ秋のよのあかつき山のきりはらふ風河に一本
に無之又諸抄此二首の引歌不載之
つしやかに　秘實なるなり弄　河實法に下すしき心
歟　風流めかぬ體なり才ある人なり
よかれを何ともおほされぬにかく心ときめき　秘夜
かれをは玉かつらは何共思ひ給はさるを大將はい
かゝと思ひたまふなりおもはれふりのやうなる心
也
おとゝむねつふれて　御かへりのなきを大將の心に
かゝりておほすなり
まことの心はへの　秘此北方生得は心よき人となり
それを髯黑のしりたれはこそかほとにも思はるれ
と也
心のうちにも　秘大將の心也
けうとき　花氣疎なり　おそ〱しき心也
御さうそくの事なともめやすくもしなし給はす　秘
北方はいつも物のけかちにのみましませは大將の
御裝束無沙汰し給てよろつうちあはさるなり　河
御さうそくの事なともめやすくしたゝかにきなとも
しなさせ給はす花鳥此詞同し注にしたゝかなると
は合期したる心歟したゝかなるうしろみなともい
へりこれは合期せすといふなり　花北方うしろみ
の事合期し給はぬ事なりきなともしなさせ給はす
とは人のきるへきやうにもしなされぬをいふなり
私云河花は物語の詞相違あり秘の義を用へし
ふすへられたるほと　火とりの香にそへていへるな
り
人もうんし　河慍老子經うんしはうとむ心也
（木工君）ひとりゐてこかるゝむねのくるしきに思ひあまれる
ほのほとそみし　秘燭（夜イ）を火取によせたり　私云（イナシ）北方
の心をたすけてよめり　弄前にもあり薫物の火取
によせたり
なてりなき御もてなしは　秘木工君への詞なり　わ
たくしの思ひをもこめたる也
まみいといたし　河傷
かやうの人に　秘大將の心なり玉かつらをみるには

さてもこのもくの君なとに物をもいひふれてあり
けるよと思ひ給ふなり
なさけなきことに　秘是はなさけなき事と草子地の
評也聞　花北方の火とりの灰かけられし事をなさ
けなきとはの給へるなり　私云花鳥、義如何
返髯黒
うきことを思ひさわけはさま／＼にくゆる煙そいと
とたちそふ　秘大將の返歌なり　九くゆる煙はちと（今イ）
後悔したる心なり北方の體をみれはとなり祇抄同
私云此歌諸抄義なし案之うきことをとは北方の物
のけの事をれをさへいとはしく大將の心に思ふに
又此火取の灰なとにいよ／＼厭却の思ひある心歟（布イ）
ことのはかなる　北方のかやうのふるまひある事玉
かつらの方なとへ聞えあらはいかゝと也
ちうけんに　河中間はいつかたにもつかぬ心なり法
文に三佛の中間といふなり　秘玉かつらへも北方（ニイ）
へもよりつかて二佛の中間なといふかことくにて
はとなり
一よはかりのへたて　秘玉かつらの方にゐ給へり
久しうこもり　玉かつらの方にのみ髯黒のゐ給ふ也
御物のけこちたく　河無骨　私云無骨はこちたくな
りこちたくはこと／＼しくなといふ心なり
あるましききすもつき　あたりへよりつき給はゝ物
のけのいかやうの事をもいひいてはちかましき事
又いてきてはと遠さかり給ふなり火とりの灰にて
思ひとり給へるとなり
とのにわたり給ふ時も　髯黒のわか里亭にもつねに
住給ふかたにのみおはして北方のあたりへはより
つき給はぬ也
君たちはかりをそ　髯黒の男女の子たちなり
女ひとゝころ十二三はかり　私云まきのはしらよみ
し人也
さふらふ人々も　北方にさふらふ人々なり
ちゝ宮きゝ給ひて　秘式部卿宮也
さて心つよくものし　父宮のゝ給ふ事なり髯黒のさ
やうにかけはなれ給ふをしらすかほにて猶同し殿
のうちにおはするは面目もなき事と也
おもなう　河無面也
おのかあらん　父宮の心此心前にもみえたり
北の方の御心ち　髯黒の北の方也
世中をあさましう　北方の本心なる也

かくてときこえ　御むかへの參りたるよし也
人のたえはてんさまを　秘つとめては堪忍しかたき
事も出來ぬへきと也　人のかたよりたえはてんさ
まをみはてゝから父宮の方へ立かへり給はゝ今一
入外聞もあしからんと思ひたゝいまおもひたち給
ふと也
御せうとのきんたち兵衞督は　左兵衞督式部卿宮の
御子此北方兄弟なり玉かつらの君に心かけし人也
中將侍從民部大輔　弄兵部督の舍弟なり問式部卿宮
の息云々民部太輔に任せらるへき事勿論歟　一勘
むかしは如此任官勿論也
としころならひ給はぬたひすみ　此程は大將の家中
をまゝにして住給へる故也
せはくはしたなく　式部卿宮にあひすみ給はゝ此御
かたはせはかるへし
かたへはおの〳〵　秘少々はといふかてとし
しつまらせ給なんに　此北方式部卿の宮の御方にお
はしましつきてから又も參るへくなといひて少々
御退散する也
さるへきはみなしたゝめおき　少々殘すへきをはそ
のまゝしたゝめおきなとするなり
女君みなよひすゑ　此北方子たちをよひすゑていひ
きかせ給ふ也
みつからは心うき　北方の我身の事をの給ふ也
ともかくもさすらへ　何となりともなり次第なとい
ふかことしさまよふなといふかことし
おひさきとをうて　子たちの事也
姫君はとなるともかうなるとも　眞木柱の君なり
河「山しろのこまのみそのゝうりつくりとなりか
くなりなる我身哉　私云不及此歌
をとこ君たちはえさらす　髯黑の方へ行かよひ給へ
しとなり　秘父の御かたをえさらすなり　只今は
具し奉り給ふなり　聞男君達をつれてかへりたら
は中々あしかるへしたゝしたかひておはせよと也
宮のおはせんほと　弄内なとへ參り給はん時の事を
母のいひ給ふなり　聞式部卿宮の御存生の程こそ
すこしのうしろたてにてもあらめ後かあしからん
と也
かのおとゝたちの　秘源と内大臣なり天下の事は此
二人によくしたかふへしとなり

心おくへきわたりそとさすかにしられて　聞又はしめられてと云本有思ひとゝめられての心なり　兎角此北方腹の男君たちの立身有かたき事をいひつつけてわひ給ふなり

ふかき心はおもひわかねと　聞をさなき人々の體なり

むかし物かたりなとを　秘住吉の物語に嫡女を父は懇に思ひしかと繼母のいひしによりておろそかに成しなり弄聞　或はいつれの物語とはなしたゝ繼母のまゝ子をにくむ事なりとりわき住吉物語なとをもあたるへき歟

時にうつろひ人にしたかへは　繼母のいひなしによる事也

ましてかたのやうにて　弄父子といふ形はかりと也　秘北方の母といふ形はかりにてなからへてあるたにかやうの事の出來ぬれは行先猶おほつかなしとなり　私云わかかやうに現然みる前にてさへうつる心はといふ也

かゝり所ありても　中々たのみのかゝるやうに髭黒の此男君達をもてなさしと也

日もくれ雪ふりぬへき　おもしろくあはれなるさまなり

いたうあれ侍りなん　聞風の吹あれんと也

ひめ君は殿いとかなしう　槙柱君は髭黒の愛子なり

みたてまつらては　大將にいとまこひをしたく思ふなり

いまなんともきこえて　秘姫君は大將の愛子たるによりてかくつよく名殘を思ひ給ふなり　弄父にいま行ともきこえすしてと也

かくおほしたるなんいうき　姫君の父大將に名殘を惜むを母北方のかやうにの給ふ也

たゝいまもわたり給はなんと　大將をひめ君の內々まつと也

かく暮なんにまさにうこきなんや　私日はくれ侍れは玉かつらの方へこそいそき給ふへけれこなたへはなにかとなり　私云北方の心中にかく思ひ給ふを察してかける詞歟又たゝ草子の地歟　九大將は只今玉かつらの方におはするなりさてことに日暮たれはいそいておはせんと推量る也　私云此義可然歟

つねによりゐ給ふひんかしおもての程　さすか名殘あるさま也

姫君ひはた色のかみ　河檜皮色紙　紫のいさゝかきはみくろ色なり　秘ふるき柱の色によせたり弄

姫君 今はとて宿かれぬともなれきつるまきの柱はわれをわするな　秘あはれなる歌なり是より眞木柱の君といへり　河枝柱日本紀　槙　眞木柱　六帖「まき柱つくる杣人いさゝめのかりほ（わさたイ）のためにつくりけるかな「おもひあまりわひしき時は宿かれてあくかれぬへき心ちこそすれ

母北方 なれきとは思ひいつともなにゝより立とまるへきまきのはしらそ　秘柱は無心の物なりとも思ひ出る事のありとも此やとりにとまるへき身にてはなきとなりあの柱は無心の物なりその無心なる柱はたとひ思ひいつともとなりその心はあるましき事はありともわれはかへらしといふ心なりかやうにみれははたときこゆるなり或抄御說同之

おゝの君　大將の宮女なりそれに北方の女房中將君の歌をよみかくるなり

中將君 淺けれと岩間の水はすみはてゝ宿もる君やかけはなるへき　秘石間の水は中將也　弄かけはなるへきは懸を影によせたり秘同　木工君はすみはてゝ宿もる君はかげはなるとよめり　私云秘に石間の水を中將なりといへるは非なり木工君をさして云なり木工君は住はてゝ宿もるへき北方にかけはなるゝと也聞同

かくてわかれたてまつらん　木工はこゝにとゝまるなり中將は北方につきてかへるなり

木工君 ともかくも岩まの水のむすほゝれかけとむへくもおもほえぬ世を　秘われもおもほえさるなり　聞われもとまりはつへき心ちもなしとなり

かくるゝまてそかへりみ給ひける　私文選別賦顧喬木於古里といへり　「君かすむやとの梢をゆくゆくもかくるゝまてにかへりみしはや　私云河海に引く視喬木於古里搖比梁於永辭江文通別賦

君かすむゆゑにはあらて　秘又二たひかへりみすへくも思はさるとなり　聞大將に名殘をおもふゆゑにかへりみさるなり數年を送りし宿の名殘はかりそとなり　私云同し歌の末をおもしろくかきなせり

と宮にはまちりて　秘是より式部卿の御方へ出給ひ
ての事なり
いみしうおほしたり　秘一度嫁娶して後は故郷へた
ちかへる事あるましき事なれは也
はゝ北のかた　秘紫上の繼母也　弄よからさる人の
よし前々の卷にみえたり秘　花むかひ腹紫上のま
ま母也
おほきおとゝを　源の事なり　或抄母北方の詞也
むかしのあたかたき　河敵　史記云一人敵不レ足レ學
學二萬人敵一項羽本紀　仇　讎同　寇文選　怨同又後漢書
賈復輕敵　論語距敵怨イナシ　此等の字不及引
女御をもことにふれ　花冷泉院の女御式部卿宮の御
女乙女卷に入内あり秋好中宮におされ給へる事を
いふにや　秘秋好中宮を入内させて式部卿宮の女
御をはおしけつやうにし給へる事
御中のうらみとけさりし　弄すまへの時世をはゝか
りて此宮音信もなかりし恨なりその外の人は又恨
に及はす好而知其惡心なり　秘須磨へ音信なかり
し事なり他人には恨もなきなり紫上のゆかりを思
ひ給はゝ世のはゝかりも有ましき物をとなり

覺しのたまひ　恨のあるを思ひしらせんとなるへし
と式部卿宮の思ひのたまひしとなり
世の人もいひならし　世間にもさやうにいひしなり
それさへ紫上故ならはさもあるましきことそとな
り
人ひとりをおもひ　秘紫上を寵し給はゝ其兄弟なと
とてはくゝみ給ふ事もなきをいふ也姉妹兄弟皆烈
士とこそいへる物をとなり弄
ほとりまてもにほふ　弄姉妹兄弟皆烈士云々
ためしこそあれと清心えさかしらをさりしをイ　一人のゆかり
にひかるゝ事もてそあれと心えさりしなり
すゝろなるまゝこかしつきをして　秘玉かつらを髯
黒にあはせ奉る事は紫上の造意ときこえのあると
なり　玉かつらの事なり源をさしていふなり
おのれふるし給へるいとをしけにしほらなる人のゆ
るき所あるましきをとてとりよせもてかしつき給ふ
は　河「つみもなき人をうけへは忘草おのかうへに
そおふといふなる　「あしかれと思はぬ山の峯に
たにおふなる物を人のなけきは　私云此引歌不用
之　花河海にはいとほしと句をきりて身にしほう

なる人のとあり則引歌におふなるをよめる歌をひかれ侍り是は身にしおふなる人とよまれ侍るにやいとおはつかなししほうは實法なりひけ黒の大將をいへる詞也　弄式部卿の宮の北方詞なり一勘云おのれふるすは我身をすてさする心なり王かつらをいとほしうおもふよりしほうなる人をといふなり或おのれふるし是は源氏の玉かつらへ忍ひ心なとかくれなけれはそれを心にもちて玉かつらをふるすといふにや源氏もさすかあらはれては人めいかゝと也さならねはいとほしく思ふにや又玉かつらの年の行いとほしみ歟是可然哉　私にあり　閩鬚黒のもとの北方をふるす事と云々又玉かつらゆゑ源の紫上をふるすと云々如何　私云ふるし給へるとは玉かつらに源の密通の事を云歟以上聞書如何私又云源の玉かつらに忍ひ給ふ心あれは鬚黒のやうなる實法なる人をよひよせて聟のやうにかしつき給ふと云歟又私云おのれふるし給へるとは源氏の玉かつらに密通の事なりさてふるし給へるとはいふなり然れは御思ひ人のうちなとにておき給はん事は面むき親子のきこえあれは叶かたき故に鬚黒なとのやうなる實々しく好色をもたてぬ人をむこにとりてわかむすめをかやうに中空になし給ふはつらき事なりといふ義然るへし

いかゝはつらからぬといひつゝけて　源のわか爲にあしき事をいひつゝけて宮の北方のいふ詞なり

宮はあなきゝにくや　式部卿宮の詞なり

よになんつけられ給はぬ　河難也　源の事を式部卿宮のほめての給ふなり

かしこき人は思ひおきかゝるむくいもかなと思ふ事こそはものせられけめさおもはるゝ我身ふかうなるにこそはあらめ　源の行迹は世人の兎角難つくへき人にもあらぬはかやうに確執をむすはるゝ仔細こそ有らめそれに無理は有へからすたゝさやうに思はるゝ我身の不幸なるなりと北方に對して宮のゝ給ふなり源に難をつけさせしと我身を卑下していひきかせ給ふなり　秘不幸なり河弄

つれなうてみなかのしつみ給し世のむくいはうかへしつめいとかしこく　猶宮の詞なりつれなうてとは何となきやうにて須磨の謫居の時の人の思のやうに隨て今我まゝなる世にその心のほとをはさまさ

まにつけて善悪をみせたまふことなり
おのれひとりをはさるへきゆかり　秘御賀の有し事
也
ひとゝせもさる世のひゝきに　花式部卿宮五十の御
賀紫上いとなみ給ふなり乙女巻にあり弄
このさうのあいほく　又此よのめいぼくとあり　河
今生の面目紫上の父式部卿宮の五十賀せられたり
し事なり　秘五十賀の事前には六條院を作りはて
てせらるへきあらましはかりをかけりこゝにてと
けおこなはれたるとみせてかけり
いよ〳〵はらたちて　秘北方也
まか〳〵しき事なとを　おそろしきことゝもなるへ
しのろ〳〵しき事なとなるへし
ての大きたのかたそさかなものなりける　草子の地
なり式部卿の北方なり　河悪日本紀
大將君かくわたり給ふをきゝて　髭黒也　花大將の
かの北方の宮の御かたへうつろひ給へる事を聞て
の給ふなり　弄玉かつらの方にて大將の聞給ふな
り
わか〳〵しきなからひのやうにふすへかほにてちの
の給ふけるかな　大將の心に思ふ事なり宮へよひと
りなとし給ふ事は似合ぬ様體かなと也
さうしみはしかひきゝりに　河ひきゝりとはひつは
りつよき心歟引はなちきれたる人の心歟　花北方
は髭黒の北方事也しかひきゝり心も思ひより給はぬを式部
卿宮のさし過てし給ふ事也
宮のかくかる〳〵しうおはするとおもひてきんたち
もある人めもいとほしきに思ひみたれて　私此事は
悉皆宮の御輿行なりされはわか北方にはとがもな
けれは子たちもある中也うちすてんも人めいとほ
しくて玉鬘へ此様體をかたりて宮の御かたへ見舞
給ふとみえたり
かんのきみにかくあやしき　玉かつらなり　秘いと
まを申て宮の御方へわたり給ふ也　秘此ありさま
を玉かつらへかたり給ふ也
中々心やすくは　父宮のかたへわたり給ふは玉かつ
らなとを迎へ申さんためにはよきと大將のいひな
し給ふなり
さてかたすみにかくろへても　髭黒のかたにおはす
るとてもかた角に心やすくおかんする物をと覚し

けちたるさまにいひなし給ふなり御子たちなとおほけれはかやうなるを外聞いかゝと思ひ給ふさまなり

おたしう思ひ　心のとかに思ひつるなり穏なる心なり

かの宮のし給ふならん　宮の御方へよひとり給ふ事なり

人のきゝみる事も　やうたいのかくやうなるはかろかろしきことなれはなり

うちほのめきて　聞宮の御方へ行てことわりてこんとなり　秘此義然へし　或御説になくさめて參りこんとなり

よきうへの御そやなきの下かさねあほ（をイ）にひのきのさしぬき　うへのきぬは袍なり　河青鈍の指貫花田色也　秘あをにひのきのさしぬきとはきとは綺也織物也　弄同からのきのさしぬきにや綺は此國にも織錬きのさしぬきはいか様なる時可用にか風流の時用る指貫なり　柳の下かさね　弄聞しはすに着するとみゆ下襲の色は時節によらぬ事にや　一答下かさねの色時節によるなり櫻梅は十一月より着用するなり柳は春冬は柳と號す夏は卯の花といふ同物なり

なとかはにけなからんと　花なとかはたくひなからんといふ心なりたくひなしと誉めたる詞なり此義不審　秘玉かつらにならへても然へしと也

かんの君はかゝることゝもをきゝ給ふにつけても

聞かゝる事ともとは髯黒の本の北方の父宮のかたへかへり給ふ事なり　秘髯黒は玉かつらの心には叶さるなりそれ故に又もとの北方いかやうに家出なとし外聞わろきことをつれなく思ひ給ふ玉かつらの心中也髯黒の引つくろひたるをもみやりもし給はぬとなり

宮にうらみきこえんとて　式部卿宮へ參りて髯黒の存分を申さんと也

まつとのに　秘大將の御方なり

もくの君なと　木工君大將の官女也

ありしさま　宮の方へ歸り給ひし時のさまなり

ひめ君の御ありさまきゝ給うてをゝしくねんし給へと　秘男々しくなり　眞木柱の歌なとみ給ふなるへし

さてもよの人に〻す　これより髯黒の此事をなけく詞也又心中歟　秘よの人に〻すとは物のけの事なり年比の心さしとは懇に祈禱なとし給へる事也　私数年の物のけにわつらひたまふを我なれはこそみ過しつるその志をみしり給はぬ事よと恨むる也

いとおもひのまゝならん人は　私心つよく随意ならん人はいまゝてうちそふへき事にはあらすと北方の事を髯黒の思ふなり　秘實法ならさる人は堪忍しかたきとなり

よしかのさうしみは　本心の人ならねはとてもかくてもいたつら人とはいへるなり

をさなき人々も　男女君達此腹にあり

藤中納言此時十八はかりとみゆ

次郎君此時八はかりとみゆ

眞木柱上まきのはしらの歌よみし姫君後螢兵部卿宮の北方になる又後紅梅の大臣の北方になり給ふ此姫君藤中納言よりもあにゝあるへし

かのまきはしらをみ給ふにてもおさなけれと　姫君のよみ給ひしまきの柱の歌の事也　聞手もおさなけれともいまた手跡のよからぬとなり

みちすから　髯黒の殿より宮へおはする間の道なり

たいめんし給ふへくもあらす　弄大將の北方の心なり弄

何かたゝ時にうつる心の今はしめてかはり給ふにもあらす　花是は式部卿宮の詞なり　聞宮の心なり

秘大將の心ゝ今さらなるにてもなきなり年來うかれ給へるとなり北方はあひ給ふへきもあれと宮のかくさらへ給へるなり

いとゝひか〳〵しき　聞北方のあしき事の大將の目に彌みえんとなり物のけの事なり

いさめ申給ふもことわりなり　秘父母いさめ給ふなり弄　私ことわりなりとは草子の地也

いとわか〳〵しき心ちもし侍かな　花是はひけ黒の大將の詞なり　私大將の詞なり聞

おもほしすつましき人も侍れはとのさかに思ひ子たちあまたある事なり　秘のとかにとは心の油斷有しと也

返々きこえても　大將の色々にの給へとも宮の御心のくつろかぬなり

今はたゝなたらかに　又大將の手たてをかへての給ふ詞也

つみさり所なうよの人にもことわらせてこそかやうにもてない給はめ　弄大將のとかをさらぬやうに治定してこそと也　秘今ちと堪忍ありて事のさまをも御覧し定つめて大將のとかをさらぬやうに治定し給て人にもことわらせてこそ進退をも定めたまふへきことゝなり　同あまりひきゝりなるをいひわつらひてあなたへ智恵を付て色々に丁簡していへる大將の分別なり

姫君をたに　私まきのはしらの歌よみし人也

おとこ君たちとをなゐは殿上し給　花後に藤中納言といへる人也

つきの君はやつはかりにて　花後に左大辨とみえたり

姫君にもむほえたれは　眞木柱上をいふ　弄まき柱の姫君の事なりおね君に似たると云詞也おねをはいたさぬとなり

あこをこそこひしき御かたみにも　河吾子日本紀　我子阿子　弄北方のかたみになり

宮にも御けしきたまはらせ給へは　式部卿宮へ對面ありたきよし大將の申さするなり

風おこりてためらひ侍るほと　宮も御風氣とて大將に御對面なきなりためらひはとかくつくろふ心なり

はしたなくて　つねにはしたなきといふ詞なり大將宮より歸り出るなり

この君たちをは車にのせて　わか君二人はかりなり　弄一本にきんたち

六條殿にはゑゐておはせねは　六條院の玉かつらのおはするかたへはこの君たちをつれてはえ行給はねは髭黒の殿に此二人をはおき給ふなりゐては將なり出にあらす

こゝにあれ　大將の詞なり

うちなかめていと心ほそけにみおくりたる　二人の君たちをはわか殿にとゝめおきて髭黒は玉かつらの方へおはするをみおくりたる體なり母君にもはなれ又父大將はかやうなれはおさなき人の心中心ほそかるへしあはれなり

物おもひくはゝりぬる　髭黒の心中也

女君の御さまの　秘玉かつら也

ひか〳〵しき御さま　本の北方の事

よろつをなくさめ　玉かつらのかたちありさまのすくれたるにて姫君の戀しさも君たちの心くるしさをも思ひ忘るゝ也

うちたえておとつれもせす　髯黒もとの北方へかきたえ無音なり

はしたなかりしにてとつけかはなるを　秘あまりにはしたなくもてなし給ひしにことつけてその後は音信もなきと也　弄式部卿宮大將にはしたなくあひしらひ給ひしにこそなりそれもしはしの事なり後にはしからん

宮にはいみしう　式部卿宮也

春のうへも　秘紫上也　紫上も此事をとりもち給ふと大北方のいひてうらむる程になり

おとゝのきみ　源なり

かたき事也　花難義なる事といふ心なり秘

おのか心ひとつにもあらぬ　秘實父まかせなれは也

うちにも心おき　内裏にも玉かつらの入内なき事をはいなくおほしめすなり

兵部卿宮なともえし　河怨うらむるなり　螢兵部卿なり是も心かけし人なり

さいへと思ひやりふかう　螢の兵部卿宮は思ひやりふかく御心もちひは然へき人とみえたりされは源の御疎略ならぬことを聞わけ給ふとなり

おのつから人のなからひはしのふることゝおもへとかくれなき物なれはしかおもふへきつみもなしとなん思ひ侍るとの給ふ　秘眞實なき事はつゐにはかくれなき事と也　私螢兵部卿もわか疎略なき事を聞わけ給ふなりいつれも[illegible]き事はつひにしらるゝ物なれはさのみ難義にも思ふへき事もなし自然にあらはるへしといふ心歟　或つみもなしとは人の中はかくれなき物なれは我一人の分別にて大將をむこにはとらぬなり實父ある人なれはなり此よしをつひには式部卿宮にもきゝあきらめ給はゝ源氏のとかはあらしとなり

かゝることともののさわきに　玉かつら故に色々の事のあるをくるしく思給故にいよ／＼髯黒をおほしうとみて物思ひ給ふさまなり

このまゐり給はんと　秘内侍のかみのよろこひ申に參り給ふへき事なり

さまたけきこえつるを　大將のかよひ給る故よろこ

ひ申をし給はぬなり

うちにもなめく　花なめくは無禮也秘　私なめく心あるは無禮心あると逆鱗あると也

人々もおほす所　源や實父の內大臣なともよろしからぬことゝ思ひ給はんと云歟

おほやけ人をたのみたる人はなくやはあると　河尚侍　麗女は右大臣豊成宅大藏卿重家の女　尚侍淑子中納言長貞女　右大臣氏宗室　私尚侍は職にありなから臣下の妻室たる例おほしとなり

としかへりてまゐらせ　秘　源氏卅八歲の年なり弄

花　西宮云尚侍新任之後諸縫殿陣令奏慶賀之由　諸司陣邊立壁爲陪女下仕侯所　內侍一人出來傳奏書司一人相副官乘燭　給祿女裝束一領　入蔣縫殿中宮御內著付二內侍一令レ啓二慶賀一有贈物　令案

內侍のかみのよろこひ申にはぬひとのゝ陣までまゐりて內侍一人出逢てそのよしを奏聞しぬれはすなはち女房の裝束を給はりて退出するのみなり此物かたりの玉かつらの君はやかて內すみし給ふへきにてそきやうてんのひんかしのおもてを御つほねにしたるよしみえたり弄

をとこたうかゐりけれは　秘　見物かてら也男踏歌の事初子の卷にあり

かたく〵のおとゝたちての大將　秘　源氏と內大臣なり　此大將は鬚黑なり

宰相中將ねんころに　秘　夕霧也

せうとのきんたち　秘　柏木なとなり

承香殿のこんかしおもて　弄　紫宸殿のうしろに仁壽殿ありそのうしろにある殿なり　弄　鬚黑のいもうとの女御の給へる所也

にしに宮の女御　河　冷泉院女御式部卿宮女也　母眞木柱上に同し　秘　當代の女御式部卿宮の女御なり

弄　承香殿のうちにて東西の事なるへしひけ黑のいもうとの女御のおはするたよりなり　私云鬚黑のいもうと承香殿の女御は此時春宮の母儀朱雀院の女御なり此時承香殿にすみ給へしそのたよりにてこゝに玉かつらの御局をしたるなるへし此宮の女御は式部卿の御女なり當代冷泉院の女御鬚黑のいもとの北方と一腹のいもうとなり此御局は承香殿のめたうをへたてゝ西の方の殿におはする歟されは御心のうちははるかにへたゝるといふなるへし

御心のうちは　秘　玉かつらとは只今心のへたて有へ

きと草子地にておしはかりて云り
みたりかはし　更衣たち　當代は更衣なとはなくて
みな中宮女御なとはかりましますとなり　私云み
たりかはしきとはさしてもなき更衣なとなきと也
中宮弘徽殿の　秘中宮は秋好弘徽殿は内大臣の女也
此宮の女御は式部卿の御女承香殿の西に住給ふ女
御なり
左の大殿の女御なと　聞竹川の左大臣歟　秘行幸の
巻よりの左大臣紅梅の巻の時分まで有し人也　系
圖云　秘左大臣女御　行幸巻よりまき柱にいたる
まで冷泉院御位の時の女御の左大臣此人なるへし
中納言宰相のむすめふたりはかり　秘此兩人不レ載ニ
系圖一
さと人參りさまてとに　おのか里なとにつねにさふ
らふ女房もかゝる物見にはしる人を尋て參りつと
ふなり
春宮の女御もいとはなやかに　弄花やかははゆたる
詞也　秘朱雀院の女御髭黒の妹春宮の御母儀也弄
宮はまたわかく　秘春宮なりいまたわかくおはしま
せとも女御はあひほのめく心なり弄　私云春宮の
女御は承香殿なりされは前に承香殿大將の妹のゆ
かりにて玉かつらの御局をもしたりと諸抄におも
へり但此女御は承香殿とは前にいへるなるへし今
は春宮の御方にのみおはして春宮の女御と申なり
にしおもてには宮の女御といへるは式部卿宮の女
御承香殿の西面に只今は住給なりその東おもてに
玉かつらの御局あれはこそめたうはかりのへたて
なるには心のうちははるかにへたゝるともかきた
れとみゆ此義然へき歟
御まへ中宮の御かた　御門の御前也　中宮は秋好也
朱雀院　院のみかとなり
六條院には此たひは所せしとはふき　河はふきはか
へりみるなり　私省なり省略すなり　弄省かへり
みる心　秘省略也
竹川　踏歌にうたふ曲なり　竹河巻にあり
うちの大とのゝきんたちは四五人　内大臣の息四五
人出給ふ也
わらはなる　八郎君はむかひはらにて　弄内大臣の
息の事なりむかひはら常腹とは當時家にある主な
り本たいのてゝろにや　是も内大臣息なり　秘む

かひはらは　腹をいへり　花 致仕のおとゝの末子なり母はかしは木に同しきなり

大將殿の太郎きみと　私 玉かつらの繼子なり　秘 まへに十はかりにて殿上せしよしある人也　花 鬚黑の大將の嫡子母は式部卿宮の御女上に十はかりなる男君たちといへるなり

よそ人とハ給はねは　秘 いつれも玉かつらのよそ人ならすとなり　內大臣の八郎君は玉かつらの弟なり鬚黑の太郎君はまゝ子なれは也

やんことなくましらひなれたる　內すみしならひたる女御たちのありさまにもまさりたると玉鬘の體をほめていへる也

この御つほね　秘 玉かつらの御つほねなり

さうしみも女房たちもかやうに內すみしてしはしはすくい　弄 御うしろみも女房たちもさうしみも云々イ本可用之歟云々　花 さうしみは玉かつらのことなりかやうに內すみして心をやるへきこともかりそめのことゝおもふなり　秘 玉かつらもさふらふ人もしはしは此まゝ內すみして有へきことをねかはしく思ふと也

おなしことかつけわたす中に　玉かつらのかたよりも綿をかつくるなり

こなたはみつうまや　河 水驛玉かつらの方水驛なり

けはひにきはゝしく人々心けさうして　秘 大將用意をくはへ給ふなり　河 心けさうし存してとあり不用之

かきりある御あるしなとのことゝもゝしたる　弄 玉かつらの方よりは水驛なるへきにや　弄 閑云玉かつらの內侍のかたにてもわたかつきたるよしみゆ尙侍の方をも經ることにや前の詞に六條院には此たひは所せしとはふき給ふとあり斟酌隨意たる歟一勘答云男踏歌推參の事其處定まらすかやうの物語はことくく先例をまもらす見所あるやうにかきなせり尙侍の方へもそのよせありて推參すへき事有何事哉

とのゐ所にゐ給ひて　秘 大將の宿廬也　玉かつら參內の故におほつかなく思ひて鬚黑も禁中のとのゐ所にさふらはるゝなり

おほしうつるらん御みやつかへなんやすからぬとのみおなしことを　秘 玉かつらへ申給ふ也　玉かつら

の鬢黑をきらひ給ふゆゑに此まゝ内すみなと有たきと玉鬘心いてきてはとおやうく思ふ心なり

御かへしなし　玉かつらよりはとかくとりあひ給はぬなり

さふらふ人こそ　秘あたりより御返事を申なり

おとゝの心あはたゝしき迄とならて　花おとゝは殿舎なり心あはたゝしきは踏歌のまきれなり人々はたま／＼の事なれはしつかに御ゆるされありてまかて給ふへく聞えたるを大將はつらしと思ひ給へるなり　私花鳥の義おやまれりおとゝは源氏なりまれまれの玉かつらの参内なれはみかと冷泉の御心にもさもとおほすはかりさふらひたまひて御いとまゆるされて退出あれと仰られしと人々の申なり聞

あまりすか／＼しうやと　河速

いとつらしと　人々の申樣を鬢黑のつらく思也

さはかりきこえし物を　秘大將の心なり　さしもさやうには申定めさりつる物をと大將の思ひなけくなり

さも心にかなはぬ世かなと　河拾遺「せりつみし昔の人もわかてとや心に物のかなはさりけん弄　私不及此歌」

うちなけきて　鬢黑の體也

兵部卿宮　螢也

御前の御あそひ　踏歌の後宴にや

この御つほね　玉かつらの御局なり

ねんしあまりて　秘兵部卿宮文をまいらせ給ふなり

大將はつかさの御さうしにそおはしける　弄直廬にや　河左右近衛府曹司あり　西宮抄云　宿所大臣納言宿廬職曹司也一大臣宿所在宜陽殿東庇左大將宿所在宜陽門内廊南右大將宿所在陽明門内南廊左右中將宿所在玄輝門東西私まへにとの為所に居給ひてといへる同し所なるへし

それよりとて　花兵部卿宮の御消息也　秘大將のかたよりときゝ給てみ給ふなり　弄兵部卿宮の文を大將のかたよりとてつかはす

しふ／＼にみたまふ　玉かつらの此文をみまうくし給ふ體なり

螢兵部卿宮

み山木にはねうちかはしぬる鳥の又なくねたき春にもある哉　弄大將のしほうなる體をみ山木とよめり

秘五文字は大將を云大將にしたかひてましますよとなり　河み山木は鬚黒大將をたとへたるなり紅葉賀に頭中將を源氏の中將に立ならひては花のかたはらのみ山木といへり是も玉鬘内侍にならへてみ山木と兵部卿宮のそねまれたるなり　聞み山木とよめるは大將の唐名を大樹といふ其心なり云々此義不審　私又なくは無二無三なり敵もなくといふなり

さへつる聲もみゝとゝめられて　河「百千鳥さへつる春は物ことにあらたまれともわれそふり行　花我そふりゆくといへる心に兵部卿宮かき給へり聞弄百千とりの歌の心述懐の心なり歌に鳥とあるよりいへり　秘百ちとりさへつる春云々　此歌の心なり

おもてあかみて　玉かつらの體なりみ山木にはねうちかはしなと兵部卿宮のおとしての給へるをはつかしく思ふ心も有へし

うへわたらせ給ふ　主上冷泉なり玉かつらの御つほねへわたらせ給ふなり　弄問主上内侍のかみの局に出御のよし槙柱巻にあり忍ひたる義にや又例ある歟　一苔いつれの御方へも行幸あるは内々の義なり公卿殿上人女房なとも御ともすることなり今の世にも典侍内侍の局へ御なりあるなり　秘此返事を思惟し給へる所へわたらせ給へるなりかきさま面白し

御かたちはいふよしなくきよらにてたゝかのおとゝの御けはひに　河けはひとは人のすかたことからをもいふなりあなかちに物いひけはひにかきるへからす日本紀に形勢とかきてけはひとよめる其心歟秘冷の御かたちいふへきかたなくきよらにてさなから源氏のおとゝにたかふ所なしと也

かゝる人は又もおはしけりと　弄源氏の如くにて又きよらなる主上をみ奉給ふ也

かの御心はへは　弄源氏の心也　花源氏の御事を玉かつらの心に思ひ給ふことなり　秘かのとは源也源は面はおやのことくにし給へりさてにけなき事と思ひし也

これはなとかさしも　此主上へ宮つかへもし給はん事は本意そと玉かつらの心中也

いとなつかしけに思ひしことのたかひたる　秘宮つ

かへに出給はて引たかへ大將になひき給ふ事を恨
の給はするなり
おもておかんかたなく　花かほのもちくるしき心也
かほをもてかくしてゝ玉かつらの體也
あやしうおほつかなき　秘勘（勅イ）定也
よろこひなともおもひしり　河從三位加階歟　秘玉
かつらの三位に叙する事ある歟　弄玉かつら從三
位し給ふ事　花内侍のかみの慶賀の事也　私云宮
つかへのらうもなくて加階し給へるとあり花義あ
やまれり
きゝいれ給はぬさまにのみあるはかゝる御くせなり
けりと　弄一本すくせ以前にも玉かつらのつれなく
文とも御いらへなとも申さぬをうらみ給ふ也　秘
玉かつらのくせとなり前に仰られし事の有しも御
返事をも申されさりし事有へし只今も同事となり
（主上冷泉）なとてかくはひあひかたきむらさきを心にふかく思
ひそめけん　河萬「紫ははひさす物そ椿市のやその
ちまたにあひしてやたれ　後拾「紫にやしはそめ
たる藤の花池にはひさす物にそ有ける　齋宮女御　新古
「むらさきの色に心はあらねともふかくそ人をお
もひそめつる延喜御製　花縫殿寮式に深紫綾一疋
紫草卅斤灰二石帛一疋紫草卅斤灰一石八斗　今案
紫はあくにて染むる物なりさてはひあひかたきと
はいへり　秘遠きちきりといはんためなり　紫は
灰を合する物なり下（人イ）心は三位に叙し給ふをいふな
り　私云引歌の紫ははひさす物そ云々諸抄に是は
かりを用るなり但紫の色に心は云々是又延喜の更
衣周子に給へる御歌なり尤引へし
こくなりはつましきにや　秘うすきちきりそと也
弄こくなりはつましきにやと主上の御詞なり引歌
まてもなき歟心はかり歟
いとわかくきよらかに　主上冷泉の御さまなり
たかひ給へる所やはある　花源氏君の御かほをさな
からうつしたれは其人と思ひなすらへて返事を申
給ふ也　秘六條院にたかふ所ましまさゝれはふと
源とおほえてかく返事を申給へる也　弄源氏に主
上のたかひ給はぬにより玉かつらのなれて有しを
おもひよそへて御いらへ申給ふ也
宮つかへのらうもなくてとしかゝゐし給ふ心にや
秘此歌の注を草子地にかく也

返玉鬘いかならん色ともしらぬむらさきを心してこそ人は
そめけれ　秘奉公の勞もなくて昇進の事なり　弄三
位の事をよめり　花三位よりは紫の色を用るゆゑ
に加階の事をよめるなるへし　秘心してこそとは
みかとへ對したてまつりてよろこふ心をのへたる
なり
いまよりなん思ひ給へしるへきと　玉かつらの詞
秘向後こそ一段と奉公申へけれと也
うちゑみて　みかと也
その今より　秘勅定也　いまよりは思ひしりても曲
あるましきさなり髭黒の物になり給ひつれは也
うれふへき人あらはことわりきかまほしくなん　私
云うれふへき人とは髭黒事歟かく玉かつらの今よ
り思ひしらんとの給ほとにいか程の事ありとも髭
黒の存命は有ましきなりそのうへのことわりを聞
たきと仰らるゝ心歟　秘此事を聞しる人にきかせ
られたきと也　弄人に此愁をことわらせはやとな
り　私此事を聞わけてになる人あらは今より思ひ
しらんとの給ふことわりをいはせてきかはやと也
まめやかにわつらはしけれは　みかと冷の眞實にう
らみ給ふさまのあへしらひにくけれは玉かつらも
實々しくたはふれかゝりなとし給はぬやうに用意
したるなるへし
いとうたても　玉かつらの心なり
おかしきさま　玉かつらの物やはらかなるさまをみ
えたてまつらしと也
むつかしき世のくせ　弄世人の心のくせのむつかし
きと也　私むつかしくうらみ給ふ事はみかとも源
氏もおなし物なれはかやうに玉かつらの思ひ給へ
るといふ歟
やう〳〵こそはめなれめ　みかとの御心也　秘追々
にもとおほしめすなり
大將はかくわたらせ　みかとのわたらせ給へるを髭
黒の心もとなく思ふなり
しつ心なけれは　河無閑心
いそきまとはし給ふ　秘退出の事をいそき給ふなり
私云いそきふためくなといふ體の詞なりあまりに
いそくとてあはてまとふなといふ類なるへし
みつからもにけなき　秘此人故に我身も時宜にたか
ひてはと也　弄よからぬ事も出來ぬへき心玉かつ

らの心とみゆ私玉かつらの心なりみかとの御心かかりていかやうの事もいてきてはと思ふから内すみものとかならす退出したき心のおはする也秘の義おやまれり

まかてさせ給へきさま　是よりは玉かつらの退出有へき様をさま〳〵に思ふ髭黒の心かまへをいふなり

ちゝおとゝなり　秘内大臣也　内大臣なとゝ申合て退出有へき事をかまふ事なり

さらは物こり　秘勅定也　今久しく御抑留あらは重て參内させぬ事もそあるとの御遠慮なりいたしたてぬ人もてとは髭黒を心にもちて仰らるゝなり

人よりさきにすみにし　秘勅語也　玉かつらに心かけ給ひし事也

けしきとりしたかふよ　髭黒の心をはゝかる事を仰らるゝ也

むかしのなにかしかためし　河後撰云大納言國經朝臣の家に侍ける女に平定文(貞イ)いとしのひてかたらひ侍て行末までちきり侍ける比此女にはかに贈太政大臣にむかへられてわたり侍にけれは文たにもかよはすかたなくなりにけれはかの女の子の五はかりなるか本院の西のたいにあそひありきけるをよひよせてはゝにみせたてまつれとてかひなにかきつけ侍ける平定文「むかしせしわかかねことのかなしきはいかに契しなこりなるらん　返し「うつゝにてたれちきりけんさためなき夢路にまよふ我はわれかは　秘おさへてもとゝめ給へき物をとなり平貞文か歌　河海に見えたり　弄平貞文むかしせしわかか(かれことイ)からねと云々

はしめよりさる御心ならん　はしめより御心かゝらぬ人なりとも玉かつらはとの人を御覧しては御心とまるへきに是はもとよりおほしめしかけたるうへにちかまさりを一きは御心にかゝりておほすなるへし

ひたふるにあさきかたに　今よりうちつけに御心のうちなとをあらはされん事はあさき事と思ふへしとされはおほしかへして心ふかくちきりて退出させたまふと也

なつけ給ふも　懐ナツケル也　前にやう〳〵てそはめなれめこ有し同し御心なり

かたしけなう　かやうにおしたち給はぬをかたしけなう玉かつらの思ふ心歟

われはわれとおもふものをとおほす　秘の內に三光の注す　弄帝の御心とみゆ　秘主上の御心なり　箋玉かつらの心なり　私云みかとの御心はかやうに心ふかくちぎりて先退出させ給ふを玉かつらのかたしけなく思ふをみ知給ふてわか心のうちには漣々になつけおきてかくよそ〳〵にては過さしと思ふ心のある物をとおほすといふ心歟但案之に箋に玉かつらの心と注せり其義ならは此みかとのは御あへしらひをみしりて玉かつらの御心にかたしけなう思ふなりさてわれは我とは貞文か歌の返しに女のよめる心に玉かつらのなりて我はわれとおもふといへるにや猶可決之猶又是を案するに昔の定文か女の返しははや定文とむかし契て後の事なれは我はわれかはとよめる也これは鬚黑のぬしつかれたれはさやうの事はみかとのおほせにてもなるましき事なれはわれはわれと心をたてゝ思ふと玉かつらの心中におもへるよしをいへるにや此段如何

御てくるまよせて　秘內侍のかみ退出なり弄　河西宮記云　輦親王大臣中老宿人有此息女親王女御尙侍每出入仰開門吉上云々

こなたかなたの　秘源內大臣の人達なり

えおはしましはなれす　玉かつら退出の時分まてみかと還幸なき也

かういときびしきちかきまもりこそ　河近衛大將なれはよそへて仰られたるいと興あり　弄近衛大將をいへり面白かきさまなり　弄近衛大將によれり

九重にかすみへだてては梅の花たゝかはかりもにほひこせとや　秘只今退出有つては雲上はるかに思ふへきとなり　私かすみへたてはとは鬚黑い事をよみ給へりかやうにきびしくまもりては又これはとの參內も有ましきかとなりかはかりはかくはかりなり香はかりにとそへたる歟

ことなる事なき事なれは　御歌のおもしろからぬを草子地にかけり御けはひありさまにもてはやされて其時はことからのよくてそ有けめと也

野をなつかしみあかいつへき　河「春の野にすみれつみにとこしわれそ野をなつかしみ一夜ねにけり

秘舊(同イ)歌をひけり玉かつらの心は一夜の契なとは有もすへき事となり　箋曰主上の御詞なりかたしけなしといふより玉かつらの心なり不審也　私云是はみかとの御詞歟一夜なとはあかしもし給ふへき事そとなり

をしむへかめる人も　秘大將なりこれもことわりとなり　花野をなつかしみあかいつへきよをとは侍侍の心也をしむへかめる人とは大將の心をいふ也いかてか聞ゆへきとおほしなやむは御門の御心に今よりはいかてか聞ゆへきとおほしなやむを見奉れは侍い忝と思ひ侍る也　私みかとの御身を鬚黒になしてみれは又ことわりなりとなりこれ我身をつみてといふなりすみれつむといふ詞によれる歟此義可然歟

いかてかきこゆへき　秘今行末はいかなるたよりにて仰かよはし給ふへきそとおほすなり　又はいかにしてかは聞えもかよひ給はんとおほすなり

いとかたしけなしとみえたてまつる　みかとのおほしなやめるさまを玉かつらの見知りてかたしけなしと思ふなり

返玉鬘　か(はイ)はかりは風にもつてよ花のえに立ならふへきにほ(いろ)ひなくとも　秘玉かつらの歌なり香はかりなりさすかに忘なはてたまひそといへる心のすこしはあるなり　立ならひ奉るへき匂ひはなくとも風のたよりはかりなとはおほしめし忘れそといへる歟いかてかきこゆへきとあるによつてかくいへる歟

かけはなれぬけはひ　玉かつらの返しにみかとおほしなくさむるなり

かへりみかちにて　みかと還御のさま也

やかてこよひかの殿にて　内裏よりすくに鬚黒の里亭へ玉かつらをわたすへしと也

かねてはゆるされ有ましきにより　かねて如此申たらは源も内大臣も同心あるましきと思ひて内々に思ひまうけて俄にとおほすなり

いさみたり風の　河みたり心ち同事歟

たひらかに　大かたなるやうに申なすなり

父おとゝにはかなるを　花致仕おとゝなり

きしきなきやうにやと　俄に何の儀式もなきを父内大臣は本意なくおほすなりされ共是ほとに成たる事を今いひさまたけてもいらぬ事と思ひなして大

将にしたかひ給ふなり
もとよりしたい（しんと云やうによむへし）ならぬ　河不進退　秘源の御心をか
ね給ゆゑ父内大臣のまゝにならぬといふなりされ
はともかくもなり存分を達しては申へからすとの
義なり
六條院そいとゆくりなくはいなしと　源はおほしは
なれぬ御心あれは　此度すくに髭黒にむかへ給ふを
一段はいなくふほゆともさもの給かたきなるへし
女もしはやくけふり　河おもはぬかたをいふ心なり
河「すまのあまのしほやく煙風をいたみ思はぬ方
にたなひきにけり　秘思はぬかたになひく心なり
引歌すまのあまの云々　或御説髭黒を思はぬかた
になり
ぬすみもていきたらましと　弄大将の心なり闕　秘
大将の心なり　箋曰玉かつらの心也　私云只大将
の思ふ人をぬすみえたる心地して心のおちゐたる
といふ詞とみえたり
かの入ゐさせ給へりしことを　花みかとの御事也
みかとの冷玉かつらの御つほねへおはして程へし
事を髭黒のふかくえんしなとし給なほ〳〵しきを

玉かつらのいよ〳〵はら立しくて心とけすけしき
をあしくみえ給ふとなり
かの宮にも　秘式部卿宮也弄花
さこそたけう　式部卿宮のはしめは髭黒のよりもつ
かぬやうにあへしらひし事をいへりされとかきた
え音つれねはおほしめしわつらふなり
たゝおもふことかなひぬる　秘玉かつらの事なりも
との北方なとの事は髭黒の思ひも出給はす玉かつ
らをえて此かしつきにのみ心をいれて過し給ふと
なり
大殿は　源氏君也
さてもつれなきわさなりやいとかうきは〳〵しうも
おもはてたゆめられたるねたさを人わろく　秘たゆ
められはたはかられたると也きは〳〵しうは物に
きはをたてたるなり源の御心にかやうに俄にむか
へとられんともしらす玉かつらのことをのとかに
思ひて過しゝにほいなく成ぬる事を悔しく戀しく
おほすなり
すくせなといふものおろかならぬ事なれと　かやう
に成行も宿世なとの定りたる事なから源のあまり

心の咎なるより我なから物を思ふとおほさるゝ也
大將のおかしやかにわらゝかなるけもなき　源大將はさすくにて和したるかたのなきなり
はかなきたはふれことも　大將のくつろく處もやはらいたる所もなき人なるゆゑにたはふれかましきふみなともえおくり給はぬなり
雨いたうふりてのどやかなる比　永日春雨の時分玉かつらの方へわたりてつれ〳〵をもなくさめし事を思ひいてゝ文を送り給ふなり
かつは思はんことを　右近に忍ひてつかはし給ふさへあるに文のうちけさうたちてはいかゝと何事もえかきつけ給はぬとなり
たゝおもはせたる事　心にふくませたる事ともをかき給ふ也
かきたれてのどけき比の春雨にふるさと人をいかにしのふや　弄源氏の事を思ひいつやとなり　秘さりとも源をは忍ひ給へきとなり　私云心はあらはなり古郷人とは源の我身をさしてよみ給へるなりいかにしのふやとは源をは忍ふや又忍はすやいかにといへる句法なるへし

つれ〳〵にそへてもうらめしう　源の文の詞なりつれ〳〵にもよはされて一しは戀しさのまさる事をいへるなり是もつれ〳〵にそへてもと心に戀しさをこめていへり
いかてかきこゆへからん　秘いつかきこゆへからんとなり
ひとまにしのひてみせたてまつれは　源の文を大將のおはせぬひまに玉かつらへ右近かみせたてまつるなり
うちなきて　玉かつらの體なり
程ふるまゝにわか心にも　玉かつらの心にも源の有さまは戀しく思ひ出らるゝなり
まほにこひしやいかてみたてまつらんなとはえの給はせぬおやにて　源は玉のおやの分なから實父ならねは戀しやいかてみたてまつらんなとはえの給はぬと也
けにいかてかはたいめもあらんと　源の文にいかてかきこゆへからんとあるによりてかく玉の思ふなり
とき〳〵むつかしかりし　源のたはふれことのたま

ひし事也
この人にもしらせ給はぬ　秘右近也聞
右近はほのけしきみけりいかなりけることならんと
は　右近は源の折々みたれ給ひしけしきをみしるな
り　弄右近も實否をしらさるなり
おほつかなくやはとて　返事を申されすは不審あら
んとはつかしく思ひなからかき給ふなり
返玉かつら
なかめする軒のしつくに袖ぬれてうたかた人を忍は
さらめや　河未必（ウツタヘ）日本紀或　イ遊仙窟　宇多我多　萬十
五「はなれそにたてるむろの木うたかたも久しき
年を過にける哉　萬十五「あまさかるひなにある
我うたかたもひもときかけておもほすらめや　萬
「鶯のきなく山吹うたかたも君か手ふれぬ花ちら
めやも　後撰「思川たえす流るゝ水の沫のうたか
た人にあはて消めや伊勢　定家卿說云うたかたと
は眞名に寧なとつかへる詞のやうに思ひよる事也
さなくてはいかてかはと云由也それを此歌一をみ
てうきたる人と云よしにうたかた人と六字につゝ
けてよめりと云說はふかくみわかてしりかほにの
へやる說なりたゝ四文字の詞也此物語にもあなか

しことゝいや〳〵しくかきな　給へりと云々いやい
やしくとある詞に心うきたる人といはんたよりな
かるへし以上僻案抄にみえたり　順說云うたかた
とはうたてと云心歟是を水のうたかたにそへたる
也　一說云さためなき人なり又すこしもといふ心
なり水原抄　新千載「思川うたかたなみのきえか
へりむすふ契は行衛たになし親行　此道祖師歌也
尤足潤色　弄僻案抄の義擧之　萬「はなれそにたて
るむろの木云々暫時なり　鶯の來鳴山吹うたかた
も云々是も暫時也　秘うたかた義さま〳〵なり河
海にみえたりいつれも只暫時の心なり　私云此歌
心はよく聞えたり五文字は長雨をかり用るなりう
たかたは寧と云字の心によく叶へり寧人を忍はさ
らめや人を忍ふ物をといふ落着なりうたかた淸ひ
と濁はわろし又暫時の心にても叶へき歟しはしと
云心なり　聞しはし也暫時の心ならはしはしの間
も人を忍はさらめやと云義歟
程ふる比はけにことなるつれ〳〵　かやうなる折ふ
しは我も別してつれ〳〵もまさると也　河「君みす
てほとのふるやのひさしにはあふことなしの草そ

おひける此歌に及さる歟
いや〳〵しくかきなし　河恭尚書禮日本紀　うやまふ
心なり　秘敬也
ひきひろけて玉水のこはるゝやうに　河「雨やまぬ軒
の玉水數しらす戀しきことのまさるころかな」な
かれ行末せきとむる玉水のこほれもあへすおつる
なみたか　秘軒のしつくのことある歌なれは面白
きかきさまなり　聞書には引歌あり秘には引歌の
沙汰なし
人もみはうたてあるへし　源の我なから人のみとか
めてはいかゝとおほすなり
かのむかしのかんの君を　秘朧月夜なり其世の事も
思ひ出給ふなり朧月夜も内侍のかみ玉かつらも内
侍のかみなり宿世いかにとなり
朱雀院の后の　弘徽殿の太后朱雀院の母后なり
さしあたりたる事なれは　花朧月夜の事はむかしこ
となり玉かつらの事はいまさしあたりたる物思ひ
なる心なり　秘先時にあたる事なれは是は堪かた
きと也　弄今玉かつらの事は時にあたる事にて猶
かなしとなり聞

よつかすそあはれなりける　世にもあるましき事の
やうに思はるゝ心歟あまた所にある詞なり
すいたる人は心からやすかるましき　源のわれと心
を隨分をさむるさへかくのことく心のまゝにすい
たらん人は心くるしきことはかり有へしと察し給
ふ也
いまは何につけてかは　秘自今以後は何事にか心を
みたるへきと也
にげなき戀のつまなりやと　花玉かつらの戀しきを
の給ふ也
さましわひ　秘思ひさますなり
御ことかきならし　源のひき給ふなり
なつかしうひきなし　玉かつらのことひきし體を又
思ひいつるなり
あつまのしらへをすかゝきて玉もはなかりそ　河平
志多加戸加毛佐戸支井留波良乃伊介乃也多萬毛波
萬禰奈加利曽於比毛須加禰也萬禰奈加利曽也風俗
上野歌
弄和琴五拍子にはすかゝき三拍子にはかたかきな
と云事ありき云々玉藻の歌此時えんある歟玉かつ

らを纏る時也かりのこのこと末のにあり其故歟
聞風俗上野歌なり此末にかりの子の事あり此行末
也　秘玉もはなかりそ此事ふと書出したる不審な
り心有へし本別に朱點あり河如此　心は只今ひき
はなれても又必逢へき心をふくめる歟　案之後漢
杜詩傳將帥和睦士卒皃藻注言觀悦如皃戯水藻とあ
り此心なるへき歟　弄花本勘入之　或後漢杜詩傳
云イ　將イ
陛下起兵十有三年将云々御説にも後漢書に皃藻觀
悦す此やうにひきわかれたりとも皃と玉藻のやう
にちきりかはさんと也
こひしき人にみせたらは　源の只今の體を玉かつら
のみ給はゝなひきもし給ふへきとほめていへるな
り源のさま優なるへし
うちにもほのかに　御門冷も玉かつらのかたちをあ
かすおほすなり
あかもたれひさいにしすかたをと　河「立て思ひゐ
てもそ思ふわきも子かあかもたれひきいにしすか
たをいま一首不載之と也　秘引歌河に同し退出の
時を忘れ給はさるとなり
御ことくさ　みかさのあかもたれ引の歌を常の御く
ちすさひにし給ふと也
御ふみはしのひ〳〵に　みかと冷より玉かつらへの
御文なり
身をつき物に　宮つかへの事は玉かつらの本意なり
されともかやうに髭黒のぬしつき給へるをうき事
に思ひてかやうの文かよはしなともし心おもしろ
からぬやうにて風流かましくしるしたる返事なと
をは申給はぬとなり
猶かのありかたかりし　私源なり　弄源氏の御心を
思ふなりおやめきはくゝみ給し事かた〳〵忘れぬ
となり
先みるかひありと　玉かつらのことを源の思ひ出る
なり
春の御まへをうちすてゝ　秘西のたいへわたり給ふ
なり
呉竹のませにわさとなうさきかゝり　秘山ふきの事
おもしろし
色にころもをなと　河萬「かたみなる色に衣はなりぬ
れと花の香はよに常ならなくに　六帖「くちなし
の色に衣をそめしよりいはて心に物をこそおもへ

秘河海にひける内六帖の歌相叶歟又續古今讀人不知
「思ふともこふともいはし山吹の色に衣をそめてこそきめ此歌可然歟玉鬘をは山ふきに比したる也弄續古今の歌をひけり　聞に六帖の歌をひけり
源おもはすに井手の中みちへたつともいはてそこふる山ふきのはな　玉かつらをこれほと俄によそ／＼に成給はんとは源のかねて思ひ給はさりし也されともさやうにの給ふへきかたもなけれは山吹の色につけていはてそこふるとよみ給ふなり中みちは玉かつらとの中也　諸抄に義なし　河中路　河萬十「山吹をやとにうゑてはみるとに思ひはやます戀こそまされ　後拾「あちきなく思ひこそやれつれつれとひとりやゐての山吹の花和泉式部　大方玉鬘上のほこりかなるかたち山吹の花に思ひよそへらるゝよし所々にみえたり玉かつらの色々のきぬくはりにもくもりなくあかき山吹のほそなかを此御れうにとあり又野分の朝の朝かほをも山吹のさきみたれたるさかりに露かゝれる夕はへにたとへたり河只今も源氏春の御まへをうちすてゝこなたにわたりて此花をもてあそひおもひ出給ふにや

かほにみえつゝ　河萬六帖「いはぬまをつゝみしほとに口なしの色にやみえし山ふきのはな　水原抄云非指證歌心歟目前の山吹の花のかほにみえて思ひよそへられたる心歟　案之非山吹の歌有本歌人丸集云「夕されは野へになくてふかほとりのかほにみえつゝわすられなくに　秘おもかけにみゆるなり引歌夕されは野へに鳴云々弄同　私此山吹に對して玉かつらの面かげにみえて忘られぬとなるへし河海に玉かつらを山吹にたとへたる事をかけり面白し　或類字源語抄には古今なとの心にはあらす只今みる山ふきの花のかほにみえつゝといへる歟愚案猶心ゆかすや　萬葉八「たかまとの野へのかほ花面影にみえつゝいもは忘れかねつも此歌は家持か坂上大孃につかはす歌也是は叶てこそ侍らめ本歌の心なとにてもなくてたゝ山吹のかほにみえつゝといはん事いかゝ此歌は秋の花をいへる歌なり春日に山吹に引かへていへる心一きは面白くこそ聞え侍れかほ花とは容花とかけりかほ鳥の注にくはしく見えたり

かくさすかにもてはなれたる事は　花玉かつらの君

にはなれてくやしき心なり　弄 源氏の心をいふ玉かつらの事を誠にかけはなれたる事は今そとなり私云此詞いさゝか心得かたしもてはなれたる事とは年月一所に心やすく御らんしつれとももてはなれてまとしくみたれむとおほしたることはなかりし也さやうに思ひ給はゝ心やすく有ぬへかりしをさもあらて過し給ひしかいまかやうに引はなれてかく眞實公界の人に思ひかけたるやうにまことしく戀しくおほし出ることをいふとみえたりまこと（ことイ）に物思ひともなるはかりなるをもてはなれたることは此たひそおほし出るといふなるへし如何

けにあやしき御心のすさひなるや　聞 草子地　聞 宮つかへに出して時々いたしたてまつらんとの心にてありしにたかひたると也　私是は草子の地なり此心は心やすくみ給ふへかりし時はさほとにはみたれ給はて今物思ひとなるはかりおほくなけくはあやにくなる御心かなと評したるなるへし

かりの子のいとおはかなるを　秘 鳧の子也聞　河 鴨子西宮記　献鴨子事在之かりの子ともいへり「あしねはふうきぬにすたくかもの子はおやにまさると聞はたのもし是はかるの子と云々然は此源氏にはかもの子かりの子と二やうの本あり只かもゝかりもかるの子なりと心得よと師に承所なりうつほの物語にあて宮をさねたか（たゞイ）の宰相思ひかけて「かひのうちに命かけたる鴈の子は君かやとにてかへらさらなん　鴈の子にかきつけやりたりとは云々詞のつゝき相似たる歟　弄 問云鴨の子の事也云々かもをかりと云如何又かるの子なるへしともあり鴨の子をかるの子といへる心如何一勘かるかりは五音通せり無子細歟鴨の子をかりの子ともかるの子ともいへる也　聞 鴨の子を似せてしたる菓子などなるへし卵のなりなるへしとあり此事猶可尋なり

御ふみはあまり人もそめたつるなと覺してすくよかに　源氏の君の文の風流めかぬなり

おはつかなき月日　秘 文の詞

御心ひとつにのみ　あまり御疎遠なるとうらみなから御心のまゝならぬよしをは分別したるとなりされは事たてたるついてならては對面あるましきことよとおやめきてかき給ふと也

源 おなしすにかへりしかひのみえぬかいかなる人か

手ににきるらん　弄かへりし巣に又みえぬ事をよめり　秘されたる歌なりかへりし巣に又見えぬことをよめり　閑鳥は同し巣へ又かへらぬ物なりかひこの一たらぬ心なり　九源の我方におきて同し巣なと思ひしにかやうにわれはいかなる人の手ににきるそと也

なとかさしもなと心やましう　秘さしも契し事のたかひたるを心やましきといへるなり　私なとかさしも人の物になしつらんと心やましきといへるなりいかなる人のてにゝきるらんといふにかけていへり人にはとられしもまゝにて有つる物をと心やましきなるへし

大将もみたまひて　源の御文を鬚黒のみたるなり

女はまことのおやの　花詩云女子有行遠父母兄弟といふ心なり　秘實父にさへ女はさはなきものをと大将の實法の心よりつらくの給ふなり

ましてこのおとゝの聞えし　源をさしていふ

にくしときゝ給　鬚黒の源のことをかくの給を玉かつらのにくゝ思ふなり

御かへりこゝにはえ聞えし　玉かつらの返事かきにくゝし給ふ也

まつきこえんとて　秘大将のかき給ふ也

かたはらいたしや　返事を大将のうえも玉かつらのかたはらいたく思ふなり

返鬚黒の玉かつらにかはりて
すかゝれて數にもあらぬかりの子をいつかたにかはとりかへすへき　弄手にゝきるとよめるにこたへてもとよりかくれてこそあれとよめり大将の玉かつらにかはりて返しよみたる心は源の心中をは推しなからたゝ大かたのことになして細々にも源氏の御方へもまゐらせ奉らぬなとやうによめり　秘もとよりすくれて數ならてある身なれはとなり大将のかくよみ給へる數ならねは細々に源へ參らせ給ふ事もなきといふ心也

よろしからぬ御けしきにおとろきて　秘源にかしこまりたる心なりすき〳〵しやとは戯れなり弄　閑よろしからぬ御けしきとは此返事を大将のかはりてし給ふも又源のことを何かとつふやき給ふと玉かつらの心にかなはぬ故にけしきのよろしからぬに大将のおとろきて只すき〳〵しやとたはふれにかきなしたる文の詞なりとありよろしからぬ御け

しきにお・うきてとは文の詞にわらすと云々　私
云源の文の詞・おほつかなき月日もかさなりぬる
を思はすなる御もてなしとうらみきこゆると御心
ひとつにのみはあるましうとあるは大將のかくう
と〳〵しくもてなすとの給へる御ふみの詞なりそ
れをよろしからぬ御けしきどいへりされは大將の
玉かつらにかはりて此のことわりを申さんとて御
返事を申事は・き〳〵しやとかきたる文の詞なり
とみゆ聞書　義不審
この大將のかゝるはかなしてこと　源の詞なり　秘此
文なとかき給ふ事はめつらしとなり
心のうちにはかくらうしたる　源の心中には髯の領
しはてゝいひたるをにくしとおほすなり
かのもとの北方は　大將の本妻式部卿宮の御女也
いよ〳〵ほけらかれて　秘しれはおろかなる也弄
物のけのうへに物思ひのそひたる故なり
大將殿は大かたの　北方へは大かたのおもてむきの
事はかはらすし給也君たちをはむかしのとく別し
て懇にはくゝみ給ふとなりまめやかなるかたのみ
は時々につけたる御あつかひなり

姫君をそたへかたく　秘まき柱君なり弄　姫君中の
あね君とみえたり大將別しての愛子なり
わかき御心のうちに　秘眞木柱の御心なり
此父君を誰も〳〵ゆるしなう　髯黒を式部卿宮かた
に色々恨給うて連々に中のへたゝりゆくやうなれ
はまき柱の君父大將に逢給はんこともかなはぬか
心ほそく覺え給ふなり
をとこ君たち　前にありし二人なり皆まき柱の弟な
り
かんの君の御ありさま　弄大將の息兄弟物かたりし
給ふ也
明くれおかしき事を　玉かつらのありさまをいふな
り
うらやましう　弄まき柱の心なり　まき柱君玉かつ
らのあたりをむつひたく思ふなり
やすらかにふるまふ　男君たちの細々參りかよふを
うらやみていへり
あやしうをとこ女につけつゝ　秘草子地也聞　男に
は帝冷泉兵部卿源氏君なとも忘す覺す女にはもと
の北方大北方此眞木柱なとも事こそかはれ玉かつ

らゆゑに物をおもふ人也
そのとしのしも月に　弄源氏卅八歳の十一月也玉か
つら髭黒の男子誕生の事又末の詞に秋の夕の事わ
り十一月の事をは先しるしたるはかりなり　秘男
子誕生なり是は十一月の末のことなれは先いひ出
しておくなり此巻は秋までのこと也聞同　此巻の
末にいたりてみるに此巻は源卅八歳の十一月まて
の事をかけるか正義なり此末の秋の夕の事は近江
君の事につけていつそやさやうのことありしと思
ひいてゝかける段なり猶秋の夕の所に記之畢
そのほとのありさまいはすとも　誕生の時の體又惣
別大將のおもひかしつき給ふ事のさまをいふ歟
父おとゝも　秘内府の事也
ゐのつから思ふやうなる　自然によきやうなる宿世
と玉かつらの事をうれしく内府の思ふなり
わさとかしつき給ふ君たちにも　秘玉かつらは内大
臣のわさとかしつき給ふ弘徽殿なとにもおとり給
はさるとなり　弄玉かつらを内府の女たちにもお
とらせすとなり
頭中將もこのかんの君を　柏木也

さすかなるけしき　花六條院の御おしへなれは一か
となる心なり　私云玉かつらを柏木のなつかしく
又源の御かたにおはしつれは自餘の兄弟よりもち
とかとをみせて心もちひのあるなり所せき慇懃に
する心なり
宮つかへにかひありて　今男子をうみ給へるにも宮
つかへならは宮をもまうけ給ふへき物をとなり
今までみこたちおはせぬ　今上冷泉也いまた皇子お
はせぬなり此玉かつらのうみ給へる君もし宮つか
へにて若宮ならはいかにめいほくならましと柏木
のあまりの事をさへ思ひての給ふと也
おほやけことは　秘内侍のかみにて其職を里にてし
給ふ也
まゐり給ふ事そ　秘内侍のかみは必しも宮中にさふ
らはさることもあれはなり　花ないしのかみの職
につきたる事はかはらすしり給へるとも内へ參り
給ふ事はあるましきと也
さてもあるへき　かやうにもあるへき事かと也草子
地なり
ないしのかみのそみし　秘近江君なり

色めかしう　近江君好色也

おとゝのいまは　内府の制禁をもきかぬなり

秋の夕のたゝならぬに　秘是はたゝ前の事を思ひいてゝ後にかきたりとみゆ　私案之此卷源氏卅八歳の秋まてといへるは諸抄にあやまれり其故は十一月に玉かつらの男子をうみ給へるは當意の事をかけりとみゆ其程のありさまいはすとも思ひやりつへき事そかしといひ柏木の若宮にておはせはいかにめいほくならんと思へるも皆その時にあたりての事なり聞書にのせたることく此段は前にありつる秋の夕の事を思ひいてゝ後にかきのせたる物なりたゝ卅八歳の十一月までをしるせりと云義尤しかるへき者也

宰相中將も　秘夕霧也

れいならすみたれて　夕霧の常にみたれぬ行跡を思ふへし　秘平生の實法をいへり弄

人よりことにもと　これは弘徽殿にさふらふ人々のみな夕霧をほむるなり

いとさかなけににらみて　近江君を引いれんとする人をにらみてなり

あふなき事や　秘河無奥也弄同花淺事也

此よにめなれぬまゆ人　秘夕霧也　近江君のこれになくといひてめつるさまなり

こゑいとさはやかにて　さは〳〵とあさやかにつくろはすいひたるさまなり

近江君 おきつ舟よるへなみちにたゝよはゝさほさしよらんとまりをしへよ　河「みるめかるかたやいつこそさをさして我にをしへよあまのつり舟　聞近江君の夕霧によみかけたるなり是は雲井鴈の事を心にもちてそのおもひかなはすはわれもおなし兄弟なるほとにさほさしよらんとわか事をよみかけたるなりおきつ舟よるへ波ちとは夕霧の雲井鴈の事をいまたよるへなくはとなり

たなゝし小舟こきかへりおなし人をやあなわろや　河「ほり江こくたなゝし小舟こきかへりおなし人をや戀わたるらん　聞夕霧の雲井の鴈をのみこひわたり給ふはあなわろやといふなりわれをおもへといふ心なり　私云古歌の詞なとにていへること葉も一句なとほのかにはかきたるはよしてれは歌一首を三句まていへるはしなゝくみゆ是又をしへ

なるへし
この御方にはかうやうゐなき事　弄此女御なとの御方にてはかゝる人は思ひよらぬをと也　秘夕霧の心なり此女御の御方にはかく用意なき人は有ましき物をさては此聞及し近江君なるへしと推し給ふなり

返夕霧 よるへなみ風のさわかす舟人もおもはぬかたに磯つたひせす　弄夕霧返しなり舟人は近江君をいふにや　秘舟人は近江君をいふなり思はぬかたへよる事はなき物をと也はしたなめたると也　私云よるへなくて風のさわかす舟人とは夕霧の我身の事成へし風にさわかれても思はぬかたへはよらぬとなりはしたなかめりとや　聞あまり引きりたる返歌と也　或御説草子地夕霧のはしたなくの給ふとかける面白し

かきおきけるよ　花鳥にみかとのごへんじを尙侍のかきおきたるよといふにや但一本このことははなしとあり

ふりはへ　弄花にわさとの心とあり

うちはへ　弄花にうちたへなとの心とあり

已上或抄奥に勘之

岷江入楚第三十二　梅枝

卅九歳　太政大臣

春宮御元服可爲二月明石姫宮御裳着同前事

正月卅日源氏君合薫物給事

二月十日兵部卿參六條院給事

槿齋院送薫物於源氏給事瑠璃器ニ梅枝ニ付

御方々合薫物各被奉源氏兵部卿宮判給事

齋院黑方　源氏侍從　紫上梅花　花散里荷葉　明石上薫衣方

終夜合物音遊給事　明朝兵部卿宮歸給事

明石姫君御裳着事　於六條院中宮御方有此事

廿餘日春宮御元服事

明石姫君入内延引四月事

御調度色々御草子事

御方々手本事

源氏書草子事

兵部卿宮參六條院給事　宮御草子持棒イ參給事

人々手跡事

兵部卿宮召寄嵯峨帝古萬葉集延喜古今集等給事

內大臣殿思煩雲居鴈姫君事

源氏君教訓御子宰相中將給事

內大臣殿與雲居鴈語給時分自夕霧宰相中將有御文事　女房有返事

梅枝　以詞爲卷名　秘　卷名以詞號之

河 卷名薫物合之後辨少將取ニ拍子一歌ニ梅之枝一梅か枝は催馬樂をうたへる事也　秘 源氏卅九歳正月の事也　江次第を亂筆せし也可書直　弄 源氏卅九也

御裳きのこと　河 明石中宮着裳十二歳也　河 うつほ物語に藤原君の女あて宮十二にてきさらきに裳き給ふよしみえたりあかしの姫君の御もき十二歳也うつほのあて宮の事を思ひて書り明石の中宮十二歳なりうつほのあて宮も十二歳にて裳きのことありなすらへかけるにや

春宮もおなしきさらきに御かうふりのこと　秘 今上也十三歳也　冷泉院春宮時應和二年二月廿八日御元服　續日本紀曰延暦七年二月甲子皇太子加元服其儀天皇皇后並御前敕令大納言從二位兼皇太子傅藤原朝臣繼綱中納言從三位紀朝臣船守兩人手加其冠于時大貳道雅朝臣正月晦日成此正月　卷正月同時　即執笏而拜　花 春宮は朱雀院の皇子今年十三歳なり御元服は昔よ日のほとゝ下にいへり是又冷泉院の二月の例を摸せり

やかて御まゐりも　明石の姫君の入内も則あるへしとにやとなり春宮へなり

たきものあはせ給　源の薫物調合也

大貳のたてまつれる　秘 太宰大貳は一任五ケ年にてあらたまれるなりされはすまの卷にいへる大貳にては有へからすされとも其時奉れると云義もあるなり　弄 秘に勘物云大貳は必す潤色ある故に御みやけを必す進する例なり江帥匡房の御みやけに大學寮の孔子の十哲の圖を進せられき　河 樹下集云大入道殿にたき物あはせてたてまつれる時金のたち花の中に道雅朝臣于時大貳「末の世にふれはなりけり橘の昔の香にはにるへくもあらす

猶いにしへのにはおとりてや　秘 新渡の香具とも也

にしきあやなとも　香具よりはしめ錦綾なともふるきほとみ所あるよしなり

ちかき御しつらひの物のおほひしき物しとねのはし

河 物覆數設茵詩文茵鴨穀　注 茵虎皮也はしは端緣也

故院の御代のはしめつかたてまうとのたてまつりけるあやひこんき　河 高麗人光源氏相したりし人なり

綾緋金錦金を織付たる錦也金襴の類歟　秘 源を鴻

臚舘にて相せし時たてまつりし物共なるへしひこんき金襴なとの類なり被金綺とかけり　私比金錦なと書り

御らんしあてつゝ　其物々に似合たる様に御覧しはからるゝ也

このたびのあやうす物　河綾羅也　花故院の後に又高麗人の來朝せること有へきにや此たひのあやうす物といへり二條院の御くらよりとり出され次第に人々にわかち給へるにや　弄大貳の奉れる也　秘大貳の奉れる新渡の物とも也

かうともは　秘沈香也弄　私云必沈香はかりにては有へからさる歟如何

二くさつゝあはせさせ給へと　秘あなたこなた分ちて薫物を合せさせ給也　私云昔今の取ならへとあれは薫物も香くをわかちて二種つゝ合せ給ふ歟黄私の昔今取並とは古き新しき方歟いかゝ

おくり物かんたちめのろく　是は御もきの時の事歟

かなうすのおと　河鐵臼也香細擣着和供入鐵臼擣五百杵云々茅山太平觀記

おとゝはしんてんに　源氏六條院の寢殿にてたき物をあはせ給なり

そう王の御いましめのふたつのほう　河古本に大畧そむわうとあり頗不得其意若そう王を展轉書寫の誤かそがきくをも承和菊と云說有此物語にも大乘を大そうなと書り　愚案猶そう王の御いましめとかくへきなり云々　花そう王をそむ王と展轉書寫の誤あるへしと河海にいへる誠に可然なり和の字を王の草字に書て其後又王と讀なせる成へし又そうをそむと讀たることは此物語に御孫を御そうと書たり承の字をそむとよめる事又うたかひなし故にそん王をは承和と心得へき也承和は仁明天皇の年號也二の方とは黑方と侍從との二つの方也　秘仁明天皇也雨抄にみえたり　弄　承和仁明天皇用之

御いましめのふたつのほう　弄不傳男子の制あれはなり　秘黑方侍從不傳男といふ制禁なるをいかてか源はつたへ給ふらんと也　河合香秘方云烏方沉香大四兩　丁子大二兩　白檀大一分　丁香大一兩或大二分加之云々　麝香大一分　薫陸大一分

拾遺方

沉香大四兩　丁子大二兩　甲香大一兩　甘松一兩　熟鬱

金小一兩（一説に入麝香一説用黄麝金）巨（占イ）唐一分　蜜和研合搗三千杵炮
甲香以和蜜塗之令黑黄不得過之黑此兩種方不傳男
耳是承和仰事也延喜六年三月三日故與侍滋野直子
朝臣献方也
心にしめて　河染也さしすせその五音通するなり
うへは　秘紫上也
ひむかしの中のはなち出に　河放出一説出居の事也
云々又廂名也　放出事　花李部王記天暦元年正月
二日於大皇太后御所院柏殿西對南放出平敷々王卿
座南北對舗以西（南イ）爲上東廂西向南上敷四位座又天暦
元年三月九日奉（車カ）駕幸朱雀院其殿装束母屋放出南邊
對舗兩主御座各疊上敷二枚加茵太上天皇東向今上
西向又天暦元年三月十六日大皇太后御柏殿設法花
八講十七日參朱雀院其殿放出安置佛像列供具東廂
敷八講座又承平七年十二月十七日陽成院御賀正殿
西放出第三間立螺鈿倚子小右記永觀元（三カ）年正月二日
中宮大饗其儀二條院東對南放出三間儲公卿座北上
對座立臺盤母屋懸簾庇不懸之（其イ）四位侍臣座在南廂西
上北面右以此等記加料簡者謂放出者南面母屋之名
也河海曰廂者誤也所詮寢殿母屋南北中央以妻戸隔

之所謂障子之妻戸也或以障子爲隔以南方爲放出以
北爲内方南放出中立帳臺有事之時撤之次東放出西
放出と云は正殿爲中央而東西各有殿謂之東對西對
也寢殿與對之間有透渡殿不及對屋作之時東西搆公
卿座子午中門を作つゝけたるをも對代といふなり
東西對代也故東對母屋をは東放出と云ふ西可准之
物語若菜巻上南のおとゝの西のはなちいてにおま
しよそふかんたちめあまたみなみのひさしにつき
給ふ又云わかなまゐりし西のはなちいてに御丁た
てゝそなたの一二の對わた殿かけて女房のつほね
にて又云しん殿のはなちいてをれいのしつらひて
らてんのいしたてたり右物語にいへるは皆六條院
のことなり是にても放出は南西の母屋とみえたり
それに西のはなちいてと云は西の對の放出と云心
なり椿かえの卷のひむかしの中の放出とは東の對
の母屋なり中といふは母屋と東西の廂との間の障
子を立てゝへたてたれは御帳をたてたる所を中の
放出とはいへるなり紫上のたき物あはせ給ふ所は
六條院の東の對の放出なり源氏の君も此時寢殿に
はなれおはしましてあはせ給ふ由みえたり是は西

の對の放出にてあはせ給ふ紫上の合せ給ふ所とは
各別なり又若菜まゐりし西の放出といへるは西の
對の放出なり彼是をとり合てそみすへき者なり六
條院には對屋二ありとみえたり　弄花鳥にくはし
可用之所詮六條院の東對の中のはなち出と心得べ
しおなし方に加減のあらそひなり　秘花鳥にくは
し所詮は西方に寢殿あり母屋の中をなかにして御
帳をたつる物なり母屋の中をいへり外様むきをは
なちいてとは云なり晴の方なり　聞小心殿とて本
の心殿をしきりてちと外様なる人をよふなり花に
あり
八條の式部卿の御ほうを　秘兩抄にみえたり　河本
康親王一品式部卿號八條宮仁明天皇第七御子母名虎女從四位下紀種子延喜元年薨　高名薫物合
也黒方　沈四兩　丁子二兩　甲香一兩　薫二兩　欝金
二兩　又侍從　沈四兩　丁子二兩　甲香一兩　麻二分
薫陸二分　甘松二分　件二方故八條宮方云々　花八
條式部卿宮本康親王は仁明天皇の第五子母は從四
位上滋野濕子參議貞主女也源氏君のあはせ給方の
紫上の方と共に侍從黒方也いつれも承和の御いま
しめの方なれはかはるへきやうあるへからす但み

なもとはおなし説なれともものち〳〵にちとつゝ其
人の意巧によりて加減することあるによりて次第
にかはることの有物なり八條式部卿宮は紫上の父
式部卿宮になすらへていへり又兩種の方は不傳男
と承和の御門の御いましめの方にのせたれは紫上
のを正説にすへきなり是によりて源氏の君の合給
をは疑をのこしていかてか御耳に傳へ給しはのせ
たるなり　私云河花兩抄に本康親王の母相違せり
可勘之
いとみわはせ　河挑
ひし給へは　河秘し
にほひのふかきあさき　秘源も紫上も同方を調合あ
るなりさて勝劣をわくへきといへり
人の御おやけなき　秘草子地なり紫上をは源の御子
のことくし給ひしてとなり
おまへにさふらふ人あまたならす　薫物を秘し給ふ
ゆゑなり
かうこの御はこ　弄こ字にごりてよむ一合點　秘か
うご　弄御厨子のおき物なり　河香壺筥　花或抄
云東厨子のうへのこしに香壺筥二合下の腰に薬の

筥二合を置此筥四合は皆同し樣にて圓角なる筥な
り但納物を可見香壺筥には銀にて簑壺の大なる樣
なる壺を入る二合に必有薰物を納料なり此薰物は
梅花荷葉侍從黑方を可納但此壺の中に雲母壺有へ
し錦折立あり紫裏に白針指の生の物にて表指しま
はしたるあり號入帷藥筥二合折立同事なり一合に
さきのことくなる壺三かねのさらかねのつい有一
合にはかりふるひはしかひありつねの銀器の具の
樣に鶴にむかひたる箸臺はしかいおきて入たりふ
るひかねのふちに生の物をはる此箸かい納たる筥
を帳の方につかはせ東西にして可置此等にも入帷
同事なり西厨子の上の腰に造紙筥二合折立あり樣
樣の造紙あり二合なから切角の筥なり下の腰に櫛
筥二合丸角なり皆櫛入懸子に小硯有折立あり今案
母屋調度東西厨子に筥八合有其中二合は香壺の筥
也東の厨子のうへにおく一合に簑壺四つゝ入て梅
花等の種々薰物雲母壺其中にありと云りきらゝは
銀盤に用なり灰の上におかん爲なるへし二條大納
言入道資家母屋のつしのはこの事注申云藥の筥に
は紅雪紫雪にろく檳榔子を入るといへり是には壺

三とて入物はかゝす候かねのついとは永久の御調
度のは黑水精にて候其藥の筥にはしろい物へにの
やうなる物かつきたると承候なり紅雪にて候やら
ん丸藥なとにては候はさりけるにやと覺候き紅雪
紫雪は中堂につかはして加持して入たる例なとも
候しやらん永久のかうこの筥には雲母の一寸より
もひろきか入て候し灰の上におかれんれうけに候
其櫛の筥にはさまさまの風流なとをつくりいれた
ることもふるき日記には見つ永久のにはさやうの
物は見え候はてかたみねのくろき馬のをのなかわ
けたる櫛はらひそ見候し心ちして候女御まゐりに
は櫛二枚つゝとりかさねて入候やらんと承りおほ
かたは母屋ひさしの調度いまの世には有かたき物
にて候めり普賢寺の入道したてられて候けるから
くさの調度たやすくいたされ候はぬやらん東山の
入道かはりろくにきくのかはのくしともやけて候
しとおほえ候

つほのすかた　かうこのはこの中のつほなるへし

火とり　眞木柱にあり　此御くしのてうとゝもは女
御入内の用意にし給へるの事也

所々の心をつくし給へらん　秘にほひのすくれたらんをとりていれんとなり
きさらきの十日雨すこしふりて　薫物をこゝろみ給はんにうへなき日なるへし
兵部卿宮　秘螢の宮也　弄をりよくおはしあひたるへし
この御いそき　秘御裳きの事也弄
むかしよりとりわきたる　源と宮との事也
その事かの事　何事も談合し給ふ也
前斎院より　秘槿なり弄
ちりすきたる梅のえたに　聞散透也散て透たるなり
過にはあらす　河高光日記云ひえの山にすみ侍けるころ人のたき物をこひて侍けれは侍けるまゝに梅花のわつかにちり殘りて侍るえたにつけてつかはしける拾遺集に見ゆ「春過てちり殘りける梅のたゝかはかりそ枝にのこれる
宮きこしめすことも　秘源の心かけ給へる事なり
いかなる御せうそこのすゝみまゐれる　螢兵部卿のたはふれ事のたまふ也
ほゝゑみて　秘源なり

いとなれ〳〵しき事きこえつけたりしを　秘薫物調合の事を申されしとなり弄
まめやかにいそき　槿の心にいれてはやく調合しいて給へるとなり
ちんのはこるりのつきふたつすゑて　朝かほよりまゐらせ給ふたき物のさま器(ツキ)二に二種入たるなり
心ばこんるりには五えふの枝白きには梅をえりておなしく引むすひたるいとのさまもなよひかになまめかしうそし給へる　河文よりはしめて草木の枝に物をつくるはみなその色につくる事なり是も紺瑠璃器をは松の枝につけ白瑠璃器をば白梅の枝に付たるなり梅をえりてとは白薄様なとにて梅花を雕或は同色の糸にて結たる造花歟云々一説云梅花の有比なれは造花に付へからす紅白の花の中に白梅を撰て付たるなり或説云斎院の獻せらるゝ薫物兩種に見えたり黒方をは紺瑠璃の壺に入て松につけ梅花をは白瑠璃のつほに入て梅枝に付られたる歟云々　花西宮抄菊花宴御膳具心葉藤花組閇云々今案心葉の松も梅も打枝のやうにかねにてえりたる物なり　秘箱のなかにうち枝のやうにつくり糸に

かけたるなり黒方は霜雪にもおかされぬ匂にたとへたりみどりは黒色にたよりあり松に付たるかたかたこゝろあり弄同

えんなる物のさまかな　兵部卿宮の詞なり

槿前斎院 はなの香はちりにし枝にとまらねとうつらん袖にあさくしまめや　秘此合給ふ焼物はにほひもなけれとうつし給ふへき人の袖からなるへしわか身を卑下し給へるなりたゝかはかりそ袖にのこれるもこのこゝろ也　聞ちりにし枝とは前斎院にて時過たりと卑下してよみ給へりとまらねとは殘らねとゝ云心歟　或御說に前に散透たる枝に付たるとあれはちりすきたる花の枝なとにはとまるましけれともそなたの御うつしあるへき御袖にはあさくはしむましきとなり　引歌「春過てちり透にける梅のはなたゝかはかりそ枝にのこれる

ほのかなるを御覧しつけて　螢兵部卿の御覧しつけて誦し給ふ也

宰相中將　夕霧也

こうはいかさねのかうのほそなかそへたる　河紅梅重香細長　花こうはいのかうのおり物の細長なり

河海香細長とありあやまれるなり女の裝束は裳からきぬ五きぬなとなり　秘花鳥の說然へし　弄女のさうそくなるへし

御かへりもその色のかみにて　花紅梅かさねの薄様をその色の紙とはかけり　弄紅梅かさねなるへし

御まへの紅梅につけたり

宮うちのことゝもひやりなく　兵部卿宮の御返事ゆかしくおもひて宣ふ詞なり

なにことかは侍らん　秘源の詞文をは枝につけておき給ふなり

くま〳〵しうおほしたるこそ　河曲日本紀隈　熊　阿間也　花かくしことのあるやうにといふ心なり

御すゝりのついてに　花源氏の筆の次に斎院への御返歌をかきて兵部卿宮にみせ申されたる也

返源 はなのえにいとゝ心をしむる哉人のとかむる香をはつゝめと　河古今「梅花たちよるはかりありしより人のとかむる香にそしみぬる　後撰「梅花かを吹かくる春風に心をそめは人やとかめん　秘人のとかめむ香をはつゝめとも焼物のにほひはえつゝむましきとなりかりそめに物申事なとも此にほひゆゑ

つゝみかたきと也　聞ちと風流をふくませたる也
或御説に人のとかめんとは前齋院へ前にもけさ
う心あれは人のとかめんをはつゝみ給へと此面白
き香はかくれ有ましけれはつゝみかねたるなり下
心はけさうせしを心をしむると也
ことやありつらん　弄兵部卿宮にかくし給ひしによ
りてなり　秘宮のゆかしかり給ほとにかやうに歌
をよみてありつるをなと申給なり　私云又かくの
ことくかきて宮にみせ給へりされは文のうちもさ
やうにてこそありつらめと宮のおほす心歟
まめやかにはすき／＼しき　秘源の御心なりかやう
に姫君の御裳著の御用意は眞實あまりに過分なる
ことゝおほしめす心なり
又もなかめる人のうへ　河源氏女子なき心也　弄明
石の中宮の事也源のひとりむすめとなり
いとみにくけれは　河醜　素寂釋に挑惡　僻事也
外人不見々可笑白氏文集　秘源の卑下の詞なり此明
石姫君かたちも見にくけれは他人ははつかしく思
て腰ゆひのこと秋好へ申と也
中宮まかてさせ　弄秋好に裳着の腰ゆはせ申させん
となり
したしき程になれきこえかよへとはつかしき所　秘
秋好事のなり　秋好中宮の御事を兵部卿宮へかた
り申給ふ也
よのつねにてみせたてまつらんかたしけなくて　秋
好中宮心はつかしき所ふかうおはする人なるゆゑ
にてうきなとの事其外何事も一かとゝ用意あるよ
しを宮へかたり申給ふなり
あえ物もけにかならす　花あやかり物なり齋宮女御
すてに中宮まてなり給へはあやかり物とおもふよ
し也　秘宮の詞誠にあやかり給へき事なりやかて
中宮にも立給へき事となり　弄秋好さいはひ人な
るによりてあやかり物といふ也
ことわり申たまふ　河裁斷日本紀
このついてに　兵部卿のわたり給ふ樣子なり
この夕くれのしめりに　河薫物はしめりに匂ひまさ
る物なり云々仍或は水邊にうつみ或は花木の下の
土にうつむ此故なり
これわかせ給へたれにかみせん　河君ならて誰にか
みせん梅花色をもかをもしる人そしる　秘源の詞

此薫物の勝負をわかせ給へとなり
しる人にもあらすやとひけし　兵部卿の宮の詞也
秘色をも香をもしる人そしるなり誰にかみせんの詞にかゝれり　河さきの歌の心なり卑下なり
いひしらぬにほひとものすゝみおくれたるがひとくさなとかいさゝかのとがをわき給うて　弄詞のつゝき如何一くさなとかとは善悪の種類をの給へと也
夏の御方只一種なり冬の御方一種とみえたり　秘其中になとか一種のすゝみおくれはなくてはとなりてにをは聊すわりにくけれと是文體也　私案之兩抄の義聊おほつかなしやうもなくきこえたるかとおほゆる兵部卿宮のしる人にもあらすやと卑下し給なから薫物をよくきゝしり給ひていひしらすすくれたる匂ひとものの中に是は沈かすゝみたる丁子かおくれたるなと香具一くさつゝのいさゝかのとかをもきゝわき給ふといふ也合せたき物は一種にてはなし合せたき物の中の香具一色つゝのすゝみおくれを聞わき給ふと心うへししからはすゝみおくれたる一くさなんとかいさゝかのとかとよむへしなんとかのか文字をすみてよめは心得にくきゆゑに前の抄のことくしるせりとみゆ
わか御二くさは　源の調合の二種也
右近の陣のみかは水のほとりになすらへてにしのわたとのゝ下より　秘承和之例抄に見えたり弄　河御溝水　近來東庭潺湲任レ澄流昔者立石風流様々也流非二一脉一（順徳院御抄）　承和御時右近陣の御溝の邊の地にうつまる後代相傳して其所をたかへす云々　埋薫物日數事　長寧公主三日姚家也七日極要方盛白瓷中地を堀事三尺以上用水邊地得朝陽埋之　公忠朝臣云合香之後物に入て花木の下の土の中の高所に埋之　知章朝臣云埋五葉松下春秋七日夏五日冬十日　花或抄云齋院より參れる瑠璃のつき（器イ）二ある中に心葉紺瑠璃には五葉の枝白には梅をえりてと云り薫物をうつむみなもとを尋ぬれは梅花は梅のもと菊花は菊の下にうつむをさきとせり今黒方と云字にてくろき姿をあらはせるなりされは紺はくろき色なれはこれをくろきしろしとせり彼松は四季にかよひて萬木の長なれはすくれたる薫物にかたとれるにてこそ貞松は歳寒にあらはると云をもつて思ふにも古人の黒方を感する事は思ひあはせらる

冬さへこほる時深くも春の匂ひあり寒に封せられすといへり大方は黒方によしある木なれはこそ松にはそへられけめ　私云右近陣は西のかたなり此六條院にも西のわた殿の下よりいつるみきはちかうとありおもひよそへられたるへし

これ光の宰相のこ　秘惟光參議に任する事こゝにはしめて見えたり弄　河任參議有數道其内七ヶ國受領合格（括イ）之史勘公文了拜參議歟惟光前攝津守也

兵衛のそう　秘處女に童にて有し者也

いとくるしきはんさ　兵部卿宮の詞迷惑なる判者にあたりたると與しの給ふなり

おなしほうこそはいつくにも　秘みなもとは同方成へきを各別に見えたりしいかゝしたる事そとなり

かきあはせ給ひつゝ　聞かぎあはせと聲をさしたり

いつれともなき中に　甲乙すくなき也

齋院の御くろほうさいへと　秘源も紫上も黒方を合せ給へれと是はいつれよりもしつやかなるけのありてすくれたると也黒方のふりはかやうに有へきことゝそ薫物の家にいふ事也

侍從はおとゝの御は　秘侍從を合給ふ人々あれと其中にて源のすくれたると也弄

たいのうへの御はみくさ　紫上也　秘梅花を加て三種なり春のおとゝ成によせて梅花をすくれたるとする也弄　河御はとは御薫物はといふへきを略したるなり前巻に詩なともおほく御と云り　河梅花方　沉香八兩二分　古唐一分三朱　甲香三兩一分　甘松一分　白檀二分三朱　丁子二兩二分　麝香二分二朱　薫陸一分　以上小十五兩三分みくさとは黒方侍從の外に梅花を加へられたる也心しらひをそへてかをりくはゝれるとは寛教僧都の說春は丁子加增有へしと見えたりか樣の香を過されたる歟

はやき心しらひ　是は匂ひのうきやかに又花やかなる心か

この比の風に　梅花なれは也　花たいの上の薫物は八條宮式部卿の侍從方の外に梅花をあはせ給へり彼二の方は不傳男といへは紫上のあはせ給へるそ本樣なるへけれと梅花は時をえたるうへ春を愛し給ふ御方なれは二つの匂をさしおきて兵部卿宮は梅花を猶すくれたると判し給へるなり寛教僧都か說にまかせて春なれは丁子をすくされたるにやは

やき心しらひをそへたるよし見えなり
夏の御かたには　花散里なり
心々にいとみ給中にかす〳〵にもたちいてすやとけふりをさへおもひきえ給へる御心にて　河此詞妖艶
殊無比類者歟　荷葉方　甘松一分　沈七兩二分
甲香二兩二分　白檀二朱イ三朱　熟金二分代麝　藿香四朱或一分四朱　丁子二兩二分　或安息香一分
一説三兩二分　以上十三兩二分　天慶六年二月廿一日甲午公忠朝臣所献之
かえふを一くさ　或夏の御かたなれは荷葉をあはせ給へるそのよせあるに似たり
冬の御かたとき〳〵によれる匂ひのさたまれるにけたれむことはあいなしと　河合香は四季にかたとる方あるなり春は梅花の方紫上春の御方のすくれたるとみえたり仍て此比の風にたくへんに更にこれに優れる匂わらしと也　夏は荷葉方　花散里上夏御方合之　秋は菊花方又侍從　冬は落葉方又黑方也　寛敏大僧都説云春者丁子夏秋者沈冬者薰陸隨季三銖許可加歟　合香古方也　秘梅花荷葉菊花落葉なとは時にあひつゝ人々にも合給へきとて斟酌あるなり　私云明石上は冬の御かたなれは落葉を合せ給へき事にや凡落葉はにほひのすくれてもはなやかなる所はなき物なりとそされは梅花荷葉なとを匂ひにけたれんとおほしてあはせ給はぬなるへし
くのえかうのはうのすくれたるは　薰衣香
さきの朱雀院のをうつさせ給てきんたゝあそんのことにえらひつかうまつれりし百ぶのほうなとおもひえて　河おもひえてとは今の薰衣香百步方なとにかよひて思ひよそへらるゝとみえたり　弄百步
一説遠薰をはいつれをもいふ禪云又云一方也百步香公忠朝臣　承平比の人　光孝御孫　秘思ひえてとは前のけたれんことあいなしとおほしてと思ひえて也　花此段の詞あなたの心有也河海に思ひえてとは今の薰衣香百步香なとにかよひて思ひよそへたるといへりしからは明石上のあはせ侍る薰衣香百步の二つを取合て新しく了簡し出せる心にやそれはいかゝと覺え侍り一には前朱雀院は承平の御門の御ことなり公忠朝臣も其代につかへて合香の達者たる人なり故に朱雀院の薰衣香といふは則

公忠朝臣の奉れる方と同事なり百歩（歌イ）方といふはおほよそ香氣とほく聞ゆるをもて百歩（歌イ）香とはいふへし一かたにさたむへからす一には朱雀院の薫衣香と公忠朝臣の（ゆ）百歩（歌イ）香と二種を明石上あはせ給といふへし百歩（歌イ）香は四條大納言の家より出たるよし見えたれと承和百歩（歌イ）香となつけ侍れはむかしよりある方なれは公忠朝臣の奉らんもうたかふへからす思ひえてといふ詞は梅花落葉なとは誰も知てめつらしからぬ故に明石上は此二方を思ひえて合せ給へるを思得てとはいへるなり前朱雀院は承平御門の御事なり西宮抄臨時部云前朱雀院初出大内之時垂金銹檳榔云々此前朱雀院は宇多御門の御事也承平御門を朱雀院と申につきて宇多天皇をは前の字をくはへて申侍り此物語には又朱雀院ましますによりて承平御門を前朱雀院と申なり此御時に公忠朝臣薫物方なと奉りし故也　河千金翼方云　薫衣香　薫陸八兩　藿香　覽探各三兩　甲香二兩　詹唐五兩　青桂皮五兩　料理略之　薫衣香方　沉三兩　甲一兩二分　檀二分　青木香二分　丁子一兩　占（古イ）一分二朱　麝以上大　凡香附子代以鷄舌香若華撥汲納香代青木香代白檀　件（仲イ）方故式部卿親王上　又方此方一名體身香　丁子　藿香　零陵　青木甘松各三兩　白芷　當皈　桂心　檳榔子各一兩　麝香一分　右十物細搗絹篩爲粉以蜜和擣一千杵之後出之丸如棗核口含咽汁盡一夜三日別含十二丸當日自覺口舌五日自覺體香十日衣被亦香廿日逆風行他人聞香廿五日洗手面水落地香一月已後抱兒々亦香忌蒜及五辛等非但口香體潔而已蓋亦治萬病一方有香附子一兩　承和百歩（歌イ）香方　甲香小八兩　蘇合小一斤　占唐小一斤　白檀小八兩　零陵香小八兩　藿香小四兩　甘松花小四兩　乳頭香小五兩　白膠小二兩二分　麝香小四兩　鬱金小二兩二分右十一種搗蜜和之於瓷器中盛埋經三七日取燒百歩之外聞香件（仲イ）方出自四條大納言家大江千古所上耳　沈小四兩二分　薫小一分　檀小一分　丁子小二兩　甲小一兩　麝小一分四朱　又方　沈小四兩　丁（麝イ）小二兩　甲小一兩　甘小一分三朱　詹小一分三朱　已上朱雀院御方也　薫衣香一名黑方　沉大四兩　丁子大二兩　甲大一兩二分　薫大一分　麝大二分　百和合字侍從　沈四兩　丁二兩　甲一兩以上大　金一兩　甘一兩以

上仁和元年三月四日抄之増損模様イ
さきの朱雀院　古今集に朱雀院とあるは亭子院なり
仍さきの朱雀院も寛平の御事たるへき歟然とも若
此物語の朱雀院よりさきと云心歟承平の聖代合香
を好しめ給よし見えたり　公忠朝臣は號滋野井辨
右大辨從四位下天暦二年十月廿八日卒六十光孝天
皇御孫大藏卿國紀子也高名薫物合好手也云々延喜
天慶之間右大辨公忠朝臣と藏人所小舎人大和常生
相並奉合番之役　弄前朱雀院承平の御門を申へし
よのつねには宇多のみかとを前の朱雀院と申歟
私云此義也花よし
よにゝすなまめかしき　薫衣香百歩歌イ香なとたき物に
様かはりて又すくれたると也
いつれをもむとくならす　河不無徳也　螢兵部卿宮
何れをも一かとつゝとり所をほめ給によりてかく
いへりいつれをも無下におとしたるはなけれは也
心きたなきえんさなめり　秘源の詞いつれをもすて
すの給へると也
月さしいてぬれは　河薫物合ことおほしたつは正月
晦日とみえたり今の月影は二月の初歟同比薫物と
もとゝのへ出さるゝとなり　花上の詞に二月十日
とあり河海に二月初といへる相違せり
かすめる月のかけ心にくきを雨のなこりの風すこし
ふきてはなのかなつかしきに　所のさま時節の體景
氣心をやりてみるへし
おとゝのあたり　秘殿のあたりなり弄
藏人所のかたにも　弄一答さきにしるせるにおなし
云々六條院藏人所也　河藏人所殿上にあり　秘六
條院の殿上なり
あすの御あそひの　秘御裳きの御遊有へしと也弄同
御ことゝものさうそくなとして　河ことのさうそく
とは絃かけ柱つけなとする事歟琴は絃の總名なり
箏にかきるへからず次の詞にも御琴ともめすとあ
り又琵琶さうのわこんとあり
おかしき笛のね　ことなとしらふるとて笛なと吹な
らすへし
うちの大殿の頭中將辨少將　柏木紅梅大臣
けさんはかりにて　河見參也　見參とは今日たれ
たれまゐりたるといふ事を交名を注して主人にみ
することなり節會なとにも此事あり　秘見參とて

外記か奏する此心なり勸入　弄　嬰きの禮なり　私
此義あり此義不用
宮のおまへにし　螢琵琶　源箏　柏木和琴夕霧笛　紅梅
調歟　一聲鳳管秋驚秦嶺之雲不及引之　河　春は雙
拍子梅かえをうたふ おりにあひたるてうし雲居とほるはかり
梅かえいたしたるほと　河　梅か枝催馬樂呂　秘　此巻名
これによる歟私勘入古今梅かえにきゐる鶯や春か
けてはれ二段　春かけてなけともいまた雪はふりつ
つ三段　あはれそこよしや雪はふりつゝ　弄　是によ
りて巻の名とす惣て歌により詞に付歌を詞にそへ
又心をもて號す此四義也　私云巻名つくること桐
壺巻に載之　毛詩名篇例五也
わらはにてゐんふたきの時高砂うたひし　花　さか木
の巻にあり弄　秘　辨の少將のことを注したる草子
地なり惣別此人郢曲すくれ聲よき人とみえたり紅
梅大臣なり
宮もおとゝもさしいらへ　花　助音の事也
螢兵部卿 うくひすの聲にやいとゝあくかれん心しめつる花の
あたりに　花　鶯の聲は郢曲の事なり心しめつる花は
薫物のことなり　秘　催馬樂の梅かえをうたひしに
感したるなり心しめつるとはたきものに心をしめ
つるにと也
千代も經ぬへしと　河　古「いつまてか野へに心のあ
くかれん花しちらすは千代もへぬへし　秘　花云々
の引歌同節のをりなるによりて此詞たより有弄聞
私云前の歌にこゑにやいとゝあくかれんと有此
引歌旁面白し又此歌心しめつる花さへあるへきに
鶯の聲さへそひたれはいよ／＼あくかれんほとに
花しちらすはこゝに千代もへぬへしといひかけた
る詞也
源氏 色もかもうつるはかりに此春は花さく宿をかれすも
あらなん　秘　源の歌も此あたりをたえすと云給へと
なり　聞　心あらはなり
頭中將にたまへは　源の盃を柏木へさし給なるへし
頭中將 うくひすのねくらの枝もなひくまて猶吹とほせよは
の笛竹　河　拾「はなの色はあかすみるとも鶯のねく
らの竹にてなゝふれそも　花　頭中將の宰相中將に
させは笛竹をよめる也私同
宰相中將 心ありて風のよくめる花の木にとりあへぬまて吹や

よるへき　吹とほせといふをうけたり　弄笛なれは落梅曲を思ひてよめる歟吹と云詞によせてよめり物の音におとろきつへき心なり　花風にたにも心してちらさぬ花をふきやはよるへきとよめる宰相中將わか横笛ふくことをよめるさて下の詞に情なくとはかけり

なさけなくと　秘人々の花のためなさけなしといへるなり　聞吹とほせにあたりてこれを情なしと也

辨少將　霞たに月と花とをへたてすはねくらの鳥もほころひなまし　或說鳥のほころふるとはおとろく義歟花のほころふるはひらく事なれは鳥もこゑを發する心歟　花鳥のほころふるはあしたとくはしめてなく心なり辨少將梅かえをうたふにつきてねくらの鳥もほころひなましとはよめりいまた夜ふかきによりて初とりはなかぬよし也　弄鳥の朝心よけになくなりかすますは夜のあくるかと月花をみて鳥もなくへきとなり庭鳥にはあらす　秘夜のあくれは鳥は心よけになくなりされは霞たになくはよの明たると心得て鳥も心よけにほころふへきとなり　私此物の音にもよほされて鳥もほころふへしと思ふにさもなきは霞の月花をへたてゝ夜のふかき故かといふにや

まことに明かたになりて　秘此歌をかけていへり

みつから御れうのなほし　源の御れうにてしらへたるを宮へおくり物にし給ふなり

てふれ給はぬたき物　弄未燒也　秘いまた試もせぬたき物なるへし

螢兵部卿　花のかをえならぬ袖にうつしもてことあやまりといもやとかめん　花このえならぬは緣ならぬなりよせもなきことなり　弄艶ならぬは卑下よせなき袖といふ義　細聞　一義えならぬはたゝならぬなり　源のおくれる裝束の心あり何となく優なる心なり　秘兵部卿の我袖なとにはとめかたきとなりえならぬ一說に艶ならぬなり卑下の詞なり　義えならぬはたゝならぬなり只今おくり給へる御直衣の心あり何となく優なる心なり　私案之花の香は薰物なりえならぬ袖はたゝならぬなり源の送給ふ直衣なりかた／＼風流めきたりといもやとかめんとよめる心面白し

いとくつしたりやとわらひ給　秘くつしたるとなり

いもやとかめんといへるをわらひ給なり　弄　妹におそるゝ心を窮屈なる事かなと源の笑ひ給ふ詞なり　秘　苦したるなり

御車かくるほとにをひて　秘　車に牛をかくるほとなりおひつゝきてつかはし給ふなり　聞　車やとりに牛をかくるほとゝ又車に牛をかくるとの二なり稱名院車に牛かくるなり　私云車に牛をかくる然るへし

返源
めつらしとふる郷人もまちそみん花の錦をきてかへるきみ　秘　花の下の事なれは花の錦と云なりいもやとかめんといへるをなくさめてよめるなり又云此直衣なと參らせ給ふ事をいへりよのつねの人ならはかくはいひ給ましきを此宮と源とは一段とへたてなき中なれはかくの給ふとなり古來此二説あり後日御云此歌奢りたる歌なり花宴巻に二條院のおとゝ我宿の花しなへての色ならはとよめるは其性奢りたる人なれはなり源氏は此心有へからす如何案之兵部卿宮は一夜の夜かれもなき人なれは此一夜の夜かれを北方は程久しき様に思給へし只今歸給をは故郷へ錦を着て歸たるやうにめつらしき事に北方は思給へきとなりいとくつしたりとわらひ給へるによく叶へる歟云々　三光自筆箋云北方は若菜巻に定れり此ときは北方といふへき人なしと也弄　花の下の事なれは花の錦と云又云源氏と宮とへたてなけれは卑下もなき也只その衣なるへし又云歌花のにしき源氏のまゐらせられての給はん事如何是か心やすき御事なれは如此あそはすにや我思はおろかにはなかりしといふ心にや　或御説に前の歌にいもやとかめんとあるをいやさは有まし此はなの錦をきてかへるをめつらしきとてこそ古郷人はおもはれめとあそはす又の義一夜もよかれなくてこゝに御座あるを待給ふらんにかゝる匂ひをしめてかへり給へは花の錦をきてかへるやうにめつらしと室家もおほしめすへきとよみ給ふなり諸抄に此説なし面白し面白し　私案之めつらしとは今夜あかし給しほとのへたてゆゑなり花の錦は源より送り給へる物なれとも花下より着てかへり給ふなれはさもいひつへしとにや此時定れる北方はなしされとも宮のいもやとかめんとあそはしたれはたれにてもさしてふる郷人も待らんといへる

なるへし又はなき事とは一夜のよかれもまれにな
き事とそ古郷人のおもふらんとにや秘抄にはわか
室家を又なき人とおもひておち給ふとなりとあり
河弄同し 是はたゝよそにて夜をあかし給ふことゝためし
なきといふ義然るへくや又花の錦と源のよみ給へ
るも必香たる心にても有へからす宮の御歌にえな
らぬ袖とよみ給へるを其まゝ心やすき御中なれは
卑下せすうけてかくの給へるも然へし花の下より
なれは錦といへり又さて古郷とはいへり錦をきて
古郷へ歸る古事にてなるへし
いといたうからかり給 聞 宮の體なり 花 からかる
はたへかたかる心なり
つき／＼の君たちにも 頭中將辨少將以下なるへし
かくてにしのおとゝに 秘 秋好の坤の殿なり弄聞
いぬの時 たき物合のあくる日二月十一日なるへし
宮のおはしますにしのはなちいて 秘 中宮なり弄
花 西對のはなちいて也秋好中宮のまします御方也
御くしあけの內侍 秘 髮上の事也 河 着裳の時髮を
あけらるゝ歟かんさしする心なり內侍其役をつと
めたるなり 弄 一勘云內侍なる人の其役をつとむ
る也
うへもこのついてに中宮に御たいめんあり 紫上と
秋好と對面也
御けはひいとめてたしと宮はみたてまつれ給ふ 秘
中宮明石姬君をはしめて見給也
おほしすつましきをたのみにて 秘 源氏中宮へ申給
詞也弄
なめけなるすかた 明石姬君は今日裳をはしめてき
る人なれは今までのすかた本式の女のさうそくな
らぬ故にかく宣ふなり
のちのよのためしにやと 秘 中宮行啓なとは後代の
例に成へきと思ふ故に忍ひ侍ると也
心せはくしのひ 弄 下に思ふなり 或 姬君のことよ
ろつこと／＼しく心はいかゝと忍ひ給ふことゝい
ふ心なり
いかなるへき事とも 秋好の御詞何とも分別なくわ
たり給へるにさやうに後代の例なとゝこと／＼し
う源の宣ふにつけて斟酌なるとなりさて中々心お
かれぬへしと宣ふなり
の給ひけつほとの御けはひ 中宮の御やう體然るへ

おさゝもおほすさまに　秘 源の思のまゝに繁昌なるとなり
さしつとひ　中宮紫上明石姫君なとなり
はゝ君の　秘 明石の上也弄
人の物いひを　源の遠慮ある義也
かゝる所のきしきはよろしきにたに　秘 紫式部か筆也聞　弄 よろしきは八分めの事を云也　秘 大方のことたにあるに此所のありさま筆にも及はさる也　花 よろしきとはよのつねのことなりけふのことは中々ことのはにもまねびたてられぬことなれは大かたはかりをしるすとなり
春宮の御けんふくは廿よ日のほとになんありける
弄 朱雀院御子今上 明石宮に一歳の御まさり歟可勘澪標巻可見　私春宮御元服十三歳同二月等例可勘之
人のむすめともきほひまゐらすへき　河 競參
この殿のおほしきさす　河 思し萠思ひそむることを草木のはしめて萠によそへたる也源氏の姫君女御に參りあらはかたはらにならふ人くるしかるへし皆猶豫するよしなり

左のおとゝ（大將イ）なとも　此左大臣（將イ）系圖になし　河 左のおとゝ是は麗景殿の女御の父とみえたり同人歟可了簡左大將此卷にみえて末にみえす若鬚黒大將の事歟其比左大將なり榮花物語云東宮冷泉に朱雀院のひめ宮まゐらせんとけしきはみ給人々たゝいまはおほしとまりにけり　弄 梅か枝の左府云々系圖に—まき柱に左大臣の女御云々同人歟別人歟是は春宮へ參り給以前のは冷泉へなり
左大將なとも　秘 此大將系圖になし私河海に鬚黒此時左大將なりと云々但末右大將歟此人別なり
いとたい〳〵しき　源の詞なり　聞 あるましきこととなり入をさしおかん事にてはなきとなり
宮つかへのすちはあまたある中に　源の宣ふ詞なり入内ありてはあまたの中に何事も善惡のけちめをあらそはんこと本意ならめとなり
そこらのきやうさくの姫君　弄 ほめたる詞也　花 邊迹なりすくれたる心なり花宴卷にも若菜上卷にもあり　河 うつほの物語云御門この朝臣に見ゆるこそはつかしけれきやうさくに心にくゝ見るにかみさひたるおきなにて

御まゐりのひぬ　明石の姫君入内延引あるなり奇特なり聞
つき〳〵にもとしつめ給ひけるを　左大臣も左大將も明石姫君入内ありてかくつき〳〵に參らせんと延引し給へるをかく源氏の宣ふをきゝてまつ左大臣の女入内なり
れいけいてんときこゆ　麗景殿女御　梅枝に左大臣の三女と云々
この御かたは　明石の中宮也弄
むかしの御とのゐ所しけいさ　河淑景舍は桐壺也源氏の母更衣並に源氏代々の曹子なりし所なり
あらためしつらひて御參りのひぬるを　きりつほの御しつらひなとまていてきて入內ののひしなり
宮にも心をとなからせ　秘中宮也　聞宮は春宮なるへし中宮にては有へからす
四月にとさためさせ給ふ　河四月入太子宮例也　陽明門院萬壽四年四月廿二日入太子宮年十五長元十年二月十二日爲中宮　案之以後之例歟聊爲潤色歟如何
御てうとゝももとあるより　御調度もとよりあるうへにしくはへ給ふなり
物のしたかたゑやう　調度のこしらへやうゑやうなとまて源のみつくろひ給ふなり
さうしの心々イはこに入へきさうしとものやかて本にもし給ふへきを　河草子匣　手本をは御本といふ也　綟殿北立二階一脚其上並厨子二脚東置櫛匣一雙其下置香壺匣其下階置藥匣
いにしへのかみなききはの　河無上際　古筆のすくれたるもおほくつたへもち給ふとなり
よろつの事むかしにはおとるさまにあさく成行世のすゑなれとかくのみなんいまのよはきはなくなりたる　秘紫上に源氏かたり給詞也　花今の世の假名は弘法大師始作之以前の假名は如日本紀萬葉歌等書樣也日本紀かなは聲に書之萬葉集は以音與訓義書之　河江談云天仁二年八月日向小一條亭言談之時問曰假名手本何時始起乎又何人所作哉答云弘法大師御作云々件事無所見但大后自筆假名法花經供養之時被行御八講之講師南北英才相迎遞イ爲導師高名淸範慶祚等之聲各振富樓那之辨才之後源信僧都又勸勤イ此事說記云日本國誠雖如來之金言唯以假名可奉書言イ也

弘法大師云傳習諸眞言梵字悉曇等密法之後寄西敎門法門作いろはにほへとの諸を給以來一切法門聖敎史書經傳不離此讃文字いろはの字色句と云心也不說他事只以此一事令講人々皆驚耳之由所傳聞也古人日記中在此事云々又問云然者件弘法大師御時以往無假名歟日本紀中假名在之由慮外令見如何答云此事尤理也雖然只付倭言令書也猶いろはに者彼時始歟云々一說いろはに有三段いろはにほへとちりぬるを奈良護命僧正作也 わかよたれヨリゑひもせすマデ弘法大師作 京傳敎大師作或云慈覺大師と也又云いろはとは母の名也然者梵字の字母の義也云々 往古和漢至萬葉書日本紀の歌の樣に書ける也

河掌中曆云 高名能書 嵯峨天皇 弘法大師 敏行少將 美材 大内記 前中書王兼明 道風木工頭 佐理大貳 後中書王具平 行成侍從大納言

ふるきあとはさたまれる 秘 昔は眞行草はかりにて今のやうにはなきなり

たへにおかしきことはとよりてこそ 河 外よりてとはすゑになりてと云心歟或人云年よりてなり

花 あふよりては奥なりむかしとよりたる心なりとよりは外なりすゑになりての心なり 秘 外へよりてなり上古をはあふよりてと云なり 弄 外よりてなり一禪日記末になりてなりと云々可然前の詞に今の世はきはよく成たるとあり但又末の詞に合ては昔の事かとみゆ如何 河 或昔より此方へ外へよりてよくかんなを書いてたるなり

女手を心にいれて 河 うつほの物語云たゝ此かきて奉られたき本をこそをとてても女てもならひ給ふめれ

こともなき手ほん ほめたる詞なり

中宮の御みやす所 秘 秋好の母六條の御息所也

きはことにおほえしはや 弄 たくひなきなり一きは別にくらゐのたかき事也 河 はやは詞の字なりおほえしやなり 私云はやは者哉歟

さてあるましき御名も かやうの手跡なとから心にしみて（もイ）思ひかけ給ひしと云歟

くやしきことに 秘 御息所は悔しき事に思ひ給ひしと也

さしもあらさりけり 秘 我身は心かはりはつひになかりし也かやうのことみな紫上にかたりたまふな

り
宮にかくうしろみつかうまつることを　秋好中宮をかくしたて給事を宣ふかやうの御うしろみをねん比に源のするほとに後悔し給ふへきことにてはなかりつると宣ふ心歟
心ふかくおはせしかはなきかけにも　御息所の物に執着のふかき人なればそれを心にもちてかく宣ふなり靈なとになり給ひし故なり
宮の御手はこまかにおかしけなれと　秋好中宮のことなり　弄母御息所のついてに宣ふなり
かとやおくれたらん　秘つよき所なきとなり　御此手はこまやかなるすちはあれと少つよき所不足なるへし
うちさゝめき　いまた中宮里亭におはしますへし仍さゝやくなり
故入道の宮の御手は　秘薄雲女院なり聞けしきふかうなまめきたるすちはありしかとよわき所ありてにほひそすくなかりし　弄つよき物に匂ひありよわき物ににほひなきこと有禪日記　秘花鳥の義可然なり　聞にほひは餘情なり　花つよき手にはかならす匂ひかある物なり手にかきらす音曲はし／＼にいたるまてつよき所あれは餘情はおのつからそふ習なりはしめからうつくしひれてよわよわとあれはみおとしかなきもの也
院の内侍のかみこそいまの世の上手に　秘朧月夜なり當世の手かきなり筆のきゝたる所あるとなり
あまりそほれてくせそゝひたる　河そほれては少たはれたる體歟或されたる心歟　あまり筆のきゝたるに任せて正體ならぬ事なとの出來たるなるへし
さはありともかの君と　秘朧月夜なりさはありともは難はありとも今の世の手かきと宣ふなり
前齋院と　朝かほの齋院なり
こゝにとこそ　花紫上なり　花此の一段は紫上に語り給ふ事也さてこゝにの詞は紫上をのたまふ也　私此の三人當時の女の手かきなりとゆるし給ふなり
この數にはまはゆくや　秘紫上の詞也　まはゆくやとは此數には入へからすとなり恥かゝやく心なり
いたうなすくし給そ　花すくし給ひそはいたうなまんし給ひそといふ心なり　秘源の詞さのみ慢し給

ひそと也弄聞　或上手めき給ふそと云義なりいつれも同義なり

にてやかなるかたの　むくやきのあるなり

まんなのすゝみたるほとにかなはしとけなきもしてそましるめれ　河眞名の文字定有なり假名は文字つかひたかひぬれは義かはること有なり案之眞名は字の姿さだまれる樣なり假名あしく書なはしとけなき文字のすかた有と云歟　花まんなのすゝみたるとは事すくして草に書たるを云それは猶も云所ありかなを其樣に書すくさはしとけなき文字すかたになるへき心なり　秘河花の釋義いつれも心得かたき歟是は紫上の手跡を源氏の宣へるなり今もあることなり女に眞名をつよく好てかく人ありさて眞名にのみ心をとむる人は假名に心もとめすして捨筆おほきなり紫上のはかやうにみえたり

またかゝぬさうしともつくりくはへてへうしのひもなと　河草子の紐不審猶可丁簡　一説草子を紐にとちたるかと云々或草子箱に入たる其紐歟云々案之次下にてもんのきのへうしおなしき玉のちくとみえたり然者卷物をも草子はてにくわへ入られたる歟花卷物をも草子と云なりさうしにかく內典の書にも卷第一卷第二なといふ外題ありまき物まつ本にてあるなり

兵部卿宮左衛門督　秘兵部卿螢なり　左衛門督不入系圖弄　河此左衛門督何人乎若引入大臣の子歟

みつから一よろひはかくへし　秘一雙也　河自は源也　一雙草子二帖也　屛風の一よろひも二枚也

けしきはみいますかりとも　花いますかりともはおはしますともといふかことし伊勢物語の詞なりてこには紫上をの給ふなり　秘宮也左衛門督のかける程はかき給ふへきとなり　私これは源のかけことにのたまふなるへし宮左衛門督なとの何ほとけしきはみつくろふともえかきならへしやは源も書ならへん物をと宣ふなり仍われほめをし給ふとかけり

われほめ　河自讃也

すみふてならひなくえりいてゝ　是は源の草子のれうとはみえす草子をかゝせ給ふかた〳〵へ消息をそへ給ふれうとみえたり

たゝならぬ御せうそこ　姫君の御れうに能書をえら

ひ給ふと各心得たるへし
かたき事に　えらひにいらん事を難義におもふなり
かへさひ申給ふ　河覆申　たゝ返し申なり
まめやかにきこえ　又度々源よりも仰らるゝなり
こまのかみのうすやうたちたる　河高麗紙なり
宰相中將式部卿宮兵衛督内の大殿の頭中將　宰相中將夕霧頭中將柏木也　秘兵衛督は紫上の兄弟なり
弄先帝式部卿の宮の息なり
あしてうたゑ　河葦手歌繪　花あしての色葉は蘆の葉の中に文字をかくなり水石鳥なとのかたにもかきなすなり中峯和尚のさゝの葉かきといふ文字の體篠の葉に似たることきなり　或注にあしてとは葦なと下繪に書文字をかきそへたるなり歌繪とはやといへは矢をゑにかきわといふに輪をかきにといふには荷をゑにかくなり　聞あしでうた繪の中を文字につくりたる物なり如此注せり
れいのしん殿に　秘たき物あはせ給ふ所なり仍例といへり
花さかり過てあさみとり　三月の末か四月はしめなるへし

さうのもたゝのも女てを　さうは草なり女手は今の世の假名なりたゝのとは行の字歟
ゆゑあるふるきしふ　歌の集　白氏文集なと歟
いかにそやなとえりいて給ふに　花御前にさふらふ二三人の女房に其歌はいかに有しなと尋給ふ心なり
くちをしからぬ　二三人えらひさふらはせ給は心ある人ともとなり
けうそくのうへにさうしうちおき　昔は机なとにおきて物かくことはまれなりしにや
筆のしりくはへて　思慮をめくらさるゝ體なり
しろきあかきなとけちえんなるひらは　河掲焉なり
故ミナトイ
ひらは枚也萬葉に枚浦枚の湖とあり此字なり　秘しろきあかき皆色純也けちえん白きあかきひらをは執し給へるなり　私赤白の色は字のいちしるくみゆる物なれは執し給ふとなり
兵部卿宮　螢兵部卿草子をかき出してもちてわたり給ふなり
御なほしたてまつり　なほしなとうるはしきなをし給へる心歟以前も直衣をき給はぬにては有へから

す
御しとねまゐりそへ　秘源は前より茵をしき給ふなるへしさてそへさせ給ふといへり
この宮もいときよげに　螢宮なり前に源をほめていへれは又此宮もとかけり
うちかしこまりてかたみにうるはしたち　さし合の時宜うるはしくし給さまなり
つれ〳〵に　秘源の詞也
かの御さうしもたせてわたり給へるなりけり　秘草子を持參あるなり　聞草子地
すくれてしもあらぬ御てを　秘不惡なり源氏のめに無上ならぬことなり　弄兵部卿宮の手跡事なり
たゝかたかとにいといたう筆すみたる　よからぬ手をとかくつくろひたてたると聞えたり
歌もことさらめきそはみたる　風流めきたることをてのみ給へは正風ならぬ歌のわさとめかしき歌をえり給へるなるへし
たゝ三くたりはかり　花歌一首を三行にかくをいふ歟たゝ又雙紙の枚毎に三行つゝにかきたまへるかいつれも相違なかるへし　秘歌といふ義あり但雙紙の詞に文字すくなゝる歟弄
かうまては思給へすこそ　秘源のほめ給へるなり
さらに筆投すてつへしや　花班超投二筆硯一歎曰大丈夫當下立二功名異域一以取中封侯上安能久事二筆硯間一乎云々今案筆をなくると云詞はおなし心は物語にいへるにかはるへし　或班超か心は捨文好武の義なり云々又是は兵部卿宮の手跡うつくしけれは源氏は筆をなけすてつへしとの給ふなり聞書に絕筆のことをひけりあはす
かゝる御中におもなくくたす　聞くたすと云濁て可然なり　河無面下筆を下すといふなりくたす物をかくてとなり　秘宮の詞也此みな〳〵の中には面つれなきとなれは隨分心をつかひ侍ると也　同箋曰源の詞なりさりともとは宮ほとはさりともかき給へきと思ひしにとなり　聞源の詞也　私案之宮の詞歟此御中におもてつれなく書ほとならは隨分と心をつくしたるほとにさりともさてそあらんずれと源のほめ給へるをそのまゝうけて宣へるなるへしさてたはふれ給へるといへるによくかなへり
「おも(イナシ)なくくたす黃ムのくたすばかきくたすと卑下

して也宮の詞さりともとはさやうなりとも源なとのあしくは言なし給はしとの義歟付紙」かき給へるさうしとも丶　源のかき給へる草子也かたみに御覽す　源のをは宮み給ひ宮の御手をは源の見給ふをいふなり

からのかみのいとすくみたる　秘こは〳〵しきなりさらにかき給へる　河草書也　からのかみといへるより源のかき給へる草子なり

こまのかみのはだこまかに　河膚和也ナコヤカ也なこうなつかしきは　秘河海に和なりといへるは此事なり高麗の紙のはたへこまやかにやはらかなるにといふなり閑　秘などうは女手の假名なりなこやかなるなり私此義あやまれり前に注することく

純のことなり

なまめきたるに　河最媚　私是も紙のことなりおほとかなる女手　源の假名をかき給へるさまを云なり

見給ふ人の涙さへ水くきになかれそふ心ちして　河獲麟一句涙與筆倶白氏文集　中務集「なき人のかきとゞめける水莖をみるに涙のなかれぬる哉　花獲麟

の一句は是を書人の涙をいふ見給ふ人の涙さへといふはみる人の感にたへす涙をなかす心なり彼一句のおこりはよからぬことなりてこゝにはたゝ絶妙の筆跡をみて自然に感涙をもよほすことに詞をかりていへるなり

又こゝのかんやのしきし　河紙屋　色紙みたれたるさうの歌をふてにまかせてみたれかき　河文字に眞行草の三あり眞は束帶して人の立たる體行はありく體草ははしる體也云々此中に草字殊に勝れて能筆のわさなり張芝字伯英善草書絶妙時人謂曰臨池水盡黑後漢書仍張生を草聖と號する也みたれたるさうのうたといふ事はかきあらはせる也　黃ムの字は眞草の草のことく諸抄にいへりいかゝそや草の歌とはいひかたきやうなり四季戀雜の中のざふの歌なるへし然れはさふの字を濁へし四季の歌には時々の景物なれは風景はかりなり戀は姫君に源の書てみせたまはんにつかはしからす雜の部に種々の歌あるへけれは雜と心得へき歟西行なとも雜の部をよくみたりとなん」しところもところに　河「よしとてもよき名もたゝすか

るかやのいまみたれなんしところもところに
あいきやうつき自然に見所あり愛あるかたもあるへし
のこりともに　弄所々より草子かきてまゐらせたるなり
左衞門督はこと〳〵しう　少字なりなとつくろひてと〳〵しき所ある歟
ふてのおきてすまぬ心ちしていたはりくはへたる
　秘我心にまかせたるなり心たゝしけれは筆たゝしといへることとたに人々のこのみ有ことなり　閑筆のうきたる體歟いたはりくはへたるはよわき心なるへし
うたなともことさらめき　秘異樣なる也弄
女のはまほにも　女の手跡なとをはしかとはみせ給はぬなり
齋院のなとはまして　權の手跡なとはとりも出し給はぬなり
宰相中將のは　夕霧なり
なにはのうらにかよひて　或葦手なとゝいひ水なといへる文字すかたのえんに難波浦をいへるにや
もしやういしなとのたゝすまひ　河文字樣石なりみな是あしてのかきやうなるへし
これはいとまいるへき　秘ひまのいるへきとなりけうしめて給　河興感日本紀
何事も物このみし　是より螢兵部卿の事をいへり
けふは又手のことゝも　一日は薰物の批判ありつる故にかくいへり
さま〳〵のつきかみのほんともえりいて　河續紙の卷物なり　秘ふるき手本ともなり弄同
御子の侍從して　秘兵部卿宮の御子なり
宮にさふらふ　螢の本をとりよせ給ふなり
嵯峨のみかとの古萬葉集をえらひかゝせ給へる四卷
私云さかのみかとの古の字三條家の本花鳥には朱にていにしへと點せり予聞書云さかのみかとのふるき萬葉集と假名にかきて注にふるきとはよめともいにしへといふ心なりとあり又或抄に古萬葉集の古の字にこ°と點せり　弄花に古萬葉集と書て下に問云いにしへの萬葉といふ義歟一答合點と云々
私云古いにしへと云を文字にかき來りて今古萬葉集とよみつけたる歟　河萬葉集廿卷聖武御代撰之

或說に萬葉抄五卷貫之撰之是は以後の撰也　河萬葉集一部廿卷平城天皇詔侍臣撰之見古今序又萬葉抄五卷一說貫之撰之一說梨壺五人抄也同廿卷抄不知撰者此外嵯峨御撰四卷目錄中に不見但うるはしき撰定の抄にてはなくて手本のために所々えらひかゝせ給へるにや尋ぬへし　河順集云天暦五年宣旨ありてはしめて大和歌えらふ所梨壺におかせ給古萬葉集等をよみときえらはせ給也召をかうふれるは河内掾清原元輔近　掾紀時文學生源順御書所預坂上望城也左近少將藤原朝臣伊尹を歌所の別當とさためさせたまふ　秘古萬葉集嵯峨天皇の手本なとのために歌を撰してかき給へるなるへし萬葉全部にては有へからす

延喜のみかとの古今集を　花延喜の御代に撰せられたる和歌集なれは則宸筆も有やうにいへりまてとはおほつかなきことなり

からのあさはなたのかみをつきておなし色のこきこもんのからのきのへうしおなしき玉のちくたんのからくみのひも　花唐組なり　唐淺縹紙綺表紙　玉軸淡番組紐たんのからくみ　弄たんのからくみ段々の文なり　秘聞に啄木の類歟　秘おなしき玉のちくとは淺黄なる玉の軸のことにや

まきことに御手のすちをかへつゝ　河昔能書は皆樣樣に體を替て書けり王羲之か筆にも種々の體あり行成卿は十二の樣を書けりなといへり

おほとなふらみしかく　灯をみしかき臺にして火をちかく見給ふなり　花切灯臺にすうるなり

つきせぬ物かな　無盡の風流をあそはされたるなり

この比の人はたゝかたかとを　當世の手跡ははしはしにてもなしとなり

やかてこれはとゝめたてまつり給ふ　秘源へまゐらせ給ふなり

をんな子なともて侍らましにたに　秘たとひ實子なりとも見はやすへき器量なき女子なとには傳ふましく思ひしに今姫君の御ためにたてまつれる本意なるとなり

ましてくちぬへきと　兵部卿宮は女子をもち給はぬなり仍かくの(後イ)給ふなり是より後に一人もち給へり此手本女手の本なれはかくの給ふなり

侍從にからの本　秘源氏の返報なり　からのほんは

唐本の書籍なり
いみしきこまふえ　高麗笛なり名物なるへし
手かくとおほえたる上中下の人々に　それ〳〵に似
合たる物ともをかゝせ給ふとなり
この御はこには　弄明石の中宮の御ためのはこなり
聞前にありつる萬葉古今なとの入たる箱歟
人のみかとまてありかたけなる　是は唐土高麗なと
までの重寶なるといふ心也
このほんとも　此手跡ともをゆかしかる人おほきと
なり
御繪ともとゝのへさせ給ふ中にかのすまの日記は
秘繪合にはすま明石の兩卷こそいたされたれ其外
日記ある也弄　私云前に繪合に出されたるも此内
にも有へき歟但繪合に出されたるは中宮にさふら
はせ給へとあれは此内に有へからさるなり
世をもおほししりなんに　明石の姫君今すこし成長
ありてつたへんとおほすなり
内のおとゝはこの御いそきを　内大臣此時分入内な
とさせ給ふへき御むすめなし雲井雁をこそとおほ
しゝは夕霧のことゆゑ内まゐりはおほしかけさる

故にさう〳〵しくおほす也
ひめ君の御ありさま　秘雲井雁也
あたらしう　秘惜あたらし　私云惜此字可然歟
つれ〳〵とうちしめり　雲井鴈も物おもひ給ふへし
かの人の御けしき　河夕霧なり　秘夕霧なりすゝみ
ての給ふ事もなきなり
心よわくすゝみよらん　内府のかたよりまけものも
さすかなりとなり
人しれす　秘人しれす後悔あるなり
一かたにつみをも　秘夕霧のとかはかりにもえいひ
なし給はさる也　弄人のとかとはかりもえおもひ
定め給はすと也
かくすこしたわみ　秘内大臣の御心くつろきたるよ
しを聞およひ給ふなり
しはしつらかりし　内大臣のあまりはしたなめ給ひ
しを夕霧のふかく思ひおき給ふなりされは心いら
れぬさまにしておもひのとめてゐ給ふなり
さすかにほかさまの　人に思ひうつるへくはなきな
り實成心なり
たはふれにくき　河「ありぬやとこゝろみかてらあ

ひみねはたはふれにくきまてそ戀しき弄
あさみとりきこえてちし　秘六位すくせといひし事也　河雲井雁のめのとのいひしてとなり
おとゝはあやしくうきたる　秘源なり夕霧のひとりすみをわひ給ふ也　花源氏君の夕霧にかたり給ふ事なり
かのわたりのこと　秘雲井の雁のことなり　私是より源の夕霧にの給ふ詞なり
右のおとゝ中務宮　花皆系圖にみえす弄　右大臣は若鬚黒大將の父か其比の大臣なり中務宮系圖にいらすとあり
物もきこえ給はすかしこまりたるさまにて　夕霧の返答に及はすたゝ慇懃にしてゐ給ふなり
かやうの事はかしこき御をしへ　花是よりは源氏の夕霧を敎訓し給ふ事なりかしこき御をしへとは源氏のむかしのきりつほのみかとの御をしへのことをおもひいたし給ふなり　弄源氏の父みかとの御をしへなとにもしたかはぬことなりかしこき御をしへとは源氏にてまやかに御をしへありしてとなり　秘源も思ひしりたるとなり桐壺の御門の御敎訓にも加樣のことはしたかひかたかりしとなり
こととませまうけれと　ことはをませんもうきなり
今おもひあはするにはかの御をしへこそ　御門の仰られしにも其時はしたかひかたかりしかよく〳〵分別すれは皆かしこき御敎訓なりしとおもひ合せ給ふなり
つれ〳〵とものすれは　花夕霧の徒然さうにておれは心におもふすぢあるかと人のおしはかるへきなり　或おもふ處あるにやとは或は當時心中に述懷なとあるか又好色の上にていかなる女御后なとにも心をかくるかなとゝ人の推量さま〳〵あるへき事をいふなり
なほ〳〵しきことにあり〳〵て　宿世といふ物あれはいかなる緣にならんもしらぬ物なりかやうにひとり住にて過してあり〳〵てさしでもなきことなと出來てはことおかしきとなり
いとしりひに　秘のちよわき事なり　河しりひとはことゆかすと云なり云々　案之後よわくなる心なり俗にしりよわといふなり　私云のちよわなるなり歌なとにも結句のよわきをはしりひとてきらふ

なり後干とかけり
おもひのほれとも心にしもかなはす　高上に心をおもへともさもなきことあるとなり
いはけなくより宮のうち　花源氏のわかもとの事をの給ふなり
みを心にまかせす　隨分みかとの御をしへと又我心をもたてゝさへあやまり有つる事をの給ふなり
猶すき〳〵しきとかをおひて世にはしたなめられなと　或須磨の謫居の事也　或說同
くらゐあさくなにとなき　秘淺位なる程は身もちもおのつから聊爾なるとなり　弄位のあさき時は進退自由なるゆゑあしき事あるとなり
心おのつからおこりぬれは　心の奢也
思ひしつむへきくさはひなき時　弄一人に思ひとゝまる所もなき也
女のことにてなんかしてき人昔もみたるゝためし　秘此段殊勝の段なり心を付へし河海にみえたり　弄左大臣時平公事　花又世繼天暦事河海に丞相欲三以贖二子罪一陽石汚爾公孫誅　文選云丞相公孫賀か子敬聲御門につみせらる丞相おほきになけく

其時陽陵の朱安世京師の大使也御門めすに安世かにけてかくるゝ世學てもとむるに公孫賀安世をとらへてたてまつるすなはち賞を行はるゝ時に敬聲をゆるして安世を禁せらる安世獄中にてあさ笑ひていはく南山の竹斜谷の木猶公孫賀かくひかせにはたらしと敬聲おこりのあまりに陽石公主武帝女を汚よし書をつくりてたてまつる武帝怒て父子公孫敬聲ともに誅せらる漢書にみえたり　寛平遺誡云左大將時平　先年於女事有所失とあり前に注せり　或抄云基經の御もとにある女に平定文かよひて侍りしを時平のおとゝとりておかれ子をまうけたまひ其子をおとゝにて定文みてかひなに歌をかきて母にみせよといひけるをおとゝみたまうて此女を定文かもとへ返されけるとなん時平のおとゝほとの人も女にはあやまり有けるをいふ也云々　私注之委細眞木柱の末に河海に注せり　花世繼に天暦のみかと安子中宮うせ給て御なけきもあさからぬ中に式部卿宮の北方はひとりそおはすらんとおほして御はらからの君達にのたまはせてよるひるもろともにふし給て世の政もしらせ給はぬさまなれはた

た今のそしりくさには此御事にそ有ける小野宮のおとゝなとあはれ世のためしにしたてまつるへき君の御心の末の世によしなき事のいてきて人のそしりをおひ給ふ事を思ひなけき給ふといへり以上河海　私云是は重明親王の後室入宮の後登子の尙侍といへる人の事也

さるましき事に心をつけて人の名をもたて　此段六條の御息所なとのことを心にもちての給ふにや

とりあやまりつゝ　花是は一度見そめたらん人をは心にかなはすとも思ひかへして見忍はんか情あるへき心也　秘逢そめつる人を中そらになさゝるやうにすへしと也　聞ふとしたる人に契そめてみおとりすることあるによりてかくの給なり　或末摘花なとのこと源氏の御心はいかやうなる人なりとも堪忍をして人をはくゝみ給ふ也

もしはおやの心に　弄女のおやの心なり　秘おやのためを思ふへし

もしはおやなくて世中かたほに　又は女のおやもなくよろつたよりなきやう樣子ならんをはすこし人からなとの然へきをとり所にしてみしのへとなり

それをかたかと　秘一かとにや

つひによかるへき心そふかう有へきなと　自他のために穩便ならんすゑかよからんとなりさやうの心つかひをそふかう思はるゝことの有へき事なりといふ義歟

のとやかにつれ／＼なる　源の夕霧を折々かやうに諫給ふとなり

かやうなる御いさめにつきて　秘夕霧の心なり猶ふかく雲井鴈の事思ひすて給はさるなり　私夕霧の心は實法なるに源のかやうにをしへ給へはいよいよ外人におもひうつるへき心なきとなり

女もつねよりことにおとゝのおもひなけき　秘雲井鴈の心也おとゝは內大臣なり　花是は雲井鴈の事父おとゝのなけき給ふ事也

うへはつれ／＼なくおほとかにて　河「あし根はふうきはうへこそつれなけれ下はえならすおもふ心を　讀人不知此歌或抄聞書等載之　弄私不引用之

御ふみはおもひあまり給ふをり／＼　夕霧の文なとをも思ひあまりたるほとの時ならてはつかはし給はぬなり

たかまことをか　河「僞とおもふ物からいまさらに誰かことをかわれはたのまん　秘引歌よくかなへり
僞と思物から云々をり〳〵夕霧の文をかはし給ふもたゝ僞とは思ひなからさならてはたか誠をたのむへきそとなり　弄河の引歌よく叶へりあはれなり雲井鴈の心なり
世なれたる人こそあなかちに人の心を　弄夕霧の文なとをも雲井鴈のひたすらにたのみ給ふなり
中務の宮なん　秘前に有し中務宮夕霧をむこにとらんとのことなり
大殿にもけしき給はりて　中務宮よりはや源へ申給ふと也
おとゝは引かへし　河致仕大臣さきに夕霧をきらひ今又したひ給ふゆゑにひきかへしといふなり　夕霧中務宮の御むこになり給はんよしを内大臣へ人の申たるなり
しのびてさることをこそは　弄内のおとゝ雲井鴈にの給ふなり密々にかたり給ふと云義をしのひてといふへし
おとゝのくちいれ　花源氏のくちいれ給ひし時致仕大臣のうけひき給はさりし事也
しうねかりきとて　致仕のそのまゝ同心なかりしを源の腹立にてかくししなし給ふとおもふなり
心よわくなひきても　前のことを内大臣の今思ふ心なり宣ふまゝに思ありても其時はことをかしかるへし又同心なかりつれはかく引たかへ給ふと色々におもひ給なり
なみたをうけて　秘内大臣姫君へ申給ふなり いとはつかしきにもそこはかとなく涙のこほるれは内大臣のかく宣ふにはつかしく又夕霧をうらむる心も有へし
いかにせまし　秘内大臣の心なりすゝみてもいふへきかとなり
たち給ぬる　内大臣こゝをたち給ふなり
なこりもやかて　花致仕のおとゝの立てわか御方へかへり給へるあとにて女君はなかめをり給ふなり 雲井鴈のそのまゝなかめ居給うたる體なり
あやしう心おくれても　花雲井鴈のおもひ給心なり 秘おもはすも涙と也　只今ふと涙のこほれしをいかに内大臣の御覧しつらんと今おもへははつかし

きなり雲井鴈の心なり
御ふみあり　秘夕霧よりの文なり
さすかにそ　つらき物からさすかにみるなり
夕霧 つれなさはうき世のつねに成行をわすれぬ人や人に
ことなる　弄つれなさは雲井雁のこと忘れぬ人は夕
霧自からの事也　秘雲井鴈のつれなきはよのつね
にあるさま也かくつれなきを忘れすしたひきにけ
る心ふかさは我身のことくなる類ひ又も有ましき
となり　私雲井雁のつれなきは不變にかはらぬを
われはいよ〳〵したふ心を忘れぬは人にかはりた
る心となりつれなきはよのつねなりつれなきをか
ほとしたふは類もあらしとなり
けしきはかりもかすめぬつれなさよと　花源氏君の
夕霧をむことにとらんとおもむけ給ふ事をしり
給はぬことは有ましきを夕霧のけしきはかりもの
給はぬをうらめしくおもひ給ふなり　秘かくこま
やかなる文に此中務宮の方よりむこにとり給ふへ
きあらましをはほのきゝ給へきをいさゝかもさや
うのかたをほのめかし給はさるはあやしき事と也
おもひつゝけ給ふはうけれと　こと人のむこに成へ

きことをかつてしらせ給はぬ夕霧の心を雲井雁の
うきことゝおもへとさすか返歌し給ふとなり前の
詞に世なれたる人こそあなかちに人の心をもうた
かふなれはあはれとみ給ふしおほかりといへるに
能叶へり
返雲井雁 かきりとてわすれかたきを忘るゝもこや世になひく
心なるらん　弄夕霧のことかたにうつることと内大臣
ほのめかし給しをも夕霧の文にしらせ給はぬをう
らみて此歌なり夕霧も世のならひにやと云心なり
秘夕霧も世の人のならひにやと云心なり　聞中務
宮のことを心にもちてよめり忘れぬとあれとも中
務宮へ思ひうつり給ふときく程にうらむる心はあ
りされ共源氏なとの御はからひにしたかふてのこ
とにやと思ひてこや世になひくとはよめるなり源
の御心に随ふてならは世になひく心なりとなり
私云忘れぬは人にことなりとあれともよそへ思ひ
うつり給ふときけは人にことなることはなしうき
世の人と同しことなりといふ歟此義
あやしとうちおかれすかたふきつゝみゐ給へりとそ
弄終詞必此程まてはか様のおもむきの返事はなか

りしをいかなることにかと夕霧の心に不審なり此中務宮の事をはしり給はさる故なり見居給へりとそとは巻々の終の詞書かくのことし　私云前に源氏の夕霧に右大臣中務宮なとむこにとらんことの給よしかたり給へりされはしり給はぬにはあらす夕霧の心はうつらぬほとに何の心もなきなり又内大臣のかたにははや中務宮の事定りたる様に思ふ故にかくいへり　花夕霧の歌に忘ぬ人や人にことなるとあるにうけてさそわすれかたく思ひ給ふらんなれとも既おれは忘てもかなはぬはよにしたかふならひなれと恨共ぉもはぬと雲井雁の返歌によみたまへるはうちうちのあらましの色計をほのめかしたる詞なりそれを夕霧の君は夢にもしり給はぬことなれはむかひたることをかやうに返事し給ふやらんとあやしとおもひてうちおかれすかたふきみたまへるとはかけるなり

私云かたふきとは傾奇(カタフキアヤシ)心なり不審したるなり

弄花　押紙　放出私

應徳二年十二月十六日御即位叙位執筆通俊卿記曰東對代南面間爲放出母屋並廂東西行横切懸翠簾副西障子立四尺屏風南北行對座敷高麗端帖（大臣座絶席五尺許四方々敷云）　爲公卿座横切御簾前南西敷圓座一枚爲攝政座

同日時範記

御直廬代（東對）　放出四ヶ間（十三日放出三ヶ間而今夜依直廬所加入一間）　西面御簾（下御格子）　副立四尺御屏風五帖北御簾前（去五六尺許）　少寄東敷菅圓座一枚爲當御座南去六尺許敷同圓座爲執筆圓座

岷江入楚第三十三　藤裏葉

廾九歳　秋太上天皇尊號

夕霧宰相中將戀雲井鴈給事

三月廾日大宮御忌日內大臣殿參極樂寺夕霧同參事

內大臣殿引宰相中將袖誘引給事

四月一日比藤花盛內大臣以頭中將爲御使招宰相中將事

源氏君下賜御直衣於宰相中將事

宰相中將向內大臣第事

內大臣物語事　頭中將折藤花加客八盃事　辨少將歌蘆垣事　頭中將引導宰相中將令見參雲井鴈事

宰相中將遣後朝文於女方事

源氏又敎訓宰相中將給事

八日灌佛事

紫上詣賀茂御形給事

同賀茂祭見物給事　語告御息所車爭事

藤典（內イ）侍祭出立所夕霧宰相中將見訊給事（藤典（內イ）侍ハ惟光女なり）

廾餘日明石姬君入內事　其夜紫上同車給事

三日過後紫上退出明石上參內事

明年源氏君可有四十御賀事

秋六條院准太上天皇事

內大臣任太政大臣事　夕霧任中納言事

夕霧中納言賜菊於大夫乳母事（雲井雁の乳母六位宿世といひし人なり）

夕霧移住三條殿事（故大宮御所也）

太政大臣渡三條殿給事

十月廾餘日六條院行幸事

朱雀院御幸事

於馬場殿有競馬事　奏池魚幷雉等事　殿上童舞事

御遊召宇陀法師事

藤裏葉　花 以詞爲卷名秘同

河詞云御ときよくさうときて藤のうら葉のとうちすし給　花 源氏卅九歳の三月より十月までの事みえたり梅か枝の同年の事なり　秘 源氏卅九歳の春より冬にいたる也弄同

御いそきのほとにも宰相中將はなかめかちにて　花 御いそきの程とは明石姫君の春宮へ參給事也宰相中將いなかめかちなるとは雲井鴈の事に思ひしつめるをいへり　秘 御いそきの程とは御裳きの事なり明石中宮也宰相中將はなかめかちにてとは雲井の鴈の事也

かつはあやしく　秘 夕霧の心中なりかくあなかちに思ふ事ならは內大臣の退屈ありてあなかち申さはゆるし給ふへきをおなしくは內大臣のかたよりをれ給ふやうにありたきとなり

せきもりのうちにもねぬへきけしきに　河「人しれぬわかかよひ路の關守はよひ／＼ことにうちもねななん　私云是は內大臣の思ひよわり給事をいふ人しれぬ我かよひちと云心はなし內大臣のかく思よわり給ふをこなたから一言申さはゆるされぬへしされ共內大臣よりおなしくはゆるされんとおもひて一言をもいひ出さぬあいたかくるしきなりされは我なから夕霧のしうねきと思ひしるなり

女君もおとゝのかすめ給ひし　花 左（右歟）大臣中務宮なとの夕霧にわか御女をまいらせんとのそみ給ひし事なり　秘 梅かえの卷に內大臣の宣ひし事なり草子地なり

何のなこりかはと　夕霧の此程さへ思ひあまるときならては心つよく文をもたてまつり給はさりしかはさやうに思ひうつりて後はなこりもあるましきと思ひわきたる心なり

そむきそむきに　夕きりは一日の御返歌の心えかたきをはいかゝさ心をきて思ひ給ふ雲井の鴈は中務宮なとの事を心にもちてうらみある也仍互の心そむき／＼なるといふなり

さすかなる御もろこひ　河 六帖「みこもりの神しまさしきすちならはわかかた（うたイ）戀をもろこひにせん（なせイ）左右音（モロコエ）伊勢物語眞名本なり　私云そむきそむきなるものから互にふかき心あれはもろこひといへり

おとゝもさこそ心つよかり給ひしかと　内大臣の心をたてゝ夕霧をいとひし事なり

たけからぬに　夕霧の方よりしゐて心いられぬさまにしなしておきたる内に又中務宮なとの事いてきたれは心をたつる事にもたけからす内大臣の心よはれるなり

かの宮にも　花中務宮の御事は夕霧の方よりうけひき給はぬを思ひたちはて給ふとはいへり　私云此義如何　秘中務宮夕霧にけしきはみし給し事なり　弄若大臣中務宮夕霧にけしきはみし事を云也　私花鳥の義不審是は中務宮の御事を夕霧のおもひ定めたまはゝと云なり思ひ立なり思ひ断（絶イ）といふ心にあらす

又とかくあらため　雲井鴈に別（外イ）人をむこにとらん事をいふなり

人のためもくるしう　又はしめて雲井鴈へ申かよは（かよはしイ）ん人夕霧なとへ對してしにくき事もあるへし

わか御方さまにも人わらはれに　秘夕霧を引かへは雲井鴈のためもあしかるへしと也　又内大臣も源夕霧なとへ對してあしかるへけれはなり

しのふとすれとうち／＼の事あやまり　聞うちうちの事あやまりもとよめり　私云ことあやまりつつけてよむべきなり　秘まへに夕霧密通の事なり　弄

猶まけぬへきなめりとおほしなりぬ　秘内大臣の心なり　私云色々思案して猶如此落着したるとなり　前に三條宮（行幸巻）にて源と内大臣對面して玉かつらの事をの給ひし時雲井の鴈の事をやの給はんと色々に思ひ給し時の心と今の内大臣の心と事のはかにかはれり内大臣の性をしるへし

うへはつれなくてうらみとけぬ御中　秘内大臣と夕霧となり親昵なから此うらみはある也　私云うへは何ともなくて下に此うらみをふくむとなり

ゆくりなく　不意也おもひもかけすふとなとゝいふ心なり

こと／＼しくもてなさんも　わさと事をつくりてかく思ふなとの給はん事をは外聞もいかゝとなり

やよひ廿日大い殿の大宮の御忌日にてごくらく寺にまうて給へり　河極樂寺　在深草　昭宣公建立　深草天皇行幸芹川之時昭宣公為殿上童供奉天皇令矸

箏給有一箏彈之人其指入作爪件爪非巧匠之所及自然之寶物也天皇常令隨身給自芹川還御之間忽以紛失大驚給召昭宣公被仰下可求進之由昭宣公奉勅命起立本路心中被願念云此爪不求獻者今生之遺恨也三寶可加護念給（朱イ）求得之處必可建立一伽藍也願力不空遂出獻之天皇殊以感歎群臣之中抽被仰幼童之條定有被恩食歟其後昭宣公極昇進爲果往日願念（今イ）立極樂寺給云々　九條右丞相記云此度所慶寺々綱所東寺西寺天台前唐院極樂寺（穩子）法性寺興福寺　本部王記承平二年三月廿七日皇太后於極樂寺爲先考太政大臣（昭宣公）及先妣人康親王女王氏追福修二法會一云々今案極樂寺昭宣公建立之在深草と也　秘闌巻に三條大宮の忌月四月と有誤れりこゝにてみえたり

弄大宮の御忌月闌巻に四月とみえたりこゝには三月と云り如何八月の除服八日ついてあしきによてのひたる也五ヶ月の服は七月までにあたる歟追聞書云大宮の御忌月三月也闌巻に卯月と満たるは誤なり除服延引也愚今案輕服は何五ヶ月といふも只その日數をかきる假令三月廿日忌日ならは五ヶ月とある服百五十日をかそへては八月の廿日比百五十日にあたるへし當時に所用如此しかれはその日數以後は輕服あくなり重服はその忌月のうちは忌日過ぬれ共猶服中に用る令の文分明なり今十三日に除服は百五十日のうちをすこしひきあけて除服せるなるへし是又日次なとにつきて此義いまもさる事有除服延引の義ともあるは若相違歟（仍）河註之假寧（亭イ）令服暇條々服一年謂以十二月爲限不ﾚ計ニ閏月一其五日以下は並省計日ｦ（ｵﾝﾌ）　秘河海にみえたり　代々攝家の墓所なり　古今ふか草の山けふりたにたてとよめるも此所なり只今内大臣此所へまいり給なり

うつせみはからを云つゝなくさめつふか草の山のけふりたにたて此歌も此寺にてよめり

君たちみなひきつれいきはひあらまほしく　内大臣の類ひさつれたる體なり

宰相中將をさ／＼　宰相中將は夕霧也これも行粧あらまほしきなり

このおとゝをはつらしと　秘雲井鴈の事ゆゑに夕霧の心のうちとけたるなり

心つかひせられ　夕霧の心つかひしくつろかぬ體なり

おとゝもつねよりは　秘たゝいまゆるすへきなとゝおほしめす故なり

みすきやうなと六條院よりも　源より誦經なとし給ふなり

宰相君はましてよろつをとりもちて　夕霧は[illegible]祖母にそたてられし人なり　秘外祖母の御事なれはなり

夕かけてみなかへり給ふほと　時分の體所のさま思ひやるべし

おとゝむかしおほしいてゝ　時節の興にもよほされて内大臣うちいとしなとゝしたる體なり

いとゝうちしめりて　夕霧の此景氣に物思ひのもよほされたるなるへし

心ときめきにみ給ことやありけん　秘夕霧のしほたれ給ふけしきを見とかめ給ふとなり　弄内府の夕霧のなかめ入たる體を雲井の雁の御事をおもふとみしりてうれしく思ふなるへし

袖をひきよせて　夕霧の袖を内大臣のひきよするなり

こよなうはかうしし給へる　秘内大臣の詞なり　河考事　或勘事　又考辭　うつほの物語このみたるふ●にこのかうしをいまはのこりなき身にゆるされなはと云々　弄かうし給へる

けふのみのりのえを　弄大宮の心に入給ひし事なれはなり　秘祖母のゆかりを忘れ給はすは我をはよそになし給そとなり雲井鴈の事下にあり　聞みのりの會歟云々　私云御法の縁歟

殘りすくなくなり行末の世に　内大臣のよはひの末になりたるにと夕霧をかこつなり

うちかしこまりて　秘夕霧なり

過にし御おもむけもこ〔たイ〕のみきこえさすへし〔きイ〕　花三條の大宮の事也　秘大宮の御事也何事も内大臣をたのみ申へきよしをの給ひおきしとなり

ゆるしなき御けしきに　是は雲井の鴈の事ゆゑ疎遠なる事をふくませていふ夕霧の詞なり

心あはたゝしき風雨に　秘心ならすあはたゝしく歸給なりまへに雨風有と書てこゝにてあはする筆法なり　弄人々かへりかたきをりに雨風に歸る心すくれたる詞なり

君いかにおもひて　秘内大臣のおもひなをり給かと

夕霧の思ひ給ふ也　私夕霧の心に内大臣のあたりの事は何事にも平生心をつくる故に今日の詞をかけ給し體を雲井鴈の事なとをゆるさんと思ひ給ふにやなと兎や角やと思ひあかし給ふとなり

よとゝもに　弄世と共になり

こゝらのとしころのおもひのしるし　夕霧の年來の存念むなしからすとなり

わさとはなく　夕霧をよきつゐてしてむかへんと内大臣のおほすなり

四日ついたちのころ　弄七日なり　花前に註す云々　如何　聞上旬のうちをいふと云々　私云七日より前なるへし

おまへの藤の花　内大臣の庭前事なり

頭中將して御せうそこ　柏木を使にて内大臣より夕霧へ消息あるなり

一日の花のかけの　弄深草極樂寺にての事也　秘同　或御說に是より使して内大臣の詞也

内大臣　わかやとの藤の色こきたそかれにたつねやはこぬ春のなこりを　秘たつねたまへとゆるしたる歌なり　弄私云是は雲井鴈の事をほのめかすなり返歌も其心みゆ春のなこりとは大宮の事なるへし　聞同

けにいとおもしろき枝に　聞歌もおもしろき故にかくいへる歟　私云前の詞によのつねの色ならすといへるをうけてけにいと面白きとかけり

まちつけ給へるも心ときめき　夕霧の心なり

返夕霧　中々（さイ）にをりやまとはん藤の花たそかれ時のたとたとしくは　河後撰「君にたにとはれてふれは藤の花たそかれ時もしらすを有ける（れさりけりイ）　弄雲井鴈父の方より夕霧を招たる歌ありゆるされたるは折まかふましきに中々心ときめきなとしてをりやまとはんと也黃昏は時分なり藤に緣あり　又一説云夕霧の返歌はいさゝか思案したる心あり尤餘情ある歌なり或御說に大事なる五文字をこゝのは面白しとなり中々ゆるされてまとふと云心なり　秘五文字おもしろし前の歌は内大臣至極ゆるしたる歌なり此上にてはまとひはすましき事なるをかく名殘なくゆるし給へは却て中々まとひぬへきとなり　私云年來ゆるし給はさりしか俄にかくあなたよりすゝみの給ふにまとひたると也前の詞に心ときめきせられてとあり　又此次の詞に　くちをしうこそ聽し

にけれとあり旁廢忘したる樣の心也　黄ムの大抵
中々とは至極したる詞につかへり案之中々は言語
道斷の義にやかさね／＼物を云は深歎せん爲也
くちをしうこそおくしにけれ　河臆也　秘夕霧の心
臆して御返事をもはか／＼しく申さゝるとなり引
なほして申給へとなり
御ともにこそと　秘頭中將の詞なり　御供申へきと
なり
わつらはしきすいしんはいなとて　秘夕霧の詞也
弄身にしたかふ人をいふ事もあり柏木の御供にと
いへるを夕霧のたはふれにさやうのむつかしき隨
身は無用との給ふなり御供といへるをうけてなり
おとゝの御まへに　弄源氏の御まへなり花　秘此音
信を源氏に見せ奉り給ふなり
おもふやうにありて物し給へるにや　秘源の詞雲井
の鴈の事なるへしとなり
さもすゝみものし給はゝこそはすきにし方のけうな
かりしうらみもとけめと宣ふ　弄孝なかりし也聞同
秘大宮の教訓ありしをも聞給はて不孝に思ひしに
今思ひなほり給ふは孝心のいたりなりとなり　同

さもすゝみものしうとはてなたよりすゝみ申にこ
そあれとなり　私云此段秘の義不審さもすゝみ物
し給はゝこそとはあなたよりまけてさやうにすゝ
みの給てこそまへに承引なかりし恨みも散せめと
也源の仰らるゝなり
御心おごりてよなうねたけなり　秘つゐには内大臣
まけ給となり　花源の心なりつゐにあなたよりま
け給はてはかなはしとおほすを御心おこりとはい
へり
しゐ侍らしたいのまへの藤　花是は夕霧の源氏に
の給ふ詞なり　秘夕霧の詞なり思ふやうありてと
いへる詞にかゝれり　私夕霧の心にも雲井鴈の事
とは思へともさは申かたき事なれはかく申給ふな
り
わさとつかひさゝれ申たりけるを　秘源の詞也
はやうものし給へとゆるし給　源の雲井鴈の事とし
りて同心してかくの給ふなり
いかならんとしたにはくるしく　秘夕霧の心なり
聞或抄同之
なほしこそあまりこくて　秘源の詞也

非参議のほと何となきわか人こそふたあゐはよけれ

河 非参議　二藍　花 直衣の色夏はわかき時二藍次にこき花田次にあさき花田なり非参議は二位三位の中將なとをいふ夕霧は時に宰相中將非参議にあらすふたあゐはあまりわか〳〵しけれはこき花田よかるへしとの給ふなり　秘 三位中將なとの程こそあれ今はふたゐの色こきは似合さるとなり　弄 ひさんきは二位三位なとの中將と云々其雅夏二あゐをきる也　私云非参議は散二位三位あはくわる物也二位三位中將なとは規模の事なり　或御說にわかき時はあか花をすこして赤色かこきなり年のより位ののほるに随てあを花を入るによりてあか色かうすし宿老又位たかき人はあを花はかりをもつてそむるなり　私云夏の直衣の色のこと幼年の時はあか花はかりにてそむ二あゐとはあを花あか花おなしほとにてそめたるをいふといへり花田はあを花をはんにしてそめたるなりこき花田とはあを花の色をふかくそめたるなりあさ花田はあを花のうすき色なりたとへは廿はかりの人宰相なとにてこき花田の色を着せは廿五六の人の散三位なとにてはおなし色なるへし年と官位とにつきて淺深の差別あるなり年わかけれとも位たかきは年のよりたるかたの色を着用する也年老ても官位ひきゝはわかきかたの色を用ゆるなり

わか御れうの　源のれうに用意せられたる直衣を夕霧の御供の人にもたせて奉り給ふなり

わか御かたにて　夕霧のゐ給ふかたなり

たそかれもすき　前に藤の色こきたそかれにとありまたれて行給ふさまなり

あるしの君たち中將をはしめて七八人　秘 頭中將なり　內大臣の子たちなり

なほ人にすくれて　秘 夕霧なり閑

おとゝおましひきつくろひ　內大臣座席なと心ことにつくろひ給ふなり

御かうふりなとし給うて　內大臣の裝束して出る事也

北方わかき女房なとにのそきて見給へ　內大臣の北方女房達なとに夕霧をほめてきかせ給ふ詞なり

いとかうさくに　弄 ほめたる詞也

あさやかにぬけいて　物々しくしたる體なとは源に

みさやうの所はまさりたるとなり
かれはたゝ　秘　源の事なり　弄　源はけたかく風流に艶にうつくしきかたのすくれたるなるへしさては大ほやけさまはすこしたはれて風流すきたる心なり
ことわりそかし　秘　たはふれてとはたわやきたるなり　是は源のさやうに有しは道理なり宮中にてそたち給ひし人なれはといふなり　弄　世の人皆源氏になひきめてなとするによてとなり只今内大臣の夕霧をほめたる心世のならひなり
これはさえのきはもまさり　夕霧は儒門より立身の人なれはなり
心もちゐをゝしく　河　雄々ヲヽシク　をとてめき物物しき所源にまさりたるとなり
ひきかくろひてそ　かく夕霧をほめ給ゆゑに内大臣もひきつくろふなるへし
物まめやかにむへ／＼しく　大かたの時儀たちたる體はすこしにて藤の花を興し給ふなり
春の花のいつれとなく　弄　内大臣の詞也
色ことに　秘　色毎ゴトになり

心みちかくうちすてゝちりぬるか　櫻はかりにかきるへからすいつれの花も春よりさきに散ぬるとなり春よりさきに散たるをうちすてゝとはいへり
この花のひとり　秘　許したる面白し
夏にさきかゝる　河「夏にこそさきかゝりけれ藤の花松にとのみも思ひける哉
あやしう心にくゝ　藤花の春夏にかくるをほめていへるなり花の興にうつるといふ所なり
色もはたなつかしきゆかりに　河　紫のゆかりの色なり　聞　紫をは女にたとへたるなり弄
うちほゝゑみ給へる　是まて内大臣のさまなり
月はさしいてぬれと　花　四月一日頃と上にみえたり月さしいてたるおほつかなし但し下の詞に七日の夕月夜とありいつれにさたむへきそや別にこれをしるすへし前には四月一日とあるを河内方の種種の沙汰ありされとも是は七日なり末にみえたり一日てろといへる面白なり
おとゝほとなくそらゑひをし給てみたりかはしくしゐゑいし給　内大臣そら酔をして夕霧をしゐ酔したまふとなり　秘　夕霧にしゐ給ふとなり

さる心して　秘夕霧心して斟酌あるなり
君は末の世にはあまるまてあめのしたのゆうそくに物し給ふめるをよはひふりぬる人おもひすて給なんつらかりける　夕霧をさしていふなり天下の有職なから内大臣を厭却し給ふはつらかりしとうらみたるなり儒道より立身の人なれは文才の方なとは源よりもつよく心つかひなとも異なる所あると見えたり心をつくへし　秘内大臣の詞也　河天下有職
よはひふりぬる人とは我身をみすて給ふとなり
文籍にも家禮といふことあるへくや　九禪抄　文籍もんしやくとよむ籍は濁也云々　弄問ふんせきとよむ歟かれいともよむにやよみやう一決せる事なし　一勘答云もんしやくけらいともよむへき歟　河史記曰漢高祖幸父太公以(之イ)家禮敬之高祖雖子君也太公雖父臣也　又云漢書高帝記六年　高祖五日一朝太公云々家令(紀イ)說太公曰天無二日土無二王皇帝雖(主イ)子人主也太公雖父臣也奈何令人主拜人臣如此則威(成イ)重不行後上朝太公擁彗迎門却行上大驚下扶太公太公曰帝人主也奈何以我亂天下法於是上心善家令言賜黄金五百斤夏五月丙午上尊太公曰太上皇私なにかしのをしへ此事也已上河海　花内大臣の我はおやかたにてあるを夕霧の家禮のよしみもましまさぬとうらみ給ふなり家禮といふは子の父をうやまふ事なり他人なれとも子に准して禮をいたすをは今の世にも家禮といひきたれりさてなにかしのをしへといふは太公の家禮(令イ)の太公にときし事をいふと云說あれともそれはあまりなる事なりなにかしのをしへは内大臣のわれと稱する詞なり夕霧いため外舅なれは敎訓もあるへき事なり家禮の濫觴には史記をひくはかりなり家禮(令イ)のをしへまてのことはあまりにてと〳〵しきやうにおほえはへりいか〻　弄内大臣をうやまふへき心也官位によて人によらすとなり　秘雨抄に見えたり所詮は父子の禮を他人にも用ひなあれは我身體貌なれは所(心イ)をもおかるへき事そとなり　箋云史記高祖記　單父人呂公善沛令避仇從之客因家沛馬(焉イ)沛中豪桀吏聞令有重客皆往賀蕭何爲主吏主進令諸大夫曰進不滿千錢坐之堂下高祖爲亭長素易諸吏乃紿爲謁賀錢萬實不持一錢謁入呂公大驚起迎之門

呂公者好相人見高祖狀貌因重驚之引入座酒闌呂公因目留高祖々々竟酒後呂公曰臣少好相人々々多矣無如季相願季自愛臣有息女願爲季箕帚妾酒罷呂媼怒呂公曰公始常欲奇此女與貴人沛公善公求之不與自妄許與劉季呂公曰此非兒女子所知也卒與劉季呂公女乃呂后也生孝惠魯元公主云々　文籍にも家譜といふこと侍るなり

箋曰此段諸抄の心不相叶今內大臣夕霧の寬仁大度の人才を愛して漢高祖に比して此詞あり內大臣は外舅叔父なれは父の名は有なから其身數にもあらぬ家令のをしへのみならす我身をは謙退して夕霧を尊重致し無禮の義はなきをいかなれは此邊は御厭却そと面には遜懷の詞なり裏は雲井鴈を內大臣の許容せぬに非すと最初の義を陳し給ふ詞なり其故は呂太后を其父呂公か高祖に與へけるを其母の呂媼か怯惜せしを怒て兒女の知所に非すとてつゐに高祖に妻あはせたる此故事云へき爲の詞也雲井の鴈の事を內大臣許容なきにてはなかりしと云へき爲なり不然は此詞此段に相應せす又此卷の奥にその秋太上天皇尊號の事有之人臣の尊號高祖濫觴也此首尾を以て今の詞あり可味之已上秘抄の內へ三光院自筆被書入之

なにかしのをしへもよくおほししるらんと　弄儒道のをしへを云々花內大臣わかをしへの心云々　聞儒道の夕霧の師匠の事也されと官位と云叔父なれはかたかたの事と宣ふなり　秘兩抄の義不然歟是はたゝ儒道の事をいへる也　同箋史記第八高祖記六年高祖五日一朝太公如家人父子禮太公家令說太公曰天無二日土無二王今高祖雖子人主也太公雖父人臣也奈何令人主拜人臣如此則威重不行後高祖朝太公擁篲迎門却行高祖大驚下扶太公々々曰帝人主也奈何以我亂天下法於是高祖乃尊太公爲太上皇心善家令言賜金五百斤注蔡邕曰不言帝非天子也索隱曰按本紀秦始皇追尊莊襄王爲太上皇已有故事矣蓋太上者無上也皇者德大於帝故尊其父號太上皇也　已上秘抄の內三光院自筆被加之此語河海被載之而三光院被註如此段之間重載之

いたう心なやまし　秘內大臣のわか心をなやまし給

ふ物かなとうらみ給なり
ゑひなきにや　内大臣の體なり　かしこといふ物よ
りも云々　河「たゝにゐてさかしらするは酒のみ
て酔なきするに猶しかす也　私云諸抄引歌不及
いかてか　秘夕霧の詞なり
昔を思ひ給へいつる御かはりともには　秘故致仕大
臣大宮葵上なとの御ゆかりを思へは身をすてゝも
つかふへしとなり　弄夕霧詞身をすてゝも致仕大
臣につかふへしと思ふとなり御かはりとも大宮致
仕攝政等の事也
いかに御らんしなす　随分疎略を存せぬにかやうに
御らるゝはもとより夕霧の心のをろかなる（おこたりイ）をかた
るなるへしと謝したる詞なり
御時よくさうときて　河御時よくなり桐壺巻に勘に
あり　花さうときはいそかはしき心也人をもてな
すとてとりはやしたる心也　秘内大臣の時宜よき
也弄聞さうときは夕霧を饗應し給ふなり
藤のうらはのと　河後撰「春日さす藤のうら葉のう
らとけて君し思はゝ我もたのまん　秘内大臣詞な
り　弄秘上の引歌用之　聞書同　私臣に此程まて
は心のへたてありし中におとしつけて君し思はゝ
我もたのまんといふ心に内大臣の誦したるなり此
詞則此巻の名なり
みけしきをたまはりて頭中將　内大臣の氣色をうけ
て柏木の藤花をとりし夕霧の盃にくはふるなり雲
井鴈をゆるすへき心みえたり
もてなやむに　夕霧のいたくしゐられて盃をもてな
やむなるへし
内大臣 むらさきにかことはかけん藤のはなまつより過てう
れたけれとも　弄松よりさきこすを過てと云待によ
せたりかことはかこつ心也紫とは姫君の數ならぬ
ゆゑにかこつへしとなり　秘雲井鴈の事をほのめ
かすなり女を紫にたとふるなり松よりさきこすを
松より過てとはいへり松を待によせたり我むすめ
の數ならぬによりてわか待に程ふるとなり　聞か
とはかけんとは雲井鴈にゆつらんとなり　私下の
句はそなたよりすゝみての給はんを待つるにさも
なかりしその愁は心中に有なから雲井鴈をまけて
奉るからはそれにゆつりて恨をも殘さしとなり前
に誦給へる歌も君し思はゝ我もたのまんといふ心

にの給へり此義其心に叶へり又紫はゆかりの色なり公界の人ならは達て存分も有へけれともみなはなれぬ中なる故に遺恨もなきといふ歟猶可決之

宰相さかつきをもちなからけしきはかりはいし　河 御前勸盃に大臣の盃を納言以下賜はりて本座に歸て盃を持なから揖するなり此等之准據歟　花 天盃を給りては庭にくたりて拜舞する也是は氣色はかり拜するは外舅の家禮をあはす也　秘 禮をし給へる也私内府は外舅なり　又只今の氣色をうけて會釈し給へる義なるへし

夕霧 いくかへり露けき春を過しきて花のひもとくをりにふらん　河 能宣集としへてせうそこつかはす人のむつましう侍らぬに春の末つ方につかはす　いくかへり咲ちる花を過しつゝ物思ひくらす春にあふらん　秘 あまたの年を過きつるとなり花のひもとくは今日の事なり能宣か歌にいくかへりさき云々河にあり此歌の心なり　聞 心は雲井鴈をゆるし給へるをよめり

頭中將に給へは　盃を柏木にさし給ふなり

頭中將 たをやめの袖にまかへるふちの花見る人からや色もまさらん　河 たをやめは婦人日本紀第一　又手弱女人多乎夜米幼婦萬葉　秘 是も雲井鴈に思ひよそへていへり弄同

聞 夕霧ゆゑに雲井鴈の威光もまさらんとの挨拶なり

つき〳〵すんなかる　花 巡流　聞 此義よし　河 つきつきすしなかる　誦流なり　私不用之　秘 すんしなかる誦しなかると云義ありと云々わろし

ゑひのまきれにはか〳〵しからてこれよりまさらす　各醉中にてこれらの外にめつらしき歌もなかりしとなり仍しかとも（しるしもらすイ）かゝすといへる義なるへしかやうの詞あまた所にあり

七日の夕つくよかけほのかなるに　河 月七日爲魄 初學　秘 四月七日の出てゝにてみえたりついたち比と上にいへるは上旬比といふなるへし（ほのか一本）

けにまたわつかなる梢ともの　秘 花なともほのかに殘れるとなり　私云前の詞に月はさし出ぬれと花のさたかにもみえぬほとなるにといへるをうけてかくいへる歟

花のさまよのつねならて　此段にいへるは皆藤の事なり

辨 少將 柏木の弟 紅梅の大臣なり聲よき人なり

あしかきをいたしてうたふ 河葦垣 催馬樂呂 あしかきのまかきかき分てけふこすと思ひこすとはれ一段 けふこすとけふこすとたれかたれかこのとをおやにまうよこしまうし(けらしもイ)二段 とゝろけるこの家のこのいゑの子とよめ(おとよめイ)おやにまうよこしけらしも三段 あめつちのかみも神もしよらたへわれはまうよこしまうさすすゝ(イナシ)四段 すかりねのすかなすかなきとをわれはきくわれはきくかな五段 秘河海にしるせり今うたふ心は夕霧の方より女の事を親に申たるやうにとりなしてうたふなり弄同 さてかくうかふを内府のけやけうもとの給也 花あし垣の歌は男のみてひそかに女をともなひて家のかきこえていぬるを其女の親に告る人の有けるをとよめ(ぞイ)はつけつらんとうたかへる心也辨少將いま此事を思ひよせてうたへるをおとゝ聞給てけやけうもつかうまつれる物哉と宣へりけやけうは尤の字也以前も此詞は有しなりてゝにはゝかる所もなくうたへると云心にけやけきとはいへりそれに年へにける此家のとおとゝの助言し給へるなりわれは葦垣の歌の詞には年へにけると云詞はなしとゝろける此家とかくへきを例の展轉してかくほどにとゝろけるを年へにけるとはかきなせるなりゆゑに年へにけるとある本をはおさへてとゝろけるとよむへきなりとゝろけるとは家のおちやふれたるをいふなり

いとけやけうも 秘てき面なると内大臣の給ふなり 聞よくひしと相當したる心歟 河常充文選

弄はしたなきとの心なり

としへにけるこの家つと 河あしかきの歌に年へにけると云詞なきか致仕大臣年へにける詠曲をいま盛にたへすうたはれたるよしか 弄とゝろけるをかきあやまれりと花鳥に有此物語古句を引かへて時に隨てかける事多し是もたゝ引かへたるなるへしとゝろけるは家のあれたるなり 聞とゝろけるは家のおちやふれたるなり 河祝言にかくうたひかふるなり 秘花鳥にといろけるを年へにけると履轉書寫の誤と云々如何こゝはたゝわさと用かへてうたひ給ふなるへし今祝言の席なれはとゝろけるとは心つかひ有へき事なるを辨少將ふと用意な

くて有のきゝにうたふへきとおほして内大臣のここに聲を加へてうたひかへ給ひたるなるへし此事是にかきらす常の事也うたふにも漢家に此例おほし又孟子なとにも詩經の詩尙書の詞も處に隨ひて用に隨ひて文字のよみをもあらぬさまに用かへたる事めつらしからさる事也努々書寫の誤とは見るへからす

物おもひのてらす　日ころの恨もたかひに殘らす成ぬるなり

いたうそらなやみをして　秘夕霧なり

みたり心ちいとたへかたくて　夕霧の詞也

まかてんそらもほと〳〵しう　河「なけきこる入いる山のおのゝえのほと〳〵しくも成にける哉　花河海にのせたる拾遺の歌のほと〳〵しくも成にける哉のほと〳〵しきはうと（ことイ）〳〵しきなといふやうの心なりこゝの詞のほと〳〵しうは拾遺のいま一首の宮作るひたのたくみのてをのをとほと〳〵しかるめをもみしかなといふ歌の心なりそれはおとろおとろしきといふ心也はや夜もふけたるほとに道の空のおそろしかるへき心に宰相中將のいへる也ふるき詞は一定せる事なしことによりて用ゆへき事なり　聞ほと〳〵しはおとろ〳〵しきなり

とのゐ所ゆつり　夕霧の頭中將の寢所を今夜かし給へ寄宿すへきとの詞なり

あそんや　河朝臣也　秘おとゝ頭中將をさしての給へり

御やすみ所　夕霧の休息所を用意せよとなり

おきないたう　大臣のみつから我をさしての給詞也

むらゐなれは　無禮なれはなり

中將花のかけのたひねに　頭中將の夕霧にいふ詞なり　秘あたなりといふ心なり　内大臣のゆるし給へるをいへり　私大臣のゆるし給へとも花のかけの旅ねなとはかりそめなる心のあるほとに頭中將の心にはくるしきしるへそとなり

松にちきれるはあたなる花かは　夕霧の詞也　河六帖「ときはなる松にちきれる藤なれはおのか比とそ花はさきける　秘おもしろき返答なり引歌河に同し　聞あたなるましきと我事を云なり

ゆゝしやと　花のかけの旅ねなとあた〳〵しくいひなしたまふをゆゝしやといみてなりさてせめたま

ふとはしるへをいそくなり
中將は心のうちに　弄頭中將なり夕霧の方よりしたはさりし事を思ふ也
ねたのわさやと　秘頭中將はわか方のまけたるよとねたく思ひ給ふなり
人さまの思ふさまに　柏木の心に夕霧の何事にもすくれたる人からなるに思ひゆるしてやかて道ひきたるとなり
（こゝイ）うしろやすくみちひきつ　夕霧の實々しき人なれは雲井鴈のためにしる（しかるイ）へき心とうしろやすく（人と心やすくイ）頭中將の思ふとなり
をとこ君は夢かと　私夕霧也
わか身いとゝいつかしうそ　秘よく堪忍したるよと思給ふ也　箋曰いつかしうはいつきかしつくの方にておほく（えイ）のたかき自稱なるへしつゐに内大臣のまけ給へる故也　私云此義尤もよし秘抄の下へ三光院自筆にかき入られたり　又聞書云内大臣の方よりまけてゆるし給へるを夕霧の面白らしくいよいよ心おこりそし給ふらんとなりとあり此義尤可用之　又此詞筆者の推量してかけるとみゆ

女はいとはつかしと　雲井鴈の心也
おかぬ所なくめやすし　雲井鴈のさまを夕霧の思ふ心なりたかひにいはけなくて見しよりもいつくもねひとゝのほりて不足なる所なきとなり
世のためしにも　秘夕霧の詞也　河戀するにしぬる物とはきかねとも世のためしにも成ぬへきかな
私云聞書に右の歌を引秘にはのせす但此引歌面白歟戀するにしぬるためしとはきかぬかわれは戀もしなんと思ひつるほとにいまた世になきためしにならんとしつると思ひのふかき事をいへるなり
心もてこそかうまても　是は夕霧の別心なく雲井鴈より外に思ひうつらぬ貞心からてそかきりありて内大臣もゆるし給へと實々しき心をみつからの給ふなり
あはれをしり給はぬも　雲井鴈をうらみたる詞なり
少將のすゝみいたしつるあしかき　辨少將のあしかきうたへる事内大臣さへ心けやけうもとの給へはそのことを夕霧の雲井鴈にかたり給ふなり
いたきぬしかな　閑うちつけたる心也　花かたはらいたき人哉といふ心なりぬしは辨少將をいふなり

秘いたく〳〵しくいひたる人なるとなり　弄いたきはいた〳〵しきなりぬしかなとは少將の事此歌におやに申といふ詞あれは當座の取合に夕霧の致仕大臣に申そ給ひし事のやうにうたひたりそれを夕霧の心にいかにそや思ひていたきぬしがなとの給へり

河くちのとこそさしいらへまほしかりつれ　河六帖「川くちの關のあらかきまもれともいてわれねぬや忍ひ〳〵に河口催馬樂呂河口のせきのあらかきや關のあらかきやまもれとも我二段まもれともいてて我ねぬやいてゝ我ねぬや關のあら垣　今の心あらかきのまかきかき分て誰かは此てとをおやにまうしゝとあるを夕霧の關のあら垣まもれともいてゝわれねぬやとこそいはまほしかりつれとむかしを思はれたるなりそれを女きゝくるしと思はれたるなり　花辨少將のあしかきをうたひし時夕霧の我は河口の歌を返答にうたひたくありしと女にかたり給ふを聞くるしと思ひたるは關のあらかさはかたく守りしかとも忍ひ〳〵には心をかよはしたりしをおやたちはしり給はていまはしめたるやうに思ひ給へるといふ心なれは女はきゝくるしと思へるなり　弄夕霧の心さやうにはあらす雲井鴈の事をはおやのおとゝには申さすまかりしともつゐにはおやのかたよりまけてあはせられぬとはいはまほしかりきとなり　秘河口催馬樂呂なり河海花鳥に昔の事を云といへりいつれもいかゝなりいかに守り給へともつゐにはまけてゆるし給ふよとなりかやうに當代の事にみるへきなり　箋勘三光自筆河口の關は伊勢國なり　六帖に河口の關の云々前にあり　私云弄秘ともに河花の説を不用聞書又同し九禪抄又同案之いてゝわれねぬや忍ひ〳〵になといへる心は河花の説おもしろし雲井鴈のあさき名をいひなかしけるなとよみあさましとの給ふなといへる詞のさまも愚意には河花の説叶へるかと存する但弄秘等の義尤可用之但如何

女いときゝくるしと　雲井鴈の心也

雲井雁あさき名をいひなかしける川口はいかゝもらしゝせきのあら垣　花女の歌なり我あさき名をたつるは川口の關のあらかきいかゝ守りたりし事そとおほめくなり　弄雲井鴈の歌あさき名とは雲井の鴈のお

やの方を夕霧のあさくいひなし給し事なりかゝ
もらしゝとは夕霧の詞にいひもらし給ふ事なり關
は守るものなりそれよりもるといへる事をよそへ
てよめりいかゝもらしゝとは出て我ねぬと夕霧の
答んとあれは守る人もいかてもらしけんとおほめ
く也　秘雲井鴈の歌おとゝを今淺きとの給ふはい
かさまにもらし給ふにかとなり聞書同　或抄宗長
説とて或人の云蘆垣のうたひにおやにもよほし申
てと云うたひを辨少將うたはれたれは夕霧は我は
おやには申さぬ物をまけ給つれはこそと云心なり
それをおやのあさき名をいひなしけるはいかゝさ
やうにはもらしけると女のよめる歌なり
あさましとの給ふ　雲井鴈の詞かこちたるさまなり
てめきたり　秘大やうなるなりほめたる事なり
すこしうちわらひて　夕霧のさまなり
返夕霧
もりにけるきくたの關を川口の淺きにのみはおほせ
さらなん　河菊多剌關在陸奥國云々能因歌枕八雲抄河内云々俗にはきくたの關と云　弘仁
式云　太政官符　應給考陸奥國外散位三十三人事
擬郡司廿八人　白河菊多剌守六十人自餘略之　右直國
府ニ外散位等如件省宜承知依件給レ考　延暦十八年

十二月廿日花鳥同　花今案男の返歌はかたく守る
なといふ奥州のくきた（さくイ）のせきもおのつから人間は
あるなれは川口のせきにのみあさきと云名をはお
ほせさるへきといへるなり　秘くきたの關箋奥州
也菊多剌關也俗にくきたの關と云きふく守る關な
りそれもるゝ事はある物なりされはわさきにのみ
もるゝにてはなきなり　弄くきたの關きくた同之
くきたの關は奥州也くきたの關はかたく守る所也
その關ももり出ることともあるならひなりそのこ
とわりなれは名をあさくいひなしたるにはあらす
と答たる歌なり　又花鳥に有あしかきの歌の心を
本として釋し給へりやす〳〵として面白き義なり
一說者辨少將歌ひし心は夕霧の女のおやにわひ申
すよしをとりあはせてうたひしを夕霧の關のあら
かきとの給ひしを女君のあさき名をもらしけると
うらみて又よめるなり夕霧又かたくもる所をもか
よふ理（傾イ）ありあさきはかりにとりなし給はぬなとこ
たへ給ふなり
ひにかこちて　夜前沈醉の餘氣にかこつけて夕霧
の朝いしたるなり

あくるもしらすかほなり　河「玉すたれあくるもしらすねし物をゆめにもみしと思かけきや秘弄開書などに不引之

人々きこえわつらふを　さふらふ人々の何かととりあつかふなり

おとゝしたりかほなるあさいかなと　あさい哉なととかめたるなり　内大臣の詞也　花あさいは朝寝なり

されとあかしはてゝそ　花あかしもはてす退出の心なり　秘あかしはてゝそと也御説花の義と同し

ねくたれの御あさかほ　弄夕霧の姿也　花六帖歌は花なるを人の朝のかほにかきなしたるなり　或抄
引歌河海「ねくたれの朝顔の花秋霧におもかくしつゝみえぬ君かな

御ふみは猶しのひたる　秘もとのことくなをしのひたまふなり

中々けふはえきこえ給はぬを　花此間は忍ひ〳〵に御ふみかよひは有しをけふは中々したりかほにてすか〳〵ともえきこえ給はでいさゝかおそかりしにや物いひさかなき後達なとはつきしろひてわらひたるなり　弄雲井鴈けさははつかしくし給ふをわらふなり　秘忍ひ給ひし時よりも中々返事をもし給ひにくゝ思ひ給ふなり

つきせさりつる御けしきに　花是は夕霧の文の中の詞なりつきせさりつるとは女の心おきたるをいふへしたえぬ心はたへかたきに女に又思ひきゆへき心ちせしとなり　弄つきせさりつるは女の心のとけぬなり　秘夕霧の文の詞なりつれなくましますよしなり

又きえぬへきと　弄以前の心つくしにかへるなり聞

夕霧同
とかむなよしのひにしほる手もたゆみけふあらはるる袖のしつくを　此年月は忍ひに袖をしほりしかどもあまりに手たゆさにうちおけは涙もしつくもおのつからあらはるゝを人なとかめそとよみ侍るは今よりは人めをはゝかるましきよしきこえ侍り
秘今よりはしのふましきそとなり

いとなれかほなり　夕霧の文のさまをいふなり

うちゑみて　秘内大臣なり手跡を褒美し給ふなり
花是はおとゝの詞なり文の中の詞にはてもつけ給

はて手跡をほめ給ふはおかしきなり
むかしの名殘なし　花是はこの日ころのうらみは露ものこらぬといふ也　私此詞草子の地なるへし
御かへりいてきかたけなれはみくるしやとてさもおほしはゝかりぬへき事なれはわたり給ぬ　雲井鴈の返事を只さへ今朝はしにくゝおほすに大臣さへおはしぬれはいよ〳〵いてこぬなり　仍おとゝおほしはゝかりぬへき事と雲井鴈の心中を察してわか方へかへり給ふなり
御つかひのろく　後朝の文の使に祿を給ふなり
中將ふかしきさまに　柏木の使をあひしらふなり
つねにひきかくし　年月を忍ひて文のかよひし時なり
右近のそうなる人の　河右近將監　いまた叙爵せさるをはせうとよふ也　弄夕霧左中將なり　左近將監たるへき歟左にても思案右近可然哉
六條のおとゝも　源氏太政大臣なり
宰相つねよりも　夕霧なり
けさいかに文なと　秘源の詞なり
さかしき人も女のすちにはみたるゝためしあるを　河寛平遺誡　左大臣藤原朝臣時平公者功臣之後其年雖少已熟政理先年於女事有所失勘云々
人わろくかゝつらひ心いられせて過されたるなんすこし人にぬけたりける御心とおほえける　夕霧の心を源のゝ給ふなり内大臣のことのほかにへたて給ひしをしゐてしたひたるさまにもみせさる物からわくる心もなくて過し給ひし心おきてをほめ給へるなり
おとゝの御おきてのあまりすゝみて名殘なくくつをれぬるを世の人もいひ出る事のあらんや　内大臣の最初にあまりこと〳〵しく厭却のさまなりしゆゑに源も腹立の心ありてこと葉ませ給はす又今度の心にもさやうにてかけはなれすなからしたふやうにはし給はさりしゆゑに結句内大臣の方よりまけてゆるし給へるを世人も何といはんとなり
さりとてもわか方たけうおもひかほに心おこりしてすき〳〵しき心はへなともらし給ふな　是より夕霧に心おきてをの給ふなり是まては皆夕霧のかたの理運にし給へるなりそれに志得たりと心おこりをして女かたをあなつらはしくおもひなしてあため

きたるすき心なとし給ふなとなり
さてそおいらかにおほきなる心おきてとみゆれとし
たの心はへはをゝしからすくせありて人みえにくき
所つき給へる人なり　弄内大臣の事を源氏の給ふ也
をゝしからすは女々しきなり　私内大臣の心を源
のゝ給ひてそれにつけて夕霧の心もちゐ有へきさ
まをゝしへ給ふなり
事うちあひ　内大臣と夕霧の御中の事を然へしと源
のおぼすなり
御子ともみえす　秘御子とも見えさるなり　源のわ
かくおはするとなり
ほかほかにては　外々なり　或抄御説によそ〳〵に
て思へはひとつ物のやうにみえ給かおまへにては
うつくしき然るへき人二人おはしますやうなり
おとゝはうすき御なほし白き御そ　花うすき直衣は
うす花田なり白き御そはかさねのきぬの事也　秘
源氏三十九歳うす花田秘に色の薄きなり白き御そ
は直衣にかさなりたるきぬなり
宰相殿はすこし色ふかき御なほしにちやうしそめの
てかるゝまて　河西宮左大臣六月の比丁子染の帷を
着給けるよし舊記にみゆ　花すこし色ふかきはこ
き花田なりこくあやはからめきたるにてはなきを
いふなり　聞丁子そめはかさねなり　秘夕霧十九
歳すこし色こう丁子そめの事花鳥に記せり類字源
語抄に丁子染の註にかうのくろき色なり丁子そゝ
きなといへるも同し色なるへきにやとあり又丁子
染は西宮左大臣高明公始て染出すなりくろ梅なと
いふかこく丁子にてそむるなり　私云花鳥には
こくあやとあり師説の本にはしろきあやとありて
てくあやイ本とあり如何丁子染とて又白きあやと
いへる不審　弄にしろきあや花にてくあや
くわんふつゐてたてまつりて　秘灌佛抄に見えたり
花國史云仁明承和七年四月八日請律師傳燈大法
師位靜安於清涼殿始行灌佛事　私按公事根源抄曰
灌佛四月八日　神事にあたる日はおこなはれす灌
佛ある時は九日より御神事をはしめらるゝ御殿の母
屋の御簾をたれて晝御座をてつしそのあとに山か
たをたてらるゝ佛の生れ給ふけしきを作て糸にて瀧
をおとし色々の作り物有北のかたに机をたて鉢五
つに五色の水を入らるゝ公卿參り集まりて殿上にさ

ふらふ女房の布施とも色々にむすひたる花に付て風流なとあるを衣箱のふたに入て臺盤所より出さるれは藏人とりて殿上の臺盤の上におく上達部わか布施のふるつゝみをもちて御殿のなけしの上なる白木の机に置て次第に座につく御斷の御布施は紙をおかる不登の人の布施藏人おく御導師の僧まうのほりて佛前の作法おはりて鉢の水を一にくみ合せて先御導師くはん佛す公卿次第にすゝみて笏をさし膝行してひさこを取て水を灌て灌佛して後禮佛す導師布施給てしりぞく此佛生會は推古天皇よりはしまる釋迦如來の俱毘藍城にて生れ給ひける時天龍下て水をそゝきて釋尊にあひせたてまつりし事を本なり私云是は內裏にての灌佛の義なり親王大臣なとの家にては作法おほくかはるへし但し大體をみせしめんために註しおかるなり

御おた〳〵よりわらはへいたし　弄　親王大臣以下布施を內裏にかはらす給ふなり　布施なとを出すため歟女房の布施ともなるへし

ふせなとおほやけさまにかはらす　河　灌佛四月八日　布施員數寬平八年四月八日定法文　親王大臣錢五百文　大約言四百文　中納言三百文　參議二百文　四位百五十文　五位百文　六位并童五十文　親王大臣紙五帖　大中納言四帖　四位五位二帖　六位并童一帖云々　推古天皇十四年是年初毎寺四月八日設齋會日本紀　私云昔より諸寺に行ふ佛生會は推古天皇よりはしまれり灌佛とて內裏并親王大臣家までおこなはるゝは承和七年よりはしまれる也　佛に水あふせたてまつるは同し　弄　灌佛のふせには昔は錢を用たるを中古より紙になされたりふせつゝみと名つけ侍るなり

おまへのさほうをうつして　內裏にておこなはるゝ御前の作法なり

うるはしき御前よりも　是も同しく內裏の事を云

宰相はしつ心なくいよ〳〵けさうし　是は夕霧の雲井鴈の方へ行給ふとてのさまなり

わさとならねとなさけたち給ふわか人は　花　夕霧の思ひかけ給ふ女房の事なり

弄　夕霧に心をかけし人也　秘　夕霧の一方にさたまり給ふをうらめしと思ふわか人あるへしとなり

私云わさとならねとゝはさして心とゝめてはの給

はぬ人もちと情たちなとし給ふをいふなり是は夕霧の官女の事を云也　或抄或義云雲井鴈に心をかけしわか人の夕霧の領し給ふをうらめしく思ふとなりと云々　私云此義曾不可用之
年ころのつもりとりそへて　秘是はてと方に夕霧の心をうつし給はさるをいへり
思ふやうなる御なからひ　先は夕霧と雲井鴈との事又源氏と内大臣との事なれは當時あらそふ人有へからされはかくいへり
水ももらんやは　河「いかてかく（はイ）あふてかたみに成ぬらん（にけイ）水もらさしとむすひしものを　花水もらぬとは堅固なる契をいふなり水洩不通といふ詞もあるなり　哢引歌の心を引かへていへり
あるしのおとゝもいとゝしきちかまさり　内大臣の心夕霧を聟にとりてよそにみしよりも可然人也と思ひてもてかしつき給ふなり
まけぬるかたのくちをしさは猶おほせとつみものこるましうそ　これ又内大臣の性をいへり
まめやかなる御心さま　夕霧のこと方へおもひうつらさりしなとをありかたく思ひていよ〳〵恨ものこらぬとなり
女御の御ありさまなとよりも　秘女御は御さいはひ心よからさる故なり　哢　私女御は今上冷泉院の女御也弘徽殿二條相國の四君腹なり
北のかたさふらふ人々　秘雲井雁の繼母なり　花二條のおとゝの四君雲井鴈のまゝ母なり　哢女御の御母内大臣の北方也
何のくるしき事かはあらん　夕霧のためにはくるしからぬなり
あせちの北方なとも　花雲井雁の實母なり　秘哢同　私雲井雁の實母は今は按察の北方なりかゝるかたにてうれしと思ひけり　按察の北方は内大臣の中はうとく成てかくよそ人になれは内大臣のを心うく思ひしか此雲井雁の事なとにて内大臣の心をうれしく思ふとなり
かくて六條院の御いそき　花明石の姫君の春宮へ參り給ふ事なり秘同
たいのうへみあれにまうて給とて　河賀茂祭前日於垂跡石上有神事號御形御あれ御生也見古語拾遺　日本紀曰神聖生其中者或御禊ミアレ　祭の前一日を御禊

といふ也御生所は神館にありと云々祭時の御旅所なり　花みあれは玉依姫の別雷神をうみ給し所をいふにやさて御生ともかく則かたちをあらはし給へる故に御形ともかけり神館はたゝすとみおやとのあひたおきみちといふ所にありといへり　秘紫上なり此時分紫上の榮花のさかりなり若菜よりは思ひ事のあるなり　聞世俗御禊と云是はみあれのみそきを云故に心よみなり御生御形花鳥にあり別雷社生御所みあれの神館へ紫上參り給ふなり次の詞にみえたり

れいの御かた〳〵　誰々をもさそひ給へと紫上のいきほひにおしけたれんもいかにそやおもひて誰もともなひ給はぬなり

御車廿はかりして　紫上の女房の車なり

くた〳〵しき人かす　さしてもなき人數おほくはあらて人をえらひ引つくろふなり

まつりの日のあかつき　秘紫上酉の日の曉にまうて給ふなり

かへさは物御らんすへき　みあれのかへさに紫上賀茂祭を見給ふなり

御さしき　御棧敷　物見給ふ所なり

御かた〳〵の女房　前の詞にはたれ〳〵も伴ひ給はぬとあれは此御かた〳〵とあるは紫上と明石の姫君との事をいへる歟

おまへそ（所イ）しめたるほと　此御棧敷の前に車をたてゝ所えたる體なり

かれはそれとゝほめより　餘所より見ても秘源氏の紫の上の御棧敷とおしはからるゝやうなるなり

おとゝ中宮の御はゝみやす所　秘六條の御息所の事を思ひての給へり

車おしさけられ　おし避られなり車あらそひの時の事なり

時による心おこりして　源氏の大臣人に驕りましき心おきてを各にいましめ仰らるゝなり

こよなく思ひけちたりし人もなけきおふやうにて　秘葵上の事なり此事只今もの給ひいつれは禁忌なれはいひさし給ふなり

なくなりにきとそのほとはの給ひけちて　聞物のけの事をあらはにはの給ふましき事なれはいひさし給ふなり是秘の義と同しき歟但し或抄云不吉なる事故の給ひさすと云々　或抄云弄にあしかれと思

はぬ山の嶺にたに此歌可然かとあり云々但弄の愚
本に此事なし
殘りとまれる人々も　六條御息所と葵上との子孫の
體をの給ふなり
中將はかく　夕霧なり　秘たゝ人にておひ出給をい
ふなり
宮はならひなきすちにて　私秋好なり中宮に立給ひ
てならひなき人なり其むくいあるかとなり
すへていとさためなき世なれはこそ何事も思ふまゝ
にていけるかきりの世をすくさまほしけれどのてり
給はん末の世のたとしへなきおとろへなとをさへ思
ひはゝからるれは（はからるイ）とうらかたらひ給て　此段の詞い
さゝか心得かたき故に私に註す此段の心は前に御
息所と葵上との事をの給ふて扨世間は定めなき物
そと也仍只今源氏の心のまゝに榮花をも盡したく
思へとも行末に殘り給はん子孫の事外におとろへ
給ふ事なとあらは俄にけちめあらはなるへし扨わ
か德をもおごらすして子孫にのこしたく思ふ故に
心のまゝに榮耀をはつくさぬよしを紫上へかたり
給ふ詞とみえた

上達部なとも御さしきにまゐりつどひ給ふれはそな
たに出給ぬ　秘紫上の棧敷に居給へりそなたとは源
のわか御棧敷なり　弄紫上のさしきより源氏のさ
しきへ出給ふなり
近衛つかさの使は頭中將なりけり　河賀茂祭欽明天
皇御世天下擧國風吹雨零爾時勅卜部伊吉若日子
令卜乃賀茂神祟也撰四月吉日馬繫鈴人蒙猪影而驅
馳以爲祭禮　頭中將近衛使例幷近衛使始可勸　花
賀茂祭春日祭の使を衛司を用らるゝは東遊を奉ら
るゝ故なり舞人倍從は近衛司の被官たるによりて
なり使のいて立又還立にさまざまの儀式ある事な
り　弄問賀茂祭の使のやう如何　一勘ちかきまて
も近衛使は伯卿子息中將爲代かさり車なとにのり
て東遊を興する事あり
かの大殿にていてたつ　柏木頭中將にて祭の使たり
仍内大臣の亭より出立なりそれに上達部なともみ
とふらひてすくに此源の御棧敷へ參りしとなり
藤内侍のすけも　河惟光宰相の女なり　秘惟光かむ
すめ夕霧心かけ給ふ人なり
おほえことにて　惟光も源氏の天下なと心のまゝにし給

ふ世なれはかく有へし
宰相中將いてたちの所にさへ　夕霧藤內侍のすけ出
立をとふらひ給ふなり
うちとけすあはれをかはし　夕霧藤內侍忍ひたる中
の心なり
かくやんとなきかたにさたまり給ぬるをたゝならす
秘藤內侍の心なり　夕霧雲井雁にさたまれること
なり
夕霧 何とかやけふのかさしよかつ見つゝおほめくまてに
なりにけるかな　秘とほ〳〵なるをいへりかつ見つ
つはかく見つゝなり　花久しくあはぬ心なり　閑
けふのかさしはあふひをよせたり　私夕霧の宰相
中將藤內侍をは文にてとふらひ給へりとみゆ
おり過し給はぬはかりをいかゝ思ひけん　秘わさと
聞給ふ事なれはなり　私つらくは思ひなから折ふ
しを過さすとひ給へるにてなくさむるなり
返藤內侍 かさしてもかつたとらるゝ草の名はかつらを折し人
やしるらん　花折桂は夕霧のもと文章生にて有し事
を云也　私葵をはかつらにかくる物なり仍かくい(かイ)
へり定家卿歌に新勅撰「久かたの桂にかくる葵草

空の光にいく世なるらん　河晉書曰都詵字廣基舉
賢良對策爲天下第一爲雍州刺史武帝於東堂會送問
詵曰卿自比爲如何詵對曰臣對策爲天下第一猶桂林
一枝崑山片玉今以之課試及第之事作來也　拾遺雜上
菅原大臣かうふりし侍りける夜はゝのよみ侍りけ
る　「久かたの月の桂もをるはかり家の風をもふ
かせてしかな
はかせならてはときこえたり　秘桂の葉風なり博士
によせたるの心もあり　閑書同　河葉風　桂の葉風也博
士にそへ(たるか)　閑そなたにこそよくしり給へけれと也夕
霧は及第の人なれはなり
はかなけれさねたきいらへとおほす　夕霧の心中な
りねたきさまにいらへたると思ふなり
猶このないしにそ　閑此段草子の地也　秘夕霧の心
をとめ給ふなり　私かへて後に此腹に君たちあま
たあり
かくて御まゐりは北方そひ給ふへきを　花紫上の事
なり　秘明石姫君入內の事なり　閑紫上のそひ給
ふへきとなり
つねになかく〳〵しうは　源の心紫の上久しく內にそ

ひさふらひ給ふ事はいかゝとなり
かの御うしろみ（うらみイ）をや　花明石の上也　秘同　源の思ひより給ふ心なり
うへもつゐにあるべき事の　紫上の心終には實母なれは姫君と明石上とへたゝりはつましきとの心也
かの人も物しき　秘明石上なり
この御こゝろにも　花明石の姫君の御心をいふなり　秘姫君なり紫上もさやうに思ひ給へるなりしからすは何としても實の母を戀しく思ひ給うてうらみ給ふへきとなり
このをりにそへたてまつり給へ　紫上の方より源氏又明石上姫君なとの心中を察してかくの給へり
またいとあえかなる　姫君のをさなくおはするとなり
御めのとたちなともみをよふことの　河見及ふ事はかりをこそ心のいたるかきりの宮つかへをもし侍らめ目に見えぬとまても思ひやりてせん事はあるましきといふなり不足のよしなり　私云御めのとたちなとは上さまの事はえ見及ふましきよしの心もある歟

みつからは　紫上の我との給詞なり
いとようおほしよる　紫上のよくの給ふ哉と源のおもひ給ふなり
あなたにも　秘明石上へ源のゝ給ふなり
いみしううれしく　明石の心也
やんことなき御ありさま　明石上の用意し給ふさま紫上にもおとらぬとなり
あま君なん猶この御おひさき　明石上の母の尼公なり實母明石上は此をりふし姫君を見たてまつるへきなり母の尼君はかゝる祝儀なとの時は見たてまつる事も成ましきをいかにしてかと思ふ心なり
その夜はうへそひてまいり給ふに　秘紫上のそひて參り給ふなり
御てくるまにもうちくたり（たイ）　河輦車也　花紫上は姫君にそひ給て手車に乘て參り給ふに尼公のたちくたりあゆみなとしてはいかに見まいらせたく思給ふともみくるしかるへきよし也　弄輦は姫君の車の事なるへし紫上は同車して參內あるなり未の詞に紫の上の輦ゆるされたまふ事をはいへりかくならふる（からイ）とは明石上の事なるへし花鳥に尼君の事と

いへるは不可然歟　秘明石上は先今夜は斟酌ある
也　私此段は紫上の姫君と輦を同して參り給ふを
明石上はたちくたりかちにてあゆみなどして參ら
んは姫君の御ためいかゝと今夜は明石上は參り給
はぬなり弄の義尤然へし　河上古は女房とてくる
まゆるされぬほとは門よりおりて道の程は几丁を
さゝせ（とらイ）てまいりけるなり
わかゝくなからふるを　明石上の心也
人のめおとろくはかりに　秘事そき給ふとなり　源
の榮花のさかりなれはこと〳〵しくせしとおほす
さへこと〳〵しき儀式なりといふなり
ちきりもなくかしつき　明石の姫君のさまなり
うへはまことにあはれに　紫上の心實子の如く哀憐
の心あるなり
人にゆつるましうまことにかゝる事もあらましかはと
花紫上の御子もち給はぬ事をいふなり　秘紫上の
御腹ならましかはとなり　私云紫上の御腹ならね
は實母の心に姫君の心中を推察して只今うしろみ
をゆつるなりそれさへうつくしくあはれに思ふな
りかくゆつるへからぬ紫の實子ならはいかばかり
あらんとの心なり
おとゝも宰相の君にも　源も夕霧も是を紫上の實子
ならは御母方の不足なる思ひもなからん物をと也
三日過してそうへはまかてさせ給ふ　秘明石上のた
ちかはりまいり給ふなりそのつゐてに紫上に明石
上の御たいめんありしなり
たちかはり　秘紫上は退出ありて明石上かはりに參
り給ふなり
御たいめん　秘紫上明石上に御對面あるなり　私此
對面禁中明石姫君の御かたにての事なり
かくおとなひ給ふ　秘紫上の詞なり　私云姫君のか
ほと成長あるまて紫上はやしなひたて給ふ明石は
年月へたゝれとも實母なれはいつれも隔心あるま
しきあひたそとの給ふ心歟　聞姫君の御としの程
にてとし月のしるしはみゆるほとに隔心はありそ
と紫上の詞也
物かたりなとし給ふこれ（長イ）もうちとけぬるはしめ　秘
此もの字は姫君をも成人ありてははしめなりとい
ふ心なり　紫上と明石上との事なりこれも如何姫
君を母の見奉るをりにあはせてこれもといへるか

とみゆ　秘明石上もはしめもかく物語なとあると
いふなり
物なとうちいひたる　秘明石上を然へき人と紫の上
の思ひ給ふなり　うへこそはとは源の心とめ給ふ
もことわりなりといふなり
又いとけたかう　秘明石上の心なり　紫上をいへり
そこらの御中にも　秘源のかた〳〵の御中にも紫上
をとりわきたる様にし給へるもことわりそとなり
かうまてたちならひ　明石上の心也　秘是に立なら
ふ事はと我身をもおもひあかれるなり
いて給ふきしきのよそほしく　秘紫上の退出を見れ
は及ひなき事と也　紫上の退出し給ふ儀式なりよ
そほしくとは行粧の然へきを云也
御て車なとゆるされ給うて　秘紫上の事なり花鳥に
姫君の御事とあり如何
女御の御ありさまにことならぬを　弄紫上事也　女
御にことならぬとは大方の事をいふなり　花是は明
石の姫君のいまた女御には立給はねと手車なとゆ
るされ給ふをおとらぬとはいふなり明石上の思ひ
給ふ心をかける詞なり　私云此段花鳥の義あやま
れり紫上の手車ゆるされて退出し給ふ儀式たとへ
は女御なとのことしとなり
さすかなる身のほとなり　前にこれはとにもたちな
らふは身のおほえなりと思ひあかりつれは今また
此ありさまをみれはことのほかちかひたると又身
を思ひおとしたる也明石上の心なり
いとうつくしけにひゝなのやうなる　秘姫君の御事
なり明石上の心なり
涙のみとゝまらねはひとつ物とそみえさりける　河
「うれしきもうきも心はひとつにてわかれぬ物は
なみたなりけり　秘開書此歌をひけり　開書さま
さまにおつる涙なるほとに一つ物とは見えぬ涙也
と引歌を引かへたるなり　私云うれしきにもうき
にも涙のおつる（心イ）所はおなし物なりされともうれし
きとうきとの思ひはひとつ物にはあらすと引かへ
たる也
としころよろつになけきしつみ　明石上の心明石の
浦より源氏歸京の時物を思ひ又のほりても大井の
里に程へたてゝ住給へり又此姫君の三歳の時紫上
のかたへむかへとり給し事なとなるへし

はれ〳〵しきに　姫君春宮へ參り給ひてのさまなり
住よしの神こそ　前にあり又若菜卷にもあり
おもふさまにかしつき　秘姫君の御ありさまなり
心およはぬことはたおさ〳〵なき　明石上のよろつにたらひたるを云也
大かたのよせおほえ　源の姫君なる故に何事も不足なきなり
なへてならぬ御さまかたち　明石の姫君の事
宮もわかき御心ちに　秘春宮なり
いとみ給へる御かた〳〵　明石姫君にあらそふ人々なり
この御君の　明石の上のそひさふらふをさすにいひなすなりそれにもいひけたれぬとなり
いとみ所にて　河挑所也　われも〳〵とあらそひ參るやうの心也
うへもさるへき　秘紫上なり
御なからひあらまほしくうちとけゆくに　聞紫上と明石上との事なり
さりとてさし過物なれす　秘然へき人々明石上を思ひ給へり　私此段明石上の然へきさまを紫上の心にはめ思ひ給ふ事を云
おとゝもなかゝらすのみおほさるゝ御世のこなたに
　秘源の御命の內にとなり
御まゐりかひあるさまにみなし給て　姫君女御にまゐりの事なり　秘是も源のうれしく思ひ給ふなり
心からなれと世にうきたる　心からなれとゝいふより夕霧と雲井雁との中のへたゝりてうきたるやうなりし事を云
しつまり給ひぬれは　秘夕霧へ雲井雁をゆるし給ふ事也
今はほいもとけなんと　源氏大臣官を休て隱居なともせんの御心中なり功成名遂て身退の心なり
たいのうへの御ありさま　源氏隱居し出家なとし給はゝに紫上御子なとなけれはいかゝと也されと秋好中宮はおろかならぬ御心よせあり此御方とは明石上の姫君なり是も公界は紫上の御女の分なれはさりとも心もとなからしと源の思ひ給ふなり
夏の御かたの　花散里也　これは猶源氏より外にはかゝ〳〵しきたよりなき人なりされと夕霧を御子の分にしてうしろみをもさせ給へつれはこれ又夕霧

の疎略あらしとおほすなり
あけんとしよそちに　源氏のおとゝ明年四十歳なれは内裏冷泉より御賀をおこなはんとおほすなりおほやけよりはしめとあれはいつれもその御心つかひ有へし　河執政人四十賀例　昭宣公堀川太政大臣也貞観七年四十歳古今ほりかはのおほいまうちきみの四十賀九條の家にてしける時によめる　「さくら花ちりかへくもれ老らくのこんといふなるみちまかふかに　業平
その秋太上天皇になすらふる御くらゐえ給てみふくはり　秘花鳥の義可然つかさかうふり　年官ネンクワン　年爵ネンシヤク也　弄花鳥に有開書同　箋前の段高祖の故事をひける所に云その秋太上天皇の尊號をえ給へる事人臣の尊號高祖濫觴也此首尾を以て此事をかける由註せり仍略して私に書之尤味へし　花長岡天皇以下は皆謚號也位につき給へる帝の位をさりてえ給へるはまさしき太上天皇の尊號也位につき給はさる人の院號ありしは敦明親王を小一條院と號せし外は其例なき事なり但太上天皇と號せぬはかりにて院司年爵封戸なとは太上天皇に一事かはる所なし是によりて此物語に薄雲女院ならひに六條院の御事には太上天皇になすらふるといふ詞をそへたり是はまことの脱屣の御門の尊號にあらさるゆゑなり御封の事は小一條院の院號のときは御封以下如元と宣下せらる太上天皇の御封は法令にいまた定られたる事なし東宮の食封は二千戸のよし延喜式にのせられたれは小一條院は東宮の時の御封をそのまゝふかれたるよしなりいま源氏君は太政大臣より院號をかうふり給へり太政大臣の食封は祿令に三千戸のよしみえたり小一條院の例をもて三千戸もとのことくたるへきよし心得へきにや但くははると云詞は三千戸の上にくはゝるへきにてそ法成寺關白は度々に及て食封を加へ給はりし事なれはそれは別したる殊恩なるへし六條院の御封の事これらをもて了見すへき也河海に太政大臣封戸二千二百五十戸とかゝれたるはあやまれり法令には三千戸分明也　河三十九院號例　上東門院　萬壽三年云々　秋院號事　東三條院　正暦二年九月一日院號　漢代暦曰北齋　武成皇帝河清四年四月帝禪太子位自號太上皇改爲天統元年　不踐

祚太上皇例　漢朝例　史記曰於是高祖乃尊ニ太公ニ爲太上皇(蔡雍曰不言帝)　漢書曰諸侯將軍群卿大夫已尊　朕爲ニ皇帝ニ而太公未レ有レ號今上尊ニ太公ニ曰太上皇(師古曰太上極尊之稱也皇居也天子之父故號曰皇不預治國不言帝也)　本朝例　草壁皇子(天武第二子文武之父)　追號長岡天皇　日並知皇子(天武子文武父)寶字二年有勅追崇尊號稱岡本天皇(見續日本紀)　舍人親王(文武第八子淡路廢帝父)追號盡敬天皇イ崇道盡敬天皇　施基皇子(天智第二子光仁父)追號田原天皇　小一條院(敦明三條院御子)寛仁元年八月廿五日院號　本春宮坊也　太上天皇　封戸二千戸　勅旨田千町

院司　別當(公卿四位五位)　判官代(ハンクワンダイ)(五位六位或四位藏人上入位)　藏人四人(非藏人有之)　主典代(シュテンダイ)　廳官(チヤウクワン)　召次所(メシツキトコロ)　仕所(ツカヘトコロ)　別納所(ハチナウトコロ)　御服(ゴフ)所　進物所(シンモツトコロ)　所衆(トコロシュ)　武者所(ムシヤトコロ)　御隨身所(ミツイシントコロ)　太上大臣の封戸は二千二百五十戸なり太政天皇は二千戸也而院號によりて御封くはゝるといふ事如何　私云此封戸の事花鳥の義よし河海あやまれり

かゝらても世の御心に　源氏此程までも執政の人なる故なり

むかしのれいをあらためてゐんしどもなり　花あらためての詞に改不改の二の心有源氏は此間太政大臣なれはそれに改て院司なと補せられたる心なり又誠の太上天皇の昔の例をあらためすして院司なとさためられたる心もあるなり　秘ての字清濁兩義なり濁時は太政大臣の御封にかはらすとなり

さまことなるいつくしさそひ給へは　いつくしさとは院中の作法のごとく今一きは何事の儀式も嚴密なる事をいへり

うちに參り給ふへき事かたかるへき　秘かる〳〵しかるましきとなり　御幸の儀式に准すへけれは也

かくても猶あかすみかとはおほして　みかと冷泉の御心に猶不足におほしめすとなり源の御子としり給へる故なり仍世をはゝかりて位をはえゆつり給はぬとなり

内大臣あかり給ひて　秘内大臣より太政大臣にあかり給ふなり　弄問云致仕のおとゝの事なり末の詞に太政大臣とみゆ内府より直に任せらるゝ事勿論歟一説平清盛公も内府より任ニ相國ニせるなり

宰相中將中納言に夕霧中納言に成給ふ也

御よろこひに　任中納言慶賀なり內裏へのをに奏慶拜賀なとゝ云

あるしのおとゝ　秘内大臣なり　夕霧は致仕の里亭

におはすれはあるしのおとゝといへり
人におされすさましき宮つかへ　致仕大臣の女弘徽殿の女御は秋好中宮におされ給ふるなとなり雲井の雁をも女御まいりなとさせんと思ひ給ひしを夕霧のおさな心地にかたらひ給ひしかはほいなき事に思ひて一段と腹立ありしよし乙女巻にみえたり今はそれをかく思ひなほすなり　秘雲井雁になまなまの宮つかへよりは夕霧に定り給ふを然へしと思ひ給ふなり
女君のたいふのめのと　秘雲井鴈のめのとなり
六位（夕霧）すくせとつふやきし　乙女の巻にありし事なり
あさみとりわか葉の菊を露にてもこき紫のいろとかけきや　秘浅緑は六位を云なりこき紫は三位なり花鳥の義可然　弄花鳥にわか葉の菊の浅みとりなりし時は露はともこき紫とはかけていはさりしよとなり　花袍色は衣服令一位深紫二三位浅紫四位深緋五位浅緋六位深緑七位浅緑八位深縹（ハナタ）初位浅縹也深紫々卅斤にて染也浅緑は五斤にて染なり深緋は茜に加紫浅緋は茜はかりなり深緑は藍と苅安にて染之浅緑は藍と黄蘗とにて染之縹は藍はかりにて染なり今從四位の袍三位以上と差異なきは一條院正暦の比より如此みたりになれり小野宮右大臣の記にみえたり又紫をふし金になせるは女工所のやすき定にしたるよりおこれり此歌に浅みとりとよめるは七位衣色也六位ならは深みとりなるへし又二位三位は浅紫なるをこき紫とよめるは一位の袍の色也かやうの歌なとには大概をもていふ常の事なりそのうへ庶明参議の中納言になる時九條右大臣袍をつかはすとてこきむらさきとみ給ふよりよめり京極中納言も参議從三位の時「紫の色こきまてはしらさりき御代のはしめの天の羽衣とよめり後撰の歌にもとつきてよめるなり　河浅緑は六位の袍なり紫は四位以上の袍なりこき紫は三位の袍なり昔は四位叙三位の後着改袍之由舊記に見えたり三位より一位まては同色なりと云々今の世は四位の袍も公卿も差別なし後撰に庶明卿参議より中納言に任する時九條右大臣袍をつかはしける歌に「おもひきや君か衣をぬきかへてこき紫の色をき（見イ）んとはとあり此事を思ひ今も中納言の事をこき紫といふ歟

からかりしをりのことは　夕霧の詞六位すくせといひし事也

はつかしういとはしき　秘 大輔のめのとの體なり

返大輔めのと ふた葉より名たゝる園の菊なれはあさき色わく露もなかりき　河 後撰「數しらす君かよはひをのはへつつなたたるやとの露とならなん　淺き色は淺黄六位袍にそへたる也　花 後撰七「露たにもなたゝる宿の菊なれは花のあるしやいくよなるらん　今案 名たゝるは名にたてる也淺き色はあさ緑の心也　秘 名たゝるは名にたちたるなりさやうにも思はさりし物をと陳したるなり

いかに心をかせ給へるにかと　大輔のめのとのこと葉なり

御いきはひまさりて　夕霧中納言に成給へはいきほひまさるといへりあるしの内大臣も太政大臣にあかり給へはかた／＼あひ住も成かたきなるへし

所せけれは　所狭なり

三條殿に　秘 大宮の住給ひし御所なり　弄 故大宮の家へなり二條の家の外に大宮の御所有けるなるへし

宮のおはしましゝ　大宮の住給ひしかたなり

むかしおほえて　大宮のおはせし時の事又夕霧雲井鴈ともにこゝにてそたち(てイ)給ひし時の事なとなるへし

せんさいともなと　秘 樂天か句に童種(雅イ)盡々成(レリ)人園林悉喬木トいへるかことし聞同　河 髪(鬢イ)絲千萬白地(池イ)草八九綠童云々前の句なり白氏文集

一むら薄も　河「君かうゑし一むら薄虫のねのしけきのへとも成にけるかな　聞書此引歌あり

ふた所なかめ　秘 雲井鴈と夕霧となり

あさましかりしよの　雲井鴈と夕霧とのあひたの事なり

ふる人ともの　大宮の時の人々なり

夕霧 なれこそは岩もるあるしみし人の行衛はしるや宿のまし水　河 眞淸水能因歌枕云まし水とは出るし水をいふといへりまさるといふ心也　秘 わか宿の岩も(まさ)る云々水こそあるしなれと也　引歌「我宿のいさゝ小川のまし水のましてそ思ふ君ひとりとは(ると云心なり)

水はかはらすしてあれは岩もるあるしよとなり

返雲井鴈
なき人のかけたにみえすつれなくて心をやれるいさらゐの水　秘大宮なとの御名殘もなきとなり　聞書なき人のかけは見えぬに心をやれるとは只今夕霧にあひ住給ふ事を下にふくむなりいさら井はちひさき井なり　河八雲抄云出水をいふなり云々小井なりいさら小川といふも遣水なとのあさくてなかるゝをいふなりいつれもすくなき心なり　なき人のかけたに見えぬやり水のそこは涙をなかしてそみる

おとゝうちより　太政大臣内裏より退出のつゐてに立より給ふなり

むかしおはしましゝ　大宮の時の事なるへし

中納言もけしきことに　秘夕霧なり

かほすこしあかみ　花かほのあかむとははちたる心なり内のおとゝにかゝるすまゐをいつしかなれははち給へるなり

女は又かゝる　雲井鴈のかたちすくれたれとも又類もあるへし夕霧はならふ人もなくみゆるとなり

かみさひたる事　ふるくさき事なり

ありつる御てならひ　秘前のやり水のうたともなり

うちしほたれ　相國のさまなり

この水の心たつねまほしけれとおきなはこといみして　花おきなは夕霧の自稱の詞なり　秘おきなは太政大臣也　花鳥に夕霧と云々如何　弄手習ともを見給てその心をもたつねへけれとも翁なれは夕霧と雲井鴈との中にて斟酌のよし也　私水の心とは歌の趣向ともなりされとも大宮の事ともを思へる歌なれは相國の二人を祝していひ出ぬとなり

相國
そのかみも老木はうへもくちぬらんうゑし小松も苔おひにけり　河「君こすはかたみに見んとわかふたりうゑし松の木君をまちけん　萬十一人丸　人丸集「いにしへのふるき翁のいはひつゝうゑし小松は苔おひにけり　弄前の詞に翁はといみしてとあり然は大宮の雲井鴈のおとなしき人に成給へる心下にあるへき歟　秘ことといみしてとはの給つれとかく歌よみ給ふなりわかき人たち成人して我身は老木となれるとなり　私云秘に我身の老木となれるとはいかゝ聞書に大宮の事は順の義の事なれはさもくちぬらん夕霧雲井鴈のかやうになり給へるはとの事なるへし只今を祝してなりと云々然へき歟

をとこ君の宰相のめのと　夕霧の乳母なり
つらかりし御心も　秘をとこをうらめしと思ひし事なり
宰相乳母
いつれをもかけとそたのむ二葉よりねさしかはせる松のすゑ〳〵　河後撰「うちかはイへてかけとしたのむ峯の松色とる秋の風にもみつなるイ　秘夕霧は勿論雲井鴈をもたのむとなりをさなくよりたかひに見そめ給ひし事をいふ也
女君はあいなくおもてあかみて　二葉より根さしかはせるとはいへるは雲井鴈のためとはつかしくおはすへし
神な月の廿日あまりのほとに六條院に行幸あり　花康保二年十月廿三日村上天皇の朱雀院に行幸ありし例をうつしてかけるなり河海にみえたりかさねてしるすにおよはすと云弄同　秘以下例とも兩抄にみえたり　河康保二年十月廿三日御記曰此日行幸朱雀院辰四刻出紫宸殿　自朱雀路到朱雀院入自永寧坊就馬場殿　仰左大將源朝臣可令召御馬之狀源朝臣下殿仰了更參上召左近少將爲光先進立東階北邊源朝臣仰御馬令驗爲光稱唯退還本陣暫左右近將監以下近衛以上各廿人起陣趍向御厩良久馳御馬向馬駈左右大將下殿執御馬奏參上奏之御馬北上十先次至當年駒各十疋隨次馳了　或抄云此事若菜上に秋の行幸の後はとあるへしそれは此行幸の事なり夏は春にとり冬は秋にとる事なり其例以前にもあり　聞書云此卷はよろつ源氏の榮花を盡し給ふ事にかけり朱雀院にも　源の御兄の院も御幸なり
あるしの院　六條院源氏なり
みの時に行幸ありて　巳の時也康保の御記に辰の四尅に紫宸殿に出御のよしみえたりみの時に行幸といへるよくかなへり
まつむまはとのに　弄御覽のため歟　此馬六條院用意歟
さ月のせちにあやめのわかれす　五月五日節會の後騎射の事ありあやめわかれすなと詞のたよりありてかきなせり
ひつしくたるほとに南のしん殿にうつり　河御記云乘輿移御殿自埒東邊行到時未イ未一尅下輿暫入内或抄云ひつしくたるとは羊の時うつるなり云々
みち　ほとのそりはしわた殿には錦をしき　花筵道

のうへの布單に錦をしかれたるをいふなり
せんじやうをひき　軟障也　繪をかきたる幕なとの
やうなる物なり（
みつし所のうかひのをさ　秘みつし所は主上の御膳
をつかさとる所也それによせられたる鵜かひなる
へし　河御厨子所　別當一人預膳部瀧口廿八鵜飼
四人網代等之類　職員令云雜供戸部戸　或本クサクサ
ノニヘアリト點之　鵜事　先代舊事本紀云獻御饗
之時禱曰而櫛八玉神水戸神孫化鵜入海底咋出底埴壌イ　弄闘云
六條院にての事なり御厨子所の鵜かひのをさとは
内裏にある物にや　一勘御厨子所は主上の御膳を
つかさとる所なりそれによせられたる鵜かひなる
へし
ちひさきふなともくひたり　河天德四年五月十二日
申魁之釣殿召漁者丹波春助下網捕魚得唯一二三喉イ鯉鮒
即放入入イ々夜還御　應和元年三月卅日之釣殿覽曳網
又令泛舟　花御記延喜八年五月廿八日從神泉苑西
披門入御埒殿左大臣仰令捕池魚左衛門督清經朝臣右衛門佐
捧下所捕得ニ魚奉覽則御膳料理供膳餘給侍臣架成調御茂イ

膳御厨子所一兩人階下調給侍臣　此時騎馬北ニ渡ル　同十八年二月廿
日入神泉苑東門至馬埒下輿此間左當イ衛門次網捕池魚
付御厨子所調供又南埒幔下調給侍臣等乃酉一尅競
馬　同年十月八日幸朱雀院爲覺院造作及御馬也左
衛門督藤原朝臣請捕魚依請左衛門官人率門部令早
網參人施網前池得鯉鮒十餘喉於御前調供又出東御
下調給侍臣
わさとの御らんとはなけれと　馬場殿よりしん殿に
うつりおはします道の興はかりにうかひなとめさ
れしとなり　草子の地歟
山のもみちはいつかたもをとらねとにしのおまへは
秘にしのおまへは秋好中宮の御かたなり　私引歌
おなし枝をわきて木の葉のうつろふは西こそ秋の
はしめなりけれ此歌を引て可然歟秋好中宮なるゆ
ゑに住給ふかたも西の町をしめ給へるなり
中のらうのかへ　秋好の御かたとのへたての壁なる
へし
御さふたつよそひて　御座ニなり　秘朱雀院と六條
院となり　聞主上冷泉院朱雀との御座はかりにて源
氏の御座をはさけてまうけられたるなり　私云此

義可なり　秘の義如何

せんじありてなはさせ給ふほと　みかと冷泉宣旨ありて源氏の御座を朱雀の次へなほされたるなり

秘あるしの座を引さけたるを同座にしく事をなほさせ給なり如何

みかとは猶かきりあるいや〱しさを　弄朝覲の行幸には帛袍を敷て上皇を拜し給ふ事あるなり　河朝覲行幸の作法にもありたきとなり聞　私いやいやしきは恭の字の心歟

池のいをも左の少將とり　池のいを〱奏する例花鳥にあり前にのす

鳥ひとつかひを右のすけさゝけて　弄聞此作法さたまれる義歟　又鵜は左とあり鷹よりあかるへきにや一答是は定れる法なし奏する者は公卿たとにてもある事なり鵜鷹の勝劣も時によるなり魚は御前の池にてとるによりて此時は鵜を賞せらるゝにや又前後遲速にもよるへき也　河捕鳥奏階下事　延喜廿年十月十八日權中納言藤原朝臣着小鳥於萄枝立階前奏之船木氏有進御贄　鷹飼事　康保六年七月廿一日藏人頭延光朝臣以左馬助滿仲左近府生多公高右近番長播磨貞任等並爲御鷹飼職員令云主鷹司正一人掌調習鷹犬事　御鷹飼藏人所被官也仍藏人右佐奏之歟　供御贄之時一座人可賜膳部之由仰之　私云右のすけといへるは則右近の少將歟

おほきおとゝおほせ事たまひてこうしておものにまゐいる　致仕相國仰をうけて御膳に調させらるゝなり　例前にあり　秘おものとは御膳にまゐるなり　以ニ口女魚ニ不レ進ニ御膳ニ日本紀

みこたちかんたちめのまうけもめつらしきさまに　王卿取獻物事をいへるにや折櫃籠物なとめつらしきさまにつくし給ふなり

かく所の人めす　樂所人なり地下の伶人なり

わさとの大樂にはあらて　こと〱しき舞樂にはあらすとなり

朱雀院の紅葉の賀　源氏と致仕相國と青海波まひ給ひし時の事也

賀王恩といふ物　賀王恩　或抄御說に王の恩を報しよろこふ義也

内のみかと御そぬきて　みかと冷泉也　相國の息舞給へる勅祿に御衣を給ふなり

おりてぶたうし給ふ　河子息預勅祿之時父舞踏定儀なり

あるしの院きくをおらせ給て青海波のおりおほしいつ　あるしの院は源氏なり　（菊）きくは朱雀院の紅葉賀の時もかざし給し花なれは思ひより給へるなり

源 色まさるまかきの菊をり／＼に袖うちかけし秋をこふらん　秘 立ならひし事となり　色まさるは太上天皇太政大臣にともになり給へる事をおもひてかく相國へよみかけたまふなるへし

おと〻そのをりは　相國の心そのをりとは紅葉賀の時の事也

われも人には　相國は人臣の極官なれはかくいへり

霜このきは〻　秘 尊號を（にイ）おきてはおよひなしとなり

時雨をりしりかほなり　前の紅葉賀にもしくれたるとみゆ又餘情にかけり

返相國 むらさきの雲にまかへる菊の花にこりなき世の星かとそみる　秘 「（古）久方の雲の上にて見る菊はあまつ星とそあやまたれける　河 慶雲壽星の心歟　弄 問云歌の心如何河海に慶雲壽星の心歟云々仙境の事歟如何　一勘紫雲とは河海にいへることく堯の時の嘉瑞なり仙境の事にはあらす紫雲とは菊の紫によせあり又菊は星に似たれはにごらぬ星とよめり又（僧イ）紫の雲と禁中の事によめる歌もあり南仲記曰舊紫雲之瑞生堯也雲向於北斗垂南風雲龍（乘イ）漢之上臻堯母感氣快岫雲愛之下入堯母之懐姙也　堯帝王世紀曰堯帝生時紫雲覆於殿上此帝時雖遭九年之洪水民誇不菜食

時こそありけれときこえ給ふ　相國の詞也　河「秋をおきて時こそありけれ菊の花うつらふからに色のまされは　秘 河の引歌を用也　引歌よくかなへりとあり　源氏の太上天皇にうつり給ふ事を云り

あをきあかきしらつるはみ　白橡（シラツルハミ）　弄 花鳥にあり秘同　花 白橡に二色ありあをきは青色あかきは赤色なりともにつるはみはいらきるに此名をえたるいと心えぬ事なりこ〻には舞童の装束をいへり左にあか色にすはうの下かさねなり右はあを色にゑひそめの下かさねなり野行幸にも左の鷹飼はあか色右のはあを色をきる歟みゆきの巻にしるしをはりぬ河海につるはみの凶服の事内裏なとの例をのせられ

たるこゝにはかけしろはぬ事なり況や水原抄等の説はみなあやまりなり　河橡和名ドンクリト號　私云世俗のドンクリと云木なり　萬葉つるはみのきぬきし人はことなしといひし時よりきまほしくおもほゆ
橡衣四位以上の衣なり歌の心は上臈の着する物なれは此衣着ほとの人は科なとにもあたらねは着たくおほゆるとよめるなり　古歌「橡のひとへ衣のうらもなくあらんといへとこひわたるかも　「つるはみのときあらひ衣あやしくもことにきまほしきこの夕哉　水原抄云秘說云もろ〳〵のすゝしの物なり云々　私云河海に此外衣服令　僧尼令　天長格太政官符新儀式等其外の記共かきのせられたれ共花鳥にかき給へることく其要なきによりて略し畢　或抄　弄花云橡の事延喜式第十四雜染色部赤白橡は櫨と茜とにて染てあくをさすと云々（青白橡は刈安と紫にて染也あくをさすといひて云々イ）唯白橡と云色は別に不見赤色青色といふも同事なり天子内宴のときも令着赤色給其外雲客なとも依時着用歟文等は只今無所見内宴に着御の赤色の御袍は唐生綾　云々花鳥行幸並藤のうらはに書註歟云々以上一條前關白返狀永正元後三廿五　白橡の名稱如何誠に不審事（若歟）候着赤色青色にしらけたる色のある事候哉白藍なとも其儀候歟何篇に白つるはみとあるはみな青色赤色通用の稱と見え別不見染色候凡名稱不及了簡候也以上下官一條關白問題事なり今注入之

れいのみつらにひたひはかり　弄舞童の體也　河同閇舞童の體なりひたひはかりけしき如何一揃ひたひは天冠なとあてたる心歟又總角の額をる云歟

みしかき物ともを　花小樂ともなり　秘同

日のくるゝもいとおしけなり　河惜なり

かく所なとおとろ〳〵しくはせす　花樂所の用意に及はぬ事なりそれは大鼓鉦鼓をならし亂聲なとあれはおとろ〳〵しきといへり

うへの御あそひはしまりてふんのつかさの御こととめす　秘樂器をあつかる女房なり　女司の圖書なり　河圖書寮の事なり　舊記に以二書司女官一召樂器之由見たり累代の樂器を納らるゝ所なり　御記延喜八年節會雅樂寮立樂後和琴宇多法師書司　唱歌於本座奏之

ものゝけうせちになるほと　河興切也

御せんにみな御ことゝもまゐれり　管絃の具を大やう

にいへるなり
うたのほうしのかはらぬこゑ　秘和琴也　河宇多法
師　和琴名物也以檜作之先一條院御時内裏燒亡之
時燒失云々　新儀式四月旬儀　若有奏絃歌者近衞府
音樂説内侍奉（奏イ）仰出御屏風南邊召大臣云（々イ）々起座跪候
御屏風南頭仰即勅可召堪管絃親公卿等大臣奉仰退
歸召出居令置草墪（サウトン）於御帳東西一許丈大臣先退（進イ）着草
墪次依召移着大臣召書司書司一人執和琴出東障子
戸（タシイ）緘之（謂宇陀法師）若奏絲竹或召殿上侍臣能歌者預之王
卿遞勸盃數曲之後奏見參　小野宮右大臣記長保二
年十一月十五日新宮之後出御南殿同右大臣以下管
絃人着御前草墪次召書司々々女孺取宇陀法師出自
御障子戸置草墪前又絲竹次々取出者書司女官役之
人見前例或書司女官取出和琴已後次々絲竹近衞次
將等執之賜　或記云延久四年宇治殿「（命云イ）命之（イ无）於南殿」
御遊之時召宇陀法師和琴其詞云御タラシ此詞有故
也云々師說云宇陀の法師とよむへし
（朱雀院）秋をへて時雨ふりぬるさと人もかゝるもみちのをり
をこそみね　秘朱雀院の御在位の中にはかゝる事は
なかりしと也聊御述懷の心あり　私秋をへて時雨
ふりぬるなと朱雀の梟下の詞なり時雨ふりぬる里
にさへかるゝ紅葉はみ給はぬとなり
うらめしけにそ　河愴恨遊仙窟　朱雀院の我御代には
かゝる行幸なきを恨おほしめすなり
（御門冷泉）よのつねのもみちとやみるいにしへのためしにひけ
る庭のにしきを（木イ）　聞書昔の紅葉賀の事をうつしたる
と云心歟と云々如何　私よのつねのもみちにはあ
らす昔のためしにもまれなるほとの錦也とよみ給
ふをきこえしらせ給ふと詞にかけるなり　秘常し
きの紅葉にはあらすと也　河冷泉院御自歎の心歟
御かたちいよ〳〵　冷泉みかとの御ありさまなり
たゝひとつ物と　秘源と主上とたゝひとつ物と見え
給ふとなり
中納言のさふらひ給か　秘夕霧なり是も又源によく
似給ふとなりあさましとは是をほめたるなり　私
云是は夕霧のみかとへよく似たるといふ歟但いつ
れにても同し
あてにめてたきけはひやおもひなし　みかと冷泉と
夕霧となりおもひなしのみかとはてとなるなり
あさやかににほはしき所は　又あさやかに物々しき

所は夕霧のましたると也　弄冷と源との假給へるに又夕霧もおなしやうなれはほゝゑたる心にてめさましといへり

こうかの殿上人　唱歌殿上人　河新儀式に見えたり

辨小將の聲　紅梅大臣なり

さるへきにこそと　前世の宿執より人にすくれたる人たちなりといふなりなからひとは源氏相國なとの事を云り　私凡此卷は源氏の榮花を極るさかりをかきたてたり紫上なとも賀茂まうて明石姫君入內の時紫上も輦ゆるされなとさま〳〵の事あり若紫上には女三宮の事出來て物思ひのつきそめそれよりなやみかちにてつゐにうせ給ひ源も次第に御物思ひなとありし也凡かやうの事世間の盛衰をあり〳〵とかきなせり心をつくへし

岷江入楚第三十四　若菜上

卅九歳　太上天皇

朱雀院御惱之事

梅壺女御御腹三宮御事　御年十三四と云々

同宮可有御裳着事

春宮行啓朱雀院事

年暮中納言君參朱雀院御物語事

夕霧今年十九なり廿にならんとてのしはすの事なるによりて廿にもまたわつかになるほとなれはとあり

朱雀院召出女三宮御乳母達物語し給ふ事也

御乳母語弟左中辨六條院家司也　女三宮可被附屬申

六條院事

太政大臣就尙侍爲御子右衞門督被望申女二宮事

女三宮可被附屬申六條院之條可然之由春宮思召事

女三宮御裳着事　出朱雀院柏殿有此事

太政大臣爲御腰結事

秋好中宮獻裝束櫛筥於朱雀院給事

吉事三ヶ日以後朱雀院御出家事　山座主爲御戒師
六條院渡朱雀院給女三宮御後見事領狀給事
又之日女三宮事語紫上給事

四十歲　同

女三宮可渡六條院給事又六條院四十賀沙汰之事
正月廿三日左大將北方献若菜事
大將男二人此次見參六條院事
依朱雀院御藥不召樂人聊有御遊事
二月十餘日女三宮渡六條宮給事
南御殿放出立御帳事
紫上與女三宮御事
紫上見源氏御夢驚給事
源氏君自紫上御方送消息於女三宮御方給事女三宮住寢殿給也
源氏令見梅花於紫上給事
源氏晝時分渡女三宮給事
朱雀院移西山御寺給事
朱雀院戲御消息於女三宮給事
同通御文於紫上給事
朧月夜內侍上住二條宮源氏密通事
女房中納言君弟和泉前司引導事
池の藤盛之事
內侍上對面事語紫上給事
明石女御自夏頃御胎氣暫出六條院給事
南御殿東西爲御座紫上此方へ渡り給て御對面あり
女三宮にも同御對面あるへし
源氏見紫上手習歌給事
明石女御紫上女三宮等各御見參事
十月紫上爲六條院御賀於嵯峨御堂供養藥師佛事
廿三日於二條院有御賀事
於寢殿放出有之事
十二月廿日餘秋好中宮爲源氏御賀七大寺御誦經事
夕霧中納言任大將事
自內裏賜六條院御賀事夕霧大將奉行於艮町有此事

四十一歲　同

正月一日始明石女御御產御祈事御歲十四歲
二月明石女御渡明石御町中對給事
明石尼公母上與女御御物語事
三月十餘日女御御產之事
七日夜自內御產養事

若菜上　以歌幷詞爲卷名

河「小松引末のよはひにひかれてや野への若菜も千世をつむへき　私云詞には左大將殿の北方若菜まゐり給とあり玉かつらの君なり　凡賀の時若菜を用る事常の事なり古今に「君かため春の野に出てわかなつむわか衣手に雪はふりつゝこれも賀の事なり　河此卷の一名はこ鳥深山木にねくらさたむるはこ鳥のと云歌ある故なり當流不用之と云々

一部內立（分イ）上下　唐書例　禮記第一　曲禮上下　第二第三檀弓上下　尙書　太甲　盤庚　說命　秦誓有上中下　周禮　天官　冢宰以下卷々有上下　漢書一　高祖紀上中下　後漢書列傳第廿卷上下　和語例　日本紀第一第二神代卷上下　うつほ物語（邊卷又イ）第五ふきあけ卷上下　第十二くにゆつりの上　第十三同卷下　第十四さくらの上の第十五同卷下

和漢の書籍上下をわかつ例かくのてとし其中に作者はしめより上下をわけたるも有後人の追て立たるもある也　禮記の曲禮上下は後人分之檀弓上下は記者分之此故に曲禮第一の卷の中に上下を立檀弓は第二を上とし第三を下としたるなり所詮上下

をわくる本意は一巻とすれは巻軸おほき故なり無（一イ）別儀（也イ）鄭禮記第三正義云實鄭目錄云義同前篇以簡策繁多故分上下二卷云々又第廿巻に上下を分る後漢書列傳を摸する也　花此物語に上下をわかてる事は此巻はかりなり抑若菜上を廿にたてて下を廿一といはすして（たてイ）柏木を廿一にたてたるは漢書の高祖紀上を第一にして下を第二といはす呂后記を第二にたてたるいまの例にあひかなへり曲禮上下は記し分し故に一巻の内に上下あり檀弓上下は後人註をつくるにつきて簡策繁多なるか故に二巻に分て上下をたてたり河海の舊説あやまれるなりわかなの上の巻には左大將の北方わかなまゐり給ふとあり歌にも則若菜とよみ給へり下の巻には女三宮朱雀院の五十御賀に若菜奉らせ給ふへきよしみえたりしかれは紫上の病惱によりてわかなの事はなくて（共イ）しはすに御賀いきしきはかりあり上下の巻におなしく詞或は歌に若菜とあるによりて巻の名とはせるならし此巻には源氏君卅九より四十一歳まて三ヶ年の事をのせたり（此巻にはイ）此上巻は玉かつら源氏へ若なまゐらせ給事あり下巻には朱雀院の五十の御賀に若菜たてまつらせ給ふへきよし有仍此巻の名とせり上下に分る事は異朝の書籍に數多有也抄に見えたり元來上下にわかちたる書もあり又後に註釋おほく成行て上下にわかちたる書もあり日本には則日本紀神代上下物語にはうつほの物語上下にわかてり河海に後漢書廿巻の沙汰ありそれまては無益也但又非無與哉此巻は源氏卅九の冬よりかけり女三宮裳着の事あり四十の御賀の事并明石中宮懐姙の事四十一の三月明石中宮御産の事已上三ヶ年の事あるなり　弄巻名源氏四十賀を玉かつらのし給わかな參りしよりなり此巻の始は源氏卅九の冬より四十の年又暮て四十一歳の春まてなり

朱雀院のみかとありしみゆきの後　河藤裏葉に六條院に行幸ありし事なり　秘六條院へ御幸也

もとよりあつしく　弄病者の體なり　靈運に（日本紀神代に見ゆ歟）

源の御兄朱雀院御事

おこなひのほいふかき　朱雀は道に御心さしふかきなり

きさいの宮のおはしましつる　秘弘徽殿の大后なり

此時后崩の事前の巻にみえす今始てかき出すなり孝心にての仰なり 弄 朱雀院の御詞此巻に惡后(アシキサイ)のうせ給よしみえたり院不孝をおはしめすなり 秘 御出家の事也

猶そのかたにもよほす 御おこなひのかたの御用意はさるへき御心まうけ勿論其外女宮たちなとの事御うしろみなとをおほしまうくるなり是より女三宮を源へあつけ給ふ事のいてきたるなり

春宮をおきたてまつり 朱雀院御子後に今上と申すをおきたてまつりてとは萬葉に除といふ字をおきて秋をおきてなといふにはかけり心はよくかなへりそれをはのけておいてといふ心なり

朱雀院
- 今上 母承香殿女御 明石巻に二歳とみゆみをつくしに春宮梅かえに御元服若菜下に御位につかせ給也
- 女一宮 此巻にみゆ
- 落葉宮 母一條御息所也 若菜下に柏木右衛門督の北方に成給也後に夕霧大將かたらひとり給ふ也
- 二品內親王 女三宮也 母先帝源氏宮 此巻に六條院にいたり下に二品し給ふ柏木巻に薫をうみ給へり是女三宮なり
- 女四宮 此巻にみゆ

秘 朱雀の御子たちなり春宮は今上の御事なり當代は冷泉院也弄同し

四ところ 花 女一宮落葉宮女三宮女四宮是なり

その中に藤つほときこえしは 秘 薄雲女院の御妹なり式部卿宮なとも兄弟なり 弄 薄雲とは別腹なり

花 延喜御時承香殿女御正三位源和子は光孝天皇の源氏なり此女御の御腹に慶子韶子齋子內親王三人ありいま女三宮は是になすらふるにや聞書

先帝の源氏にそ 弄 にせんていとあらせんたい可然歟 河 皇女賜源氏姓例 嵯峨天皇皇女貞姬正四位下潔姬正三位 全姬尙侍從二位 善姬以上四人弘仁五年五月八日勅賜源朝臣姬姓なり醍醐天皇時女御源朝臣和子承香殿光孝天皇皇女也 醍醐天皇々女源朝臣兼子源朝臣嚴子宇多院皇女一人賜源氏姓

また坊ときこえさせし 朱雀の春宮の御時より此源氏の宮は入內となり

たかきくらゐにも 弄 后の事をいふ朱雀の御代には立后なくて過しなり 秘 立后も有へき人なれともさもなきとなり總して朱雀の御代には立后なし其の故は內侍のかみこそ立后有へき人なるを源と名を

立イ取給故に只宮仕にて立后なきなり其外には可然人も參り給はさる故なり

大きさいの內侍のかみ　弘徽殿の朧月夜をならふ人なくもてなし給ふなり

みかとも御心のうちにいとほしき　弄朱雀の御心よわくおはしまして御心にはおほし入なから朧月夜におのつからけおされ給ひしなり　秘朱雀院の御心よわくおはします故なり

おりさせ給ひにし　花朱雀院の脱屣はみをつくしの卷にあり

世中をうらみたる　源氏宮世をうらみてうせたるなり

そのほと御とし十三四（ジウサウシ）　女三宮の御としのほとなり

いまはとそむきさす　朱雀の御心中也

山こもりしなんのちの世　山こもりのあとの事なり常の後世とは心かはるへし

たのむかけにて　河古へわひ人のわきて立よる木のもとはたのむかけなく紅葉ちりけり　但不及引歌諸抄にひかす

にし山なる御寺つくりはて　秘仁和寺なり抄に見えたり　河李部王記云天暦六年四月十五日太上天皇遷御仁和寺院康子內親王所領也　去三月十日御出家云々　花新國史云仁和四年八月十七日於新造西山御願寺行先帝周忌御齋會　今案西山なる御寺とは仁和寺をいふなり光孝天皇ノ御願寺として仁和年中につくられたるによりて仁和寺とは號せり則光孝天皇の一周の御齋會もかの寺にしておこなはる又宇多天皇御出家の後延喜元年十二月に御室を仁和寺にたてらる同四年圓堂を作らる供養あり本尊は金剛界會の三摩耶形なり云々又承平の御門は天暦六年三月に御出家有て四月に仁和寺に遷御あり此物語の朱雀院は承平のみかとになすらへて申侍れとしかも又彼是を取合てかけるなり　弄朱雀の御山庄の事准仁和寺天暦六年承平御門光孝天皇仁和寺にこもり給ひし事相叶へり　秘み寺つくりはてヽと有一本つくりいてヽとあり　私云作りはてヽを用へし

この宮の御もき　女三宮の御裳着なり

院のうちやんことなくおほす御たから物　朱雀院の御たから物をは皆女三宮へ參らせ給ふとなり

御そぶんありける　處分なり　花宇多の御門をは御出家の後は朱雀院と申侍り承平四年に朱雀院御處分の事あり李部王記に見えたり
春宮はかゝる御なやみにそへて世中をそむかせ　朱雀の病惱をさへ春宮のおほしなけきたるに御病ゆゑに御出家（室イ）さへあらんとある故に行啓なるなり
はゝ女御もそひ　春宮の御母女御なり　秘承香殿女御なり　鬚黒のいもうと也弄
宮のかくておはしますを　春宮をもち給へるめてたきなり
宮にもよろつの事　春宮に御遺誡めきて仰らるゝなり
御うしろみともゝこなたかなた　弄女御たちの事なり　秘女御たちの事なり　明石中宮なとなれはなり　私云是は外舅には鬚黒もかろ〳〵しからぬ人にて源氏君なとゝもしたしくおはします明石中宮は源ゝ御女子なれはかた〳〵心やすくおほしめすなり
この世にうらみのこる事も　朱雀院の仰なり弄
さらぬ別にもほたし　河古ㇾ老ぬれはさらぬ別の有といへはいよ〳〵みまくほしき君哉　私此歌に不及歟只今は世をそむき給ふ事なれはなかき世の別にはあらすまことの死別のほたしともならんとなり「世のうきめ見へぬ山ちへいらんには思ふ人こそほたしなりけれは世をそむく時のほたしなり死別にはさらぬ別なれともそれさへかけとゝめられんほとのほたしそとなり
さき〳〵の人のうへに　是は大かた世上の事をおほせらるゝなり
思ふやうならん御代　秘御位にもつき（三イ）給はしとなり
その中にうしろみなと　女一女二女四なとは御母義とものある也
三のみやいわけなき　秘御愛子たるによりてなり
たゝひとりをたのもしき　女三は御母のなきゆゑに朱雀はかりをたのみたるなり
女御にも心はうつくしきさまに　秘承香殿なり心うつくしくたのむかたもなきよしをの給ふなり　花鳥にたのむかたもなきよしをの給ふと云々如何（よし也イ）心うつくしきとは只よく思ひあひて有へきの心歟
私花鳥の心も用儀歟朱雀の隔心なく承香殿女御へ

女三の事をたのむやうに仰なさるゝ義たかふ（頼むイ）へからす

されとはゝ女御の　此承香殿女御は藤壺の女御（女三の母）（源氏宮なり）の寵にはおしけたれ給し人なれは行へとてもさのみ心にはいれ給ふましき物をと草子地にいへるなり

朝夕にての事をおほし　朱雀の御病氣かやうの御心つかひゆゑにそひゆくとなり

御物のけにてとき／＼なやまれ　是は朱雀のもとより病者におはしたりしかとかやうにとりつめてはなかりし物をとなり

御くらゐをさらせ　秘　近臣は猶したひたてまつる人おほきなり

みつからもまゐり　源の朱雀院へ參給はんとなり

院はいといたく　朱雀まちよろこひ給ふなり

中納言君　夕霧の朱雀へ參りゐるなり

故院のうへの　花　桐壺の御門の御事なり榊の巻にあり此院とは源氏の御事なり秘　秘　朱雀院の御詞なり弄

いまのうちの　秘　冷泉院なり

はかなきことのあやまち　秘　須磨の左遷の事也　花　朧月夜の事によりて源氏君須磨の浦へうつり給ひし事なり

さかしき人といへと　河　以恨報怨事不可勝計　かやうのたくひふるき物かたりともにおほし

その御心はえほころふへからん　下の恨のいつかはもれ出んと思ひしなり

春宮なとにも心をよせ　秘　明石姫君の（なイ）まゐらせ給ふ事なり弄　私云是は前によりて大かたの源の心よせの事なり

今はた又なくしたし　是は明石姫君の參り給ふ事とみゆ花同

心には思ひなから　朱雀の御心天性疎懶なる故に其心をもみえ給はぬとなり

この道のやみ　河「人のおやの心はやみにあらねとも子を思ふ道にまよひぬるかな　私云引歌に不及本性のおろそかなるに女宮たちなとの事にもてあつかひ給ふ事を仰らるゝなり女三の御事なと下に有へし

やかて中々よその事に　源の春宮へ明石姫君を參ら

せられたるをよきついてにて源へ春宮の御事をそ
おほしめしゆつりたる事をよその事に見はなちた
るとは仰らるゝなり
うちの御事は　今上冷泉なり
かの御ゆゐてん　遺言なり　桐壷のみかとの仰おか
れしことゝなり
かく末の世にはあきらけき　花冷泉院を天暦のみか
とになそらへ奉るなり　貞観政要云太宗問魏徴曰
何謂明君徴曰君之所以明者兼聴也其所以暗者偏信
也
きしかたの御おもてをもおこし　朱雀の我御世の事
を卑下して仰らるゝ也
此秋の行幸の後　河藤裏葉に六條院へ行幸有し節は
神無月廿日あまりと有て此秋とある如何　花十月
を秋といへるは紅葉を賞する故なり又一年を春秋
といへるは夏を春にとり冬を秋にとる故なり　弄
春秋といふる夏は春に屬し冬は秋に屬する故此義
あり又拾遺部分に雜春に夏を屬す此義有行幸は十
月なり然を秋と書るは詞優なり　秘藤裏葉の行幸
なり十月なれは秋とかけるは尤優也此類前にもあ
り
たいめんに　朱雀院の源へ直に仰られたる事あり必
參り給ふやうに夕霧にもよほされよとなり
過侍りにけん　秘是より夕霧の返答なり一切幼少の
時の事は何ともしり侍らすとなり　私須磨のうつ
ろひの事なと仰らるれは返答申にくし夕霧幼少の
時なれはかた〳〵かやうに返答申されたる成へし
としまかり入て　河年よりてといふ心歟聞　秘夕霧
のみつからの事なり
大小の事に　弄秘
いにしへのうれはしき　秘前にはかなき事のあやま
りに心おかれたてまつる事と有し返答なり
大やけの御うしろみをつかうまつりさして　源の陰
遁したく思ひ給ふ心さしなり又太上天皇の尊號な
とありてかく世の政をはしり給はぬ心歟又太政大
臣職掌なき官なれはそれからをいへるにや
故院の御ゆゐこんのことも　秘清濁如此　河如御遺
言なり　源氏に大やけに仕へき事を仰ありしなり
御くらゐにおはしましゝ　朱雀の御位の事　其頃は
源は年もわかゝりしなりいまた上に致仕のおとゝ

なとおはせしかは我心のほと奉公もなきをの給となり
心ざしをとげて　志を遂てなり
いまかくまつりことをさり　秘只今しつかにまします時に其心の行末をもとけさるは口をしき事となり
所せき身の　源氏も太政大臣太上天皇なとなれはかろ〳〵しくありきも成かたき事なり
廿にもまたわつかなるほと（九イ）　秘夕霧今年十九歳也　弄夕霧十九歳也源卅五歳なり　花夕霧の中納言廿にならんとてのまへのとしの十二月の事なり
ひめ宮（君イ）の御うしろみ　女三宮を夕霧にや給はんと朱雀の御心なり
おほきおとゝのわたりに　秘朱雀の御詞なり　雲井雁にすみつき給ふ事なり
心えぬさま　雲井雁をしはしゆるし給はさりし事なり
さすかにねたく　秘女三宮の御うしろみにもとおほす心なり　弄
いかにの給はする　夕霧の心中はいかやうの事を仰らるゝそと思ふなり
このひめ宮　女三宮なり
たゝはか〳〵しくも侍らぬ身　秘夕霧の詞也　雲井の雁をゆるしかねたることをも心にこめて宣ふなり
のぞきて　夕霧を見るなり
おひしらへる　弄年よりたる人なり
さりともかの院の　秘六條院なり弄　老たる女とも六條院のわかくおはせしにはおよはすといふなり
きこしめして　女房ともの申事を朱雀の聞召てなり
かれはいとさまことなりし　秘六條院なり源の事をほめて朱雀の給へるなり
その世にもねひまさり　源の若かりし時よりも又別段なるをの給へり
うるはしたちてはか〳〵しき　秘禁中公事等の時の事なり
又うちとけてたはふれこと　源のさま其時につけていみしきよしなり
何事もさきの世　前世の宿執すくれたる人そとなり
帝王のかきりなく　桐壺のみかとなり

二十かうちには　弄愚或本はたちとかきりたり　私
はたち可然歟
ひとつあまりてや宰相にて大將かけ　河六條院紅葉
賀巻任參議廿歟葵巻兼大將(右大臣イ)廿一貞信公昌泰三年任
參議廿一　秘源は廿一にて參議になり給へりいさ
さかもおこる心なく昇進なども卑下し給しとなり
それにこれはいとこよなくすゝみ　花夕霧は十九に
て中納言に任せらるゝ事をいふ也　秘夕霧は昇進
早速なりしなり
このおほえのまさる　河次々の子とあり如何　漸々
源の威光のまさるゆゑとなり
これもをさ〳〵　秘夕霧の事なり眞實の才學(覺イ)は源に
もおとらぬとなり
およすけまさり　結句源よりもまさりさまならんと
なり
ひめ宮のわかく　秘女三宮の事也弄
かたおひならん　いまたおさなくおはしませはかく
おはすなり仍て源氏へあつけ申されしとなり
式部卿の宮のむすめ　秘紫上なり
内には中宮　弄秋好なり

かの權中納言の　夕霧なり
きやうさくに　弄ほめたる詞なり
中納言はもとより　弄夕霧の事也女房たちの詞なり
秘御めのとの詞也
かのわたりに　秘雲井雁の事なり　今雲井雁さへ定
りては彌別心は有ましきとなり
かの院こそ　秘六條院なり
やんことなき御ねかひ　秘紫上の外に本臺をもとめ
給心のあるとなり弄
前齋院なと　秘槿の事なり弄
ふりせぬあたけ　河あたなるけなり　いてといふよ
り朱雀の御詞なり
まことにすこしもよつきて　あたけこそうしろめた
けれとは仰られなからさもおほしよるやうなると
なり
ふればらせ　秘弄たゝ如此
かならすむつ(すイ)ひよりなまし　秘女にてあらは必源に
はあさむかるへしとなり
女のあさむかれむ　河哢られんとなり嘲哢の心歟
九禪抄あさむくは欺なりたふらかさるゝやうなる

心歟
かんの君の事も　秘草子地なり聞
この御うしろみとも　女三の御うしろみたちなり
左中辨　秘系圖の外の人なり　花六條院の院司かね
たるをいふにや
この宮にも　弄女三の宮にもたよりあるなり
ものかたりする　御めのとの左中辨にいふなり
うへなんしか〳〵　秘めのとの左中辨に物語するな
り　朱雀院の(さろゝ也イ)御に女三宮御うしろみを六條院へと
覺しめしよるとなり
かの院に　秘六條院なり
みてたちはひとり　皇女なとはさやうの事なきかは
なりされは心よせたてまつる人のなきたよりなき
となり
うへおきたてまつりて　朱雀院の外に女三のたのみ
給ふへき人なしとなり
おのれはつかうまつるとても　御めのとなとの御う
しろみ申はかりは何ほとの事もなしとなり
思ひの外の事も　不慮の御名のたつ事なとありては
その用心なり

御らんする世に　朱雀の御存生の時かやうの事定め
たきとなり
かしこきすち　御身の位たかき事
かくあまたの御中に　姫君四人の中にとりわきて朱
雀のおほしめせは人のそねみありて何事をも見お
とさむとせしとなり
ちりもすゑ　花床夏の歌の詞なりちりはかりも人に
あしく思はせ奉らしの心なり又けかされぬ心なり
辨いかなるへき　秘左中辨の詞なり
院はあやしき　弄六條院なり
かた〳〵につけて　御心のとまるをもとまらぬもそ
のほと〳〵につけてと云なり
やんことなく　秘紫上の事なり　聞紫は別段なるな
り
それにことよりて　秘紫上に與力したる樣にてある
かひもなきかあるとなり
御すくせありて　秘自然皆かた〳〵のかひなき人の
なみにてはいかゝとなり女三の御宿世つたなくて
紫上におほしおとりては人にこそより給へいかゝ
あるへきそとなり

猶いかゝとはゝからるゝ(ろもイ) 秘さま〳〵思案して猶知かたしと思へる面白き語なり　弄辧詞也　私云此段を按するに其心いさゝかたかへるやうにおほえ侍るなり御すゝせありてとは女三宮源氏に御縁ありてもしさやうに六條院へおはしますやうもあらはとなりいみしき人といふともとは紫上の事なりいかな紫上も女三をおしけちてもてなす事はなるましきと辧の心にも思ふとなりそれをおしはかるれとはいへるなり猶いかゝとはかるゝ事はありてなんおほゆるとはさやうに紫におしけたれしとは思へとも女三の御うへをよく〳〵思按すれは何と有へきとも又しらぬ事そとうしろ足のふまると云心となり此義もし然るへくや聞書此心なり

さるは此世のさかへ　聞此詞より以下は源のつねの御心を辧か女三のめのとにかたるなり弄　秘源の自稱なり我身の上に不足なる事はなきを本臺のしか〳〵となきのみ不足なるとなり紫上も人からはよけれともしき〳〵にむかへ給る本妻にはあらすと也　弄源氏の御心也本たいなとのなき事なり

人のもときをもおひとは朧月夜六條の御息所の事なといつれも人のそしりありし事なり

さなんおはします　まことに源の仰せらるゝことくなりとなり

かた〳〵につけて　秘方々おほけれ(さはおほすれとイ)とみな十分ならぬたゝ人となり

その人ならす立くたれる　源のあつめおき(イナシ)給へる人(にイ)さのみたちくたれるはなけれと源へ比量すへき人々にはあらすとなり

院の御ありさま　六條院なり

けにさもおはしまさは　秘女三宮は似つかはしき事となり　前に左中辧の色々思按したるかおはしまして御おほえなと然るへからんするならはこれほとの事は有ましきとおもふなり

いかにたぐひたる　河類なり　河周易云君子以レ類族辨レ物同人卦　毛詩曰窈窕淑女君子好仇註曰窈窕幽閑也淑善也仇匹也后妃有關雎之德是幽貞專之善女宜爲君子之好匹也

めのと又ことのついて　女三のめのと左中辧と相談せしやうを朱雀へ申入るなり　なにかしの朝臣とは左中辧をさしていふなり

かの院には　六條院なり
かならすうけひき　承引なり　承諾の意なり
としころの御ほい　前に左中辨の女三の御めのとにかたりし事のゆくゑなり
こなたかなたの御ゆるし　朱雀と源との事歟朱雀も眞實にさやうにおほしめしより源も御承引ありて眞實にうしろみきこえ給はんならは御傳へ申さんとなり朱雀も御心はさやうなるとしりなから辨は女三の御めのとの兄弟なれは用捨の心なり
いかなるへき　御めのとの用捨の詞なり
ほと〳〵につけつゝ　弄源氏の心を云　秘めのとの詞なりたゝ人さへかた〳〵ある中にはいかゝとなり　私源の御心その人々の程々を御分別の義は勿論となり
たゝ人たに又かゝつらひ　凡人さへ思ひ人のたちならひたるはあしきなりまして女三なとのあまたの中にはいかゝとなりわかぬは不足の事なり
めさましきこともや　花紫上ならふかたなくてましまます事をいふなり
御うしろみのそみ給ふ人々は　めのとの心には源へ然へからんと思ひなからかくいふなり前の詞を思ふへし先朱雀の御分別をきかんためなり
かきりなき人　位のかみなき人なり
いまの世のやうとてはみなほからかに　弄別に調達したるなり　花ほからかに萬事に調達したる心なり末の世にはいかなる上﨟なりともよろつに心うるかたなくては人にあさむかるゝ事の有へき儀をいふなり　秘上古の事は淳素大やうにてましますもよき事なるを今の世は何事にも達して我心と分別し給はてはと當時のならひをいふに此女三は何事もあまり大やうにてましますとなり
大かたの御心おきてにしたかひて　秘上のおきてにしたかふ下なれはとなり　めのとやうの人はつかふまつるかきりあり上の一心の御分別より出たる事ならては下か下まてしたかふ事はなきとなり
しかおもひたとるによりなん　秘朱雀院の仰なりさやうに色々と分別する故にこそ然へき御うしろみをもと覺しめしよらるれ皇女なとの御うしろみあらんは總別は好まぬ事と也　又かやうに句をきりて見るへししか〳〵のゆゑにてそ色々に思召あ

つかひ給へとなりみてたちのと云より又おてしとみるへし

みてたちのよつきたる　花皇女なとのわたくしの男もち給ふ事なり　弄みてたちのわたくしの男まうけ給ふはほめぬ事なり次の詞に又たかきゝはといへるも同しく女の男にみゆるに付けて大事なる事をならへていへるなり

又たかききはゝといへと　皇女なとの男に見え給ふはこのまぬ事なるうへは女は男につけてしかも恋思ひも有物なりと仰らるゝなり

又さるへきかけ　かやうの皇女なとのよすかもましまさぬ世のたつきなき時まて心を貞心にもち給ひて過さん事もかたかるへしとなり

人の心もたひらかにて　河平也切韵云正也利也易也昔の人は心の平なる故に男もさあるましき事は思ひもよらさりしなり今の世はすこしみたりなる事もある間心清くて人もむかしとおほすなり

なきおやのおもてをふせ　おもてふせといふなり
河「かくせとも老もかくれぬ此春を花のおもてもふせつへらなる　不及此歌

いひもてゆけはみなおなし　花みてたちのわたくしのうしろみもち給へると又おやの家にあかめられし人のむすめのなほ〳〵しきすきものに名をたちなきおやのおもてふせになるともいひもてゆけはおなしわるさになる心なり　弄高下同事なり　高下の事なり宮なとゝ申せはとて同事なり聞

よろつにうしろめたく　前にしか思ひたとるによりなんといふ詞の畢竟なり

すへてあしくもよくも　秘善悪につけて親の定たる事はぬしのとかをはのかるゝ事となり

ありへてこよなきさいはひあり　花是は下に親にしられすさるへき人もゆるさぬに心つからしのひわさしたる女の事なりありへてはこよなきさいはひありめやすき事になる事もあれとそのはしめふときゝつけたる時は心つたなくおほゆるなり

おやにしられす　河孟子曰女子生而願為之有家父母之心人皆有之不待父母之命媒酌之言鑚穴隙相窺踰牆相從則父母國人皆賤之　秘聞と此事を引り　孟子六滕文公章句下　河寄言痴少人家女愼勿持身輕許人　白氏文集井底引銀瓶　不及此事止淫奔也　秘此言コリ引

なほ／＼しきたゝ人の　花よのつねの人のうへにてたにあはつけく覺ゆるにまして上らうなとの事はいふに及はぬ事なり
みつからの心よりはなれて　花三界唯一心心外無別法のことわりなれはよきもあしきも心をはなれて有へきにあらすとなり　秘花鳥に三界のことわりなりと云々
すくせのほとさためられんなん　心の外に人に見えなとするもいひもてゆけはわか心からなりされともさやうなる時はすくせのつたなく人にしなさるるやうなるこゝろがあるなり
あやしう物はかなき　秘女三宮の事なり　花是よりは女三宮の御事をいふなりこれかれ心にまかせてもてなしきこゆるとは姫君は何事もましまさぬをめのとたちの心にまかせてもてなし聞ゆるさまに院にはおほしめしたるなり
これかれの心にまかせて　秘めのとたちの心にまかすへからすとなり
いよ／＼わつらはしく　秘めのとの心なり　花院のの給ふ事を聞てめのとたちはいよ／＼わつらはしき事に思ひあへるなり
今すこし物をも　秘猶女三の御事を朱雀の仰らるゝ御詞なり
ふかきほいも　弄御出家の事に御心ふかし聞　秘御病おもきによりて佛法修行も成就しかたきとなり
六條のおとゝは　是より女三の御うしろみの事をこれかれと仰られしなり　朱雀の御詞なり
あまたものせらるへき　ものせらるへきとはかたかたの人のそねむへき事をものせらるへきといへりとみゆ
しるへきにもあらす　秘かた／＼のあるをもしらすかほにし給ふへきとなり聞同　私かた／＼の人の心をおしはかり知へきにもあらすかまはぬ事となり
とてもかくても人の心なり　女三宮の御心ひとつにて人のそねみも有ましきとなり
のとかにおちゐて　弄源氏の事なり
たれはかゝりかはあらん　源氏の外にたれか御うしろみによらんとなり
兵部卿宮　秘螢の宮なり弄

おなしすち　兵部卿宮女三宮ともに皇子皇女なる事をいふなり
あまりいたくなよひ　秘　あまりによわき所のあるなり　私云いたくなよひかしめくはたはふれ過たる心なり
又大納言のあそんの家つかさ　河　家司也　花　此大納言は系圖になき人なり院の別當なるへしいへつかさは女三宮の家司をのそむをいへり　秘　系圖の外なり家司は女三宮の勅別當をのそむ事をいへり　弄　朱雀院別當なり系圖一人與には藤大納言は年ころ院のへたう(別當)にてしたしくつかうまつりてとあり同人歟兩人兩輪をの給ふなり
むかしもかやうなるえらひ　河　帝王女遇庶人事　正三位源朝臣潔姫者嵯峨天皇之皇女也天皇選聟未得其人太政大臣正一位藤原朝臣良房初參之時天皇悅其風操超倫殊勅嫁之　一品康子内親王延喜皇女配九條右丞相生閑院太政大臣公季　聞　秘　嵯峨天皇（延喜御門の御むすめの事抄にひけり）
右衛門督の　秘　柏木なり　弄　内侍のかみの甥なり
たかき心さし　右衛門督のなをさりの人をは見しとなり
なほ又このためにも　聞　女三の御うしろみにはさしあたりてかろ〳〵しきとなり
かやうにもおはしよらぬ　弄　世人も御愛子には心をかけしなり　女三宮の御うしろみをは色々にかくおほしあつかふなりそれゆゑに又のそむ人もおはしあね宮たちをは人をえらはすとも御うしろみをゆるさんと覺しめせは又望人もなしとなり
さゝめきこと　河　私語長恨歌
おほきおとゝ　致仕大臣柏木の父なり弄同
内侍のかんの君にはかのあね北方　秘　六君なり太政大臣の室は此内侍のかみのあねなり　花　二條太政大臣の四君柏木なとの母は朧月夜尚侍のあね君なり　秘　二條の大殿の御むすめなり
兵部卿宮は　玉かつらをのそみ給ひてその本意をもとけ給はさりしをいへり
かたほならんと　花　かたほならんはわろきこそなり人の思ふ所かたほなる事なからんと思ひ給ふなり
藤大納言はとしころ　前に大納言の朝臣といへる同し人なり年來朱雀院の院司大別當なとか此段は前

に御うしろみのさためありし人々の面々に心をつくすさまをいへるなり
權中納言　秘夕霧なり弄
人つてにもあらす　朱雀の夕霧に直に女三の事をめしもしつへかりし物を雲井鴈に定り居るかねたきと仰られし事前に有
よもてはなれて　雲井鴈に定りたるとも望み申さはゆるし給ふへきと思ふなり
女君の今はと　秘雲井の鴈の事なり
つらきにもことつけて　雲井鴈をゆるし給はさりしつらさにかこつけよそへ思ひうつるへかりしをさへ堪忍して今又物をや思はせんとなり
にはかに物をや　河「かねてよりつらさをわれにならはせてにはかに物を思はするかな　弄引歌聞みゝはとまりなり　此段夕霧の心中をかけり
春宮にもかゝる事とも　此御うしろみの人々の事を聞召なり
のちのよのためし　秘後代の事となり
しかおほしたつ　とても御うしろみを定給はんならは源氏にます事あらしと春宮の内々の御けしきあるを朱雀の聞召よろこふなり
けにさる事なり　朱雀の春宮のおほせ尤となり
御心たらせ給ひ　此點弄　朱雀の御心に六條院にと思ひ定て思ひたち給ふをいふなり
かの辨して　前の左中辨なり　朱雀の御心の中を源へ仰らるゝなり
この宮の御事　秘六條院にはさき〳〵より聞およひ給ふなり
心くるしき御事(かイ)にも　是より源の御詞なり
いくはく立をくれて　弄源卅九　院四十二三のちかひなり　朱雀院は源氏に三歳の兄にてましますなり
したいをあやまたぬ　弄生死の次第なり
いつれのみこたち　朱雀の御子たちなり
ふちやうなる世のさためなき　弄重詞なり　次第次第といへはとていくはくのちかいもなし況や不定の世間なれはなり不定のさためなさとかける重語にあらす假名の物にてかやうにかける常の事なり
ましてひとへにたのまれ　前にかくとりわきて聞置奉りてんとは大かたの御うしろみを源へ仰おかる

る事なり又このましてといふは源へ本の北方なとのやうにしておやさまにゆつり給はん事は源のほたしとも成へきとの事なり

うちつゝき世をさかん　弄源氏廿歳はかりより出家の心ありしなり　私朱雀の世をそむき給ふにわれきさのみはおくれしとなりそれをうちつゝきといふ歟さやうのきさみ只今朱雀の何かと覺しめしわつらふやうに又女三の事の源のほたしとならんとなり心くるしくとは女三の御事なり

中納言　夕霧の事を源のゝ給ふなり

いとほしくもくちをしくも　左中辨の心也

うち〳〵におほし立　朱雀の一定源へとおほすさまを辨の申なり

さすかにうちゑみつゝ　源の御さまなり

いとかなしく　源の詞也女三を御愛子なる故に色々に覺しあつかふにてそとなり

たゝうちにこそたてまつり　入内然へきとなり　主上冷泉院なり

やんことなきまつの人々　河先ヅなりさきたちておはします女御たちの事なり　秘はやくより參りたる人とて別に寵のある事はなきなりさやうの所にはかゝはるへきにてはなきとなり

末の人をおろかなる　後參の人に寵なきにもあらすとなり

故院の御時　弄證據なり　秘先坊をひき給へり弘徽殿の大后は薄雲に寵をうはゝれ給ひし事なり

いきまき給ひしかと　秘威勢ありてとなり　河いきまくはいかれる姿なり　私云われはと威勢めく體をいふ歟

入道の宮　薄雲の女院なり

此みこの御はゝ女御　秘女三宮の母と薄雲と姉妹なることなり弄

かたちもさしつきには　秘藤壺につきては此女三宮の御母かたちよききこえありて源氏も床しく思ひ給ひしなりされは此姫君をは源は床しく思ひ給ふへしとなり

いぶかしくは　源の床しく思ふなりいふかしくは不審なりおほつかなくみたきよしなり

としもくれぬ　秘十二月になるをいへり歳暮にはあらす與に年もかへりぬと書るにてとしのくれは見

えたり
朱雀院には御心ち猶おこたりさまにもおはしまさね
は　河李部王記云天暦六年八月廿七日太上皇御乳母
加賀命婦告送云院御惱彌重諸人申遷宮可宜之由去
月一日參二條院依御物忌立西門外案内令去廿七日
八九日御惱危急卅日晩以後頗平復云々六日從今夜
上皇御惱漸篤十三日此晩上皇悶絶良久云々入夜院
近臣告御惱重由亥刻重參同十四日落飾入道私云是
承平の御門御惱によて御落飾の事なり
御もきのこと　花昌子内親王の御はかまきの例を思
へり朱雀院の御女則又御惱の時分也云々　河李部
王記云天暦六年十一月廿八日昌子内親王初服レ袴
主上親結レ腰給其膳物從二御厨子所一辨二備之一朱漆
臺四本以二銀器一備レ膳同小臺二本以二銀土器代一備二
菓子一親王家獻鳥犀御帶一腰書法四卷朱雀院并殿
上男女官饗其侍臣十餘人召弘徽殿南廊給酒肴中宮
職給祿云々
かへ殿のにしおもて　花かへ殿西の對なり　秘柏梁
殿　朱雀院にあり弄　東宮故事曰後宮有素柏局床
なり　柏殿者皇后御在所なり　見九條右丞相暦記

三月三日侍朱雀院柏梁殿惜殘春各分一字應　太上
法皇製探得浮井序字　故ヽ三月三日宴于池上蓋思古之曲水也
構柏梁以擬蘭亭間花林而栽拱木皆是好閑於樂無爲
詠風月重時節之所致之義也請各分一字將惜殘春云
爾謹序詩略之云々　御記云康保二年十月廿三日己
未此日行幸朱雀院入自永寧坊就馬場殿乘輿移柏殿
撿延喜聖代之例每秋幸此院而柏殿燒亡之後都無此
事而去夏新構柏殿至冬則作畢故設今日宴也　李部
王記云天暦九年七月十日太上皇遷御朱雀院扈從公
卿及非侍從兩馬助等給座柏殿西對　私かへ殿の事
乙女卷にもあり
もろこしの后のかさり　河嵯峨天皇弘仁八年男女衣
服用唐法　秘周禮王后の六服あり花鳥に見えたり
花周禮王后六服　褘(キ)の衣　褕(ユ)狄(テキ)　闕ノ衣　鞠(キク)衣
展(テン)衣(イ)　褖(ケン)衣(イ)といへり　長恨歌傳云又命戴二歩搖一
垂二金璫一明年冊爲二貴妃一半二后服用一云々
御こしゆひにおほきおとゝ　花康子内親王の御もき
のこしゆひに一條左大臣の例也　河太后御記云承
平三年八月廿七日女御御裳たてまつり給　李部王
記云承平三年八月廿七日康子內親王初着裳戌一點

に一條左大臣親王外舅結御裳腰滋野内侍理髪尙侍結本結即叙二品云々　隱義物語云おほいとのゝ御はかまのこしゆひ給しにはと所の宮たちえならぬ御よそほひを紫檀の螺鈿の衣はこへよろひに入てからのきをいれかたひらにして世になたかき帯とも色々のつたへ給へるをたてまつり給へりと云々

女三宮の御こしゆひ致仕相國なり

いまふたところの大臣　祕左右大臣なり

みてたち八人　親王たちなり

内春宮のこらす　内裏殿上人叉春宮の殿上人なり

藏人所(クラウトコロ)おさめどの　藏人所　納殿共に納御物所なり

弄問云女三宮御裳きの時内春宮の御心よせの事なり藏人所も物をおかるゝ所にや地下の者の候所云云如何　一勘答藏人所は今の世にも藏人所とて調進物なと事によりて有

尊者(ソンシャ)の大臣の御ひきいて物　河着裳の腰ゆひをも尊者と號歟可勘　花是は大饗の例をもて御もきのこしゆひを尊者といへりおほよそ唐朝には德爵齒の三の中に一つもあれは尊者といへるなり弄

中宮よりも御さうそくくしのはこ　秋好中宮也　花

御もきには先髮上の義式なれはくしの筥も入事なり

かの御くしあげのく　祕齋宮に立給し時の事なり

弄朱雀院より參りし事也問秋好中宮より朱雀院の女三宮へ參せらるゝ也昔の御くしあけのくとは古物にや如何一勘秋好中宮の齋宮に立給し時用られし御くしあけの具成へし裳きには先かみあけ有花

もとの心はへ　むかしのとわさとみせたるよしなり

宮のてんのすけ　祕中宮權亮なり

院の殿上にも　此權亮か朱雀院の殿上人にてもある人なり

かゝる事そ　祕院へ見せ申さるへき事となり　弄姫宮の御方へなから院の御かたへの御消息あり

(秋好)さしなからむかしを今につたふれは玉のをくしそかみさひにける　河秋好中宮齋宮にてくたり給し時えならぬ御よそひとも御くしのはてなと有し事なり

祕さしなからはさなからなり櫛に緣ありて面白しそのまゝこゝへ傳受したるとなり神さひにけるとは久しき心なり鼻下の心有弄聞　花さしなからの五文字二の心有くしをはひたいにさす物なればさ

しなからとよみ給へり後拾遺そなはれし玉のをくしをさしなから又から衣給ひしひもはさしなから是はさすと云心なり又さなからと云詞にも用るなり拾遺集大宮にむれたるたつのさしなからおもふ心のありけなる儀是はさなからと云詞に叶へり此さなから昔を今につたふれはの歌はこの心の通せるなり

あはれにおほし出らるゝ　齋宮の御くたりの時の事なり

あえ物けしうはあらしとゆへり　秘あやかり物となり秋好中宮はさいはひ人なれはなり

おもたゝしきかんさし　秋好のゆつりたまへるかんさしさいはひのほとをはめていへり

むかしのあはれをは　秘大極殿にての事なり今日は祝言のかた計なり弄　秘齋宮の御くたりの時朱雀の御みにしみておほしめされし事をあはれをはさしおきてとかけるなり

返朱雀
さしつきに見る物にもか萬代をつけのをくしのかみ清濁さふるまて　秘中宮のさしつきにての女三宮を見る物にもかなとなり　秘中宮に女三宮を次にもいへり　閒云物にもかなやの心にやか文字清濁如何

一勘合點

三日過してつゐに御くしおろし給つ　御もきの三日以後朱雀院御出家有しなり

よろしきほとの人　秘中所の人さへとなり

つとひさふらひ　河集日本紀

山のさすよりはしめて御いむことのあさり三人　秘受戒の阿闍梨なり　河元慶三年五月八日丁酉是夜太上天皇落飾入道　李部王記云天暦六年三月十四日亥時太上天皇落飾入道延暦寺座主大僧都延昌爲和上法性寺座主權律師鎮朝爲親教師瀬御坂運照阿闍梨勢祐已講爲唄師　案之受戒羯磨阿闍梨教授阿闍梨とてある歟

しつやかなる所に　朱雀の御心のうちなり此御本意も女三宮なとの御事にひかされてさもなきと仰らるゝなり

おさなき宮　秘女三宮なり

六條院もすこし御心ちよろしうと　朱雀院御出家の後すこし御心とりしつめてよろしく覺しめさるゝ時分を聞つくろひて源の參り給ふなり

御たうはりのみふなとこそみなおなしてとおりゐの
みかとゝひとしく　河 太上天皇封千五百戸二千勅旨
田千町　私云太上天皇の封戸令條にのせたる由花
鳥に見えたり藤のうら葉の巻にくはし但てゝには
おりゐのみかとゝひとしきとあれは若令條にもあ
るにや可勘之　弄 問六條院御事なり院號かうふら
せ給ても太上天皇の儀式にかはるやう如何　一勘
答云封戸年官年爵なとは太上天皇にかはる所なけ
れとも今天子にてましますの御門の脱屣の後の儀式
には又かはるへき事なり是又勿論事なり　問云封
戸の戸といへるはいか程の事そや　一勘答云戸は
民戸なり千戸萬戸と云は民戸をよせらるゝ心なり
それを封戸ともいふなり
まことの太上天皇のぎしきにはうけはり給はす　秘
源の事なり萬事をそぎすて給ふなり　私云天皇な
れともその儀式を理運に本様に立給はぬをうけは
り給はすと云なり
世のもてなし思ひ聞えたるさまなとは心ことなれと
おりゐのみかとの太上天皇よりも源をは人の用ゐ
奉ることなり

れいのことく／＼しからぬ御車　秘 常の檳榔毛（ビンラウゲ）の車な
るへし庇の車なとは中古より出来る物なり　弄 問
いかやうなる車なるへきや　一勘答云常の檳榔の
事なり　花 西宮抄云太上天皇御行（供奉人装束随時無定）上皇乗
車（檳榔朱雀院初なり出大内時乗金銹檳榔）今案唐庇なとは後々に出来れ
る物なり
直にてそつかうまつり　御幸の儀式ならは公卿は布
にて供奉すへき事なり是等替りぬ成へし
さはしますかたに　朱雀の常の御座のかたなり御府
中に又隔心なきさまなり
よそひくはへて　源の御座を敷くはふるなり
かはり給へる御ありさま　秘 御落餝のさまなり
とみにもえためらひ給はす　源の落涙のさまなり
故院におくれ　秘 源の申給へる詞斉
このかたの住い　秘 出家の心ざしの事なり
つゐにかくみたてまつり給ひし　朱雀御出家の事也
身にとりてはてゝにも有ましく　国 朱雀にくらへて
は源の身数ならぬよしなり
院も心ほそく　朱雀一曾さまなり
けふかあすかと　秘 院の御返事　河 行平「わか世をはけ

ふかおすかとまつかひの涙の瀧といつれたかけん
朝忠集「人の世の老をはてにしせましかはけふか
あすかとなけかさらまし　聞書後の歌をひけり
弄雪山の鳥の事なと有開同
心さしもかなふましけれと　秘今の御本意の志をと
け給ふへき御氣力なしとなり
たゝこの心さしにひきとゝめられたると　弄御出家
の事也　秘かく念誦なとすへき心の故にかけとゝ
むるかとなり
つとめなきおこたりをたに　此心さし故にかけとゝ
めらるゝ命ならは今まて御出家の延引したる罪を
謝しかたく思ふとなり
おほしおきてたる　是は總別の御おきてなり
思ひゆつるかたなき　女三宮なり　落葉宮には御母
あり一條御息所　女一女四宮も御母有成へし
まほにはあらぬ　女三宮の御事たしかにうち出給は
ぬ心なり
心くるしと　源の心中なり
さすかにゆかしき　秘源の心中なり　女三の事をゆ
かしく思ひ給ふなり

けにたゝ人よりも　秘源の詞なり弄
わたくしさまの御うしろみ　上のしななる人ほと下
の事をしらぬ故とにかくの給ふなり
するの世のまうけの君　河儲君也後に位につき給ふ
朱雀の御子也　私云末代のまうけの君とは近代の
春宮の中にかしこくましますよし也
おほやけとなり給ひ　此春宮位につき給はゝいよい
よ世は御心のまゝなるへけれとも又猶ことのかき
りあれは女三宮なとの御ためにてまやかなる御う
しろみは有かたかるへしとなり
女の世イさため御イ　何ことも春宮の御心のまゝなるへけれ
と女の御ためなとには御心まゝにはありかたき事
も有へしとなり
女のさため御イには　さま〳〵まとの御うしろみ　女は物
はかなき物なれはうしろみ肝要なりそれ眞實のう
しろみとは夫婦のなからひならてはなき物そとい
ふ成へし
猶しゐて後の世の御うたかひ　秘然へき御うしろみ
を定給てよかるへしとなり　私つねの御うしろみ
はかりにておほつかなくおほされはさやうの人體

を覚しめし定めよと申給ふなり
さやうに思ひよる　秘　院の御返事なり
いにしへのためしをきゝ侍るにも世をたもつさかりのみて　河　忠仁公事 在端　秘　嵯峨天皇の御子を忠仁公に給し事也弄
をえらひてさるさまの事　御位のみかとの御女は何事もうしろめたきことなきさへ人をえらひ給へり朱雀は世をのかるゝ跡に残しおき給ふ事なれはいよいよ然へき人をえらひたくおほすなりされと是は世をのかれ給ふきはなれは（まてイ）こと〳〵しく人をえらふにもおよはす又すつるさまにもあらすさすかにてさま〳〵覚しめしわつらふとなり
ましてかくいまはと　秘　院の卑下しての給なり昔たにさやうの事は侍り今はましていかなる人にも給はるへき事となり
しかすつる中にも　秘　おもしろき詞なり
とりかへすべきにもあらぬ月日の　河　日月流邁歳不我與 毛詩　日月逝矣歳不我與 論語
内親王一人　聞云女宮も親王宣下ありて號するにや
一拗合點

さるへきよすかをも御心におほしさためて　是は源へおやさまにゆつり給ふ朱雀の御詞なり
権中納言なとの　夕霧也
おほいまうちきみにせんせられて　河　詮せられてなり　夕霧の致仕の相國のむこになりたる事歟（也イ）
中納言のあそんの　秘　源の詞なり　夕霧なり
何事もまたあさくて　官位といひ分別といひあさかるへしとなり
かたしけなくとも　是より源の承引の詞なり
ふかき心にて　秘　源の我身はふかき心さしもあるへきとなり
おはします御かけにかはりては（るとイ）おほされしを　何事も御在世にかはる事はあるましきなりされとも我身の行末もみしかゝるへき事をいかゝとなり
あるしの院かたもまらうとの上達部も　朱雀の院司源供奉の公卿ともなり
御あるじの事さうじ物にて　精進物也　花　あるしは饗の說勿論也　河　内膳自西階供御膳其膳供精進物延喜御記　あるしはさま〳〵のことく饗事なり或說あるしの院法體御精進なれは御あるしのことく

精進と云歟　今案之義なり　私云さうし物にて精
をまうけたると心得へし
うるはしからす　聞ことそさたる體也
院の御まへにせんかうのかけはんに御はち　河淺香
御鉢　秘御出家の後たるによりて鉢を用給ふ也
花朝覲行幸時主上御敷物は紫檀懸盤六本有打敷等
淺香のかけはん可准之又御鉢は依御法體被用之鉢
をは應量器と云也出家の後の器也宇多の御門出家
の後正月三日朝覲行幸のための延喜御門仁和寺へ行
幸有し時は御笏靴を撤せられて又手（平イ）三拜し給へり
又主上にも法皇にも同御茶を供せし事もあり御法
體の時の儀かくのことく在俗の時の禮にかはる事
のみあり此物語に朱雀院御出家の後御精進物にて
御鉢を用られ侍る寛平法皇の昔の跡をまなひ給へ
る心なり
あはれなるすちの事　秘草子の地なり
別當大納言も　細の藤大納言女三の御うしろみのそ
みし人也
この宮の御事　女三の事を源の領状し給へるを朱雀
の心やすくおほすなり

なま心くるしう　秘源氏紫上にかたり給はん事いか
かとなり弄
さしもあらし前の齋院をも　秘紫上の心なり槿齋院
をもねんころにはし給へともとりたてたる事はな
きなり其たくひ成へしと思ひ給ふなり
なに心もなくて　秘紫上のさまなり
いとほしくこの事をいかに　是より紫上の心中を思
ひやる源の心なり
中々いとゝふかきこそ　一わかためにいとゝあさく
や成ぬらん野中のし水ふかさまされは
見さため給はさらん　秘只今に心の程は見定め給ふ
へきなりかやうの事の出來ぬるにつけては一入と
切にもすへきとなり
いまのとしころと　秘近年と成ては夜かれもなきと
なり弄
その夜はうちやすみて　秘朱雀院よりかへり給し夜
なり弄　私云すこしの隔心あらんもいかゝなるは
との御中なからこの事はさすか打出にくゝて夜を
あかし給ふなり
院のたのもしけなく　秘源の詞なり

あはれなる事とも　是はおほかたのあはれさをの給
　ふなり
こと〳〵しく人はいひなさん　源氏の本臺にむかへ
　給なと取なすへしとなり
人つてにけしきはませ　左中辨して仰られし時の事
　也
たいめんのついてに　朱雀の直面にあはれけに仰ら
　れしにはえ申かへさすとなり
かへさひ　かんさい秘弄同
あちきなくや　紫上何とか思ひ給へきとなり
いみしき事ありとも御ため　源の一生の間紫上に心
　のかはる事はあらしとなり
かの御ためこそ　秘女三宮なり　紫上に心のかはら
すは女三は次なるへけれはかくの給ふなり
はかなき御すさひ事　弄源のすき心の事也　秘紫に
はこれ程までもなき事をたに嫉妬のかたはふかき
人となり
いとつれなくて　秘色にはいたし給はさるなり
あはれなる御ゆつり（かイ）　紫上の詞也
こゝにはいかなる　われはなにとか申へきそとなり

めさましくかくてはなと　秘紫上の此まゝにてある
　をも人たにとかめすは此まゝにて有へきとなり
かのはゝ女御　秘紫上の姑（ヲハ）なりされは他人にてはな
　きとなり女三と紫とはいとこなり　花藤壺女御は
　式部卿宮の御妹紫上の御をはなり
あまりかうちとけたる　秘源の詞　あまりかけし
　ろはす結局紫の身を卑下しての給さまをとかめて
　源のゝ給ふ詞なり
まことはさたに　されとも實に紫のさやうにたにお
　ほさはとなり
世の人のくちといふ物　人の中ことを云を云り　河
海に孟子をひけり　河魯平公將出嬖倉者請曰他日
君出則必命有司所之今乘輿已駕矣有司未知所之敢
請公曰將見孟子曰何哉君所爲輕身以先於匹夫者以
爲賢乎禮義由賢者出而孟子之後喪踰前喪君無見焉
公曰諾　孟子ニ梁惠王下　「人なかを人にさくな
るめゆよきみ人のなかこときゝたつなきみ
うちはゝゆかみ　弄方ゆかみ
心ひとつにしつめて　秘よく〳〵遠慮をめくらすへ
　きとなり

またきにさわきて　物のやうをも見定すにうらみ給ふな我はかはらしとをしへ給ふ也源の用心の詞也

心のうちにも　秘紫上の心中なり弄

空よりいてきたる　物のふりたるやうの事なり

わか心にはゝかり給ひ　秘是はいさめなとすへき事にてもなしとなり

おのかとちの心より　秘源の御身よりし出し給ふ事にてもなきと也されは我身の物思ひなる様をはみえしと深くつゝみ給ふ也紫上の天然の性の奇特也

こゝにはいかなる　われは何とか申へきそと也

めさましくかくてはなと　秘紫上のこのまゝにて有をと人たにとかめすは此まゝにて有へきと也

式部卿宮の大きたのかた　秘紫上の継母眞木柱のきみの祖母なり

うけはしけなる　河兒咀のろふなり　河伊勢物語云むかし宮の内にてあるこたちのつほねのまへをわたりけるに何のあたにか思ひけんよしや草葉にならんさかみんといふ男つみもなき人をうけへは忘れ草おのかうへにそおふといふなる

大将の御事にてさへ　髭黒の大将に玉鬘の君をあはせ給ふ事を紫君の知給ふやうにうらみ給ふ事なり

いちしるく思ひ合せ　紫の継母の心に髭黒の北のかたのむくいに此女三の事か出來たると思はんと思ひ給ふなり

おいらかなる人の御心にも　秘紫の事也いかなる人のうへにもかやうの方の思ひはあるとなり草子地なり

今はさりともとのみ　秘紫上の今は本臺になりてならふ方なくみえしにかやうの事出來ぬるは是則盛者必衰のことわりあらはれ侍り

人わらはれならん　弄紫上さいはひにむくいのある事をいへり

としもかへりぬ　花源氏四十歳になり給なり秘弄

きこえ給へる人々　秘螢兵部卿宮柏木藤大納言なとなり花

内にも御心はへ　主上冷泉も入内も有へく仰られしなり

さるはことしそよそちに　秘源四十歳也

みなかへさひ（い）　復（カヘサウ）　論語に見ゆ

正月（ムツキ）廿三日ねの日なるに左大將殿の北方わかな參り

給ふ　私云是此巻の名なり　弄正月の賀は多分用ニ子日ニ也　廿三日子の日なる間御賀の事あり　玉かつらなり賀の時若菜を用る事常の事也　古今に君かため春の野に出てわかなつむの歌の例なり聞
花延長二年正月廿五日甲子天子四十御賀父上皇被献之於紫宸殿有其儀采女調和若菜羹供進云々　今案延長二年の御賀は醍醐の御門の御賀なり宇多御門是を献せらる此物語は髯黒の大將の室六條院の御賀を奉らる父子の例相かはれりといへとも共に正月の子日也四十の御賀なりわかなを調和せる事一としてかはる事なし此物語の作りさま大方此さま也云々　御記云御賀事延長二年正月廿一日右大將藤原朝臣來自院有仰云々近間寂然甲子日朝摘若菜奉入之　廿五日甲子此日自院賜子日之宴云々
內宴記云弘仁四年始有內宴唐太宗之舊風也正月一二三日間有子日者件日行之藏人式清涼記等廿日註曰一二三之間若有子日便用之　倚松樹以摩腰習風霜難犯和菜羹而啜ㇾ口期氣味之克調　菅丞相屈從雲林院序　十二種　若菜　蘇(薊イ)　苣(荏イ)　芹　蕨　薺　葵　蓬　水蓼　水雲　芝　菘　此中菘はさま〴〵の説あり　白河院に松を奉りける人有ける俳事なりと御あり大外記師遠は大根のよしを申ける異説を用られし由舊記にみゆ　七種は　薺　蘩蔞　芹　菁　御形　須々代　佛座
四十よりはしめて數のまさ(みつイ)るを賀するなり春の初若菜を摘て是を使にて祝なり古今にも仁和御門人にわかな給ひける御歌あり是も賀を給ひけるなり

えいさめかへし給はす　玉かつらの俄にかく〳〵と申給へるなり前にみなかへさひ申給ふとあれはかくかけり

しのひたれとさはかりの御いきほひ　秘當時は玉かつらは太政大臣の御女右大將の北方なれはならひなくいかめしきなり　弄玉かつらの父も夫もいかめしき人なり

みなみのおとゝのにしのはなちいて　河放出　廂の名なり云々　或説云出居事なり　花六條院の南のおとゝの西のはなちいてなり放出の事先にしるしをはりぬ　秘六條院の母屋なり

ひやうふかべしろ　屛風　壁代　又坊壁

いしなとはたてす　河倚子　此巻紫上二條院にての

御賀にもいしをたてたりとみえたり是は略したる義たり　秘しのひたる故に略するなりおくに紫上のし給ふにも倚子はなき也　私勘此奥には螺鈿の倚子をたてたりと有

御ぢしき四十枚　河地敷也　花地敷(シキ)は唐莚に大紋高麗へり付たる物なり或龍鬢(敷イ)地鋪なり弄同　龍鬢の地鋪は龍のたく以蔵へしと云々　弘云唐莚に緣をとりたる物なり　私四十枚は源の年の数(歎イ)なり　河御記云(延喜十六年御賀)當御座前鹿鋪地敷二枚其上鋪四幅帖(地記事延喜十六)備舞踏所云々

御しとね　河茵　河茵事同御記云(行幸亭子院西向東宮座當同庇第一間皆用數數茵)

けうそく　河脇息事同御記云立蒔繪大床子二脚其上立沈香之脇息一脚

その御くとも　年のよりたる具ともなり　私此義如何

らてんの御つし二よろひ　河螺鈿　延喜六年御賀御記云母屋前立二尺蒔繪御厨子四基(一二基納御法服 一基納御法具)　同十六年御記云立二尺蒔繪御厨子各納法服冬夏各五具　花仁和元年太政大臣賀夏冬装束五襲臥具屏風有數云々

御衣はこよつすゑて　秘四十の賀なるによりて四あるなり

夏冬の御さうそく　秘四季をいへり弄

かうこくすりのはこ御すゝりゆするつきかゝげのはこ　河寝殿裝束　二(ニイ)階一脚南(上置火取湯汁坏有蓋唾壺中階置御帛打亂筥下段置一合次置唐櫛笥)次(二階)一脚北(置厨子二脚東置御櫛匣一雙其下置香壺匣西置菓子菓匣其下階挿頭臺)　花　泔(ユスルツキ)器有二義

並蓋一かゝげのはこは打亂筥なり　秘かうこかゝげのはこうちみたりのはこなとの類なり　弄ゆするつきはひんたらいの類なりかゝけのはこは打亂筥と同し

御かざしのだいにはおんしたんをつくりめつらしきあやめを　河一切の物にもんのあるをはあやめといふなり定家卿説なり是も木のはき目なといふ事なりあや杉とも云なり　延長二年正月廿五日御賀御記云南廂自東第四間立挿頭机一脚有象山其水金銀花樹等(木イ)　秘つくり花を臺にさして老をかくすへき表示(オイ)なり挿頭の花なり

おなしきかねをも色つかひなしたる　秘つかひなしたる色もしきまもたくひなきよしなり

ものゝみやびふかく 河閑麗 玉かつらの君かやう
の心つかひすくれたる人となり
大かたの事をも 總體の作法をはこと〳〵しからす
しなし給ひ(ろイ)かやうのこまやかなる事をはきよらを
つくしてとゝのへられたるなり
今イ人々まいりなと みてたち大臣公卿參り給ふ成へし
おイ出ましに おもてむきの座へ源の出給ふなり 秘外
様に出給はんとて簾内にて玉鬘に對面あるなり弄
いにしへおはし出るさま〳〵なりけんかし 源の心
中を察して草子地にかけり
ひかかそへにやとおほゆる 秘源の御さまのわかく
きよらなるをいへり
をさな君も 弄玉かつらの子たちなり 秘玉かつら
の子たちなり花鳥の義尤可然
かんの君はうちつゝきても 秘玉かつらか心には此
子たちをは源にはみせ申ましき由思ひ給ひしなり
閑御子たち二人まて源へみせ奉らんははつかしき
と玉鬘のおほす成へし
大將のかゝるついてにたに御らんせさせんとてふた
りおなしやうに 河髯黒の大將の眞木柱同胞の男子

二人十二十一歲なり是をふりわけかみといふ歟
花髯黑の御子二人のちに右兵衛督右大辨といへる
なるへし 河海に眞木柱の同腹男子なといへるは
あやまれり是はみな玉鬘のまうけ給へる也故に玉
かつらの歌にも「わか葉さすのへの小松を引つれ
てとよみ給へり但此時三四歲の子たちなりふりわ
けかみいかゝ 弄異河海の義玉かつら腹なり三四
はかり成へし
なほしすかたとも 童直衣の姿なり
過るよはひもみつからの心には 秘源の詞也
かゝるすゑ〳〵のもよほし 秘御孫たちなり
中納言の朝臣のいつしかと 秘雲井の鴈の腹なり
人よりことにかそへ 秘此御賀を第一にし給へる事
なり弄 上東門院より六十賀おこなひ給ひける時
よみ侍ける法成寺入道前關白太政大臣「かそへし
る人なかりせはおく山の谷の松とや年をつまゝし
榮花物語にあり
玉鬘しはしは老を忘れても おもしろくかけり
わか葉さすのへの小松を引つれてもとのいはねをい
のるけふかな 秘御子たち引つれて參りて御年をい

はふよしなり
せめておとなひきこえ給　秘せめてはしゐての心なり　源氏にはちなからおとなしくいひなし給へるなり弄
御わかなさまはかりまゐれり　秘幽玄なり　祝義の氣色はかりなり弄
返源小松はら末のよはひにひかれてや野への若なも千世をつむへき　河「かすかの丶わかな丶らねと君かため年の數をそつまんとそ思ふ　秘末遠き人の齢にひかれてわかみも年をはるかにつみつへしとなり弄
式部卿の宮はまいりにく丶　弄紫上の父なり　花眞木柱の上の事なり　眞木柱の君の祖父宮なり玉かつらの所をおほして大將のし給へる事ある故に遅參し給へるなり
大將のしたりかほにてかゝる御ならひにうけばりものし給ふも　髭黒なり源氏致仕なとの方さまをわか物に所えかほなるをうけばりものし給ふといふなり
御むまこの君達　花大將の御子たちは式部卿宮の孫たちなり秘　弄式部卿宮のためにも孫なり眞木柱君の兄弟なり
いつかたにつけてもおりたちさうやく　河雑役　式部卿の御孫はけふも此中(内イ)へいり立給ふ事をいふ歟
こものよそえたをりひつ物よそち　河籠物　四十枚折櫃物　四十　秘こもの献物　籠物兩儀なり　弄をりひつものをりひ(うつイ)もの　秘如此
さるへきかきりさりつゝけ　花外記延長二年正月廿五日御賀中務卿敦慶親王以下同兼輔朝臣執ニ捧物ヲ總廿捧(笋蕨之類或是預養之(或菓イ))物盛小籠置ニ梅柳ノ枝ニ　次侍從以下執ニ折櫃物ヲ總廿捧菓子等之類なり(饗イノナ)入レ自ニ日華門ヲ列立庭中ニ一列親王以下參議以上一列四五位各奏ニ物名ヲ訖内膳正忠望率ニ膳部ヲ入レ自ニ月花門ヲ受ケ捧物ヲ出レ自ニ同門ヲ
御かはらけくたりわか菜のあつ物　御土器下るは盃の下るなり　河延喜十六年御賀御記云請中務卿親王上野太守親王太宰帥親王給酒于時左衛門督藤原朝臣奉有命召抔(坏イ)處給即退盃飲訖施舞　延長御記云采女調和若菜羹供進采女又以供進餘羹給侍臣盛中垸(焼イ)置中盤　うつほの物語に云しろかねのひさけ

にわかなのあつ物ひとなへ
御まへには　源の御前なり
おほんつきとも　秘御器なり
朱雀院の御くすりの事　河御樂事御惱事なり
たいらぎはて給はぬ　すきと不愈し給はぬなり
かく人なとはゆさす(日イ)　延喜十三年尚侍賀御記云命侍臣令奏絃歌自彈和琴中務卿親王彈琵琶克明親王彈琴云々不召樂人事　此等之例歟
御ふえなとおほきおさゝ　秘管の總名なり　名物ともをとゝのへ給ふなり　弄樂器の總名也　私樂器の總名とはわろしふえは管ことは絃の總名なり玉かつらの父致仕相國隨分の器ともをとゝのふるとなり
和琴はかのおとゝ　致仕相國秘藏の和琴となり則致仕ひき給ふなり
かた〳〵いなふるを　河固辭　餘の人は叶がたしと柏木に同し和琴にて源の御所望なり
をさ〳〵おとるましう　弄相國にならひて右衞門督調給ひし也　秘柏木の父おとゝにおとらさるなり
上すのつきといひなから　河繼嗣也　河和琴　和名

曰日本琴(ヤマコト)　萬葉集俗用和琴二字也末止古止(ヤマトコト)譜序夫和琴者依爲本朝之歌(奇イ)器不載漢家之書籍上始自神皇(六イ)下至于人倫之今公宴之庭私遊之時無不相携但云調子云拍子晴習音曲不傳案譜云々　又嵯峨天皇別書此曲傳之尚侍廣井女皇云々後頗中絕承和聖主深好神琴召慈賀善門於階下習御其曲左大臣源信卿同習其曲于時相坂邊有蟬歌翁々尤長此道仍遣右近少將良岑宗貞晴令傳其手(手カ)又貞觀聖主召藤原朝臣繁井等習御彼時貞保親王蒙勅命頗作此譜也　延喜聖主柄絃管之妙其中和琴尤長更傳賜左兵衞佐藤原敦忠朝(古イ)習得其朝臣薨後天慶聖主勅命之(云イ)請式部卿親王敦實許可習兼又左大臣雅信卿爲彼親王家智深傳此曲以降大納言時仲參河守經相越前守經宗筑前守兼俊兵庫頭邦家雅樂頭範基等朝臣皆繼倫々不絕矣已上右兵衞尉紀俊註衞進公家　或說云和琴の濫觴は弓六張をもちてひきならして是を神樂にもちゐるを後人琴につくりうつせりと申傳たるを上總國の濟物のふるきしるし文に弓六張と書て註に御神樂料とかけりとそいみしき事也鴨長明抄に見ゆ

もろこしのつたへともは　和琴の外もろこしよりつたへたる樂器ともは譜も何も心得やすきやうにしおきたるへし
かきあはせたるすかゝきに　弄和琴にかきる事也
ことのをもいとゆるらかにはりていたうくたして
いたうくたしてとは下の聲にてひゝくなりのほるねとは上音にてたかきなり
これはいとわらゝか　秘和なり愛敬つきてすみのほる音のあるなり又おとゝは下聲にゆる／＼としたる方のあるとなり
のほるね　上音なり同調子成へし
この御ことはきやう殿の御ものにて　弄琴は螢兵部卿宮なり　河琴　宜陽殿西宮抄云納殿累代御物在宜陽殿恒例御物納藏人所綾綺殿紙御屏風納仁壽殿藏人所雜色爲預　御記延喜五年正月廿二日召保忠令吹笙曲調頗比聽因賜橘皮笙是故太政大臣昭宣公弱冠時承和天皇爲令學習所給也寛平中以其名物而獻之其後爲宜陽殿笙令尋舊意賜之　同延喜十七六イ年四月廿二日此日返納宜陽殿累代書法此殿自本納書法百九十七卷往年暫出看覽又於御書所摸所也今摸寫功訖返納本所只雖大十イ數本無細目觀起イ其題名或有誤謬仍新作目錄一卷細記題名裝束及其訛謬加以置之欲後來者見之頗有分別耳又加書法三卷是二百卷凡厥子細其在目錄即令右近少將伊衡藏人濟行等撿納之
こ院の末つかた　秘桐壺の帝なり
一品のみや　秘朱雀院の同腹の姫宮なり
御つたへ／＼を　秘一品の宮へ太政大臣中うけ給へるろイそのつたへつたへをおほしいつるなり
みてもえひなきは　螢宮なり舊事を思ひ出せるさまなり感にもよほされてなり
御けしきとり給てきんはおまへ　螢宮源の御氣色をうかゝひて琴をゆつり給ふなり
めつらしき物ひとつ　源の琴を彈するなり
さうかの人々みはしにめして　河御說記イ云延喜十六年三月御賀試樂中務卿親王太宰帥親王在階下唱歌侍臣五六人又唱歌
かへりてゑになる　河反音律なり　秘呂の律になるなり弄
あをやきあそひたまふほとはねくらの鶯　河靑柳律

催馬楽長生楽序拍子十二　青柳をかたいとによりておけや鶯のかさにぬふかさは梅の花かさ也　秘青柳に鶯もおとろきぬへしとかけりおもしろくしかも青柳をかた糸によりて鶯の心あはれなり弄　花此御遊夜景なるによりてかくいへり

わたくしことのさまに　秘公儀は事かきりありて定れる法式計なり是は私事なれは事くはへて　段と結構し給へるなり　弄問云わたくしことのさまにしなしていかゝきやうさくに如何　一勘云此御賀はもとよりわたくしの禮義なりきやうさくは遝迹と書たとへはすくれたる心成へしわたくしことは卑下したる儀なり祿物なときやうさくにとは可然し給ふなり

御おくり物なと　玉かつらのかへり給に源の贈物なり

かう世をすつるやうにて　秘　源の詞也

とし月の行衛もしらすかほなるをかうかそへしらせ法成寺關（壽イ）白　「かそへしる人なかりせはいたつらに谷の松とや年をつまゝし　秘かそへしる人云々此歌を引よくかそへしらせ給ひけるよとなり

とき〳〵は老（おひへイ）やまさると　弄とき〳〵はまゐり給て源氏をもみ給へかしの心にや　私老やまさるとは源の老のかさなるかと細々御らんせよかしとなり

ふるめかしき身の所をさ（せきイ）　老ぬるに又位さへかろかろしくならぬ御身をの給ふなり

あかすくちをしくそ　源の心中なり

よく世に住はて　弄玉かつらの身の定れるなり　大將の室に定り給事源の御息そとなり

おろかならす思ひ聞え給事　玉かつらの心にも實父よりも源を大切におもふとなり

きさらき十餘日に　秘きさらきとをかあまりとよむ也　此頃女三宮六條院へわたり給なり

この院にも　六條院なり

わかなまゐりし　弄しん殿なり　玉かつらのわかなまゐらせられし同し所なり

うちにまゐり給ふ人のさほう　河源氏院號以後なれは入内の儀に准せらるゝ歟　入上皇宮同事なり　秘入内の義をまねふなり

かのけいしのそみし大納言　秘藤大納言なり

御車よせたる所に院わたり給ておろしたてまつり給

河臣下の禮は妻を迎る時はみつから車をよする禮なり云々　院中の義には此義有へからさる歟然を六條院たゝ人のことくふるまひて卑下し給ふよしなり　秘臣下の禮は自車をよするなり今源は院號かうふり給へはさは有ましきをこゝは源の謙退の義なり　弄潤云臣下の禮は妻を迎る時みつから車をよするなり　河海に有可然歟　一勘大略如此　私云自車をよせ給へるをれいにはたかひたるといへり　河海よく叶へり

たゝ人におはすれは　秘草子地なり　内まいりにてもなしとなり

むこの大君といはんにも　花吾家の曲の詞なり　催馬樂の心なり　弄王孫の事なり　私源は皇子なれとも尊號あれは大君とはいひかたしとなり

めつらしき（いかめしきイ）みやひをつくし給　兩院よりさま〳〵のけいめい成へし

けにかゝるにつけてこよなく人におとり　紫のうへの心中にさま〳〵おほす事なり

み（またイ）ならふ人なくならひ給て　紫のならふ人なくならひたるなり

はなやかにおひさきとほき　女三のさまを思ふなり

もろ心に　弄女三宮の御まうけの事共を紫上のし給ふとなり

いとゝありかたしと　私紫上を源のありかたく思ひ給ふなり

ひめ宮（君イ）はけにまたいとちいさく　女三の御さまなり　一向にいまたわかひたる御さまとなり

かのむらさきのゆかり　紫上をたつねとり給し事を源の思ひ出給ふなり

されていふかひありし　紫上はをさなき時より心はせのよくおはせしとなり

これはいといわけなく　是は一すちにいわけなき計なり

よかめりにくけに　秘嫉妬なとの給ふ事はあるましきとなり　源の心にそれもよきそとなり心のまゝに嫉妬よくけなる心なとかいまたなけれはしやすきとおほしなからあまりいわけなきすきて何事にもはへなきと又おほす源の御心なり　弄にくけ強き心は有ましきとなり

としころさもならひ給はぬ　紫上の心なり

しのふれと猶ものあはれなり　紫上の心中なり
御そともなといよ〳〵たきしめさせ　紫上のさまな
り弄　源の装束なとに紫上のにほひをせさせ給ふ
なり　彌源を心に入るさまなり
なとてよろつの事　弄なとてといふより源氏の心な
り源の心の中なり紫上をさしおきて又ともみるへ
き人もなき世なりとなり
わかけれと中納言をはえおほしかけす　秘夕霧は雲
井の鴈の外には又わくる心も有ましとみとめ給て
しゐての給ふ事もなかりしを我身の心よわきゆゑ
となり
涙くまれて　源のさまなり
こよひはかりはことわりと　源の紫上へ申給詞也聞
に三ケ日めなり
これより後のとたえ　源の紫へ向後のとたえあらん
はわかおこたり成へしとなり
又さりとてかの院にきこしめさん前のやうにの給へ
とも又さやうに女三へとたえありては朱雀の御前
いかならんと源のうちなけくなり
すこしほゝゑみて　秘紫上なり

みつからの御心なからたに　秘これより後のとたえ
あらんこそ身なからも心つきなかるへけれとある
をうけたり
ことわりも何もいつこにとまるへき　今夜はかりは
ことわり前に有をいふなり只源の御心とたに定か
たくの給へは何事も今より本はあるましきなとゝ
の給ふをいふかひなけにとりなし給ふといふなり
はつかしうさへ　源の御心也
つらつゑをつき　河支頤　源のさまなり
すゝりを引よせて　秘紫上なり
紫上
めにちかくうつれはかはる世中を行すゑとほくたの
みけるかな　秘さためなきとなり　河貫之集云女の
もとよりおこせたりける　「秋はきの下葉につけ
てめにちかくよそなる人の心をそみる
けにもことわりにて　源の心也
源
いのちこそたゆともたえめさためなきよのつねなら
ぬ中の契を　秘この二人の契は世間の定めなき契の
類にてはなきとなり　聞定なき世の常の契にては
なきとなり面白き句法なり　花命はたゆとも此契
はかはるましきよしなり三四の句の心は定なき世

のならひならぬ契といふ心なり　私命はたゆる事
は有へし此契はたゆへからす世間の定なき契のや
うなるよのつねの類にてはなしといふなり
とみにも　秘源なり
そゝのかし　紫上の源をもよほしたてゝ女三の御か
たへおはしまさするなり
いとたゝにはあらすかし　紫上の心中なり
とし頃さもやあらんと　紫上の心なり槿齋院なとの
事なり
さらはかうにこそはと　是より紫の心中に色々思ひ
めくらす事なり
かく世のきゝみゝもなのめならぬ　世の聞みゝは外(ことイ)
聞の事なりなのめならぬは朱雀の御女なるをいふ
なり
いまよりのちも　秘世間の不定なりいかなる事も出
きぬへきとなり
さてそつれなくまきらはし　紫の體なり
おもはすなる世なりや　これよりはさふらふ人々の
心なり
かたさり　弄所をゝく體なり

おしたちて　理運なるさまの心なり
けたれても　紫のおしけたれては堪忍あらしとなり
おのかしゝ　さふらふ人々の我とちいふさまなり
露もみしらぬ　秘紫上なりあらぬさまをつくり給ふ
なり
かう人のたゝならすいひ思ひ　秘紫の心なり　さふ
らふ人々の心中を察し給ふなり
かくこれ(たイ)かれあまた　秘紫上の詞弄
いまめかしうすくれたるきはにもあらすと　明石上
花散里なとなり紫の詞なれは我をも卑下しての給
へるなり
この宮の　女三なり
なほわらは心のうせぬにや　紫の我身の心をの給ふ
なり　女三の御としなとのまたいとかくおはしま
せはなり
へたてあるさまに人々やとりなさむと　さふらふ人
人の心中を察したる詞なり
ひとしき人おとりさまなと思ふ人にこそ　秘何事も
人からによる事なれはいさゝかも此宮に對しては
心をたつへき事もなきとなり

みゝたつ　耳にかゝる事なり

かたしけなく心くるしき　女三なり朱雀院御山すみあるへきなれはかたしけなきうちに心くるしきかたもそふとなるへし

中務中將の君（ナカツカサ）　弄もとは源氏の御かたにありしを須磨へ御下向の時より紫上のかたにあり

むかしはたゝならぬ　秘此中務中將君なとなりはしめは源の御方の人なり

こと御かた／＼より　こと御方々とは明石花散里なとなり　其類ならす紫の御心中はさこそとなり

もとより思ひはなれたる　かやうの事に元來かけしろひもなき人の事なり

おもむけつゝ　さやうにいひなすやうの心なり

かくおほしはかる人々こそ中々くるしけれ　弄紫上の語也秘云是は紫の心中とみえたり

なとてかさのみ思ひなやまん　世間を観してなにゝかさのみ貪着せんとおほす心なり

あまりひさしきよひゐも　例にかはりたると人の思はむ所をおほすなり

けにかたはらさひしきよな／＼へにけるも猶たゝならぬ心ちすれと　けにとは人のおしはかりにかなひたる所をうけていへりまことにかやうのをり／＼には御心にかゝる事あるなり

すまの御わかれのをり　かやうの時の事まて覺し出てなくさめ給へるこゝろもけにたゝならぬ御心中なるへし

わか身まての事はうちおき　河「いかにかと思ふこころのある時はわか身をおきて人そかなしき

われも人もいのちたえす　源も紫も命の堪忍せすしてあらはかひなからんとなり

風うちふきたる夜のけはひ　秘餘寒の時分なり　是より末一段其夜のさま思ひやるへし

かの御夢に見え給けれは　秘源の夢なり　見ゆるは紫上なり

鳥のねまち出給へれは　源のさまなり夜ふかき鳥の聲のきこえたるもと前にかきたる心のかよへるさまおもしろくかきなせり心をつくへし

夜ふかきもしらすかほに　秘鳥のねにかこつけ給ふなり

いといわけなき　女三の御さまなり

明くれのそらに雪の光みえて　「明暮の空にそ我はまとひぬる思ふ心のゆかぬまに〳〵　私不及引歌

やみはおやなしとひとりてたるゝ　河「春のよのやみはあやし梅花色こそみえねかやはかくるゝ　秘さふらふ人々の事なり

猶殘れる雪と　河子城陰處猶殘雪衙鼓聲前未有塵樓度曉望白樂天第十六　秘樂天詩子城云々子城とは北方をいへり紫上の方は北なり　誦し給へる心面白し　弄子城の詩の心如何　一勸子城は北方城なり雪につきて樂天か詩を誦したるはかりなり

ひさしうかゝる　夜かれも久しくなかしとなり　私云源のかゝる忍ひありきのやうなる風流の事の久しうなかりつるとなり心は同し

そらねをしつゝ　秘源をてらしめんかためなり

てよなくひさしかりつる　秘源の詞なりそらねをせし事なり

おぢきこゆる心の　紫にさふらふ人々のおつるとの給ふなり源の紫への給ふ詞とみえたり

さるはつみもなしやと　夜ふかくいそきかへり給へともさふらふ人々の久しくまたせたてまつりたれはわか罪はなしと源のの給ふにや又紫の上におちたてまつりて久しくあけさりつれはさふらふ人々のつみはなしと源の紫をかてちての給ふ詞にや

ぬれたる御ひとへの袖を引かくして　紫の様體なり

かきりなき人ときこゆれとかたかめるよをとおはしくらへらる　秘女三宮は族姓天下第一なりされとも紫上ほとの用意はなきとなり　弄女三宮におほしくらふるなり

とけかたき御けしきをうらみきこえ給て　紫のうちとけぬ體を源のうらみ給ふなり源の紫をうらみ又心さり給ふさまなるへし

しん殿には　秘女三の宮の御かたなり

けさの雪に　秘源よりの文の詞なり

心ちあやまり　病の事なり心ちそこなひてなともあり

さきこえさせ侍ぬとはかり　秘文にはあらて詞にていへるなり　めのとの無興したる返事なり

ことなる事なの　秘源の心中なり

さはおもひしてとそかしあなくるしと身つから思ひつゝけ給ふ　源のかねてより紫上ほとはあらしと思

ひしかさやうなるなり朱雀の御ためくるしくおほすなり

女きみも　紫上なり紫のとかのやうに人のとりなさむとくるしかり給ふなり

けさはれいのやうに　秘五日めなるへし　紫の御かたに源のうちとけてね給ふとなり

ことにはつかしけもなき　秘人からを執し給ふ故にかう執し給へり

御ふてなとひきつくろひ　女三宮を執し給ふ心なるへし

しろきかみに　雪のあしたなれはなるへし　秘すくすくしきさまなり

源中みちをへたつるほとはなけれとも心みたるゝけさのあは雪　花後拾「かつ消て空にみたるゝあは雪は物思ふ人のこゝろ也けり　秘さはるへきほとの雪にはあらされともなり　聞心みたるゝはみたり心ちの心なるへし　私上句は程へたてたる中道ならねともけさの淡雪につけても心[illegible]るとなり花鳥に出せる歌を心にもちてみるへし思ひの切なるを云なるへし

やかてみいたして　弄女三宮の御返事をまち給ふ也紫上に忍ひ給ふ心なり何となく紫上には忍ひ給ふ心あり

花をまさぐり　秘文をつけ給ひし花の残たるなるへし　弄

ともまつ雪のはのかにのこれるうへにうちゝりそふ空を　河「ふりそめて友まつ雪はむは玉のわか黒髪のかはるなりけり　私云是は白髪を雪に比していへるなり白う成初て消る事なくして又友をまちつくる雪は白髪そとなり不及此歌なり只詞のさま面白なり　花詩には待伴といふなり

袖こそにほへ　河「をりつれは袖こそにほへ梅花ありとやこゝにうくひすのなく　秘鶯を聞て歌の心によせて花を引かくし給ふなり聞　弄歌の心によせて花を引かくし給ふなり

御かへりすこし程ふる　秘前にやかてみいたしてとあり此まゝにて御かへりをもやかて見給ふへきの心あれと程ふるまゝに入給ふなり

女君に花みせたてまつり給ふ　女三へ文をたてまつり給へは紫の機嫌をこらんとなり

花といはゝかくこそ　秘梅花を評していへり
さくらにうつしては又ちりはかりも心わくかたなく
や　河「梅かゝをさくらの花にゝほはせて柳か枝に
さかせてしかな　花紫上を櫻にたとへたまへりち
りはかりはすこしはかり也　梅かゝを櫻の花にゝ
ほはせての心なり　秘花の説一儀可然されと只花
のうへはかりを評していへるにて面白きなり此文
なとつかはし給へは紫上の機嫌をとるへきとてか
やうの花のうへなとをいひまきらはし給へるなり
弄櫻にうつしてとは梅かゝを櫻の花にの心なり
これもあ（はイ）またにうつろはぬほとめとまるにやあらん
花の盛にならへてみはやなとの給に　紫上の返答は
あまたにうつろはぬほとめとまるにやあらん花の
さかりにならへて見はやとは女三宮を思ひよせ給
へるなり　弄春の花とものさかぬほと櫻はかりに
心をとめたるにやといふなり花のさかりに櫻に梅
をもならへてみはやとなり　この詞も紫上に源氏
のの給ふ也此時紫の心をとりてまきらはしに花の
批判し給ふなり女三紫上なとに花をたとへたる義
は不用之あまたにうつろはぬとは衆花未開の時分
梅の咲たる事なり只こゝもとも兎（何イ）や角やみてまき
らはしにし給へるなり悉皆紫上をなくさめむとて
さま〳〵の事をの給ふなり花鳥の義無益なり闕
御かへりあり　秘女三よりの返事なり
御てのいとわかきを　秘女三宮の手跡の幼稚なるを
紫上にはゝかり給ふなり
しりめにみをこせて　紫上のさまなり
返女三はかなくてうはの空にそ消ぬへき風にたゝよふ春の
あは雪　是は源の夜かれをうらみたる歌なるへしめ
のとのよめるなるへし秘弄箋
御てけにいとわかく　前に御手のわかきとあるは源
の心なり是は紫のしりめにみたる心なりけにとは
前をうけたる物語の詞なり
さはかりの程に成ぬる　弄女三宮の年のほと（手イ）を云紫
上の心也
みぬやうにまきらはして　紫上の用意なり
こと人のうへならん　弄源の心なり
いとほしくて、秘こと人の事ならましかはとやかく
やとの給ふへき物をと也　私こと人の上ならはさ
こそあれなとは忍ひてきこえ給ふへけれといとは

しくてたゝ心やすく思ひなし給へとのみ聞え給ふ
此詞は女三宮ならすはかたはしをは紫上なとへはかたり給ふへけれどさすかいとほしくおほして心やすき人さまなとはかり大やうに何事をも源の紫上へいひなし給ふそいふなるべし
けふは宮の御かたにひるわたり給ふ　三夜まてはよるはかりわたり給へるなるへしひるはけふはしめてなるへし女御入内の後も五日めなと露顕とてひるわたりおはする事ありそれを御あらはれの事なとゝむかし物語にかけりその准據なるへし女三宮わたり給時も内に參り給ふ人のさほうをまねひてとあり
心ことにうちけさうし給へる御ありさまいまみたてまつる女房なと　弄いまみたてまつるとは三夜の後ひるみたてまつる人なり　秘三夜の後はひるはしめてみたてまつる人々なり　私うちけさうしは源のかたちなり
いてやこの御ありさまひとゝころこそ　秘紫上ほとの御おほえは此宮にはおはしますへからすとなり
女宮はいとらうたけに　女三の御ありさまをこれよりはかけるなり
ちごのおもきらひせぬ　秘いときなきさまなり
院のみかとはをゝしく　朱雀なり　弄男らしきなり朱雀院も男らしくつよきかたはおはせさりしかとおかしく故つきたる方は人にすくれ給へると云也
なとてかくおいらかに　秘大様（オホヤウ）なり（方にはイ）　河説面白し弄河毎人老らかにと心得たる歟さにはあらすさきの詞にも女三宮はちごのおもきらひせぬ心ちしてなとありをさな／＼しくて物はかなしときこえたりこれもおほれたるよしをねひれてなといふ樣なり
心とゝめ給へるみてときゝし　女三は朱雀の別して御寵愛ときゝしかかやうなるは不審なるとの源の心なり
おほえ給けることは　うちおもふまゝのさまを云歟　秘ゑみはなたす　河笑也　つねにゑみ給ふ心なり笑かちなるなり
むかしの心ならましかは　弄若年の時善惡をえらふ時ならはとなり　秘源の若き時の心のまゝならはいとひもし給ふへきとなり　私今は源の年つもり世のありさまを見あつめたる故にきはなれすくれ

たるはなき物そと思ひしりたるよしをまへいひの
へたるなり
きははなるゝ事はかたき物なりけり　花その人のし
なほとよりぬけいてゝよきを云也
よそのおもひはいとあらまほしき程なりかしとおほ
すに　花源氏の心に女三宮をよそにて思ひしはよろ
つあらまほしきさまにおほえしを紫上にさしなら（ならへイ）
へみ給へはありかたく我なからもよくをしへたて
たると思はるゝなり今此宮をあつかり申事は餘所
からの思ひやりはいかめしかるへしとなり
さしならひ　秘紫上をは我よくそたてたるとなり
一夜のほとあしたのまも　紫の上を源のいよ〳〵思
ひまし給ふさまをかける段なり
院のみかとは月のうちに御寺にうつろひ給ひぬ　院
は朱雀なり御寺は物語には西山とはかりかけり
秘月の中は二月中なり仁和寺にうつり給ふなり弄
この院にあはれなる御せうそこども　此院は源氏な
り
いかにきゝ所やなとはゝかり給ふ事なくて　こなた
へのきこえなといかゝと憚り給はてともかくも有

へしとなり
をさなくおはするを　女三宮の御さまなり
むらさきのうへにも御せうそことにあり　河紫上
號自此始
をさなき人　秘院の御文の詞也弄
たつね給ふへきゆゑもやあらんとそ　花女三と紫と
母かたのいとこにておはします事なり　秘よそ外
の人にてはましまさすとなり女三御母は紫上の御
おはなれはなり

先帝
- 式部卿宮　紫上の御父宮也　后腹也
- 薄雲女院　冷泉院御母后也　同
- 源氏宮　朱雀院之女御女三宮の御母なり　別腹也

朱雀
そむきにしこの世にのこる心こそ入山道のほたしな
りけれ　河「世のうきめ見えぬ山路へいらんにはお
もふ人こそほたし成けれ」此世事によせたり　秘
心あらはなり
（みイ）
やとをはるけきこゆるも
おとゝも見給て　源の朱雀よりの文を見給て紫上へ
御返事をすゝめ給ふよしなり

御かへりいかゝなと　紫の返事ありにくきとなり
たゝ心をのへて　秘懐を述るはかりなり
返紫上
そむく世のうしろめたくはさりかたきほたしをしゐてかけなはなれそ　秘この世に心あらはしゐてかけはなれ給ひそとな。
女のさうそくに　弄裳からきぬなとなり　朱雀の御使への祿なり
御てなといとめてたきを　紫の手跡すくれたるなり
院の御らんして　朱雀の御らんして女三のいわけなくおはするさまを心はつかしくおほすなり
いまはとて女御更衣たち　朱雀の御寺にうつろひ給ふみきりの有さまなりあはれなる事おほかるへし
内侍のかんの君　朧月夜なり
故きさいの宮　朱雀の御母弘徽殿の太后なり
二條の宮にて　弄閒云后宮のおはせし所なれは宮といへる歟　一勘合點なり　惡后の父の殿二條なり
朧月夜尙侍在此所太政大臣舊宅也
ひめ宮の御ことをゐきては此御ことをなん　女三の御事につきては此内侍のかみの事を朱雀のゐはしめすとなり

あまになりなんと　朧の事なり朱雀のいさめもとめ給ふとなり
六條のおとゝ　源氏なり
その世のことも　過にしかたの事なり
かたみに世のきゝみゝも　源も朧も互に外聞を憚るへき人となり
いとほしけなりし世のさはき　秘すまのうつろひの事也
むかしよりもこよなくうちくし　文のゆきゝなとに事のさまみゆるなりうちぐしは具したるなり物のたらひたる心なり
むかしの中納言の君　秘昔も源の心しりをしたる人なり
かの人のせうとなるいつみのさきのかみ　中納言君の兄　和泉前司なり
人つてならてものこしに　是より源の和泉前司にかたらひ給ふ詞なり
むかしよりつらき御心を　朧の心二條のおとゝの源へそのまゝにまゐらせんとやうに有し時はさもなかりし事なとなるへし榊卷にみえたり

あはれにかなしき　秘御山てもりの事なり
けに人はもりきかぬ　源の和泉前司に人にはもらさしとの給ひし事をうけてけにといふなり
心のとはんてそ　河後「なき名そと人にはいひて有ぬへし心のとはゝいかゝこたへん　引歌なき名そと人には云々此歌君子たる者の心をつくへき歌なり　内省不疚（ウチニカヘリミルニヤマシカラス）
いにしへわりなかりし　秘弘徽殿の太后の在世にたに有そめし事となり
そむき給ひぬる　朱雀の御事なり
たちにしわか名　河「むら鳥のたちにしわか名今さらにことなしふともしるしあらめや
このしのたのもりを　河和泉守事なり　和泉國の名所なれはなり　秘和泉守なれはいへり　花六帖「いつみなるしのたの森のくすの木も千枝にわかれて物をこそ思へ　常陸の事をつくは山なといへる類なり　私此一段いにしへわりなかりしと云より源の心なり是も人の性をいへる事なり昔も朧の心かろき人なれは今さら有ましき事との給ふともいひなひかさむとおはして源のおはしたるなりよ

く〳〵心をつくへしさて案のことく此たひ逢給ひしなり
女君には　紫上なり末つむの君のわつらふをとふらふよしの給ひなすなり
ひむかしの院　二條院の東院なり
心けさうし給ふれいはさしも　東の院の人々なとは心やすきかたなれはつねには引つくろひ給はぬとなり
思ひあはせ給ふ　紫の心に朧の事を思ひよする事もあるなるへし
ひめ宮の事ののちは　女三宮のおはして後は有しやうに紫の源へうちとけぬ心あるなり
その日はしん殿へも　女三宮の御かたなり
御ふみかきかはし　女三宮へ御ふみはかりかよはし給ふなり　又朧へ御文かよはし給ふ歟猶女三にて可然歟如何
あしろ車のむかしおほえてやつれたるに　弄須磨のむかしおほえて也其折ふしやつれたる車なとありし事なり　或弄の義に同し但是はたゝ昔忍ひありきし給ひし時を思ひ出たるといふにや云々　私昔

の恐ひおりきの體然へし
あやしくいかやうに　秘朧月夜の詞　源のわたり給はん事いまさらあるましき事との給ひつる物をいつみの守の何と申たるそと朧のおとろくなり
おか(もイ)しやかにてかへしたてまつらん　和泉守のおしかへし申詞なり
御とふらひなと　御山こもりのとふらひなり
さらに昔のあるましき　源の詞也あるましき事とは風流めきたる事なり
なけく〳〵　朧のさまなり
されはよ　源の心なり朧月夜のちとかろ〳〵しきさま也秘　私云されはよと前の詞にいにしへわりなかりし世にさへ心かはし給ひし物をとありさおはして只今おしてわたり給へは案のことく如此と也
ひんかしのたいなりけり　朧の源にあひ給ふ所二條のおとゝの東對なり
みさうしのしりはかためたれは　障子をほそくあけて人のとほらぬほとにしてしりさしをしたる心なるへし
いとわかやかなる　秘源の詞也　わかき時の風流かましきやうなる體かなとなり
玉藻にあそふをしの聲々　後「春の池の玉藻にあそふ鴛鳥のあしのいとなき戀もする哉　春の池の玉もにあそふ鴛を鴛にかきかへたる面白し弄
うつり行世かなと　二條の相國の榮花の時をおもひ給ふなり
平仲(ヘイチウ)かまねならねと　弄問云仲の字にごりてよむ歟　一勘合點　河平仲定文女にことに心さしあるよしをみえんとて硯のかめに水を入てもちて目をぬらしてなくまねをしけるをいへり在末摘花巻　弄そらなきなとすといへりまねならねとはそらなきにあらすといへり聞
むかしにかはりておとな〳〵しく　源の口にてはおとな〳〵しくの給ひなから御心はさもなきとなり
これをかくてやとひきうこかし給ふ　花障子を引あけんとする心なり
源氏年月を中にへたてゝあふさかのさもせきかたくおつるなみたか　秘此障子を相坂によせたり涙かとは涙哉なり聞
返朧なみたのみせきとめかたき清水にてゆきあふみちは

はやくたえにき　河「もる人のありとはきけと相
坂のせきもとかめぬ（とイ）わか涙かな　秘わふみちは近
江にそへ（よせイ）たり弄聞河海の引歌を載之はやくたえに
きとはもとよりたえたるとなり
さるいみしきことありし世のさわき　須磨のうつろ
ひも朧ゆゑの事となり
もとよりつしやかなる　朧の心かろきさまを評する
なり
むかしおほえたる御たいめんに　年ころよそ〳〵な
りし時は思ひはなれ給たるやうなれと今かく源と
めつらしく逢給へはえ心つよからぬとなり
あさはらけのたゝならぬ空に　時節の體を思ふへし
花はみなちりすぎて　散過なり弄
藤のえんし給ひし　花のえんの巻に此事あり
この藤にいか（よイ）にそめけん色にか　秘朧月夜の心あり
弄朧月夜によそへての給也
さしいつる日のはなやかなるにさしあひ　朝日に源
の光のはえあひたる也
さるかたにてもなとかみたてまつり　中納言君の心
なり朧月夜は源の思ひ人にてまし〳〵てもにくか
らさる物をとなり
御みやつかへにもかきりありてきはことになれ（はなれイ）給事
もなかりしを　花朧月夜の女御なとには成給はす尙
侍は過分なる職にてもなきなり
故宮の　弄太后の事なり
よからぬ世のさはき（へイ）にかる〳〵しき御名さへ　太后
の源へあたりて須磨のうつろひの事なとありしゆ
ゑに朧の悪名さへたちそひたるとなり中納言君の
心也
のこりあらせまほしき　聞中納言君の源と朧との心
中を察するなり
やう〳〵さしわかりゆくに　秘朝日をいへり花
源氏しつみしも忘れ（しらイ）ぬ物をこりすまに身もなけつへき宿
のふちなみ　河古今「こりすまに又もなき名は立ぬ
へし人にくからぬ世にしすまへ（宮イ）は貫之「さをさせ
とふかさもしれぬ淵なれはいろをは人もしらしと
そ思貫之藤を淵（しイ）によせたる例也興風集「戀しさに
身もなけつへくなくさむるつ（こイ）とにしたかふ心なら
ねは　弄須磨の心もある歟　秘昔の事も更に忘れ（しイ）
されともとなり須磨の心なり

心〻るしうみたてまつる　中納言の心なり
花のかけは猶なつかしくて　秘朧月夜の心に源を心にかけしなり弄
返朧 身をなけんふちもまことのふちならてかけじやさらにこすりまの波　源の身をなけむとよめるをことわるなり眞實身をなくへき淵ならは波のかゝるをもいとふましきにあるましき事なれは波もかけしとよめるなり弄
わかやかなる御ふるまひを心なからも　源の心にわれと思ひしるなり　秘心なからも　互にゆるさぬ事となり
せきもりのかたからぬ　河人しれぬわかかよひちの關守はよひ〳〵ことにうちもねなゝん　私朧月夜の心よからぬを關守のかたからぬといへるにや始終その心みえたり
そのかみも人よりこよなく　源の朧月夜には別して心とゝめ給ひし人そとなり　秘草子地なり
いみしく忍ひいり　秘源の御さまなり　朧よりかへり給へる時の事なり
女君さはかりならん　紫上は大かた推量し給へる也

弄紫の朧へ源の忍ひありしきし給ふを推量する也
みはなち給へらんと　紫のかまはぬ體なるを源の心くるしく思ふなり
ありしよりけに　河伊勢物語忘るらんと思ふ心のうたかひに有しよりけに物そかなしき　不及引歌又
もらすへき　紫上へはかたり給ふなり
うちわらひて　秘紫上なり
むかしをいまにあらためくはへ給ふほと　河　しつやしつしつのをたまきくりかへし昔を今になすよしもかな　私不及引歌歟あらためくはへとは源のわか〳〵しく昔になりかへり給ひてしかも昔より好色になり給へるといはんとてあらためくはへとはいへり
なかそらなる身のため　秘とにかくに我身はなかそらになるへしとなり
なみたくみ給へる　紫のさまなり
かう心やすからぬ　秘源の詞也
何こともえのこし給はす　紫上の心をとらんとてはすかたりに朧の事をありのまゝにの給ふとなり
宮の御かたにも　女三なり

ひめ宮はなにとも　女三は何心もおはせぬを御うし
ろみともの源のわたり給はねは何かととりあつか
ふとなり
わつらはしうなと　女三のかやうの嫉妬なとの給ふ
ほとならは是は一段むつかしかるへき事なれとも
おはせぬゆゑにうつくしきもてあそひくさに源の
おほすとなり
きりつほの御かたは　弄明石中宮事　十三歳歟　秘
明石姫君也十三歳なるへき歟物語の上にて總して
源の外は他人の年の沙汰かんかふるに及さるなり
めつらしきさまの　秘御懐姙なり弄
からうして　御いとまをたまはりかねたるよしなり
ひめ宮（君イ）のおはしますゝとのひんかしおもてに　秘
女三宮　まします西對の東なり　花西對のひんか
し面なり
あかしの御かた　秘實母のつき給ふなり
たいのうへ　紫上なり
姫宮（君イ）にも中のとあけて　秘女三宮にも紫上此次に對
面有へしとなり　弄紫上語也
うちゑみて　秘源なり

宮よりもあかしの君の　紫上の心也明石上をは女三
よりもはつかしく思ひ給ふなり
たいに侍る人　秘源女三宮へ申給ふ詞なり
しげいさに　秘きりつほなり
ちかつききこえ　紫上の女三へ對面の事なり
ゆるしてかたらひ給へ　女三を執して源のゝ給ふな
り
心なとはいとよき人なり　紫のさまを女三へ源のか
たり給ふなり
はつかしくこそは　秘女三の御返事なり
人のいらへはことにしたかひて　私源の詞也人の何
事をか云へきその返答とてかねてはをしへかたき
事となり
御なかうるはしうてすくし給へと　此對面の事を註
釋していへり
何心もなき　秘源の心なり　女三の何心もなきさま
を紫上のみしり給へき事のはつかしきとなり　私
云女三の何心もなきさまを紫のみしり給はんは
つかしけれとも始終御中もよく隔心なくあれかし
と覺して對面あらせ給ふとなり草子地さもいふへ

にや
さのみ給(イナシ)はんを　紫上の思ひよりての給をかへさい
の給ふへきもいかゝとおほすなり
われより上の人やは有へき　花紫上のとしのまさり
給へる事をの給ふなり　秘紫上は式部卿宮ノ御女
なり我身をは随分と思ひ給ひしなり　私此義可然
花鳥の説如何　私源氏のあまたとりおき給へる中
に今までは我より上の人はなかりし物をとなるへ
し
身のほとのはかなきさまを　秘本式の嫁娶の儀なき
をくちをしとなり聞　弄紫上の宮の御子なりされ
とうしろみなとはかはかしからさりしをいふ也
私本式に嫁娶の礼(私イ)なく紫上なとの様なるをは野合(ヤカウ)
と云此義秘の説然へし
おのつからふることも物おもはしき　秘怨者(エンナルモノハ)其吟(ソノキン)
悲(カナシム)　自然の理なり
院わたり給ひて　源なり　此巻にもおとゝとも院と
もかけり
女(宮女御君イ)　明石中宮　女御の君　女三宮　桐壷女御明石中
宮なり　秘宮女御なとのわかくうつくしきめうつ
しにも紫上猶たくひなくみえ給ふはいかはかりよ
き人なるらんとなり
あるへきかきりけたかう　是より紫のすくれたるさ
まを云なり源の心中に思ひ給ふなり
手などのいとわさも上すとみえて　聞みえて濁へ
しとわさとめかすよき手と云なり
身(紫上)にちかく秋やきぬらんみるまゝにあをはの山もう
つろひにけり　我身の人の秋にあひぬるよしなりあ
をはの山名所にてはあらさる歟夢の浮橋巻にもゐ
り夏山をいへる也こゝも其類なるへし又名所にも
あるにや　私前の詞におのつからふるさとも物お(ありてもイ)
そはしきすちのみかゝるをとありてれも手ならひ
にかきすさみ給へる歌とみえたり　青葉山は若狭
にあり是は只夏山の義可然歟
めとゝめ給ひて　源の御めのとまる紫のうらみたる
心切なれはなり
水(源)とりの青羽は色もかはらぬを萩のしたこそけしき
ことなれ　河「しら露はうつしなりけり水鳥の青葉
の山の色つくみれは　青葉山童蒙抄と云物には入
若狭国名所也清輔抄には陸奥国或又尾張国とする

せり但是は夏ふかく茂りたる青葉の山を云なり
夢浮橋巻にもみえたり六帖歌も其心歟　秘源の歌
なり五文字面白し夏山は色かはる物なれとも此水
鳥の青羽はかはる事なきことくに源の心は不變な
るとなり萩の下葉は紫上の心にとりなすなり　水
鳥は池なとに見ゆる忍ゆによめる歟又青はといは
んため計歟紫上の歌をうけて青羽をよめり源氏の
かはらぬを紫上のそしりこととなるとよめり
ことにふれて　紫上の御うらみふかきとなり
あはれにおはさる　源の心也
こよひはいつかたにも　秘紫上も女三も御隙なれは
なり
かのしのひ所に　秘朧月夜なり
いとあるましき　秘心にはよく思ひしり給へとも是
世間のならひなり人のつゝしむへき所なり
春宮の御かたは　河春宮の母女御の心なり　古今に
二條后春宮の御息所とあるも春宮の母御息所なり
花明石の姫君東宮の女御なるを申なり河海に母女
御としるされたる思ひゐやまれるにや　秘明石の
姫君なり花鳥説可然春宮の女御なれはなり

實の母君よりもこの御かたをは　秘明石上なり　此
御かたは紫上なり
いとうつくしけに　明石の姫君のさまなり
おもひへたてす　秘紫上の御かたよりも思ひへたて
給はさるなり
いとをさなけに　秘女三宮のさまなり
むかしの御すち　秘紫上とはよそならさる事なり
中納言のめのと　秘女三宮の御めのとなり
おなしかさしを　紫の詞也　御親類の由なり　後撰
四「わかやとゝたのむよし野に君しいらはおなし
かさしをさしこそはせめ　女三宮の母義源氏宮　先
帝皇女紫上の姨なれはなり　私云他の抄に不レ載二此
引歌一但紫上のかくておはする六條院へうつりて
女三もひとつに住給へはわかやとゝたのむ心も面
白歟但此儀はいりほかにや如何
おこたらん事は　よろつ疎略なる事あらはこなたお
とろかし給へとなり
たのもしき御かけともに　めのとの詞なりたのもし
き御かけとは母女御朱雀院なり
かゝる御ゆるし　紫の懇なる詞をいふ也

そむき給ひしうへの　秘朱雀院もかく仰られしとなり　女三の御事をは紫をたのむと仰られしとなり
いとかたしけなかりし　秘紫上の詞也　弄朱雀院より御消息ありし事を云と也
けにいとわかう心よけなる人かなと　紫上のさまを女三の思ひ給ふ心なり
世中の人もあいなう　秘互に嫉妬の心はかならすある世中のならひなり
それにつけても又やすからす　女三のおはして紫のおほえすこしはおとらんと人の推量したるに源の懇切いよ〳〵まさる故にそれをも又やすからす人のいひたるとなり推量にちかひて紫上よりも女三の御おほえを（おイ）とりたる事を云となり
ことなはりて　世間にさま〳〵の事をいひしも此御對面の後は事なはりたるとなり
神無月にたいのうへ院の御賀にさかのみたうにて
秘源のたて給堂なり御賀の事あり　弄松風卷に見えたり　源氏たて給　延喜十三年十月十四日是日於四方賜侍藤原朝臣四十賀弄　李部王記云延長四年九月廿八日京極御息所奉仕法皇六十賀

やくしほとけくやうしたてまつり給ふ　河延長五年二月廿五日彈正尹親王爲民部卿六十賀於桃園宮設法會奉造藥師佛像奉寫藥師金剛壽命般若心經　延長七年九月十七日左大臣諸息四人共法性寺設五十賀齋會其儀本堂毗盧遮那像前安置銀藥師如來像天暦三年三月十五日右兵衛督師氏卿爲大相公貞信公七十賀於法性寺尊勝堂修法會七佛藥師像寫金字壽命經七十卷已上李部王記
ちすのとゝのへ　帙（悟イ）簀也
さいせう王經こんがうはんにやしゆみやう經なと
河最勝王經十卷題曰金光明最勝王經金剛般若一卷題曰金剛般若波羅蜜經　壽命經一卷題曰佛説一切如來金剛壽命陀羅尼經
いとゆだけき　寛なり　ゆたかにひろきなり
御だうのさま　嵯峨の御堂なり
かたへはきほひあつまり　遊覧を本として外々の人は參るも有へしとなり草子地也
御すぎやうわれも〳〵　御誦經面々の源の御いのりのためにするとなり
廿三日を御としみの日にて　弄子の日也云々廿三日御賀ゆゑある日歟正月廿三日子の日なるに御賀の

事有き 秘としみ年満なり玉かつらも正月廿三日に御賀あり源の御身にとりて子細ある日なるへし自然誕生日なとなる歟 河としみの日とは御賀試樂の日なり云々一說云御年の滿たるを拜見の心也

この院はかくすきまなく 秘六條院なり御祈は嵯峨にて有て御賀はてなたにて御遊以下の事有なるへし 弄問云たいのうへ院の御賀にさかのゝ御堂にて藥師佛供養し給ふなり此院はかくすきまなくつとひ給へるうちにわかわたくしのとのとおほす二條院にてそのまうけせさせ給二條院にては內々の事ともをおせたまふ歟御賀を二條院にておこなひ給ふにや一禪合點つとひ給とは御かた〳〵局々事うちにとは六條院はかた〳〵つとひ給ふといひ又さいはゐ二條院わたくしの所なれはとなり六條院所せきによて二條院にておこなはるゝなり宴舞樂わり嵯峨にては法事なり

御かた〳〵もさるへき事 秘花散里なとなり

たいともは人々の御つほね〳〵に 秘皆つほねをもはらひてかさり給ふなり

院司(ヰンシ) 弄六條院の院司なり

しんでんのはなちいてをれいのしつらひてらでんのいしたてたり 花承平七年十二月十七日陽成院御賀寢殿西放出第三間立螺鈿之倚子 今案業上御賀二條院にておこなはるゝよしみえたり 私云陽成院は二條院也仍如此被註之歟 弄問云倚子をたつるはいかやうの人の賀にも有へき歟 一勘 花鳥には先例等をのせ侍り人によるへき事なり主上上皇の外は不審なり

おとゝのにしの間に御そのつくゑ十二たてゝ夏冬の御よそひ御ふすまなされいのごとくむらさきのあやのおほひとも 花承平七年十二月十七日陽成院諸親王源氏爲太政大臣御賀西第一間立御衣机八前以泥繪置御服筥八合各有黑紫綾覆 清涼記院御賀事延喜十六年儲平敷御座云々机立脚納夏冬御衣五脚積雜帛各五十疋 承平四三月廿六日於常寧殿有中宮御賀帳臺東邊立二二尺御厨子六基衣筥十二合一基夏御衣六具冬五具

うちの心は 秘おほひともをしたるなるへし うちの心者なり 心葉にあらすと云々

おき物のつくゑふたつからのらのすそこのおほひ

河置物机　唐の羅の末濃の覆
かさしのたいはぢんのけそく　河沈の花足なり　秘
前にもあり老をかくす心なり例花鳥に見えたり
花嘉祥三年仁明天皇四十御賀御挿頭臺造ニ沈香山一
以レ金爲レ鶴令レ含二御挿頭華一
しげいさの御あつかり　秘桐壺也
あかしの御かた　弄うけとりてかさしのだいをさせ
給ふなり
うしろの御びやうふ四てうは式部卿の宮　秘紫上の
父宮なり
れいの四季のゑなれと　河古今に内侍のかみ右大將
藤原定國朝臣四十賀しける時に四季のゑかけるう
しろの屛風にかきたりける歌云々
せんするだん　弄壇のたん歟　秘庭の壇なと歟一
本たきとかける本あり是も可然歟　聞せんすいた
き庭を段々にみたるなり
ふたいの左右にかく人のひらはり　河平張也
ろくのからひつ四十つゝ　弄四十の賀によれり
ひつじの時はかりにがくにんまいるまんざいらくわ
うじやうなとまひて　河御記云延喜十六年三月五日

試樂吾即床子時未一尅也樂行事參議信忠朝臣等率
樂人參着座　河萬歳樂拍子二十新樂中曲長秋宮横
笛譜云本是舞七帖而今世舞五帖舞出入用調子隋煬
帝作　花延喜六年十一月十日御賀先奏萬歳樂次蘇
合香次皇麞
こまのらむしやうしてらくそんのまひいてたる　河
落蹲　南宮譜云昔善舞此曲者有伴田麿古樂小曲
權中納言右衛門督おりて　夕霧柏木なり
いりあやをはのかにまひて　河舞有聚綾手　故曰入
綾舞入なり　入あや舞のはつる本となり　聞云權
中納言衛門督もらくそんを舞たるなり舞人にくは
ゝりてまふべき歟一勘合點
いにしへの朱雀院の行幸　紅葉賀の時の事
又おとらす　夕霧柏木の源氏致仕の大臣に立つゝき
たるを云なり
つかさくらゐはやゝすゝみて　秘いにしへは源は中
將致仕大臣は頭中將なり只今は二人なから官はこ
とのほかすゝみたるなり云々
あるしの院　源氏なり
北のまん所のべたう　河今時執政の室家を北政所と

號す是は已に院號以後なり但日來執政の時北政所別當をおかれしを今もうちたえ院中の儀をふるまひ給はぬによりてもとのことくにておかれたるなり院號の後も猶おと〻といへり此心歟但紫上うるはしく本たいのよしはみえさるにや寢殿をもさるやうありてふたけ給はすとみえたり然は北政所の號か如何猶可加了見　花紫上の家司なり女房をは北方又北政所なと人によりていひかへたり紫上は大かた源氏の寶家のおほえたり北政所といはむ何事かあらんや　秘紫上を北政所と云へし皆家司なとを補する物なれはなり源は今院號を蒙り給ふはとにさはあるましき源の謙退の心にて改めすしてある義なり　弄北方のくらゐなり紫上なるへし問云別當はいかやうの人なるそや一勸別當は家司を云　又問云北政所本臺を號する歟一答執柄家攝關に任して後正室を北政所といふ始の儀式ある事なり

山きはより池のつ〻み過るほと　こ〻の體嵯峨の景氣のやうなり如何但二條院の池上のつ〻み歟

千とせをかねてあそふ鶴のけ衣　むしろ田の〳〵いつぬき川にやすむつるのいつぬき川にやすむつるの一段すむつるの〳〵ちとせをかねてそあそひあへる千とせをかねてそあそひあへる二段　席田　弄席田なり

御こと〻もは　秘樂器とも也　ともからの名物にて手ならし給器なり桐壺の帝の御代を思ひ出給ふなり

故入道の宮　秘薄雲なり　弄卅七にてかくれ給ふ也

内にも故宮の　秘薄雲なり　秘内は主上冷泉故宮は薄雲なり

ての院の御ことを　源氏なり

れいのあとあるさまのかしてまり　天子も父へは朝覲とて行幸の事あり源は忍ひたる事なれはさやうの事もなきを冷泉の口をしくおほすなり仍御賀にかこつけて行幸あらんとおほすなり

世中のわつらひとならん事　河吾君不遊有深意一人出兮不容易六宮從兮百司備八十一車千萬騎朝有宴飲暮有賜中人之産數百家未足充君一日費　白氏文集驪宮高

いなひ申給ふ事　行幸の事を源の辭退し給ふなり

しはすの廿日あまり中宮まかてさせ給ひて　中宮は

秋好なり　聞源の御賀をし給ふ也　御記云延喜十六年十二月廿一日中務卿親王奉爲院御算賀奉寫壽命經此日於仁和寺設法會　私云玉鬘尙侍紫上兩度の御賀正月も十月も何れも廿三日なりもし源氏につけて故ある日かと秘にのせられたりそのことくもし故ある日は是も十二月廿三日歟それを廿日あまりとかけるにや

ことしのゝこり　當年中の殘りを祈るなり

ならの京の七大寺に御すきやうの爲の布四十たんは

ちかき宮此四十寺にきぬ四百疋　花李部王記云延長四年十二月十九日內裏奉修六條院御六十御賀誦經王城七大寺合布六千端進京七寺絹六百疋則於朱雀獄賑給初欲依例奉仕御賀然自彼院有御消息停止如故是而已耳　御記延長四年十二月十九日壬寅此日奉爲太上皇息災增寶壽於京邊七ヶ寺南京七大寺東大寺興福元興大安藥師西大法隆御誦經事其布施用絹六百疋布六千端云々　貞觀十三年遣使於邊京四十ヶ寺平城四十ヶ寺修轉經功德錢寺別有數賀皇太后四十算也　花延長二年天子四十算布四千端十三大寺諷誦を修せらる承平四年三月中宮御賀七大寺東西延曆極樂寺等有誦經其布施東大安藥太奉云師延曆寺各五百端西大法隆東西極樂寺各四百端爲中宮災息天延命也　四十寺　弄に有例　弄閒百近き都の四十寺は寺の有所定れるにや一揔大略殘る寺有るへからさるなり定たる所なり

ありかたき御はくゝみを　秘中宮の御心のうちなり

ちゝみやはゝみやすん所の　弄源氏の御賀をさせ給ふへきをとなり　秘二親のを御沙汰なかりし念なさをいま源の御ためにとりそへてさたあるへしとなり　聞又の義秋好の二親とも源をたのみてかく成給へれは其心さしのふかき事に親への志をとり添たると云なり　私云秘義然へし弄の義いかゝ私云此義面白し

かうあなかちに　秘何事をも省略有へき由を源は申給へは心ならす事ともとゝめ給ふとなり

四十の賀といふ事はさき〳〵をきゝ侍るにものこりのよはひ久しきためしなんすくなかりけるを　河仁明天皇四十御賀四十一崩天曆四十二崩東三條院四十○崩右大將定國延喜六年行四十賀同年七月薨是等の事歟　昭宣公は貞觀十七年四十の賀し給て五

十七にて薨す貞信公は延喜十九年四十賀ありて七十歳にて薨すかゝる例もあれと多分につきてためしすくなきとはかけるなり　つゐ（ひイ）へをとゝめさせ給ふ心なり仁明天暦四十賀の後崩御なり　源の心はかやうにかた〳〵の沙汰を無益と思ひ給ふ故にかくいひすさめ給ふなり又命なかき例もあれと先多分につきてかくの給へり抄に見えたり

のちにたらんてとを　河五十の賀の事也

おほやけさまにて猶いかめしく　公事なれはなり

中宮の御賀は内裏よりの（おイ）とりなし事なれはかくいへり

宮のおはしますまち　秘六條院のひつしさるのまちなり　弄秋好の方なり　花中宮のおはします町は坤のもと（もとイ）の宮も修理せられて六條院へつくりこめられたる御前（所イ）なり

さき〳〵にことにかはらす　まへの御賀の時のことし

かんたちめのかつ（ろイ）くなと大饗になすらへて　秘まへまへには樂人の祿はかりこゝには中宮のなれは如此となり　河六條院の御賀を中宮のせさせ給ふなり大饗とは中宮の饗になそらへられたる歟正月二日中東二宮の大饗なとの事歟　太（后イ）公御記 承平四年十二月九日御賀みこたちかんたちめには女のよそひ宰相にはさくら色のほそなか　花正月二日二宮大饗事　西宮記云大納言白大褂二領中納言同色一領參議紅大褂一領非參議四位柳色合小褂一領五位細長一連云々延喜中宮式云親王以下大納言以上各白大褂衣二領中納言三位參議白褂衣一領非參議三位并四位參議褂衣一領五位綿一連高階[illegible]位五位各賜之　今案此御賀は中宮のせさせ給へるによりておほやけことになすらへて親王公卿以下の祿大饗の例を用らる但其色目は必しも大饗のことくにはあらさるなり右大將の北方玉かつらの御賀紫上の御賀には祿のさたはなきなり　弄湖云河海に大饗とは中宮の饗になすらへられたるなり云々中宮東宮二宮の大饗はいかやうの時おこなはるゝ事そ　一答中宮春宮の大饗は二宮の大饗といひて毎年正月二日に大内の北の玄輝門の東の腋にて東宮の饗あり同門の西にて中宮の饗あり其事河海にひかれたるなり

てしざし　腰差　匹絹にて卷なから腰にさす故なり

御さうぞくかぎりなく　是は源のための御さうぞく
なり
名たかき御おひ　石帯なり　河高名録云　韓狩　落
花形　垂無生角なり　鵝形　雲形　鶴通天　鴛通天
故前坊の　秘中宮の父宮なり
ふるき世の一の物と　秘私云かくのことくつけたり
むかし物かたりにゐ物えさせたるをこそ　秘草子の
地なり　弄問何事をひきてかけるぞや一揃花鳥に
大概しるせり　七大寺四十寺なとへ御誦經物功徳
錢を施入せられ又延長四年六條院の御賀には朱雀
の獄にて賑給の事ありとこれらの事を思ひて物か
たりに書けり河海にのせられたる史記孟子は今い
ふ事にはわはぬ事なり不可用之　河孝經曰明君之
政設利以致之又曰愛利倶行衆乃悅史記曰堯之賜舜
絺イ絺衣與琴爲築倉廩予牛羊五帝本紀以下略之
内にはおほしそめてし　主上には行幸もなかりし事
を御心の外におほしめしたる事なり
中納言にもつけさせ　そイ清秘に如此なり　用意し給へるをむなしくし給
ふへきにあらされは夕霧にゆづり給へるなり　弄
源氏辭し給ふによて夕霧に仰つけられけるとなり

行幸なとなき事なり闕同
その頃の右大將やまひしてしゝ給ひけるを　秘系圖
になし弄同　大納言安部安仁　天安二十一十七依
病辭右大將同三四廿三薨　大納言藤原通明　延喜
十月三日辭樋大將勅使帶劔同廿年六年十七日薨イ
十九八十二依病上表十月廿八日勅使
この中納言に　秘大將の闕あるによりて夕霧を大將
にとおぼすなり
院もよろこひ　源なり
いちはやき　最強也物のすみやかなる心なり此所に
よくかなへり又最早にても有へき歟　私御賀のほ
とよろこひ　こはへん（ひくわんイ）とは内裏よりの御賀を夕霧に
仰付られて則大將になさせ給へるとなり
うしとらのまちに御しつらひまうけ給ひて　秘花ち
る里の御かたなり弄　此御賀は夕霧の右大將花ち
る里の住給へるうしとらのまちのしん殿にてとり
行はせたるなり
けふは猶かたこさに　秘内より御沙汰の御賀なる故
にいへり
所々のきやう　河所々饗也内裏よりおこなはるゝ御
賀は必内藏寮穀倉院なとより饗とんしきの事をは

沙汰をいたすなり則藏人頭宣旨を書き下す定れる事なり
中將せんしうけ給はりて　秘　藏人方の沙汰なり　河新儀式云藏人頭奉仰先書出可造仕御調度等用途物召内藏寮穀倉院天皇奉賀上皇御算儀也中宮此儀をうつさるゝなり　私中宮の沙汰不審猶前の秋好の御賀と思ひあやまれるなり
左右のおとゝ　弄かくのことくつけたり　公卿正眞太政大臣左右大臣各一人大納言二人中納言三人參議八人合十六人見寛平遺誡
殿上人は内春宮院殘はすくなし　花　殿上人は禁中にかきらす院の殿上人春宮の殿上人なとゝてその所所にゆるされて昇殿する事ありおのつからその中にかねたる事も有へし院にて昇殿したりとも内裏にていまた昇殿せすは殿上の役にしたかふ事はかなはぬ事なり　秘　花鳥にみえたり
おましの御てうとともなとはおほきおとゝ　致仕太政大臣御座調度の事をはうけ給り給へるなり
けふはおほせ事ありて　秘　内よりの仰事なり　私此前々の御賀には致仕大臣はおはせすけふは別勅にて致仕の太政大臣もおはせしとなり
もやの御ざにむかひておとゞの御座あり　源氏の對座に致仕大臣の座あるとなり
このおとゝそ今さかりのしうとくとは　河　宿徳也　致仕大臣のさまなりしうとくは宿徳なりよきころにとしおとなしやかなる體也
内の御てかゝせ給へる　弄　主上宸筆の御繪なり　追聞書云歌與繪歟私不定聞同之　秘　宸筆をそめ給へるなり　私云したゑのさまとあれは宸筆　歌なとゑそはしたるなりとみえたりうすたんはうすたみなりと河海にあり　河　絹屏風を唐綾にてはりたる歟或云うすだんはうすたみ歟　新儀式云母屋四間副北障子立淳和御手跡屏風三帖御帳東立同屏風一帖御賀天皇御算所　延長七年三月廿八日太后御記曰おとゝの御賀を菅頼の中將つかうまつれり四尺の屏風二よろひ御てをうへにかゝせてたてまつらせ給ふ　拾遺集右大將定國四十の賀に内より屏風調してたまひけると云々
からゐやのうすたん　屏風のおもてなり
春秋のつくりゑなともての御屏風のすみつきのかゝ

やくさまはめもおよはす思ひなしさ（出イ）へめてたくなむ
ありける　私云餘の屏風におもしろき春秋の繪なと
かけるも此屏風に主上の歌なとかゝせ給へる墨つ
きにはならへかたしと思ひ給ふにや如何
おき物のみつしひき物ふさ物　河清涼殿置物御厨子
置樣孝道記　北第一階無置物第二階右笙箱拍子左琵琶玄上華蘂第
三階箏第四階和琴　打物をは南にをくへし先鞨鼓
大笛横笛次太鼓次鉦鼓拍笛拍子
御むま四十疋左右のむまつかさ六衛府の官人かみよ
りつかさ〳〵にひきとゝのふる日くれはてぬ　秘上
より給はる御馬なり例花鳥に見えたり　花延長二
年正月廿五日自宇多院被奉若菜於内裏院引出物御
馬四十疋入自月華門藏人大夫退出近衛騎之次召馬寮給之内竪奉上宣召馬頭等右從之左代
西頭西面作之　今案延長の御賀の御馬四十疋は院より參ら
せらるゝによりて院の御馬やのとねり是をひきて
内裏にては近衛のわたすを御覽ありて馬寮の官人
をめして是を給ふ此物語の御馬は内裏よりひかせ
らるゝによりて左右の馬つかさは六府の官人なと
これをひく延喜十六年三月の法皇（冷泉イ）の御賀に御馬十
疋内裏より引るゝ時此定なり時にしたかひ事によ

りてかはることとなるへし　河六衛府左右近衛府左右兵衛府左右衛門府
延喜十六年三月七日御賀日（御イ）記曰左右少將諸衛左馬（寮イ）
助等引御馬十疋奉覽　延長二年正月廿五日同御記
云左右大臣起座院御馬被奉入仰令早牽大臣稱唯下
殿仰之即分御馬三十疋入自日（月イ）華門時酉一剋　弄問
云御馬をひくは六條院へ内より給はり給ふ義なり
如何六衛府をはゑふとよむ歟答花鳥にのせ侍り
萬歳樂賀王恩なといふ　河賀王恩大饗（食イ）調曲拍子十六可彈五反合拍子八十新樂南呂諸云古樂中曲舞出入用拍子　延喜六年　同十六年御賀共に賀王恩
萬歳樂等有由御記にみえたり　弄此外舞とも猶有へ
けれともめてたき樂なるによて此二つをいへりい
つれも御賀にたよりある舞なり但御遊をいそかる
るにて舞はけしきはかりのよしみえたり　秘此外
に樂あまた有へしされさ縁あるはかりを（ヨロコフト）あけてか
けるなるへし　聞賀王の恩は王恩を賀云義なり云
々如何
けしきはかりまひて　秘舞を略して御前の御遊にな
れるなり
びはゝ（北西イ）れいの兵部卿宮　弄螢宮なり

おまへにきんの御こと　源氏は琴をひき給ふなり
ふと〻わごん　致仕大臣和琴なりいつれも各の得給へる物をひき給ふなり
か〻る御なからひにいつかたにつけても　源氏と致任とははなれぬ間なれはなり
御をくり物にすくれたるわこんひとつこのみ給こま（笛イ）とそへてしたんのはこ（はこにイ）一よろひにからのほんともこのさうのほんなといれて御車にをひてたてまつれ給ふ　河からの本は唐手本なり　奥書云西湯（陽イ）王大鈞字仁傳年七歳高祖重之賜王義之書一巻　延喜十六年御賀之時内の御引出物嵯峨御手跡一裴琴和琴各一面一枚云々　又延長御賀横笛琴箏和琴次第取一物各有其袋笛着松枝同御引出物也見御記　太后日記承平四年十二月九日御賀おと〻はとくまかて給ぬ御をくり物沉の箱一よろひいれたりせんたいの御ての萬葉集とひとつ（ひとつにはイ）本五まきやまとこと一云々
秘（こイ）こかのさうのほんは手本なるへし　延長二年十二月廿一日中宮奉仕内裏御賀李部王記宴酣左大臣（既イ）奉一兩大夫自中宮御方執樂器（猶イ）於又廂當御座隗大臣箏一執北邊大臣清和御時壽（清和七合也承和御時綮談之）献箏春鶯囀付木枝　次八條中納言執琵琶次琴箏和琴式部卿親王問之大臣奏曰后宮（奉イ）貞大臣請（語イ）以次稱名　承平四年三月九日奉仕中宮御賀貞信公記不及祿退出追給祿並手跡和琴箏本萬葉集々笛二合令接延長二年の御賀の御引出物は中宮より内裏へ參らせらる〻色目を李部王記にしるされたり今の物語は致仕の太政大臣に六條院よりの引出物なり延長の例にはおなしからさるへし　承平四年の中宮の御賀は貞信公（于時攝政左大臣）是を献せらる攝政は人々祿を給ひ（はる先イ）きに早出有しかはおつて中宮より祿と引出物と和琴萬葉集の本なとをたまはり給ふその子細は太后の御日記にもみえたり此例今の物語にはいさ〻か似よりたるといふへきにや
御むまともむかへとりて右のつかさともこまの樂してのゝしる　河延長二年正月廿五日（正月五日イ）御賀御記御馬引出て後主殿寮炬雅樂寮入自日華月華南門東西相立承明門前時西三剋遲奏舞曲唐高麗各二曲夕霧右大將なれは右馬寮の御監也　弄問御馬をむかへとるとは祿を給へるにや右のつかさ高麗のかくしてとは右の樂人の事也一勘むかへとるとは内よりひ

かれたる馬をうけとる事なり
ゑふ（ヨウトイフヤウニヨム）の官人のろくとも　大將より給はるなり
內春宮一院　弄一條は朱雀なり　祕一條は朱雀なり
いつれも源をはなれ給はぬ御中なりとなり
きさいのみや　秋好中宮なり
大將のたゝひとり　源の男子の夕霧より外にはなきをいへり
かたはらなきやうに　傍若無人なりならふ人なしといふなり
かのはゝ北のかたいせの宮すん所との　秋好夕霧にさいはひあり彼母たちのいとみのゆくへなしとなり　葵上と六條御息所となりされとも其御末々は猶繁昌あるとなり　藥師云彼車あらそひの昔は葵上は權勢ならひなかりしかと今夕霧はたゝ人なり中宮はしな高くなりてさかえ給へる事となり
その日の御さうそくともなとこなたのうへ　祕花散里なり弄同
三條の北のかた　祕雲井の鴈なり
こなたにたゝよその事にのみ　祕花散里なり夕霧を子のことくにし給へるによりて今日の事の數に入給ふとなり花ちる里の事なり
としかへりぬ　祕源四十一歲なり　花源氏四十一のとしなるへし
きりつほの御かたちかつき給へるにより　御産ちかきとなり
ゆゝしきことをみ給ひてしか（なイ）は　祕いまく～しき也葵上の事なり花弄
まだいとあえかなる　明石姬君十四歲歟花同
所をかへて　河榮花物語に上東門院おなしやうなれは所をかへさせ給ふとなり　祕物のけの故なり
あかしの御まちの中のたいに　弄北のたいなり　祕明石上のすみ給ふまちなり　私弄に北のたいといへる不審也
こなたはたゝおほきなるたい　北のまちの體なり此內に寢殿はなくて對はかりといふ成へし
はゝ君この時に　祕明石の上なり
かの大あまきみも　祕明石の上の母なり
ほけ人にて　年のよりほれたるさまなり
この御ありさまを　三歲以後はしめて姬君をみたてまつるなり

むかしの事なとまほにしも　明石上は姫君へ昔かたりなともありのまゝには申給はねはよくしり給はぬなり

あやしくむつかしき人かなと　明石姫君の心に大尼公をかくおほしけるとなり

むまれ給ひし　姫君明石にて誕生の事

いまはかきりかはかりの契にこそ　源御歸京の時明石上との契りを今はかきりそと思ひしに姫君生れ給へるゆゑにかくておはするといふなり

けにあはれなりける　姫君の御心のうちなり

心のうちには　これも姫君の御心中なり

うけはりて　族姓なとの理運に結構なる身にはあらす紫上の御子たるゆゑにこそと思ひしり給ふなり

身をは又なき物に　くはしくしらぬほとは我にならふ人あらしよと思ひしとなり中宮の御心奇特なり

世の人は　私弄にかくのことし

いとあまりおほとき給へる　秘草子の地なり　私母君をはもとより（イナシ）といふより此一段草子の地なるへし

かの入道の　明石の入道なり

仙人の（センニン）　私弄にかくのことし

おもひみたれ給ひぬ　明石の姫君の御心なり

御かたまゐり給ひて　秘明石のうへなり

日中（ニッチウ）の御かぢ　秘かくのことしあかしの上の詞也

みしかき御木丁　ちひさき木丁なり

くすしなとやうのさまして　秘醫者なとこそかやうにしてはさふらへとなり　花やとり木の巻にくすしなとのつらにてもみすのうちにはさふらふましくやはとあり

あなみくるし

よしめきそして（由）　河存してなり　秘年よりたれとよしめきすくしたるなり殺の字なり　河海の説いかゝ聞

あなとかたふき　もう〳〵には耄の心歟あなとは耳のおほろにて聞えかねたる體なり

いとかはらかに　秘さはやかなといふ詞なり

むかし思ひ出たる　尼公のなきたる體なとに明石上の心つきたるなり

むねつふれて　聞明石上のいかなる事をか申されつらんとあやふく思ふとなり

こたいのひかことゝも　明石上の詞
いてまうてまつらんはや　弄はやと聲をさしたり是
は者哉と云詞なりはやすみてよむへし
いとなまめかしく　明石の姫の君のさまなり
わか子ともおほえ給はす　明石上の心ねとも思はれ
すかたしけなきさまとなり
いまはかはかりと　秘委しき事をは御身の位も定り
て申へきと思ひし物をとなり
くちつきなとはみくるしくひろこりたれと　聞齒の
透ては口のひろこるなり
ひそみ　嚬又潜也なく時は眉の間のあつまるをひそ
むといふ實も其心歟又明石の上なと色々にの給へ
はひそまり居る心歟此時は潜の字の心なるへし
あなかたはらいたと　秘さふらう人々の思へるなり
私此次の詞にきゝもいれすとあれは前のひそみは
泣躰歟
尼公おいの波かひあるうらに立いてゝしほたるゝあまを
たれかとかめん　秘さすかに人もとかむへきと思へ
るなるへし　同歌心あらは也
昔の世にもかやうなるふる人はつみゆるされて　河
嫺イ
浩々國老[父]兄文選あり
返明石姫君しほたるゝあまを波ちのしるへにてたつねもみはや
はまのとまやを　姫君の御歌くはしき事はけふ此尼
君の申給にはしめてしり給へるなり　私くはしく
けふ聞給ひて入道の住らん所をたつねもみはやさ
成へし
明石上世をすてゝあかしのうらにすむ人も心のやみははる
けしもせし　弄あかしは明らかなる心によめり
秘入道の事なり明石は明なるかたによめり心は明
なる方に有へしされとも子を思ふ道ははれかたか
るへしとなり
わかれけむ曉の事も夢のうちにおほし出られぬを
花是は明石の上の入道にわかれし曉の事いつとな
くとりみたしてうちわするゝやうなるをわれなか
らなさけなしと思へるなり　秘夢にもおほえ給は
さるとなり　姫君の明石の入道にわかれ給ひし時
を夢にもおほえ給はぬをくちをしくおほすとなり
花鳥の說いかゝ
をとこみこにさへ　明石中宮は今上の后東宮の母六
條院の御女母入道播摩守女　秘此御子後に森宮也

皇大后宮胤子　醍醐天皇御母内大臣高藤女母交野大領弘益女

てなたはかくれのかた　弄明石の上の方にかりにわたり給し事也

ぎしきなきやうなればわたり給ひなんとそ紫のうへもわたり給へり　源氏も宮の御産ある北の對へわたり給へり紫上もおなしくわたり給へりとなり明石上のすみ給ふかたは尼公のためによけれともせはきゆゑにあなたへわたり給はんとするなりとあり猶可決之　紫の詞に六日といふにれいのおとゝにわたり給ひぬとあり　御産當日上下着白装束九夜改白装束復尋常也九條右丞相紀曰女房等各着白裳唐衣冷泉院降誕

しろき御さうそく　紫上の躰なり産屋白き出たちなるへし九日めに改る歟

まことのおは君は　河祖母君あかしの上なり

御ゆとのゝ　うふ湯の事なり

春宮(トウクウ)の宣旨なるないしのすけそ　秘うふゆにまゐり給ふなり　弄問云内侍のすけなる人の宣旨なと號する人歟一勘宣旨は宣旨殿なとゝて今まも女房の名にもいふなり是は内侍のすけをかねたるなり

むかへゆにおりたち給へるもいとあはれに　延長四年六月一日皇后産男兒村上天皇内侍奉仕御湯大君前湯　私云むかへ湯は煎湯の事と同しとみゆうふ湯あひせたてまつる時のあひてときこえたり此むかへゆは明石上なり　河勘御湯殿同時以後(日イ)七ケ日毎日在之續書記傳明經鳴絃以下在之同記云少將伊尹之乳母大和奉仕御湯殿依此女能知此道之故乎中納言室管根朝臣女奉仕御對湯

うち／＼の事もほのしりたるに　秘明石の姫君の母といひても口おしからさるとなり

ちきりことにものし給ひける人かなとみきこゆ　明石上を宣旨の見て思ふ心なり　秘此ほとのぎしきとは草子地なり

六日といふにれいのおとゝ　六條院にて明石姫君すみ給ふかたなり

七日の夜内よりも御うふやすない　内は主上冷泉なり春宮の御ためにはおちにておはしますこの儀式こと／＼しからん故に北のまちはせはけれは六日めに本殿へかへりうつり給へるなるへし　花延長元

年七月廿日朱雀院御誕生七日の御うふやしなひ内
裏よりせらる同四年六月一日村上の院御誕生七夜
の御うふやしなひも内裏よりせらるこれらの例な
り御前の物は板木や（の小イ）に臺盤六前に銀の筥馬頭盤や
うの物をすうる也うちきならひにきぬ綿布碁手錢
五十貫或三十貫等色々あり參入の人々には女の裝
束以下人によりてこれを給ふそれに御うふきぬ一
かさねむつき一かさねなとそへて給ふ事也　碁手（コテ）
の錢（ゼニ）產所に碁を用る事仙境に翫ふ故に祝したる故（イナシ）
歟云々河新儀式云皇后有御產事先年遣使被奉問之
七夜仰内藏寮令設饗膳
朱雀院のかく世をすてさせ給へる御かはりにや藏人
所より頭辨　朱雀院より有へき事なれと御隱遁たる
によりて也　延長元承平御門御誕生の時父みかと
御うふやしなひ有しなり　天慶の御時もありき今
は内より朱雀院の御かはりにさせ給ひしなり問云
藏人所より如何　一勘頭辨（或イ）の宣旨をうけたまはる
藏人方へ仰す　有賜祿式殼倉院役屯倉等なり女御
更衣產所七夜遣使賜物
おほやけ事にはたちまさりて　秘中宮よりもし給へ
る故に何事もきらをつくしたり公義はかきりあれ
はさもなき物なり
れいのやうにもことそかせ給はて　源の性儉約を專
にする事前の賀の文にみえたりされと此御產には
物を省略し給はぬとなり花の義なりさるほとに内
々のこまかなるうつくしき事はめにもたゝすして
もらしたるとなり
おとゝの君もわか宮をほとなくいたき奉り給て　河
源氏院號後のなれとも猶日ころ申つけたるまゝに
いふなり殿の心なり此物語の中如此事おほし載先
（時歟イ）假託
大將のわきたまうけたなるを　上古の風大樣なるな
り弄
物をひきのふるやうに　むかしの物かたりにおほく
かけるなり
にくらかにもうけはらぬなと　弄明石上をほめたり
みえかはし給ひて（とイ）　秘紫上と明石上となり弄
宮の御とくに　わか宮なり　秘心のへたても今はな
しとなり
あまがつ　三歳まてこれを用ふよろつの凶事をこれ

にほすなり　はうこのやうにつくれる物なり
御てつから　紫上なり
つくりそゝくり　手まき(さまイ)くりなとの類なり
わか宮をえ心のとかに　弄明石の尼の中宮をえ見奉らぬ也　同誕生の宮の事歟明石の姫君女御歟云々
私生れ給へる宮の事成へし姫君はいまた中宮ならぬ宮とは申へからす猶又若宮と云ん事いかゝ
かのあかしにも　入道前播磨守なり
あしこにこもりなん後　あそこといふ詞也
うつろひける　明石入道山ふかく入て住しよしなり
思ひはなるゝ世のとちめ　秘獲麟(クワクリン)の一句なり
此さしころは　秘是より文の詞也弄同
めのいとまいりて　是はみる人目のひま入となり
念佛もけたいするやうにやくなくて　是はかんな文かく時入道の念佛懈怠するなるへしやくなくは無益なり
六時のつとめ　入道のおこなひなり
わがおもと　明石上なり
うまれたまはむとせしそのとしの二月(キサラキ)のその夜の夢にみしやうみつからすみの山を右の手にさゝけたり

山の右右(サウ)聞書如此より月日の光さやかにさしいてゝ世をてらすみつからは山のしたのかけにかくれてその光にあたらす山をはひろき海にうかへおきてちひさき舟にのりてにしのかたをさしてこきゆくとなん見侍し
秘すみの山須彌の山なり花鳥に過去因果經をひろる妙なり　王道のひろき心なり右の手にわかし上をまうけたる也女なれは右也月日の光は月は明石の姫君日は今の若宮也みつからは山のしもは入道は世間に心なき故に恩光にあたらさる也山をは廣き海には四海を掌に入給ふ心なり　弄春宮の四海をたもち給ふへきなりちひさき舟にのりて般若の(もイ)舟に棹さして彼岸にいたるへきなり　花鳥の義尤可然也　同俗云夢の事不可勝計　私此義弄皆同仍別に不註之　河拾遺記云帝供之常夢吞日則生子
帝皇年代暦云晉懷帝時前趙州聰字玄明張氏夢日入懷十五月生聰　日月夢の事推古天皇元年癸丑正月に法興寺を立四月に厩戸豐聰耳皇子を立て爲皇太子萬機悉委ぬ内外博達也始て四天王寺を建立二年甲寅三寶を興隆して寺を競造る六月十五日夜御夢想云頂上寶冠を着し給へる無心の俗形おはします

大寶蓮花の上に安座し給て左右の手の上に日月輪を差上て光明を放ち給ふ黄金白銀の七寶の城廓有是皇子所住城と宣ふすなはち告給はく汝寺ともに三寶を興隆し（具濟イ）天照太神崇祭奉まつるへし云々御夢さめて後則夜半に上宮太子を迎へたてまつりて此由をかたり申給太子大に驚畏て月讀明神の昔祭所を尋て七ヶ國の内七十郡を點定して御厨に（ニイ）奉寄せしめ給と云々見懐中抄　榮花物語云一位新發意皇后宮定子による忍ひて參て御物語きこゆる中御祈つかうまつりてねて待し夢にをとてみこ生れ給はんと思ふゆめをみて待しかは云々　雖（強イ）爲吉夢非其人不幸事　大鏡云九條殿御夢に朱雀門の前にて左右の足を東西の大宮へさしやりて北面して内裏をいたゝきたりとみたるを仰ありけれは御前になまさかしき女房の有けるかいかに御またのいたくわたらせ給やらんとあはせたりける此ゆゑにや御子孫さかえましませとも其御身は終に攝政關白はし給はさりけり　花　過現因果經云至二普光佛一（乃然異灯之名）出二興スルニ于世一ニ爾時善慧仙人因アリチ與二五百外道一論議破其異見時五百人求爲弟子各以銀錢一枚上之善慧聞佛（佛書與人イ）出興今灯照王迎請供養擊鼓唱令國内名花皆不得買悉以輸王善慧聞已大懊惱欲訪花所忽遇瞿夷持花七莖畏王制令藏着瓶中善慧至誠感花踊上追叫就置此女答言當送内宮欲以上佛不可得也善慧告言五百銀錢雇五莖花瞿夷問云欲花何用善慧答言爲欲以獻佛瞿夷又問獻佛何爲善慧答言爲欲成就一切種智度脱衆生瞿夷答言今此男子乃爾忠誠不惜錢寶即語之曰我今當以此花相與願我生々常爲君妻善慧答言我修梵行求無爲道不得相許生死之縁瞿夷即言我不從我願花不可得善慧又曰汝若決定不與我花當從汝願我好布施不逆人意（イナシ）惠若使有來從我求毛頭目髓腦及與妻子汝莫生嫌（一イ）懐吾施心瞿夷答言敬從來命今我女弱不能得前併寄二花以獻於佛使我生々不告此願好醜不離必當心中令佛知之時灯照王領諸官庶持妙香花種々（諸々イ）供具出城迎佛王臣禮敬散獻名花々悉墮地善惠見諸人衆供養畢已諦觀如來相好之容欲滿種智度衆生故即散五花皆住空中（化イ）他成花臺後散二莖亦上於空爾時王民龍天八部見此奇（特イ）持歎未曾有レ於是普光如來讃曰テ善哉汝以テ是行ヲ過二僧祇劫一當レ得メ二成佛一號曰ハ釋迦牟尼既授記已佛經行處而地濁善惠即脱所着鹿之皮衣以用布地解髮覆已佛踐而度（イナシ）復（復イ）記之曰汝後得

佛當於五濁惡世度諸人天不以爲難必如我也是時善惠投佛出家白言世尊我昨得此五種奇夢一者夢レ臥二大海一二者夢レ枕二須彌一三者夢三諸衆生入二我身內一四者夢三手執レ日五者夢手執レ月唯願世尊爲レ我解脫普光答曰夢臥レ海者汝在生死大海之中夢レ枕二須彌一者出二於生死一夢三諸衆生入二身內一者爲レ彼作二歸依所一夢執レ日者智光普照夢執レ月者清涼度レ生令レ離二熱惱一此夢因緣是汝將來成佛之相善惠聞已不レ勝二踊躍一（大藏經辭字函）　今案內典外典に夢をとける事おほしといへとも此物語に云る所は善惠仙人の五種の奇夢をとけるにすこしもたかふ所なし但其心はかはれる事も有へしまつ須彌と云梵語には蘇迷盧山唐には妙高山と云四室（寶イ）をもてつくれるによて妙といふ地に入事八萬由旬地を出事八萬由旬合十六萬由旬の由なるによて高とはなつくるなり東西南北に四洲あり日月に山の半腹をめくりて晝夜をてらすといへるむかしの入道の夢は明石上の生れんとする夜の夢といへりしはらくこれをあはせていかゝ須彌の山は山におきてはうへなき山なり右の手にさゝくるといふは女をは右につかさとれは明石上をいふなるへし山の左より月日のさし出たるは月は中宮日は東宮にたとふれは明石上の御女中宮に立て孫は東宮を生給ふへき瑞なりみつからは山のしたにかくれてその光にあたらぬといふは明石の入道世をのかれて榮花をむさほるこゝろなけれはかの御聽（德イ）をみさるをひかりにあたらぬとはいへりやまをはひろき海にうかへおくとは東宮つひに御位につきたまひて四海を掌に握りまたふへきこゝろなり我身はちひさき舟にのりて西をさして行は入道般若の舟に棹さして生死の海をわたりて西方極樂の岸にいたるへきにたとふ現當二世の願望成就してめてたき瑞夢なり善惠仙人の夢に須彌日月をみ給へる事は普光佛一々にこれをあはせ給へりすこふるその心相違せりさいへとも各そのねかひもとむる所の成就せる事は世間出世の利益異なりといへともなそらへて是を思ふへき也　又玄奘三藏は渡天の前に須彌の海中にあるを夢にみ給ふと慈恩（承忍イ）傳にあり又夢に日月を呑とみるは必貴子を生ともいへり夢は無明薰習のなす所といへとも佛もおほへ（くイ）夢をもてたとへとして法を說給へり故に此

つきの詞は内教(ナイケウ)の心を尋る中にも夢を信すへき事おほく侍といへりしらす此物語の作者も善悪の五種の夢をふくみてかけるにや侍らんいまに此物語の諸抄にひきのせさる事おほつかなし
ぞくのかたのふみ　俗書外典なるへし
又内教の心を　是は内典とて佛法の敎學なり　周禮六夢中有正夢無風雨之夜無憂喜醒之時分明爲正夢又訖栗枳王十夢あり夢存橋卷に註すへし　凡經論に夢を信すへきと不可勝計　淨土祖師善導和尚觀經疏にも夢をもて證定とせり　律宗の好相などもおほくは夢を本とせり　又佛本行集(法イ)經云摩耶夫人白象右の脇に入と夢に見給淨飯王占(巨イ)夢の婆羅門を召てとひしかは若(若イ)母人夢見白象入右脇彼母所生子三界無極尊云々
かゝる道におもむき　明かゝる道におもむきとは明石上生れて後に播磨國へ任におもむくなり　又明石上生れて後出家入道したる事をいふ歟如何　又此國の事にといふ次の詞をみれは任國の事歟
又此國の事に　近衞中將をすてゝ播磨守になりたる事なり

わかきみ　秘明石上の果報をたのみしとなり　私明石姫君をいふ歟
思ひのこととき（に）あひ給わか君　思ひのことく時にあふなり此わか君は明石姫君なり
くにのはゝと　河國母也　秘是は姫君の御事なり國母になり給ふへきとなり
このひとつのおもひちかき世にかなひ侍ぬれは　秘現在因を見て未來の果を知るへきなり
にしのかた十萬億の國へたてたる　河從是西方過十萬億佛土有世界名爲極樂阿彌陀經
むかふるみちに　此男一人念佛名西方使者(有イ)一蓮生但使一生常不退此花還到此間迎法照禪師五會法事讃
水くさきよき山のすゑにて　河の義略之漢書匈奴傳をひけり　花嵯峨の御代に玄賓を僧都になされし時官牒を樹にさしはさみて歌を詠して深山に入その歌に云弄同之　「とつ國は水くさきよみ事しけき都の中はすますまされり
入道 光いてんあかつき近く成にけりいまそみしよの夢かたりする　秘春宮の世をたもち給ふへき事をいへり又は入道の闇より明におもむく心もあり忘想とは

おもへとも今のかたり出るとなり弄
月日かきり(たりイ)　秘　文の日付を命日とも思ひ給へとの心
なり　弄　女の方への文なから命日としるへし
いにしへより人のそめおけるふちの衣　河　纏衣　明
石入道は弃恩入無為の心にて父子恩愛の道をたゝ
んためいにしへより人のそめける藤衣にもやつる
ましき由を遺言し侍れと釋尊猶浄飯王の金棺をか
き給ひ目連又母のため盂蘭盆をまうけ侍れは明石
上の身にあたりてはいかてか其恩を報せむ事を思
はさらんや但我をは變化の物と思ひなせといへる
を河海には四生の中の他生をいふへきとしるされ
たれと人界は勸(劫イ)初の時こそ他(化イ)生なとはありとみえ
たれいまの變化といふは佛菩薩の願力或は定力に
よりて善悪の業を感してかりにそのかたちを現す
る事有變易生死とは之を云也布袋和尚は彌勒の變
化寒山拾得は文珠普賢といふかてとし明石入道變
化の物といへるかやうにみなし然へきやらんしら
すかし
へんけの物と　河　變化　四生本化生心なり　私此前
に花鳥にしるされたる義然へし

ねかひ侍る所に　秘　安養國なり
さはゝかのきしにいたりて　婆羅世界の外なり　河
到彼岸梵波羅密　善導大師の讃に誓到彌陀安養界
還來穢國度人夫(天イ)の心なり
かのやしろに　住吉の社なり
願文(グハンモン)とも　私　聞書かくのことし
ちんのふし(ばイ)てにふんしてめて　沉文箱也　河　封箱
たゝこの月十四日になん　聞　十四日といふへき事な
り　稱名義云々　私曰近代に及て四日をはよかと
いふ十四日廿四日をはジウシニチニジウシニチと
云々近來シ文字を忌て十四日をジウヨカ廿四日を
ニジユウヨカと云々此物語にてはジウシニチジシ
ウシニチと讀て然へき歟
くまおほかみにも施し侍りなん　熊狼　河　薩埵王子
飢虎に身を施し給し心歟　拾　「身をすてゝやまに
いりにしわれなれはくまのくら(ふらイ)はんこともしられ
す　弄
あきらかなる所にて　花　あきらかなる浄土なり
この(えイ)ふみかき給ひて三日といふに　弄　使の大徳の詞
たへたるみねに　深山なるへし絶峯なり　人もかよ

はぬみねの心歟河海にたへ（えたイ）なるみねとありて妙高
山歟と云々此義然るへからす
なにかしらも　使の大徳の自稱
いまはと世をそむき給ひしをりをかなしきとちめと
思ひ給へしかと　のこり侍りけり　のこり侍りけり
とかけるおもしろし一とせのわかれのかなしさに
つきたると思ひしに只此音つれを見侍りて思へは
猶かなしさの思ひかきりもなき物也けると也聞
ほとけにまかり申し給て　河辭也いとま申なり
施入（セニウ）し給し　入道の明石の浦の堂へ寄進なり
みなそふんし給ひて　處分なり
雲霞にましり給ひし　弄雲霞にましりてと也河海に
有引歌不用只交雲霞也
佛の御てしのさかしきひしりたにわしのみねをはた
と〳〵しからすたのみきこえなから猶たきゝつきけ
る夜のまとひはふかゝりけるを　河常在靈鷲山の心
なり佛はかりに（げイ）滅度し給へとも常住此不滅（イナシ）なりと
とかれたるなり薪つくるは佛涅槃の事なり　佛此
夜滅度如薪盡火滅之說也　佛涅槃の時三明六通の
大羅漢も擧身毛竪遍射血現涕泣盈目生大苦惱と大

經にみえたり　秘佛は常在靈鷲山なるたにも弟子
ともはかなしみ侍しに此尼君のなけきことはりな
りと也弄
御かたはみなみのおとゝに　明石上なり南のおとゝ
は明石の中宮のおはする方なり
おも〳〵しく　秘明石上なり
おほろけならては　おほろけならぬ事ならてはなり
明石上あま君のかたへわたり給ふ事もあらぬやう
におも〳〵しけれとあはれなることゝきゝ給ひて
忍ひて尼君のかたへ明石の上おはしけれはいみし
くかなしけなるさまして忍ひ尼君の給へるとな
り弄　おほろけならぬ事ならてはの心にや　如此
詞をつかふ事おほしおほろけのいのちなかさなめ
りとあるもおほろけならぬ心なりいひのこしたる
ことは成へし
けにせきとめん　尼君のかなしけなるにつけてけに
といふなり
此夢かたりをかつは行さきたのもしく　行末のたの
みつよく此夢ゆゑになりたるなり
さらはひか心にて我身をさしも有ましきさまに　年

月我身をあかめ給ひしは此夢をたのみてなりける
に又行末もたのもしきとなり　私入道の源なとむ
こにとてそ事假合ぬ事をし出して御歸京の時分なと
は明石上をもあくからし給はひか心えなると思ひ
しと今おもへは此夢にたのみをかけての事なりけ
るよとなり　これまてかくあひぬれはゆくさきは
なほ〳〵たのもしき行さきやといふなり
あま君久しくためらひて　なみたのこほるゝをとか
くしての心なり
君の御とくには　明石上をさして云
おなしはちすに　各留半坐乘花葉待我閻浮同行人
にはかにおほえぬ御事　秘源の御事なり
そむきにし世に立かへり　都をふりすてゝゐなかに
住居せしか松風卷に京へかへりたる事をそむきに
し世にたちかへりといふなり
かたつかたには　弄明石入道を思ふ心なり尼公の詞
なり
又なくちきりおき　弄心中の契をいふ也　入道の人
にゝぬひかめるやうなる心なからわかくよりたの
みならひたるとなり

御かたもいみしく　弄明石の上なり
人にすくれむ行さき　明石上詞行末の事は何とも思
はさるとなり
かすならぬ身には　秘姫君も我物なからわか（子イ）なとも
（しりイ）えし侍らぬとなり
さるへき人の御ため　秘父のためとてそ思ひしにと
なり弄　花さるへき人とは父の事なり
昨日もおとゝの君の　秘明石上のさふらひしを源氏
の御覽せしなり　弄中宮につきたてまつりて明石
上の候し事也
身ひとつはなにはかりも　明石上の身上の事にはか
まはぬなり姫君の御ためを思ふ由なり
かくそひ給ふ御ためいとおしきに　花尼公の明石上
にそひ給ふ事なり　私花鳥の義いかゝ姫君の御た
めにはかりさへなり又若宮むまれ給へはさやうの
御ためいよ〳〵身をも心にまかせぬとなり若君生
れ給へるをそひ給ふと云なるへし
あかつきにかへり　秘南のたいへ參り給ふなり　明
石上の事
わか宮はいかゝおはします　秘尼きみの詞也　生れ

給へる若宮の事なり
女御の君も　秘姫君なり　皇子降誕よりは春宮の御
息所と申へきなり（そのイ）
院もことのつゐて　秘源なり尼君の事をいつれもの
給しとなり
ゆゝしきかねてと　弄尼君はさながらへ給へとのあ
らましことなり
いかにおほす事にか　尼君をいかやうにもてなさん
とおほすはしらすとなり尼公そのほとまてとは姫
君中宮になり春宮御位につきたまひ此たひの若宮
春宮にたち給ふへき事ともなり
又うちゑみて　いやされはこそさま／＼（イナシ）　秘尼公な
りなけきし名残なきさまを又うちゑむとかく尤
おもしろし　弄悲の中の悦なり
いてやされはこそ　さきにいひつる明石上（殿イ）ゆゑにめ
てたき事にも又入道にあはすしてわかれし事なと
いへるをうけいへり尼公詞也
このふはこは　秘入道の方よりの文箱なり
宮よりとくまいり給ふへき　秘春宮より姫君にとく
参り給へとなり

めつらしき事さへそひて　弄春宮の御心をいふ花同
宮すん所は　明石姫君なりこゝにて始て御息所とか
けり后かねなる人をいふなり此物語には大略皇子
誕生以後を御息所とはいへり　弄女御よりはくた
りたるなり又不然義もある歟云々　聞云皇子出来
させ給ふて後は御息所と號する事にや一答東宮の
御時きさきかねをは御息所と申なり　古今集一巻
二條后をは東宮の御息所と申に同しきなり御子の
ありなしにはよらす
こり給ひて　御いとまの出かたきに姫君のこり給ふ
也
ほとなき（なかきイ）御身　姫君の今度御産の事なり
つくろひて　今すこし養生なとし給ひてといふ歟た
めらひかたくとはいまたもとのまゝになり給はぬ
御かたなとは　明石上
事を心をやりてかけり
たいのうへなとのわたり給ぬる　秘紫なとの我御方
にわたり給ひて人すくなゝる時なり弄
おまへにまいり給ひて　秘姫君の御前なり
おもふさまさかなひはて　秘むかしの上也國母なと

に成給ての事と思へ共と也
世中さためかたけれは　我身のさためなき命なれは
只今と申なり
何事をも御心と　此一段女御の御心と物を思ひはか
り給ふまていませすは此事をしり給はし其前には
かなく明石上のなるならはたゝ人のことく必臨終
なとを御らんすへき事にてもなし只今申をくと也
いまはのとちめを　弄たゝ人のことく臨終なとを御
覧せられしとなり
あやしきあとなれと　入道の手跡の事を云
御願文　イ本に願ふみとかける如何私願ふみは願書
なり　願文（モン）とは云へからさるなり
このうちのことゝもはせさせ（たイ）給へ　願文にのせたる
願ともい（はイ）たし給へるとなり
かはかりとみたてまつりおきつれは　姫君も成人は
ありつれは我身世をそむくとも心やすしとなり
心のとかにも　明石上の心のとかならぬなり
たいのうへの御心　弄紫上の事を云
身にはこよなくまさりて　秘明石上の我身よりはま
さりて紫上を千秋萬歳と思となり　弄我身にまさ
りて祈るとなり
御身にそひきこえさせんに　姫君に明石上のそふほ
と姫君の御おもてふせなる身のほとそと卑下した
るなり
いとかうしも　紫の姫君への心さしをよそ〳〵にて
はかはかりあらんとおもはさりしとなり明石上の
見て心やすく行さきうしろやすきなり
いとおほくきこえ給ふ　これまて明石上詞
涙くみてきゝおはす　姫君のさまなり
かくむつましかるへき　秘明石上の禮ふかきさま也
このふみのこと葉　入道に似あひたる文のこと葉や
うたいなるへし
かうにいとふかく　香のしみたるなりさすかにとは
面白くかけり
いとあはれと　秘姫君なり
いんは姫君の御かたに　秘女三の宮の御かたなり
中のみさうし　此巻の前に中の戸あけてとあり
みつからははたかくれ　秘みつからは明石上なり弄
聞みつからは女御君なり　私明石上にて可然歟
わか宮はおとろき給へりや　源の詞　秘今度誕生の

若宮なり
御かた　明石上　明石上の木丁をすこし引よせてか
くろへて有なから此御返しを申給へり
たいにわたし　花紫上の東のたいに若宮をわたしき
こえ給へるよしなり紫上の御かたへ若宮をわたし
給へるとなり
いとあやしき　秘源の詞
此宮をらうし　領するなり
人やりならすきぬもみなぬらしぬきかへうちなめる
人やりならすよくかなへり
かろ〱しくなとかくわたしたてまつり給ふてなた
にわたりてこそ　秘紫上こなたへ参り給ふへき事と
なり
いとうたて思ひくまなき　秘明石上詞　人のねんこ
ろなるをおもはぬ心也
女にておはしまさんにたに　姫宮にておはしますと
あなたへわたし奉らせ給て見奉らせ給はん事何事
かは侍らんいはんやをのこみこにておはしませは
とさまへも御うしろみ有へき事なれはあなたにて
みまいらせ給こそいよ〱心やすくおほえ給ふと

なり
へたてかましき　紫へ隔心かましくはせしと源へ明
石上申給ふなり
さかしらかり　是は人の間のさかしらするとつねに
いふ義なり
うちわらひて　秘源なり
御中ともにまかせてみはなちきこゆへきなゝりな（ナンナリナ）
我身は口入すましきとなり　源詞
たれも〱さしはなち　弄へたてゝとは源をへたつ
るとの給ふなり　紫上明石上なとは結句一同して
源をいひへたて給ふとたはふるゝなり
まつはかやうにはいかくれて　はいかくれては物へ
たてたる心なりいひおとし給ふ人をいひおそれし
むる也源の給ふ事をさかしらなとゝきこえ給ふ事
をいふ也これはあかしの上の事なり　秘木丁にか
くれなから物申給ふをいへり　源の詞なり明石上
にたはふれ給ふなり源をいひおとし給ふとなり
はいかくれてとは源氏にみえ給はての給ふをいへ
り　私前にみつからははたかくれてとあり
はつかしけなるさまして　明石上の體なり

ありつるはこ　秘文箱なり
なそのはこそ　秘源の詞
あなうたていまめかしく　秘明石上なりわかく〵しく成給へる御心ならひにかやうの事をうけ給はるよとなり
なりかへらせ給ふ　源氏このころもしのひありきなとし給ふをしたに思ふなるへし　私女三の御事もてもるへし
物あはれなる御けしきとも　秘源のあやしく思ひ給ふなり　たはふれ事なと申給へるあはれなるけしきはみゆるなり
わつらはしくて　あやしみ給ふ事のわつらはしさにありのまゝに申なり
かのあかしのいはや（岩屋）より　明石上詞入道の事なりをして明石のいはやとかけり
御いのりの巻數　かやうによむへし　をこなひの眞言陀羅尼の數をかきておくへ祈禱の意趣をかきたる物なり
またゝき願　いまたはたさぬ願なり
けにあはれなるへき　秘源なり

いかにをこないましく　是より入道を佛道を修する事を源のゝ給ふ詞なり
こゝらのとしころつとむるつみもてよなからんかし　明石入道の事をの給ふ歟こよなからんはすくれたる義なり罪を滅せんとつとむるに罪のきえんこともすくれぬへしとなり　明石入道年頃をつむによりて罪障の消滅も事外なるへしとなり聞
さかしきかたく〵の人　貴（保イ）僧高僧とてあまた見侍りしうちにも名利にのみ染て眞實の道者は明石の入道ほとの人はなかりしとなり
さすかにけしきありし　世間の義もうちもきたるにもなかりしとなり
ひじりたちこの世はなれかほにも　此體眞實の道者なるへし
かやすき身ならは　秘今一度對面ありたきとなり
いまもかの侍し所　明石上詞弄
鳥のねきこえぬ　古聞ふかき山の體なり引歌有河同
秘引歌なし　河「とふ鳥の聲もきこえぬおく山ふのかき心を人はしらなむ
さらはそのゆいごん　秘源詞

あま君いかに　弄源氏のねんころなる性をかけり
さるさまのちきり　夫婦の中なり
うちなみたくみ　源のさまなり
おもひ出らるゝ人の　世のたゝすまひを知るほと明
石入道の事を戀しく思ひいてらるゝ人そと也され
はいかに思ふらんと尼公の事をの給ふなり
ふかきちきりの　秘一しほの事なるへしとなり
この夢かたりも　秘明石上の事なり
ぼんじとかいふやうなる　いとおやしきと云より明
石上詞　花梵字は天竺の文字なり十二の摩多三十
五の對文なといふ事あり筆跡のわるきをはぼんじ
のやうなるといへり
今はとてわかれ侍しかと猶こそあはれはのこり侍る
　秘都へのほり給し時の事也あはれはのこり侍面白
き詞なり　秘明石上の京へのほるとて今はかきり
と思ひてわかれしかとも又今のわかれもかなしき
をあはれはのこるといへりイ私
さまよくうちなき給ふ　明石上の體なり
とり給ひて　入道のかきたる物を源のとり給ふなり
文箱をとり給てなり

猶ほれ〱しからす　秘年老たりとも見えす手跡な
　とをほめ給ふなりイ花
てなとも　ほんじのやうなると明石上のいふによて
　かくの給ふなり
この世にふるかたの　秘後世の事はかりを思ふなり
弄
かのせんぞのおとゝは　花明石入道は大臣の御末な
り　秘河海に小野宮九條右丞相の事をひけり
かしこく心さしをつくしておほやけにつかうまつり
給けるほとにものゝたかひめありてそのむくひにか
く末はなきなり　忠文民部卿將門をは征伐の大將軍
たりけるに勸賞の定め有ける時淸愼公賞の疑はし
きをはおこなはされとこそあれと申されたりける
を弟の右丞相刑の疑はしきをはおこなはされ賞の
疑はしきをは行へとこそあれと申されけれともつ
ゐに沙汰なかりけり翌朝に民部卿右丞相に參して
提申て宮の券（貴券勢イ）契を奉りける家に歸て手をにきりて
立たりけるか十指の爪手のこうまて生いてゝ血は
紅をしほりたるやうにて思死にけりやかて惡靈と
なれり其故にや淸愼公の子孫は末々なく成て小野

宮も他家へ傳（侍イ）りけりと云々見舊記若此事歟　弄入道のおやの事准據は清愼公の事を思へり將門征伐（イナシ）の賞の事を見河海

をんなこのかたにつけたれと　秘只物語のうへにて明石姫君の事をの給なるへし花鳥には女子の方より祖孫（訣イ）の事をひけり是も面白なり但此物語の上にてみるへしとなり　花村上院第一の御子廣平親王は民部卿元方卿のむすめの更衣はらなりそれに御おとゝ冷泉院は后はらにておはしましゝによりて第一のみこをさしおきて東宮にたち給へり民部卿是をほいなき事と思ひておもひ死にせしか其後冷泉院御物くるはしうならせ給て御子花山院三條院とておはしましゝも花山は俄に御位をすてゝ御く（おイ）しおろさせ給ひ三條院は御めみえさせ給はすなとせしか又三條院の御子に（にイ）敦明太子と申侍しは御位の御望なきよし仰あり（られイ）て俄に院號かうふらせ給て小一條院と申きかやうに冷泉院の御末いつれ（れイ）もすか〳〵ともわたらせ給はぬは彼靈のわさとそみえ侍しさて三條院御むすめ禎子内親王と申は後朱雀院の御代に入内ありて後三條院をまうけさせおはしまして後に陽明門院と申きその御末のみこそ今の世までつたへさせ給へれ三條院の御末男かたはたえさせ給て女かたより御子孫を殘し給へる事此物語に云る明石入道の事に公私のちかひめ（記イ）こそあれ似よりたるやうなれはつゐてなから思ひしつけ侍り是は物語つくれるよりはるか後の事なれと世の理りは古へも今もかはらぬ事なる（訣イ）へきをや

つきなしと　私秘にかくのことく相續あるましと也

この夢のわたりに　河引歌有不及之歟　秘夢の事をかける事なり　世中はの歌に當時夢の義なりわたりは優なる詞のたよりなり

あやしくひが〳〵しくすゝろにたかき心さし　秘明石入道の志なり花

又われにてもさるましきふるまひ　源のわれなからかくはせましき事をと思ふ比と心にしみし事なり

この君のむまれ給ひし　弄明石女御事　源のせましきふるまひと思ひしほと心にしみしことには此女御の出き給へるにてさては契ふかき人なるゆゑそと思ひしり給しとなり

めのまへに見えぬ　それよりさきの因緣はしられぬ

事そと思ひしとなり
かゝるたのみありて　夢の事をかけるをみてと（今イ）心得
給ふなり
よこさまにいみしきめを見たゝよひしも　秘　入道の
祈禱によりて源氏の左遷の事もいてきぬるとなり
弄　左遷なとの事
この人ひとりの　明石女御の事
心のうちにお（をイ）かみて　秘　渇仰してとめ（リイ）給ふなり　源
の心中に拜しうやまひてとり給ふなり
これは又ぐしてたてまつるへき　河　明石入道の願書
に源氏みつからのをも具してたてまつらんと仰ら
れたるなり　秘　源も御願書有へしそへて奉るへき
となり　弄
いまはかくいにしへの事をも　秘　源姫君へ教訓なり
事の由來は入道の文にきゝ給へはとなり
あなたの御心はへを　秘　紫上の御心はへをあたにも
思ひ給ふましき事そとなり
もとよりさるへき　秘　夫婦兄弟なとはいふに及はす
となり
よこさまの人のなけのあはれ　秘　非道なる他人の心

おかすし給へるは一段の志なるへしとなり
ましてこゝになとさふらひなれ給ふを　いま明石上
姫君にそひ奉り給にもかはる事なくあつかひ給へ
る紫上の志の殊勝なるをいへり
ふかくねんころに　弄　紫上の心をいふ　私　大かたの
人ならは實母のかくそひ給ふからは疎略有へきを
かはらす懇切なる所紫の心奇特なるとなり
いにしへの世のたとへにも　花　まゝ母のたとへなり
秘　繼母のうはべはかりなるをしりてもおもてのま
まにむかへるかよきとなり
らう／＼しきたとりあらんもかしこきやうなれと
弄　繼母の事うはへはよきをもさもあらぬかとたと
るはかしこきやうなれともあしき心なるへしとな
り
わかためしたの心ゆかみたらん人をも思ひよらすう
らなからんためは引かへしあはれにいかてかゝるに
はとつみえかましきにも思ひなをる事もあるへし
花　わかためはまゝ子のためなり下の心ゆかみたる
は繼母の心のゆかみたるなりさも思ひよらすうら
なきとはまゝ子の心也ひきかへしあはれにとは母

の思ひなをしてまゝ子を哀と思ふへき事なり　弄
たゝうへのけしきあしからすはそれをたのまはひ
きかへし繼母もつみえかましく思ふへしとなり
秘かくうらなくたのめはかへりて思ひなをる事の
あるとなり
おほろけのむかしの世のわたならぬ人　此おはろけ
も弄花に前に註せることくおほろけならぬ成へし
秘あたならぬ人とは實ある人也實ある人は人にう
らみを殘さゝれは人の中言をいへともそれはやか
てはるゝものなり　弄大かたの世の人々の中の事
をいへりあたならぬとは實ある人なり實ある人の
事はたかふふしある時かた〳〵(また〳〵つみイ)とかなきよしをあ
きらめなとすれはおのつからくるしからすよくも
てなす事なりとなり
ひとり〳〵つみなき時には　花まゝ子もまゝ母もお
の〳〵とか(つみイ)なきをいふなり　弄我も人も罪なき所
あらはるれはくるしからすとなりをの〳〵先な
たむる(くさイ)をよしとなり
さしも有ましき事にかと〳〵しく　秘かと〳〵しく
いへはおのつから疎遠になるなり

おほくはあらねと　秘源の見及び給ふ人々をの給へ
り　花源氏のみ給ふ限の御かた〳〵の事なり
ゆゑよしといひ　花ゆゑよしとはゆゑ〳〵しく(ひイ)よき
事なり　秘ゆゑとは本性なり由は心もちゐなり物
を分別する心つかひ也此段帚木巻のしなさための
心かよへり此物語の本意くり返し〳〵心をならふ
へき事といへり殊勝の物也　故は本性也由は心た
てなりさま〳〵の用捨あるなり此段この巻の品さ
ための心にかよへり
さま〳〵に　秘それ〳〵に人の心はあるなり
えたるかたありて　秘すつへきをもなく又とるへきも
なきなり
このたいをのみなん　秘紫上なり
又あまりひたゝけて　泥(ヒタヽク)　花叨なり　須磨の巻にも
有詞なり　閑とりひろげたるやうの心歟猶勘へし
かたへの人は思ひやらぬかし　秘紫上の外の人は思
ひやりたると明石上のいふなり花弄(イ)　弄紫上の外は
得失さま〳〵なりときこゆ
そこにこそは　明石上をさしての給へり弄
むつひかはして　秘紫上とむつひ給へとなり

ての御うしろみ　女御の御うしろみの事なり
のたまはせねと　秘明石上の詞　是はあかしの上の
御返答なり
めさましき物になと　弄紫上はめさましく明石上を
思ひ給はぬてと也　秘もし紫上めさましき物にし
給はゝ此前わたりにちかつき参る事もあるましき
となり
かへりてはまはゆく　かゝはゆきやうの心なり
數ならぬ身のさすかにきえぬ　花きえぬは世になか
らへたる心なり
つみなきさまにもてかくされて　秘紫上の何事をも
みかくし給ふとなり
その御ためには何の心さしかは　秘明石上には御心
さしは有ましきなり女御を懇切にし給ふゆゑそと
なり
うちそひても　秘内住し給へるに紫上は不斷にそひ
給事のかなはさるかはりにて明石上を思ひたまへ
るゆゑにや心やすく思ひ給ふ故そとなり
それも又とりもちてけちえんになとあらぬ　秘明石
上卑下して實母のやうにし給はさるかよきとなり

弄花これは紫上の御うしろみし給ふ事なり　私
花鳥の義いかゝ
物の心えすひかしき　是は大かたの世の事なり
物の心えぬ人に立ましりぬれは心へのよき人もあ
しき事あるとなり
さなをし所なく　さうなをし所なきなり　秘よき人
となり弄紫上も明石上もなをし所なくよきと源
のほめ給ふなり
さりやよくこそひけしにけれ　秘明石上の心なり
たいへわたり給ひぬ　源のこれより紫のかたへおは
したるなり
さもいとやんてとなき　秘明石上の心なり
かくしもくし給へる　河具也
宮の御かた　秘女三宮也
えなのめならさめるは　女三へ源のおはする事まれ
なるなり
おなしすちにはおはすれと　秘紫上も式部卿宮の御
女にて卑下有へきならねといま一きはの女三にを
よはさるとなり
いま一きはゝ　弄女三を心くるしとなり

しりうこちきこえ　花 源氏の御うしろみなり　後言なり

わかすくせはたけくそ　聞 明石上の心中也　秘 明石上の宿世を思ふなり

やむことなきたに　女三の御おほえのさしもおはせぬ事歟

ましてたちましるへき　明石上の我身を思ふなり

たゝこもりたる山すみを　秘 入道の隠居をいふ弄

ふくぢのそのにたねまきてと　河 或勘文に那輪多羅か福地の園に種まきてあはん必有爲の都に　奥入に云雖有此説證據不知誰説頗凡俗事歟云々　花 尼きみのわかむすめの明石上の事をいふなり　秘 那輪多羅か(彼イ)云々此歌奥入破之伊勢物語鹽尻の註俊成卿凡俗なるによりて不用之たゝしらすとて有なんといへる殊勝事なり此類なり只福分の種ありと心得て有へきなり弄

のちの世を思ひやりつゝ　入道とひとつ蓮の縁を思ふなり

大將君はこのひめ君　秘 夕霧女三宮の事を思へり弄

こなたにはさりぬへき　女三宮の御方也　朱雀院なとへの心よせなるへし

いとわかくおほとき　女三の御さま夕霧の心也

うへのきしきは　面むきの體こと／＼しくはありて物ふかくけたかき方はなきとなり

かたち人の　秘 みめよき人なり

物思ひなけなる御あたりとはいひなから何事ものとやかに　わかやかに心しつかならぬ人の中に又のとかなる人も有へしされと人々のわかく心ちゆきけなるにましりて准し有へし　又云心は明白なり又心のまゝにしつかならぬわらはなとめにつかす御覧するよしなり　はなやかなる人たちはかりなる中なりとて又のとかなる心持たる人有へし又下に思ひのある人もましるなりされとのとかに打しつまりたる人々も此花やかなるたちにひかれてその方にみなさるゝなり人の心は友たち又は住(宅イ)たちによりてうつる物なりかやうの所心得をつくへし私義は大略おなし

身に人しれぬ思ひそひ　花 物思ひある人も心ちよけなる人にましれはそれにひかれて同しやうにみゆるとなり

ひとつさまに世中をおぼしの給はぬ　秘一偏に世間はなきとなり　源の心也

さうしみ御ありさま　女三へは源のいひをしへ給ふとなり

けにこそありかたき　秘院の御氣にあふましきと夕霧は推し給ふなり

紫の御ようい　世にもりいてさるとなり　秘抄なり

しつやかなるをもとゝして

みし面かけも　弄紫上事　秘野分のまきれに紫上をみ給ひし事

わか御北のかた　雲井の鴈なり弄

おたしき物にいまはと　秘雲ゐの鴈を得ては叉（父イ）と心もなきをいま源の女三宮を得給へるをみて心も聊かみたるとなり　私此段秘の義不審こゝは皆雲ゐの鴈の事なり雲ゐ鴈の心いふかひ有てすくれたるらう〳〵しきなとはなけれとも我心の好色ならぬ故にをたしく心ゆるひし給ふとなりなをかうさまさまにつとひ給へるとは御子たちのおほく出きたる事なりとり〳〵におかしく夕霧の愛し思ふゆゑに思ひはなれかたきとなり此義可然歟

此宮は人の御ほとを思ふにかきりなく心ことなる女三はさためてすくれたらんと思ひやらるゝとなり

とりわきたる御けしき　源の別しての御志ありとはみえぬなり

みたてまつりしか　秘人めはかりにし給へるを然へからすとなり　私源の御疎略なる故にみたてまつるをりもあらんやと夕霧の思ふなり此一段は鞠の時右衛門督にあらはにみえ給ひしかる〳〵しさなとをかねていひいたすなり

衛門のかんの君と　柏木なり

院につねにまいり　秘朱雀院なり

此宮を　女三なり

院にもめさましとは　女三を柏木に給はらん事をあるましき事ほとには朱雀のおほしめさゝりしとなり

たいのうへの御けはひには　女三のおほえ紫上にをとりたると世の人も云なり

かたしけなくともさる物は思はす（せイ）　秘柏木のわれはわくる心も有ましき物をとなり

たくひなき御身にてそあたらさらめと　秘女三宮なとにたくふへき身にてはなけれともとなり
小侍従といふ御ちゐし　秘女三宮の御めのと子柏木のめのとのめいなり弄
いひはけましつゝ　てなたよりはらをたつるやうにいひなす心也
おとゝの君もとよりほいありて　源氏の隠居の志しあれは其時はと柏木の思ひ給ふなり　花源氏の御山てもりの事なり　弄源氏の紫上に心をつけはて給はゝと也又云六條院の道心の事歟　私弄花の後の議然へし花鳥秘同し此段右衛門督の密通の事をかきいたす序なり
しつかなるすまゐ（ひイ）は　秘源の詞也公事なともなき月なり
おほやけわたくしことなしや　何事も無事の時節也
こゆみいさせて　聞小弓なり　弄聞云小弓のやう如何　一勘雀小弓の事なり別なる義なし
うしとらのまちに　秘花散里の御かたなり
まりもてあそはして　河劉向別錄曰蹴鞠者傳曰黄帝所作或曰起戰國時記（託イ）黄帝蹋鞠之勢也以練武士知有戈（方イ）也今軍士無事得使蹋鞠有害廿五篇　元興寺本名法興寺　に大なる槻の木ありこれをかゝりとして天智天皇大臣鎌足入鹿なと（以イ）して御鞠ありけり　延喜五年三月廿一日御記曰曉頭綾綺殿前令侍臣蹴鞠覽之同五月八日仁壽殿蹴鞠五月廿二日殿前十三日御常寧殿有蹴鞠興
みたりかはしき事の　秘鞠をいへり
まりもたせ給へりや　源の詞
これかれ侍りつ　夕霧の詞也
しんてんのひむかしおもて　花しんてんの西のたいの東面にまりのかゝりあり桐壺はこなたにわたり給へともいまは御るすの折ふし也　秘此ほとはきりつほのまし／＼たるかたなり　寢殿の南むき末にみゆ南の東よりにや
わか宮くしたてまつり　秘春宮へ參り給へるなり弄
やり水なとの行あひはれて　遣水はれたるなり
よしあるかゝりのほとを　秘只木陰なるへしよしある所といふなり花鳥に西の對の東面に鞠のかゝりありと云々いかゝ鞠の懸をうふる事は保元に内にて切立あり是はしめてみえたり又西の對といへる

おほつかなし只寢殿の東とは晩景には西へよりて蹴鞠ありとみえたり階の東なるへし
おほいとのゝ君たち　頭辨（トウノベシ）　兵衛佐　大夫の君　致仕の大臣の子たち柏木の弟たちなり　弄兄弟三人なり
風ふかすかしてき日なりとて付うじて　河與なり
おとゝ、源氏なり
辨の君もたち出れは　秘辨官儀式官なれはなりかやうの遊なとをは面には沙汰せさる官なるへし
かんたちめなりとも　衛府司なれはなり自然源を憚て斟酌もありやとてかくの給ふなり
かはかりのよはひにては　源の詞上古には老後に蹴鞠は斟酌あるなり成通卿五十未滿まて蹴なり賴輔卿六十七の年上鞠せしは一段の事なり
さるはいとぎやう〳〵なりや　花輕々（キャウ〳〵）なりまりの事なりみたれかはしき御遊をいふなり　前にはみたりかはしき事のさすかにめさめてとほめてこゝには輕々なるといへりかやうに引合てみるへきなり
一拗花鳥にしるすと云々まりの遊のみたりかはしきさまなる事なりしつやかならぬ事にやさるはいと前の詞に鞠に心のひくやうに云しに對して也
わつかなるもえきのかげに　繭黃いまた淺綠なる木かけなり　花はちりたる跡なり
衞門督のかりそめに　柏木まり足とみゆ
かたちいときよけに（ガイ）　柏木なり
みはしのまにあたれる　花寢殿の南むきに階間有へし
さくらのかけによりて　秘次第に西へよるなり
おとゝも宮もすみのかうらんに出て　秘東なり　まりをはうへより見を（おイ）ろさぬ事に人々心得たれと人によりてかゝる事も有しなりすみのかうらんは東の對の西のすみのかうらんなるへし
かうふりのひたいすてしくつろき也　河朝候日（日イ）高冠額擡　夜行沙厚沓聲忙　詠朗　弄たゝ鞠にくつろぎたる心なるへし
さくらのなをしのやゝなへたるに　秘冬直衣なり
弄表白裏蘇芳
さしぬきのすそつかたすこしふくみてけしきはかりひきあけ　花ふくむとはなへはめる事なり指貫のそはとる事家々のつたへかはれり　秘花鳥に指貫の

そはとる事家々説かはれると云々これは鞠をけるにつきて種々の説ありと云なり此時分はさやうの沙汰有へからすとりあへすいつもの指貫すかたなるへし浮文の指貫ともをいふなるへし

しをれたる枝すこしおし折て　秘まりにあたりてしをれたるなるへし　花資雅卿は懸の枝をこしにさしてけたる由みえたりこれは花のえたを何となく折たるにや　資雅卿は宇多源氏佐々木野といふ蹴鞠の家なり有雅卿の子也有雅卿は後鳥羽院の御時のまり家也　鞠の譜等成通卿以後ありき　此以下花鳥に同し仍略之

みはしの中のしなのほとに　河中階先例未勘京極殿の南階の間にて見證に二條殿階半令座給之由見えたり雖爲近例定有其故歟云々

櫻はよきて　河「吹風も心しあらは此春はさくらをよきてちらささらなむ　落花猥籍風狂後（輕イ）（シケリカハシ）麻　秘引歌に及へからす　聞書引歌なし

しりめにみれは　柏木なり御前のかたは女三のかたなり

御まへ　秘女三宮なり

春のたむけのぬさふくろ　河手向齋　私又手祭又祭禮　ぬさ袋はすきふくろなり　後撰にいひかたらひける人のあからさまにこゝへまかりけるにぬさふくろなとつかはすとて歌あり　拾遺云ものへまかりける人のもとへぬさをむすひて袋にいれてつかはすとて能宣歌あり奥に載之

春のたむけとは三月の末なれは春の暮て行手向といふ心也　ぬさとは旅の手向にすれはなり春の暮行を旅に行にたとへたる也　花ぬさは色々の紙をきりてすきたるふくろに入たるにやさてきぬのつまのすきかげにたとへたる也　弄旅にたつ人にぬさをつかはすは道祖神に手向て無爲に行へきと祝する心なり折節三月なれは春の手向とかけり三月の末なれは春のくれて行手向をいふなり道祖神にたむくるぬさにきぬのつまともをまかへたるなり

御木丁ともしどけなく　やうたいの正しき事には木丁のうちもみたれすなと此物語にかけり

人げちかく　私秘にかくのことく點す。（祭イ）

からねこのいとちひさく　河野王案曰猫似虎而小能

捕鼠爲類音苗和名禰古萬

にけんとひこしろふ　引しろふなり

うちさすかたにて立給へり　女三宮なり

はしより西の二の間東のそはなれは　秘　階の間の二間めなり階よりみやれは二間にあたれりひんかしのはしらのそはといふなり　弄　聞云前の詞に寝殿の東おもてにてとみえたり爰に東のそはといへる如何　一説階の間も東のかゝりに有へき歟東のそはとは簾の中の東のはしらのそはといふ心にやいささか心得かたき様なり猶思按有へし此一段未按得之重而可レ述所存仍除之也　此さし圖如何只右衛門督のかたへよくみゆるやうにかけり

すき〳〵に　秘　つき〳〵なり

さうしのつま　草子のはつれなり　花　きぬのかさなりたるは草子のはしのやうなるなり

七八寸（シチハッスン）　私秘かくのことくつけたり

さゝやか　私秘かくのことし

まりに身をなくる　鞠はかりに身をなして心いるゝなり

人々あらはを　女房とものみすのあきたるをしらぬなり

みかへり給へる　女三のさまなり

大將いとかたはらいたけれと　夕霧も此體をみつけ給ふなり

うちしはふき給へるにそ　夕霧聲つくろひして心得させたるなり

さるはわか心ちにも　秘　夕霧なり今少は見參らせたくは思へともとなり

ねこのつなゆるしつれは　猫の綱にて簾の引あけられたるをかゝりたる綱をはつしたる故に簾のもとのことくなるなり

まさにめとゝめじやと　夕霧の心に柏木の見て心のとまらんと察するなり

ねてをまねきよせて　柏木のいたくなり

かんだちめのざ　源の詞大將衛門督をさしていふなり

たいのみなみおもて　秘　紫上の御方なり　花　東の對の南のひさしの方なり紫上の住給ふかたなり

みなそなたに　大將右衛門督なり

わらうだ　花　圓座なり

つばいもちひなしかうしやうの物とも　秘つばいもちひ鞠場にて用る物なり　河椿餅椿の葉に入たる餅なり云々椿の葉を合てもちひの粉にあまつらをかけてつゝみたる物を鞠の所にて食するなり　うつほの上閑ゆつり大臣とのゝ御かたよりひわりこみきつはいもちひなとたてまつり給へりそのおほいとのよりおなしかうしたち花わらまきなとあり

そほれ（らイ）とりくふ　弄そほれ

かち物はかり　秘肴なるへし　弄つまりさかなの事なり　私もし又干たる魚の肴の事歟

大將は心しつかに　柏木の心に女三をおかす思ふをみしりたる夕霧の心中なり

いてやこなたの　紫の御方なり秘

うちとのようい　河内外の用意なり

宰相の君は　秘柏木なり　參議にて右衛門督を兼たるなり花弄

よろつのつみをも　かろ〳〵しきも心にかゝらす柏木は女三を心にしめたるなり　夕霧のかつはかろかろしと思ふらんと思ひしにてたへたる詞也　秘柏木は此はし近なる事なとをも何とも思ひ給はさるとなり

まりなんえおよはす　源の致仕大臣にまり足のおとりたるとなり

ものゝすちは　柏木をほめ給ふ也鞠なとのはかなき事まては委しくをしへ給ふ事あるましき天然の奇特なるすちにて有けるよとなり

うちほゝゑみて　秘衛門督なり　實の道々歟イ

はか〳〵しきかたにはぬるく侍る家の風　柏の詞實の道々しきかたはえつたへぬとなり「久かたの月のかつらもをるはかり家の風をもふかせてしかな不及此歌なり

いかてか何事も人にことなるけちめを（イナシ）はしるしつたふへき也　源の詞なりかやうの事は傳なとにのせてもよかるへきとなり

にほひやかにきよくなるを　源の御さまをみて柏木の思ふ心なり

かゝる人にならひて　秘かゝる人にならひてとよめり　只習歟可決之　女三の源の目うつりにわれには心うつりたまはしと柏木の思ふなり心にかゝる故にかやうの事にて女三の事を思ふなるへし

大將君ひとつ車にて　夕霧柏木同車なり
猶この頃　秘柏木の詞なり
院には猶このだいに　秘柏木の詞なり
源のけふも紫上の方にて　盃酌なとし給へは斯云り
この宮いかに　秘女三の宮なり弄
くし給ひたらん　河啓なり
たい〳〵しき事　秘夕霧の詞なり　退々也　いかて
さは有へきといふ心なり
こなたはさまかはりて　紫上はおさなくよりやしな
ひ給ふそのしたしみのあるなるへしとなり
宮をはかた〳〵につけて　宮をは源の執しおほすと
夕霧のよきさまにいひなし給ふなり
いてあなかま　秘柏木の詞なりないひかくし給ふそ
くはしく聞えたるとなり
柏木 いかなれは花にこつたふ鶯のさくらをわきてねくら
とはせぬ　花櫻は女三宮にたとへよめり　秘柏木の
歌なり女三の宮の御方にとまり給はぬとよめり弄
さくらひとつに　秘鶯は花の木にとまらすと云々弄
私鶯の櫻にねぬ事さもある歟但櫻を(のイ)よきてねくら
とはせぬとは春の花にねんならは鶯は櫻ひとつに

宿りつゝ餘木にはとまるましき事そといふ義歟如
何
いてあなあちきなの　夕霧の心なり無益の柏木のと
りあつかひやとなり
されはよとおもふ　花上の詞に大將は心しりにあや
しかりつるみすのすきかけ思ひ出る事やあらんと
右衛門督を思ひ給へりされはよとは推したるにち
かはぬといふ心なり
返夕霧 み山木にねくらさたむるはこ鳥(花鳥一本かほ鳥)もいかてか花の色に
あくへき　河杲鳥(ハコ)万　箱鳥同　或は皃鳥の異名なり
と云々　皃鳥梟の名なり　雄略天皇御時美作國つ
るき山と云所相見(スケミ)乙人(ヲトヒト)と云人の姉子をおひて山中
を行とて鷲にとられてはやこ〳〵とよひしに終に
死たりける故にはこ鳥とはいふなりはことははや
こと云心なり「み山木によるはきてゐるはこ鳥の
あけはかへらんことをこそおもへ「あさゐてにき
なくはこ鳥なれたにもきみのこふれは時をすへな
く　花「かほ鳥のまなくしは鳴春の野の草のねし
げき戀もするかな　八雲抄かほ鳥は定家卿も不知
之たゝうつくしき鳥なりと云　常陸國に杜若をか

は花といふ此花さく時鳴といふ　今按深山木にぬるといへるはまつはは乙鳥正説也深山木は紫上にたとへ花の色は女三宮をいふなり　弄はこ鳥の事一勘花鳥にありはこ鳥の類は深山木に住なから花をも忘れしとなりはこ鳥の事花鳥にみえたり深山木に住なからなほも忘れしとなり女三宮にへたては有ましきとなり

ひたおもむきに　櫻ひとつにかは何（イナシ）もとなり夕霧のむつかしく思ひていひまきらはし給ふなり

かんの君は猶おほいとのゝ　柏木なり思ひある心中なり弄　おほいとのゝ東は父おとゝの東對なり

私おもふ心とはなほさりの北方をはむかへしとなり又女三なとの事を思ふなり

このゆふへよりくしいたし　苦痛なり　花頭痛なり又苦痛なり　秘花鳥両説なり　私なとか思ふ事かなはさらんと心おこりせしに此女三の事はかなふましき事なれはくしいたく思ふとなり

ふかきまとのうちに　河養在深窓人未識　長恨歌　おくふかきをいへり詞をかりたるはかりなり

小侍従かり　花かりは名をかるなり　秘かりは小侍従かもとへと云心なり　花鳥の説いかゝ

一日風にさそはれて　秘文の詞也

みかきかはらをわけ入て　秘院中のかきの内をいふなりこゝは名所にあらす　引歌「立（しらイ）かへり又やわけまし面かけをみかきか原の忘れかたさに弄花よし野の名所なり女三の御方にたとふ　河みかきか原は名所なり女三の御方にたとふ　河みかきか原は名所ならねとも御垣によせていふなり　應徳二年三月十六日花宴　中殿宴　京極閣　「千世まてとささそはしむる櫻花みかきか原にほりうゑしより

いとゝいかにみおとし　河柏木の我を女三の見給てみおとし給はんと卑下なり

あやなくけふは　河「みすもあらすみもせぬ人の戀しくはあやなくけふやなかめくらさん　秘引歌みすもあらす云々　私伊勢物語の心はみすもあらすみもせぬ人なる故にあやなくけふやなかめくらさんとあらましのやうにいへり是はさたかに見たる人なれはなかめくらして侍りといふにや

柏木　よそにみてをらぬなけきはしけれとも名殘戀しき花

の夕かけ　心あらはなり　秘弄に不註之
侍從は一日の心もしらねは　秘柏木のほのかに女三をみたる事を小侍從はしらぬなり
心くるしけなるありさまも　小侍從か我心なからしらさるなりたゝにはうちゝきかたきとて見參に入るなり　私聞にわか心に柏のゝ給ふ事をあはれと思ひイしりて事をふかく申達すへくやならん我身なから知かたきとなり
いとうたてある　女三の宮の詞なり
みもせぬといひたる所　あやなくけふはといひたるにて昨日見し事を女三宮の思ひ出給ふなり
心のうちそをさなかりける　秘草子の地なり　人のみしをは何ともおほさて源のかへり聞給はん事をはゝかりおほすなり心をさなきさまとなり
御さしいらへ　さしいらへなり　昨日みけんを源の聞給はんにはゝかりていらへもし給はすとなり
れいのかく　河例の書也　秘いつもかやうに小侍從か返事かくなるへし　弄花鳥同
つれなしかほに　柏木思ひを忍ひしと云參り給ひし時はつれなきさまをよくつくり給ひしとなり
みすもあらぬやいかに　侍從はみすのつまより見給ひし事をしらすして返ししたるなり
今さらに色にな出そ山櫻およはぬ枝にこゝろかけき返小侍從と　心あらはなり　河海に引歌あり不用之
かひなき事をとあり　是も別義なし
弄花奥に註する分
南のおとゝの西のはなちいて　玉かつらのわかなまゐらせ給ひし所なり花鳥に西の對の母屋なるへしと云々東の放出とあるは東對の母屋也と云々
朱雀院の姫宮六條院へわたり給ひし　わかなまゐりし西のはなちいてに御帳たてゝそなたのたいわた殿かけて女房のつほねゝゝなり　女三宮はしん殿におはしますとみえたり如何

岷江入楚第三十五　若菜下

四拾一歳
衛門督奉念女三宮爲病事
三月卅日六條院弓之會事
衛門督參春宮申女三宮御猫給事
同愛猫給事
螢兵部卿嫁與木柱姫君給事外祖母大宮とりもち給
事
四十二歳
四十三歳
四十四歳
四十五歳
四十六歳
此巻の詞云はかなくてとし月もかさなりてうちの
みかと御位につかせ給ふて十八年にならせ給ぬと
云々冷泉院御位につき給ふてこのかたことしまて
十八年にあたるなりしからは源氏四拾一ニイより四拾
五までの事物語に見えさるへしはかなくてとし月
もかさなりてといふ詞の中にてもれるなるへし

春宮受禪事　今上是也
太政大臣上致仕表事
鬚黑左大將任右大臣爲攝錄事
六條女御御腹一宮立坊事
夕霧右大將任大納言事
十月廿日六條院住吉詣事
女御殿對上同車事
明石御方尼上又同車事
女三家叙二品給事
紫上養明石御腹女一宮給事
花散里養大將藤典侍腹三君給事
爲明年朱雀院五十御賀人々習舞事
源氏奉教於琴於女三宮給事
四十七歳　今上在位
正月十九日女樂事
明石上琵琶　紫上和琴　明石女御箏　女三宮琴
御方々花喩事
源氏君與夕霧大將音曲事
其夜源上君渡紫上對給御物語事
人々御事語給事

紫上ことし卅七になり給ふよしみえたり三年の相違ありまことは四十歳になり給へり
夕霧渡女三宮御方給事
自曉方紫上痛胸給事
御賀延引事　二月中不本腹事 復イ
三月紫上渡二條院給事
衞門督任中納言嫁娶朱雀院女三宮事　落葉宮是也
衞門督物語小侍從君事
四月十餘日御禊前夜衞門督密通女三宮事
祭日衞門督獨吟歌事　落葉宮歌事
六條院渡女三宮之日紫上俄又絕入仍立歸給事
物氣出現事　六條御息所靈也
紫上御受戒剪額髮事
六月比紫上少驗事
女三宮自四月比懷姙事
源氏渡女三宮御方給事
衞門督文小侍從見奉女三宮則挿茵端給事
源氏取扇之次見付茵端文事
小侍從以源氏見付文事　語衞門督事
源氏又渡女三宮給事
二條內侍上出家事
源氏遣文有返事事
朱雀院御賀依女三宮御腦十月又延引事
山御門送文於女三宮事
十二月十餘日御賀試樂事
衞門督稱病不參源氏召給事
衞門督試樂未終早出病惱事
衞門督離女二宮渡父大殿御所事
明石女御又生男宮給事　匂宮是也
廿五日御賀事

若菜下

河此巻の名もろかつら云々落葉をなにゝひろひけんの歌によるらん當流不用之　花以詞爲巻名くはしき事は上巻にしるし侍りぬ六條院四十一歳二月の事迄は上巻にあり同年の三月より當巻にみえたる四十二より四十五までの事は物語に所見なし四十六七の事またのせ侍り中四ケ年の事かけたるは此巻の詞云はかなくてとし月もかさなりてうちの御門の御位につかせ給ふて十八年にならせ給ひぬとかけり冷泉院は源氏四十六歳の時御位をすへらせ給へり是まて料簡あるへきものなり　弄此巻の始に源氏の事四十一年より四十七歳までの事あり此巻上下にわかれて前とひとつの事なり事おほきによりてわかてるなり但上は六條院の御賀下は朱雀院御賀上下ともに若菜を本とせる心ある歟上巻のおくにかひなき事をとあり小侍従かかくいへるもとはりとおもへともといふ也　源四十一歳の三月より四十七歳の末にいたれり四十二の比より四十五までの四ケ年の事此物語に見えす花鳥に四十一歳の二月までの事上巻にありと云々然れとも上巻の末に三月の事あるなり

ことわりとはおもへともうれたくもいへるかな　花柏木の右衛門督女三宮を思ひかけ奉りて小侍従かもとへ文つかはしたれは返事に「今更に色にないてそ山櫻およはぬ枝に心かけきといひ侍れはけにことはりとはおもへともさてしも思ひやまれねはうれたくおもふとなり上の巻の末の詞につゝけて見るへしみな右衛門督の心をいへるなり　河うれたくはうれはしきなり　聞前巻の末をうけていへり　秘小侍従か返事の口をしきとなり

いてやなそかく　秘小侍従かかくいへるはかりにて堪忍しかたきとなり

院の御ためなまゆかむ　秘六條院なり　聞大かたは大切に思ふ源氏の御ためよからぬ心のいてくるをなまゆかむ心といへり

つもこりの日は人々　秘三月三十日なり　此上巻の末にありし同し三月なり

なまものうくすゝろはしけれと　源へ柏木の我心から隔心の體いてきたりなまゆかむ心といへるよくかなへり

そのあたりの花の色　女三の御あたりの花の色なり
殿上ののりゆみきさらきとありしを過て　花 殿上の
賭射三月の例もあれと故藤壺の后の御忌月により
て停止せられたるといへり忌月の名は唐朝よりは
しまる但晋穆帝后を納んとして九月九日これ忌月
なりいかゝと有しを禮記に忌日のことはありて忌
月の文なし忌月あらは忌年有へしと云儀有又唐武
后（帝イ）の時契丹を平て軍をかへす時凱旋の樂をなさん
とせしそれも高帝の忌月いかゝと云義ありし晋穆
帝の例を引て終に軍樂をおこす事を得たり本朝に
は猶忌月をさる事になれり九月九日の宴も延喜帝
の御忌月にわたるによりて十月に是を行れて殘菊
の宴と名つけられたり後江相云其文をかきたり文
粋にみえたり　秘 高倉院治承五年正月崩御なれは
安徳天皇の御代は踏歌節會なかりしなり　河 西宮
抄云殿上賭弓前後頭於殿上取方人充文不依次仍改
書押小壁四府中點便（使所イ）取各爲出居所云々設饗定陰陽
師出居參内解除書召文作事主上御射場予（射手イ）著座王卿
依召定方人奏前後奏出居令懸的矢取渡的付着座籌
刺著座左（召方々イ）方弘祓仰渡數令人賭物主繼射勝方拜王卿

以下主繼射追（出イ）等懸物上卿召所々（イナシ）掌令書分前後取掌
着的付座侍座次々（イナシ）射弓云々有中科人者　李部王記
天暦五年三月十六日殿上賭弓忌月事　賭弓　正月
十八日於弓場殿射之四府卿公以下束帶ィ本
やよひはた御忌月なれは　弄 籬雲の忌なり　秘 母后
薄雲の御忌月なれは延引あるなり忌月を避る例花
鳥にみえたり後圓融院の御代十六日節會舞樂ある
によりて停止あり後の事なれと例にひけり
この院にかゝるまとゐ　秘 大やけには停止なとによ
りて源にて此事あるなり　黄ム まとゐとは圓居と
かく歟それを歩射の時なれは的によせて云へり
私若菜上の末に柏木の夕霧に詞けふのやうならん
いとまのひま待つけて花の折すこさすまいれとの
給ひつるを春をしみかてら月のうちに小弓もたせ
てまいり給へとかたらひちきりありこの詞の末な
るへしさてこの次に小弓との給ひしかとかちゆみ
のすくれたると有　河 的射なり古今に思ふとちま
とゐせる夜はから錦とあるは圓居なり居まはりた
るなり詩には團欒なと作れりそれをいま的射にそ
へていへるなり

右左の大將さゑ御なからひ　秘髭黒夕霧也玉かつら
ゆへそとつねによくいひかはし給ふなり弄
すけたちなと　河すけは次將なり　中少將也秘
こ弓との給ひしかとかちゆみのすくれなる上手をも(とイ)
河歩射騎射ゆみ、歩射かちゆみ歩射和名加知由美　李部大尉歩射
法云失歩射以目先領其持心射之　今案持心者的名
乎花李部王記承平三年三月十六日殿上侍臣於朱雀
院歩射又天暦四年十月十五日試春宮擬帶刀坊亮以
下預試先試騎射次試歩射云々　秘かちたちなとい
ふ事なり馬上ならすしているなり
殿上人ともゝつき〳〵しきは　殿上人の中にも射藝
に達したるを云也
まへしりへの心こまとりにかたわきて　河弓の前後
なり　柏殿合手をそろふるなり云々　秘あひ手く
み〳〵をよくさためらるゝなり(相手イ)　弄聞云こまとり
のやう如何　一勘左右の合力をこまとりと云なり
けふにとちむる霞　秘三月卅日也
花のかけいとゝたつことやすからて　河「けふのみ
と春を思はぬ時たにもたつ事やすき花のかけかは
本歌のとり様殊勝なりけふのみと春を云々

えんなるかけ物とも　秘あなたこなたよりいたさる
るなり　西宮抄云賭弓註進錢白穀倉院進　出懸物藏人持
出給紳紳付イ延喜廿一年御息所被出女裝束も、延長四年中宮被出裝束
柳の葉を百たひあてつへき　河史記曰楚有養由基者
善射者也去柳葉百歩而射之百發而百中之左右觀者
數千尺皆曰善射　秘養由基ともいひつへき上手と
もなり
とねりともの　花とねりは左右の近衞　弄近衞官人
なり
うけはりていとる(むイ)　上手ともわか物々と面々おもひ
てあらそふなり
こゝしき手つきともをこそ　巨々敷也　弄大やうな
るなり　百たひあてたるを無心なりといへり勝負
に心をかけて身體のくつるゝ心なり　こゝしきは
大やうなるなり射の道あなかちにあたるはかりを
本とすへきにあらす論語にも射不主皮といへり
大將たちより　聞大將遠なり
人よりけになかめをしつゝ　柏木の物おもへるさま
なり
かたはし心しれる　秘夕霧ふと見しり給ふなり

われさへ思ひつきぬる　夕霧の柏木と知音ゆゑに我
さへ思ひのいてくるやうなるなり
此君たち御中いとよし　闇草子地也　われさへ思ひ
つきぬるといふ詞の註なり
はかなき事にても物おもはし打まきるゝことあらん
をいとをしくおもほえ給　夕霧の心に斯樣の事にて
も柏の源にうとうとしくなられんと察也
みつからも　秘柏木なり
人にてんつかるへき　秘人にゆひをさゝるへき事り
河古人詩册に批點なとはいさゝか褒貶したる心
なりされは點つかるましきとは人にほめそしらる
ましきといふなり
それさへそかたき事なりける　猫をぬすみ出ん事さ
へかたき事なりまして女三の事はとなり
女御の御かたに　秘弘徽殿なり　柏木の兄弟
かゝる御中らひ　兄弟さへかくけとを（ほイ）けれはまして
はるかに思ふとなり
ゆくりかにあやしくは　女三宮の事なり　弄女三の
事を思ひあはせしなり　私ゆくりかには不意にな
りおもはすになといふ心なりかろかろしきをすこ

し柏もおとすなりされと心にしみてあしくはおも
ひなされぬとなり
私ほろけに　秘おほろけならすなり
春宮にまいり給て　弄朱雀の御子女三の御兄弟なり
秘女三宮の御兄弟なれは似かよひ給ふ所も有へき
心なり
ろなふかよへ（うイ）る　河無論　勿論　河東宮女三宮に似
給ふへきなり
さはかりの御ありさま　秘春宮なとの御うへを申せ
はおろかなりとなり
うちの御ねこ　秘柏木の心　花小右記曰長保元年九
月十九日暑内裏御猫產子女院左大臣右大臣有產養
事有衝重椀飯納宮（篁イ）之衣等云々猫乳母馬命婦時人咲
之奇恠事也天以レ目若（若イ）是可有徵歟未聞禽獸用人乳
嗟乎　河寛平御記云寬平元年十二月六日朕閑時述猫消息曰驪（クハシ）
猫一喉太宰少貳源精秩猫來朝所獻於先帝愛其毛色
之不類余猫云々皆淺黑色此猫深黑如墨烏其形容要（似イ）
如韓盧長尺五寸高六寸許其屈也小如秬粒其伸也
長如彊弓精目（日晶イ）晭熒如針芒之亂眩耳鋒直竪如匙不搖
其伏臥時團圓不見足尾宛如堀中之玄璧其行步時寂

冀不聞音聲恰知雲上黒龍性好道行暗合五禽寧低頭
尾着地而曲聳（背イ）脊高二尺許毛色悦懌蓋由是亦能捕
夜鼠捷（據イ）於他猫先帝愛翫數日之後賜之于朕被撫養五
年于今毎旦給之以乳粥豈啻取材能之翅（其イ）挺因先帝取（所イ）
賜雖微物殊有情於懐育耳仍而曰汝猫含陰賜之氣修
支竅之形心有必寧知我乎猫乃歎息擧首仰睨吾顔似
咽心盈臆口不能言

あまたひきつれ　弄内裏の御猫の子の所々とりわき
て參るなり　秘猫の子をうみたるかた〳〵にわか
れてあるなり

六條院の姫宮の御かたに　柏木の詞女三宮の御方よ（にイ）
れ（あイ）るなり

見えぬやうなる　見もなされぬうつくしさとなり

ねてわさとらうたく　秘春宮猫を愛し給ふ御心有歟

からねてのこゝのに（ふイ）たかへる　秘柏木の詞也

ゆかしうおほさるはかり　秘猫をめしよせらるゝや
うに柏木の申なすなり

きりつほの御かたより　明石中宮よりつたへ猫を女
三宮へこひ給へるなり弄

たつねんとおほしたりきと　秘春宮の御心にかなら
す尋給へきと見たてまつり給へれはなり

朱雀院のとりわき　柏木は朱雀院わらはより別して
めしつかはれしなり

又このみやにも　秘春宮なり　柏木春宮へしたしく
まいりて御琴をもをしへ申給ふなり弄

いつくこのみし人は　弄猫を女三宮によそへて思ひ
しなり　花衛門督猫をいつくしみし人はといへり
しる人にしていへるなり高砂の松をもしる人とよ
めりいはんや有情のものをや　秘柏木の詞なり六
條院にて見しよしなり人とは松も昔の友ならなく
にの類なり

けにおかしきさま　秘春宮の詞なり

これはさるへきまへ心　秘柏木の詞猫は主をしらさ
る物となり

まさるともさふらふめるを　聞これよりまさりたる
猫ともあらはてれをは給はらんと柏木の申うくる
なり　一説まさる（清）とも多くさふらふほとにこれか
まさりたるとも申うけんといふ義云々この說いか
が

人けとほかりし　秘猫の次第になれたるなり

ねう〳〵といとらうたけに　花猫の字の音めうなり
ねうは五音通なりねう〳〵となくをうたてもすゝ
むかなといへり
うたてもすゝむかな　弄猫の事歟すゝむる歟すゝむ
同事にや　秘我物おもひをすゝむるなり　私猫の
なくを聞てわかおもひのうたてもすゝむかなとい
ふへき也すゝむは催すかたなるへし
柏木 戀わふる人のかたみと手ならせはなれよ何とてなく
ねなるらん　歌はきこえたるまゝなるへし結句鳴音
なるらんなり　秘なくねをなく猫といへる義あり
不用之　弄只猫のなく音とよめり
これもむかしの契　河引歌あり不及之也　花唐武宗
時宮妃後身爲猫事あり
宮よりめすにもまいらせす　春宮より此猫をめせと
も柏木の進上せぬなり
左大將との丶北の方　私玉かつらなり弄
大臣の君たちよりも　秘大殿の君たちは玉かつらの
實の兄弟柏木なとなり弄
右大將君をは　秘夕霧なりはしめは源の實子のやう
に有し事なり

心はへのかと〳〵しく　秘夕霧の性をいへり　聞玉
かつらの姓をいへり私此心はへのかと〳〵しき玉
かつらの性然へし
しけいさなとの　秘明石中宮は實の兄弟なれともこ
と〳〵しきなり　弄明石中宮なり
さまことなる御むつひ　玉かつらと夕霧と實の兄弟
ならさるからことことしかるまるしき事をさまか
はりたるといふなり
おとこ君（をイ）　秘髯黒なり玉かつらをは大切にし給へる
事なり
この御はらには　秘玉かつらの御腹には女子なきな
り
まきはしらの姫君を　もとの北方のはらの姫君
おほち宮なと　秘式部卿宮なり　紫上父也
此君をたに　眞木柱君の祖父なり
みこの御おほえ　眞木柱の君の事　弄先帝の式部卿
宮の事　眞木柱君の母の父也
この宮の御心よせ　秘式部卿宮當時の權門なり
この院大殿　弄源氏　致仕の大臣なり
大將もさる世のおもしさ（とイ）　弄髯黒なり

ひめ君のおほえ　秘いつかたにつけても眞木柱の君おほえことなるとなり

はゝ君のなをあやしくひかめる　眞木柱君の母物のけの事也

まゝはゝの御あたり　秘玉かつらなり　弄まき柱の君の心也

兵部卿宮猶ひさ所　秘螢なり

おほしける事ともみなたかひて　秘玉かつらをとりはつし給ふ事なとなり

さてのみやはあまへて　秘さいひてもかなはさるよしなり

このわたりにけしきはみ　秘式部卿宮へ申より給ふなり

大宮なにかは　河式部卿宮紫上の父也　弄式部卿宮の宅家也　秘式部卿宮の室家也　聞式部卿の室まき柱の外祖母也　私秘　聞等の義不審式部卿兵部卿まきれあれは式部卿宮を大宮とかけりとみゆ式部卿宮の室はこのさきの詞に大北のかたといふさかな物とかけり

いたうもなやまし　秘やかて領状あるなり

みてあまりうらみ所なき　みこは螢宮なり　秘あまり心をもつくさゝるをいへり　私螢の好色をたてたる思にやよてかけひき給へるから風流めかぬ所有て其心にもかなはぬ心有へし

大宮は女こあまた　秘嫡女は髭黒の室今は離別せり又王女御とて内に参り給ひしも秋好中宮にけをされて后にたち給ふ事もなき也　弄式部卿北方の御女共槙柱の母ゝ髭黒にはなれ給ふ又王女御とて内に参り給ひしも秋好中宮にけをされ給へる事ともを物けなけかしと云り　私弄花にこゝには大宮を式部卿北方とかけり不審

物てりしぬへけれと　秘我か御むすめたちのさいはひのなきにてり給ふへけれとなり

はゝ君はあやしきひか物　眞木柱の母君なり

大將はたわか事にしたかはすとて　髭黒も槙柱の君を玉かつらの方へわたし給はぬとて疎略し給ふとなり

宮はうせ給へにける北のかたを　弄螢兵部卿もとの北の方をの給ふ也　秘螢兵部卿也もとの北の方を忘れかたくそのかたちに似たる人をと尋給ふ也

私螢兵部卿の北方は二條相國のむすめとみゆ其人の事にや花宴巻にみゆ花鳥に前齋院と申人なりとあり何事にか不審

あしくはあらねと　此まきはしら君もかたちなとあしくはあらねともとの北方とはかはれる成へし

大みや　眞木柱の外祖父也

母君もさこそひかみ（はイ）　秘まき柱の君の實母なり

うき世と思ひいて給　槙柱と螢との物うけなる中なれはわか身にとりか（そイ）へてかく云なり

大將もされはよ　髯黒の心なり　色めき給へるみてとは螢兵部卿なり

わか御心にゆるし給はさりし　髯黒の合點なき事なりしはとにやらんものしと思ひ給ふなり

かんの君　秘玉かつらなり

おくたのもしけなき　秘此兵部卿宮のあた〳〵しき御さまを聞給ふにはかしこくそ我身のつれなかりしと思ひ給ふなり

そのかみもけちかくみきこえんと　猶玉かつらの心中也その時も螢へなひかんとは思はさりしかと心ふかきさまに何かとの給ひしを髯黒とかやうになりぬる事かろ〳〵しきやうにや思ひおとし給はんとはかりはつかしきとなりさてまき柱はまゝ子にてちかきゆかりのやうなれは玉かつらのよろつに螢のきこえ給はん所に心つかひせらるゝとなり

これよりもさるへきことは　秘玉かつらよりもまき柱の事あつかひ給へるなり

せうとの君たちなとして　秘まき柱の兄弟申返し（通イ）給ふ　私此義いかゝ　弄玉かつらの方より槙柱の兄弟していひかよひ給ふをまき柱の君の祖母のえし給ふなり　私かゝる御けしきもしらすとは螢兵部まき柱の君へ通ひ給ふてからは玉かつらの方よりそのあたりを心つかひ給ふ也それをまき柱の君はしらす玉かつら腹の男君たちなとして繼母へ申かよひ給へはさすかにえもてはなれす玉かつらあひしらひ給ふとなり弄花に玉かつらのかたりよりといへるいかゝ此前の詞にも玉かつらの御あたりをまき柱のなつかしく思ふと有

おほ北方といふさかなもの（祖母也イ）　是式部卿の室家なりまき柱の母君の母なり前に大宮といへるはこれをもて思ふに式部卿宮なるへしまへにもしるすと云と

も弄花に所々にて相違の間註之
みこたちはのとかにふた心なく　私大北方の詞也
秘内へ參らせすして宮なとへ參らするにはとおと
していふ心也　秘大將のたまふなり内へ參らせ
すして宮にたてまつるはさやうの所を心やすくと
思ふはかりなりとおとして云心なり　私此詞大將
といへるいかゝ大北方のさかなくていふ事なり
宮もゝりきゝ給ひて　秘螢兵部卿宮なり
ふるさとにうちなかめかち　螢宮まき柱へ疎遠なる
さまなり
たゝさるかたの御中にて　秘二年はかりかくてゐ給
へり此後紅梅大臣の室に成給へり
はかなくて年月もかさなりて　秘源氏四十二より四
十五までの事此内に有へし明石姫君夕霧の御こと
もあまたまうけ給へる事此中に有へし
内のみかと御くらゐにつかせ給て十八年にならせ給
ぬ　河仁明天皇治世十七年承和十四年嘉祥三十八年
にておりさせ給ふ　今年は新帝の御宇にとるへき
故也　清和天皇治世十八年是貞觀　無繼嗣例　朱
雀院昌子内親王後一條院章子内親王馨子内親王　花冷
泉院は源氏廿八歲の時受禪ありてそのあくる年を
在位のはしめにとりて源氏四十六歲まては十八年
にあたる也十八年在位は清和天皇の例なり秘　弄
十八年の例在河海此卷源氏四十一歲より四十六七
歲までうつりぬ十八年にならせ給とかけり此程に
春宮の御子も玉かつらの御子たちも出きぬるなる
へし冷泉院讓位今上即位源四十六歲　十月に住吉詣又年
かへりぬ四十七二月に女試樂十二月朱雀の御賀の
事まてあり冷泉院御讓位の次の年御在位より十八
年にかけりこゝにて諸人の年齡をかんかへ知へし
源氏四十六歲にいたる
世中はかなう　弄冷泉の御心也
つきの君　秘皇子ましまさゝるなり
おもふ人々にも　弄冷泉院源氏を思ふやうにうやま
ひ給ふ事かなはぬによつて内々の御心にかたしけ
なくおほしめすなり
日ころいとおもくなやませたまふ　河依御藥俄脫屣
模延喜例歟李部王記　秘陽成院依御腦脫屣の事あり
き弄閑
おほきおとゝちしのひやう（ヘイ）　秘柏木の父也　花太政

大臣致仕の例はなけれども左右の大臣致仕になすらへて云り但天暦三年正月三日是日太政大臣致仕表從中務省奏進有勅答不許云々（見李部王記） 弄 冷泉院の御代に太政大臣關白し給ふ御位すへり給ふによて又職を辭して致仕せんとなり 闕云致仕冠をかくる如何 一掛今よりは出仕をやめて隱居するを云其時は冠も入ましきなり

年深き身のかうふりをかけん 河 東觀漢記曰王莽居隔（椅イ）子宇諫莽而莽誅之逢萠謂其友人（王イ）曰三綱絶矣不去禍將及管（管イナシ）人即解冠掛東門而去 後漢書逢萠字子康北海人掛冠避世牆東陶弘景神武門掛冠去

左大將右大臣 弄 ひけくろ也 秘 ひけくろなり 關白に成給ふなり 河 粟田關白 道兼 于時右大臣攝籙

女御の君もかゝる御代 秘 承香殿の女御髭黑の兄弟なり 今上春宮の母女御なり弄同

かきりある御位を 花 今上の母女御御贈后の事をいふなり

ものゝうしろの 河 人の見ぬ心なり

六條の女御の一宮 秘 明石中宮也 弄 明石の中宮腹の御子なり

右大將の君大納言になりてれいの左にうつり給ぬ
弄 夕霧なり 末に左大將とあり

六條院はおりゐ給ひぬる 冷泉院の御つき 河 冷泉院世次おりゐの御門冷泉院にておはしますされは冷泉院ときこえさす 冷泉院は大炊御門南二條北堀川西大宮東四町累代後也嵯峨天皇御宇此院弘仁十四年四月十一日天皇遷冷泉院十七日讓位於皇太弟淳和承和元年八月遷冷泉院天長十四年帝朝冷然院嘉祥三年正月同仁壽三年二月晦日幸冷泉院覽櫻花天暦三年九月廿八日陽成院以冷然院被奉朱雀院八年三月十一日改冷然院爲冷泉院 秘 朱雀の御かたよりつか（きイ）さ給ふ事を源は口をしく思給ふ也冷泉院とてゝにてはしめてかけり凡おりゐのみかとを冷泉院と申なりはしめは冷然院とかけるを此院しけく火災ありさて冷泉とかきて火災をさくる心なり冷泉院とのもしをいれてもよめり 又只もしを略してよめり兩儀なり 花 帝皇系圖曰弘仁十四年四月十一日遷于冷然院十七日讓位於皇太子天暦八年二月十一日改冷然院爲冷泉院

おなしすちなれと御思ひなやましき事なくて　秘六條院の御子なるかくれのあれはなり　冷泉院は誠の六條院の御子なれは系圖には桐壷の御門の御子にかけりそれをおなしすちとはいへるなり陽成天皇の御母二條后へは業平中將まいりちかつきしかは清和の御子とはいへとまことは業平の子といふうたかひあり是によりてその一代はかりにて末の代にはつたひ給はす冷泉院の御事是になすらへおもふへし思ひなやましき事なくて私思のなやましき事とはふかく愼み給ひし故に無事なりと云なり　弄冷泉院の事なくて過給にしに源氏密通の事もあらはれす無ゐなるはかりにて御代をつき給ふ御子はなしとなり

末の世まては　秘末まては相續し給はさるとなり

人にのたまひあはせぬ　秘源の心ひとつに思ひ給ふなり

春宮の女御は　秘明石中宮なり十八年とかきて年を送りし間の事なり弄

源氏のうちつゝき后にゐ給ふへき事を　河榮花物語に源氏のうちつゝき后にゐ給ふ事は春日の神の御とかめありと見えたり媞子中宮の時の事なり　花薄雲女院（先帝御子 桐壷后）　秋好中宮（前坊御女 冷泉院后）　明石姫君（源氏御女 今上后）是を源氏のうちつゝきゐ給ふとはいへり薄雲秋好は姓を給はれる源氏にてはなけれとも皇女をは皆源氏のかたへとるなり藤氏は后にあらさる故なり薄雲秋好明石中宮皆王孫（子イ）なれはいづれも源氏にとるなり河海榮花物語をひけり

冷泉院のきさきは　秘秋好なり

ゆゑなくてかうしおき給へる　弄秋好の心に源氏のかくし給ひたる御心をありかたくおほすなり　私ゆゑなくとは皇子なともおはせぬをとなり

院のみかと　秘冷泉院なり　弄冷泉院の六條院へ御幸なとありしなり

ひめ宮の御事は　秘女三宮なり　弄花鳥

みかとの御心とゝめて　秘女三は今上の御いもうとなり　弄みかとは今上なり

大かたの世にも　秘内にも大切にし給へるなり

たいの上の御いきほひ（イキホヒ）　河徳　又勢　秘されとも紫上には及ひかたきなり

御中いとうるはしう　源と紫上との御中なり

いまはかくおほそうのすまゐならて　弄紫上源氏へ申給ふ　秘此六條院は物さわかしき所なりしつかなる所にてをこなひをもしたきとなり　此段紫の心中なとなり

あるましくつらき　秘源の詞

みつからふかきはいある事なれと　源も此事素懷そとなり

とゝまりてさう／＼しく　紫を跡におきてはさうさうしくおほさんをいかゝと延引するとなり

ある世にかはらん　又もろともにかたちをかへ給ふとも目前に紫のかはらんさまをみんは心くるしとなり

つゐに其事とけなん後　源氏出家の後ともかくもおぼしたてとなりかやうに源のさまたけ給ふなり

女御の君たゝこなたをまことの御おや　秘明石中宮紫上を實母のことくし給へるなり

御かたはかくれおの　明石上なり

中々ゆくさき　明上の今もていてぬも行さきたのもしきとなり

あま君も　明石上の母なり

めをさへのこひたゝらして　尼君の年よりたるさまなり　河目をのこひたゝらかすなり　秘の義與にあり追て次に加之　秘河海たゝらかしてといふ文字入ことの外俗なるならん青表紙いたゝしてと有可然なりたゝしてとは目たゝきめしてと云事なり目にたつなり事々しうみえたるなり

すみよしの御願かつ／＼　長保五年九月九日御堂關白（于時左大臣）随身室家參石清水并住吉給東遊神樂等有之今案源氏君相具臺上參詣住吉可准之

年ことの春秋のかくらになかき世のいのり　弄明石入道願に毎年せし神樂なるへし　なかき世は末の世ゆく末までの祈歟

けにかゝるいきほひならては　秘天下の國母なとならては御沙汰ありかたき事ともとなり

さえ／＼しくはか／＼しく　秘才學かましきなり

秘願書のさまなるへし

佛神のきゝいれ　願書のおもむき佛神も納受あるへくかきなしたると入道の文章を源のほめ給ふなり

あはれにもおほけなくも　あら／＼しきひしり心に思ひよりし事のあはれに又身にも應せす心たかゝ

りける事よとおほすとなり
しはしかりそめに身をやつしける昔の世のおこなひ人　秘眞實變化の物かとなり　私若菜上にへんけの物とおほせとあり　花交野大領彌益女高藤公密通生女子爲承香殿女御生延喜帝
このたひは御こゝろをはあらはし給はす　秘明石入道の願とはなくてまうて給ふなり弄
うらつたひの物さわかしかりし　秘須磨より明石への道すからの願をはみをづくしの卷にてはたし給へり　花みをつくし卷にある住吉まうての事也
たいの御うへもくしきこえ　御堂殿の例花鳥にみえたり弄　私前にあり
大臣ふたところ　右大臣は髯黑なり今一人は左大臣歟内大臣かなるへし
まひ人はゑふのすけとも　秘花鳥にみえたり　花舞人は十人石淸水賀茂の臨時祭のとし六衞府のすけ共なり陪從をは舞人と云十二人四位五位六位各四人なりそれも道々のすくれたるをめすよしみえたり又くはゝりたる二人は加陪從といふ是も兵衞府尉なるものなり春日祭近衞使の時舞人陪從は皆近衞の官人等也臨祭の試樂調樂をは兵衞陣にて是をおこなふ故に陪從はおほく兵衞つかさなり　弄問云東遊の舞人事歟加陪從はいかなる時くはゝる事（にイ）にか　一勘答今世にも八幡臨時祭の時陪從の外は加陪從とて諸家諸大夫なとめしくはへらるゝ事あり昔は皆道の者の所役たるなり
へいしうも　秘東遊のためなり　此所々の陪從は近衞司の人々なり春日祭舞人の陪從は近衞司の官人也賀茂臨時祭の試樂は近衞司にてあれは陪從おほくは兵衞司なり　弄禪問云陪從を歌人といふ事うたひとゝよむへきか　一答陪從は臨時祭の時歌人にては侍れと二字をうたひとゝはよむへからさるにや
くはゝりたるふたり　河加陪從二人近衞司例可勘
秘加陪從とて諸家の諸大夫なとめしくはへらるゝ事あるなり　弄加陪從は近衞司の人おほくあり
みかくらのかたにはいとおほく　花御神樂も皆近衞の召人なり　秘住吉にて神樂あるへし　弄神樂の人數も又ありとみえたり
内春宮院　内今上　春宮明石中宮腹の一宮　院冷泉院也

うまそひすゐじんことねりわらは　馬副随身　小舎人童也　秘馬そひは侍のよる事も有小舎人わらは中間の分の品也　弄問云いかやうの品なるへきそや一答當時は中間（チツケン）ふんさいの品なり又馬副にはさふらひのする時もあり

女御殿たいのうへ　秘明石中宮紫上同車なり第一の車なり

つきの御車にはあかしの御方尼君しのひてのり給へり女御の御めのと心しりにてのりたり　私云此車には明石と御乳母とあひのる分にて忍びて尼君をものせたる故に心しりにてとかけり末の詞にてみえたり　秘女御の御めのと案内者の分にてのるなり　弄此乳母此時の心しりとみえたりよろつ案内者なとの心なり　私明石上母の尼君とのり給へる車に此乳母ものりたりとみゆ

かた〳〵の人たまひ　河後車を申にや　人給前に註す　副車（ソヘクルマ）（ヒトタマヒ）

うへの御かたの五（イツヽ）　紫上方の女房衆なり

女御とのゝいつゝ　明石女御なり

あかしの御かたの三（ミツ）　秘あかれは流なり　弄問云車の事也あかれは流なり云々如何　一勘あかれは別の心なり如何人々あかるゝ別（ワカレ）事云々　一答か文字にてりてよむへし

さるはあま君をおなしくは老の波のしわのふはかり　花古今長歌なみのしわにやおほえれん　此段尼君の参りたるをことわるなり

人めかしくて　秘源は一かと人の目たつほとにして参らせんとなり　尼君の老後に満足させんためなり

大かたのひゝきにたちましらんも　此たひ目たつさまならんはいかゝと明石上のしづめ給ふなり

おもふやうならん世　花東宮の御位につき給はん世をいふなり

のこりのいのち　秘ゆかしかり給ふなり　しのひて尼君のゝ給へるとは此故にまへにかけり

さるへきにてもとよりかくにほひ　秘明石の上なとはことわりの事なり此尼君一段の事そとなり

十月（カミナツキ）なかの十日なれは　花一月卄日を上中下にかそふれは卄日は中の十日なり此ゆゑに下に卄日の月といへり

神のいかきにはふくすも色かはりて松の葉の紅葉なと音にのみ秋をきゝぬかほなり　河「千はやふる神のいかきにはふ葛も秋にはあへすうつろひにけり一說云松の下葉の紅葉にあらす下廻紅葉也云々なへては下葉と心得たる歟　もみちせぬときはの山は吹風の音にや秋をきゝわたるらん　弄　松樹の葉色なり

おとにのみ秋を　弄　古歌の心をとれる殊勝也　祕　引歌とりさま面白しもみちせぬときはの山云々　私常盤の山は紅葉せすして風の音にのみ秋有此景氣は葛もうつろひ松のあたりの下葉おもしろく風しつかなるといへるなり引歌かへたる面白なり

あつまあそひの　河　東遊神樂也

ことにうちあはせたるひやうしもつゝみをはなれてとゝのへ　河　神樂は打物なとにて拍子をとゝのへたる故也　花　ことは和琴なり大皷なとをうたぬをつつみをはなるゝといへるなり　祕　ことには和琴なりつゝみをはなるゝとは東遊に太皷なきなり弄

所からは　祕　住吉なり

山あゐにすれる竹のふしは　河　山藍小忌なり　花　賀茂臨時祭舞人竹文青摺袍蒲萄染下襲地摺袴合袴陪從櫻襴文青摺袍柳色下襲白表袴合大口赤紐(純イ)半臂緒引帶等各開付之　祕　舞人の着する小忌をいへり藍にてすれるなり　弄　詞のつゝき東遊の裝束にや

かさしの花の色には　花　臨時祭插頭使藤舞人櫻陪從山吹但住吉詣には御使なし舞人陪從のかさしは花の上を右にてさすなり諸社行幸の時東遊には使もあるなり

めのみまかひいろふ　祕　まかひ色めくなりいろふの詞種々の義ありしも殊なる事なし　弄　問云いろふ如何書寫の誤にや一搦いろふは色めく心なり猶可尋

もとめこはつる末に　河　拾遺求子「ちはやふるひらのゝ松の枝(數イ)しけみ千世も八千世も色はかはらし

わかやかなるかんたちめかたぬきて　祕　花鳥にみえたり　弄　かたぬき東遊なり　花　東遊譜云先一二歌(韻頭イ)次駿河舞次求子加太於呂之調子高麗雙(頭イ)調なり長保五年住吉詣於御社左府以下上達部其外殿上人合十人舞了神主立舞相府脱衣之云々　今案是は片舞といふことなり神社行幸か樣の物語(詣イ)の時歟求子

はてゝ後公卿以下十人かたぬきて舞事有かたおろ
しと云すなはちこれなりすはうかさねは公卿の下
かさねの色ゑひそめは殿上人の下かさねをいふな
り紅のあこめ袂時雨とは紅葉色にとりなしていへ
る詞なり

すはうかさねのゑひそめの　此の字有無多本なり
只下かさねの事なり　私花鳥にすはうは公卿の下
重ゑひそめは殿上人の下かさね云々然らはのもし
の無を用へし

ひきほころはし　弄問云ほころはしたる其様如何
一拗かたふく事をいへり紋（綻イ）かすにはあらす肩ぬき
たる體なり　秘かさねたるをぬきたるなるへし

けしきはかりぬれたる　秘折ふしの景氣なり

おはしをは忘れて　秘面白きさまなり

いとしろくかれたるをきをたかやかにかさして　河
荻挿頭事人長の事也尋常には榊をもつて也但清暑
堂の御神樂の試樂執柄家にておこなはるゝ時かれ
たる荻をもつと也　花荻をかさす事は人長の作法
と云る人長は神樂に有東遊のかた舞の事にいへる
おほつかなし　秘河海の説不審なり只舞人の時の
奥にせし事なるへし　弄河海に人長とかけり不用
之人長は神樂に舞変にて樂遊（は東遊也イ）て如此之樂の末に公
卿殿上人等も舞事在例云々陪從にてはあるましき
か上達部なとなるへし問云河海に清暑堂御神樂執
柄家にてをこなはるゝ時荻の枝を持也と云々荻を
かさす事この時に限る歟此卷には東遊の末の舞に
荻をかさしたるとかけるにや一拗此事未一決なり
問云東遊事神事の時はかりをこなふ歟　一拗合點

いり給ひて　秘棧敷なとにゐ給へる歟

二のくるまに　弄一番の車の次成へし棧敷なとより
内々の方へ入給なるへし　秘明石の尼のかたへな
り　聞明石上の歌（言イ）なり

河たれか又心をしりて住よしの神世（代イ）をへたる松そこと
とふ　昔の御ありさまを又しる人もなけれはなり心
あらはなり諸抄註なし

かのうらにて　明石より歸京の事

女御の君のおはせし　明石の浦になり

世をそむき給ひし人　秘入道の事なり弄

返明石尼住の江をいけるかひあるなきさとは年ふるあまもけ
ふやしるらん　弄明石姫御返事なり海士も思ふらん

となり即尼の心なり　秘　結句妙なり我身の事を忘（しイ）るらんといへるおもしろしまことにいけるかひあるなきさなり

明石　むかしこそ先忘られぬ住よしの神のしるしを見るにつけても　秘　尼君ひとり詠云々又明石上の歌ともいへり兩義とも用之尼のひとり詠しけるなり問云右兩首六條院の誰か又心をしりて住吉のとよみて二の車につかはしたりし返歌なり兩首共に明石の尼の歌にや一勘後の歌は明石上の歌なり

松原もいろまかひ　松のみとりも霜の色にかはりたるを色まかふと云なり此時此所の景思ひやるへし

みかとより外の物見　紫上門外の見物なとは目なれ給はすとなり　河　君耳唯聞堂上言　君眼不見門外事白氏文集

紫上　住の江の松に夜ふかくおく霜は神のかけたるゆふかつらかも　秘　紫上の歌なりからめきたる歌なりたかむらのあそんのひらの山さへといひける雪のあしたをおはしやれはまつりの心うけ給ふしるしにやといよ／＼たのもしくなん　河　浪起桑田行變海花開月令不依春（對雪琴野相公）　今案古人釋載此詩不叶歟或人云野相公の詠にひらの山さへゆふかづらせりと云歌有之云々未勘出ひもろきは神の心に云々　文時卿歌なり如何　花　清輔朝臣袋草子文時卿歌「ひもろきは神の心にうけつらし比良の高根にゆふかつらせり　今案この文時の歌ひらの高根にゆふかつらせりとは雪を詠する歌とこそ覺え侍れさらすしてひらの山のゆふかつらせんことおほつかなし又文時を篁と書たるは名たかへとそ覺侍る其故は關吹こゆるすまの浦風の歌は壬生忠見か集に侍るを行平中納言の歌のよし此物語にのせたりそれを續古今に源氏にもとつきて則行平の歌と入たりたしかなる忠見か歌にて侍りか樣の事も侍れは文時の篁とのせたるも思ひちかひたる事はいかなるかしてき人のうへにも漢家本朝ためしある事なり又清輔袋草子は源氏物語より後に書たる物なれは篁か歌なるを文時とあやまりてもや書侍りつらんいかにも源氏の説を本として關吹こゆるすまの浦風の例を引へき也　弄用之　秘　此歌の事花鳥に委見えたり松のうへの霜のふかくおけるをみて彼歌よみし時もかくやと思ひ出せるなり

明石女御 神人の手にとりもたる榊葉にゆふかけそふるふかき夜の霜 心てとなる事なき諸抄註なしゆふかけそふる也ふかき夜の霜とは木綿かけそふてふかき夜の霜といふ心なり

中務君 秘 紫上の女房是は源の宮女にて紫のかたにある歟

中務君 はふりこかゆふうちまかひおく霜はけにいちしるき神のしるしか 秘 是は前の歌をうけてよめり 河 祝(ハフリ)子(コ) 私 神の治定の納受のしるしかと讀りかはかななり

つき〳〵敷しらす 秘 草子地

いできえして 出はへのせぬなり出はへに對していへり

もとすゑもこと(たイ)〳〵しきまて 河 神樂譜にとて本歌ひるめの神を末歌さすやをかへの私神樂の歌本末是にかきるへからす仍のせす

ゑひすきにたるかくらおもて 河 神樂おもてとは寒き顔色歟或は顔を見合て並居たるを云也 花 神樂おもては神樂する人の面なり 秘 神樂には勸盃のある故なり

庭火もかけしめりたるに猶まんさい〳〵と 河 神樂有千歳早歌 本方 せんさいせんさいや千とせのせんさいや末方萬歳まんさいまんさい萬歳やよろつよの萬歳や 庭燎(ニハヒ)四聲字苑云燎力照反 和名邇波比毛詩有庭燎篇

ちよを一夜に 私河海引歌あり不用之

うへのきぬの色々けちめ 河 四位紫 五位緋 六位緑袍 四位五位ましはるなり

あをにひのおもておりて 秘 織て覆なり 河 折敷のおもてにはりたる絹も尼なれは鈍色なるなり 弄 織て覆たるなり一本をして織て用 聞 おりては下車の事云々如何

しりうこちけり 河 後言(シリウコト)うしろにて云言也女房なとの云なるへし

わつらはしきかんだ(えイ)から 河 神寶なり

よろつのせうよう 逍遥也 あそひつゝかへり給ふさまなり

いひつゝくるもうるさくむつかしき事ともなれは 秘 讀切なりおもしろきかきとめなり

かの入道の 是は尼君明石の上なとの心中を察してかけるか 秘 かやうの事をうき世にありて聞なか

ち立まさらはさらん（ましらさらんイ）もあかぬ事にて有へきとなり
かたき事なりかくましらはましと（もイ）見くるしくや　花
此入道のやうに世をそむく事はかたき事そとなり
聞　さやうにいつくまても滿足する事は世間にはか
たき事と云なり　私かゝるありさまをみすきかぬ
は滿足せぬ事なりされともさやうにたらひたる事
はかたき事なりといひてさて又入道のなからへて
立ましりたらんは一段見くるしくやあらましと評
判していへる歟
世中の人これをためしにて　秘　菓子地　かやうの子
細を聞及ては世間の人の心たかくならん時代そと
なり　河　長恨歌傳男不封侯（褰イ）女作妃君看女却爲門楣
其天下心羨慕如此
めであさみ　聞　世俗に物をあさみたると云事なり
ちゞのおとゝの近江君　狂言めきてかけり
入道のみかとは　花　朱雀院の御事なり秘弄同
內の御事も　今上の御政なとにもいろひ給はぬ成へ
し
春秋の行幸　秘　朝覲行幸なり　河　春秋の行幸朝覲也
孟子曰天子適諸侯曰巡狩々々者巡所守也諸侯朝
於天子曰述職々々者述所職也無非事者春省耕而補
不足秋省歛而助不給
ひめ宮の御事　女三宮なり
この院をは　弄　六條院の事　秘　源をは大かたの事に
てとなりよくはくゝみ給へと內へ申給ふなり
二品になり給て御ふなとまさる　秘　女三宮二品にな
り給ふなり弄　花　祿令一品親王封八百戸位田八十
町二品六百戸位田六十町三品四百戸五十町親王封（四歟）
減半位田減三分今案二品內親王は封三百戸位田二
十町也河海に委かんかへしるされたるなり　河　二
品親王封百五十戸位田六十町　私　此事非なり　弄
問云御封戸の戸といへるはいか樣の事そや一勘戸
は民戸也千戸萬戸と云は民戸をよせらるゝ心なり
それを封戸ともいふなり
たいのうへかく年月にそへてかた／＼まさりたまふ
御おほえに　紫上の心なりかた／＼まさり給ふとは
女三は今上の御妹にて二品なとゝ給ふ明石上は女
御の實母にて行末たのもしき人にていまもいきほ
ひもそふへし
わかみはたゝひとゝころの　秘　紫上は源の心さしを

たのみたてまつるはかりなり
あまりとしつもりなは　秘寵は年を經て衰ぬへきと
なり
さかしきやうにて　秘紫上の心つかひ妙なり
内のみかとさへ　秘女三宮の御事内のみかとさへ心
にいれ給ふ事なれはおろかならすし給へるなり
わたり給ふことやう〳〵ひとしきやうに　弄女三宮
ゝ紫上とに源氏の心さしをいふ也
さるつきことゝは　秘紫上の心なり
東宮の御さしつきの女一の宮　秘明石中宮の御腹也
後に薫大將心かけ給ふ人なり
いつれもわかす　明石中宮の宮たちをいつれも紫上
のいとほしみ給ふとなり
夏の御かた　秘花散里也
大將の君のないしのすけはらの君を　弄河典侍(ナイシノスケ)惟光朝臣女
弄夕霧の大將の御子をかしつき給ふなり
心はえもほとよりは　内侍のすけ腹の姫君也源もう
つくしみ給ふなり
すくなき御末も　秘明石中宮の御腹夕霧の御子あま
た侍れは末は繁昌あるとなり

つれ〳〵もなくさめ給ひけり　源の御さまなるへし
右のおほとのゝまゐりつかうまつゝ　秘髯黒なり
むかしのかけ〳〵しきすち　河玉かつらを源氏の思
ひはなれ給ふなり　弄玉かつらの君源氏の御方に
もわたり給ひなとするなりかけ〳〵しかりしとは
源氏の心なり
姫君(宮イ)のみそ　秘女三宮なり
女御の君は　弄桐壺　秘中宮におとなひ給へは心や
すくおほして今は此女三宮の事をのこ源は心をつ
け給ふとなり
この宮をはいと心くるしくをさなからん　弄女三宮
なり　花女一宮の御事なり　秘女三とみえたり花
鳥の説いかゝ
朱雀院の今はむけによちかく　弄をはり近き心なり
弄　私御在世もほとあるましき心にいへり
たいめんなりいま一たひ　秘女三宮の御事なり弄
うらみのこりもこそすれ　朱雀のいく程もあるまし
き御心ちすれはもし再會遲々してなくは來生の恨
も遺し給ふへきかとなり
わたり給ふへく　朱雀の御かたへ女三參り給ふと也

ついてなくて　つきもなくてはいかゝと源のおほし
　めくらすなり
此たひさたち給はんとし　秘今年朱雀の御年四十九な
　り明年五十にみち給へり源は四十六歳なり弄
わかなゝとてうしてや　秘御賀也　此巻の名なり
御ほうふくの事いもゐの御まうけ　秘よのつねの御
　賀にさまかはりたり　河齋日本紀　白氏文集云十三
年來座對山唯將無事化人間齋時往々聞鐘笑一食如
何不食閑　韓康伯曰洒心曰齋防患曰戒　延喜式曰齋
稱片膳　齋宮寮　菅家御集云紙裘生薑稱樂種竹籠昆布
　記齋儲
人の御心しらひ　河心知　心調イ
右の大殿の御こともゝふたり　秘髯黑也をさなき人
　々に舞を習はせ給ふなり
大將の御子ないしのすけはらくはへて三人　夕霧の
　御子三人の内典侍はら一人なり
なゝつよりかみの　秘七歳よりとしの行たるはとな
　り弄
兵部卿の宮のわらはそんわう　螢宮の御子なり又孫
　王なり　河童孫王

宮はもとよりの御こと　秘女三宮なり弄
　さりともきんはかりは　源の琴はかりはをしへ給ひ
　つらんと朱雀院よりも内にもゆかしくおほしめすと
　なり
院の御前にて　朱雀の御前なり
　きかはやとなん　今上の仰なり
大こくともの四季につけてかはるへきひゝき河琴の
　大曲也春は角夏は徵秋は商冬は羽土用は宮也律は
　寒呂は温也分清濁語五音法曲也蔡邕女訓曰舅姑君
　命之鼓琴必正座操琴而奏曲若問曲名則捨琴興對曰
　某曲小曲五終則止琴有大曲中曲小曲也出太平御覽
　尙書云聲依詠律和聲聲謂五音宮商角徵羽也律謂六律六呂十二月之音氣也當依聲律以和樂也
そらのさむさぬるさを　秘花鳥師曠をひけり　花樂
　書曰師文之變易寒暑孫登之感動風雷云々琴書曰師
　曠は晉樂官也上於琴能易寒暑召風雷爲晉平公鼓之
　感玄鶴六下舞
心もとなくおはする　女三のさとくおはしまさぬな
　り
ゆしおんするまも　河由し按するは押（オス）なり　手仕な
　り　秘由はゆるなりあんするはをすなり

女御の君　秘明石女御也
みこふたところおはするをみもけしきはみ　弄明石
の女御の御腹なり又もとは匂兵部卿宮を懐姙ある
なり
五月はかりにそなり給へれはかみわさなどに　河宮
女懐姙者散齋之前退出有月事者祭日以前退宿廬不
得上殿其三月九月潔（日イ）齋預前退出宮外物忌令
十一月十一日過してはまゐり給ふへき　河十一月十
一日神今食事歟　秘十一月過しては一本十一日と
あり十一日神今食潔齋の日なれはなり又十一月は
神事の月なり　両義共に用之　弄十一月にや但諸
本十一日と云々神今食一段の神事過てにや可尋證
本歟　聞十一日ど有又十一月と書本あり
なとてわれにつたへ　秘明石女御の御心なり
冬の夜の月は人にたかひてめて給　河枕草子にすさ
ましき物しはすの月夜とある心なり　秘人のめて
さるものにいへとも此物語には多く許するなり
聞是は冬の月を源の愛し給ふとなり
たいなとにいそかしく　秘いそかはしとて春はまゐ
りてしつかにきくへしとなり

としかへりぬ　朱雀五十歳源四十七歳なり
院の御賀　秘朱雀の御賀まつ内よりしたまふへき故
なり　弄内よりさせ給ふにさし合により源のをは
程過し給ふなり
二月十餘日（キサラキトヲカアマリ）　二月十餘日あまりと源の御賀の日とり
なり
たいにつねにゆかしうする　紫の女三の琴をゆかし
かり給ふなり
さうひはのね　箏　琵琶なり
女樂（ヲンナカク）こゝろみさせん　秘女三宮は試樂也朱雀院にて
所作あるへきためなり餘の人々はたゝ女樂までな
り弄　河左傳襄公十一年鄭人賂晋侯以女樂晋侯以
樂之半賜魏絳　史記曰孔子爲政齊人懼利鉏（黎イ）乃選
齊國中女樂好者八十人　御記曰天德三年十月十九
日召内教坊妓女十人令奏絲竹
たゝ今の物の上すともこそ　秘世間の物の上手と云
もなきは云々源の平生の事を申給ふなり
いとふかくはつかしき　秘随分尋ねもとめし内にす
くれたりしはなかりしとなり　私源の自讃の詞也
我心の及はぬほとの事はなかりしとなり

又この比の人々のされよしめき　秘當代の者の器用なるは臨說有正體なき事のすくれなきとなり
きんはたまして　秘琴は女三宮ほとつたへたる人もなきとなり
うちゑみて　弄女三の宮なり
廿一二はかりに　今年廿一なるへし源へわたりたまふ年十四歲とみえたりその後八年に歲ぬ弄
院にも見えたてまつり給はて　朱雀へ女三の久しく見え給はぬ事なり
けにかゝる御うしろみ　源へ朱雀よりあつけ給へるをけにもといへるなり
正月廿日はかりになれは　花まてとは十九日なりふし待の月と下にみえたり
月たゝは御いそきちかく　秘二月になりなはとなり御賀の事をいへり花弄
しかくめきて　秘ことしく人のいひなすへしとなり
しんてんにわたしたてまつり給ふ　花女三の御かたなり　秘女三のおはしますかたへ紫上をわたし給ふなり弄
こなたにとほきをは　秘女三にうとき人々をはのぞき給ふなり
わらはへはかたちすくれたる四人　秘紫上の童なり
花是は紫上の童女なりあか色はうはきなり紅のうちたるはひとへをいふにや
あか色に　秘あか色のうはきなり　河あをじ　釋云五位裝束なり青彩事なり云々青磁是は茶碗名なりその色は似たる物なり案之褄子なり　延喜三年正月十四日蹈歌御記云歌頭給袿舞人所人等給褄子云云　私褄子はあをと云物の事歟如何
女御の御かた　秘明石上の女御なり　花あを色はうはきなり
やまふきなるからのき　秘正月なれはなり　弄一勘唐綺を山ふき色にそめたるなり
わかしの御かたのはことしからて　花紅梅さくらはうはきなりあをしはかさみをいふへし　秘あをし茶碗の青磁なとの色なり　弄私秘にあり河海に見えたり
うちなめなと　河裝束はうちてきらをつくる本儀なり御うちとのとてありかたひきは略義なり

宮の御かた　秘女三宮なり
あをに　秘ふかく青きなり　花あをにはうはきなり
青丹は濃青に黄をさしたるなり弄　青丹萬葉にあ
をによしならと云り昔彼所の土のあをくふかくり
けるゝにて土器をつくりそめけるよりいひそめた
るなり　一説緑青うつほの物語春日祭のしもつか
へはあをにゝ柳かさねきたり云々
院おはしますへき　秘源氏なり
右の大いとのゝ三らうかんの君はらのゐに君　鬚黒
の男子四人なり先腹の子二人なり大殿のためには
三らう玉鬘腹に嫡子といへる也女樂によて若年の
人をいたし給ふ也
左大將の御たらうよこふえ　夕霧の嫡子雲井の雁腹
なり左大將然へし
御ことも　弄絃の惣名なり
こんちのふくろ　河紺地袋
宮にはかくことゝしき　弄琴のことなり　秘女三
宮は如此名物はいまたえひき給はしとて用意ある
なり
大將をこそ　河夕霧也

あかしの君をはなちては　明石上の外は皆源氏の御
弟子なり
わてんこそいくはくならぬしらへなれと　和琴は日
本にてつくる物なり六絃にて絃なともすくなけれ
は物にあはする心かはりてむつかしき大事多き歟
猶可尋之
春のことのねはみなかきあはすへ　秘古來心得かた
き事なり　弄問云春のことのねはみなかきあはす
る物なり如何或本にはさる物とことのねはみなか
きあはするとあり一樹春の字書あやまり有歟さる
物はまされる歟　箋未決　了簡在別
おまへのことゝしく　弄内裏にてのよりもといへ
り
花はそのふる雪　弄梅花成へし　秘梅なるへしあ
まさる雪のなへてふれゝはの心なるへし　聞梅な
りふる雪は古雪なり去年の雪なり云々　我古雪の
義不審只降雪成へし古雪不可用之
うくひすさそふつまにしつへく　河「花のかを風の
たよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる
おとゝのあたりの　弄殿中をいふなり

さうの御ことのすそすこしさしいてゝ　源の箏をは簾下よりすこしさし出てゐたまふなり弄
かろ〳〵しきやうなれと　秘 源の詞也
うちかしこまりて　秘 夕霧なり
いちこつてうのこゑにはちのをゝたてゝ　河 發絃箏調子絃也雙調以三爲發盤渉調以五爲發也　花 發の絃は初絃をいふと云々調子の色の聲をいふならは一越調は一の絃をはちのをといふへきにや猶尋へし　弄 宮の絃にや云々雖見河海未決
猶かきあはせはかりは　秘 夕霧にひき給へとなり弄
さらにけふの御あそひ　秘 夕霧の詞
さもある事なれと　秘 源の詞なり
うつくしきとのゐすかた　河 直衣なり
かみさひたるてつかひ　聞 聲のすみのほりたる體なり
ふかき御らうのほと　秘 能稽古し給ふ故なり　河 御らうとは上臈の心なり或云和琴を稽古の勞と云歟但是はさもきこえさる歟此物語に人のしなを臈といへることとあまたあり　弄 勞をつみ給ふとなり
物のひま〳〵に　弄 樂器とものひま〳〵より聞るなり
はうしとりて　秘 夕霧なり
すこしふつゝか　秘 つよきかたをいへり弄
月心もとなき比　弄 妙なり廿日比の夜なり　秘 廿日比の夜のさまなり月のかすみたるをいへり私月のかすみたるにては有へからす此末の詞にふし待の月はつかにさしいてゝとありこゝは未出の心なり
宮の御かたを　秘 夕霧のはのかにのそき給ふなり　弄 女三なり
二月中の十日はかりの青柳のわつか[はイ]にしたりはしめたらん心ちして鶯の羽風にもみたれぬへし　河 白雪花繁空拂地緑絲枝弱不勝鶯 白氏文集柳　紫記云少將の君はそこはかとなくあてになまめかしく二月はかりのしたり柳のさましたり　具平親王「鶯の羽風になひく青柳のみたれて物を思ふ比かな　聞 緑糸枝弱云々引此詩
夏にさきかゝり　弄 引歌まてもなし
ふくらかなる　弄 懷姫の時なり
ほかけの御すかた　弄 火影にて見たるなり
けうそくはれいのほと　脇息は常のなれはおほきに

みゆるとなり
花とはいはゝさくらにたとへても（まくイ） 河「櫻よりまさる花なき春なればわたし草木は物ならなくに 私不及此歌 秘事の外にほめたるなり楊貴妃を牡丹に比したり唐朝の花といへるは牡丹の事なり我朝の花といへるは櫻の事なりされはならひもなきのたとへなりさて物よりすくれたりといへり 聞
うすものゝ裳のはかなけなる 花柳のきぬにうすものゝ裳と心得侍へきにや 私明石上の裳を引かけたるは人々に禮をいたす心にや
まほにゐて 聞正體にゐぬなり是も卑下なり
はちのもてなしねをきくよりも 秘前にかみさひたりといひてゝに又かくいへるおもしろし
さ月まつ花たちはなの 河「橘はみさへ花さへその葉さへ枝に霜おけいましときは木 花古「さ月まつ花たちはなの香をかけは昔の人の袖の香ぞする 秘橘はさ月に花さくものなれはいへるなり五月待山郭公うちはふきのうたは四月なり 私河花の引歌用るに及はさるなり
たいのうへのみしかりよりも 秘野分のあしたの事なり弄
心のいとぬるさそ 河緩なり 此段夕霧の心中なり
院はたひ〳〵 秘朱雀院なり弄
心やすきかたに見え給ふ御けはひ 女三の御ありさまはと夕霧の思ふなり人はふるまひ肝要なる義なり心をつくへきをしへなり
この御かた 秘紫上なり弄
あなかちにあるましく 秘夕霧の實法にて身をよくおさめ給ふなり
ふしまちの月はつかにさし出て 秘二月十九日なり弄 河春宵一刻直千金花有淸香月有陰歌管樓臺聲細々鞦韆院落夜沈々 蘇東坡
春のおほろ月夜 弄源氏の詞なり 秘おほろ夜よと讀切て心得へし春のおほろ月夜はあはれとも秋のあはれは猶すみのほる物となり
かやうなる物のねにむしの聲よりあはせたる 秘虫の聲と物の音とよく合なり聞弄
秋のよのくまなき月 夕霧の詞
花の露も色々 秘秋の千穐（種イ）なり
春の空のたと〳〵しき 弄秋はすみのほらすとは大

將又當座をほめたる詞思ふへし　秘笛のねなとすむ事は春はますへきと也夕霧は當時をほめて云り
女は春を哀ふと　河女感陽氣春思男感陰氣秋思女毛詩
いなこのさためよ　秘源氏の詞なり
いにしへより人のわきかねたる事　弄御息にをしへ給ふなり　河春秋の勝負の事也　秘昔よりいひしきにける事なれはわれらはいかゝいまはさためん
私此引歌いかゝ「春秋に思ひみたれてわきかねつ時につけつゝうつるこゝろは　此歌可然歟
こくの物ともはしもけにりちをはつきの物にしたる
河曲呂は春のしらへ律は秋のしらへといふ歟　本は律呂といふ律は陽正なり呂は陰助なり然とも催馬樂には呂律といひて律を次にする也　秘こくの物曲なり日本は呂律を陰陽と用來るなり唐には律呂と云陽をさきにするなり　弄りちをはつきの物にとは春をまされりと源氏の給ふ也　聞云ものゝしらへこくの物ともはしもりちをはつきの物にしたる調曲をも催馬樂のもちいのことく呂律と律を次にとかけるにや　一堪催馬樂に呂律と申つけ侍り　聞本朝の伶倫の相傳も呂律を陰陽と用來云々催馬樂も此分なるをや　一勘唐には律呂と云は陽をさきにするなり文明唐子問答以上一勘一帖至若菜下此所

いかにたゝいま　秘當時のいうそく人を源氏のたつね給ふなり
そのこのかみと　弄人よりまさるをこのかみといへり上手もまねひとる事かたしとなり　秘人よりまさりたるをいへり師兄といふかことし
ほのかなる女たち　今夜の女樂なり
としころかくうもれて　弄女かくともをよしと聞ひか〳〵しきかとなり　私人なとにましらひ給はねは御耳もたと〳〵しく成たるとなり
あやしく人のさえはかなくさりする事とも、物のはえありてまさる所なるその御前の御あそひ　秘此女逵奇特にひきとり給へる也此館は奇特にかやうの事のはやくなるとなり源の自稱なり　弄源氏の院のうちを物のはえある所との給ふなり私雨抄ともに六條院を物のはえある所と源のゝ給ふとあり但いかゝ人々の才覺はかなくとりする事も物のはえありてまさる所なるその御前とあり是は內裏の

事なり物のはえも他所にことなる故に何事も藝能
のしよきなりその御前にて一きさみにえらはるゝ
それかれにも今夜の女樂は勝負あらしと源の夕霧
にの給ふ詞とみゆ
それをなんとり申さんと　秘夕霧も申たく思ひしを
斟酌してありつるとなり
およすけてやはと　夕霧の分明ならぬ心にて功者め
きさし過て申さんかと遠慮したるとなり
のほりての代　河上代　秘昔の事をよくもしらさる
となり　弄上代（ノホリテノヨ）　夕霧先卑下しての詞なり
けにかたはらなきを（ニカリテ）　螢　琵琶琴今の世にはならふ人
なしとなり
わさとならぬ御あそひと　ことしからぬみあそ
ひとかねて心に思ひたゆみける故かとなり
さうかなと　唱歌なり
和琴はかのおとゝ　秘致仕大臣なり弄
こしらへなひかしたる　。弄寒暑なと折に叶ひて調へ
合せたるなり
きははなれぬ　聞一かとひき出る事のかたき物そと
也やまとことなる故なり

いとかしこくとゝのひて　秘紫上をほめ給ふなり
さことしき　弄源返答なり　秘源の詞也
したりかほに　源のうれしくおほすさまなり
けにけしうはあらぬでしども　いつれもあしからす
と源もの給ふなり
ひはゝしもこゝにくちいるへき　秘明石上の琵琶は
かりは我口入せさるとなり　弄明石上は源氏の弟
子ならねと京にては又まさり給ふとなり
おほえぬ所にて　弄大井の宿にての事なり　秘明石
にてきゝ其後大井の里にて聞し事なり　私明石に
て聞はしめ給ふなり弄の義いかゝ
われかしこに　明石上の琵琶の京にては又あかりた
るを源のわかてからのやうにの給ひなすとなり
まへよりも愛にてはましたるとなり是さへ自稱あ
ると人々思ふとなり
よろつの事みちに　弄世中ををしへ給ふなり
秘諸道ををしへ給ふなり
わか心ちにあくへき　何事をまねふとも奥儀を極め
たりと滿足する事はあらしと也
ならひとらん事は　學者になりてならひえん事もか

たきなり
たとりふかき人の　秘よく尋とるへき師範まれなる
となり　弄當世ふかくまなふ人なしとなりされは
すこしにても引えたるさおもふへきをとなり
なたらかに　河朽論語
心をやりて　秘大湿(徳イ)にても有へきなり　秘ひきうる
人なきほとにかたかとをなりともなたらかにしえ
ては滿足もすへきとなり
琴なん猶わつらはし　河白虎通云琴者禁也禁止於邪
氣以正人心也　文選曰曠三奏而神物下降何琴德之
深哉馬融琴賦　私勘文選賦嵇康無此文馬融作笛賦
件賦無此文若他賦之文歟猶可勘之素然私云此勘註
不知誰人取作　秘琴は根源をきはめかたきとなり
このことは　私此事なるへし
天地をなひかし　弄樂書云琴動天地感鬼神　私河海
にもてんちとかんなり花鳥にもてんちと假名に
書り　弄天つちをなひかし　花禮樂通鬼神
よろづの物のねのうちにしたかひて　秘諸の樂器琴
のねのにしたかひたるなり　弄諸器琴の音にした
かふにや事にしたかひて調ある心にや云々

かなしみふかき　秘琴の德なり抄に見えたり　琴の
德なりうつほの物語なとにもあり
この國にひきつとふるはしめ　花波羅門僧正始渡本
朝云々但允恭天皇　文武天皇も彈琴給云々うつほ
の物語にてかけり　弄うつほのとしかけか故も有
おほくのとしをしらぬ國に　うつほのとしかけは遣
唐使の時波斯國にての事なり
雲いかつちをうこかしたるためしありたる世には
有ける　河禮記云樂者天地之和又曰移風易俗天下皆
寧(禮記云言樂用即正人理和名陰陽)　漢書禮樂志曰象天地而制禮樂所以
通神明立人倫(師古倫理也)　又曰孔子曰安上治民摸(莫イ)善於禮
移風易俗莫善於樂(師古曰此孝經載此孔子之言)　文選琴賦曰至人攄思
爲制雅琴大周正樂曰賀韶吳人也常夜彈琴感鬼神見
舞數曲斯亦妙之至也　五音得失事　文選嘯賦(成公子安)
(名綏)　曰發徵則隆冬熙蒸騁羽則嚴霜夏凋動商則秋霖
春降奏角則谷風鳴條註(夏イ)翰云熙美也徵夏音也故冬發
此聲則炎蒸至羽冬音也是騁此聲感嚴霜至商秋音也
春用此聲則秋霖降角春音也秋奏此聲感温風鳴條也
谷風則春風也皆音律至妙感應有如此者善曰列子曰
鄭師文(父イ)學琴於師襄々々曰子之琴何如師父(文イ)曰(讀)清常試

之於是當春而叩商絃以召南呂涼風忽至草木成實及
秋而叩角絃以激夾鐘溫風徐廻草木發榮當夏而叩羽
絃以召黃鍾霜雪交下川池暴沍及冬而叩徵絃以激
蕤賓陽光熾烈堅氷立散師襄曰皡曠之淒（淸イ）角鄒行（衍イ）之吹
律無以加之張湛曰商金音屬秋南呂八月律角木音屬
春夾鍾二月律羽水音屬冬黃鍾十一月律徵火音屬夏
蕤賓五月律鄭玄禮記註曰蕤蒸也聲類曰蕤無字　う
つほの物語一としかけ琴をつかまつるにおとゝの
うへのかはらくたけて花のことくにちるいまひと
つつかうまつるに六月の中の十日のほとに雪ふす
まのことくこりてふるみかとおほきにおとろきて
の給ふけにこのしらへはめつらしき手なりけりこ
れはゑいらくと云手なりもろこしのみかとのひき
給ふにかはらくたけて雪ふるとなんいひたるこの
國にはいまた見ぬ事をあやしくめつらしき人のさ
えかなと
おに神のかたふきこそめ　河琴書曰堯大德堯彈感天神
降臻儀然言和之至也故堯制神人暢　禮記曰夫禮樂
通乎鬼神　蘭蕪香散楚江頭湘竹叢邊涙不收莫把悲
絲寫離怨夜深簾外鬼神愁　聽琴永頤

これをひく人よからすとかいふ　弄琴大事なる故に
かくいふ事なとありとなり此段大かた世のをしへ
なり　琴のすくれたる物なれはさる事も又本此分
小書なり
うるさきまゝに　むつかしき物なるはとにとなり
世の中にひとりいてはなれて　河出離
きんのねをはなれては何事かは　河衆器之中琴德最
優　文選
もろこしてまと　聞日本のつたへはよそ〳〵になり
たれはなり
なとかなのめにて大かたのつたはりたる事計をたに
となり
わつらはしきこく　是も曲なり
こゝにつたはりたるふといふ物のかきりを　河日本
紀見在書目錄藤佐世撰　樂家（廿三部二百七卷）（卅イ）琴經一卷　蔡伯
喈撰　樂圖四卷　琴操三卷（晉廣陵相衍撰）琴法一卷（趙耶利撰）（卯イ）琴錄
一卷琴德譜五卷　雜琴譜百廿卷　琴用手法一卷
彈琴手法一卷　雜琴手勢法一卷　阮咸圖一卷
師とすへき人もなくて　弄上手になり給ふ事　河
智無師智とてあり祖師にも無師獨悟の人有何事も

いたりぬれは自得する事なり
あかりての人にはあたるへくも　河上古人相當
ての後といひてはつたはるへき　秘源氏の弟子といはん器用の人なきをわひたまふなり
大將けにいとくちをしくはつかしと　秘夕霧の相續せさる事をいへり　弄夕霧えつたへさる事をはち給ふ心なり
てのみこたちの　秘明石の御腹の御孫たちの事なり
そもさまて　秘それもといふ詞なり
二宮いまよりけしきありて　秘今上御子　秘後に式部卿と云人なり　弄此御腹の事後に式部卿宮三宮は匂兵部卿なり
さうの御ことをはうへにゆつり　弄明石の女御のを紫上にゆつり給て又紫上の和琴を源氏にまいりしなり
かつらきあそひ　河催馬樂葛城呂　河かつらきの寺のまへなるやとよらのてらのにしなるや二段　えのはゐにしら玉しつゝ(くイ)やましら玉しつくやをしとゝをしとゝ三段　しかしてはくにそさかへんやは(んイナシ)いゐらそとみせんやをしとんとをしとんと〳〵　弄かつらき呂なりよせある歟可勘
この御てつかひは　弄紫上の御手つかひなり
りんのてなと　弄臨說なり秘　河輪手　輪說也　私云臨說可然也
かへりこゑにみなしらへかはりて　弄呂より律になる也　秘葛城は呂なり律のかきあはせなり　河將律調琵琶に在　呂より律になる時彈也
きんはかのしらへ　秘五ケ條のしらへなり　河琴五ケ調　搔手(カクテ)　片垂(カタノリ)　水宇瓶(スイウヒヤウ)　蒼海波(サウカイハ)　鵾鷄謂一說
胡笳歟　白氏六帖第十八曰笳者胡人卷蘆葉吹之以作樂也胡曰笳摘爲琴曲　花うつほ第三春日祭のみやこ風といふことをこかの聲にしらへてゝのめてたといふ手をそりかへしあそはす　弄五ケ曲見河海
或は五六のはち　河萬秋樂五六帖なかはより破にかへる故五六の破樂と云心也令案御遊盤渉調有先蹤歟可勘無其襲者萬秋樂說不審五ケ調中有五六破樂名手五六はち　弄說々未決云々　彈閣　秘不知事云々　閑同上　五六のはちをいとおもしろくすまして
春秋よろつの物にかよへる　ひき給ふ時にしたかひ

事にふれて調かはる心つかひありとうつほにみえたり
いとうつくしく　女三の琴を源の思ひたまふさまなり
この君たちの　弄七八歳の人々なり
みゝとからぬたと〱しき　河耳のおそきなり　今夜はすこしはかりとおほしゝを物のねきゝわく程耳とからて夜のふけたるこ源のをさなき君たちをいたはりての給ふなり
さうの笛ふく君にかはらけさし給て御そぬきて　弄玉かつらの腹の君なり　御そは源のなり
よこふえの君にはこなたより　河夕霧の御子なり　秘こなたよりは紫上の事也弄同
宮の御かたより　秘女三宮なり
あやしや物のしをこそ　源のたはふれての給ふ詞なり
宮のおはします御木丁のそはより御ふえを　秘女三の宮より源氏にまいらせ給ふ也弄
いみしきこまふえ　高麗笛也
御子のもち給へるふえをとりて　夕霧の大將子息の横笛をとりて吹なり
いつれも〱みな　秘源の皆御弟子なり我と才の程を思ひしり給ふなり北邊大臣諸藝を兼備せし人なり源の才藝を比してかけり
さうのことのかはりて　紫上のさうのことかおもしろかりしとなり
わか北のかたは　秘雲井の雁なり
故大宮の　弄攝政北方事
院はたいへわたり給ひぬ　秘紫上の御方なり　花東對紫上の方なり
うへはとまり給ふ　花紫上は女三宮の御かたにとまりて曉に歸り給ふとなり　秘紫上はいまた宮の御かたにさふらひ給ふとなり
日たかうなるまて　弄源氏と紫上となり
はしめつかたあなたにて　弄紫上詞也
宮の御ことのねは　秘源の詞也
こと事なくをしへ　花他事なき心なり
さかし　秘源の詞也　さありとてなり
てをとる〱　弄手を取なり
うるさくわつらはしく　弄もゝにてはつねのうるさ

きなり
いとまいるわさなれは　秘たれ〳〵にもむつかしくて琴をはをしへ給はさりしとなり
院にも内にも　朱雀今上の女三に琴をゝしへ給ふらんさ仰らるゝ故にかくのことくとなり
おもひおこして　秘大義を思ひたつ心なり
むかしよつかぬ程を　秘紫上の幼少の時の事其時分は源も隙（へイ）なかりしなり　弄紫上幼少の時の事也
いてはえしたりし　紫の和琴箏いつれも上手と聞ゆ
今はまたおとな〳〵しく　紫上は樂なとのやうなる事はかりにてもなくよろつにたらひ給へる事をいふなり
いとかうくしぬる人　河具なり　秘かやうによろつを具したる人はかたきよしなり　弄紫上諸事具して有かたしとなり
ゆゝしきまておもひ聞え給ふ　源の心中なり
とし（は）卅七にそ成給ふ　弄源氏に十年おとりと見えたりはしめは若紫に七歳はかりいもうとゝみゆとはかけり心有へし卅七歳は女の重厄也　秘女は卅七重厄薄雲女院も卅七にて崩し給へり惣しては紫上が源に七計のいもうとゝみえたり然は源は四十七也紫上は四十なるへきを紫式部か思ふやうありてかく書るなるへし
物さわかしく　源の事しけきよしなり
おほきなる事とも　花大法なとの事なり秘殿さうつの（おイ）　秘北山僧都也紫上のをちなり僧都入滅の事こゝに始て見えたり
おちかた（ほイ）にうちたのまん　たゝうちの事にもよき人そとなり
みつからはをさなくより　弄源氏の語　源のみつからの事こゝよりの給ふ也内すみにて生長せしと也
かなしきめをみる　須磨の事等なり
まつは思ふ人に　秘夕顔上葵上薄雲なとゝなり　私母更衣外祖母　父御門なとの事もこもるへき歟
それにかへてや　秘福祿等をそなふる事はかたきと也　私かなしきめともにあひぬるにかへてやらんおもひしよりもいのちなかきとの給ふなり
君の御身　秘紫上なり
かのひとふしのわかれ　秘すまの別の事なり弄きさきといひ　后をはしめて嫉妬のかたの物思ひな

き人はなしとなり
おそのまとのうちなから　源の子のやうにして紫を
とりたてたまへれはなり
そのかたは人にすくれたりける　嫉妬のかたには物
ふもはせぬよし源の自稱也　秘さやうのかたと也
この宮のかく　秘女三宮なり弄
御みつからのうへなれは　秘自身はしらさる事とな
り弄　源は隨分心さしをくはふれとも紫は御身の
うへのことなれはなほさりにかおほすらんされとも
物ゝ心をよくわきまへ給ふ紫上なれはさりともお
ほししらんとなり
の給ふやうに　秘紫上の詞弄
物はかなき身には過にたる　紫の卑下の詞なり我に
は過分の御あつかひとなり
心たらぬなけかしさ　女三の御事なとを心にこめて
の給ふなり
さはみつからの　秘されはとなり弄
いのりなりけりとて　前に源の物思ふ事のおほきに
かへていまゝてもなからへたるかとの給ふにつき
てかやうにたえぬなつかしさは紫のための祈かと
の給ふなり
のこりおほけなる　末をいひ殘し給へるさまなり
まめやかには　これまてはたは〔末イ〕ふれのやう
にいひなし給ふなりさて眞實には行衞の命もみし
かし世をもそむかはやとなり
こともかくしらすかほに　私卅七なり　今年三
十七重厄なれはなり
さき〳〵もきこゆる　秘さまをかへて心やすく有へ
しとなり
それはしも　秘源の詞也弄
猶思ふさまてとなる心のほとを　紫上へ別しての心
さしを見はて給へとなり
なみたくみて　紫のさまなり世をすてたまはん事を
源の同心なきこといつもの事なれはなり
きてえまきらはし　源のいひまきらはすなり
おほえはわら〔くイ〕ねと　秘これかれ見給ふうちに眞實の
實法なる心もち〔びイ〕ゐの人はまれなるとなり
大將のはゝ君を　弄葵上の事　秘葵上なり元服の夜
よりみ給ひしなり
つねに中給からす　秘後悔なり

又わかあやまちにのみも　秘子細のあるなりその子細を下にいひいへたまふなり
うるはしくおもりかにて　葵上のさまなり
あかぬかなと　不足なる事なきなり
さかしとや　秘賢なるなり　弄賢なるなり女のためはさしもあらぬ心なり
思ふにはたのもしく見るにはわつらはし　秘本臺には可然さまなり　私見るには女々しからぬ所のましる心歟
中宮のはゝみやす所　秘六條御息所
心ふかくなまめかしき　ゆゑ／＼しくよしありと聞ゆ人見えにくゝ　是もうちくつろぎにくき歟
うらむへきふしそ　秘恨のふかき本性なり　私尤と思ふ恨なからあまりゆるき所なく思ひつめたる性そとなり此故に物のけなとにも出る成へし
心ゆるひなくてはつかしくて　心の油斷もなくはつかしかりし人也是ゆゑ人（人イナシ）みえにくしといへるなり
うちたゆみ朝夕のむつひ　我も人も心をくつろけて朝夕のむつびはなりかたき人（中イ）となり
いとあるましき名をたちて　秘心そらに源のなし給ふそとなり
わかつみある　是も御息所の道理にてあれは源のつみあるかとなり
中宮をかくさるへき御契り　秘秋（こイ）好中宮の冷泉院との御契はさたまりたる事にてそあるらめさはいひなから悉皆取たてゝ源のまいらせ給ひし事なり弄
かの世なからも　秘後世にてもとなり弄
みなほされぬらん　秘後世より見直し給ふへきとなり
今もむかしもなほさりなる心のすさひに（みイ）　秘よしなき事に名をたつとなり
きしかたの人の御うへ　葵上御息所皆故人なり仍きしかたの人と云　私此物語にたよりて又御息所の物のけにあらはれ給ふ末の詞に見えたり
うちの御かたの御うしろみ　弄明石女御事也　秘明石上の事也さしもなき人と思ひしに思ひの外に心ふかき人そなり源のほめ給ふ也　私是より現在し給ふ人々のうへなり　弄明石上を（のト）御うしろみとなり
こと人はみねはしらぬを　弄紫上詞秘　弄御息所葵

上たとをはみさる人なれはしらす此明石をはみる（しイ）
人の事なれはなり
いとたとしへなきうらなさを　秘紫上のこゝろあさゝを
みゆへきくちをしきとなり（おイ）
女御はをのつから　紫上の明石女御を大切に思ふ心
見えたり
さはかりめさましと　秘源の心なり　弄源の語なり
心私源の心然へし
をき（おイ）給へりし人を　紫上明石上をはさしも隔心せ（台しイ）
しに女御の御ためを眞實に紫の思ひ給ふ故（やうイ）に今は
みえかよはしなとし給ふを源の有かたき心をとは
めおほすなり
君こそはさすかにくまなきにはあらぬ物から　花君
とは紫上にむかひての給ふ詞なり　秘源の語それ
それに心をやり給へるとなり　弄くまなきとはか
くれたる所なく心とき人の事なり秘
いとけしきこそ物し給へ　秘物えしし給ふはかりそ
難なるとなり弄
宮にいとよくひきとり給へり　秘女樂に（の事イ）此たひ琴を
よくひき給ひし事を申さんとて女三宮へ源の參り
給ふ也
われに心をく（おイ）人なり　秘女二宮の御おもむき（さまイ）なり
いまはいとまゆるして　秘源の詞也
物のしは心ゆかせて（るイ）こそ　源の我との給ふなり
ひてろのしるしありて　日來の御稽古のしるしによ
くひき給へりとなり
たいにはれいのおはしまさぬ　秘紫上なり
かく世のたとひに　弄紫上の心也
昔かたりともにもあたなる男色このみ　弄大かたふ
る物語なとにある事なり
終によるかたありて　河「よるかたもありといふな
るありそ海のたつ白波のおなし所に「大ぬさゝ名
にこそたてれなかれてもつゐによるせはありてふ（わイ）
物を「わたつ海のおきつしほあひにうかふあはの
消ぬ物からよるかたもなし　此等の歌の心通する
か　開つゐ（びイ）によるせはありてふ物をなり
あやしくうきても　紫の身上の事也
けにの給ひつるやうに　河前に紫上を思ひもなき人
との給ひし事なり
人のしのひかたく　秘女の身は嫉妬第一の物おもひ

なれはなり
御むねをなやみ給ふ　連々胸中に思ひのむすほゝれ
たる故なり
御せうそこきこえさせん　源の女三の方におはす故
つけ申さんとなり
ひんなきことゝ　紫上の用意奇特なるへし
御身もぬるみて　河「人しれぬ我思ふ人にあはぬ夜（小町集）
は身さへぬるみておもほゆる哉
院もとみに　源はしり給はておそくかへり給ふ也
女御の御かたより御せうそこ　秘明石女御なり弄
女御もわつらひ給ふも知給はてたゝ御せうそこあ
るついてにわつらはしきよしきこえ給ひて女御より
源へも仰らるゝなり
むねつふれて　源の心中なり
御つゝしみのすちなと　秘卅七歳の事なり
御かゆ（かゆイ）なとこなたに　花是は源氏の事なり　秘源の
事なり弄　源も御らんしいれぬなり
はかなき御くた物　是は又紫上のわつらひ給ふさま
なり
そこ所となく　弄いつくともさしたる所なきなり

を（おイ）もしとみれは（とイ）　弄此御やまひはおもからて又たゆ
みなさなり
御賀のひゝきも　秘女三宮よりし給へる御賀なり
かの院よりも　秘朱雀院よりもなり弄
所をかへ給はんとて　病人所をかへてこゝろむる例
若菜上にあり上東門院の事也
院のうちゆすりみちて　六條院中なり
この人うせ給はゝ　紫上うせ給はゝ源も世をそむき
給へしとて猶々夕霧なとも心をつくし給ふとなり
みすほうなと大かたのをは　惣別源のをこなひたま
ふ修法とももとりもち又夕霧もとりわき別にしたま
ふなり
いさゝか物おほしわくひまにはきこゆる事を　秘出
家の事なり弄
かきりありてわかれいて（はイ）　秘源の心なり　命のかき
り有てのわかれ（えイ）は各別なり眼前に紫上の世をすて
給はん事をはいみしとの源の心なり
むかしよりみつからそ　秘源のみつからの事なり
けにいとたのみかたけに　前にかきり有てわかれは
てとありしにこたへてかけり

宮の御かたにも　秘女三宮の御かたなり
御てとゝもゝすさましくて　同し院の内ならねと女
三の琴をもひき給はぬとなり
院のうちの人々は　秘六條院なり
この院には　弄六條院也
人ひとりのさいはひと（御けイ）　秘紫上一人となり
たゝにもおはしまさて　女御の御事　秘御懐妊なり
くるしき御心ちにも　紫上病中にもものゝけなとのお
そろしきに御懐姫の折ふしなれは早く内へ参り給
へと女御へ申給ふとなり心つかひ妙なり
わか宮のいとうつくしうて　弄明石中宮腹の二宮歟
又匂宮歟　弄私義あり女一宮の事なるへし永正九
五十五夢（コノ所本ノマヽ）唐狀爲女一宮の由述らる愚意に符合した
り　秘女一宮なり　私両抄女一宮の由一決可用之
愚意符合とあるは逍遙院の義なり
おとなひ給はんを　紫の詞也
ゆゝしくかくれ　弄源氏の語聞　秘人々の云也　私
此一段皆源氏の詞とみえたり
けしうは物し給はし　弄けしうは如此但け文字清歟
秘大事はあるましきとなり弄

おきてひろきうつは物には　秘紫上の徳ある心をき
てをいひあらはし給ふなり小取焉小得福大取焉大
得福（弄經至德要道篇）當純曰豚牛之鼎不可處以烹鷄捕鼠之狸
不可使之搏獸一鈞之器不能容以江漢之流百石之車
不可滿以斗筲之粟何則大非小之量輕非重之宜
きうなり人はひさしくつねならす　河老子經曰柔之
勝剛（舌柔齒剛）齒先舌亡天下莫不知（柔者久長剛者折傷也）
よゐなとにても　河夜居也
御心のいとまなけなり　源のさまなり
まことや衛門督は中納言に成にきそかし　秘此已下
柏木の事をいへり此間は参義にて衛門督を兼たり
いとまの人なり（時イ）　秘時にあへる人なり弄
おもふ事のかなはぬ　秘女三宮の御事なり
此宮の御あねの二宮を　弄女三のあね宮落葉宮也
花柏木の室落葉の宮と云人也　秘落葉宮なり
下らうの更衣はら　秘更衣たれともなし
もとよりしみにしかた　女三の御事なり
なくさめかたをはすてにて　姨（チノステ）棄山　河一（大和物語）わか心な
くさめかねつさらしなやをは捨山に照月を見て
をはすては女三宮の姉宮東宮の御ためには　御を

はなれは何となくにほはせて云る心はたゝなくさめかたきといはんためなり　秘月を見てなくさめかたきやうに二宮を見てもなくさますとなり只なくさめかたき心肝要なり　秘花鳥に東宮の御姨ににほはせていへり云々此義に及へからすわか心なくさめかねつの歌も大和物語の本説にかゝはらす月をみてなくさめんとすれと更になくさめかたしとよめる歌なり今此二宮を得てはなくさむへきと思へりしにかへりて思ひをますとなりされは宇治に中君二條院にましませはさらに姨捨山の月すみのほりてといへるもたゝなくさめかたき心はかりなり

人めにとかめらるましき　よそめの疎略ならぬほとにもてなし申となり

したの心　女三ゝ御事也

宮の御侍従のめのとの　女三の御めのと侍従といふなり小侍従は此人のむすめなり弄

そのめのとのあねそ　侍従のめのとのあねは柏木のめのとなり

かゝるおもひも　女三の御ありさまをよくつたへききて柏の思ひそめしとなり

かくて院（二條院）もはなれ　秘源は紫上のなやみ給ふ故にあなたにのみましますとなり

むかしよりかく　秘柏木の詞也

したしきよすが　めのとたちより小侍従へつゝきたる事なり

たえぬ心のほと　柏木の思ひにたへぬ心なり

院のうへたに　花此院は朱雀を申なり朱雀院なり

女三の御事（おイ）を人の申となり源はかたく〳〵に障（ひまイ）なきゆゑにをされたるやうにてましませは後悔し給ふとなり　弄朱雀院へ女三宮の事を人の申しなり源氏の心を聞給ふに後悔し給ふて源氏もたゝ人なれと心にいらぬ事のあかぬなりおなしくは心やすきをと朱雀院おほしめしけるとなり

悔おほしける　河悔也

つたへきゝしに　弄右衛門督のきゝしとなり

いかゝおもひみたるゝ　秘いかはかりおもひみたらん（おイ）となり　柏木の心なり

けにかなし御すちとは　聞むかしよりしみたる事は忘れさるとなり

それを（はイ）それとこそ　おなし御兄弟とも思はれす各別のやうなるとなり
さしおきたてまつりて　落葉宮をおきて又女三なとへ心かけ給はん事なとなり
さてそはありけれ　聞さにてこそありけれと云歟
宮にかたしけなく　女三の御うしろみ望みし事は朱雀も今上もしろしめしたるとなり
院にも内にも　秘院は朱雀なり
なとかはさても　さもあるへき事と仰られしとなり
たゝいますこしの御いたはり　花柏木のいまいさゝ（給ふ事もイ）かねんころにも申たらは女三の宮をゆるしも有へかりしとくやしく思ふ也　弄今すこし朱雀の御憐あらはとなりかねて柏木にもやと覺しける事有しゆゑにいへすこしといへり　秘花鳥説いかゝ朱雀の今少御憐愍あらは我に給ふへき物をとなり
いとかたき事なりや　又小侍従の詞なり
御すくせといふ事侍なるをもと　根本の宿世定りたるとなり
かの院のことにいてゝ　秘源なり源のねんころに所望し申されしなり

この比こそすこしもの〳〵しく御そのいろも　秘中納言に昇進ある事なり　花かしは木の右衛門督中納言に任す中納言は三位相當なり三位の袍の色淺紫をいふなり　弄中納言になりたる事四位の參議（三位イ）より中納言になる事なり　河天武天皇十四年七月庚午勅定明位以下進位以上朝服色淨位已上皆着朱花（此云波泥孺）正位深紫直位淺紫勤位深緑務位淺緑追位（ニイ）深蒲萄進位淺蒲萄　文武天皇大寶元年三月甲午始依新令改制官位號云々依服制親王四品以上諸王諸臣（イ）品（臣イ）位者皆黒紫諸王二（階イ）位已下諸臣三位已上者皆赤紫直冠上四位深緋下四位淺緋勤冠四階深緑務冠四階淺緑追冠四階深縹進冠四階淺縹皆淺冠綺帯白襪黒革舄其袴者直冠以上者皆白縛口袴勤以下者白（脛イ）脛裳　柏木巻に初は參議右衛門督後に權中納言と見えたり上古は位に隨ひて袍色も淺深ある歟　熈明卿天暦五年二月任權中納言叙從三位（元參議正四位下左大辨）　時九條右大臣遜袍歌在後撰集「おもひきや君か衣をぬきかへてきむらさきのいろをきん（みイ）とは　資房記にも叙三位着改袍よし見えたり

いふかひなくはやりかなる　秘小侍従か事也
いまはよし過にしかた　秘柏木の詞なり
いとおそろしけれは　源におそるゝ心なり
これよりおほけなき　秘小侍従か詞なり
なにしにまいりつらんと　弄小侍従か何しに督のもとへきつらんとなり
はちふく　河撥撫はらひすつるなり　私今の世の世俗にはちはらひするといふ類なり
いてあなきゝにく　秘柏木の詞也
こちたく　秘こと〳〵しくなり
女御后もあるやうありて　河五條二條后業平朝臣に通し給ひし事なと歟　後撰云といてきてのち京極の御息所につかはしける元良のみこ「わひぬれはいまはたおなしなにはなる身をつくしてもあはれとそ思ふ　秘二條后なとの例あるへし　弄業平清和の女御に被通事
ましてその御ありさま　秘女三宮なり
うち〳〵は心やましき事そ(もイ)　秘紫上におされ給ふ事
院のあまたの御中に　秘院とは朱雀なり　あまたの姫君の御中に也

さしもひとしからぬきはの御かた〳〵に　秘明石上なとの同輩よといひくたしたるなり
世中はいとつねなき物に　河「戀しなはたか名はたゝし世中のつねなき物といひはなすとも　私此引うたに及はす
つきゝ(しイ)りなる事なり　河ふつきりなる心歟　秘いひきり給ひそとなり
人におされ給へる御ありさまとて　秘小侍従か詞也
めてたきかたにあらため　秘いまさらいかなるかたになひき給ふへき事にてもなしとなり
これはよのつねの　秘おやさまにとはしめよりの給ひしかは寵愛のかたはくるしからさるとなり
かたみにさてそ　女三と源との間互にさやうに思ひ給ふ事なるへしとなり
よろつにいひてしらへ　秘柏木なり
まことにさはかりよになき　秘柏木の詞也源の御ありさまをいふなり
なれすかたうちとけて　是をみよの歌ならはなれるすかたかなれ(出てイ)すかたならは與下したる也「君か門今そ過行是を見よ戀する人のなれるすかたを

えいなひはてゝ　河辭遊仙窟
さりぬへきひまあらは　小侍從か詞也
院のおはしまさぬ　源のとまりたまはぬ夜なり
いかなるをりかは　弄小侍從か心ちゆるいたる性女
宮のためあしき事なりと心うへし
いかに／＼と日々に　秘柏木なり
せめられこうして　柏木のせめ給ふにくたひれたる
なり
せうそこしおこせたり　柏木へ小侍從よりなり
よろこひなから　弄よろこひ／＼行心なりつゝとい
ふ詞と同し
わか心にもいとけしからぬ　秘柏木の心也
けちかく中々思ひみたるゝ事もまさるへき事まては
おもひもよらす　女三に逢て實事なとあらんまては
柏木の思ひよらぬなり
卯月十餘日の事なりみそきあすとて　河四月中午日
齋内親王禊事也　見年中行事　秘齋内親王の禊の
事也（きイ 明イ）　齋院の御禊毎年の儀なり　中午日也　その時
なれは月日女房をまいらせらるへし葵卷に御禊は
午日にかきらすはしめて齋院にうつりたもふ時の

御禊は吉日をえらふによりて定日なし毎年は中の
午日なり
上らふにはあらぬ　弄物ぬひなとするにかなへり
秘わらはゝ下つかへなれはみつからもかくいとな
み侍るなり
ちかくさふらふあせちの君も　弄女三宮にちかくさ
ふらふ女房なり
源中將せめてよひ出させ　秘按察君のおもひ人なり
弄
やをら御丁のひんかしおもてのおましのはしに　弄
これほとの事までもおもひよらさりしなりかはか
りも不可然となり
さまでもあるへき事なりやは　秘物語の評なり又は
柏木の心なりこれはとまてもおもひよらさりしと
なり
宮は何心もなく　女三宮なり
をとこのけはひ　柏木なり
院のおはすると　源氏かと思ふなり
ゆかのしもに　河床の高さ三尺鬼氣の及はさるなり
見養性抄　弄寢所ちとたかしと見えたり

あさましくむくつけく　女三の心中なり
わなゝき給ふさま　これより女三宮の體なり
かすならねと　秘柏木の詞也
おほけなき心の侍しを　不相應の事なからおもひかけたてまつりしとなり
ひたふるにこめて　中々一向にしのひはてたらはかくは有ましきとなり
院にもきこしめされにし　柏木の事は朱雀もしろしめされしとなり
もてはなれても　かつて有ましき事とは仰られさりしとなり
かすならぬ一きさみに人よりふかき心さしを　柏木の身の源は及はぬゆゑに源よりもふかき柏木の思ひはむなしくなりたるとなり
うこかし侍にし　秘心を動かすなり　弄督の君心を動かせしなり
いかはかりしみ侍りにけるにか　河深着日本紀
せきかねて　秘心に制しかねたるなり弄
つみおもき心も　秘實事なとはあらしとなり弄
その人なりけり　女三柏木のとしるなり

ことわりなれと　柏木の心
ためしなき事にも　柏木の女三をさま〲いひたはかる詞なり
ひたふるなる心も　秘宮をおとしたてまつる心なり弄
よそのおもひやりは　花柏木の心におもふ事なり　秘よりつきにくきやうにあるへしとかねて思ひしにはかはるとなり
かけ〲しきすちはなくて　河ひたなき心なりかけまくもかしこきなと同事なり又いひかけしろひたる心にや　私河義如何是も實事なと有へきとは思ひもよらさりしに思ひの外なると柏の思ふなり
さかしくおもひしつむる心もうせて　女三のやうたいの心つよからぬ故にかくのことくなり
ゐてかくし　秘將隱なり　河伊勢物語白玉か何そと人のとひし時とよめる心も有へし　弄業平二條后を具し奉りし事なとに准す
たゝいさゝかまとろむともなき　河睡遊仙窟　坐睡　聞これに實事かこもるなり
てならしゝねこ　秘懷妊の事なり　夢獣は懷胎の相

也　花てならしゝ猫を宮に奉らんとすると見えし
は宮に近つきまいりたる事なりなにしに奉りつら
んと思ふは六條院の御とかめをおもひて後悔すへ
き事見えしなり
なにしにたてまつりつらん　秘夢中の心なりかたみ
と思ふへき物をとをしみける心なり　弄夢中心な
り宮に返へしたてまつらんと思ふに又さてはかた
みにもとをしみける心なり　私花鳥の義もおもし
ろき歟
猶かくのかれぬ　秘柏木の申給詞
院にも今はいかてか見えたてまつらん　秘源なり
私女三の心中なり
人の御涙をさへのこふ袖は(れイ)　河下官乃將ニ衣袖ニ與ニ娘
子ニ拭レ涙遊仙窟　秘おもしろき詞なり
いかゝはし侍るへき　秘柏木の詞
ものゝさらにいはれ給はねは　柏木の色々に申せと
も女三の物のいはれ給はぬなり
はて〳〵はむくつけくこそ　柏木の詞なり
さらはふようなめり　柏木の詞女三の御一言ならは
御許容なきなりさては身をいたつらになしはてた
るとなり
身をいたつらにやはなしはてぬ　河夏虫の身をいた
つらに云々不及此歌　いたつらになしはてたるな
りぬは不也さるの心也
いとすてかたさによりてこそ　秘かくつれなくまし
ませは命もこゝにてすつへきとなり
てよひにかきり　秘命をいへり弄
それにかへつる　露はとも御許容の氣あらはそれに
かへたる命と思はんとなり
あきれておほさる　女三の心也
思ひのとめよとおほされは　かやうに柏のするを女
三のあきれ給ふ故にうつし心もうせてかくあるは
心つよくあはれとも仰られぬ故ぞとおもしいふな
り
あはれなる夢かたりも　秘猫の夢かたりも　弄猫の
見えし夢の契しられし事も申度心なり
いまおほしあはする事　薫を懐姫の事なり　弄猫の
夢懐姫なとの事にやといへり
秋のそらよりも　秘四月なれはなり聞
柏木　おきて行空もしられぬ明くれにいつくの露のかゝる

そてなり　花此歌はてにをはをいたはる歌なりいつくのもし心をやりてみるへきなり　弄正徹了簡あり云々此きさみの心なるへし云々禪閤いつこをそこらなと心得よとなり又云なりけんと詞をそへて心うへし云々此歌のてにをは古歌に多し此表の詞いま思へはいかにもとある事なりけり　帚木に又さふらひなんとてなり　後撰戀の三同四此外古歌多し可勘入　戀三「なみた川なかすね覺云々　戀四「思ひ出てをとつれ云々　秘むきて行へきかたもしらすと也結句花鳥説はいつくのをそこゝのと心をやりてみるへしと也又正徹説此時柏木心も心となきうちの歌なれはてにをはの分別もなきと也　袖なりけんと云心もありとなり　されと此歌わまた侍る後撰戀三「なみた川なかすね覺もある物をはらふはかりの夢やなになる　又戀四「思ひ出て音つれしけん山ひこのこたへにこりぬ心なになり此外此類わまた有へし不審に及はさる乎　箋聞いつくの露のはいつくの露にて有そと云心をの文字にもたせて如此袖也とひきいてゝみせたてまつれる也花鳥の説そこゝの露と云々又云てにをは相違の義正徹か義なりそれは柏木の衣々に不本心と云云又てにをは相違に非すと云作例有涙川なかす云云後撰戀三思ひ出て音つれ云々同戀四　箋曰なになりは句法なれは袖なりこの作例にはあたらさる哉但なになりと云も何なると云心なれは袖なると云作例にて詠しけるにや然れは不審なきなり

いてなんとするにすこしなくさめ給て　柏の立出んとするにて女三もすこし心をなくさめて返歌なとし給へると云歟又立出んとする時柏木を女三のなくさめてすかしやらんとての返歌歟可決之

返女三宮

あけくれ（ろイ）の空にうき身はきえなゝん夢なりけりとみてもやむへく　秘まへには物もの給はさりしを今柏木の出給ふになくさみてかくよみ給ふなるへし心はことなる義なき歟

まことに身をはなれて　河「あかさりし袖の内にや入にけん我玉しゐのなき心ちする　秘誠の字妙也わかさりし袖の内にや入にけんの心ちあり　箋まことに詞字眼なり引歌同之

女宮（御イ）の御もとにも　秘落葉宮なり箋聞同

大殿へそしのひて　箋聞致仕大臣なり　落葉の宮の

方へは入給はて父おとゝのもとへ行給ふなるへし
見つる夢のさたかに 箋聞 猶の夢の事なり
そらはつかしき 箋聞 四一 旦智の心なり 花 そらおそろ
しき心なり
女の御ためは 箋 女三宮也
いと有ましき事 聞 斯樣のしのひたる事に蝦踏なる
事は有ましき事なれ共是は別して有ましき事と也
みかどの御めをとりあやまちて 河 妃日本紀 御妻
周禮 女御ききさきの類の事なり
くるしくおはゆまし これは覺悟の前なればなり
しかいちしるきつみには 弄 女御などをあやまちて
罪にあたるやうにはなくとももとなり
こイ
六の院にめをそはめられ 秘 源の御事なり 弄 めを
そはめられし陽人にもいへり
かきりなき女ときこゆれど 花 二條五條の后などの
類なり 弄 世人をいふ也 秘 世の人をいふ也世な
れたる人こそうへは實法にて下にほのすく人あれ
となりこれはいつくもふかき御心もなきとなり
箋聞 是は貴賤によらぬとなり
よつきたる 箋聞 これは世をよく知たる人なり

心かはし給ふたくひも うはへはゆゑありてめかし
きうへは大やうにしてしかも下の心はちとかろき
なりさやうの人こそ心かはし給ふ事もあれとなり
しからは前にかきりなき人といふは位たかくやん
ことなき人の事ときこえたり花鳥に五條二條后の
類といへる然へくや
是はふかき心もおはせねと 弄 女三宮は深き心もな
しとなり 是は女三の心より色めかしくてしいて
給へる事にてもなきにわか〱しく物おちし給ふ
心よりはや人もしらんかとあかき所さへおそろし
きやうにおほすこれにて人のみとかむへきなりと
也
みつからおほししるへし 女三宮の我と思ひしり給
ふへしとなり
なやましけになんと 女三のわつらはしけなるよし
源へ申たるなり
御心をつくし給ふ事に 秘 紫上の病惱にうちそへて
なり弄
そてはかとなく 女三のさまなり紫上のやうなるわ
つらひにてはなしと源のみ給ふなり

久しくなりぬるたえまを　聞源の心なり紫上の煩ひ
ゆゑ久しくおはせぬゆゑに女三のかやうにうちむ
かはぬやうにしたまふかとの心なり
かの御心ちのさまなと　秘紫上の事也弄
久しきたえまをこさわらんと紫のわつらひのさま
をのへ給ふとなり
いわけなかりしほとより　紫を幼少より養育ありし
かは今さらみはなちかたきとなり
このほとすきはみなほし　源の女三へのとだえをこ
とわるなり
定（宮はイ）あかくけしきもしり給はぬ　女三の心なり源の柏
木の事をしり給はぬをおほすなり
かんの君は　右衛門督なり秘
中々なる心ち　慈の事に思ひをくはへたるなり
まつりの日　秘酉の日なり弄
あらそひゆく　物見にはよき所に居らんとあらそひ
行なり
なかめふし　柏木のさまなり
女宮をはかしてまりおきたる　弄二宮なり　秘落葉
宮なり我身には過分なりなといひなし給ふなり

わかかたにはなれゐて　柏木の休息所なり
（柏木）くやしくそつみをかしける葵草神のゆるせるかさし
ならぬに
秘摘に罪をよせたり　摘おくを罪を犯すとよめり
女三宮の事をよめり神のゆるせるかさしならぬと
は源の事を思ひてよめり
人やりならぬつれ〳〵に　祭をも見給はぬ故のつれ
つれなれは人やりならぬなり
女宮もかゝるすさましけさも　弄女二宮なり
さうのことなつかしく　秘落葉宮なり
いま一きは　秘女三宮をいへり
（柏木）もろかつら落葉をなにゝひろひけん名はむつましき
かさしなりとも　秘葵桂のかつらなり女三宮と落葉
宮と兄弟なれはなり是より落葉とはいへり　箋聞も
ろかつらとは葵は二葉なれはかくいへり又の説桂
と葵との二つをさすと云々落葉をなにゝと云時は
葵桂にとるへき歟名はむつましきは同し朱雀の女
なれはなり是は女三宮をえぬ事をいふなり　弄葵
桂のかつらなり落葉とは二宮をよめり
いとなめけなる　秘草子地なり箋聞　弄二宮を思ひ

おとしけるをいへり

おとゝの君はまれ〳〵わたり給て　源のたま〳〵女三のかたへおはしたる故心もとなく思ひなから二條院へえかへり給はぬなり

たえいり給ぬとて　紫の俄に絶入給ふなり

けにかの院は　弄二（三イ）條院なり

いとまか〳〵しく　河狂言萬葉　弄出なりまかれる心也さるへきかきりのみこそまかてね　箋聞是は不斷の護持僧夜居なとにさふらふは退出せず當座の修法なとはかりうけ給はりたるは壇もこほち退出するなり

おろ〳〵とさわくを　はら〳〵とまかり出るなり

さりとも物のけの　秘こゝにて源の心をおこしてつよく心をもち給へるなり

不動尊の御もとのちかひ有　本誓　河大般若經曰定（迦）業（葉イ）亦能轉（持イ）　正報盡者能延六月法　不動義軌　金剛手光明灌頂經曰世號（師イ）不動立印軌後次觀自身成就尊形狀一百由旬内所有難調御鬼神所持者皆悉能散壞（壞イ）

秘定（迦葉イ）業亦能轉（持イ）の心なり河海に見えたり　善无（元イ）畏三藏之師欲滅弟子爲受灌頂善无畏行此法悉受灌頂なり　弄其後猶延年の事有之　箋聞能延六月法とあるに付て能延六月の法とて秘法あり人に六の玉しゐあり其玉を一月に一つゝとり六月に皆とるなりそれをは取返す法爰（賈イ）故に能延六月といふなり云々

その日かすをたに　是は能延六月の法をおこなふ日（日イ）數をたにと云歟七月の事なり

とまり給ふへきにも　箋聞源の紫におくれ給ふましき體そとなり

佛も見たてまつり　源の愁傷の深切なるを佛のあはれみ給ふかとなり

やう〳〵いき給ふ　紫上蘇生し給ふさまなり

いみしうてうせられて　箋聞に加持には金剛縛にてからめたる調伏なり　東寺云調と云と云々

てうしわひさせ給ふが（ろイ）なさけなく　物のけを調してわひさするなり物のけのいふ事なり

おほししらせんと　弄むらさきの上をとらんとなり

命もたふましく　源の命も堪ましくなけき給ふとなり

いまこそかくいみしき身をうけたれ　箋聞惡處にて

生かはりたるとなり　弄御息所のなき身にていま
いましき業といへり
いにしへの心ののこりてこそ　今生にての執心にひ
かれてこそこれまて参りくれ（らイ）なりしかれは今も源
の御事には心よわくまけてあらはれぬるとなり
たゝむかし見給ひし物のけの　秘葵上の時出し物の
けのさまなり箋聞
あさましくむくつけしとおほししみにしとのかはら
ぬもゆゝしけれは　葵の時よりあさましきとに源の
思ひ給ひしに又かはらぬさまに見えたるもいまい
ましきなり葵上をとりたる故なり
まことにめ（そイ）の人か　源のものゝけのつきたるわらは
にのたまふ詞なり
きつねなとのたはふれたるか　河誑タフレ　聞たふら
かす心なり
又ひとのしらさらん事の　源の心得はゆきて人のえ
しらぬ事を物のけにいへとなり
おろ／＼といたくなきて　物のけのさまなり
わか身こそあらぬさまなれそれなからそらおほれす
る君は君なり　あらぬさまなれは生のかはりたるな
り
秘物のけの歌なり我身こそ生をかへたれとなり
弄物のけの歌なりそれなからとは源氏はしり給へ
きとなり
ものはちしたるけはひかはらす　御息所の體の其ま
まなるなり葵巻にも物のけはちたる事あり
物いはせしとおほす　秘源の物いはせしとなり
中宮の御事にても　弄秋好なり
秘物のけのいふなり
道ことになりぬれは　弄生前死後に心のかはるにや
となり箋聞
このうへまても　弄子の事もおもはぬとなり　御息
所の心也
猶みつからつらしと思ひきこえししふなん　河執
箋聞子の事なとは死後にうすくなる我身の執は後
の世まてもはなれぬとなり
いきての世に人よりおとして　箋聞生前に我を思ひす
て給ひしよりも死後の御むつ物かたりのつらきと
也
思ふとち（みイ）の御物かたり　秘前に紫上へかたり給ひし

事なり弄
心よからすにくかりし　御息所の御心を人見えにく
くなとゝかたり給ひし事なり　箋聞樺の卷に紫と源
の薄雲の御事を語給ひし時もその夜の夢に薄雲を
源のみ給ひしなり沓冥に通する事なり
なきにおはしゆるして　弄はふき省かへり見るなり
　なき世の跡なれは何事をも人の申のふ事をも少
々はふきかくし給へとなり此はふきは鳥の羽をひ
ろけて物におほふ心（てイ）なり
うち思ひしはかりにかくいみしき身のけはひなれは
かく所せきなり　弄御息所の心中に思ひしによてな
り　秘惡鬼なとになれはそと立よると思へとも病
者のため事の外になやみあるとなり　聞驗者の加
持なと畏るゝ故に居所もなき樣なるを所せきと云
かさて顯はれたる心歟云々　私此義も如何只秘に
いへる如く卒度立よると思へ共病者の爲には所せ
きなるへし
かくいみしき身の　弄靈なとのあらはるゝなり
所せきなり　弄はつかしくも思ふとなり　私此義い
かゝ只秘の義然へき歟

この人をふかくにくしと　秘紫上なり
まもりつよく　秘源はまもりつよくてよりもつかさ
るとなり聞　弄佛神の守なり　源氏の事也　私源
はまもりつよき故紫へたよりたるといふ歟此人と
は紫上なるへし紫を心さして物のけにならんとは
思はぬといふ心歟
このつみかろむはかり　聞祈禱持は靈氣のためには
苦痛になる也たゝ得脱するかたにとふらひをし給
はゝ此執はおのつからはなれむとなり
修法（シユホウトツト云ヤウニヨムヘシ）と經とのゝしる事も　秘花鳥に見えたり　花夫
般若御讀經燒損邪氣之足之由稻荷明神告貞崇法師
給事見延長八年李部王記　箋曰死靈は追福して令
得脱之法力也其靈の苦と成へき事不審與方は如此
歟密の心には相違なり如何
ゆめ御宮つかへ　河努々なり
齋宮におはしましゝ比ほひ　秘齋宮は經佛を手にと
り給はさるなり　河大鏡云むかしの齋院は佛經な
との事はいませ給けれと此院には佛經をさへあか
め給て每朝の御念佛かゝせ給はす大齋院選子「お
もへともいむとていはぬ事なれはそなたにむきて

をのみそなく
ね齋宮寮忌語内七言延喜式云佛（スイ・タチヅクミ・タチヨハリイ）經（ソメカミ・フチカミ）
塔（アラヽキ）寺（ユリタツ・ユリタチ）香炬（タイマツ）僧（カミナカ）尼（ツノハス）齋（イモイ・カタナシ）　箋花鳥にものせられたり
ふうじこめて　河封籠　物のけをふうしこめておきてしらせぬやうに紫上をはこと方にうつし給ふなり
いとゆゝしく　弄いき出給ふ事人しらさるなり　紫上の實にうせ給ひたるやうにとふらひ申人あるをいまくしくおほすなり
けふのかへさ　箋賀茂祭なり　弄賀茂祭昔はかへさをみしなり明日日かへさ有しなり
いけるかひありつるさいはひ人のひかりうしなふ日にてあめは　秘かくみなうちつけ事をいへり　弄紫上のひかりをうしなふときなる故に雨ふりぬといふなり
そほふる　河伊勢物語にやよひのついたち雨そほふる云々（曾保寄眞名本）萬葉にあられそほふるとも云り案之そほはすこし也あけのそほ舟といへるは丹ぬりたる小舟なり日本紀に赫をは曾保爾云々

なにをさくらに　河「まてといふにちらてしとまる物ならは何を櫻に思ひまさまし　弄まてといふに云云ちれはこその心なり散はこそいとゝ櫻はめてたけれうき世になにか久しかるへき　箋聞まてさいふに云々
二品の宮の　秘女三宮也弄もとの御おほえ　弄本たいの心なるへし
右衛門督　秘同車してなり
御おとうとの　弄まつりの後の日かへさを見る心なり
かくいひあへるをきくにもむねつふれて　秘紫上の頓滅の事をいひあへる也　私柏木の心なりかくいひあはせるとは紫上のうせ給ひて女三宮の御おほえのあらはれんと人のいふを聞てむねつふるゝなり
なにかうき世に　河「ちれはこそいとゝ櫻はめてたけれなにかうき世に久しかるへき　弄奥入に殘りなくちるそめてたき云々ちれはこそいとゝ櫻云々
箋聞ちれはこそいとゝ櫻云々
式部卿宮　秘紫上の父なり
大將君　弄夕霧也

いかに〳〵ゆかしき　秘柏木詞弄
たゝひさしき御なやみを　柏木用捨の詞なり
いとおもくなりて　秘夕霧詞也弄
わかあやしき心ならひ　柏木のわりなき事をおもひよる心ならひに夕霧の紫上に心をかくるかとうたかふなり
かくこれかれまゐり　弄源のきゝ給ふなり
おもきはうさの　源の詞重き病者なり
みつからもえのとめす　女房とものなきさわきたるに源もえ心をさめさりしとなり
かゝるをりのらうらうならねは　河牢籠也　花衛門督なり牢籠はこゝにてはおとろきさわく心也こゝにてはおとろく心なり禪閤又云紫上の大事源氏の心中の悲さ牢籠なり常にいふもわたれり　又云自由ならぬ心にや參らてはの時なり柏木心也　秘花說いかゝ只不㆓自由㆒心なるへしまへに有しと同し參らてはかなはされはこそまいりたれとなり
はらきたなかりける　柏の我と思ふなるへし黑心はらきたなきとよめり　心の內そといふより草子地なり

いきいて給ひて　紫上の蘇生の事なり
うつし人にたに　箋現存の時さへなり　秘源の心なり御息所はうつゝの時さへ氣のとりくるしかりしとなり
世かはりあやしき　生のかはりたる事なり
いひもてゆけは女の身は　秘女は業障ふかしとなり涅槃經にもかけり河海にみえたり　河所有三千界男子諸煩惱合集爲一人女一人爲業障女人地獄使能斷佛種子外面似菩薩內心如夜叉涅槃經　箋載之
まことゝおほしいつるに　源の紫とのむつことの物かたりを紫も思ひ合せ給ひまことには御息所の心の樣をむつかしくわつらはしきとおほすといふ歟
御くしおろしてんと　紫上本意とけたくおほす也
五かいはかりうけさせ　箋聞五戒は沙彌戒也不及十戒云々　五戒龍王經云一日一夜間持三歸五戒人生卅三天中所守護又持五戒人廿五神王被護又以清淨心合掌不生他念人者命終時生日摩尼天經意要法文曰言五戒者是優婆塞此云近事男也優婆夷此云近事女也
御かたはらにそひゐ給ふ　紫の御かたはらに源もそひゐ給ふなり

よにかしこく　箋聞随分の智人も賢人も難儀に及ふ
　時は心しつめかたしとなり源をいへるなり
いかなるわさをもてか　箋主君も不叻（しレイ）親服（觀眼イ）も替なり
御かはもすこし　源の御さまなり
五月なとはましてはれ〳〵しからぬ　箋聞ましてと
　かける心面白しはれ〳〵しからぬは五月雨なとの
　體なり
物のかけのつみ　御息所のとふらひ
御まくらかみちかくても　箋紫上の枕上のほとり也
ふたんのみと經　箋聞禁中ならねと六條院は院中な
　れは讀經といふ此經は大般若最勝王法花經等也
をり〳〵かなしけなる　弄物の氣なり
なきやうなる御心ちにも　紫上の心なり　紫上は物
　もおほえぬうちにも源の御心まとひをかなしく思
　ひ給ふとなり箋聞
思ひおこして御ゆなと　箋少食事なるへし
思ひくまなかるへけれは　箋聞思くまの有とかく也
猶いとゆゝしくて　箋聞あふなき心歟弄
六條院にはあからさまにも　弄以前の詞に紫上の病
　をつけたりし時に參り給ふなり源の女三の御方へ

　はおはせぬとなり
ひめ宮はあやしかりし　秘女三宮なり懐姙なり
たちぬる月より　これは五月をいふへし柏木女三に
　あへるは四月なり
かの人はわりなく
夢のやうに見たてまつり　秘柏木女三宮に文もかよ
　ひし事有へし弄　箋聞柏の心もあまりけしからぬ
　事なり女三もあまり人まかせに心やはらかなる心
　なりいつれもあしきなり
院をいみしく源の事なり
ありさまも人のほとも　箋聞柏と源との事なり
いたくよしめき　箋柏木のすかたなり秘
たくひなき御ありさま　箋源氏なり
　秘源をおさなくよりなれ給ふめうつしにはいかゝ
　と見えたり
かくなやみ給ふは　秘懐姙の事なり
あはれなる御すくせ　箋此あはれなるは因果の道理
　なるといふなり　宿執の事なり
見たてまつりとかめて　秘皆懐姙を不審するなり

院のわたらせ給ふ 弄 女三の懐姙の事をつふやきう
らむるなり源のおはする事のなかりし事なりほの
不審して無句體となり
かくなやみ給ふと 箋 女三のわつらひ給ふ故源の六
條院へおはする也弄 秘 六條院へ源氏のわたり給物語イ
ふとかきていまた二條院の事をかけり弄 是勘物
の筆法なり
つふやく 河 詢 嚅同
女君は 秘 紫上なり
ふしなからうちやり 箋 寢なから髪をほし給ふはを
そくひるよしなり
露はかりうちふくみ 露のかわきもやらすまよふす
ちもなくうつくしき體なり
色はさをにしろく 河 佐青又小青 箋 あまりに白き
は青きなりそれは病後色の青く白きさまなり 箋
閑前に紫を櫻にたとへたるを思ふへし 弄 さあを
きまてとも一本にあり白きは極めて青きなり
らうたけなり 箋 勞なりいたはるなり深く大切にみ
たる心なり文王勞問曰とあり此心によくかなふな
り

もぬけたるむしのからなとのやうに 河 二也
とし比すみ給はて 秘 二條院也
たとしへなく 箋 たとへなくとなり
あはれにいまゝて 秘 はや開入きえイ給ひし物をとなり
弄 紫上なやみ給ふを又いまゝてなからひけりと思
ひ給ふと也
かれみ給へおのれひとりすゝしけなるかな 河 源の
詞也 箋 おのれ獨とは源の心もいつれひとりイ紫の煩ゆゑにすゝ
しくもなきといふ所か妙なり遊ひかりすゝしけな
りとなり
おきあかりて 紫上なり
わか身さへかきりて 箋 紫の事は勿論源さへかきり
と思ふ事のありしとなり
みつからもあはれに 秘 紫上なり
紫 きえとまる程やはふへきたまさかにはちすの露のか
かるはかりを 秘 紫上の命露のやうにしはしのほと
かゝりたるをとよめり 秘 我命は邂逅にと也弄
箋 蓮の露はきえをまたぬものなり風あれはちるな
りきえとまるは消殘る心なり
返源 ちきりおかんこの世ならてもはちすはに玉ゐる露の

心へたつれ　秘心へたて給ふなとなり　源の歌なり
聞一蓮托生の心後世を契るなり　箋呑留半座乘花臺なとゝて夫婦は一蓮を契るなり是も凶なる歌也
いてたまふかたさまは　箋女三宮なり
内にも院にも　今上と朱雀なり
なやみ給ふと　女三なり
めにちかき　秘紫上なり
かゝる雲間にさへや　秘病のひまなり　弄紫上の病のひまなりかきくれし心なり　箋紫上の煩のひまを雲間といふなりいまた十分に本腹はし給はぬは雲間といふ也　聞五月雨の後の心もあるかまつは病のひまなり
宮の御心のおにゝ　弄心のうちの僻事を人やしるらんと思ふを心の鬼と云也
日ころのつもりを　秘源はいかゝと思ひ給ふなり
箋源は此間のとたえを女三のうらむるゝ思ひ給ふなり
例のさまならぬ　秘御懐妊なり弄
あやしくはとへて　秘源　心なり　私秘にて文字濁聲あり　程へて　秘聞に拵へて此兩義聞書にはて
もし清か如何　箋御子の出來んならは是よりも早く出來せん事そと不審に源の思ひ給ふと也　聞明石中宮已後いつれの腹にも御子の出來せぬ事を程へてと云歟　又久しく源の女三へおはせさりし事を程をふると云歟　私秘にてもし濁たる心は女三の六條院へおはしましたるは近き事也紫上なとの年久しきにも御子のなきにといふ心也次の詞に年比へぬる人々たにもとあるにてきこえたる歟如何
とし比へぬる人々　箋是は源の三人の事をさす歟紫上明石花散里なとの事歟如何
不定なる御事　箋是はよくもしらすしてめのとなとの中かと源の推量なり
からうしてわたり給ひしかは　箋やう〳〵に思ひおこしてゝなり
二三日　弄ふつかみか
いかに〳〵　秘紫上を心もとなく思ひ給ふなり
いてややすからぬ世をも　箋紫上を大切にし給ふを女三かたの衆とり〳〵にいふ事なり
わか君の御あやまち　弄御ふみをのみは源氏紫上のかたへなり　秘女三宮なり　弄女三なり　我君な

り　女三の御身にあやまりのあるをしらぬ人の理運にいふとなり
侍従そかゝるにつけて　箋源の二三日おはするをいふなり云々　秘源の此事を知給はぬさへ紫上には思ひおとし給へるを此柏木の事を源の知り給ひたらはいかゝあらんと小侍従か思ふ心歟
かの人も　秘柏木なり弄
かくわたり給へる　源の女三の御方へなり
たいへあからさまに　箋紫のおはせねとも源の對へやうなとわりておはしけるなるへし
人まなりけれは　人のすき間なり
むつかしき物　女三の詞也文の事也
はしかきのいとほしく　はしの文言御（かイ）いとほしきといふ所へ人の來るなりとていぬへきを侍従かあはてゝ其まゝおきたるなり
こゝにはけしうはあらす　弄如此け文字を濁なり私つねに清て用之　秘源の詞也
いとたゝよはし　紫上のさまなり
ゆめ心をき　女三の打しめりたるを恨給ふと源の思ひ給ひて人なとのあしさまに申なすとも信用あるなわか心はかはらしとなくさめての給ふこゝろなり
いたくしめりて　秘女三の御さまなり
おとろき給ひて　源なり
月まちてともいふなる　河夕やみは道たと〳〵し月待てかへれわかせこそのまにもみん　秘女三宮の詞也　夕やみは道たと〳〵し云々　箋此くれたるに御かへりあるかせめて月まちてなりとも御歸あれとよみたる歌なりわさとよみたるやうなる引歌なり道たと〳〵しからぬよ源のの給へるより出たるなり
そのまゝにとや　同し歌の結句なり　源の詞なり
女三宮
夕霧に袖ぬらせとや日くらしの鳴をきく〳〵は（おきイ）さて行らん　秘此日くらしのなくを聞てはよそにましますとも御出あるへき物をとなり　箋日晩の鳴は日の暮るゝ證據なりそれを聞つゝかへり給ふはわか袖をぬらせとの事かとかこちたるなり
かたなりなる　箋女三の宮のよろつ御年よりもわかくおはする様（體イ）なり
あなくるしや　源のさまなり

返源まつさともいかゝ聞らんかた〳〵に心さわかす日く
らしのこゑ　秘二條院にもまたるへき物をとなり引
歌古今「こめやとはおもふ物から日くらしの鳴夕
くれはたちまたれつゝ　箋かた〳〵には紫上と女
三宮となり
猶なさけなからんも　箋えふりきり給はぬなり前に
女三のとたえをうらみたる體と源のみなしなとし
給ふ故にかくてとゝまり給ふなりそれ故に叉花木
の文なとはあらはれしなり
しつ心なく　紫の事を思ふ源の心なり
よへの川ほりをおとして　河蝙蝠の羽を見て扇をつ
くりはしめし故に扇の名を云なり今の世にもつ扇
なりかはほりといへり私今の扇なり
これは風ぬるく　花風ぬるきとは檜扇をいふにやそ
れをは置給てかはほりをもとめ給ふなり　秘檜扇
なるへし弄
御しとねのすこしまよひたる　秘まよふは亂なり萬
葉にも亂の字をまよふとよめり弄
あさみとりのうすやう　河淺緑なり
その人の手なりけりと　秘柏木なり

御かゝみなとあけて　女三の御鏡の箱のふたなり是
は源のみ給ふ鏡なり女三はいまたね給へりとみゆ
猶み給ふへきふみにこそ　弄源氏の御覽すへき文と
思へり
時日（昨イ）の文と見るに　小侍從は紙の色にてみしるなり
むねつふ〳〵と　むねのさわくなりかくい給ふてけ
んと思ひなすまて小侍從か心なり
あないわけな　秘源い心なり　秘源の心なり我身の
みつくるはくるしからさるなり
出給ひぬれは　秘源の二條院へ出給ふなり
あかれぬるに　弄別なり
いふかひなの御さまやと　秘小侍從の心なり
かは（さイ）かりのいみをたに心のおにゝ　弄小侍從か近
さふらふをたにひとやとかめんとさり侍りしとな
り小侍從も身に僻事のある故にすこしの事にさへ
心をつけ侍るにと女三へ申なりいみをたにとは物
をいみさくる心なり
いつくにか　秘小侍從か詞なり
人々のまいりしに　秘人々のまいりしをたに我はは
はかりし物をとなり

いらせ給ひしほとに　秘源の御出ありしはしはし逗留もありつるをとなり
いさとよ　秘宮の詞也
えおきあへて
なつてのかはあらん　文のなき事なり此詞おほく歟イありとこゝにかあらんすらんなと世俗にいふ詞なり
あないみし　秘少侍従か詞也
かの君も　秘柏木なり
すへていわけなきさまにて　花みすのつまの事なり
かくまて思う給ふへし御事かは　秘しとけなく見え給し故にこそあなかちにせめ給へと也弄　私たゝ思ふ事のかたはしを人つてならてきこえたきと柏もの給ひしなりさるに心やすく打とけ給へる故にかやうの事になりたると云心にや始て逢給し時柏木の心にもかはかり心やすく打とけ給はんとは思はさりしとかけり
はゝかりもなくきてゆ　秘草子地なり主君にはいかやうには物はいひかたきをはゝからす　私是も女三宮のわかく分別もなき體をかけりつみしてかける詞なるへし

心やすくわかく　私是より草子地なるへし
つゆはかりの物も　女三の御わつらひの體なり
いまはおこたりはて給にたる　秘紫上は平愈なるものをとなり　女三の最中にわつらひ給ふをおきて紫の本腹し給へるのみ心をつくし給ふと皆〻やすからすいふなり
おとゝはこのふみの　源の柏の文を不審におほすなり
中納言の手ににたる手して　弄さふらふ女房の手なとにやとなり
としをへて思ひわたり　秘ふみの大體をとりてかけり
いとかくさやうに　秘源の夕顔の上への文手をかきかへ給へりあひみてもあはぬよしをこそかくへきを此文のかきさま用意なしとなり　又須磨の巻に朧月夜のかたへあふせなき涙の川とかき給へり弄逢給ひしをもかくかき給へりおちゝる事もやとの用意なり
さてもこの人をは　秘源の心なり　此人とは柏木の事かあとへつゝけてみれは女三の事なるへし

めつらしきさま　秘懐妊なり
人つてならす　聞源の直に見出たる事なれはかくいへり
なはさりのすさしと　秘自然手かけ物なとのかりけめと思ふたにもこと心のあらんはつらき物をとなり
ましてこれはさまことに　秘柏木もあまりなる心となり
いふかたことなり　秘したへいひのふるなり　河五條后冬嗣大臣女仁明后　二條后中納言長良女清和后　通業平中將　花山女御元方民部卿女三條院后　通小野宮關白弁　通信中將道イ　麗景殿女御法興院入道女三條院后　承香殿女御顕光大臣女一條院后　以上二人通右兵衛頼定
おほろけのさたかなる　秘さた〳〵とみえぬ程はまさる事あるなり
かくはかり又なきさま　秘此女三宮なり源は紫上をさしおきて心を女三につくすとなり
うち〳〵の心さしひくかた　聞紫上なりそれよりもおもてむき女三をはおやめき結搆に源のあひしらひ給ふとなり女御更衣にはおほえかろきもおほしとなり
つまはしき　河弾指なり
みかとゝきこゆれと　秘公方の御心さしのあさきにわたくしのねきことのふかきには心をかはすたくひおほしとなり
よるかたありや　前の詞をうけてこれは又一のより所かあるとことわるなり
わか身なからもさはかりの人に　秘柏木に思ひかへておほしめす事となり
故院のうへもかく御心にしろしめして　秘きりつほの帝の薄雲の御事なり
戀の山ちはえもとくましく　河「いかはかり戀の山ちのしけゝれはいりと入ぬる人まとふらん　弄此引闘書同秘不載之
もとくましきは　源のみつからおほすなり
つれなしつくり　源の思ひ入れぬかほをし給へと女三の御事をいかゝせんとおほすさまの物思ひ給ふとみゆるなり
女君　紫上なり
きえのこりたるいとほしみに　秘紫上のわれをみす

にかたくして女三の事をおもひなやみ給ふかとの推量なり
心ちはよろしく　秘紫上の詞弄
かの宮のなやましけに　女三なり
とくわたり給にし　源のはやくかへり給ふと紫のゝ給ふなり
さかし　秘源の詞なり
内よりはたひ〳〵　弄女三のかたへ源のおろかにやといふ心の文ありしとなり　秘今上より女三の御かたへなり
院のやんてとなく　朱雀の今上へよく仰おかれし故そとなり
こなたかなたおほさん事の　箋是は朱雀今上の事をうけていふなり
うめき給へは　箋嗟歎するなり　歎心なり　源のイ
源のさまなり　前に草子の地といへるはわろし源の詞なり
内のきこしめさんよりもみつからうらめしと　秘紫上の詞也　聞今上の疎略なると覺しめさんよりも女三の御心中心くるしきとなり紫の奇特なり
われは覺しとかめすとも　弄女三宮の事なり　女三は思ひ入給はすとも人のあしくいひなさむとなりけにあなかちに思ふ人のためにはわつらはしきよすかなれと　秘源の詞深切に思ふならは人の助言もいるましきをこれは國王の御心はかりをかきりてつかうまつるは淺き志なりとなり　聞思ふ人の爲ならは國王はわつらはしきよすかなり又大よそ人とはあたりの人なとのとやかくやと色々思慮せんもむつかしきなり是は國王の御心はかりを憚るは淺き志なりとあさけるやうにの給ひなすなり　私此段猶可案之　弄深く思ふ人故はよそにいひあつからんことをも心にかくるをこれはわつらはしき國王の御心を思ふはかりは淺き事なりとなり黄ム此行は上私の字付紙あり
わたり給はんこともろともに　秘紫上六條院へかへり給ふへき時參へきとなり
こゝにはしはし　秘紫上の詞弄
まへわたり給ひて　源は先六條院へかへり給へと紫のすゝめたまふなり
日ころへぬ　弄かくの給ひていつれもわたり給はす

ひめの宮はかくわたり給はぬ日ころふるも　箋これ
は以前の日ころをいふなり
わか御おこたり　箋是は當分の日比なり前は源をの
みうらみ給しか今は女三の御身にあやまちのある
故と思ひしり給ふなり
院もきこしめしつけて　花朱雀院の御事なり
かの人も　箋柏木なり
かゝる事なん　花かの人の文を源氏のみ給ひし事な
り
いとあさましく　柏木の心なり
ありふれは　程のへぬれはとなり
そらにめつきたる　河天眼の事歟隱密する事も四知
とて天地人我の四はしる事なり天の照覽は第一な
り
朝夕すゝみもなき比なれは　河「夏の日も朝夕すゝ
みある物をなとわか戀のひまなかるらん　箋不及
引歌云々　弄聞に用引歌秘不註之
身にしむる心ちして　弄おそろしくそゝろさむきな
り　花身もひゆる心なり
としころまめことにもあたてとにも　是より源のし
たしかりつるさまを思ひつゝくる柏木の心なり
さしておもきつみには　おもてむきにて罪におこな
ひ給ふ事はあらしされとも猶ましらひにくき事な
るへしと心よわく身をなき物になしたる心ちのす
るなるへし
いてやしつやかに　秘女三の體なり　秘柏木の此事
をおもひさまさんとてかく思ひなし給ふなり
みすのはさまも　鞠の時の事なり
大將の思へる　箋夕霧猶の時聲つくりせし事あり
しひてこの事を　箋是より草子の地聞
よきやうとてもあまり　弄柏の心六條院の心かと云
義有如何女三なとの御身は大やうなるか可然事な
りされとも女三はあまり大とか過たるとの事なり
世のありさまもしらす　箋世間の作法をもしらすか
してからぬさまなり
かつさふらふ人に　秘めしつかふ人をも可然をえら
ふへき事そとなり
かの御事のくるしさと　箋懷妊の事云々　私たゝ大
かた女三の御身の上の事なるへしさま〲難をつ
けて思ふうちに猶女三の御ための心くるしきをい

ふなるへし
かくおもひはなち給ふにつけては 花 源の女三へは再會あらしとおほすなり 弄 源氏の女三を思ひはなちて又さやにくに戀しくてわたり給ふとなり
うきにまぎれぬ 花「戀しさのうきにまぎるゝ物ならは又二たひ君を見ましや 物語より後の歌なり不可爲證歌 秘 源のわたり給へるなり花鳥引歌おもしろし
やんことなく 箋 是は面むきを前よりもねんころにし給ふなり
けちかくうちかたらひ 箋 文を見つけ給うて後は女三と實事なとはなきとなり
おほしのみみたるゝにこの御心のうち 箋 女三の御心の中なり 聞 これは草子の地なり
さることとみきとあらはし 箋 柏木の文の事なり源の心なり
みつからいとわりなく 女三のわれと人の不審するやうなる體をあらはし給ふ事なり
心をさなしかくおはするけそかし 箋 如此おはする故に此事なとも出來ぬるとなり

女御のあまりやはらかに 秘 明石の女御也 弄 明石女御の御事を源氏の思ひ給ふ也 箋 明石女御大とかにやはらかなる人ときこえたり
おひれ給へるこそ 河 おひれはをさなき心なりねをひれなとやうの心なり
かやうに心かけ 物やはらかなる人は心かけそめたる人のとり入やすくてしかも思ひはなれかたき物そとなり
右のおとゝの北のかた 秘 玉かつら也
かと／＼しう 箋 心のはたとつよき所のあるなり
にくき心のそはぬにしも 源の心をかけ給ひし事を我と思ひ給ふなりされともつひに實事はなしとみゆ
此おとゝ 弄 ひけくろ也 此一段玉かつらの鬚黒[illegible]逢そめし時の事なり
むしんの女房 河 無心なり 秘 小辨をいへり弄
ことさらにゆるさん 玉かつらの我とはなひかぬ所をあらはしてからゆるされて逢給ひしなり
今おもへは 箋 女三の御事からくらへて源のおほすなり

契ふかき中なりけれは　秘鬢黒と玉かつらとの契りふかき中なれは玉かつらの心ととけ給ふとも又さらすとも同事にて有へけれと人のゆるさぬ事ならはうたてからましとなり弄箋聞　私此段玉かつらの心をほめ給ふなり

いといたくもてなしてし　秘玉かつらの心を云也弄

二條の内侍のかんの君　秘おほろ月夜の事也花弄

かくうしろめたきすちの事　女三の事故に源のおもひしり給ふなり

かの御心にはさもすこしかるく　花女三宮の事也
箋女三宮の事故朧月夜の心弱さもかる〳〵しき事と少しおもひさまし給へる心なり

終に御ほいのこと　内侍のかんの君尼に成給へる事也秘弄　私ほいのごと如くなり又ほいのこと事なりいつれにもなり猶ほいのことくといへるか可然か如何

きゝ給ひては　源のすこし思ひさまし給ひつれとも出家のよしきゝてはあはれにて今一たひもとおほすなるへし

いまなんとも　秘案内もなかりしとなり

源氏 あまの世をよそにきかめやすまの浦にもしほたれしも誰ならなくに　秘此朧月夜尼に成給ふをも源いよそにきくましきなりわか身すまのうつろひもそなた故なれはとなり弄　箋尼海人をかる誰ゆゑそと云結句なり

さま〳〵なる世のうさを　源より朧への文の詞

心におもひつめて　源も出家の素懐あるとなり思ひあつめてなり

御ゑかうのうちには　河廻向文願以此功徳普及於一切我等衆生皆共成佛道

とくおほし立にし　花尙侍の素懐をとげ給ふ事院の御事に思ひ立給ふよしなり　秘朱雀院の御山こもりの時かく思ひたちし事なり源のさまたけ給ひしなるへし

人には（にイ あらすイ）しかわらはし　朧の出家を源のさまたけ給ふとはあらはさぬなり若菜上に朱雀も此次にはいかかとゝめさせ給ひしよしかけり

むかしよりつらき御契　秘内へ参り給はぬさきよりの契りとなり

いまはかくしもかよふましき　箋尼すかたにて艶書

めきてかきかはし給はん事は有ましき事なれはと
ちめといへり
つねなき世とはわれひとり　秘文の詞なり　箋これ
は朱雀の御事なり
おくれぬとの給はせたるになん　秘おくれぬるとな
り　箋世のつねなきは我身ひとりと思ふにおくれ
ぬると源の仰らるゝは心得すといふなり
けに　明石の事を思ひいてゝけにといへり
返朧月夜
あま舟にいかゝはおもひおくれけんあかしの浦にあ
さりせし君　秘あかしの上ゆゑに明石まてはくたり
給へるなり我身ゆゑにてはなかりしとなり弄同
秘けにあま舟におくれ給ふましき事なるか我ゆゑ
明石へおはしたるにてはなき故におくれ給へると
なり
ゑかうにはあまねきかたにても　河あまねき門とあ
りてあまねきかとゝは普門示現の心也ひろくあま
ねき廻向の心なり　私花にはあまねきかたとあり
此沙汰に及はす　秘普及於一切の心也　箋廻向に
はあまねきかたがよけれとも男女心をかよはしゝ
間にはいかゝとゝかめたるなり　聞朧はかりなら
す源の八にあまねく心かくる事をいふ歟云々　私
別して朧の源へ下に通する心なくともあまねき門
にはいかゝもむらし奉んといへる歟猶可決之
しきみにさし給へる　樒也　弄おほろ月夜の手はよ
しとなり
女若にもいまはたえぬる事　弄朧月夜の文を紫上に
見せ給ふなりたえぬるとは出家し給ふ事なり　秘
今をとちめなれはなり
いたくこそはつかしめ　秘此歌イ紫上の事なり
弄おくれけんと源氏の出家におくれぬるとあるを
返事によみ給ひし事なり
けに心つきなしや　秘みなかやうにそむき給ひて御
友もなしとなり
齋院と此君と　箋槿齋院と此君か朧月夜なり　弄槿
齋院出家の事こゝにて見えたり
こゝらの人のありさま
かくみなそむきはてゝ　秘齋院はとの貞女はなかり
しとなり
ふかくおもふさまにさすかに　弄槿齋院の事なりふ
かく思ふさまに槿齋院の體なり

かの人いなすらひ　秘女三宮なり　箋槿朧二人　聞
槿なり　私秘に女三といへる大にあやまれり槿朧
の二人といへるもわろし齋院はたいみしといふよ
り槿一人の事をほめ給ふなり
女こをおふしたてん　女子をそたてん事大事となり
女一の御事の心中にある故に源のさま〳〵の給ふ
なり
すくせなといふらん物　前世の宿因は親のまゝにも
ならぬ事となり
よくてそあまたかた〳〵に　弄源氏の心に今よりは
あまたに心をわたさしと也私義ありと云々　聞男
女の御子のすくなき事をの給ふ源の詞也よくてそ
あまた子のなけれとなり是も女三の事ゆゑなり
としふかくいたらさりし　秘年わかき時なり
さう〳〵しのわさやさま〳〵に　源の御子のすくな
きをわかき時は分別もなくてさう〳〵しくおほせ
しとなり
わか宮を心して　秘今上の女一宮なり　弄紫上の養
たて給ふなり
何事も心もとなき　女御は御いとまなくまたわかく
おはしませは心もちひのゆきとゝかぬてとあるへ
しとなり
人にてんつかるましく　弄惣してみてたちの事をの
給ふ　箋人に褒貶せらるましくなり
それにもたすけられ　弄うしろみは人に嫁する事夫
にたすけられて萬はかくるゝ事なり
はか〳〵しきさまの　秘紫の詞なり花
いかならんとて　花おもしろきかき様なり　弄妙な
り命もしらすさためなき世を思給ふ詞なるへし
人にまかせて　聞紫の心中なり槿朧なとの事なり
かんの君にさまかはり　秘朧月夜なり
またたちなれぬ　弄朧月夜の尼になり給ひしはしめ
なれはそのかたの女房ともいまた裁なれしとなり
箋衣といはすして面白し
けさなとはいかにぬふ物そ　河東宮切韻云　釋氏曰
袈裟二音俗云計佐天竺語也此云無垢衣又功徳衣孫
愐三傳法衣即沙門之服也　花昔の尼のかゝるけさ
ぬひやういかゝ侍るらん
六條院のひむかしの君　秘花ちる里なり
ほうふくたちては　河法服立　秘立の字如何多（たイ）くと

云心歟　秘あまりに世をそむきたるやうにはすましきなり
つくもところの人　河作物所　秘金銀細工の所なるへし調度のためなり弄　箋尼の具は悉くろぬりしろかな物にてまきゑなしと云々
御しとねうはむしろ屛風木丁　弄うはむしろ如何
わさとかましく　弄これはあなたに御用意なき間にといそき給ふなり
山のみかとの御賀　箋始て朱雀を山のみかとゝかけり
八月（ハツキ）は大將の御き月　秘葵上の忌月なり　弄夕霧の母葵上の忌也夕霧此たひの御賀をとりもち給ふによりてなり
かくその事　箋夕霧樂所の奉行なり
九月は院の大きさき　秘朱雀院の母后の御忌月なり弄弘徽殿太后なり云々
十月にとおほしまうくる　御賀十月にとなり
姫君いたくなやみ　弄女三宮也
衞門督の御あつかりの宮　秘落葉宮なり
その月には　弄女三宮落葉也朱雀院の御賀し給ふ也

十月也
おほきおとゝ　箋致仕大臣なり
かんの君もそのついてに　弄柏木朱雀院へ參り給ふなり　秘柏木此程出仕なかりしをこれをついてに出給へるとなり
宮うちはへて　秘女三宮御懷姙のさまなり弄
院は心うしと　源なり
ことしはまきれおほくて　弄紫上の病氣なとにまきれてなり　箋祈なとの事なり
御山にもきこしめして　箋朱雀なり　箋聞みやまとつけたり
らうたく戀しと　これは先朱雀の女三の懷姙のことをかくおほすなり
月ころかくほか〳〵にてわたり給ふても　秘源の女三のかたへかきたえ給ふよしなり　是より源の女三へうと〳〵しきよしを朱雀のきこしめして懷姙の事なとにも御不審のたちたるなりそれを此さきへいひのへたる段なり
たいのかたのわつらひける頃は　紫上なり紫の煩の時分はそれにとりまぎれて女三へうと〳〵しかり

しを朱雀もやすからすおはしゝとなりさてはさやうの時分いかなる事もありて懐姫に給ふ故にそのまゝうと〳〵しきかと御推量なりよくおはしよれるなり

うちわたりなとのみやひをかはすへき　秘朱雀の御心なり内裏にさふらふ女御更衣のうへをさへさまさまとりあつかふ事のあれはまして二條院に源のましますするすにはいかなる事かと御心にかゝれるなり　弄朱雀の御心世の人禁中（中宮なとにイ）なとの事をもいひ出るにとなり　箋これは中言誹々と内通あるなとと偽をいふ事も有となり　花みやひと云詞伊勢物語にあり此物語にはあまた所にあり　日本紀云風姿とかけりみやひかにたわやきたる心なり私此義共いつれもよくかなへりともみえすうちわたりのみやひとは面むきなとの文かよはしなとはくるしからぬ中なる人をもはや密通なとのあるといひなすやうの事もあるといふ義歟　内わたりなとのみやひをかはすも宮つかひ人に心をかはしたる心なりかやうの詞は心をやりて見るへきなり

こまやかなる事　世事の道を捨給へる朱雀なれともこの道をはおはしすてすとなり　聞此道は子の道なり

おとゝおはします　源の女三のかたにおはして朱雀の御ふみをみ給ふなり

そのことゝなくて　秘朱雀院の文の詞なり

とし月のすくるなん　箋朱雀の御よはひの末ちかきよしなり

世中さひしく　箋源の疎遠なるをふくめり聞　箋聞いかゝ世中さひしく世中のうへにて心に句をきりてよむへしと云々

いとゝほしく　秘源の心弄　秘是より源氏の御心なり　箋朱雀のおほしめす所は尤と源のおほすなり

とはかりおほしつゝけて　しはらくなりくはしき事をは朱雀のしろしめさて源のおろそかなるとおほさん所を心くるしく思ひつゝけ給ふなり

この御かへりをは　源氏女三宮へ申給ふ詞なり

心くるしき御せうそこにまつこそ　朱雀の御文の體源のために迷惑なると也　秘源の身こそ面目なけれは也人めにたつはかりに疎き事はなかりし物を

となり
思はすにおもひきこゆる事　箋源の女三をあしさまにおもふ事ありともおもてには疎略せしと思ふ物をとなり　聞柏の事をちとにほはせての給へり
はちらひて　女三の御さまなり
物おもひくし給へる　弄くつしとよめり
いとをさなき御心はへをみおき　箋女三の心をさなくおはするを朱雀のみしり給てつきうしろめたかり給ふと源の宣ふなり
いまよりのちもよろつになん　秘又はいかやうの事もあるへきとなり箋　私是は柏の事をあてゝの給ふなり
かうまてもいかて聞えし　不入事を申さしと思へともとなり
うへの御心にそむくと　弄うへは朱雀の事也　秘うへとは朱雀なりそむくとは女三の御心に源のそむき給ふとなり弄
こゝにたにきこえしらせてやと　箋此子細朱雀へ申されぬほとにせめて女三へ申ひらくとなりさらすはこれほとまても申さしとおもひしとなりいふせきとは不審なりものつまひらかならぬなり朱雀へ申ひらかておけは御不審あらんするなりおほつかなきやうの心なり
いたりすくなくたゝ（只）ひと（人）のきこえなす（たゝうとゝよむへからす）　秘朱雀のいたりすくなき人の申まゝにやきこしめしけんとなり柏木の事下にふくめり　弄朱雀のいたりすくなき人の申まゝにやきこしめしけんとなり但女三の心とみゆ　花たゝ人のきこえなすかたになひけるをおのか申事をはかへりておろかにおほしめすと也私朱雀こいへる義如何是はいたりすくなくとは女三の心を源のゝ給ふなり只人のきこえなすとは人の申なすかたになりやすき御心となり是は柏木密通の事を云也さやうにいたりすくなく人の申なすまゝなる女三なれは源の疎遠をも人の申なし次第に源のてかめのみ（もてなしおろかなるとイ）おほすへしとなり花鳥如何
又いまはてよなくさた過にたる　花さた過るとしたけたる事を云なり是は只源の我身の事也
秘源の年よりたると女三の見なし給ふらんと也
院のおはしまさんほとは　朱雀なり　箋是は朱雀の御存生の間はわれにしたかひ給へとなり朱雀のお

はしはからひて源にあつけ給へる女三なりされはやう有へしとおほしめせとなり

さたすき人をもおなしく　柏木に思ひおとさすせめて源をなすらへにもおほせとなり

いにしへよりはいふかき　花道心の事なり　秘我身道心のふかく有しとなり

たよりうすかるへき女かたにたに　花たよりうすき女かたとは色このみの事也いつれにそなたに仮に心をくれしよしなり　私花鳥の義如何たよりうすきとは分別のうすかるへき事なり　秘榊齋院朧月夜にもおくれたるとなり

いまはとすて給けん世のうしろみ　弄朱雀の御出家の事也　秘女三宮をあつかり申事なり　源の出家せんことも身上にてことなるとゝこほりなけれとも女三を朱雀のうしろみにとおほすゆゑに延引するとの給ふなり

ひきつゝき　朱雀に追つゝきて出家せんは女三の御ためいかゝとなり

心くるしと思ひし人々も　箋後世をかけとむるほとのはたしはなしとなり併女三故に世をもそむかぬ事を源のゝ給ふなり

ゆく末はしりかたけれと　箋明石女御の事なり朱雀しりかたしとは源の用捨の詞なり

みつからの世たにのこけくはと　箋源の存生の行末に別條なくはとなり行末まては思はすとなり

その外は　方々の人々なり

もろともに身をすてんも　秘紫上はかりは我身もろともに出家してもをしからぬ年となり只女三宮一人に心とまるとなり　私紫上はかりの事をもろともといへるにはあらす明石の上花散里なとも皆世をすてゝもをしからぬよはひそとなり

やう〳〵すゝしく　心のうちにかゝる事のなき心也

院の御世のゝこり　弄朱雀也

おもはすなる御名の　箋女三の事なり思はすの外聞あしき事なとありて朱雀の御心をなやまし給なとなり

ことにもあらす　物の數ならすとなり

つみいとおそろし　朱雀の御身はかりならす女三の御罪にならんとなり

その事とは　柏木との給はぬはかりにの給ふなるへ

し
涙のみおちつゝわれにもあらす　女三の御さまなり
われもうちなき給ひて　源氏なり　箋源の憐愍のふ
かき御心なりさなくは怒る心の出こんするなり
人のうへにてもゝとかしく思ひしふる人のさかしら
に　源詞也　秘昔は人を源もむつかしと思ひしとな
り　進止（サカシラ）萬葉　昔は源氏の人のさかしらを聞給ひしに
今又かやうの事をの給ふとなり
身にかはる事にこそ　箋老たる人なとのさかしらめ
くを無用の事をいふと昔は源の思ひ給ひしかいつ
しか身のうへになりたるとなり身にかはるとはお
もしろくかけりさかしらはかしこけにさし出る事
歟
う[illegible]さき御心をふらん　是もちとわたりての給ふか
かゝせたてまつり　秘院への御返事なり
御てのわなゝき　女三の御さまなり
かのこまかなりし　秘柏木への御返事はおもひやり
給ふなり
まいり給はんてとは　秘御文の詞にはあらす　私是
は文の詞にはあらす御まいりの事を女三へ源のゝ
給ふ詞と末にてみえたり
二條の宮　弄落葉宮也
ふるめかしき御みさまにて　懐姙ゆゑ此比おところへ
給ふとなり箋　弄女三宮此比おところへ給ふとなり
卑下なり
立ならひかほ　あらそひかほなるなり
霜月はみつからの御忌月　みつからとは源氏の父桐
壺帝の御忌月なり又みつからとは朱雀の御父帝の
御忌月と云なり弄　御の字両義にわたれり箋
又いとゝての御すかた　私懐姙の御すかたなり　い
とゝとは月のかさなるほと御はらのふくらかなる
へきを云也
むつかしく物おほしみたれす　女三への源の教訓な
りさきのやうにはの給へともさすかにいとおしく
てかくの給ふなり
いとらうたしとさすかに　箋さすかにといへる面白
し
ゆゑあるへきかやうの時なと柏木は第一にとりも
つへき人となり
人あやしとおもふらんと　源の心なり

みんにつけても　是は柏木の源をみんにもとなり
秘女三の御事をかの心にほれ〳〵とや思はれ侍る
へからんとなり　弄源の御心をほれ〳〵とやみん
となり女三の事源氏の心なり
見んには又　是は源の柏をみんにはとなり
月ころまいり給はぬをもとかめなし（てイ）　源のとかめ給
はぬなり
院にはた御あそひなとなき　秘紫上なやみ給ふ故に
御遊なともなけれは御用なともなき故と人々はお
もへるなり
大將の君そあるやうあることなるへし　夕霧は此や
うたいを不審に思ふなり猫の時より心つきし故な
り
すき物はさためてわかけしきとりし事にはしのはぬ
にや有けん　秘柏木の事也　弄けしきとりは猫の事
なり　鞠のかへさに猫の云し事なるへし　夕霧の
心に柏木の女三へいひよりたるを源なとのしろし
めしたるかとは思ひよるなり殘りなきさまとは實
事なとまてあらんとは夕霧は思ひよらぬなり
さたかに　秘かくのこりなくとまては思ひよらさる
也　弄夕霧の花散里の方にて調樂し給ふによて源
氏の御その事共を御覽しあつかはぬ事をいへり此
一行心得かたき段也　私弄の義猶いかゝと覺ゆ
秘の義然るへし
十二月になりにけり十餘日と　十日あまりとよむへ
し　弄御賀十二月十餘日となり　朱雀は御遊御こ
のみなる故かた〳〵舞樂あるなり
二條　のうへ　秘紫上もかへり給ふなり
えしつめはてゝ　紫上も試樂によりしつめはてすし
てかへり給ふとなり
女御の君もさとにおはします　六條院に（ニイ）おはする也
此たいのみこ　秘匂兵部卿宮なり薫に一歳の兄なり
宇治にいたりて薫よりは弟にかけり　聞如此事作
物語也不及不審云々　弄四宮常陸宮は明石中宮腹
也　愚匂宮歟可勘　此事誤之由永正九年五十九管（夢）
（庵イ）專注還之たるへし此愚勘相當也　私明石の女三の
事（御產イ）をはかゝすして產後に其まゝ六條院におはする
よしはかりをみせてかけり面白し
すき〳〵いとおかしけにて　河次々近江湯次產（座イ莊イ）也

すくるよはひのしるし　源の御心なるへし
しか〳〵に右大臣とのの北方　髯黒の北方玉かつらなり
大將の君うしとらのまちにて　大將は夕霧うしとらの町は花散里の方なり
てうがくのやう　調樂也わたくしのことなれはてうがくのやうにといへり
かの御かたは　弄　花散里の事なり
おまへの物はみ給はす　秘　花散里の方にてならし給（イ本）ふ故に別に試樂見物には出られさるなり　弄「夕霧の花散里のかたにて調樂し給ふによて源氏の御かたの事は御覧しあつかはぬ事をいへり此一行心えかたき段なり　私弄の義猶いかゝとおほゆ秘の義可然（さたかにの條に注せり前にしるす）
衞門督をかゝることのをりもましらはせさらんは
箋これは世にのこる人もなく參りぬるに柏木の參らさらんは人不審すへきとなり管絃の方に達し致仕大臣の嫡子にて時の人なれはかた〳〵さやうにあるへき事なり
おもくわつらふよし　重き所勞のよしなり

心くるしくおほして　源の御心なり
とりわきて　秘　別してめし給ふなり
ちゝおとゝも　致仕大臣なり
院にもきこしめさんを　聞　源氏歟　又朱雀歟
又かんたちめなとも　柏木のはやく參してなり
れいのけちかきみすのうちに　源と朱雀とつねに御中のよかりし心なり　常にしたしかりしよしありしにかなへり
もやのみすおろし　源は簾中にてあひしらひ給なり
やせ〳〵に　柏木のさまなり
れいもほこりかに　秘　平生もほこりかになとはなき人なり猶一しほしめりたるなり
おとうとの君たち　紅梅の大臣なとなり
いとゝしつめて　生得しつめたるさまなる人の用意をくはへたるさまなり
なとかはみこたちの　皇女になすらへてもうてぬ人體となり女三の事ゆゑ源の心におほし出するなり
たれも〳〵いと思ひやりなき　箋　女三宮と柏木との事なり　秘　所存の外なるとなり　弄　源の詞也弄
そのことゝなくて　さしたる事なくて久しく對面な

きこゝなり
色々のひやうさを　紫上源三の事なり
こゝにものし給ふみこのほうしつかうまつり　秘女
三宮の御賀の事なり弄闇　私女三の事をわざと猶(懇にイ)
々といひ消し給ふなり柏のさまをみん爲なるへし
　鐵法事歟朱雀院御出家の故にかくいふなり
つき〳〵ことには　私次々歟　但月々もさはりあ
る事を前にかけり可用其義歟如何
ともせめつれは　月迫なり
おもひのことくしあへて　かねて源みたくみのこと
くはなしとなり
いもゐの御はち　秘出家にてましますゆゑにいへり
いもゐは精進なり出家は依鉢を用る者なり(歯イ)
家におはへる　秘源の子孫なり　源子孫一家等の
事なり　闇諸家の事なるへしと也云々
思ひめくらしかねてなん　誰にも柏木なとゝのへ
させたとせんたなくてたひ〳〵申つるさの給ふ也
まて月比の疎遠なりし述懐をもこなたよりなげた
るよしなり
かはの色たかふらんと　柏木の雖義におもふよしな

り源のしり給ひなからうらなくの給ふと思ふ故い
ろ〳〵はつかしきなり　柏木の返事なり紫上女三宮の御
月ころかた〳〵に
なやみなり
みたりかくひやうといふもの　順和名曰醫家書有脚
氣病論脚氣一名脚病俗云阿志之介　うつほの物語十五源中納言鮮
蛾にまゐり給てみたりかくひやういたはり侍りて
とあり案之にみたりは病の惣名歟　みたり心ち也
世継に東三條殿みたり風なとあり　花かくひやう
は病脚氣の兩義ありみたりはさへて病の事なり
血の氣がみたれて病となる故なりはか〳〵しくふ
みたつる事も侍らすといへるは脚氣の事とも聞え
侍り　秘脚氣なり云々　只病の惣名歟　但ふみた
つるといへる脚氣なるへし　秘脚氣事也箋
院の御よはひたり　朱雀なり滿五十歳なり
人よりさたかにそへ　致仕の御賀を申沙汰しけれと
も朝家の出仕をもせぬ人なれは斟酌なるとなり
かうふりをかけ　河掛冠事也端にあり
車をおしまず　河古文孝經日七十老致仕懸其所仕之
車置諸廟永使子孫監而則正而立身之終其要然也

漢薛廣德爲御史大夫凡十月免歸沛太守之迎界上沛以爲榮懸其安車傳子孫師古曰懸其所賜安車以乘從致仕懸車又古說也

つく所なし　弄致仕の大臣着座せん所なしと也愚案有　秘致仕大臣着座せん所なしと云説ありいかゝたゝより所なしといへる心なるへし　私秘の義尤然へし

下らうなりともおなしこと也　柏木の事なりおなしことは同事歟同し如く歟同事可然歟

もよほし申さるゝ　致仕のすゝめられしとなり

おもきやまひをあひたすけて　是は朱雀へ女二宮の參り給ひし時の事なり　河今日正閑天又腰可能扶病暫來白氏文集此詩不及引歟

いまはいよ〳〵かすかなるさまに　秘朱雀の思ひすましておはしませは大略の事を省畧せられて然へしとなり　朱雀の御出住の體をよく知て申さるゝなり

いかめしくきゝし御賀の事を　秘女二宮の御賀し給ひしを致仕のおとゝのとりなしにいひなして女三宮の御賀の有へき事をはいかめしく思ひいへるを源氏のらうありとほめて思ひ給ふなり弄箋

たゝかくなんとうきたる（ことそイ）さまに世の人はあさく見るへきをさはいへと心えてものせらるゝにされはよと思ひなられ侍る　弄たゝかくなんは源氏の詞卑下語　秘何事も省略し侍るをかくいかめしきやうにとりなし給へれはよくとゝのへたきと也秘されはよとはされはてそ世間には此御賀をこと〳〵しくいひなす事とおほすなり　箋當日を省略したりと人のとはんなり（思イ）乘てことことしく人のおもふへき故なり然共柏木のとそけとあるもさては柏木もさやうにてと〳〵しくおほすかと也　花女二宮の御賀のことそきたるをくるしくもなきやうに柏木の申給ふはかたうとして申と心え給ふなり　私花鳥の義いかゝたゝかくなんとは柏木の申給ふやうに源もおほしてことそきたる用意なるを乘て人のことしく思へき故に案に相違して事の外省略し給へは人あさくみるへきとなりさはいへと心えてとは柏木は省略したるはよからんと心えられたる其外所は源と同心なからことそけと柏の申さるゝはさては柏もこと〳〵しき用意ならんとは思ひ給ふよさては世の人思はん所はいよ〳〵一定なり省略

の用意に生ましき物をと今おもはるゝとの源の詞と見えたり
大將はおほやけかたは　源の詞也　朝儀奉公の心は
夕霧はやう〳〵熟したるとなり
もとよりしまぬ　心にそまぬ事なり
かの院何事も　細　朱雀院也弄　心およひ給はぬ諸藝に通し給へりとなり
かくいかたのことは　朱雀別して樂道をこのみ玉ふとなり
捐しすてたるやうなれと　朱雀世をすて給へれとも樂道なとを忘れ給ましきとなり
かの大將ともろともに　夕霧と柏木ともろともになり
物のしなといふ物はたゝわかたてたる　地下伶人なとはたゝ公役なとのやうにしてなにごとも用意心つかひなき物そとなり
うれしき物から　柏の心なり源の隔心なき體を思ふなり源の心もちは妙なり
ひんかしのおとゝ　弄　花散里のかた也
兄々わてなひくは〳〵　柏木のおこなひくはへ給ふなり　夕霧の随分とゝのへ給つる所へ柏木のおはして猶事ともしそへ給ふとなり樂道には源のゝ給ひしやうによく達したる人そとなり
いとふかき人にて　柏木の樂道をほめていへり
御かた〳〵物見給はんに　試樂の日なれと明石女御女三宮紫上以上いつれも御見物なれはけふはいよいよまひのさうそくをもよくとゝのへらるゝと也
かの御賀の日は　當日のさうそくを今日かねていふなり
あかきしらつるはみにえひそめの下かさね　河赤白橡　蒲萄染下襲　花　永平七年陽成院七十賀舞童五人服赤白橡蒲萄染下襲
けふはあをいろにすはうかさね　河　青色麴塵也　蘇芳重也
かく所にして
仙遊霞といふ物　院にておはすれは仙洞の心に此樂あり　河　遊仙霞大食調曲拍子十無舞古樂小曲南宮横笛譜爲性調曲
雪のたゝいさゝかちるに春のとなりちかく梅のけしきみるかひありてはゝゑみたり一冬なから春の隣の

ちかけれは中かきよりそ花はちりける「にほはね
とほゝゑむ梅の花をてそわれもおかしと折てなか
むれ　私春の隣の獣をよめり
ひさしのみすのうちにおはしませは　庇の簾中に源
氏おはすなに式部卿宮紫上父右のおとゝ髭黒なと
はかり居給ふなり大納言以下はすのてにゐて
御あるしなと　饗應なり
右の大殿の四郎君　髭黒子玉かつら腹系圖に右辨
大將殿の三郎君　夕霧子雲井雁腹系圖に右大辨
兵部卿宮のそんわうの君たち二人　螢宮なり二人は
螢の御子系圖にはいつれも童宮とあり御母みえす
河五位まては孫王といふなり
大將のないしのすけはらの二郎君　夕霧の二男母藤
典侍系圖に中納言とあり
式部卿宮の兵衛督といひし今は源中納言の御子　式
部卿宮紫上父兵衛督源中納言式部卿御子の子母みえす系圖に
若君とあり
右の大いとのゝ三郎君　髭黒の三男母玉鬘の尚侍系
圖右兵衛督とあり
大將殿の太郎君　夕霧の嫡男母雲井雁系圖に右衛門
督とあり
御むまこの君たち　弄孫達の舞を感し給ふ也
ふかきかと〳〵しさを　餘情なとの事か夕霧柏木な
との後見と有へし
御うまこをおほして　秘皇麞をまふ人なり
あるしの院　弄源氏也
ゑひなきこそ　河萬「かしてしといふ物よりも酒呑て
ゑひなきするそまして有らし「世中のあそひの道（へからしイ）
にましらはゝゑひなきするにありぬなるへし「た
たにゐてかたらひするは酒のみてゑひなきするに（もまたすきイ）
猶しかすけり　秘「いにしへの七の賢き人ちもたゝ
ほりする物はさけにて有らし　私諸抄引歌をのせ（けるイ）
す予も亦事次記之耳
衛門督心とゝめて　柏木はゝゑむなり　秘すこし心
ありての給ふなり　箋ほゝゑむ心もなき人をさし
てわさとの玉ふなり末にめもとまらぬ人をしもと
あり
いましはしならん　弄柏木もやかて老なんとなり
さかさまにゆかぬ年月　河「さかさまに年もゆかな
んとりもあへす過るよはひやともにかへると　私

不及引歌
人よりけにまめたちくつして　生得柏木は實々しき人なるに底深く隔〔源へイ〕心の事あり又所勞もあしくて舞樂の面白さも心もとまらすしてゐ給ふ人に源のかく打あけての給ふなり
そらゑひをして　源のそら醉なり　源の醉たるさまをしてなりかくの給はんためなり
いと〻むねつふれて　柏木の心に恐怖するうへはかくはむねつふる〻なり
けしきはかりにて　秘酒をものみ給はぬなり
御らんしとかめて　源のとりわき酒をしゐ給ふなり
なへての人に〻す　柏木のさまをはめたるなり
まかてぬるま〻にいと〻まとひて　河明順奉咒咀後一條院之由御堂關白聞給召明順直問給明順歸家吐血死云々見榮花物語此等之例歟
れいのおとろ〳〵しきゑひにもあらぬを　弄柏木上戸なるへし今はことに醉給ふとなり　私つねの醉ほとなきにかくわるを不審するなり
つ〻ましと物を思ひつるに　源の前にて臆してかくある歟心よはきことは柏木の我と思ひしり給ふなり
おと〻も母北のかた　柏木の父母たちなり
よそ〳〵にて　一條院落葉宮御方にましますをよひ給ふなり
とのにわたし　致仕の大臣のかたへ柏をよひとり給ふ也
女宮のお〔ぼイ〕はしたる　秘落葉宮なり弄
心のとかにわひなたのみして　秘此程は行末を思ひしに今は後悔なり　箋平生思ひたゆみしを後悔なり
わかれたてまつるへきとてにやと　私諸抄此引歌なし不及之歟「かりそめの行かひちとそ思ひこしいまはかきりのかとてなりけり
かたしけなきをいみしと思ふ　柏木のこ〻ろなり
母みやす所　落葉宮の母なり弄
世のこと〻して柏木にの給ふなり弄　母御息所の詞也
世のこと〻して　世間のならひとして父母の事は勿論なからかやうの病氣なとの時は夫婦の間こそ心やすくてはなれ給はぬてそ常の事なれとなり

ことわりや　秘柏木の返事弄　箋柏木の聞同之　又
草子地歟　私柏木の心然へき歟
數ならぬ身にて及ひかたき　柏木のことは皇女にて
ましませはかく申し給ふなり
なかく世に侍て　皇女なとをゆるさるゝかたはせめ
て長久に存命して官位をもきはめ人かすになりて
御らんせられたきと思ふにかく存命不定になりぬ
れは柏の深切の志をもえあらはさしとなり
とゝまりかたき心ちにも　秘柏木の命の事也弄　命
のとゝまらんことはかたきとなり
えゆきやるましく　弄女君をおきてはえ行やりかた
きなり　私今生には留りたり冥途へはえ行やらじ
と也　又心やすくはえ行やらしとおもしろき詞也
またはゝの北方　秘柏木の母なり弄
れいならす心ほそき時　柏木の母の例ならぬ時は先
柏木をゆかしくたのもしくも思ふに何とておそく
おはするそとなり
又いとことわりなり　落葉の母御息所のゝ給ふかこ
とわりなる故に又ことわり也とかけり
人よりさきなりける　秘柏木に嫡子なれはなり弄花

致仕大臣の柏木か嫡子なり
とりわきて　柏の母儀の別して愛子なる事を柏のい
ふ詞なり
いまはとたのみなくきかせ給はゝ　秘落葉宮へ申さ
るゝなり
たゆくおろかなる本上（ほとイ）　墮窳 史記　物の疎懶なる心
歟こま／＼ともなき心なり
なく／＼わたり給ぬ　弄致仕のかたへ柏木わたり給
宮はとまり給て　落葉なり
いとゝはかなきかうしなとをたに　花榮花物語に佐
理病悩のことをいふにたちはなひとつもきこしめ
しては御身にもとゝめすといへり　柑子には毒な
しとなり
内よりも院よりも
いとゝしきおやたちの　内よりも院よりもかくねん
ころにとふらひ給へるにつけていよ／＼をしくあ
たらしく思ひ給へるなり
六條院にも　箋天下の爲にをしき人と思ひ給ふ心は
源の妙なり致仕へもとふらひ給ふなり
大將はまして　夕霧は柏木と別してよき中なれは一

入思ひなけき給ふとなり
御賀廿五日になりにけり　秘朱雀の御賀十二月廿五
日あまりかねてあらましのことし／＼きはかくあ
る物也　私此御賀試樂の時を委細に書て當日を略
してかける此故に當日の舞の裝束を試樂の處にあ
り／＼とかけり面白し
やんことなき上達部。致仕の一つは愁歎の時分を云
すこしかとある人の所勞なとの時は用捨あるへき
事なれとも此御賀たひ／＼延引して年內餘日なし
となり
つき／＼にとゝこほりつる　秘月々なり　私次々も
然へき歟
女宮の御心のうちをそ　女三宮の事也　秘女三宮な
り事外の大宮にてわりつる故にかく障碍あるなり
閑女三の心中を源のおはすなり　柏本のこともて
もれる歟
れいの五十寺の御誦經文かのおはします御てらにも
まかひゐさなの　秘五十寺五十ヶ寺なり年の數なり
おはします寺は仁和寺なり　河摩訶毘盧遮那毘盧
遮那舍那如次配法報應三身（玄義七取意）天武天皇四年始

於諸寺誦經云々　李部王記云延長七年九月十七日
左大臣諸息四人共於法性寺設五十賀齋會其儀本堂
毘盧遮那如來像云々　朱雀院五十の御賀なれは五
十寺の御誦經あるなり是條（潔イ）例なり摩訶盧遮那は大
日也彼西山の御寺五拾寺の隨一として大日の御誦
經ありといふなり彼御寺の御本尊大日なるよしな
り留りにのとまりたる打まかせてはめつらしき
程なれとも心はきこえたるにや古今歌にもうつり
もゆくか人の心のと云り同體也のゝ字にて猶末の
心こもるなり此字めつらしきにつきて紫明抄なと
にも樣々の了見を加へたり皆は今案義也不足信用
一說云五十寺　一寺の名なり云々是又實（弄イ）說なり一
寺にては五十の御賀の詮なきにや　花天慶二年十
二月貞信公六十賀太政大臣於六十寺修諷誦永延二
年三月十四日法興院大入道六十賀公家今日修諷誦
於六十寺　今案御賀之時諸寺之諷誦は年齡の數を
用る定れる事なり五十の御賀なれは五十寺にて御
誦經あるなりかのおはします寺は仁和寺の圓堂本
尊金剛界大日なるをいふなり五十寺の御誦經別し
ては又仁和寺圓堂にて摩訶毘盧舍那の御誦經あり

となり此結語の事奇特なりかのおはします寺にもまかひるさなの御修法ありといふへきをかくかきたる也かやうの筆法莊子なとの書に相似たるなり
弄五十寺は五十の賀によれりおはします御寺は仁和寺に准す仁和寺の圓堂の本尊金剛界大日也まかひるさなの法なと行ひ給ふと心をのこしてのと書とめたり此結語古來さま〳〵の說あり諸抄に見えたり不載之　或云後漢書逸民傳韓康傳云是韓伯休那といへる那字同心と云々所詮は此物語は發端と結語とをは樣々にかへて書へき造意ありされはかく種々に書へきとてかやうにかけるなるへし心はあらはに聞え侍るにや「吹まよふ野風をさむみ秋萩のうつりも行か人の心の　閑韓伯休事吹まよふ野風をさむみ云々　此書も一體をかけり　秘韓伯休串者商人なり物をうるにわかいふたる程ならねばうらさる者なりそれを人のいふ事を承引せぬ事を韓伯休那(謝イ)といふ其那の字の文章也云々　又祈願の啓白に物神分に般若心經大般若經名又摩訶毘盧舍那なとゝいひて一つ〳〵磬をうつ是もまかひるさなといひて楚なと打處にて書きりたる歟と云
云　私態しての義花爲然へし結語の事いつれにてもきこえたる歟如何
弄花奥に註する分
人の御心しらい(むイ)とも入つゝ　朱雀院御出家の後なれはかはる事共也　同韓伯休事　韓康字伯林京兆覇陵人常采藥名山賣於長安市口不二價三十餘年時有女子從康買藥康㕥守價不移女子怒曰公是韓伯休那
那語餘聲乃賓反不二價乎也

室松岩雄
保持照次
信田重並　校

明治四十三年九月二十日印刷
明治四十三年九月二十三日發行

（定價金參圓）

編輯者　室松岩雄
東京市麹町區飯田町五丁目八番地

發行者　三里半七
東京市神田區豐島町三十四番地

印刷者　金山佐次
東京市神田區豐島町三十四番地

印刷所　博眞堂

發行所　國學院大學出版部
東京市麹町區飯田町五丁目八番地

國學院大學出版部